公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（15）

東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田原迫ノ上遺跡２

（鹿屋市串良町）

縄文時代早期編

第１分冊

２０１７年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（15）
田原迫ノ上遺跡２
第一分冊
二〇一七年三月
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

田原迫ノ上遺跡遠景

縄文時代早期の土器・石皿・磨・敲石

Ⅳ類瘤状突起集合

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）の建設に伴って，平成22～平成26年度に実施された鹿屋市串良町細山田に所在する田原迫ノ上遺跡の発掘調査の記録（縄文時代早期編）です。

田原迫ノ上遺跡では，平成22～26年度の調査で，縄文時代・弥生時代を中心に多数の遺構・遺物が発見されており，当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものと考えます。本報告書では，縄文時代早期（平成22～26年度調査分）の調査成果を報告しています。

主な調査成果として，20軒を超える竪穴住居跡，200基近くの集石，40基の連穴土坑が挙げられます。また本遺跡は，縄文時代早期中葉の石坂式土器を主体とすることが分かりました。このことは，遺跡周辺だけでなく，大隅半島中央部における当時の人々の生活を解明する手がかりになるものと期待されます。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にご協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成29年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　堂　込　秀　人

報　告　書　抄　録

ふりがな	たはらさこのうえいせき　　じょうもんじだいそうきへん
書名	田原迫ノ上遺跡 2　　縄文時代早期編
副書名	東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	15
編著者名	徳永 愛雄・平 美典・国際文化財株式会社（大塚 正樹・辻本 彩・島崎 直行）・株式会社九州文化財研究所（山下 研・中岡 達也・中村 幸四郎）
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995-70-0574　FAX0995-70-0576
発行年月日	2017年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
たはらさこのうえ 田原迫ノ上 いせき 遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやしくしらちょう 鹿屋市串良町 ほそやまだ 細山田	46203	H25 － 203 － 385	31° 26′ 30″	130° 55′ 00″	本調査 2009.02.01 ～ 2009.03.19 2010.05.06 ～ 2011.03.11 2011.05.09 ～ 2012.03.16 2012.07.02 ～ 2013.01.28 2013.06.03 ～ 2014.01.28 2014.05.12 ～ 2015.01.28	62,389	東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田原迫ノ上遺跡	集落跡	縄文時代早期	竪穴住居跡21軒，落とし穴９基，連穴土坑40基，土坑104基，集石遺構192基，石器製作跡５基	前平式土器，吉田式土器，倉園Ｂ式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，手向山式土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，石鏃（打製・磨製），石斧（打製・磨製），石槍，礫器，トロトロ石器，砥石，石皿，磨石，敲石	連穴土坑内から石坂式土器が出土
	散布地	縄文時代前期	—	曽畑式土器	
		縄文時代後期	—	指宿式土器，市来式土器，鐘崎式土器	
		縄文時代晩期	—	黒川式土器	
	集落跡	弥生時代中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，円形・方形周溝，土坑，柱穴列	山ノ口式土器，擬凹線文系壺，樹皮布敲石，磨製石鏃，砥石，石匙，土製勾玉，土製加工品	大型建物跡は現地保存
	散布地	古墳時代以降	溝状遺構，道跡，畝状遺構群	成川式土器，須恵器，土師器，陶器，磁器，瓦器	

要約　縄文時代早期～弥生時代中期を中心とした複合遺跡である。弥生時代中期では，大型で円形の竪穴住居跡や棟持柱を持つ掘立柱建物跡，柱穴列や周溝など，大隅半島中央部での当時の集落のあり方を知る上で貴重な資料である。縄文時代早期についても多くの竪穴住居跡や連穴土坑，集石遺構など，注目される遺構が多く検出されている。縄文時代早期中葉から早期後葉をつなぐ時期の集落として貴重な遺跡である。

※主要な遺構・遺物については，平成26年度までの調査成果を掲載している。

田原迫ノ上遺跡位置図（1 ／ 25,000）

例　　言

1　本書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う田原迫ノ上遺跡の発掘調査報告書の第２巻（縄文時代早期編）である。
2　本遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。
3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が，平成22・23・24年度に，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）が平成25・26年度に実施した。
4　発掘調査支援業務を埋文調査センターが平成24・25・26年度に国際文化財株式会社に委託して発掘調査を実施した。
5　発掘調査における実測図の作成は，平成22・23年度は埋文センター調査担当者が行った。平成24・25・26年度は，埋文調査センター調査担当者の指揮のもと，国際文化財株式会社が行った。写真撮影は埋文センター及び埋文調査センター調査担当者が行った。また，空中写真撮影は株式会社ふじたに委託した。
6　整理作業・報告書作成作業は，平成24年度に埋文センターが，平成25・27・28年度に埋文調査センターが実施した。
7　整理作業・報告書作成作業支援業務を埋文調査センターが平成27年度に株式会社九州文化財研究所に，平成28年度に国際文化財株式会社に委託して整理作業・報告書作成作業を実施した。
8　遺構図・遺物分布図の作成は，埋文調査センター調査担当者の指揮のもと，国際文化財株式会社及び株式会社九州文化財研究所の協力を得て行った。
9　出土遺物の実測・拓本・トレースは，埋文調査センター調査担当者の指揮のもと，国際文化財株式会社及び株式会社九州文化財研究所の協力を得て行った。また，剥片石器の一部は，株式会社パスコ及び大福コンサルタント株式会社に委託した。
10　出土遺物の写真撮影は，埋文センターの写場にて，埋文調査センターの吉岡康弘・辻明啓が行った。
11　本報告に係る自然科学分析は，テフラ分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に，放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所及びパリノ・サーヴェイ株式会社に，樹種同定を株式会社加速器分析研究所及びパリノ・サーヴェイ株式会社に，種実同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に，植物珪酸体分析を株式会社古環境研究所，石材産地推定分析を有限会社遺物材料研究所に委託した。本報告において，編集を行った上で掲載した。
12　本編の執筆は次のように分担し，編集は徳永愛雄と平美典が国際文化財株式会社の協力を得て行った。
　第１章　寺原徹・徳永愛雄
　第２章　徳永愛雄
　第３章　徳永愛雄・平美典
　第４章　徳永愛雄・平美典・大塚正樹・辻本彩
　第５章　パリノ・サーヴェイ株式会社
　　株式会社加速器分析研究所
　　株式会社古環境研究所
　　有限会社遺物材料研究所
　第６章　徳永愛雄・平美典
13　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。
14　遺物の注記で用いた田原迫ノ上遺跡の記号は「田」である。
15　使用した土色について基本的には『新版標準土色帖』（1970，農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
16　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。
17　本書で使用した方位は，磁北である。
18　掲載した遺物の番号は，通し番号で，本文・挿図・表・図版の遺物の番号と一致する。掲載した遺構の番号は，遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表・図版の遺構の番号と一致する。
19　挿図の縮尺は，挿図ごとに示している。
20　掲載した土器の拓本を表裏とも貼付している場合は，底部片の一部を除き，左が表面，右が裏面になるよう配置している。
21　遺構の埋土には，薩摩火山灰（ⅩⅢ層）やにぶい赤褐色が含まれるものもあり，文中の埋土に含まれるものもある。
22　集石遺構一覧表の石材別個数の合計が総礫数と合わないものは，その他の石材があるためである。
23　遺物観察表の標高について，２点以上接合しているものは，最高値と最低値を掲載している。

凡　　例

1　グリッドについて

　グリッドは，高速道路建設予定地のセンター杭STA№181とSTA№182を基準にして，１グリッド10ｍ×10ｍの大きさで田原迫ノ上遺跡を含むように設定した。

2　遺構について

(1) 各遺構の縮尺，略記号及び番号は，以下に示すとおりである。

遺　構　名	縮　尺	略　記　号
竪穴住居跡	１／４０	SH
落 と し 穴	１／２０	ST
連 穴 土 坑	１／２０	SV
土　　坑	１／２０	SK
集　　石	１／２０	SQ
石器製作跡	１／１００	SO

(2) 遺構番号は，遺構ごとに通し番号を付した。

(3) 遺構の網掛けは，右上に示すとおりである。

3　遺物について

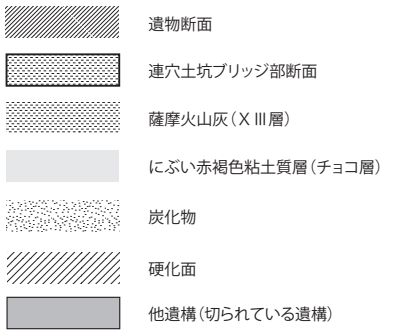
(1) 掲載遺物の縮尺は，土器・石器とも１／３を基本とした。石鏃等については，縮尺を変えてあるので，図中に示した縮尺を参考にしていただきたい。

(2) 掲載遺物は掲載順に番号を付している。

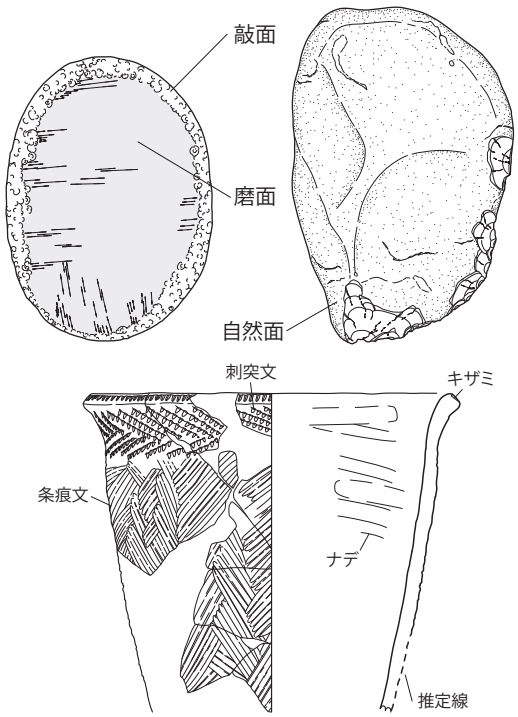
4　配置図等について

　折り込みの遺構配置図は1/800，土層断面図は，1/60で作成し，縮尺を入れた。なお，縮尺の表示のない図面が一部あるが，1グリッド（１マス）が10m×10mである。

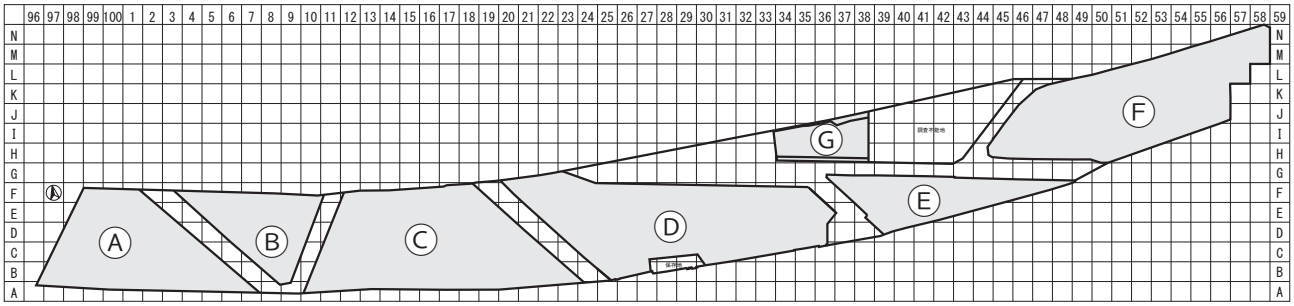
5　調査区を便宜上下図のように調査区Ａ～Ｇと７つに大別している。



遺構網掛け



遺物表現



田原迫ノ上遺跡調査区大別図

総　目　次

第１分冊
巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査の経過…… 1
第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　一部本調査…… 2
第３節　本調査…… 3
第４節　整理・報告書作成…… 10
第２章　遺跡の位置と環境…… 13
第１節　地理的環境…… 13
第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）…… 13
第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡…… 17
第３章　調査の方法と層序…… 23
第１節　調査の方法…… 23
第２節　層序…… 24
第３節　出土遺物の分類…… 46
第４章　発掘調査の成果…… 53
第１節　縄文時代早期の調査成果…… 53
１　調査の概要…… 53
２　遺構…… 53
３　遺物…… 289

第２分冊
第５章　自然科学分析…… 1
第１節　自然科学分析の概要…… 1
第２節　テフラ同定…… 1
第３節　年代測定…… 7
第４節　樹種同定…… 14
第５節　植物珪酸体分析…… 20
第６節　石器石材産地推定…… 26
第６章　総括
第１節　遺構について…… 57
第２節　遺物について…… 64
遺物観察表…… 76
写真図版（遺構）…… 117
写真図版（遺物）…… 149
奥付

第１分冊目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　一部本調査…… 2
　第３節　本調査…… 3
　第４節　整理・報告書作成…… 10
第２章　遺跡の位置と環境…… 13
　第１節　地理的環境…… 13
　第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）…… 13
　第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡… 17
第３章　調査の方法と層序…… 23
　第１節　調査の方法…… 23
　第２節　層序…… 24
　第３節　出土遺物の分類…… 46
第４章　発掘調査の成果…… 53
　第１節　縄文時代早期の調査成果…… 53
　　１　調査の概要…… 53
　　２　遺構 …… 53
　　（1）　竪穴住居跡 …… 53
　　（2）　落とし穴 …… 77
　　（3）　連穴土坑 …… 85
　　（4）　土坑 …… 123
　　（5）　集石遺構 …… 177
　　（6）　石器製作跡 …… 285
　　３　遺物 …… 289
　　（1）　土器 …… 289
　　（2）　石器 …… 371

挿図目次

第１図　確認トレンチ位置図……2
第２図　平成22年度調査範囲図（縄文時代早期）……3
第３図　平成23年度調査範囲図（縄文時代早期）……4
第４図　平成24年度調査範囲図（縄文時代早期）……6
第５図　平成25年度調査範囲図（縄文時代早期）……8
第６図　平成26年度調査範囲図（縄文時代早期）……9
第７図　周辺遺跡位置図……16
第８図　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣT間の遺跡位置図 ……22
第９図　土層断面１……25
第10図　土層断面２……26
第11図　土層断面３……27
第12図　土層断面４……28
第13図　土層断面５……29
第14図　土層断面６……30
第15図　土層断面７……31
第16図　土層断面８……32
第17図　土層断面９……33
第18図　土層断面10……34
第19図　土層断面11……35
第20図　土層断面12……36
第21図　土層断面13……37
第22図　土層断面14……38
第23図　土層断面15……39
第24図　土層断面16……40
第25図　土層断面17……41
第26図　土層断面18……42
第27図　土層断面19……43
第28図　土層断面20……44
第29図　土層断面21……45
第30図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類１……46
第31図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類２……47
第32図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類３……48
第33図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類４……49
第34図　田原迫ノ上遺跡出土石器分類１……50
第35図　田原迫ノ上遺跡出土石器分類２……51
第36図　竪穴住居跡の各部の名称……53
第37図　竪穴住居跡分布図……54
第38図　縄文時代早期遺構配置図……55
第39図　竪穴住居跡１号・出土遺物……57
第40図　竪穴住居跡２号……58
第41図　竪穴住居跡３号・出土遺物……59
第42図　竪穴住居跡４号・出土遺物……60
第43図　竪穴住居跡５号……61
第44図　竪穴住居跡５号出土遺物……62
第45図　竪穴住居跡６号・竪穴住居跡７号・出土遺物 ……63
第46図　竪穴住居跡８号・出土遺物……64
第47図　竪穴住居跡９号・竪穴住居跡10号……65
第48図　竪穴住居跡11号・出土遺物……66
第49図　竪穴住居跡12号……67
第50図　竪穴住居跡13号……68
第51図　竪穴住居跡14号・出土遺物……69
第52図　竪穴住居跡15号・出土遺物……70
第53図　竪穴住居跡16号・出土遺物……71
第54図　竪穴住居跡17号・出土遺物……72
第55図　竪穴住居跡18号・竪穴住居跡19号……73
第56図　竪穴住居跡20号・出土遺物……74
第57図　竪穴住居跡21号・出土遺物……75
第58図　落とし穴の各部の名称……77
第59図　落とし穴タイプ別分布図……77
第60図　落とし穴１号……78
第61図　落とし穴２号・落とし穴３号……79
第62図　落とし穴４号……80
第63図　落とし穴５号……81
第64図　落とし穴６号・落とし穴７号……82
第65図　落とし穴８号……83
第66図　落とし穴９号……84

第67図　連穴土坑の各部の名称① ……85
第68図　連穴土坑の各部の名称② ……85
第69図　連穴土坑の各部の名称③ ……85
第70図　連穴土坑の最深部位置の範囲 ……85
第71図　連穴土坑の主軸の方向 ……86
第72図　連穴土坑タイプ別分布図 ……87
第73図　最深部位置別分布図 ……87
第74図　連穴土坑１号・連穴土坑２号 ……88
第75図　連穴土坑３号・出土遺物 ……89
第76図　連穴土坑４号・連穴土坑５号 ……90
第77図　連穴土坑６号・出土遺物 ……91
第78図　連穴土坑７号・連穴土坑８号 ……92
第79図　連穴土坑９号・連穴土坑10号 ……93
第80図　連穴土坑11号・連穴土坑12号・出土遺物 ……94
第81図　連穴土坑13号・出土遺物 ……95
第82図　連穴土坑14号 ……96
第83図　連穴土坑15号 ……97
第84図　連穴土坑16号・連穴土坑17号 ……98
第85図　連穴土坑18号・出土遺物・分布図 ……99
第86図　連穴土坑19号・連穴土坑20号 …… 101
第87図　連穴土坑21号 …… 102
第88図　連穴土坑22号・連穴土坑23号・出土遺物 …… 104
第89図　連穴土坑24号・出土遺物 …… 105
第90図　連穴土坑25号・連穴土坑26号 …… 107
第91図　連穴土坑26号出土遺物・分布図 …… 108
第92図　連穴土坑27号・連穴土坑28号 …… 110
第93図　連穴土坑29号・連穴土坑30号・出土遺物 …… 111
第94図　連穴土坑31号・出土遺物 …… 112
第95図　連穴土坑32号・出土遺物・連穴土坑33号 …… 113
第96図　連穴土坑34号 …… 114
第97図　連穴土坑35号・連穴土坑36号 …… 115
第98図　連穴土坑37号 …… 116
第99図　連穴土坑38号・出土遺物・連穴土坑39号 …… 117
第100図　連穴土坑40号・出土遺物 …… 118
第101図　土坑の各部の名称 …… 123
第102図　土坑タイプ別分布図 …… 124
第103図　土坑１号 …… 125
第104図　土坑２号・出土遺物 …… 126
第105図　土坑３号・出土遺物・土坑４号・土坑５号…… 127
第106図　土坑６号・出土遺物・土坑７号・土坑８号…… 128
第107図　土坑９号 …… 129
第108図　土坑10号・出土遺物・土坑11号 …… 130
第109図　土坑12号～14号 …… 131
第110図　土坑15号・土坑16号 …… 132
第111図　土坑17号・土坑18号 …… 133
第112図　土坑19号・出土遺物・土坑20号 …… 134
第113図　土坑21号・出土遺物・土坑22号 …… 135
第114図　土坑23号・土坑24号 …… 136
第115図　土坑25号・土坑26号 …… 137
第116図　土坑27号～29号 …… 138
第117図　土坑30号・土坑31号 …… 139
第118図　土坑32号～34号 …… 140
第119図　土坑35号～37号 …… 141
第120図　土坑38号～40号 …… 142
第121図　土坑41号～43号 …… 143
第122図　土坑44号～46号 …… 144
第123図　土坑47号・土坑48号 …… 145
第124図　土坑49号・出土遺物 …… 146
第125図　土坑50号・土坑51号 …… 147
第126図　土坑52号・出土遺物・分布図 …… 148
第127図　土坑53号・土坑54号・出土遺物・土坑55号 …… 149
第128図　土坑56号～58号 …… 150
第129図　土坑59号～61号 …… 151
第130図　土坑62号・土坑63号 …… 152
第131図　土坑64号・出土遺物・土坑65号・土坑66号 …… 153
第132図　土坑67号・出土遺物 …… 154
第133図　土坑68号 …… 155
第134図　土坑69号 …… 156
第135図　土坑70号・出土遺物 …… 157
第136図　土坑71号～74号 …… 159
第137図　土坑75号・出土遺物 …… 160
第138図　土坑76号～78号 …… 161
第139図　土坑79号～81号 …… 162
第140図　土坑82号・出土遺物・土坑83号 …… 163
第141図　土坑84号～86号 …… 164
第142図　土坑87号～89号 …… 165
第143図　土坑90号～93号 …… 166
第144図　土坑94号・出土遺物 …… 167
第145図　土坑95号 …… 168
第146図　土坑96号・出土遺物 …… 169
第147図　土坑97号 …… 170
第148図　土坑98号～100号…… 171
第149図　土坑101号・土坑102号 …… 172
第150図　土坑103号・土坑104号 …… 173
第151図　集石遺構の範囲 …… 177
第152図　集石遺構タイプ別分布図 …… 178
第153図　集石遺構検出層別分布図 …… 179
第154図　集石遺構１号・集石遺構２号 …… 179
第155図　集石遺構３号～７号 …… 180
第156図　集石遺構８号～11号 …… 181
第157図　集石遺構12号・集石遺構13号・出土遺物・
集石遺構14号…… 182
第158図　集石遺構15～18号 …… 183
第159図　集石遺構19号～21号 …… 184
第160図　集石遺構22号・出土遺物 …… 185
第161図　集石遺構23号・集石遺構24号・出土遺物 …… 186
第162図　集石遺構25号・集石遺構26号 …… 187
第163図　集石遺構27号・出土遺物・集石遺構28号・
出土遺物…… 188
第164図　集石遺構29号・出土遺物 …… 189
第165図　集石遺構30号・集石遺構31号 …… 190
第166図　集石遺構32号・集石遺構33号 …… 191
第167図　集石遺構34号・集石遺構35号 …… 192
第168図　集石遺構36号・出土遺物 …… 193
第169図　集石遺構37号・集石遺構38号 …… 194
第170図　集石遺構39号～42号 …… 195
第171図　集石遺構43号～46号 …… 196
第172図　集石遺構47号～49号・出土遺物 …… 197
第173図　集石遺構50号・出土遺物・集石遺構51号・
集石遺構52号…… 198
第174図　集石遺構53号～56号 …… 199
第175図　集石遺構57号～59号・出土遺物 …… 200
第176図　集石遺構60号～62号・出土遺物 …… 201
第177図　集石遺構63号・集石遺構64号・出土遺物・
集石遺構65号…… 202
第178図　集石遺構66号・集石遺構67号・出土遺物・
集石遺構68号・出土遺物…… 203
第179図　集石遺構69号・集石遺構70号 …… 204
第180図　集石遺構71号・出土遺物 …… 205
第181図　集石遺構72号～74号 …… 206
第182図　集石遺構75号・集石遺構76号・出土遺物 …… 207
第183図　集石遺構77号・集石遺構78号 …… 208
第184図　集石遺構79号・集石遺構80号 …… 209
第185図　集石遺構81号・出土遺物・集石遺構82号・
出土遺物…… 210
第186図　集石遺構83号・集石遺構84号 …… 211
第187図　集石遺構85号・出土遺物 …… 212
第188図　集石遺構86号・集石遺構87号 …… 213
第189図　集石遺構88号 …… 214
第190図　集石遺構89号・集石遺構90号・出土遺物 …… 215
第191図　集石遺構91号 …… 216
第192図　集石遺構92号 …… 217
第193図　集石遺構93号・出土遺物 …… 218
第194図　集石遺構94号・集石遺構95号 …… 219
第195図　集石遺構96号・集石遺構97号・出土遺物・
集石遺構98号…… 220

第196図　集石遺構99号・出土遺物・集石遺構100号…… 221
第197図　集石遺構101号・集石遺構102号 …… 222
第198図　集石遺構103号～105号 …… 223
第199図　集石遺構106号～109号 …… 224
第200図　集石遺構110号～112号 …… 225
第201図　集石遺構113号・集石遺構114号・出土遺物 …… 226
第202図　集石遺構115号・出土遺物…… 227
第203図　集石遺構116号・集石遺構117号・出土遺物 …… 228
第204図　集石遺構118号・出土遺物…… 229
第205図　集石遺構119号～121号・出土遺物 …… 230
第206図　集石遺構122号・出土遺物・集石遺構123号 …… 231
第207図　集石遺構124号・集石遺構125号・出土遺物 …… 232
第208図　集石遺構126号～128号・出土遺物 …… 233
第209図　集石遺構129号・集石遺構130号 …… 234
第210図　集石遺構131号・出土遺物…… 235
第211図　集石遺構132号・出土遺物・集石遺構133号・
出土遺物…… 236
第212図　集石遺構134号・出土遺物・集石遺構135号・
集石遺構136号 …… 237
第213図　集石遺構137号・出土遺物・集石遺構138号 …… 238
第214図　集石遺構139号・出土遺物・集石遺構140号 …… 239
第215図　集石遺構141号・出土遺物…… 240
第216図　集石遺構142号・出土遺物…… 241
第217図　集石遺構143号…… 242
第218図　集石遺構144号・出土遺物・
集石遺構145号～147号…… 243
第219図　集石遺構148号…… 244
第220図　集石遺構149号…… 245
第221図　集石遺構150号・集石遺構151号 …… 246
第222図　集石遺構152号…… 247
第223図　集石遺構152号出土遺物…… 248
第224図　集石遺構153号・出土遺物・集石遺構154号 …… 249
第225図　集石遺構155号…… 250
第226図　集石遺構156号・出土遺物…… 251
第227図　集石遺構157号・集石遺構158号 …… 252
第228図　集石遺構159号・集石遺構160号 …… 253
第229図　集石遺構161号・出土遺物…… 254
第230図　集石遺構162号…… 255
第231図　集石遺構163号・出土遺物…… 256
第232図　集石遺構164号・出土遺物…… 257
第233図　集石遺構165号…… 258
第234図　集石遺構166号…… 259
第235図　集石遺構167号…… 260
第236図　集石遺構168号・出土遺物…… 261
第237図　集石遺構169号・出土遺物…… 262
第238図　集石遺構170号…… 263
第239図　集石遺構171号・出土遺物…… 264
第240図　集石遺構172号・出土遺物…… 265
第241図　集石遺構173号…… 266
第242図　集石遺構174号・集石遺構175号 …… 267
第243図　集石遺構176号・集石遺構177号 …… 268
第244図　集石遺構178号・出土遺物・集石遺構179号 …… 269
第245図　集石遺構180号・集石遺構181号 …… 270
第246図　集石遺構182号・出土遺物…… 271
第247図　集石遺構183号・集石遺構184号 …… 272
第248図　集石遺構185号・集石遺構186号 …… 273
第249図　集石遺構187号…… 274
第250図　集石遺構188号・集石遺構189号 …… 275
第251図　集石遺構190号…… 276
第252図　集石遺構191号…… 277
第253図　集石遺構192号…… 278
第254図　石器製作跡分布図 …… 285
第255図　石器製作跡１号・出土遺物 …… 286
第256図　石器製作跡２号・出土遺物・石器製作跡３号 … 287
第257図　石器製作跡４号・出土遺物・石器製作跡５号 … 288
第258図　遺物分布図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類・
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類系土器）…… 289
第259図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類土器・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類系土器 …… 290
第260図　遺物分布図（Ⅳ類土器） …… 291
第261図　遺物分布図（Ⅳ-a類） …… 292
第262図　Ⅳ-a-斜類土器（１） …… 293
第263図　Ⅳ-a-斜類土器（２） …… 294
第264図　Ⅳ-a-斜類土器（３） …… 295
第265図　Ⅳ-a-斜類土器（４） …… 296
第266図　Ⅳ-a-斜類土器（５） …… 297
第267図　Ⅳ-a-斜類土器（６） …… 298
第268図　Ⅳ-a-横類土器（１） …… 299
第269図　Ⅳ-a-横類土器（２） …… 300
第270図　Ⅳ-a-横類土器（３） …… 301
第271図　Ⅳ-a-横類土器（４） …… 302
第272図　Ⅳ-a-羽類土器（１） …… 303
第273図　Ⅳ-a-羽類土器（２） …… 304
第274図　Ⅳ-a-羽類土器（３） …… 305
第275図　Ⅳ-a-羽類土器（４） …… 306
第276図　Ⅳ-a-縦類土器（１） …… 307
第277図　Ⅳ-a-縦類土器（２） …… 308
第278図　遺物分布図（Ⅳ-b類） …… 309
第279図　Ⅳ-ｂ-斜類土器（１） …… 309
第280図　Ⅳ-ｂ-斜類土器（２） …… 310
第281図　Ⅳ-ｂ-斜類土器（３） …… 311
第282図　Ⅳ-ｂ-斜類土器（４）・Ⅳ-ｂ-横類土器（１） 312
第283図　Ⅳ-ｂ-横類土器（２） …… 313
第284図　Ⅳ-ｂ-横類土器（３） …… 314
第285図　Ⅳ-ｂ-横類土器（４） …… 315
第286図　Ⅳ-ｂ-羽類土器・Ⅳ-ｂ-縦類土器（１） …… 316
第287図　Ⅳ-ｂ-縦類土器（２） …… 317
第288図　遺物分布図（Ⅳ-c類） …… 318
第289図　Ⅳ-ｃ-斜類土器 …… 318
第290図　Ⅳ-ｃ-横類土器（１） …… 319
第291図　Ⅳ-ｃ-横類土器（２）・Ⅳ-ｃ-縦類土器（１） 320
第292図　Ⅳ-ｃ-縦類土器（２） …… 321
第293図　Ⅳ類胴部 …… 322
第294図　Ⅳ-底-ア類（１） …… 323
第295図　Ⅳ-底-ア類（２） …… 324
第296図　Ⅳ-底-ア類（３）・Ⅳ-底-イ類（１） …… 325
第297図　Ⅳ-底-イ類（２）・Ⅳ-底-ウ類・Ⅳ-底-エ類（１）326
第298図　Ⅳ-底-エ類（２）・Ⅳ類系土器１（１） …… 327
第299図　Ⅳ類系土器１（２） …… 328
第300図　Ⅳ類系土器１（３） …… 329
第301図　Ⅳ類系土器２ …… 330
第302図　遺物分布図（Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類土器） …… 331
第303図　Ⅴ類土器（１） …… 331
第304図　Ⅴ類土器（２） …… 332
第305図　Ⅴ類土器（３） …… 333
第306図　Ⅴ類土器（４） …… 334
第307図　Ⅴ類土器（５） …… 335
第308図　Ⅵ類土器（１） …… 336
第309図　Ⅵ類土器（２） …… 337
第310図　Ⅵ類土器（３） …… 338
第311図　Ⅶ類土器 …… 339
第312図　遺物分布図（Ⅷ類土器） …… 339
第313図　Ⅷ類土器 …… 340
第314図　遺物分布図（Ⅸ・Ｘ・XI ・XII類土器） …… 341
第315図　遺物分布図（Ⅸ-a-楕類・Ⅸ-a-山類・Ⅸ-a-菱類）342
第316図　Ⅸ-a-楕類（１） …… 342
第317図　Ⅸ-a-楕類（２）・Ⅸ-a-山類（１） …… 343
第318図　Ⅸ-a-山類（２）・Ⅸ-a-菱類 …… 344
第319図　遺物分布図（Ⅸ-b-楕類・Ⅸ-b-連類・Ⅸ-b-山類）345
第320図　Ⅸ-ｂ-楕類（１） …… 345
第321図　Ⅸ-ｂ-楕類（２）・Ⅸ-ｂ-連類（１） …… 346
第322図　Ⅸ-ｂ-連類（２）・Ⅸ-ｂ-山類（１） …… 347
第323図　Ⅸ-ｂ-山類（２） …… 348
第324図　遺物分布図（Ⅸ-c-楕類・Ⅸ-c-連類・
Ⅸ-c-山類・Ⅸ-c-菱類）…… 349
第325図　Ⅸ-c-楕類（１） …… 349
第326図　Ⅸ-c-楕類（２）・Ⅸ-c-連類 …… 350

第327図　Ⅸ-ｃ-山類（１）…… 351
第328図　Ⅸ-ｃ-山類（２）…… 352
第329図　Ⅸ-ｃ-山類（３）・Ⅸ-ｃ-菱類 …… 353
第330図　Ｘ-ａ類・Ｘ-ｂ類・Ｘ-ｃ類…… 354
第331図　Ⅺ類土器・Ⅻ類土器 …… 355
第332図　遺物分布図（ⅩⅢ類土器）　…… 356
第333図　ⅩⅢ類土器（１）　…… 357
第334図　ⅩⅢ類土器（２）　…… 358
第335図　ⅩⅢ類土器（３）　…… 359
第336図　ⅩⅢ類土器（４）・ⅩⅣ類土器 …… 360
第337図　遺物分布図（ⅩⅣ・ⅩⅤ・ⅩⅥ類土器）　…… 361
第338図　ⅩⅤ類土器　…… 361
第339図　ⅩⅥ類土器（１）　…… 362
第340図　ⅩⅥ類土器（２）　…… 363
第341図　ⅩⅥ類土器（３）　…… 364
第342図　ⅩⅥ類土器（４）　…… 365
第343図　ⅩⅥ類土器（５）　…… 366
第344図　ⅩⅥ類土器（６）　…… 367
第345図　ⅩⅦ類土器（１）　…… 368
第346図　ⅩⅦ類土器（２）　…… 369
第347図　ⅩⅦ類土器（３）・土製品 …… 370
第348図　石鏃Ⅰ類 …… 371
第349図　石器分布図（狩猟具類）　…… 372
第350図　石器分布図（加工具類）　…… 372
第351図　石鏃Ⅱa類…… 373
第352図　石鏃Ⅱb類（１）…… 374
第353図　石鏃Ⅱb類（２）…… 375
第354図　石鏃Ⅱb類（３）・石鏃Ⅲa類 …… 376
第355図　石鏃Ⅲb類（１）…… 377
第356図　石鏃Ⅲb類（２）…… 378
第357図　石鏃Ⅳ類・石鏃Ⅴ類（１）　…… 379
第358図　石鏃Ⅴ類（２）　…… 380
第359図　石鏃Ⅵ類 …… 381
第360図　石鏃Ⅶa類・石鏃Ⅶb類 …… 382
第361図　尖頭状石器 …… 383
第362図　石槍　…… 384
第363図　石匙（１）　…… 385
第364図　石匙（２）　…… 386
第365図　削器（１）　…… 387
第366図　削器（２）　…… 388
第367図　掻器・石錐・ドリル・楔状石器 …… 389
第368図　二次加工剥片 …… 390
第369図　剥片（１）　…… 391
第370図　剥片（２）　…… 392
第371図　剥片（３）　…… 393
第372図　石核（１）　…… 394
第373図　石核（２）　…… 395
第374図　石核（３）　…… 396
第375図　異形石器 …… 397
第376図　器種不明石器 …… 398
第377図　打製石斧（１）　…… 399
第378図　打製石斧（２）　…… 400
第379図　磨製石斧 …… 401
第380図　局部磨製石斧・石斧未成品 …… 402
第381図　礫器（１）　…… 403
第382図　礫器（２）　…… 404
第383図　礫器（３）　…… 405
第384図　礫器（４）　…… 406
第385図　礫器（５）　…… 407
第386図　磨石・敲石類Ⅰ類（１）　…… 408
第387図　磨石・敲石類Ⅰ類（２）　…… 409
第388図　磨石・敲石類Ⅰ類（３）　…… 410
第389図　磨石・敲石類Ⅰ類（４）　…… 411
第390図　磨石・敲石類Ⅰ類（５）　…… 412
第391図　磨石・敲石類Ⅰ類（６）　…… 413
第392図　磨石・敲石類Ⅰ類（７）　…… 414
第393図　磨石・敲石類Ⅱ類（１）　…… 415
第394図　磨石・敲石類Ⅱ類（２）　…… 416
第395図　磨石・敲石類Ⅲ類（１）　…… 417
第396図　磨石・敲石類Ⅲ類（２）　…… 418
第397図　磨石・敲石類Ⅲ類（３）　…… 419
第398図　磨石・敲石類Ⅲ類（４）　…… 420
第399図　磨石・敲石類Ⅳ類（１）　…… 421
第400図　磨石・敲石類Ⅳ類（２）　…… 422
第401図　磨石・敲石類Ⅳ類（３）・
　　磨石・敲石類Ⅴ類（１）　…… 423
第402図　磨石・敲石類Ⅴ類（２）・石錘・
　　石製加工品・軽石製品…… 424
第403図　石皿（１）　…… 425
第404図　石皿（２）　…… 426
第405図　石皿（３）　…… 427
第406図　石皿（４）　…… 428
第407図　石皿（５）　…… 429
第408図　石皿（６）　…… 430
第409図　石皿（７）　…… 431
第410図　石皿（８）　…… 432
第411図　石皿（９）　…… 433
第412図　石皿（10）　…… 434
第413図　石皿（11）　…… 435
第414図　石皿（12）　…… 436
第415図　石皿（13）　…… 437
第416図　石皿（14）　…… 438
第417図　石皿（15）　…… 439
第418図　砥石　…… 440

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……15
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……17
第３表　石器の石材分類表……52
第４表　竪穴住居跡の検出層……53
第５表　竪穴住居跡の形状……53
第６表　竪穴住居跡の長軸と短軸の最大値･最小値･平均値…54
第７表　竪穴住居跡の検出面積の最大値･最小値･平均値……54
第８表　竪穴住居跡一覧表……76
第９表　落とし穴の検出層……77
第10表　落とし穴の検出面の形状……78
第11表　落とし穴のタイプ……78
第12表　落とし穴一覧表……84
第13表　連穴土坑の最深部位置……85
第14表　連穴土坑の底面傾斜方向……85
第15表　連穴土坑の従穴部と主穴部の形状タイプ……86
第16表　従穴部と主穴部の形状タイプ組み合わせ……86
第17表　従穴部・ブリッジ・主穴部の主軸・短軸の平均値…86
第18表　主従値　……86
第19表　連穴土坑一覧表１…… 119
第20表　連穴土坑一覧表２…… 120
第21表　連穴土坑一覧表３…… 121
第22表　連穴土坑一覧表４…… 122
第23表　長軸・短軸の平均値及び最大値・最小値…… 123
第24表　土坑の検出層…… 123
第25表　土坑の検出層毎のタイプ基数（基）…… 124
第26表　土坑一覧表１…… 174
第27表　土坑一覧表２…… 175
第28表　土坑一覧表３…… 176
第29表　タイプ別基数…… 177
第30表　検出層別のタイプ基数及び検出層で占める割合… 177
第31表　集石遺構一覧表１…… 279
第32表　集石遺構一覧表２…… 280
第33表　集石遺構一覧表３…… 281
第34表　集石遺構一覧表４…… 282
第35表　集石遺構一覧表５…… 283
第36表　集石遺構一覧表６…… 284
第37表　石器製作跡の検出層及び終焉層…… 285
第38表　石器製作跡の黒曜石・その他の石材分類点数…… 285

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下，「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間を，平成12年２月には志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡（854,100㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室，文化財課，埋文センターの４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

そこで，県教委は，まず平成13年１月29日から平成13年２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石縄遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成13年７月10日から７月26日に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と，平成13年９月17日から10月26日まで，平成13年12月３日から12月25日までの２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成13年10月１日から平成14年３月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年４月には，志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象面積が678,700㎡となった。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅IC（平成21年４月28日，「曽於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま生きるということになった。

また，日本道路公団からの再委託は曽於弥五郎ICまでで終了し，曽於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

田原迫ノ上遺跡の調査は，一部本調査を平成20年度に実施し，平成22年度から埋文センターが本調査を以下のように行った。

平成22年度　平成22年５月６日～平成23年３月11日
平成23年度　平成23年５月９日～平成24年３月16日
平成24年度　平成24年７月２日～平成25年１月28日

平成25・26年度の本調査は，埋文センターの国事業に係る発掘調査業務が埋文調査センターへ移管されたことに伴い，県文化財課からの委託を受けた埋文調査センターが以下のように行った。

平成25年度　平成25年６月３日～平成26年１月28日
平成26年度　平成26年５月12日～平成27年１月28日

報告書作成作業は，平成23・24年度は埋文センターが行い，平成25・27年度は埋文調査センターが行った。

田原迫ノ上遺跡の調査経過は，以下のとおりである。

発掘調査

１　分 布 調 査：平成13年７月
２　試 掘 調 査：平成13年12月
３　一部本調査：平成20年１月～３月
４　本　調　査：平成22年５月～平成27年１月

整理作業・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は，平成23年度から実施しており，縄文時代前期～弥生時代編（平成25年度までの本調査分）を平成26年度に刊行している。

なお，各調査期間，調査体制等詳細については次節以降で報告することとする。

第２節　一部本調査

田原迫ノ上遺跡の一部本調査は，立小野堀遺跡・牧山遺跡と併せて下記の期間で実施された。実働は34日間である。

期　　間　平成21年１月20日～平成21年３月19日

調査体制

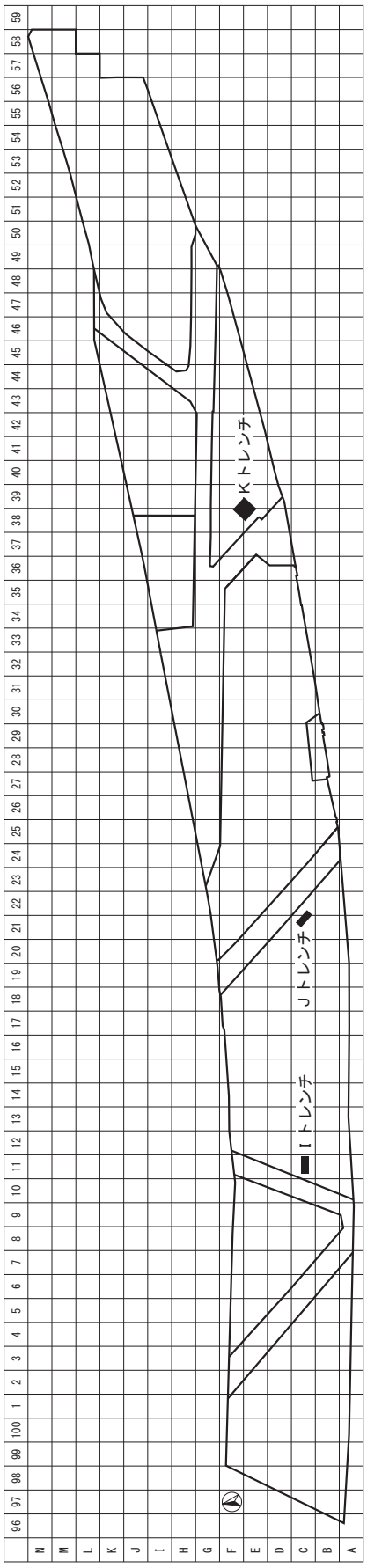
事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	宮原　景信
調査企画	〃 次長兼総務課長	平山　章
	〃 次長兼南の縄文室長	池畑　耕一
	〃 調査第二課長	彌榮　久志
	〃 主任文化財主事兼第二課第一調査係長	中村　耕治
調査担当	〃 文化財主事	高岡　和也
事務担当	〃 総務係長	紙屋　伸一
	〃 主事	五百路　真

調査の詳細（調査日誌より）

調査の詳細を調査日誌より月単位で記す。

平成21年１月～３月

確認トレンチ（Ⅰ～Ｋトレンチ）設定準備。Ⅰ～Ｋトレンチ：表土剥ぎ後，調査。Ⅰトレンチ：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，早期遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ，トレンチ位置図作成。



第１図　確認トレンチ位置図

第３節　本調査

本調査は平成22・23・24年度の３ヶ年は，埋文センターが，平成25・26年度の２ヶ年は，埋文調査センターが実施した。各年度の調査期間は以下のとおりである。現道部分は未調査であるが，平成28年度以降に調査を予定している。

平成22年度：平成22年５月６日～平成23年３月11日
平成23年度：平成23年５月９日～平成24年３月16日
平成24年度：平成24年７月２日～平成25年１月28日
平成25年度：平成25年６月３日～平成26年１月28日
平成26年度：平成26年５月12日～平成27年１月28日

各年度の調査体制及び調査の詳細については以下のとおりである。なお，調査の詳細については，平成22・23・24年度は日誌抄を基に，平成25・26年度は各種日報を基に記述している。

平成22年度の調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
	鹿児島県土木部高速道路対策室	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
調査企画	〃 次長兼総務課長	田中　明成
	〃 次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	〃 調査第二課長	井ノ上　秀文
	〃 文化財主事兼調査第二課第一調査係長	前迫　亮一
調査担当	〃 文化財主事	遠矢　勝幸
	〃 〃	藤山　賢一郎
事務担当	〃 総務係長	大園　祥子
	〃 主事	髙﨑　智博

調査の詳細（日誌抄より）

平成22年度の本調査を平成22年５月６日から平成23年３月11日（実働172日間）まで実施した。平成22年度は主に弥生時代を中心としたⅡ～Ⅵ層の調査が中心で、縄文時代早期の調査は一部のみである。縄文時代前期以降の調査については、『田原迫ノ上遺跡１』を参照してほしい。ここでは縄文時代早期に関する調査の詳細について記載する。

平成22年７月

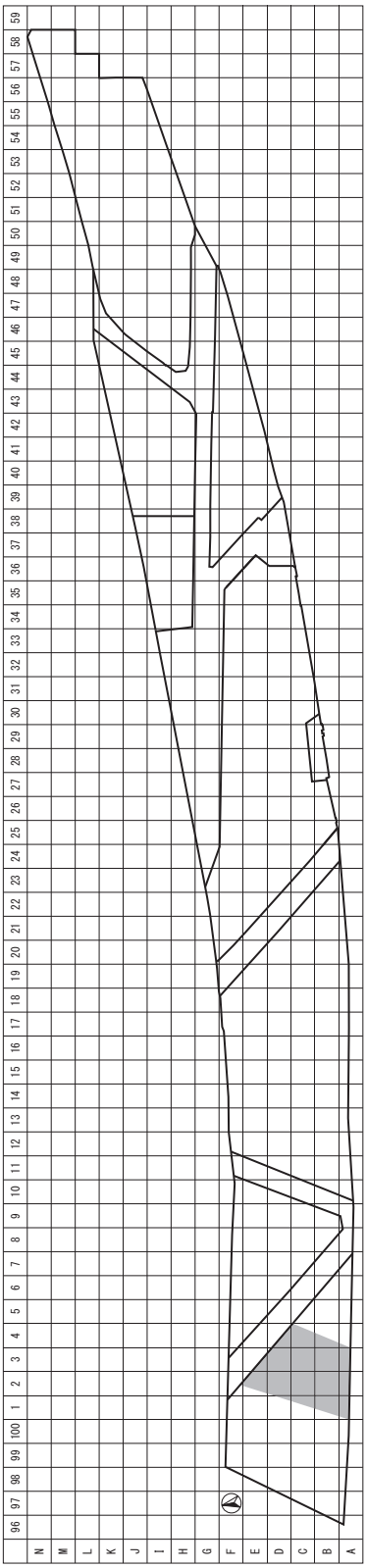
Ａ～Ｅ－１～４区：下層確認トレンチを２ヶ所設定し，Ⅶ～Ⅻ層上面まで掘り下げ。遺物取り上げ。

埋蔵文化財専門職員養成講座受講者７名（６日），国土交通省黒木専門職視察（８日），鹿屋市教育委員会坂口課長・主幹兼文化財班長山口氏来跡（27日）。

平成22年８月

Ａ～Ｅ－１～４区：Ⅸ～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｃ－４区：Ⅻ層上面で落とし穴１号検出。

霧島文化財少年団発掘体験・鹿屋市文化財ウォッチン



第２図　平成22年度調査範囲図（縄文時代早期）

グ（３日），曽於市文化財審議委員10名来跡（４日），文化財課堂込係長来跡（６日）。

平成22年９月

Ａ～Ｅ－１～４区：Ⅸ～Ⅺ層掘り下げ。Ｃ－４区：落とし穴１号掘り下げ及び実測，写真撮影。

平成22年10月

Ａ～Ｅ－１～４区：Ⅸ～Ⅻ層掘り下げ。Ⅻ層上面地形測量図作成。Ｃ・Ｄ－２区：Ⅻ層上面で落とし穴２・３号検出，写真撮影及び掘り下げ。

平成22年11月

Ｃ・Ｄ－２～４区：Ⅻ層上面落とし穴１～３号写真撮影及び掘り下げ。

Ｃ・Ｄ－２～４区：Ⅻ層上面落とし穴１～３号写真撮影及び掘り下げ，実測。

平成23年１月

Ｃ・Ｄ－２～４区：Ⅻ層上面落とし穴１～３号掘り下げ及び実測。

平成23年２月

Ａ－１～３区：Ⅻ層上面まで掘り下げ。南側土層断面実測。Ｃ・Ｄ－２区：落とし穴２・３号実測。

平成23年３月

Ｃ・Ｄ－２区：落とし穴３号完掘及び完掘状況写真撮影。環境整備，撤収作業。

平成23年度の調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
	鹿児島県土木部高速道路対策室	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	〃 次長兼総務課長	田中　明成
	〃 次長兼南の縄文調査室長	井ノ上　秀文
	〃 調査第二課長	冨田　逸郎
	調査第二課第一調査係長	八木澤　一郎
調査担当	〃 文化財主事	遠矢　勝幸
	〃 文化財研究員	平　美典
	〃 文化財調査員	原　栄子
事務担当	〃 総務係長	大園　祥子
	〃 主事	髙﨑　智博

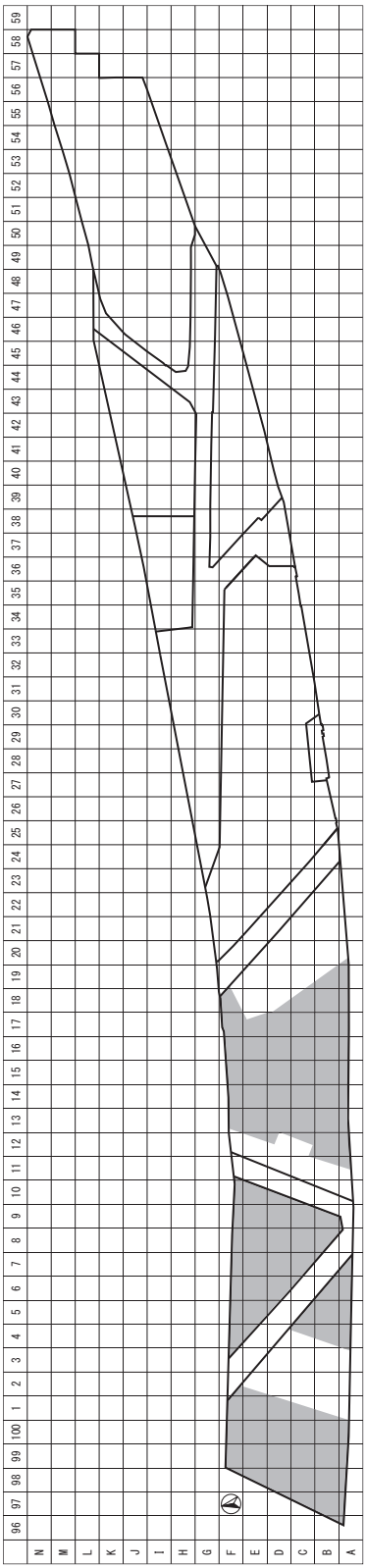
調査の詳細（日誌抄より）

平成23年度の本調査を平成23年５月９日から平成24年３月16日（実働162日間）まで実施した。平成23年度も７月までは弥生時代を中心とした調査が主で，縄文時代早期の調査が本格化するのは８月以降である。

平成23年６月

Ａ－11区：Ⅸ～Ⅻ層掘り下げ及び遺物取り上げ，写真撮影。

国土交通省上村監督官・本田専門職現地協議（３日）。



第３図　平成23年度調査範囲図（縄文時代早期）

平成23年７月

Ａ・Ｂ－11区：XIV層掘り下げ終了，完掘状況写真撮影。土層断面実測。Ａ～Ｆ－11～13区：Ⅸ～XII層掘り下げ。Ａ～Ｆ－13・14区：Ⅸ層掘り下げ。

南日本新聞社子ども記者取材（22日），大隅河川国道事務所國友所長他４名，海上自衛隊池群司令他４名遺跡見学（25日）。

平成23年８月

Ａ～Ｄ－11～14区：Ｘ～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ，遺物出土状況写真撮影。Ｅ・Ｆ－14区：Ⅸ～XI層掘り下げ。Ｃ－13区：竪穴住居跡１号検出及び掘り下げ。Ｂ－13区：竪穴住居跡２号検出及び掘り下げ。Ｃ－12区：集石１号実測。Ｂ－12・13区：集石２～４号検出状況写真撮影及び実測。Ａ－13区：集石５号実測。Ａ・Ｂ－12区：集石７号実測。Ｄ－12・13区：集石８・９号実測。

鹿屋市文化財ウォッチング事業発掘体験42名（３日），南日本新聞社鹿屋総局堀之内氏来跡（８日），霧島市文化財少年団発掘体験（23日）。

平成23年９月

Ａ・Ｂ－４～７区：XIII層（薩摩火山灰層）上面地形測量図作成。Ａ－７・８区：下層確認トレンチ掘り下げ（Ⅸ～XII層）。Ｂ・Ｃ－４・５区：下層確認トレンチ掘り下げ（Ⅸ～XIII層上面まで）終了，完掘状況写真撮影。Ｃ～Ｆ－11～14区：Ｘ～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｅ－７区：下層確認トレンチ掘り下げ（XI～XIII層）。Ｂ－13区：竪穴住居跡１・２号掘り下げ及び完掘写真撮影。断面実測。Ｂ－13区：連穴土坑１号掘り下げ。Ｃ－13区：土坑１号，連穴土坑２号掘り下げ及び実測。Ｄ－13区：連穴土坑３号検出及び掘り下げ。Ｄ～Ｆ－13区：集石10～18号写真撮影及び実測。

平成23年10月

Ａ～Ｃ－４～７区：南壁土層断面実測（Ａ区のみ），埋め戻し。Ａ～Ｆ－８～10区：Ⅷ層機械掘削，Ⅸ層以下掘り下げ。Ａ～Ｆ－11～14区：Ⅸ～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ，XIII層（薩摩火山灰層）上面地形測量図作成。Ａ－12～14区：南壁土層断面実測。Ａ・Ｂ－14区：XIII層上面地形測量図作成。Ａ・Ｂ－15・16区：Ⅸ・Ｘ層掘り下げ。Ａ～Ｃ－14～16区：Ⅷ層機械掘削，Ⅸ～XII層掘り下げ。Ｃ－14区：土器集中（石坂式土器）検出及び実測，写真撮影。Ｆ－12～14区：北壁土層断面実測。Ｃ－13・14区：竪穴住居跡３号検出及び掘り下げ。Ｃ－13区：連穴土坑２号実測。Ｄ－13区：土坑５号掘り下げ及び実測。Ｃ－14区：土坑６号検出及び掘り下げ，写真撮影。Ｄ－14区：集石18・19・21号実測。Ｂ－14区：集石20号実測。Ａ・Ｂ－16区：集石22・23号実測。

空中撮影（18日），大隅地区社会教育行政研修会14名，県文化財課前迫係長来跡（25日）。

平成23年11月

Ａ～Ｃ－４～７区：排土埋め戻し。Ａ～Ｅ－15・16区：Ⅸ～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｃ～Ｅ－７・８区：下層確認トレンチ掘り下げ終了（XIII層まで），完掘状況写真撮影。Ｃ～Ｆ－５～10区：Ⅷ層機械掘削，Ⅸ～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｃ～Ｆ－10区：東壁土層断面実測。Ｆ－６～10区：北壁土層断面実測。Ｂ－14区：竪穴住居跡３号掘り下げ及び実測。Ｄ・Ｅ－９・10区：土坑２号・３号検出及び掘り下げ，実測。Ｃ－14区：土坑６号掘り下げ及び実測，写真撮影。Ｃ－８区：落とし穴４号検出及び掘り下げ，実測。Ｄ－７区：落とし穴５号検出及び掘り下げ，実測。Ｅ－９区：落とし穴６号検出及び掘り下げ，実測。Ｅ－５区：連穴土坑４・５号検出及び掘り下げ，実測。Ｅ－７・８区：連穴土坑６・７号検出及び掘り下げ，実測。Ｆ－９区：連穴土坑８号検出及び掘り下げ，実測。Ｂ－16区：集石22・23号実測。Ｂ・Ｃ－15・16区：集石24・25号実測。Ｅ－９・10区：集石26・27号実測。Ｄ－９・10区：集石28～30号実測。

細山田中学校職員研修10名（７日），肝付町宮富小学校６年生見学８名（18日）。

平成23年12月

Ａ～Ｆ－15・16区：Ｘ～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ａ・Ｂ－17・18区：Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ。Ｂ～Ｆ－４～10区：XIII層（薩摩火山灰層）上面地形測量図作成。Ｃ～Ｆ－15・16区：Ｘ～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ－14区：竪穴住居跡３号掘り下げ及び実測。Ｅ－７・８区：連穴土坑６・７号完掘状況写真撮影及び実測，落とし穴６号掘り下げ及び実測，写真撮影。Ｅ－８・９区：連穴土坑８号掘り下げ及び実測。Ｂ－15区：集石25号実測。Ｄ－９区：集石29号実測。Ｃ～Ｅ－15区：集石31～36号実測。Ｆ－15区：集石37号実測。Ｆ－17区：集石38号実測。

平成24年１月

Ｂ・Ｃ－１区：落とし穴７・８号掘り下げ及び実測，写真撮影。Ｂ－13区：土坑５号・連穴土坑９号：掘り下げ及び実測，写真撮影。Ａ～Ｄ－17区：Ⅸ～XI層掘り下げ。来年度調査予定地確認トレンチ（３箇所設定）掘り下げ及び出土遺物取り上げ，写真撮影。

東串良町教育長来跡（10日）。

平成24年２月

Ｄ～Ｆ－97～100及び１区：Ⅸ～XII層下層確認トレンチ掘り下げ，XIII層上面地形測量図作成，土層断面実測。Ａ－15区：連穴土坑12号及びＣ－16区：連穴土坑13号掘り下げ及び実測・写真撮影。Ａ～Ｄ－17区：集石39～44号写真撮影及び実測。Ｂ－17区：竪穴住居跡４号写真撮影及び掘り下げ。Ａ～Ｃ－18・19区：Ⅸ～Ｘ

Ⅱ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ⅸ～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。

平成24年３月

Ａ～Ｃ－18・19区：Ｘ～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ａ－17～19区：南壁土層断面実測，Ⅻ層上面地形測量図作成。Ａ－15・16区：連穴土坑12号実測。Ａ－17区：竪穴住居跡４号掘り下げ及び実測。Ｆ－17～19区：Ⅺ・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石45～47号実測。Ｂ－16・17区：埋め戻し。撤収作業，環境整備。

平成24年度の調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター

		所長	寺田　仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中　明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上　秀文
	〃	調査第二課長	冨田　逸郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	八木澤　一郎
調査担当	〃	文化財主事	上床　真
	〃	〃	彌榮　久志
	〃	文化財調査員	原　栄子
事務担当	〃	総務係長	大園　祥子
	〃	主査	岡村　信吾

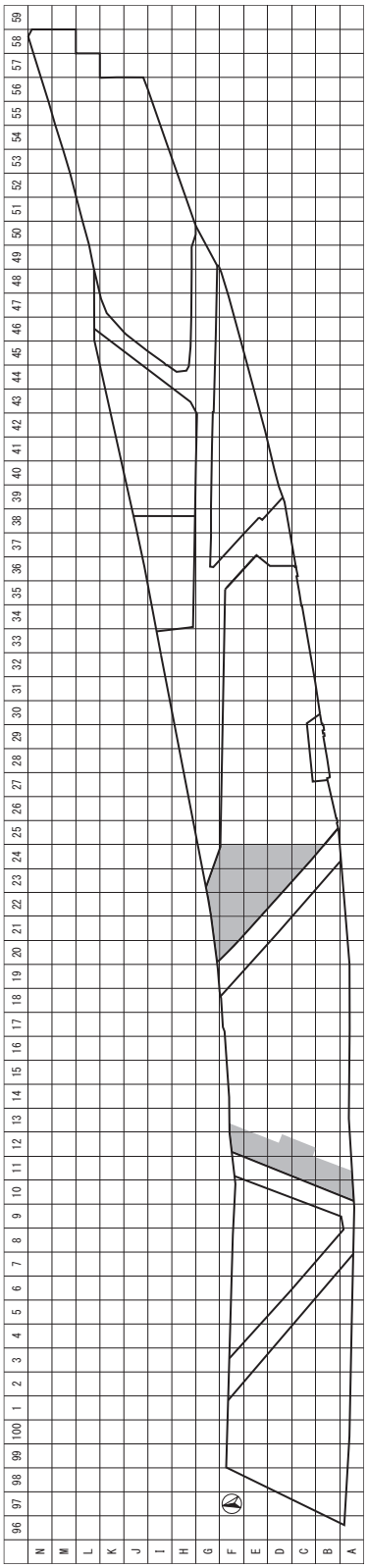
発掘調査支援業務委託

発掘調査の実施にあたり，埋文センターは「埋文センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，民間業者へ支援業務委託を行った。

委託先　国際文化財株式会社
契約期間　平成24年６月８日～平成25年２月22日
調査期間　平成24年７月１日～平成25年１月28日
委託内容　発掘調査支援業務　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
担当者　主任技術者　浦壁　晃
　　主任調査支援員　中村祐一
　　調査支援員　鳥越道臣，関美男，辻本彩，土岐耕司，池内啓，長尾聡子
検査　中間検査　平成24年10月22日
　　完成検査　平成25年２月14日（成果物・実地）

調査の詳細（日誌抄より）

平成24年度の本調査を平成24年７月１日から平成25年１月28日（実働108日間）まで実施した。本調査の実施にあたり，国際文化財株式会社へ発掘調査支援業務委託を行った。



第４図　平成24年度調査範囲図（縄文時代早期）

平成24年７月

Ａ～Ｅ－10～12区：Ⅸ～Ⅻ層掘り下げ，土層断面実測，写真撮影，Ⅻ層上面全景写真撮影。連穴土坑14～17号検出。落とし穴９号検出。集石48～50号写真撮影，実測。

平成24年８月

Ｂ～Ｄ－22～29区，Ｅ－25・26区，Ｅ・Ｆ－33・34区：Ⅱ～Ⅵ層の調査（詳細は省く）。

総務福利課視察（８日），鹿屋市文化財ウォッチング・小学生30名（９日）発掘体験，社会教育主事講習受講者・熊本大学11名（10日）。

平成24年９月

Ｂ～Ｇ－20～24区：Ⅸ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ～Ｄ－22～24区：Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石検出。

中薗聡鹿児島国際大学教授現地指導（18日），大隅教育事務所現地研修18名（26日）。

平成24年11月

Ｂ～Ｇ－20～24区：Ⅹ層・Ⅺ層掘り下げ出土遺物取り上げ。集石51～76検出，写真撮影。

現地説明会開催（10日，290名）。

平成24年12月

Ｂ～Ｇ－20～24区：Ⅺ層・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡５～10号・連穴土坑18～21・土坑検出，掘り下げ，写真撮影，実測。

平成25年１月

Ｅ～Ｇ－23・24区：Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡９・10号養生。撤収作業。環境整備。

平成25年度の調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

		センター長	冨田　逸郎
調査企画	〃	総務課長兼総務係長	山方　直幸
	〃	調査課長	鶴田　静彦
	〃	調査第一係長	八木澤　一郎
調査担当	〃	文化財専門員	上床　真
	〃	〃	徳永　愛雄
事務担当	〃	主査	岡村　信吾
	〃	事業推進員	川﨑　麻衣

発掘調査支援業務委託

発掘調査の実施にあたり，埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，民間業者へ支援業務委託を行った。

委託先　国際文化財株式会社
契約期間　平成25年４月23日～平成26年３月14日
調査期間　平成26年６月３日～平成27年１月28日
委託内容　発掘調査支援業務　１式
測量業務　１式
土工業務　１式
担当者　主任技術者　浦壁　晃
主任調査支援員　中村祐一
調査支援員　池内啓，鳥越道臣，鵜久森彬，加世田悠仁，渡部裕司，長尾聡子，荒木謙志
検査　中間検査　平成25年10月８日
完成検査　平成26年２月18日（成果物）
平成26年２月19日（実地）

調査の詳細（各種日報より）

平成25年度の本調査を平成25年６月３日から平成26年１月28日（実働124日間）まで実施した。本調査の実施にあたり，国際文化財株式会社へ発掘調査支援業務委託を行った。

平成25年６月

Ｄ～Ｆ－25～29区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石78～82検出，写真撮影，実測。石器製作跡１・２検出，写真撮影。

細山田中学校１年生見学37名（6日），文化財課中村文化財主事監理業務（11日），埋文センター堂込課長監理業務（26日）。

平成25年７月

Ａ・Ｂ20～24区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｄ～Ｆ－25～29区：Ⅸ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石83～89検出，写真撮影。

文化財課中村文化財主事監理業務（９日）。

平成25年８月

Ａ－20～23区，Ｂ－19～26区，Ｃ－18～22・25・26区，Ｄ－18～21・25～29区，Ｅ－18～20・25・27～29区，Ｆ－25・27～29区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ－20～22区，Ｃ－18～22・25・26区，Ｄ－25・26区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ａ－20～24区，Ｂ－20～24区，Ｃ－20～23区：Ⅻ層掘り下げ。集石90～127・竪穴住居跡11号検出，写真撮影，実測。

鹿屋市文化財ウォッチング発掘体験（６日），宮田小学校親子会23名発掘体験，埋文センター堂込課長監理業務（７日）。

平成25年９月

Ｄ－20・34～37区，Ｅ－20区，Ｆ－30～35区：先行トレンチ掘り下げ。Ｄ－18～21区，Ｅ－17～20・

30 ～ 36区，Ｆ － 30 ～ 36区：Ⅸ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ・Ｃ － 25・26区，Ｄ － 18 ～ 21・25・26区，Ｅ － 17 ～ 20区，Ｅ・Ｆ － 30 ～ 36区：Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ・Ｃ － 25・26区，Ｄ － 18 ～ 21・25・26区，Ｅ － 17 ～ 20区，Ｅ・Ｆ － 30 ～ 36区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｃ・Ｄ － 25・26区，Ｄ － 17 ～ 21区，Ｆ － 17 ～ 20区：Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑22・23号検出，写真撮影，実測。集石128 ～ 140号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成25年10月

Ｂ － 26 ～ 28区，Ｃ・Ｄ － 27 ～ 29区：Ⅸ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ － 26 ～ 28区，Ｃ・Ｄ － 27 ～ 29区，Ｅ・Ｆ － 30 ～ 36区：Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｅ・Ｆ － 30 ～ 36区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｅ － 30 ～ 32・35 ～ 37区，Ｆ － 30 ～ 36区：Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡12号検出，写真撮影，実測。集石141 ～ 147号検出，写真撮影，実測。土器集中１検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成25年11月

Ｂ － 26 ～ 28区，Ｃ － 27 ～ 36区，Ｄ － 27 ～ 36・39 ～ 41区，Ｅ － 39 ～ 46区，Ｆ － 42 ～ 48区，Ｇ － 44 ～ 48区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ － 26 ～ 28区，Ｃ － 27 ～ 29区，Ｄ － 27 ～ 29・38 ～ 41区，Ｅ － 38 ～ 46区，Ｆ － 40 ～ 48区，Ｇ － 44 ～ 48区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ － 26 ～ 28区，Ｃ － 27 ～ 29区，Ｄ － 27 ～ 29区，Ｆ － 44 ～ 49区，Ｇ － 45 ～ 49区：Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡13号・集石148 ～ 161号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

埋文センター堂込課長監理業務（26日）。

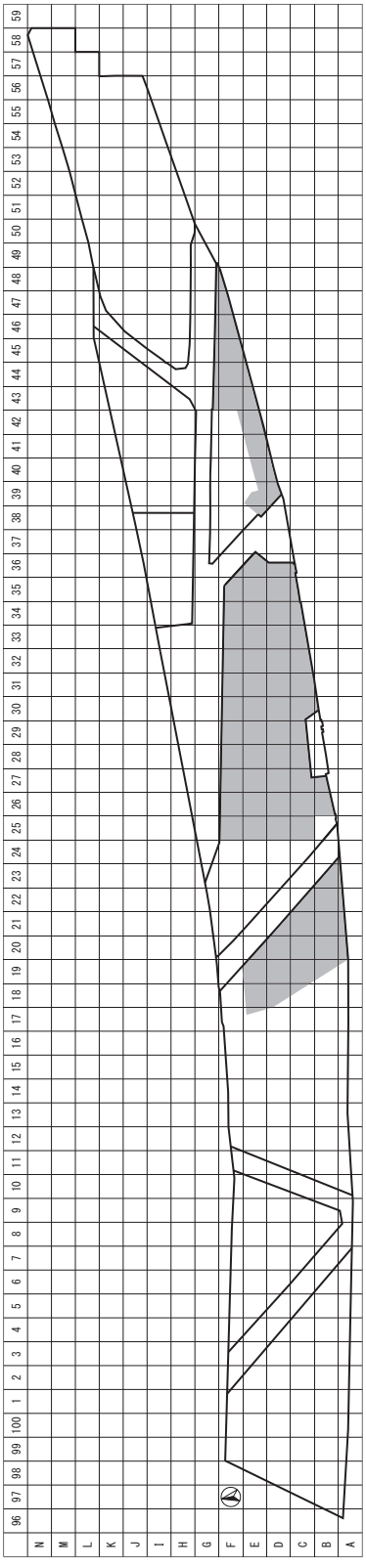
平成25年12月

Ｄ － 30 ～ 36区：Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ － 26 ～ 28区，Ｃ － 30 ～ 36区，Ｄ － 26 ～ 28，30 ～ 36区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ － 26 ～ 28区，Ｄ － 26 ～ 28・38 ～ 41区，Ｅ － 38 ～ 46区，Ｆ － 41 ～ 49区，Ｇ － 45 ～ 49区：Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡14・15号検出，写真撮影，実測。連穴土坑24号検出，写真撮影，実測。集石162 ～ 165号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

埋文センター堂込課長監理業務（17日）。

平成26年１月

Ｆ・Ｇ － 43・44区：Ⅸ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｆ・Ｇ － 43・44区：Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｃ・Ｄ － 30 ～ 36区，Ｆ・Ｇ － 43・44区：Ⅺ層・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡16号検出，写真撮影，実測。連穴土坑25号検出，写真撮影，実測。集石166号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。空中写真撮影。撤収作業，環境整備。



第５図　平成25年度調査範囲図（縄文時代早期）

平成26年度の調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　埋蔵文化財調査センター
　センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　山方　直幸
　〃　調査課長　八木澤　一郎
　〃　調査第二係長　寺原　徹
調査担当　〃　文化財専門員　平　美典
　〃　〃　上村　俊洋
事務担当　〃　主査　岡村　信吾
　〃　事業推進員　川﨑　麻衣

発掘調査支援業務委託

発掘調査の実施にあたり，埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，民間業者へ支援業務委託を行った。

委託先　国際文化財株式会社
契約期間　平成26年４月11日～平成27年３月12日
調査期間　平成26年５月12日～平成27年１月28日
委託内容　発掘調査支援業務　１式
　測量業務　１式
　土工業務　１式
担当者　主任技術者　平林淳雄
　主任調査支援員　鳥越道臣
　調査支援員　池内啓，山﨑良二，青嶋邦夫，鵜久森彬，加世田悠仁
検査　中間検査　平成26年10月21日
　完成検査　平成27年２月24日（成果物）
　平成27年３月３日（実地）

平成26年度の本調査を平成26年5月12日から平成26年1月28日（実働145日間）まで実施した。本調査の実施にあたり，国際文化財株式会社へ発掘調査支援業務委託を行った。

平成26年６月

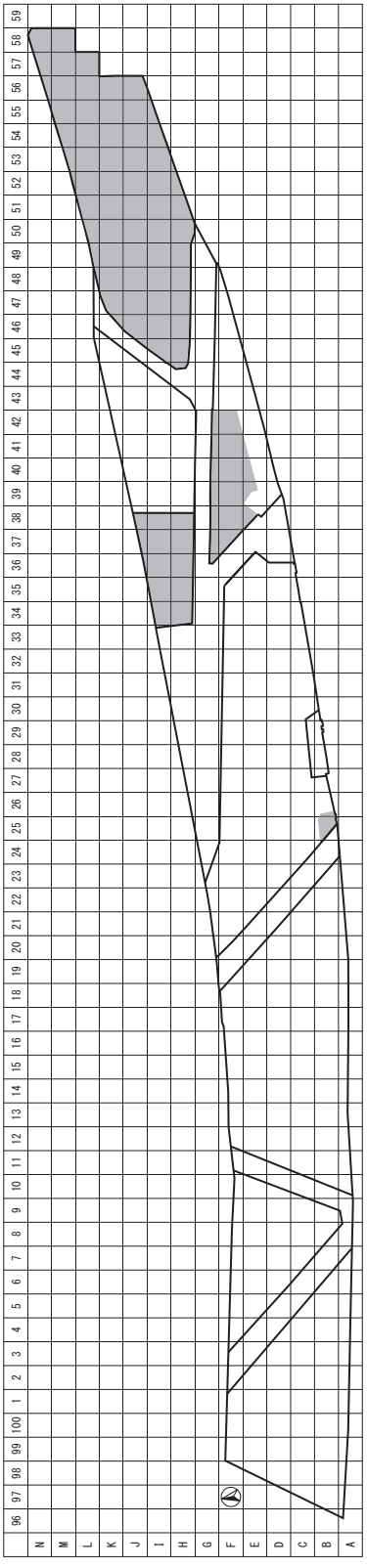
E～G－36～42区：Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石167～170号検出，写真撮影，実測。礫集積６号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年７月

K－50～53区，L－50～56区，M－52～56区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。D～F－36～42区：Ⅺ層，Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑26号検出，写真撮影，実測。集石171号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年８月

H～J－50～53区，K－50～56区，L・M－54～56区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。H～



第６図　平成26年度調査範囲図（縄文時代早期）

Ｊ－33～38区：集石172～175号検出，写真撮影，実測。

平成26年９月

Ｈ－50～53区，Ｉ・Ｊ－50～56区：Ⅸ層・Ｘ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ－50～53・55・56区，Ｉ・Ｊ－50～56区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ・Ｉ－34～35区：Ⅸ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｂ－25～26区：Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑27号検出，写真撮影，実測。集石176～180号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年10月

Ｈ～Ｌ－44～49区：Ⅸ層・Ｘ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｋ・Ｌ－50～56区，Ｍ－53～56区，Ｎ－56区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ～Ｊ－33～38区：Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ａ・Ｂ－25・26区：ⅩⅢ層上面遺構精査。竪穴住居跡17～20号検出，写真撮影，実測。連穴土坑28～38号検出，写真撮影，実測。集石181～188号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年11月

Ｍ・Ｎ－58区：ⅩⅢ層上面精査。Ｈ～Ｌ－44～49区：Ｘ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ～Ｊ－33～38区：Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡21・22号検出，写真撮影，実測。連穴土坑39～41号検出，写真撮影，実測。集石189・190号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年12月

先行トレンチ掘り下げ。Ｈ～Ｌ－44～49区：ⅩⅢ層上面精査。Ｈ～Ｊ－33～38区：Ⅺ層・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑42～47号検出，写真撮影，実測。集石191号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。空中写真撮影。環境整備。

平成27年１月

Ｈ～Ｌ－49・50区（ベルト部分）：Ⅷ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石192・193号検出，写真撮影，実測。撤収作業，環境整備。

第４節　整理・報告書作成

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は，平成24・25・28年度は田原迫ノ上遺跡の発掘調査と並行して実施し，平成27年度は整理・報告書作成作業のみを実施した。

整理・報告書作成作業は，平成24年度は埋文センターが実施した。平成25・27・28年度は，県文化財課からの委託を受けた埋文調査センターが実施した。

作業内容は，以下のとおりである。

１　整理作業

(1)　遺構・土層断面

実測図と図面台帳との照合，実測図の遺構別仕分け，デジタルトレースの調整・修正等

(2)　遺物

ア　土器・石器共通

水洗い，注記，遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図等との照合等

イ　土器

分類（部位・形式等），接合（簡易な復元含む），実測個体の選別等

ウ　石器

一般礫との仕分け，分類（器種等），実測個体の選別接合等

２　報告書作成作業整理作業

(1)　遺構・土層断面

遺構配置図作成，デジタルトレースによる土層断面図作成・統合，レイアウト等

(2)　土器

実測，拓本，デジタルトレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載遺物写真撮影等

(3)　石器

実測，実測委託，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載遺物写真撮影等

(4)　自然科学分析

炭化物の年代測定・樹種同定委託等

３　各年度の作成体制

整理・報告書作成作業に関する作成体制は以下のとおりである。

平成24年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	寺田　仁志
作成企画	〃	次長兼総務課長	田中　明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上　秀文
	〃	調査第二課長	冨田　逸郎
	〃	調査第二課第一調査係長	八木澤　一郎
作成担当	〃	文化財調査員	原　栄子
事務担当	〃	総務係長	大園　祥子
	〃	主査	岡村　信吾

平成25年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　冨田　逸郎
作成企画　〃　総務課長兼総務係長　山方　直幸
　　〃　調査課長　鶴田　靜彦
　　〃　調査第一係長　八木澤　一郎
作成担当　〃　文化財専門員　國師　洋之
　　〃　文化財調査員　中村　有希
事務担当　〃　主査　岡村　信吾

平成27年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　堂込　秀人
作成企画　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
　　〃　調査課長　八木澤　一郎
　　〃　調査第一係長　中村　和美
作成担当　〃　文化財専門員　徳永　愛雄
事務担当　〃　主査　荒瀬　勝己

整理作業・報告書作成作業支援業務の委託

整理・報告書作成作業の実施にあたり，埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要項」に基づき，民間調査組織へ作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。

埋文調査センター職員１名が常駐して，統括，指揮及び運営を行った。委託内容は以下のとおりである。

委託先　株式会社九州文化財研究所
契約期間　平成27年４月13日～平成28年３月11日
作成期間　平成27年５月11日～平成28年２月19日
委託内容　報告書作成作業支援業務　１式
　　整理作業支援業務　１式
担当者　主任調査支援員　山下研
調査支援員　中岡達也，中村幸史郎
検査　中間検査　平成27年10月８日
　　完成検査　平成28年３月３日

平成28年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　堂込　秀人
作成企画　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
　　〃　調査課長　八木澤　一郎
　　〃　調査第二係長　宗岡　克英
作成担当　〃　文化財専門員　徳永　愛雄
　　〃　文化財専門員　平　美典
事務担当　〃　主査　荒瀬　勝己

整理作業・報告書作成作業支援業務の委託

整理・報告書作成作業の実施にあたり，埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要項」に基づき，民間調査組織へ作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。

埋文調査センター職員１名が常駐して，統括，指揮及び運営を行った。委託内容は以下のとおりである。

委託先　国際文化財株式会社
契約期間　平成28年４月11日～平成29年３月10日
作成期間　平成28年５月９日～平成29年１月27日
委託内容　報告書作成作業支援業務　１式
　　整理作業支援業務　１式
担当者　主任調査支援員　大塚正樹
調査支援員　辻本彩，島崎直行
検査　中間検査　平成28年10月21日

４　整理・報告書作成の経過

各年度の整理・報告書作成の概要を，平成24・25年度は日誌抄をもとに，平成27・28年度は整理作業及び報告書作成作業業務月報をもとに月ごとに記した。

平成24年度

平成24年４月　土器洗い，石の選別，廃棄礫パソコン入力，土器注記，石器洗い
　５月　土器注記，石器分類，廃棄礫パソコン入力，図面点検，石器注記，写真パソコン整理，土器分類，土器接合
　６月　土器接合
　７月　土器接合，石器注記，軽石の土落とし
　８月　土器接合，石器注記
　９月　土器洗い
平成25年２月　竪穴住居跡・土坑・集石仮トレース，土器接合
　３月　竪穴住居跡・土坑・集石仮トレース，土器接合

※平成24年10月～平成25年１月は，縄文時代早期に関わる作業は実施していない。

平成25年度

平成25年４月　遺構図面整理
５月　遺構図面整理，石器分類，遺構埋土フローテーション
６月　遺構図面整理，遺構内出土礫石器実測，遺構図トレース，フローテーション
７月　土器水洗い，遺構内出土礫石器実測・トレース
８月　土器水洗い，石器実測委託準備
９月　石器水洗い
10月　土器水洗い，科学分析委託準備，土器分類，注記
11月　石器実測委託の実測図チェック
12月　石器実測委託の実測図チェック
平成26年３月　図面整理，資料整理

※平成26年１月・２月は，縄文時代早期に関わる作業は実施していない。

平成27年度

平成27年４月　支援業務委託準備，入札，実測石器選別
５月　支援業務委託作業開始，土器接合，遺構図面整理
６月　土器接合，土器分類，土器実測，台長作成，原稿執筆
７月　土器分類，土器実測，拓本，復元，遺構図調整・修正，原稿執筆
８月　土器実測，拓本，復元，遺構図調整・修正・トレース，石器実測，原稿執筆
９月　土器実測，拓本，復元，遺構図調整・修正・トレース，石器実測，原稿執筆
10月　土器実測，拓本，復元，石器実測・トレース，遺構図調整・修正・トレース原稿執筆
11月　土器実測・拓本・トレース，石器実測・トレース，遺構図調整・修正・トレース，観察表作成，原稿執筆
12月　土器実測・拓本・トレース，石器実測・トレース，遺構図調整・修正・トレース，台帳作成，観察表作成
平成28年１月　土器実測・拓本・トレース，石器実測・トレース，拓本スキャニング，遺構配置図作成，台帳作成，観察表作成，原稿執筆
２月　拓本・トレース，石器実測・トレース，拓本スキャニング，遺構配置図作成，台帳作成，観察表作成，検査準備，支援業務委託作業終了
３月　成果物提出，完成検査，支援業務委託終了

平成28年度

平成28年４月　支援業務委託準備，入札
５月　支援業務委託作業開始，土器実測，復元，土器分類，石器実測，遺構図トレース・修正，拓本・トレース図合成
６月　土器実測，拓本，土器分類，石器実測，遺構図トレース・修正，拓本・トレース図合成，原稿執筆
７月　土器実測，拓本，土器分類，石器実測・トレース，遺構図トレース・修正，拓本・トレース図合成，原稿執筆，データ編集
８月　土器実測，拓本，土器分類，遺構図修正，石器実測・トレース，拓本・トレース図合成，遺構図仮レイアウト，原稿執筆，データ編集
９月　土器実測，拓本，復元，遺構図修正，拓本・トレース図合成，石器実測・トレース，土器再分類，土器仮レイアウト，黒曜石産地推定分析，原稿執筆，データ編集
10月　土器・石器観察表作成，土器再分類，遺物写真撮影，原稿執筆，データ編集
11月　原稿執筆，分布図作成，データ編集，レイアウト，校正
12月　原稿執筆，分布図作成，データ編集，レイアウト，校正，入校
平成29年１月　校正
２月　印刷・製本
３月　成果物提出，完成検査，支援業務委託終了

※平成28年度田原迫ノ上遺跡の発掘調査分の出土遺物の水洗い・注記を行ったが，割愛している。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鹿屋市串良町は，大隅半島南東部のほぼ中央に位置し東は東串良町，南は肝属川を隔てて肝付町，西は鹿屋市東原町，旭原町，笠之原町，北東は立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。平成18年１月１日に旧鹿屋市と合併するまでは広大な笠野原台地を二分していた。

串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地，その間の丘陵，台地及び低地等の低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラ等の火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119ｍ）で中生層の地質からなっている。

西側の山地は，北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み，南部の高隈山系へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳等500 ～ 600ｍ級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.8ｍ）を主峰に横岳・御岳等1,000ｍ級の山から成る山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長をなし，それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山地間を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布したシラス地形になっている。この火砕流は南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。これらの火砕流をはじめとする噴出物が堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開折され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。

一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地等を水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾等に注いでいる。この河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また，何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は，東西に6.5㎞，南北に13㎞の狭長で，北部の山地中央において山地は少なく，笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており，広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は，肝属川とその支流の串良川が流れ，それによる沖積地が広がり，約695haの水田地帯を形成している。また，北部には低い丘陵性の山地が存在するが，町域に占める割合は少ない。

田原迫ノ上遺跡は，この串良町の北東部に所在し，笠野原台地の縁辺部に位置する。本遺跡の標高は約120ｍで，遺跡の北側斜面を下ったところには，串良川が西から東に向かって蛇行して流れており，本遺跡との比高差は約70ｍである。西側には立小野堀遺跡が，東側には牧山遺跡が隣接する。

第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

串良町では，昭和36，50 ～ 52年度に分布調査が行われ，数多くの遺跡が周知のものとなった。現在までに，詳細分布調査及び確認調査によりそれらの遺跡のエリアが確定しつつある。また，串良町における遺跡の大半は，笠野原台地の縁辺部に集中して立地していることが明らかになっている。

東九州自動車道関連遺跡については，第３節において大まかな概要を記すことにする。

旧石器時代

本遺跡周辺の二小塚Ａ遺跡において，旧石器時代の可能性がある剥片が数点出土している。

また，本遺跡からやや離れるが，鹿屋バイパス建設に伴って発掘調査が行われた西丸尾遺跡・榎崎Ａ遺跡・榎崎Ｂ遺跡でナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

縄文時代

早期の遺跡としては，倉園Ｂ遺跡・下堀遺跡・益畑遺跡・高吉Ｂ遺跡などがあげられる。倉園Ｂ遺跡では，住居址遺構４軒・連穴土坑と断定できるものが10基・集石遺構60基検出されている。下堀遺跡では，連穴土坑と断定されているものが10基，集石遺構が13基検出されている。本遺跡から３㎞離れた益畑遺跡では，住居跡２軒・連穴土坑16基・集石遺構85基・土坑160基が検出されている。中でも，１号竪穴住居跡は，長軸464㎝，短軸287㎝，深さ67㎝で，竪穴部の２面にベッド状の張り出しをもつ。この住居跡の埋土中にはＰ13（桜島起源の薩摩火山灰：約9500年前）がレンズ状に堆積しており，その下位から前平式土器が出土したことから，上野原遺跡とほぼ同じ状況がうかがえる。高吉Ｂ遺跡では，連穴土坑のブリッジ部分から完形に近い石坂式土器が出土した連穴土坑１基を含む合計４基の連穴土坑・集石遺構141基などが検出されている。

前期の遺跡としては，神野牧遺跡・石踊遺跡などがあげられる。神野牧遺跡では，集石遺構３基が検出され，曽畑式土器・深浦式土器などが出土している。石踊遺跡では，深さ10㎝の落ち込みの中に，磨石・敲石５個と角礫１個の上に約20㎝の大きさの五角形状の板

石が乗った状態で検出され集積遺構１基，曽畑式土器・轟式土器が出土している。

中期の遺跡としては，前谷遺跡・岩崎遺跡などがあげられる。前谷遺跡では，竪穴住居跡５軒（方形状３軒・円形状２軒）集石遺構１基などが検出され，春日式土器が出土している。岩崎遺跡は，岩崎式土器の標識遺跡で階段状の道が検出されている。

後期の遺跡としては，ホンドンガマ遺跡・十三塚遺跡・牧山遺跡などがあげられる。ホンドンガマ遺跡では，市来式土器に比定できる土器・石匙・打製石斧などが出土している。十三塚遺跡では，凹線文土器・市来式土器・三万田式土器が出土している。牧山遺跡では，西平式土器・中岳Ⅰ・Ⅱ式土器などが出土し，後期のピットにおいて，遺物が環状に集中する範囲の内側から同心円状に検出されており，環状集落を呈していたと考えられている。

晩期の遺跡としては，宮下遺跡・柿之木段遺跡などがあげられる。宮下遺跡では，黒川式土器・北部九州の夜臼式土器並行の刻目突帯文土器・組織痕土器（平織り）が出土している。柿木段遺跡では，晩期の落とし穴・土坑の他，石斧埋納遺構が検出されている。

弥生時代

大隅半島においても，前期の遺跡はわずかで，確認できる遺跡の規模としては小さく，分布も散発的である。宮下遺跡は，縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期にある遺跡と思われる。また，水の谷遺跡では，前期に該当する甕形や鉢形の弥生土器が出土している。

中期以降の遺跡としては，吉ヶ崎遺跡・前畑遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・本遺跡等があげられる。吉ヶ崎遺跡では，中期の竪穴住居跡が３軒検出されている。特に，１号住居状跡はベット状遺構をもち，床面の焼土や炭化物が多く見られ，焼失家屋と思われる。そのためか，甕形土器・壺形土器の完形品が各４点と磨製石鏃・磨製石斧等が住居跡の床面から発見されている。前畑遺跡では，方形プランで約４ｍ四方を呈する竪穴住居跡３軒・平地式建物跡や高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡８棟などが検出され，山ノ口式土器の範疇に属する在地系土器が出土している。王子遺跡では，竪穴住居跡27軒・棟持柱を有する掘立柱建物跡６棟・掘立柱建物跡８棟・土坑を有する建物跡２棟などが検出されている。十三塚遺跡では，張り出しのある竪穴住居跡が８軒検出され，住居内からは，壺形土器・甕形土器・棒状叩具・磨製石鏃・鉄鏃等が出土している。本遺跡では，竪穴住居跡31軒・掘立柱建物跡40棟（うち，棟持柱を持つ掘立柱建物跡２棟）・柱穴列６列が検出され，山ノ口式土器と多くの土製加工品も出土している。また，調査区外へ続く大型建物跡と考えられる柱穴列は，現地にそのまま保存されることとなった。

古墳時代

大隅半島，特に志布志湾沿岸部は古くから唐仁古墳群・塚崎古墳群・横瀬古墳群をはじめとする多くの古墳が存在することが知られている。また，南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域である。

本遺跡に近接する立小野堀遺跡では，約190基の地下式横穴墓と鉄剣や鉄鏃等数多くの副葬品が出土している。副葬品の中の青銅鈴は，環鈴の転用品で，国内最古級のものである。本遺跡に隣接する町田堀遺跡では，地下式横穴墓88基（うち，１基は円形周溝を伴う地下式横穴墓）や鉄剣，異形鉄器等の副葬品が確認されている。

地下式横穴墓に関する遺跡は，鹿屋市の薬師堂古墳・祓川地下式横穴墓群・中尾遺跡・名主原遺跡，串良町の岡崎古墳群，大崎町の下堀遺跡などで出土している。これらの遺跡は，肝属川・串良川・持留川・姶良川・大姶良川流域に存在しており，地下式横穴墓の分布状況が明らかになりつつある。このことは，岡崎古墳群出土の３個体の初期須恵器・鉄鋌，中尾遺跡出土の象嵌が施された鉄剣・鉄刀と合わせて，当時の人々の生活を解明していく上で貴重な資料である。

集落遺跡として，現在調査中だが，本遺跡と同町内の小牧遺跡・川久保遺跡があげられる。小牧遺跡では，竪穴住居跡９軒・礫集積８基・花弁形住居２軒が検出されている。川久保遺跡では，竪穴住居跡27軒（うち，鍛冶関連建物跡２軒）が検出され，鉄滓・鞴の羽口等が出土している。中でも，鞴の羽口は転用品のみでなく，専用として作られた可能性があるものも出土している。両遺跡とも，現時点では調査途中である。

古代・中世以降

串良町内における中世以降の遺跡は，県教育委員会発行の「鹿児島県中世城跡」では14カ所が報告されているが，詳細な調査はほとんどなされていない。

岡崎古墳群と甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は，16基の近世墓が検出され，土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が出土している。下堀遺跡では，土坑墓・畝跡・溝状遺構の他，多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高い炉跡も検出されている。柿木段遺跡では，古代のカマド跡・溝状遺構・古道，中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出されている。十三塚遺跡では，古道跡が８条検出され，古道跡から陶磁器片が出土したことから近世以降の可能性が考えられている。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	樋ノ口Ⅱ	鹿屋市上高隈町	散布地	山林	古墳,古代	丘陵	－	－
2	牧原	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳,古代	台地	－	－
3	石縊	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	竪穴住居	H20 ～本調査
4	十三塚	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	－	H20 ～本調査
5	立小野堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳,古代	台地	地下式横穴墓	H22本調査
6	土持堀の深井戸	鹿屋市串良町細山田	包蔵地		近世	台地	深井戸	－
7	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田	散布地 集落跡	畑地	縄文,弥生	台地	竪穴住居,掘立柱建物,周溝	H22 ～本調査本報告書
8	牧山	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文,弥生,古墳	台地	轟式,埋設土器,石冠	H25 ～本調査
9	入部堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古代	台地	－	－
10	新堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文	台地	－	－
11	町田堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	住居跡,製鉄工房跡,掘立柱建物跡	H25 ～本調査
12	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	丘陵	－	－
13	生栗須	鹿屋市串良町細山田生栗須	包蔵地	畑地	弥生	台地	－	－
14	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	丘陵	－	－
15	堂園	鹿屋市串良町細山田生堂園	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	－	－
16	高松	鹿屋市串良町細山田高松	散布地	畑地	弥生	台地	－	－
17	立小野	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文,弥生	台地	－	－
18	立小野Ａ	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	台地	－	－
19	立小野Ｂ	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	台地	－	－
20	遠見ヶ丘	曽於郡大崎町野方立小野・曲迫	散布地	畑地	中世	台地	－	－

参考文献

鹿児島県教育委員会　1997「大隅地区埋蔵文化財分布調査概要」鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書（６）

鹿児島県教育委員会　1992「西尾丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書(64)

鹿屋市教育委員会　2008「名主原遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘報告書(84)

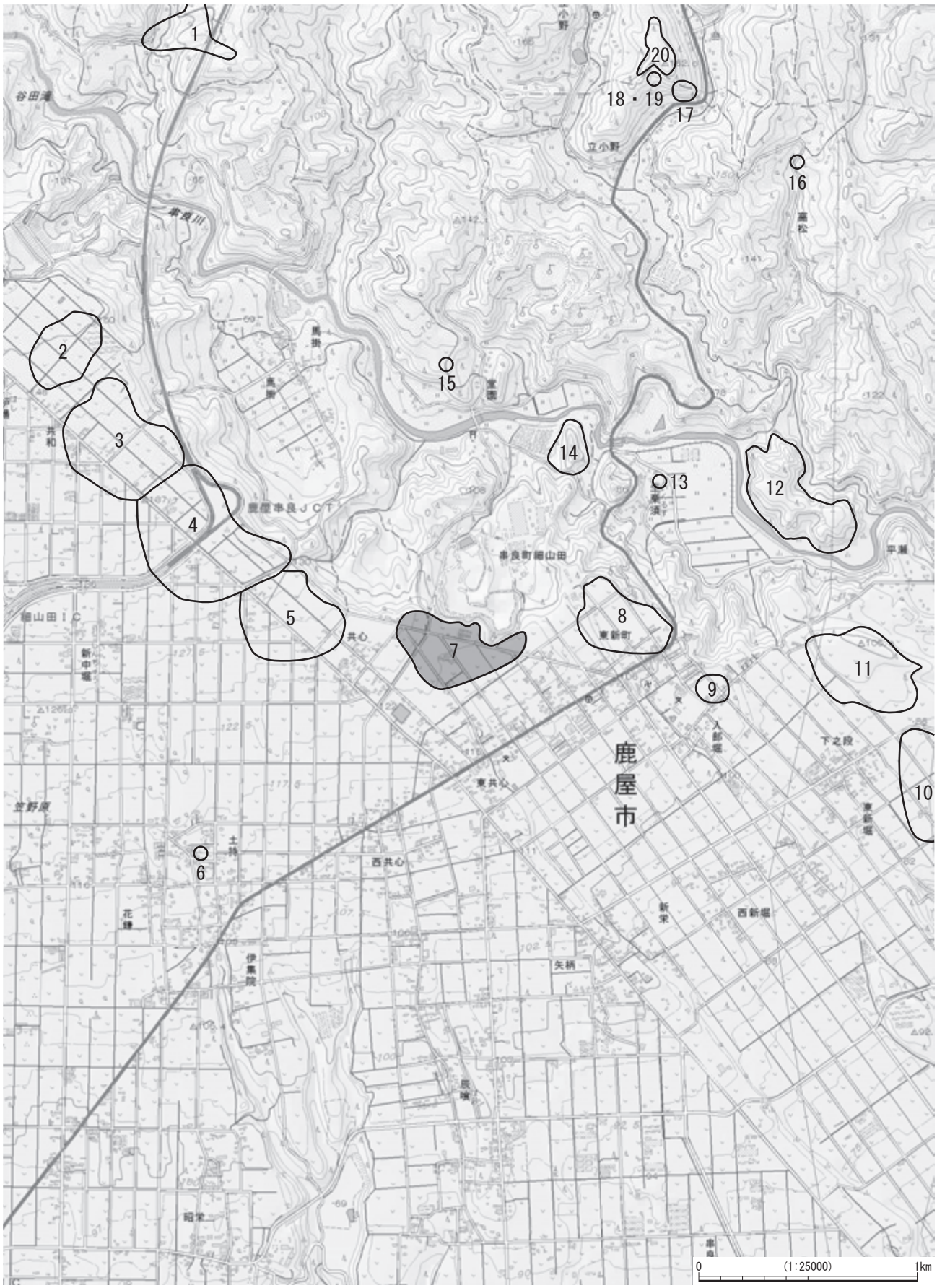
姶良町教育委員会　2005「中尾遺跡Ⅳ」姶良町埋蔵文化財発掘報告書(19)

串良町教育委員会　1990「岡崎古墳群」串良町埋蔵文化財発掘報告書（３）

串良町教育委員会　2005「益畑遺跡」串良町埋蔵文化財発掘報告書(11)

鹿児島県教育委員会　2016「田原迫ノ上遺跡１」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（５）

鹿児島県教育委員会　2016「町田堀遺跡」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（７）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18・19
20
鹿屋市
串良町細山田
細山田ＩＣ
0
(1:25000)
1km

第７図　周辺遺跡位置図

第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には，第２表に示すとおり23の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡　　平成28年３月31日現在

番号	遺跡名	所在地・立地	調　査	整理･報告書	遺跡の概要		
					時　代	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町志布志 台地縁辺部 標高約70m	概要は，県立埋セが平成25年度に隣接地を調査した結果で，本線部分は，H28年度以降調査予定である。		旧石器	—	ハンマーストーン，剥片，打面調整剥片
					縄文早期	土坑	石坂式土器，下剥峯式土器，石鏃，磨石，石皿
					縄文前中期	落とし穴，土坑	—
					縄文後晩期	溝状遺構	磨消縄文土器，丸尾式土器，中岳Ⅱ式土器，西平式土器，磨石，敲石
		縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期に比定される。縄文時代早期の出土遺物は，土器の出土に比べ石器の出土が非常に少ない。前期の落とし穴は２基で，それらの底部には杭跡と考えられる小ピットが７～８つ確認されている。					
2	宮之上	志布志市志布志町安楽 台地　標高約45m	県文化財課の試掘調査により，本路線上には，遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市志布志町安楽 台地　標高約30m	—	—	H28年度以降調査予定		
4	小牧古墳群	志布志市 志布志町安楽 台地 標高約50m	H27年度～ 調査中	作業中	旧石器	—	細石刃核，細石刃，チップ
					縄文草創期	集石遺構	黒曜石剥片，土器
					縄文早期	集石遺構	前平式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，押型文土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，耳栓，石鏃，磨石，異形石器
					弥　生	—	弥生土器，石包丁
		尾根と谷による起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心とした遺跡である。縄文早期の集石遺構は，検出層によって構成礫の大きさに差が見られ，時期差によるものか，今後の調査が注目される。また，塞ノ神式土器の壺形土器や，耳栓・異形石器・円盤状石器が出土し，遺跡の性格を知る上でも重要である。					
5	次五	志布志市有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	終了	作業中	旧石器	—	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石遺構，磨石集積遺構	前平式土器，加栗山式土器，吉田式土器，札ノ元Ⅶ類，石坂式土器，中原Ⅴ式，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，手向山式土器，塞ノ神Ｂ式土器，打製石鏃，磨製石鏃，石錘，局部磨製石斧，トロトロ石器
		旧石器時代から縄文時代早期が中心となる遺跡である。調査は志布志市教育委員会によって行われ，旧石器時代は，細石刃文化期に比定される遺物が出土している。縄文時代早期は，早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認され，特に，注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
6	大代	志布志市有明町 野井倉 台地縁辺部	県文化財課の試掘調査により，本路線上には，遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。				
7	木森	志布志市有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度～ 調査中	—	縄文早期	集石遺構	前平式土器，加栗山式土器，吉田式土器，下剥峯式土器，押型文土器，石鏃，石匙，磨石，敲石
					中　世	掘立柱建物跡，ピット	須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓
		縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡である。縄文時代早期の集石遺構，中世の掘立柱建物跡等が検出され，縄文時代早期の土器，石器，中世の須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。					

番号	遺跡名	所在地・立地	調　査	整理･報告書	遺跡の概要		
					時　代	主な遺構	主な遺物
8	春日堀	志布志市有明町蓬原 河岸段丘 標高約30m	H26年度～ 調査中	作業中	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，集石遺構，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴	前平式土器，加栗山式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，手向山式土器，塞ノ神A式土器，三角形土製品（仮称），打製石鏃，打製石斧，環状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，砥石，穿孔円礫
					弥　生	竪穴住居跡	山ノ口式土器
					古　墳	溝状遺構，竪穴住居跡，土坑，棒状礫集積遺構，土器集中	甕（笹貫式，東原式），壺，坩，高坏，須恵器高坏，棒状礫，磨製石鏃片
					時期不明	掘立柱建物跡，土坑，ピット	—
					古代～中世	焼土跡，竪穴建物跡，土坑墓，掘立柱建物跡，柵列，ピット	土師器(坏，甕，椀)
					近　世	古道，溝状遺構，土坑，遺物集中	陶器，磁器
		縄文早期から中世を中心とする複合遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡・連穴土坑・集石遺構（100基以上）・落とし穴，弥生時代の竪穴住居跡，古代～中世の掘立柱建物跡が検出され，遺物は縄文時代早期の土器・打製石鏃・打製石斧・環状石斧・トロトロ石器・磨石等，縄文時代後期・弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
9	稲荷堀B	曽於郡大崎町菱田 台地　標高約50m	県文化財課の試掘調査により，本路線上には，遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。				
10	平良上C	曽於郡大崎町井俣 台地 標高約50m	終了	作業中	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，　集石遺構，土坑，土器集中，埋設土器，チップ集中	吉田式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，押型文土器，平栫式土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧，扁平打製石斧，磨石，石皿，礫石器，石核，剥片，フレーク，チップ
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡・連穴土坑・集石・土坑が検出されている。遺物は縄文時代早期の土器・石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
11	宮脇	曽於郡大崎町 井俣 台地 標高約43m	H27年度～ 調査中	—	旧石器	—	石核，円礫，フレーク，チップ
					縄文早期	集石遺構，土坑，ピット，土器集中	加栗山式土器，小牧3Aタイプ，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，打製石鏃，磨石，チップ，破砕（散在）礫
					近世～近現代	—	土瓶（薩摩焼），寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代の遺構は検出されていないが，石器製作過程の所産と思われる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期の遺構は，集石，土坑，土器集中，ピットが検出されている。遺物は，土器，石器等約10,000点が出土している。近世の寛永通宝，近世以降の土瓶（薩摩焼）が出土している。鬼界カルデラ噴火時に2度の大地震により発生した液状化現象を示す噴砂層が見られる。					
12	堂園堀	曽於郡大崎町井俣 台地　標高約45m	県文化財課の試掘調査，県立埋蔵文化財センターの確認調査により，本路線上には，遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	荒園	曽於郡大崎町 仮宿	H24年度～	作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃・水晶剥片
					縄文早期	素材剥片（頁岩）遺構，集石遺構，チップ，剥片集中区，土坑	前平式土器，吉田式土器，加栗山式土器，下剥峯式土器，押型文土器，手向山式土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，苦浜式土器，条痕文土器，壺形土器，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製石斧，磨製石斧，磨石，石皿，フレーク，チップ
					弥生中期	竪穴住居跡，土坑	吉ヶ崎式土器，山ノ口式土器，磨製石鏃未製品，砥石
					古　墳	竪穴住居跡	東原式土器，笹貫式土器，須恵器，砥石
					古代以前	片薬研堀	—

番号	遺跡名	所在地・立地	調　査	整理･報告書	遺　跡　の　概　要		
					時　代	主　な　遺　構	主　な　遺　物
13	荒園	台地縁辺部 標高約50m	調査中	作業中	中　世	掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面，ピット	土師器（皿），東播系須恵器，陶器，青磁，華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする複合遺跡である。遺構は縄文時代早期の集石遺構，弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡，古代以前の片薬研堀，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	永吉天神段	曽於郡大崎町 永吉 台地縁辺部 標高約50m 及び 河岸段丘 標高約30m	終了	埋文調査セ（8） 第一地点編 2016.3刊行 ・ 作業中	旧石器	ブロック，礫群	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石遺構，埋設土器	前平式土器，吉田式土器，加栗山式土器，手向山式土器，下剥峯式土器，押型文土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，苦浜式土器，条痕文土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧，磨石，敲石，石皿，フレーク，チップ
					縄文後期	—	北久根山式土器，中岳Ⅱ式土器
					縄文晩期	竪穴住居跡，落とし穴，土坑	入佐式土器・黒川式土器，刻目突帯文土器，管玉，打製石斧
					弥　生	竪穴住居跡，円形周溝墓,土坑墓群，掘立柱建物跡，土坑	入来式土器・山ノ口式土器，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古　墳	竪穴住居跡，土坑	成川式土器，須恵器
					古　代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中　世	掘立柱建物跡，土坑墓，地下式坑，火葬土坑,土坑	白磁,青磁,土師器,瓦質土器,東播系須恵器,備前焼,常滑焼,湖州六花鏡,砥石,石塔,古銭
					近　世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
		旧石器時代から近世までの複合遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群が検出された。土坑墓からは国内最古級に位置付けられる鉄鏃が出土した。中世においては白磁,青磁,瓦質土器,東播系須恵器等が多量に出土し，当時流通の拠点であったことをうかがい知ることができる。					
15	京の塚	曽於郡大崎町 西持留 台地縁辺部 標高約95m	終了	作業中	縄文早期	集石遺構	石坂式土器，下剥峯式土器，中原式土器，押型文土器，塞ノ神式土器，打製石鏃，石核
					縄文前期～中期初頭	土坑，土器集中	曽畑式土器，深浦式土器，大歳山式土器，鷹島式土器，船元式土器，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核，フレーク
					近世以降	溝状遺構，古道	—
		縄文時代早期から中期初頭，近世以降の複合遺跡で，縄文時代前期から中期初頭が中心となる遺跡である。200基を超える縄文時代中期の土坑が検出されている。また，在地系土器の深浦式土器だけでなく，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器・瀬戸内地方の船元式土器などが出土しており，他地域との交流をうかがい知ることができる。					
16	小牧	鹿屋市串良町 細山田	H27年度～	作業中	旧石器	—	細石刃，フレーク，チップ
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石遺構	前平式土器，吉田式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，平栫式土器，条痕文系土器，石匙，磨石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式土器，深浦式土器，磨石
					縄文後期	竪穴住居跡，伏甕，打製石斧，集積遺構，集石，土坑，土器集中	指宿式土器，市来式土器，凹線文系土器，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿
					縄文晩期	—	入佐式土器，黒川式土器，刻目突帯文土器
					弥生中期	—	入来式土器，山ノ口式土器，砥石

番号	遺跡名	所在地・立地	調　査	整理･報告書	遺　跡　の　概　要		
					時　代	主　な　遺　構	主　な　遺　物
16	小牧	台地 標高約60m	調査中	作業中	古　　墳	竪穴住居跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式～辻堂原式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品
					古　　代	土坑	土師器（甕・坏），須恵器短頸壺
					中世以降	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑，柱穴，焼土域	土師器(坏)，白磁，青磁，石鍋，鞴の羽口
		旧石器時代から中世までの複合遺跡である。縄文時代早期や後期の良好な竪穴住居跡やそれに伴う土器が出土している。また，古墳時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡が検出されている。本遺跡は，各時期における集落跡と考えられ，周辺の遺跡を含めて串良川沿岸での人間活動の変遷を継続的に追うことができる遺跡である。					
17	川久保	鹿屋市串良町 細山田 河岸段丘 及び 台地 標高約30～50m	H26年度～ 調査中	作業中	縄文早期	集石遺構，土坑	前平式土器，加栗山式土器，吉田式土器，倉園Ｂ式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，押型文土器，塞ノ神式土器，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石遺構	轟式土器，曽畑式土器，磨製石斧
					縄文晩期	集石遺構	黒川式土器，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡	高橋式土器，下城式土器，山ノ口式土器
					古　　墳	竪穴住居跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，古道跡	笹貫式，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古　　代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中　　世	掘立柱建物跡，古道跡，溝状遺構	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの複合遺跡である。特に，古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡が検出されている。これらの遺構の中には，鍛冶関連遺構を伴うものや専用の鞴の羽口が出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					
18	町田堀	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度～ 調査中	埋文調査セ （7） 2016.3刊行	縄文早期	集石遺構	下剥峯式土器，平栫式土器
					縄文後期	竪穴住居跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式土器，石刀，打製石斧，磨製石斧，石鏃，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡	山ノ口式土器
					古　　墳	地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器（壺・高坏・坩），人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　　代	焼土跡，古道	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの複合遺跡である。縄文時代後期では，竪穴建物跡から櫂原文を施す完全な石刀が出土している。また，古墳時代では，88基の地下式横穴墓が報告されている。地下式横穴墓では初めて，円形周溝を伴う例が確認されている。					
19	牧山	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度～ 調査中	作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石遺構，石器製作跡	吉田式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，辻タイプ，桑ノ丸式土器，押型文土器，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石，剥片，チップ，被熱破砕礫
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式土器，条痕文土器
					縄文後期	土坑，ピット，落とし穴状遺構，埋設土器，石器集中部	市来式土器，西平式土器，丸尾式土器，太郎迫式土器，三万田式土器，中岳Ⅱ式，打製石斧，磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠，被熱破砕礫
					縄文晩期	土坑・ピット	入佐式土器，突帯文土器
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式土器，打製石斧，磨製石斧，磨製石鏃，打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鑿

番号	遺跡名	所在地・立地	調　査	整理･報告書	遺　跡　の　概　要		
					時　代	主　な　遺　構	主　な　遺　物
19	牧山				中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代～中世にかけての複合遺跡である。中でも，縄文時代後期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴群（径約30cm・深さ約40cmの柱穴300～400個）が環状で確認されており注目される。また，埋設土器や祭祀用とみられる石冠も出土している。					
20	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度～調査中	縄文前期以降編 埋文調査セ （５） 2016.3刊行 ・ 作業中	縄文早期	竪穴住居跡，落とし穴，連穴土坑，土坑，集石遺構，石器製作跡	前平式土器，吉田式土器，倉園Ｂ式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，辻タイプ，桑ノ丸式土器，中原式土器，押型文土器，手向山式土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，石槍，磨製石鏃，打製石鏃，石匙，砥石，石皿，磨石，敲石
					縄文前期	—	曽畑式土器
					縄文後期	—	指宿式土器，市来式土器
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，円形周溝，方形周溝，土坑，柱穴列	山ノ口式土器，擬凹線文系壺，樹皮布敲石，磨製石鏃，砥石，石匙，磨石，敲石，台石，土製勾玉，土製加工品
					古墳時代以降	溝状遺構，道跡，畝状遺構群	成川式土器，須恵器，土師器，陶器，磁器，瓦器，薩摩焼
		縄文時代早期～弥生時代中期を中心とした複合遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構に伴う方形や大型の円形の竪穴住居跡，棟持柱をもつ２棟を含む掘立柱建物跡，柱穴列や円形・方形の周溝など，大隅半島中央部での当時の集落のあり方を知る上で貴重な資料である。また，大型建物跡の可能性が高いとして，一部が現地に保存されている。縄文時代早期についても竪穴住居跡20軒・連穴土坑40基など注目される遺構が多く検出されている。					
21	立小野堀	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度～調査中	作業中	縄文前・中期	—	深浦式土器
					縄文後期	—	指宿式土器，西平式土器，市来式土器
					弥生中期	—	山ノ口式土器
					古　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式土器，須恵器，人骨，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴
					時期不詳	溝状遺構	
		縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡である。特に古墳時代の地下式横穴墓が，多量の土器・須恵器・鉄鏃や鉄剣等の鉄器・青銅製鈴・人骨等を伴い190基発見された。これだけ多くの副葬品を伴った地下式横穴墓の発見は，地下式横穴墓の研究だけでなく，南九州の古墳時代の様相を解明していく上で貴重な資料となる。					
22	十三塚	鹿屋市串良町細山田 台地 標高約140m	終了	埋セ報告書 （164） 2011.3刊行	縄文早期	—	石坂式土器
					縄文後期	—	凹線文土器，市来式土器
					縄文晩期	—	黒川式土器，三万田式土器
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式土器，土製勾玉，磨製・打製石鏃，棒状敲具，鉄鏃
					古墳時代	—	成川式土器
					中世～近世	道路状遺構	加治木銭
		弥生時代中期が中心となる遺跡である。竪穴住居跡は，花弁形・方形・円形に分類されている。出土遺物等から，王子遺跡(鹿屋市王子町)や前畑遺跡(鹿屋市郷之原町)等と同時期の集落跡と考えられている。また，集石遺構が竪穴住居跡内から検出されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡(南さつま市金峰町)や永吉天神段遺跡(曽於郡大崎町)で出土した鉄鏃同様，無茎の鉄鏃が出土した。					
23	石綰	鹿屋市串良町細山田　台地 標高約140m	終了	埋セ報告書 （164） 2011.3刊行	縄文早期	集石遺構，土坑	岩本式土器，前平式土器，志風頭式土器，石坂式土器，平栫式土器，貝殻条痕文土器，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	—	山ノ口式土器，須玖式
		縄文時代早期及び弥生時代中期の複合遺跡である。鎌石橋式土器が１個体と轟Ａ式が２個体出土し，同時期に存在した可能性も考えられる。					

第８図　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡位置図

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

田原迫ノ上遺跡の発掘調査は，平成22～平成26年度まで５年間に渡り実施した。現道部分は未調査であるが，平成28年度以降の調査を予定している。調査対象表面積は31,289㎡，調査対象延面積は62,389㎡である。

調査区割りは，高速道路建設予定地のセンター杭STA№181とSTA№182を基準にして，１グリッド10m×10mの大きさで設定を行った。グリッドは，その２点を結ぶ直線を東西方向の基準線とし，センター杭STA№181と直行する直線を南北方向の基準線とした。その上で，センター杭STA№181と直行する直線を軸として東に向けて10ｍ間隔に１，２，３，・・・と番号を付した。また，センター杭STA№181から南に30mが，高速道路予定地南端を含む場所であったことから，この地点を南北方向の基準として北側に向けて10m間隔にＡ，Ｂ，Ｃ，・・・とアルファベットを付し，Ａ-1区などと呼称することとした。

なお１区より西側は，発掘調査中で新たに広がった範囲のため，１区より西側は，100，99，98・・・として，96区まで設定した。

発掘調査は，基本的に重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行い，遺物取り上げや遺構の検出を行った。無遺物層については，重機を用いて慎重に掘り下げを行った。遺構については，それぞれの遺構の特徴に適した道具（移植ごて・お玉・スプーン・竹べら等）を用いて慎重に調査を行った。また，遺構の実測や写真撮影を適宜行った。遺物は，平板実測またはトータルステーションで取り上げを行った。

なお，調査区の壁際を中心に幅１ｍ程の先行トレンチを設定し先に人力で掘り下げることで，地形や各層の把握に努めた。また，遺構の範囲確認やシミ状痕跡には，ミニトレンチを設定するなどして，上面での把握に努めた。

地形測量は，薩摩火山灰（XIII層）上面で，平板測量及びトータルステーションを用いて実施した。

竪穴住居跡については，中央に十字の土層観察用ベルトを残し掘り下げを行い，完掘後には立ち割りを行ったものもある。

落とし穴については，半裁し，土層断面等を確認するため立ち割りを行い，完掘した。

連穴土坑については，半裁し土層断面等の実測後に完掘し，立ち割りを行い，底面以下の状況の確認を行った。

土坑については，半裁し完掘を行った。

集石遺構については，検出時の礫を平面・見通し断面２面で実測した後，礫を取り上げ掘り込みの有無の精査を行った。

石器製作跡については，チップ等の出土状況に応じて，周辺を手鎌で精査し，出土状況を把握した。

薩摩火山灰（XIII層）以下については，年度毎・調査区毎に下層の調査を行った。結果，Ｈ-48区においてのみ１点石核が出土し，範囲を広げ調査を行ったが，他の遺構・遺物が確認されなかったことから，無遺物層とした。

２　遺構の認定と検出方法

(1)　遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，担当職員や民間調査組織担当者で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の遺構の認定は，以下のとおりである。

ア　竪穴住居跡・土坑

形状，規模，埋土，壁の立ち上がり状況や床面（底面）の状況などで総合的に判断した結果，21軒を竪穴住居，104基を土坑と認定した。

イ　落とし穴

形状，深さ，埋土，杭跡の有無などで総合的に判断した結果，９基を落とし穴と認定した。

ウ　連穴土坑

大小二つの土坑が地中（トンネル）でつながれたものを一基の連穴土坑とした。また，明確なトンネルはないが，ブリッジ部分が崩落・崩壊した痕跡の見られるものも連穴土坑とした。結果，40基を連穴土坑と認定した。

エ　集石遺構・石器製作跡

周辺の遺物出土状況や礫砕片やチップ等の広がりの範囲を総合的に判断した結果，192基を集石遺構，５基を石器製作跡と認定した。

(2)　遺構の検出方法

鹿児島県内における縄文時代早期の遺物包含層は，アカホヤ火山灰（Ⅷ層）と薩摩火山灰（XIII層）に挟まれている。本遺跡も同様である。その二層の間の土壌は黒く，色調の判断が困難であるが，遺構の有無を判別をしやすいのが薩摩火山灰層上面である。そこで，各年度とも共通して，当時の掘り込み面に限りなく近い位置（上層）での検出に努めた。その方法の一つとして，面的に鋤簾等での精査を繰り返し行ったり，パミスの集中が見られる箇所にミニトレンチを設定したりして判断した。それでも，集石以外の遺構の多くは，薩摩火山灰層上面まで掘り下げないと検出できなかった。

３　整理作業・報告書作成作業の方法

平成26年度は，田原迫ノ上遺跡の弥生時代のみの整理作業・報告書作成作業を行っているため，ここでは記載しない。

平成24年度

平成22・23年度の発掘調査成果品の整理を行った。図面整理は，遺構実測図，土層断面図等に仕分けし，台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは，未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際，遺物に付着している重要な情報を除去することがないように洗い，細石刃等微細な剥片石器については，超音波洗浄機を使用した。

注記は，水洗い終了後，順次行った。注記は，田原迫ノ上遺跡出土遺物である確認のため，「田」を頭に，包含層から出土した遺物には続けて「区」・「層」を記入した。さらに，点上げにより取り上げた遺物には「取り上げ番号」を，一括で取り上げた遺物には，「一括」を併せて記入した。また，遺構内遺物については，「区」・「層」に続けて「遺構名称」を記入した。なお，小破片や器面の摩滅が著しいものについては注記を省略した。

分類・接合は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で分類し，さらにグリッドごとに分けた後接合を行い，その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，作業の効率化を図るため，予算の範囲内で石器実測委託を行った。

一部の遺構については，原稿執筆も行った。

平成25年度

前年度の整理作業に加え，平成25年度本遺跡の発掘現場整理作業所で，水洗い・注記・一部接合の作業を全点実施した。また本年度は，発掘調査支援業務委託において，現場で遺構図面のデジタルトレース等も行った。

平成26年度

平成26年度本遺跡の発掘現場整理作業所で，水洗い・注記・一部接合の作業を全点実施した。

平成27年度

「整理作業及び報告書作成作業支援業務委託」で行った。

土器の接合，台帳類の再整理，遺構図面作成，土器・石器実測，拓本等である。接合後は，文様や胎土，器形等で分類し，実測する土器片の個体抽出を行った。土器・石器実測のトレースはデジタルで行い，土器の内外面の文様等は，拓本で採取した。遺構図面のトレース，コンター図作成もデジタルである。

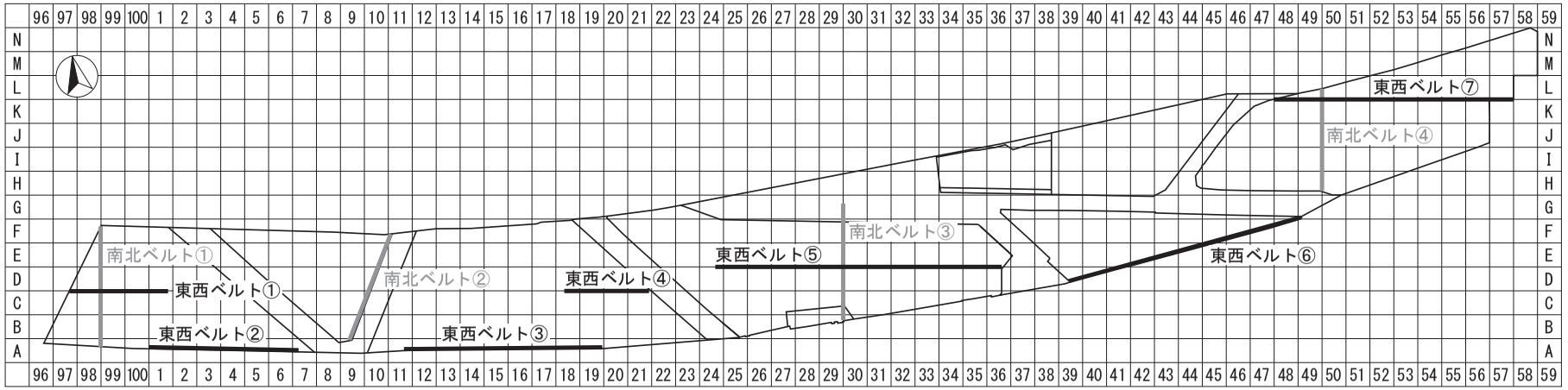
平成28年度

前年同様，「整理作業及び報告書作成作業支援業務委託」で行った。27年度の方法に準じて，未実測分の土器・石器の実測・トレース，遺構図作成の作業を行った。また，黒曜石の産地推定分析，レイアウト，写真撮影，原稿執筆を行った。

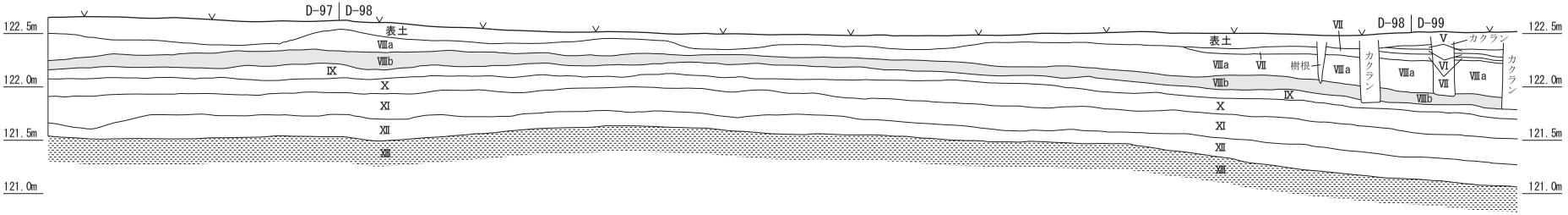
第２節　層序

田原迫ノ上遺跡の基本土層及び遺物・遺構の年代を把握する手掛かりの一つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

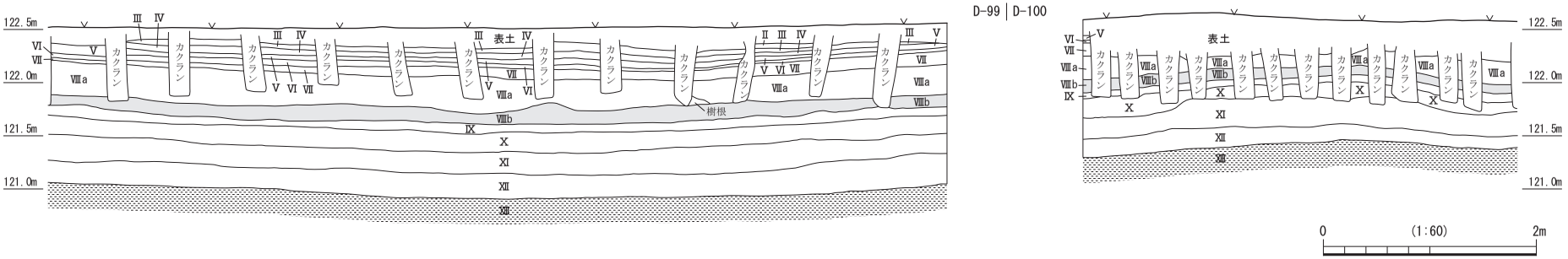
Ⅰ 層：旧耕作土や盛土で，表土とした。
Ⅱ 層：黒褐色土の無遺物層で，部分残存である。
Ⅲ 層：黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで４層に細分した。
Ⅲa 層：茶褐色土で，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅲb 層：茶褐色土で，Ⅲa 層より若干明るく，開聞岳噴出の火山灰を含む，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅲc 層：黒褐色土で，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅲd 層：茶褐色土で，開聞岳噴出の火山灰（灰ゴラ）を含む，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅳ 層：黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで２層に細分した。
Ⅳa 層：赤黒色土で，白色・黄色粒を含む。
Ⅳb 層：黒褐色土で，黄色パミスを若干含む。
Ⅴ 層：茶褐色土で，縄文時代前期遺物包含層であるが，部分残存である。
Ⅵ 層：茶褐色土で，池田湖起源（約6,400年前）の火山灰層で軽石を含む。
Ⅶ 層：暗茶褐色土である。
Ⅷ 層：明橙褐色土で，鬼界カルデラ起源（約7,300年前）の噴出物を含むアカホヤ火山灰層である。堆積物の違いで２層に細分した。
Ⅷa 層：明橙褐色土で，アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。
Ⅷb 層：明橙褐色土で，アカホヤ一次の軽石層である。
Ⅸ 層：黒褐色土で，多少粘質を帯びている。縄文時代早期後葉の包含層である。
Ⅹ 層：黒褐色土で，黄橙パミスを含む。縄文時代早期後葉の包含層である。
Ⅺ 層：暗茶褐色土で，黄橙色パミスを含む。縄文時代早期中葉の包含層である。
Ⅻ 層：暗茶褐色土で，黄橙色パミスを含むが，Ⅺ層よりは，パミスは少ない。縄文時代早期前葉～中葉の包含層である。
ⅩⅢ 層：黄白色で，桜島起源（Ｐ14：約12,800年前）の薩摩火山灰である。
ⅩⅣ 層：にぶい赤褐色で，粘質性が強く，「チョコ層」と言われる層である。



東西ベルト①

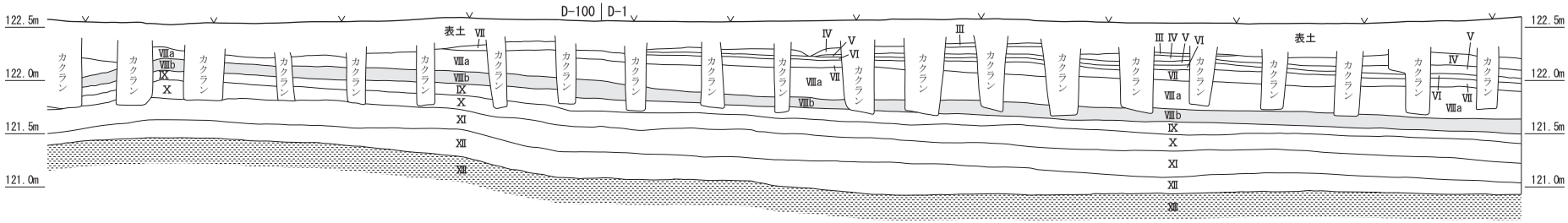


東西ベルト①

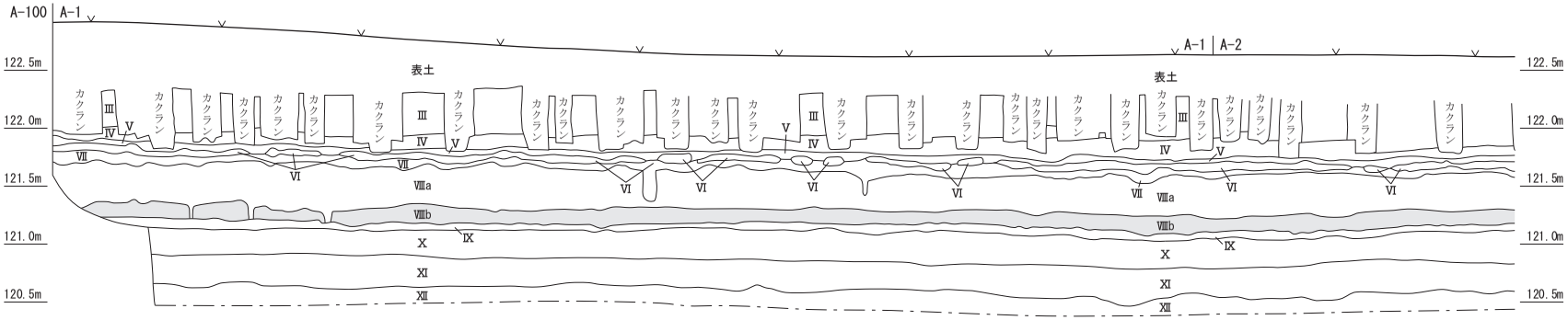


第９図　土層断面１

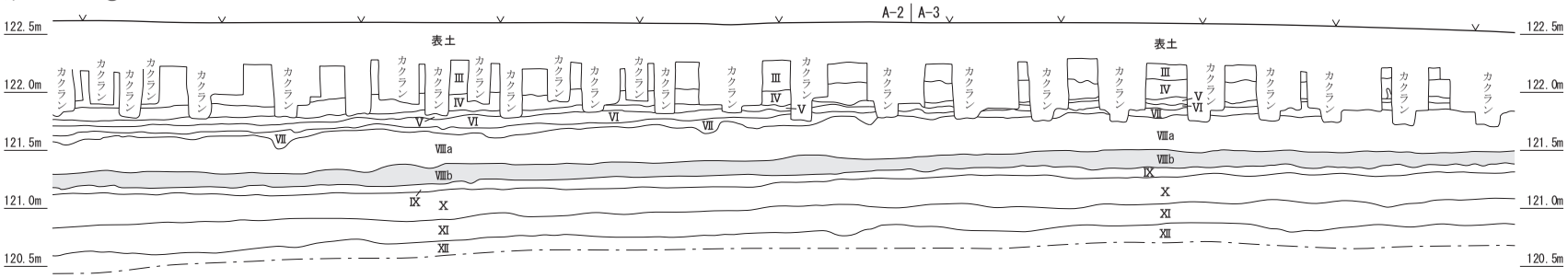
東西ベルト①



東西ベルト②



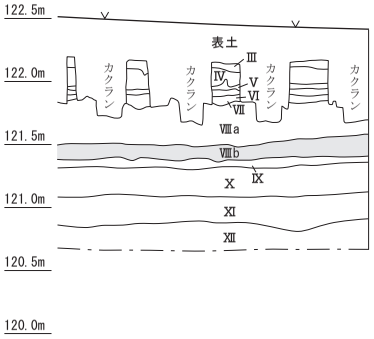
東西ベルト②



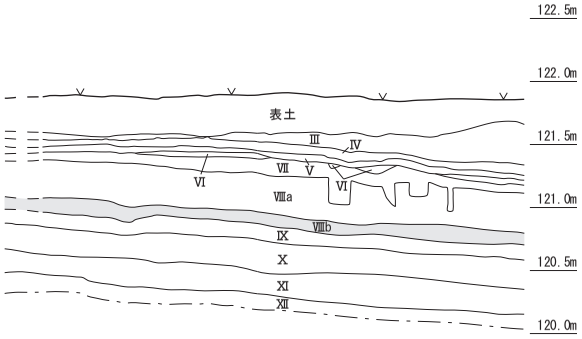
0 (1:60) 2m

第10図　土層断面２

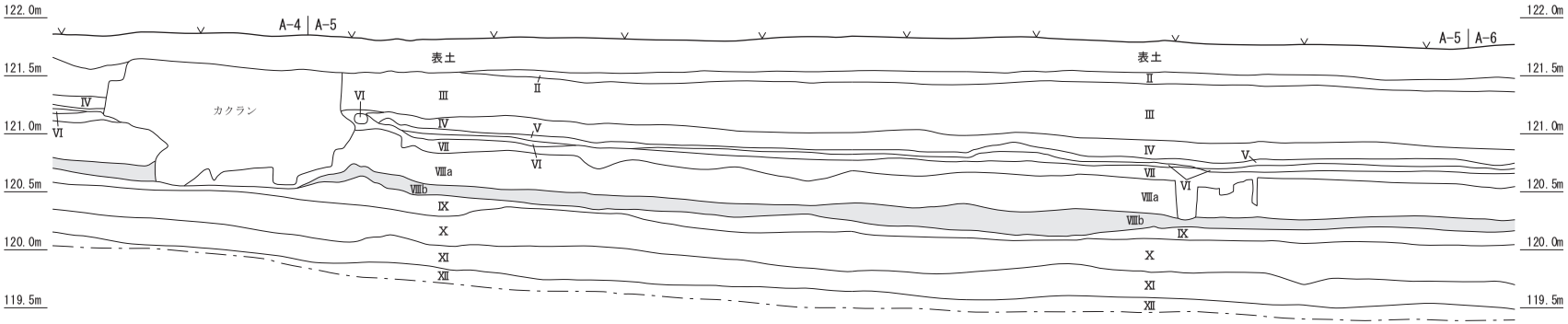
東西ベルト②



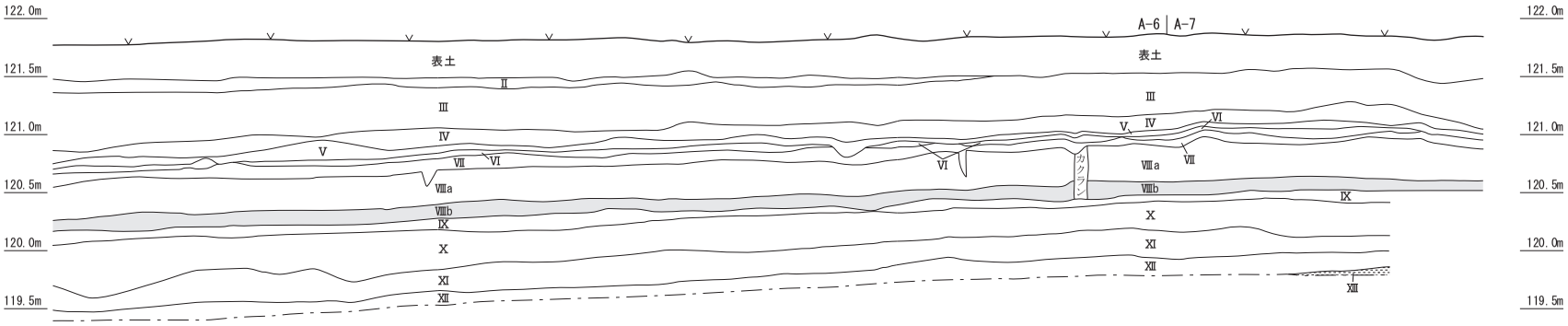
A-3 | A-4



東西ベルト②

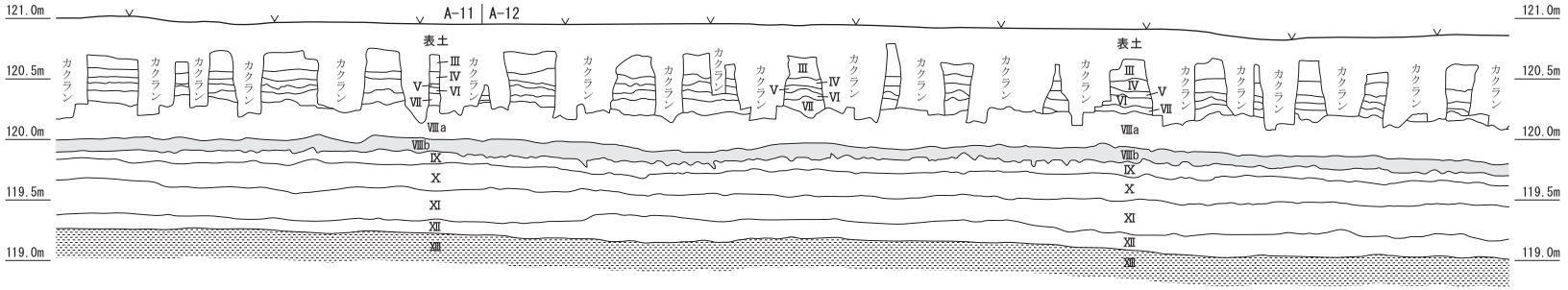


東西ベルト②

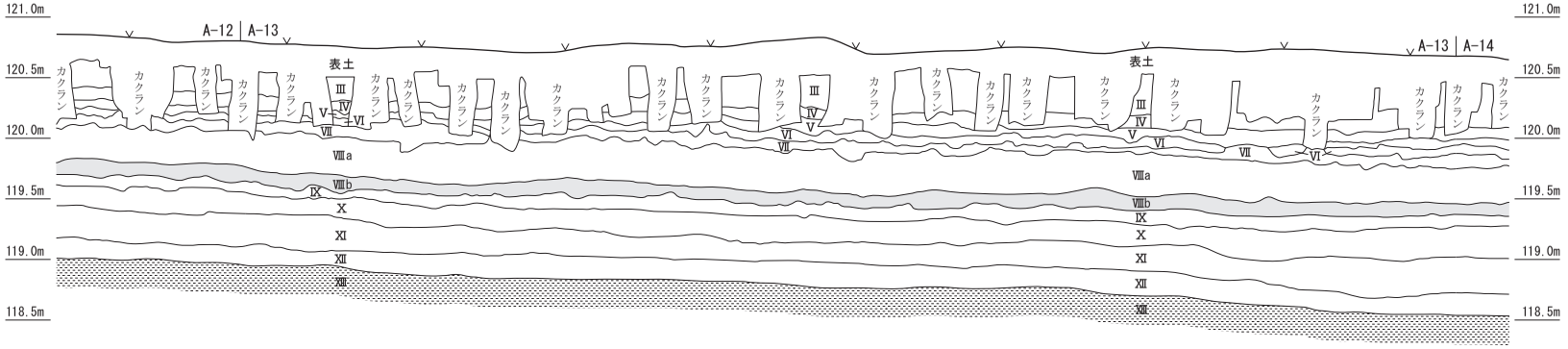


第11図　土層断面３

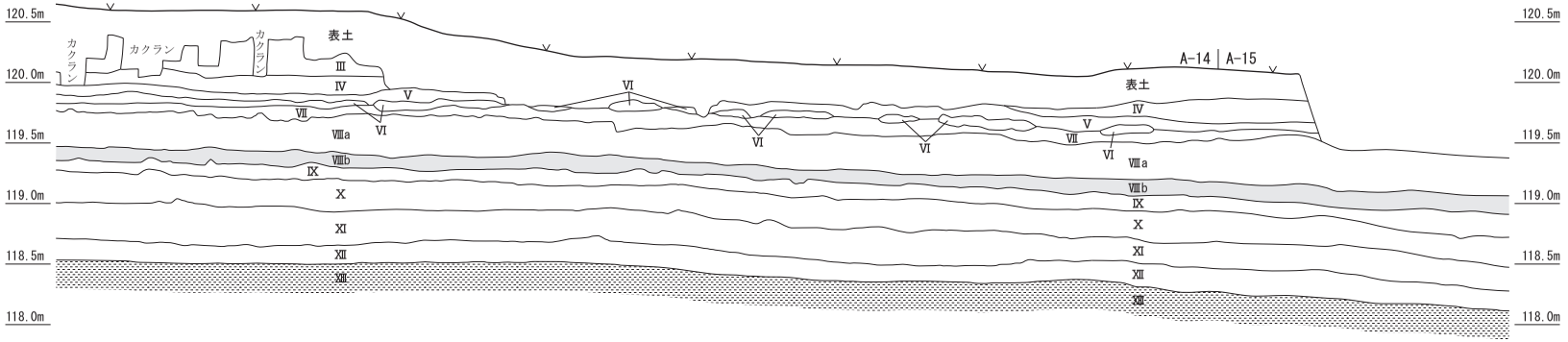
東西ベルト③



東西ベルト③



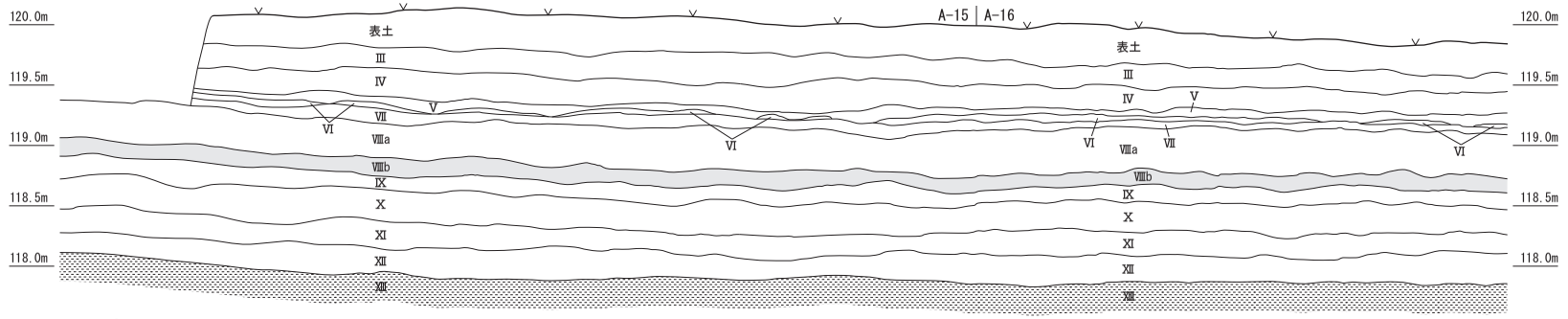
東西ベルト③



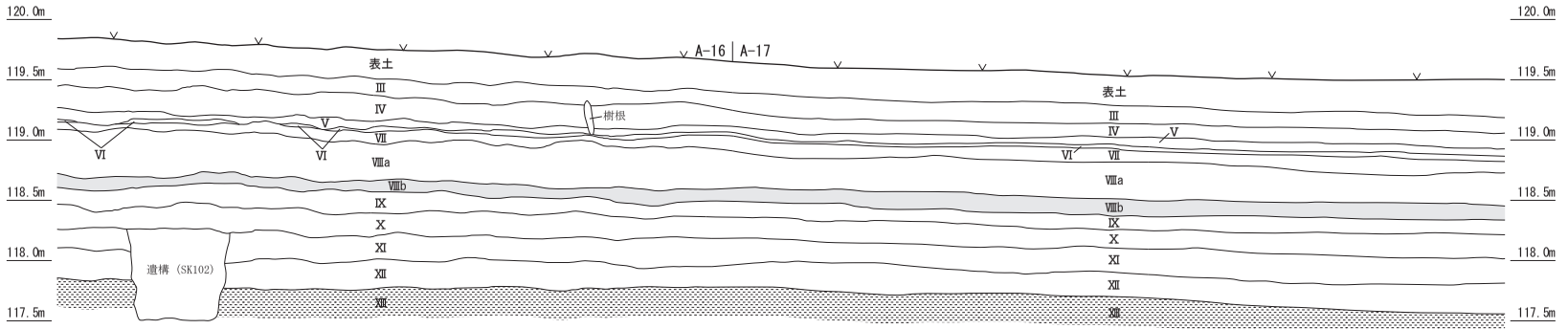
0 (1:60) 2m

第12図　土層断面４

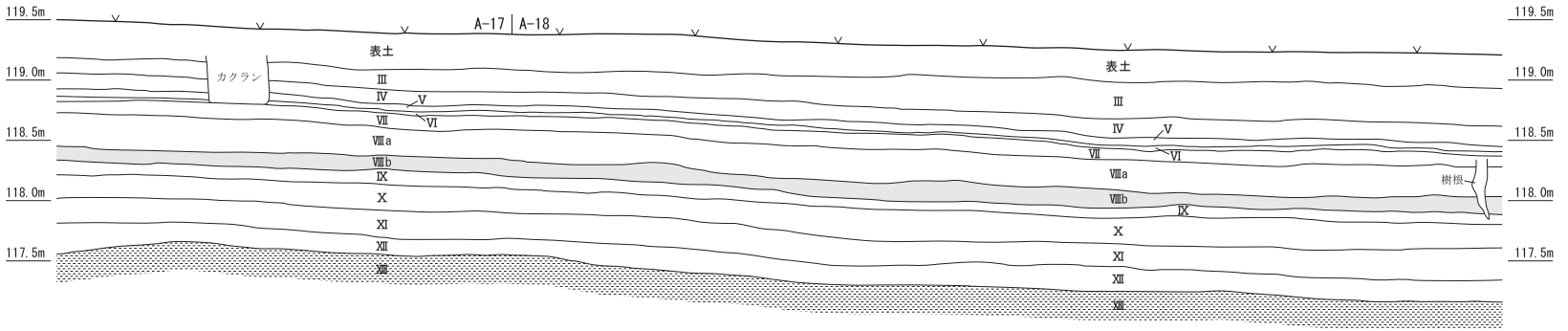
東西ベルト③

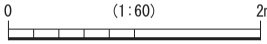


東西ベルト③



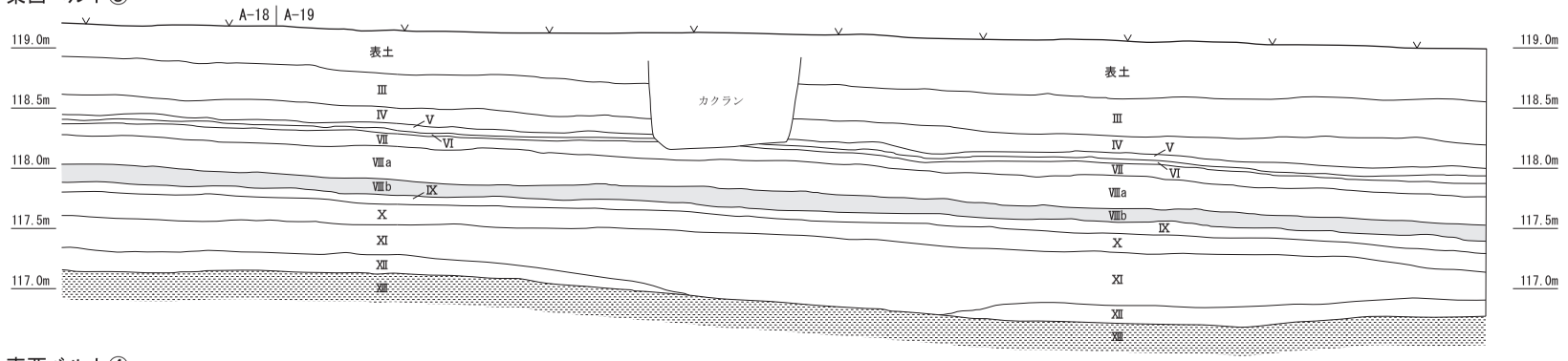
東西ベルト③



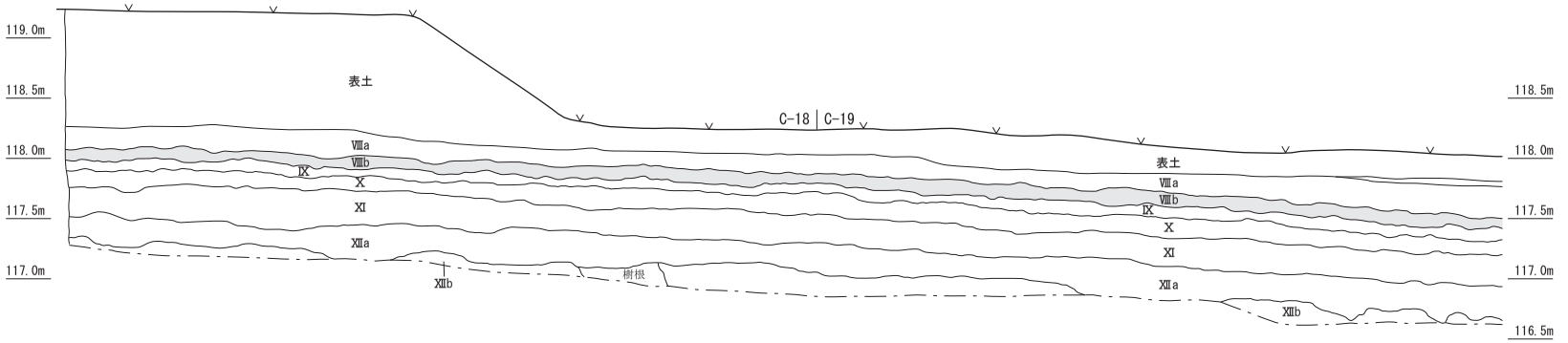


第13図　土層断面５

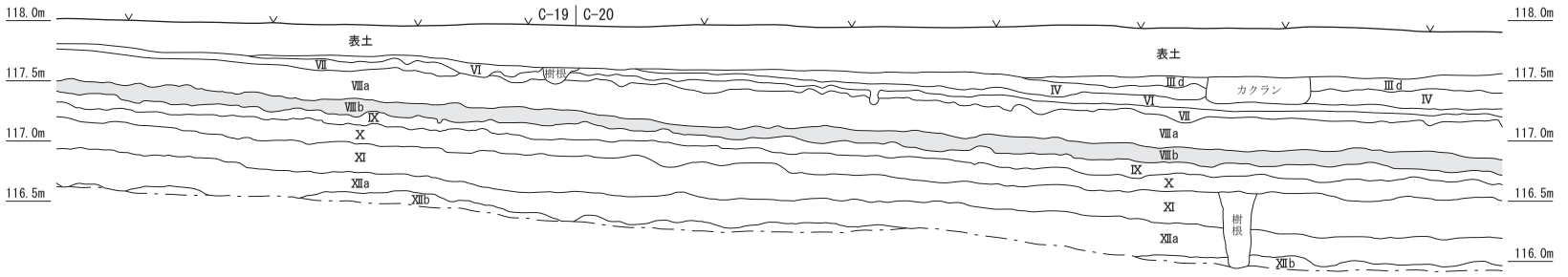
東西ベルト③



東西ベルト④



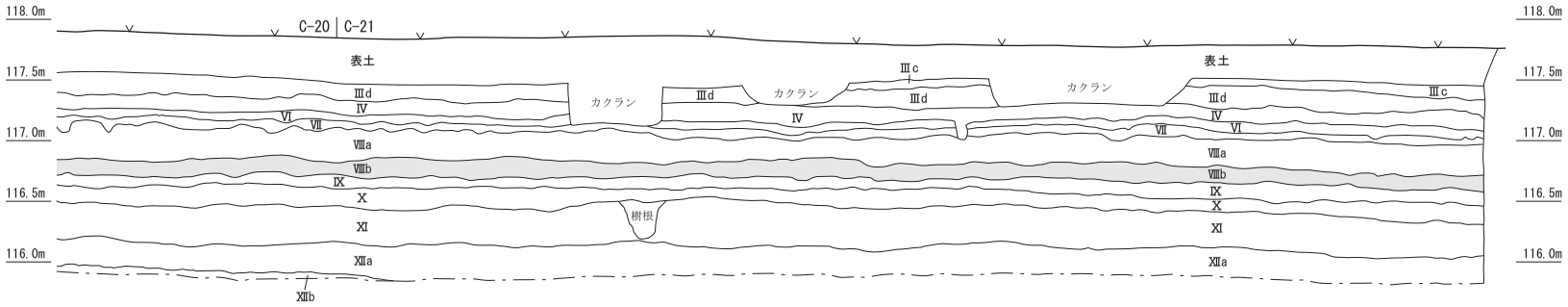
東西ベルト④



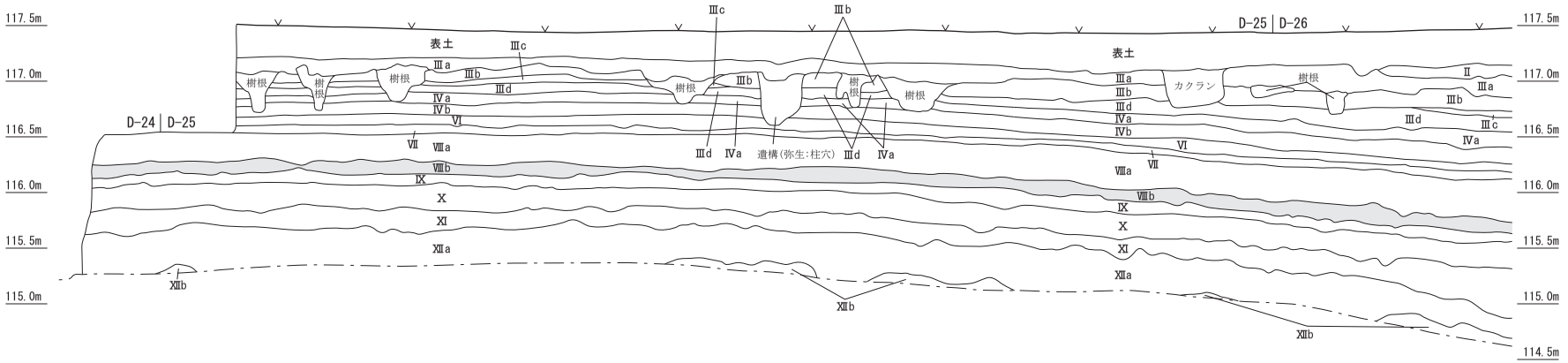
0 (1:60) 2m

第14図　土層断面６

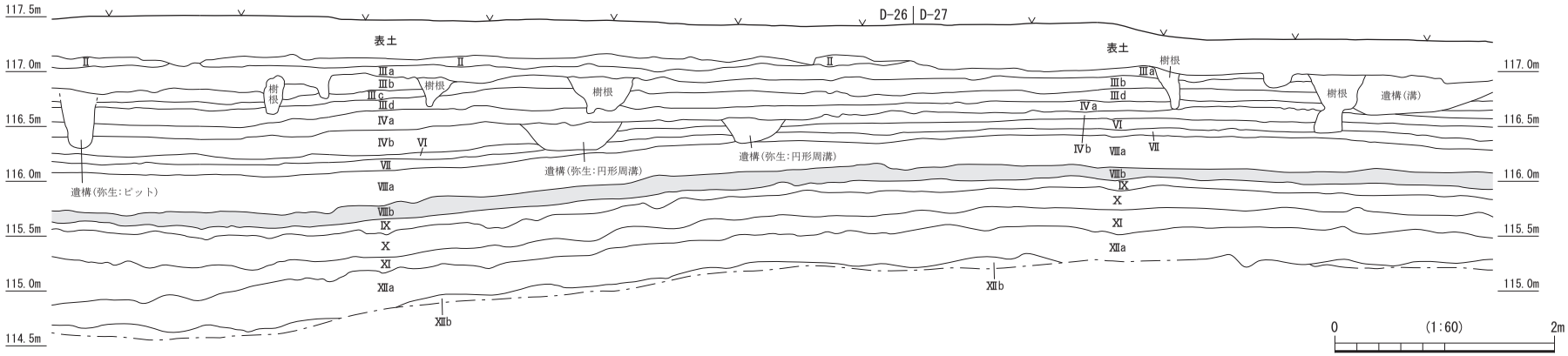
東西ベルト④



東西ベルト⑤

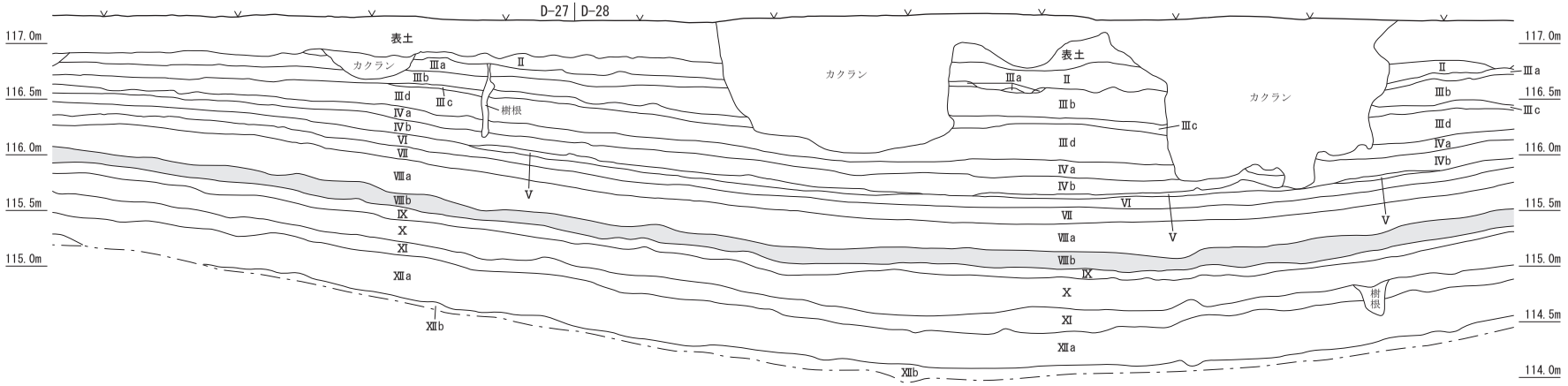


東西ベルト⑤

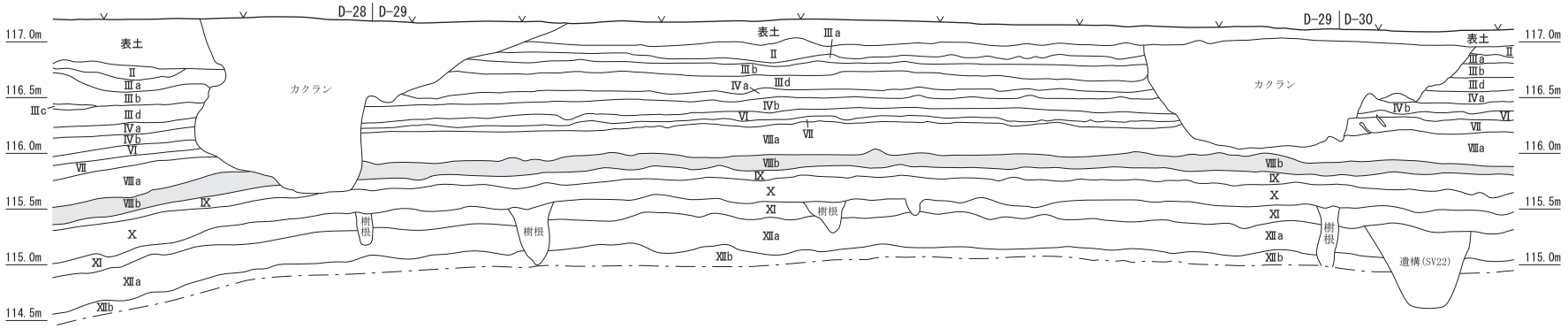


第15図　土層断面7

東西ベルト⑤



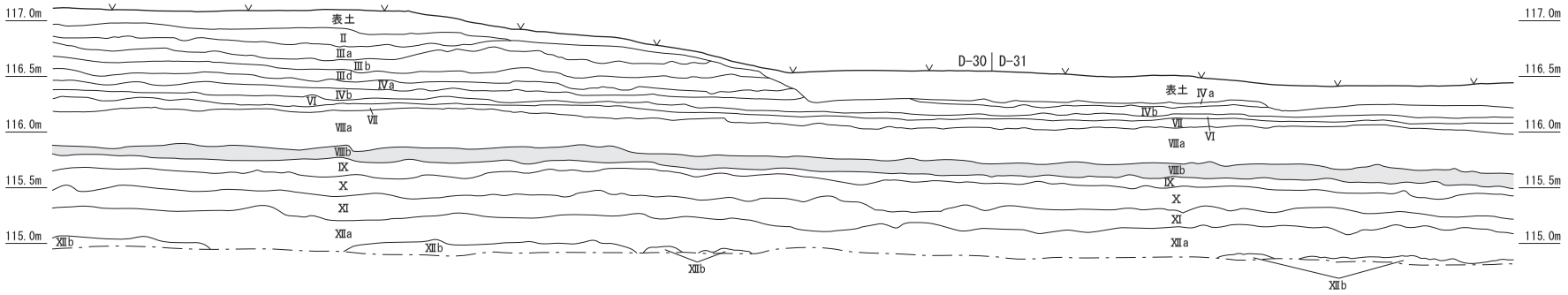
東西ベルト⑤



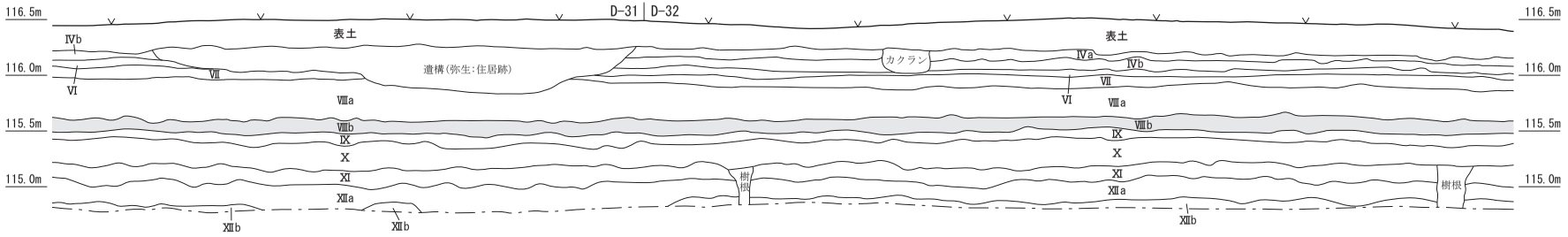
0 (1:60) 2m

第16図　土層断面8

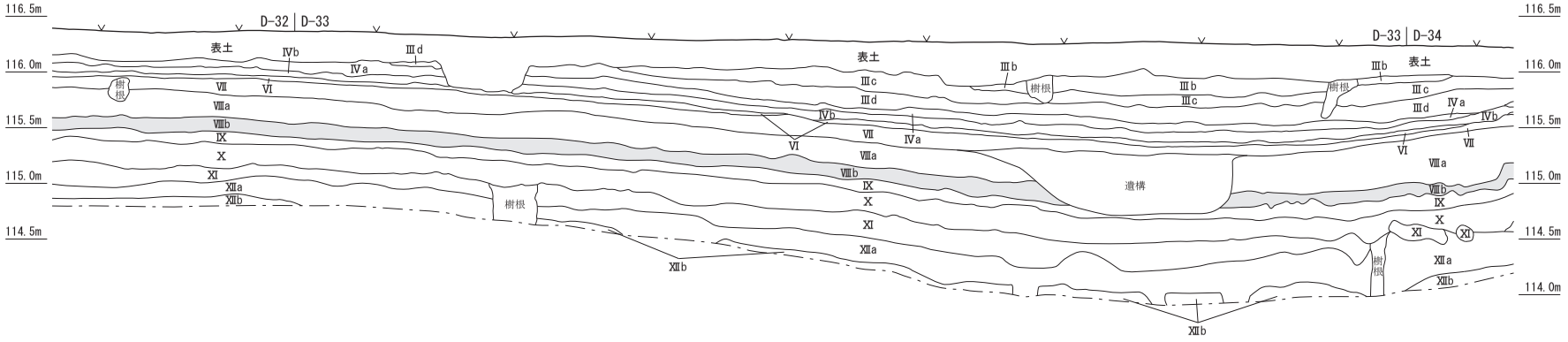
東西ベルト⑤



東西ベルト⑤



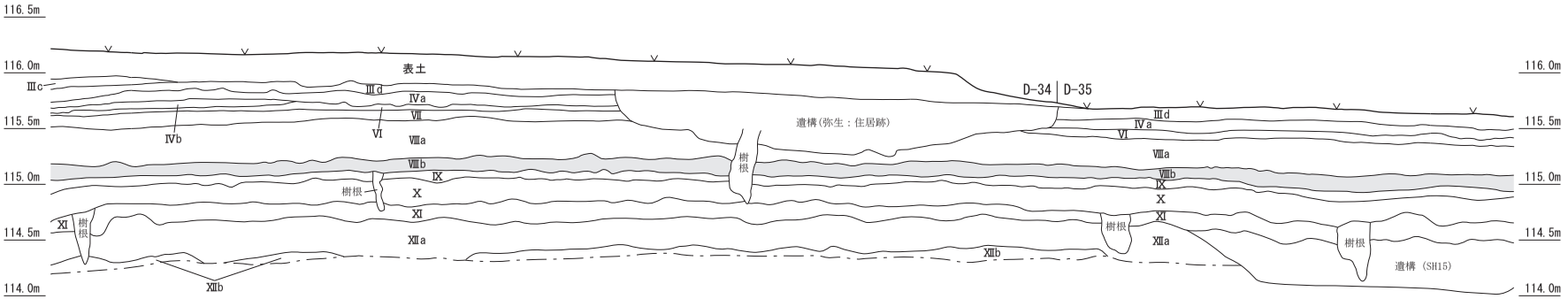
東西ベルト⑤



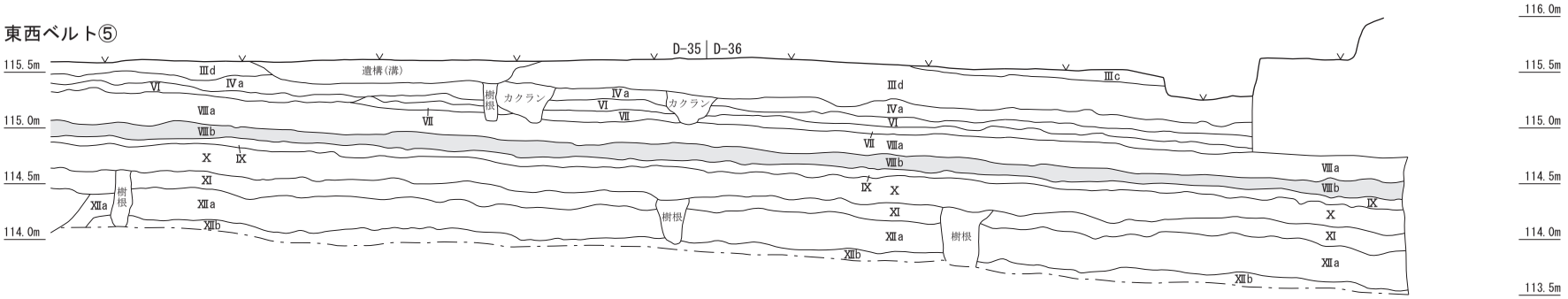
0 (1:60) 2m

第17図　土層断面９

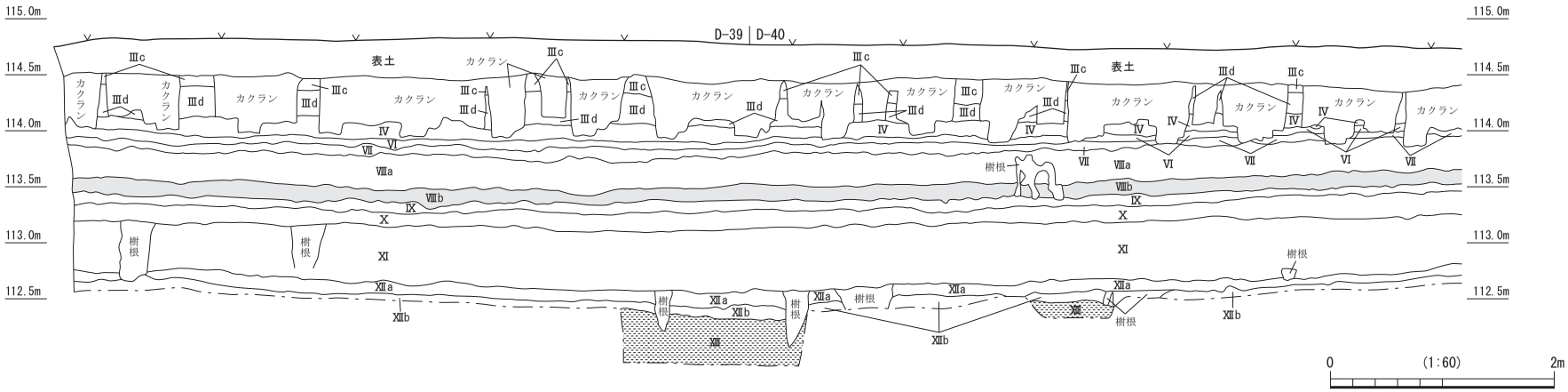
東西ベルト⑤



東西ベルト⑤

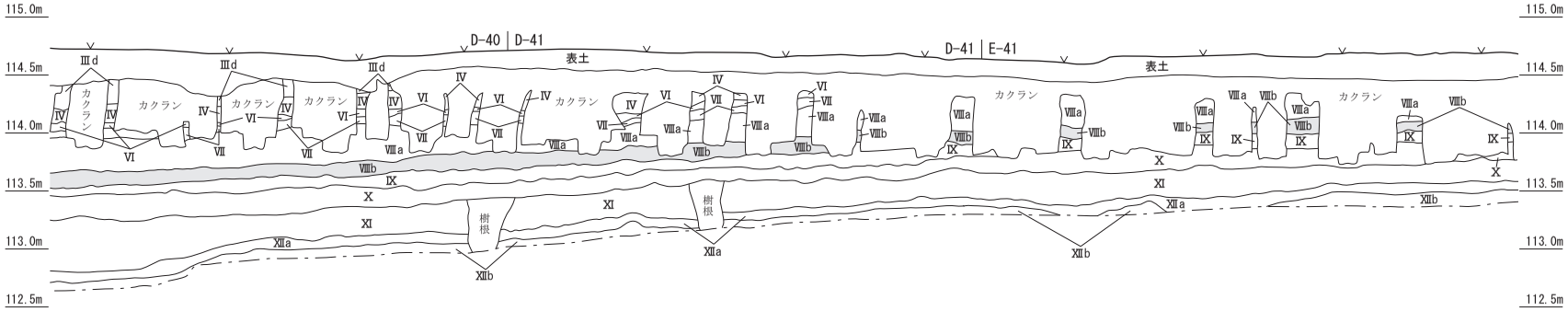


東西ベルト⑥

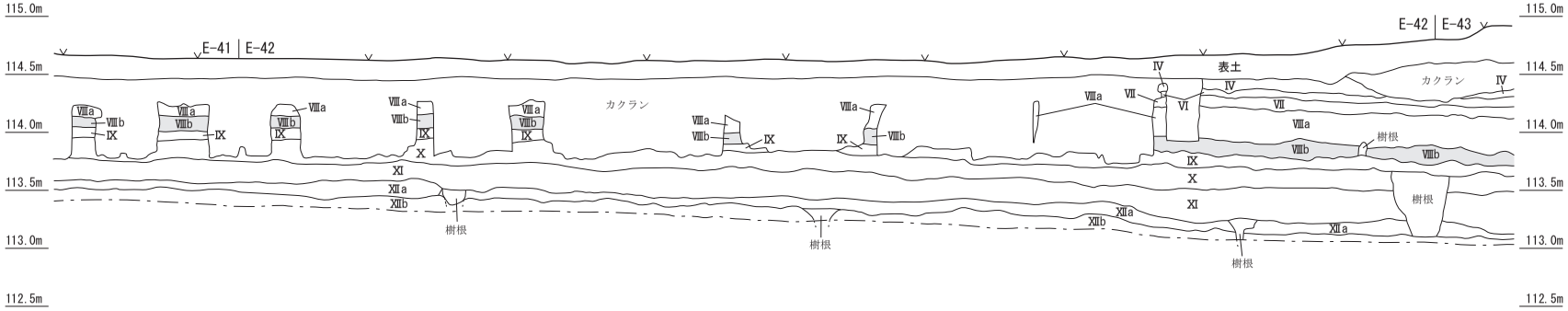


第18図　土層断面10

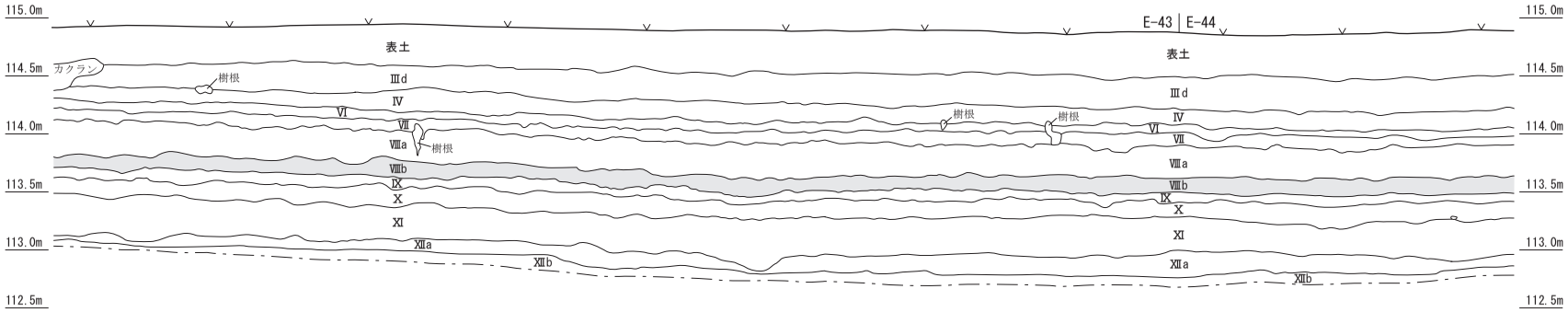
東西ベルト⑥



東西ベルト⑥



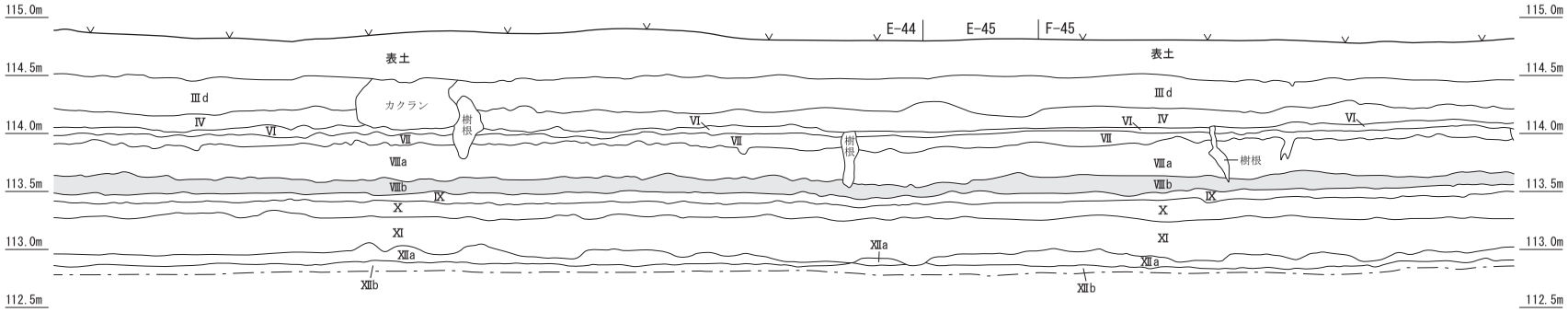
東西ベルト⑥



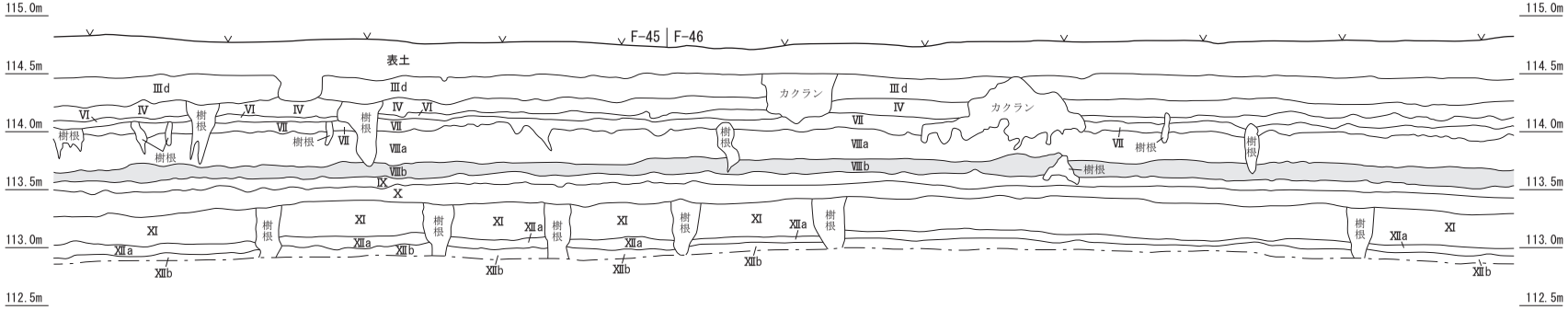
0 (1:60) 2m

第19図　土層断面11

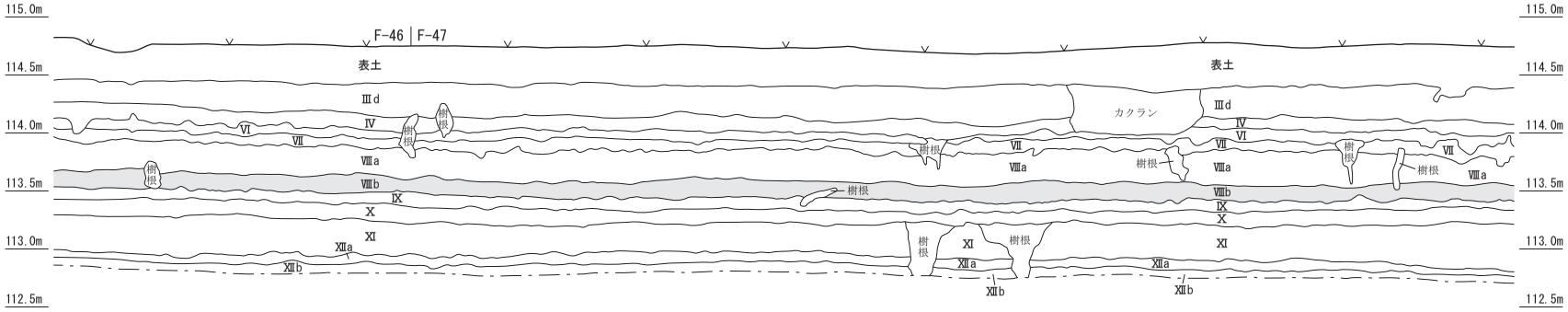
東西ベルト⑥



東西ベルト⑥



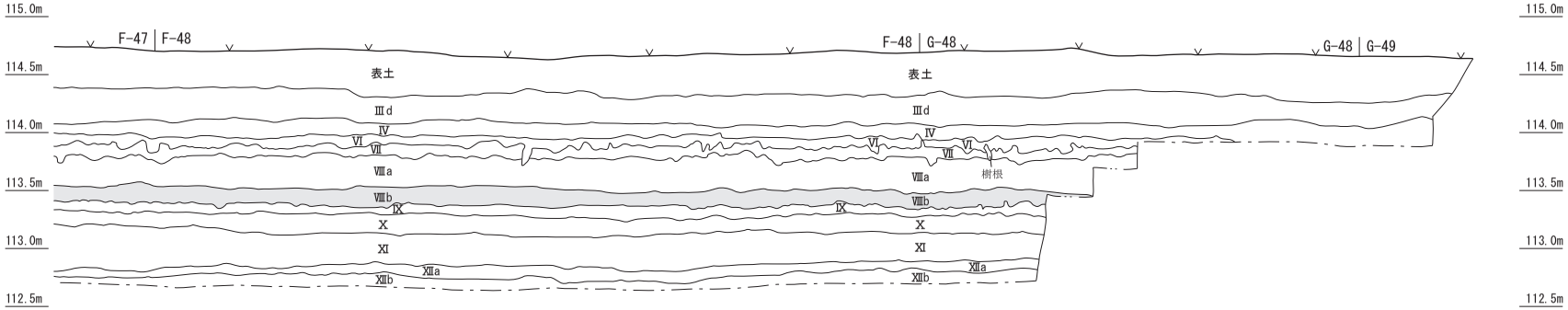
東西ベルト⑥



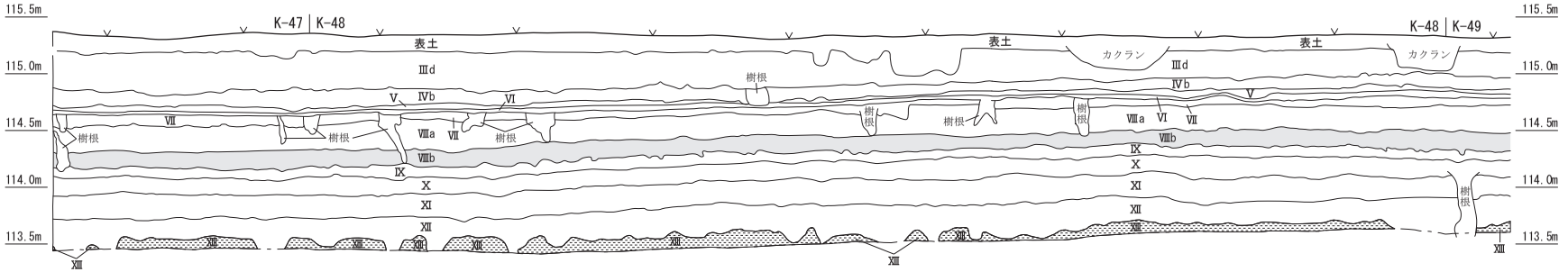
0 (1:60) 2m

第20図　土層断面12

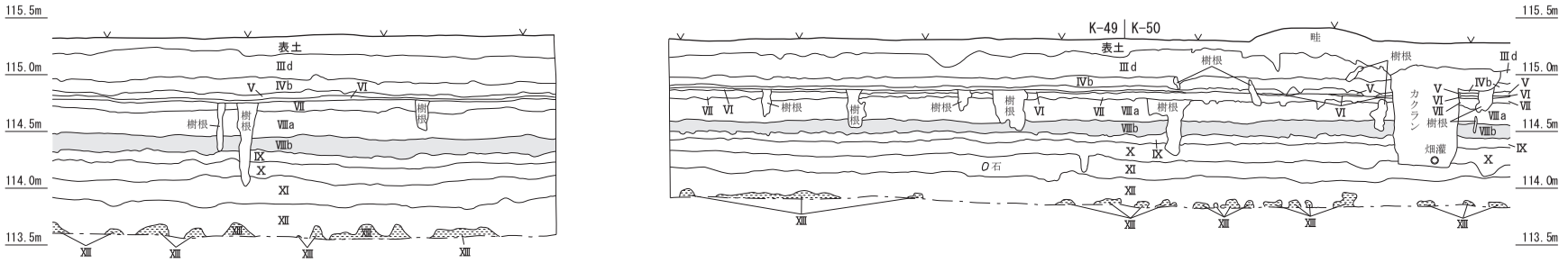
東西ベルト⑥



東西ベルト⑦



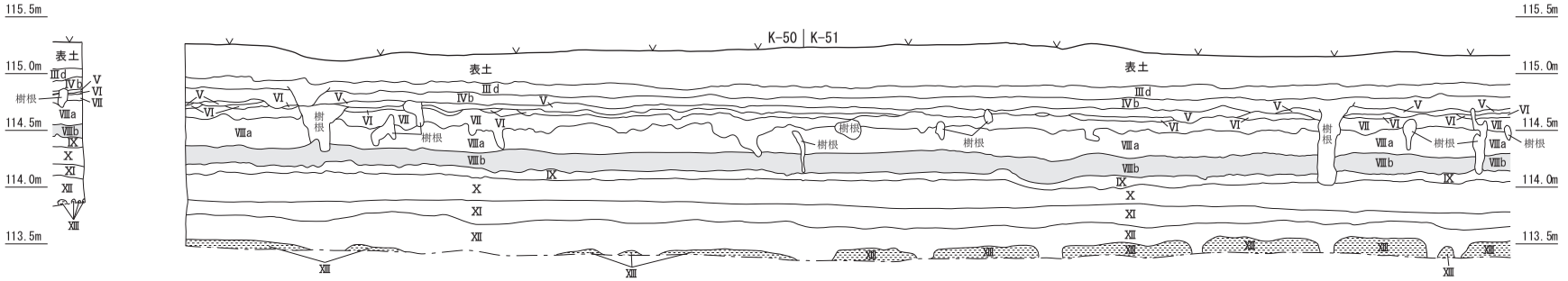
東西ベルト⑦



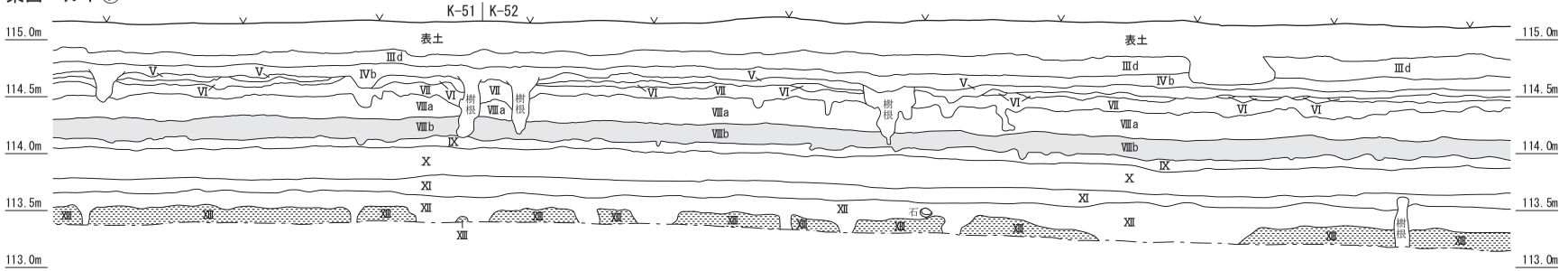
0 (1:60) 2m

第21図　土層断面13

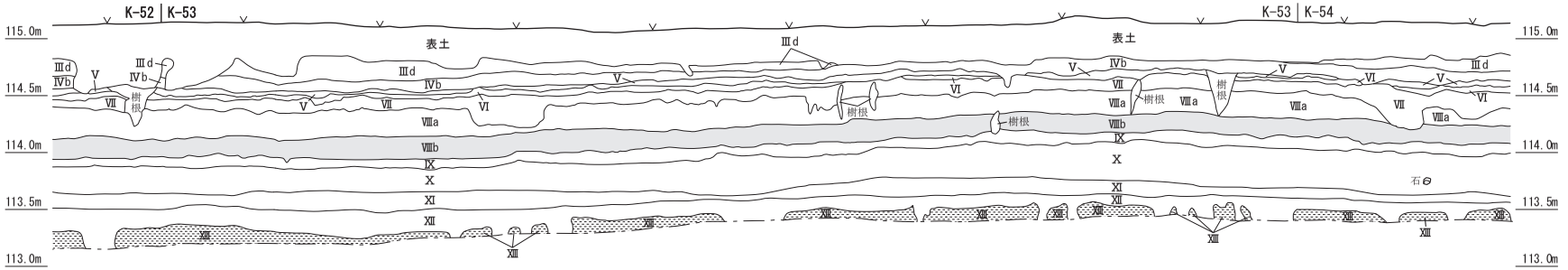
東西ベルト⑦



東西ベルト⑦



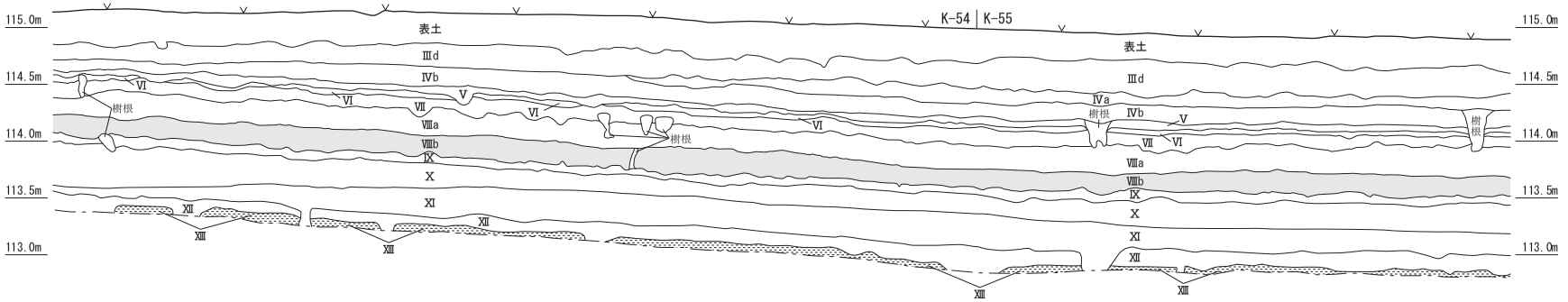
東西ベルト⑦



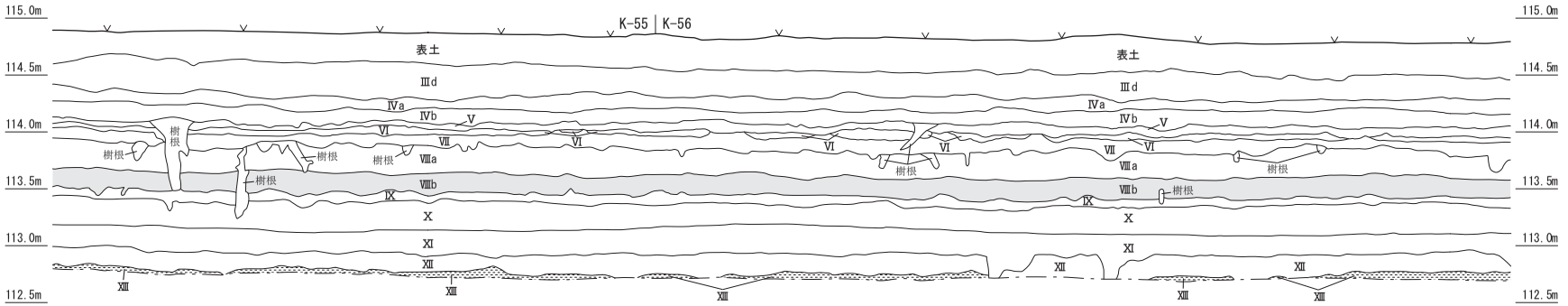
0 (1:60) 2m

第22図　土層断面14

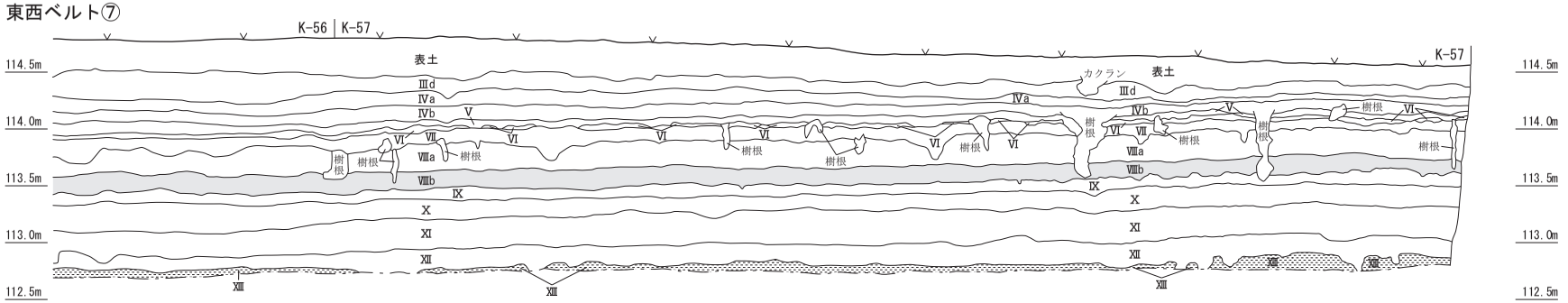
東西ベルト⑦

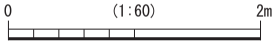


東西ベルト⑦

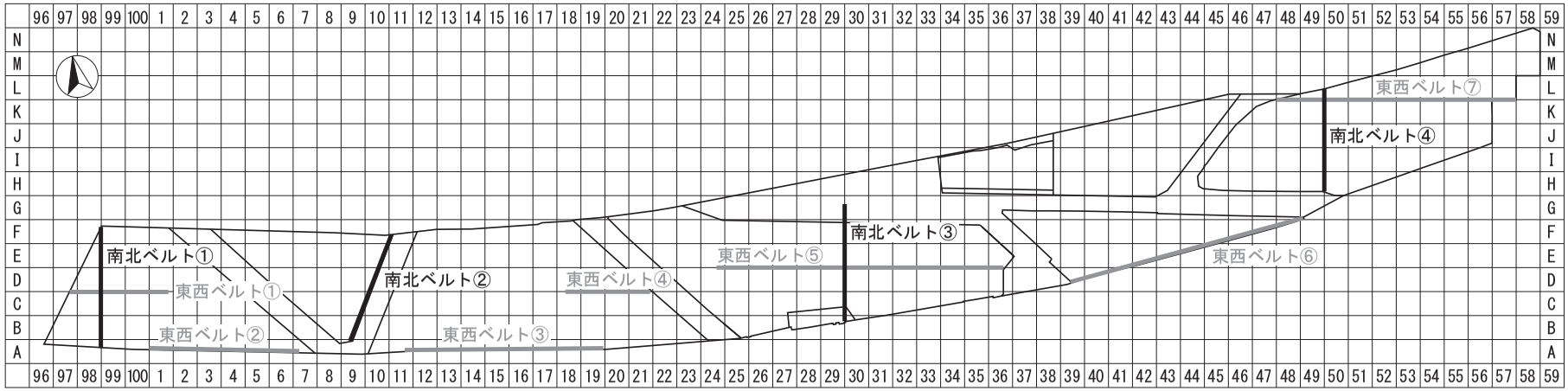


東西ベルト⑦

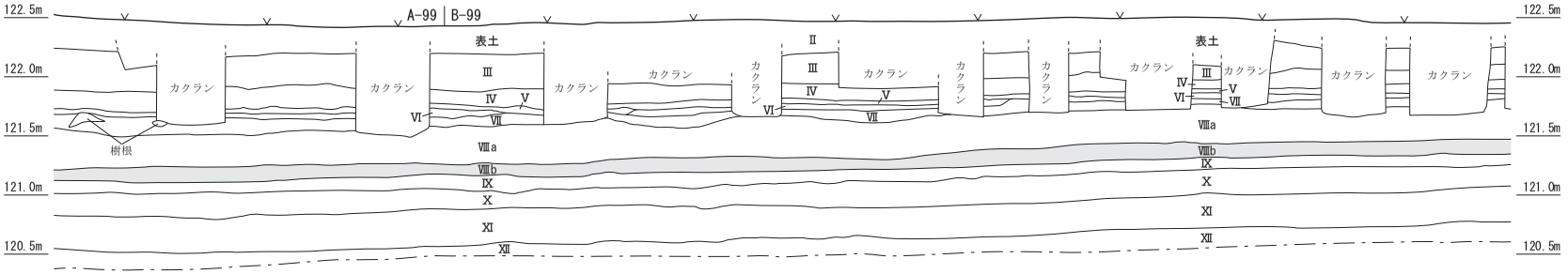




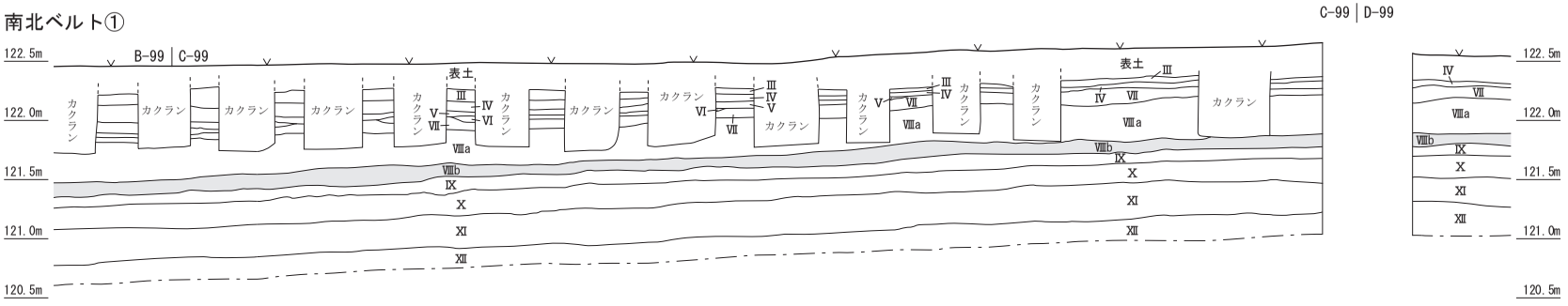
第23図　土層断面15

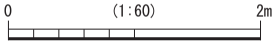


南北ベルト①



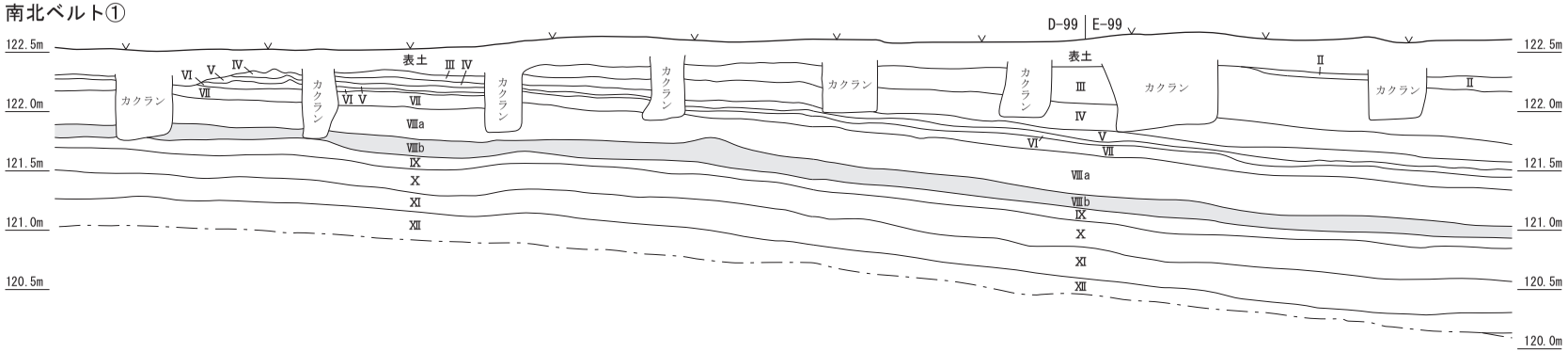
南北ベルト①



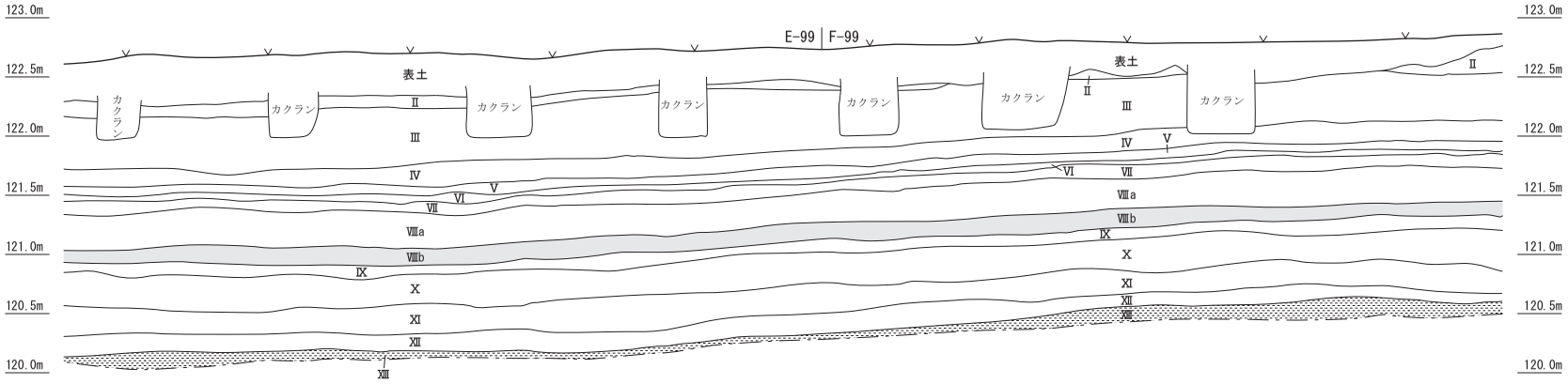


第24図　土層断面16

南北ベルト①



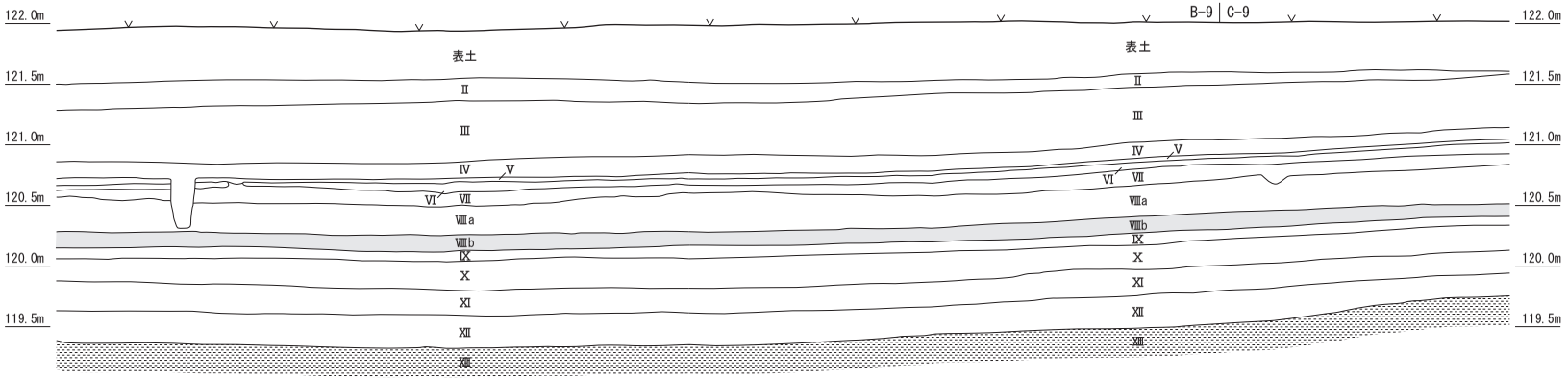
南北ベルト①



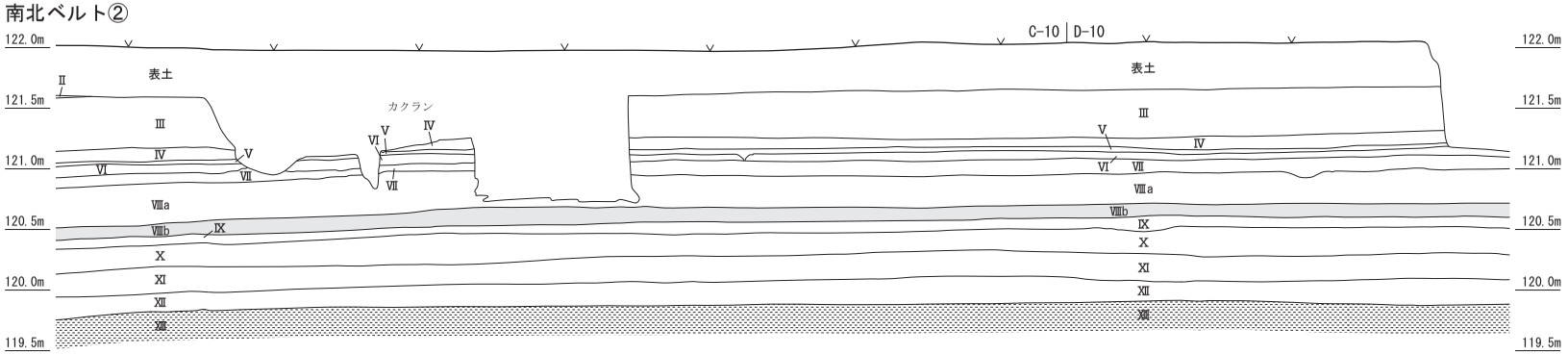
0 (1:60) 2m

第25図　土層断面17

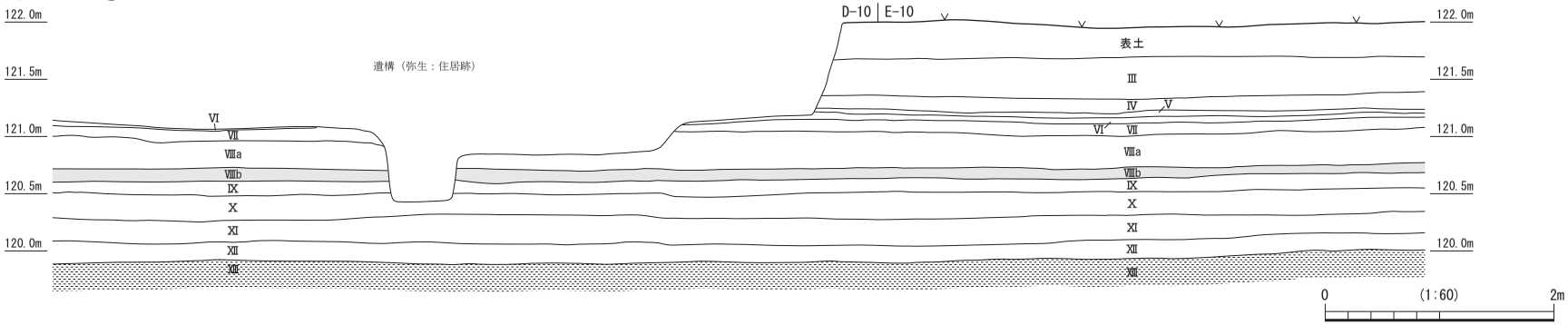
南北ベルト②



南北ベルト②

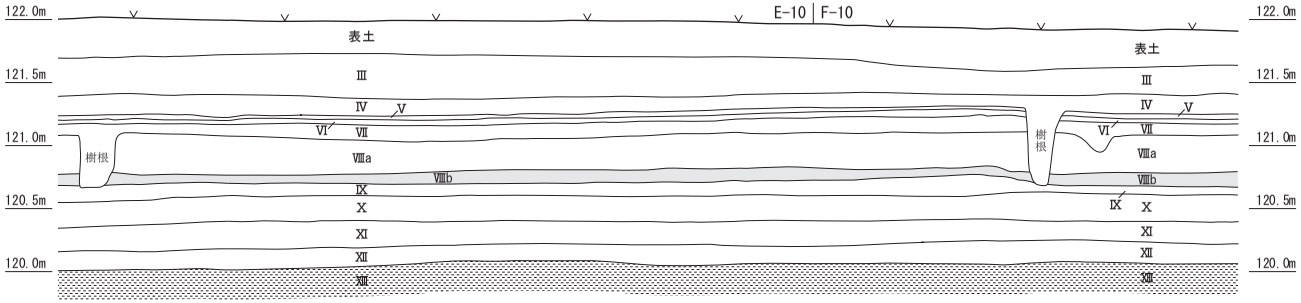


南北ベルト②

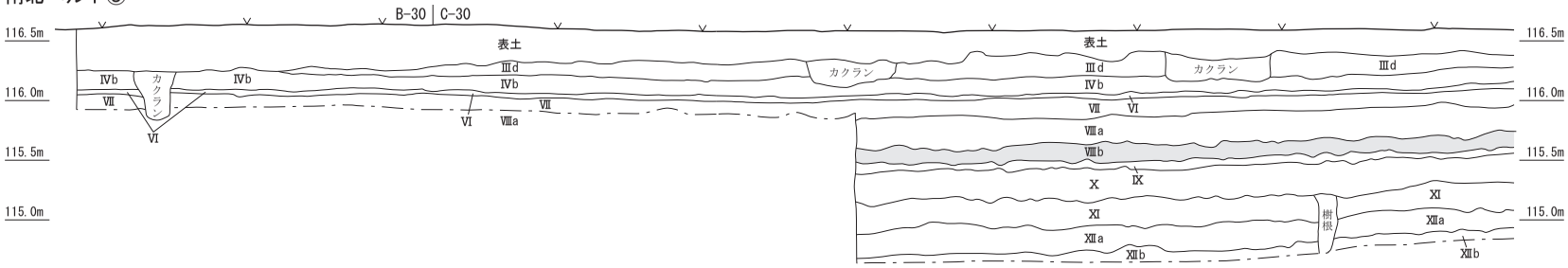


第26図　土層断面18

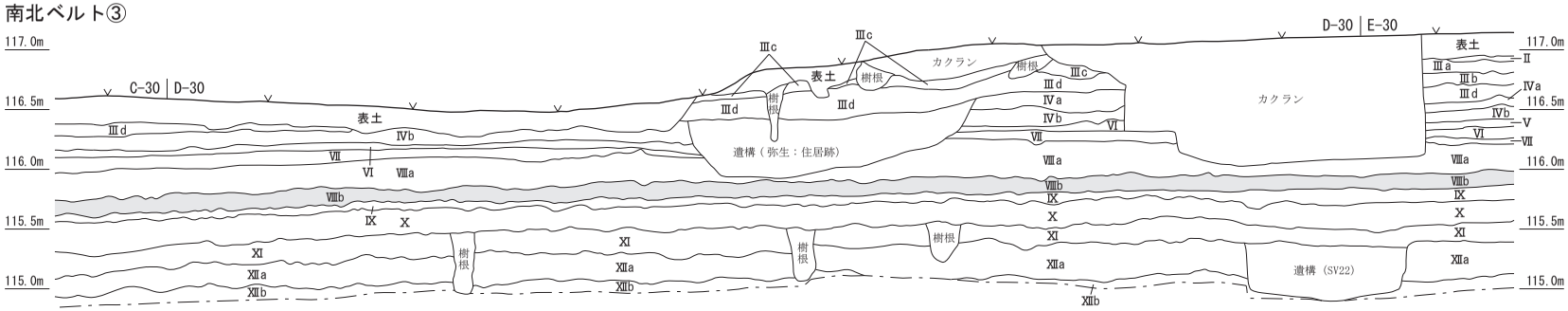
南北ベルト②

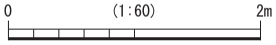


南北ベルト③



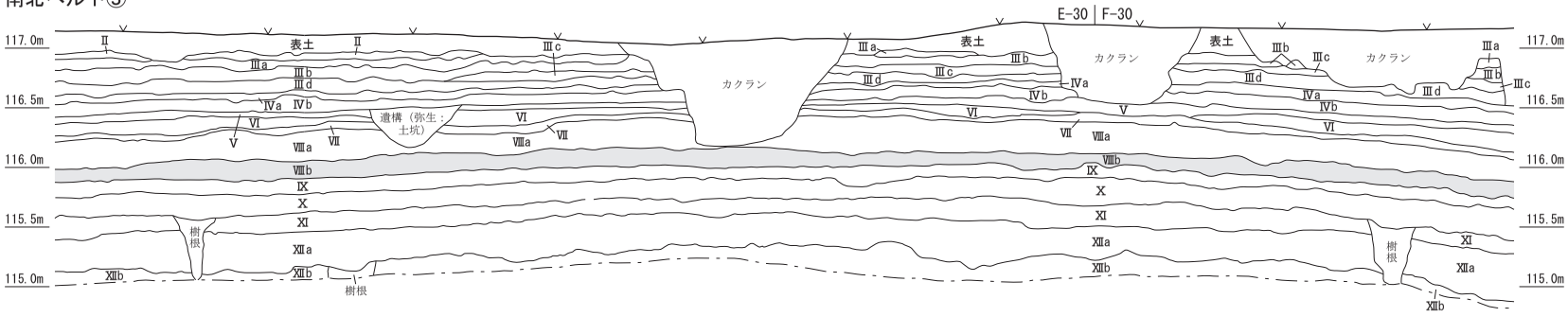
南北ベルト③



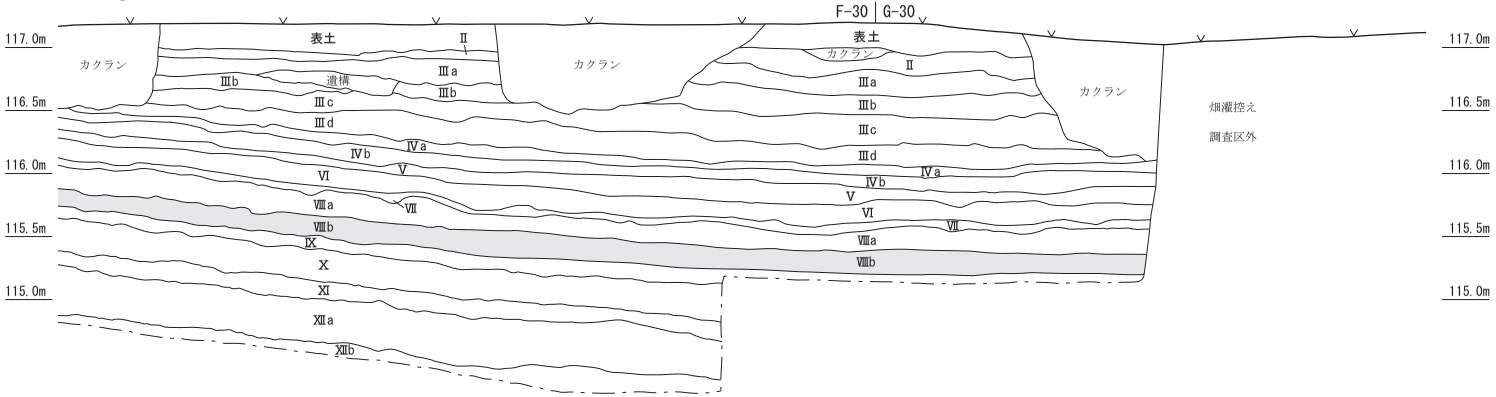


第27図　土層断面19

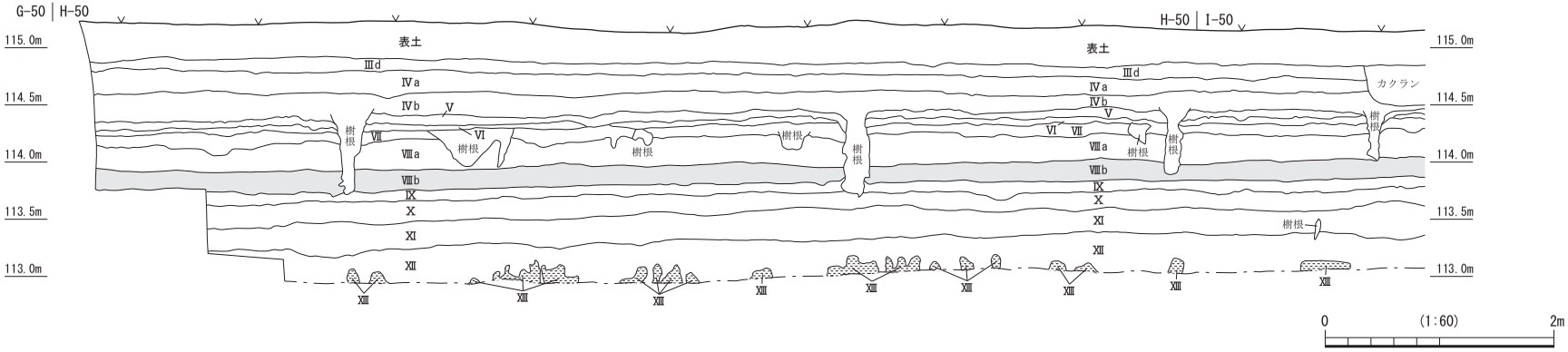
南北ベルト③



南北ベルト③

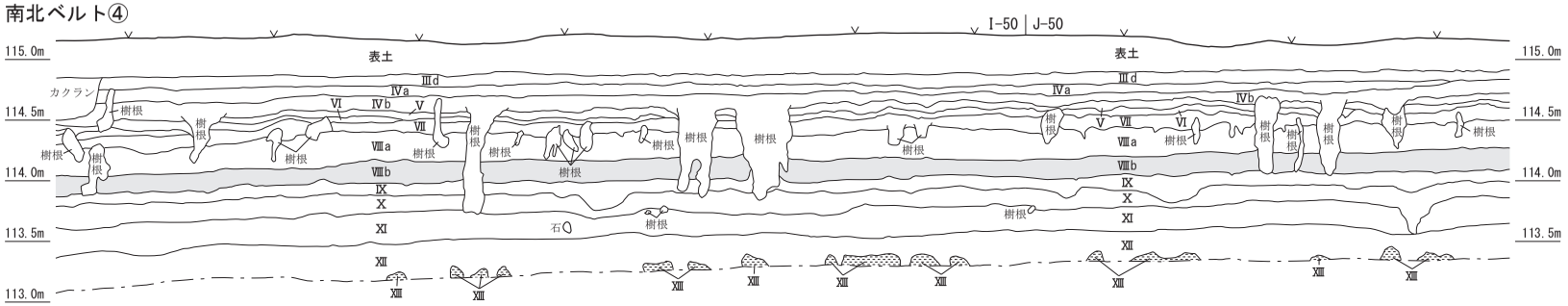


南北ベルト④

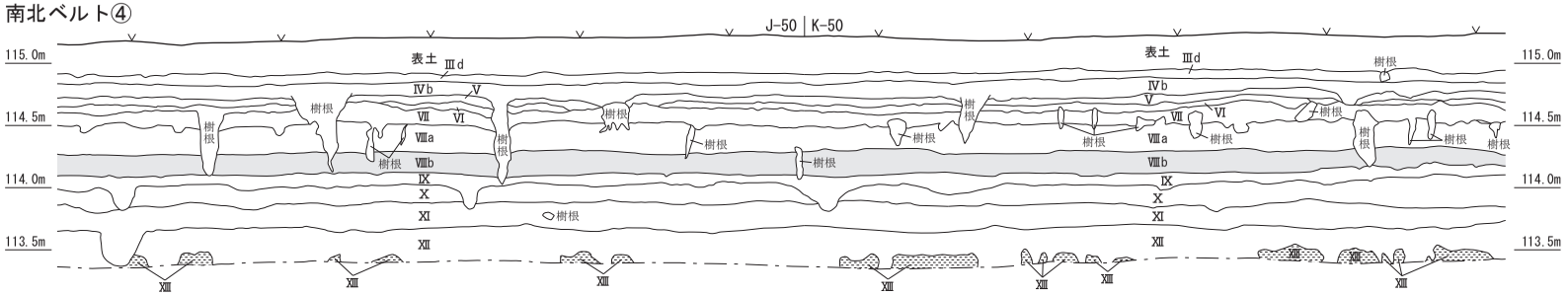


第28図　土層断面20

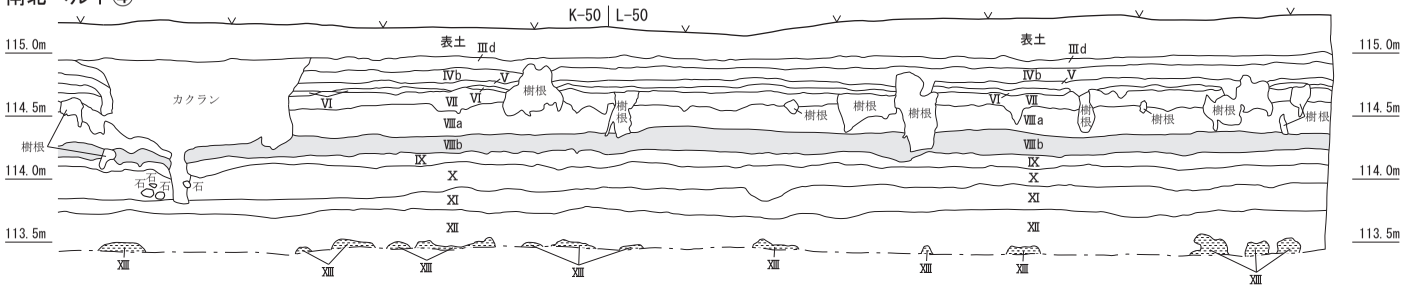
南北ベルト④



南北ベルト④



南北ベルト④



0 (1:60) 2m

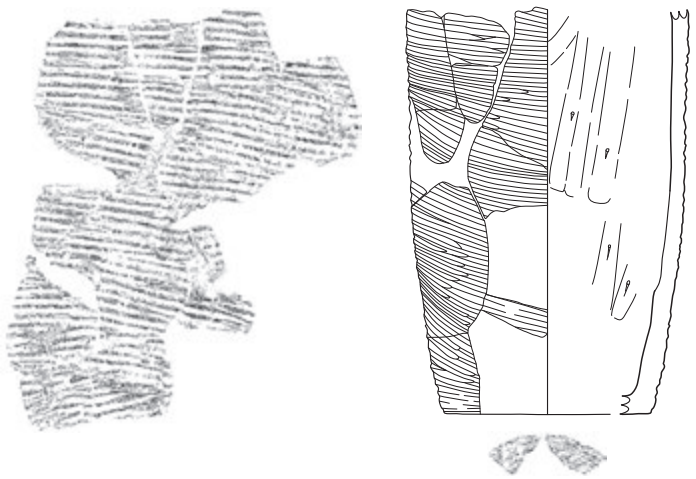
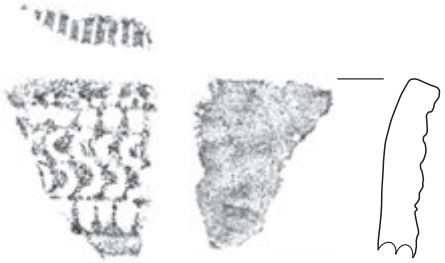
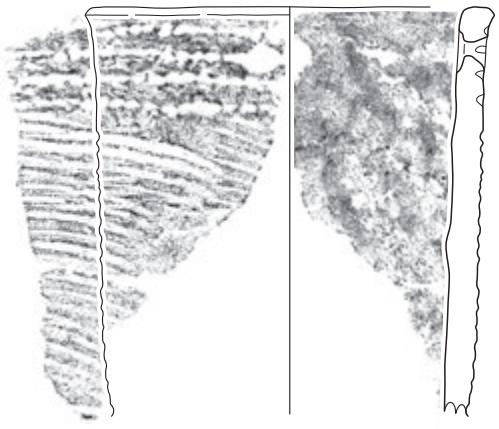
第29図　土層断面21

第３節　出土遺物の分類

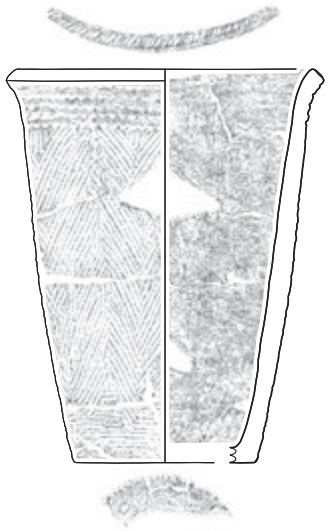
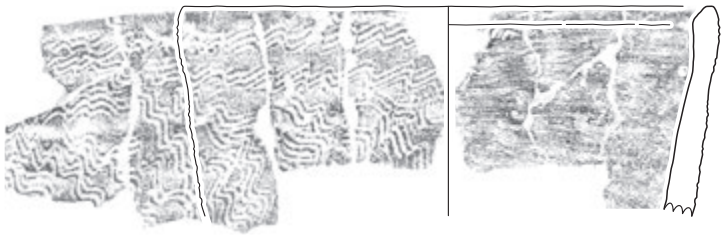
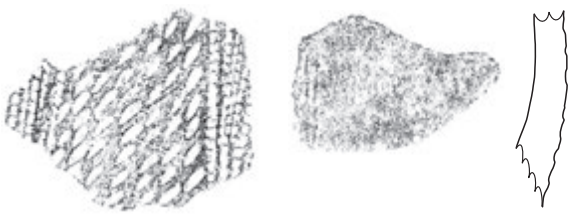
田原迫ノ上遺跡で出土した縄文時代早期の遺物の多くは，主にＸ層とXI 層で出土した。本節では，抽出した土器と石器の分類について述べる。

1　土器

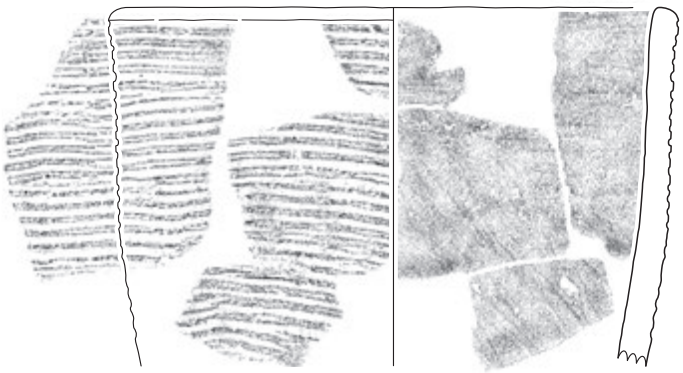
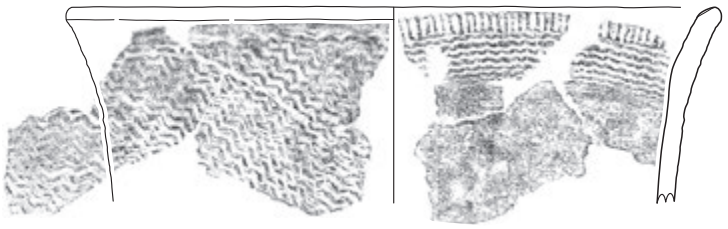
田原迫ノ上遺跡から出土した縄文時代早期の土器を，Ⅰ類からXⅦ類に分類した。中でもⅣ類が多く出土している。各類の点数は，第２分冊第６章第２節に掲載している。出土したほとんどの土器が破片資料で，１個体として接合することができた資料は少ない。また，胎土については，同じ３人が観察を行った。各類の代表的な土器を第30 ～ 33図に模式図として示した。全ての模式図は，本遺跡で出土した土器の実測図を任意の縮尺で示したものである。

Ⅰ類	**器形**　底部から口縁部まで直線的に立ち上がり，円筒形となる。 **文様・器面調整**　胴部は貝殻条痕文，貝殻刺突文，底部はキザミを施す。	
Ⅱ類	**器形**　口縁部は外反する。口唇部に平坦面を有する。 **文様・器面調整**　口唇部はキザミ，口縁部は横位の貝殻刺突文，半裁竹管文，胴部は貝殻刺突文を施す。	
Ⅲ類	**器形**　口縁部は外反し，円筒形となる。口唇部は平坦面を有する。 **文様・器面調整**　口縁部は横位の貝殻刺突文，胴部は横位もしくは斜位の貝殻条痕文・押引き文を施す。	

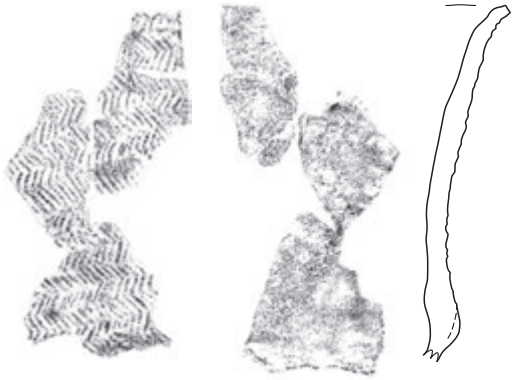
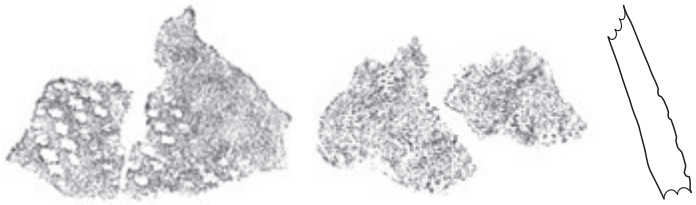
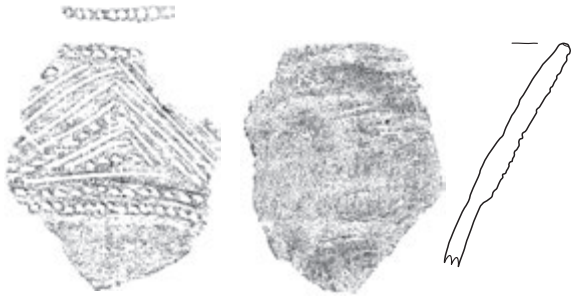
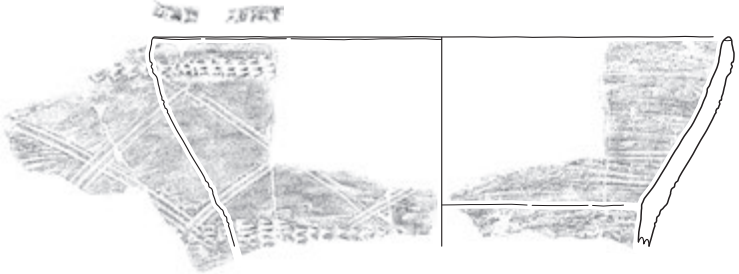
第30図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類１

Ⅳ類	**器形**　口縁部は外反・外傾・直口し，円筒形となる。口縁部に瘤状突起をもつものもある。 **文様・器面調整**　口唇部にはキザミ，口縁部は横位の貝殻刺突文，胴部は綾杉状の貝殻条痕文，底部付近は横位の貝殻条痕文，底部外面端部はキザミを施す。	
Ⅴ類	**器形**　口縁部は内湾・直口し，円筒形となる。口唇部は平坦面を有する。 **文様・器面調整**　外面は貝殻刺突文，貝殻条痕文を施す。口縁部と胴部の2帯に分けて施文するものと，全面を1帯で施文するものがある。内面にナデをおこなう。	
Ⅵ類	**器形**　口縁部は内湾・直口し，バケツ形となる。 **文様・器面調整**　外面は櫛状工具による羽状文，流水文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。また，外面に押型文を施すものもある。	
Ⅶ類	**器形**　胴部は膨らみ，口縁部は内湾する。 **文様・器面調整**　外面は短沈線文を縦位，斜位，羽状に施す。	

第31図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類２

Ⅷ類	**器形**　胴部は膨らみ，頸部ですぼまる。口縁部はやや外反し，円筒形となる。 **文様・器面調整**　胴部に横位の貝殻条痕文を施す。	
Ⅸ類	**器形**　口縁部は外反し，深鉢形となる。 **文様・器面調整**　外面は，山形，楕円などの押型文を施す。口縁部内面に押型文，柵状文，刺突文を施すものもある。	
Ⅹ類	**器形**　口縁部は外反し，深鉢形となる。 **文様・器面調整**　外面に撚糸文を施す。口縁部内面に撚糸文を施すものもある。	
Ⅺ類	**器形**　口縁部は外反し，深鉢形となる。 **文様・器面調整**　外面および口縁部内面に縄文を施す。	
Ⅻ類	**器形**　口縁部は外反し，深鉢形となる。 **文様・器面調整**　外面および口縁部内面は枝回転による施文を施す。	

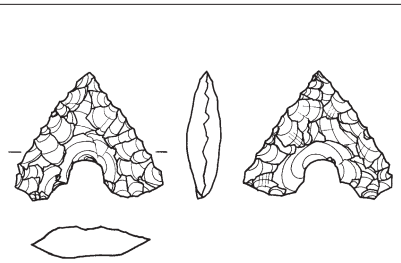
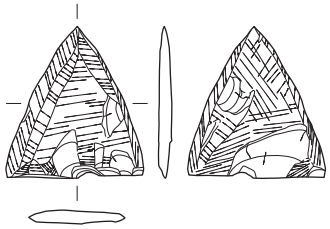
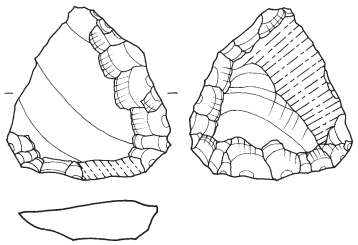
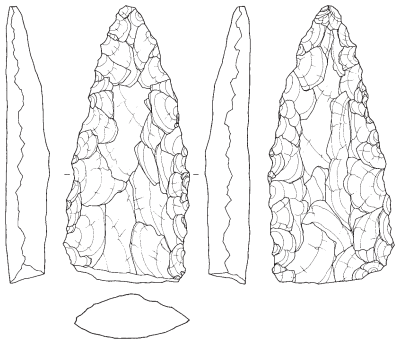
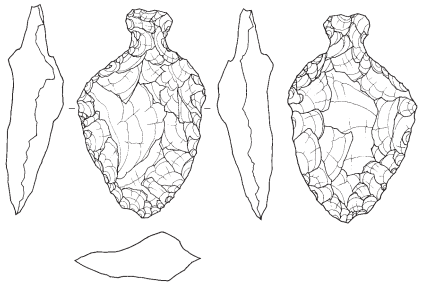
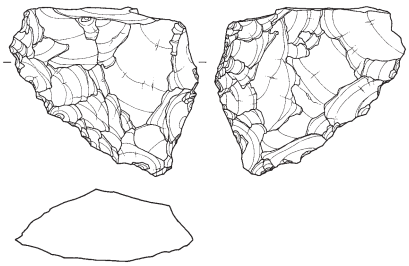
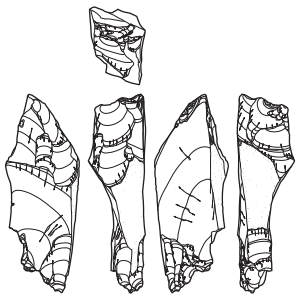
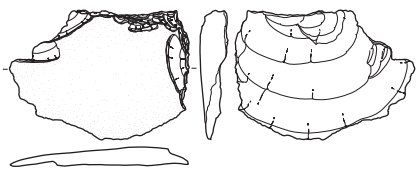
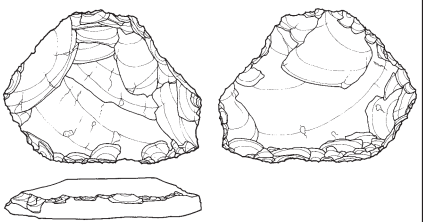
第32図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類３

XIII類	**器形**　胴部は屈曲し，口縁部は大きく外反する。 **文様・器面調整**　山形，楕円などの押型文とミミズばれ文等を組み合わせて施す。	
XIV類	**器形**　胴部は膨らむ。 **文様・器面調整**　胴部に縄文を施す。	
XV類	**器形**　胴部は膨らみ，頸部ですぼまる。口縁部は外反する。 **文様・器面調整**　口唇部はキザミ，口縁部は刺突文，条痕文を，胴部に刻目文，連点文を組み合わせて施す。	
XVI類	**器形**　胴部は膨らむものと直線的に開くものがある。口縁部はラッパ状に開く。 **文様・器面調整**　格子状・流水状の沈線文，網目撚糸文，貝殻刺突文を組み合わせて施す。	
XVII類	Ⅰ～XVI類までに分類できなかった資料である。	

第33図　田原迫ノ上遺跡出土土器分類４

2　石器

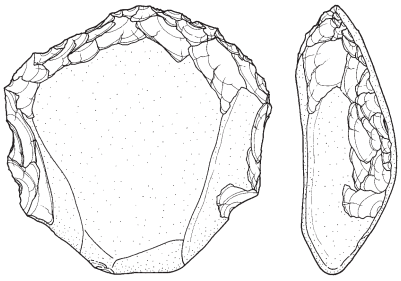
観察表の石材分別は，剥片石器では第３表のように行った。石器の中で，器種が明らかな石器を第34・35図に模式図として示した。全ての模式図は，本遺跡で出土した実測図である。また，第４章第１節の第349・350図に狩猟具類と加工具類に分けて分布図を示している。

打製石鏃 矢の先端に装着する狩猟具。素材剥片に押圧剥離により二次加工を施し整形しているもの。	**磨製石鏃** 打製石鏃とは製作技術が異なり，全て研磨により製作されたもの。	**尖頭状石器** 先端の尖った石器で，剥片を素材とし，押圧剥離によって形状を整える。形状は石鏃もしくは石鏃の未成品に類するが，厚みがある。
		
石槍 槍の先端に装着されたと考える狩猟具。剥片等を使用して押圧剥離で製作されたもの。	**石匙** つまみ部を有することを第一の特徴とする。素材剥片に押圧剥離により整形され刃部はていねいな二次加工が施されたもの。	**削器** 剥片の縁辺に加工を施して刃部としたもの。
		
楔形石器 上下両端からの平行な剥離が認められ，両端は直線上の縁辺あるいは尖端の形状を呈するもの。	**剥片** 原石から薄く剥がしたもの。剥片から石鏃や削器などに加工される。	**二次加工剥片** 剥片の縁辺の一部に二次加工が認められるもの。削器と判断した以外のもの。
		

第34図　田原迫ノ上遺跡出土石器分類１

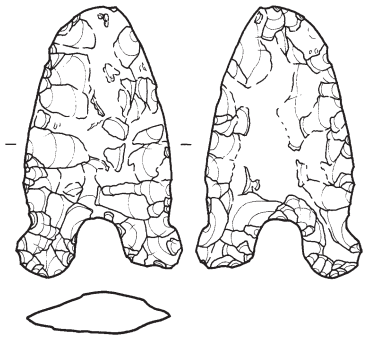
石核

素材剥片を剥離したもの。



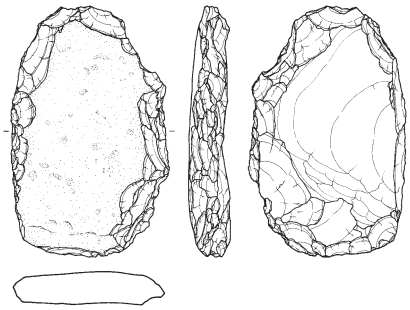
異形石器

何らかの形を模して作られたもの。もしくは用途不明の石器一群。



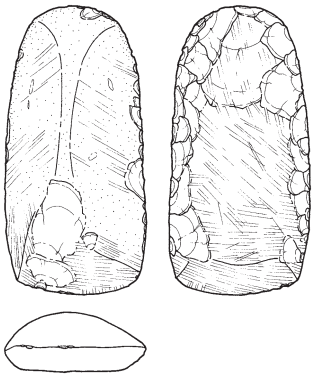
打製石斧

伐採具や土掘り具の一つと考えられる。全体あるいは刃部を押圧剥離により形成したもの。



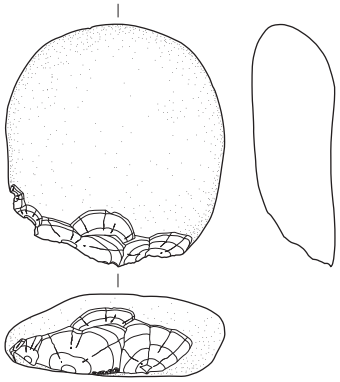
磨製石斧

伐採具や土掘り具の一つと考えられる。全体あるいは刃部を研磨により形成したもの。



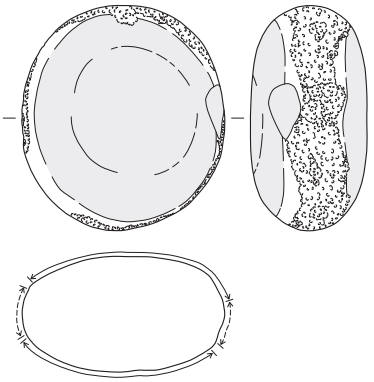
礫器

原石の一部を打ち欠いて刃部を付けたもの。



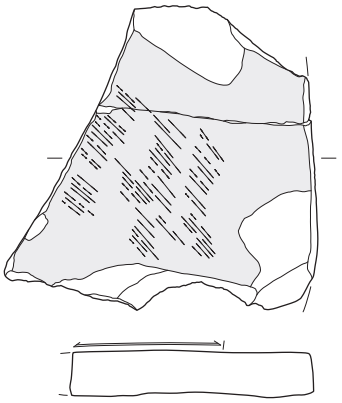
磨石・敲石類

植物質食料加工具の一つと考えられる。両平坦面に磨面，周縁には磨面や敲打痕等が認められるもの。



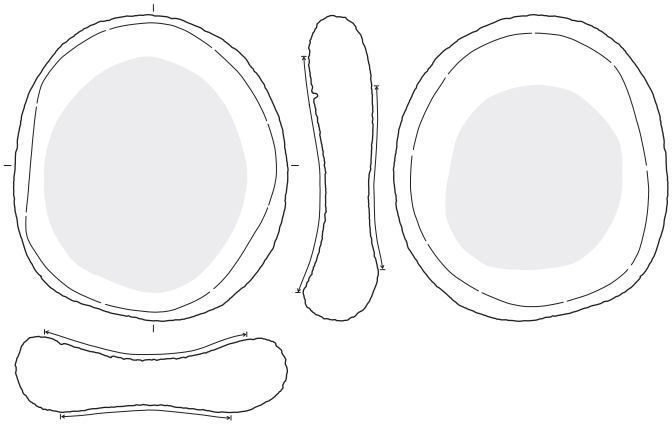
砥石

片面あるいは両平坦面に砥石として利用した痕跡が認められるもの。



石皿・台石類

植物性食料加工具の一つで，磨石類により堅果類の製粉作業化等に使用されたと考えられるもの。厚みのある大形礫のほか，使用により中央部が皿状に凹むものもある。



第35図　田原迫ノ上遺跡出土石器分類２

第３表　石器の石材分類表

石　　材	分　類	特　　徴
安山岩	ＡＮ	・石英質の不純物を含み，基調は滑らかでガラス質に富む質感のもの。 ・不純物をわずかに含み，基質はややざらついた質感のもの。 ・色調は，黒灰色～青灰色系である。
チャート	ＣＨ	・珪質分に富み，節理が発達せず，剥離面は滑らかで，油脂光沢であるもの。 ・珪質分に富み，節理がやや発達するもの。 ・珪質分にやや乏しく，節理がやや発達し，透明感や油脂光沢もほとんどないもの。 ・色調は，白色～灰色系，青灰色～緑色系，黒色系と様々である。
ホルンフェルス	ＨＦ	・熱変成した泥岩～頁岩質のもので粒子が比較的細かいもの。 ・色調は，黒～暗灰色系，茶色～ベージュ系，白色系と様々である。
黒曜石	ＯＢ１	・不純物を多く含むもので，全く光を通さないもの。 ・色調は，漆黒である。
	ＯＢ２	・不純物を多く含むもので，光を通すもの。 ・色調は，黒色～アメ色である。
	ＯＢ３	・不純物を含まないか，わずかに含むもので，透明度が高いもの。 ・色調は，アメ色～黒色，オリーブ色である。
	ＯＢ４	・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもので，良質でガラス光沢をもつもの。 ・色調は，黒色である。
	ＯＢ５	・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもの。 ・色調は，黒灰色である。
	ＯＢ６	・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもの。 ・色調は，青灰色である。
	ＯＢ７	・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもの。 ・色調は，灰色～オリーブ灰色である。
	ＯＢ８	・微細な不純物を含むもの。 ・色調は，乳白色である。
頁岩	ＳＨ	・珪質分に非常に富み，油脂光沢のあるもの。 ・珪質分がほとんどなく，無光沢で，節理は発達せず，緻密で良質のもの。 ・色調は，暗灰色～灰色系，黒色～暗灰色系と様々である。
その他	―	タンパク石，玉髄系，花崗岩，凝灰岩，砂岩

第４章　発掘調査の成果

第１節　縄文時代早期の調査成果

１　調査の概要

本遺跡における縄文時代早期の該当層は，Ⅷ（アカホヤ火山灰）層とⅩⅢ（薩摩火山灰）層に挟まれた，Ⅸ～ⅩⅡ層である。調査区全域でこれらの層を確認することができた。

Ⅶ・Ⅷa 層の無遺物層を重機で除去し，Ⅷb 層から人力で山鍬等を用いて徐々に掘り下げを行った。

Ⅸ～ⅩⅡの各層の土の色調が酷似していることから，遺構検出は困難を極めた。極力上位の層で遺構を検出しようと，慎重な調査を進めたが，本来の掘り込み面で検出できた遺構は少ないと考えられる。

遺構は，個々に検出状況の記録写真を撮影した後，各遺構の長軸にあわせてベルトを設定し，実測を行った。

出土遺物は，基本的に小破片はグリッド毎に一括して取り上げ，それ以外は，平板やトータルステーションで出土地点の記録を行った。

遺構・遺物について，各項で詳細を述べることとする。

２　遺構

発掘調査において，縄文時代早期の遺構を，Ⅸ～ⅩⅢ層で検出した。層位については，検出時に該当層の認定を行っているため，検出時の認定を生かしている。しかし，整理作業・報告書作成作業時に，発掘調査時の所見や写真，周囲の遺物出土状況なども加味し，総合的に判断し，修正したり，再認定したりした遺構もある。

調査の結果，遺構については，竪穴住居跡21軒，落とし穴９基，連穴土坑40基，土坑104基，集石遺構192基，石器製作跡５基を検出した。

これらの多くは，Ⅳ類土器やⅨ類土器などの土器の時期の遺構と考えられる。

(1)　竪穴住居跡（略記号：SH）

竪穴住居跡は，平成23年度の調査で４軒，平成24年度の調査で５軒，平成25年度の調査で６軒，平成26年度の調査で６軒の計21軒が検出された。

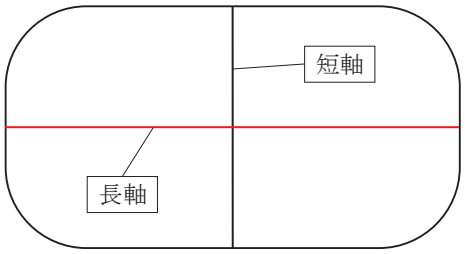
本報告書では，下記に示すように竪穴住居跡の各部分に名称を付し，規模を計測した。

長　軸：検出面で，竪穴住居跡のほぼ中心を通り，その竪穴住居跡の広がりが長い方の長さ。

短　軸：長軸の真ん中を通り，長軸に対して垂直に広がる長さ。

方　位：長軸がのびている方角。

最深部深さ：長軸，もしくは短軸で，その竪穴住居跡で最も深い部分の長さ。



第36図　竪穴住居跡の各部の名称

検出状況　単独で検出された竪穴住居跡は18軒であった。そのうちSH１・SH３・SH13は，連穴土坑と切り合って（うちSH３は土坑とも切り合う）検出された。SH８・SH９・SH19は，調査区外へ広がるものであった。SH同士が切り合って検出されたものはない。また，Ⅸ層では検出されていない。

第４表　竪穴住居跡の検出層

検出層	軒　数	備　　考
Ⅺ 層	3	先行トレンチより検出
ⅩⅡ 層	8	
ⅩⅢ 層	10	

住居跡の多くは，ⅩⅢ（薩摩火山灰）層上面で検出されている。結果，床面がⅩⅢ層で収まるものは，掘り込みが非常に浅くなっている。Ⅺ層で検出された３基は，先行トレンチで住居跡の一部を検出し，壁面の立ち上がり等から掘り込み面を上層で確認できたため，本来の掘り込みに近い状況だと思われる。

形　　状　全形を把握できた17軒のうち，竪穴住居跡の形状を把握するため形状値（短軸÷長軸）について，以下のような定義を設定した。

横　　長：形状値が，0.7未満で，長軸に対して左右に広がる形。

方　　形：形状値が，0.7～１で方形に近いもの。

不定形方形：形状が整っていないと判断した方形。

第５表　竪穴住居跡の形状

形　状	軒　数
横　長	３ 軒
方　形	11 軒
不定形方形	３ 軒
不　明	４ 軒

検出面の形状は，方形が11軒と最も多く，横長と不定形方形が３軒ずつとなっている。床面には，貼床と考えられる硬化面をもつものも６軒あった。しかし，竪穴住居跡に付随する柱穴（ピット）や炉跡，小土坑は検出されておらず，建物内部の具体的構造を把握することはできない。

規　　模　検出層に違いがあるため一概にはいえないが，長軸や短軸，検出面積の最大値・最小値等について下表に示す。

第６表　竪穴住居跡の長軸と短軸の最大値・最小値・平均値

	長　軸（m）	短　軸（m）
平均値	2.76	2.22
最大値	3.83（SH11：XIII層）	3.03（SH12：XII層）
最小値	1.71（SH17：XIII層）	1.44（SH17：XIII層）

第７表　竪穴住居跡の検出面積の最大値・最小値・平均値

	面積（㎡）
平均値	6.35
最大値	11.33㎡（SH12：XII層）
最小値	2.46㎡（SH17：XIII層）

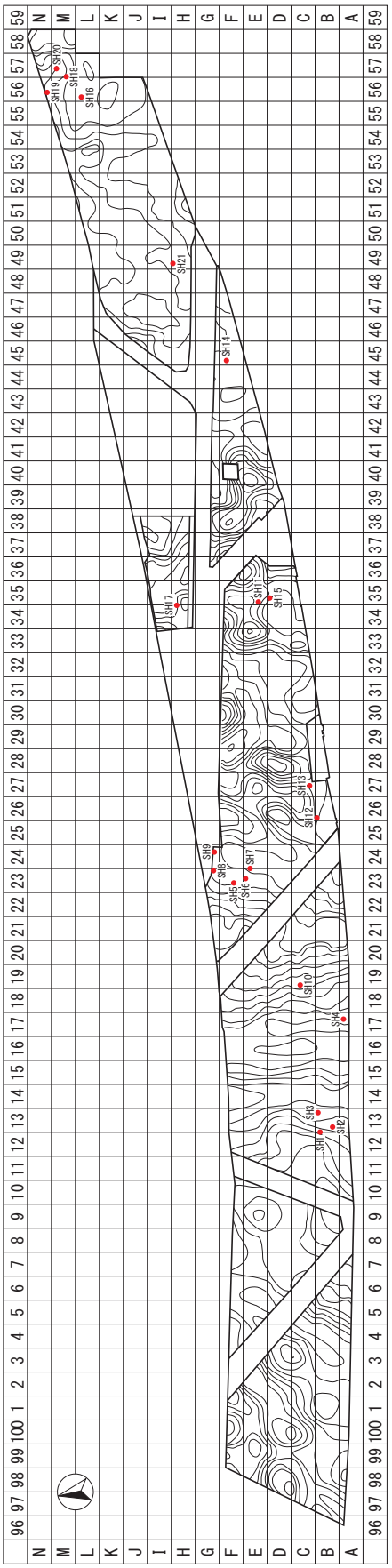
11㎡を超えるSH11とSH12は，他の住居跡よりかなり大きいことから，大型の住居跡ということになろう。床面積から考えるとSH11がSH12より２㎡も広いことから本遺跡の最大の住居跡はSH11となる。

また，定塚遺跡の報告書に習い，「壁面傾斜値」を提示した。「壁面傾斜値」とは，住居跡壁面の傾斜度合いをみるための数値で，「壁面傾斜値」＝「床面積」÷「検出面積」で算出した。数値が１に近いほど，垂直度が高いということになる。ただし，検出面と床面とのレベル差が20㎝未満の場合は，提示していない。

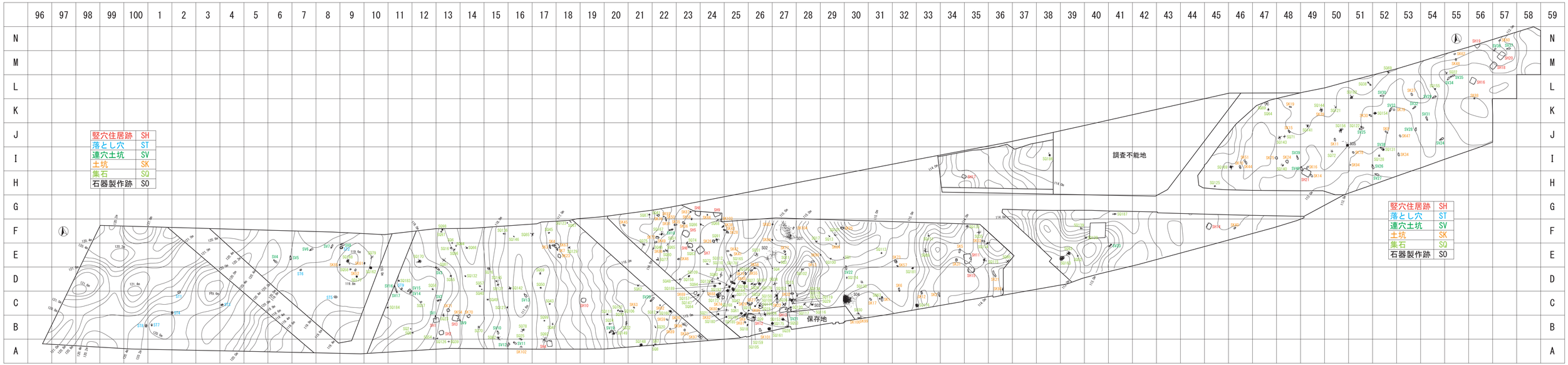
分　　布　竪穴住居跡が２軒以上が近接して検出されている箇所が５箇所である。調査区Ｃで１箇所（Ｂ-13），調査区Ｄで３箇所（Ｅ～Ｇ-23・24，Ｂ・Ｃ-26・27，Ｄ・Ｅ-35），調査区Ｆで１箇所（Ｌ～Ｎ-56・57）である。他の住居跡はそれらをつなぐようにまばらに分布している。また，調査区ＣのＢ-13区より西側には検出されていない。

住居跡の床面積でみると，調査区中央より西側に床面積の平均値を下回るものがやや近接する範囲に存在する。他の遺構と重複するものも調査区中央より西側に存在する。

各竪穴住居跡　本遺跡で検出された竪穴住居跡を検出した順に報告する。



第37図　竪穴住居跡分布図



第38図　縄文時代早期遺構配置図

竪穴住居跡１号（SH１：第39図）

検出状況　Ｂ－12・13区，Ⅻ層上面で検出された。

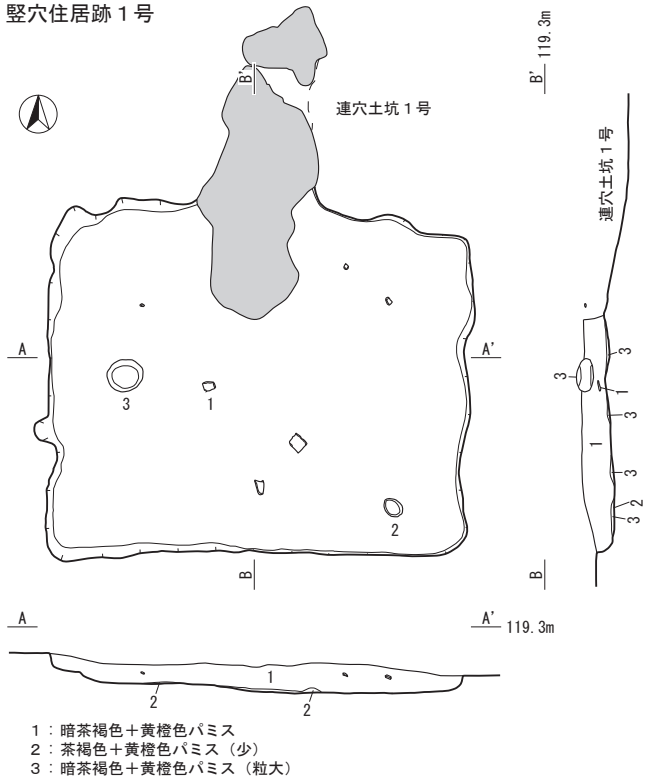
切り合い　住居北壁側で連穴土坑１号（SV１）と切り合っている。埋土の堆積状況からSH１がSV１に切られていると判断した。

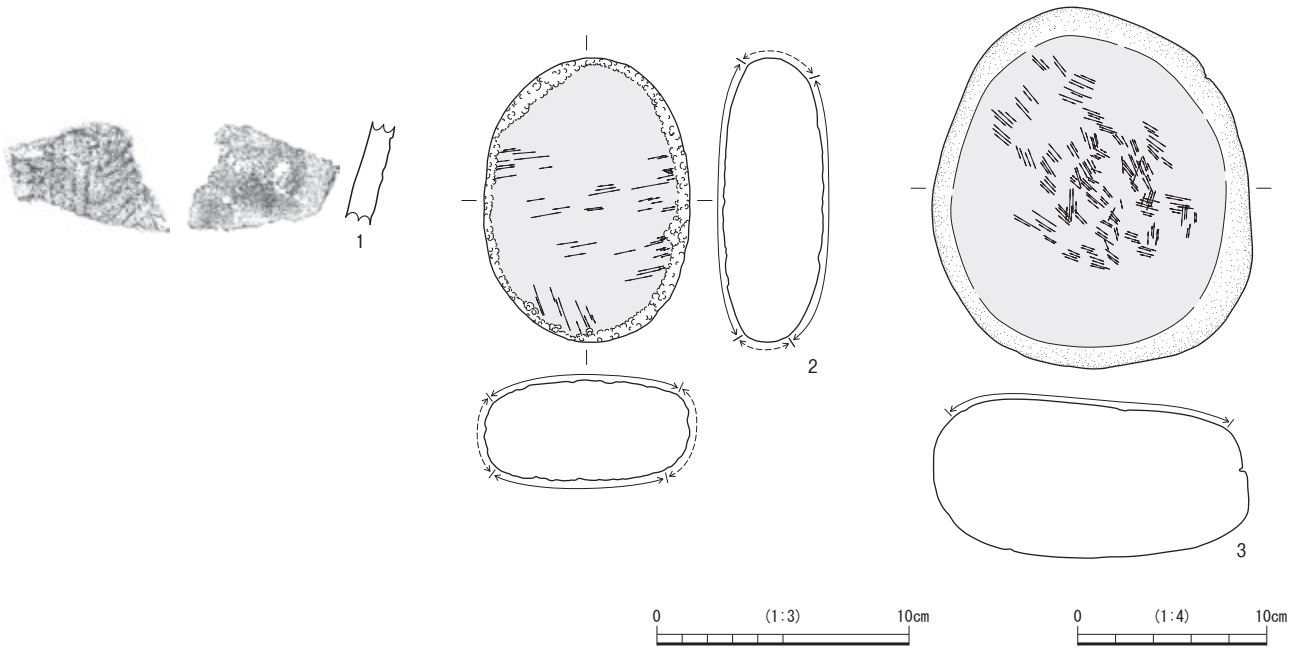
形状・規模　平面形状は方形で，長軸2.18ｍ，短軸1.88ｍ，検出面からの深さ0.14ｍである。掘り方はⅫ（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土３は，ともに暗茶褐色の土で，黄橙色パミスを含みⅪ層に類似する土である。黄橙色パミスの大きさ（埋土１<埋土３）の違いで分層した。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１＝埋土３>埋土２となる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物のうち３点を図化した。1（第39図）は，胴部である。外面は剥落しているが，綾杉状の貝殻条痕文を施す。2（第39図）は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，側面に敲打痕が認められる。3は安山岩製の石皿である。扁平な礫の片面を使用面としている。被熱しており使用面にススが付着する。

土器分類　1は，Ⅳ類に該当する。





第39図　竪穴住居跡１号・出土遺物

竪穴住居跡２号（SH２：第40図）

検出状況　Ｂ－13区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は不定形方形で，長軸1.97ｍ，短軸1.76ｍ，検出面からの深さ0.3ｍである。掘り方はⅫ（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土で，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。

出土遺物　埋土中から４点の遺物が出土した。土器片１点，石器１点，礫２点であった。土器片は，３条の貝殻条痕文を斜位に施す。図化はしていない。

炭 化 物　埋土中で採取した炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，8,467-8,285calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

竪穴住居跡３号（SH３：第41図）

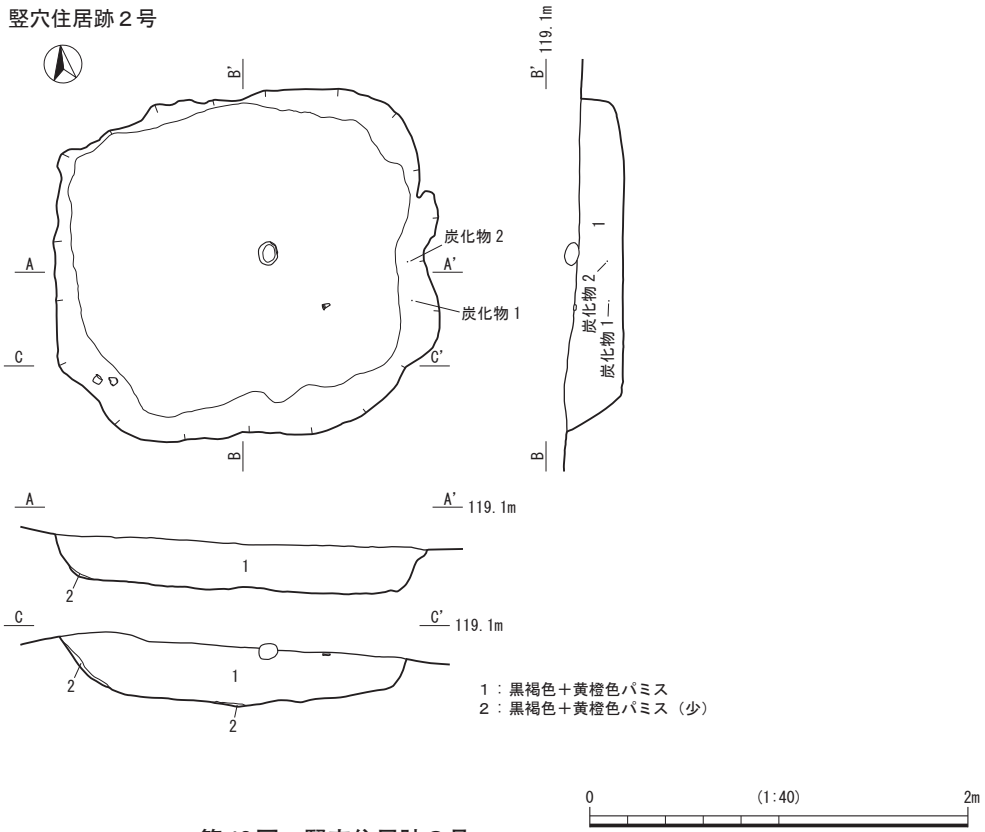
検出状況　Ｂ－13・14区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　住居東壁側で連穴土坑９号（SV９）と，北壁側で土坑54号（SK54）と切り合っている。埋土が，SV９・SK54と一様であることから，SH３との新旧関係は不明確である。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸2.53ｍ，短軸2.36ｍ，検出面からの深さ0.37ｍである。掘り方はⅫ（薩摩火山灰）層で収まっている。中央部周辺の床面には，1.1ｍ×1.0ｍ程度の貼床と思われる黄橙色パミスを含んだ黒褐色の硬質土の広がりが見られる。SH３内からは6基のピットが検出されたが，いずれも掘り込みが10㎝程度と浅く，検出位置などからも住居に伴うものではないと判断した。

埋　　土　埋土は一様で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土で，Ⅺ層に類似する。一部にⅫ（薩摩火山灰）層のブロックが混在していた。

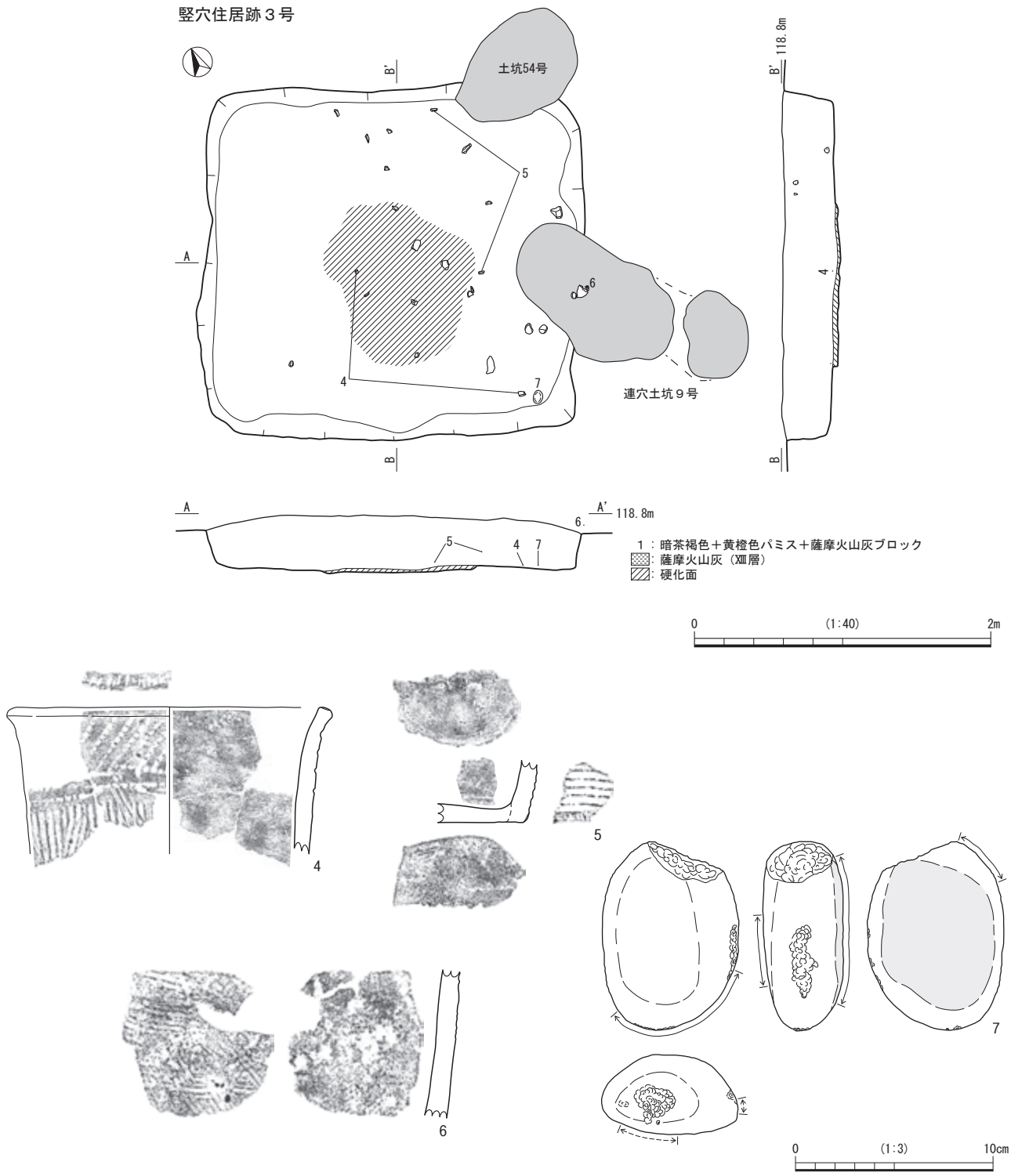
出土遺物　埋土中から33点の遺物が出土した。土器片が21点で，石器が１点，礫が11点であった。そのうち土器片３点，石器１点を図化した。4（第41図）は，SH３内の２点と包含層出土遺物１点が接合した。やや外反する口縁部片である。口縁部外面に斜位刺突文を,その下位には横位刺突文を施し，横位刺突文の下位には，縦位や斜位の貝殻条痕文を施す。平坦な口唇部には，幅１～２㎜程度のキザミを施す。内面には，指によるナデをおこなう。5（第41図）は，SH３内の２点が接合した底部である。底部外面端部にはキザミを，その上位には横位条痕文を施す。接合痕から，まず底部を形成し，その横から胴部を張り付けたことがうかがえる。底部内面には,指おさえが確認できる。6（第41図）は，胴部片で



第40図　竪穴住居跡２号

ある。内外面共に剥落が激しいが，外面には，綾杉状に近い条痕文が確認できる。4～6は，胎土や器壁の厚さ，文様等から同一個体とは言い難い。図化していない土器片のうち２点は，やや外反する口縁部で，口縁部外面に斜位貝殻刺突文を，口唇部にはキザミを施す。５点は胴部で，4と同一個体と思われる。斜位貝殻刺突文を施す。残りは小破片のため，不明である。7（第41図）は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の片面を磨面に使用し，側面に敲打痕が認められる。上面は欠損後も敲打面として使用している。被熱しており上面から右側面にかけてススが付着する。

土器分類　4～6は，いずれもⅣ類に該当する。



第41図　竪穴住居跡３号・出土遺物

竪穴住居跡４号（SH４：第42図）

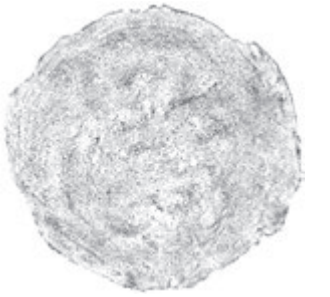
検出状況　Ａ－17区，Ⅻ層上面で検出された。

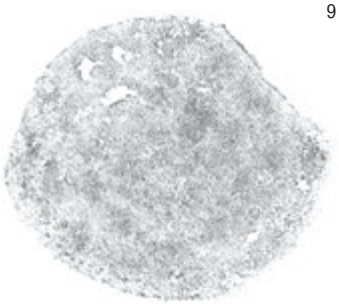
切り合い　切り合いはない。

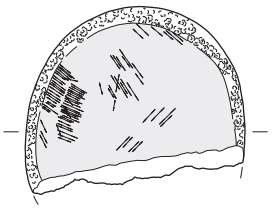
形状・規模　平面形状は方形で，長軸2.59ｍ，短軸2.14ｍ，検出面からの深さ0.38ｍである。掘り方はⅫ（薩摩火山灰）層を掘り抜きⅩⅣ層に達している。中央部周辺の床面には，貼床と思われる0.44ｍ×0.25ｍ程度の硬化面の広がりが見られる。遺構の北東角は他より10㎝程度一段高くなっており,出入り口等である可能性も考えられる。

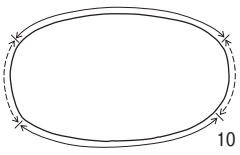
埋　　土　埋土は４つに分かれる。埋土１は，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土でⅪ層に相当する。埋土２・埋土３・埋土４は，ともに茶黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。包含物（埋土２：黄橙色パミスのみ・埋土３：にぶい赤褐色の土・埋土４：薩摩火山灰）の違い等で分層した。

出土遺物　埋土中から13点の遺物が出土した。土器片３点，石器２点，礫８点であった。そのうち土器２点と石器１点を図化した。8（第42図）は，SH５内の出土遺物１点と包含層遺物７点が接合した胴部である。外面には，綾杉状の貝殻条痕文を施す。また，外面上部には，被熱痕が確認できる。内面は，工具によるケズリや指によるナデも見られる。9（第42図）は，底部である。底

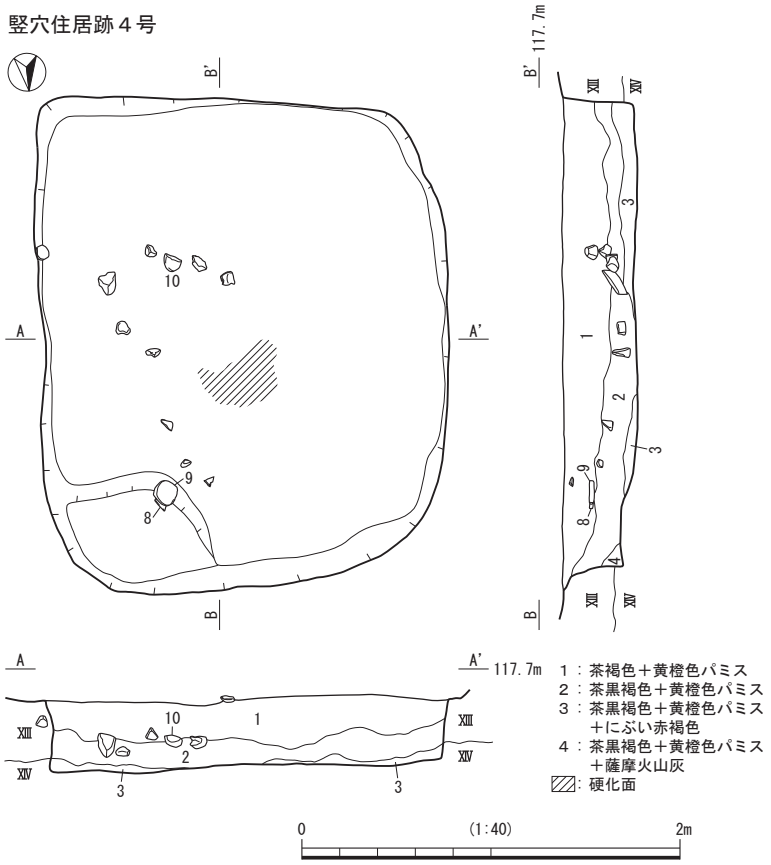








竪穴住居跡４号



第42図　竪穴住居跡４号・出土遺物

面外部端部に，キザミは確認できないが，その上位には横位条痕文を施す。底面内部には，指おさえが確認できる。8・9は，胎土は似通うが，同一個体とはならない。10（第42図）は安山岩製の磨石・敲石類である。下半分を欠損するが元は扁平な円礫と考えられ，表裏両面を磨面に使用し，側面に敲打痕が認められる。被熱しており欠損部周辺にススが付着する。

土器分類　8・9・図化していないもう１点は，いずれもⅣ類に該当する。

炭 化 物　床面で採取した炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，8,226-7,964calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

竪穴住居跡５号（SH５：第43図）

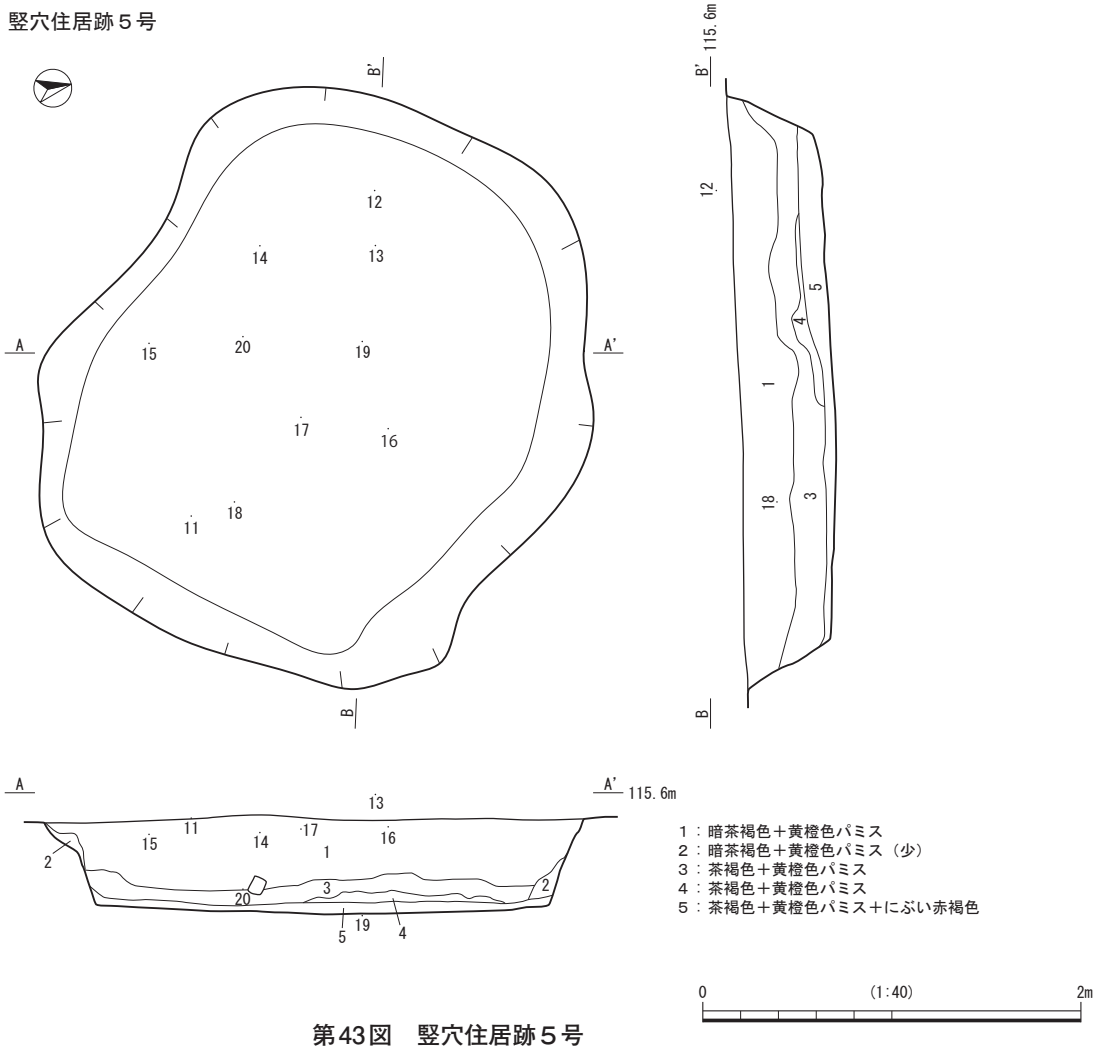
検出状況　Ｆ－23区，Ⅻ層中で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は不定形方形で，長軸3.05ｍ，短軸2.63ｍ，検出面からの深さは0.48ｍである。掘り方はⅩⅢ（薩摩火山灰）層を掘り抜きⅩⅣ層に達している。掘り方直上には,貼床と考えられる土（埋土５）が水平に堆積している。

埋　　土　埋土は５つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。埋土３・埋土４・埋土５は，いずれも茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。粘質の強さ（埋土３<埋土４<埋土５）や包含物（埋土５にのみ，にぶい赤褐色の土を含む）違い等で分層した。

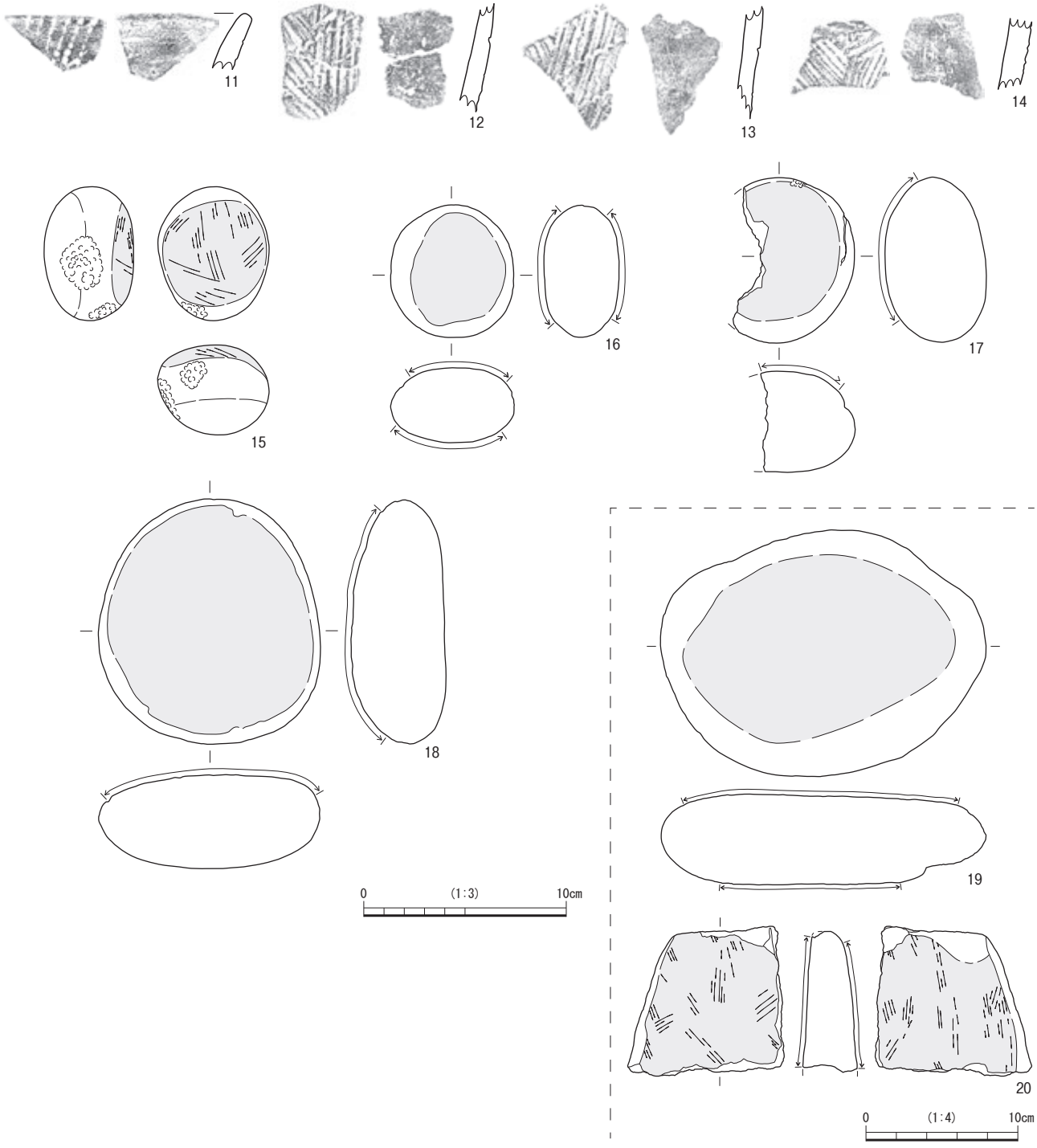
出土遺物　埋土中から25点の遺物が出土した。うち10点を図化した。11（第44図）は，外反する口縁部片である。口縁部外面に，斜位貝殻刺突文を施す。やや丸みを帯びる口唇部は，文様をもたない。内面には，ナデをおこなう。12・13（第44図）は，器壁の薄い胴部で，胎土や施文等から同一個体と考えられる。12・13は，綾杉状の貝殻条痕文の上位に，貝殻刺突文を施す。写真図版では，上部の接合が外れている。14（第44図）も胴部である。綾杉状の貝殻条痕文の上に斜位貝殻刺突を施すことから，頸部近くと思われる。内面にはナデをおこな



第43図　竪穴住居跡５号

う。15 ～ 18（第44図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。15は小ぶりな円礫の片面を磨面に使用し，側面に敲打痕が認められる。16は小ぶりでやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。17は左半分を欠損する。やや扁平な円礫の片面を磨面に使用してしている。被熱しており裏面から側面にかけてススが付着する。18は扁平な円礫の片面を磨面に使用している。19は砂岩製の石皿である。扁平な礫の表裏両面を広く磨面に使用している。表面は特によく研磨され滑らかな状態である。20は破片資料だが，表裏両面の平坦部に磨面が残ることから石皿とした。

土器分類　11 ～ 14は，いずれもⅣ類に該当する。



第44図　竪穴住居跡５号出土遺物

竪穴住居跡６号（SH６：第45図）

検出状況　Ｅ－23区，Ⅻ層で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸2.1ｍ，短軸1.88ｍとやや小型のものである。検出面からの深さは0.4ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。

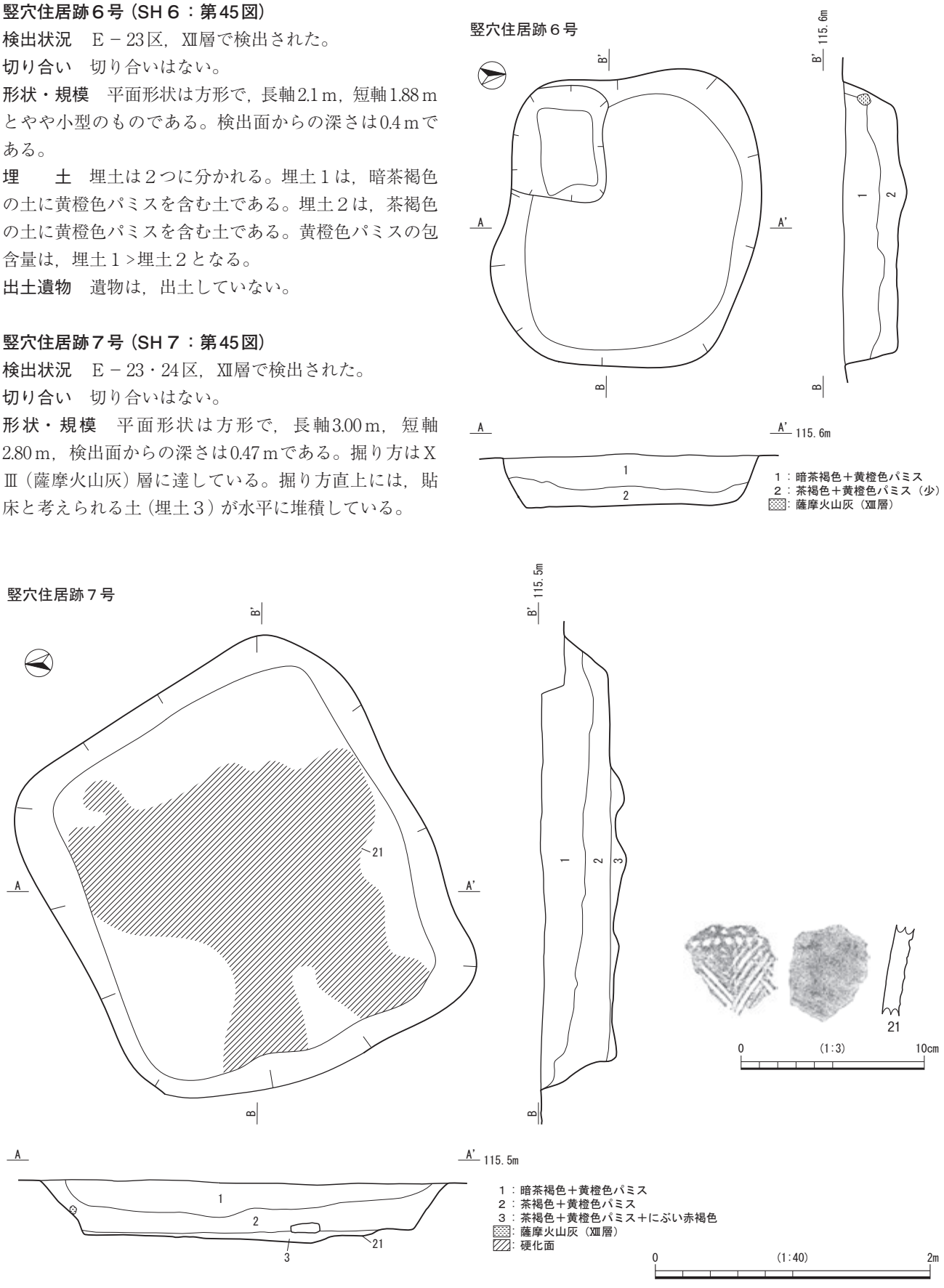
出土遺物　遺物は，出土していない。

竪穴住居跡７号（SH７：第45図）

検出状況　Ｅ－23・24区，Ⅻ層で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸3.00ｍ，短軸2.80ｍ，検出面からの深さは0.47ｍである。掘り方はⅩⅢ（薩摩火山灰）層に達している。掘り方直上には，貼床と考えられる土（埋土３）が水平に堆積している。



第45図　竪穴住居跡６号・竪穴住居跡７号・出土遺物

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２・埋土３は，ともに茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。粘質の強さ（埋土２<埋土３）や包含物（埋土３にのみ，にぶい赤褐色の土を含む）違い等で分層した。

出土遺物　埋土中から２点の遺物が出土した。土器片・礫が各１点で，土器片１点を図化した。21（第45図）は，頸部に近い胴部である。外面上位に，横位貝殻刺突文を，下位に綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面には，ナデをおこなう。

土器分類　21は，Ⅳ類に該当する。

竪穴住居跡８号（SH８：第46図）

検出状況　G－23区，Ⅻ層中で検出された。北側については，調査区外へ延びる。

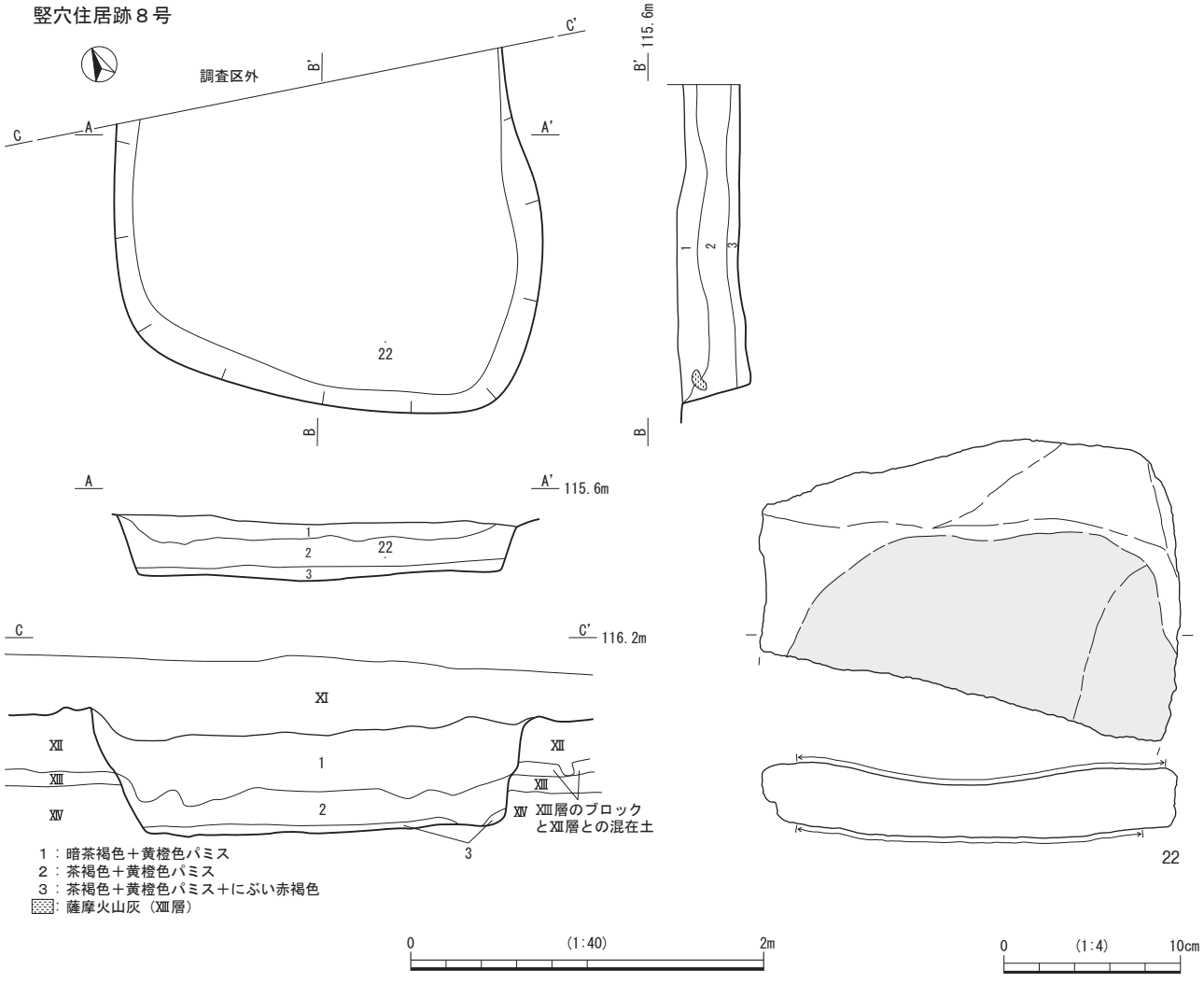
切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は不明である。現状の長軸2.40ｍ，短軸1.80ｍ，検出面からの深さは0.55ｍである。掘り方はⅩⅢ（薩摩火山灰）層を掘り抜きⅩⅣ層に達している。掘り方直上には，貼床土と考えられる土（埋土３）が水平に堆積している。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２・埋土３は，ともに茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。粘質の強さ（埋土２<埋土３）や包含物（埋土３にのみ，にぶい赤褐色の土を含む）違い等で分層した。

出土遺物　埋土中から２点の遺物が出土した。土器片１点・石器が１点である。そのうち石器１点を図化した。図化していない土器片は胴部である。外面に綾杉状の条痕文と貝殻刺突文をわずかに確認できる。22（第46図）は花崗岩製の石皿である。扁平な石材の表裏両面に磨痕が確認され，特に表面は緩やかに落ち窪んでいる。表面磨面の残存状態から，全体の1/2 ～ 2/3を欠損すると考えられる。

土器分類　胴部片は，Ⅳ類に該当する。



第46図　竪穴住居跡８号・出土遺物

竪穴住居跡９号（SH９：第47図）

検出状況　G－24区，XII層中で検出された。北側については，調査区外へ延びる。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は不明である。現状の長軸2.66ｍ，短軸1.04ｍ，検出面からの深さは0.55ｍである。掘り方はXIII（薩摩火山灰）層を掘り抜きXIV層に達している。掘り方直上には，貼床と考えられる土（埋土３）が水平に堆積している。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２・埋土３は，ともに茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。粘質の強さ（埋土２<埋土３）や包含物（埋土３にのみ，にぶい赤褐色の土を含む）違い等で分層した。

出土遺物　遺物は出土していない。

竪穴住居跡10号（SH10：第47図）

検出状況　C－19区，XII層中で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸2.04ｍ，短軸1.77ｍ，検出面からの深さは0.20ｍである。掘り方は一部XIV層に達しているものの，基本的にはXIII（薩摩火山灰）層で収まり，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土で，XI層に類似する。埋土２は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土中にはわずかであるが炭化物が認められた。

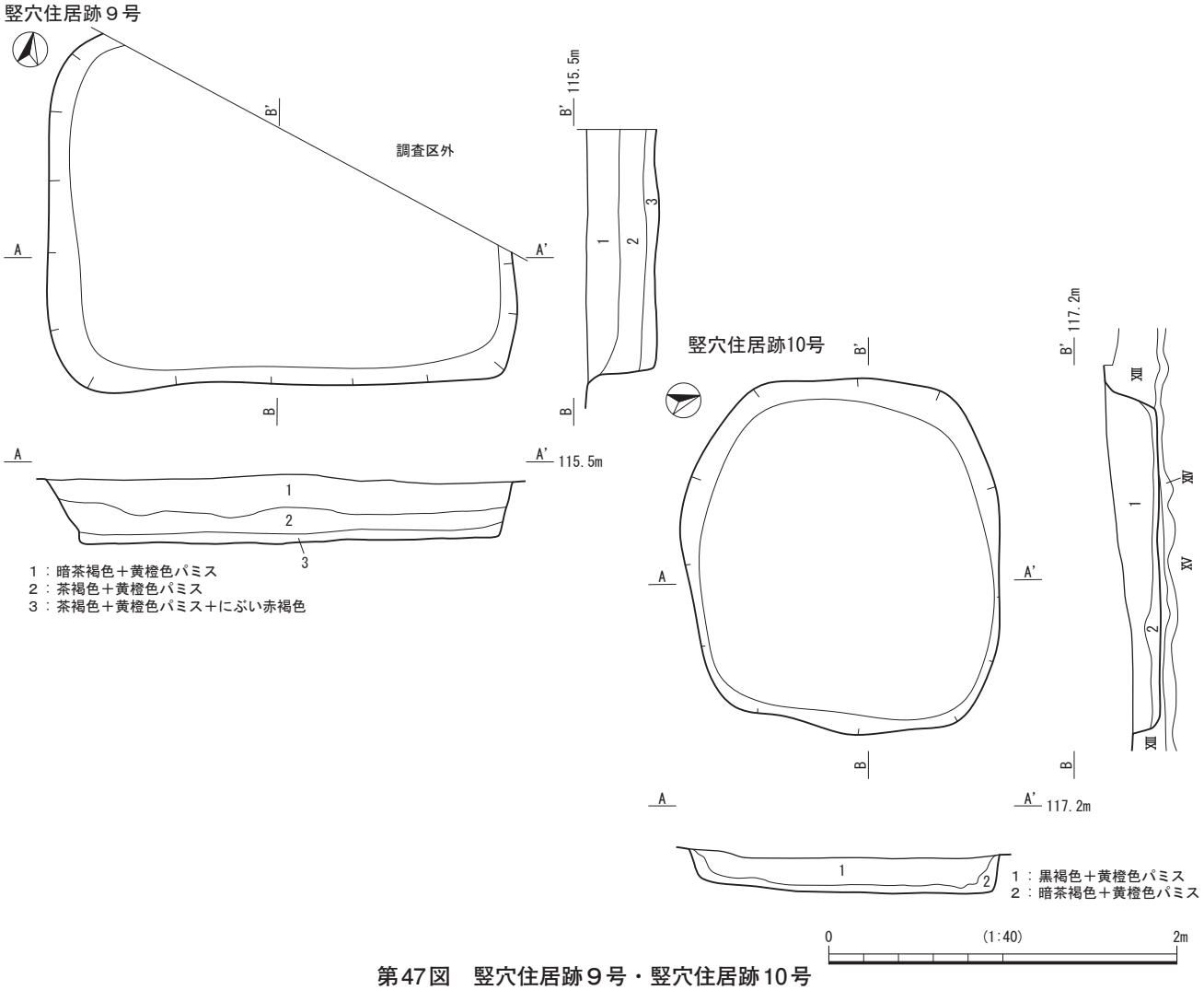
出土遺物　遺物は出土していない。

竪穴住居跡11号（SH11：第48図）

検出状況　E－34・35区，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は不定形方形で，長軸3.83ｍ，短軸2.90ｍとやや大型のものである。検出面からの深さは0.15ｍである。掘り方はXIII（薩摩火山灰）層で収まり，床面として意識したものと思われるが，住居中央から北側部分には2.8ｍ×2.5ｍ程の範囲で硬化面の広がりが認められた。住居中央部東壁端からは土坑が検出され，住



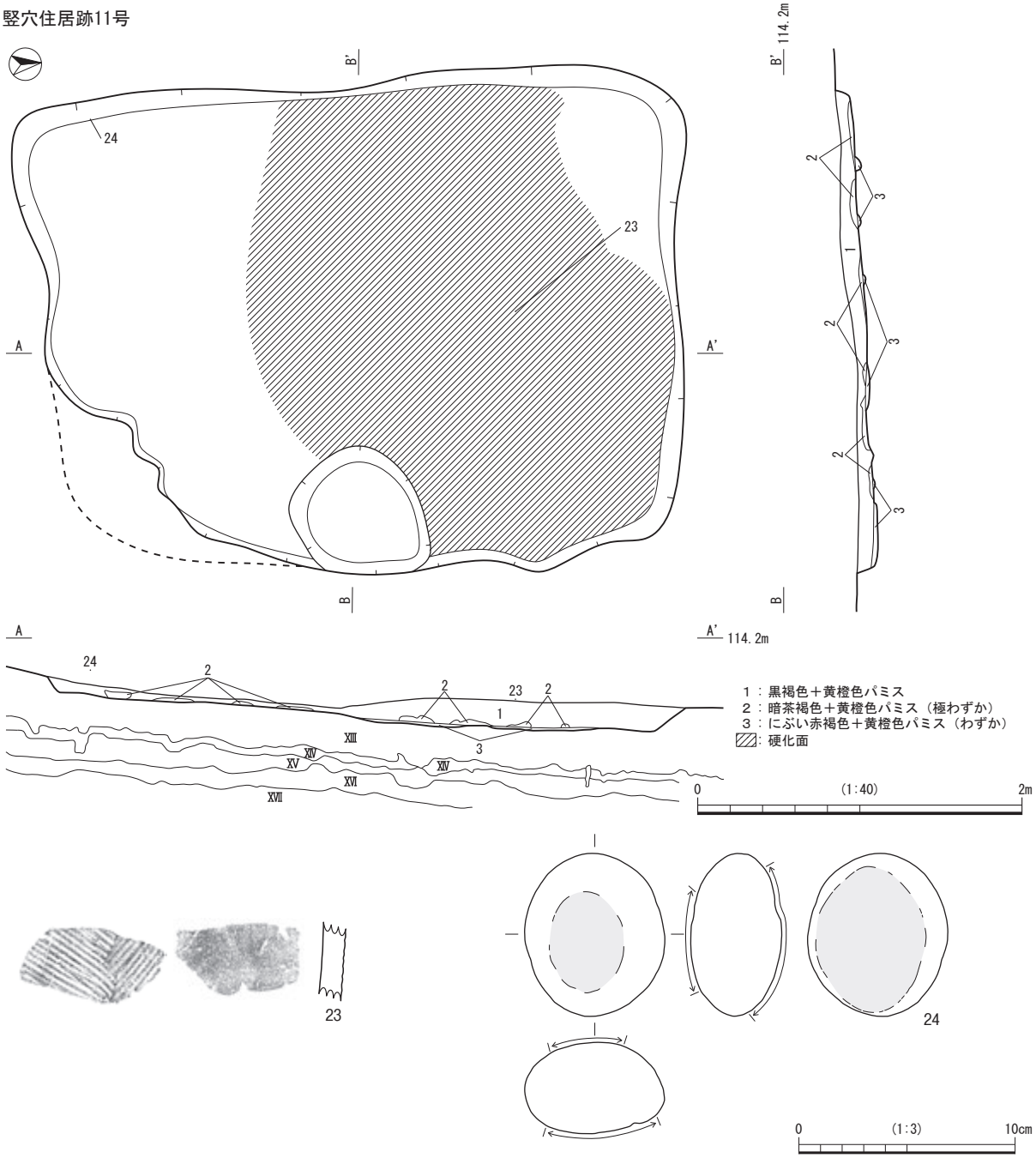
第47図　竪穴住居跡９号・竪穴住居跡10号

居に付帯するものと考えられる。土坑の規模は0.8ｍ×0.76ｍの円形状で，埋土からは炭化物が認められた。その他遺構内からは複数のピットが検出されたが，形状が不安定で位置も不規則なことから，樹根と判断した。

埋　　土　埋土は３つに分けられる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土で，Ⅻ層に類似する。埋土２は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを極わずかに含む土で，Ⅻ層に類似する。埋土３は，にぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）でわずかに黄橙色パミスを含む土である。埋土３は，上面が硬化しており，貼床の可能性も考えられる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物のうち２点を図化した。23（第48図）は，胴部である。外面に，綾杉状の貝殻条痕文を施し，内面にはナデをおこなう。また，図化していない他の土器片は，２点が底部，２点が胴部である。底部２点は，小破片だったり，剥落が激しかったりして，施文等が不明である。２点の胴部には，貝殻条痕文が確認できる。24（第48図）は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており側面にススが付着する。

土器分類　23や他の胴部片は，Ⅳ類に該当する。



第48図　竪穴住居跡11号・出土遺物

竪穴住居跡12号（SH12：第49図）

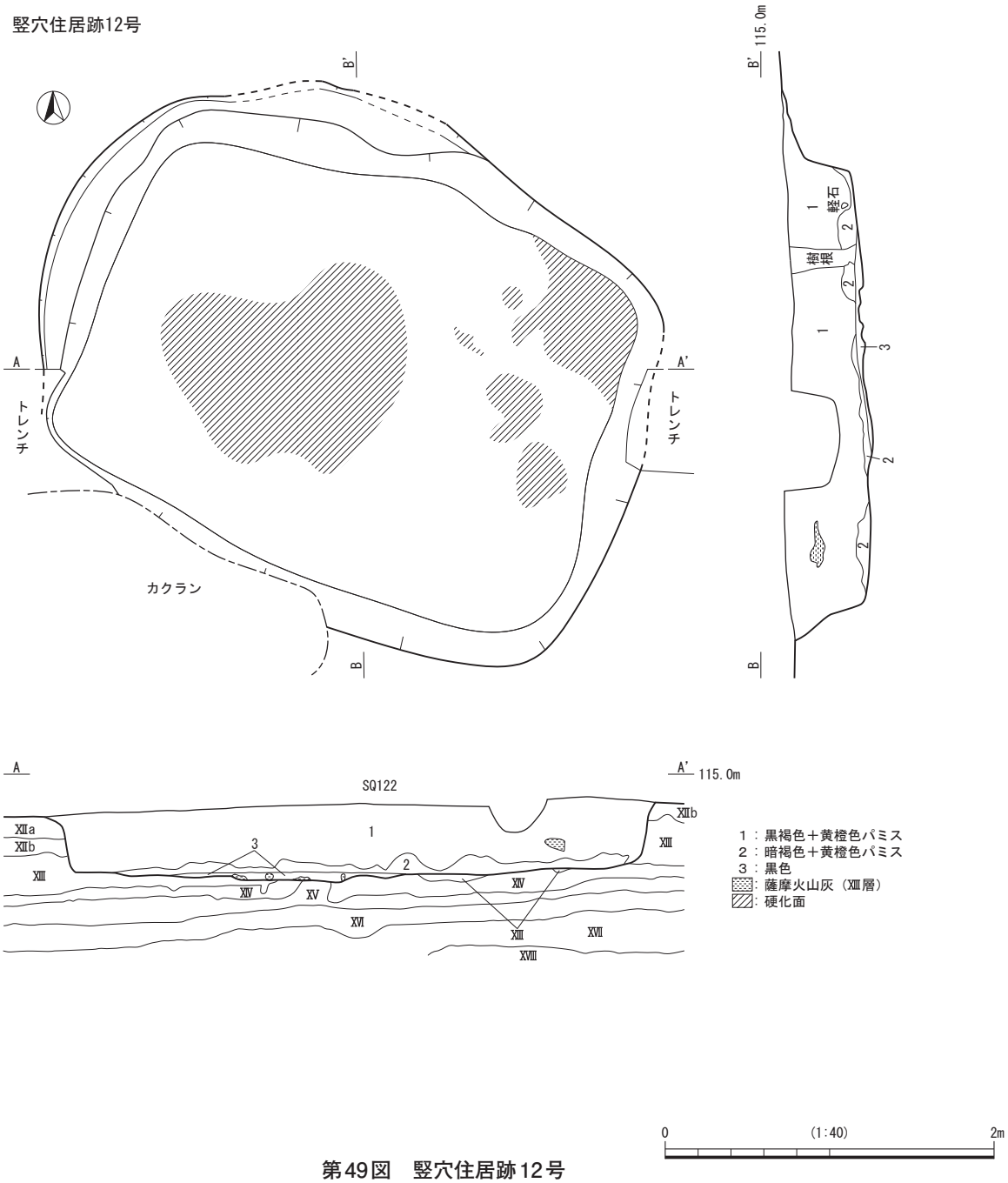
検出状況　B・C－25・26区，XII層中で検出された。

切り合い　住居中央部東側に集石遺構122号（SQ122）が存在する。SH12の埋土を掘り込んでいることから，住居の埋没後に形成されたと考えられる。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸3.74m，短軸3.03mとやや大型のものである。検出面からの深さは0.40mである。掘り方は一部XIV層に達しているものの，基本的にはXIII（薩摩火山灰）層で収まり，床面として意識したものと思われる。住居中央の西側部分には1.38m×1.06m程の範囲で硬化面の広がりが認められた。

埋　　土　埋土は3つに分かれる。埋土1は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土2は，暗褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土3は，黒色の土で黄橙色パミスを含まない土である。埋土3は，上面が硬化しており，貼床の可能性も考えられる。

出土遺物　軽石が出土しているが，加工痕等は，確認できなかった。



第49図　竪穴住居跡12号

竪穴住居跡13号（SH13：第50図）

検出状況　C－27区，Ⅻ層上面で検出された。当初は，土坑を有する竪穴式住居跡として調査を進めた。

切り合い　土坑と思われていた壁面を精査したところ，連穴土坑21号（SV21）と切り合っていることが確認された。SV21がSH13の硬化面を切っていることから，連穴土坑が後から作られたと判断した。

形状・規模　平面形状は横長で，長軸3.30ｍ，短軸2.11ｍである。検出面からの深さは0.35ｍである。掘り方はXV層に達している。住居中央部周辺には1.85ｍ×1.35ｍ程の範囲で硬化面の広がりが認められた。

埋　　土　埋土は５つに分かれる。埋土１・埋土２は，極暗褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。また埋土２には，薩摩火山灰も含まれる。埋土３は，暗褐色の土に極わずかに黄橙色パミスと薩摩火山灰を含む土である。埋土４は，黒褐色の土に極わずかに黄橙色パミスを含む土である。埋土５は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。

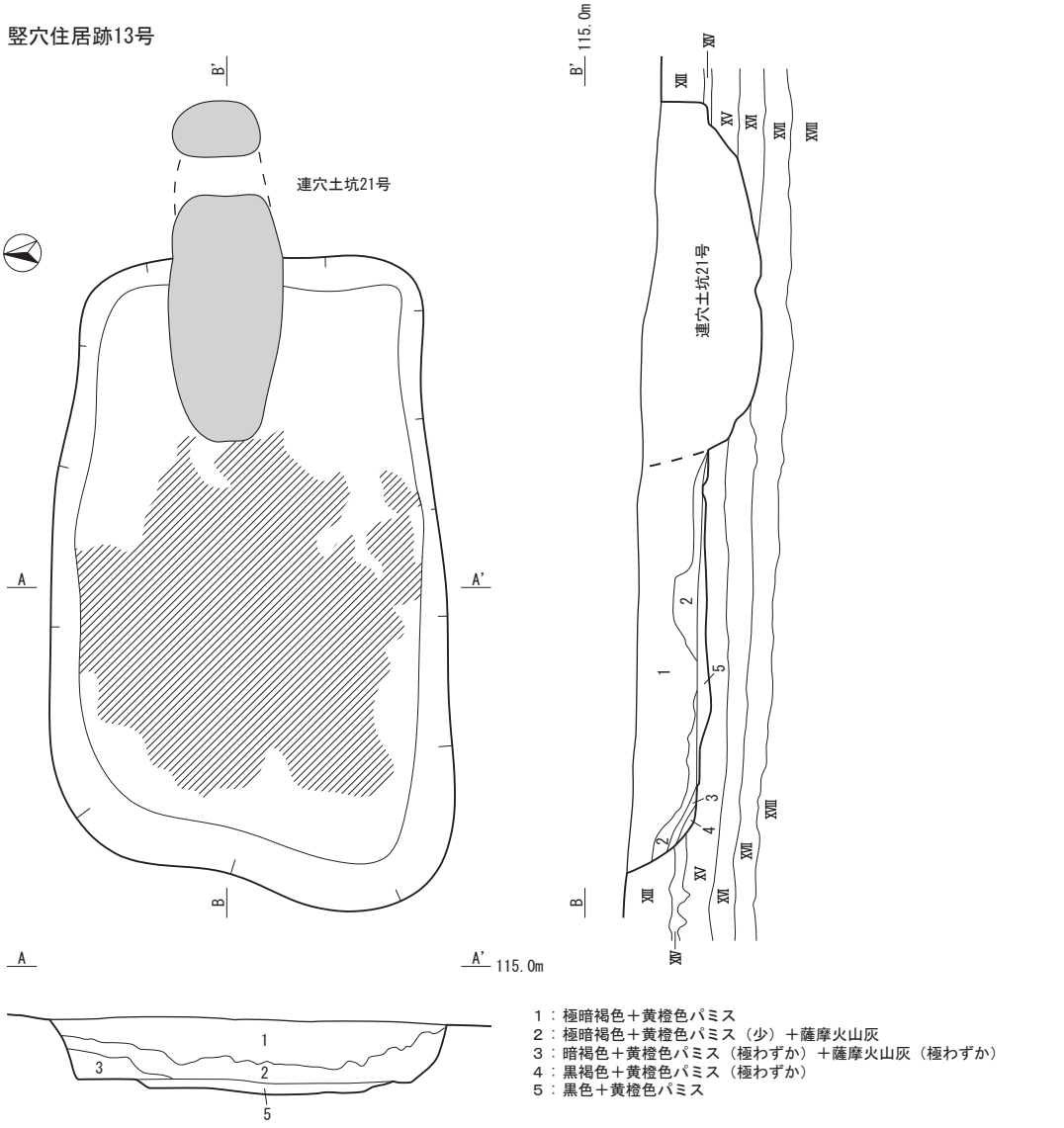
出土遺物　埋土中から出土した遺物は，いずれも礫であった。

竪穴住居跡14号（SH14：第51図）

検出状況　F－45区，Ⅻ層中で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は横長で，長軸2.63ｍ，短軸1.80ｍである。検出面からの深さは0.43ｍである。掘り



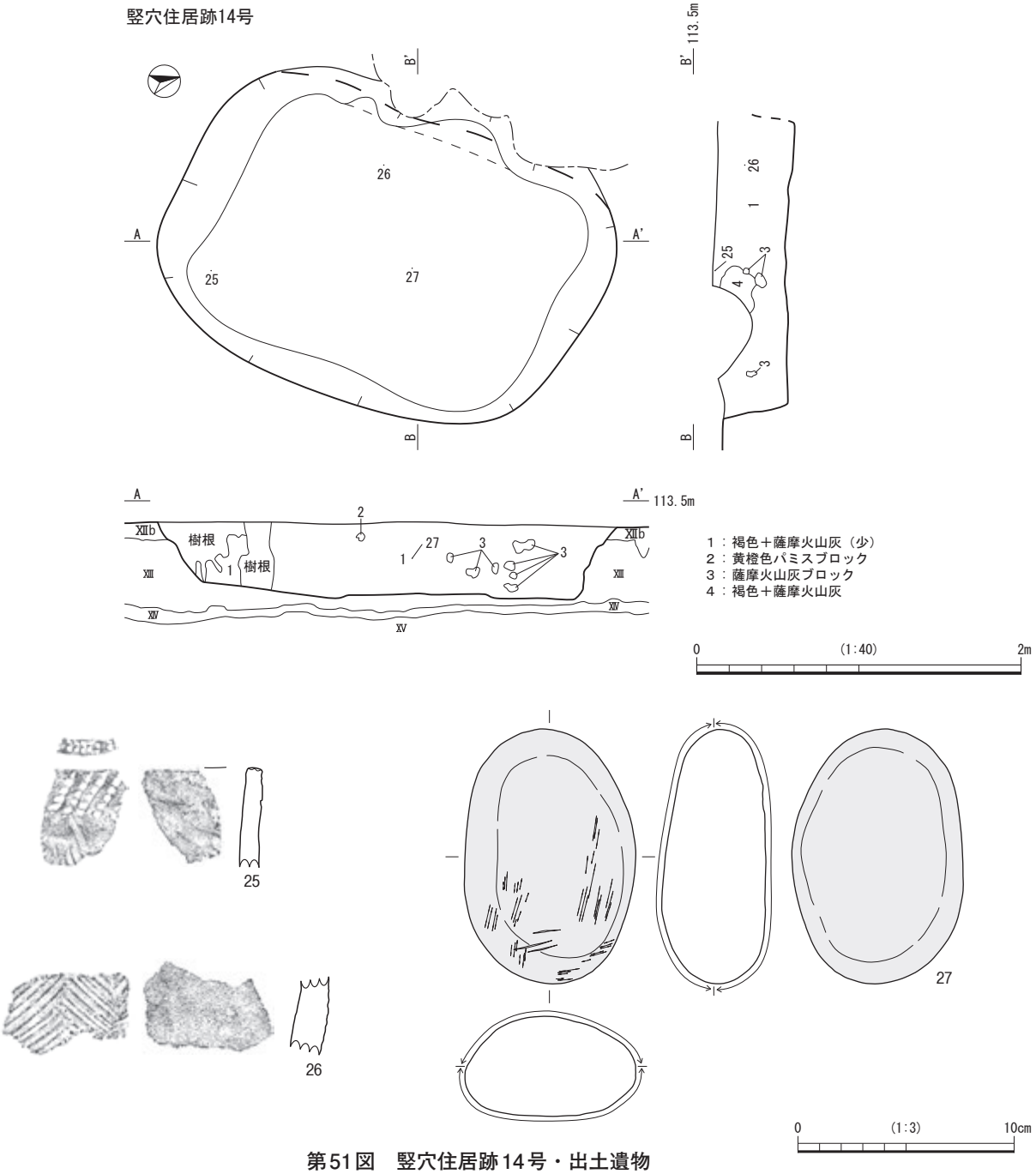
第50図　竪穴住居跡13号

方はⅩⅢ（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。B－B’の断面に見られる凹み部分は落ち込みで，北西壁側は樹根により撹乱を受けている。

埋　　土　埋土は４つに分かれる。埋土１・埋土４は，褐色の土である。黄橙色パミスは含まず，薩摩火山灰の包含量（埋土１<埋土４）の違い等で分層した。埋土２は，黄橙色のパミスブロックである。埋土３は，薩摩火山灰のブロックである。

出土遺物　埋土中から６点の遺物が出土した。土器片５点，石器１点で，うち３点を図化した。25（第51図）は，外傾する口縁部である。口縁部外面に，斜位貝殻刺突文を，その下位には斜位貝殻条痕文を施す。ほぼ平坦な口唇部には，２つの刺突を一単位とする刺突文を施す。内面には，ナデをおこなう。26（第51図）は，胴部である。綾杉状の貝殻条痕文を施し，内面にはナデをおこなう。図化しなかった土器片３点は，いずれも胴部で，貝殻条痕文を施す。27（第51図）は安山岩製の磨石・敲石である。扁平な円礫の片面を磨面に使用している。

土器分類　25・26・他３点は，いずれもⅣ類に該当する。



第51図　竪穴住居跡14号・出土遺物

竪穴住居跡15号（SH15：第52図）

検出状況　D・E－35区，Ⅻ層中で検出されたが，北側半分についてはⅩⅢ層での検出である。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　検出が遅く全形は不明である。現状の長軸3.04ｍ，短軸2.40ｍ，検出面からの深さは0.35ｍである。掘り方はⅩⅢ（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は，３つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，いずれも黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１＝埋土２<埋土３）や粘性の強さ（埋土１＝埋土２<埋土３）の違いで分層した。また，埋土３には炭化物が極少量含まれる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物のうち１点を図化した。28（第52図）は安山岩製の磨石・敲石類である。下半分を欠損する。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。

図化はしていないが，綾杉状の貝殻条痕文を施す胴部１点も出土している。

土器分類　胴部片は，Ⅳ類に該当する。

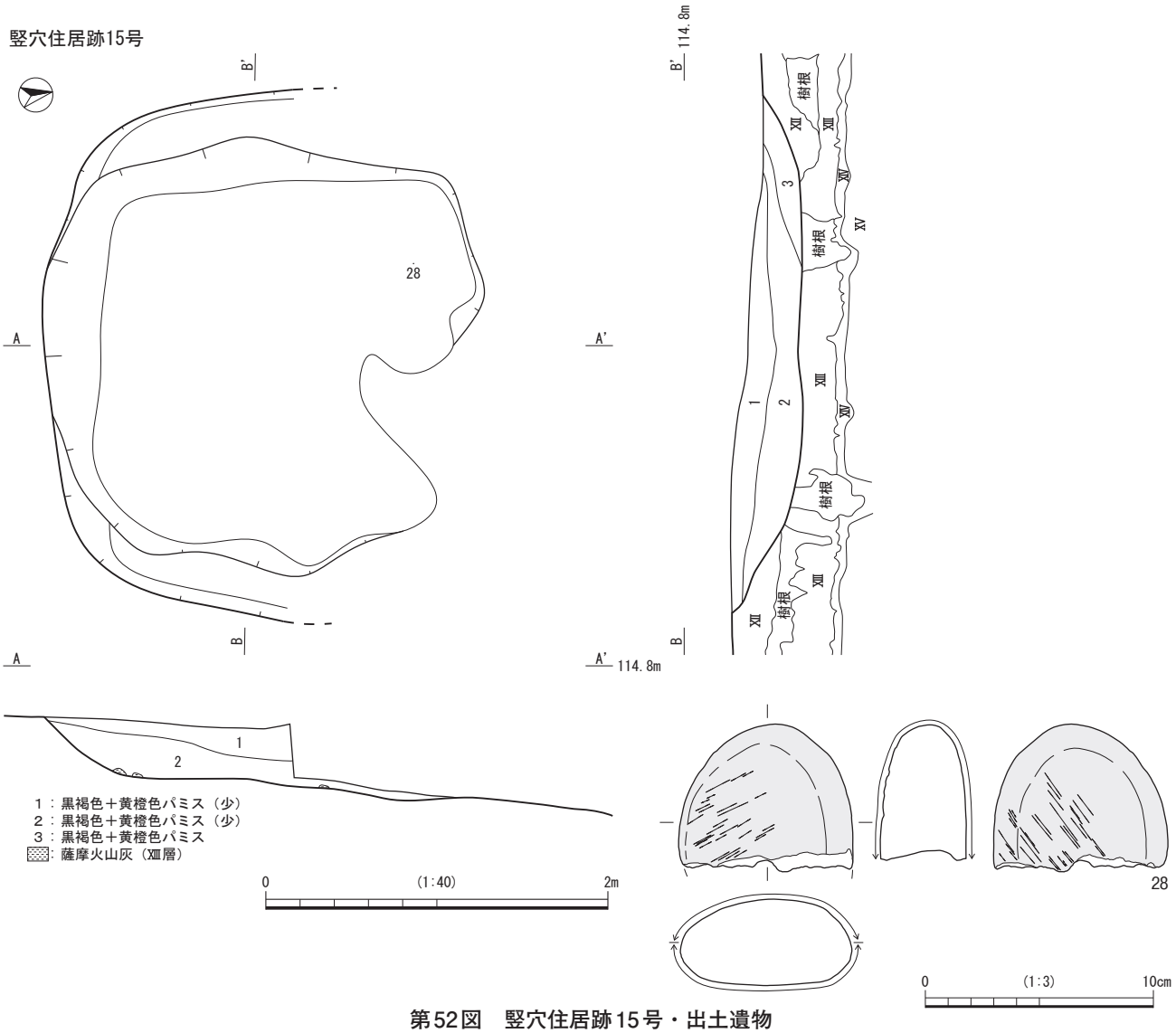
竪穴住居跡16号（SH16：第53図）

検出状況　Ｌ－56区，先行トレンチ掘り下げ中にⅩⅢ層で住居の一部を検出した。先行トレンチを基に住居の広がりを確認したため，トレンチ以外の部分はⅪ層中で検出することができた。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸2.50ｍ，短軸2.21ｍである。検出面からの深さは0.55ｍである。掘り方はⅩⅢ（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は６つに分けられる。埋土１・埋土２・埋土５は，いずれも黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰を含む土である。黄橙色パミス（埋土１＝埋土２>



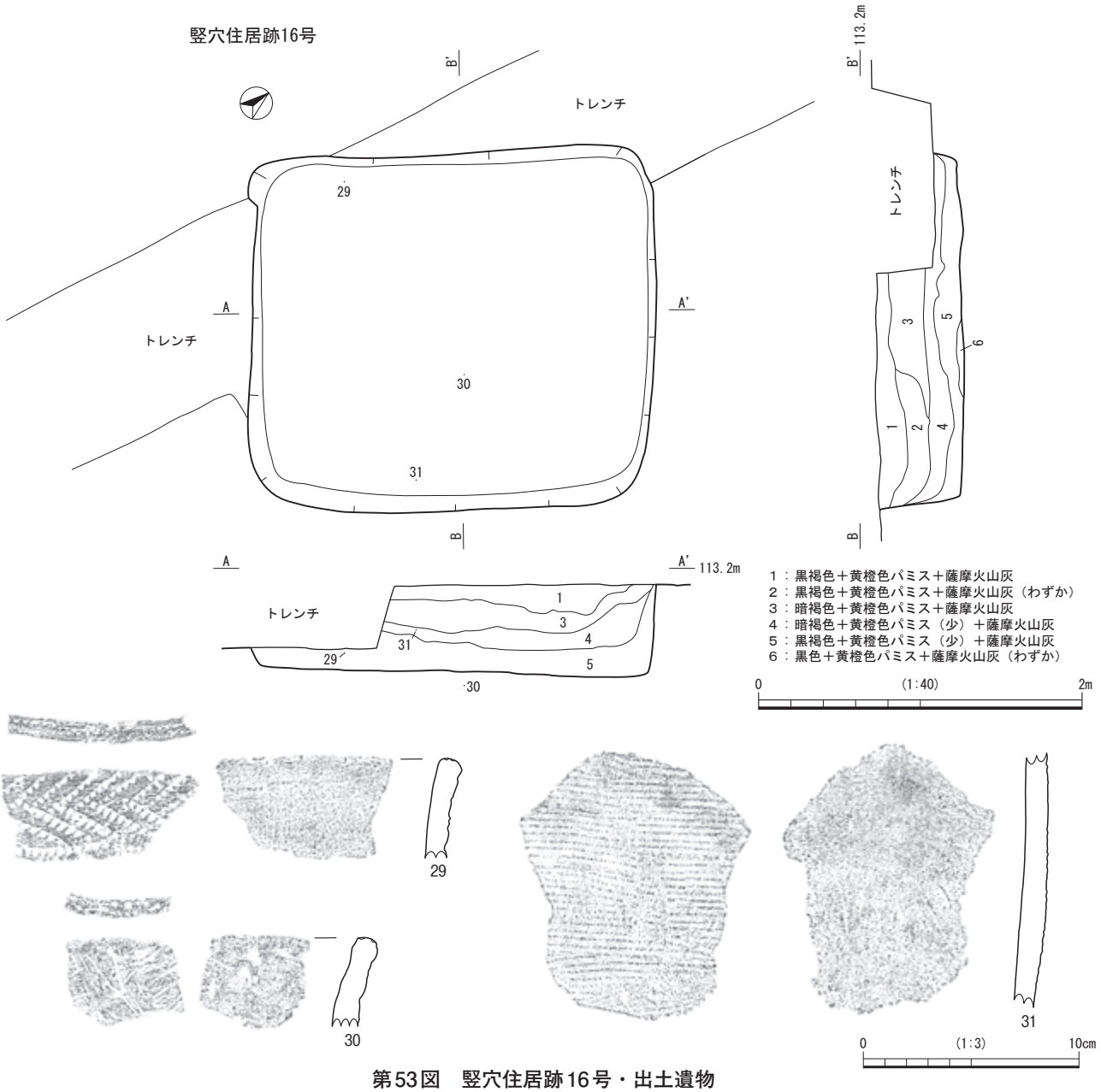
第52図　竪穴住居跡15号・出土遺物

埋土５）と薩摩火山灰（埋土２<埋土１＝埋土５）の包含量の違い等で分層した。埋土３・埋土４は，ともに暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰を含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土３>埋土４）の違い等で分層した。埋土６は，黒色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰をわずかに含む土である。

出土遺物　埋土中から14点の遺物が出土した。いずれも土器片である。そのうち３点を図化した。29（第53図）は，外反する口縁部である。口縁部外面には，羽状の貝殻刺突文が，その下位には横位刺突文を施す。羽状の刺突は，右上がりが先で，右下がりをその後に施文する。また，横位刺突文は，右下がりの刺突文の後に施文されている。やや平坦な口唇部には，貝殻刺突を施す。内面には，ナデをおこなう。30（第53図）も，外反する口縁部である。口縁部上位には，斜位刺突文や，ランダムな条痕を施文するが，施文具は不明である。やや丸みを帯びた口唇部にも工具不明の刺突文を施す。内面の整形は，多少雑である。29とは，同一個体とはならない。31（第53図）は，やや膨らみを帯びた胴部である。外面に，横位貝殻条痕文を施す。内面には，ナデやスス跡が確認できる。図化しなかった土器片の１点は，底部付近の胴部と思われ，外面は無文であるが，胎土や内面の調整等から30と同一個体と思われる。

また，図化しなかった土器片１点は口縁部で，29と同一個体と思われ，包含層遺物と接合した。

土器分類　29・30はいずれもⅣ類に，31はⅠ～Ⅲ類系に該当する。



第53図　竪穴住居跡16号・出土遺物

竪穴住居跡17号（SH17：第54図）

検出状況　H－34・35区，XⅢ層上面で検出した。この周辺の調査区の包含層中から出土する遺物は数点のみで，遺物の出土状況からは竪穴住居跡等の遺構の検出は全く予想されなかった。

切り合い　切り合いはない。なお，SH17を中心とする調査区内からは数基の土坑状のシミ痕が検出されたが，半裁を行った結果すべて樹根と判断した。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸1.71ｍ，短軸1.44ｍと小型のものである。検出面からの深さは0.08ｍである。掘り方はXⅢ（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は２つに分けられる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰を含む土でⅪ層に類似する。埋土２は，にぶい褐色の土に薩摩火山灰を含む土で，黄橙色パミスは含まない土でXⅢ層に類似する。

出土遺物　埋土中から１点の遺物が出土し図化した。32（第54図）は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，側面に敲打痕跡が認められる。特に左上側面は欠損後も敲打面として使用している。

竪穴住居跡18号（SH18：第55図）

検出状況　M－56・57区，先行トレンチ掘り下げ中にXⅢ層上面で一部を検出した。当初は56区までが調査範囲だったが，遺構が調査区外に延びることが判明したため，範囲を拡張し完掘を行った。先行トレンチを頼りに住居の広がりを確認したため，トレンチ以外の部分はⅩⅠ層中で検出することができた。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸2.97ｍ，短軸2.20ｍと比較的大型である。検出面からの深さも0.65ｍと深い。掘り方はXⅢ（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は５つに分けられる。埋土１は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２・埋土３は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土２<埋土３）の違いで分層した。埋土４・埋土５は，暗褐色の土に薩摩火山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量（埋土４<埋土５）の違いや，埋土５には黄橙色パミスを含まないことから分層した。埋土１～３にも薩摩火山灰は含まれる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物２点は，礫であった。

竪穴住居跡19号（SH19：第55図）

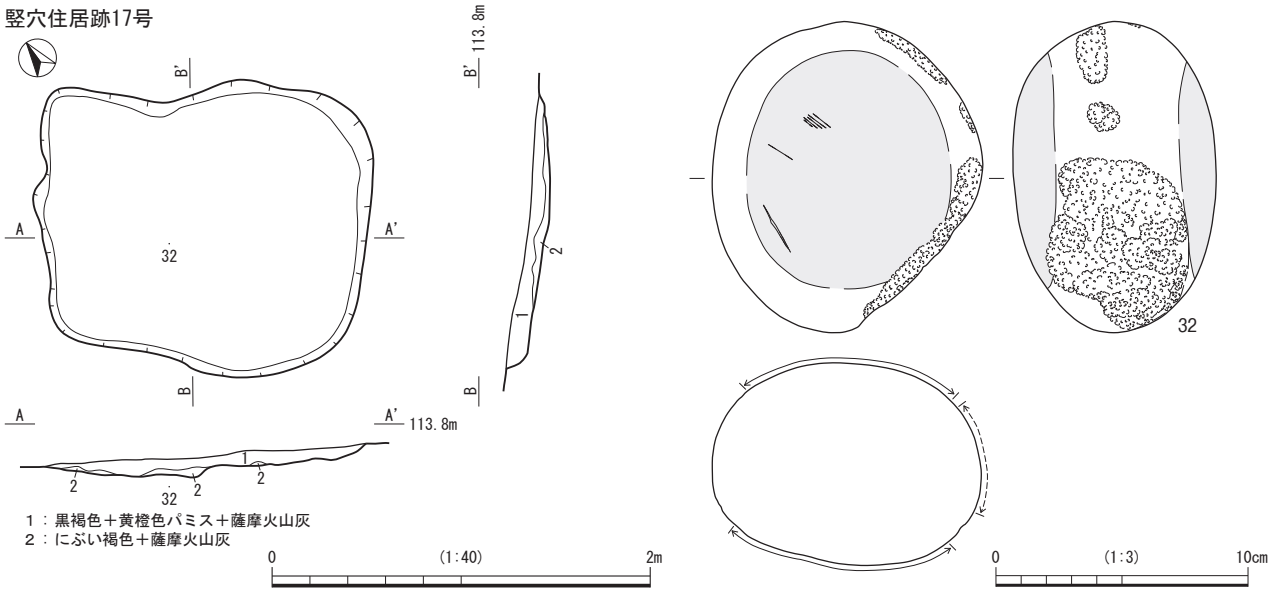
検出状況　N－56区，先行トレンチ掘り下げ中にXⅢ層上面で一部を検出した。先行トレンチを頼りに住居の広がりを確認したため，トレンチ以外の部分ではⅪ層中で検出することができた。北側については調査区外（路線外）へ延びる。

切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は不明である。現状の長軸1.85ｍ，短軸1.55ｍ，検出面からの深さは0.42ｍである。掘り方はXⅢ（薩摩火山灰）層内上面で収まっており，床面として意識したものと思われる。

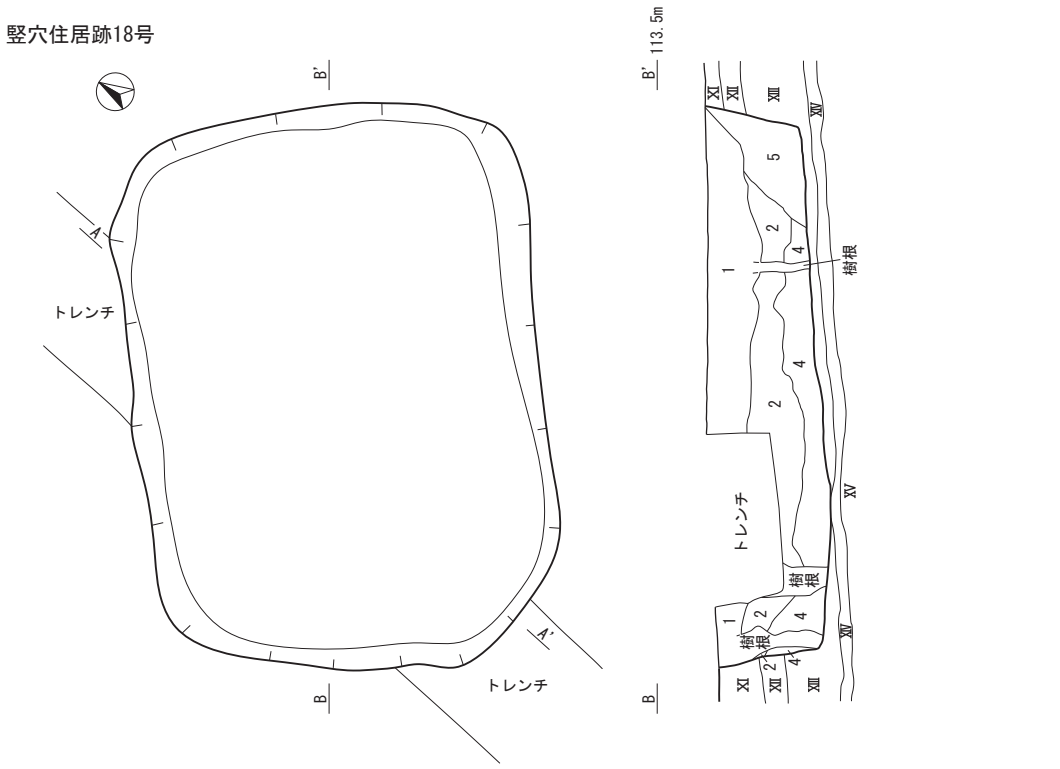
埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。埋土３は，暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰をわずかに含む土である。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

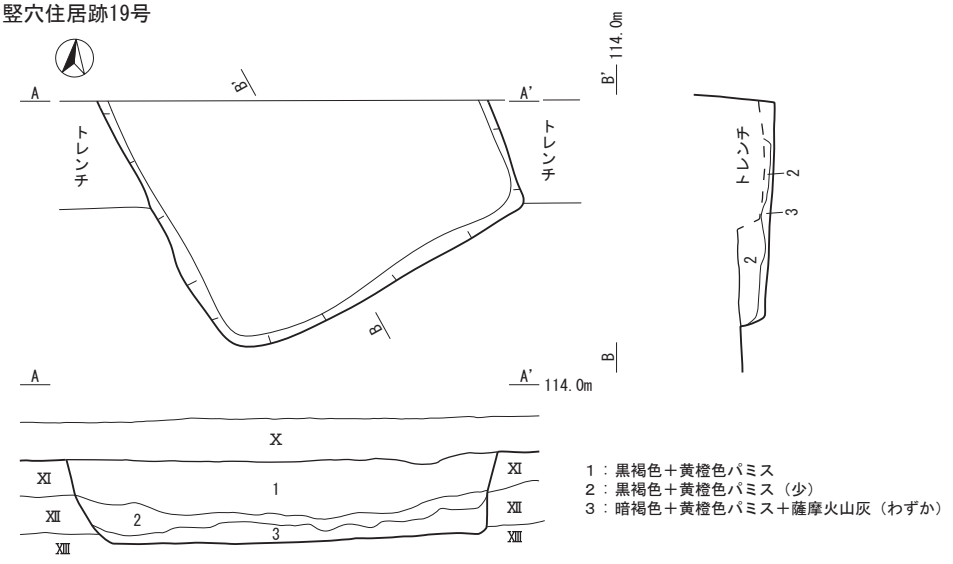


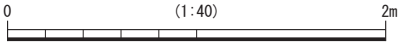
第54図　竪穴住居跡17号・出土遺物

竪穴住居跡18号



竪穴住居跡19号





第55図　竪穴住居跡18号・竪穴住居跡19号

竪穴住居跡20号（SH20：第56図）

検出状況　M－57区，XIII層上面で検出した。

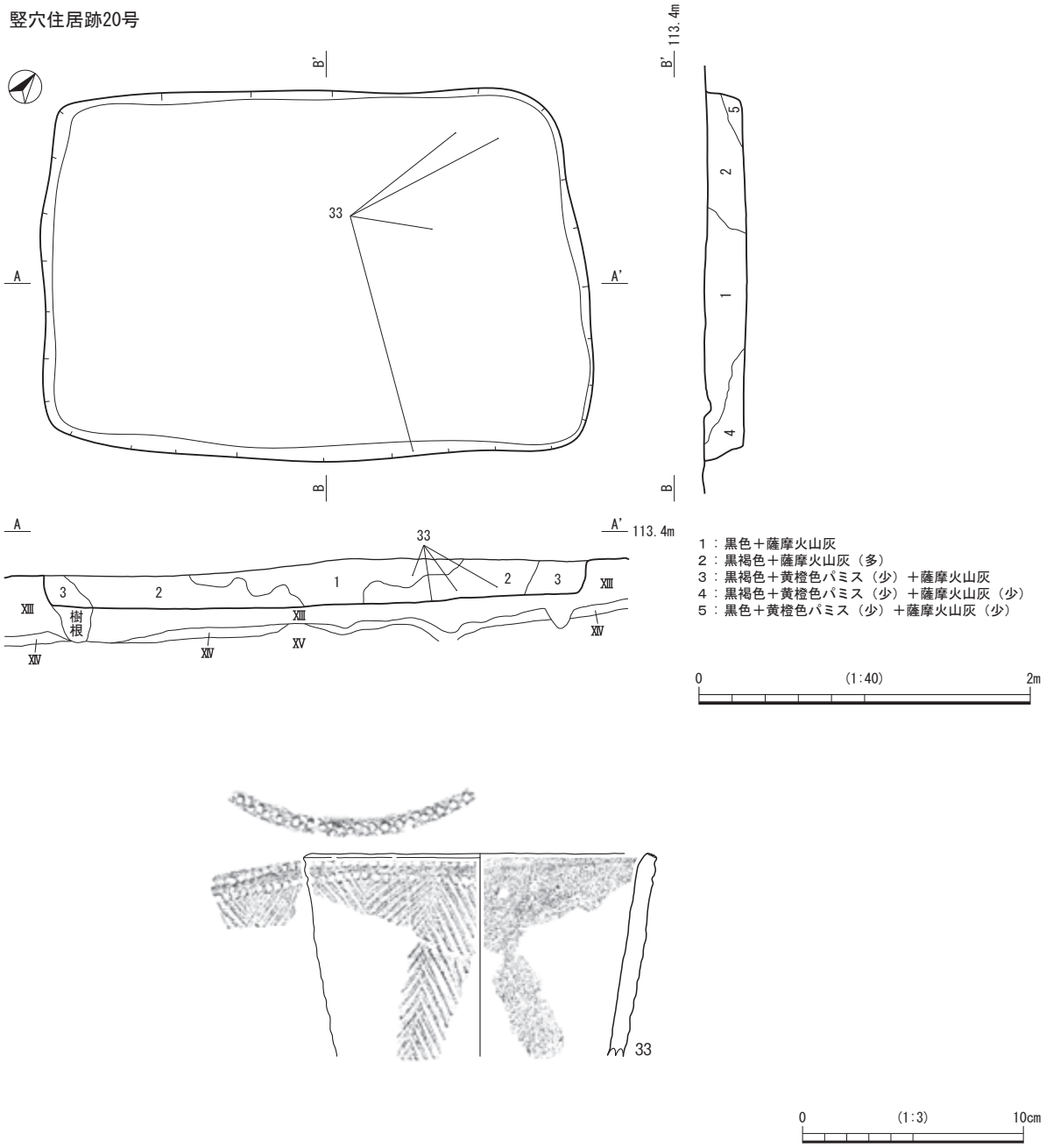
切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は横長で，長軸3.28ｍ，短軸2.23ｍと比較的大型のものである。検出面からの深さは0.28ｍである。掘り方はXIII（薩摩火山灰）層内で収まっており，床面として意識したものと思われる。

埋　　土　埋土は５つに分かれる。埋土１・埋土５は，ともに黒色の土に薩摩火山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量（埋土１>埋土５）の違い等で分層した。埋土２・埋土３・埋土４は，いずれも黒褐色の土に薩摩火山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量（埋土２>埋土３>埋土４）の違い等で分層した。また，住居埋没過程の初期段階である三角形堆積は，黄橙色パミスを少量含みXII層に類似する。

出土遺物　埋土中から５点の遺物が出土した。いずれも土器片で，口縁部３点，胴部１点が接合し図化した。33（第56図）は，外傾する口縁部である。口縁部外面には，くり抜くような横位刺突文を２条，直下に綾杉状の条痕文を施す。口唇部には，刺突文を施す。内面はていねいなナデで，やや光沢を帯びている。

土器分類　33は，Ⅳ類に該当する。



第56図　竪穴住居跡20号・出土遺物

竪穴住居跡21号（SH21：22図）

検出状況　H・Ⅰ－49区，Ⅻ層上面で検出した。

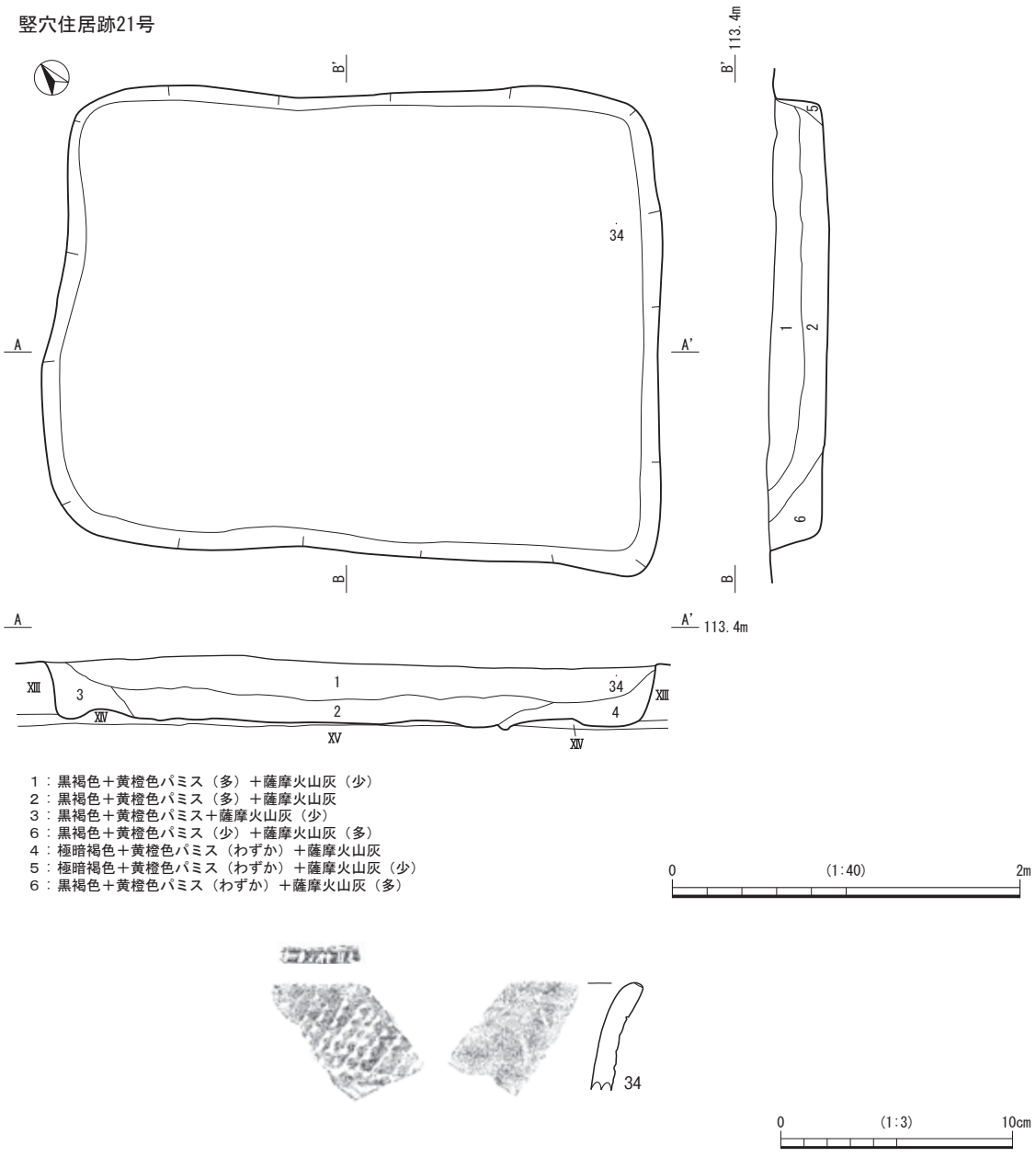
切り合い　切り合いはない。

形状・規模　平面形状は方形で，長軸3.54ｍ，短軸2.62ｍと比較的大型のものである。検出面からの深さは0.35ｍである。掘り方はⅩⅣ層直上まで及んでいるが，埋土や完掘後の断ち割りでは貼床等の痕跡は確認されなかった。

埋　　土　埋土は６つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３・埋土６は，いずれも黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰を含む土である。黄橙色パミス（埋土１＝埋土２>埋土３>埋土６）と薩摩火山灰（埋土１＝埋土３<埋土２<埋土６）の包含量の違い等で分層した。埋土４・埋土５は，ともに極暗褐色の土にわずかに黄橙色パミスと薩摩火山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量（埋土４>埋土５）の違い等で分層した。また，住居埋没過程の初期段階である三角形堆積は，Ⅻ層に類似する。その後住居中央部を中心に堆積する埋土１・埋土２は，Ⅺ層に類似する。

出土遺物　埋土中から３点の遺物が出土し，いずれも土器片であった。そのうち１点を図化した。34は，外反する口縁部である。口縁部外面には，斜位貝殻刺突文を，その下位に横位刺突文を施す。やや膨らみを帯びた口唇部には１～２㎜程度のキザミを施す。内面にはナデをおこなう。図化しなかった２点は胴部で，ともに綾杉状の条痕文を施す。

土器分類　34・他２点は，いずれもⅣ類に該当する。



第57図　竪穴住居跡21号・出土遺物

第８表　竪穴住居跡一覧表

遺構名	検出区	検出層	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	長軸方向	検出面積（㎡）	床面積（㎡）	柱穴	炉跡	遺物	備　考
			平面形状（形状値）				壁面傾斜値					
SH１	B－12・13	Ⅻ	2.18	1.88	0.14	東／西	4.10	3.92	—	—	○	SV1と重複
			方形（0.86）				—					
SH２	B－13	Ⅻ	1.97	1.76	0.30	東／西	3.47	2.64	—	—	○	科学分析
			不定形方形（0.89）				0.76					
SH３	B－13・14	Ⅺ	2.53	2.36	0.37	東／西	5.59	5.37	—	—	○	SV9とSK54と重複
			方形（0.93）				0.96					
SH４	A－17	Ⅻ	2.59	2.14	0.38	北／南	5.54	5.07	—	—	○	科学分析
			方形（0.83）				0.92					
SH５	F－23	Ⅺ	3.05	2.63	0.48	北西／南東	8.02	6.20	—	—	○	
			不定形方形（0.86）				0.77					
SH６	E－23	Ⅺ	2.10	1.88	0.40	東／西	3.95	2.75	—	—	—	
			方形（0.93）				0.70					
SH７	E－23・24	Ⅺ	3.00	2.80	0.47	北東／南西	8.40	6.20	—	—	○	
			方形（0.93）				0.74					
SH８	G－23	Ⅺ	—	—	（壁）0.55 （平）0.32	（北東／南西）	—	—	—	—	○	調査区外へ
			—				—					
SH９	G－24	Ⅺ	—	—	（壁）0.55 （平）0.40	（東／西）	—	—	—	—	—	調査区外へ
			—				—					
SH10	C－19	Ⅺ	2.04	1.77	0.20	東／西	3.61	2.99	—	—	—	
			方形（0.87）				0.83					
SH11	E－34・35	Ⅻ	3.83	2.90	0.15	北／南	11.10	10.38	—	—	○	
			不定形方形（0.75）				—					
SH12	B･C－25･26	Ⅺ	3.74	3.03	0.40	東／西	11.33	8.24	—	—	—	
			方形（0.81）				0.73					
SH13	C－27	Ⅻ	3.30	2.11	0.35	東／西	6.96	5.16	—	—	—	SV24と重複
			横長（0.64）				0.74					
SH14	F－45	Ⅺ	2.63	1.80	0.43	北東／南西	4.73	3.16	—	—	○	
			横長（0.68）				0.67					
SH15	D･E－35	Ⅺ	—	—	0.35	（東／西）	—	—	—	—	○	
			—				—					
SH16	L－56	Ⅺ	2.50	2.21	0.55	北東／南西	5.53	4.90	—	—	○	
			方形（0.88）				0.89					
SH17	H－34･35	Ⅻ	1.71	1.44	0.08	北東／南西	2.46	2.17	—	—	○	
			方形（0.84）				—					
SH18	M－56･57	Ⅺ	2.97	2.20	（壁）0.65 （平）0.28	北西／南東	6.53	5.35	—	—	—	
			方形（0.74）				0.82					
SH19	N－56	Ⅺ	—	—	0.42	（北西／南東）	—	—	—	—	—	調査区外へ
			—				—					
SH20	M－57	Ⅻ	3.28	2.23	0.28	北東／南西	7.31	6.59	—	—	○	
			横長（0.68）				0.90					
SH21	H・Ⅰ－49	Ⅻ	3.54	2.62	0.35	北西／南東	9.27	8.43	—	—	○	
			方形（0.74）				0.91					

(2)　落とし穴（略記号：ST）

落とし穴は，平成22年度の調査で３基，平成23年度の調査で５基，平成24年度の調査で１基の計９基が検出された。

本報告書では，下記に示すように落とし穴の各部分に名称を付し，規模を計測した。

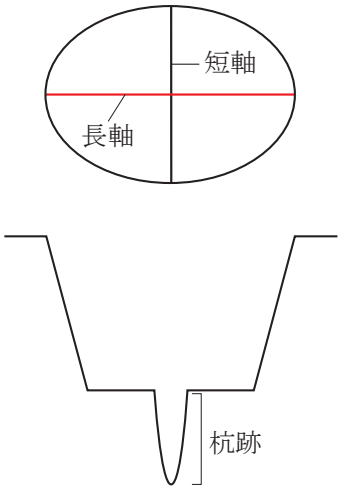
長　軸：検出面で，落とし穴の中心を通り，その落とし穴の広がりが長い方の長さ。

短　軸：長軸の真ん中を通り，長軸に対して垂直に広がる長さ。

深　さ：長軸と短軸の交点から底面までの長さ。

杭　跡：底面にある小ピットをさす。

杭跡の深さ：底面から杭跡の最深部までの長さ。



第58図　落とし穴の各部の名称

検出状況　落とし穴９基は，全て他遺構と重複せず検出された。Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層で検出されたものはない。

第９表　落とし穴の検出層

検出層	基　数	杭跡をもつ基数
Ⅻ層	1	0
ⅩⅢ層	8	7

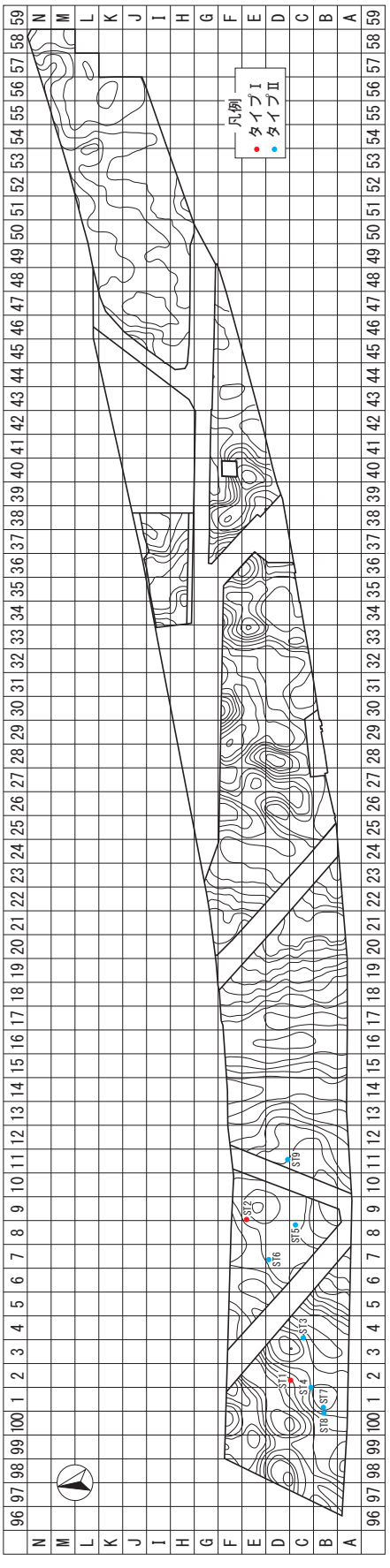
形状・規模　全形を把握できた９基のうち，落とし穴の検出面の形状を把握するため形状値（短軸÷長軸）を求め，以下のような定義を設定した。

横　　長：形状値が，0.7未満で，長軸に対して左右に広がる形。

不定形横長：形状が整っていないと判断した横長。

方　　形：形状値が，0.7～１で方形に近いもの。

不定形円形：形状が整っていないと判断した円形。



第59図　落とし穴タイプ別分布図

第10表　落とし穴の検出面の形状

形　状	基　数	形　状	基　数
横　長	3基	方　形	1基
不定形横長	3基	不定形円形	2基

落とし穴の規模を把握する基準として，断面形状値（長軸÷深さ）を求め，タイプ別に分類した。

タイプ　形態分類のことである。

タイプⅠ：主深値が，1.5以上のもの

タイプⅡ：主深値が，1.5未満のもの

第11表　落とし穴のタイプ

タイプ	基　数	杭跡をもつ基数
Ⅰ	2	0
Ⅱ	7	7

タイプⅠのものは，ST１・ST２の２基で，杭跡をもたず，検出面の形状は不定形円形である。タイプⅡのものは，ST３～ST９の７基で，全てが杭跡をもち，検出面の形状に不定形円形はない。タイプⅠとタイプⅡは，断面形状や杭跡の有無に違いがある。タイプⅠは落とし穴としての機能を果たしていたのか，明確ではないが，落とし穴としての機能差（捉える獲物の違いなど）と考え，ここでは落とし穴とした。

分　布　落とし穴は，やや帯状に，11グリッドから西側に全９基が存在する。また，５グリッドを境に西側に５基，東側に４基と群をなし，且つそれぞれの群にタイプⅠが１基ずつ存在する。

各落とし穴　本遺跡で検出された落とし穴をタイプ別に報告する。

タイプⅠ

落とし穴１号（ST１：第60図）

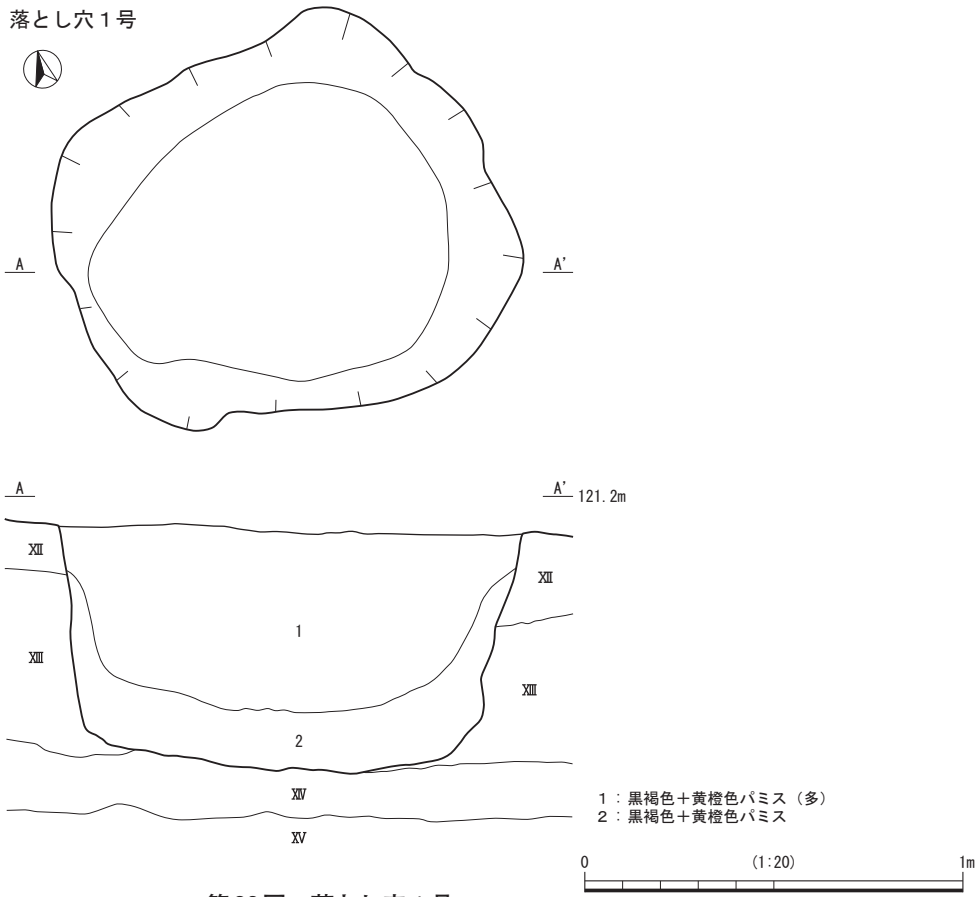
検出状況　Ｃ－２区，Ⅻ層で検出された。

形　状　平面形状は不定形円形で，杭跡は確認されていない。底面はⅩⅣ層まで達する。

規　模　平面形は長軸1.22m，短軸1.01m，底面の長軸0.94m，短軸0.76m，検出面からの深さ0.62㎝である。

埋　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミス（埋土１>埋土２）を含む土である。また埋土２は，埋土１より黄橙色パミスの粒子がやや大きめである。

出土遺物　遺物の出土は見られない。



第60図　落とし穴１号

落とし穴２号（ST２：第61図）

検出状況　Ｅ－８・９区，Ⅻ層で検出された。

形　　状　平面形状は不定形円形で，南側中位に段を有する。杭跡は確認されていない。

規　　模　平面形は長軸1.43m，短軸1.10mで，底面の長軸0.58m，短軸0.58m，検出面からの深さ0.86mである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に薩摩火山灰を含む土である。埋土２は，黒茶褐色の土に薩摩火山灰ブロックを含む土である。埋土３は，暗茶褐色の土に薩摩火山灰を含む土である。他の落とし穴とは，埋土状況が異質である。

出土遺物　遺物の出土は見られない。

タイプⅡ

落とし穴３号（ST３：第61図）

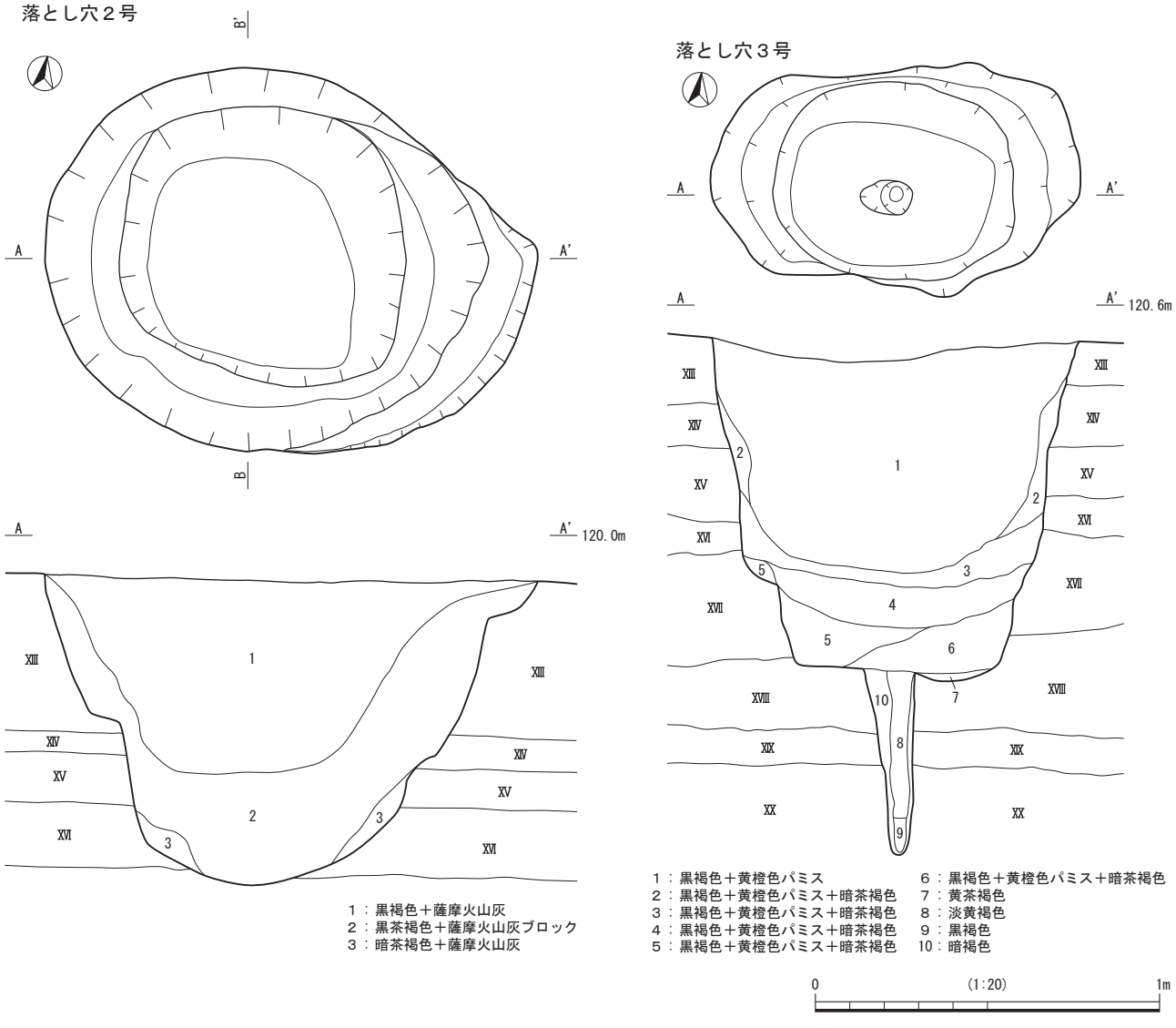
検出状況　Ｃ－４区，Ⅻ層で検出された。

形　　状　平面形状は不定形横長で，底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規　　模　平面形は長軸1.07m，短軸0.62mで，底面の長軸0.58m，短軸0.40m，検出面からの深さ0.90mである。杭跡の深さは0.53mである。

埋　　土　埋土は10に分かれる。埋土１～埋土６は，いずれも黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土３>埋土２>埋土６＝埋土５>埋土４となる。また，埋土２～埋土６には暗茶褐色の土（埋土２～埋土５>埋土６）も含まれる。埋土７は，黄茶褐色の土である。埋土８は，淡黄褐色の土で硬質である。埋土９は，黒褐色の土で砂質である。埋土10は，暗褐色の土で砂質である。

出土遺物　遺物の出土は見られない。



第61図　落とし穴２号・落とし穴３号

落とし穴４号（ST４：第62図）

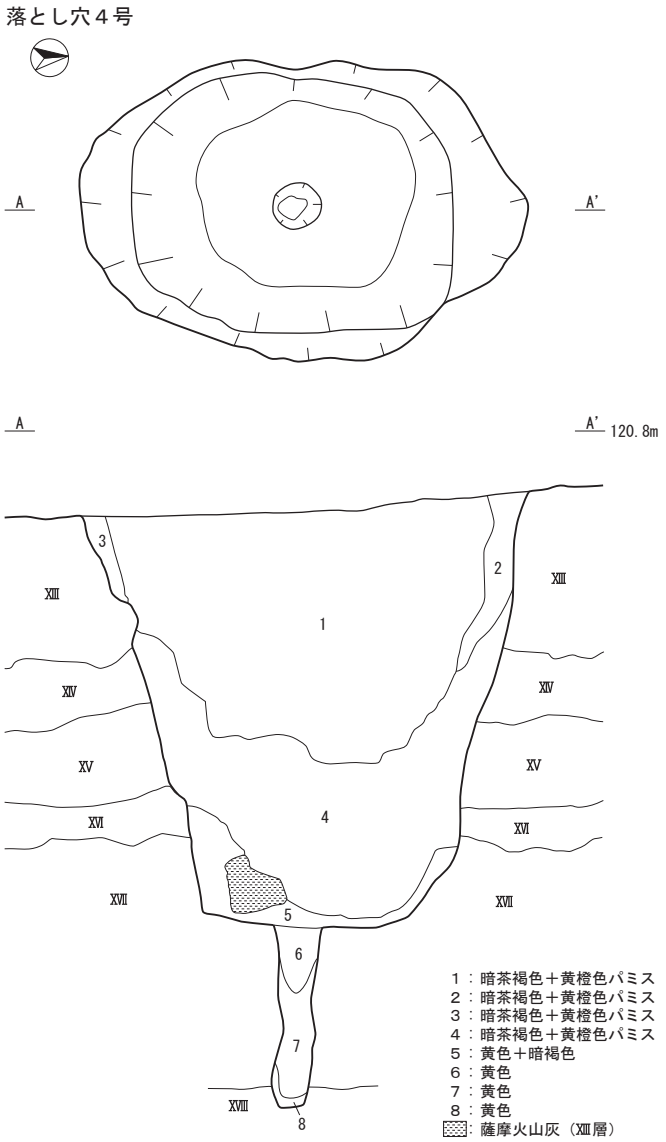
検出状況　Ｃ－２区，Ⅻ層で検出された。

形　　状　平面形状は不定形横長で，底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規　　模　平面形は長軸1.18m，短軸0.77mで，底面は長軸0.54m，短軸0.48m，検出面からの深さ1.10mである。杭跡の深さは0.47mである。

埋　　土　埋土は８つに分かれる。埋土１～埋土４は，いずれも暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１＝埋土２<埋土３＝埋土４）や黄橙色パミスの包含量（埋土３<埋土４<埋土２<埋土１）の違い等で分層した。埋土５～埋土８は，いずれも黄色の土である。包含物や質感の違い（埋土５：暗褐色の土が混入，埋土６：やや硬め，埋土７：粒子が小さく砂質，粒子が極小で軟質且つ粘質）等で分層した。

出土遺物　遺物の出土は見られない。



第62図　落とし穴４号

落とし穴５号（ST５：第63図）

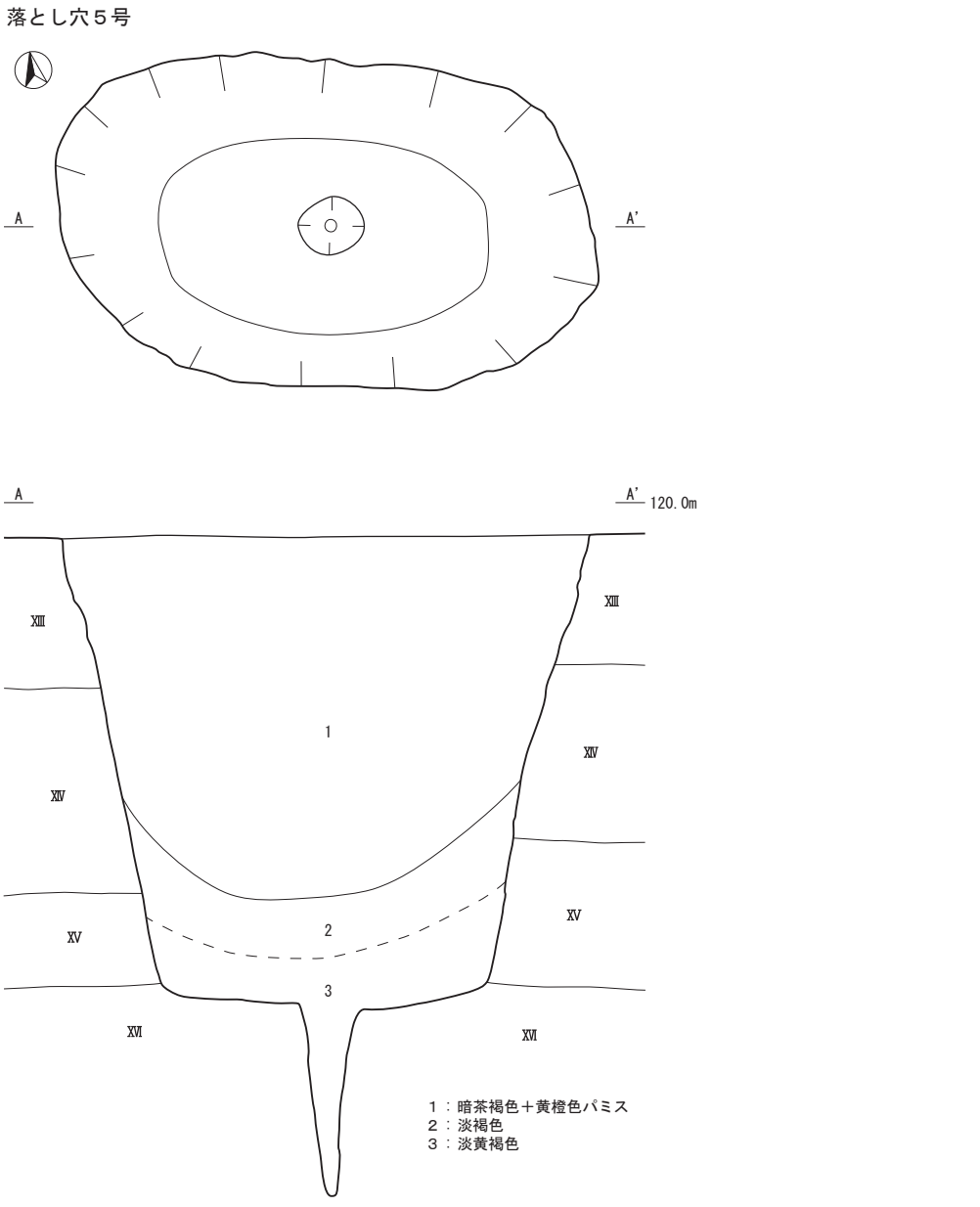
検出状況　Ｃ－８区，XIII層で検出された。

形　　状　平面形状は横長で，底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規　　模　平面形は長軸1.44m，短軸0.88mで，底部の長軸0.88m，短軸0.52m，検出面からの深さ1.25mである。杭跡の深さは0.55mである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，淡褐色でやや柔らかい土である。埋土３は，淡黄褐色の土で杭跡には，砂質が強い土が多く含まれている。

出土遺物　遺物の出土は見られない。



第63図　落とし穴５号

落とし穴６号（ST６：第64図）

検出状況　Ｄ－７区，Ⅻ層で検出された。

形　　状　平面形状は方形で，底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規　　模　平面形は長軸0.94m，短軸0.69mで，底面は長軸0.50，短軸0.30m，検出面からの深さ1.21mである。杭跡の深さは0.36mである。

出土遺物　遺物の出土は見られない。

落とし穴７号（ST７：第64図）

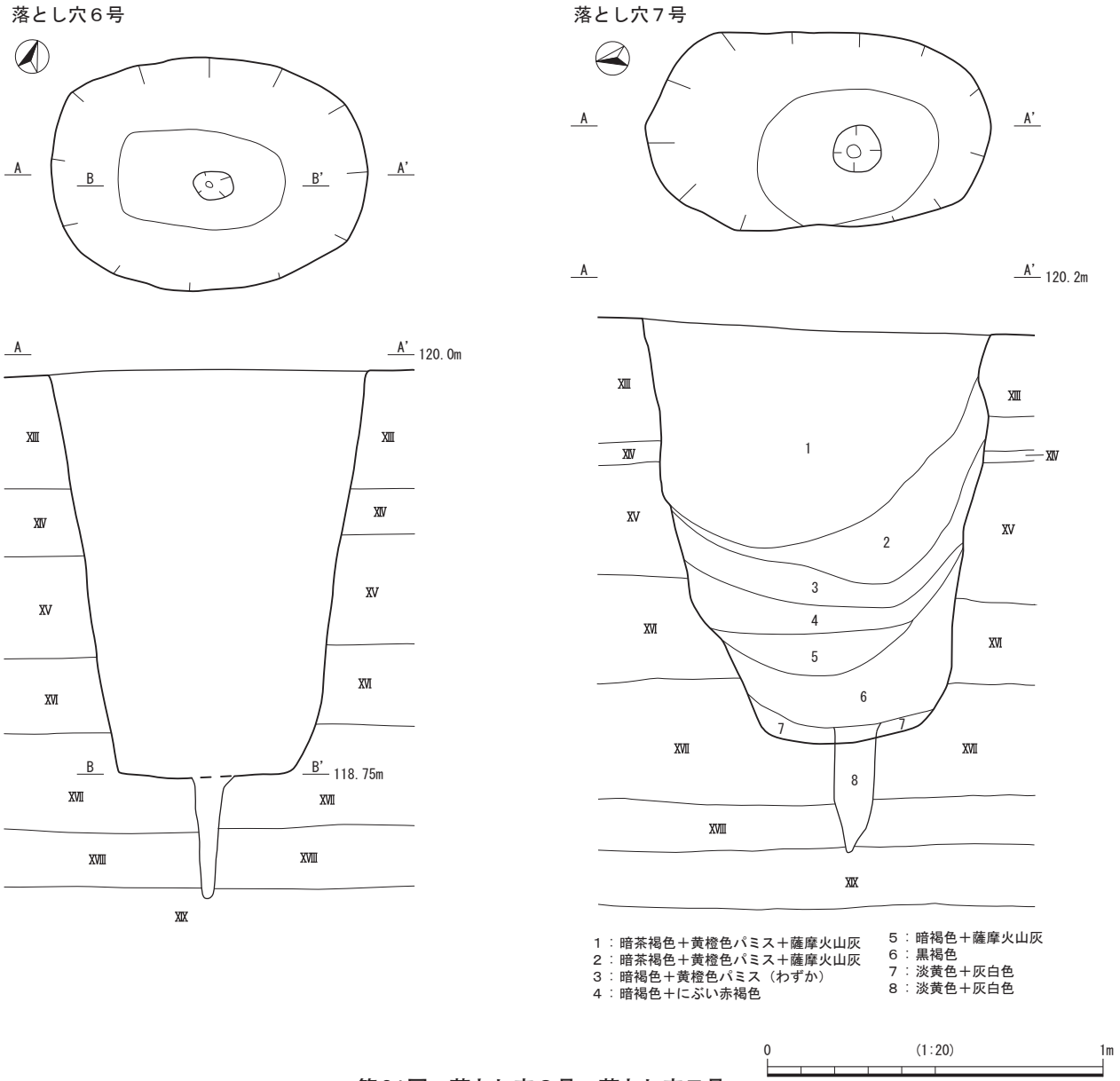
検出状況　Ｂ－１区，Ⅻ層で検出された。

形　　状　平面形状は横長で，底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規　　模　平面形は長軸1.02m，短軸0.57mで，底面の長軸0.50m，短軸0.38m，検出面からの深さ1.22mである。杭跡の深さは0.37mである。

埋　　土　埋土は８つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰を含む土である。色調の明るさの違い（埋土１>埋土２）で分層した。埋土３・埋土４・埋土５は，いずれも暗褐色の土である。包含物（埋土３：わずかな黄橙色パミス，埋土４：にぶい赤褐色の土，埋土５：薩摩火山灰）の違い等で分層した。埋土６は，黒褐色の土で，他の包含物はほとんど含まれない。埋土７・埋土８は，ともに淡黄色の土に灰白色の土を含む土である。灰白色の土の包含量（埋土７>埋土８）や砂質の強さ（埋土７<埋土８）で分層した。埋土８は，杭跡のみに確認された埋土である。

出土遺物　遺物の出土は見られない。



第64図　落とし穴６号・落とし穴７号

落とし穴８号（ST８：第65図）

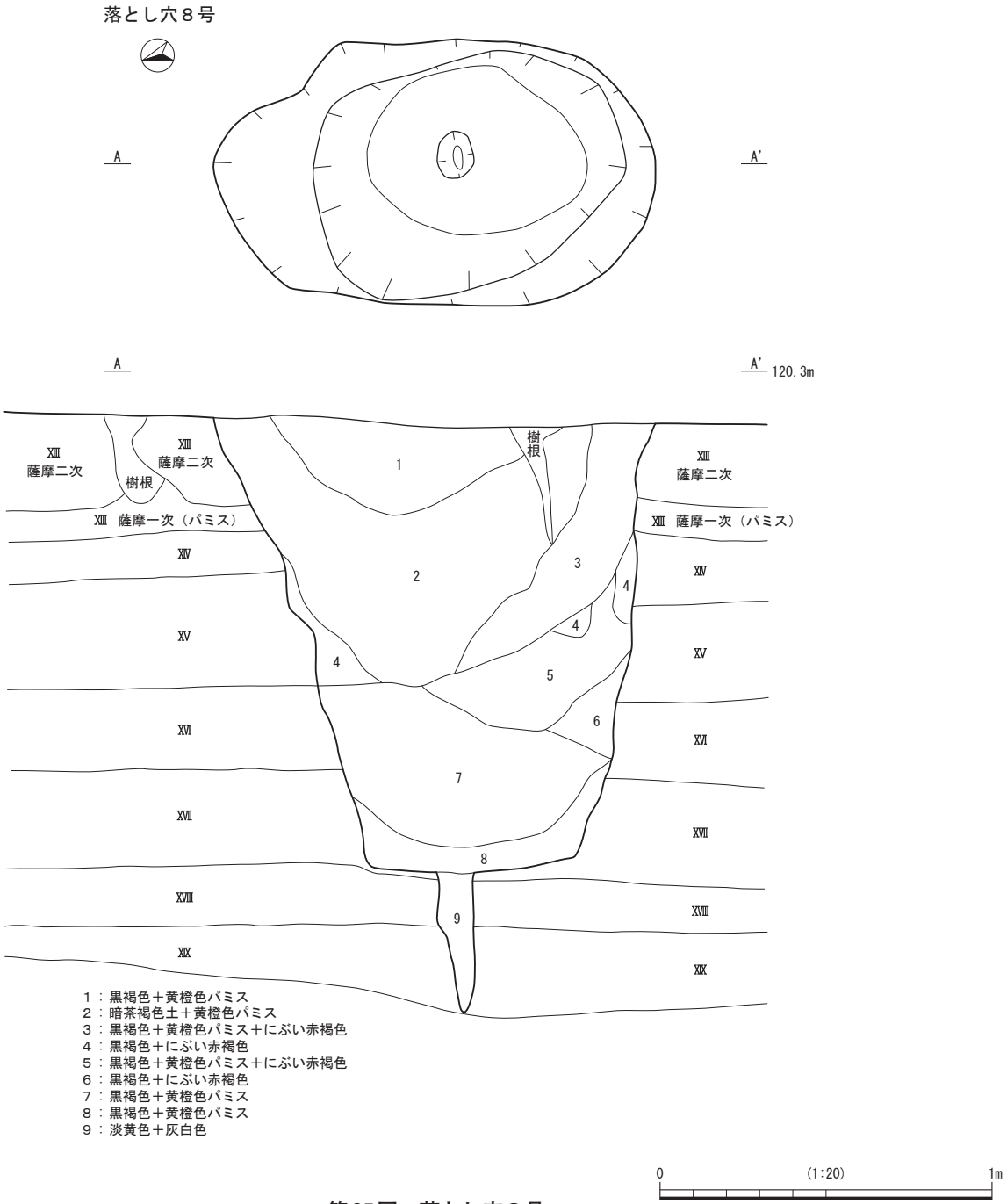
検出状況　Ｂ－100区，XIII層で検出された。

形　　状　平面形状は不定形横長で，底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規　　模　平面形は長軸1.33m，短軸0.79mで，底面の長軸0.66m，短軸0.50m，検出面からの深さ1.34mである。杭跡の深さは0.42mである。

埋　　土　埋土は９つに分かれる。埋土１・埋土３～埋土８は，いずれも黒褐色の土である。各層の黄橙色パミスの包含量は，埋土１＝埋土３＝埋土７>埋土５>埋土８となり，埋土４・埋土６には含まれない。また，にぶい赤褐色の土の混入量は，埋土４>埋土３>埋土５＝埋土６となり，埋土１・埋土７・埋土８には含まれない。埋土２は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土９は，淡黄色の土に灰白色の土が混ざり，やや粘性のある砂質で杭跡のみに確認された埋土である。

出土遺物　遺物の出土は見られない。



第65図　落とし穴８号

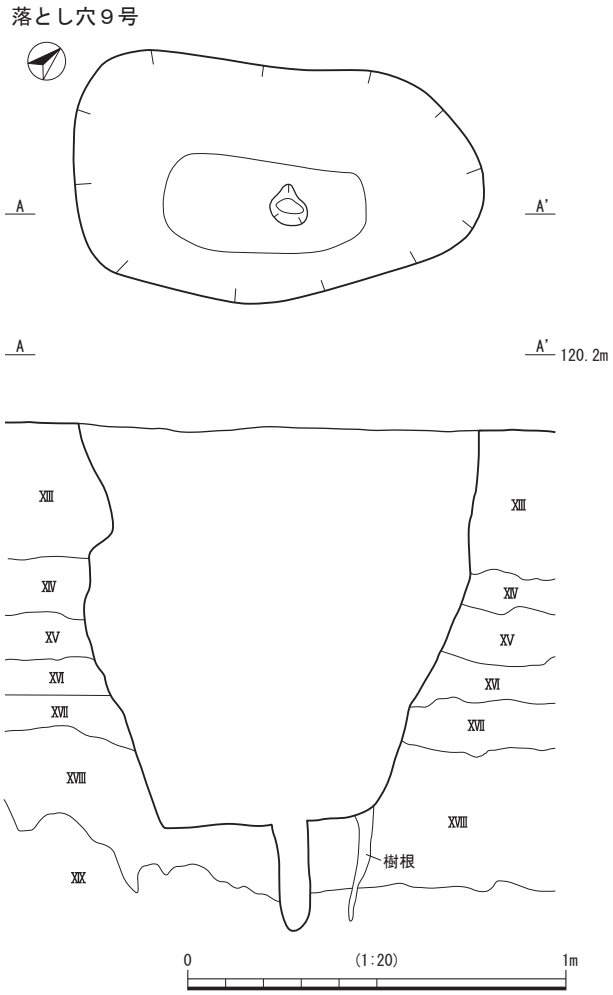
落とし穴９号（ST９：第66図）

検出状況　Ｄ－11区，Ⅻ層で検出された。

形　　状　平面形状は横長で，底面のほぼ中央に杭跡をもつ。また，壁面や底面には工具痕が確認されている。

規　　模　平面形は長軸1.06m，短軸0.62mで，底面の長軸0.54m，短軸0.24m，検出面からの深さ1.32mである。杭跡の深さは0.28mである。

出土遺物　遺物の出土は見られない。



第66図　落とし穴９号

第12表　落とし穴一覧表

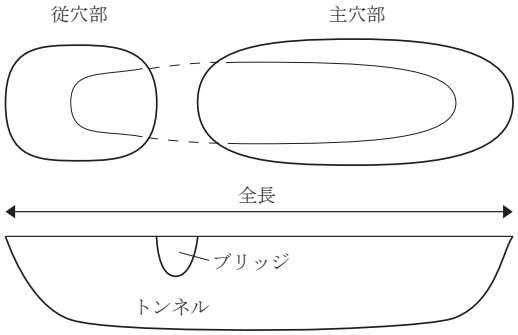
遺構名	検出区	検出層	平面形状	検出面			底面		杭跡（数）（深さm）	断面形状値（長軸÷深さ）	タイプ	備　　考
				長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	長軸（m）	短軸（m）				
ST１	Ｃ－２	Ⅻ	不定形円形	1.22	1.01	0.62	0.94	0.76	—	1.97	Ⅰ	
ST２	Ｅ－８・９	Ⅻ	不定形円形	1.43	1.10	0.86	0.58	0.58	—	1.66	Ⅰ	
ST３	Ｃ－４	Ⅻ	不定形横長	1.07	0.62	0.90	0.58	0.40	１つ（0.53）	1.19	Ⅱ	
ST４	Ｃ－２	Ⅻ	不定形横長	1.18	0.77	1.10	0.54	0.48	１つ（0.47）	1.07	Ⅱ	
ST５	Ｃ－８	Ⅻ	横長	1.44	0.88	1.25	0.88	0.52	１つ（0.55）	1.15	Ⅱ	
ST６	Ｄ－７	Ⅻ	方形	0.94	0.69	1.21	0.50	0.30	１つ（0.36）	0.78	Ⅱ	
ST７	Ｂ－１	Ⅻ	横長	1.02	0.57	1.22	0.50	0.38	１つ（0.37）	0.84	Ⅱ	杭跡の深さは，見通し
ST８	Ｂ-100	Ⅻ	不定形横長	1.33	0.79	1.34	0.66	0.50	１つ（0.42）	0.99	Ⅱ	
ST９	Ｄ-11	Ⅻ	横長	1.06	0.62	1.32	0.54	0.24	１つ（0.28）	0.80	Ⅱ	

(3)　連穴土坑（略記号：SV）

本遺跡では，２つの土坑が地中のトンネルで繋がった土坑をセットで連穴土坑と称した。また，明確な地中のトンネルは見られないが，ブリッジが崩落したと考えられるものも連穴土坑とした。連穴土坑は，平成23年度の調査で13基，平成24年度の調査で５基，平成25年度の調査で４基，平成26年度の調査で18基の計40基が検出された。

本報告書では，下記に示すように連穴土坑の各部分に名称を付けている。

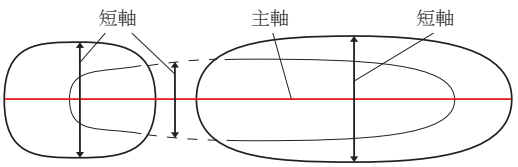
従 穴 部：連穴土坑の小さい方の土坑をいう。
主 穴 部：連穴土坑の大きな方の土坑をいう。
トンネル：小さな土坑と大きな土坑が地中で繋がっている空間部分をいう。
ブリッジ：トンネルの上にあたる部分をいう。
全　　長：ブリッジ部分を含む，主穴部外端から従穴部外端までの長さを表す。



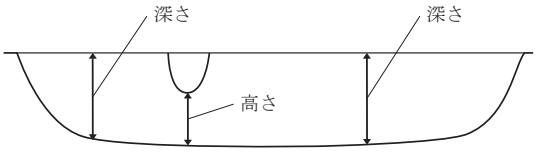
第67図　連穴土坑の各部の名称①

また，従穴部・トンネル・主穴部の規模を計測するにあたり，次のような決まりを設定した。

主　軸：従穴部・ブリッジ・主穴部のほぼ中心を通り，全長・従穴部・主穴部それぞれの主軸の長さ。
従穴部位置：主軸に沿って，主穴部から従穴部方向をいう。
短　軸：従穴部・トンネル・主穴部のそれぞれの主軸の真ん中で，主軸に対して垂直に交わり，各部の端までの長さ。
深　さ：従穴部・主穴部それぞれの主軸と短軸が交わる点での，検出位置から底面までの長さ。
高　さ：トンネルの主軸と短軸が交わる点から底面までの長さ。

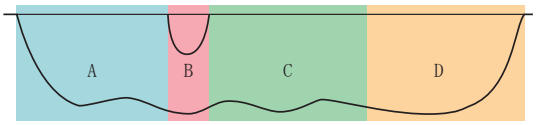


第68図　連穴土坑の各部の名称②



第69図　連穴土坑の各部の名称③

また，次のような範囲を設定し，記号（Ａ～Ｄ）を付け，一覧表（第19表～第21表）では，最深部にあたる位置のアルファベットに○を付した。さらに，底面の傾斜方向が分かるよう矢印等（→：右へ下る，←：左へ下る，―：ほぼ平坦）で示した。最深部の範囲や傾斜に関して，５㎝未満の差は，平坦として取り扱っている。



第70図　連穴土坑の最深部位置の範囲

Ａ：従穴部の範囲
Ｂ：ブリッジの範囲
Ｃ：主穴部のブリッジ側半分の範囲
Ｄ：主穴部のブリッジ側でない半分の範囲

最深部が不明なものは４基ある。最深部の位置する範囲は，以下のようになる。（色つけ部分が最深部）

第13表　連穴土坑の最深部位置

A	B	C	D	基数（36基に対する割合）
	11			B　：11基　(31％)
	8	8		BC　：８基　(22％)
4	4	4		ABC　：４基　(11％)
4				A　：４基　(11％)
3	3			AB　：３基　（８％）
		2		C　：２基　（６％）
1	1	1	1	ABCD：１基　（３％）
	1	1	1	BCD　：１基　（３％）
		1	1	CD：１基　（３％）
			1	D：１基　（３％）
12	28	17	4	←各最深部位置の基数

各範囲の底面の傾斜方向が分かるものは，36基ある。各範囲の傾斜方向の数をまとめたものを以下に示す。

第14表　連穴土坑の底面傾斜方向

範囲	方向	範囲	方向	範囲	方向	範囲	基数
A		B		C	←	D	26 基
A	→	B		C		D	21 基
A		B	←	C		D	17 基
A		B	→	C		D	4 基
A	←	B		C		D	4 基
A		B		C	→	D	1 基

主穴部（ＣＤ）へ向って傾斜するものは少なく，ブリッジ（Ｂ）へ向って傾斜するものが多い。

さらに，ブリッジの残存状況を，残存状況がよいものには○を，一部崩落がしているものには△を，崩落が著しいものには×を表に付している。

検出状況　単独で検出された連穴土坑は35基である。他の遺構と切り合って検出された連穴土坑は５基である。そのうち，連穴土坑１号・９号・21号の３基は，竪穴住居跡と重複して検出され，連穴土坑16号・17号の２基は，互いに重複して検出されている。連穴土坑の検出層は，XI 層で３基，XIII層で37基，IX，X，XII 層では検出されていない。

形　状　従穴・主穴の形状について，以下のような定義を設定した。

縦長：（従穴部・主穴部のそれぞれの短軸）÷（従穴部・主穴部のそれぞれの主軸）が，0.7未満，もしくは1.3より大きいもので，主軸に対して上下に広がる形。

不定形縦長：形状が整っていないと判断した縦長。

横長：（従穴部・主穴部のそれぞれの短軸）÷（従穴部・主穴部のそれぞれの主軸）が，0.7未満，もしくは1.3より大きいもので，主軸に対して左右に広がる形。

不定形横長：形状が整っていないと判断した横長。

方形・円形：（従穴部・主穴部のそれぞれの短軸）÷（従穴部・主穴部のそれぞれの主軸）が，0.7 ～ 1.3のもの。

不定形方形：形状が整っていないと判断した方形。

不定形円形：形状が整っていないと判断した円形。

タイプ：形態分類のことである。

Ⅰ類：縦長・不定形縦長

Ⅱ類：横長・不定形横長

Ⅲ類：方形・不定形方形・円形・不定形円形

従穴部・主穴部の形態分類は，以下のようになる。

第15表　連穴土坑の従穴部と主穴部の形状タイプ

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	不明
従穴部	17基	0基	20基	3基
主穴部	0基	36基	0基	4基

第16表　従穴部と主穴部の形状タイプ組み合わせ

従穴部	主穴部	計
Ⅰ類	Ⅱ類	16基
Ⅲ類	Ⅱ類	20基

従穴部と主穴部の組み合わせは，「Ⅲ類（従穴部）＋Ⅱ類（主穴部）」が20基，「Ⅰ類（従穴部）＋Ⅱ類（主穴部）」が16基である。

従穴部位置をまとめると，以下（第71図）のようになる。北から南西方向に位置するものが多い。

規　模　全長を把握できた連穴土坑は37基である。検出層の違いがあることから一概にはいえないが，最大のものが連穴土坑20号（検出層：XIII層）の2.35ｍ，最小のものが連穴土坑28号（検出層：XIII層）の1.45ｍ，平均値が1.76ｍであった。1.5ｍ台・1.7ｍ台の連穴土坑が各９基で，それぞれ全体のおよそ25％を占める。

第71図　連穴土坑の主軸の方向

本遺跡の連穴土坑の従穴部・ブリッジ・主穴部の各主軸・各短軸の平均値を以下に示す。

第17表　従穴部・ブリッジ・主穴部の主軸・短軸の平均値

	主軸平均値（m）	短軸平均値（m）
従穴部	0.35	0.47
ブリッジ	0.16	0.33
主穴部	1.27	0.64

本報告書では，主穴部と従穴部の規模差を比較するため，「主従値」を提示した。主従値は，「（主穴部の主軸）÷（従穴部の主軸）×（主穴部の短軸）÷（従穴部の短軸）」で求めた。つまり，この値が大きい程，規模差が大きいということになる。

第18表　主従値

	主従値
平　均	5.45
最大値	9.26（SV4）
最小値	2.41（SV23）

分　布　調査区の中央部を境に，調査区の西側（調査区Ｂ・Ｃ）と東側（調査区Ｆ）に集中して広がる傾向が見られる。以下の点に着目して，連穴土坑の分布を示す。

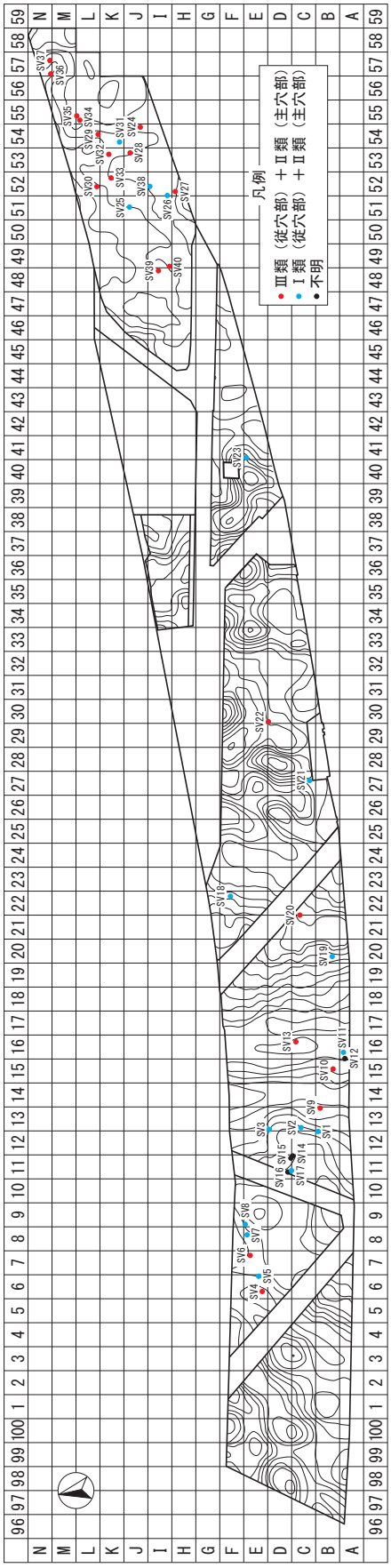
ア　タイプ別（第72図）

「Ⅲ類（従穴部）＋Ⅱ類（主穴部）」のタイプは，赤（●）で，「Ⅰ類（従穴部）＋Ⅱ類（主穴部）」のタイプは，青（●）で，不明は黒（●）で示している。

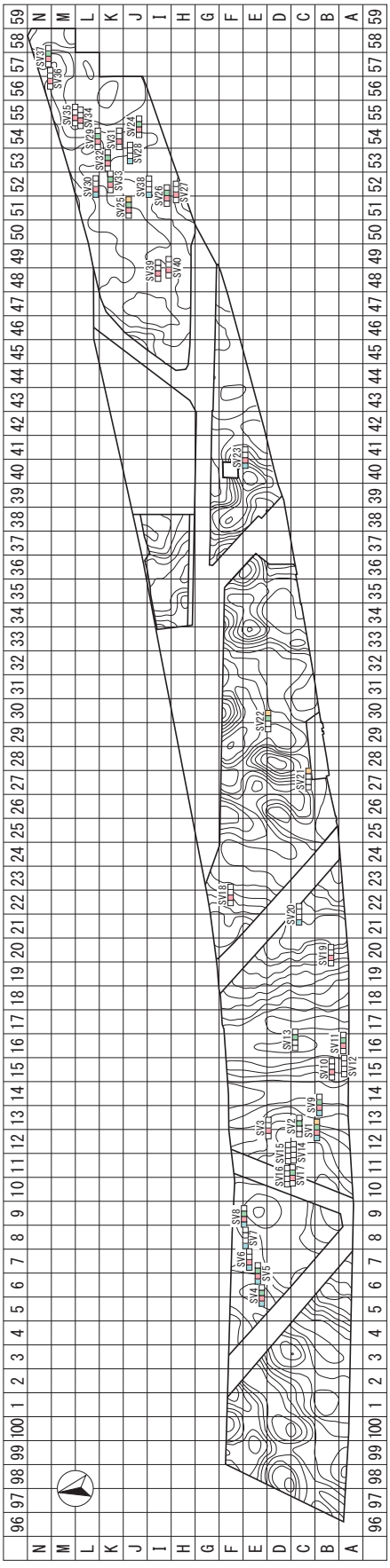
イ　最深部位置別（第73図）

連穴土坑の最深部位置（第13表）に付した色別に示している。

各連穴土坑　本遺跡で検出された連穴土坑を検出した順に報告する。



第72図　連穴土坑タイプ別分布図



第73図　最深部位置別分布図

連穴土坑１号（SV１：第74図）

検出状況　SV１は，B-12・13区において，従穴部，ブリッジはXⅢ層上面で，主穴部の一部は，竪穴住居跡１号（SH１）の床面で検出された。SH１の調査中から，従穴部が北側に確認されており，SH１調査前に調査を行った。

切り合い　SH１と切り合い，SV１は，SH１の後に構築されている。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。底面全体が最深部（ＡＢＣＤ）で，本遺跡の中では，このSV１のみがもつ底面形状である。従穴部は，底面から壁面をやや掘り込み，内傾しながら立ち上がった後，急傾斜になり一段有して再度急傾斜で開口する。主穴部は，壁面から急傾斜で立ち上がった後，SH１の底面に達する。ブリッジ断面は，角が丸みを帯び，下部が鋭角となるホームベース状に近いが，従穴部の方へ鋭角に掘り込まれている。

規　　模　全長は1.58ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，やや短めである。主従値は5.89で本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑２号（SV２：第74図）

検出状況　SV２は，C-13区において，XⅢ層上面で検出された。また，検出時には，時期の新しいピットが主穴部に確認されていた。調査終了後に，主軸に合わせて断ち割ったが，底面下に変化は見られなかった。

切り合い　切り合いは，ない。

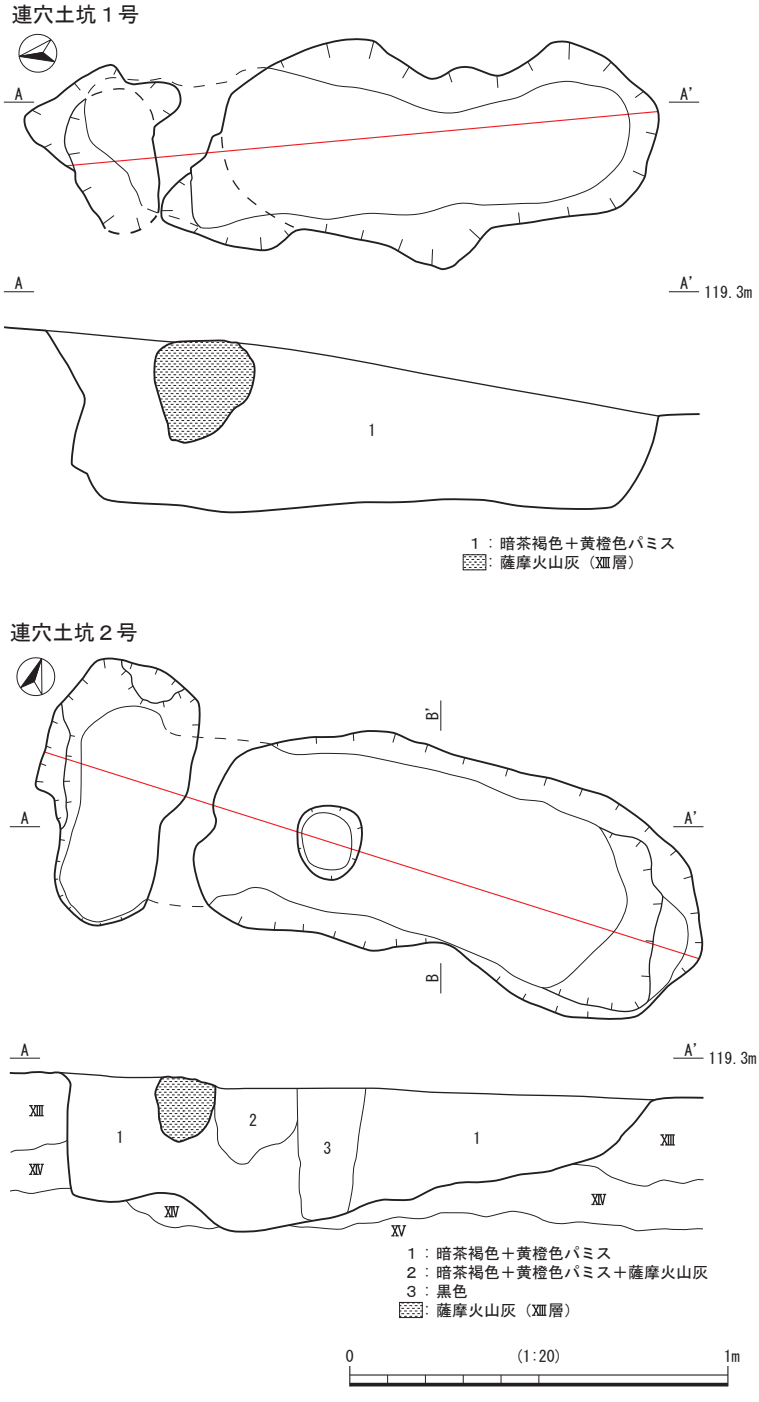
形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，主穴部（C）である。従穴部は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は，最深部位置から緩やかにスロープ状に立ち上がった後，壁面からラッパ状に開口する。ブリッジ断面は，下部が幅狭となり丸みを帯びる縦長の四角形である。

規　　模　全長は1.81ｍで，本遺跡の連穴土坑のほぼ平均的な長さである。主従値は2.54で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が２番目に小さい。

埋　　土　埋土は，３つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，ブリッジの主穴側上部にのみ堆積し，埋土１に薩摩火山灰（XⅢ層）が混入している土である。埋土３は，新しい時期のピットに伴う埋土で，黒色の土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物は，トンネル付近で，小粒のものがわずかに確認されたが，採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。



第74図　連穴土坑１号・連穴土坑２号

連穴土坑３号（SV３：第75図）

検出状況　SV３は，D-13区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（B）である。従穴部は，最深部位置からやや緩やかに立ち上がった後，ほぼ垂直に開口する。主穴部は，最深部位置からへの字を描くような形状で，壁面でほぼ垂直に立ち上がり，その後ラッパ状に開口する。ブリッジは，縦長の長方形で構築時に近い形状で崩落したと思われる。

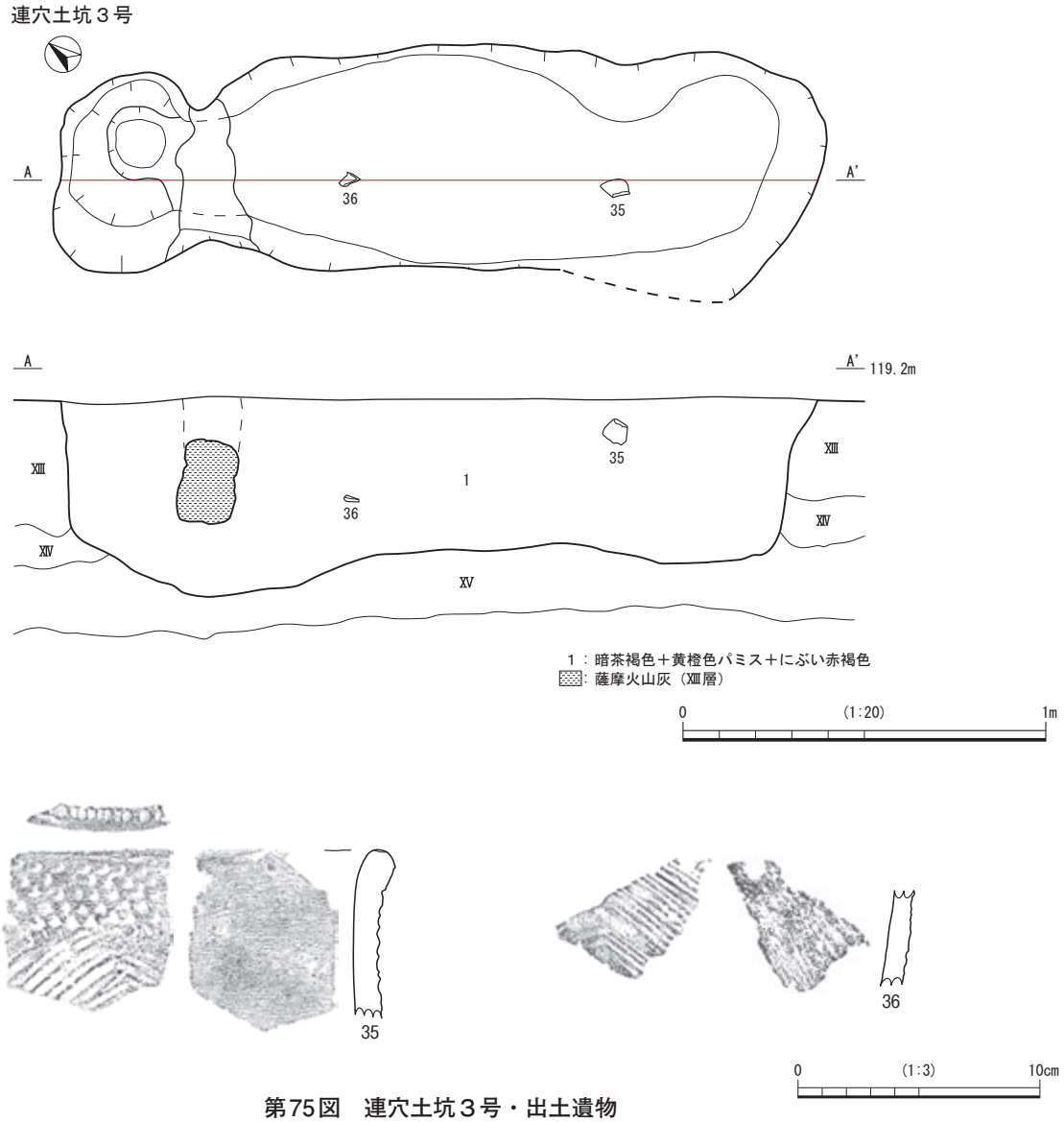
規　　模　全長は2.08ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，３番目に長い。主従値は5.77で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土に，にぶい赤褐色粘質の土（XIV層）が混入している土である。

出土遺物　埋土中からは，土器片２点が出土し，２点とも図化した。35（第75図）は，口縁部片である。やや外反する口縁部外面には斜位貝殻刺突文を施し，その刺突文直下から綾杉状の条痕文を施す。また，ぷっくりと膨れた口唇部頂部に幅３～５㎜程度のキザミを施す。内面は，ナデをおこなう。36は，外面に斜位貝殻条痕文を施す胴部で，内面は，ナデをおこなう。この２点は接合しなかったことや，条痕文の幅の違いから同一個体ではないと判断した。

土器分類　35・36は，ともにⅣ類に該当する。

炭 化 物　主穴部のブリッジ側底面から１cmほどの炭化物が出土し採取したが，科学分析等は行っていない。明確な焼土は確認されなかった。



第75図　連穴土坑３号・出土遺物

連穴土坑４号（SV４：第76図）

検出状況　SV４は，E－６区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部～主穴部ブリッジ側（ＡＢＣ）となる。従穴部は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は，最深部位置から水平に半分まで広がった後，ほぼ垂直に立ち上がり，その後段を有するようにスロープ状に開口する。トンネルの主軸は，本遺跡の連穴土坑の中では最大である。ブリッジ断面は，横長の長方形であるが，下部は主穴部から従穴部へとやや鋭角に掘り込まれている。

規　　模　全長は1.95ｍで，本遺跡の連穴土坑の中では，長めである。主従値は9.26と本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が最も大きい。従穴部と主穴部の規模差や，トンネルの主軸の長さ，主穴部の底面からの立ち上がりの様子から，他の連穴土坑と様子が異なる。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。

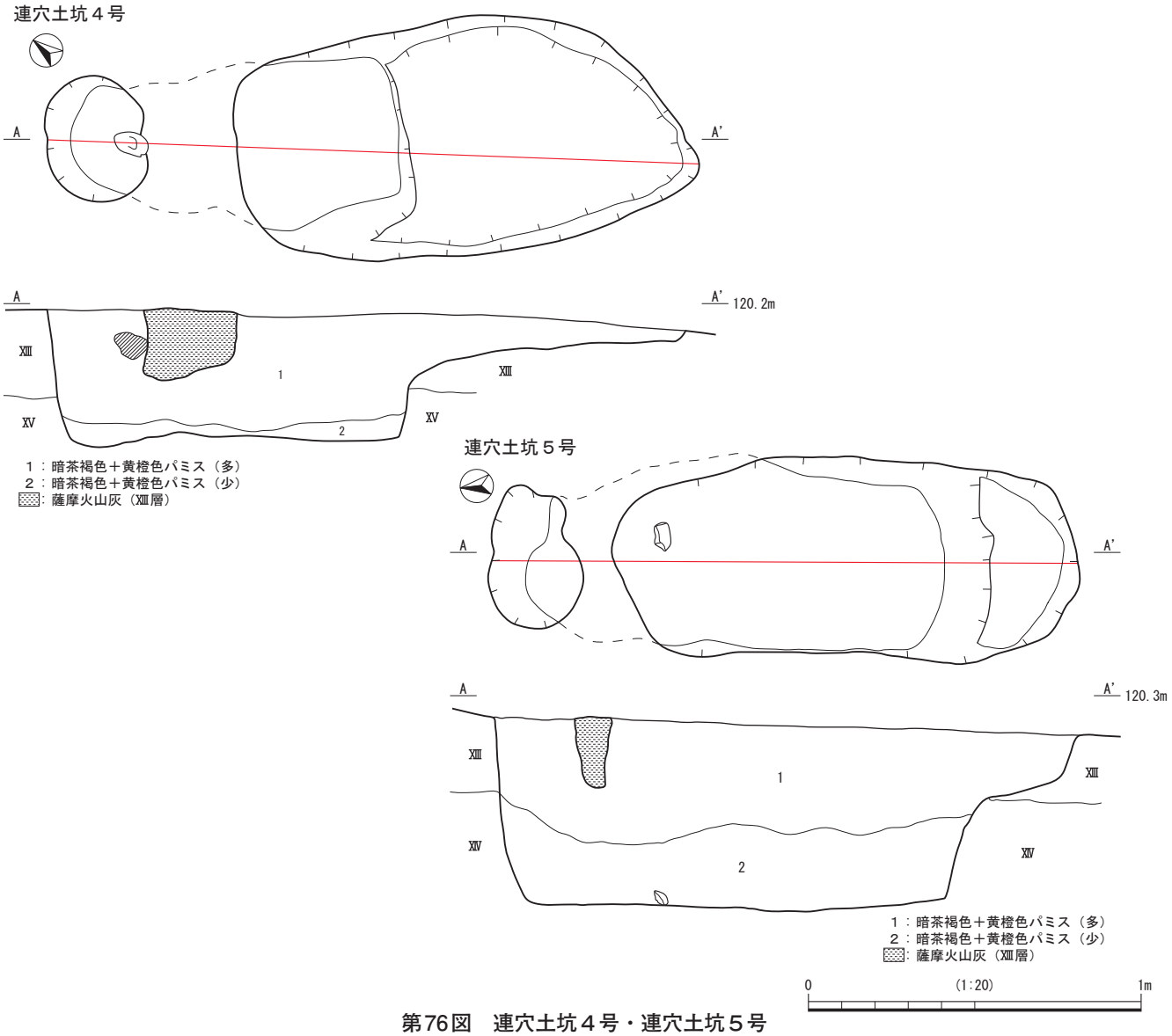
出土遺物　礫がブリッジに刺さるように出土したが，石器ではなかった。

炭 化 物　埋土中に，極小の炭化物をわずかに確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑５号（SV５：第76図）

検出状況　SV５は，E－６区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。



第76図　連穴土坑４号・連穴土坑５号

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部～主穴部ブリッジ側（ＡＢＣ）となる。従穴部は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は，最深部位置からほぼ水平に広がり，壁面でやや垂直気味に立ち上がった後，一段有するように緩やかになり，再度やや垂直気味に開口する。ブリッジ断面は，従穴部が掘り込まれる舌状形である。

規　　模　全長は1.77ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は7.53で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が大きい。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。

出土遺物　礫が底面で１点出土したが石器ではなかった。

炭 化 物　埋土中に，極小の炭化物をわずかに確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑６号（SV６：第77図）

検出状況　SV６は，Ｅ－７区において，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

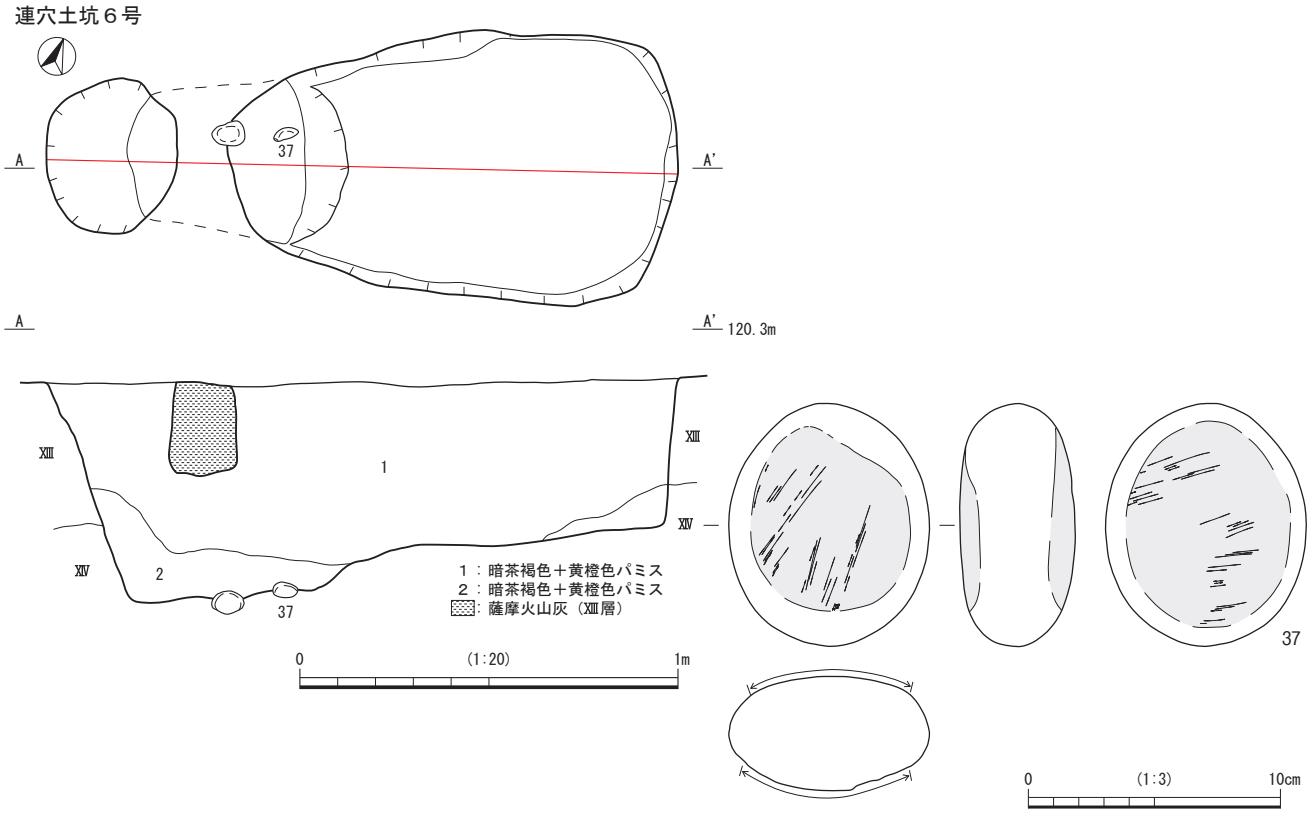
形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部とブリッジ下（ＡＢ）である。従穴部は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。主穴部は，最深部位置から，やや緩やかに５㎝程度立ち上がった後，一段有するように水平面が広がり，壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は，下部が若干幅広くなる縦長の台形状である。

規　　模　全長は1.67ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は5.98で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は２つに分かれ，埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。

出土遺物　埋土中から，遺物が２点出土した。そのうち１点は石器１点で，もう１点は礫であった。石器を図化した。37（第77図）は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。

炭 化 物　炭化物は，従穴部底面及び主穴部底面で確認され，採取した。従穴部で採取した炭化物は，科学分析の結果から^{14}C年代測定は8,149–7,966calBCを，主穴部で採取した炭化物の^{14}C年代測定は8,010–7,781calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。



第77図　連穴土坑６号・出土遺物

連穴土坑７号（SV７：第78図）

検出状況　SV７は，E－８区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部（A）である。従穴部は，底面からやや垂直気味に立ち上がる。主穴部は，最深部位置からスロープ状に緩やかに立ち上がった後，壁面でやや膨らみをもちながら垂直気味に開口する。ブリッジ中央部は崩落しているが，南西側にやや残存していることから，推定ラインを破線で示した。

規　　模　全長は1.72ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は7.41で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土である。埋土１には，黄橙色パミスを含み，埋土２には，黄橙色パミスを含まないことから，分層した。

出土遺物　礫が底面で１点出土したが，石器ではなかった。

炭 化 物　ブリッジ下の底面付近で炭化物が多く確認され，採取した。採取した炭化物は，科学分析の結果から^{14}C年代測定は8,235-7,963calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑８号（SV８：第78図）

検出状況　SV８は，E－９区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

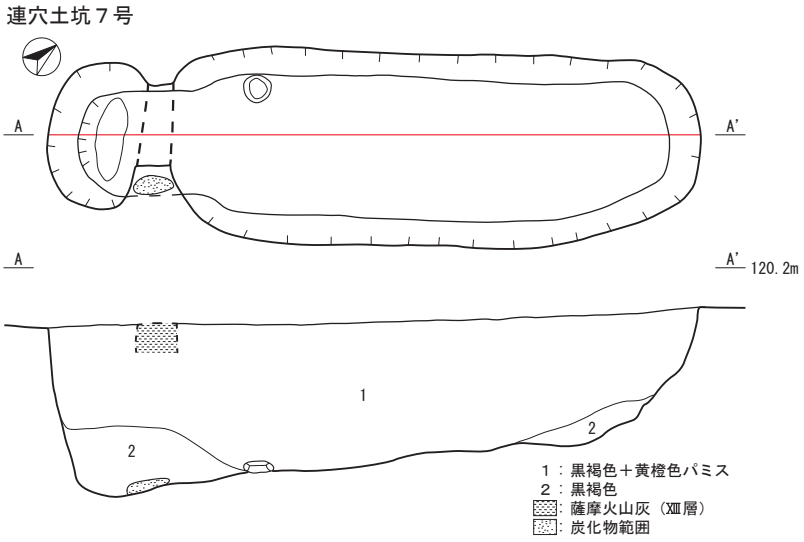
形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部～主穴部ブリッジ側（ＡＢＣ）となる。従穴部は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。主穴部は，最深部位置から水平に広がった後，10cm程度垂直気味に立ち上がり，一段有して壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジは，崩落して埋土中にその痕跡の一部は確認できるが，形状は不明である。

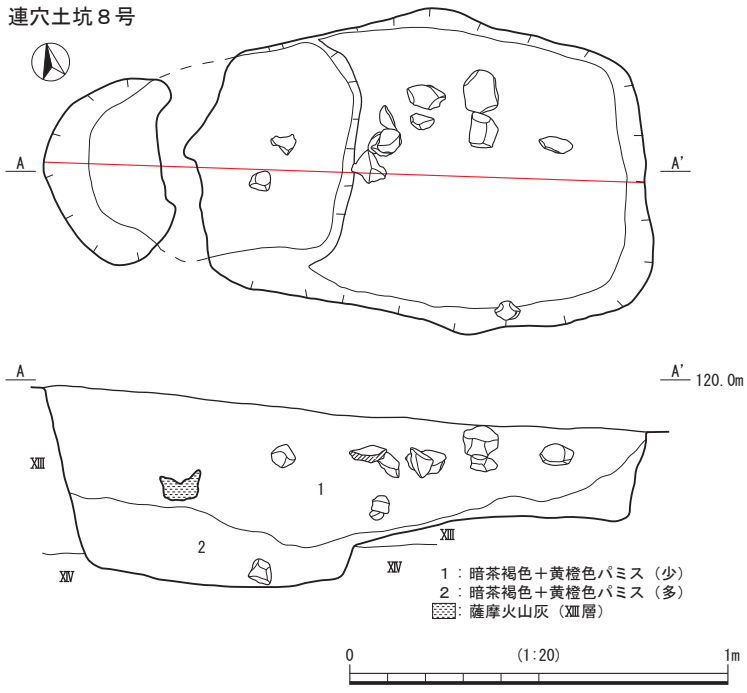
規　　模　全長は1.59ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，短めの長さである。主従値は6.94で，本遺跡の中では，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの量（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。

出土遺物　埋土中に流れ込むように礫が12点出土しているが，石器等は含まれていなかった。

炭 化 物　埋土中に，わずかな炭を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。





第78図　連穴土坑７号・連穴土坑８号

連穴土坑９号（SV９：第79図）

検出状況　SV９は，Ｂ-13・14区において，従穴部，ブリッジはⅩⅢ層上面で，主穴部の一部は，竪穴住居跡３号（SH３）の床面で検出された。

切り合い　SH３と切り合う。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部～主穴部ブリッジ側（ＡＢＣ）となる。従穴部は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は，底面最深部から，スロープ状に立ち上がった後，一段有して，壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジは，多少崩落しているが，構築時のまま崩落したと思われる。ブリッジ断面は，主穴部側が鋭角となる縦長の平行四辺形状であるが，主穴部側が一部掘り込まれている。

規　　模　全長は1.68ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，ほぼ平均的な長さである。主従値は3.13で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が４番目に小さい。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。埋土３は，暗茶褐色の土に薩摩火山灰（ⅩⅢ層）の土が若干混入している土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑10号（SV10：第79図）

検出状況　SV10は，Ｂ-15区において，ⅩⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（Ｂ）である。従穴部は，底面から膨らみをもちながらやや急傾斜で立ち上がる。主穴部は，最深部からスロープ状に立ち上がった後，壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は，従穴部側は，従穴部を左にしてくの字状に，主穴部側は垂直に掘り込まれ，下部が丸みを帯びる縦長状である。

規　　模　全長は1.56ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，短めの長さである。主従値は3.32で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が小さい。

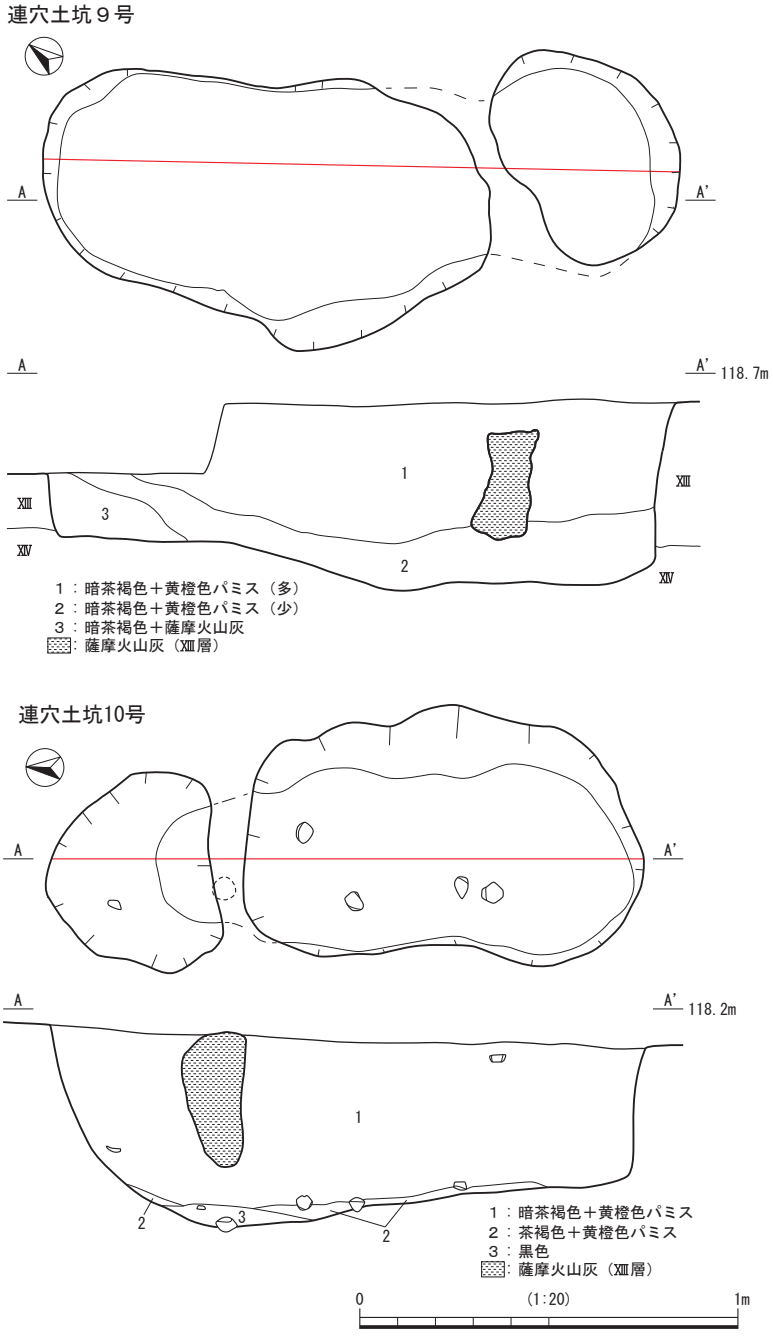
埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土で，埋土のほとんどを占める。埋土３は，黒色で粘性が強い土で，ブリッジの底面付近にのみ堆積する。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土で，埋土３の両端上部に薄く堆積している。

出土遺物　礫が６点出土したが，石器ではなかった。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑11号（SV11：第80図）

検出状況　SV11は，Ａ-16区において，ⅩⅢ層上面で検出された。



第79図　連穴土坑９号・連穴土坑10号

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（ＢＣ）である。従穴部は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がった後，ラッパ状に立ち上がる。主穴部は，最深部位置からやや緩やかに立ち上がりながら一段有した後，壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジは，多少崩落しているが，構築時のまま崩落したと思われる。ブリッジ断面は，縦長の四角形状である。

規　　模　全長は1.50ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，２番目に短い長さである。主従値は3.47で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が小さい。

埋　　土　埋土は，３つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，いずれも暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの大きさ（埋土１<埋土２）や混入している土（埋土３にのみ，にぶい赤褐色の土）の違いで分層した。

出土遺物　礫が３点出土しているが，石器ではなかった。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑12号（SV12：第80図）

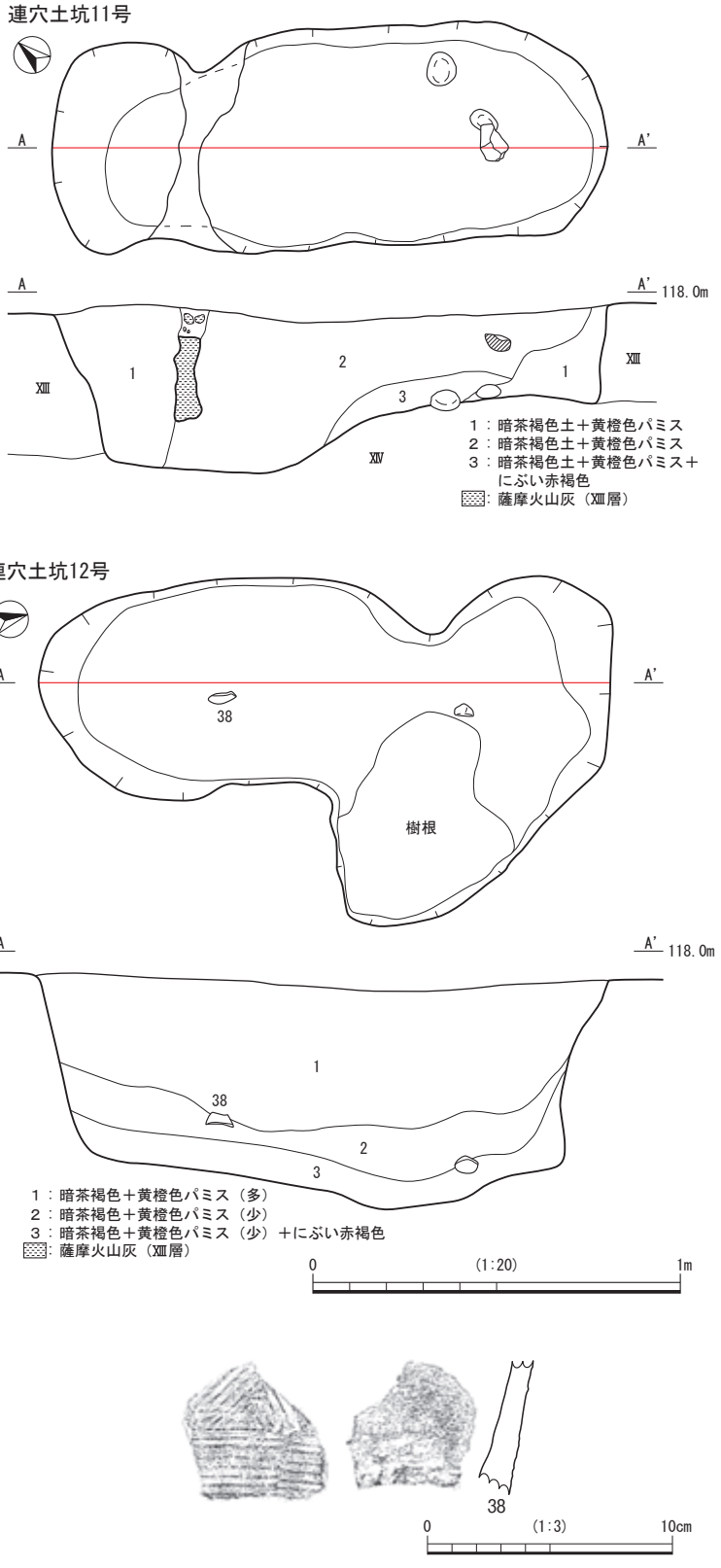
検出状況　SV12は，Ａ-15・16区において，ⅩⅢ層上面で検出された。検出時の平面形状から，連穴土坑と判断した。東側の一部は樹根の影響を受けている。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部・主穴部ともに形状は不明であることから，タイプは不明とした。最深部位置は，推定で従穴部（Ａ）かブリッジ下（Ｂ）と思われるが，明確でないため一覧表には示していない。推定される従穴部は，底面から壁面を若干掘り込み，やや内傾しながら立ち上がった後，ラッパ状に開口する。推定される主穴部は，最深部からスロープ状に立ち上がった後，壁面でやや垂直気味に開口する。ブリッジは，完全に崩落し痕跡等も確認できなかった。

規　　模　全長は1.55ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，５番目に短い長さである。主従値は不明である。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，ともに暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。埋土１と埋土２は，色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１〉埋土２）の違い等で分層した。埋土３は，にぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）が混入しており，黄橙色パミスの量も少ない土である。



第80図　連穴土坑11号・連穴土坑12号・出土遺物

出土遺物　埋土中から２点の遺物が出土し，土器が１点，礫が１点であった。土器１点を図化した。38（第80図）は，底部近くの胴部である。外面上位には，綾杉状に貝殻条痕文を，その下部には横位貝殻条痕文を施し，綾杉状の貝殻条痕文の後に横位貝殻条痕文を施す。

土器分類　38は，Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　主穴部の底面付近で木炭が確認され，採取した。採取した炭化物は，科学分析の結果から^{14}C年代測定は8,273-8,170calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑13号（SV13：第81図）

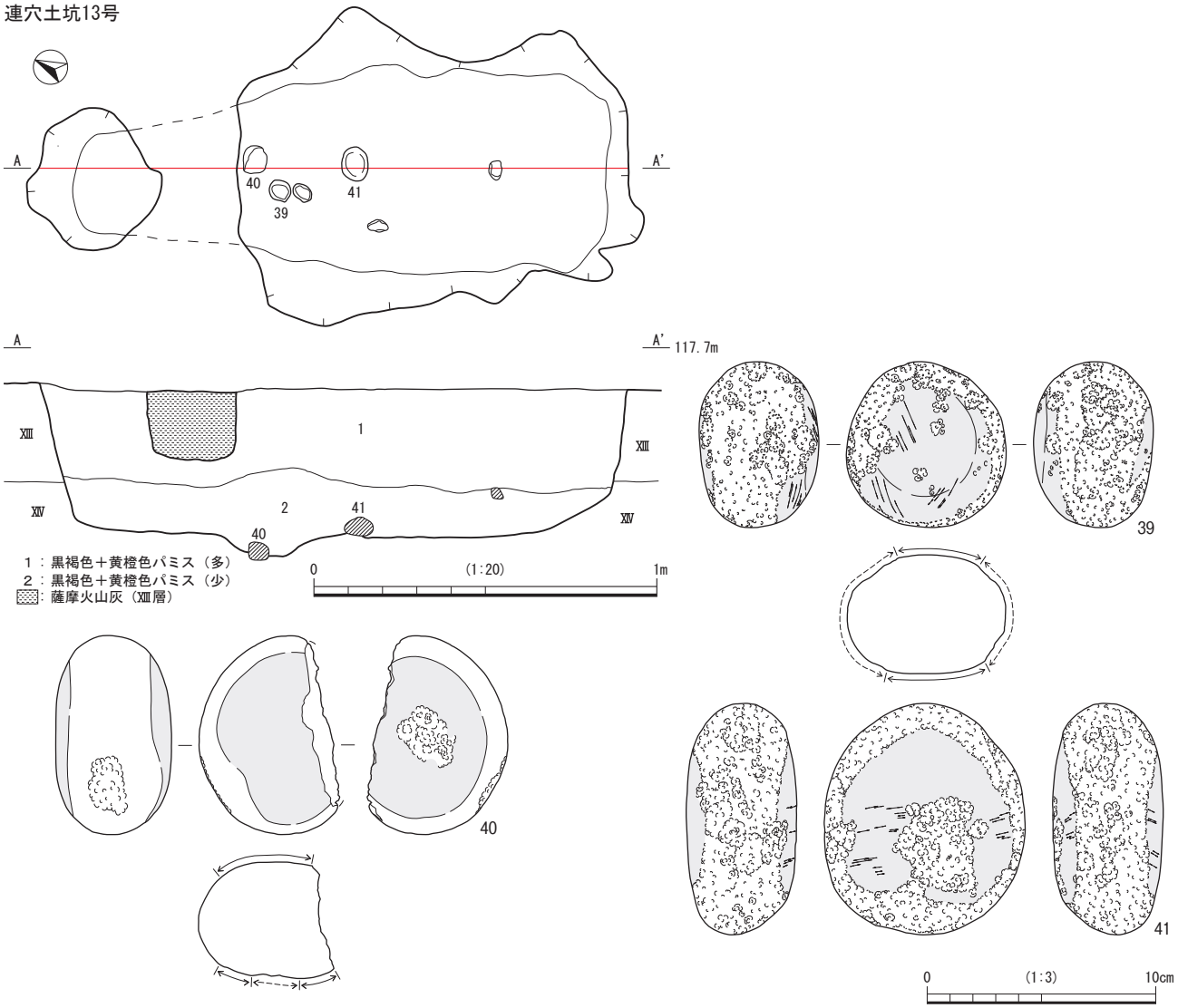
検出状況　SV13は，C-16区において，XIII層上面で検出された。当初は，楕円形状のシミを土坑と判断し調査を行った。半裁を行ったところ底面に礫が確認された。これまでの調査から土坑の底面には礫がなく，連穴土坑の底面には礫が見られたことから，北西部上面の精査を行った。その結果30㎝程度の小ピットを検出し，埋土を掘り下げたところ，貫通したことから，小ピットを従穴部，当初の土坑を主穴部とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，主穴部ブリッジ側（C）である。従穴部は，底面から急傾斜で立ち上がる。主穴部は，最深部位置から緩やかに立ち上がった後，ほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は，四角形で上部と下部の幅差はほとんど見られない。

規　　模　全長は1.71ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は6.49で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。



第81図　連穴土坑13号・出土遺物

出土遺物　埋土中から６点の礫が出土した。そのうち３点は石器で，３点は礫であった。石器３点を図化した。39 ～ 41（第81図）は安山岩製の磨石・敲石類である。いずれも扁平な円礫の表裏両面を磨面や敲面に使用し，側面にも敲打痕が認められる。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑14号（SV14：第82図）

検出状況　SV14は，C・D-11・12区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部・主穴部ともに形状は不明であることから，タイプは不明とした。最深部位置は，推定で従穴部（A）かブリッジ下（B）と思われるが，明確でないため一覧表には示していない。推定される従穴部は，底面から急傾斜に立ち上がった後，ラッパ状に開口する。推定される主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がった後，一度急傾斜になり再びスロープ状に開口する。南西壁面の一部にブリッジの痕跡は確認できたが，多くは崩落し埋土中にも痕跡等を確認できなかった。

規　　模　全長は1.54ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，短めの長さである。主従値は不明である。

埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　埋土中で採取した木炭は，科学分析の結果から^{14}C年代測定は8,233-7,964calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑15号（SV15：第83図）

検出状況　SV15は，C・D-11区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部・主穴部ともに形状は不明であることから，タイプは不明とした。最深部位置は，推定で従穴部～主穴部（ＡＢＣＤ）と思われるが，明確でないため一覧表には示していない。底面はほぼ水平に広がり安定している。推定される従穴部は，底面から壁面を若干掘り込み，やや内傾しながら立ち上がった後，急傾斜に開口する。推定される主穴部は，壁面からやや垂直気味に立ち上がった後，ラッパ状に開口する。ブリッジは，完全に崩落し痕跡等も確認できなかった。

規　　模　全長・主従値ともに不明とした。

埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　出土していない。

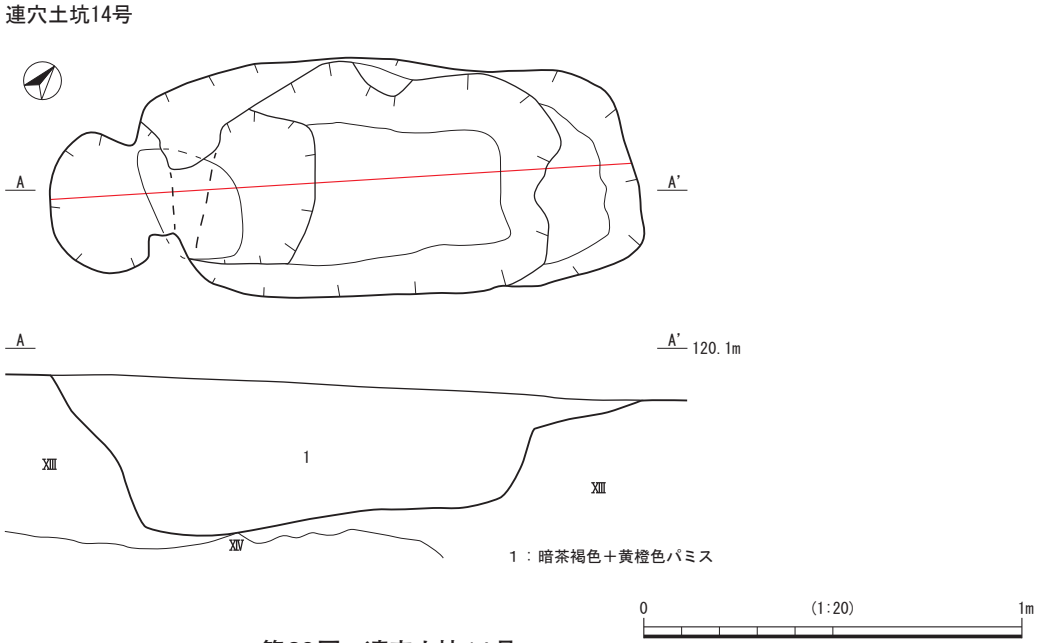
炭 化 物　埋土中に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑16号（SV16：第84図）

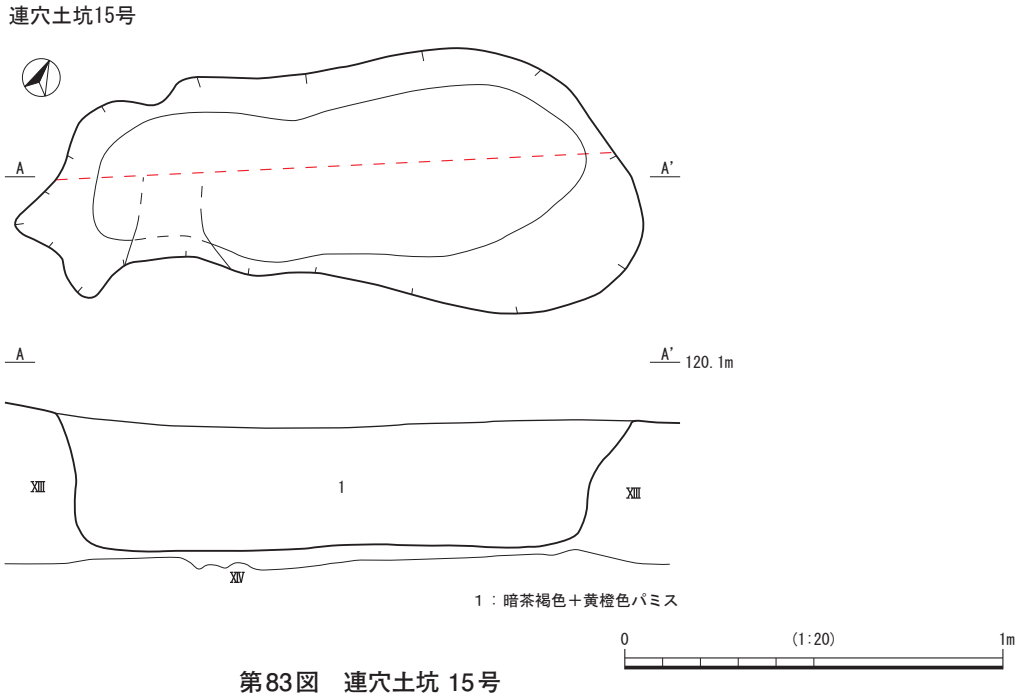
検出状況　SV16は，D-11区において，XIII上面で検出された。

切り合い　SV17と切り合い，SV17以前に構築されている。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に属すが，主穴部の形状は不明とした。最深部は，推定でブリッジ下（B）と思われるが，明確でないため一覧表には示していない。



第82図　連穴土坑14号



第83図　連穴土坑 15号

従穴部は，底面からやや急傾斜に立ち上がる。主穴部の立ち上がりは不明である。ブリッジ断面は，従穴部を右に見て，上部より下部がやや幅広となる逆ノの字状である。

規　　模　全長・主従値ともに不明とした。

埋　　土　埋土については，次のSV17の埋土で，合わせて記述する。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑17号（SV17：第84図）

検出状況　SV17は，C・D-11区において，Ⅷ層上面で検出された。

切り合い　SV16と切り合い，SV16の後に構築されている。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（BC）である。従穴部は，底面からやや急傾斜に立ち上がる。主穴部は，最深部位置から緩やかに立ち上がり，一段有した後に，壁面でやや急傾斜に開口するが，途中で壁面を一部掘り込んでいる。ブリッジ断面は細長く，下部にいくに従ってやや幅広となるが，従穴部だけが一部掘り込まれ，従穴部を左に見て逆くの字形になっている。SV16とSV17の平面及び断面形状に共通点が幾つか確認できる。

規　　模　全長・主従値ともに不明とした。

埋　　土　埋土については，SV16・17，合わせて記述する。埋土は３つに分かれる。埋土３は，SV16・17のブリッジ下の底面付近にのみ堆積し，にぶい褐色で粘質性のある土である。埋土３は，Ⅳ～Ⅵ層の土より粘性が低く，Ⅳ～Ⅵ層相当とならないことから，炭や炭化物等の影響を受けた可能性もある。埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。埋土１はSV17にのみに，埋土２はSV16にのみ確認され，埋土１が埋土２を切っていることから，SV16とSV17に構築された時期に差があると判断した。

出土遺物　出土していない。

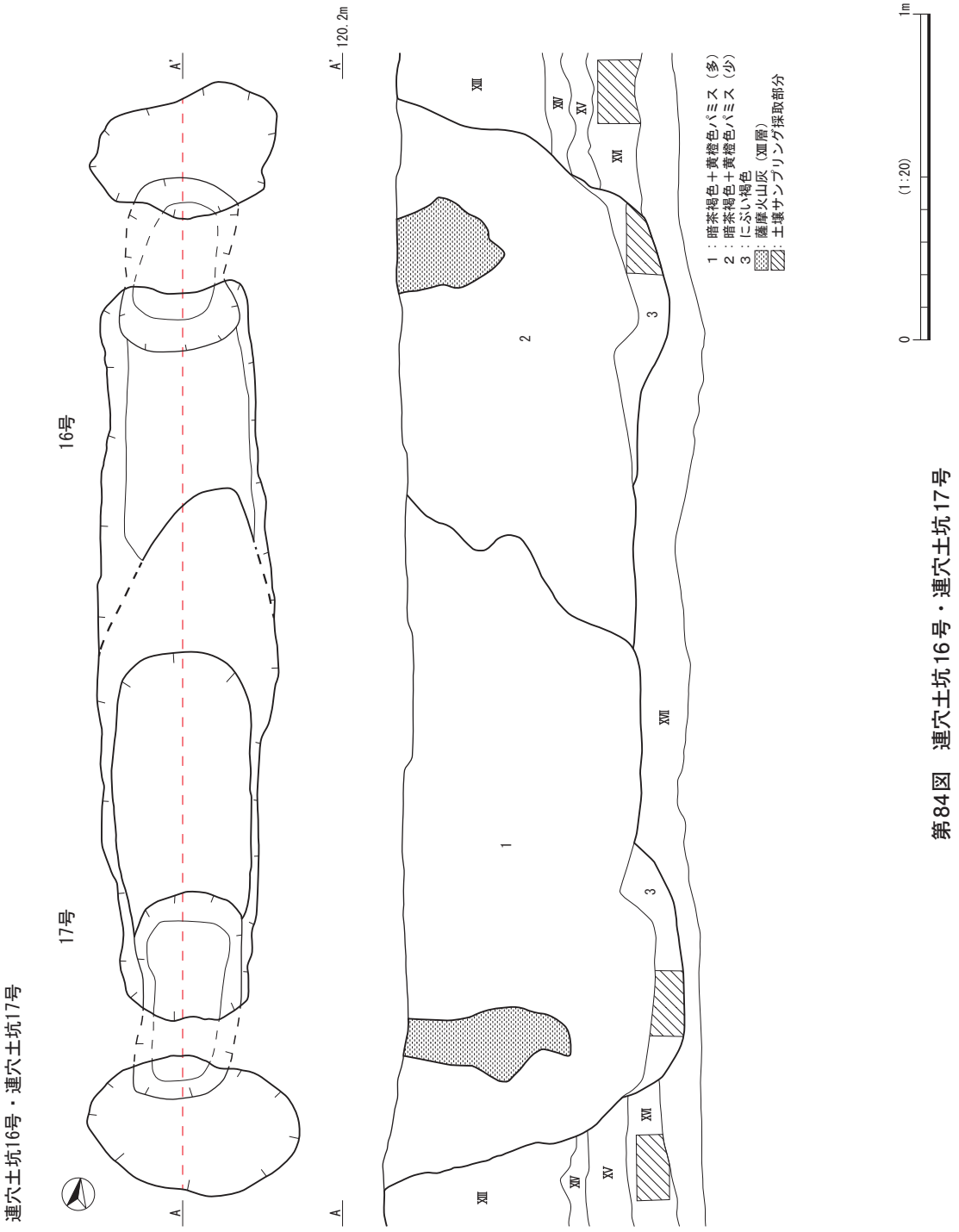
炭 化 物　埋土１と埋土２に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。第84図にある網掛け範囲の土壌をサンプル採取したが，分析等は行っていない。

連穴土坑18号（SV18：第85図）

検出状況　SV18は，F-22区において，Ⅷ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（B）であるが，本遺跡の中では，最も深くまで掘り込まれている連穴土坑である。従穴部は，底面からやや垂直気味に立ち上がった後，急傾斜で開口する。主穴部は，最深部位置から段を二段有しながら緩やかに立ち上



第84図　連穴土坑16号・連穴土坑17号

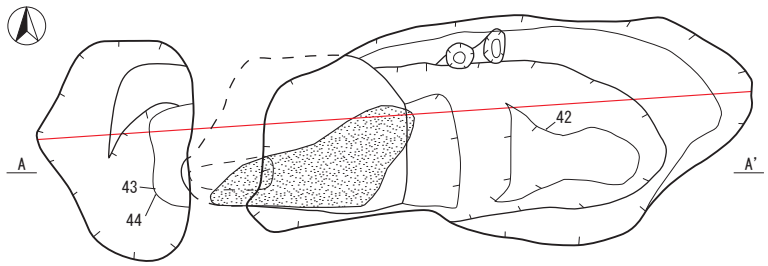
がった後，ほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は，従穴部の方が鋭角に掘り込まれる逆三角形状である。

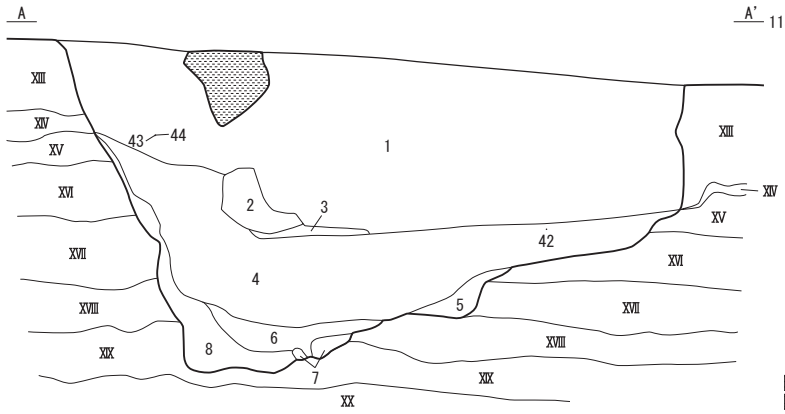
規　　模　全長は1.89ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，やや長めである。主従値は3.36で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が小さい。

埋　　土　埋土は８つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色でXVI層に類似するが，被熱等の影響を受けたと思われ黒色化した土である。埋土３・埋土４は，ともに茶褐色の土に黄橙色パミスを含み，にぶい暗茶褐色の土（XIV層）が混入する土である。土のしまり具合（埋土３〉埋土４）や粘性の強さ（埋土３〉埋土４）の違い等で分層した。埋土５は，茶褐色の土で，黄橙色パミスを含まない。埋土６は，赤灰色で５㎜～５㎝程度の橙色のブロックを含み，若干粘質がある土である。埋土７は，炭化物を含む黒色の土である。埋土８は，にぶい橙色で粘質のある土である。

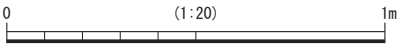
SV18は，埋土状況から，ブリッジ（埋土２の部分が

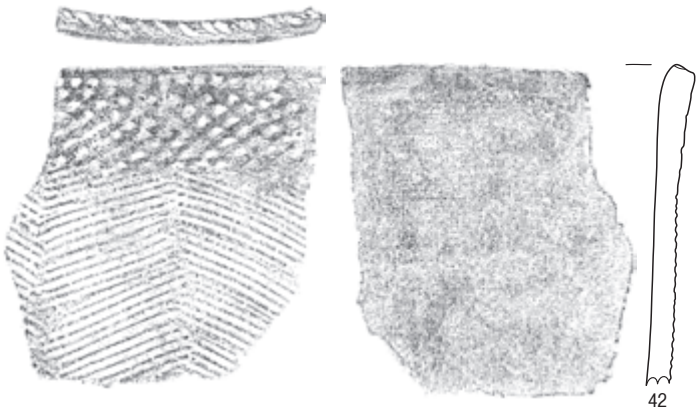
連穴土坑18号

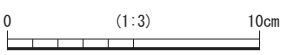


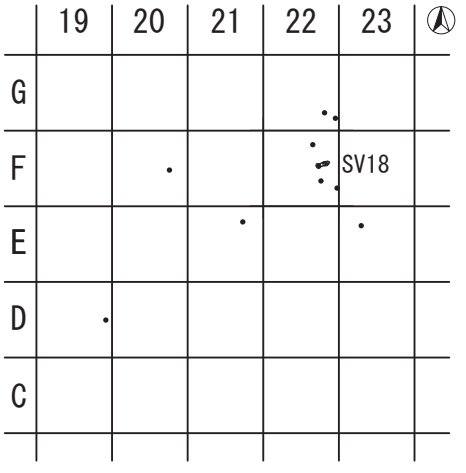


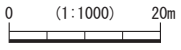
1：暗茶褐色＋黄橙色パミス
2：茶褐色＋黒色化
3：茶褐色＋黄橙色パミス＋にぶい暗茶褐色
4：茶褐色＋黄橙色パミス＋にぶい暗茶褐色
5：茶褐色
6：赤灰色
7：黒色
8：にぶい橙色
：薩摩火山灰（XIII層）
：炭化物範囲











第85図　連穴土坑18号・出土遺物・分布図

もう一つのブリッジ）・トンネル（埋土４の部分がもう一つのトンネル）がもう一つ存在した可能性を否定できないが，本報告では，ブリッジ・トンネルを各１つで報告した。

出土遺物　埋土中から７点の遺物が出土した。いずれも土器で，そのうち３点を図化した。42（第85図）は，口縁部片である。ほぼ直行する口縁部外面に，横位貝殻刺突文を１条施し，その直下に斜位貝殻刺突文を，その刺突文の下部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。また，平坦な面をもつ口唇部に幅４㎜程度のキザミを施す。内面は，ナデをおこなう。43（第85図）は，外面に横位貝殻刺突文を施す胴部である。接合はしなかったが，胎土や施文方法から43と同一固体と思われる土器片11点が包含層からも出土している。その分布状況を第85図で示した。44（第85図）は，外面に斜位貝殻条痕文を施す胴部である。綾杉状の条痕文の一部と思われる。42 ～ 44は，同一個体とはならない。

土器分類　42・44はⅣ類に，43はⅤ類に該当する。

炭 化 物　埋土中に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。ブリッジ下及び主穴部ブリッジ側底面で焼土が確認された。

連穴土坑19号（SV19：第86図）

検出状況　SV19は，Ｂ-20区において，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はＩ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ｉ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（Ｂ）である。従穴部は，最深部位置からやや急傾斜で立ち上がった後，一度緩やかになるが，すぐに垂直気味に開口する。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がり，一段有した後に，壁面で急傾斜で開口する。ブリッジ断面は，検出面を平坦にして半円状であるが，主穴部をやや掘り込んでいる。

規　　模　全長は1.72ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は8.60で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が２番目に大きい。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，ともに黒色の土にわずかに黄橙色パミスを含む土である。粘性の強さ（埋土１＝埋土３<埋土２）や土のしまり具合（埋土１>埋土２＝埋土３）の違い等で分層した。断面にあるＡの層は，熱変化によって壁面等が変色したと判断したことから埋土にはしていない。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　埋土中で採取した木炭は，科学分析の結果から，^{14}Ｃ年代測定は，8,230-7,964calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑20号（SV20：第86図）

検出状況　SV20は，Ｃ-21・22区において，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部（Ａ）である。従穴部は，最深部位置から垂直に立ち上がった後，一段有して再度垂直気味に開口する。主穴部は，水平に安定して広がった後，壁面で急傾斜で開口する。ブリッジの残りはわずかだが，その断面は，検出面を平坦に半円状になるが，従穴部をやや掘り込んでいる。

規　　模　全長は2.35ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，最大の長さである。主従値は2.85で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が３番目に小さい。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）や粘性の強さ（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。断面にあるＡの層は，熱変化によって壁面等が変色したと判断したことから埋土にはしていない。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　埋土中で採取した木炭は，科学分析の結果から，^{14}Ｃ年代測定は，8,150-7,965calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑21号（SV21：第87図）

検出状況　SV21は，C-27区において，従穴部は竪穴住居跡13号（SH13）の東側のⅫ層上面で，主穴部はSH13検出面内で検出された。SH13壁面及び上面東側に円形状のシミを確認した。そのシミ状部分の精査を行ったところ，従穴部と地中で繋がったことから連穴土坑とした。

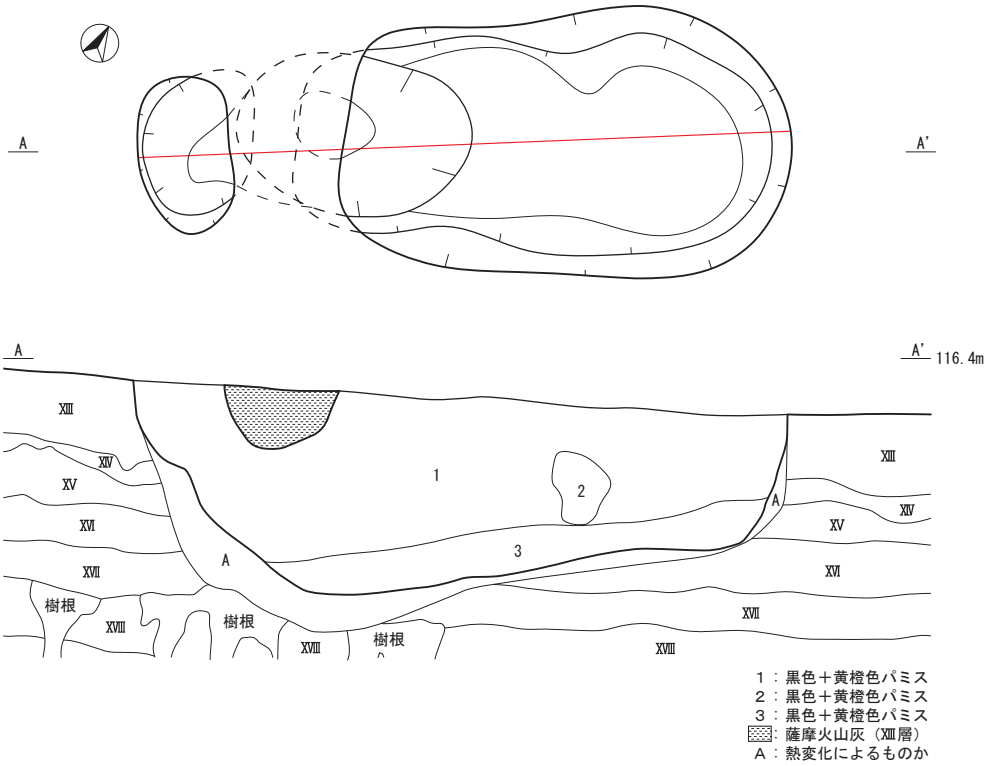
切り合い　SH13と切り合い，SV21はSH13の後に構築されている。

形　　状　従穴部の形状はＩ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ｉ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，主穴部（Ｄ）で，本遺跡の中では，このSV21のみである。従穴部は，底面からやや緩やかに立ち上がった後，一段有してすぐに垂直に開口する。主穴部は，ブリッジ下から緩やかな傾斜をもって下り，その後緩やかな傾斜で立ち上がる。ブリッジ断面は，四角形状で下部の方が若干幅広となるが，主穴部の方から従穴部へとやや掘り込まれている。

規　　模　全長は1.82ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は5.83で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

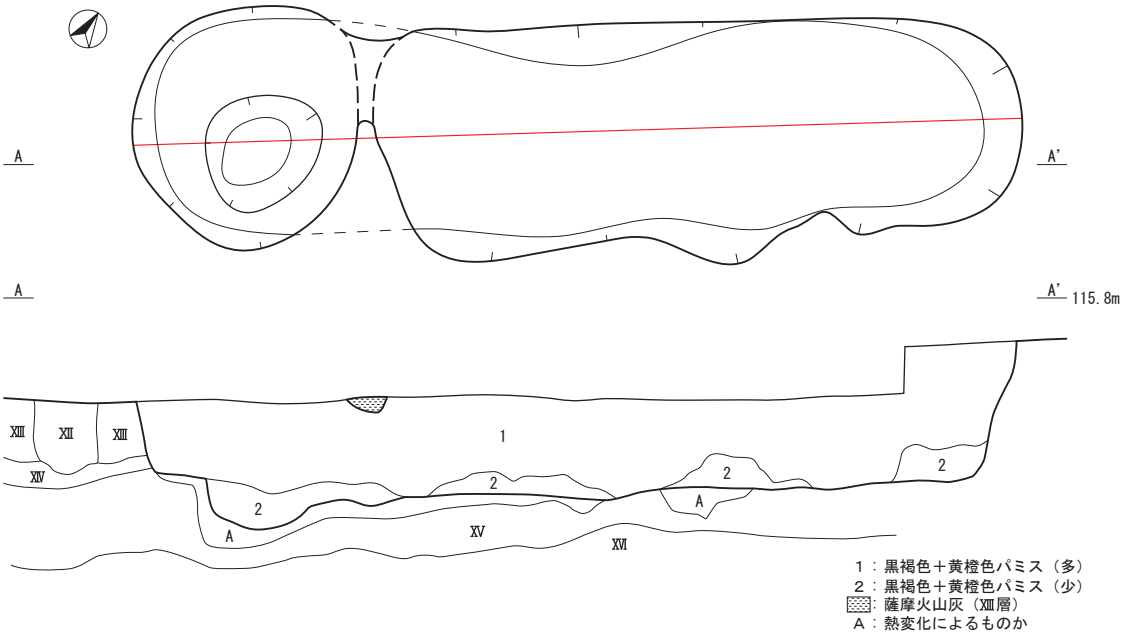
埋　　土　埋土は４つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに極暗褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土３は，暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）

連穴土坑19号



1：黒色＋黄橙色パミス
2：黒色＋黄橙色パミス
3：黒色＋黄橙色パミス
▨：薩摩火山灰（Ⅲ層）
A：熱変化によるものか

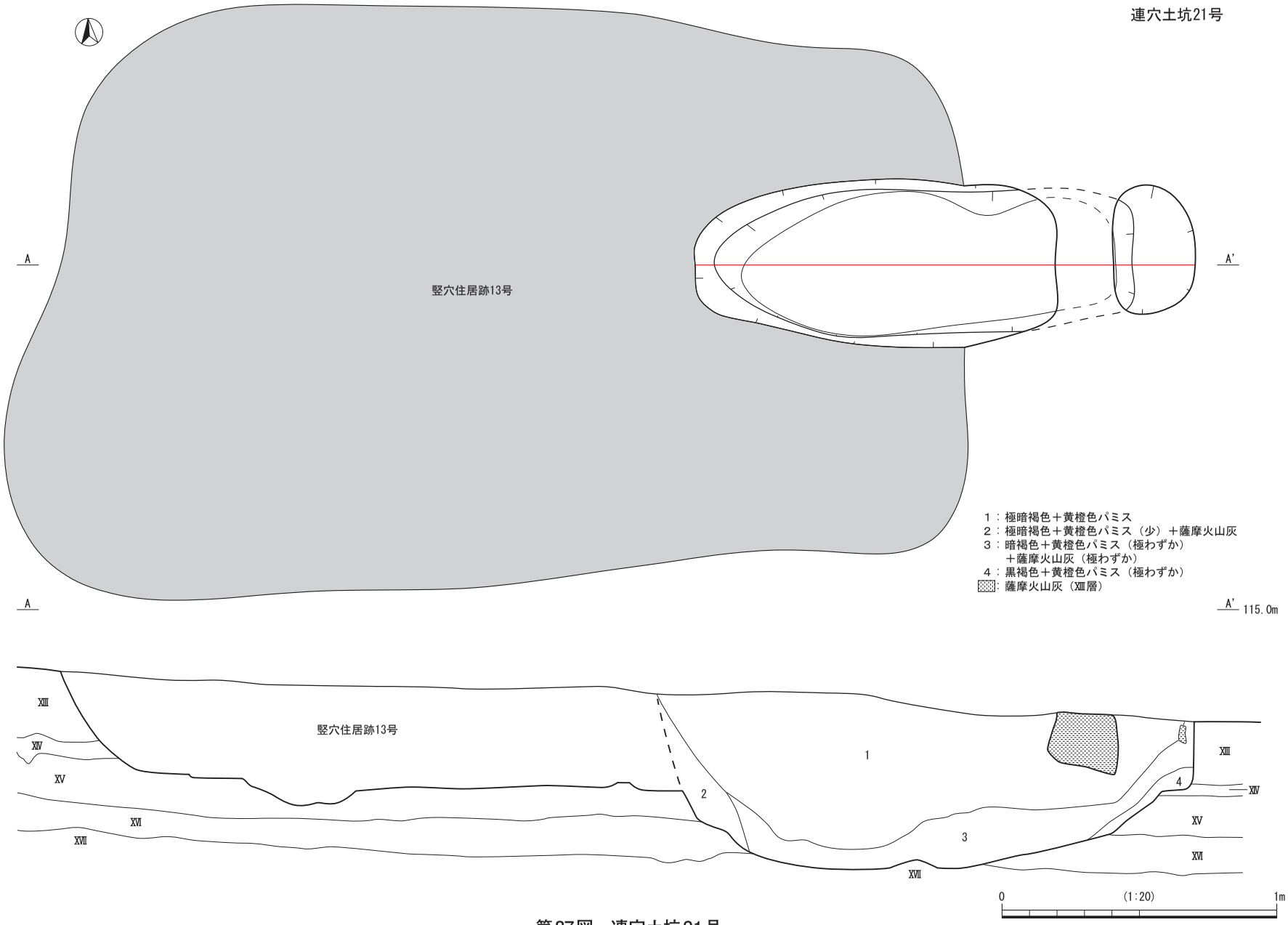
連穴土坑20号



1：黒褐色＋黄橙色パミス（多）
2：黒褐色＋黄橙色パミス（少）
▨：薩摩火山灰（Ⅲ層）
A：熱変化によるものか

0 (1:20) 1m

第86図　連穴土坑19号・連穴土坑20号



第87図　連穴土坑21号

を含む土である。埋土4は，黒褐色の土に黄橙色パミスを極わずかに含む土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑22号（SV22：第88図）

検出状況　SV22は，Ｄ・Ｅ-30区において，XⅢ層上面で検出された。検出時は，小土坑と大土坑が隣り合っていたので，連穴土坑を意識して調査を行った。また，このSV22と切り合うように西側に縦長に伸びる土坑状のシミも同時に検出された。SV22に伴う遺構として調査を行ったが，壁面や床面が不安定であったことから，樹根と判断した。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，主穴部（ＣＤ）で，本遺跡の中では，このSV22のみである。従穴部は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は，ブリッジ下からほぼ水平に広がり，壁面からは急傾斜で立ち上がる。ブリッジ断面は，横長の長方形状であるが，下部は主穴部・従穴部ともにやや掘り込まれ，若干下部が尖り気味である。

規　　模　全長は1.73ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は8.54で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が４番目に大きい。

埋　　土　埋土は，３つに分かれる。埋土１・埋土３は，ともに暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土３）の違い等で分層した。埋土２は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　埋土中及び底面に炭化物を確認し，採取したが，科学分析は行っていない。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑23号（SV23：第88図）

検出状況　SV23は，Ｅ-41区において，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部とブリッジ下（ＡＢ）である。従穴部は，底面から急傾斜で立ち上がるが，壁面に多少の凹凸が確認できる。主穴部は，最深部位置から緩やかに立ち上がりながら一段有した後，壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は，若干従穴側に向かって舌状形である。

規　　模　全長は1.55ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，５番目に短い長さである。主従値は2.41で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が最も小さい。

埋　　土　埋土は８つに分かれる。埋土１・埋土５は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土５）の違い等で分層した。埋土７も黒褐色の土であるが，黄橙色パミスは含まない。埋土２・埋土３・埋土４は，ともに黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土２>埋土３>埋土４）の違い等で分層した。埋土６は，暗褐色の土に黄橙色パミスをわずかに含む土である。埋土８は，褐色の土で粘性が強い土である。また，埋土８の下位には，Ａ（暗褐色の土で粘性が強い土）とＢ（暗褐色の土に黒褐色の土がブロック状に混入し，粘性の強い土）が確認されたが，近くの旧石器先行トレンチでも，ＡとＢ同様の土が確認されているため，SV23に伴う埋土と判断しなかった。

出土遺物　埋土中からは，３点の遺物が出土した。土器が１点，礫が２点であった。そのうち土器１点を図化した。45（第88図）は，外面に綾杉状の貝殻条痕文を施す胴部で，内面はナデをおこなう。

土器分類　45は，Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　埋土８の下部から採取した炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，8,232-7,956calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑24号（SV24：第89図）

検出状況　SV24は，Ｊ-54区において，Ⅺ層下位で検出された。

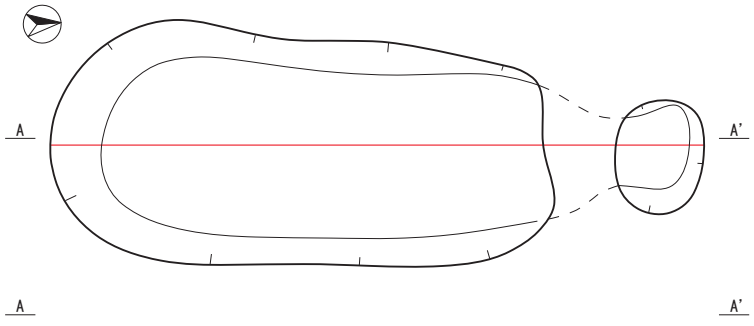
切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（ＢＣ）である。従穴部は，底面から垂直気味に立ち上がった後，急傾斜で開口する。主穴部は，最深部位置からなだらかに立ち上がり，水平に広がった後，壁面で垂直になり，その後ラッパ状に開口する。ブリッジ断面は，三角フラスコ状である。

規　　模　全長は2.04ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，長めだが，Ⅺ層で検出された連穴土坑の中では，２番目に長く，XⅢ層で検出された連穴土坑も含めると５番目に長い。主従値は5.22で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

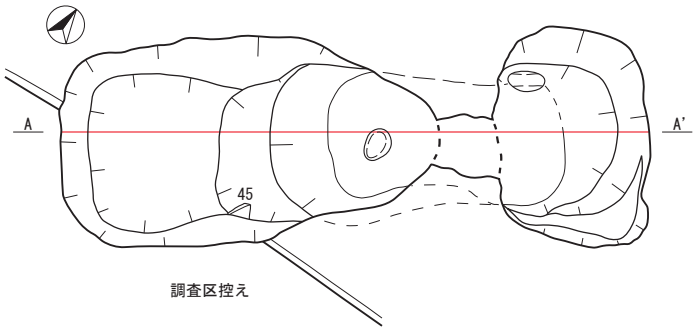
埋　　土　埋土は７つに分かれる。埋土１は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２・埋土４・埋土５・埋土６は，ともに黒褐色の土に黄橙パミスを含む土だが，色調の明るさ（埋土２>埋土４＝埋土６>埋土５）や黄橙パミスの包含量（埋土５>埋土２＝埋土４>埋土６）の違い等で分層した。埋土３と埋土７は，ともに暗褐色の土であるが，色調の明るさ（埋土３<埋土７）の違い等で分層した。

連穴土坑22号



1：暗茶褐色＋黄橙色パミス（多）
2：黒褐色＋黄橙色パミス
3：暗茶褐色＋黄橙色パミス（少）
：薩摩火山灰（XIII層）

連穴土坑23号



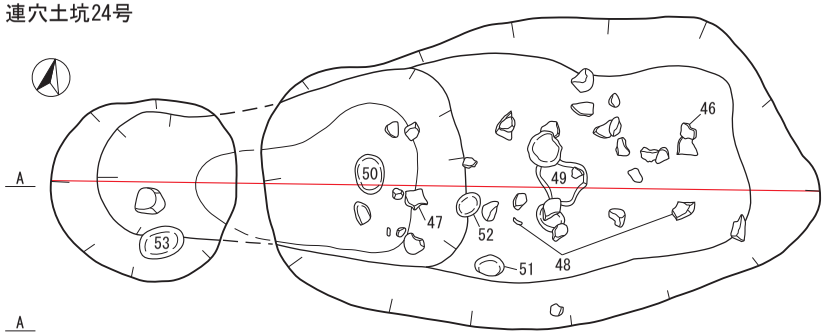
0 (1:3) 10cm

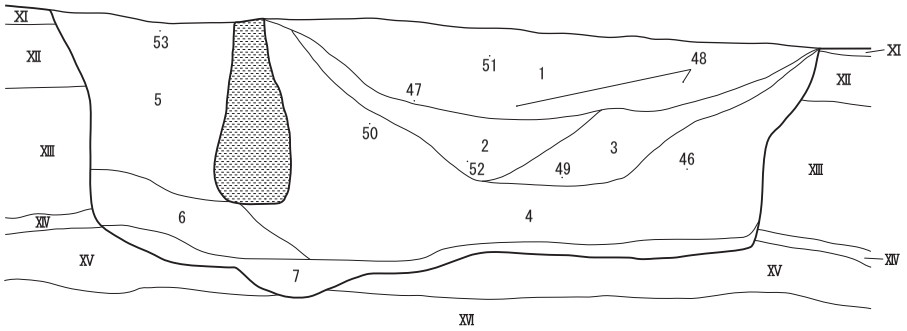
1：黒褐色＋黄橙色パミス（多）
2：黒色＋黄橙色パミス（多）
3：黒色＋黄橙色パミス（少）
4：黒色＋黄橙色パミス（わずか
5：黒褐色＋黄橙色パミス（少）
6：暗褐色＋黄橙色パミス
7：黒褐色
8：褐色
：薩摩火山灰（XIII層）

0 (1:20) 1m

第88図　連穴土坑22号・連穴土坑23号・出土遺物

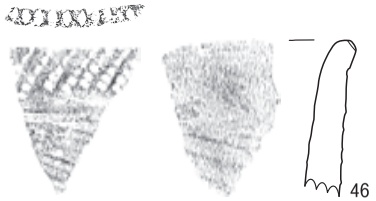
連穴土坑24号

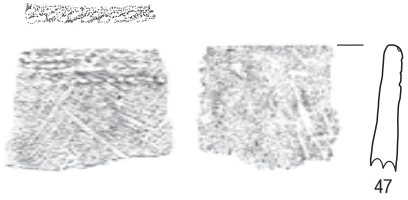


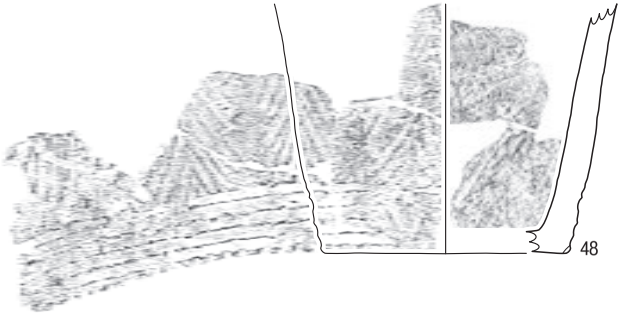


1：黒色＋黄橙色パミス
2：黒褐色＋黄橙パミス（少）
3：暗褐色
4：黒褐色＋黄橙パミス（少）
5：黒褐色＋黄橙パミス（多）
6：黒褐色＋黄橙パミス（わずか）
7：暗褐色
：薩摩火山灰（XIII層）

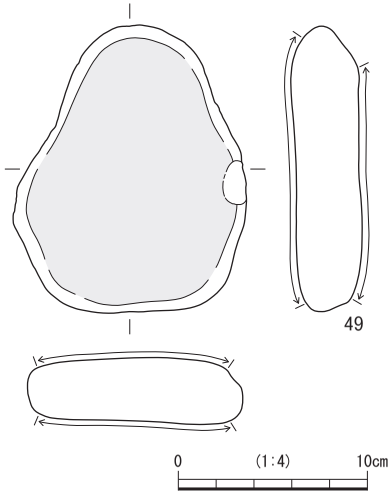
0 (1:20) 1m

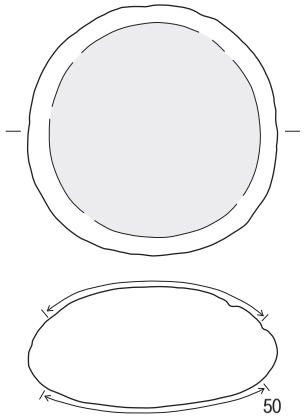


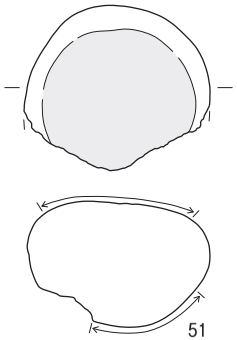


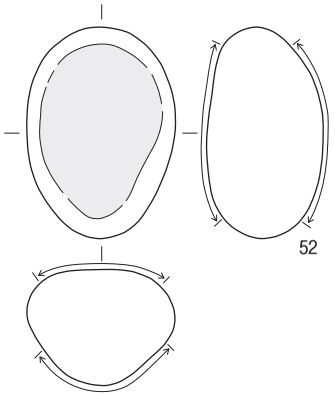


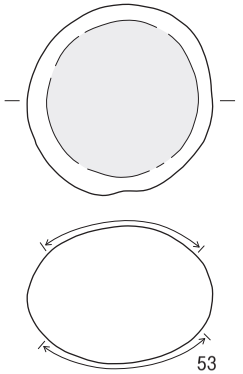
0 (1:3) 10cm











0 (1:4) 10cm

0 (1:3) 10cm

第89図　連穴土坑24号・出土遺物

出土遺物　埋土中からは，41点の遺物が出土し，土器が９点（口縁部片２点・胴部片５点・底部片２点），石器が５点，礫が26点であった。そのうち土器３点と石器５点を図化した。46（第89図）は，口縁部端部のみがやや外反する口縁部である。口縁部外面は，斜位貝殻刺突文を施し，その刺突文の直下に斜位貝殻条痕文を施す。また，丸みを帯びた口唇部には幅３～４㎜程度のキザミを施す。内面には，工具による調整が一部に確認できる。47（第89図）は，直行気味の口縁部である。口縁部外面には，横位貝殻刺突文を施し，その刺突文の直下は綾杉状の貝殻条痕文を施す。また，やや丸みを帯びた口唇部には幅１㎜程度のキザミを３つ斜位に施す。内面には，工具による調整が一部に確認できる。48（第89図）は，底部である。外面には綾杉状の胴部文様に加え，胴部下部は横位貝殻条痕文となっている。また，底部外面端部には，幅２～３㎜程度のキザミを施す。図化していない胴部片５点には，いずれも綾杉状の条痕文が認められ同一個体の可能性はあるが，接合しなかった。49～53（第89図）は磨石・敲石類である。いずれも扁平な円礫の表裏両面を磨面や敲面に使用している。49は砂岩製で、50～53は安山岩製である。

土器分類　46～48は，いずれもⅣ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑25号（SV25：第90図）

検出状況　SV25は，Ｊ-51区において，Ⅺ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下～主穴部（ＢＣＤ）で，本遺跡の中では，このSV25のみの底面形状である。従穴部は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は，水平に広がった後，壁面でやや垂直に立ち上がった後，ラッパ状になり，再度垂直に開口する。ブリッジは，調査中に崩落したためその形状は不明である。

規　　模　全長は2.09ｍとⅪ層で検出された本遺跡の連穴土坑の中では，最も長いが，ⅩⅢ層で検出された連穴土坑も含めると２番目に長い。主従値は8.55で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差は３番目に大きい。

埋　　土　埋土は５つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３・埋土４は，ともに黒褐色の土に黄橙パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土４>埋土２>埋土３>埋土１）の違い等で分層した。埋土５は，暗茶褐色の土で粘性が強い土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑26号（SV26：連25・26図）

検出状況　SV26は，Ｉ-51・52区において，ⅩⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（ＢＣ）である。従穴部は，底面からやや急傾斜して立ち上がった後，垂直に開口する。主穴部は，最深部位置から緩やかに段を有するように立ち上がった後，壁面を掘り込み，やや内傾しながら立ち上がり，その後垂直に開口する。ブリッジ断面は，四角形状であるが，下部は，従穴部から主穴部側へ掘り込まれている。

規　　模　全長は1.87ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，ほぼ平均的な長さである。主従値は7.08で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

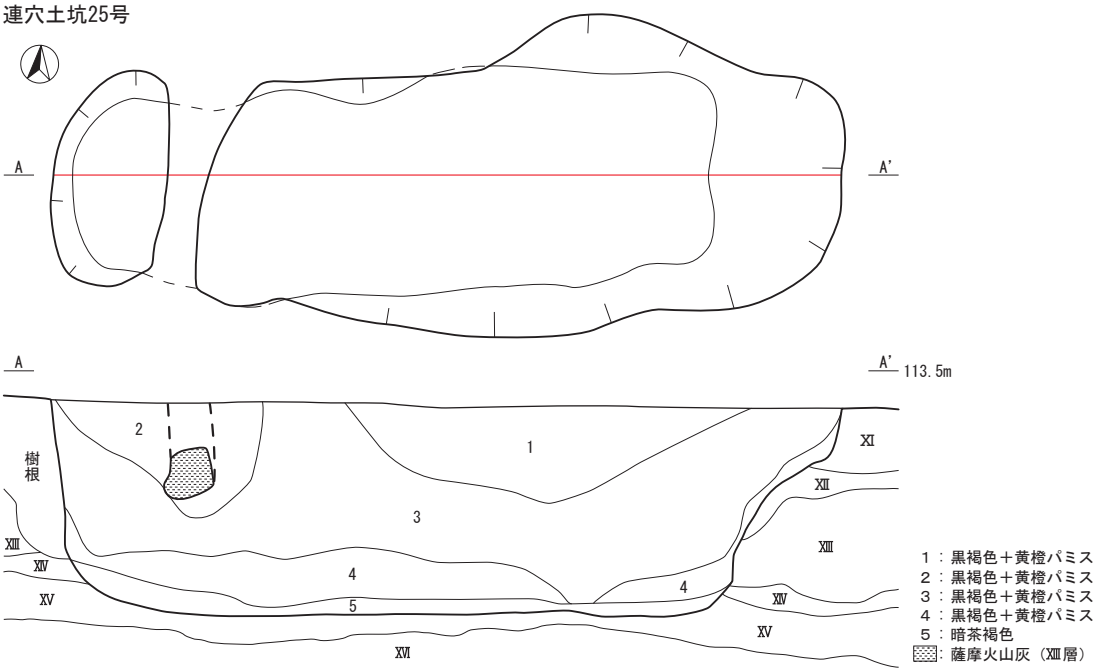
埋　　土　埋土は，５つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３とも黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２<埋土３）や黄橙パミスの包含量（埋土１>埋土２>埋土３）の違い等で分層した。埋土４は，暗褐色の土で粘性が非常に強くしまりのない土である。

出土遺物　埋土中からは，４点の土器が出土し，うち２点を図化した。この２点は，包含層遺物３点と接合し，口縁部から胴部までの資料となった。接合した５点の分布状況を第91図で示した。54（第91図）は，ほぼ直行する口縁部をもつ。口縁部外面には，斜位貝殻刺突文を施し，その直下に横位貝殻刺突文を１条施す。胴部には，横位貝殻刺突文の直下から綾杉状の貝殻条痕を施す。横位貝殻刺突文が，胴部文様との区画となる。また口縁部外面上部には，瘤状突起をもつ。瘤状突起は面取りをされる。前面上部と左側面は欠損する。瘤状突起にも口縁部同様の斜位貝殻刺突文を施すが，前面では縦位となる。口唇部は，平坦で刺突文を斜位に施す。

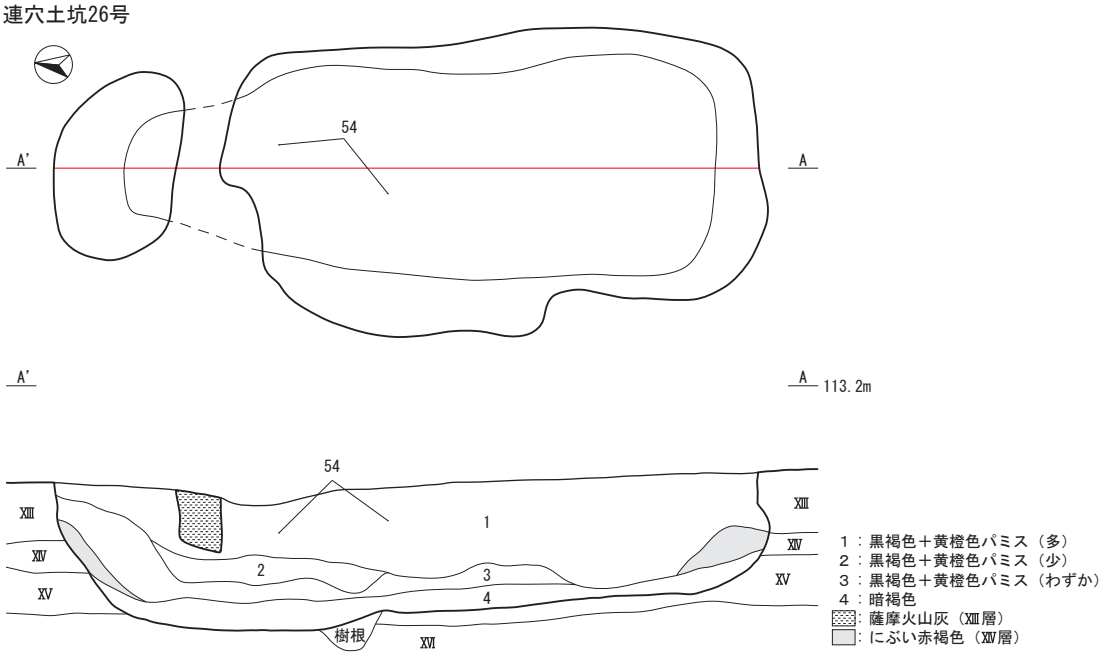
土器分類　54は，Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑25号

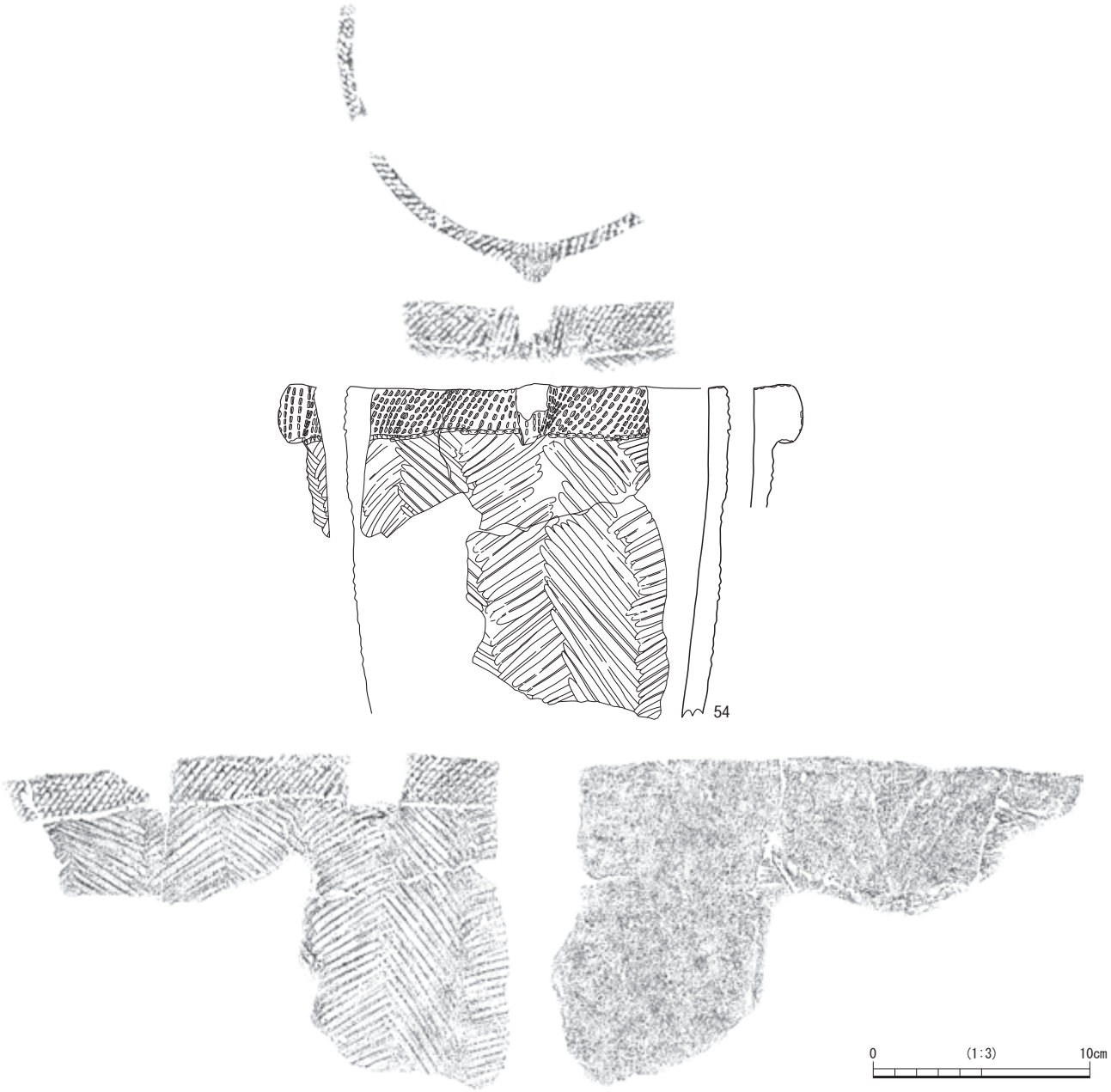


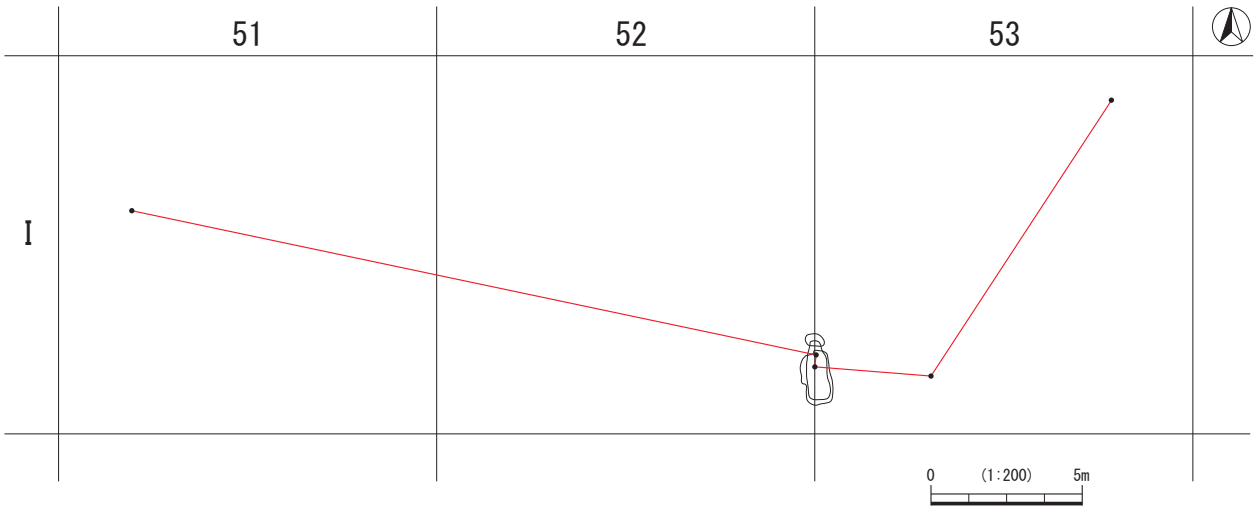
連穴土坑26号



0 (1:20) 1m

第90図　連穴土坑25号・連穴土坑26号





第91図　連穴土坑26号出土遺物・分布図

連穴土坑27号（SV27：第92図）

検出状況　SV27は，H-52区において，XIII層で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はIII類に，主穴部の形状はII類に属し，「III＋II」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（B）である。従穴部は，底面から膨らみを帯びながら立ち上がった後，垂直に開口する。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がった後，壁面を掘り込み，やや内傾しながら立ち上がり，その後急傾斜に開口する。ブリッジ断面は，下部がやや丸みを帯びる四角形状である。

規　　模　全長は1.92ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，長めである。主従値は6.72で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋　　土　埋土は，４つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，ともに黒褐色の土に，黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２<埋土３）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２>埋土３）の違い等で分層した。埋土４は，褐色の土で粘性が非常に強いが，しまりのない土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑28号（SV28：第92図）

検出状況　SV28は，J-53区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はIII類に，主穴部の形状はII類に属し，「III＋II」タイプになる。最深部は，従穴部（A）である。従穴部は，壁面をやや掘り込み，緩く内傾しながら立ち上がり，その後垂直に開口する。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がるが，最終的な立ち上がりは樹根の影響で確認できない。ブリッジ断面は，下部が若干幅広となる四角形状である。

規　　模　全長は1.45ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，１番短い。主従値は5.13で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は，６つに分かれる。埋土１・埋土５・埋土６は，ともに極暗褐色の土である。色調の明るさ（埋土１＝埋土５>埋土６）や混入している土（埋土１：黄橙色パミス・埋土５：薩摩火山灰・埋土６：なし）の違い等で分層した。埋土２・埋土３・埋土４は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土２<埋土３＝埋土４）や粘性の強さ（埋土２＝埋土４>埋土３），しまり具合（埋土２＝埋土４>埋土３）の違い等で分層した。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑29号（SV29：第93図）

検出状況　SV29は，L-54区において，XI層中で検出された。他の連穴土坑と比べ，XI層中で黄橙パミスが濃く集中していたため形状を特定することができた。

形　　状　従穴部の形状はIII類に，主穴部の形状はII類に属し，「III＋II」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（BC）である。従穴部は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は，最深部位置から一度緩やかに立ち上がり，その後スロープ状に段を有するように立ち上がった後，壁面で急傾斜で開口するが，途中で一段有し，再度急傾斜で開口する。一段有する箇所は，およそ20㎝程度で，薩摩火山灰（XIII）層上面に構築されている。ブリッジ断面は，下部になるにつれて少しずつ幅広になり，主穴部側につま先部分がある長靴状である。

規　　模　全長は1.86ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さであるが，XI層で検出された連穴土坑の中では，１番短い。主従値は8.46で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が５番目に大きい。

埋　　土　埋土は，８つに分かれる。埋土１・埋土４・埋土５は，ともに黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１>埋土５>埋土４）や黄橙色パミスの包含量（埋土１<埋土４<埋土５）の違い等で分層した。埋土２・埋土３・埋土６は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土２>埋土６>埋土３）や黄橙色パミスの包含量（埋土２>埋土６>埋土３）の違い等で分層した。埋土７は，褐色の土で非常に粘性が強くしまりがない土である。埋土８は，暗褐色の土で粘性が非常に強くややしまりのある土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　従穴部底面の底面付近に多くの炭化物を確認し，採取した。科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，8,274-8,170calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

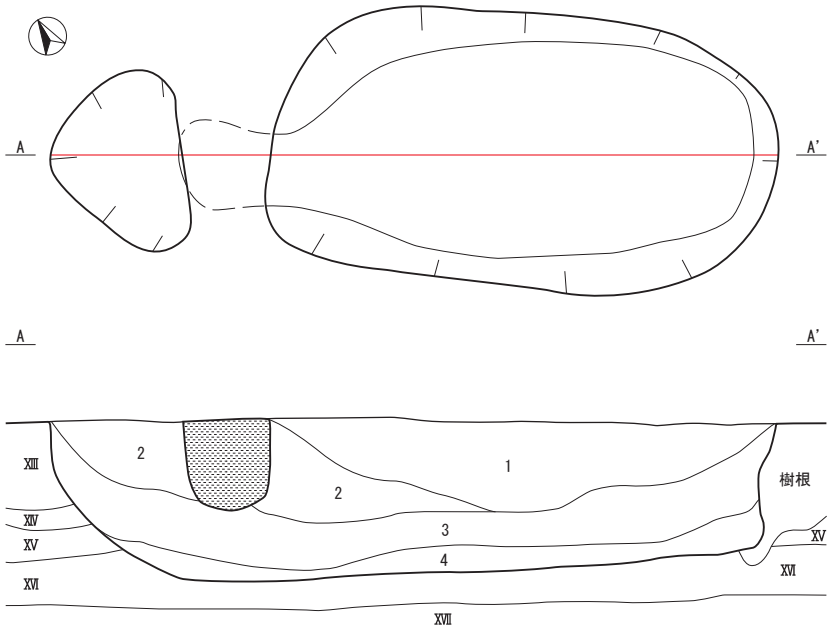
連穴土坑30号（SV30：第93図）

検出状況　SV30は，L-52区において，XIII層上面で検出された。

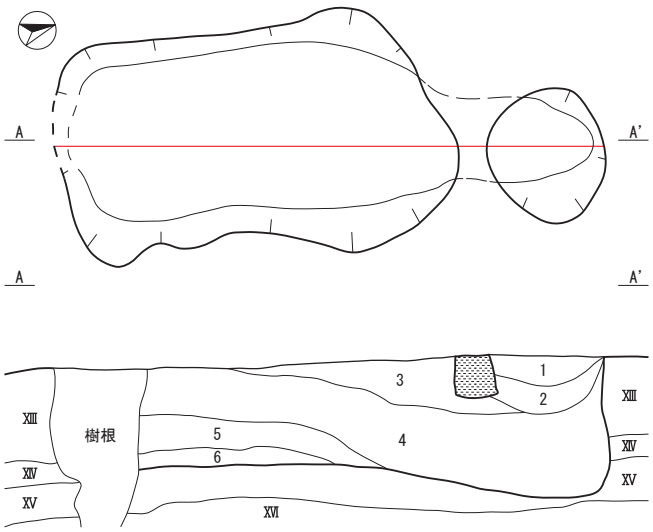
切り合い　切り合いはない。

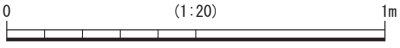
形　　状　従穴部の形状はIII類に，主穴部の形状はII類に属し，「III＋II」タイプになる。最深部は，従穴部とブリッジ下（AB）である。従穴部は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は，最深部位置からスロープ状に段を有するように立ち上がった後，壁面を若干掘り込みながら膨らみをもって開口する。ブリッジ断面は，縦長の長方形状である。

連穴土坑27号



連穴土坑28号





第92図　連穴土坑27号・連穴土坑28号

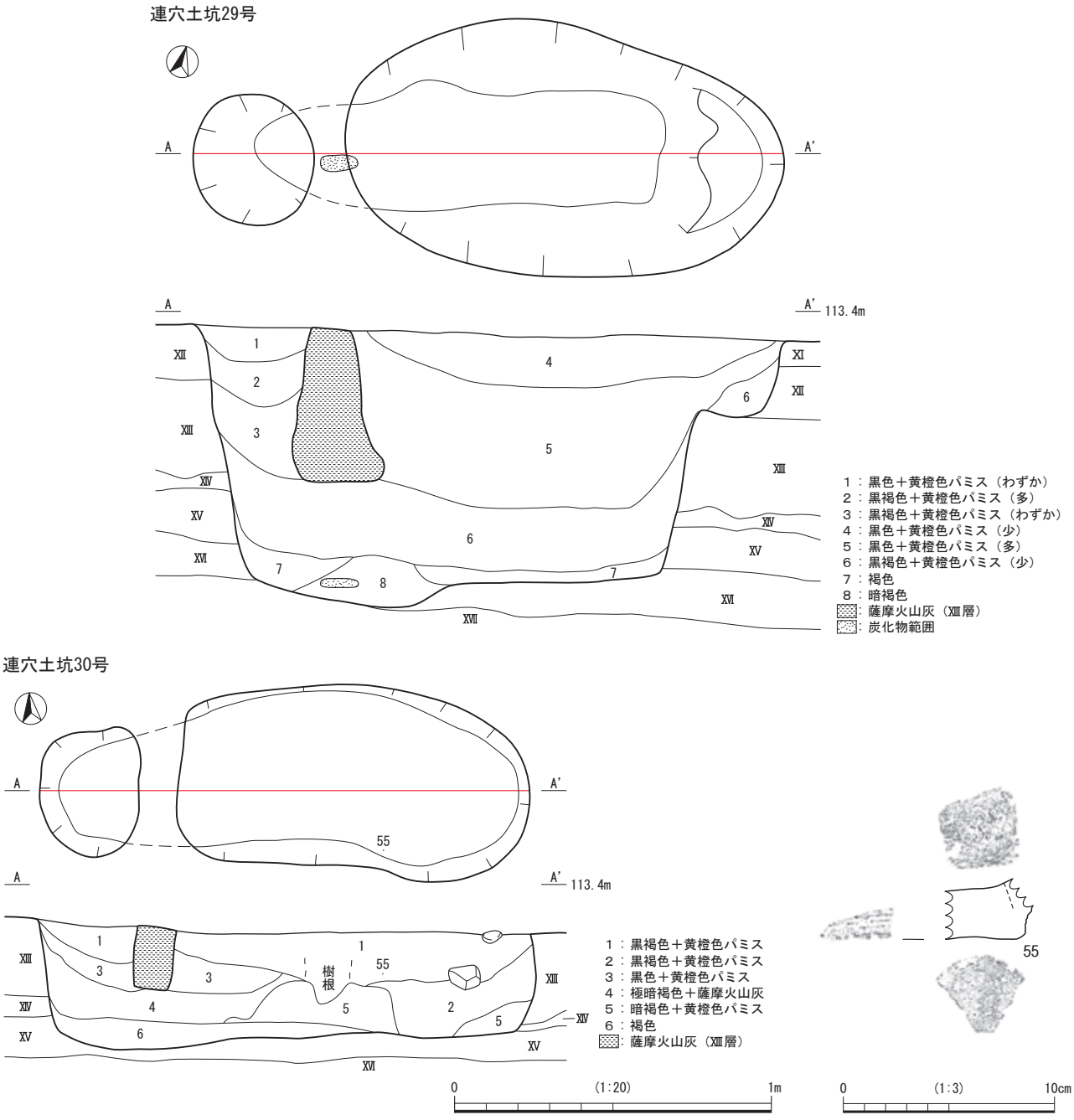
規　　模　全長は1.55ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，短い長さである。主従値は5.23で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は，樹根による影響を受けているが６つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。しまりの強さ（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。埋土３は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土４は，極暗褐色の土に若干薩摩火山灰（Ⅻ）層を含む土である。埋土５は，暗褐色の土でわずかに黄橙色パミスを含む土である。埋土６は，褐色の土で粘性が強くしまりのない土である。

出土遺物　埋土中からは，３点の遺物が出土し，土器が１点，礫が２点であった。土器１点を図化した。55（第93図）は底部である。底面外面には光沢が確認でき，丹念に磨かれたと思われる。底部付近の胴部は，剥落があるものの横位貝殻条痕文を施す。底部外面端部には，明確なキザミは確認できない。底部側面に僅かだが接合線が確認できる。

土器分類　55は，Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第93図　連穴土坑29号・連穴土坑30号・出土遺物

連穴土坑31号（SV31：第94図）

検出状況　SV31は，K-54区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（B）である。従穴部は，底面から急傾斜で立ち上がる。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がった後，壁面で急傾斜して開口する。ブリッジ断面は，縦長の長方形状であるが，従穴部側は丸みを帯びながら下部に向かい，主穴部側は垂直に下部に向かう。最下部は，主穴部側から従穴部側に斜めに掘り込まれている。

規　　模　全長は1.72ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は3.83で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が小さめである。

埋　　土　埋土は，樹根による影響を受けているが８つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３・埋土６は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土２<埋土１<埋土３<埋土４）や黄橙色パミスの包含量（埋土１<埋土３<埋土２<埋土６）の違い等で分層した。埋土５も黒褐色の土であるが，黄橙色パミスは含まれず，薩摩火山灰（XIII層）を含んでいる。また，埋土５の一部には，にぶい赤褐色の土（XIV層）が堆積している。埋土４・埋土７は，ともに暗褐色の土で，色調の明るさ（埋土４<埋土７）や粘性の強さ（埋土４<埋土７）の違い等で分層した。

出土遺物　埋土中からは，３点の土器片が出土し，１点を図化した。56（第94図）は，胴から底部である。胎土には，２㎜程度の金雲母も確認できる。胴部は，綾杉状の貝殻条痕文を施し，その下位には，横位貝殻条痕文を３～４条施す。その施文順はまず，４条の横位貝殻条痕文を施し，一部をナデ消した後，綾杉状の貝殻条痕文を施す。胴部内面及び底部外面には，指おさえが見られる。底部外面端部に，明確なキザミは確認できない。胴部側面から底部にかけて接合線が確認できる。また，図化しなかった２点のうち１点は胴部で，外面に綾杉状の貝殻条痕文を施す。胎土に金雲母が含まれないことから，56とは同一個体とは言い難い。もう１点は，底部で，底部外面端部には，貝殻刺突文を斜位に施す。刺突文を施す前に貝殻による器面調整を確認できる。胎土には，黒色鉱物・白色鉱物・ガラス質鉱物が含まれる。

土器分類　56と胴部片はⅣ類に，図化していない底部はⅤ類に該当する。

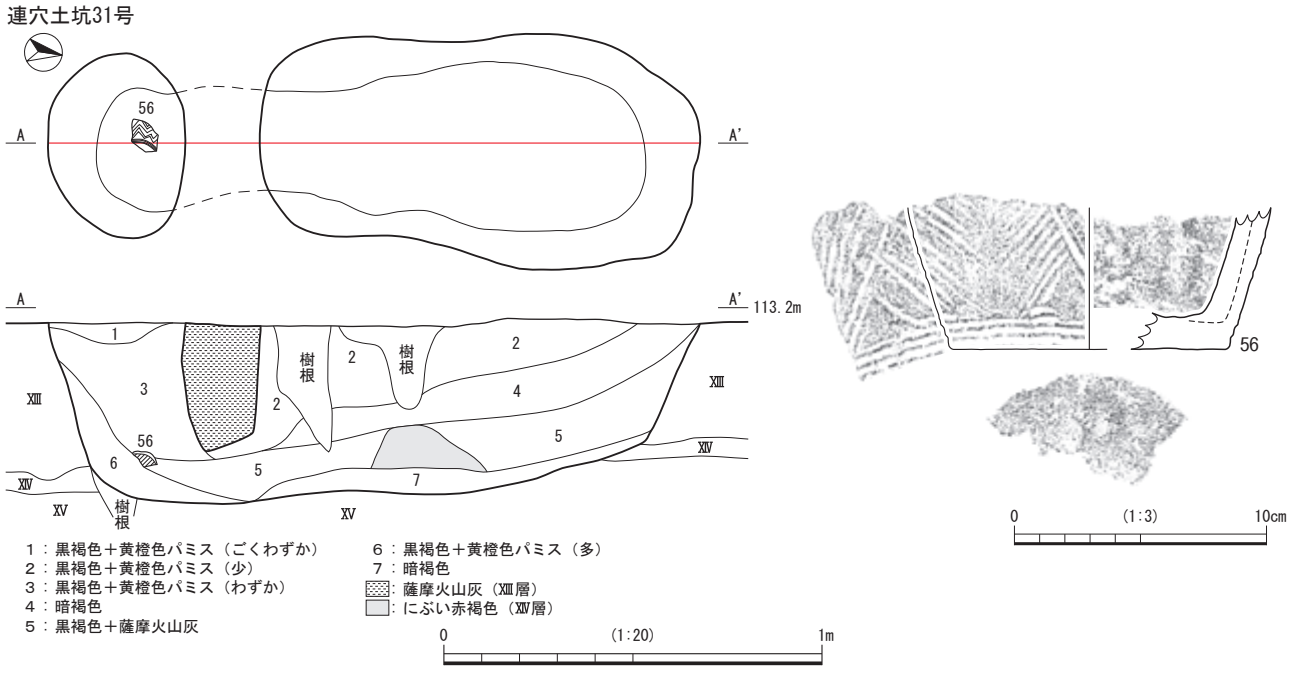
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑32号（SV32：第95図）

検出状況　SV32は，K-53区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（ＢＣ）である。従穴部は，底面からやや緩やかに立ち上がった後，ほぼ垂直に開口する。主穴部は，最深部位置から緩やかに立ち上がり，ほぼ水平に広がり段を有した後，壁面でやや急傾斜で開口



第94図　連穴土坑31号・出土遺物

する。ブリッジ断面は，縦長の長方形状であるが，主穴部側から従穴部側へと掘り込まれている。

規　　模　全長は1.74ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は5.50で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は，９つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土４・埋土６は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２＝埋土４<埋土６）や黄橙色パミスの包含量（埋土２>埋土４>埋土６>埋土１）の違い等で分層した。また，埋土４には，薩摩火山灰（XIII層）がやや含まれている。埋土３・埋土５・埋土７は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスやにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。色調の明るさ（埋土３＝埋土５<埋土７）や黄橙色パミスの包含量（埋土７<埋土３<埋土５）の違い等で分層した。埋土８は，褐色の土で粘性が非常に強くしまりのない土である。埋土８の上層の一部に，にぶい赤褐色の土（XIV層）が堆積している。

出土遺物　埋土中からは，１点の土器片が出土し，図化した。57（第95図）は，底部である。胴部下位には横位貝殻条痕文を６条施し，その上位に綾杉状の貝殻条痕文を施す。横位条痕文を綾杉状の条痕文が切っていることからその施文順は，横位貝殻条痕文が先となる。底部外面端部には，明確なキザミは確認できない。

土器分類　57は，Ⅳ類に該当する。

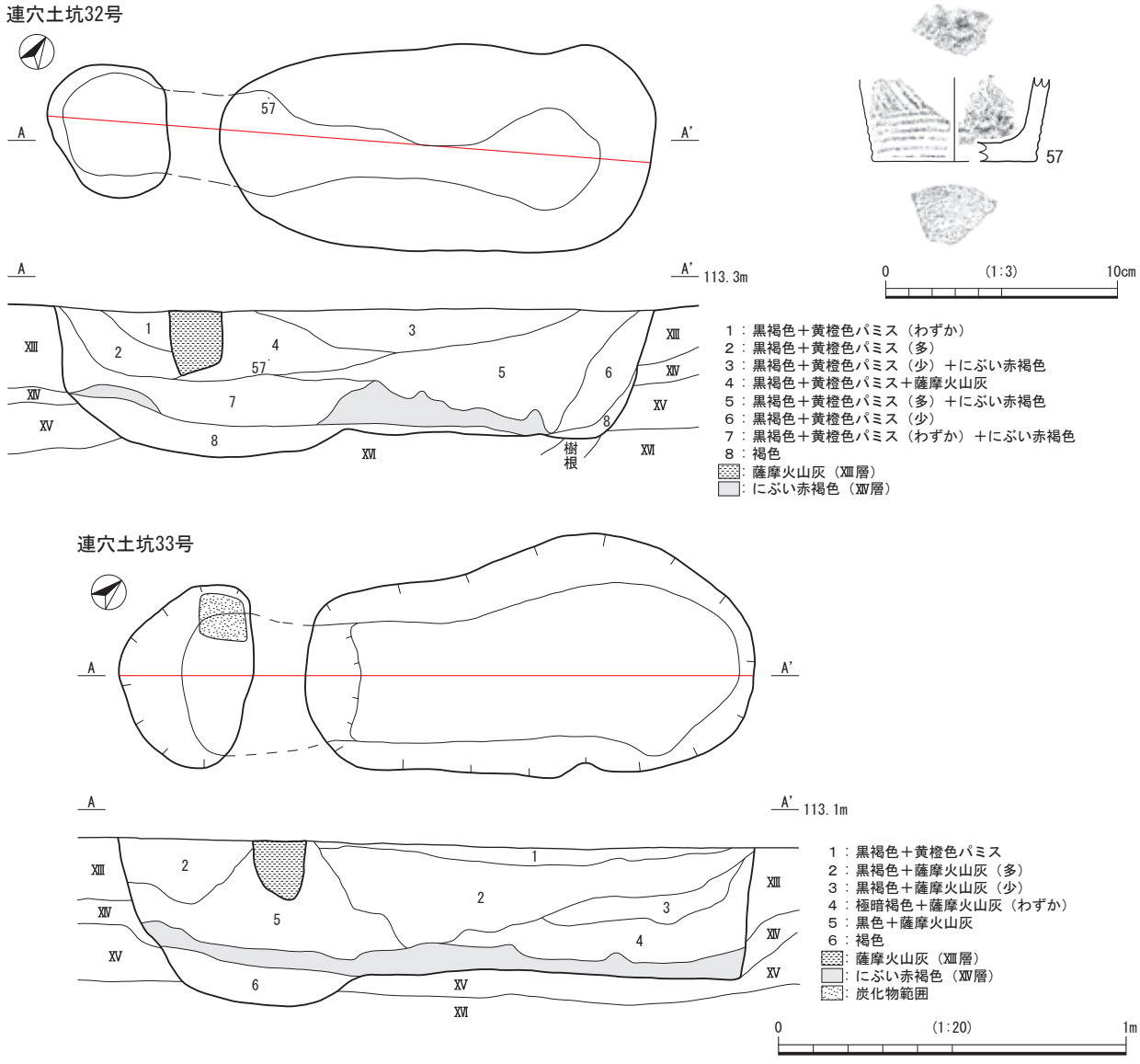
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑33号（SV33：第95図）

検出状況　SV33は，K-52区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類



第95図　連穴土坑32号・出土遺物・連穴土坑33号

に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（ＢＣ）である。従穴部は底面から，ラッパ状に立ち上がる。主穴部は，最深部位置から急傾斜で立ち上がった後，段を有して水平に広がり，壁面で垂直に開口する。ブリッジ断面は，主穴部側に丸みをもつ舌状形である。

規　　模　全長は1.83ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，やや長めの長さである。主従値は4.46で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が小さめである。

埋　　土　埋土は，７つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，ともに黒褐色の土である。色調の明るさ（埋土２<埋土１<埋土３）や混入しているパミスやその包含量（埋土１：黄橙色パミス・埋土２：薩摩火山灰>埋土３：薩摩火山灰）の違い等で分層した。埋土４は，極暗褐色の土にわずかに薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。埋土５は，黒色の土に薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。埋土６は，褐色で粘性が非常に強くしまりのない土である。また，埋土６の上層には，にぶい赤褐色の土（XIV層）が堆積している。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　従穴部の底面付近で採取した炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，8,139-7,968calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑34号（SV34：第96図）

検出状況　SV34は，Ｌ-55区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（Ｂ）である。従穴部は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がった後，壁面で急傾斜に開口する。ブリッジ断面は，検出面が平坦でやや横長の半円形状である。

規　　模　全長は1.63ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は7.25で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋　　土　埋土は，８つに分かれる。埋土１・埋土５・埋土６は，ともに黒褐色の土で黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土５<埋土１<埋土６）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土５>埋土６）の違い等で分層した。埋土２は，極暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土だが，黄橙色パミスの包含量の方がやや多い。埋土３は，黒色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土だが，薩摩火山灰（XIII層）の包含量の方がやや多い。埋土４は，にぶい赤褐色の土（XIV層）に薩摩火山灰（XIII層）のパミスを多く含む土である。埋土７は，黒褐色の土で，粘性が非常に強くしまりのない土である。埋土７の上層の一部に，にぶい赤褐色の土（XIV層）が堆積している。

出土遺物　出土していない。

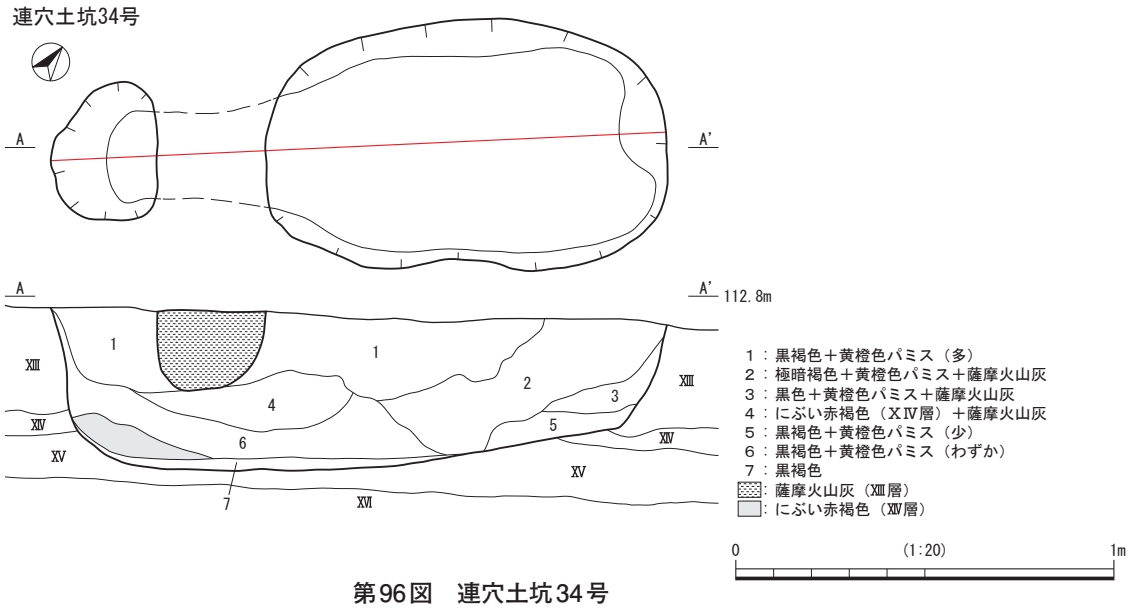
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

連穴土坑35号（SV35：第97図）

検出状況　SV35は，Ｌ・Ｍ-55区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（Ｂ）である。従穴部は，底面から一度ラッパ状に立ち上がった後，一段有した後垂直に開口する。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がった後，壁面



第96図　連穴土坑34号

でほぼ垂直になって，その後急傾斜で開口する。ブリッジ断面は，下部がやや幅狭となる横長の長方形状で，主穴部から従穴部にかけて掘り込まれている。

規　　模　全長は2.05ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，４番目に長い。主従値は3.27で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が５番目に小さい。

埋　　土　埋土は，６つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XⅢ層）を含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。埋土３・埋土４は，ともに暗褐色の土である。色調の明るさ（埋土３>埋土４）の違い等で分層した。また埋土４には，薩摩火山灰（XⅢ層）が混入している。埋土５は，褐色の土で，粘性が非常に強くしまりがない土である。主穴部の底面の一部には，にぶい赤褐色の土（XⅣ層）が堆積している。

出土遺物　出土していない。

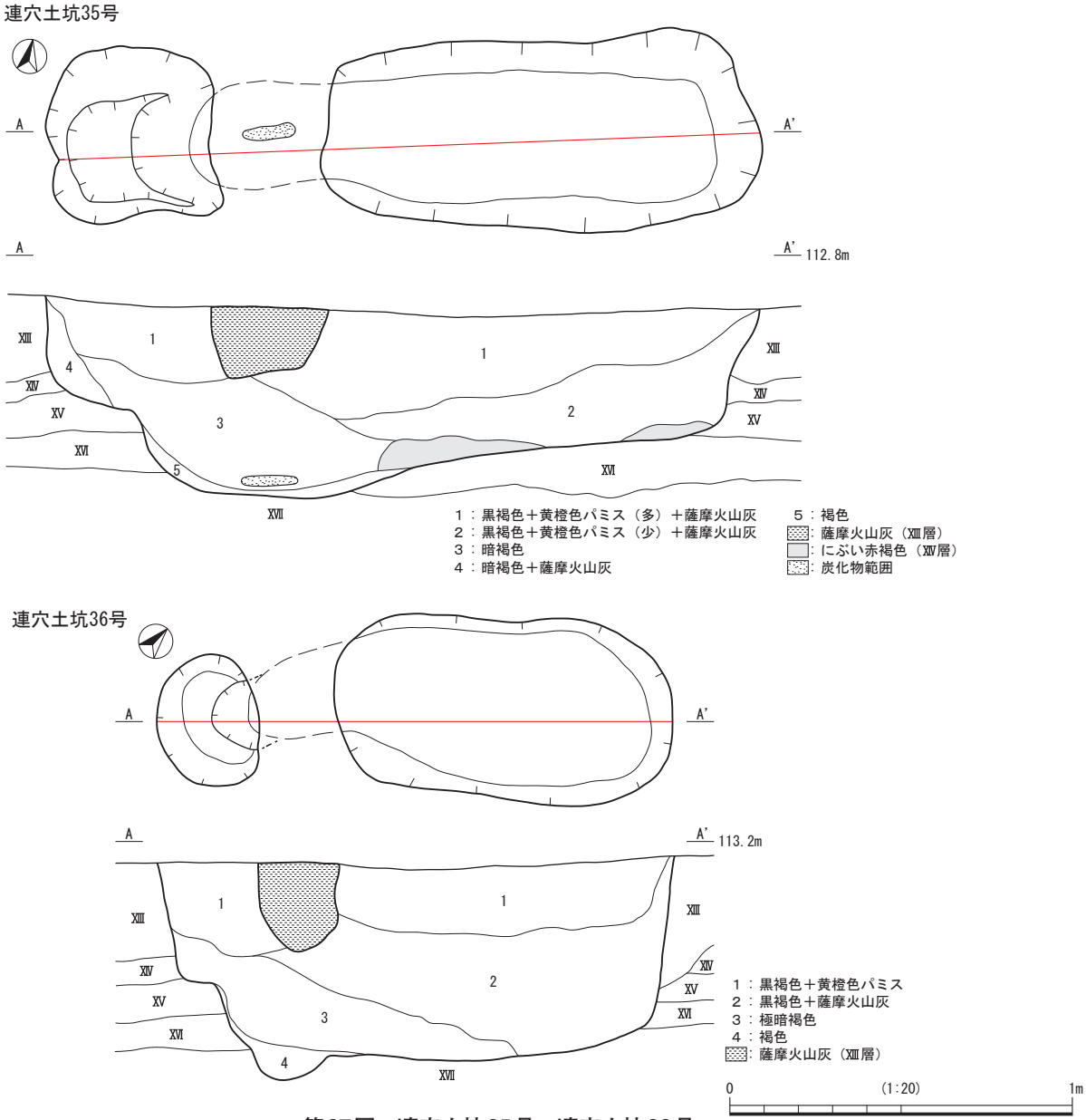
炭 化 物　従穴部の底面付近で採取した炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，8,134-7,969calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑36号（SV36：第97図）

検出状況　SV36は，M・N-57区において，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（B）である。従穴部は，底面から急傾斜で立ち上が



第97図　連穴土坑35号・連穴土坑36号

り，一段有した後，やや垂直に開口する。主穴部は，ほぼ水平に広がり壁面でやや垂直に開口する。ブリッジ断面は，主穴部側の一部がやや掘り込まれている逆釣鐘状である。

規　　模　全長は1.51ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，３番目に短い長さである。主従値は4.36で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は，４つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土である。色調の明るさ（埋土１＜埋土２）や混入するパミス（埋土１：黄橙色パミス・埋土２：薩摩火山灰）の違い等で分層した。埋土３は，極暗褐色の土で，粘性が若干ある土である。埋土４は，褐色の土で，粘性が強くしまりがない土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や焼土は，確認されなかった。

連穴土坑37号（SV37：第98図）

検出状況　SV37は，Ｎ-57区において，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（ＢＣ）である。従穴部は，底面からやや垂直気味に立ち上がる。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がった後，壁面で急傾斜で開口する。ブリッジ断面は，従穴部は下部が幅狭くなるような弧状形に，主穴部はほぼ垂直に掘り込まれている。

規　　模　全長は1.67ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は4.81で，本遺跡の中では，平均的な主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は６つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土４は，ともに黒褐色の土である。色調の明るさ（埋土２＜埋土１＜埋土４）や混入するパミス（埋土１と埋土２：黄橙色パミス・埋土４：薩摩火山灰）の違い等で分層した。埋土３は，黒色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）をわずかに含む土である。埋土５は，暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土であるが，若干黄橙色パミスの方が多く含まれる。埋土２と埋土３を切るように，にぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）が堆積している。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や焼土は，確認されなかった。

連穴土坑38号（SV38：第99図）

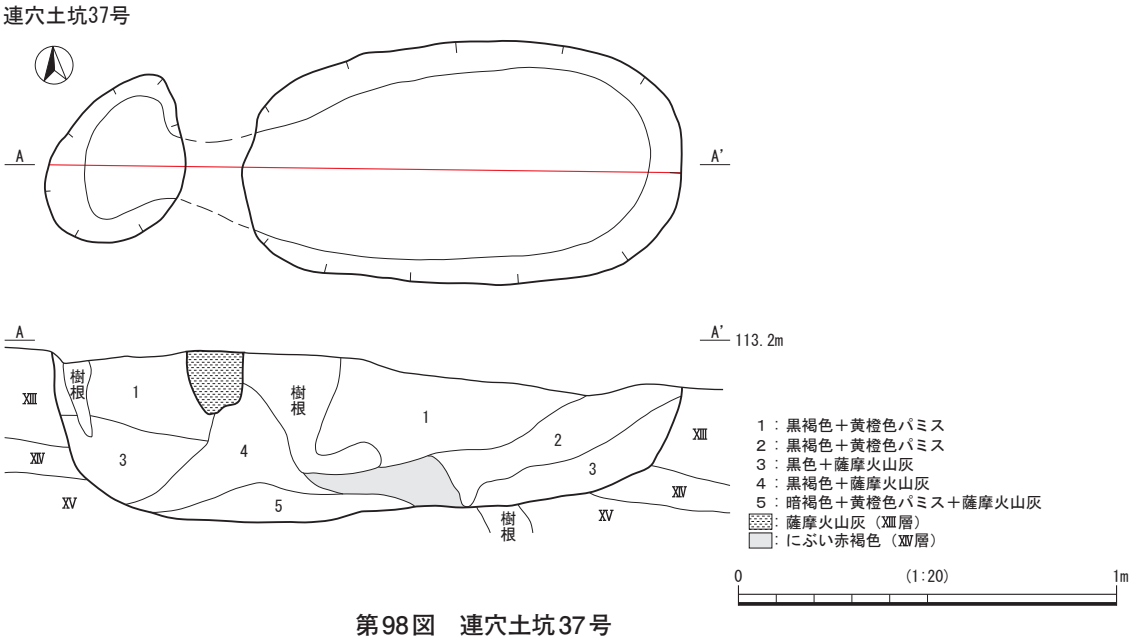
検出状況　SV38は，Ⅰ-52区において，Ⅻ層上面で検出された。検出時は，連穴土坑と意識せず調査を開始した。半裁中に薩摩火山灰（Ⅻ）層をブリッジにして，小土坑と大土坑がトンネルで繋がったことから，連穴土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅠ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅰ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，従穴部（Ａ）である。従穴部は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は，底面から階段状に数段有しながらスロープ状に立ち上がり，壁面では急傾斜に開口する。ブリッジ断面は，下部がやや幅狭くなる縦長の四角形状で，下部はやや丸みを帯びる。

規　　模　全長は1.96ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，長めの長さである。主従値は6.01で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に薩摩火山灰（Ｘ



第98図　連穴土坑37号

Ⅲ層）を含む土で，粘性はないがしまりは強い土である。

出土遺物　埋土中からは，１点の遺物が出土した。遺物は石器で図化した。58（第99図）は砂岩製の石皿である。扁平な円礫の表裏両面に使用痕跡が認められる。

炭 化 物　炭化物や焼土は，確認されなかった。

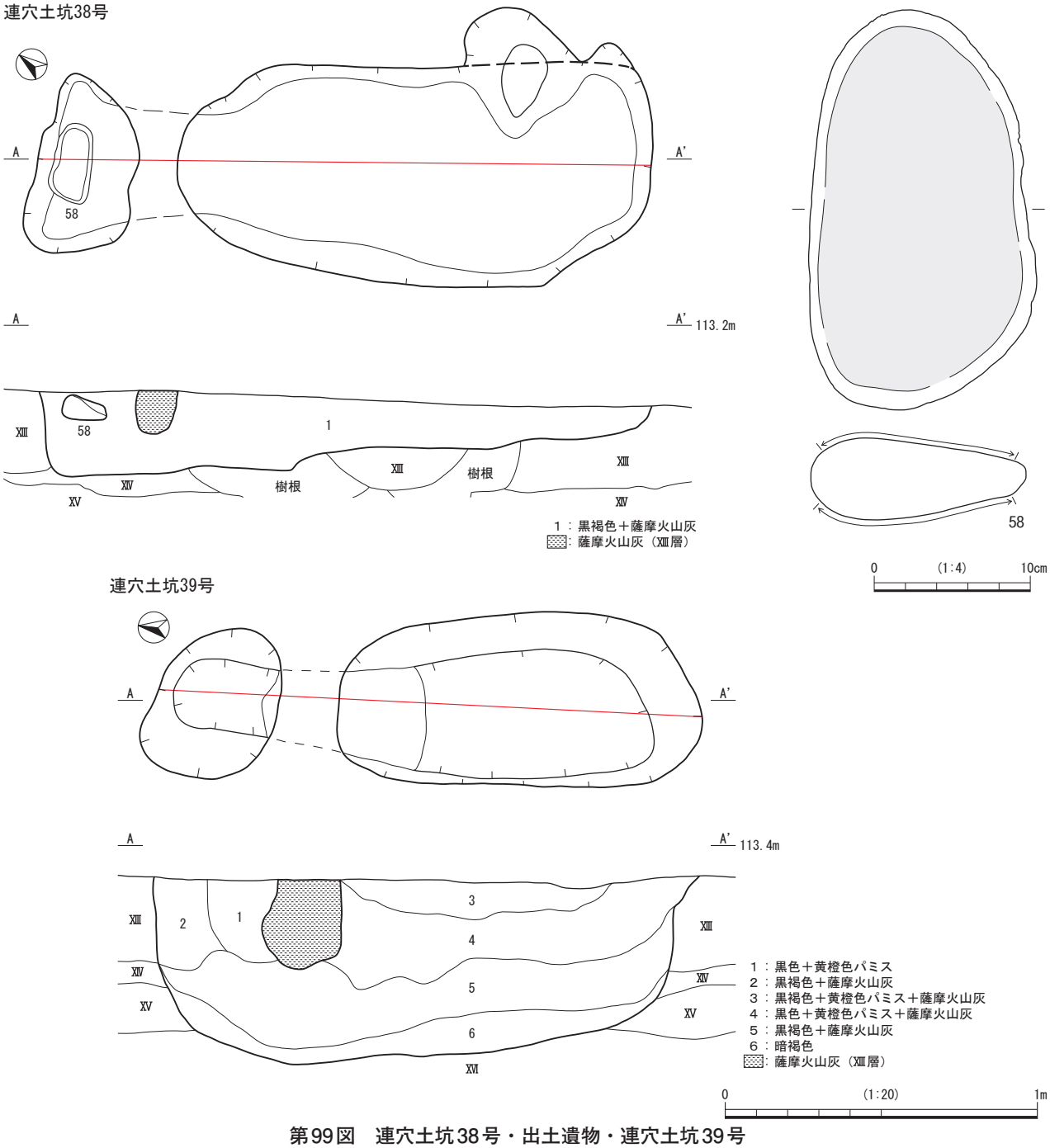
連穴土坑39号（SV39：第99図）

検出状況　SV39は，Ⅰ-48区において，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（Ｂ）である。従穴部は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は，最深部位置からスロープ状に立ち上がり，壁面でほぼ垂直になった後，急傾斜で開口する。ブリッジ断面は，主穴側には丸みのない，幅広の丸底フラスコ状である。

規　　模　全長は1.75ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は3.44で，本遺跡の中では，従穴部と主穴部の規模差が小さめである。



第99図　連穴土坑38号・出土遺物・連穴土坑39号

埋　　土　埋土は，６つに分かれる。埋土１・埋土４は，ともに黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調や黄橙色パミスの包含量は同等であるが，埋土４には，薩摩火山灰（XIII層）が混入していることから分層した。埋土２・埋土３・埋土５は，ともに黒褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。色調の明るさ（埋土２＝埋土３>埋土５）や黄橙色パミスの有無（埋土３にのみ含まれる）の違い等で分層した。埋土６は，暗褐色の土で，粘性が強くしまりのない土である。

出土遺物　出土していない。

炭 化 物　炭化物や焼土は，確認されなかった。

連穴土坑40号（SV40：第100図）

検出状況　SV40は，Ⅰ-49区において，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

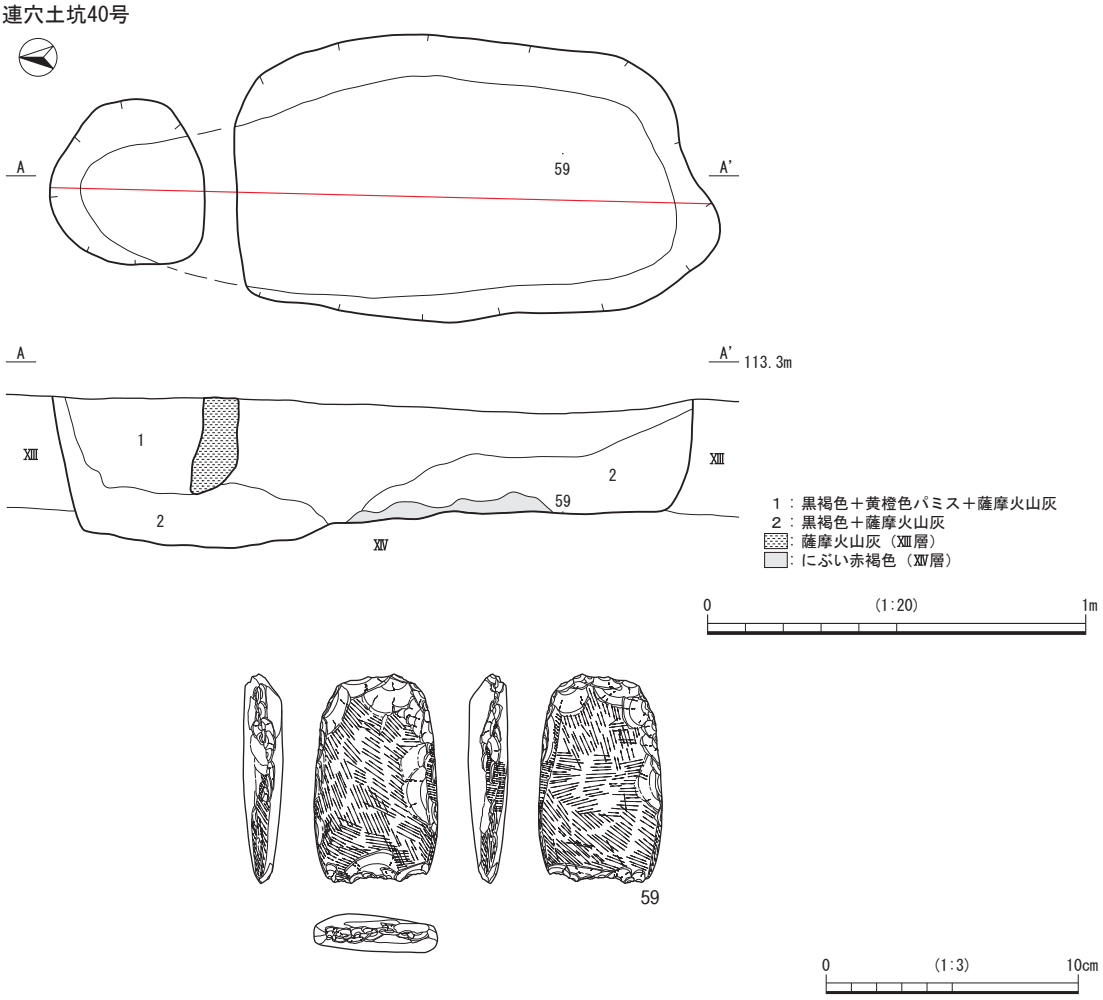
形　　状　従穴部の形状はⅢ類に，主穴部の形状はⅡ類に属し，「Ⅲ＋Ⅱ」タイプになる。最深部は，ブリッジ下（B）である。従穴部は，底面から急傾斜で立ち上がる。主穴部は，最深部位置から緩やかに立ち上がった後，水平に広がり壁面からほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は，従穴部側が尖った舌状である。

規　　模　全長は1.75ｍと本遺跡の連穴土坑の中では，平均的な長さである。主従値は5.25で，本遺跡の中では，平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋　　土　埋土は，３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。埋土１にのみ，黄橙色パミスを含むことから分層した。主穴部の底面の一部に，にぶい赤褐色の土（XIV層）が堆積している。

出土遺物　埋土中からは，１点の遺物が出土した。遺物は石器で図化した。59（第100図）は頁岩製の磨製石斧である。小型で薄手に成形しており，表裏両面及び側面を丁寧に研磨している。刃部には研磨後の剥離痕が残り，一定方向に細かく調整していることから，欠損後に再加工を施した可能性がある。

炭 化 物　炭化物や焼土は，確認されなかった。



第100図　連穴土坑40号・出土遺物

第19表　連穴土坑一覧表１

※炭化物の△は，見られたがごく少量のため採取していない。○は，採取しているが分析を行っていない。
※従穴・トンネル・主穴の欄の「—」は，不明を表す。
※炭化物・焼土の位置・遺物の欄の「—」は，無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	従穴部：タイプ			ブリッジ残存	トンネル			主穴部：タイプ			全長（m）	主従値	主穴部からみた従穴部方向	炭化物	焼土	出土遺物		備　考
			主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主軸（m）	短軸（m）	高さ（m）	主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主穴÷従穴（倍）	底面傾斜	（年代測定はcalBC）	（焼土の位置）	土器	石器	
SV1	B－12･13	Ⅻ	Ⅰ			○	0.16	0.37	0.18	Ⅱ			1.58	5.89	北	—	—	—	—	SH１と重複
			0.22	0.38	0.43					1.20	0.41	0.29		5.50	Ⓐ-Ⓑ-Ⓒ-Ⓓ					
SV2	C－13	Ⅻ	Ⅰ			○	0.09	0.45	0.14	Ⅱ			1.81	2.54	西	△	—	—	—	
			0.38	0.68	0.32					1.34	0.49	0.27		3.50	A-B→Ⓒ←D					
SV3	D－13	Ⅻ	Ⅰ			△	0.16	—	—	Ⅱ			2.08	5.77	北西	○	—	○	—	
			0.31	0.54	0.44					1.61	0.60	0.41		5.20	A→Ⓑ←C-D					
SV4	E－6	Ⅻ	Ⅲ			○	0.28	0.40	0.18	Ⅱ			1.95	9.26	北西	△	—	—	—	
			0.29	0.37	0.41					1.38	0.72	0.12		4.80	Ⓐ-Ⓑ-Ⓒ←D					
SV5	E－6	Ⅻ	Ⅰ			○	0.11	0.47	0.35	Ⅱ			1.77	7.53	北	—	—	—	—	
			0.27	0.41	0.55					1.39	0.60	0.55		5.10	Ⓐ-Ⓑ-Ⓒ←D					
SV6	E－7	Ⅻ	Ⅲ			○	0.14	0.37	0.32	Ⅱ			1.67	5.98	南西	従穴8,149-7,966 主穴8,010-7,781	—	—	○	
			0.34	0.41	0.47					1.19	0.70	0.42		3.50	Ⓐ-Ⓑ←C-D					
SV7	E－8	Ⅻ	Ⅰ			×	0.09	0.28	—	Ⅱ			1.72	7.41	南西	8,235-7,963	—	—	—	
			0.25	0.38	0.44					1.38	0.51	0.35		5.50	Ⓐ←B-C-D					
SV8	E－9	Ⅻ	Ⅰ			△	0.09	0.51	—	Ⅱ			1.59	6.94	西	△	—	—	—	
			0.31	0.45	0.48					1.18	0.82	0.28		3.80	Ⓐ-Ⓑ-Ⓒ←D					
SV9	B－13･14	Ⅻ	Ⅲ			△	0.09	0.42	—	Ⅱ			1.68	3.13	南東	—	—	—	—	SH３と重複
			0.45	0.55	0.49					1.14	0.68	2.5		0.39	Ⓐ-Ⓑ-Ⓒ←D					
SV10	B－15	Ⅻ	Ⅲ			○	0.09	0.32	0.17	Ⅱ			1.56	3.32	北	—	—	—	—	
			0.41	0.49	0.42					1.06	0.63	0.41		2.60	A→Ⓑ←C←D					
SV11	A－16	Ⅻ	Ⅰ			△	0.06	0.39	—	Ⅱ			1.50	3.47	北西	—	—	—	—	
			0.34	0.56	0.41					1.10	0.60	0.26		3.20	A→Ⓑ-Ⓒ←D					

第20表　連穴土坑一覧表２

※炭化物の△は，見られたがごく少量のため採取していない。○は，採取しているが分析を行っていない。
※従穴・トンネル・主穴の欄の「—」は，不明を表す。
※炭化物・焼土の位置・遺物の欄の「—」は，無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	従穴部：タイプ			ブリッジ残存	トンネル			主穴部：タイプ			全長（m）	主従値	主穴部からみた従穴部方向	炭化物	焼土	出土遺物		備　考
			主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主軸（m）	短軸（m）	高さ（m）	主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主穴÷従穴（倍）	底面傾斜	（年代測定はcalBC）	（焼土の位置）	土器	石器	
SV12	A－15･16	XIII	—			×	—	—	—	—			1.55	—	北	8,273-8,170	—	○		
			—	—	—					—	—	—		—	—					
SV13	C－16	XIII	III			○	0.27	0.36	0.21	II			1.71	6.49	北西	—	—	—	○	
			0.30	0.41	0.39					1.14	0.70	0.43		3.80	A-B→Ⓒ←D					
SV14	C・D－11・12	XIII	—			×	—	—	—	—			1.54	—	南西	8,233-7,964	—	—	—	
			—	—	—					—	—	—		—	—					
SV15	C・D－11	XIII	—			×	—	—	—	—			—	—	南西	△	—	—	—	
			—	—	—					—	—	—		—	—					
SV16	D－11	XIII	I			○	0.23	0.23	0.37	—			—	—	北	—	—	—	—	SV17と重複
			0.33	0.53	0.37					—	—	—		—	—					
SV17	C・D－11	XIII	I			○	0.11	0.19	0.35	II			—	—	南	△	—	—	—	SV16と重複
			0.41	0.66	0.62					—	—	—		—	A→Ⓑ-Ⓒ←D					
SV18	F－22	XIII	I			△	0.19	—	—	II			1.89	3.36	西	△	○ ブリッジ・主穴部底面	○	—	
			0.40	0.57	0.32					1.30	0.59	0.53		3.30	A→Ⓑ←C←D					
SV19	B－20	XIII	I			○	0.30	0.40	0.45	II			1.72	8.60	南西	8,230-7,964	—	—	—	
			0.24	0.40	0.40					1.18	0.70	0.46		4.90	A→Ⓑ←C←D					
SV20	C－21･22	XIII	III			△	0.05	0.55	0.25	II			2.35	2.85	南西	8,150-7,965	—	—	—	
			0.59	0.65	0.34					1.71	0.64	0.24		2.90	Ⓐ←B←C-D					
SV21	C－27	XIII	I			○	0.20	0.46	0.30	II			1.82	5.83	東	—	—	—	—	SH13と重複
			0.30	0.46	0.34					1.32	0.61	0.63		4.40	A→B→C→Ⓓ					
SV22	D・E－30	XIII	III			○	0.19	0.25	0.18	II			1.73	8.54	北	○	—	—	—	
			0.23	0.30	0.25					1.31	0.60	0.30		5.70	A-B→Ⓒ-Ⓓ					

第21表　連穴土坑一覧表３

※炭化物の△は，見られたがごく少量のため採取していない。○は，採取しているが分析を行っていない。
※従穴・トンネル・主穴の欄の「—」は，不明を表す。
※炭化物・焼土の位置・遺物の欄の「—」は，無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	従穴部：タイプ			ブリッジ残存	トンネル			主穴部：タイプ			全長（m）	主従値	主穴部からみた従穴部方向	炭化物	焼土	出土遺物		備　考
			主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主軸（m）	短軸（m）	高さ（m）	主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主穴÷従穴（倍）	底面傾斜	（年代測定はcalBC）	（焼土の位置）	土器	石器	
SV23	E-41	XIII	I			○	0.15	0.28	0.43	II			1.55	2.41	北東	8,232-7,956	—	○	—	
			0.40	0.57	0.63					1.00	0.55	0.46		2.50	Ⓐ-Ⓑ←C←D					
SV24	J-54	XI	III			○	0.07	0.23	0.20	II			2.04	5.22	西	—	—	○	○	
			0.49	0.48	0.62					1.48	0.83	0.60		3.00	A→Ⓑ-Ⓒ←D					
SV25	J-51	XI	I			△	—	—	—	II			2.09	8.55	西	—	—	—	—	
			0.30	0.55	0.52					1.68	0.84	0.55		5.60	A→Ⓑ-Ⓒ-Ⓓ					
SV26	I-51･52	XIII	I			○	0.11	0.31	0.21	II			1.87	7.08	北	—	—	○	—	
			0.34	0.46	0.31					1.42	0.78	0.33		4.20	A→Ⓑ-Ⓒ←D					
SV27	H-52	XIII	III			○	0.23	0.23	0.19	II			1.92	6.72	北西	—	—	—	—	
			0.35	0.41	0.34					1.34	0.72	0.40		3.80	A→Ⓑ←C←D					
SV28	J-53	XIII	III			○	0.08	0.21	0.23	II			1.45	5.13	北	—	—	—	—	
			0.31	0.36	0.37					1.06	0.54	0.34		3.40	Ⓐ←B←C←D					
SV29	L-54	XI	III			○	0.10	0.30	0.38	II			1.86	8.46	西	8,274-8,170	—	—	—	
			0.33	0.41	0.75					1.43	0.80	0.78		4.30	A→Ⓑ-Ⓒ←D					
SV30	L-52	XIII	III			○	0.13	0.39	0.19	II			1.55	5.23	西	—	—	○	—	
			0.31	0.39	0.37					1.11	0.57	0.32		3.60	Ⓐ-Ⓑ←C-D					
SV31	K-54	XIII	I			○	0.20	0.29	0.15	II			1.72	3.83	南	—	—	○	—	
			0.36	0.48	0.45					1.16	0.57	0.44		3.20	A→Ⓑ←C←D					
SV32	K-53	XIII	III			○	0.15	0.24	0.24	II			1.74	5.50	南西	—	—	○	—	
			0.35	0.38	0.32					1.24	0.59	0.36		3.50	A→Ⓑ-Ⓒ←D					
SV33	K-52	XIII	III			○	0.15	0.37	0.31	II			1.83	4.46	南西	8,139-7,968	—	—	—	
			0.39	0.49	0.41					1.29	0.66	0.35		3.30	A→Ⓑ-Ⓒ-D					

第22表　連穴土坑一覧表４

※炭化物の△は，見られたがごく少量のため採取していない。○は，採取しているが分析を行っていない。
※従穴・トンネル・主穴の欄の「—」は，不明を表す。
※炭化物・焼土の位置・遺物の欄の「—」は，無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	従穴部：タイプ			ブリッジ残存	トンネル			主穴部：タイプ			全長（m）	主従値	主穴部からみた従穴部方向	炭化物	焼土	出土遺物		備　考
			主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主軸（m）	短軸（m）	高さ（m）	主軸（m）	短軸（m）	深さ（m）		主穴÷従穴（倍）	底面傾斜	（年代測定はcalBC）	（焼土の位置）	土器	石器	
SV34	L-55	XIII	Ⅲ			○	0.24	0.23	0.21	Ⅱ			1.63	7.25	南西	—	—	—	—	
			0.28	0.35	0.39					1.11	0.64	0.35		4.00	A→Ⓑ←C←D					
SV35	L・M-55	XIII	Ⅲ			○	0.33	0.31	0.36	Ⅱ			2.05	3.27	西	8,134-7,969	—	—	—	
			0.44	0.49	0.30					1.28	0.55	0.35		2.90	A→Ⓑ←C←D					
SV36	M・N-57	XIII	Ⅲ			○	0.23	0.25	0.37	Ⅱ			1.51	4.36	南西	—	—	—	—	
			0.30	0.39	0.35					0.98	0.52	0.54		3.30	A→Ⓑ←C←D					
SV37	N-57	XIII	Ⅲ			○	0.15	0.19	0.22	Ⅱ			1.67	4.81	西	—	—	—	—	
			0.36	0.41	0.37					1.11	0.64	0.34		3.10	A→Ⓑ-Ⓒ←D					
SV38	I-52	XIII	Ⅰ			○	0.13	0.34	0.13	Ⅱ			1.96	6.01	北西	—	—	—	○	
			0.32	0.55	0.27					1.51	0.70	0.14		4.70	Ⓐ←B←C←D					
SV39	I-48	XIII	Ⅲ			○	0.19	0.24	0.31	Ⅱ			1.75	3.44	北	—	—	—	—	
			0.39	0.48	0.52					1.17	0.55	0.53		3.00	A→Ⓑ←C←D					
SV40	I-49	XIII	Ⅲ			○	0.09	0.40	0.17	Ⅱ			1.75	5.25	北	—	—	—	○	
			0.41	0.43	0.37					1.25	0.74	0.27		3.00	A→Ⓑ←C←D					

(4)　土坑（略記号：SK）

土坑は，平成23年度の調査で７基，平成24年度の調査で20基，平成25年度の調査で53基，平成26年度の調査で24基の計104基が検出された。

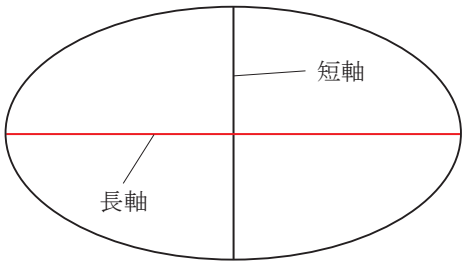
本報告書では，下記に示すように土坑の各部分に名称を付し，規模を計測した。

長　軸：検出面で，土坑のほぼ中心を通り，その土坑の広がりが長い方の長さ。

短　軸：長軸の真ん中を通り，長軸に対して垂直に広がる長さ。

方　位：長軸がのびている方角。

最深部深さ：長軸で，その土坑で最も深い部分の長さ。



第101図　土坑の各部の名称

形　状　土坑の形状について，形状を把握するため形状値（短軸÷長軸）をもとめ，以下のような定義を設定した。また，形状の定義は連穴土坑の定義と同じである。

横　　長：形状値が，0.7未満で，長軸に対して左右に広がる形。

不定形横長：形状が整っていないと判断した横長。

方形・円形：形状値が，0.7～１のもの。

不定形方形：形状が整っていないと判断した方形。

不定形円形：形状が整っていないと判断した円形。

規　模　長軸及び短軸を把握できた土坑は94基である。検出層に違いがあることから一概にはいえないが，長軸が最大のものはSK21（検出層：Ⅻ層）で2.77ｍ，最小のものはSK94（検出層：Ⅹ層）で0.40ｍ，平均値は1.19ｍであった。短軸が最大のものはSK67（検出層：Ⅻ層）で1.80ｍ，最小のものはSK94（検出層：Ⅹ層）で0.36ｍ，平均値は0.66ｍであった。

第23表　長軸・短軸の平均値及び最大値・最小値

	長　軸	短　軸
平均値（ｍ）	1.19	0.66
最大値（ｍ）	2.77（SK21）	1.80（SK67）
最小値（ｍ）	0.40（SK94）	0.36（SK94）

検出状況　単独で検出された土坑は98基である。他の遺構と切り合って検出された土坑は6基である。そのうち，土坑54号は竪穴住居跡3号と重複して検出され，土坑4号・7号の２基は土坑67号と重複して検出された。また，土坑99号と土坑100号は互いに重複して検出された。

第24表　土坑の検出層

検出層	基数（割合）
Ⅹ 層	２基（2.0%）
Ⅺ 層	４基（3.8%）
Ⅻ 層	９基（8.7%）
ⅩⅢ層	89基（85.6%）

タイプ　形態分類のことである。以下の５つのタイプに分類した。

タイプⅠ：平面形状が横長，もしくは不定形横長で，規模や断面形状などの形相から，連穴土坑を想見させるもの。

タイプⅡ：平面形状が横長，もしくは不定形横長で，断面形状などの形相から，連穴土坑を想見させるもの。タイプⅠより大型もしくは小型と判断したもの。

タイプⅢ：検出面の形状が横長・不定形横長のもの。

タイプⅣ：検出面の形状が円形・方形・不定形円形・不定形方形のもの。

タイプⅤ：柱穴状の形状で，掘り込みが深いもの。

不　　明：調査区外へ広がるか，攪乱の影響等で全形状が把握できないもの。

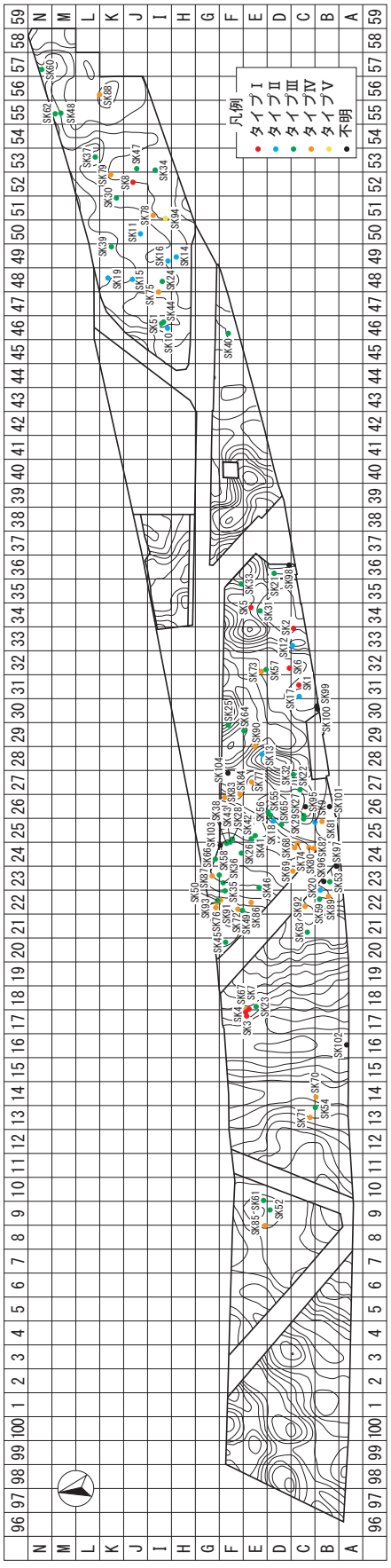
分　布　Ⅰ～Ⅳ類のタイプ毎に色を付け，土坑の分布（第102図）を示す。

Ⅰ類：●　Ⅱ類：●　Ⅲ類：●　Ⅳ類：●
Ⅴ類：●　不明：●

調査区Ｂ～Ｆに広く分布するが，分布密度は調査区ＤとＦが高い。特に，調査区Ｄの西端（Ｂ～Ｇ-21～27区）に密集する。その範囲に分布する土坑は，タイプⅢ・Ⅳが多い。また，タイプⅠやⅡは，土坑の密集範囲からやや外れた範囲に広がる。調査区Ａ・Ｇでは検出されていない。調査区Ｂでは，東端にのみ分布する。調査区Ｃでは，中央外に散漫的な分布を示す。調査区Ｅでは，東端に１基のみ分布する。

以上のように，土坑の分布には調査区間で差が見られる。また，タイプによる分布にもやや差が見られる。

各土坑　本遺跡で検出された土坑を，タイプ毎，長軸と短軸の和の大きい順に報告する。



第102図　土坑タイプ別分布図

第25表　土坑の検出層毎のタイプ基数（基）

	タイプⅠ	タイプⅡ	タイプⅢ	タイプⅣ	タイプⅤ	不明
X層	—	—	1	—	1	—
XI層	—	—	1	1	—	2
XII層	—	—	3	2	—	4
XIII層	8	12	41	24	—	4
合　計	8	12	46	27	1	10

タイプⅠ

土坑１号（SK１：第103図）

検出状況　C-31区，XIII層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。南側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。北側壁面は，底面から数段有するように緩やかに立ち上がった後，急傾斜で開口する。

規　　模　長軸は2.06ｍ，短軸は0.75ｍで，最深部は0.35ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土３は，ともに暗茶褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。黄橙色パミス（埋土３>埋土１）と薩摩火山灰（埋土３>埋土１）の包含量の違い等で分層した。埋土２は，暗赤褐色の土に黄橙色パミスを含むが，薩摩火山灰（XIII層）は含まない土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑２号（SK２：第104図）

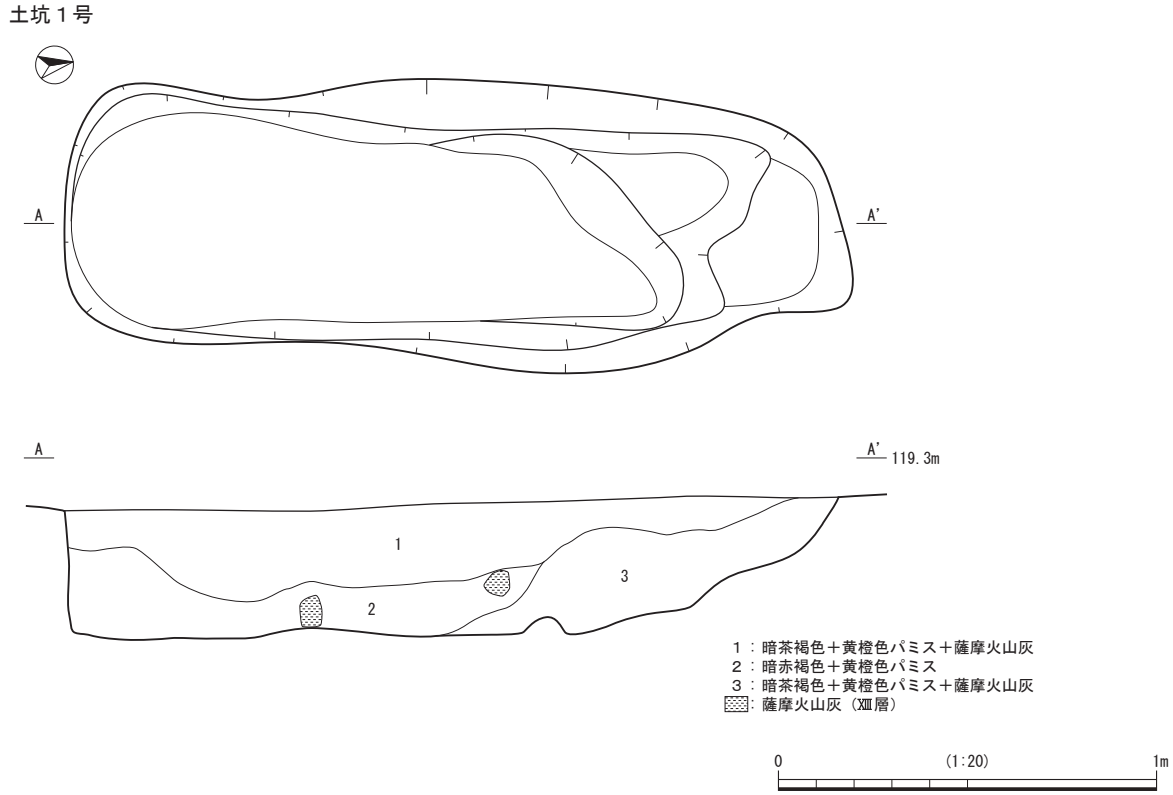
検出状況　C-33区，XIII層上面で検出された。SK２の南側には，樹根による撹乱が見られたが，SK２の一部は，その撹乱を切って構築されていた。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，南側の一部にくびれをもつ不定形横長である。底面は比較的安定している。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は，南側壁面より底面からやや緩く立ち上がる。

規　　模　長軸は1.99ｍ，短軸は0.70ｍ，最深部は0.50ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスとごくわずかに炭化物を含む土である。一部に薩摩火山灰（XIII層）のブロックが認められる。埋土２も，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含むが，



第103図　土坑１号

埋土１よりその包含量は少なく，粘性が強い土である。

出土遺物　埋土中から３点の遺物が出土した。土器片が２点，石器が１点である。いずれも図化した。60は，外反する口縁部上部に，横位貝殻刺突文を一条巡らし，直下に羽状の貝殻刺突文を施す。その下位には，条痕文は確認できない。肥厚する口唇部には，２パターン（ＸとＹとする）のキザミを施す。Ｘパターンは，６㎜（長さ）×２㎜（幅）ほどのキザミを口唇部に垂直に施す。Ｙパターンは，２～８㎜（長さ）×１㎜（幅）ほどのキザミを，口縁部外面に施した羽状の刺突文と同じ方向に施す。Ｘパターンキザミから，Ｙパターンへ移行する順が切り合い関係で観察できる。内面には，ナデをおこなう。62（第104図）は，包含層遺物１点と接合した口縁部である。外反する口縁部外面に斜位刺突文を施す。また，口唇部には幅１～３㎜ほどのキザミを施す。内面には，工具による調整やナデをおこなう。60と62は，同一個体にならない。61（第104図）は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の片面を磨面に使用している。

土器分類　60・62ともに，Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　埋土１にのみ，わずかな炭化物を確認したが，採取等は行わなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑３号（SK３：第105図）

検出状況　Ｅ-17区，Ⅻ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。北側壁面・南側壁面ともに，底面からやや急傾斜で立ち上がる。

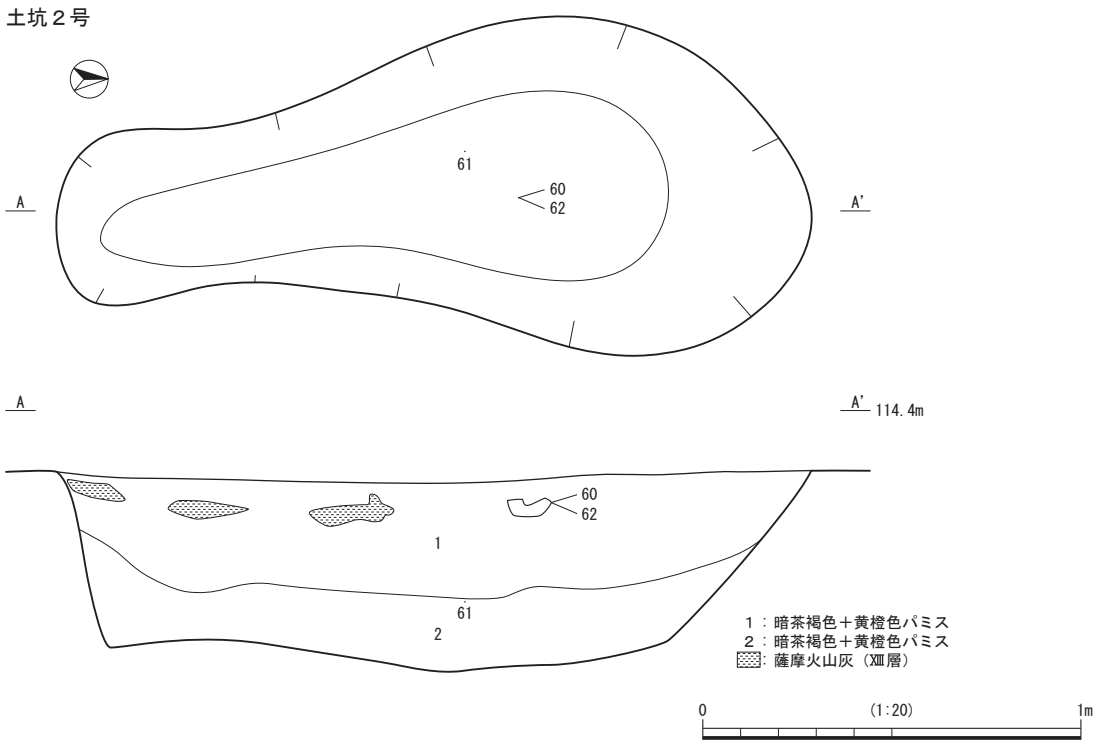
規　　模　長軸1.76ｍ，短軸0.56ｍ，最深部は0.42ｍである。

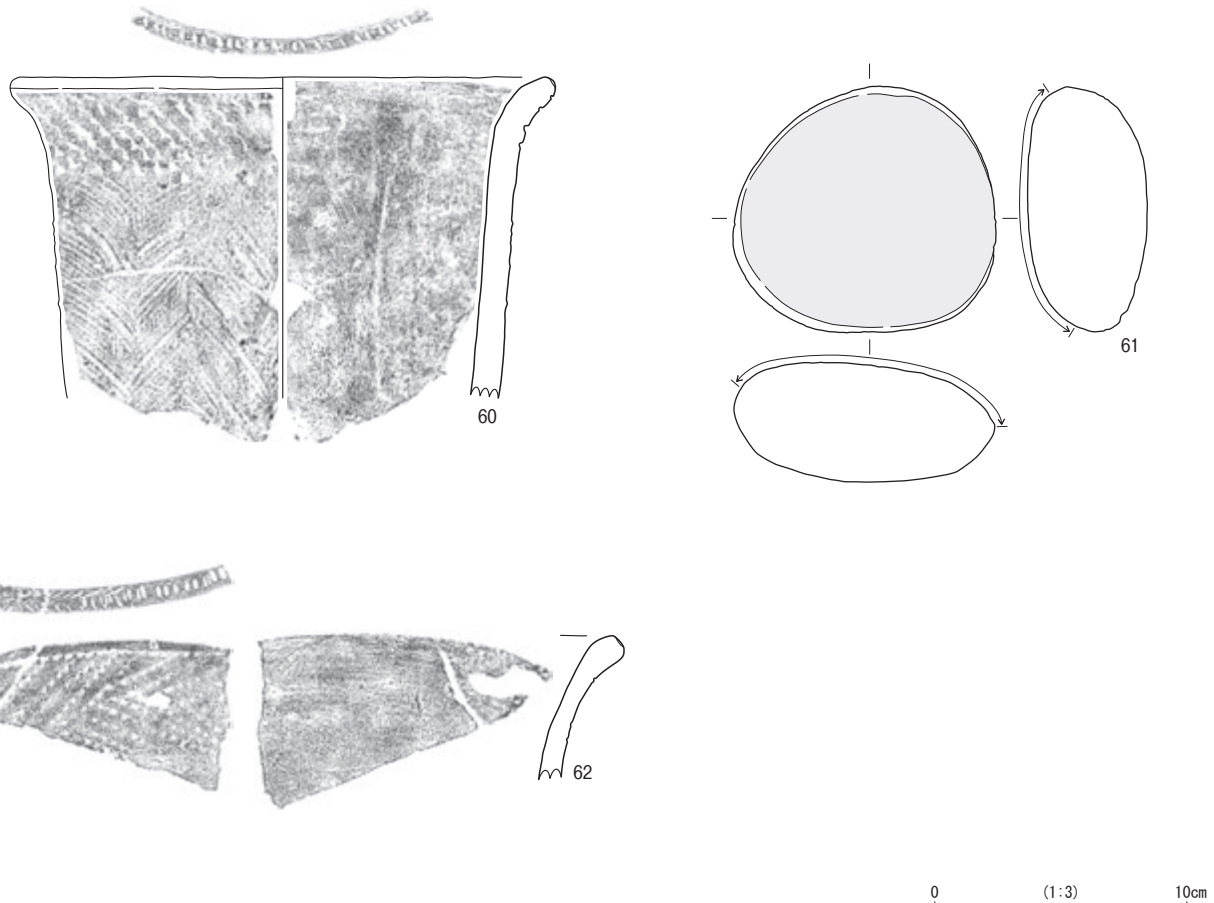
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，暗褐色の土で，黄橙色パミスをほとんど含まない土である。

出土遺物　埋土２からは，１点の遺物が出土し，図化した。63（第105図）は胴部である。上位には，刺突文のような跡が認められるが，刺突間が５㎜と長い。胴部は，横位条痕文を施すが，さほど長くはない。内面には，ナデをおこなう。

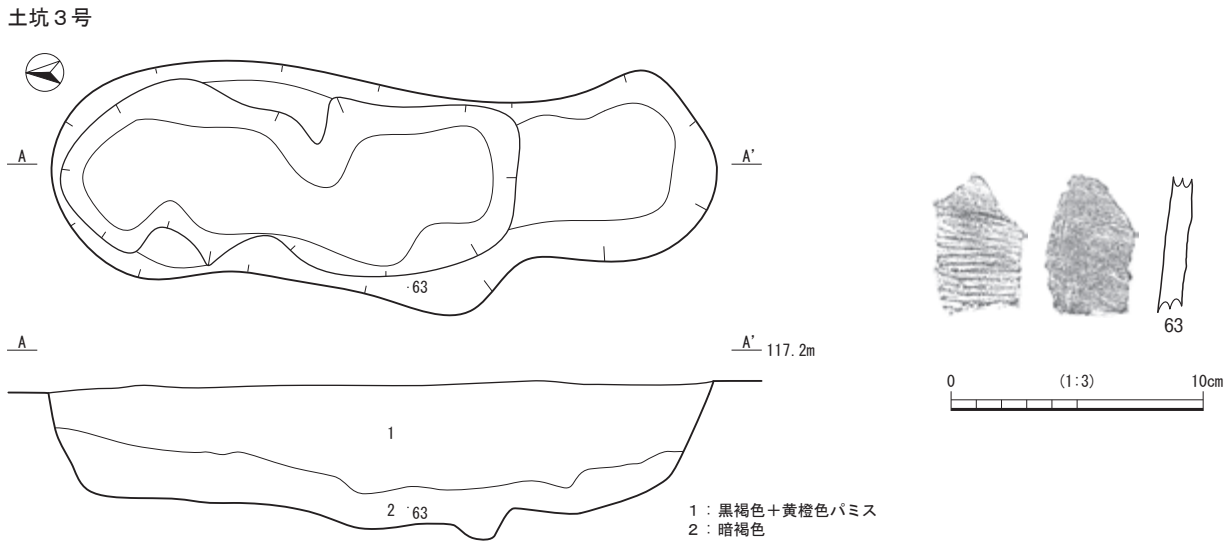
土器分類　Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。





第104図　土坑２号・出土遺物



土坑４号（SK４：第105図）

検出状況　E-17区，XⅢ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い　SK４とSK７は，SK67を切って構築されている。

形　　状　平面の形状は，横長である。西側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。東側壁面は，底面から数段有するように緩やかに立ち上がった後，急傾斜で開口する。

規　　模　長軸1.64ｍ，短軸0.61ｍ，最深部は0.35ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，暗褐色の土で黄橙色パミスを含まない土である。

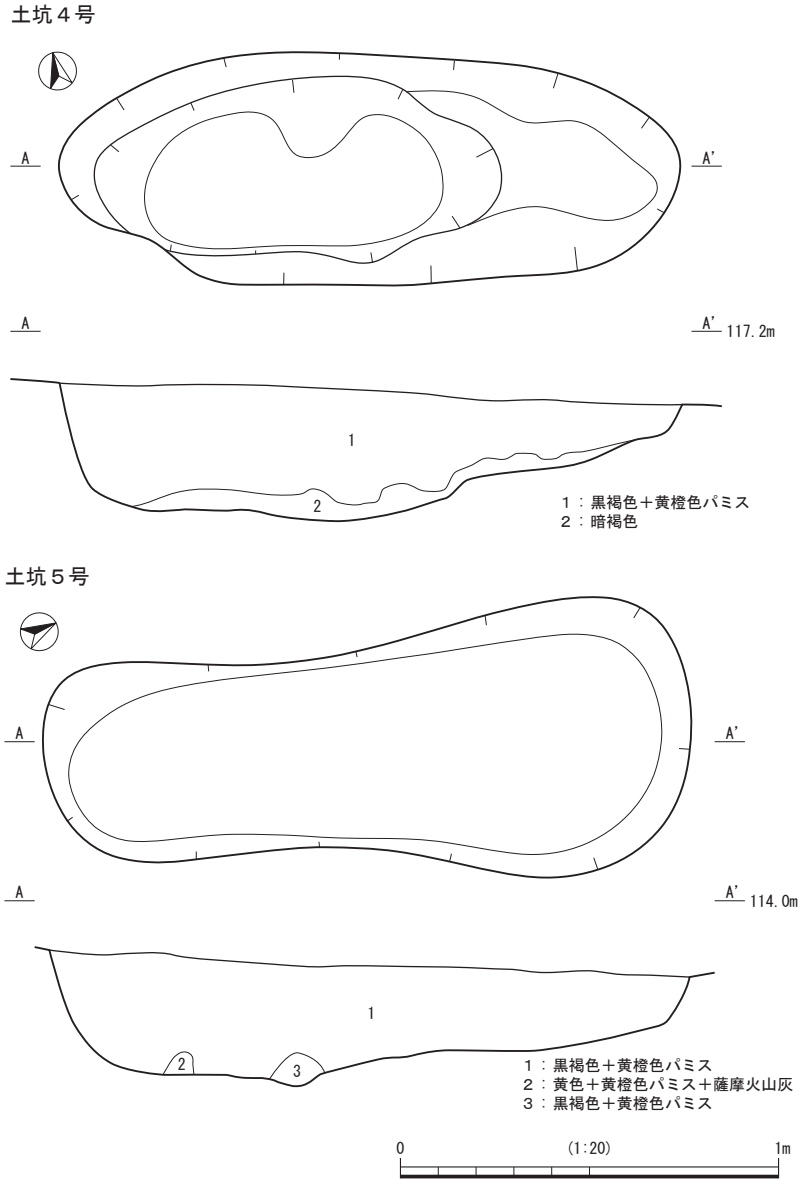
出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

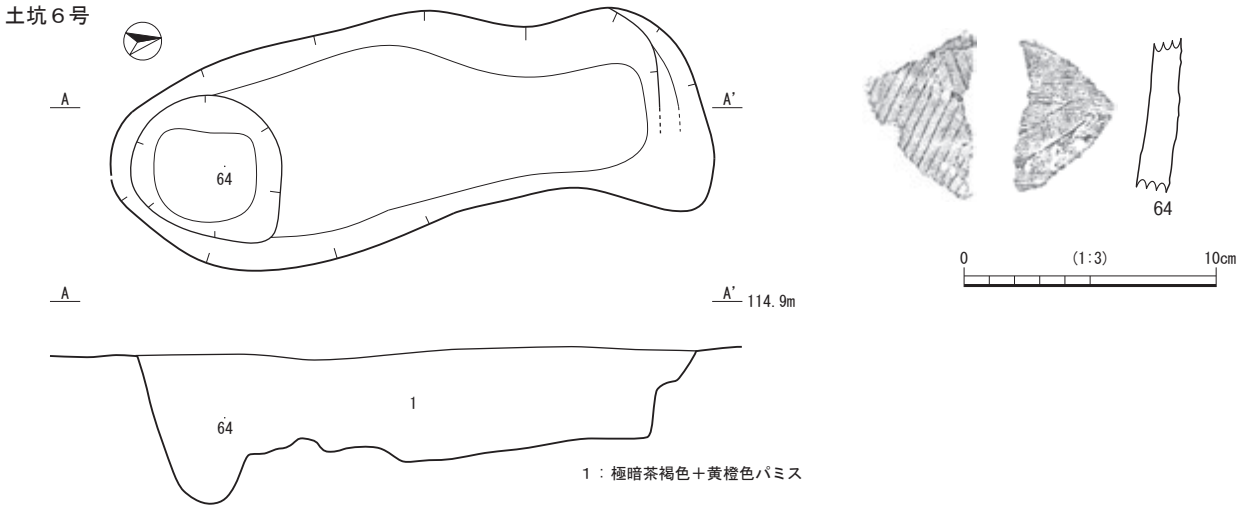
土坑５号（SK５：第105図）

検出状況　E-34区，XⅢ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い　切り合いはない。



第105図　土坑３号・出土遺物・土坑４号・土坑５号



形　　状　平面の形状は，南側の一部にくびれをもつ不定形横長である。南側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。北側は，底面中央付近からスロープ状に立ち上がった後，急傾斜で開口する。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸1.70ｍ，短軸0.53ｍ，最深部は0.32ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分けられる。埋土１・埋土３は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。その包含量（埋土１>埋土３）の違い等で分層した。埋土２は，黄色の土に多くの薩摩火山灰（Ⅻ層）と，黄橙色パミスをわずかに含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑６号（SK６：第106図）

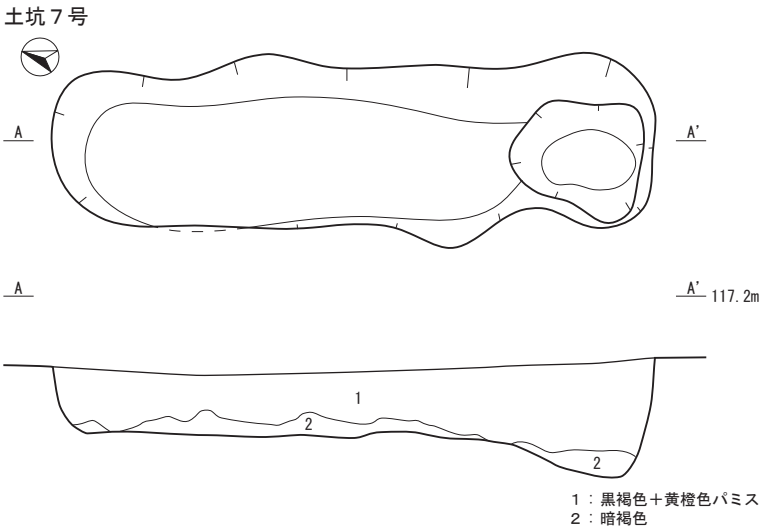
検出状況　C・D-32区，Ⅻ層上面で検出された。検出時の形状が不安定で，樹根の可能性も考慮しながら，サブトレンチを設定するなどして調査を行った。結果，SK６は，樹根の撹乱内に構築されていることが確認された。

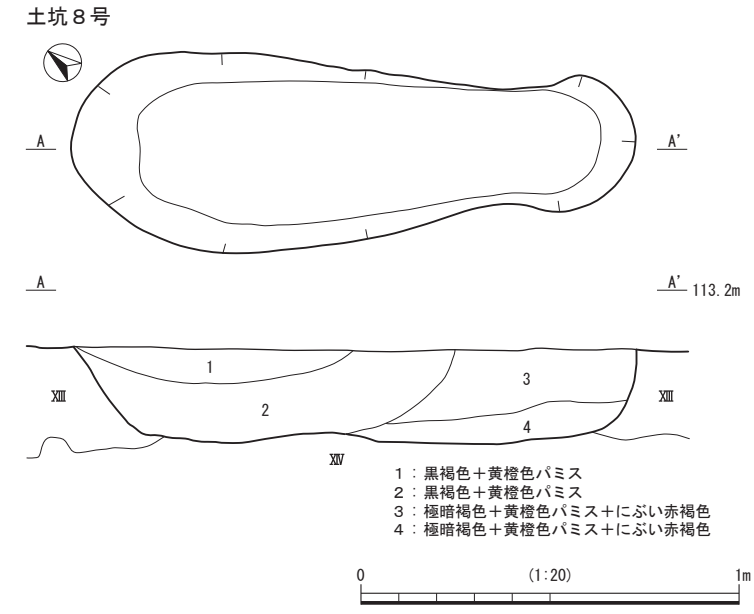
切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がった後，短く一段有して急傾斜で開口する。南側底面の一部が深くなっている。

規　　模　長軸1.50ｍ，短軸0.58ｍ，最深部は0.40ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，極暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。





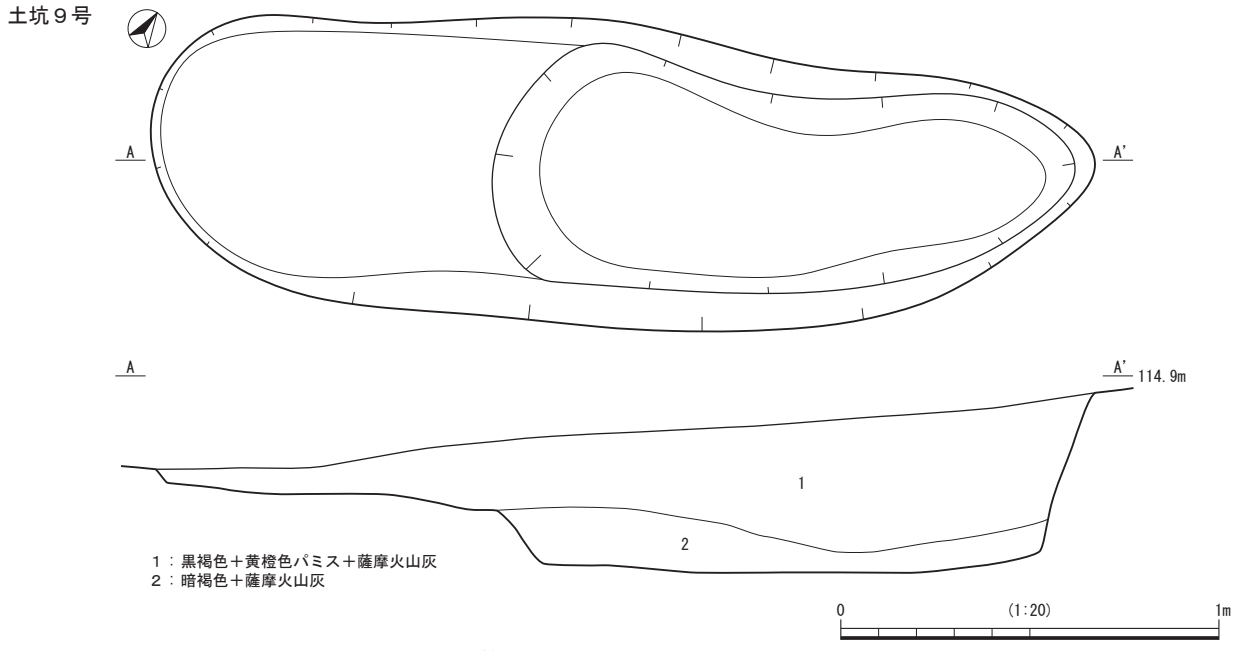
第106図　土坑６号・出土遺物・土坑７号・土坑８号

出土遺物　埋土中からは，１点の遺物が出土し，図化した。64（第106図）は胴部である。綾杉状の貝殻条痕文を施す。土器が十分に乾燥しないうちに調整を行ったのか，指によるナデの後に，下の方へ胎土が一部流れ落ちている様子も確認できる。
土器分類　64は，Ⅳ類に該当する。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑７号（SK７：第106図）
検出状況　Ｅ-17・18区，XⅢ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。
切り合い　SK７とSK４は，SK67を切って構築されている。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。北側壁面・南側壁面ともに，底面から急傾斜で立ち上がる。底面は安定しているが，南側一部のみ深くなっている。
規　　模　長軸1.59ｍ，短軸0.42ｍ，最深部は0.31ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，暗褐色の土で，黄橙色パミスを含まない土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑８号（SK８：第106図）
検出状況　Ｊ-52区，XⅢ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，南東側の一部にくびれをもつ不定形横長である。底面は安定しており，XⅣ層上部をわずかに掘り込む。北西壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。南東壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。
規　　模　長軸1.49ｍ，短軸0.45ｍ，最深部は0.24ｍである。
埋　　土　埋土は４つに分かれる。埋土１・埋土２は黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。埋土３・埋土４は，極暗褐色の土に，黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XⅣ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土３>埋土４）の違い等で分層した。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

タイプⅡ
土坑９号（SK９：第107図）
検出状況　Ｂ・Ｃ-25区，XⅢ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。中央より



第107図　土坑９号

東側壁面に向かいスロープ状に立ち上がる底面を一段有し，その段より15㎝程深い位置に西側壁面に水平に広がる底面を一段有する。東側壁面・西側壁面ともに，底面から急傾斜で開口する。

規　　模　長軸2.48ｍ，短軸0.81ｍ，最深部は0.42ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に，黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。埋土２は，暗褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）のみを含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑10号（SK10：第108図）

検出状況　Ⅰ-46区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。中央より北側壁面に向かい水平に広がる底面を一段有し，その段より10㎝程深い位置に南側壁面に水平に広がる底面を一段有する。北側壁面・南側壁面ともに，底面からほぼ垂直気味に開口する。

規　　模　長軸1.37ｍ，短軸0.70ｍ，最深部は0.34ｍである。

埋　　土　埋土は，４つに分かれる。埋土１・埋土３は，ともに黒褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とにぶい赤褐色の土（Ⅳ層）を含む土である。薩摩火山灰（埋土１>埋土３）とにぶい赤褐色の土（埋土１<埋土３）の包含量の違い等で分層した。埋土２は，極暗褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とにぶい赤褐色の土（Ⅳ層）をまだら状に含む土である。

出土遺物　埋土中からは，２点の遺物が出土した。石器が１点，礫が１点であった。石器１点を図化した。65（第108図）はホルンフェルス製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の全体を磨面に使用し、表裏中央に深い敲打痕が認められる。被熱しており右側面周辺にススが付着する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑11号（SK11：第108図）

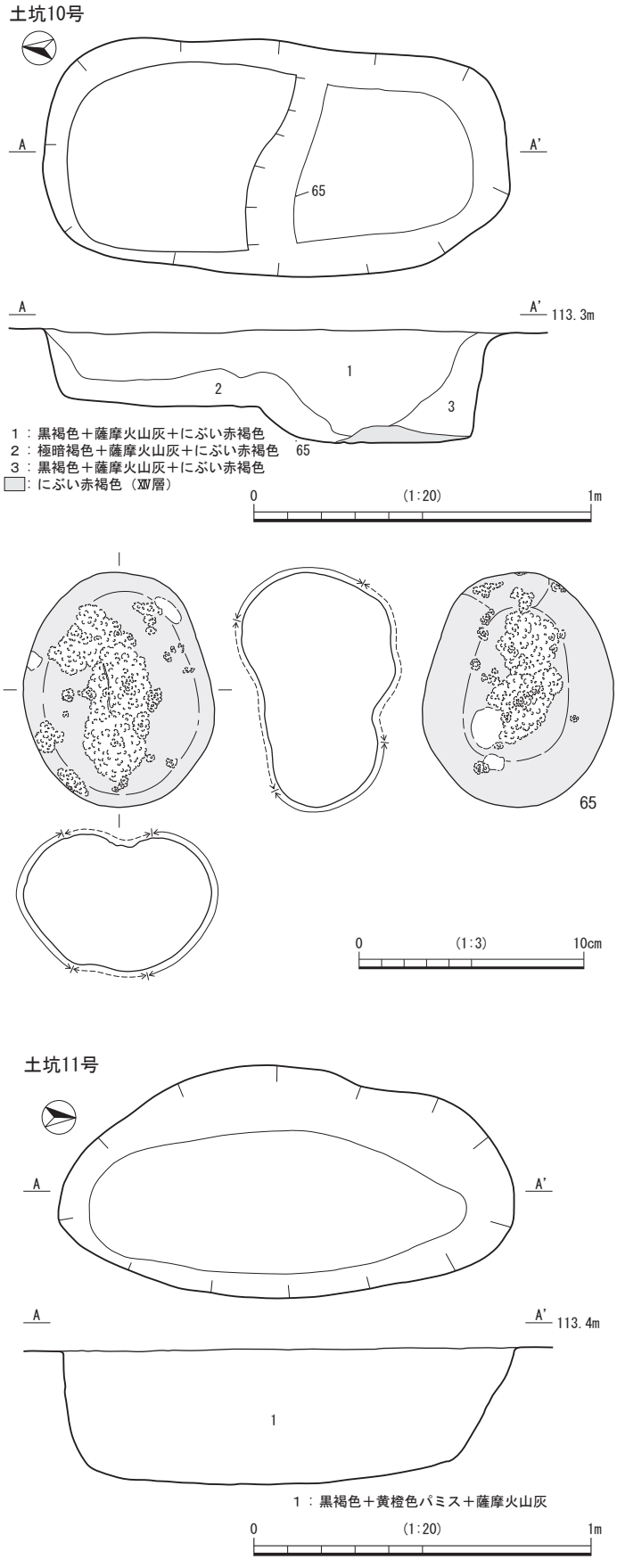
検出状況　Ｊ-50区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は水平に広がり，安定している。南側壁面は，底面から垂直気味に立ち上がる。北側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.35ｍ，短軸0.69ｍ，最深部は0.40ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと



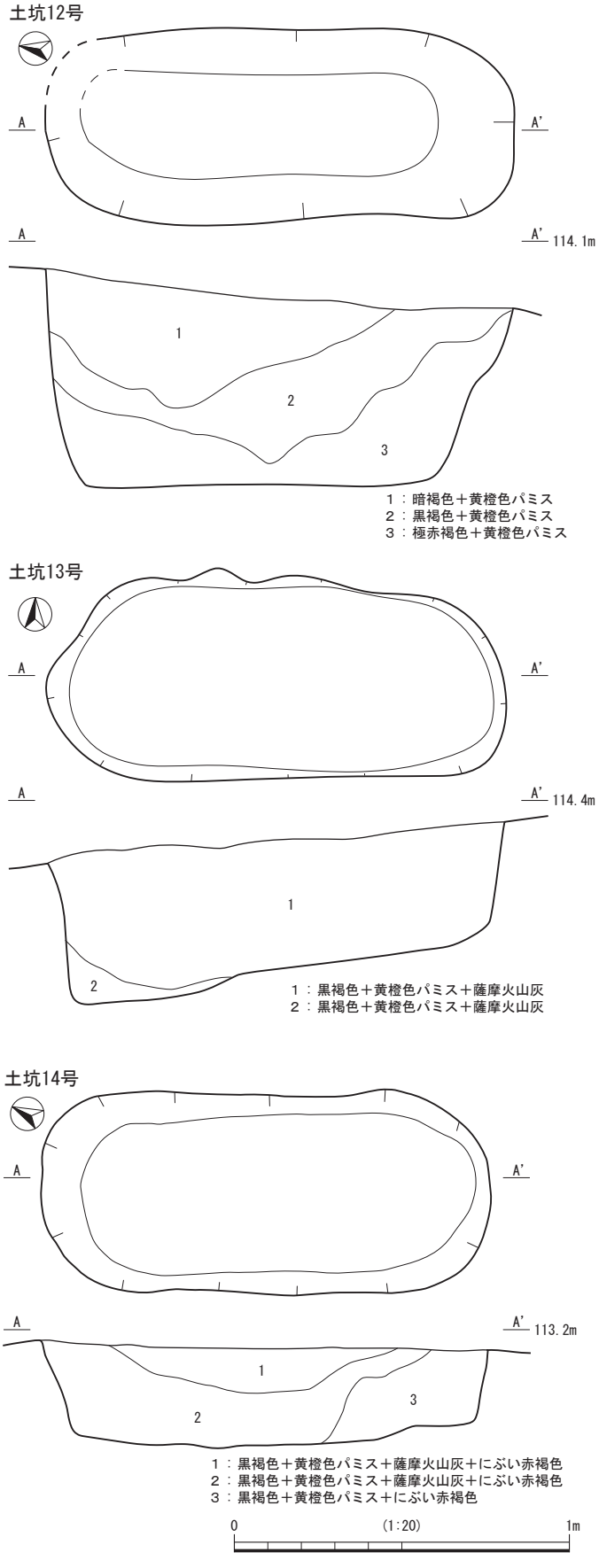
第108図　土坑10号・出土遺物・土坑11号

薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑12号（SK12：第109図）
検出状況　C・D-33区，XIII層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は掘りすぎの影響で推定であるが，横長である。底面は水平に広がり安定している。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，やや緩やかな傾斜をもつが，再度急傾斜し開口する。北側壁面は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。
規　　模　長軸1.39ｍ，短軸0.58ｍ，最深部は0.63ｍである。
埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，暗褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土３は，極赤褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。各埋土の黄橙色パミスの包含量は，埋土２>埋土１>埋土３となる。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　埋土中に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑13号（SK13：第109図）
検出状況　E-28区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，西側壁面に向かってスロープ状に下傾斜する。西側壁面・東側壁面ともに，底面からほぼ垂直に立ち上がる。
規　　模　長軸1.36ｍ，短軸0.60ｍ，最深部は0.46ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２ともに，黒褐色の土に，黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１<埋土２）で分層した。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑14号（SK14：第109図）
検出状況　H-49区，XIII層上面で検出された。検出時は，従穴部と考えられる小土坑を確認していたため，連穴土坑の可能性を考慮し，調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。

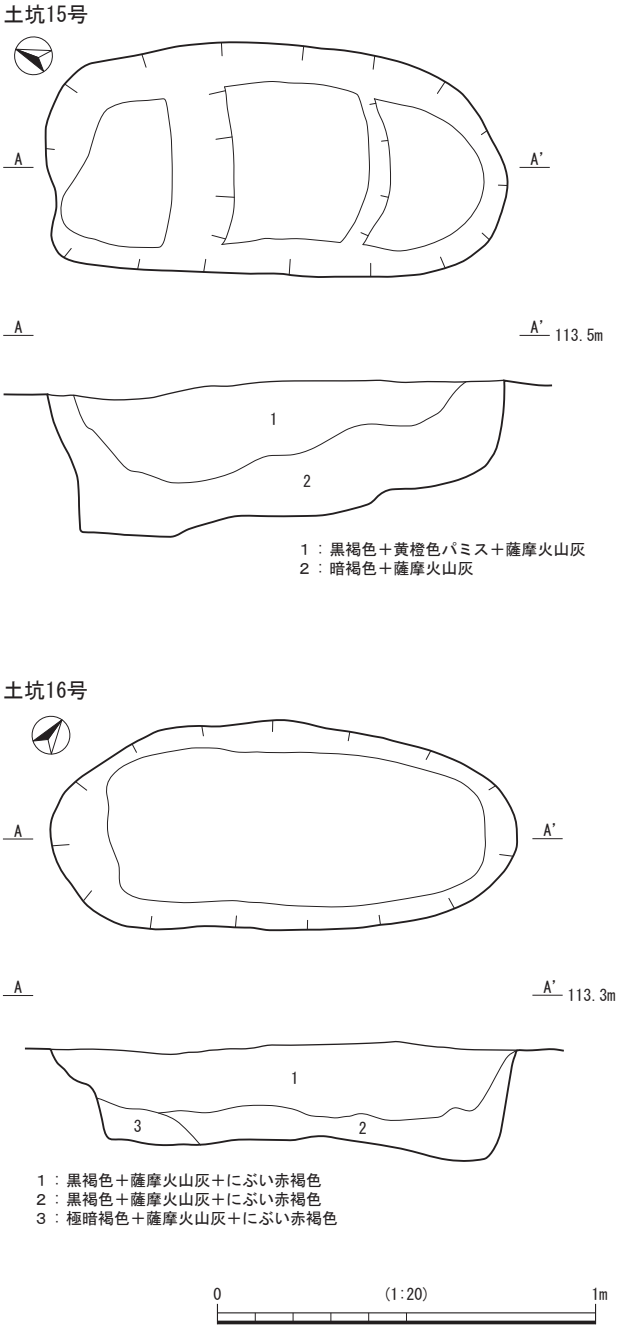


第109図　土坑12号～14号

切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，ほぼ水平に広がり安定している。北西側壁面は，急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は，ほぼ垂直に立ち上がる。
規　　模　長軸1.33ｍ，短軸0.59ｍ，最深部は0.30ｍである。
埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。色調の明るさ（埋土１＝埋土３<埋土２）やにぶい赤褐色の土の包含量（埋土１<埋土３<埋土２）の違い等で分層した。埋土１と埋土２には，薩摩火山灰（XIII層）も含まれている。その包含量は，埋土２<埋土３となる。
出土遺物　埋土中からは，１点の遺物が出土したが，礫であった。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑15号（SK15：第110図）
検出状況　Ｊ-48区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，北西側壁面に向かい階段状に下傾斜する。北西側壁面は，底面から垂直に立ち上がった後，急傾斜で開口する。南東壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。
規　　模　長軸1.21ｍ，短軸0.61ｍである。最深部は0.38ｍとなる。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。埋土２は，暗褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）を含む土であるが，黄橙色パミスは含まない。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑16号（SK16：第110図）
検出状況　Ｉ-49区，XIII層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，横長である。中央より南西壁面側の底面は，ほぼ水平に広がり安定している。中央より北東壁面側の底面は，その方向へやや下傾斜する。南西壁面の底面は，ほぼ垂直に立ち上がった後，ラッパ状に開口する。北東壁面は，急傾斜で立ち上がる。
規　　模　長軸1.23ｍ，短軸0.55ｍ，最深部は0.30ｍである。
埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）とにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。薩摩火山灰（埋土１>埋土２）とにぶい赤褐色の土（埋土１<埋土２）の包含量の違い等で分層した。埋土３は，極暗褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）とにぶい赤褐色の土を含む土である。埋土３は，埋土１や埋土２と比較し，薩摩火山灰が多く含まれる。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第110図　土坑15号・土坑16号

土坑17号（SK17：第111図）

検出状況　C-31区，Ⅻ層上面で検出された。検出時には，SK17の南側に近接して小土坑と思われる円形のシミ状の痕跡が確認できた。SK17を主穴，そのシミ状痕跡部を従穴として調査を行ったが，トンネルやブリッジの痕跡が確認できなかった。また，そのシミ状痕跡部の埋土や底面，壁面等が不安定であったことから，シミ状痕跡部は樹根とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，中央にややくびれをもつ横長である。南側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がった後，ラッパ状に開口する。北側壁面は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。

規　　模　長軸1.17ｍ，短軸0.54ｍ，最深部は0.39ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，極暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。埋土３は，暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑18号（SK18：第111図）

検出状況　D-25区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。中央から南側壁面へ向かう底面は，ほぼ水平に広がり，南側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。北側壁面上位から中央までの底面は，やや階段状に下傾斜する。

規　　模　長軸1.08ｍ，短軸0.55ｍ，最深部は0.27ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土にわずかに黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑19号（SK19：第112図）

検出状況　K-48区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

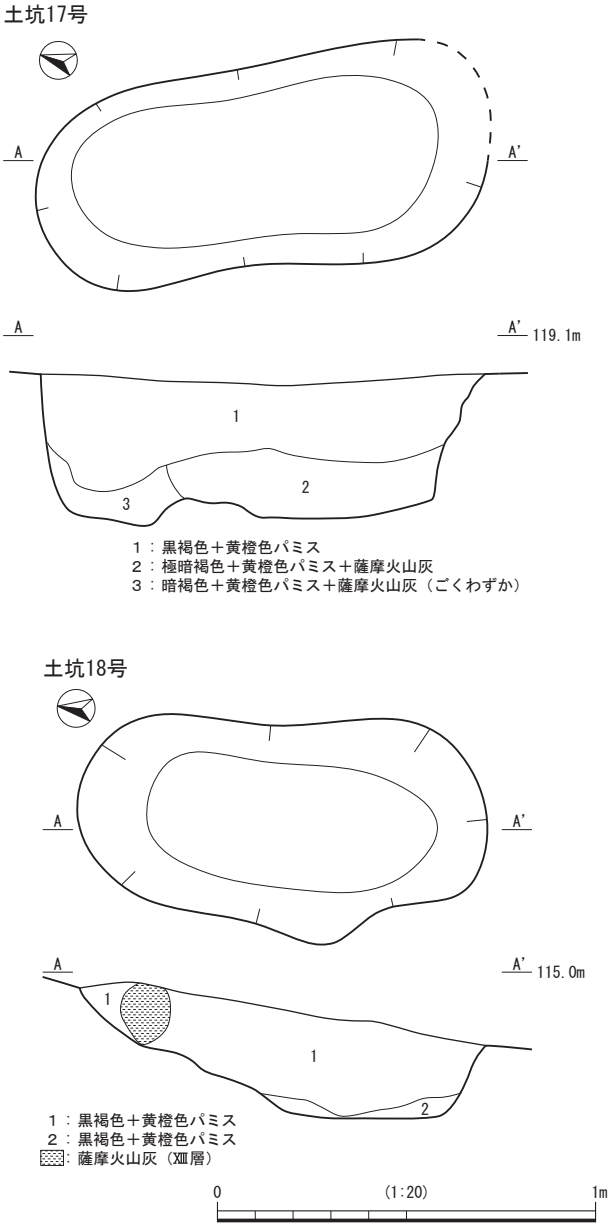
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，緩やかに開口する。東側壁面は，底面から垂直に立ち上がる。底面は，への字を右へ180度回転させた形状である。

規　　模　長軸1.05ｍ，短軸0.44ｍ，最深部は0.33ｍである。

埋　　土　埋土は４つに分けられる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。薩摩火山灰の包含量（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。埋土４も黒褐色の土だが，薩摩火山灰（Ⅻ層）のみ含まれる土である。埋土３は，極暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。

出土遺物　埋土中からは，１点の遺物が出土した。その１点を図化した。66（第112図）は安山岩製の磨石・敲石類である。破片資料だが元はやや扁平な円礫と考えられ，表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第111図　土坑17号・土坑18号

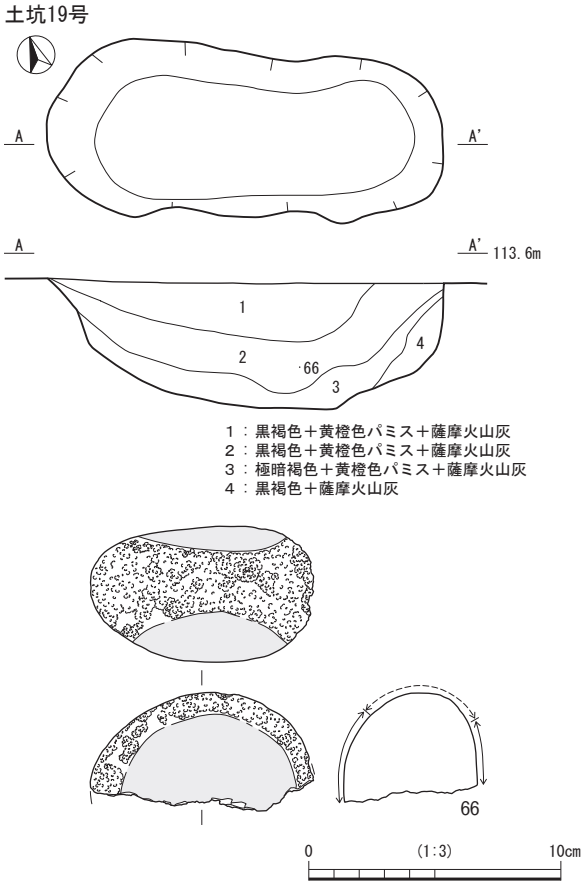
土坑20号（SK20：第112図）

検出状況　B-22・23区，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は水平に広がり安定している。北東側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がった後，やや急傾斜で開口する。南西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸0.92m，短軸は0.45m，最深部は0.28mである。



第112図　土坑19号・出土遺物・土坑20号

埋　　土　埋土は4つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土1<埋土2<埋土3）の違いで分層した。埋土4は，暗褐色の土に黄橙色パミスをわずかに含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

タイプⅢ

土坑21号（SK21：第113図）

検出状況　D-36区，XⅢ層上面で検出された。SK21周辺には，不定型なピット状の樹根が点在しており，SK21も樹根の痕跡が一部に確認された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，北側壁面から中央にかけて水平に広がり，中央から南側壁面にかけて水平に広がる。南側壁面・北側壁面ともに，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸2.77m，短軸0.71m，最深部は0.25mである。

埋　　土　埋土は3つに分かれる。埋土1は，黒褐色の土に黄橙色パミスをわずかに含む土である。埋土2・埋土3ともに，暗褐色の土である。黄橙色パミスの有無（埋土2：有，埋土3：無）等で分層した。

出土遺物　埋土中からは，2点の遺物が出土し，そのうち1点を図化した。67（第113図）は胴部である。外面に綾杉状の条痕文を施す。内面は，やや光沢を帯び，指によるナデをおこなう。出土したもう1点も胴部であった。外面に綾杉状の条痕文を施す。条痕の凹凸の差から，p253と同一個体とは言い難い。

土器分類　2点とも，Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　埋土中に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑22号（SK22：第113図）

検出状況　C-27区，XⅢ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，北側・中央・南側に各一段ずつ有する。北側壁面・南側壁面は，ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。

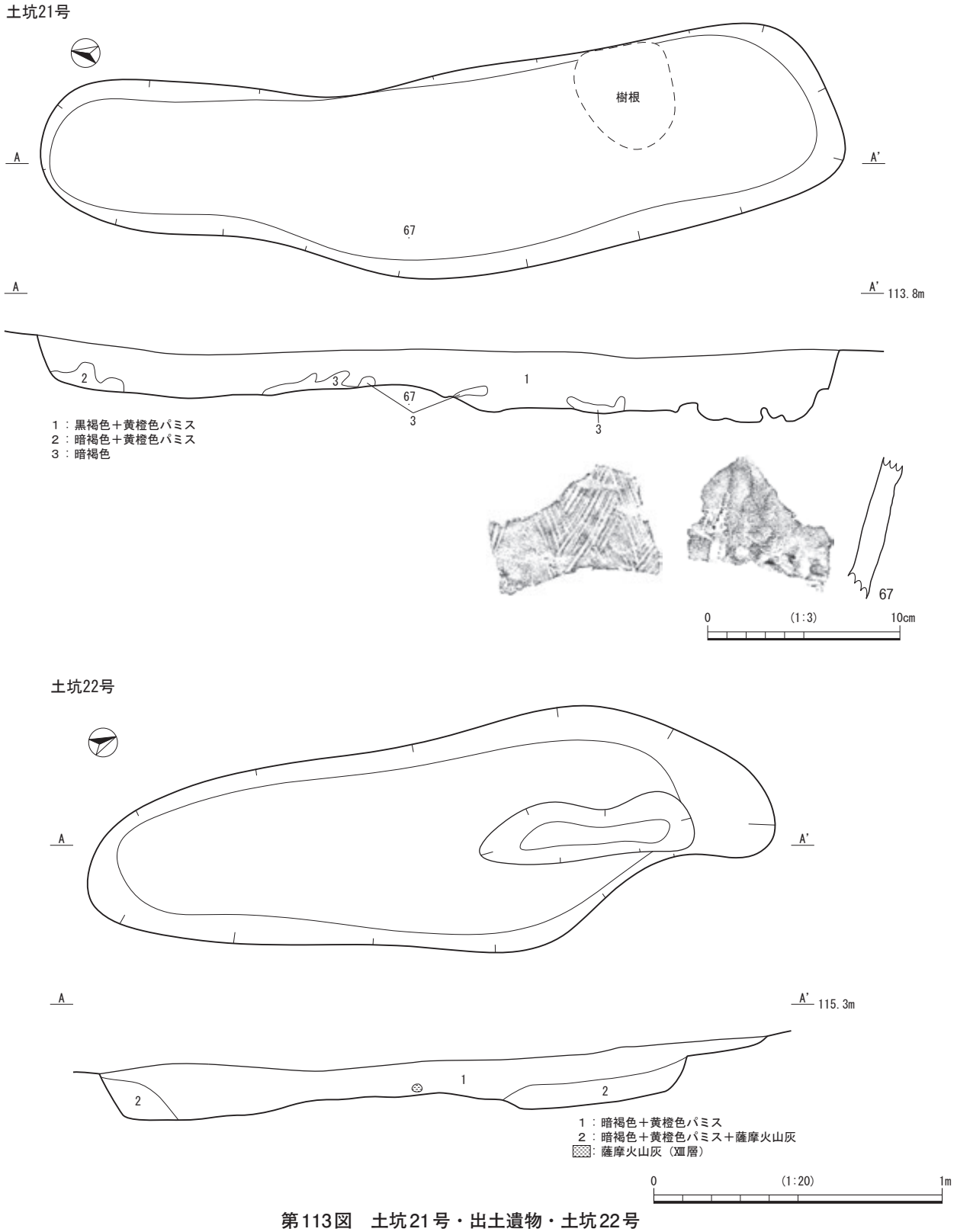
規　　模　長軸2.31m，短軸0.73m，最深部は0.20mである。

埋　　土　埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は，ともに暗褐色の土である。埋土1は，黄橙色パミスを含

む土である。埋土２は，黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅹ Ⅲ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１<埋土２になる。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　埋土中に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。



第113図　土坑21号・出土遺物・土坑22号

土坑23号（SK23：第114図）

検出状況　Ｅ-18区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は不定形横長である。底面は，北側壁面から南側壁面に向かい緩やかに下傾斜する。北側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。南側壁面は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。

規　　模　長軸1.80ｍ，短軸1.20ｍ，最深部は0.30ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，明黄褐色の土で，黄橙色パミスは含まない土である。埋土３は，暗褐色の土で，黄橙色パミスを含まない土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑24号（SK24：第114図）

検出状況　Ⅰ-48区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，ほぼ水平に広がる。北側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.46ｍ，短軸1.02ｍ，最深部は0.55ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。埋土２は，極黒褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）を含み，にぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）をまだら状に含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

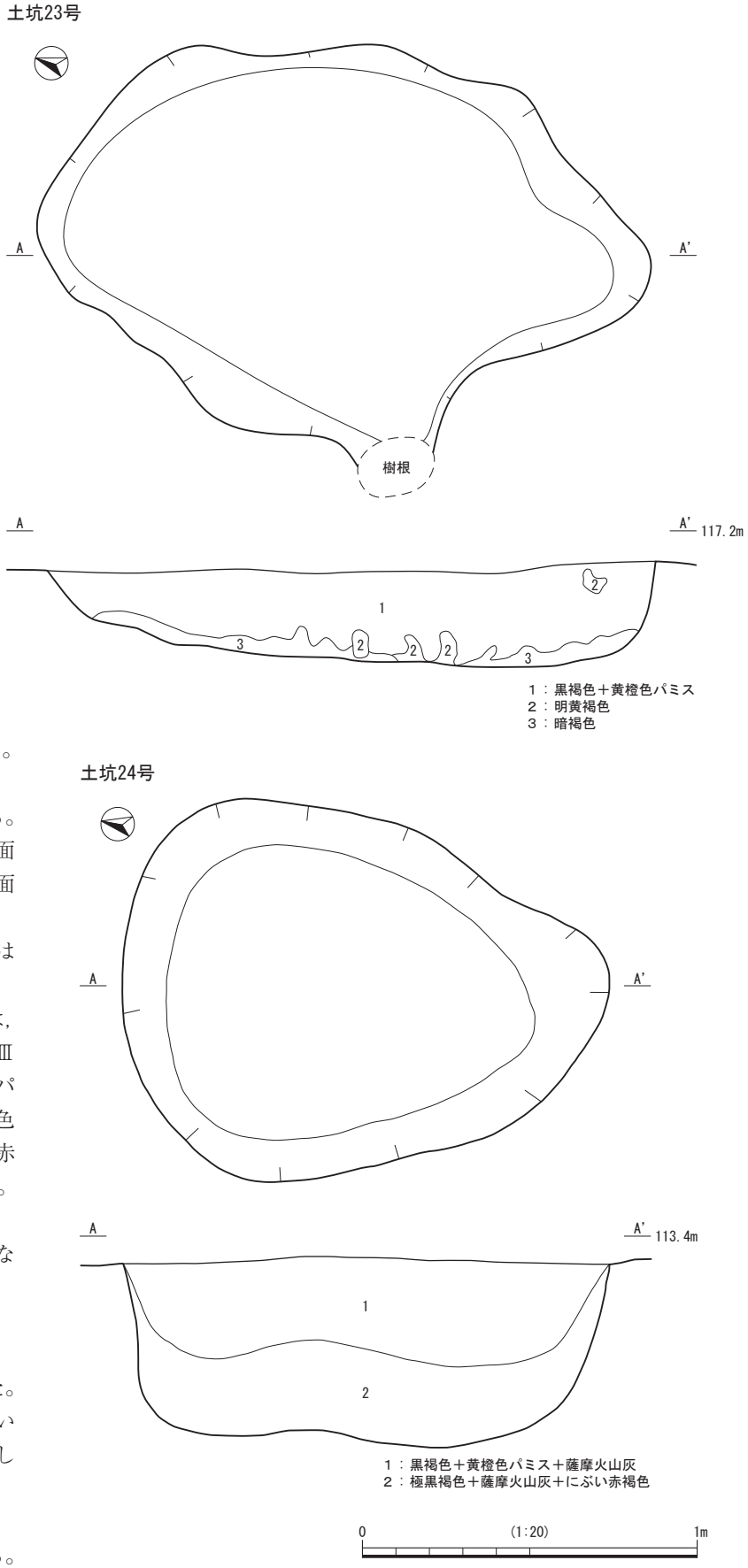
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑25号（SK25：第115図）

検出状況　Ｆ-29区，Ⅻ層上面で検出された。南西部の一部を掘りすぎたため，破線を用いて，平面と底面の形状を推定ラインを表現した。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，北西から南東へ向かい緩やかに下傾斜



第114図　土坑23号・土坑24号

する。北西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，緩やかに開口する。南東側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.45ｍ，短軸0.90ｍ，最深部は0.36ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XⅢ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。埋土２は，褐色の土に，黄橙色パミスと薩摩火山灰（XⅢ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑26号（SK26：第115図）

検出状況　Ｆ-24区，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，水平に広がる。南側壁面・北側壁面は，ともに底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XⅢ層で収まる。

規　　模　長軸1.38ｍ，短軸0.75ｍ，最深部は0.32ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスが含まれる土である。埋土２は，埋土１に薩摩火山灰（XⅢ層）のブロックが混入する土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑27号（SK27：第116図）

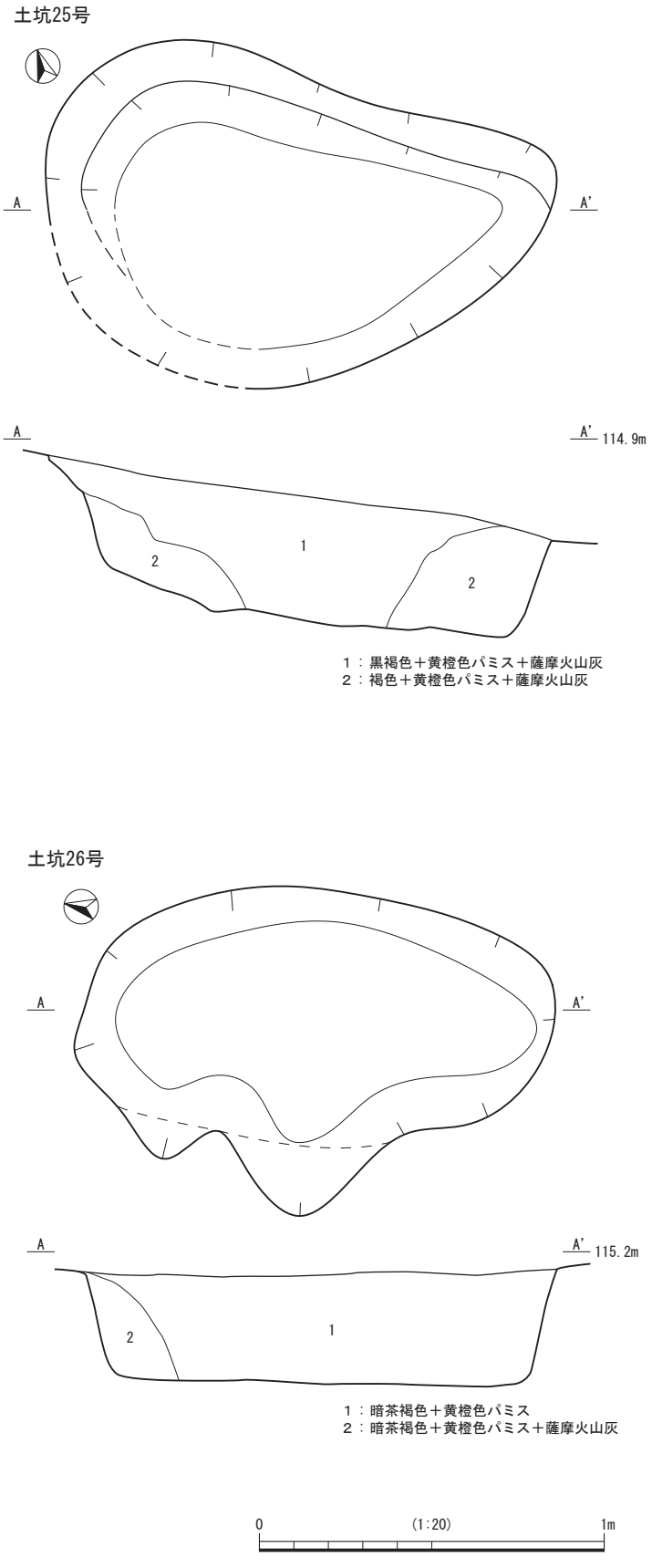
検出状況　Ｃ-26区，XⅡ層中で検出された。北側は，一部樹根による攪乱を受けている。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は推定であるが，不定形横長とした。底面は，三つの段を有する。西側壁面は，底面から垂直気味に立ち上がった後，一度段を有するように緩やかに広がり，その後急傾斜で開口する。東側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，一度傾斜は緩くなり，段を有するように広がるが，再度急傾斜で開口する。

規　　模　長軸1.57ｍ，短軸は推定で0.73ｍ，最深部は0.36ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XⅢ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。また，埋土１と埋土２の黄橙色パミスと薩摩火山灰の包含量は，ともに黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。埋土３は，暗赤褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XⅢ層）を含む土である。黄橙色パ



第115図　土坑25号・土坑26号

ミスと薩摩火山灰の包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。

出土遺物　遺物は，埋土２の上位から土器片が数点出土した。剥落が激しかったり，小破片であったりすることから図化はしていない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑28号（SK28：第116図）

検出状況　F-25区，Ⅻ層上面で検出された。土坑の切り合いの可能性を考慮し調査を行ったが，埋土が一定であることから一つの土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。北東と南西には段を有する。北西壁面・南東壁面は，ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.27ｍ，短軸0.88ｍ，最深部は0.23ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑29号（SK29：第116図）

検出状況　C-25・26区，Ⅻ層で検出された。

切り合い　切り合いはない。

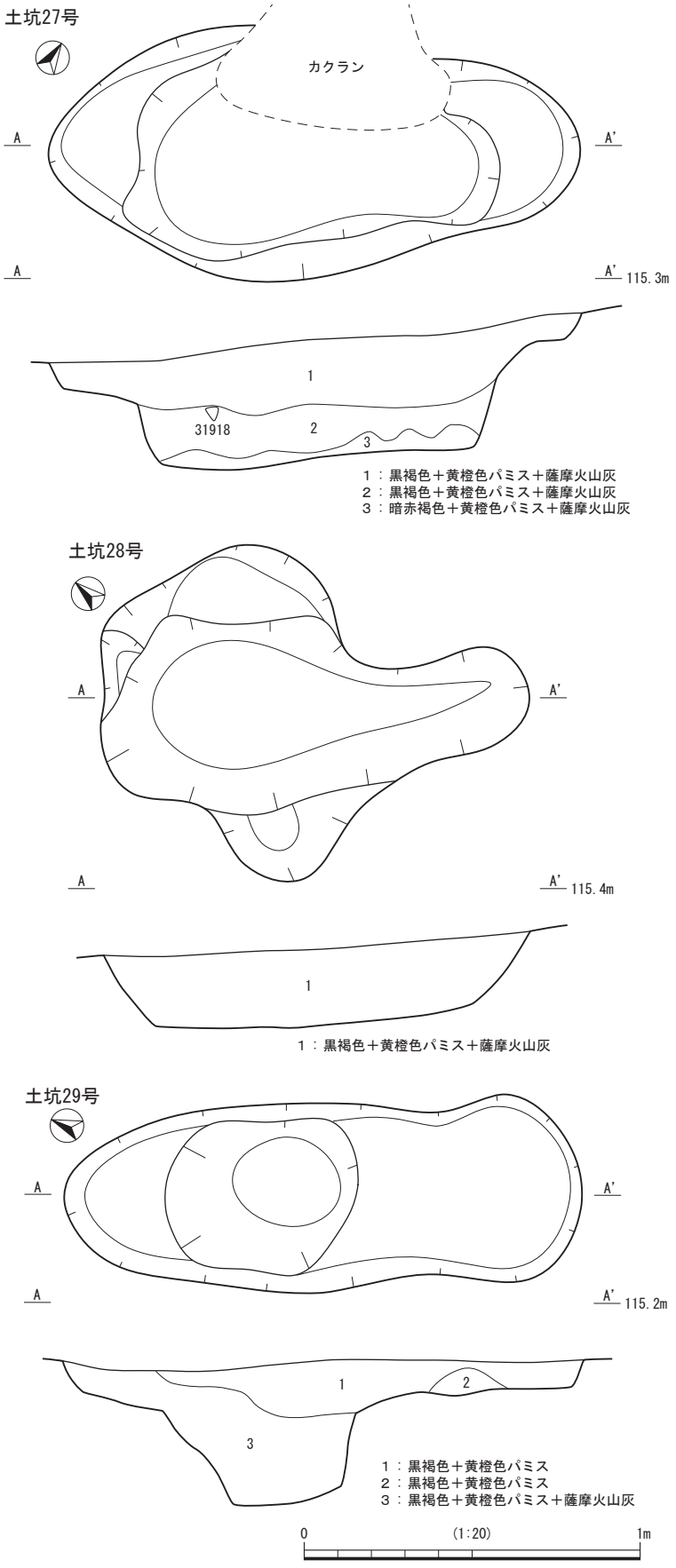
形　　状　平面の形状は，南側の一部にややくびれをもつ不定形横長である。底面は，中央から北側付近に柱穴状に掘り込まれ，最深部を形する。南側壁面・北側壁面は，ともに最深部から急傾斜で立ち上がった後，一度ほぼ水平に広がり，再度急傾斜になり開口する。

規　　模　長軸1.54ｍ，短軸は0.57ｍ，最深部は0.41ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。埋土３も黒褐色の土であるが，黄橙色パミスに加え薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　埋土２・埋土３にわずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。



第116図　土坑27号～29号

土坑30号（SK30：第117図）

検出状況　K－51区，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，南東側が柄杓の柄になるような形状である。北西側壁面・南東側壁面は，ともに底面から垂直に立ち上がる。

規　　模　長軸1.37ｍ，短軸0.59ｍ，最深部は0.32ｍである。

埋　　土　埋土は７つに分かれる。埋土１は，暗褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XⅣ層）をまだら状に含む土である。埋土２・埋土３は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土をまだら状に含む土である。色調の明るさ（埋土２>埋土３）と黄橙色パミスの包含量（埋土２>埋土３）の違いで分層した。埋土４も黒褐色の土で，薩摩火山灰（XⅢ層）を含むが黄橙色パミスは含まない土である。埋土５は，極暗褐色の土に薩摩火山灰（XⅢ層）とにぶい赤褐色の土をまだら状に含む土である。底面直上の一部には，薩摩火山灰（XⅢ層）のブロックとにぶい赤褐色の土（XⅣ層）が堆積している。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑31号（SK31：第117図）

検出状況　E－34区，XⅢ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し，調査を進めた。結果，遺構の一部を落ち込みと判断し，検出時より長軸が短くなり，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は３つの段を有している。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がった後，ほぼ水平に広がり，再度やや急傾斜で開口する。

規　　模　長軸1.13ｍ，短軸0.79ｍ，最深部は0.48ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

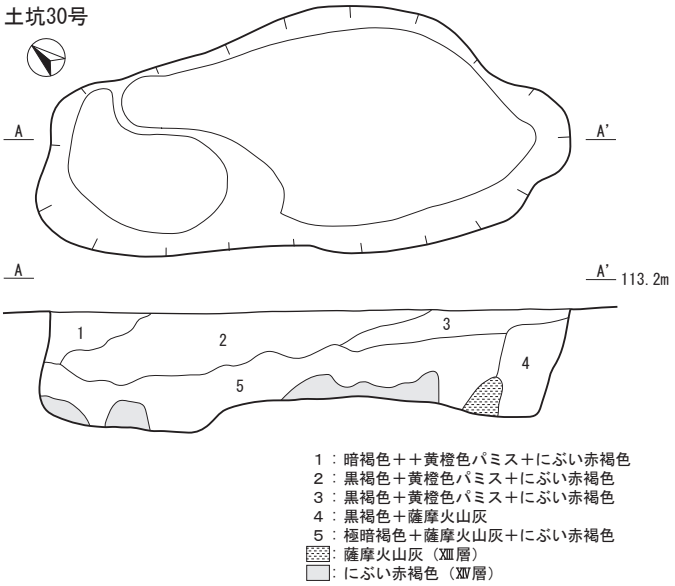
炭 化 物　埋土中に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

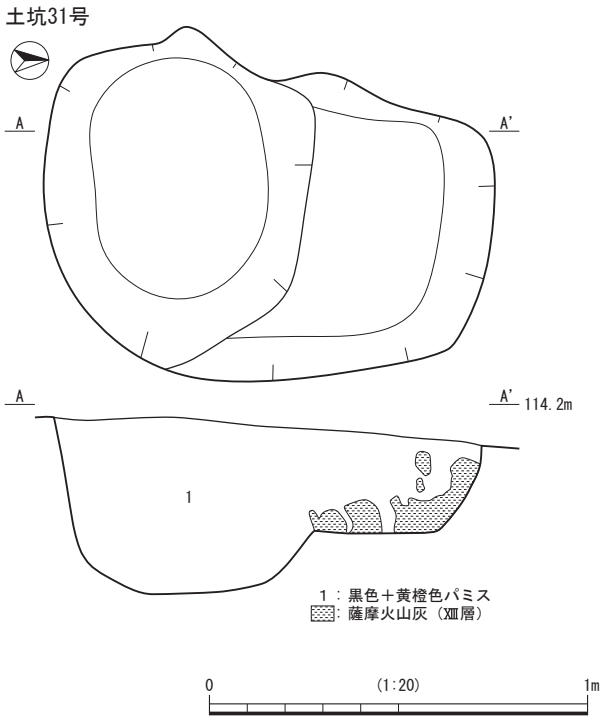
土坑32号（SK32：第118図）

検出状況　C－27区，XⅡ層中で検出された。検出時の形状がやや不明瞭であったため，半裁等を行いながら調査を行った。結果，一部に樹根による撹乱が確認された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，西側壁面から東側へ緩やかに下傾斜した後，東側壁面へ向かい緩やかに上傾斜になる。東側壁面は，底面からやや緩やかに立ち上がる。





第117図　土坑30号・土坑31号

規　　模　長軸1.37ｍ，短軸0.63ｍ，最深部は0.23ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　埋土中に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑33号（SK33：第118図）

検出状況　Ｆ-35区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，東側から西側へ向かい緩やかに下傾斜した後，水平に広がる。西側壁面・東側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸1.40ｍ，短軸0.59ｍ，最深部は0.17ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。また，埋土１には，薩摩火山灰（Ⅻ層）のブロックが混在している。埋土２は，極暗褐色の土に黄橙色パミスが含まれる土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑34号（SK34：第118図）

検出状況　Ⅰ-53区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

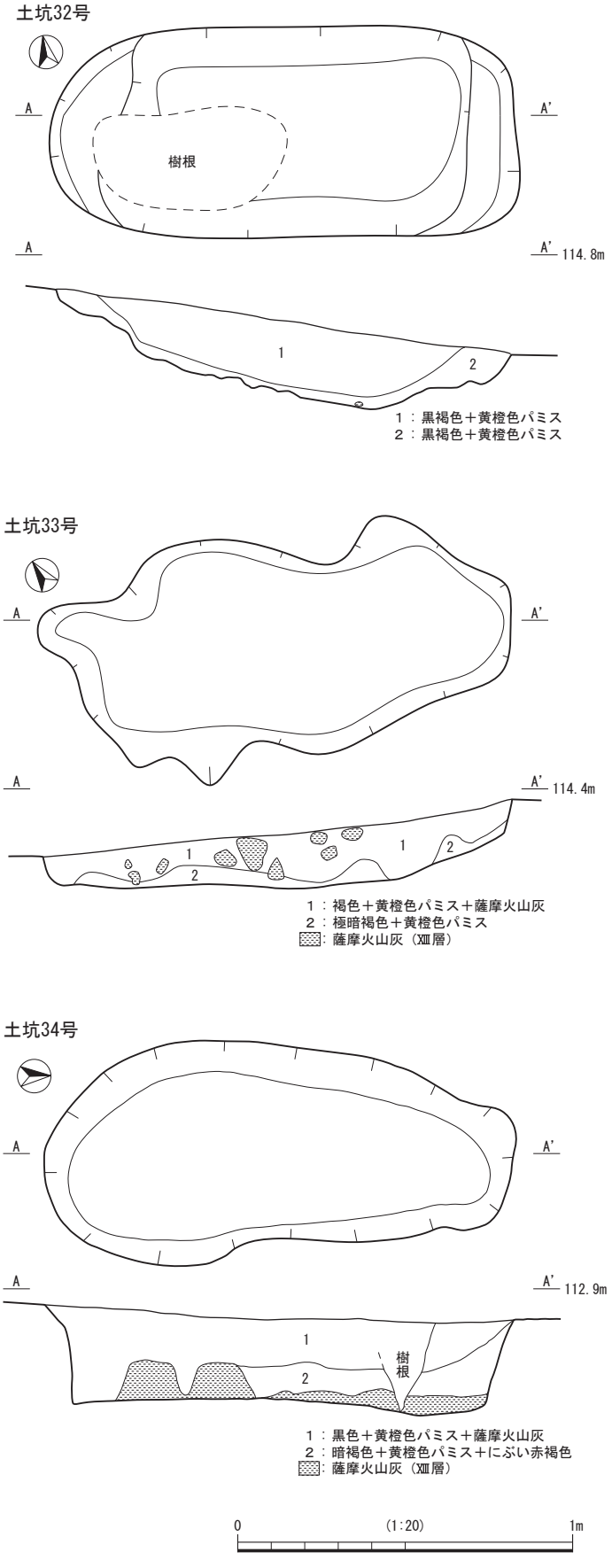
形　　状　平面の形状は，北側先端に若干のくびれをもつ不定形横長である。底面は，ほぼ水平に広がる。南側壁面は，底面から垂直に立ち上がった後，ラッパ状に開口する。北側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.40ｍ，短軸0.58ｍ，最深部は0.28ｍである。

埋　　土　一部樹根による撹乱を受けているが，埋土は３つに分かれる。埋土１は黒色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。埋土２は，暗褐色の土に黄橙色パミスとまだら状ににぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）を含むが，薩摩火山灰（Ⅻ層）は含まない土である。底面直上には，薩摩火山灰（Ⅻ層）のブロックが堆積する。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第118図　土坑32号～34号

土坑35号（SK35：第119図）

検出状況　F-22・23区，XⅢ層上面で検出された。検出時には，SK35と連続するように東側に小型の土坑と思われるシミ状の痕跡が確認できた。SK35を主穴，そのシミ状痕跡を従穴と考えて調査を行った。結果，シミ状痕跡部分は，SK35との間にブリッジやその痕跡が確認できなかったことや，壁面や底面が不安定だったことから，樹根跡とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，２つの段を有する。東側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。西側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がった後，一度緩やかな立ち上がりになり，その後ほぼ垂直に開口する。掘り込みは，XⅢ層で収まる。

規　　模　長軸1.35ｍ，短軸0.62ｍ，最深部は0.27ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑36号（SK36：第119図）

検出状況　F-23区，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，中央に若干のくびれをもつ不定形横長である。底面は，南東壁面直下が柱穴状に掘り込まれ，北西側に向かいやや水平に広がる。南東側壁面・南西側壁面は，ともに底面からやや垂直気味に立ち上がる。掘り込みは，XⅣ層まで達する。

規　　模　長軸1.30ｍ，短軸0.64ｍ，最深部は0.35ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。埋土３は，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

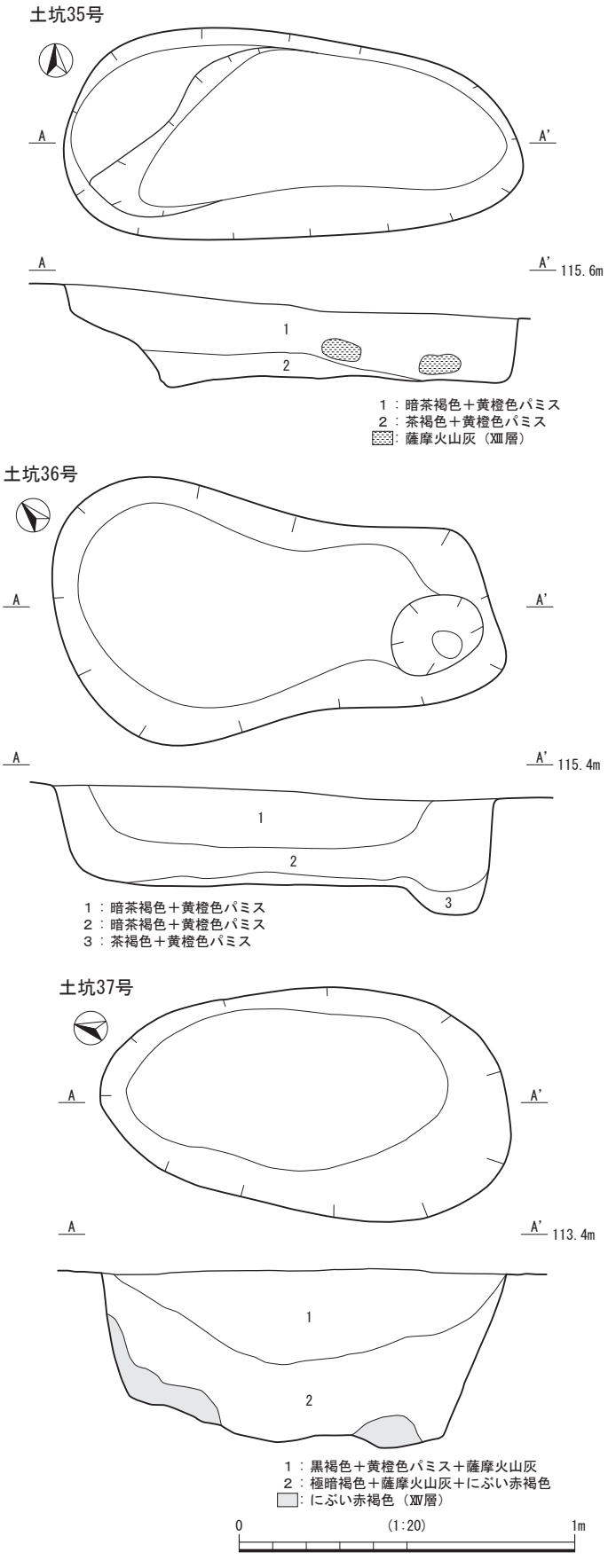
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑37号（SK37：第119図）

検出状況　L-53区，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，北側から南側に向かって緩やかに下傾斜する。北側壁面・南側壁面は，ともに底面から急傾斜で立ち上がる。



第119図　土坑35号～37号

規　　模　長軸1.22ｍ，短軸0.67ｍ，最深部は0.53ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。埋土２は，極暗褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とまだら状ににぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）を含む土である。底面直上の一部には，にぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）の土が堆積している。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑38号（SK38：第120図）

検出状況　Ｆ-24区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，ほぼ水平に広がる。南西側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。北東側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.29ｍ，短軸0.50ｍ，最深部は0.30ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑39号（SK39：第120図）

検出状況　Ｋ-49区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，ほぼ水平に広がる。北側壁面は，底面から垂直に立ち上がる。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.26ｍ，短軸0.55ｍ，最深部は0.33ｍである。

埋　　土　埋土は４つに分かれる。埋土１は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２・埋土３・埋土４は，ともに黒褐色の土である。それぞれの埋土に含まれる土（埋土２：黄橙色パミスと薩摩火山灰，埋土３：黄橙色パミス，埋土４：薩摩火山灰とにぶい赤褐色の土）の違い等で分層した。

出土遺物　遺物は，出土していない。

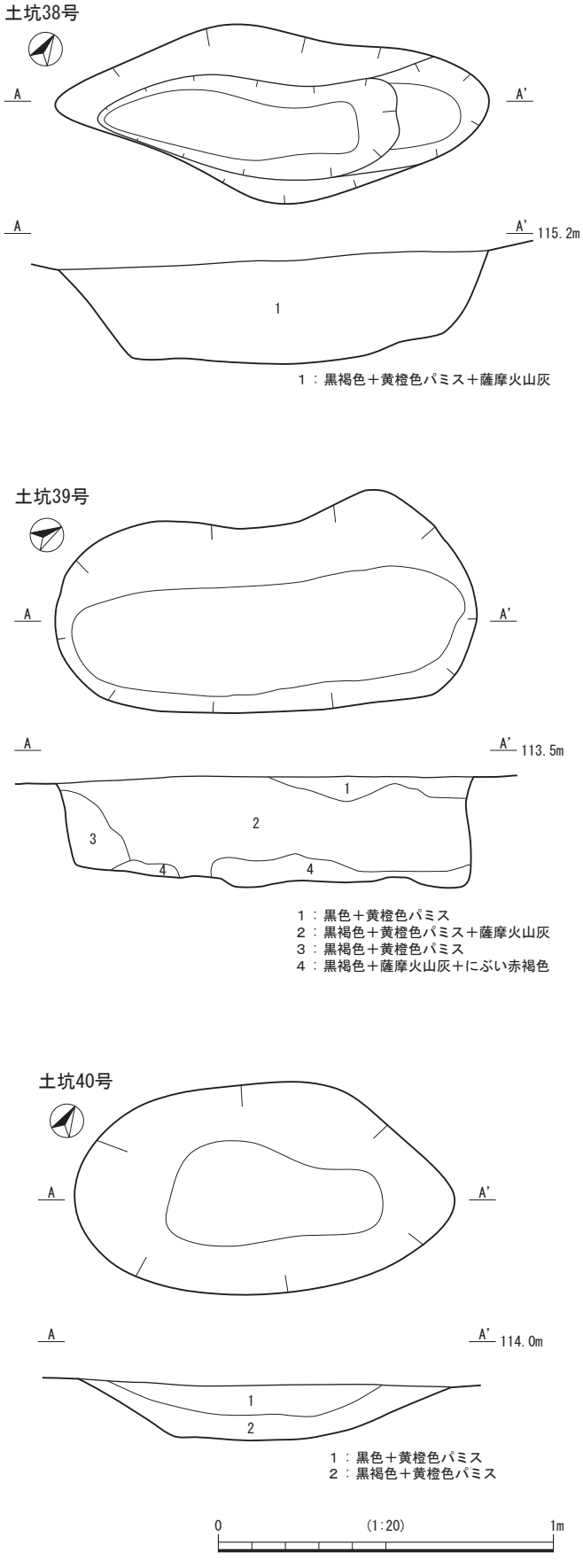
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑40号（SK40：第120図）

検出状況　Ｆ-46区，Ｘ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面はほぼ水平に広がる。南西側壁面・北東側壁面は，ともに底面から



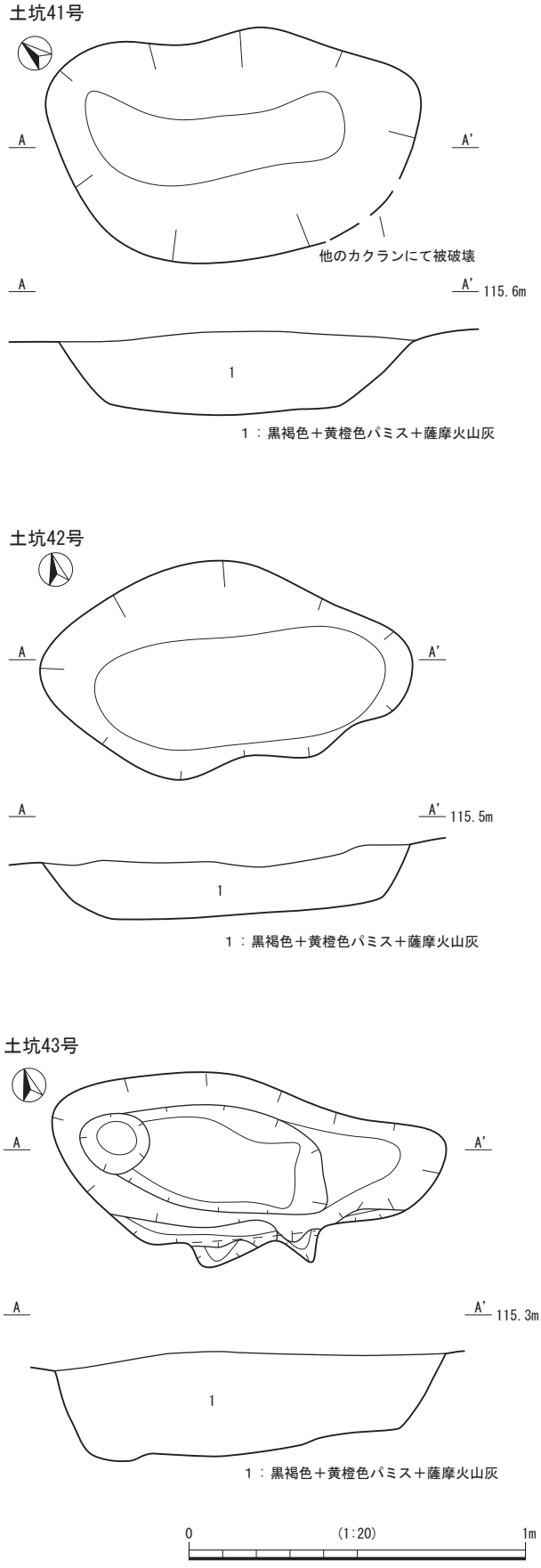
第120図　土坑38号～40号

やや緩やかに立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。
規　　模　長軸1.13ｍ，短軸0.63ｍ，最深部は0.17ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒色の土にわずかに黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，黒褐色の土にわずかに黄橙色パミスを含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　埋土１・埋土２に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑41号（SK41：第121図）
検出状況　Ｅ-25区，Ⅻ層上面で検出された。本土坑の南側には樹根による撹乱が確認された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，水平に広がる。北西側壁面・南東側壁面は，ともにやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。
規　　模　長軸1.05ｍ，短軸0.68ｍ，最深部は0.25ｍである。
埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）をわずかに含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑42号（SK42：第121図）
検出状況　Ｅ-25区，Ⅻ層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，東側から西側へ緩やかに下傾斜する。東側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。西側壁面は，底面から東側よりもやや緩やかに立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。
規　　模　長軸1.10ｍ，短軸0.60ｍ，最深部は0.18ｍである。
埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）をわずかに含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑43号（SK43：第121図）
検出状況　Ｆ-24・25区，Ⅻ層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，東側に若干のくびれをもつ不定形横長である。底面は，東側から西側に向かって数段有しながら緩やかに下傾斜する。西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。



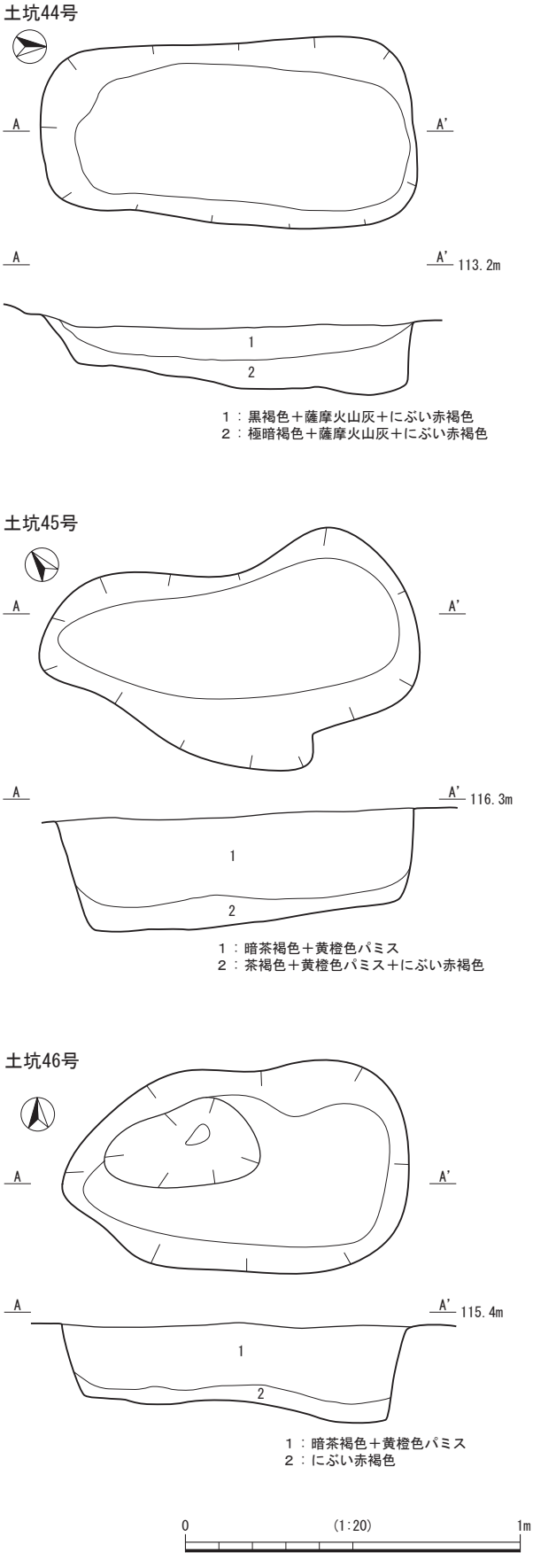
第121図　土坑41号～43号

規　　模　長軸1.15ｍ，短軸0.52ｍ，最深部は0.30ｍである。
埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑44号（SK44：第122図）
検出状況　Ⅰ-46区，Ⅻ層上面で検出された。検出時の形状から，連穴土坑の可能性を考慮し調査を進めた。結果，ブリッジやその痕跡，明確な被熱痕が確認できなかったことから，連穴土坑とはせず土坑とした。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，南側から北側へ向かって緩やかに下傾斜する。南側壁面は，底面からやや緩やかに立ち上がる。北側壁面は，底面から垂直に立ち上がる。
規　　模　長軸1.12ｍ，短軸0.54ｍ，最深部は0.21ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とまだら状ににぶい赤褐色の土（Ⅳ層）を含む土である。埋土２は，極暗褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とまだら状ににぶい赤褐色の土（Ⅳ層）を含む土である。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑45号（SK45：第122図）
検出状況　Ｆ-20区，Ⅻ層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，南東側から北西側に向かって緩やかに下傾斜する。北西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。
規　　模　長軸1.08ｍ，短軸0.57ｍ，最深部は0.34ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（Ⅳ層）を含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑46号（SK46：第122図）
検出状況　Ｅ-23区，Ⅻ層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，



第122図　土坑44号～46号

一部に見られる凹みは，樹根の影響の可能性もあるが，西側から東側へ向かって緩やかに下傾斜する。西側壁面・東側壁面は，ともに底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XIII層で収まる。

規　　模　長軸1.03ｍ，短軸0.60ｍ，最深部は0.30ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，にぶい赤褐色でXIV層に類似する土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑47号（SK47：第123図）

検出状況　Ｊ-53区，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面はほぼ水平に広がる。北側壁面・南側壁面は，ともに底面からほぼ垂直に立ち上がる。

規　　模　長軸1.03ｍ，短軸0.57ｍ，最深部は0.40ｍである。

埋　　土　一部樹根による影響を受けているが，埋土は３つに分かれる。埋土１は，黒色の土である。埋土２は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土３は，暗褐色の土にとまだら状ににぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑48号（SK48：第123図）

検出状況　M-55区，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

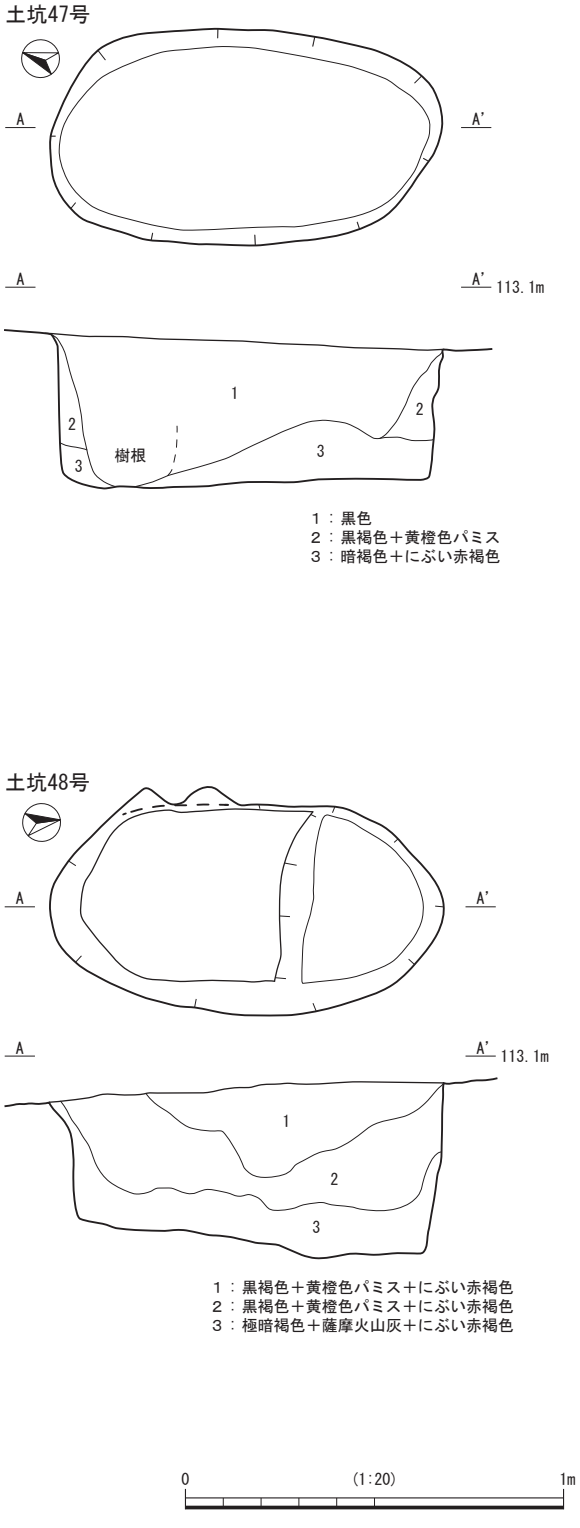
形　　状　一部樹根による影響が確認されたが，平面の形状は，横長である。底面は，南側から北側へ向かって緩やかに下傾斜する。南側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がった後，やや急傾斜で開口する。北側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，垂直に開口する。

規　　模　長軸1.04ｍ，短軸0.56ｍ，最深部は0.46ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，黒褐色の土に黄橙色パミスとまだら状ににぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。埋土３は，極暗褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）とにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第123図　土坑47号・土坑48号

土坑49号（SK49：第124図）

検出状況　E・F-22区，XIII層上面で検出された。検出時には，SK49と連続するように西側に小型の土坑と思われるシミ状の痕跡が確認できた。SK49を主穴，そのシミ状痕跡を従穴と考えて調査を行った。結果，シミ状痕跡部分は，SK49との間にブリッジやその痕跡が確認できなかったことや，壁面や底面が不安定だったことから，樹根跡とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，ほぼ水平に広がる。西側壁面・東側壁面は，ともに急傾斜で立ち上がる。

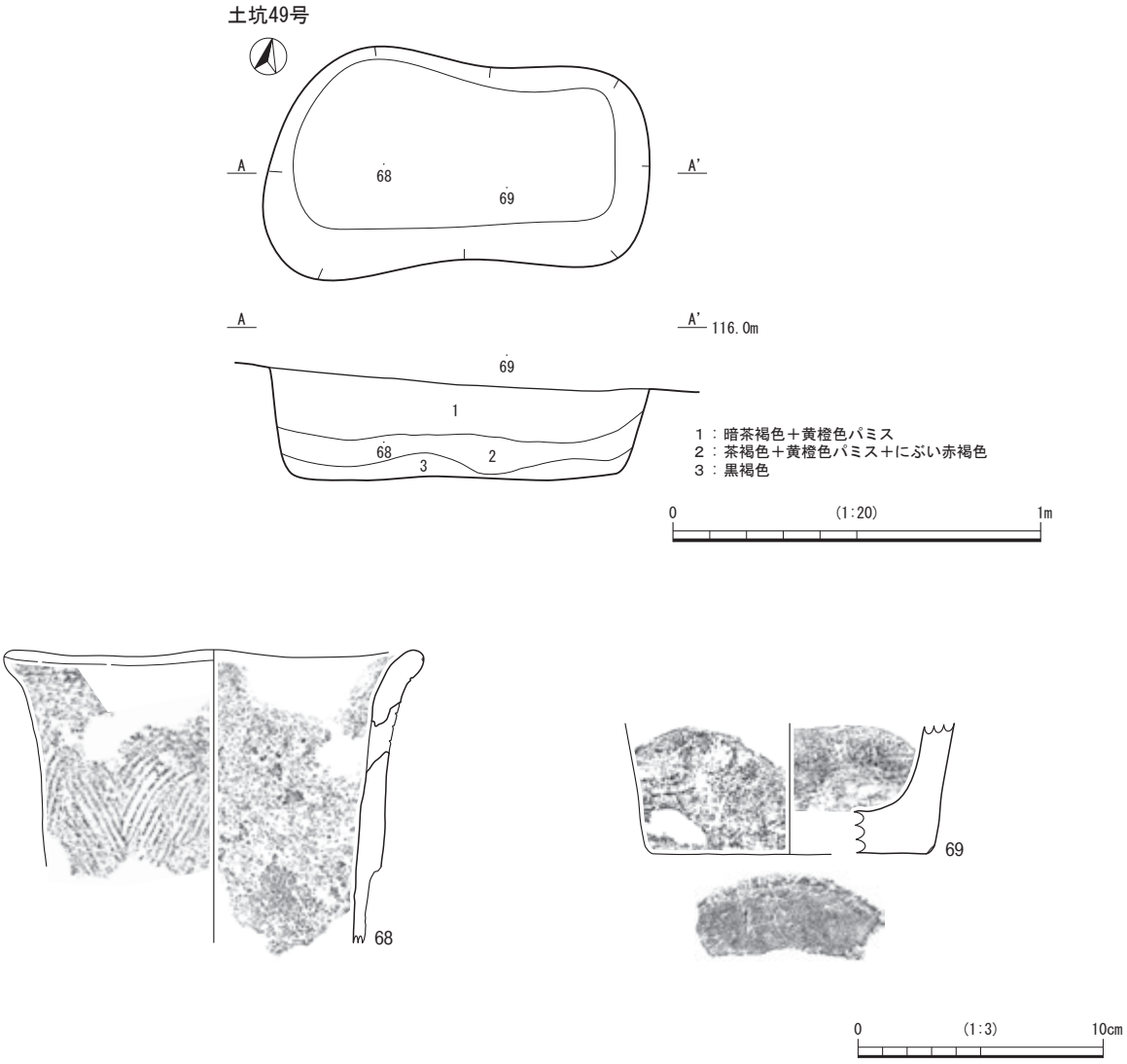
規　　模　長軸1.04ｍ，短軸0.55ｍ，最深部は0.30ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。埋土３は，黒褐色の土（XV層）である。

出土遺物　埋土中からは，３点の遺物が出土し，そのうち２点を図化した。68（第124図）は，外反しやや波状になる口縁部である。内外面ともに，摩滅や剥落が著しいが，口縁部外面上部には横位刺突文を，その直下には綾杉状の条痕文を施す。焼成後に開けたと思われる穿孔が口縁部近くにある。69は，平底になる底部である。底部外面は，やや光沢を帯びている。胴部は摩滅が著しいが，底部外面端部には，キザミを施す。底部内面は，指おさえが確認できる。68と69が同一個体かどうかの判別はできない。もう１点は，極小破片かつ剥落が激しいため，型式等の判断はできなかった。

土器分類　68・69は，ともにⅣ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第124図　土坑49号・出土遺物

土坑50号（SK50：第125図）

検出状況　F・G-22区，XⅢ層上面で検出された。検出時には，SK50の南側に近接してSK91が検出された。SK50を主穴，SK91を従穴として調査を行った。結果，トンネルやブリッジの痕跡が確認できなかったため，別々の土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，南側から北側へ向かって緩やかに傾斜する。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XⅢ層で収まる。

規　　模　長軸1.20ｍ，短軸0.37ｍ，最深部は0.36ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XⅣ層）を含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑51号（SK51：第125図）

検出状況　Ⅰ-46区，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

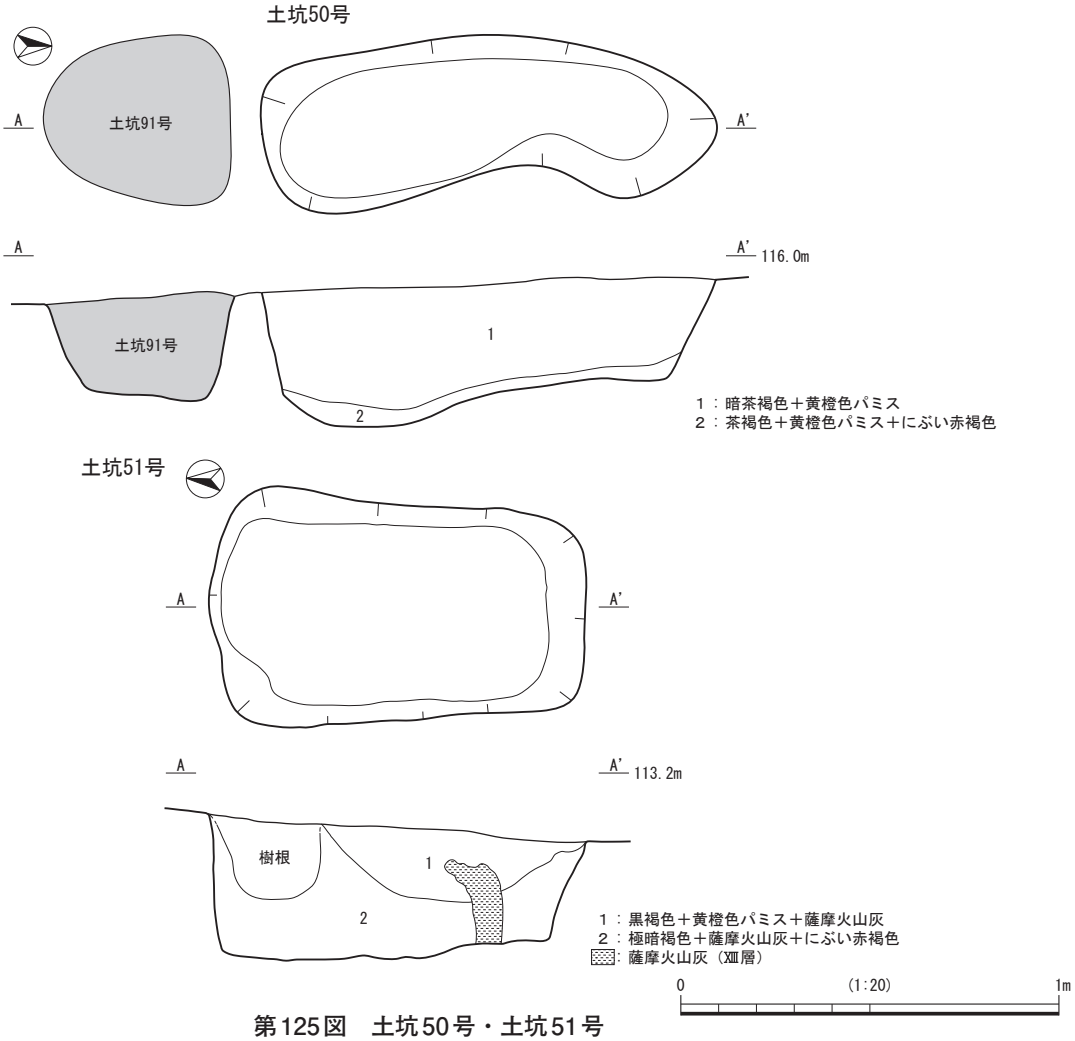
形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，ほぼ水平に広がる。北側壁面は，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸1.00ｍ，短軸0.57ｍ，最深部は0.36ｍである。

埋　　土　一部樹根による影響を受けているが，埋土は３つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XⅢ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。埋土２は，極暗褐色の土に薩摩火山灰（XⅢ層）とまだら状ににぶい赤褐色の土（XⅣ層）を含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第125図　土坑50号・土坑51号

土坑52号（SK52：第126図）

検出状況　D－9区，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。掘り込みの一部は，XIV層まで達している。底面は，北東から南西に向かって緩やかに下傾斜するが，南東壁面付近で緩やかな傾斜になる。北東壁面・南西壁面は，ともに底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。

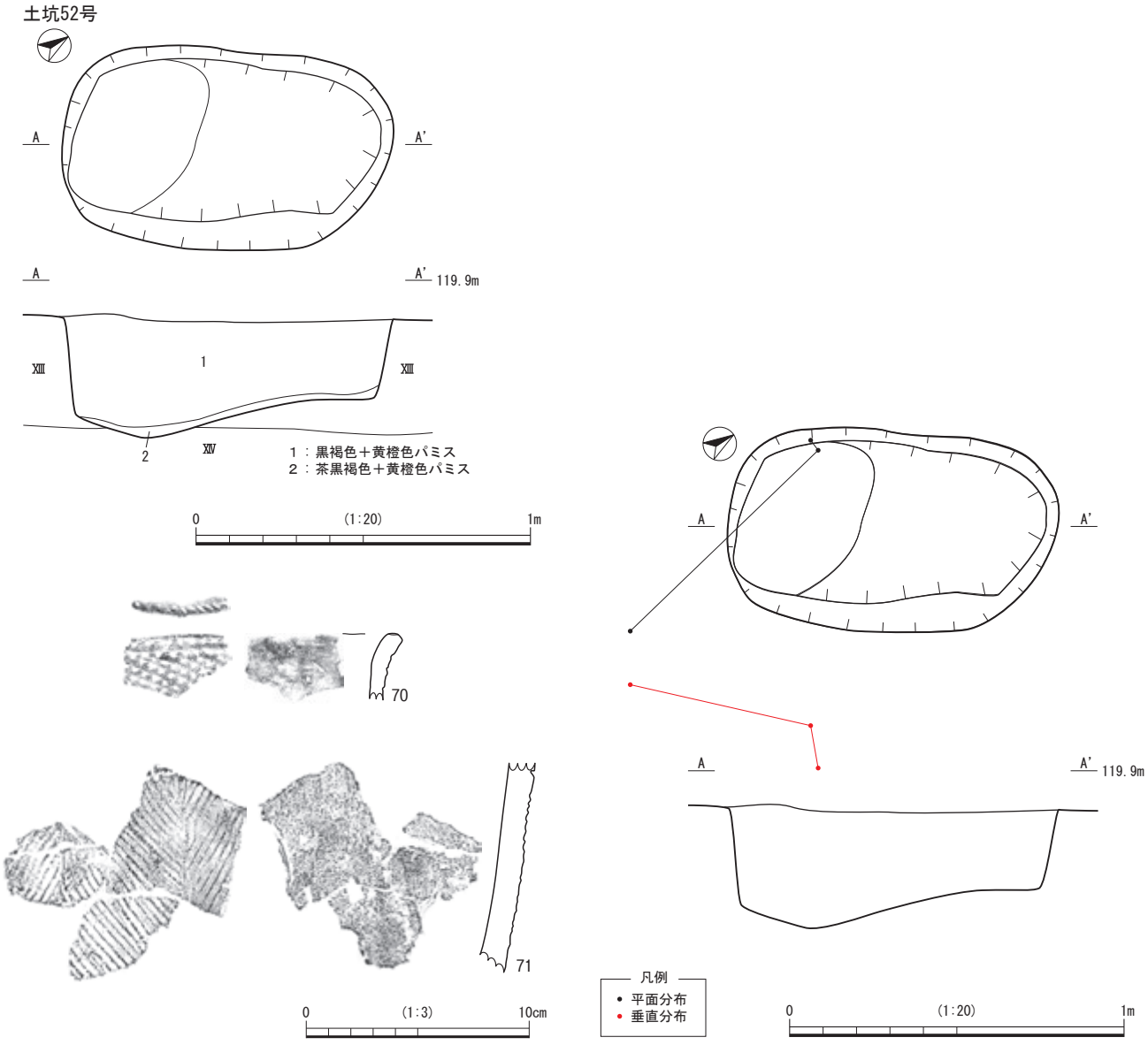
規　　模　長軸0.98ｍ，短軸0.58ｍ，最深部は0.35ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。

出土遺物　埋土１からは，５点の遺物が出土した。うち３点は土器片で，２点は礫であった。そのうち２点を図化した。70（第126図）は，口縁部である。外反する口縁部外面上部に，横位刺突文を２条施し，その直下に，斜位刺突文を施す。また，やや膨らんだ口唇部頂上には，幅３～５㎜程度のキザミを施す。内面は，ナデをおこなう。71（第126図）は，胴部外面に貝殻条痕文を施す。包含層出土遺物３点と接合した。胴部上位の一部に方向は不明瞭だが，刺突文を施し，その下位には，綾杉状の条痕文を施す。内面はナデをおこなう。図化した２点は胎土や器壁の厚みの違いから同一個体ではないと判断した。

土器分類　土器片は，いずれもⅣ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第126図　土坑52号・出土遺物・分布図

土坑53号（SK53：第127図）

検出状況　B－23区，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，南側壁面直下から北側に向かってやや急な下傾斜だが，北側壁面付近で急傾斜になった後，そのまま垂直に立ち上がる。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸0.90ｍ，短軸0.62ｍ，最深部は0.33ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土にわずかに黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑54号（SK54：第127図）

検出状況　B－13区，XIII層上面で検出された。

切り合い　竪穴住居跡３号（SH３）と切り合う。埋土がSH３と一様であることから，SH３との新旧関係は不明確であるが，SH３に伴う施設とは断定し難い。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，ほぼ水平に広がる。西側壁面・東側壁面は，ともにほぼ垂直気味に立ち上がる。掘り込みは，XIV層まで達する。

規　　模　長軸0.90ｍ，短軸0.61ｍ，最深部は0.25ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　埋土中からは，１点の遺物が出土し，図化した。72（第127図）は，底部である。内外面ともに剥落が激しく施文等の有無が判断できなかった。接合痕が確認できる。はじめに底部の円盤を作り，その側面に胴部を貼り付けたと推測できる。

土器分類　明確な型式判断はできなかった。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑55号（SK55：第127図）

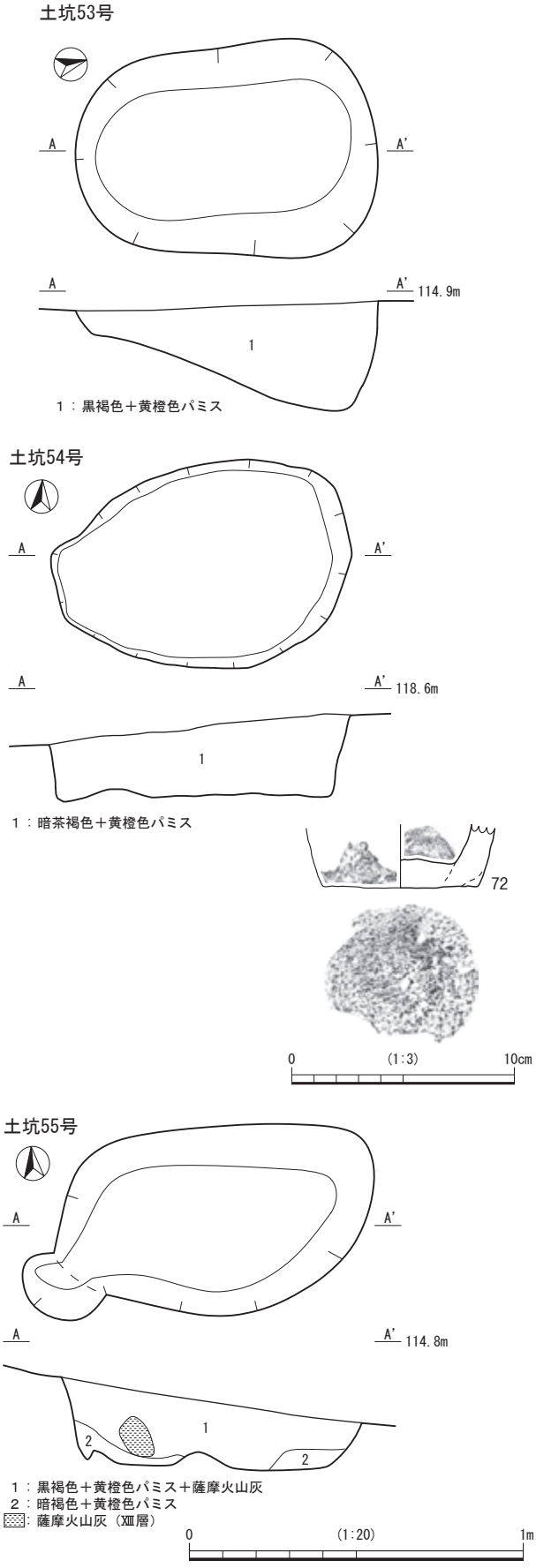
検出状況　D－26区，XIII層上面で検出された。一部樹根による影響を受けている可能性がある。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，中央と東側に一部凸部をもつが水平に広がる。西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XIII層で収まる。

規　　模　長軸0.90ｍ，短軸0.57ｍ，最深部は0.23ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。埋土２は，暗褐色の土に黄橙色パミスを含むが薩摩火山灰（XIII層）は含まない土である。また，埋土１の下部の



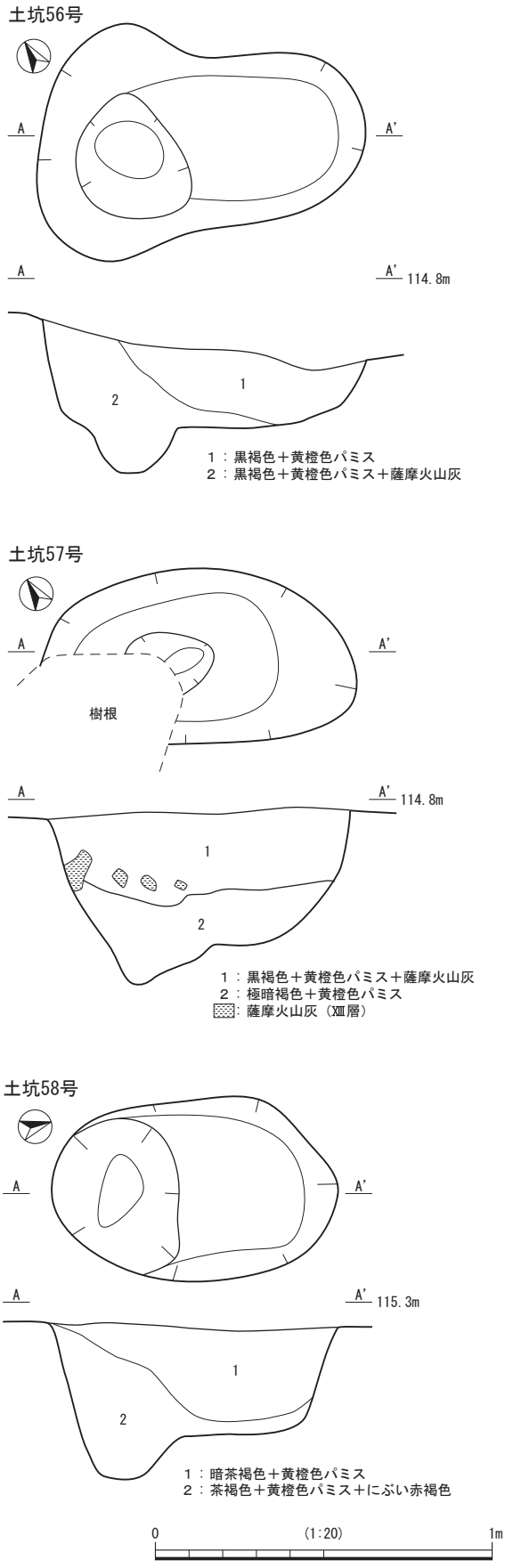
第127図　土坑53号・土坑54号・出土遺物・土坑55号

一部に薩摩火山灰（XIII層）のブロックが確認できる。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑56号（SK56：第128図）
検出状況　D-26区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，北西側に柱穴状の凹み部があり，中央から南東側にかけて水平に広がる。北西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。
規　　模　長軸0.96m，短軸0.51m，最深部は0.39mである。
埋　　土　埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。その包含量は，埋土1<埋土2となる。また，埋土2には，ごくわずかだが薩摩火山灰（XIII層）が含まれる。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑57号（SK57：第128図）
検出状況　E-32区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　一部，樹根の撹乱を受け推定だが，平面の形状は横長とした。北西側壁面は，最深部位置からやや急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は，最深部位置からやや緩やかに立ち上がった後，水平に広がるが，再度やや急傾斜で開口する。
規　　模　長軸0.91m，短軸0.52m，最深部は0.51mである。
埋　　土　埋土は2つに分かれる。埋土1は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。埋土2は，極暗褐色の土にごくわずかに黄橙色パミスを含むが，薩摩火山灰（XIII層）は含まない土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑58号（SK58：第128図）
検出状況　F・G-23区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，北側に柄杓の柄を置いたような形状で，南側に柱穴状の凹み部をもち，北側は水平に広がる。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XIV層まで達している。
規　　模　長軸0.85m，短軸0.54m，最深部は0.47mである。



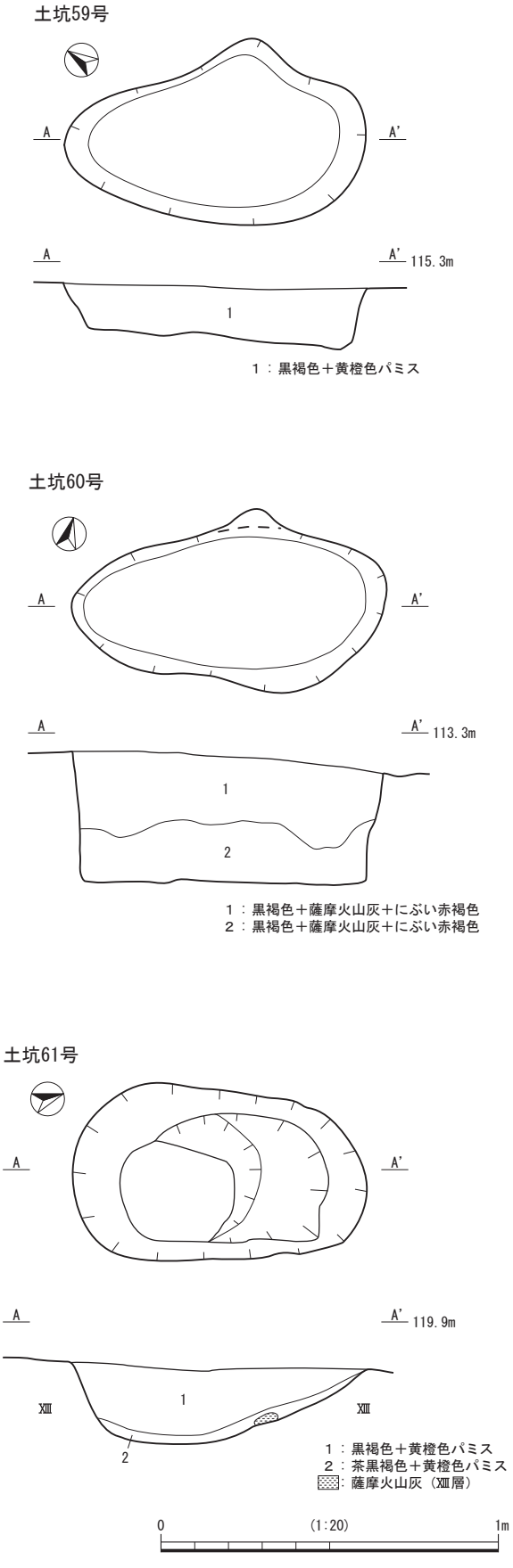
第128図　土坑56号～58号

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑59号（SK59：第129図）
検出状況　Ｂ-22区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，北西から南東に向かって緩やかに下傾斜する。南東側壁面は，床面から急傾斜で立ち上がる。北西側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XIII層で収まる。
規　　模　長軸0.89ｍ，短軸0.50ｍ，最深部は0.19ｍである。
埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑60号（SK60：第129図）
検出状況　Ｎ-57区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，水平に広がる。西側壁面・東側壁面は，ともにほぼ垂直に立ち上がる。
規　　模　長軸0.93ｍ，短軸は0.45ｍ，最深部は0.39ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）とにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や薩摩火山灰の包含量（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑61号（SK61：第129図）
検出状況　Ｅ-10区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，横長である。北側壁面上部から緩やかに下傾斜した後，やや水平に広がり，その後急傾斜で立ち上がり南側壁面を形成する。掘り込みは，XIII層で収まる。
規　　模　長軸0.86ｍ，短軸0.50ｍ，最深部は0.22ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の



第129図　土坑59号～61号

土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。底面直上の一部には，薩摩火山灰（Ⅻ層）のブロックが堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑62号（SK62：第130図）

検出状況　M-55区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形横長である。東側壁面は，ほぼ垂直に掘り込まれた後，西側へやや緩やかに下傾斜し，その後ほぼ水平に広がる。西側壁面は，底面からやや壁面を掘り込むように弧状に立ち上がる。

規　　模　長軸0.87ｍ，短軸0.44ｍ，最深部は0.47ｍである。

埋　　土　埋土は４つに分けられる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスとまだら状ににぶい赤褐色の土（Ⅹ Ⅳ層）は含むが，薩摩火山灰（Ⅻ層）は含まない土である。埋土２・埋土３も，ともに黒褐色の土で薩摩火山灰（Ⅻ層）とまだら状ににぶい赤褐色の土（Ⅻ層）は含むが，黄橙色パミスは含まない土である。薩摩火山灰の包含量（埋土２<埋土３）の違いで分層した。また，埋土４も，黒褐色の土でにぶい赤褐色の土（Ⅻ層）は含むが，黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含まない土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑63号（SK63：第130図）

検出状況　C-21区，Ⅺ層で検出された。

切り合い　切り合いはない。

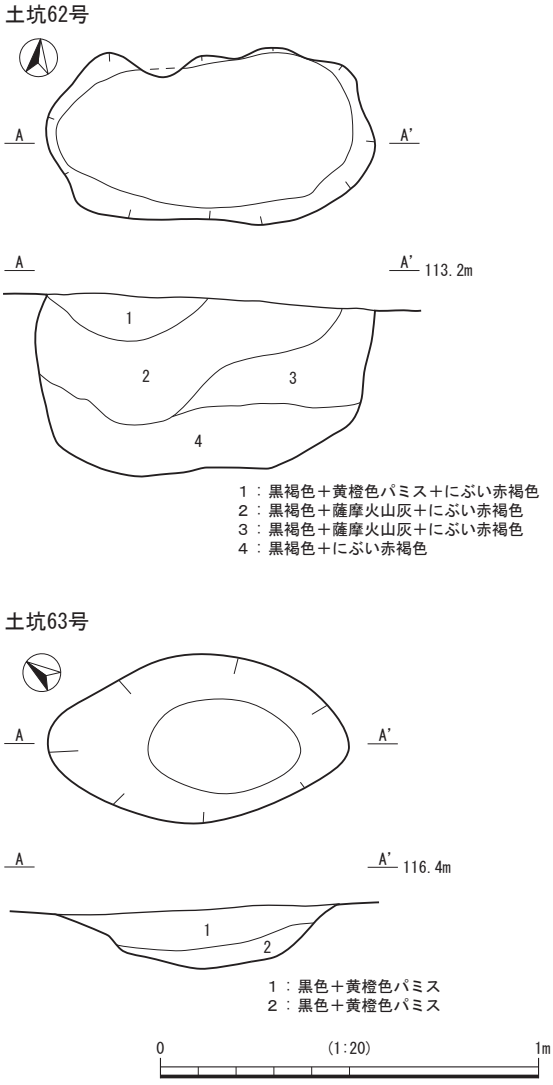
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。底面は，中央が若干凹むが水平に広がる。南東側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。北西側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がった後，緩やかに開口する。

規　　模　長軸0.79ｍ，短軸0.45ｍ，最深部は0.16ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。しまりの強さ（埋土１>埋土２）や炭化物の有無（埋土１：なし，埋土２：わずかに有り）等の違いで分層した。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　埋土２に，わずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。



第130図　土坑62号・土坑63号

土坑64号（SK64：第131図）

検出状況　E・F-29区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，水平に広がる。南側壁面・北側壁面は，ともに底面から垂直気味に立ち上がる。

規　　模　長軸0.72ｍ，短軸0.44ｍ，最深部は0.38ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。その包含量は，埋土１>埋土２となる。

出土遺物　埋土中から，遺物が１点出土し，図化した。73（第131図）は花崗岩製の石皿である。破片資料で、扁平な石材の片面を使用面としている。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑65号（SK65：第131図）

検出状況　D-25区，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，横長である。底面は，一部樹根の影響を受けている。東側壁面は，底面からやや緩やかに立ち上がる。西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，一段有するが，すぐにやや急傾斜で開口する。掘り込みは，XIII層で収まる。

規　　模　長軸0.67ｍ，短軸0.44ｍである。最深部は0.14ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスとごくわずかに炭化物を含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　埋土に，ごくわずかな炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑66号（SK66：第131図）

検出状況　G-24区，XIII層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

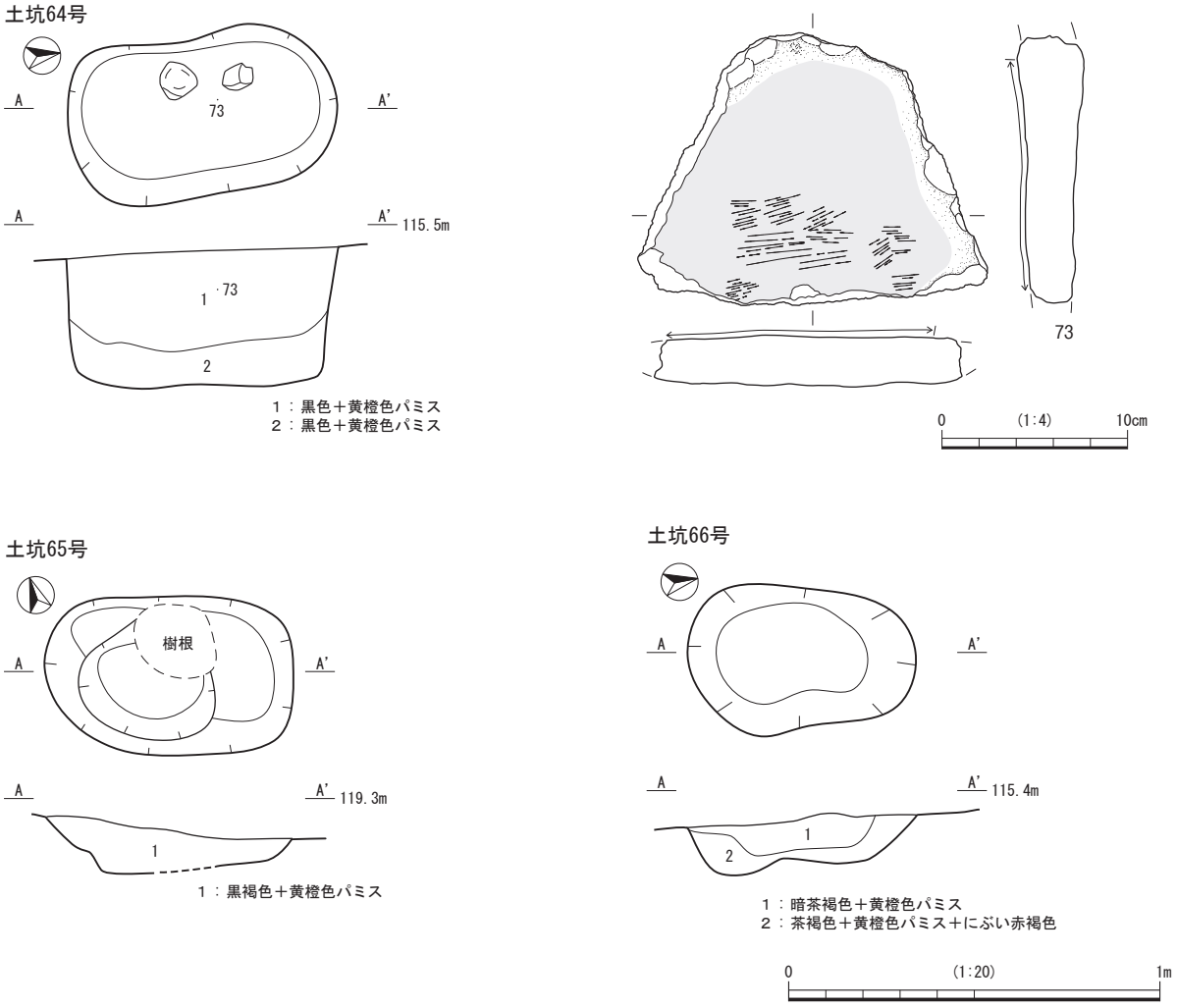
形　　状　平面の形状は，不定形横長である。北側壁面上部からやや急傾斜で南側へ掘り込まれた後，ほぼ水平に広がって段を有するが，再度，緩やかに南側へ下傾斜し，最深部となる。その後，やや急傾斜で南側壁面を形成する。掘り込みは，XIII層で収まる。

規　　模　長軸0.62ｍ，短軸0.38ｍ，最深部は0.14ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XIII層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１<埋土２となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

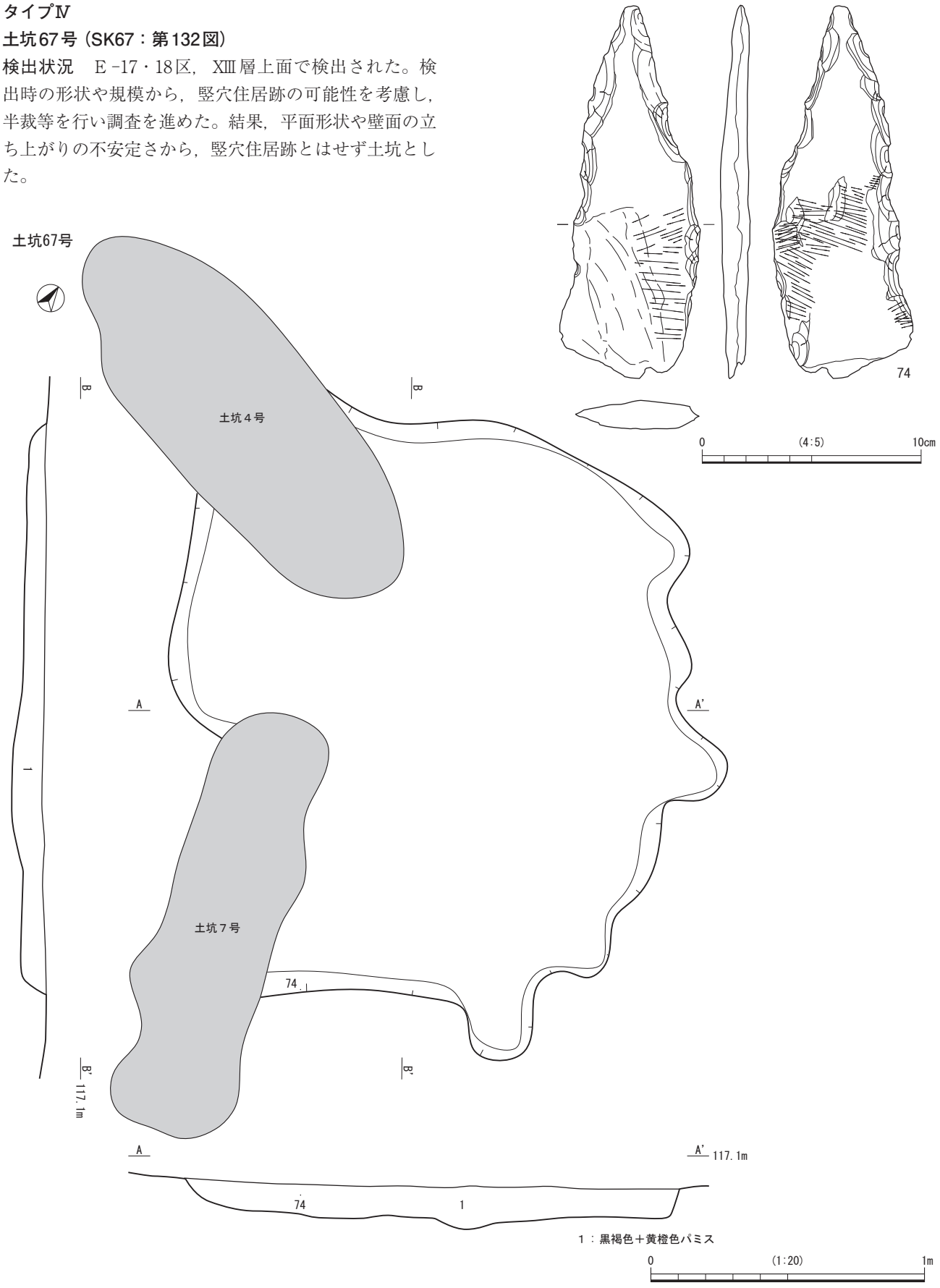


第131図　土坑64号・出土遺物・土坑65号・土坑66号

タイプⅣ

土坑67号（SK67：第132図）

検出状況　E-17・18区，Ⅻ層上面で検出された。検出時の形状や規模から，竪穴住居跡の可能性を考慮し，半裁等を行い調査を進めた。結果，平面形状や壁面の立ち上がりの不安定さから，竪穴住居跡とはせず土坑とした。



第132図　土坑67号・出土遺物

切り合い　SK67は，SK４とSK７によって切られている。SK67の方が，SK４・SK７以前に構築されていた。

形　　状　平面の形状は，不定形方形である。底面は，多少の凸凹はあるが，ほぼ水平に広がる。北側壁面・西側壁面は，ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。南側壁面・東側壁面は，ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸2.09ｍ，短軸1.80ｍ，最深部は0.16ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　74（第132図）はホルンフェルス製の石槍である。両側縁より押圧剥離を施したのち、表裏両面を研磨し薄く成形している。形状から刺突具としての使用も考えられる。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑68号（SK68：第133図）

検出状況　Ｃ-24区，Ⅻ層上面で検出された。検出時の形状が方形であったため，竪穴住居跡の可能性を考慮して調査を行った。結果，底面に凹凸が多く，貼床も確認できなかったことから竪穴住居跡とはせず土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

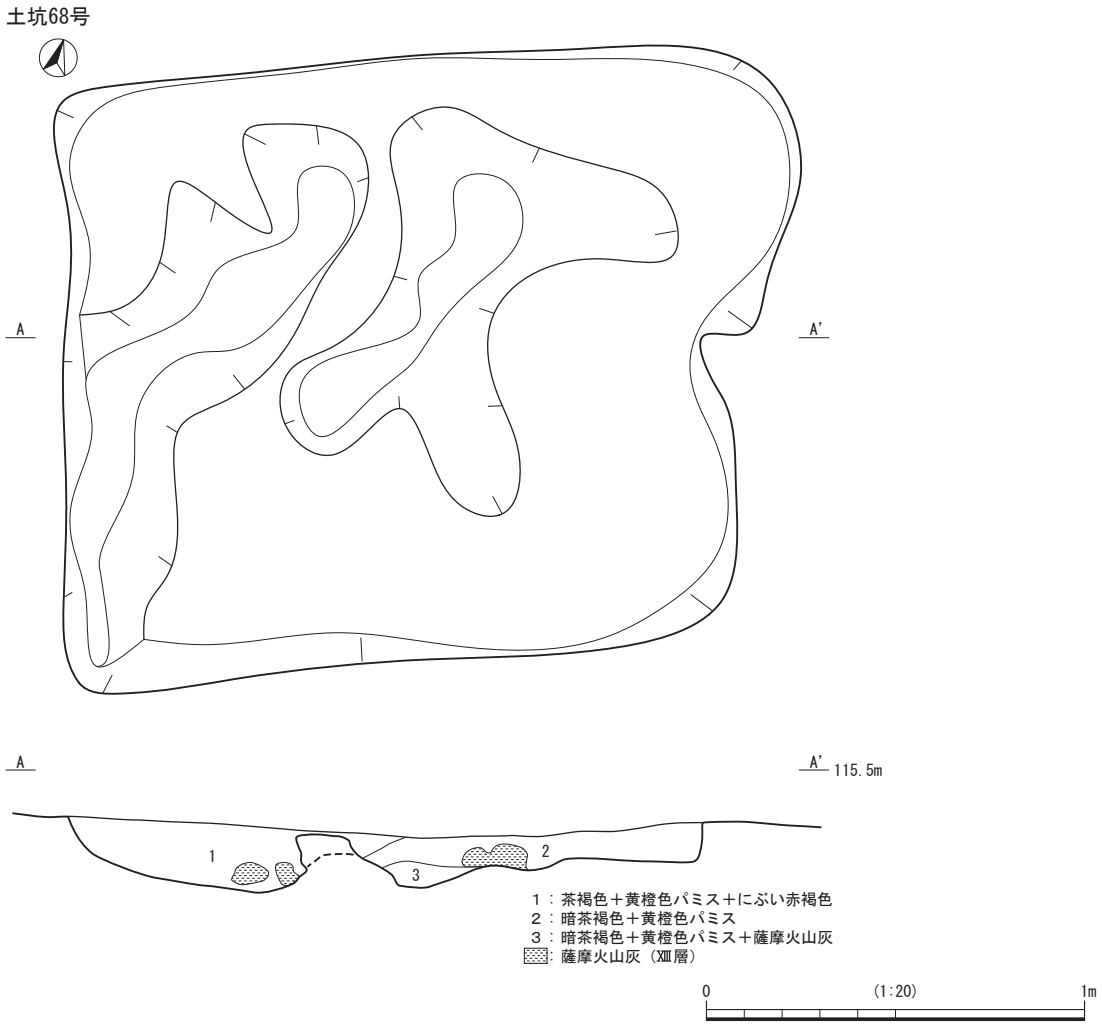
形　　状　平面の形状は，方形である。底面は，凹凸が多く見られる。東側壁面・西側壁面は，ともに急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸1.68ｍ，短軸1.60ｍ，最深部は0.17ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）が含まれる土である。埋土２・埋土３は，ともに暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土中には，薩摩火山灰（Ⅻ層）やにぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）のブロックが認められる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第133図　土坑68号

土坑69号（SK69：第134図）

検出状況　C－23区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，円形である。底面は，緩やかな波状を形する。南西側壁面・北東側壁面は，ともにやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸1.58ｍ，短軸1.22ｍ，最深部は0.10ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。一部には，薩摩火山灰（Ⅻ層）のブロックが認められる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑70号（SK70：第135図）

検出状況　B・C－14区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形円形である。底面は，北東側から南西側に向かって緩やかに下傾斜する。北東側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。南西側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がった後，一段有するようにやや水平に広がって，再びほぼ垂直に開口する。掘り込みは，Ⅺ層上面まで達する。

規　　模　長軸1.53ｍ，短軸1.24ｍ，最深部は0.63ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　埋土中や検出面上から，14点の遺物が出土した。石器は，磨石・敲石が４点，石皿が１点，９点は礫であった。そのうち５点を図化した。75～79（第135図）は安山岩製の磨石・敲石類で、いずれも扁平な円礫を用いている。75・76は表裏両面を磨面に使用し，側面全体に敲打痕が認められる。77は下半分が欠損しており，残存部分の全体を磨面に使用している。78は安山岩製の石皿である。破片資料で扁平な礫の表裏両面を使用面としている。被熱しており右側欠損部にスス，タールが付着する。79は表裏両面を磨面に使用するが、表面および側面の敲打痕は範囲が狭い。被熱しており裏面にススが付着する。

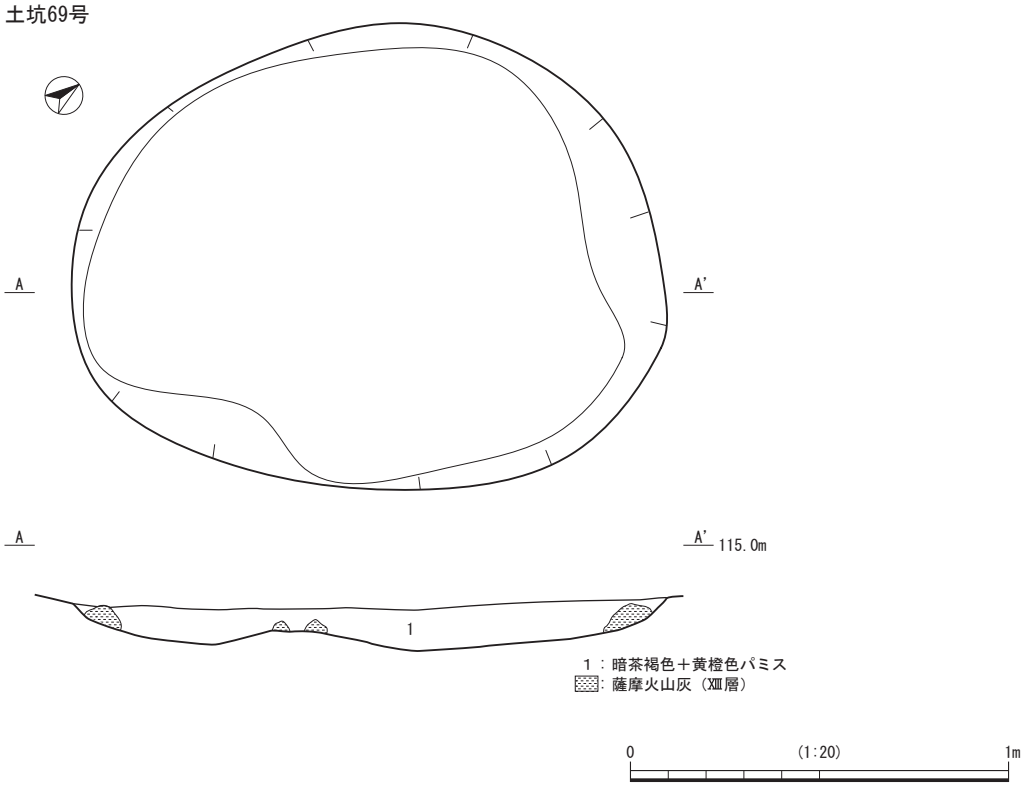
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑71号（SK71：第136図）

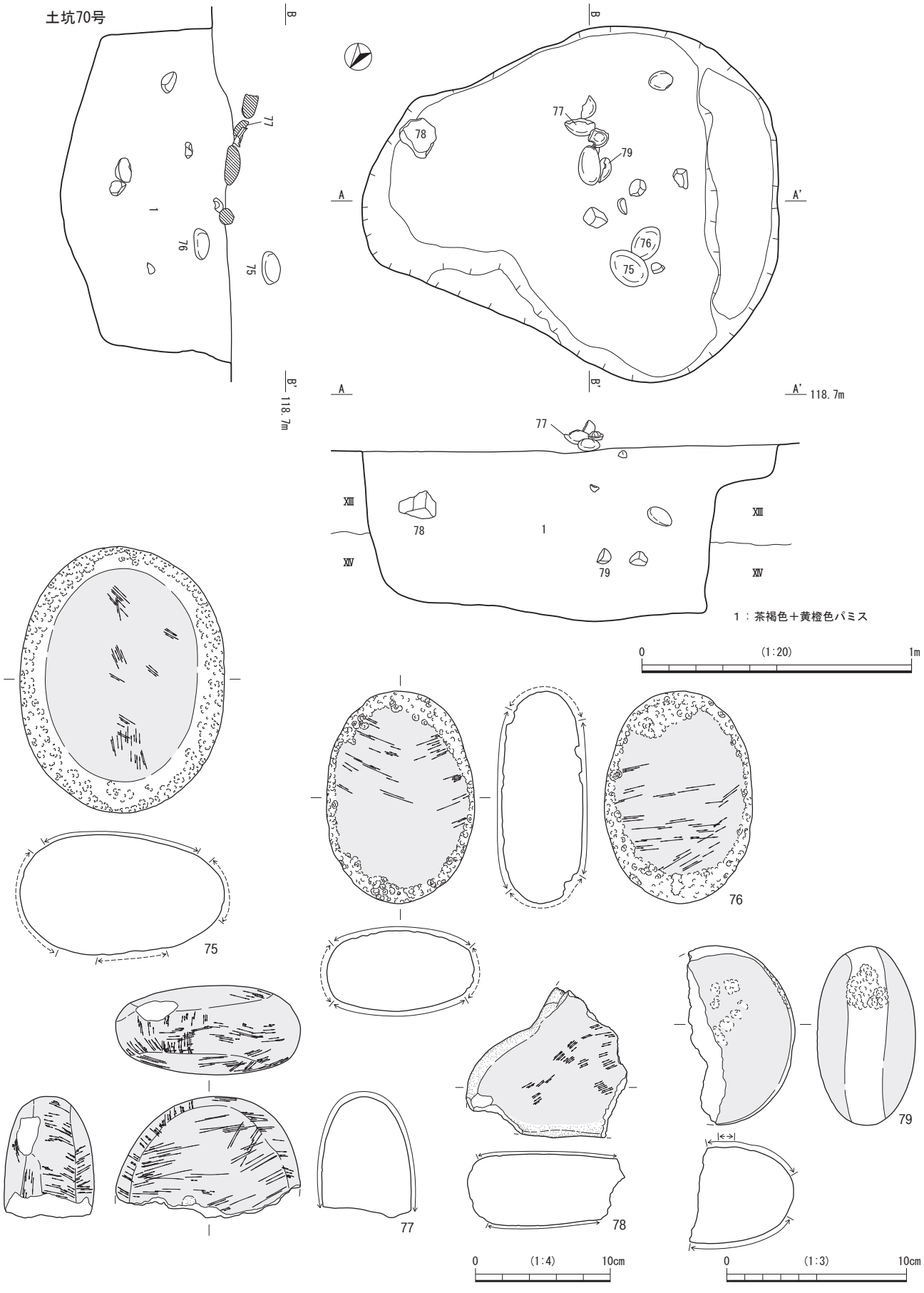
検出状況　C－13区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形方形である。底面は，西側から東側に向かってスロープ状に傾斜している。西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，やや急傾斜になって開口する。掘り込みは，Ⅺ層まで達している。



第134図　土坑69号



第135図　土坑70号・出土遺物

規　　模　長軸1.28ｍ，短軸1.20ｍ，最深部は0.44ｍである。
埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，褐色の土で黄橙色パミスは含まない土である。埋土２は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土３は，埋土２に薩摩火山灰（Ⅻ層）が混入している土である。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

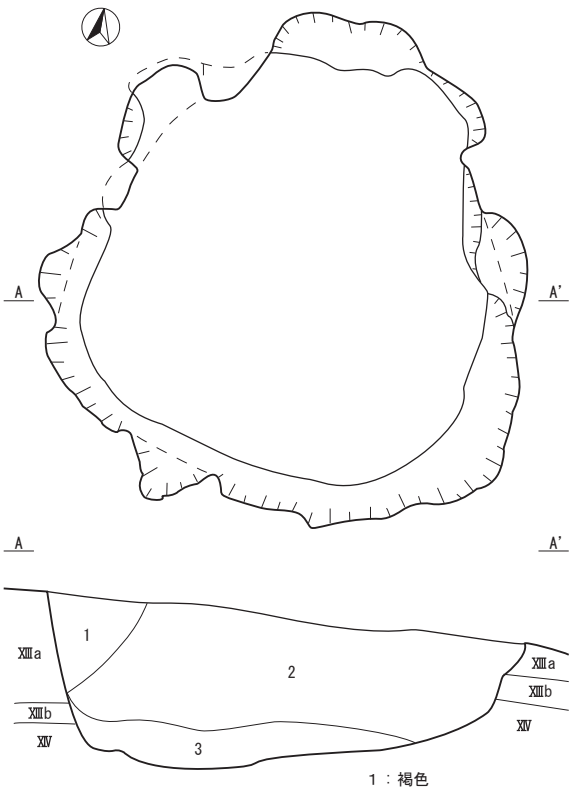
土坑72号（SK72：第136図）
検出状況　Ｆ-22区，Ⅻ層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，方形である。底面は水平に広がる。西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。
規　　模　長軸1.40ｍ，短軸1.00ｍ，最深部は0.26ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑73号（SK73：第136図）
検出状況　Ｅ-32区，Ⅻ層で検出された。検出時の形状が，不明瞭だったため，サブトレンチを設定し，土坑の範囲を確認した。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形円形である。底面は，検出面のおよそ1/5の大きさで水平に広がる。南側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がった後，緩やかになるが，その後急傾斜で開口する。北側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，一段有した後にやや急傾斜で開口する。
規　　模　長軸1.24ｍ，短軸は1.14ｍ，最深部は0.46ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。埋土２は，にぶい黄橙色の土に黄橙色パミスを含むが，薩摩火山灰（Ⅻ層）を含まない土である。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　埋土に，炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑74号（SK74：第136図）
検出状況　Ｃ-24・25区，Ⅻ層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形方形である。底面には，凹凸が一部に確認できる。北側壁面・南側壁面は，ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。
規　　模　長軸1.27ｍ，短軸1.06ｍ，最深部は0.20ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。埋土１の一部には，薩摩火山灰（Ⅻ層）のブロックが混在する。埋土２は，褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

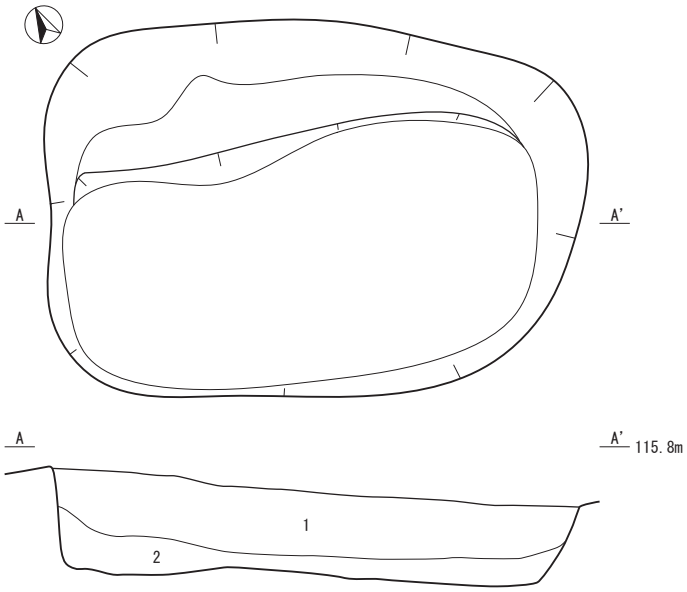
土坑75号（SK75：第137図）
検出状況　Ⅰ-47・48区，Ⅻ層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，方形である。北側壁面上部から下部まで垂直に掘り込まれている。底面は，そこから水平に広がった後，緩やかに傾斜して南側壁面下部に至る。南側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みの一部は，ⅩⅤ層まで達している。
規　　模　長軸1.13ｍ，短軸1.00ｍ，最深部は0.36ｍである。
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とにぶい赤褐色の土（ⅩⅣ層）を含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）やにぶい赤褐色の土の包含量（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。
出土遺物　埋土中からは，21点の遺物が出土した。土器片が11点，石器が１点，礫が９点であった。そのうち土器２点と石器１点を図化した。80（第137図）は，SK75内出土遺物２点が接合した口縁部から胴部である。口縁部外面は，横位刺突文を２条施す。胴部外面は，綾杉状と縦位の貝殻条痕文を施す。刺突文と条痕文の施文順は，条痕文が先，横位刺突文が後となる。また，口唇部には幅２～３㎜程度のキザミを施す。内面は，ナデをおこなう。81（第137図）は，SK75内出土遺物５点が接合した胴部から底部である。胴部外面は，斜位貝殻条痕文を底部端部近くまで施す。胴部内面はナデをおこない，底部内面には指おさえが確認できる。80と81は，胎土・色調などが類似しているが，条痕文の幅に差異が見られ，接合しないことから，同一個体ではないと判断

土坑71号



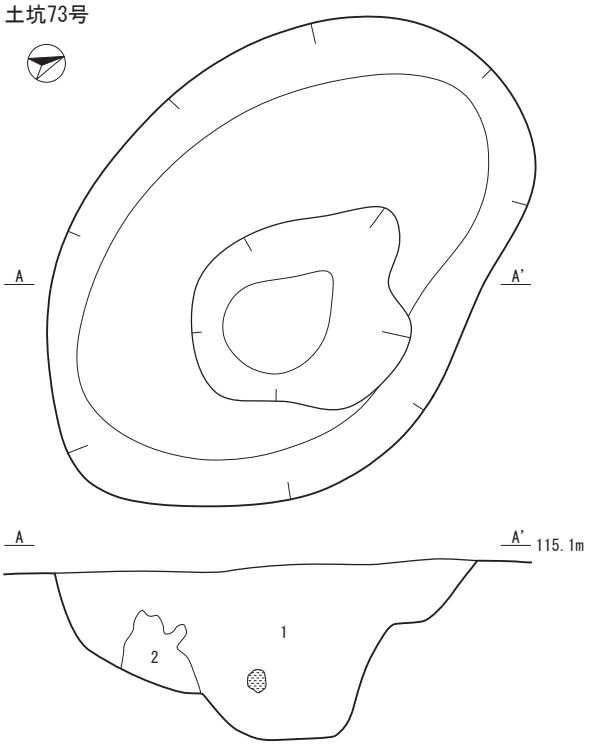
1：褐色
2：黒褐色＋黄橙色パミス
3：黒褐色＋黄橙色パミス＋薩摩火山灰

土坑72号



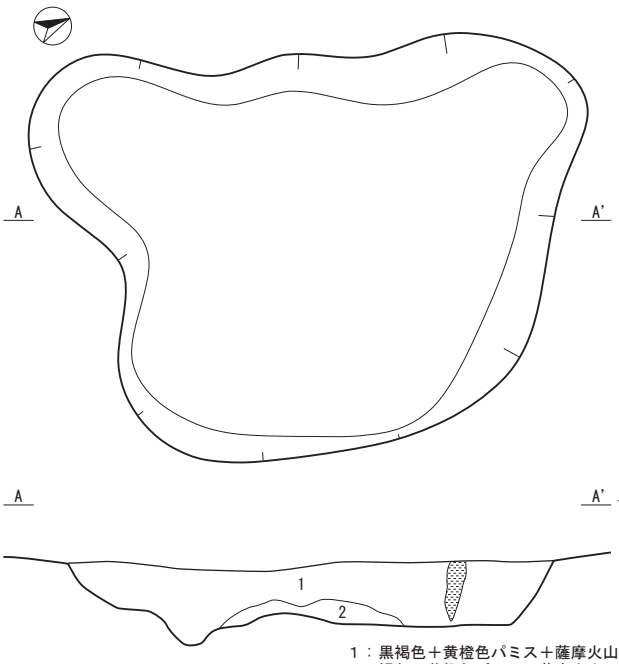
1：暗茶褐色＋黄橙色パミス
2：茶褐色＋黄橙色パミス＋にぶい赤褐色

土坑73号

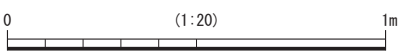


1：黒褐色＋黄橙色パミス＋薩摩火山灰
2：にぶい黄橙色＋黄橙色パミス
▨：薩摩火山灰（XIII層）

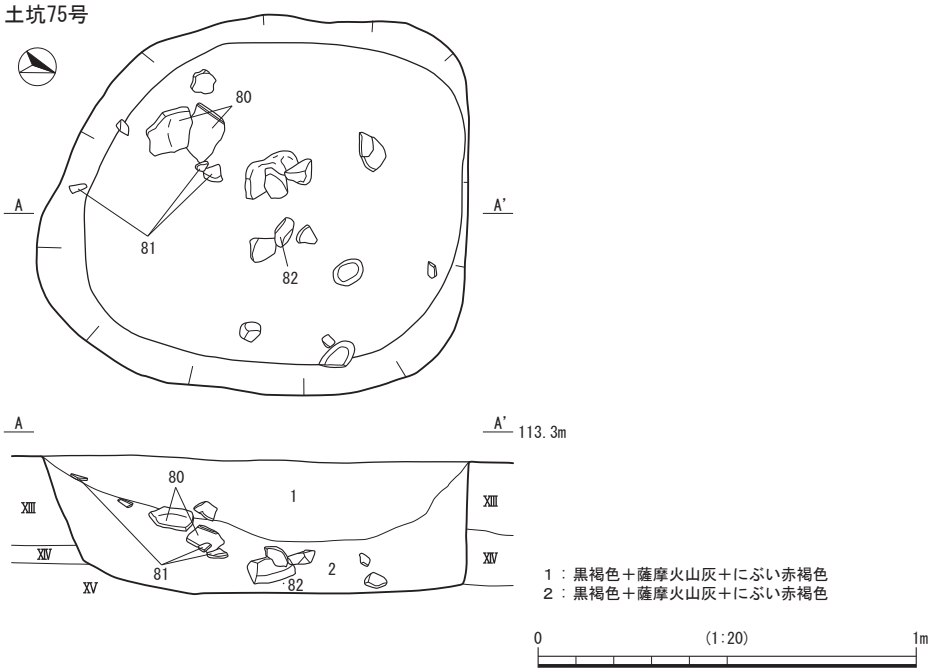
土坑74号

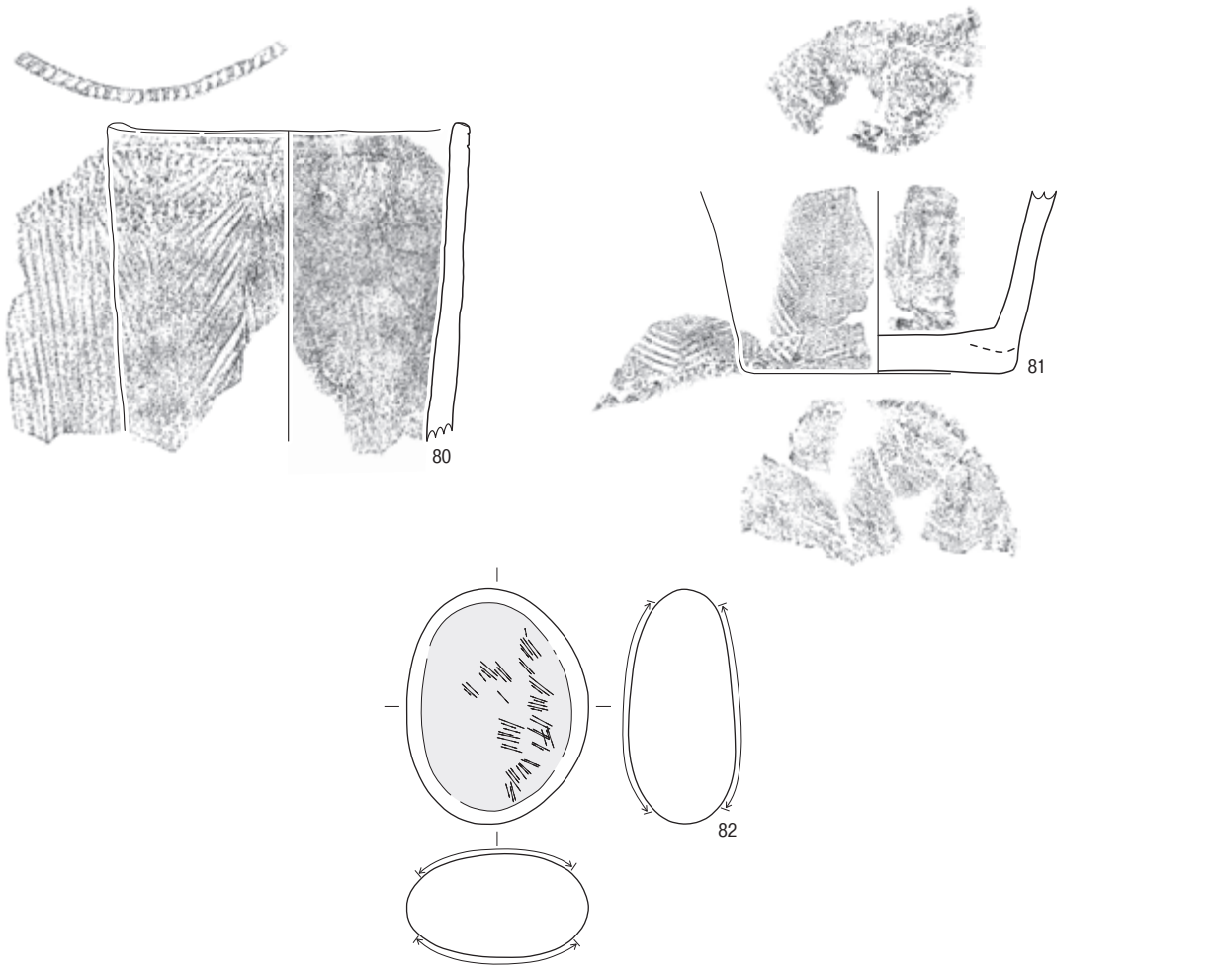


1：黒褐色＋黄橙色パミス＋薩摩火山灰
2：褐色＋黄橙色パミス＋薩摩火山灰
▨：薩摩火山灰（XIII層）



第136図　土坑71号～74号





第137図　土坑75号・出土遺物

した。82（第137図）はホルンフェルス製の磨石・敲石である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。遺物が全体的に，南西側から北西側に遺物は出土しているが，出土位置に差が見られる。南西側から北西側に流れ込んだ可能性が高い。

土器分類　80・81は，ともにⅣ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑76号（SK76：第138図）

検出状況　G-22区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形方形である。西側壁面上部・東側壁面上部から，最深部に向かって弧を描くように掘り込まれ，丸底状になっている。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸0.88ｍ，短軸0.84ｍ，最深部は0.33ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（Ⅻ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑77号（SK77：第138図）

検出状況　F-27区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，円形である。底面は，柄杓の柄の方を北側に向けて置いたように２つの段を有するように広がる。南側壁面・北側壁面は，ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸0.96ｍ，短軸0.75ｍ，最深部は0.44ｍである。

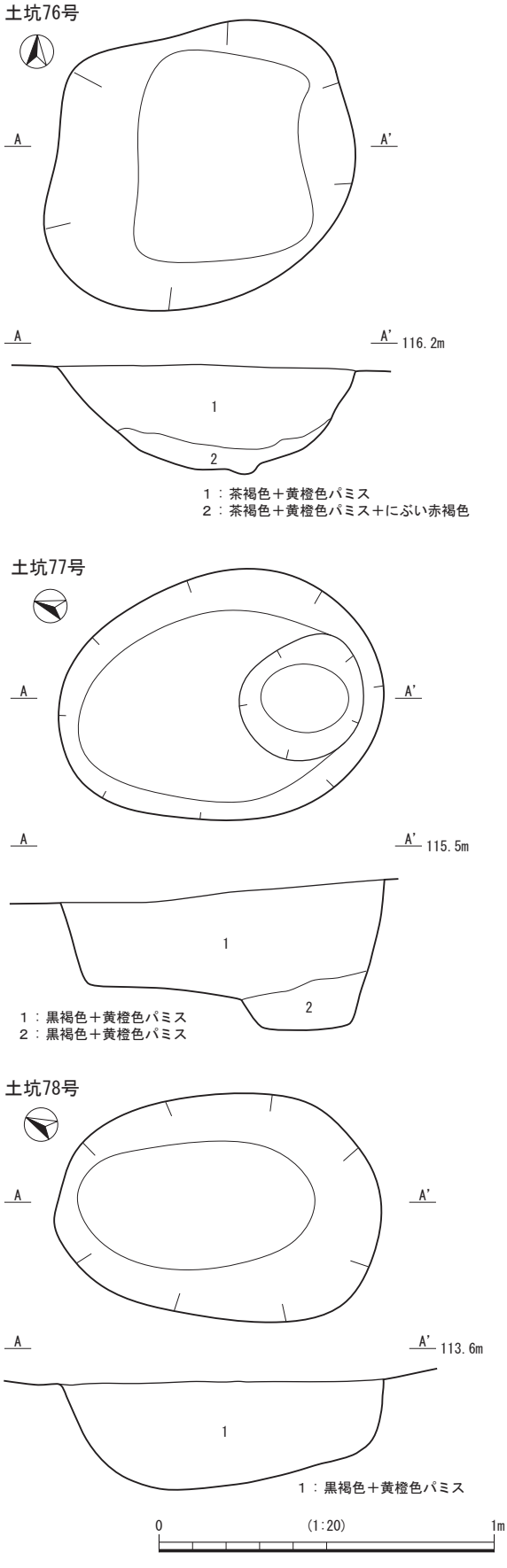
埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や黄橙色パミスの包含量（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑78号（SK78：第138図）

検出状況　Ⅰ-51区，Ⅺ層で検出された。検出時には，ややまとまった状態で10個程度の小礫が確認された。当初は集石遺構を考慮して調査を行った。結果，礫が表面にしか確認されなかったことから，SK78に流れ込んできた可能性が高いと判断し，集石遺構とはせず土坑とした。



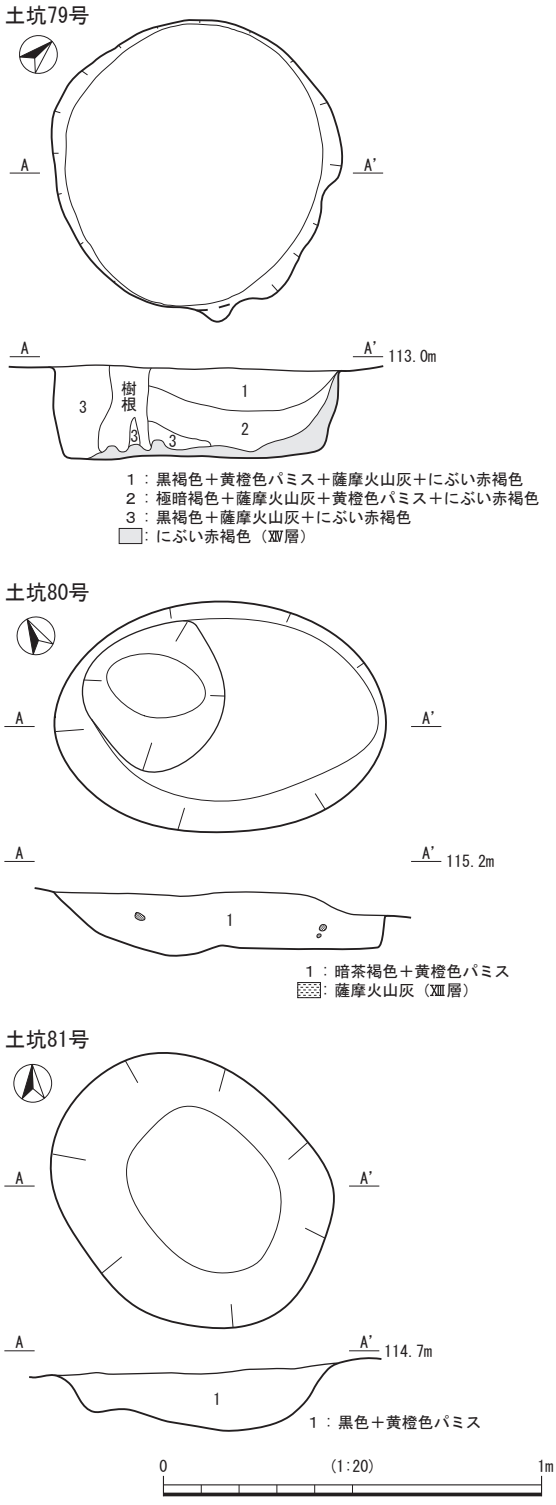
第138図　土坑76号～78号

切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，方形である。面は，北西側から南東側に向かって緩やかに傾斜する。北西側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。
規　　模　長軸0.97ｍ，短軸0.68ｍ，最深部は0.31ｍである。
埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　埋土に，炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑79号（SK79：第139図）
検出状況　K-52区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，円形である。底面は，水平に広がる。南西側壁面・北東側壁面は，ともにほぼ垂直気味に立ち上がる。
規　　模　長軸0.75ｍ，短軸0.75ｍ，最深部は0.25ｍである。
埋　　土　一部樹根による影響を受けているが，埋土は４つに分かれる。埋土１・埋土３は，ともに黒褐色の土に薩摩火山灰（XIII層）とにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。にぶい赤褐色の土の包含量(埋土１<埋土２）の違い等で分層した。また埋土１には，黄橙色パミスも含まれる。埋土２は，極暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層），にぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。各埋土の薩摩火山灰とにぶい赤褐色の土，黄橙色パミスの包含量は，次のようになる。薩摩火山灰は，埋土１＝埋土３<埋土２，にぶい赤褐色の土は，埋土１<埋土２<埋土３，黄橙色パミスは，埋土１>埋土２である。
出土遺物　遺物は，出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑80号（SK80：第139図）
検出状況　C-24区，XIII層上面で検出された。
切り合い　切り合いはない。
形　　状　平面の形状は，不定形円形である。底面は，土坑中央より東側は水平に広がり，西側は若干掘り込まれている。西側壁面は，底面から緩やかに傾斜して立ち上がる。東側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは，XIII層で収まる。
規　　模　長軸0.88ｍ，短軸0.62ｍ，最深部は0.15ｍである。
埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。一部に薩摩火山灰（XIII層）のブロックが認められる。
出土遺物　遺物は出土していない。
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑81号（SK81：第139図）
検出状況　B-25区，XII層で検出された。検出時に若干の礫が含まれており，掘り込みを伴う集石遺構の可能



第139図　土坑79号～81号

性を考慮して調査を行った。結果，埋土中からはそれ以上の礫は出土しなかったことから，埋まる過程の凹みにたまったものと判断し，集石遺構とはしなかった。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，円形である。東側壁面上部から，底面に向かいやや急傾斜で掘り込まれた後，なだらかに西側へ向かってスロープ状に立ち上がる。その後，やや下傾斜となった後に，やや急傾斜で西側壁面を形成する。

規　　模　長軸0.74ｍ，短軸0.71ｍ，最深部は0.17ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。炭化物も確認できた。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　埋土に，炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑82号（SK82：第140図）

検出状況　Ｃ-24区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形方形である。南側壁面上部から底面へ向かいやや急傾斜に掘り込まれた後，やや緩やかになるが，再度やや急傾斜で底面へ達する。北側壁面上部から底面へ向かい緩やかに掘り込まれた後，急傾斜で底面へ達する。底面はやや弧状である。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸0.78ｍ，短軸0.69ｍ，最深部は0.26ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土３も，黒褐色の土であるが，黄橙色パミスは含まず，薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。一部に，薩摩火山灰（Ⅻ層）のブロックが認められる。

出土遺物　埋土中からは，２点の遺物が出土した。そのうち１点を図化した。83（第140図）は，口縁部である。やや内湾する口縁部外面には貝殻復縁部による横位及び斜位の刺突文を施す。内面は，ナデをおこなう。図化できなかったもう１点は，胴部外面に，山形押型文を施す。

土器分類　83はⅤ類に，もう１点はⅨ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑83号（SK83：第140図）

検出状況　Ｆ-26・27区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

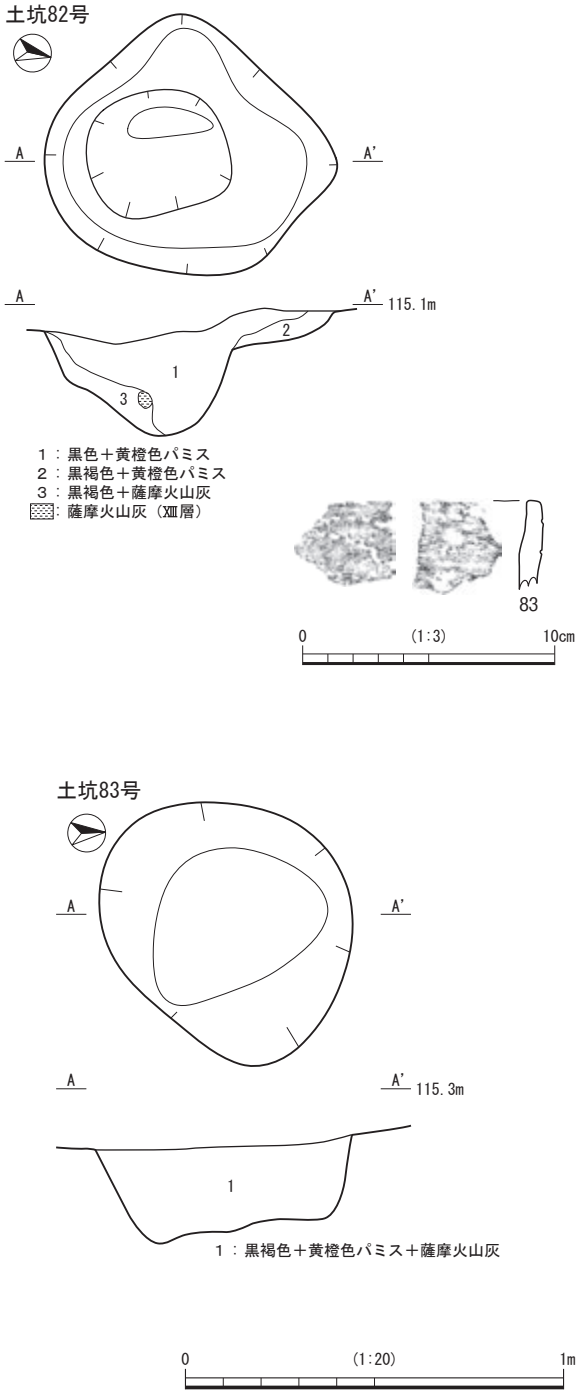
形　　状　平面の形状は，不定形円形である。底面は，北側から南側に向かって緩やかに下傾斜する。南側壁面・北側壁面は，ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸0.68ｍ，短軸0.66ｍ，最深部は0.25ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第140図　土坑82号・出土遺物・土坑83号

土坑84号（SK84：第141図）

検出状況　F-26・27区，XⅢ層上面で検出された。南東部は，掘りすぎのため破線を用いて，平面形状を推定ラインで示した。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形円形である。北側壁面上部から，底面に急傾斜で掘り込まれ，一度水平に広がる。その後，やや急傾斜で更に掘り込まれた後，急傾斜で立ち上がった後，ラッパ状に南側壁面を形成する。

規　　模　長軸0.73ｍ，短軸は推定で0.60ｍ，最深部は0.32ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XⅢ層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑85号（SK85：第141図）

検出状況　E－８・９区，XⅢ層で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形方形である。西側壁面上部から急傾斜で底面へ掘り込まれ，そこから東側壁面へ向かって緩やかに急傾斜し，そのまま東側壁面上部へ向かう。掘り込みは，XⅢ層で収まる。

規　　模　長軸0.73ｍ，短軸0.54ｍ，最深部は0.18ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　埋土に，炭化物を確認し，採取したが科学分析等は行わなかった。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑86号（SK86：第141図）

検出状況　E-22区，XⅢ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

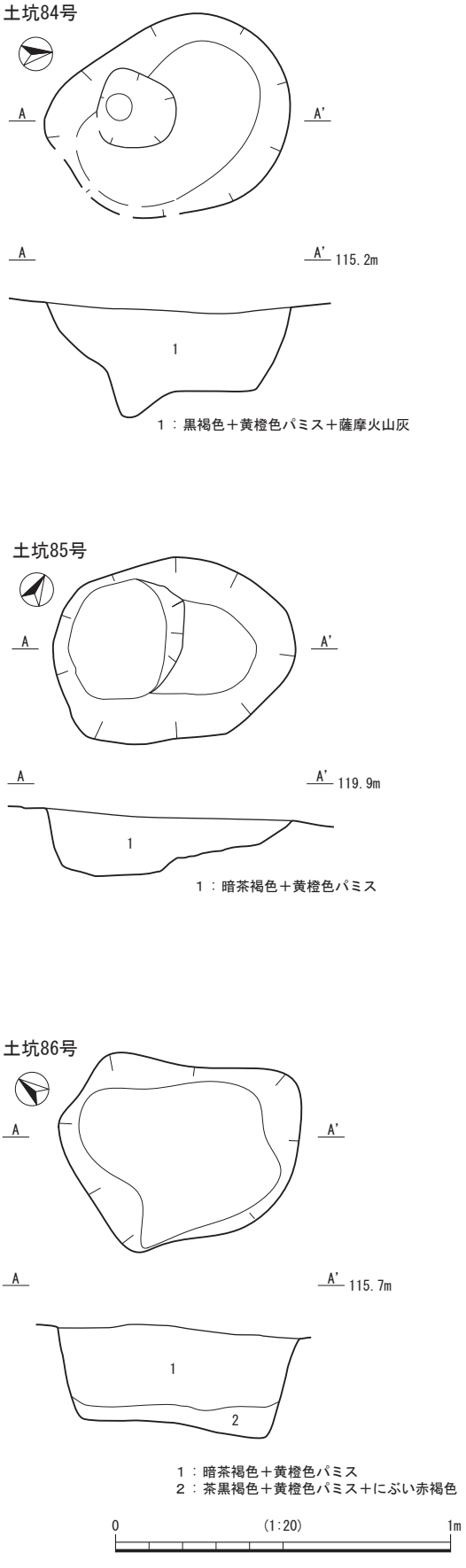
形　　状　平面の形状は，不定形方形である。底面は，中央より北西側は水平に広がり，中央より南東側へ緩やかに下傾斜する。南東側壁面・北西側壁面は，ともに急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XⅢ層で収まる。

規　　模　長軸0.72ｍ，短軸0.53ｍ，最深部は0.30ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶黒褐色の色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XⅣ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第141図　土坑84号～86号

土坑87号（SK87：第142図）

検出状況　G-23区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形円形である。底面は，土坑ほぼ中央におよそ半径５㎝の水平な広がりを見せる。西側壁面上部・東側壁面上部は，ともに底面へ向かい緩やかに段を有するように掘り込んだ後，急傾斜で掘り込まれる。掘り込みは，Ⅻ層まで達する。

規　　模　長軸0.65ｍ，短軸0.50ｍ，最深部は0.35ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスと，にぶい赤褐色の土（Ⅻ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑88号（SK88：第142図）

検出状況　Ｋ・Ｌ-56区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，方形である。底面は，水平に広がる。西側壁面・東側壁面は，ともに底面からほぼ垂直に立ち上がる。

規　　模　長軸0.57ｍ，短軸0.55ｍ，最深部は0.33ｍである。

埋　　土　埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土３は，黒褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とにぶい赤褐色粘質土（Ⅻ層）を含む土である。薩摩火山灰の包含量（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。また，埋土１は，黄橙色パミスを含む。埋土２は，暗褐色の土に薩摩火山灰（Ⅻ層）とにぶい赤褐色の土（Ⅻ層）を含む土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑89号（SK89：第142図）

検出状況　Ｂ-22区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

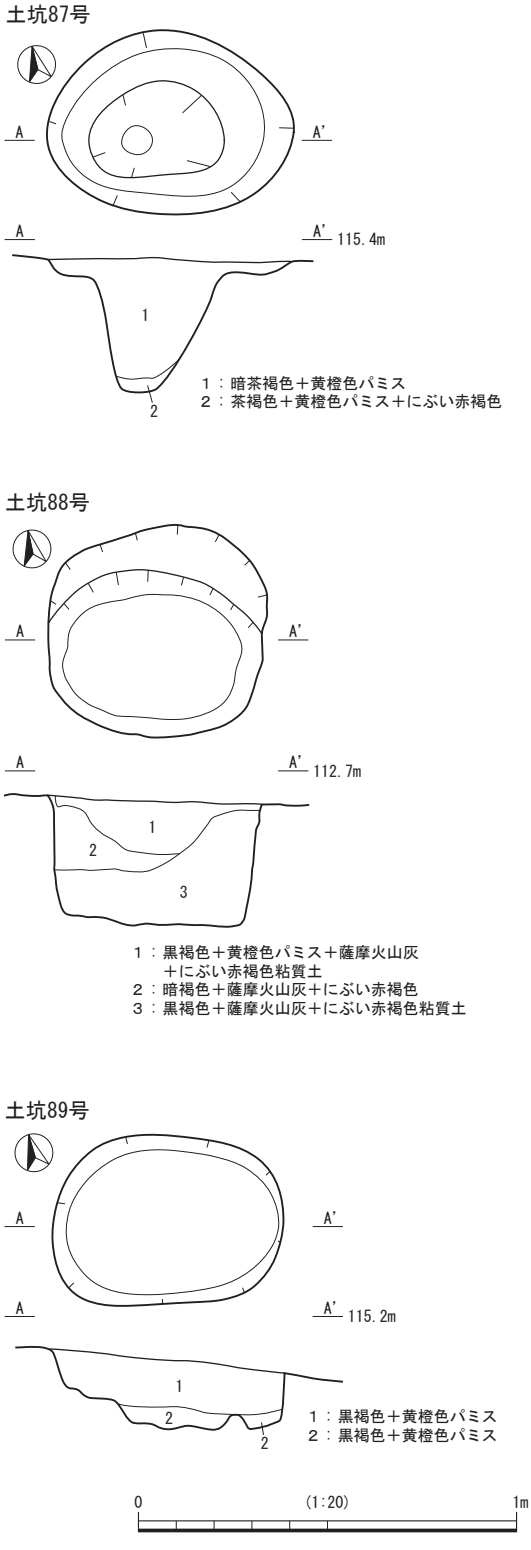
形　　状　平面の形状は，方形である。底面は，３つの段を有する。西側壁面上部から東壁面へ向かい，急傾斜で掘り込まれわずかな段を有し，緩やかな下傾斜をしてさらに一段有する。その後再び急傾斜で掘り込まれ，東側壁面へ水平に広がる。東側壁面は，底面から垂直に立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸0.60ｍ，短軸0.45ｍ，最深部は0.18ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）や粘性の強さ（埋土１<埋土２）の違い等で分層した

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　埋土１に，炭化物を確認したが，採取等はできなかった。明確な焼土は，確認されなかった。



第142図　土坑87号～89号

土坑90号（SK90：第143図）

検出状況　E－28・29区，XIII層上面で検出された。西側の一部は，樹根の影響の可能性もある。建物跡に伴う柱穴の可能性が考えられたが，周囲に本土坑と同様の土坑や住居跡のような遺構が確認されなかったため，土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形円形である。底面は，水平に広がる。北西側壁面・南東側壁面は，ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　長軸0.50ｍ，短軸0.49ｍ，最深部は0.30ｍである。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（XIII層）を含む土である。その包含量は，黄橙色パミス>薩摩火山灰となる。一部に薩摩火山灰（XIII層）のブロックが混在する。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑91号（SK91：第143図）

検出状況　F－22区，XIII層上面で検出された。検出時には，SK91の北側に近接してSK50が検出された。SK91を従穴，SK50を主穴として調査を行った。結果，トンネルやブリッジの痕跡が確認できなかったため，別々の土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形方形である。底面は，水平に広がる。南側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がる。北側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みは，XIII層で収まる。

規　　模　長軸0.50ｍ，短軸0.45ｍ，最深部は0.28ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（XIV層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

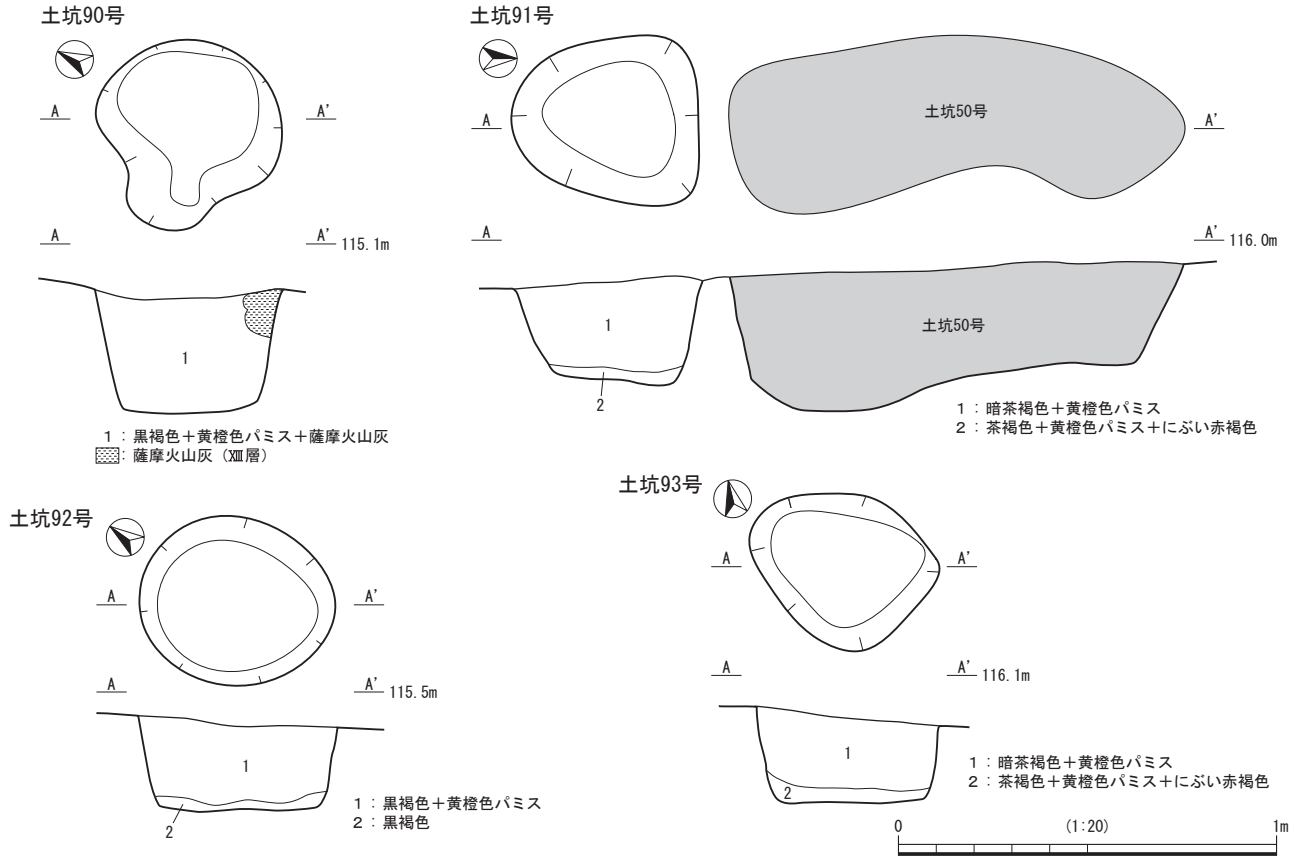
炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑92号（SK92：第143図）

検出状況　C－22区，XIII層上面で検出された。建物跡に伴う柱穴の可能性が考えられたが，周囲に本土坑と同様の土坑や住居跡のような遺構が確認されなかったため，単独の土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，円形である。底面は水平に広がる。北西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。南



第143図　土坑90号～93号

東側壁面は，底面から垂直気味に立ち上がる。

規　　模　長軸0.51ｍ，短軸0.45ｍ，最深部は0.25ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２も，黒褐色の土だが，黄橙色パミスは含まない土である。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑93号（SK93：第143図）

検出状況　Ｇ-22区，Ⅻ層上面で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，不定形方形である。底面は，水平に広がる。西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは，Ⅻ層で収まる。

規　　模　長軸0.48ｍ，短軸0.41ｍ，最深部は0.25ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１は，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，茶褐色の土に黄橙色パミスとにぶい赤褐色の土（Ⅻ層）を含む土である。黄橙色パミスの包含量は，埋土１>埋土２となる。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

タイプⅤ

土坑94号（SK94：第144図）

検出状況　Ⅰ-51区，Ⅹ層で検出された。

切り合い　切り合いはない。

形　　状　平面の形状は，円形である。底面は，円形状に水平に広がる。南西側壁面・北東側壁面は，ともに底面から垂直気味に立ち上がった後，急傾斜で開口する。

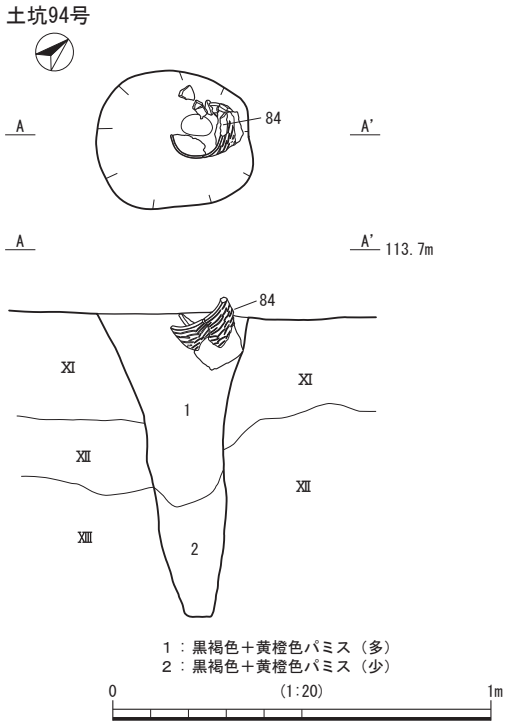
規　　模　長軸0.40ｍ，短軸0.36ｍ，最深部は0.81ｍである。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）の違い等で分層した。

出土遺物　SK94の北壁に接するように口縁部を上に向け，南へ傾いた状況で土器が出土した。84（第144図）がそれである。84は，口縁部から底部までおよそ1/3が残存している。器面は剥落が著しく，外面に貝殻腹縁による刺突文を横位や斜位に施す。口縁部は内湾し，口唇部は平坦に面取りされ，ミガキのようなナデをおこない光沢を帯びる。内面はナデをおこなう。

土器分類　Ⅴ類に該当する。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。


土坑94号
A
A'
84
113.7m
Ⅺ
Ⅻ
Ⅻ
Ⅻ

不明

土坑95号（SK95：第145図）

検出状況　C－26区，Ⅻ層で検出された。北側が樹根による撹乱を受けているため，切り合い・形状・規模の全体は把握できない。検出時の形状から，竪穴住居跡の可能性を考慮し調査を行ったが，樹根による影響が大きかったため，土坑とした。

切り合い　切り合いはない。

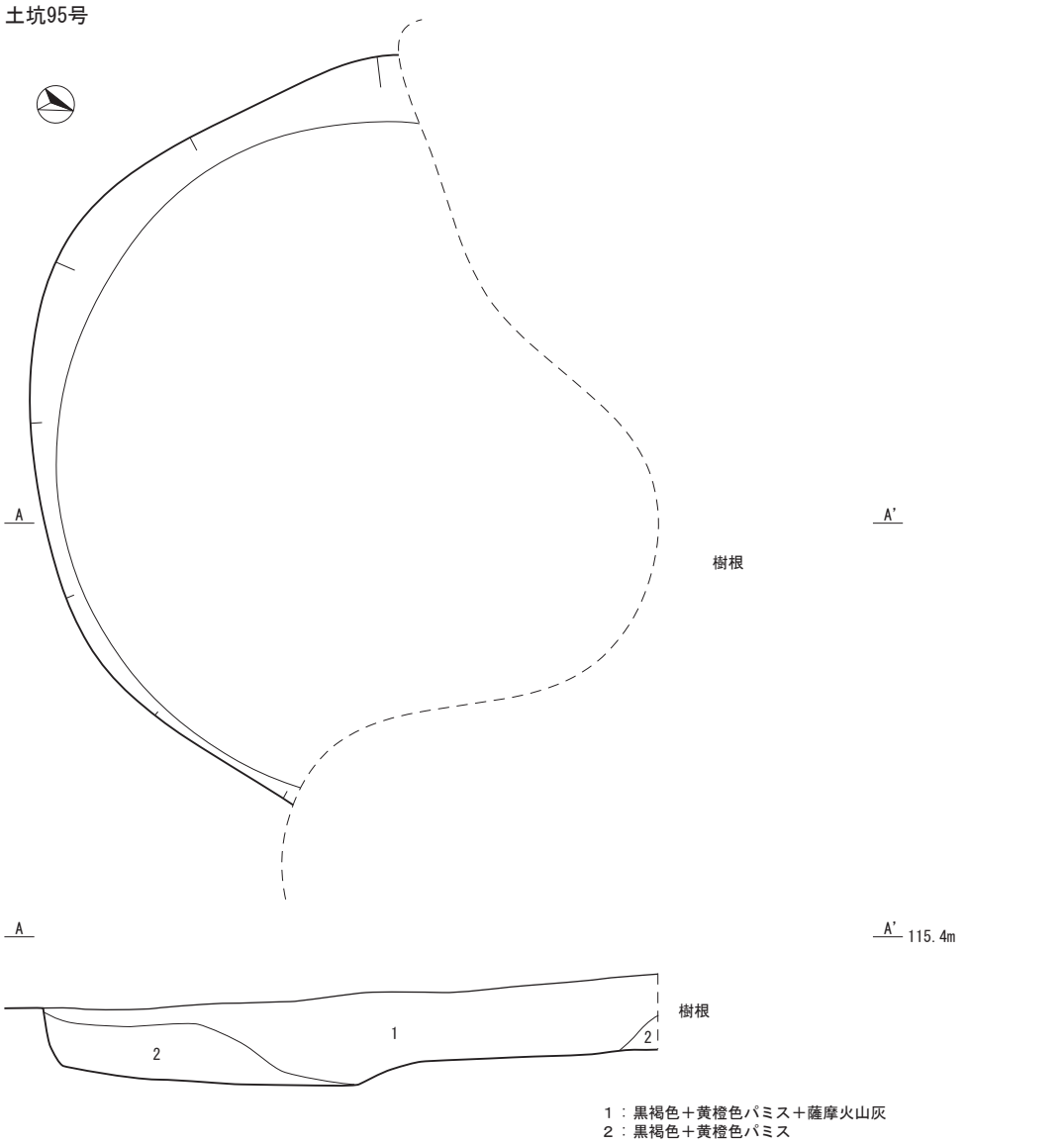
形　　状　西側壁面上部から，垂直気味に掘り込まれ底面に達した後，緩やかに東へ下傾斜しながら広がる。その後，やや緩やかに傾斜するが，すぐに水平に広がる。

規　　模　不明である。

埋　　土　埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１>埋土２）の違い等で分層した。また，埋土１には，薩摩火山灰（Ⅻ層）もわずかに含まれる。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第145図　土坑95号

土坑96号（SK96：第146図）

検出状況　B－23区，XI層，現道から控えをとった境で検出された。検出面から底面近くまで炭化物が多く確認できた。当初はXII層上面で検出したが，壁面にXI層からの掘り込みが確認できたため，拡張し調査を行った。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い　現状では，切り合いはない。

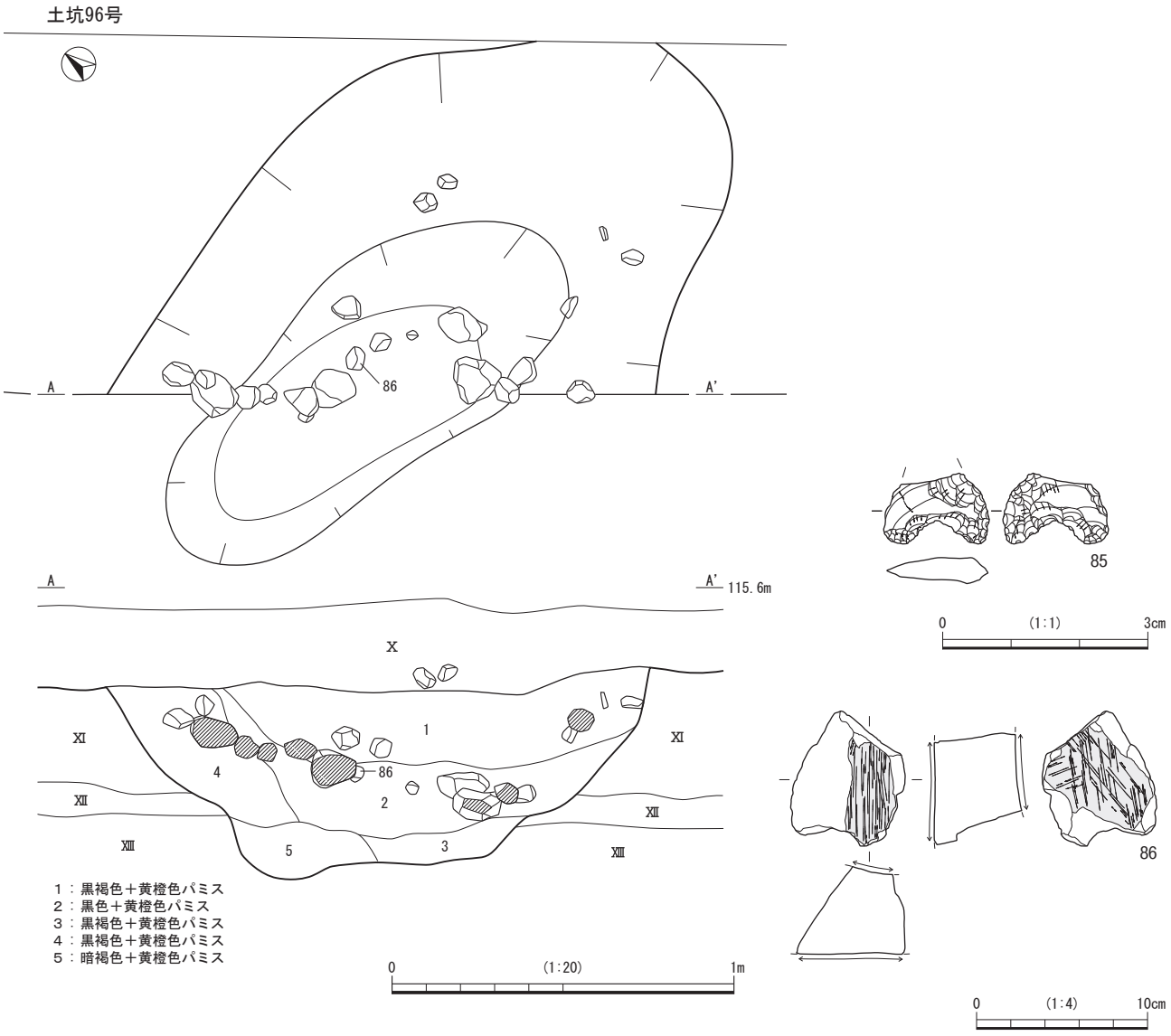
形　　状　現状では，北西側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がった後，ラッパ状に開口する。南東側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がった後，緩やかになり，再度やや急傾斜になって，その後，ほぼ垂直気味に開口する。

規　　模　現状では，不明である。

埋　　土　現状では，埋土は５つに分かれる。埋土１・埋土３・埋土４は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１＝埋土３<埋土４）や黄橙色パミスの包含量（埋土１＝埋土３>埋土４）の違い等で分層した。埋土２は，黒色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土５は，暗褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。各埋土の黄橙色パミスの包含量は，埋土２<埋土４<埋土１＝埋土３<埋土５となる。

出土遺物　埋土中から，遺物が22点出土した。うち石器２点を図化した。85（第146図）は黒曜石製の凹基無茎鏃である。先端部を欠損する。表面に主要剥離面が残り、基部にやや浅い抉りを持つ。86は砂岩製の石皿である。破片資料だが元は扁平な礫を用いたと考えられる。向かい合う２面に磨面が残り、一方は平坦、もう一方は緩い傾斜も持つことから表裏を決定した。

炭 化 物　埋土中で採取した炭化物は，科学分析の結果から，鱗茎（ノビル等の球根）であることが確認された。明確な焼土は確認されなかった。



第146図　土坑96号・出土遺物

土坑97号（SK97：第147図）

検出状況　B－23・24区，XⅢ層上面，現道から控えをとった境で検出された。当初はXⅢ層上面で検出したが，壁面に上層からの掘り込みを確認したため，安全面に配慮した上で拡張し，壁面部分は２日間で調査を行った。SK97は，次年度以降の調査区内に広がる。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い　現状では，切り合いはない。

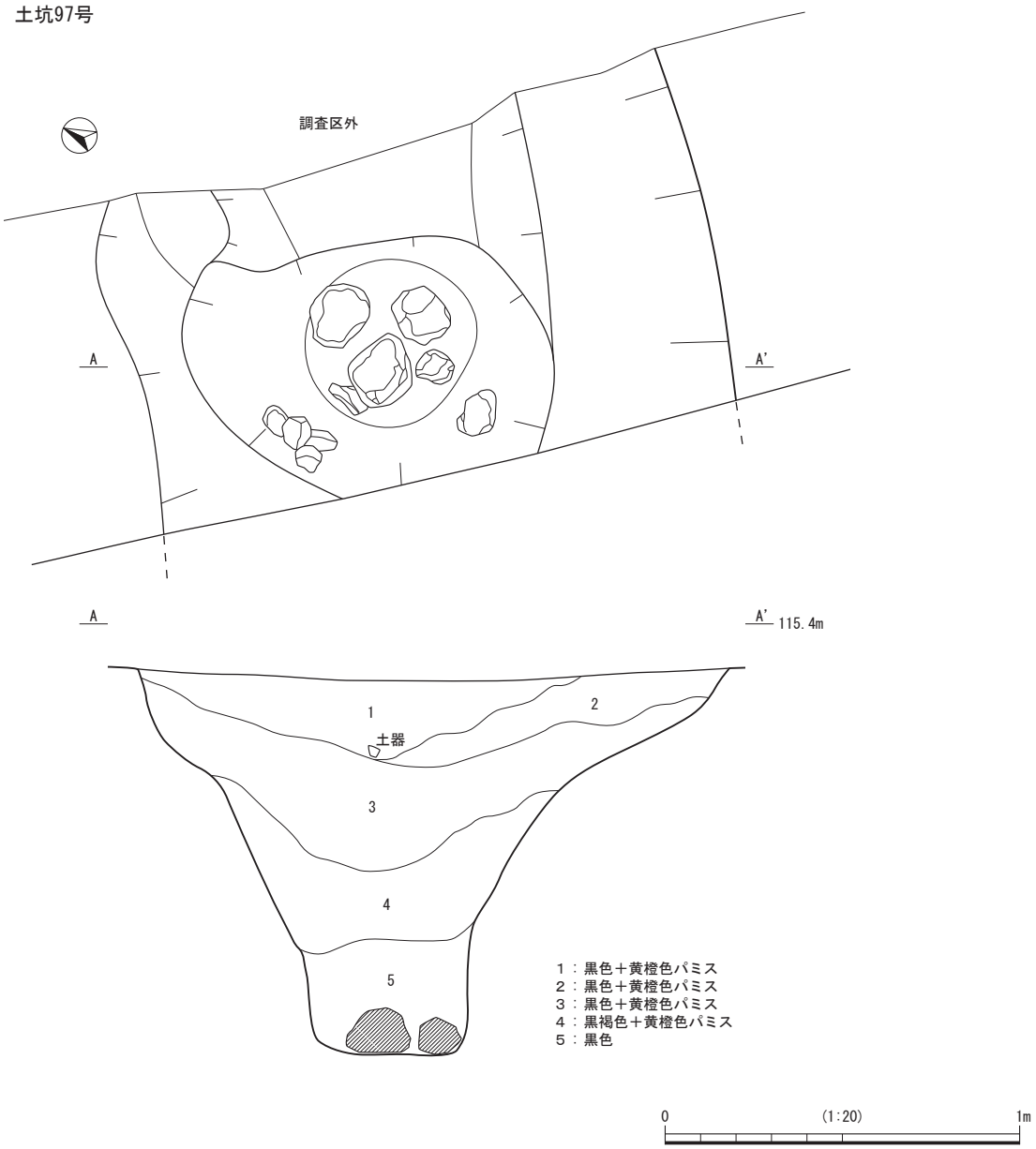
形　　状　現状では，底面は，水平に広がる。北側壁面・南側壁面は，ともに底面から垂直に立ち上がった後，急傾斜になり，その後ラッパ状に開口する。

規　　模　現状では，不明である。

埋　　土　現状では，埋土は５つに分かれる。埋土１・埋土２・埋土３は，ともに黒色の土に黄橙色パミスと炭化物をわずかに含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１<埋土２<埋土３）の違い等で分層した。埋土５も，黒色の土で炭化物を多く含むが，黄橙色パミスは含まない土である。埋土４は，黒褐色の土に黄橙色パミスと炭化物を含み，しまり具合が非常に強い土である。

出土遺物　遺物は，壁面には土器片や礫が，底面からは拳大～乳児の人頭大近くの礫が出土している。調査区外は，今後調査予定のため，壁面や底面にある土器や礫をそのままで埋め戻している。

炭 化 物　埋土中に，炭化物を確認し採取したが，科学分析等は行っていない。明確な焼土は，確認されなかった。



第147図　土坑97号

土坑98号（SK98：第148図）

検出状況　D－36区，XI層上面，平成25年度調査区外との境で検出された。検出時は，竪穴住居跡の可能性を考慮し調査を行った。結果，検出時より遺構が小規模になったり，全貌が見通せないことから，今回の調査では，土坑として取り扱うこととした。検出面はXII層中であったが，調査区境の壁面に，XI層からの掘り込みが確認できた。平面の形状と断面が一致しないのはそのためである。SK98は，北側の樹根を切って構築されている。SK98は，次年度以降の調査区内に広がる。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い　現状では，切り合いはない。

形　　状　現状では，北側壁面上部・南側壁面上部からお椀状に掘り込まれている。

規　　模　現状では，不明である。

埋　　土　現状では，埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土１<埋土２）と黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。底面の一部に薩摩火山灰（XIII層）のブロックが確認できる。

出土遺物　遺物は，壁面に土器片が出土している。調査区外は，今後調査予定のため，壁面の土器はそのままで埋め戻している。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑99号・土坑100号（SK99・SK100：第148図）

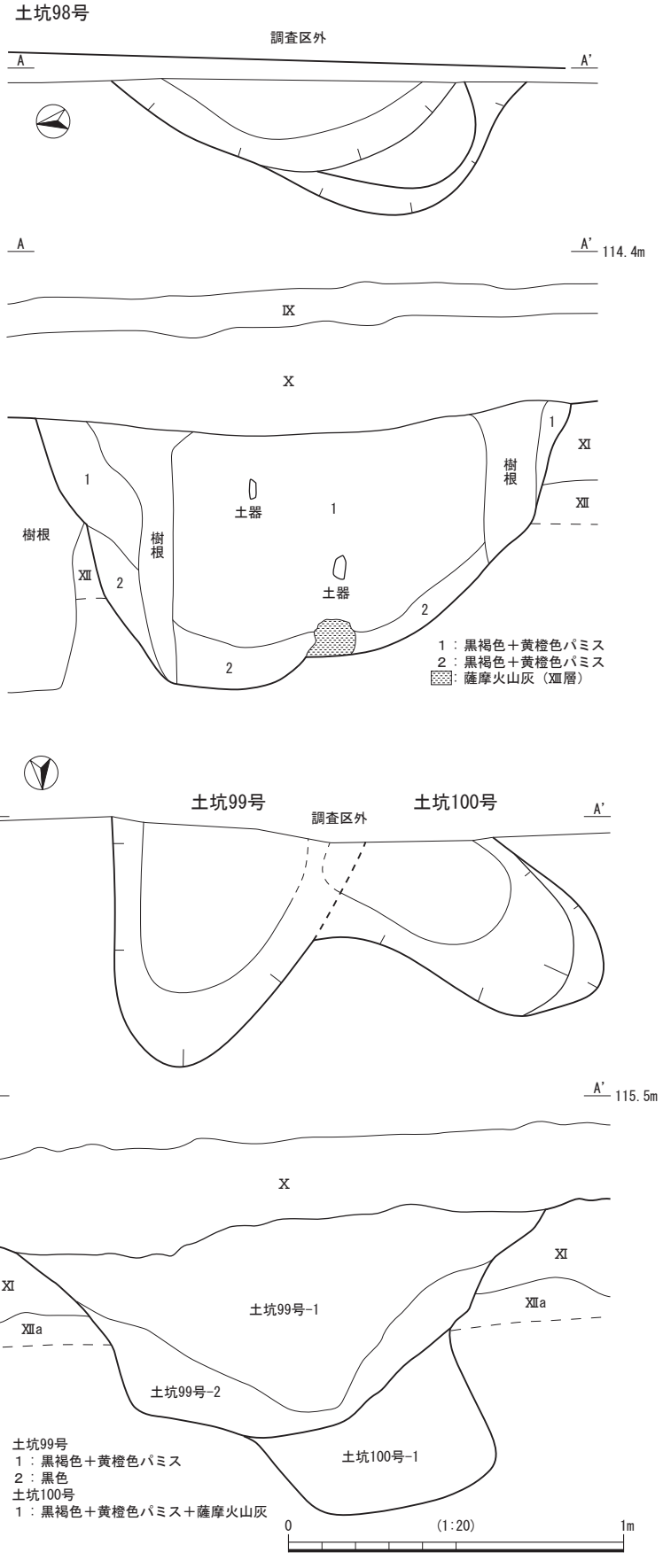
検出状況　B－30区，XII層，調査区外との境で検出された。平面の形状では，新旧の把握が難しかったが，調査区外との壁面で掘り込みの立ち上がりから，新旧関係を把握した。

切り合い　現状では，SK99が，SK100を切っている。

形　　状　SK99は，東側壁面上部から西側に向かってやや緩やかに掘り込まれた後，急傾斜になって掘り込まれ，その後水平気味に底面を構築する。西側壁面は，底面からやや急傾斜で立ち上がった後，急傾斜になり，その後ラッパ状に開口する。SK100の底面は水平に広がる。

規　　模　現状では，不明である。

埋　　土　現状では，SK99の埋土は，２つに分かれる。埋土１は，黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土２は，黒色の土で黄橙色パミスは含まない土である。埋土１・２は，



第148図　土坑98号～100号

ともに炭化物をわずかに含む。現状では，SK100の埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスとごくわずかに薩摩火山灰（XIII層）火山灰を含む土である。底面付近には，にぶい赤褐色の土（XIV層）がまばらに混入している。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　埋土中に，炭化物を確認し採取したが，科学分析等は行っていない。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑101号（SK101：第149図）

検出状況　B－26区，XII層，調査区外との境で検出された。壁面に検出面より上部から掘り込みがあることが確認できた。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い　現状では，切り合いはない。

形　　状　現状では，底面は，水平に広がる。北側壁面は，底面から垂直に立ち上がる。

規　　模　現状では，不明である。

埋　　土　現状では，埋土は３つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに極暗褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量（埋土１>埋土２）の違いで分層した。埋土３は，明黄褐色の土である。黄橙色パミスは含まない。埋土の一部に薩摩火山灰（XIII層）のブロックが混在する。

出土遺物　遺物は，出土していない。

炭 化 物　埋土中に，炭化物を確認し採取したが，科学分析等は行っていない。明確な焼土は，確認されなかった。

土坑102号（SK102：第149図）

検出状況　A－16区，XIII層上面，調査区外との境で検出された。検出面はXIII層であるが，壁面から掘り込みはXI層から始まっていることが確認できた。

切り合い　現状では，掘り込みはない。

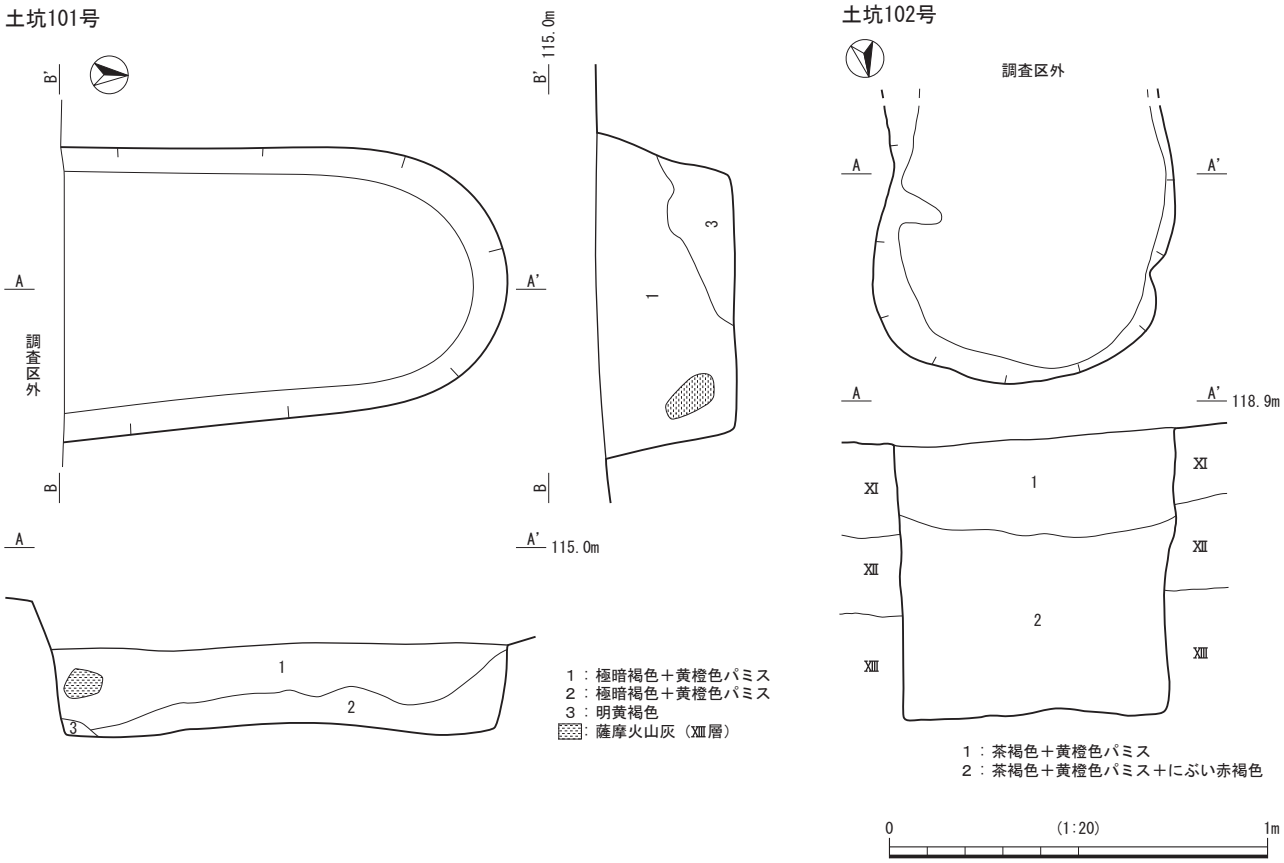
形　　状　現状では，底面は水平に広がる。西側壁面・東側壁面は，ともに底面から垂直に立ち上がる。掘り込みはXIV層まで達する。

規　　模　現状では，不明である。

埋　　土　現状では，埋土は２つに分かれる。埋土１・埋土２は，ともに茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミス以外の混入している土（埋土１：なし，埋土２：にぶい赤褐色の土（XIV層））の違い等で分層した。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第149図　土坑101号・土坑102号

土坑103号（SK103：第150図）

検出状況　F－24区，Ⅻ層上面で検出された。調査区外との境で検出された。壁面に検出面より上部から掘り込みがあることが確認できた。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い　現状では，切り合いはない。

形　　状　現状では，底面は水平に広がる。北側壁面は，底面からほぼ垂直に立ち上がる。南側は，底面から壁面を少し掘り込みながら立ち上がり，その後逆「ノ」の字状になりながら開口する。

規　　模　現状では，不明である。

埋　　土　現状では，埋土は単層で，暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。

土坑104号（SK104：第150図）

検出状況　F－27区，Ⅻ層上面で検出された。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。南側一部は，樹根と思われる影響を受けている。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い　不明である。

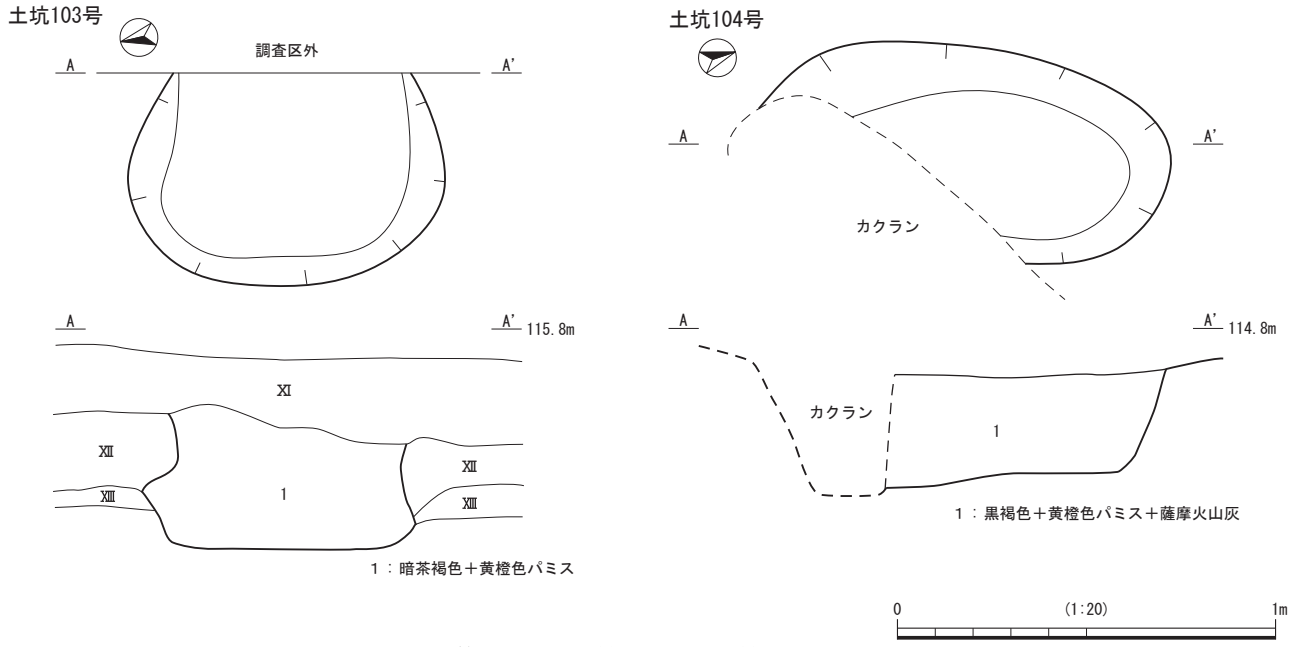
形　　状　底面は，ほぼ水平に広がる。北側壁面は，底面から急傾斜で立ち上がる。

規　　模　不明である。

埋　　土　埋土は単層で，黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰（Ⅻ層）をわずかに含む土である。

出土遺物　遺物は出土していない。

炭 化 物　炭化物や明確な焼土は，確認されなかった。



第150図　土坑103号・土坑104号

第26表　土坑一覧表1

遺構名	検出区	検出層	平面形状	長軸（m）	短軸（m）	炭化物	焼土	遺物	タイプ	備　考	連穴土坑の可能性											
											主軸		短軸（m）	最深部深さ	主軸÷短軸	ア	イ	ウ	エ	オ	可能性
											長さ（m）	方位									
SK1	C-31	Ⅻ	横長	2.06	0.75	—	—	—	Ⅰ		2.06	南／北	0.75	0.35	2.75	○	○	○	○	○	◎
SK2	C-33	Ⅻ	不定形横長	1.99	0.70	○	—	○	Ⅰ		1.95	南／北	0.66	0.50	2.95	○	○	○	○	○	◎
SK3	E-17	Ⅻ	不定形横長	1.76	0.56	—	—	○	Ⅰ		1.76	北／南	0.56	0.42	3.14	○	○	○	○	○	◎
SK4	E-17	Ⅻ	横長	1.64	0.61	—	—	—	Ⅰ	SK67と重複	1.64	西／東	0.61	0.35	2.69	○	○	○	○	○	◎
SK5	E-34	Ⅻ	不定形横長	1.70	0.53	—	—	—	Ⅰ		1.70	南／北	0.53	0.32	3.21	○	○	○	○	○	◎
SK6	C･D-32	Ⅻ	不定形横長	1.50	0.58	—	—	○	Ⅰ		1.56	南／北	0.58	0.40	2.69	○	○	○	○	○	◎
SK7	E-17・18	Ⅻ	不定形横長	1.59	0.42	—	—	—	Ⅰ	SK67と重複	1.58	北／南	0.42	0.31	3.76	○	○	○	○	○	◎
SK8	J-52	Ⅻ	不定形横長	1.49	0.45	—	—	—	Ⅰ		1.49	北西／南東	0.45	0.24	3.31	○	○	○	○	○	◎
SK9	B･C-25	Ⅻ	不定形横長	2.48	0.81	—	—	—	Ⅱ		2.49	南西／北東	0.80	0.42	3.11	○	×	○	○	○	○
SK10	I-46	Ⅻ	横長	1.37	0.70	—	—	○	Ⅱ		1.37	北／南	0.70	0.34	1.96	○	×	○	○	○	○
SK11	J-50	Ⅻ	横長	1.35	0.69	—	—	—	Ⅱ		1.36	南／北	0.69	0.40	1.97	○	×	○	○	○	○
SK12	C･D-33	Ⅻ	横長	1.39	0.58	○	—	—	Ⅱ		1.39	北／南	0.58	0.63	2.40	○	×	○	○	○	○
SK13	E-28	Ⅻ	横長	1.36	0.60	—	—	—	Ⅱ		1.37	西／東	0.60	0.46	2.28	○	×	○	○	○	○
SK14	H-49	Ⅻ	横長	1.33	0.59	—	—	—	Ⅱ		1.33	北西／南東	0.59	0.30	2.25	○	×	○	○	○	○
SK15	J-48	Ⅻ	横長	1.21	0.61	—	—	—	Ⅱ		1.20	北／南	0.61	0.38	1.97	○	×	○	○	○	○
SK16	I-49	Ⅻ	横長	1.23	0.55	—	—	—	Ⅱ		1.23	北東／南西	0.55	0.30	2.24	○	×	○	○	○	○
SK17	C-31	Ⅻ	横長	1.17	0.54	—	—	—	Ⅱ		1.22	北西／南東	0.54	0.39	2.26	○	×	○	○	○	○
SK18	D-25	Ⅻ	不定形横長	1.08	0.55	—	—	—	Ⅱ		1.08	南／北	0.56	0.27	1.93	○	×	○	○	○	○
SK19	K-48	Ⅻ	不定形横長	1.05	0.44	—	—	○	Ⅱ		1.05	西／東	0.44	0.33	2.39	○	×	○	○	○	○
SK20	B-22･23	Ⅻ	不定形横長	0.92	0.45	—	—	—	Ⅱ		0.90	北東／南西	0.44	0.28	2.05	○	×	○	○	○	○
SK21	D-36	Ⅻ	不定形横長	2.77	0.71	○	—	○	Ⅲ		2.73	南／北	0.70	0.25	3.90	○	×	○	×	○	△
SK22	C-27	Ⅻ	不定形横長	2.31	0.73	○	—	—	Ⅲ		2.38	北／南	0.73	0.20	3.26	○	×	○	×	○	△
SK23	E-18	Ⅻ	不定形横長	1.80	1.20	—	—	—	Ⅲ		1.80	北／南	1.20	0.30	1.50	○	○	×	○	×	△
SK24	I-48	Ⅻ	不定形横長	1.46	1.02	—	—	—	Ⅲ		1.46	北／南	1.05	0.55	1.39	×	○	×	○	×	△
SK25	F-29	Ⅻ	不定形横長	1.45	0.90	—	—	—	Ⅲ		1.45	西／東	0.90	0.36	1.61	○	○	×	○	×	△
SK26	F-24	Ⅻ	横長	1.38	0.75	—	—	—	Ⅲ		1.37	南／北	0.75	0.32	1.83	○	×	○	○	×	△
SK27	C-26	Ⅺ	不定形横長	1.57	(0.73)	—	—	○	Ⅲ		1.57	南西／北東	(0.73)	0.36	—	—	—	—	—	—	—
SK28	F-25	Ⅻ	不定形横長	1.27	0.88	—	—	—	Ⅲ		1.26	北西／南東	0.90	0.23	1.40	○	×	○	×	×	◎
SK29	C-25･26	Ⅺ	不定形横長	1.54	0.57	○	—	—	Ⅲ		1.54	南／北	0.57	0.41	2.70	○	○	○	○	○	◎
SK30	K-51	Ⅻ	不定形横長	1.37	0.59	—	—	—	Ⅲ		1.41	北西／南東	0.61	0.32	2.31	○	×	○	○	○	○
SK31	E-34	Ⅻ	不定形横長	1.13	0.79	○	—	—	Ⅲ		1.19	南／北	0.80	0.48	1.49	○	×	○	○	×	△
SK32	C-27	Ⅺ	横長	1.37	0.63	○	—	—	Ⅲ		1.37	西／東	0.63	0.23	2.17	○	×	○	×	—	△
SK33	F-35	Ⅻ	不定形横長	1.40	0.59	—	—	—	Ⅲ		1.30	北西／南東	0.63	0.17	2.06	○	×	○	×	○	△
SK34	I-53	Ⅻ	不定形横長	1.40	0.58	—	—	—	Ⅲ		1.39	南／北	0.58	0.28	2.40	○	×	○	○	○	○
SK35	F-22･23	Ⅻ	横長	1.35	0.62	—	—	—	Ⅲ		1.35	西／東	0.62	0.27	2.18	○	×	○	×	○	△

第27表　土坑一覧表２

遺構名	検出区	検出層	平面形状	長軸（m）	短軸（m）	炭化物	焼土	遺物	タイプ	備　考	連穴土坑の可能性										
											主軸		短軸（m）	最深部深さ	主軸÷短軸	ア	イ	ウ	エ	オ	可能性
											長さ（m）	方位									
SK36	F-23	XIII	不定形横長	1.30	0.64	—	—	—	III		1.38	北西／南東	0.65	0.35	2.12	○	×	○	×	○	△
SK37	L-53	XIII	横長	1.22	0.67	—	—	—	III		1.22	南／北	0.67	0.53	1.82	○	×	○	○	×	△
SK38	F-24	XIII	不定形横長	1.29	0.50	—	—	—	III		1.30	南西／北東	0.52	0.30	2.50	○	×	○	○	○	○
SK39	K-49	XIII	不定形横長	1.26	0.55	—	—	—	III		1.26	北東／南西	0.55	0.33	2.29	○	×	○	○	○	○
SK40	F-46	X	横長	1.13	0.63	○	—	—	III		1.13	南西／北東	0.63	0.17	1.79	○	×	○	×	×	△
SK41	E-25	XIII	不定形横長	1.05	0.68	—	—	—	III		1.06	北西／南東	0.68	0.25	1.56	○	×	○	×	×	△
SK42	E-25	XIII	不定形横長	1.10	0.60	—	—	—	III		1.07	西／東	0.58	0.18	1.84	○	×	○	×	×	△
SK43	F-24･25	XIII	不定形横長	1.15	0.52	—	—	—	III		1.16	北西／南東	0.56	0.30	2.07	○	×	○	○	○	○
SK44	I-46	XIII	横長	1.12	0.54	—	—	—	III		1.12	南／北	0.54	0.21	2.07	○	×	○	×	○	△
SK45	F-20	XIII	不定形横長	1.08	0.57	—	—	—	III		1.13	北西／南東	0.58	0.34	1.95	○	×	○	×	○	△
SK46	E-23	XIII	不定形横長	1.03	0.60	—	—	—	III		1.03	西／東	0.60	0.30	1.72	○	×	○	×	×	△
SK47	J-53	XIII	横長	1.03	0.57	—	—	—	III		1.04	北西／南東	0.57	0.40	2.61	○	×	○	○	×	△
SK48	M-55	XIII	横長	1.04	0.56	—	—	—	III		1.04	南／北	0.56	0.46	1.86	○	×	○	○	×	△
SK49	E･F-22	XIII	不定形横長	1.04	0.55	—	—	○	III		1.04	西／東	0.55	0.30	1.89	○	×	○	×	×	△
SK50	F･G-22	XIII	不定形横長	1.20	0.37	—	—	—	III	SK91と近接	1.20	南／北	0.37	0.36	3.24	○	×	×	×	○	△
SK51	I-46	XIII	横長	1.00	0.57	—	—	—	III		1.00	北／南	0.57	0.36	1.75	○	×	○	○	×	△
SK52	D- 9	XIII	横長	0.98	0.58	—	—	○	III		0.98	北東／南西	0.58	0.35	1.69	○	×	○	○	×	△
SK53	B-23	XIII	横長	0.90	0.62	—	—	—	III		0.90	北／南	0.64	0.33	1.40	○	×	○	○	×	△
SK54	B-13	XIII	不定形横長	0.90	0.61	—	—	○	III	SH３と重複	0.89	南西／北東	0.61	0.25	1.46	○	×	○	×	×	△
SK55	D-26	XIII	不定形横長	0.90	0.57	—	—	—	III		0.96	西／東	0.54	0.23	1.78	○	×	○	×	○	△
SK56	D-26	XIII	不定形横長	0.96	0.51	—	—	—	III		0.96	北西／南東	0.51	0.39	1.88	○	×	○	○	×	△
SK57	E-32	XIII	横長	0.91	0.52	—	—	—	III		0.91	北西／南東	0.52	0.51	1.75	○	×	○	○	×	△
SK58	F･G-23	XIII	横長	0.85	0.54	—	—	—	III		0.85	南／北	0.54	0.47	1.57	○	×	○	×	×	△
SK59	B-22	XIII	不定形横長	0.89	0.50	—	—	—	III		0.89	南東／北西	0.50	0.19	1.78	○	×	○	×	×	△
SK60	N-57	XIII	不定形横長	0.93	0.45	—	—	—	III		0.93	西／東	0.45	0.39	2.07	○	×	○	○	○	○
SK61	E-10	XIII	横長	0.86	0.50	—	—	—	III		0.86	北/南	0.50	0.22	1.72	○	×	○	×	×	△
SK62	M-55	XIII	不定形横長	0.87	0.44	—	—	—	III		0.87	西／東	0.44	0.47	1.98	○	×	○	○	○	○
SK63	C-21	XI	不定形横長	0.79	0.45	○	—	—	III		0.79	南東／北西	0.45	0.16	1.76	○	×	○	×	×	△
SK64	E･F-29	XIII	横長	0.72	0.44	—	—	○	III		0.73	南／北	0.43	0.38	1.70	○	×	○	○	×	△
SK65	D-25	XIII	横長	0.67	0.44	○	—	—	III		0.66	南東／北西	0.48	0.14	1.38	○	×	○	×	×	△
SK66	G-24	XIII	不定形横長	0.62	0.38	—	—	—	III		0.62	南／北	0.38	0.14	1.63	○	×	×	×	×	△
SK67	E-17・18	XIII	不定形方形	2.09	1.80	—	—	○	IV	SK４・SK７と重複	2.09	北西／南東	1.80	0.16	1.16	×	○	×	×	×	△
SK68	C-24	XIII	方形	1.68	1.60	—	—	—	IV		1.68	東／西	1.60	0.17	1.05	×	○	×	×	×	△
SK69	C-23	XIII	円形	1.58	1.22	—	—	—	IV		1.58	南西／南東	1.22	0.10	1.30	×	○	×	×	×	△
SK70	B･C-14	XIII	不定形円形	1.53	1.24	—	—	○	IV		1.53	北東／南西	1.16	0.63	1.32	×	○	×	×	×	△

第28表　土坑一覧表３

遺構名	検出区	検出層	平面形状	長軸（m）	短軸（m）	炭化物	焼土	遺物	タイプ	備　考	連穴土坑の可能性										
											主軸		短軸（m）	最深部深さ	主軸÷短軸	ア	イ	ウ	エ	オ	可能性
											長さ（m）	方位									
SK71	C-13	XIII	不定形方形	1.28	1.20	—	—	—	IV		1.30	北/南	1.20	0.44	1.08	×	×	×	○	×	△
SK72	F-22	XIII	方形	1.40	1.00	—	—	—	IV		1.40	北西／南東	1.00	0.26	1.40	×	×	×	×	×	△
SK73	E-32	XII	不定形円形	1.24	1.14	○	—	—	IV		1.48	北西／南東	1.05	0.46	—	—	—	—	—	—	△
SK74	C-24･25	XIII	不定形方形	1.27	1.06	—	—	—	IV		1.39	北／南	0.98	0.20	1.42	×	×	×	×	×	△
SK75	I-47・48	XIII	方形	1.13	1.00	—	—	○	IV		1.13	北／南	1.00	0.36	1.13	×	×	×	○	×	△
SK76	G-22	XIII	不定形方形	0.88	0.84	—	—	—	IV		0.88	西／東	0.84	0.33	1.05	×	×	×	○	×	△
SK77	F-27	XIII	円形	0.96	0.75	—	—	—	IV		0.96	南／北	0.75	0.44	1.28	×	×	○	○	×	△
SK78	I-51	XI	方形	0.97	0.68	○	—	—	IV		0.97	南東／北西	0.68	0.31	—	—	—	—	—	—	△
SK79	K-52	XIII	円形	0.75	0.75	—	—	—	IV		0.77	北西／南東	0.75	0.25	1.03	×	×	○	×	×	△
SK80	C-24	XIII	不定形円形	0.88	0.62	—	—	—	IV		0.85	北西／南東	0.63	0.15	1.35	×	×	○	×	×	△
SK81	B-25	XII	円形	0.74	0.71	○	—	—	IV		0.78	西／東	0.64	0.17	—	—	—	—	—	—	△
SK82	C-24	XIII	不定形方形	0.78	0.69	—	—	○	IV		0.74	北／南	0.70	0.26	1.06	×	×	○	×	×	△
SK83	F-26・27	XIII	不定形円形	0.68	0.66	—	—	—	IV		0.71	南／北	0.61	0.25	1.16	×	×	○	×	×	△
SK84	F-26・27	XIII	不定形円形	0.73	(0.60)	—	—	—	IV		0.66	北西／南東	0.65	0.32	1.02	×	×	○	○	×	△
SK85	E-8･9	XIII	不定形方形	0.73	0.54	○	—	—	IV		0.73	北東／南西	0.54	0.18	1.35	×	×	○	×	×	△
SK86	E-22	XIII	不定形方形	0.72	0.53	—	—	—	IV		0.72	南東／北西	0.53	0.30	1.36	×	×	×	×	×	△
SK87	G-23	XIII	不定形円形	0.65	0.50	—	—	—	IV		0.65	西／東	0.50	0.35	1.30	×	×	○	×	×	△
SK88	K・L-56	XIII	方形	0.57	0.55	—	—	—	IV		0.55	西／東	0.55	0.33	1.04	×	×	○	○	×	△
SK89	B-22	XIII	方形	0.60	0.45	○	—	—	IV		0.60	東／西	0.45	0.18	1.33	×	×	×	×	×	△
SK90	E-28・29	XIII	不定形円形	0.50	0.49	—	—	—	IV		0.50	北東／南西	0.49	0.30	1.02	×	×	○	○	×	△
SK91	F-22	XIII	不定形方形	0.50	0.45	—	—	—	IV	SK50と近接	0.50	南／北	0.45	0.28	1.11	×	×	○	×	×	△
SK92	C-22	XIII	円形	0.51	0.45	—	—	—	IV		0.51	南東／北西	0.45	0.25	1.13	×	×	○	×	×	△
SK93	G-22	XIII	不定形方形	0.48	0.41	—	—	—	IV		0.49	南東／北西	0.40	0.25	1.23	×	×	×	×	×	△
SK94	I-51	X	円形	0.40	0.36	—	—	○	V		0.40	北東／南西	0.36	0.81	1.11	×	×	×	×	×	△
SK95	C-26	XII	—	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK96	B-23	XI	—	—	—	○	—	○	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK97	B-23・24	XIII	—	—	—	○	—	○	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK98	D-36	XI	—	—	—	—	—	○	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK99	B-30	XII	—	—	—	○	—	—	不明	SK100と重複	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK100	B-30	XII	—	—	—	○	—	—	不明	SK99と重複	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK101	B-26	XII	—	—	—	○	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK102	A-16	XIII	—	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK103	F-24	XIII	—	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK104	F-27	XIII	—	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(5)　集石遺構（略記号：ＳＱ）

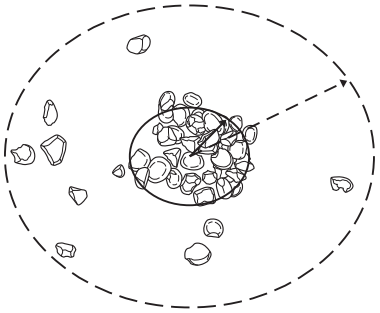
集石遺構は，平成23年度の調査で47基，平成24年度の調査で29基，平成25年度の調査で89基，平成26年度の調査で27基の計192基が検出された。

本報告書での集石遺構の一覧表（第31表～第36表）の見方について下記に示す。

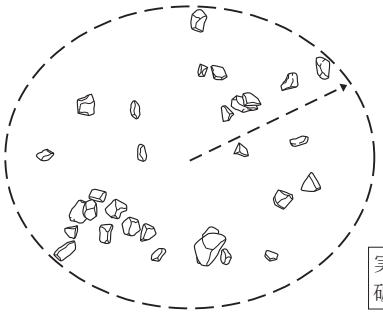
総　礫　数：個々の集石遺構を構成している石器を含めた礫の総数。

範　　囲：個々の集石遺構の範囲を，「集中部」と「全体」で示し，同心円を用いて半径（m）で表し，その範囲を５㎝単位で示した。「集中部」とは，集石遺構内で礫が密集している範囲で，「全体」とは，密集している箇所の中心部からその集石遺構を構成している範囲全体のことである。集中部についての判断は，礫と礫の間の空間の差や，礫同士の上下の重なり合いを目安に行った。また，礫の集中部が見られない集石遺構には，「―」を用いた。第151図で例を示す。

【集中部のある集石遺構】



【集中部のない集石遺構】



第151図　集石遺構の範囲

掘り込み部：個々の集石遺構に伴う掘り込みが確認できたものは「○」，掘り込みが確認できなかったものは「－」で示した。深さは，検出面から最深部の深さを示している。

出 土 土 器：個々の集石遺構内から出土した土器があれば「○」を付けた。出土土器とは，その集石遺構が使用されていた時期を特定するものとは限らない。また本文中には，出土した土器の分類を，本遺跡の土器分類に合わせて提示している。

石材別個数：個々の集石遺構を構成する礫の素材を個数で示している。石材は，安山岩，ホルンフェルス，砂岩，凝灰岩のみ掲載しているため，合計が総個数にならない場合もある。記載以外の石材には，泥岩，頁岩，花崗岩が見られた。

重量別個数：個々の集石遺構を構成する礫一つひとつの重量ごとに幾つあるかを個数で示している。

タ　イ　プ：形態分類のことである。

上野原遺跡・稲荷迫遺跡（埋文センター）の分類方法を参考に，本遺跡縄文時代早期の集石遺構を次のように分類した。

タイプⅠ：明確な集中部が見られず，掘り込み部のないもの。

タイプⅡ：明確な集中部が見られ，掘り込み部のないもの。

タイプⅢ：明確な集中部が見られ，掘り込み部のあるもの。

タイプⅣ：明確な集中部は見られないが，掘り込み部のあるもの。

第29表　タイプ別基数

	集中部	掘り込み部	基数	集石遺構全体に占める割合（%）
Ⅰ類	無	無	95	49%
Ⅱ類	有	無	52	27%
Ⅲ類	有	有	30	16%
Ⅳ類	無	有	15	8%

検　出　層：田原迫ノ上遺跡における集石遺構の検出層別基数及びタイプ別基数は，下表のとおりである。

第30表　検出層別のタイプ基数及び検出層で占める割合

	タイプ				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計
Ⅹ層	38基	27基	9基	5基	79基
Ⅺ層	55基	24基	18基	6基	103基
Ⅻ層	2基	1基	2基	4基	9基
ⅩⅢ層	―	―	1基	―	1基
計	95基	52基	30基	15基	192基

集石遺構は，Ⅸ層では検出されていないが，Ⅹ層で79基，Ⅺ層で103基，Ⅻ層で９基，ⅩⅢ層で１基検出されている。

分　布　分布　Ⅰ～Ⅳ類のタイプ毎に色を付け，集石遺構の分布を第152図に示す。また，第153図には各集石遺構検出の層を示す。

タイプⅠ：●　タイプⅡ：●　タイプⅢ：●　タイプⅣ：●

集石遺構は，調査区Ｂの東端～Ｇに広く分布するが，調査区Ａからは検出されていない。また，タイプⅠは調査区全体に広がるが，調査区Ｃ・Ｄに集中する傾向がある。タイプⅢ・Ⅳは，調査区Ｄの南西部に集中する傾向がある。

Ⅹ層で検出された集石遺構は，調査区Ｂ～Ｇまでほぼ全体に広がる。また，Ⅻ層検出の集石遺構は，調査区Ｄの南西部に集中する傾向がある。

各集石遺構　以下，タイプ別に報告する。各タイプは以下のとおりである。

タイプⅠ：SQ 1 ～ SQ95

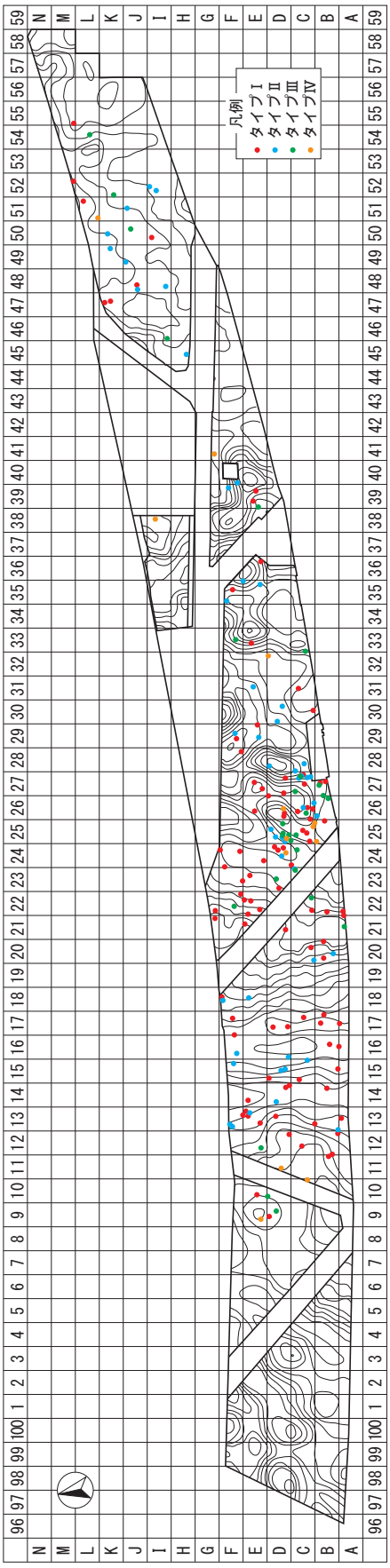
タイプⅡ：SQ96 ～ SQ147

タイプⅢ：SQ148 ～ SQ177

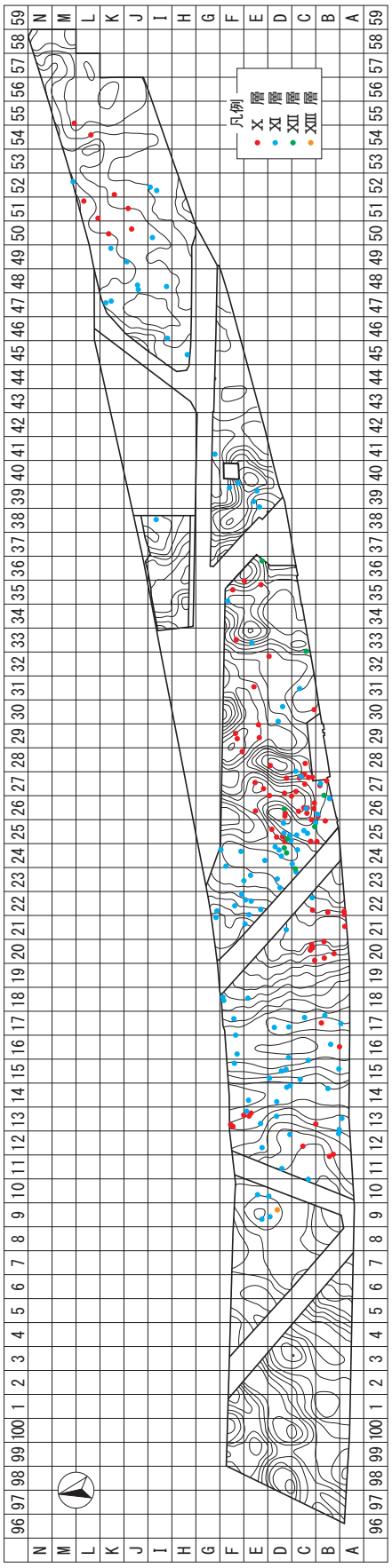
タイプⅣ：SQ178 ～ SQ192

被熱の有無については，目視により判断した。

また，炭化物が多く確認され，採取し科学分析を実施したものについては，その結果を示している。



第152図　集石遺構タイプ別分布図



第153図　集石遺構検出層別分布図

タイプⅠ

集石遺構１号（SQ１：第154図）

検出状況　Ｅ-29区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は6個である。礫は，中心から半径0.15ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

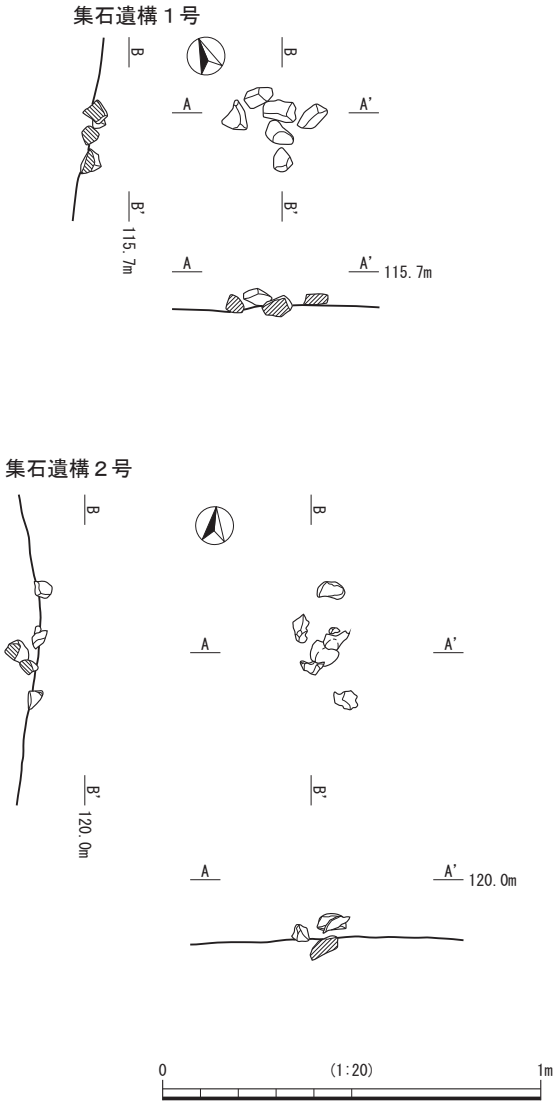
集石遺構２号（SQ２：第154図）

検出状況　Ｂ-11区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は7個である。礫は，中心から半径0.20ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と泥岩のみで，構成礫のほとんどが熱を受けている。100ｇ以下の礫がほとんどである。

出土土器　出土していない。



第154図　集石遺構１号・集石遺構２号

集石遺構３号（SQ３：第155図）

検出状況　Ｅ-27区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は8個である。礫は，中心から半径0.25ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスのみで，ほとんどの礫が熱を受けている。

出土土器　出土していない。

集石遺構４号（SQ４：第155図）

検出状況　Ｄ-26･27区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は8個である。礫は，中心から半径0.25ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩や砂岩・凝灰岩が主体で，構成礫全体の約63％が熱を受けている。

出土土器　出土していない。

集石遺構５号（SQ５：第155図）

検出状況　Ｂ-12区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は11個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，すべての構成礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫で半数を占める。

出土土器　出土していない。

集石遺構６号（SQ６：第155図）

検出状況　Ｅ・Ｆ-13区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫のほとんどが熱を受けている。１～100ｇと100～200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

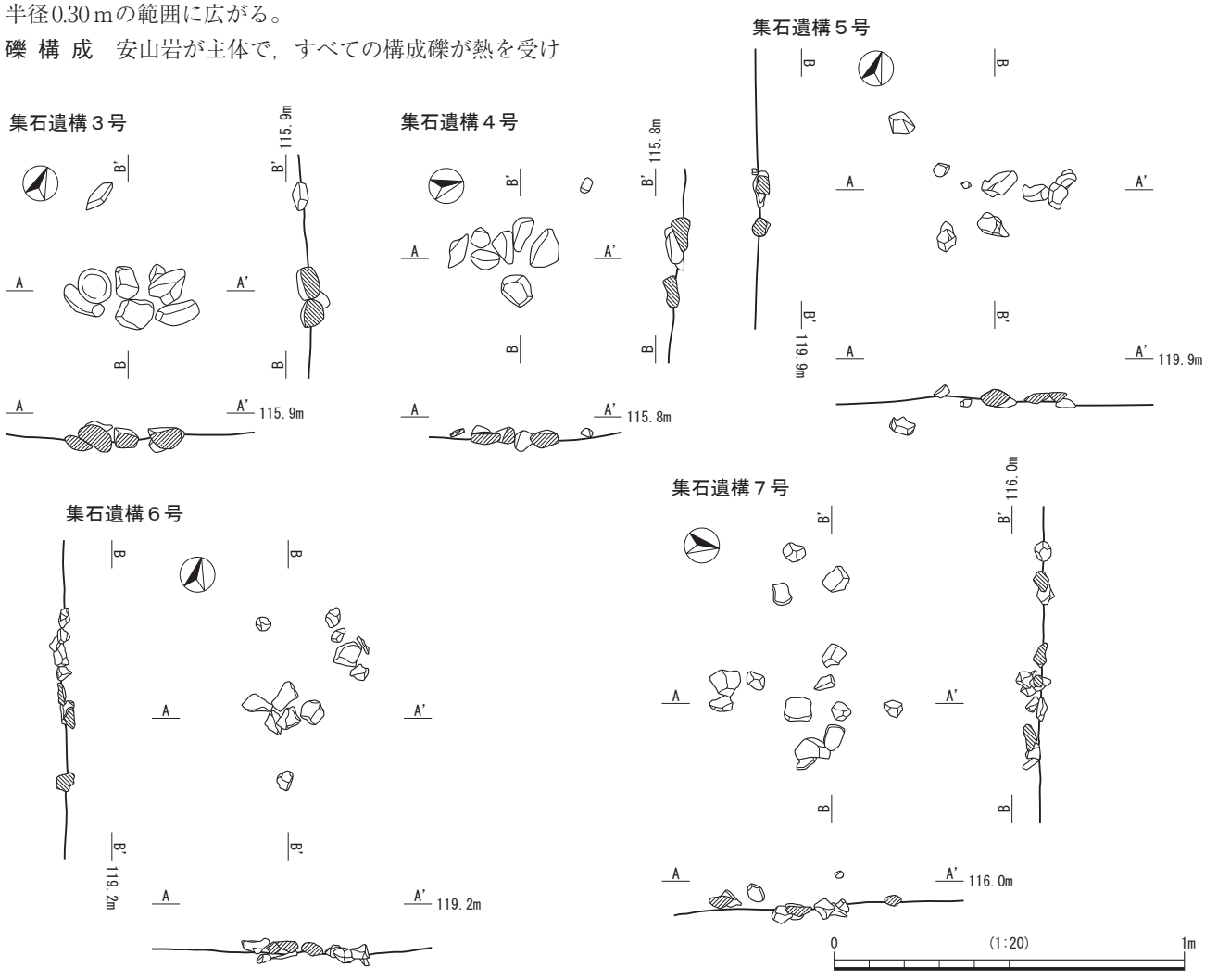
集石遺構７号（SQ７：第155図）

検出状況　Ａ-22区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は14個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100～200ｇの礫が多く，磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。



第155図　集石遺構３号～７号

集石遺構８号（SQ８：第156図）

検出状況　A-22区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は15個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約60％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構９号（SQ９：第156図）

検出状況　C-26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は6個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，ほとんどの礫が熱を受けている。800 ～ 900ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構10号（SQ10：第156図）

検出状況　C-20区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は24個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。

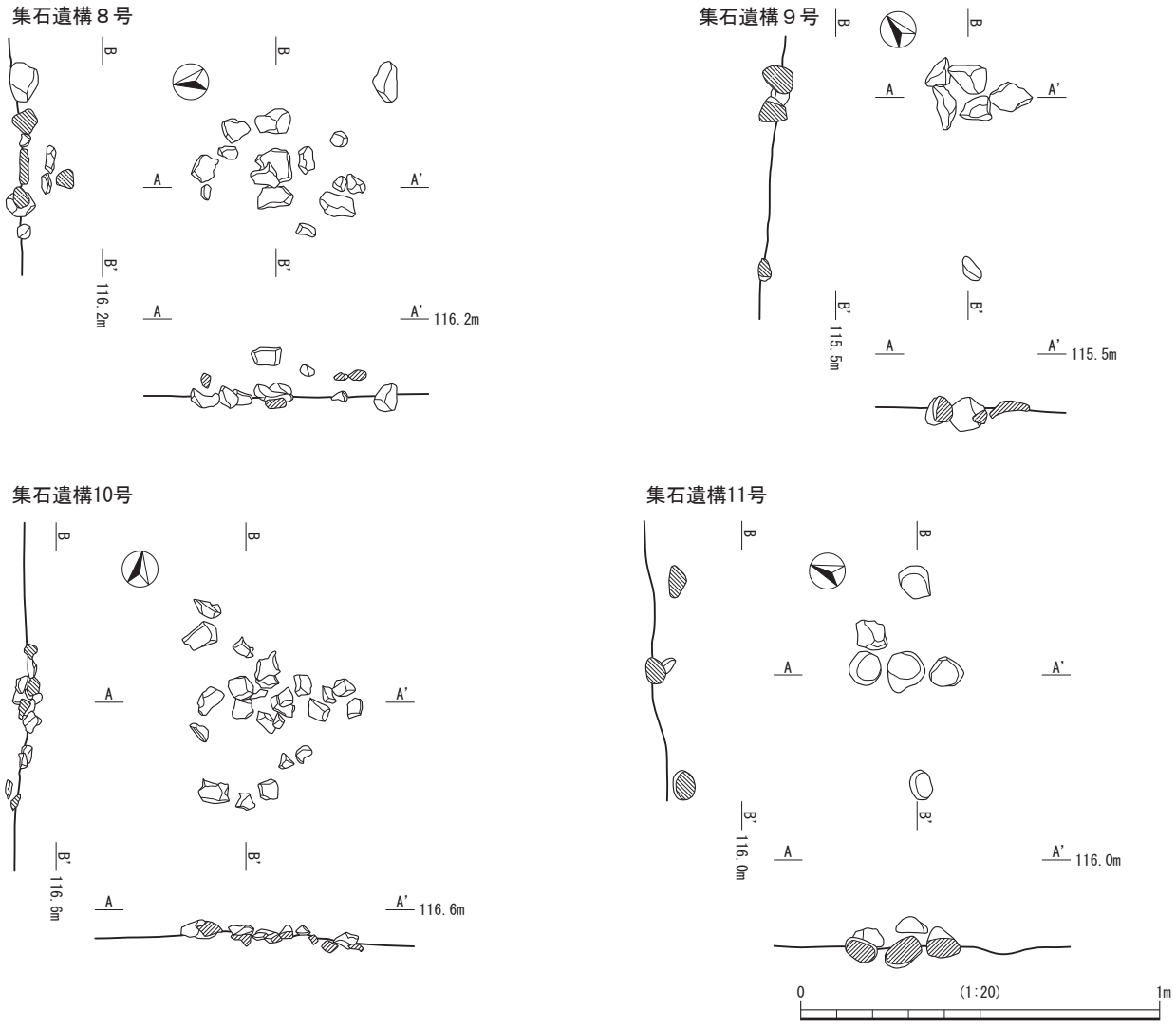
集石遺構11号（SQ11：第156図）

検出状況　E-27区，X層で検出された。構成礫総数は6個である。

規　　模　構成礫総数は６個である。礫は，中心から半径0.35ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，熱を受けている礫は少ない。1000ｇを超える礫１個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。



第156図　集石遺構８号～ 11号

集石遺構12号（SQ12：第157図）

検出状況　C－22区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は15個である。礫は，中心から半径0.35ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，ほとんどの礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超えている礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構13号（SQ13：第157図）

検出状況　F－29区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多く，磨石・敲石類や砥石の転用品が確認され，砥石１点を図化した。87（第157図）は砂岩製の砥石である。破片資料で扁平な石の片面を使用面としている。

出土土器　出土していない。

集石遺構14号（SQ14：第157図）

検出状況　C－25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は17個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100 ～ 200ｇと，200 ～ 300ｇの礫が多い。

出土土器　小破片の胴部が２点出土している。接合はできなかったが，色調や胎土，施文方法から同一個体と思われる。いずれも図化はしていない。

土器分類　Ⅻ類（不明）に該当するが型式判別はできなかった。

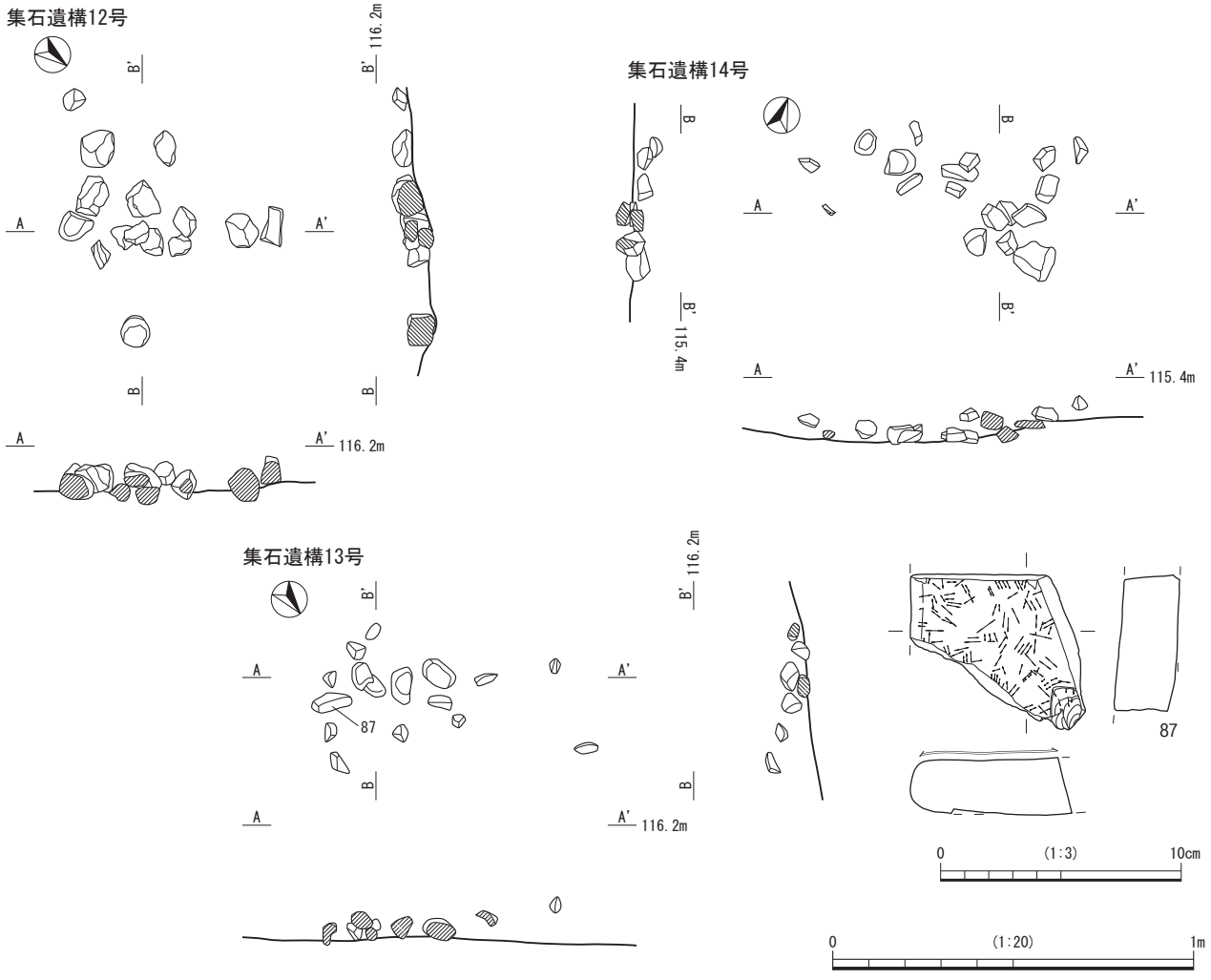
集石遺構15号（SQ15：第158図）

検出状況　D－27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は51個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　胴部が１点出土している。網目撚糸と思われ



第157図　集石遺構12号・集石遺構13号・出土遺物・集石遺構14号

る施文を施す。胎土には，角閃石は含まれているが，金雲母は確認できない。接合しなかったが，集石遺構36号（SQ36）内出土遺物の95と同一個体と思われる。

土器分類　X類に該当する。

集石遺構16号（SQ16：第158図）

検出状況　E－13区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構17号（SQ17：第158図）

検出状況　F－28区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約70％が熱を受けている。300 ～ 400ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

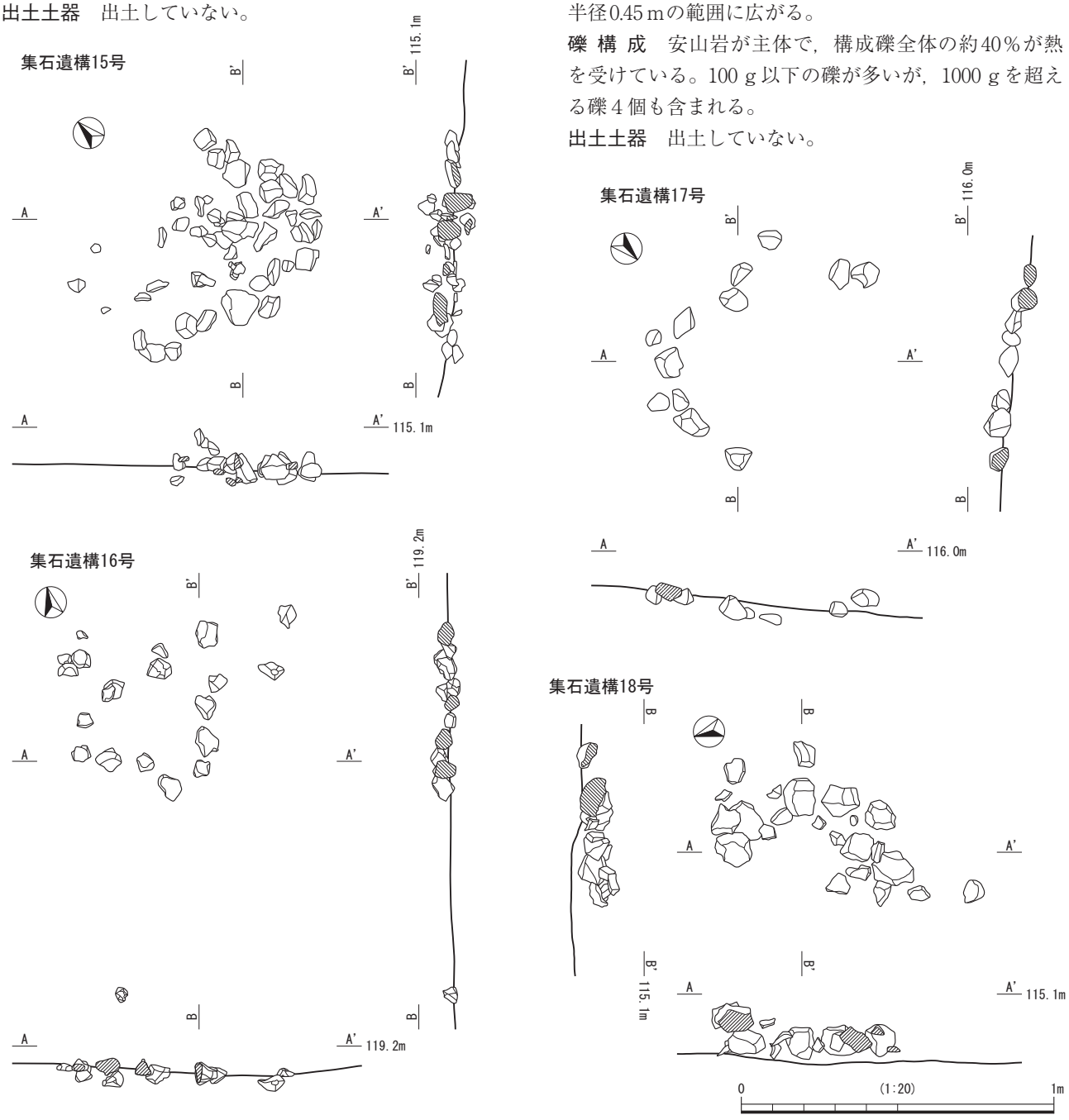
集石遺構18号（SQ18：第158図）

検出状況　B－25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は23個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫４個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第158図　集石遺構15 ～ 18号

集石遺構19号（SQ19：第159図）

検出状況　C－26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は14個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩と安山岩が主体で，構成礫全体の約70％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　口縁部が１点出土している。図化はしていない。口縁部外面上部に，横位の山形押型文を施す。その直下に斜位の山形押型文を施す。施文順は，横位→斜位である。口唇部外面端部は丸みを帯び，そこから1.7㎝程口縁部内面に内傾し，稜をもつ。口縁部内面の稜までの部分に，横位の山形押型文を施す。

土器分類　Ⅸ類に該当する。

集石遺構20号（SQ20：第159図）

検出状況　B－22区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は11個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩のみで，ほとんどの礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。

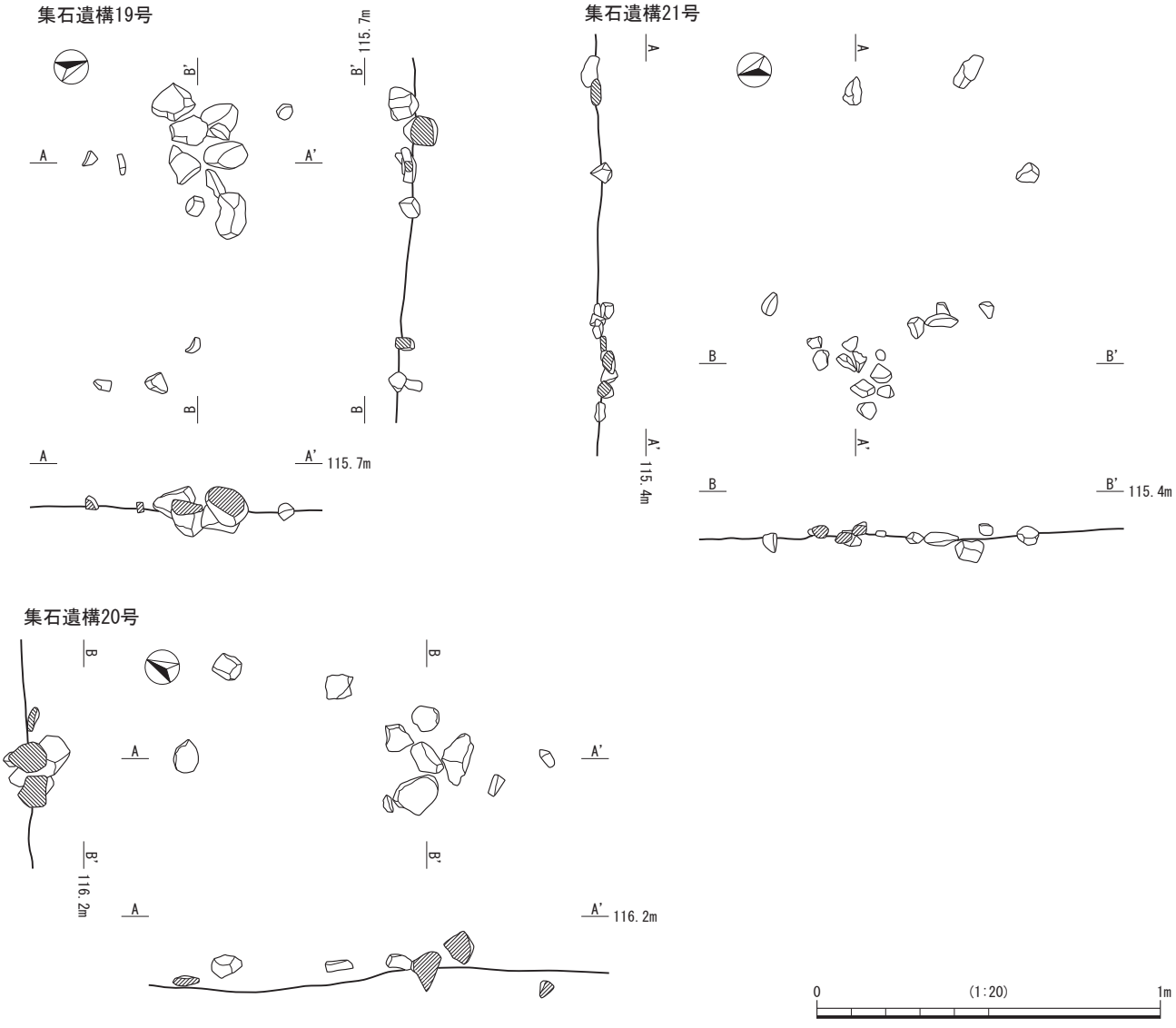
集石遺構21号（SQ21：第159図）

検出状況　C－25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は18個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　構成礫は安山岩が多く，次いで凝灰岩が多く含まれ，構成礫の約40％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。



第159図　集石遺構19号～21号

集石遺構22号（SQ22：第160図）

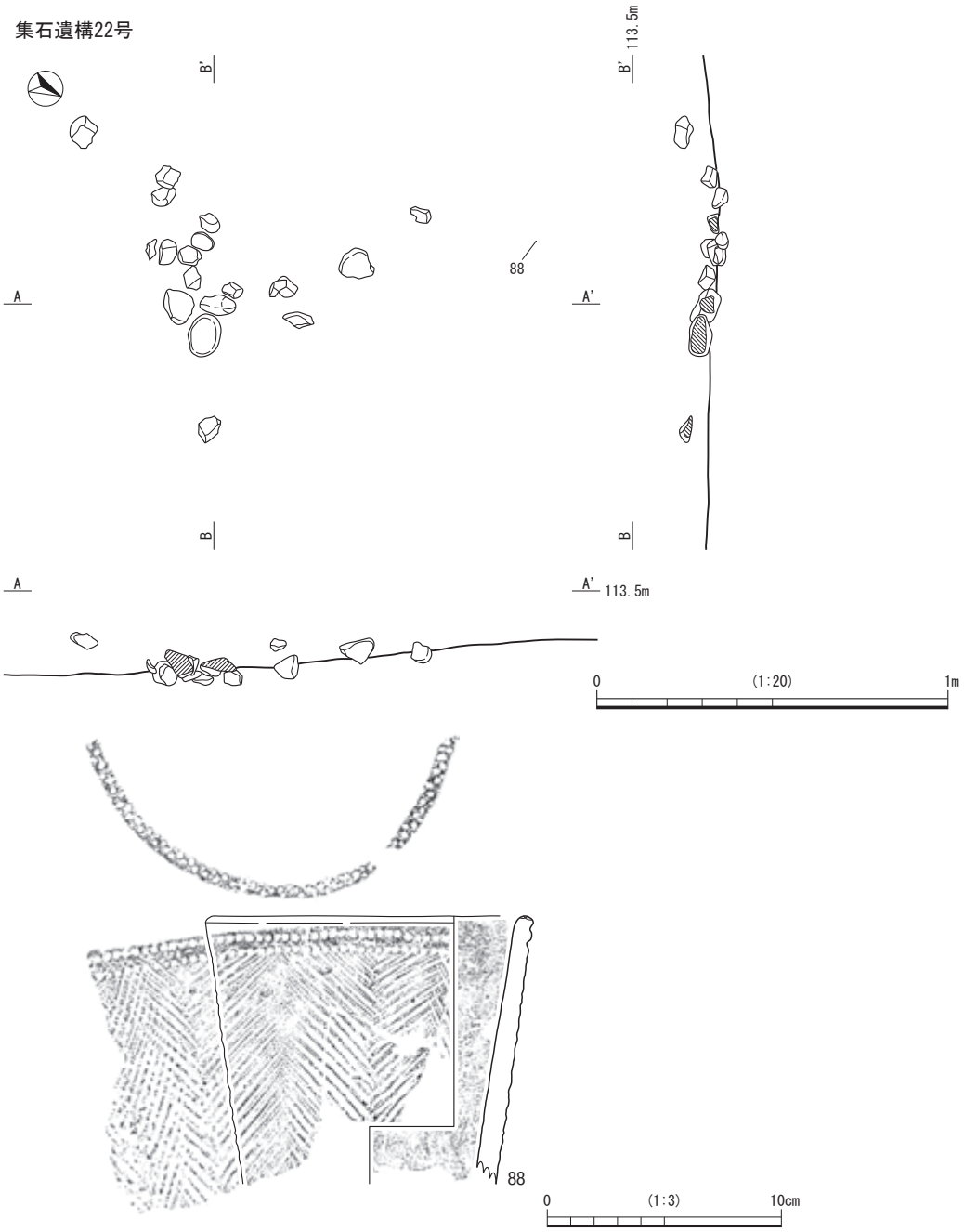
検出状況　M-55区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫の約20％が熱を受けている。100 ～ 200 ｇの礫が多い。

出土土器　口縁部～胴部が３点，小破片の底部が１点出土している。そのうち1点を図化した。88（第160図）は，外傾する口縁部である。口縁部外面には，くり抜くような横位刺突文を施し，直下に綾杉状の条痕文を施す。口唇部は刺突文を施す。内面はていねいなナデがおこなわれやや光沢を帯びる。他の胴部の１点は，綾杉状の貝殻条痕文を施す。もう１点の外面は摩滅が激しく，分類判断はできなかった。底部は剥落が著しいが，底部付近の胴部に横位貝殻条痕文をわずかに確認できる。この破片にのみ，５㎜程度の小礫も含まれている。また，残存状況から底面の半径は，２～３㎝と推定される。３点とも金雲母は含まれていないが，同一個体の可能性は低い。いずれも図化はしていない。

土器分類　88と胴部１点・底部は，いずれもⅣ類に該当する。



第160図　集石遺構22号・出土遺物

集石遺構23号（SQ23：第161図）

検出状況　C－13区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は，29個である。礫は，中心から半径0.65ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体のほとんどの礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多く，磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

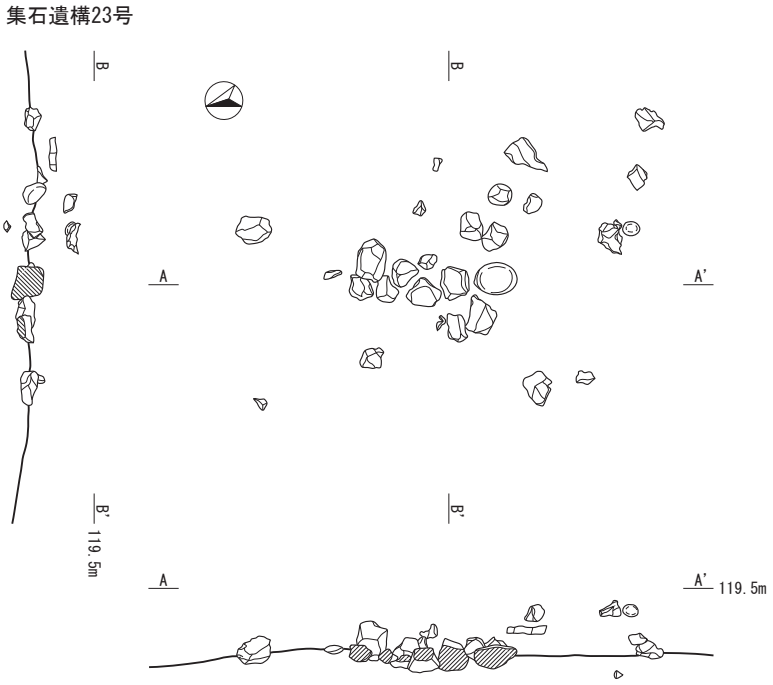
集石遺構24号（SQ24：第161図）

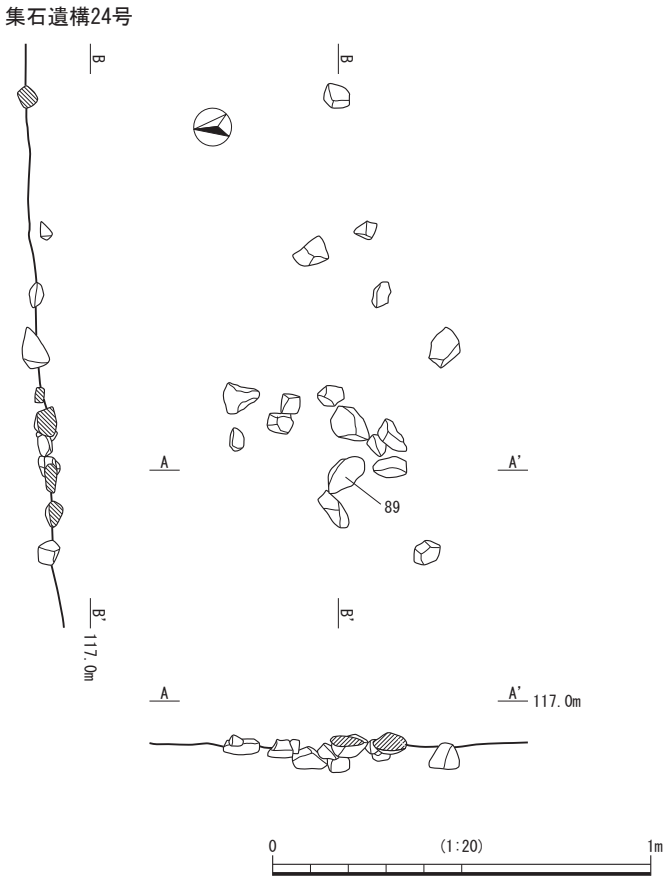
検出状況　B－20区，X層で検出された。

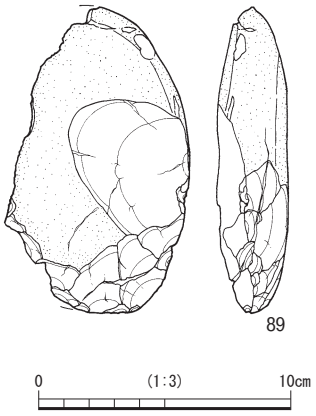
規　　模　構成礫総数は17個である。礫は，中心から半径0.65ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が半数近くで，凝灰岩とホルンフェルスが同程度含まれ，構成礫全体の約50％が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多い。89（第161図）はホルンフェルス製の礫器である。扁平な円礫の縁辺３辺を表裏両面から打ち欠き刃部を作り出している。

出土土器　出土していない。







第161図　集石遺構23号・集石遺構24号・出土遺物

集石遺構25号（SQ25：第162図）

検出状況　A・B－16区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は24個である。礫は，中心から半径0.70ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩を主体に，７種の石材で構成され，構成礫全体のほとんどが熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000 ～ 1500ｇ，1500 ～ 2000ｇの礫各１個，2000 ～ 2500ｇの礫３個も含まれる。

出土土器　出土していない。

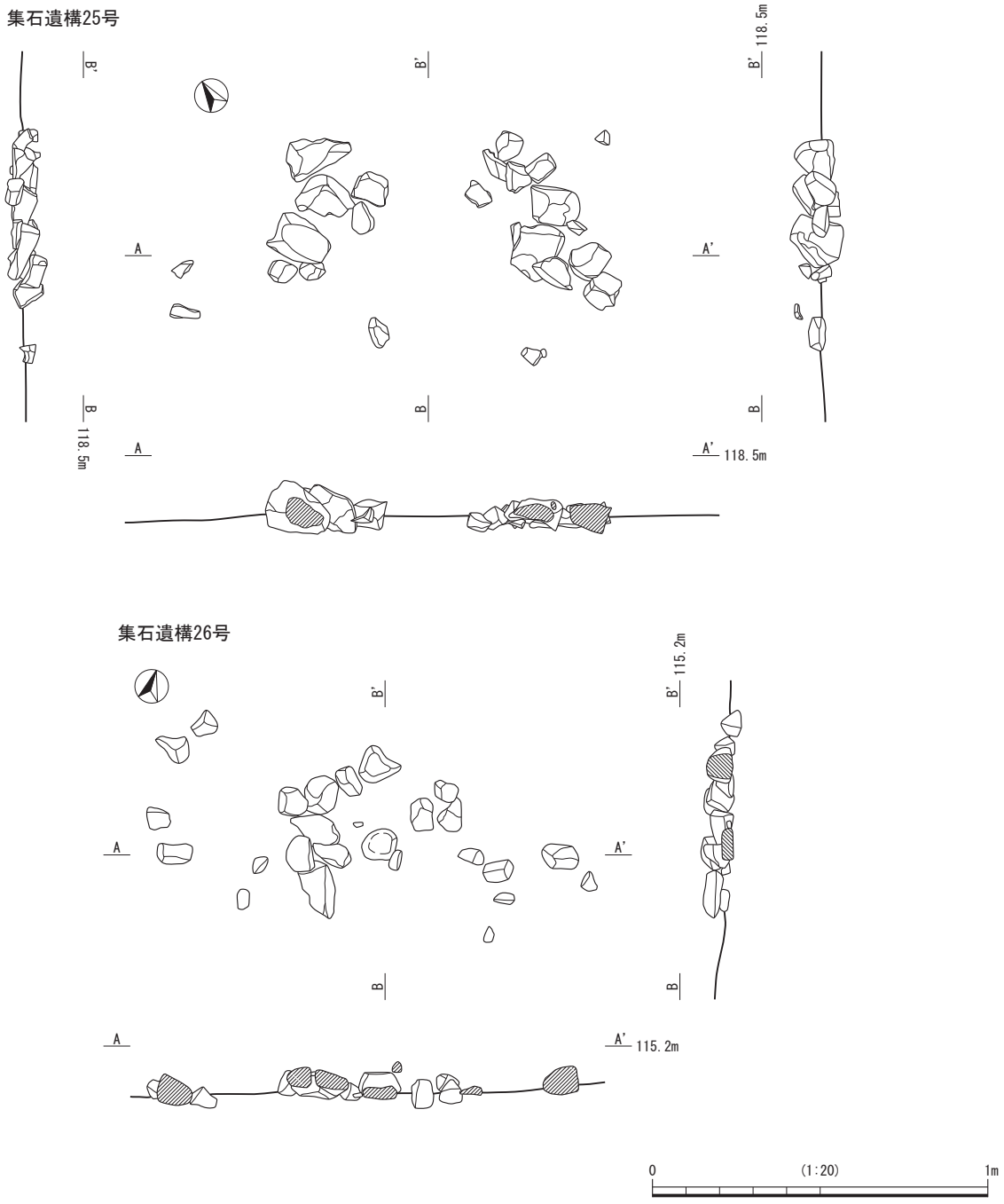
集石遺構26号（SQ26：第162図）

検出状況　D－26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は26個である。礫は，中心から半径0.70ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第162図　集石遺構25号・集石遺構26号

集石遺構27号（SQ27：第163図）

検出状況　D-26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は22個である。礫は，中心から半径0.70ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が，熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫３個も含まれる。90（第163図）は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化する。

出土土器　底部が１点出土している。剥落もあり型式の判断はできなかった。胎土には，ガラス質鉱物が多く含まれるが，金雲母は含まれていない。図化はしていない。

集石遺構28号（SQ28：第163図）

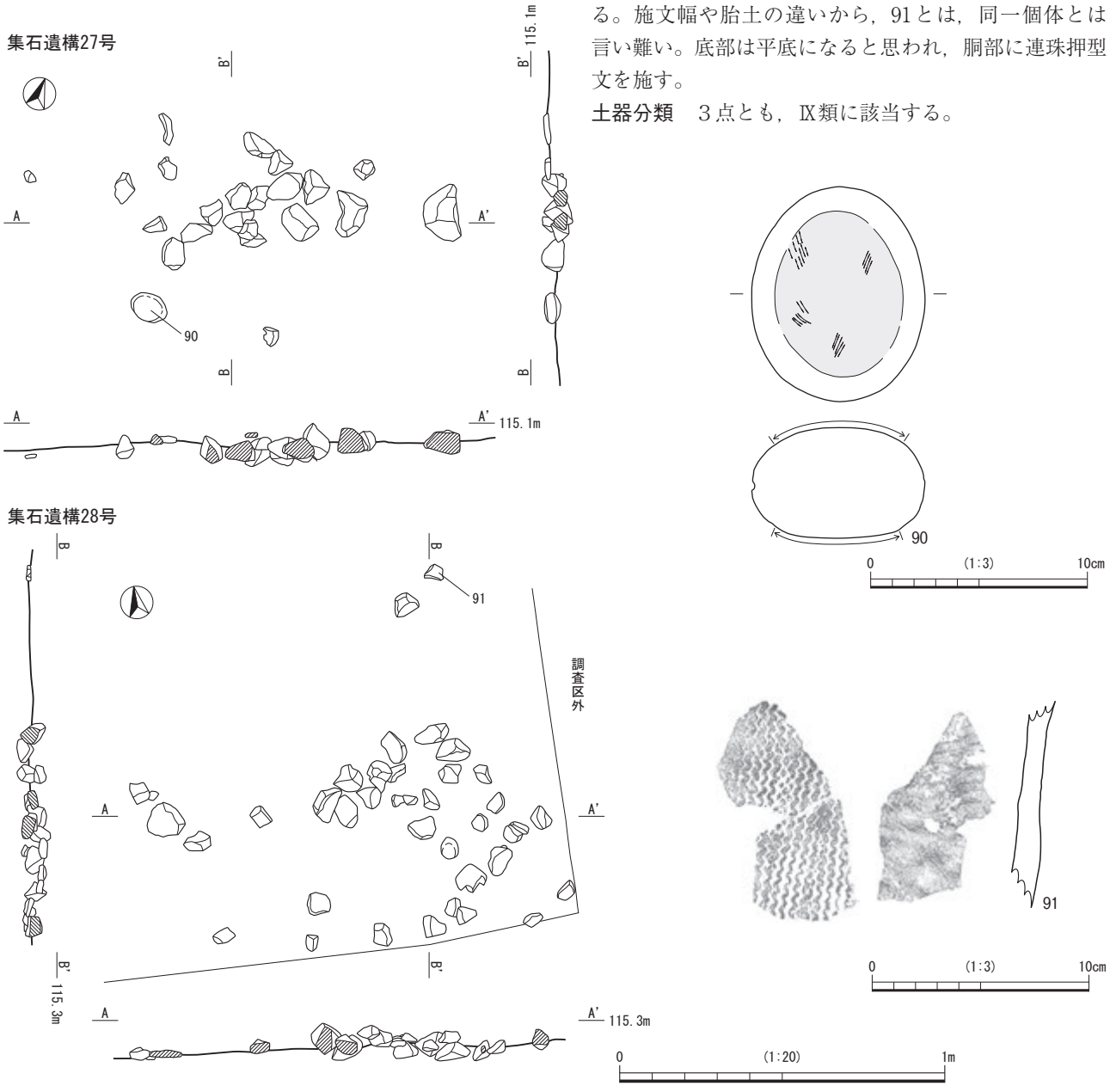
検出状況　B-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は39個である。礫は，中心から半径0.70ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ホルンフェルスと凝灰岩，安山岩が主体で，熱を受けている礫は確認できなかった。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　胴部が２点，底部が１点出土している。そのうち１点を図化した。91（第163図）は胴部で，包含層出土遺物１点と接合した。やや光沢を帯びている外面に，山形押型文を縦位に施す。内面は，工具によるナデをおこなう。もう１点の胴部は，摩滅や剥落が激しいが，山形押型文を施す。胎土には，金雲母が含まれている。施文幅や胎土の違いから，91とは，同一個体とは言い難い。底部は平底になると思われ，胴部に連珠押型文を施す。

土器分類　３点とも，Ⅸ類に該当する。



第163図　集石遺構27号・出土遺物・集石遺構28号・出土遺物

集石遺構29号（SQ29：第164図）

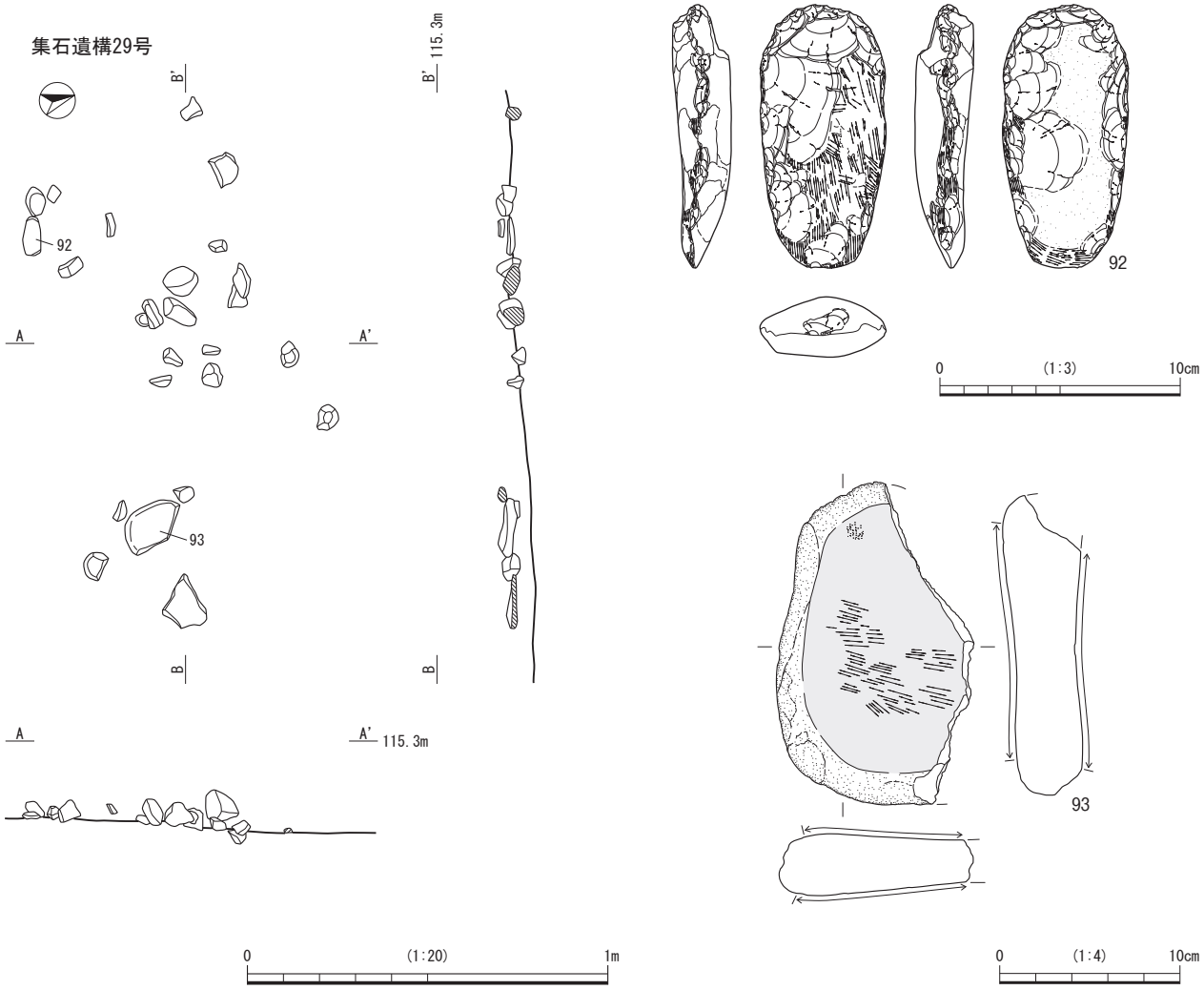
検出状況　C-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫は，中心から半径0.75ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩と安山岩が主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。100～200ｇの礫が多い。磨石・敲石類や石皿の転用品が確認され，図化した。92（第164図）はホルンフェルス製の磨製石斧である。刃部が基部より狭く，薄手で小型である。表面や刃部を丁寧に研磨しているものの裏面に自然面が残る。表面から側縁にかけての剥離は，研磨部分との関係から使用による破損と考えられる。93は安山岩製の石皿である。破片資料で扁平な石の表裏全面を磨面に使用している。被熱しており表面から欠損部にかけてススが付着する。

出土土器　胴部が３点，口縁部が１点出土した。胴部の３点は，ともに菱形押型文を斜位に施す。そのうち２点は，包含層出土遺物と接合した。接合された図が，549（第318図）である。もう１点の胴部も，文様の大きさや施文方法，胎土が同様である。この１点とは接合しなかったが，いずれも同一個体と思われる。胎土には，金雲母は含まれていない。口縁部も，包含層出土遺物及びSQ36出土遺物と接合した。接合，復元された図が，645（第331図）である。

土器分類　胴部はⅨ類に，口縁部はⅪ類に該当する。



第164図　集石遺構29号・出土遺物

集石遺構30号（SQ30：第165図）

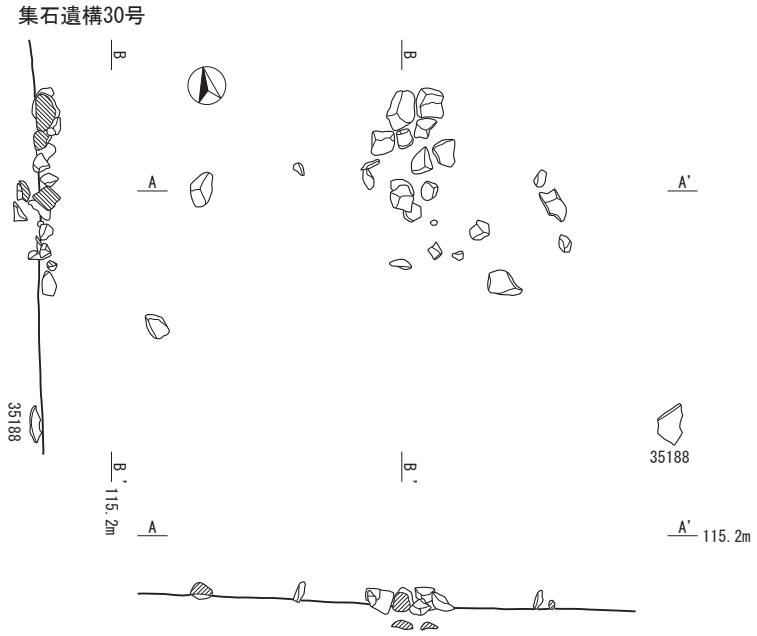
検出状況　C-30区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は25個である。礫は，中心から半径0.75ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　砂岩と安山岩，凝灰岩，ホルンフェルスが同程度で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　外面の剥落が著しいが，外反する口縁部が1点出土している。口唇部はやや平坦でキザミを施す。口縁部外面上位に，斜位貝殻刺突文を施すことがわずかに確認できる。胎土には，金雲母は含まれていない。図化はしていない。

土器分類　Ⅳ類に該当する。



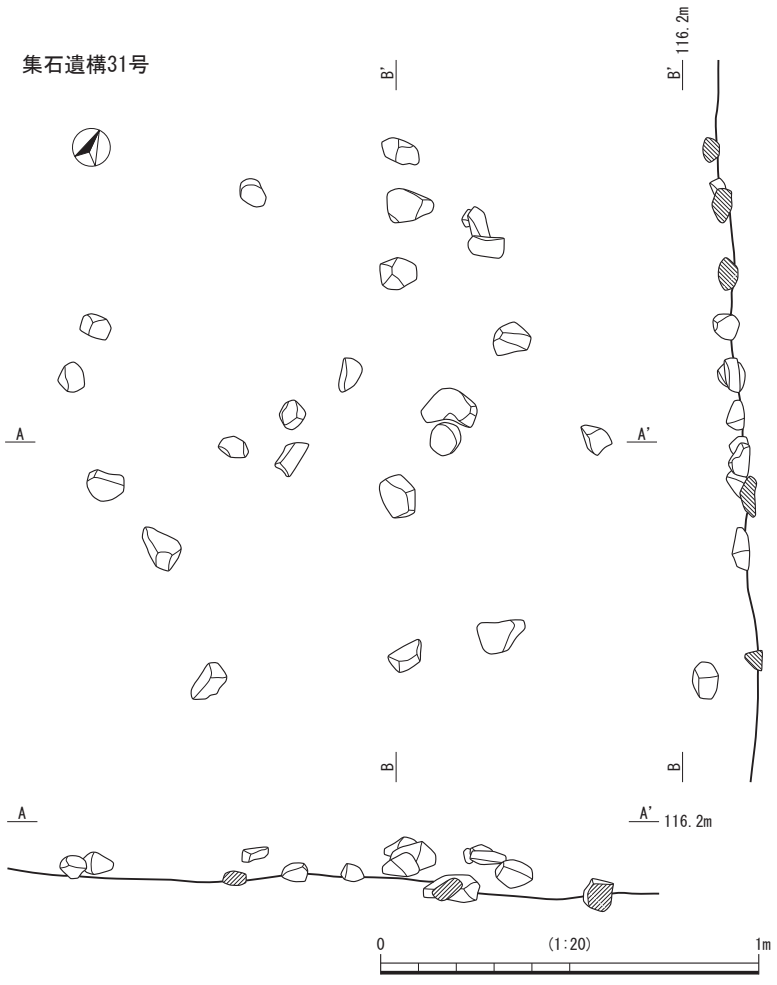
集石遺構31号（SQ31：第165図）

検出状況　E-26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は23個である。礫は，中心から半径0.80ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約70%が熱を受けている。200～300ｇと400～500ｇの礫が多い。石皿・砥石が確認された。

出土土器　出土していない。



第165図　集石遺構30号・集石遺構31号

集石遺構32号（SQ32：第166図）

検出状況　B－20区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫は，中心から半径0.80ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約60％が熱を受けている。1000ｇを超える礫４個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構33号（SQ33：第166図）

検出状況　C－26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は26個である。礫は，中心から半径0.85ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩，砂岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，2500ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　小破片の胴部が１点出土している。剥落が激しく型式の判断はできなかった。胎土には，ガラス質鉱物が多く含まれるが，金雲母は含まれていない。図化はしていない。

集石遺構34号（SQ34：第167図）

検出状況　D－27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は31個である。礫は，中心から半径0.85ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩を主体にホルンフェルスとのみ構成され，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。

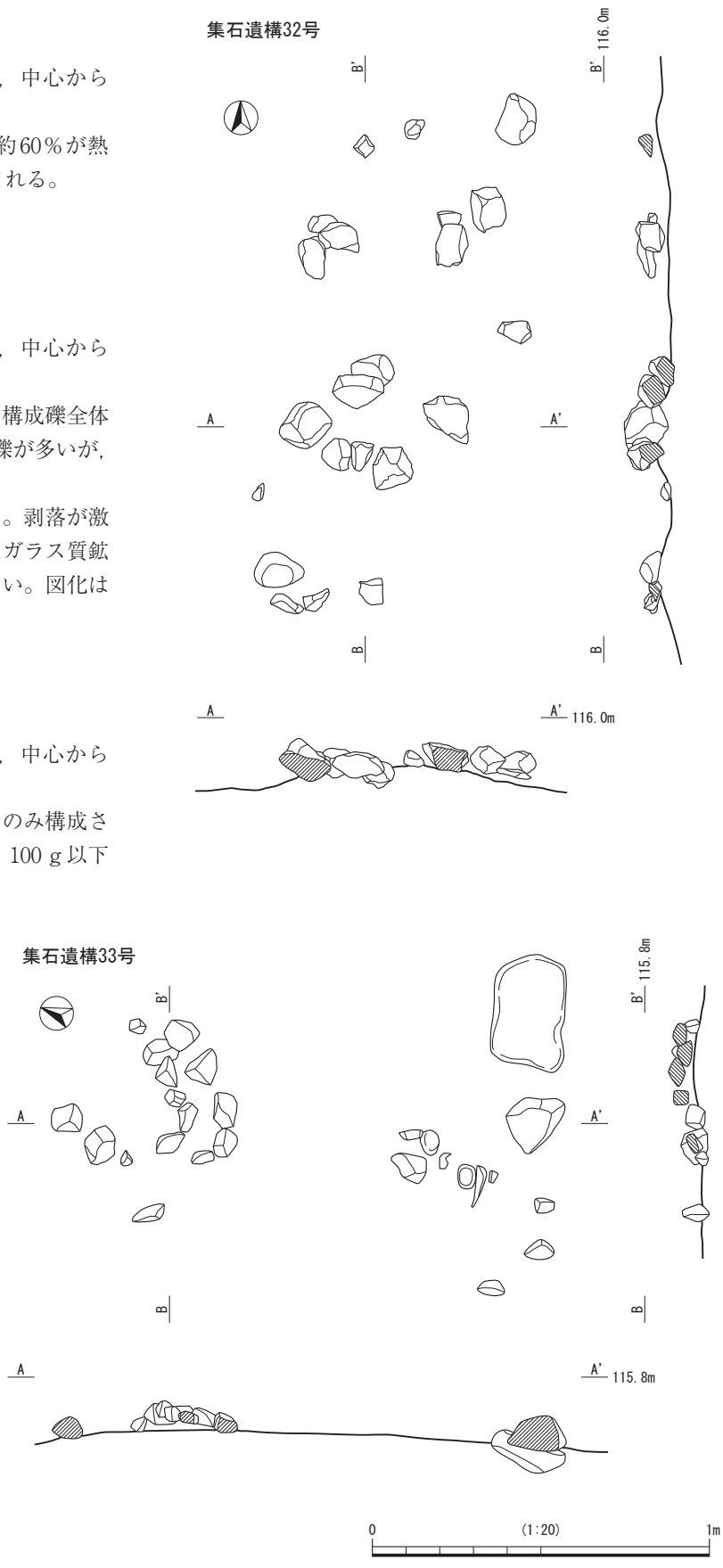
集石遺構35号（SQ35：第167図）

検出状況　F－35区，X層で検出された。

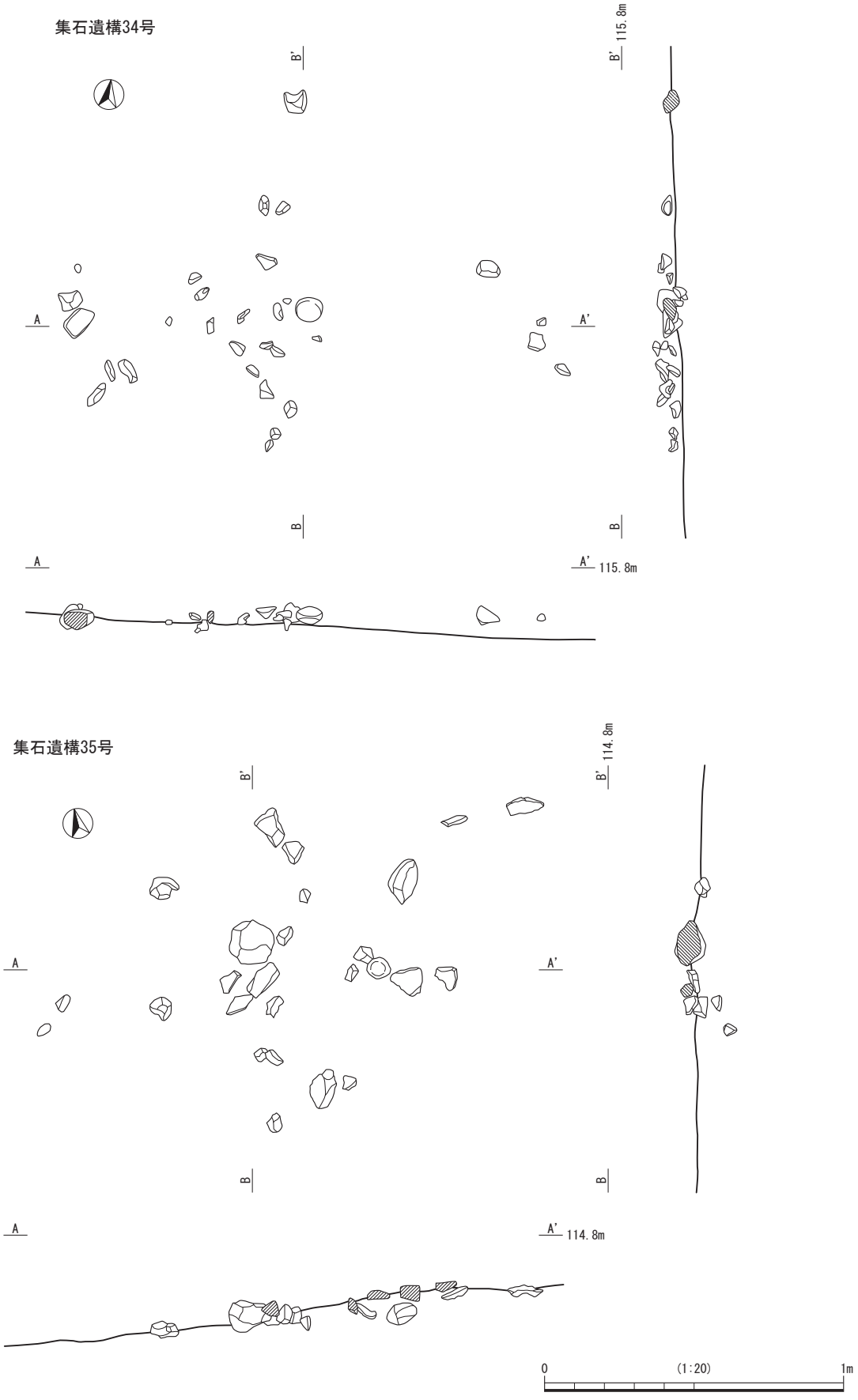
規　　模　構成礫総数は26個である。礫は，中心から半径0.95ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第166図　集石遺構32号・集石遺構33号



第167図　集石遺構34号・集石遺構35号

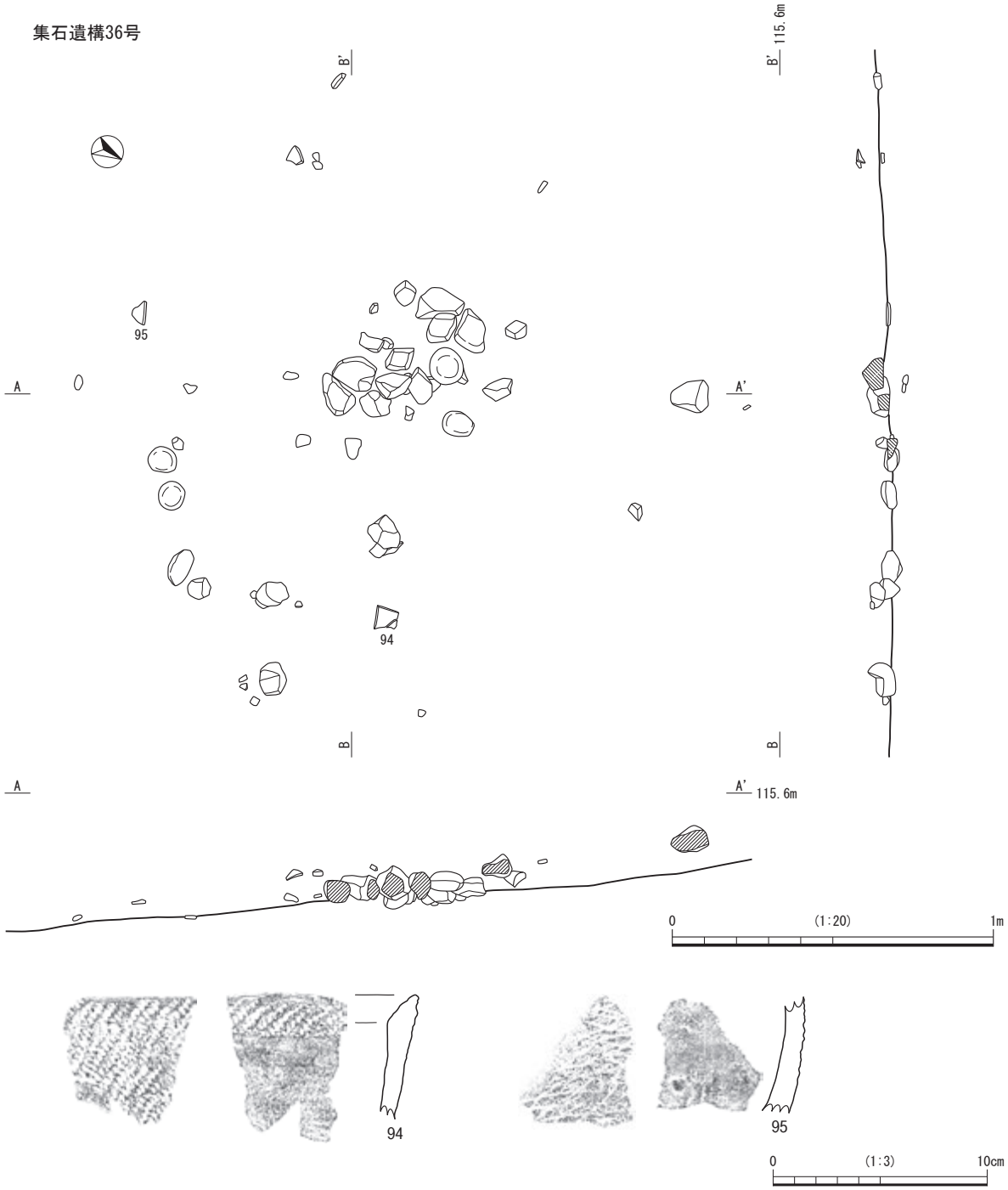
集石遺構36号（SQ36：第168図）

検出状況　C－27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は42個である。礫は，中心から半径1.00ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルス，凝灰岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫が1点含まれる。

出土土器　胴部が11点，口縁部が２点出土した。そのうち２点を図化した。94・95（第168図）である。94は，直行する口縁部で，ＬＲ縄文を施す。口唇部の外面側端部は尖頭状で，そこから1.8㎝程内傾した後，稜をもつ。稜に至る口唇部内面にも，外面と同一のＬＲ縄文を横位に施す。内面は，工具によるナデをおこなう。94は，包含層出土遺物及び集石遺構29号（SQ29）内出土遺物と接合した。接合，復元された図が645（第331図）である。95は，網目撚糸文を外面に施す胴部である。施文方法や胎土等から，集石遺構15号（SQ15）内出土遺物と同一個体と思われる。残り10点の胴部のうち５点の胴部には外面に連珠押型文を施す。１点はなだらかな山形押型文を施し，１点は枝回転によると思われるイチ



第168図　集石遺構36号・出土遺物

ゴの外見のようなツブツブを外面に施す。１点には流水文を外面に施す。この１点は，173（第240図）と489（第308図）と同一個体と考えられる。残りの２点の文様は不明である。もう１点の口縁部はやや外反し，口唇部は棒状工具による刺突状の斜位条痕文を施す。外面及び口縁部内面に，枝回転によると思われるイチゴの外見のようなツブツブを施す。

土器分類　94はXI類に，95はX類に該当する。また図化していない連珠押型文と山形押型文を施す胴部はIX類に，流水文を施す胴部はVI類に，枝回転によると思われる胴部と口縁部は，XII類に該当する。

集石遺構37号（SQ37：第169図）

検出状況　C－12区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は28個である。礫は，中心から半径1.05ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約80％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1500 ～ 2000ｇの礫１個と，2000 ～ 2500gの礫１個も含まれる。

出土土器　小破片の胴部が１点出土している。剥落が激しく型式の判断はできなかった。胎土には，金雲母は含まれていない。図化はしていない。

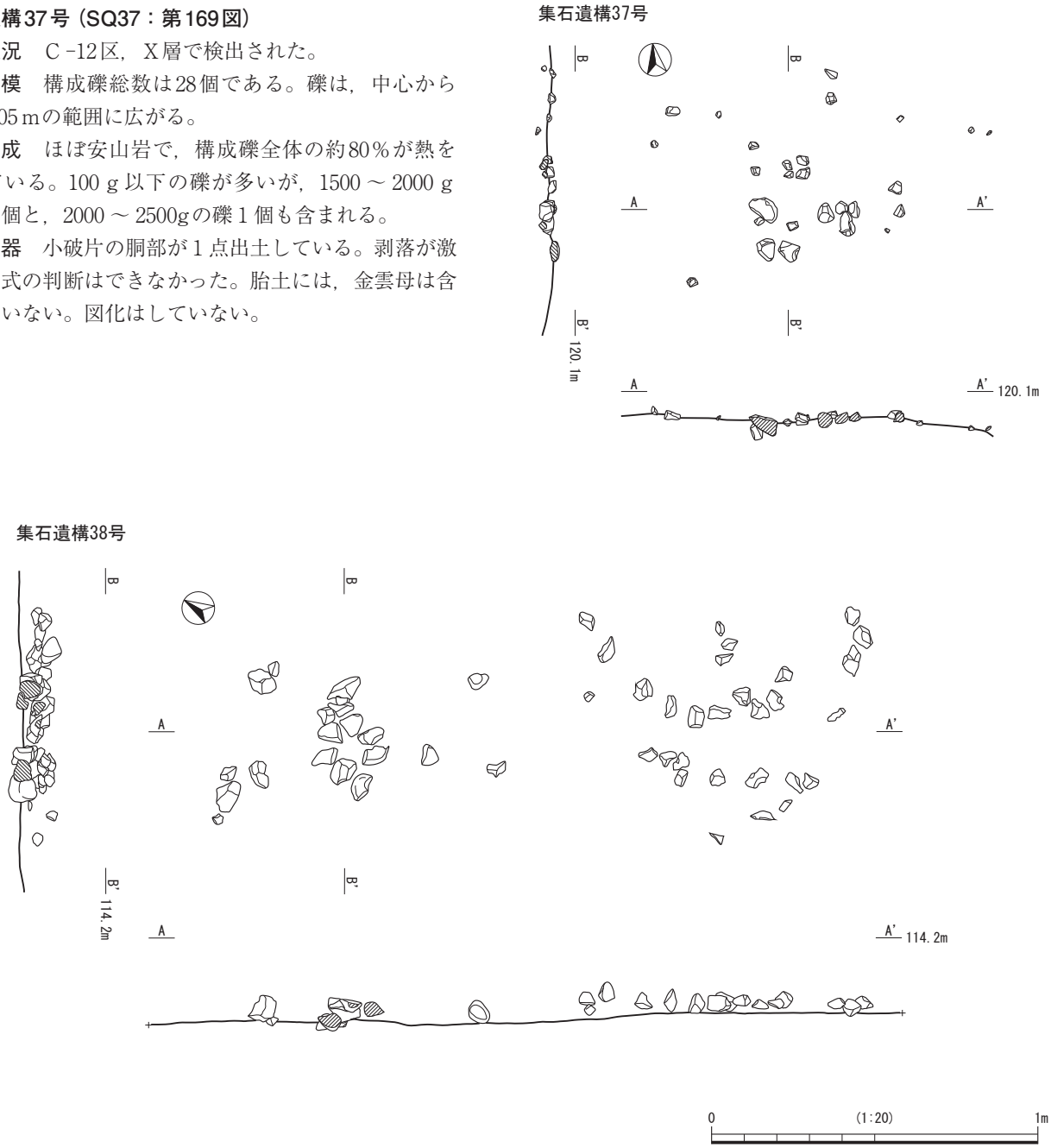
集石遺構38号（SQ38：第169図）

検出状況　L－51区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は49個である。礫は，中心から半径1.05ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ホルンフェルスと安山岩が主体で，構成礫全体の約20％が，熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。



第169図　集石遺構37号・集石遺構38号

集石遺構39号（SQ39：第170図）

検出状況　A－13区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は13個である。礫は，中心から半径0.35ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，全ての構成礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が半数を占める。

出土土器　出土していない。

集石遺構40号（SQ40：第170図）

検出状況　D－14区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は10個である。礫は，中心から半径0.20ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構41号（SQ41：第170図）

検出状況　G－22区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は7個である。礫は，中心から半径0.20ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　構成礫は凝灰岩のみで，全ての構成礫が熱を受けている。

出土土器　出土していない。

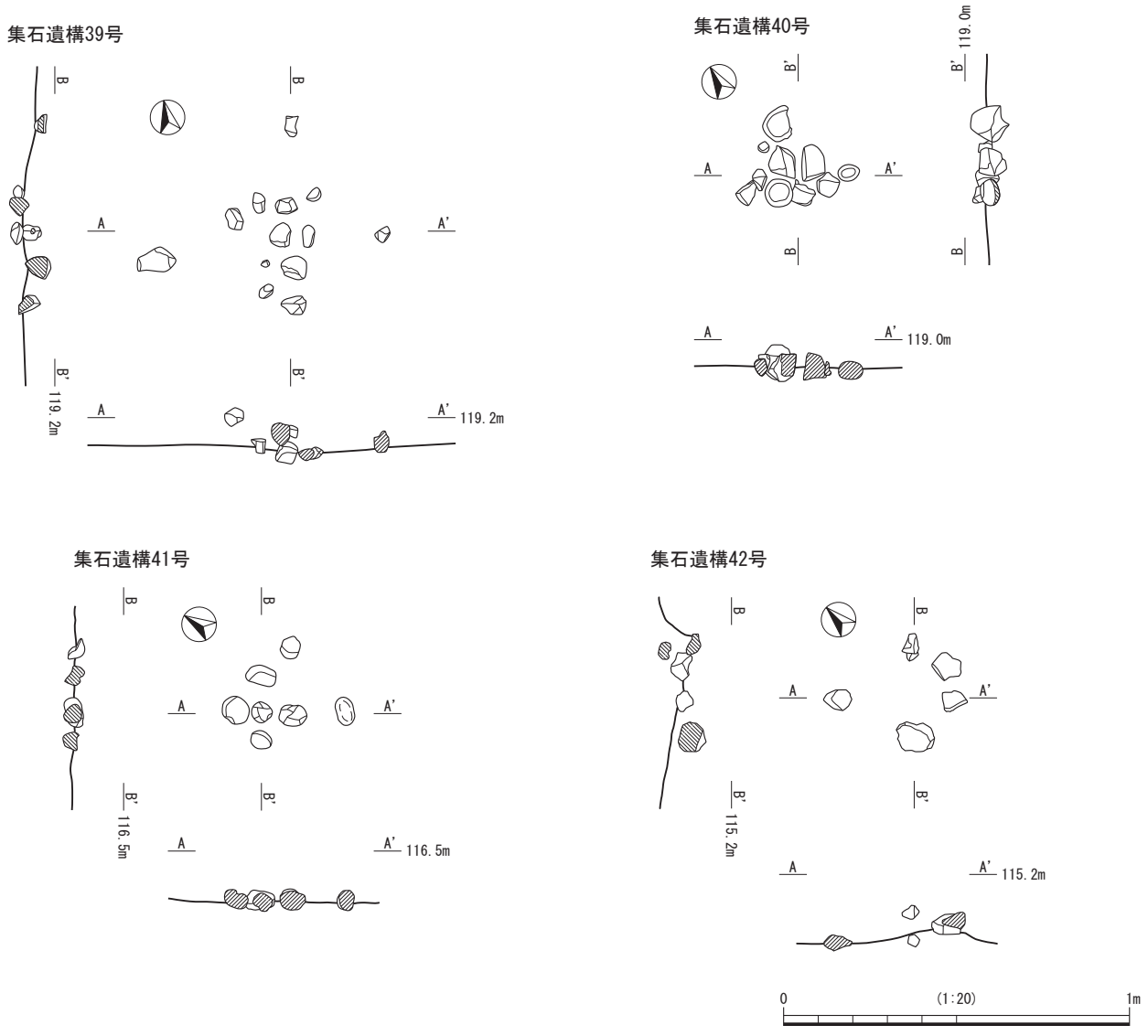
集石遺構42号（SQ42：第170図）

検出状況　C－25区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は6個である。礫は，中心から半径0.20ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルス，凝灰岩で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。

出土土器　出土していない。



第170図　集石遺構39号～ 42号

集石遺構43号（SQ43：第171図）

検出状況　C－17区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.25ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構44号（SQ44：第171図）

検出状況　E－13区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は9個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体のほとんどが熱を受けている。600ｇ以下の礫で構成されている。

出土土器　出土していない。

集石遺構45号（SQ45：第171図）

検出状況　F－17区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は15個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体のほとんどが熱を受けている。400 ～ 500ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

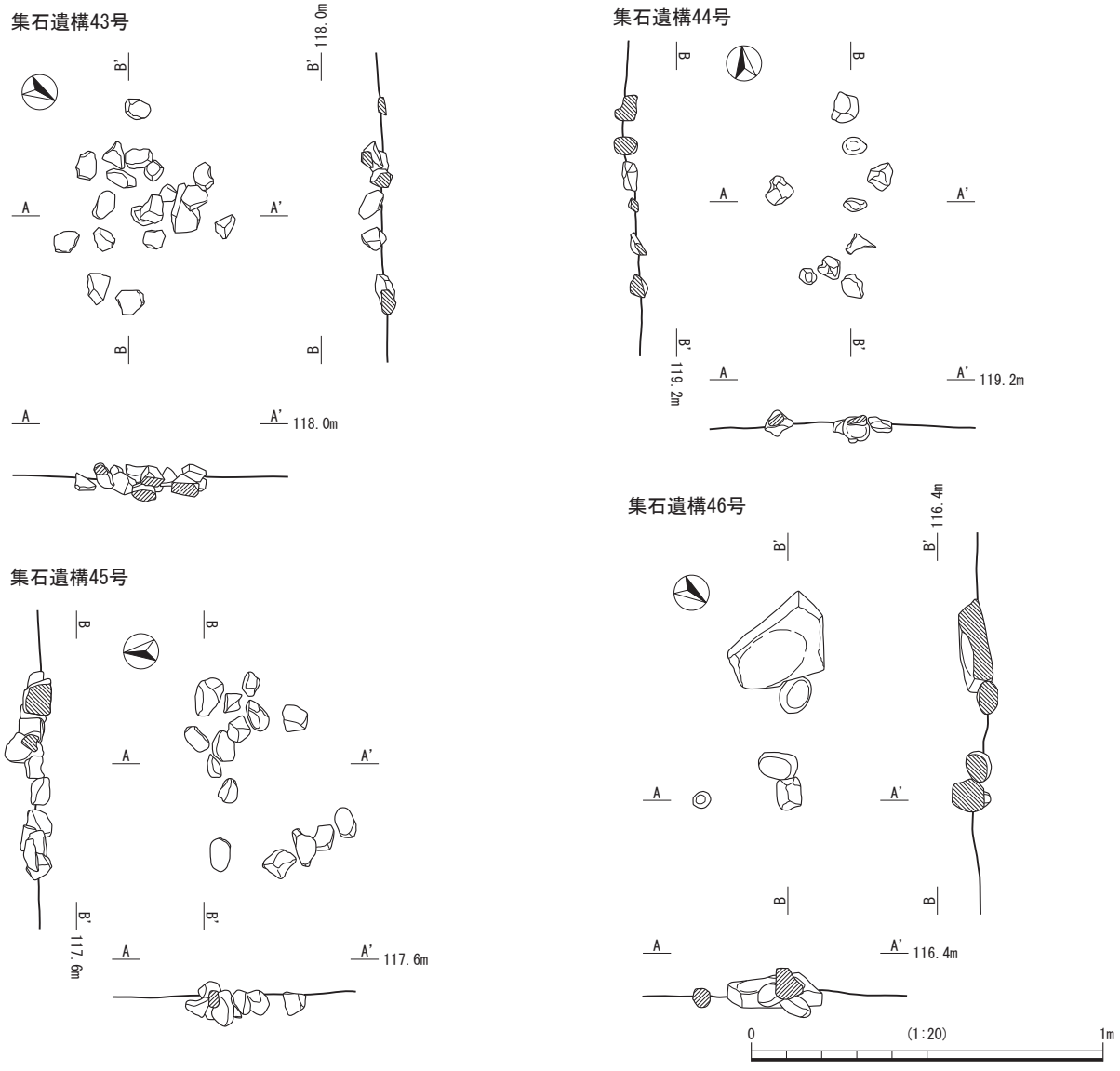
集石遺構46号（SQ46：第171図）

検出状況　E－22区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は５個である。礫は，中心から半径0.35ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，熱を受けている礫は１個のみ確認できた。礫の重さはまばらだが，3000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第171図　集石遺構43号～ 46号

集石遺構47号（SQ47：第172図）

検出状況　B－17区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は9個である。礫は，中心から半径0.35ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。400 ～ 500ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構48号（SQ48：第172図）

検出状況　D－23区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.35ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ凝灰岩で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫1個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構49号（SQ49：第172図）

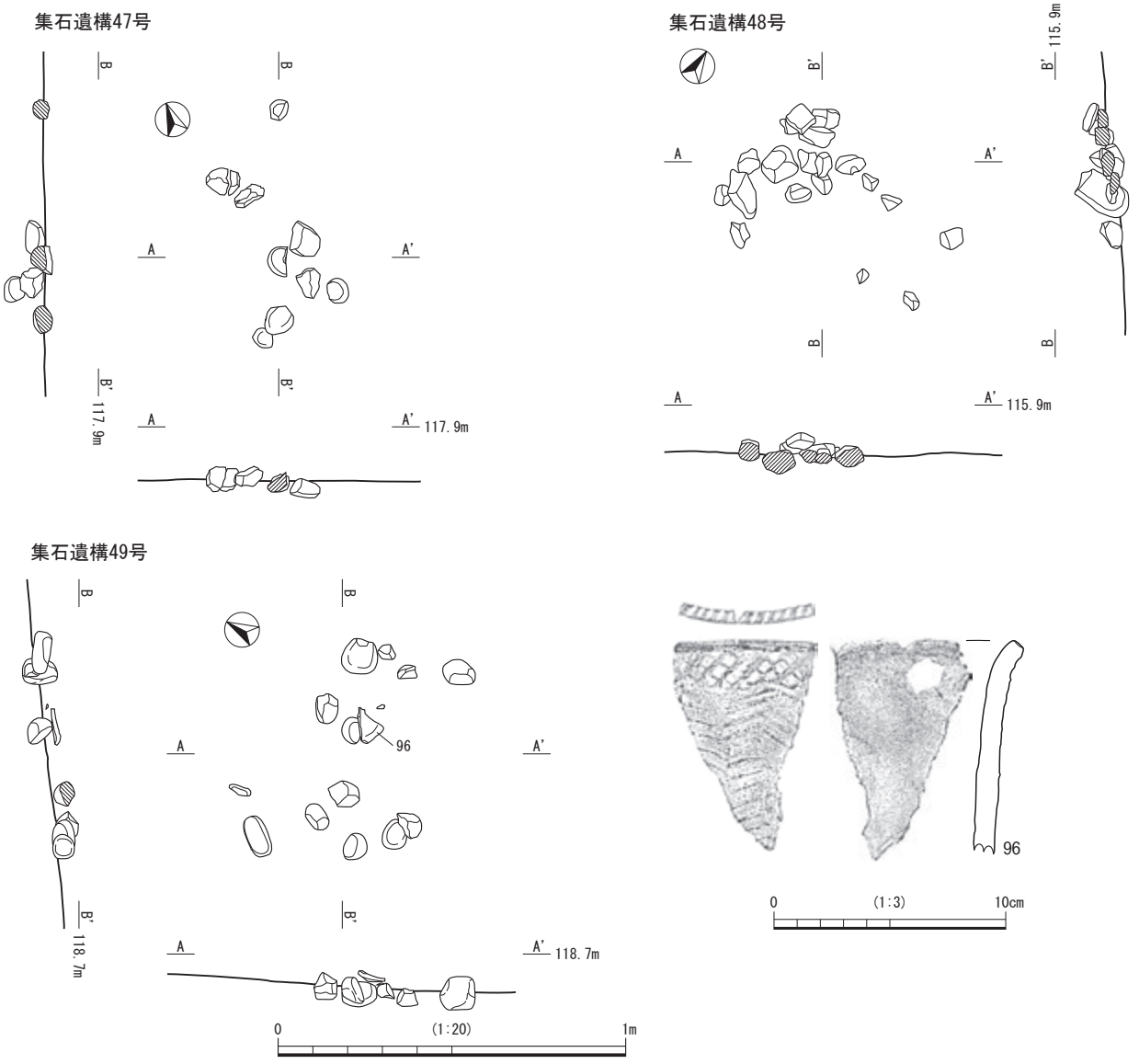
検出状況　C－15区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は13個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，ほとんどの礫が熱を受けている。300 ～ 400ｇの礫が多い。

出土土器　口縁部が1点出土し，図化した。96（第172図）である。外反する口縁部外面上位に，斜位に押引き状の刺突文を施し，その直下に斜位貝殻条痕文を施す。口唇部は，平坦で2㎜程のキザミを斜位に施す。口唇部，内面は光沢を帯びている。

土器分類　Ⅳ類に該当する。



第172図　集石遺構47号～ 49号・出土遺物

集石遺構50号（SQ50：第173図）

検出状況　D－17区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は17個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　構成礫は安山岩が約半数で砂岩・凝灰岩等も含まれ，構成礫全体の約70％が熱を受けている。100～200ｇの礫が多い。磨石・敲石類の転用品が確認され，図化した。97（第173図）は凝灰岩製の磨石・敲石類である。破片資料だが元は扁平な円礫と考えられ，片面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化し磨面にススが付着する。

出土土器　出土していない。

集石遺構51号（SQ51：第173図）

検出状況　F－22区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩のみで，熱を受けている礫は確認できなかった。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

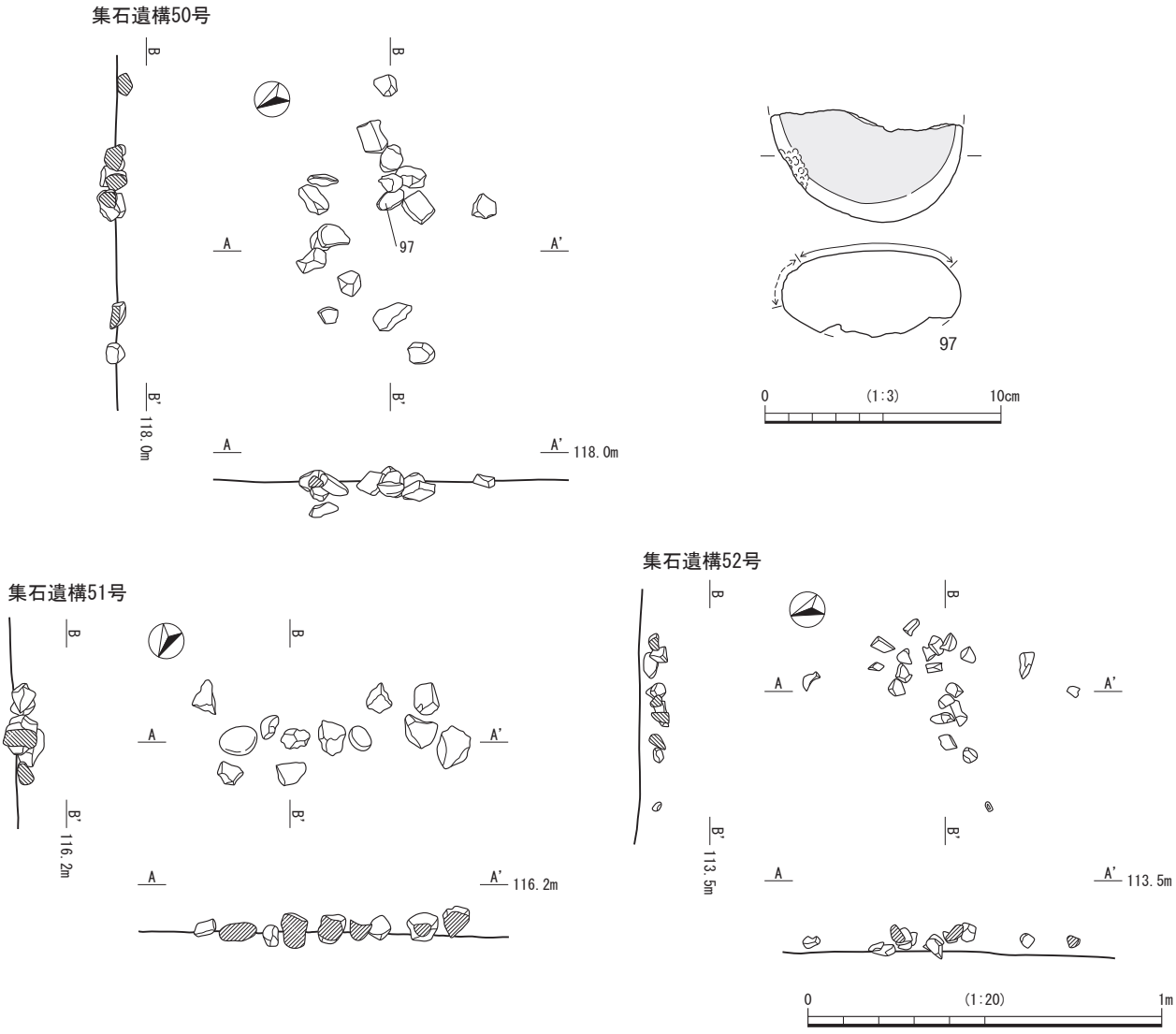
集石遺構52号（SQ52：第173図）

検出状況　E－39区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。



第173図　集石遺構50号・出土遺物・集石遺構51号・集石遺構52号

集石遺構53号（SQ53：第174図）

検出状況　B－27区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は18個である。礫は，中心から半径0.40ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，熱を受けている礫は１個しか確認できなかった。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構54号（SQ54：第174図）

検出状況　A・B－12区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は10個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，全ての構成礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構55号（SQ55：第174図）

検出状況　D－13区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は27個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫のほとんどが熱を受けている。200 ～ 300ｇと300 ～ 400ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

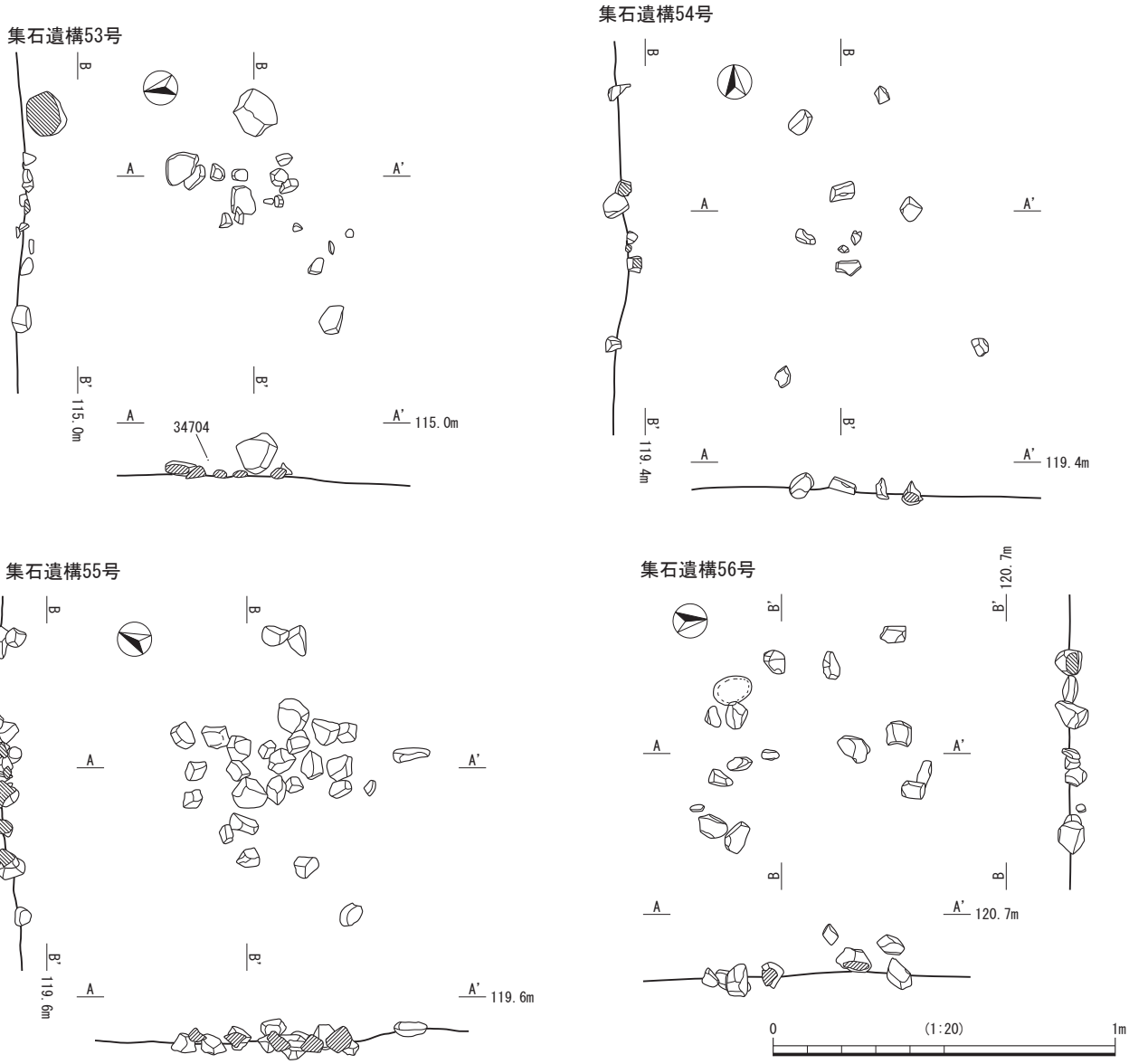
集石遺構56号（SQ56：第174図）

検出状況　D－12区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約80％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。



第174図　集石遺構53号～ 56号

集石遺構57号（SQ57：第175図）

検出状況　D－14区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は23個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，熱を受けている礫は少ない。200 ～ 300ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構58号（SQ58：第175図）

検出状況　D－９区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は13個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，全ての構成礫が熱を受けている。400 ～ 500ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構59号（SQ59：第175図）

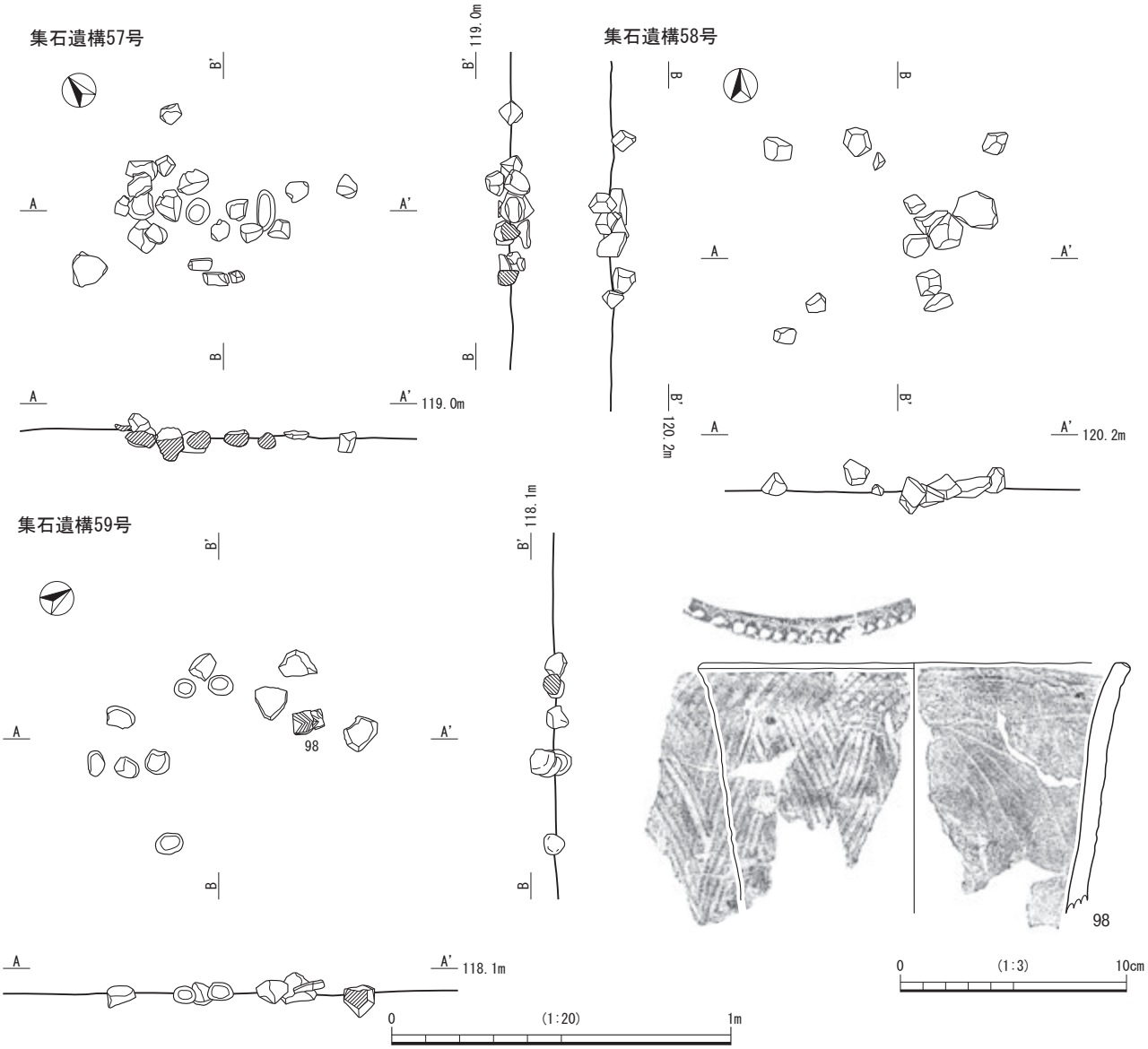
検出状況　D－17区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は11個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，全ての構成礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇと300 ～ 400ｇの礫が多いが，1000 ～ 1500ｇの礫１個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　口縁部が１点出土し，図化した。98（第175図）である。やや外反する口縁部外面上位に，斜位貝殻刺突文を施し，その直下に綾杉状の条痕文を施す。口唇部外面端部に，５㎜程の刺突状のキザミを斜位に施す。内面は，貝殻による調整の跡が確認できる。

土器分類　Ⅳ類に該当する。



第175図　集石遺構57号～ 59号・出土遺物

集石遺構60号（SQ60：第176図）

検出状況　D-24区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は17個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　花崗岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫４個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構61号（SQ61：第176図）

検出状況　C-25区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は15個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫３個も含まれる。

出土土器　出土していない。

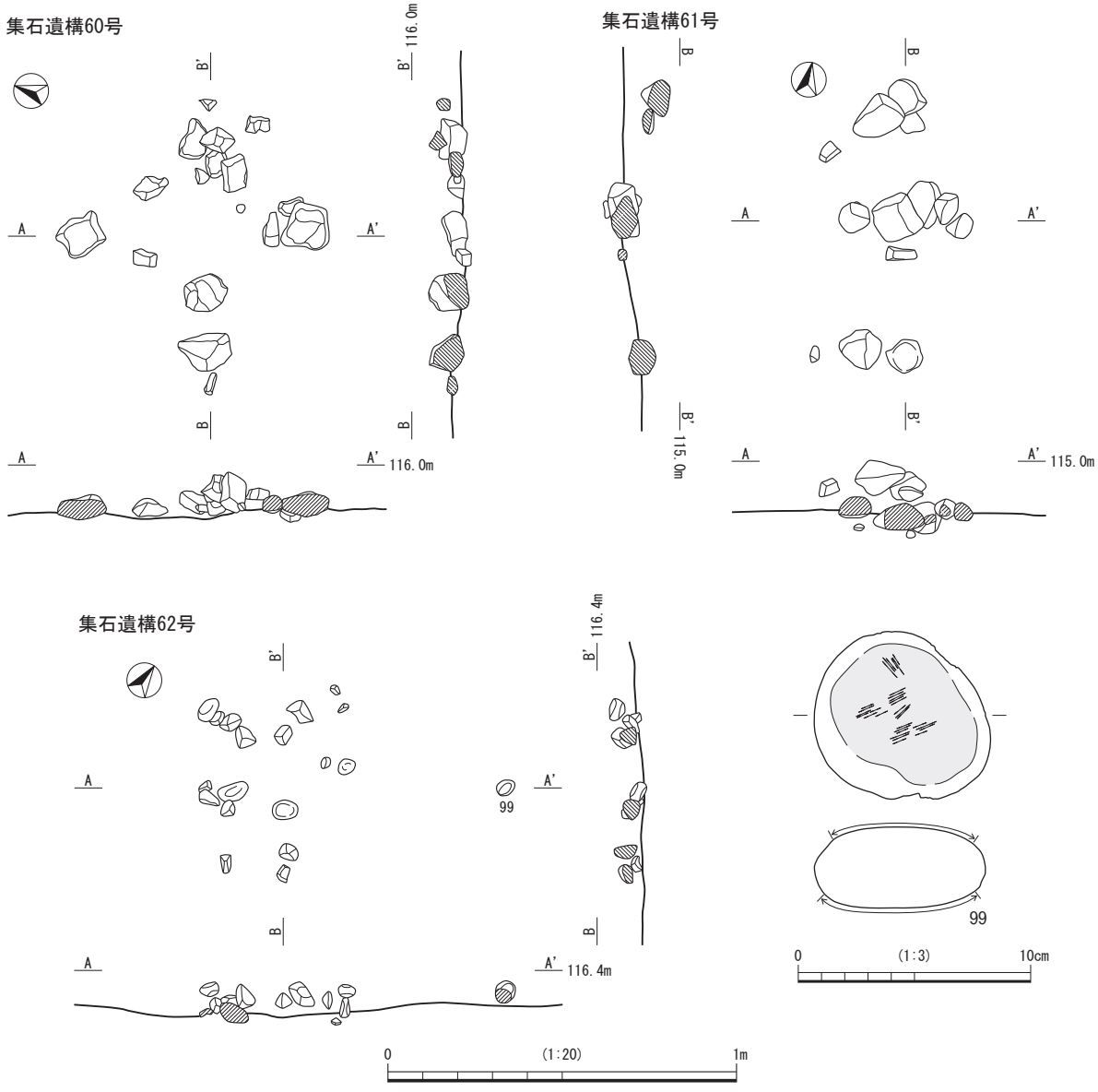
集石遺構62号（SQ62：第176図）

検出状況　D-21区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。磨石・敲石類が確認され，図化した。99（第176図）は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており側面にススが付着する。

出土土器　出土していない。



第176図　集石遺構60号～62号・出土遺物

集石遺構63号（SQ63：第177図）

検出状況　C－31区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　小破片の口縁部が１点出土している。外反する口縁部外面上位に，斜位刺突文をやや不規則的に施し，その下位には，横位条痕文を１条施す。口唇部に文様をもたない。胎土には，金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類　Ⅳ類に該当する。

集石遺構64号（SQ64：第177図）

検出状況　K－47区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は22個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ホルンフェルスと安山岩が主体で，構成礫全体の約60％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。100（第177図）はホルンフェルス製の磨製石斧である。刃部の破片資料で，表面右側から裏面にかけて広く剥離痕が残るがやや磨滅しており，成形時のものと考えられる。

出土土器　出土していない。

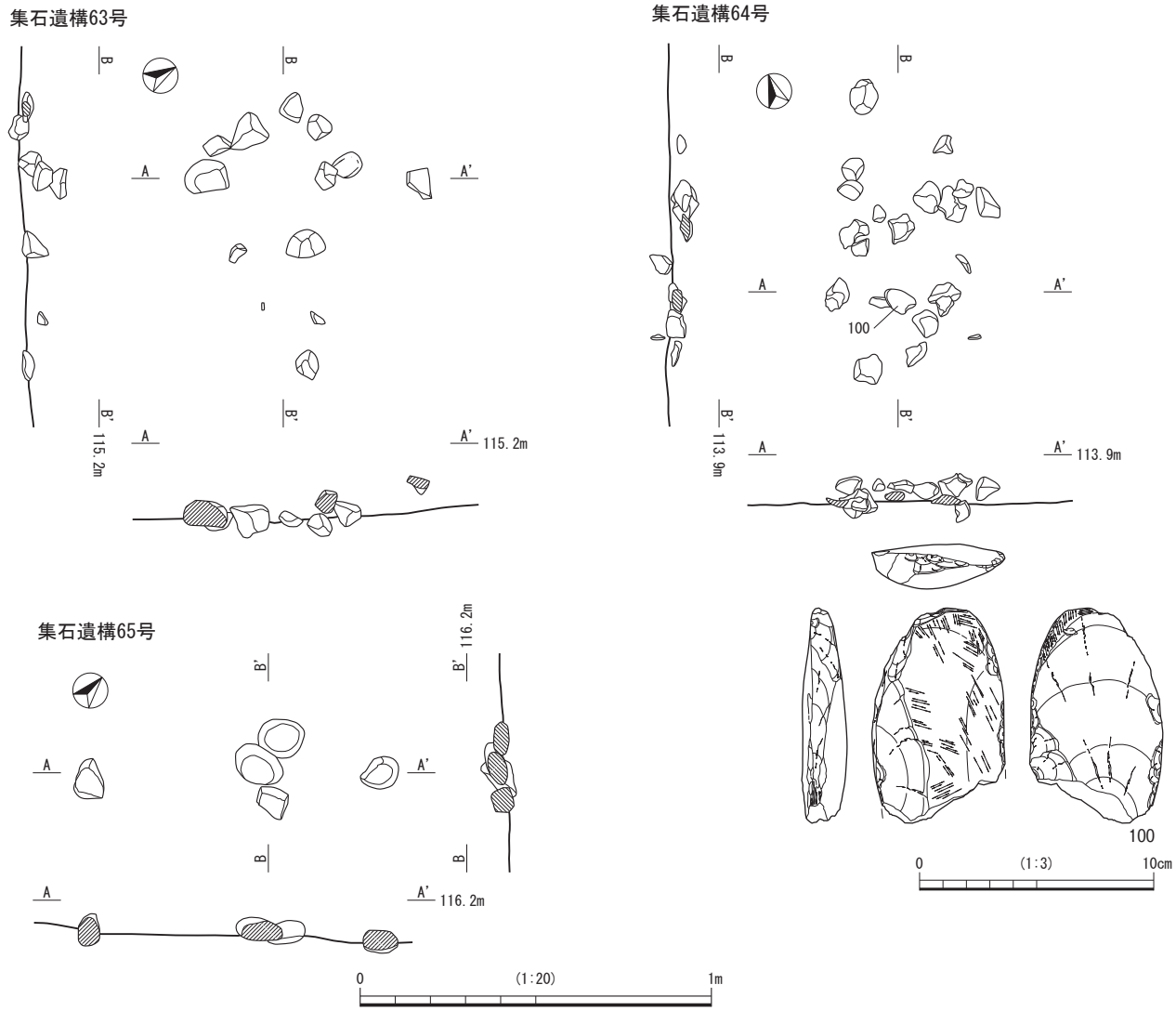
集石遺構65号（SQ65：第177図）

検出状況　E－22区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は５個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩のみで，熱を受けている礫は確認できなかった。1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第177図　集石遺構63号・集石遺構64号・出土遺物・集石遺構65号

集石遺構66号（SQ66：第178図）

検出状況　E－14区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は20個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構67号（SQ67：第178図）

検出状況　F－18区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は11個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は確認できなかった。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　胴部が１点出土し，図化した。101（第178図）である。やや膨らみをもつ胴部に，綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は，光沢を帯びている。

土器分類　Ⅳ類に該当する。

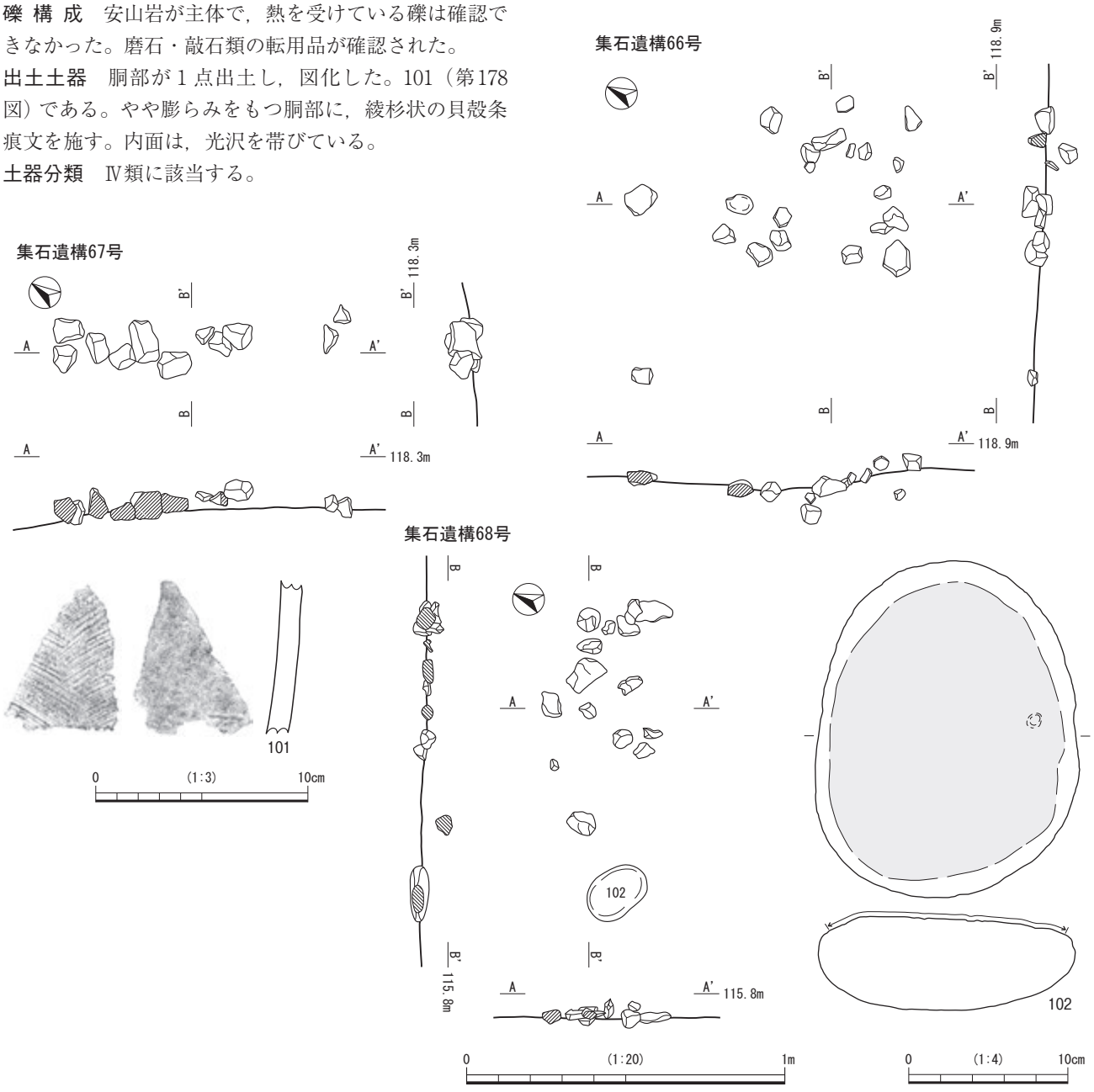
集石遺構68号（SQ68：第178図）

検出状況　F－24区，XI層で検出された。構成礫総数は16個である。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　花崗岩と凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，3000ｇを超える礫１個も含まれる。石皿の転用品が確認され，図化した。102（第178図）は安山岩製の石皿である。扁平な礫の片面を使用面としている。被熱しており全体的にススが付着する。

出土土器　出土していない。



第178図　集石遺構66号・集石遺構67号・出土遺物・集石遺構68号・出土遺物

集石遺構69号（SQ69：第179図）

検出状況　M-52区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は27個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100～200ｇの礫が多く，磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

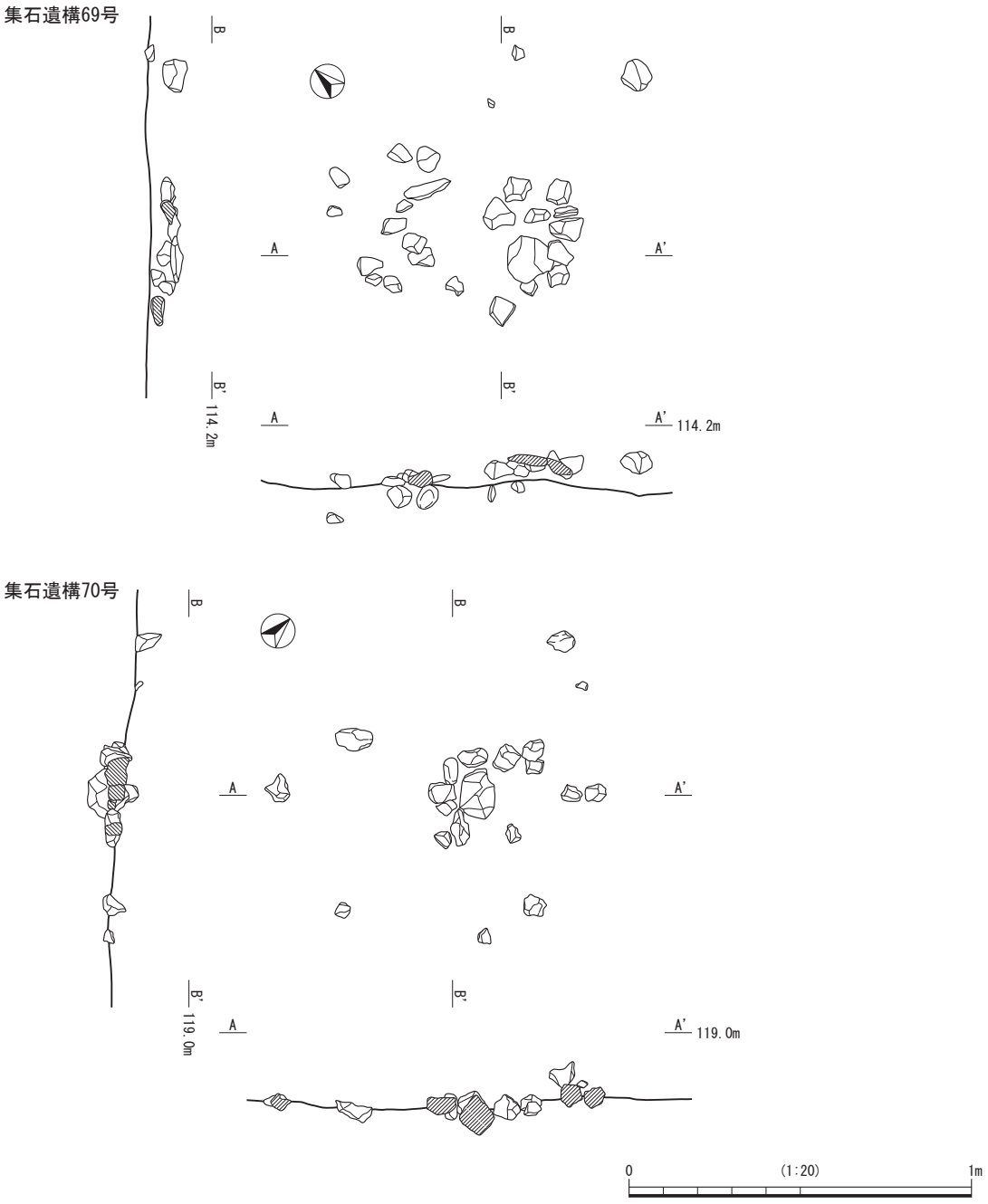
集石遺構70号（SQ70：第179図）

検出状況　B-14区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩をはじめ，５種の石材で構成され熱を受けている礫は少ない。300～400ｇの礫が多いが，2000～2500ｇの礫１個も含まれる。

出土土器　小破片の胴部が１点出土している。貝殻条痕文を２条施すが，明確な型式の判断はできなかった。胎土には，金雲母は含まれていない。図化はしていない。



第179図　集石遺構69号・集石遺構70号

集石遺構71号（SQ71：第180図）

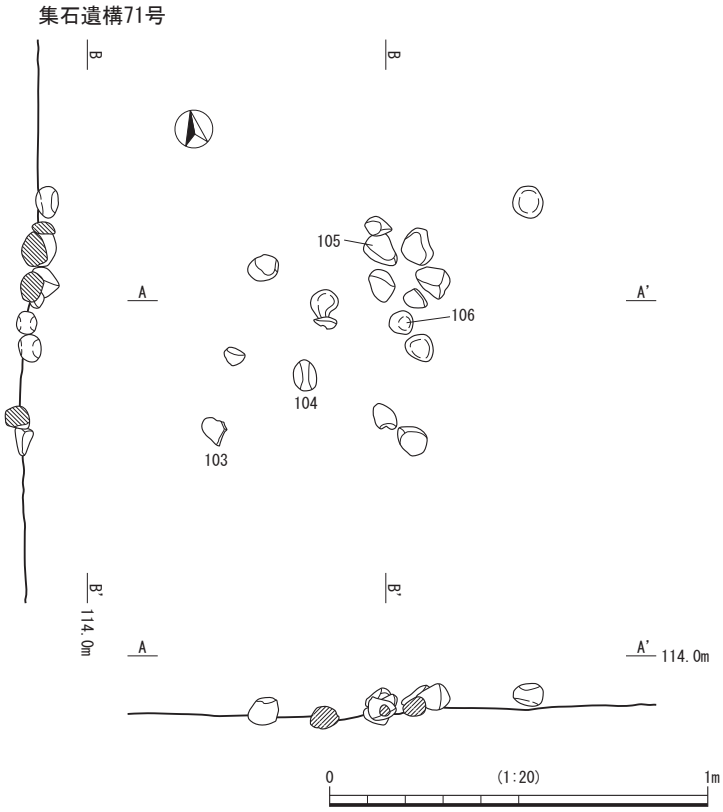
検出状況　J -48区，XI層で検出された。

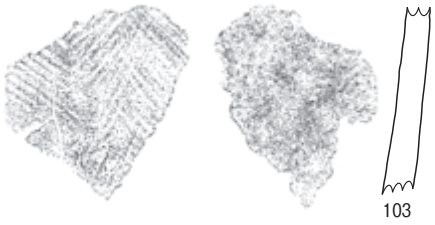
規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。

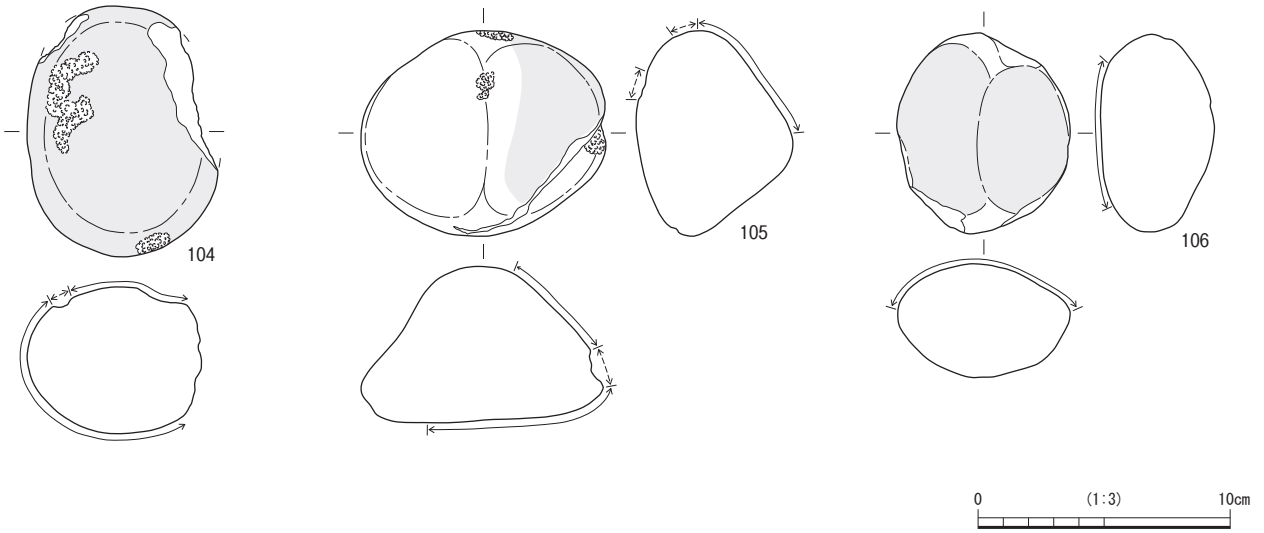
礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。300 ～ 400 ｇの礫が多い。104 ～ 106（第180図）は，いずれも安山岩製の磨石・敲石類である。104はやや扁平な円礫の全面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。105は三角形状の礫で，表面右側から裏面を磨面に利用しており，表面と側面の一部で敲打痕が認められる。106は扁平な円礫の表面を磨面に使用している。これら３点はいずれも被熱している。

出土土器　胴部が１点出土し，図化した。103（第180図）である。103は，綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は，貝殻によるナデをおこなう。

土器分類　Ⅳ類に該当する。







第180図　集石遺構71号・出土遺物

集石遺構72号（SQ72：第181図）

検出状況　Ⅰ-50区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は13個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構73号（SQ73：第181図）

検出状況　Ｅ-24区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫は，中心から半径0.60ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

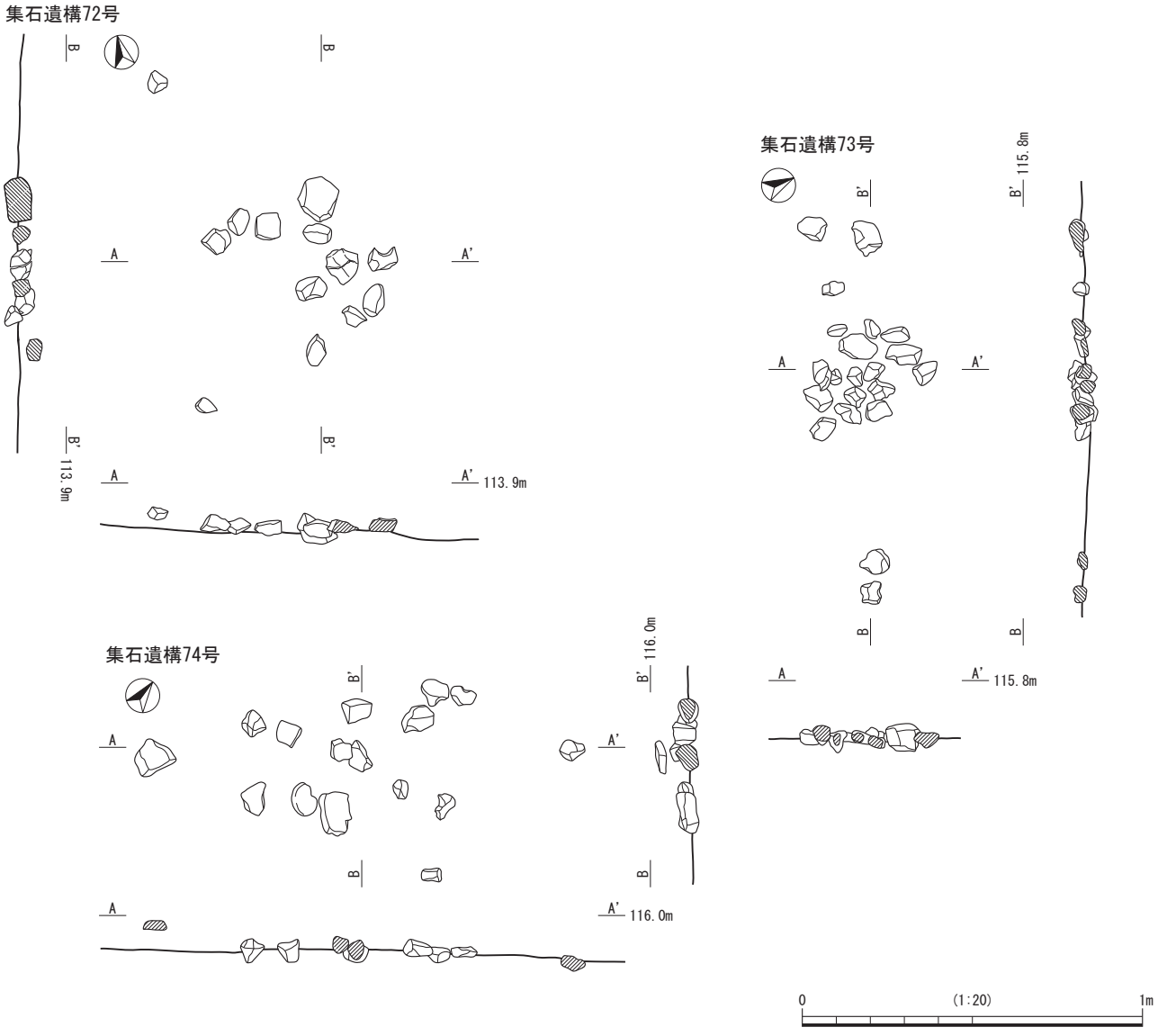
集石遺構74号（SQ74：第181図）

検出状況　Ｅ・Ｆ-23区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫は，中心から半径0.65ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇと400 ～ 500ｇの礫が多く，磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。



第181図　集石遺構72号～74号

集石遺構75号（SQ75：第182図）

検出状況　E -21区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は35個である。礫は，中心から半径0.65ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 g 以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。

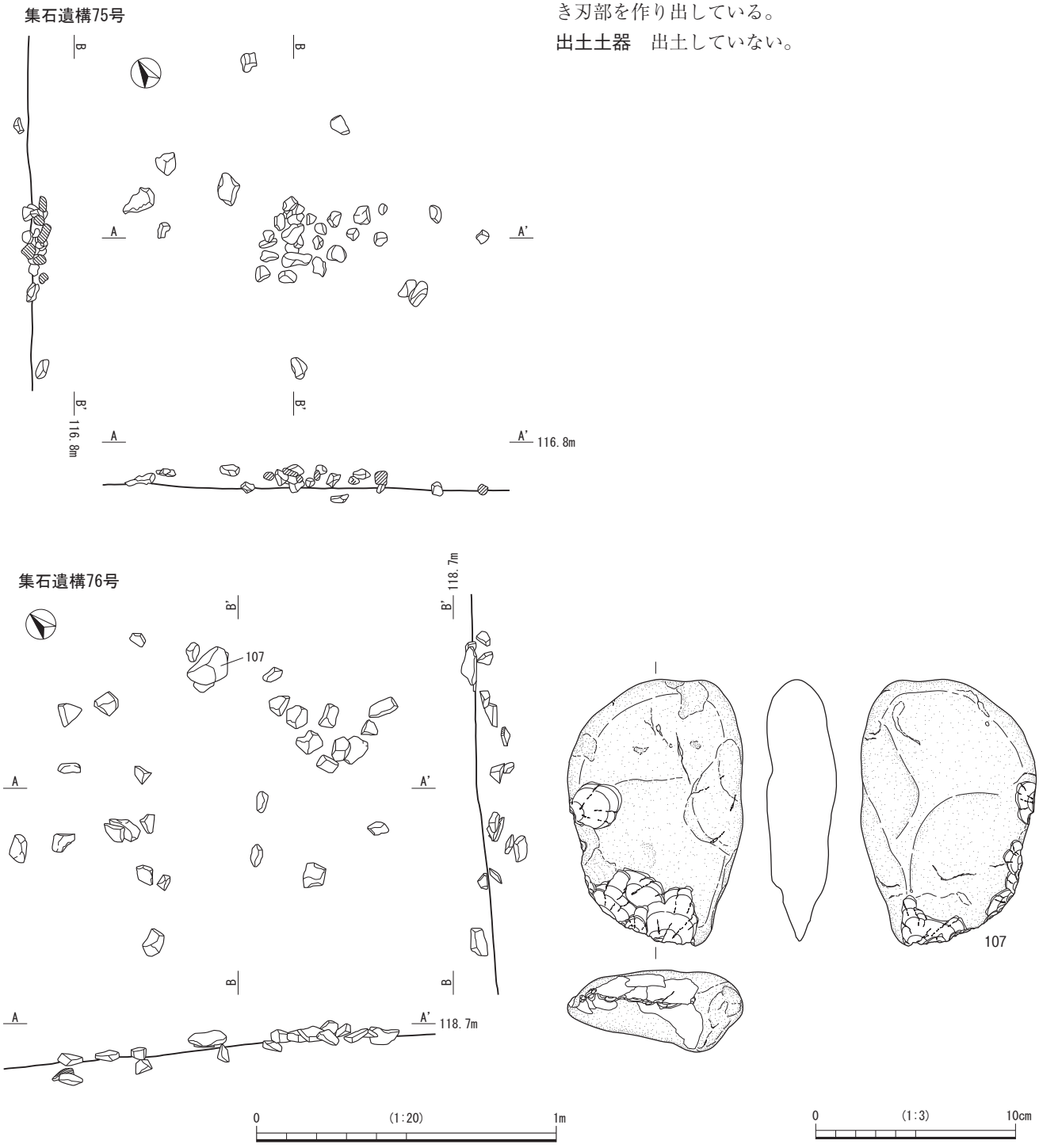
集石遺構76号（SQ76：第182図）

検出状況　D -15区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は30個である。礫は，中心から半径0.70ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100 g 以下の礫が多い。礫器の転用品が含まれ図化した。107（第182図）はホルンフェルス製の礫器である。扁平な楕円礫の縁辺を表裏両面から打ち欠き刃部を作り出している。

出土土器　出土していない。



第182図　集石遺構75号・集石遺構76号・出土遺物

集石遺構77号（SQ77：第183図）

検出状況　E-22区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は32個である。礫は，中心から半径0.70ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ凝灰岩で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構78号（SQ78：第183図）

検出状況　B-16区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は35個である。礫は，中心から半径0.75ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体のほとんどが熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫で半数を占める。

出土土器　出土していない。

第183図　集石遺構77号・集石遺構78号

集石遺構79号（SQ79：第184図）

検出状況　E－10区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫は，中心から半径0.75ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　構成礫は安山岩が多く砂岩・凝灰岩等も含まれ，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下と200～300ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

炭 化 物　確認された炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，7,489-7,304calBCを示した。

集石遺構80号（SQ80：第184図）

検出状況　E－22区，XI層で検出された。

規模　構成礫総数は22個である。礫は，中心から半径0.75ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩と花崗岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。400～500ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫５個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

集石遺構81号（SQ81：第185図）

検出状況　E－13区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は20個である。礫は，中心から半径0.80ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫のほとんどが熱を受けている。100～200ｇの礫が多い。

出土土器　胴部が１点出土し，図化した。108（第185図）である。横位の沈線文を施し，その下位には，貝殻による押引文を施す。

土器分類　XVI類に該当する。

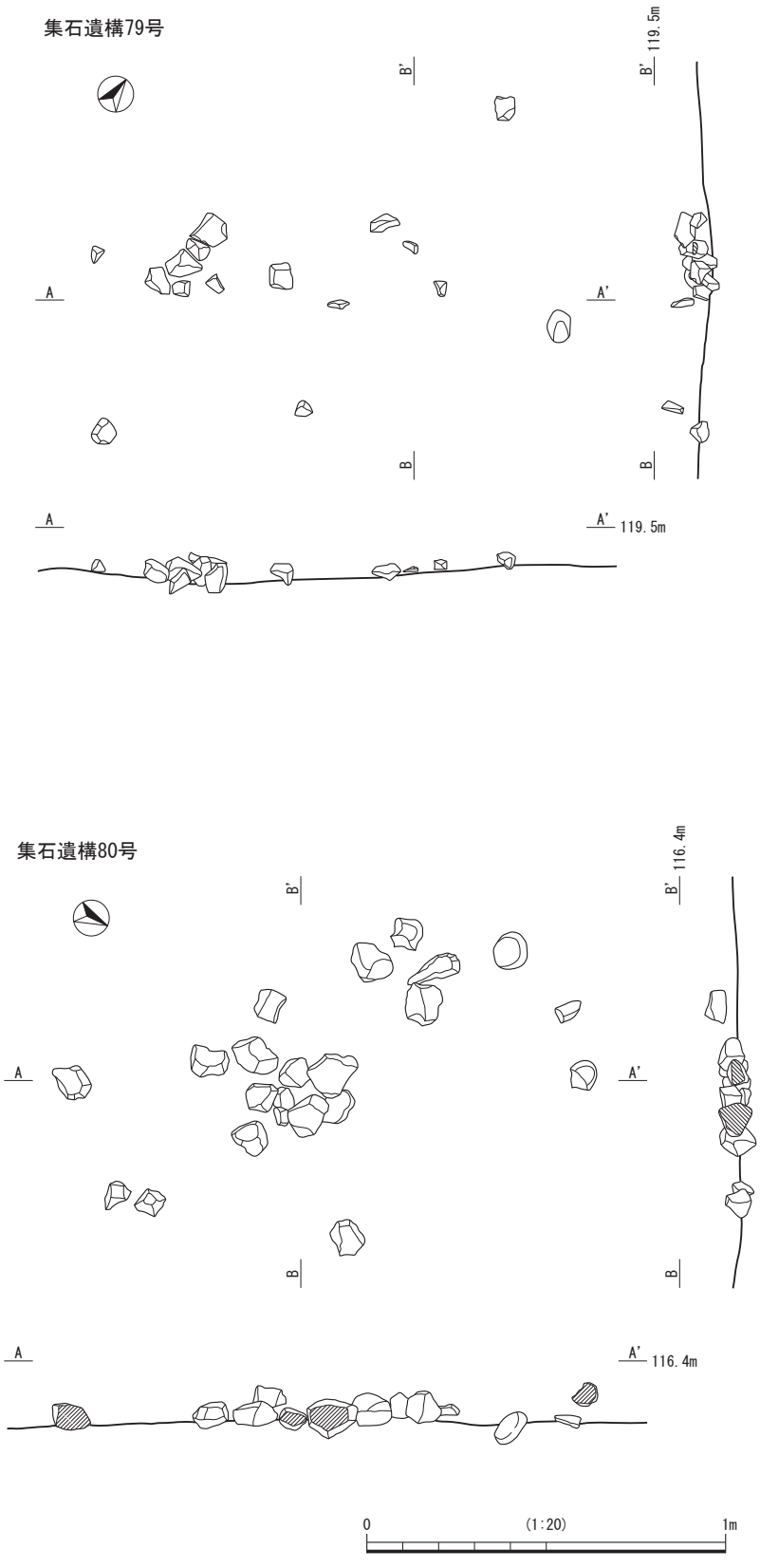
集石遺構82号（SQ82：第185図）

検出状況　A・B－15区，XI層で検出された。

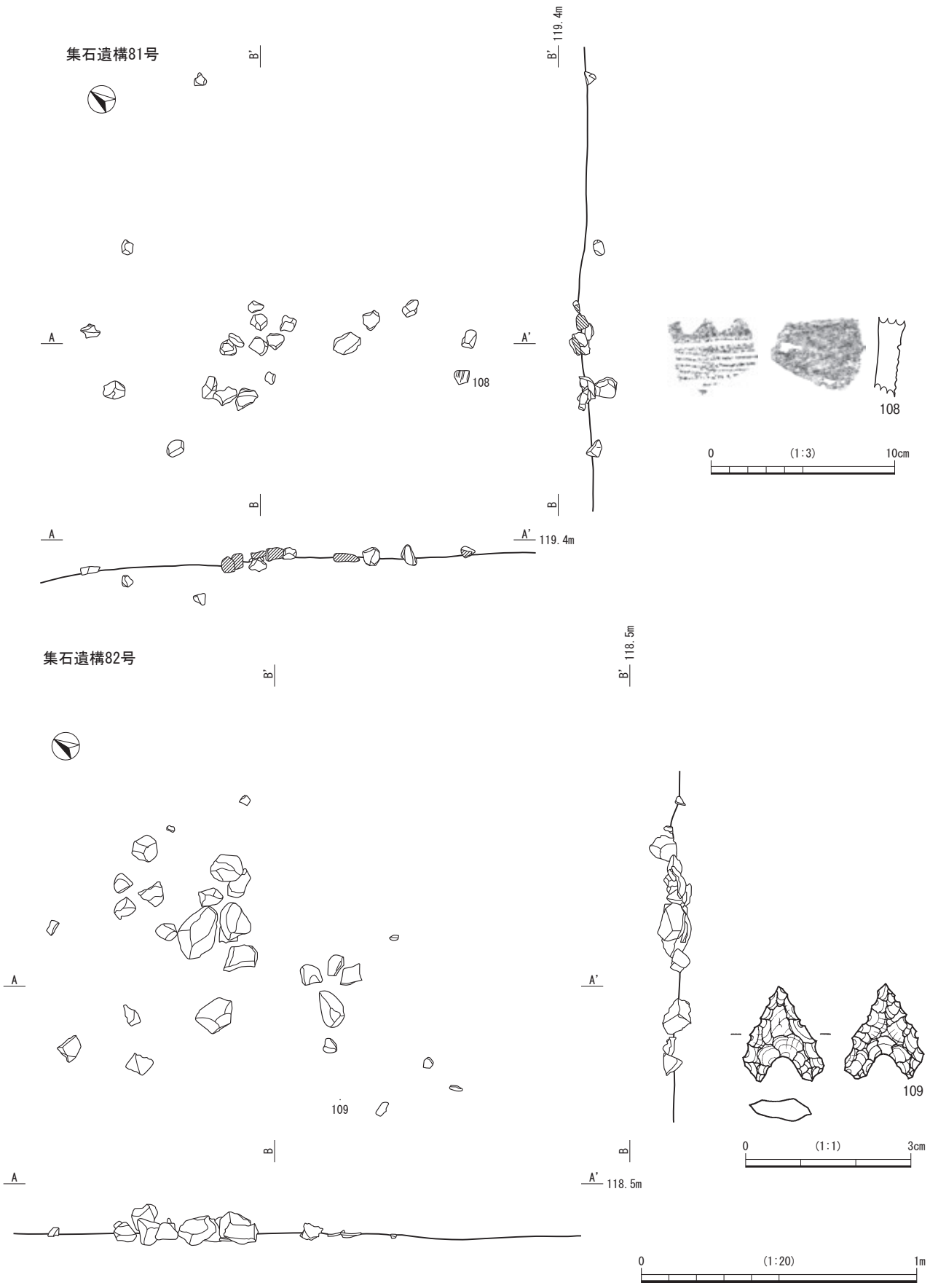
規　　模　構成礫総数は25個である。礫は，中心から半径0.80ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は１個しか確認できなかった。100ｇ以下の礫が多いが，1000～1500ｇの礫２個，2000～2500ｇの礫１個も含まれる。109（第185図）は黒曜石製の凹基無茎鏃である。表面に主要剥離面を残し，基部にやや深い抉りをもつ。109は，OB２類に該当する。

出土土器　出土していない。



第184図　集石遺構79号・集石遺構80号



第185図　集石遺構81号・出土遺物・集石遺構82号・出土遺物

集石遺構83号（SQ83：第186図）

検出状況　E－23区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は17個である。礫は，中心から半径0.80ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　構成礫は砂岩が多く凝灰岩等も含まれ，全ての構成礫が，熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。

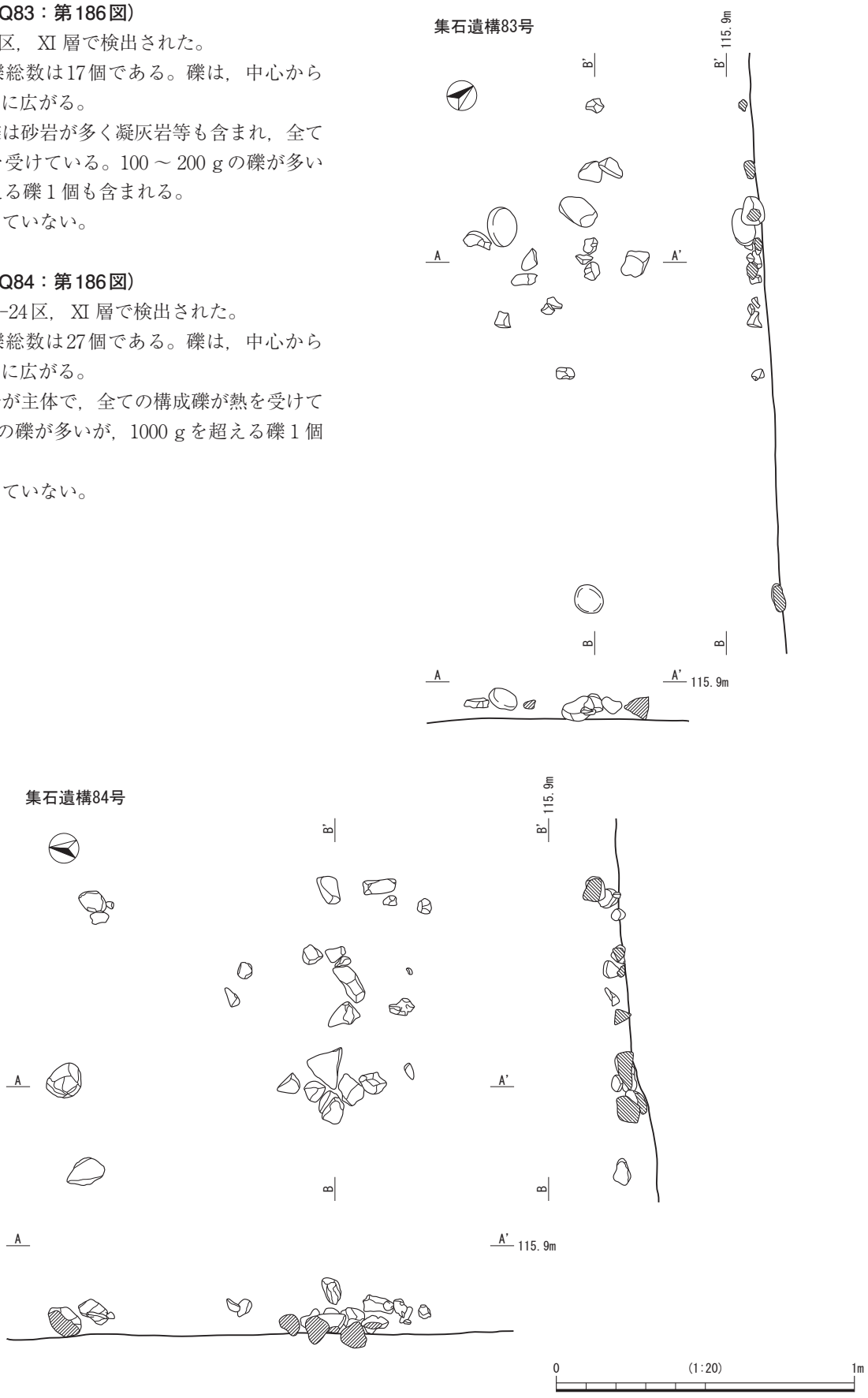
集石遺構84号（SQ84：第186図）

検出状況　C・D－24区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は27個である。礫は，中心から半径0.80ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第186図　集石遺構83号・集石遺構84号

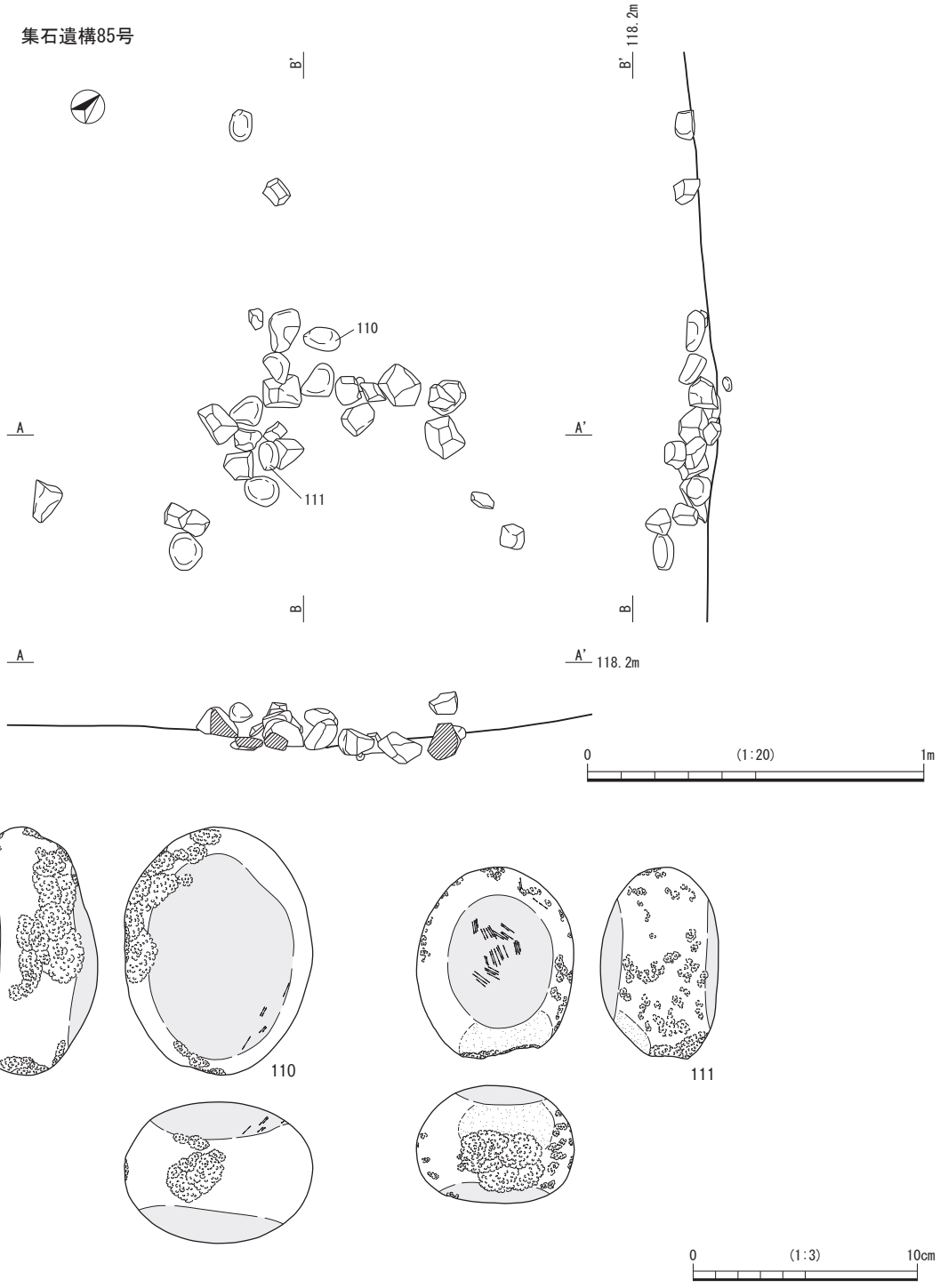
集石遺構85号（SQ85：第187図）

検出状況　F－16･17区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は30個である。礫は，中心から半径0.85ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　構成礫は安山岩が多く，凝灰岩等も含まれ，構成礫全体の約50％が熱を受けている。500 ～ 600ｇと900 ～ 1000ｇの礫が多いが，1000 ～ 1500ｇの礫１個も含まれる。磨石・敲石類が含まれ，図化した。110・111（第187図）は，ともに安山岩製の磨石・敲石である。110はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，側面に敲打痕が認められる。111はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面として使用し，側面に敲打痕が認められ，下面で特に顕著である。被熱しており裏面にスス，タールが付着する。

出土土器　出土していない。



第187図　集石遺構85号・出土遺物

集石遺構86号（SQ86：第188図）

検出状況　F－24区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は36個である。礫は，中心から半径0.85ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇと200 ～ 300ｇの礫が多く，石皿の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

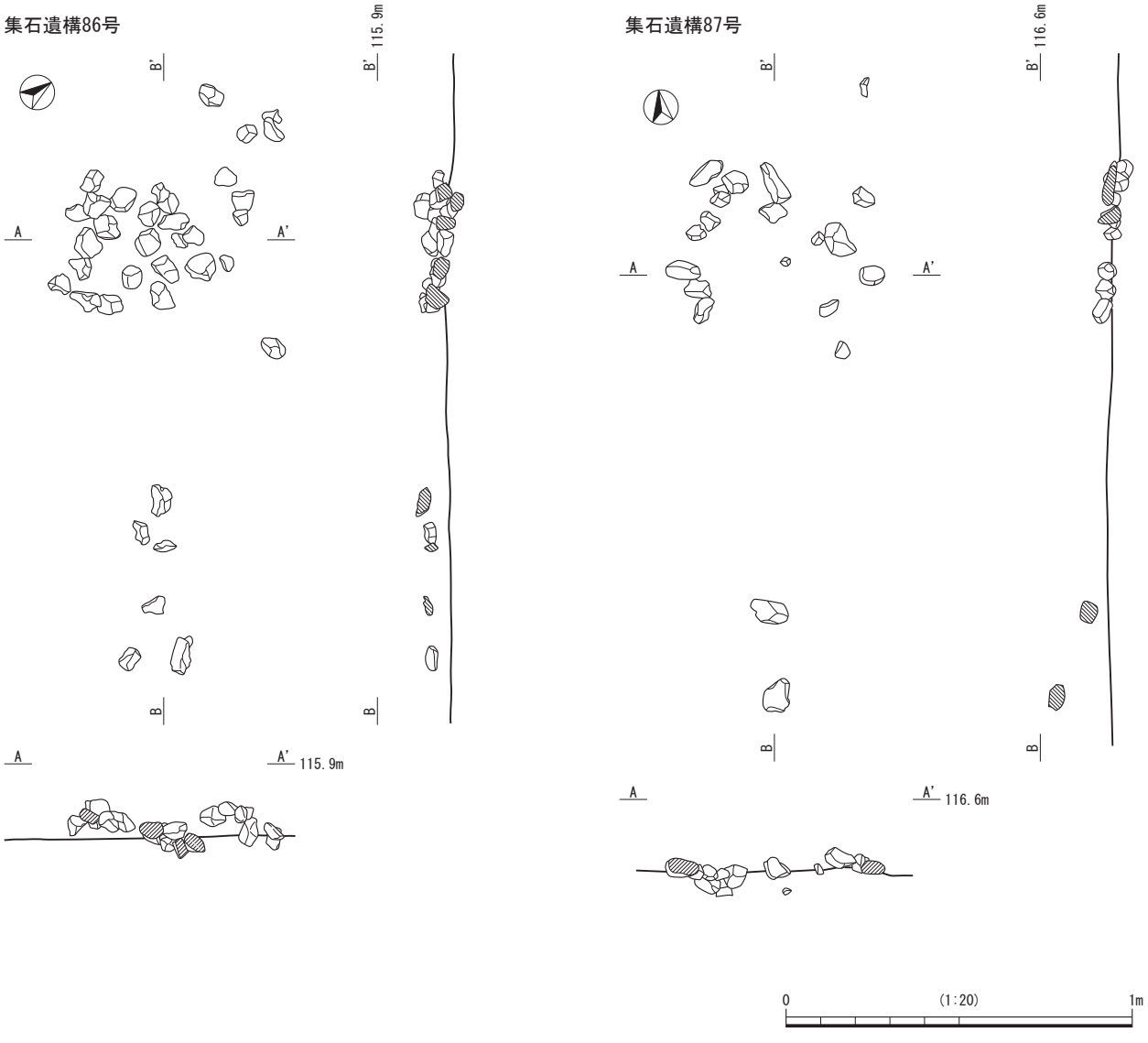
集石遺構87号（SQ87：第188図）

検出状況　G－21区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫は，中心から半径0.95ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩と頁岩のみで，全ての構成礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。



第188図　集石遺構86号・集石遺構87号

集石遺構88号（SQ88：第189図）

検出状況　E－33区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は32個である。礫は，中心から半径0.95ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　構成礫は安山岩が多数で，熱を受けている礫は少ない。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構89号（SQ89：第190図）

検出状況　K－47区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は35個である。礫は，中心から半径1.05ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，構成礫全体の約40％が，熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構90号（SQ90：第190図）

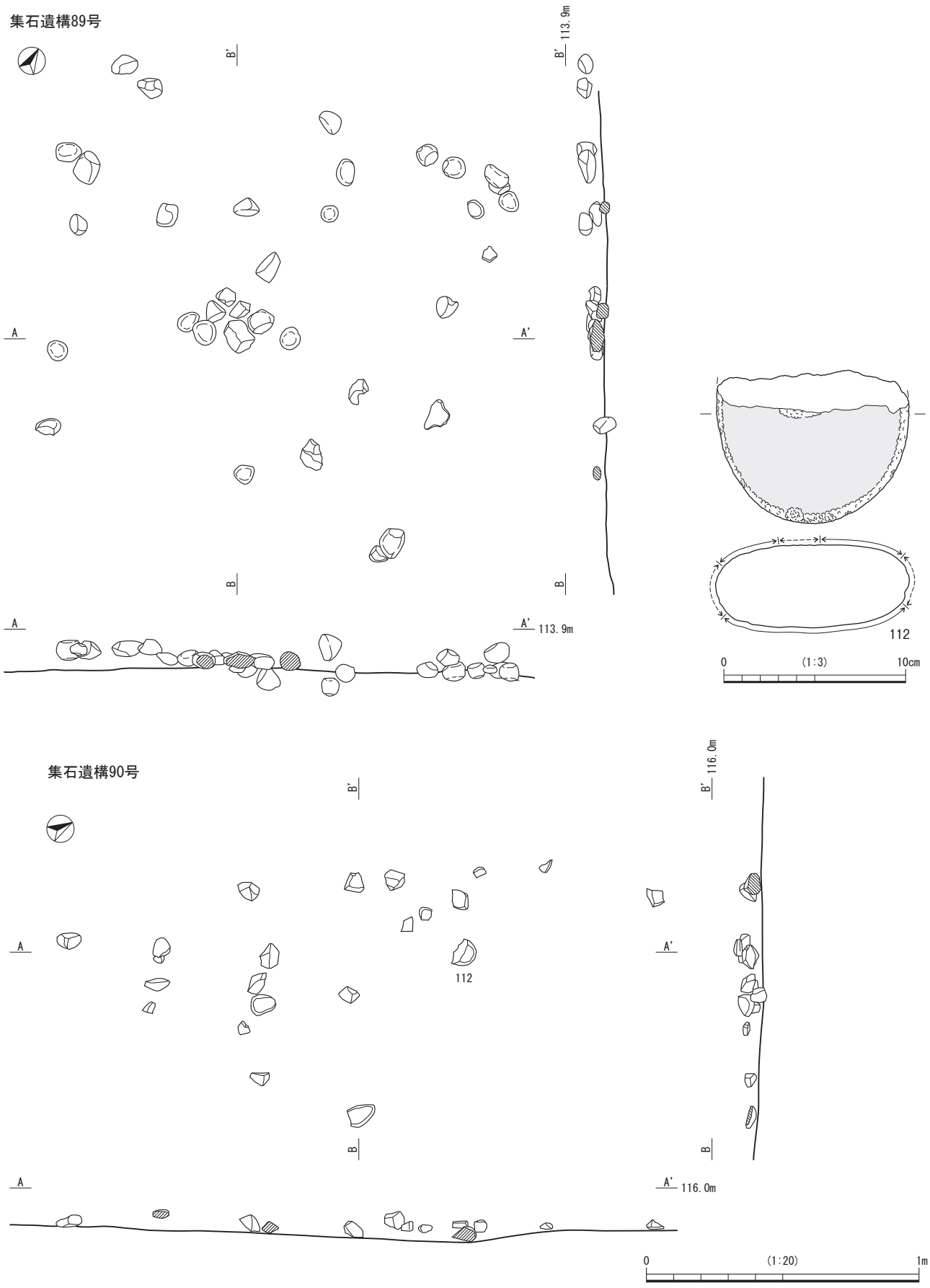
検出状況　D－24区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は22個である。礫は，中心から半径1.15ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩，花崗岩が主体で，ほとんどの礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多く，磨石・敲石類の転用品が確認され，図化した。112（第190図）は安山岩製の磨石・敲石類である。上半分を欠損する。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，表裏両面中央および側面に敲打痕が認められる。

出土土器　出土していない。

第189図　集石遺構88号



第190図　集石遺構89号・集石遺構90号・出土遺物

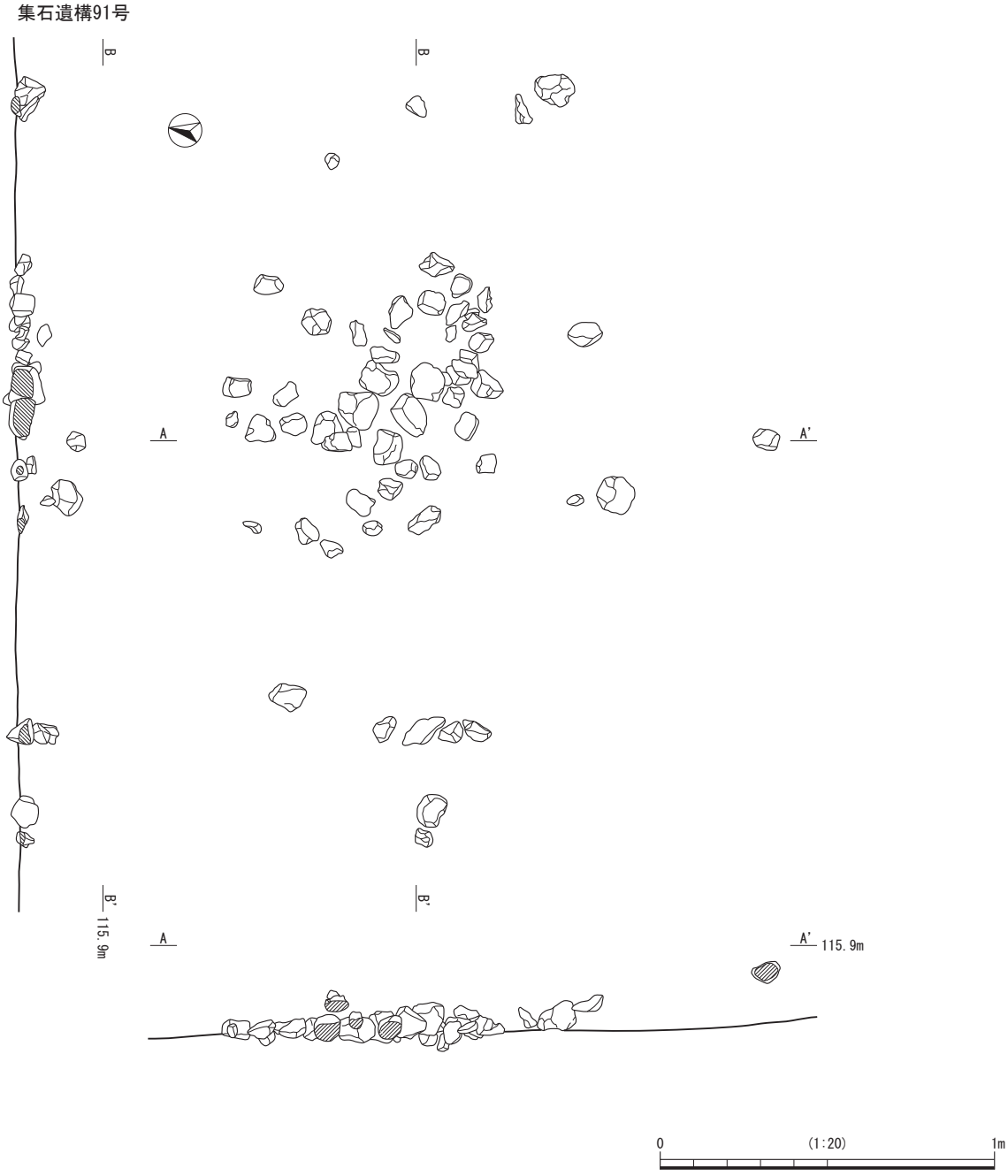
集石遺構91号（SQ91：第191図）

検出状況　F－24区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は60個である。礫は，中心から半径1.20ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　ほぼ凝灰岩で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫８個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第191図　集石遺構91号

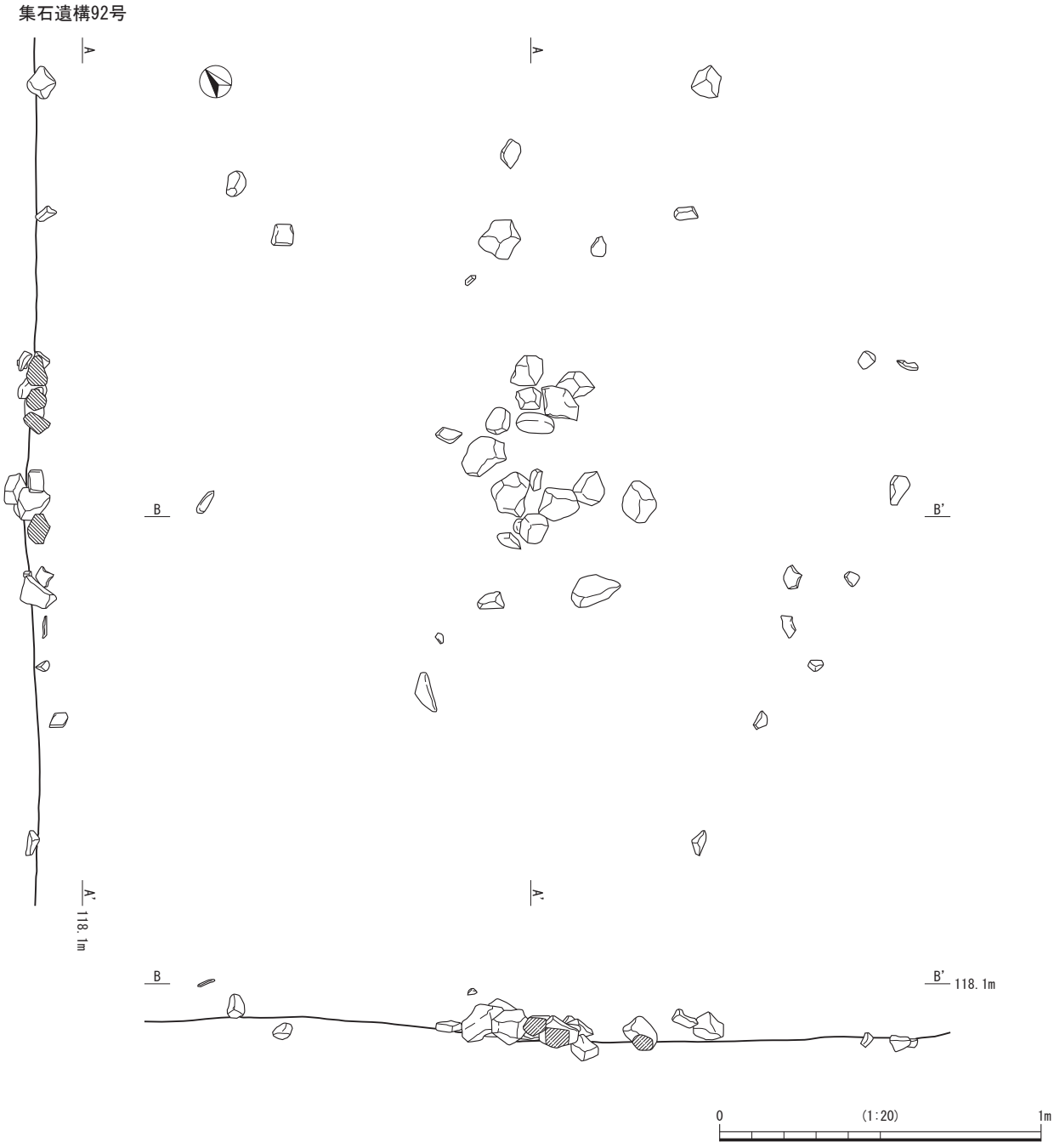
集石遺構92号（SQ92：第192図）

検出状況　A・B－17区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は38個である。礫は，中心から半径1.35ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000 ～ 1500ｇの礫が３個と，1500 ～ 2000ｇの礫３個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第192図　集石遺構92号

集石遺構93号（SQ93：第193図）

検出状況　E-39区，XI層で検出された。

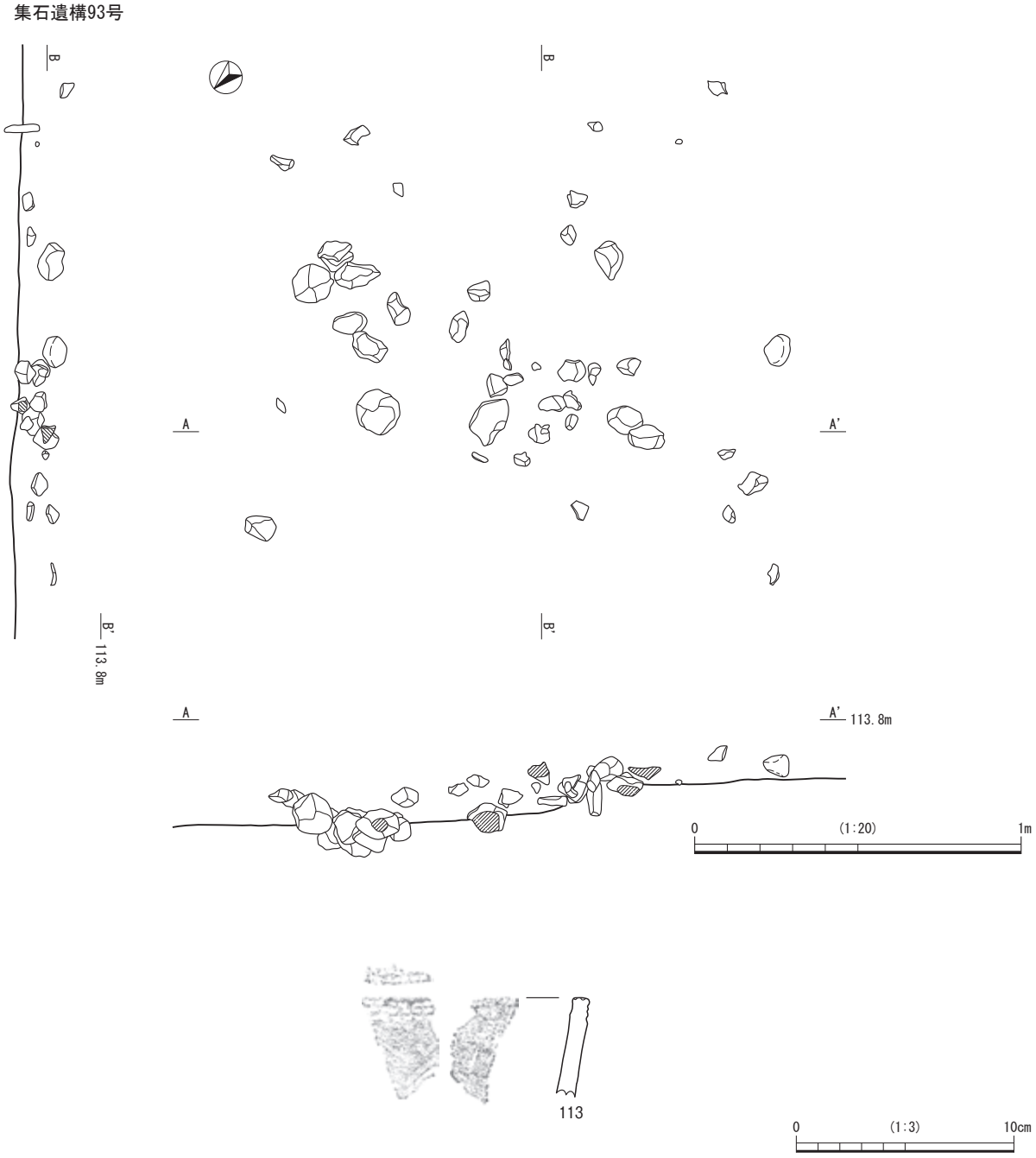
規　　模　構成礫総数は63個である。礫は中心から半径1.70ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫５個も含まれる。

出土土器　胴部が３点，口縁部が１点出土している。そのうち１点を図化した。113（第193図）である。113は，直行する口縁部で，口縁部外面上位に，横位貝殻刺突文を施し，その直下には，綾杉状の貝殻条痕文を施す。口唇部は，貝殻による刺突状のキザミ２つを１単位として施す。胴部３点は，ともに斜位貝殻条痕文を施す。そのうち１点は，底部近くの胴部で，斜位貝殻条痕文の下位には，横位貝殻条痕文を施す。３点とも胎土には，金雲母は含まれていない。

土器分類　この４点は，Ⅳ類に該当する。

炭 化 物　確認された炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，7,727-7,585calBCを示した。



第193図　集石遺構93号・出土遺物

集石遺構94号（SQ94：第194図）

検出状況　D-24区，Ⅻ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は36個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。600 ～ 700ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫7個も含まれる。

出土土器　出土していない。

炭 化 物　確認された炭化物は，炭化材であった。科学分析の結果から，ツバキ属に同定され，^{14}C年代測定は，7,457-7,188calBCを示した。

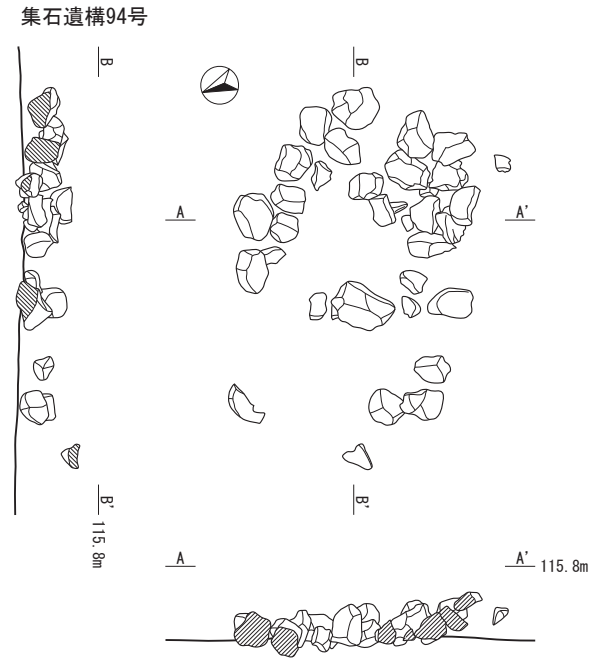
集石遺構95号（SQ95：第194図）

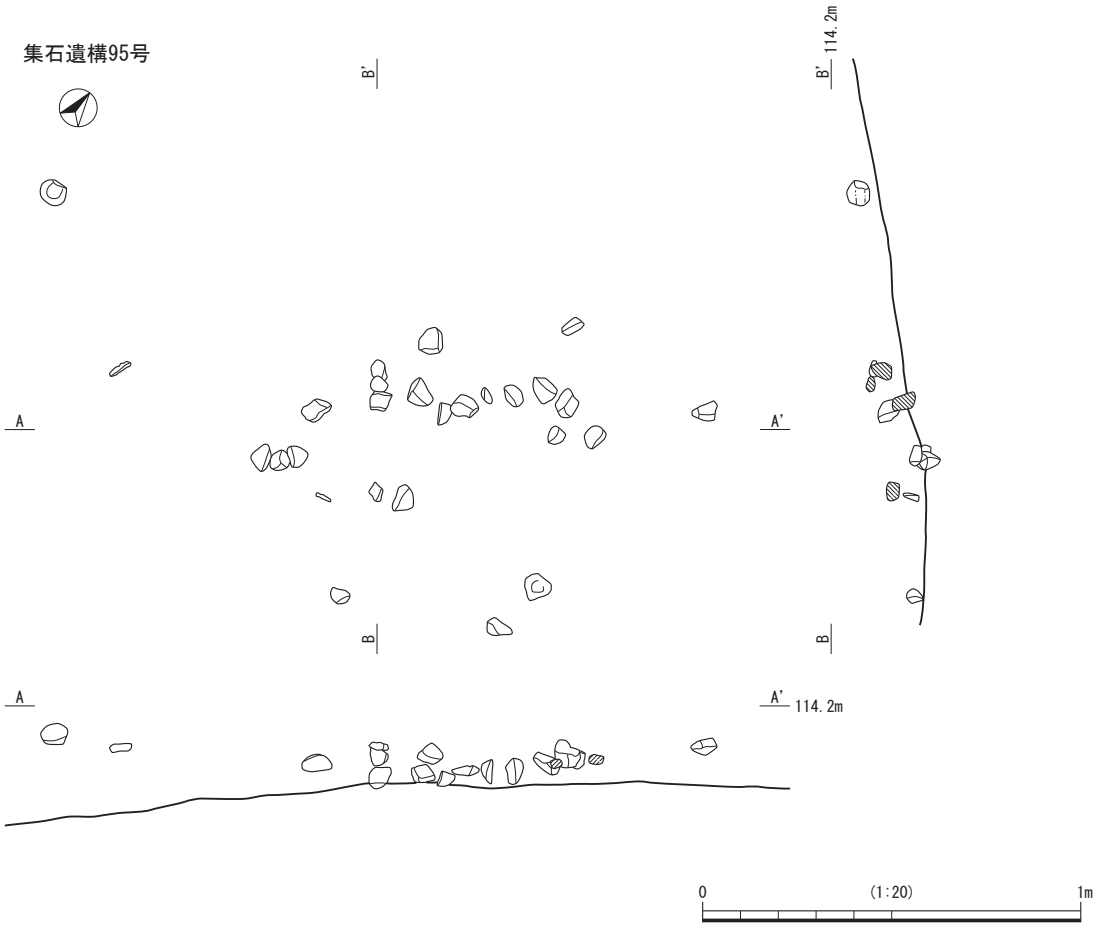
検出状況　E-36区，Ⅻ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は27個である。礫は，中心から半径0.95ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。





第194図　集石遺構94号・集石遺構95号

タイプⅡ

集石遺構96号（SQ96：第195図）

検出状況　E-13区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は26個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.50ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫のほとんどが熱を受けている。100ｇ以下の礫が大半を占める。

出土土器　出土していない。

集石遺構97号（SQ97：第195図）

検出状況　F-13区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は20個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.50ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　砂岩と泥岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100～200ｇの礫が多く，磨石・敲石類の転用品が1点確認され，図化した。114（第195図）は安山岩製の砥石である。扁平な円礫の片面を使用面としている。被熱しており全体がやや赤化する。

出土土器　出土していない。

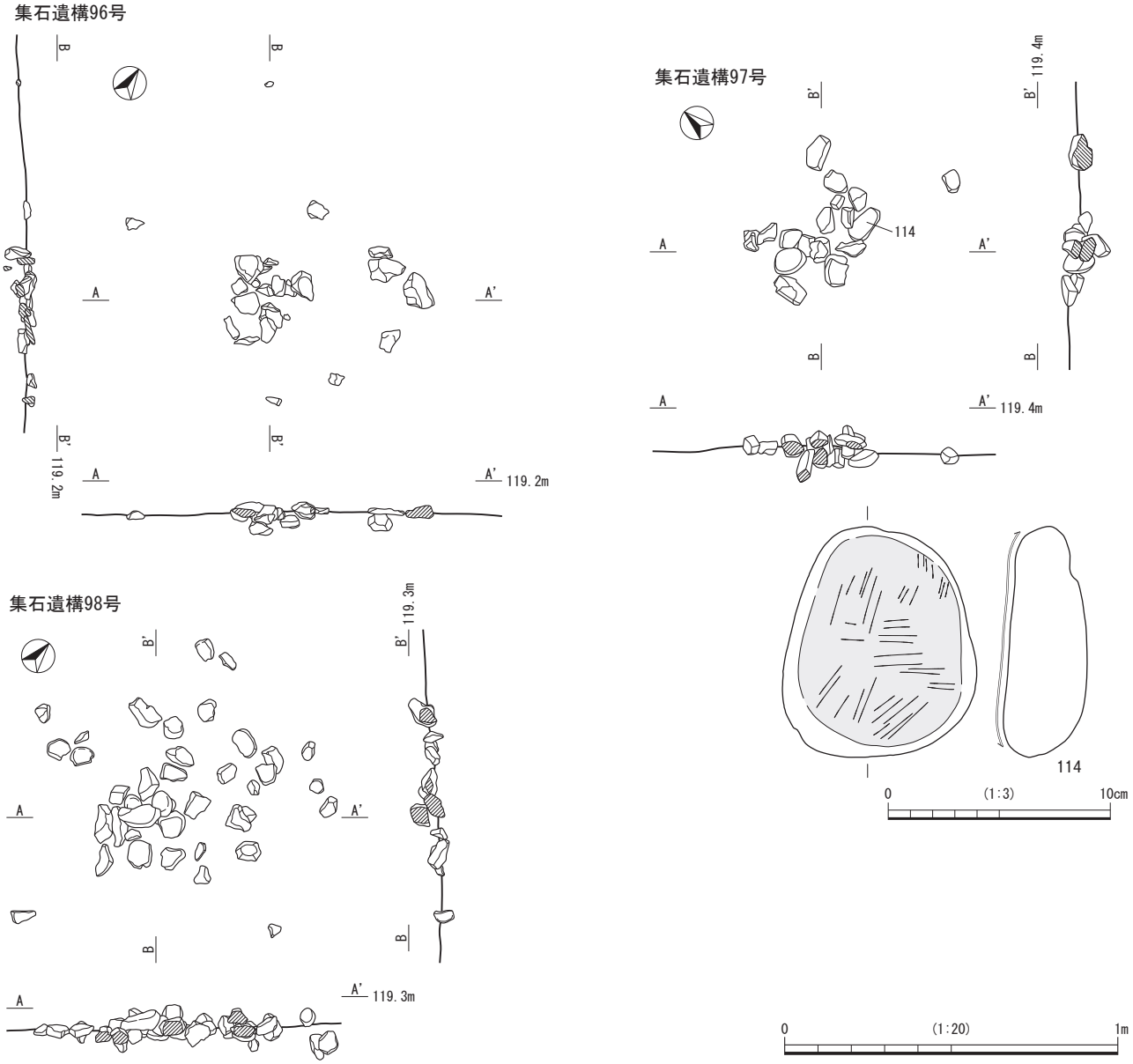
集石遺構98号（SQ98：第195図）

検出状況　F-13区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は40個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.55ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　砂岩が主体で，構成礫全体の60％が熱を受けている。200～300ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。



第195図　集石遺構96号・集石遺構97号・出土遺物・集石遺構98号

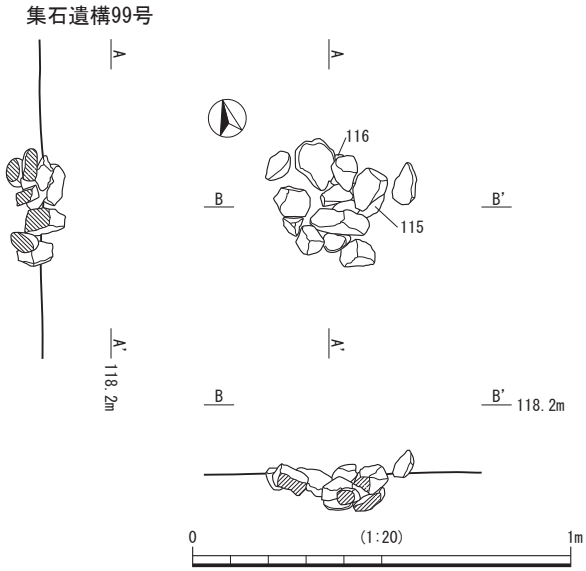
集石遺構99号（SQ99：第196図）

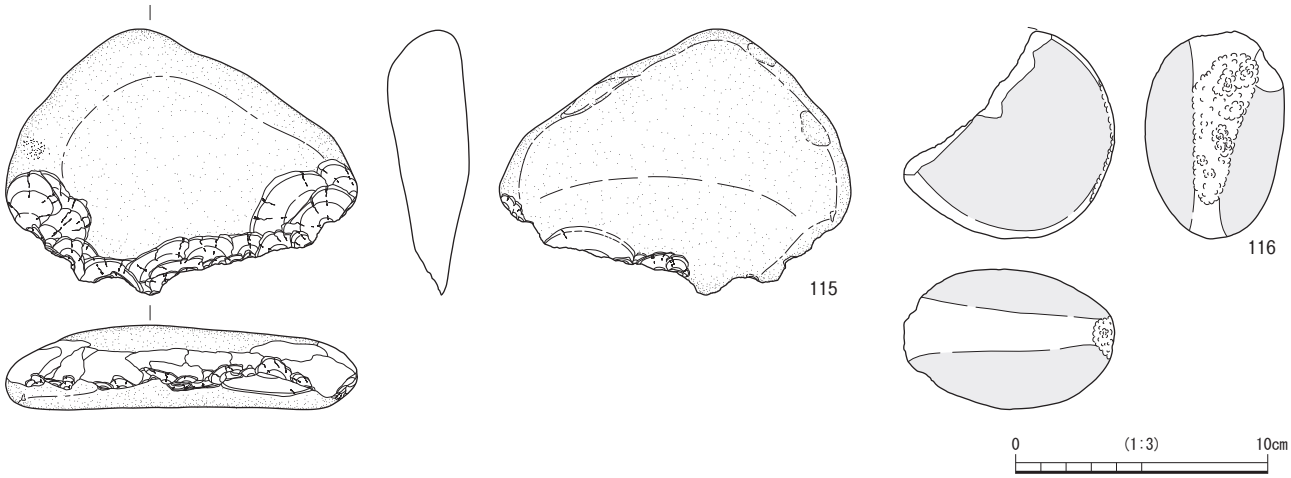
検出状況　B－17区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は15個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.20ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。磨石・敲石類や礫器の転用品も含まれる。115（第196図）はホルンフェルス製の礫器である。扁平な円礫の縁辺を表面側から打ち欠き、片刃の刃部を作り出している。116（第196図）は安山岩製の磨石・敲石類である。左上部が欠損する。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，右側面に敲打痕が認められる。被熱しており全体がやや赤化する。

出土土器　出土していない。





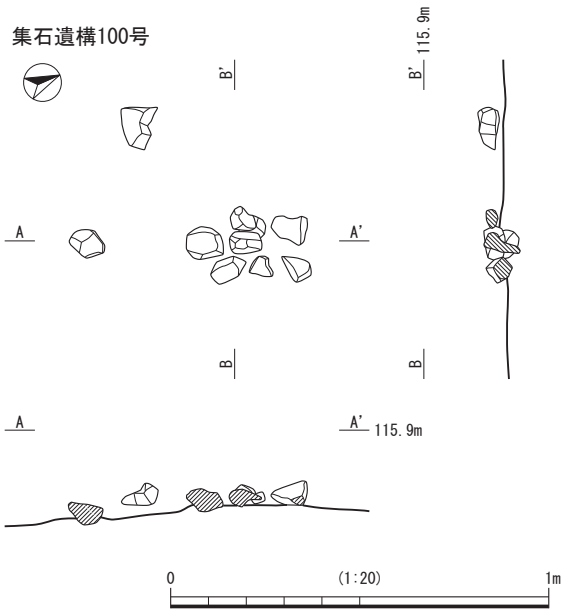
集石遺構100号（SQ100：第196図）

検出状況　E－29区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は10個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，ほとんどの礫が熱を受けている。

出土土器　出土していない。



第196図　集石遺構99号・出土遺物・集石遺構100号

集石遺構101号（SQ101：第197図）

検出状況　F－29区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は22個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径1.30ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約70％が熱を受けている。300 ～ 400ｇの礫が多い。石皿の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

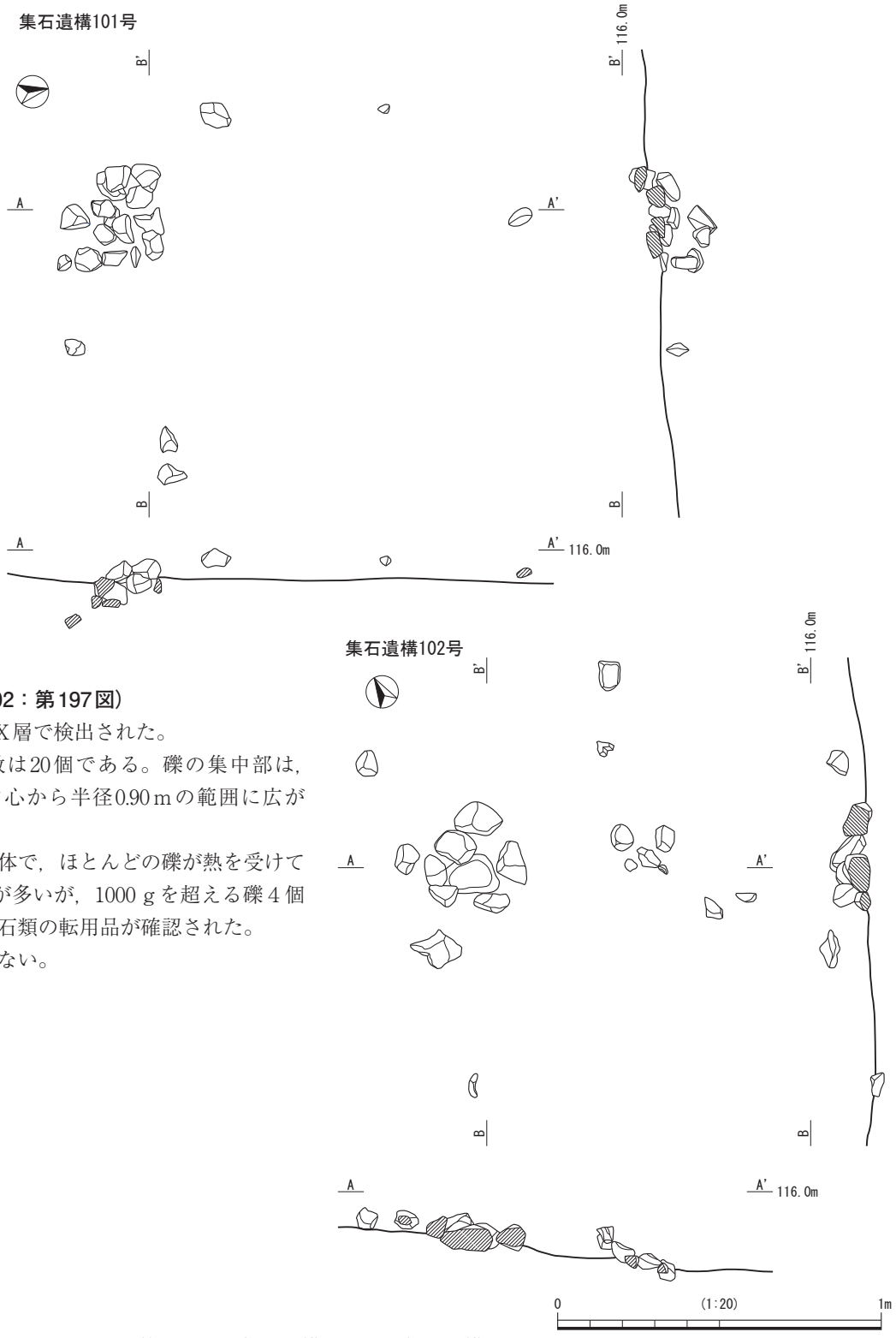
集石遺構102号（SQ102：第197図）

検出状況　D－28区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は20個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.90ｍの範囲に広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，ほとんどの礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫４個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。



第197図　集石遺構101号・集石遺構102号

集石遺構103号（SQ103：第198図）

検出状況　D-25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は26個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.60ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多く，磨石・敲石類や石皿の転用品が確認された。

出土土器　小破片の胴部が２点出土している。２点とも，外面に楕円押型文を斜位に施す。楕円の大きさ，胎土（楕円が小さめの土器片には金雲母が含まれ，大きめの方には金雲母は含まれていない）の違いから同一個体とは言い難い。いずれも図化はしていない。

土器分類　Ⅸ類に該当する。

集石遺構104号（SQ104：第198図）

検出状況　C-26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は42個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径1.10ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約60％が熱を受けている。1000ｇを超える礫３個も含まれる。

出土土器　小破片の胴部が３点出土している。１点は，外面に楕円押型文を斜位に施し，２点は剥落があるが，山形押型文を縦位に施す。この２点は，施文幅，胎土が同様であることから同一個体と思われる。３点ともガラス質鉱物が多く含まれるが，金雲母は含まれていない。いずれも図化はしていない。

土器分類　Ⅸ類に該当する。

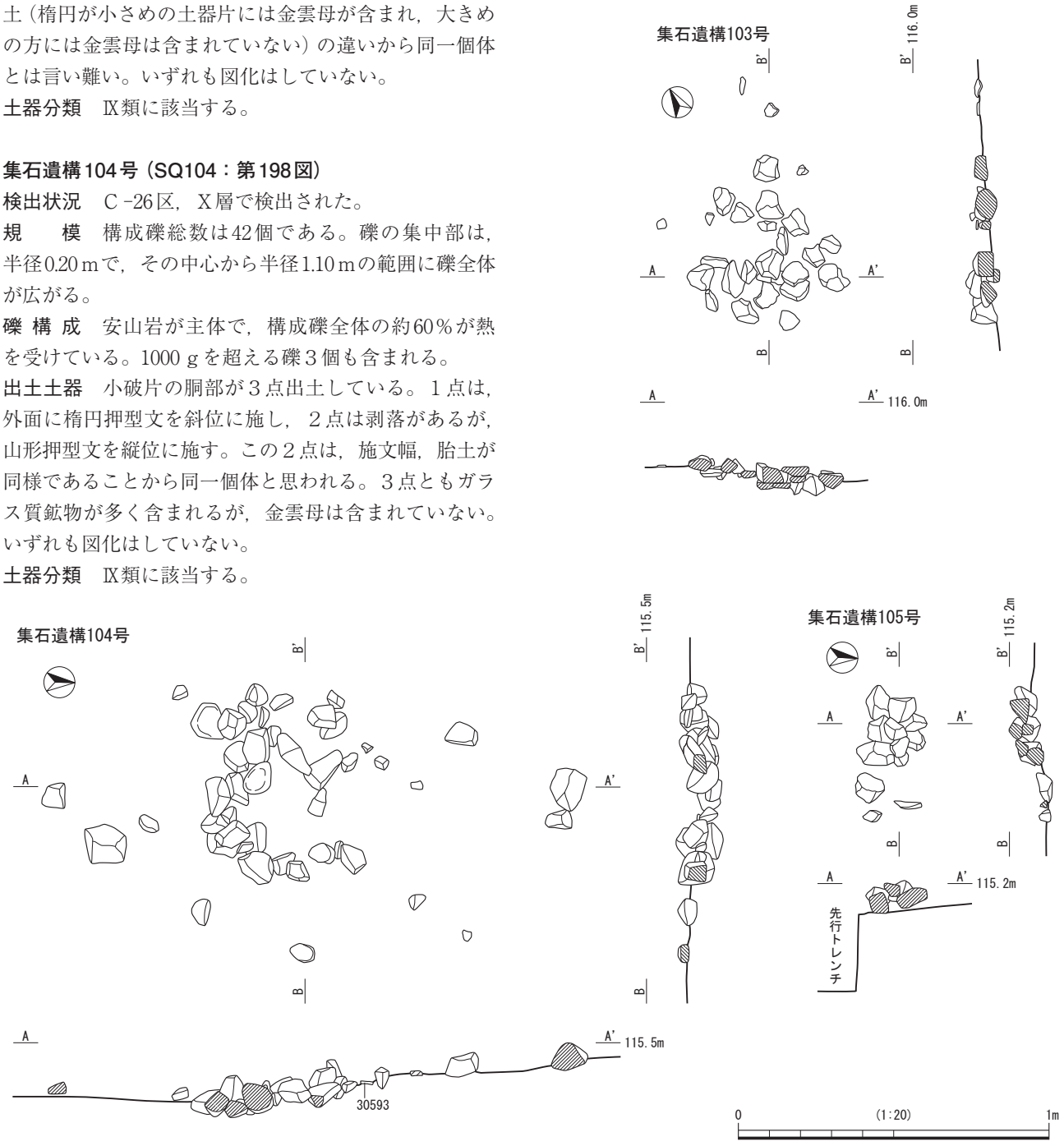
集石遺構105号（SQ105：第198図）

検出状況　B-26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.30ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約60％が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。



第198図　集石遺構103号～ 105号

集石遺構106号（SQ106：第199図）

検出状況　C-20区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は35個である。礫の集中部は，半径0.30ｍで，その中心から半径0.50ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約80％が熱を受けている。100 ～ 200ｇと200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超えている礫３個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構107号（SQ107：第199図）

検出状況　C-20区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は23個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.45ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約80％が熱を受けている。1000ｇを超えている礫４個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構108号（SQ108：第199図）

検出状況　C-26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は5個である。礫は，半径0.15ｍの範囲に集中している。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，ほとんどの礫が熱を受けている。1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。

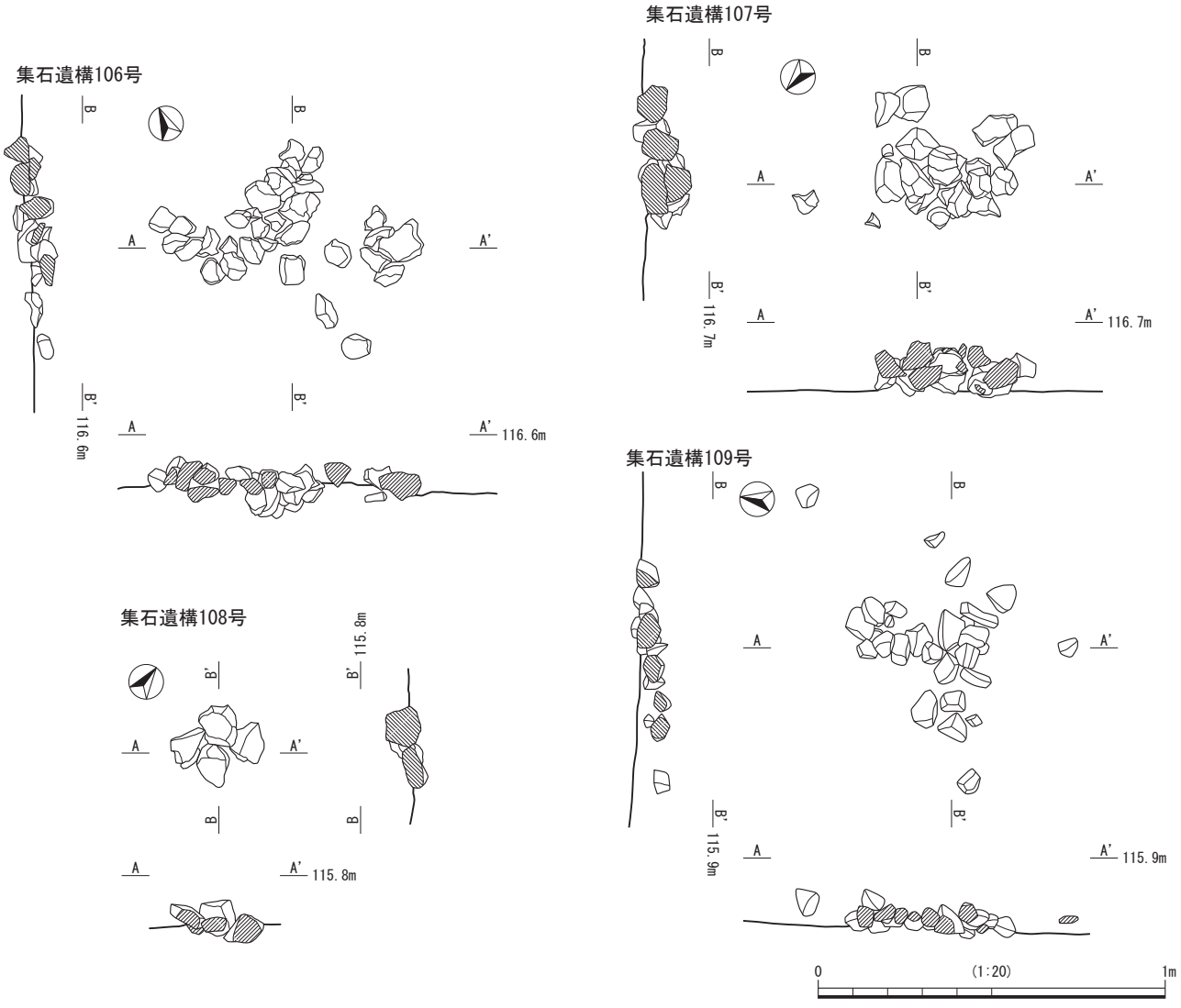
集石遺構109号（SQ109：第199図）

検出状況　D-25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は28個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.55ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　凝灰岩と安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。



第199図　集石遺構106号～ 109号

集石遺構110号（SQ110：第200図）

検出状況　D-25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は36個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径0.80ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約80％が熱を受けている。1000ｇを超える礫６個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

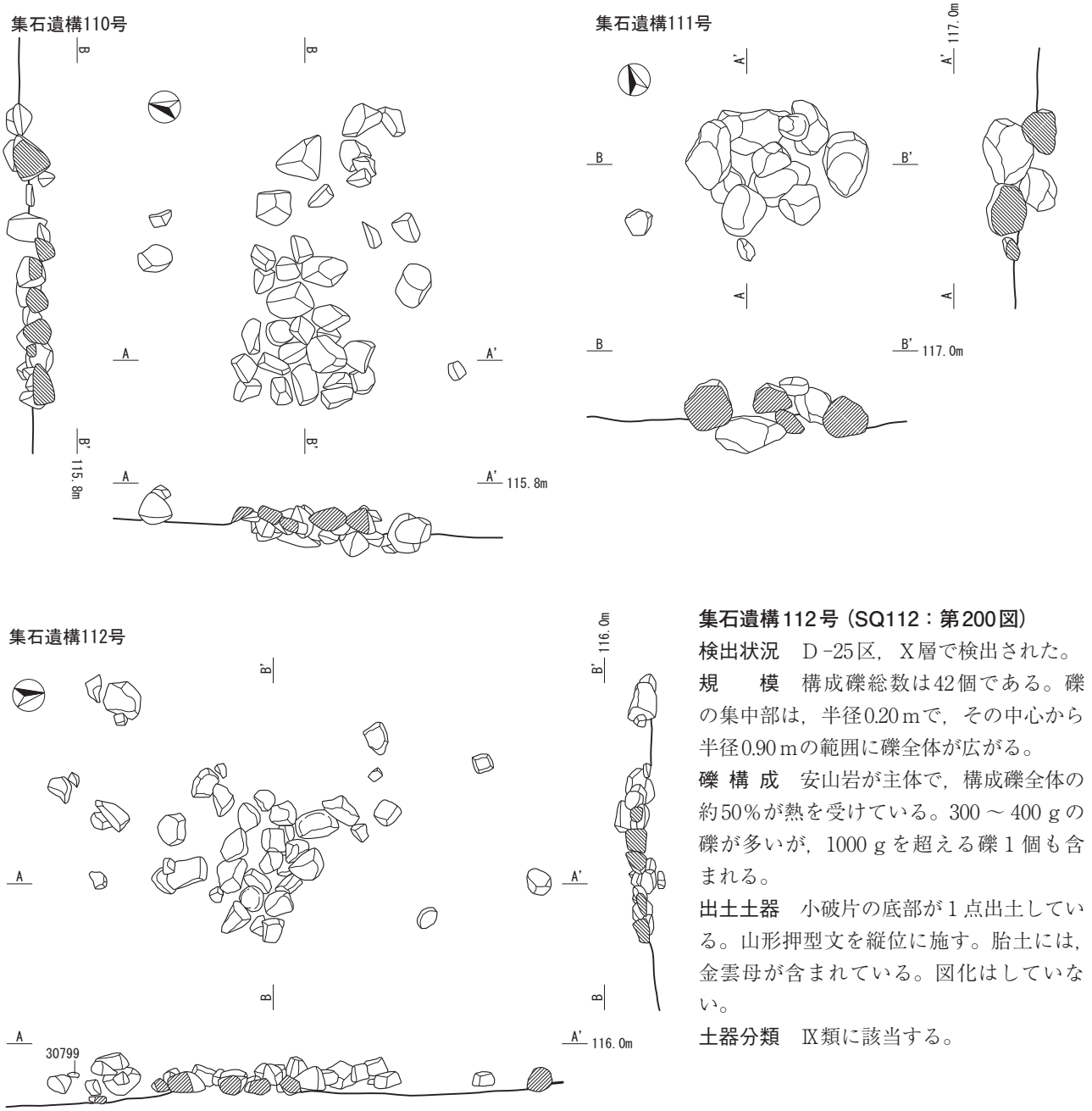
集石遺構111号（SQ111：第200図）

検出状況　C-20区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径0.50ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約70％が熱を受けている。1000ｇを超える礫９個も含まれる。

出土土器　出土していない。



集石遺構112号（SQ112：第200図）

検出状況　D-25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は42個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.90ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。300 ～ 400ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　小破片の底部が１点出土している。山形押型文を縦位に施す。胎土には，金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類　Ⅸ類に該当する。

0　(1:20)　1m

第200図　集石遺構110号～ 112号

集石遺構113号（SQ113：第201図）

検出状況　E－31区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は20個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.40ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

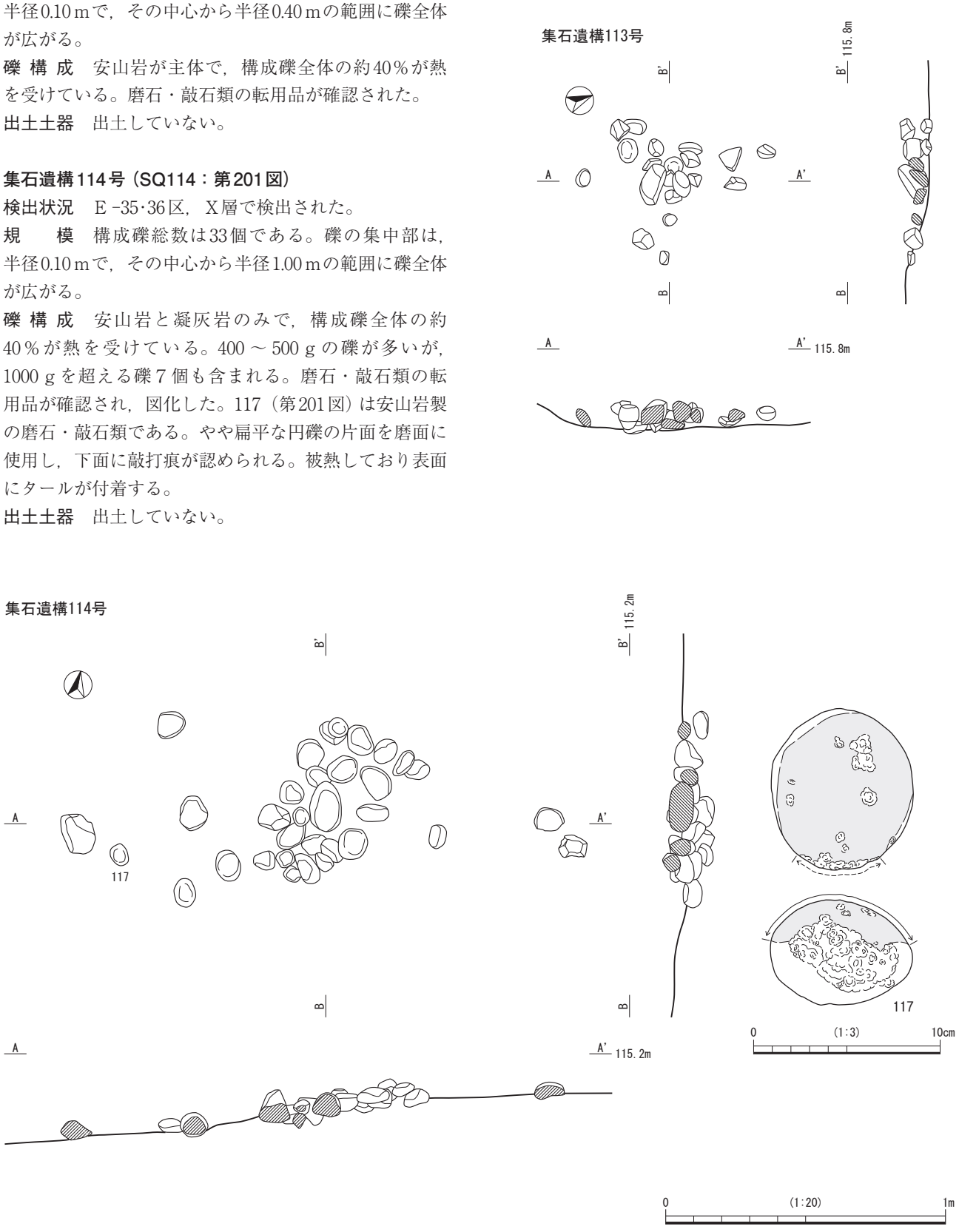
集石遺構114号（SQ114：第201図）

検出状況　E－35･36区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は33個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径1.00ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩のみで，構成礫全体の約40％が熱を受けている。400～500ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫7個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認され，図化した。117（第201図）は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の片面を磨面に使用し，下面に敲打痕が認められる。被熱しており表面にタールが付着する。

出土土器　出土していない。



第201図　集石遺構113号・集石遺構114号・出土遺物

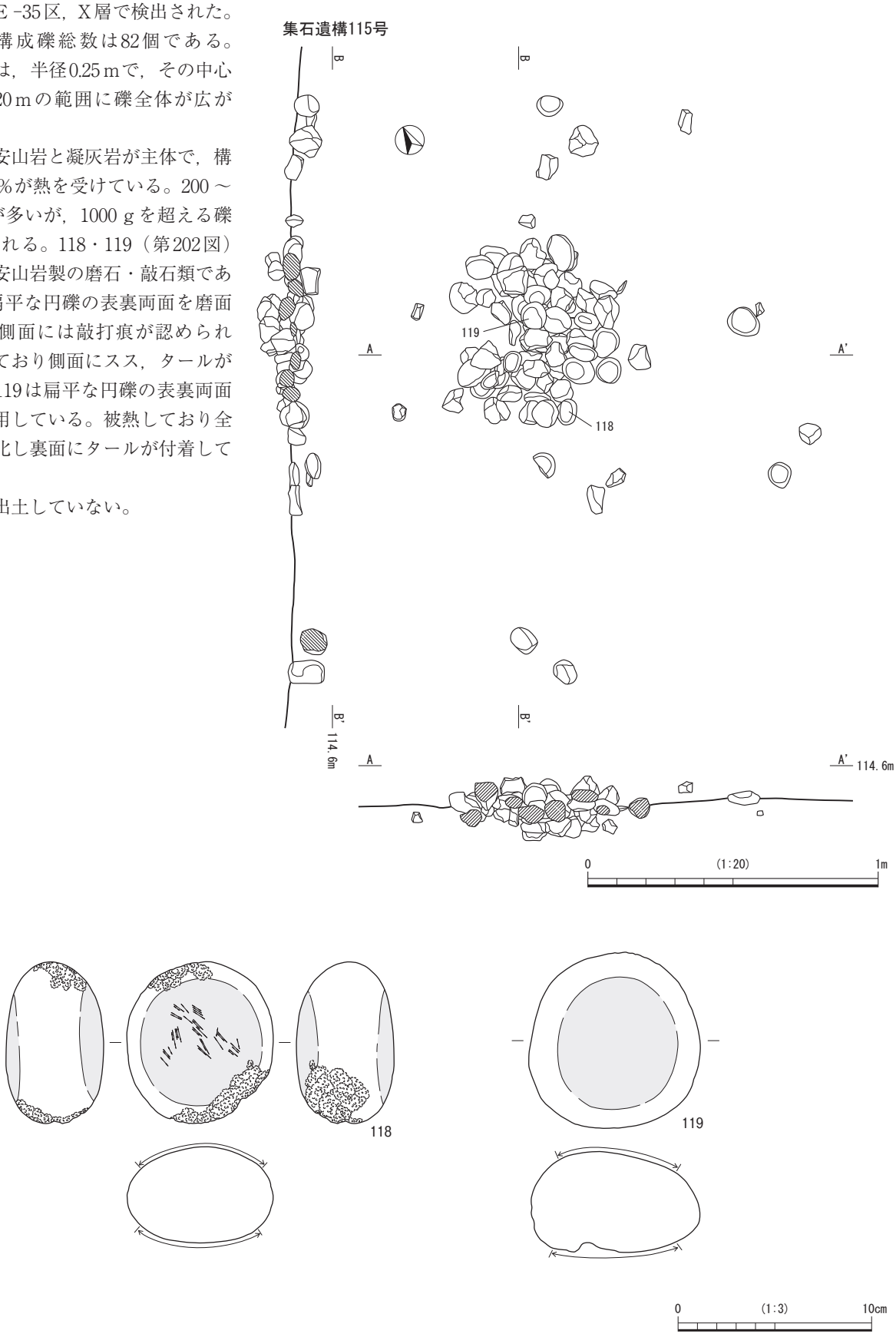
集石遺構115号（SQ115：第202図）

検出状況　E－35区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は82個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径1.20ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫の約30％が熱を受けている。200～300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫４個も含まれる。118・119（第202図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。118は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，側面には敲打痕が認められる。被熱しており側面にスス，タールが付着する。119は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化し裏面にタールが付着している。

出土土器　出土していない。



第202図　集石遺構115号・出土遺物

集石遺構116号（SQ116：第203図）

検出状況　C-28区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は41個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.85ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩，ホルンフェルスが主体で，熱を受けている礫は少ない。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構117号（SQ117：第203図）

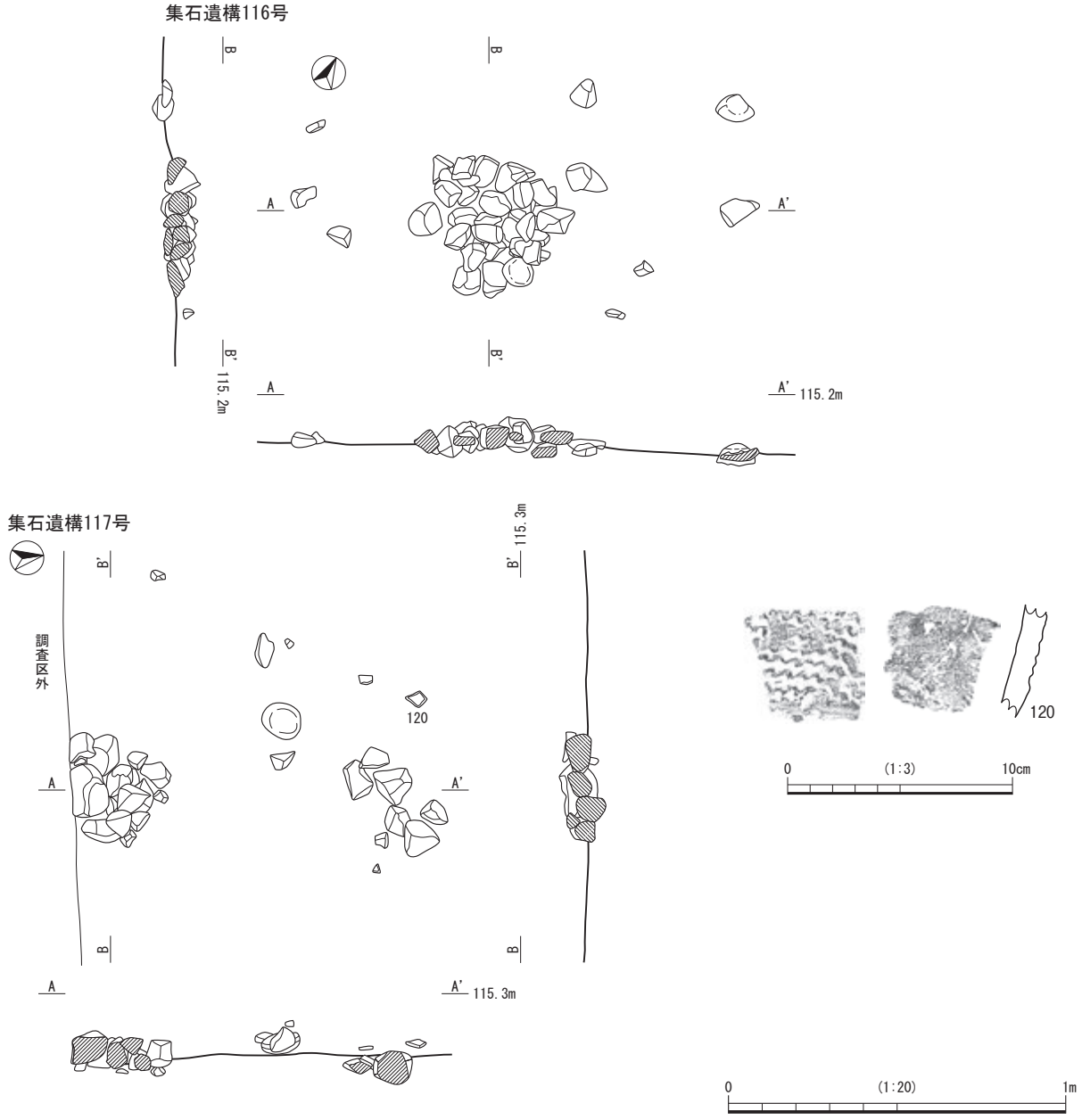
検出状況　C-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は29個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径1.00ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。1000ｇを超える礫３個も含まれる。砥石が含まれる。

出土土器　胴部が３点出土している。そのうち１点を図化した。120（第203図）である。底部に近い胴部で，山形押型文を横位に施す。内面は光沢をやや帯びており，工具によるナデをおこなう。他の２点とも施文方向は不明であるが，１点は幅の狭い山形押型文を施し，もう１点はなだらかな山形押型文を施す。２点とも金雲母が含まれている。３点は，同一個体とは言い難い。

土器分類　３点とも，Ⅸ類に該当する。



第203図　集石遺構116号・集石遺構117号・出土遺物

集石遺構118号（SQ118：第204図）

検出状況　C-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は66個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径2.25ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　胴部が３点，口縁部が１点出土している。そのうち２点を図化した。121・122（第204図）である。121は口縁部で，外面に連珠押型文を横位に施す。口唇部の外面側端部は丸みを帯び，そこから1.5cm程内傾した後，稜をもつ。稜に至る口縁部内面に，文様を施していないが，棒状工具による刺突状の条痕文を施す。内面は，工具によるナデをおこなう。内外面ともに，やや光沢を帯びている。122は，口縁部に近い胴部で，内面上位に，山形押型文を横位に施す。外面にも同一の押型文を横位に施す。121・122は同一個体とは言い難い。残りの胴部のうち１点は，山形押型文を横位に施すが，121・122と同一個体とは言い難い。また，被熱によると思われる剥落が著しい。もう１点は，底部付近の胴部と思われる。貝殻による斜位条痕文を上位に，横位条痕文をその下位に施す。図化していない胴部２点とも，胎土には金雲母は含まれていない。

土器分類　121・122はⅨ類に，図化していない山形押型文の胴部もⅨ類に，斜位条痕文を施す胴部はⅣ類に該当する。

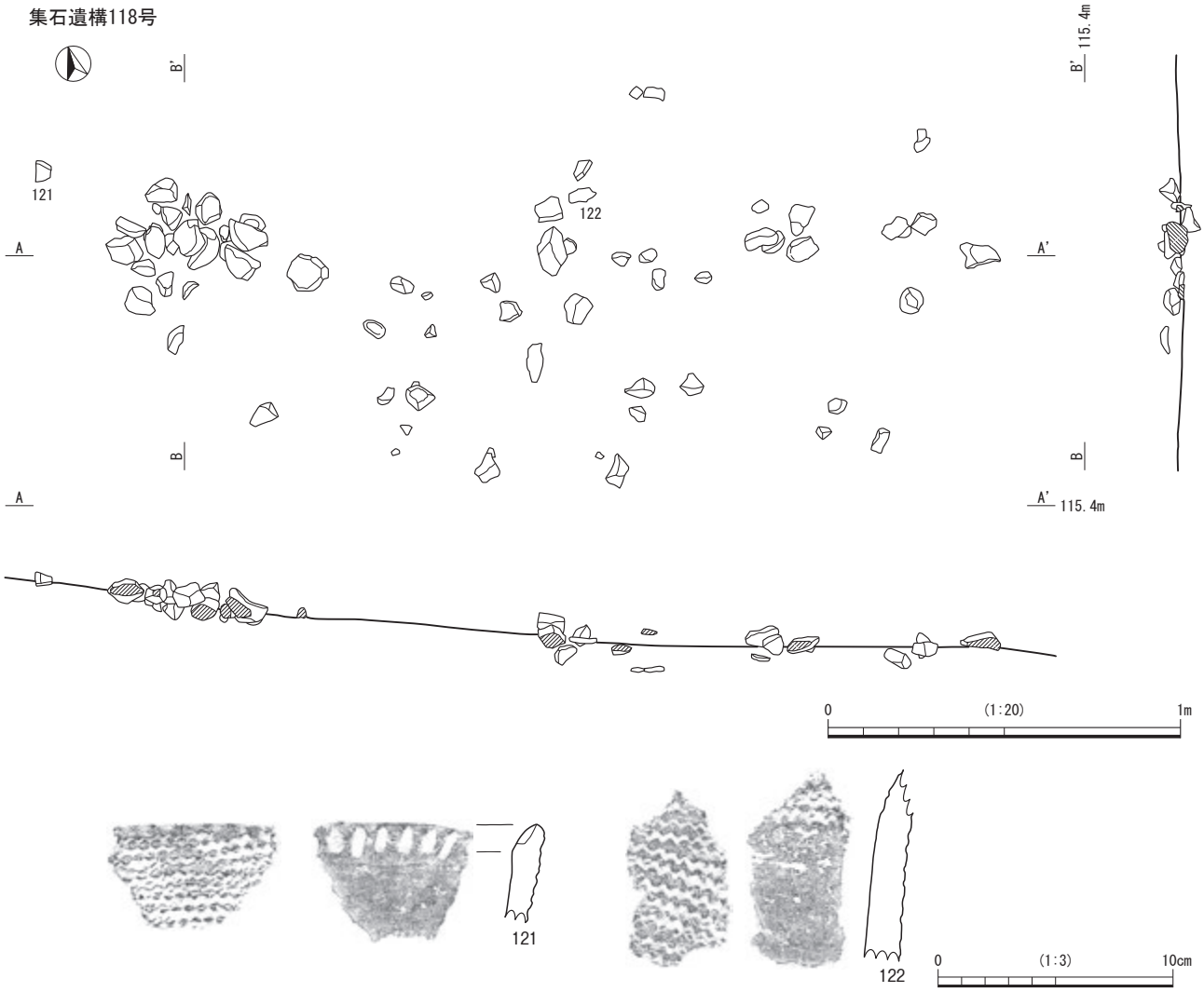
集石遺構119号（SQ119：第205図）

検出状況　C-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.60ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は１個しか確認できなかった。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第204図　集石遺構118号・出土遺物

集石遺構120号（SQ120：第205図）

検出状況　C-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は43個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.75ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構121号（SQ121：第205図）

検出状況　K-50区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は11個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.35ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルス，砂岩で構成され，構成礫の約40％が熱を受けている。123（第205図）は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の片面

第205図　集石遺構119号～ 121号・出土遺物

を磨面に使用し，側面と裏面側縁に敲打痕が認められる。

出土土器　小破片の胴部が２点出土している。１点には，外面調整に貝殻条痕が，内面にはナデをおこなう。もう１点は，小さめの楕円押型文を施す。２点とも胎土には，金雲母が含まれている。いずれも図化はしていない。

土器分類　前者はⅣ類に，後者はⅨ類に該当する。

集石遺構122号（SQ122：第206図）

検出状況　Ｊ-51区，Ｘ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.40ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。700 ～ 800ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫５個も含まれる。124（第206図）は凝灰岩製の石皿である。破片資料で扁平な石の片面を使用している。側面にも磨痕が認められる。被熱しており側面から欠損部にかけてスス，タールが付着する。

出土土器　胴部から底部が１点出土し，図化した。125（第206図）である。125の底部外面及び胴部外面は，やや光沢を帯びている。胴部外面は，工具による短沈線文を斜位に施す。底面は，平底である。

土器分類　Ⅵ類に該当する。

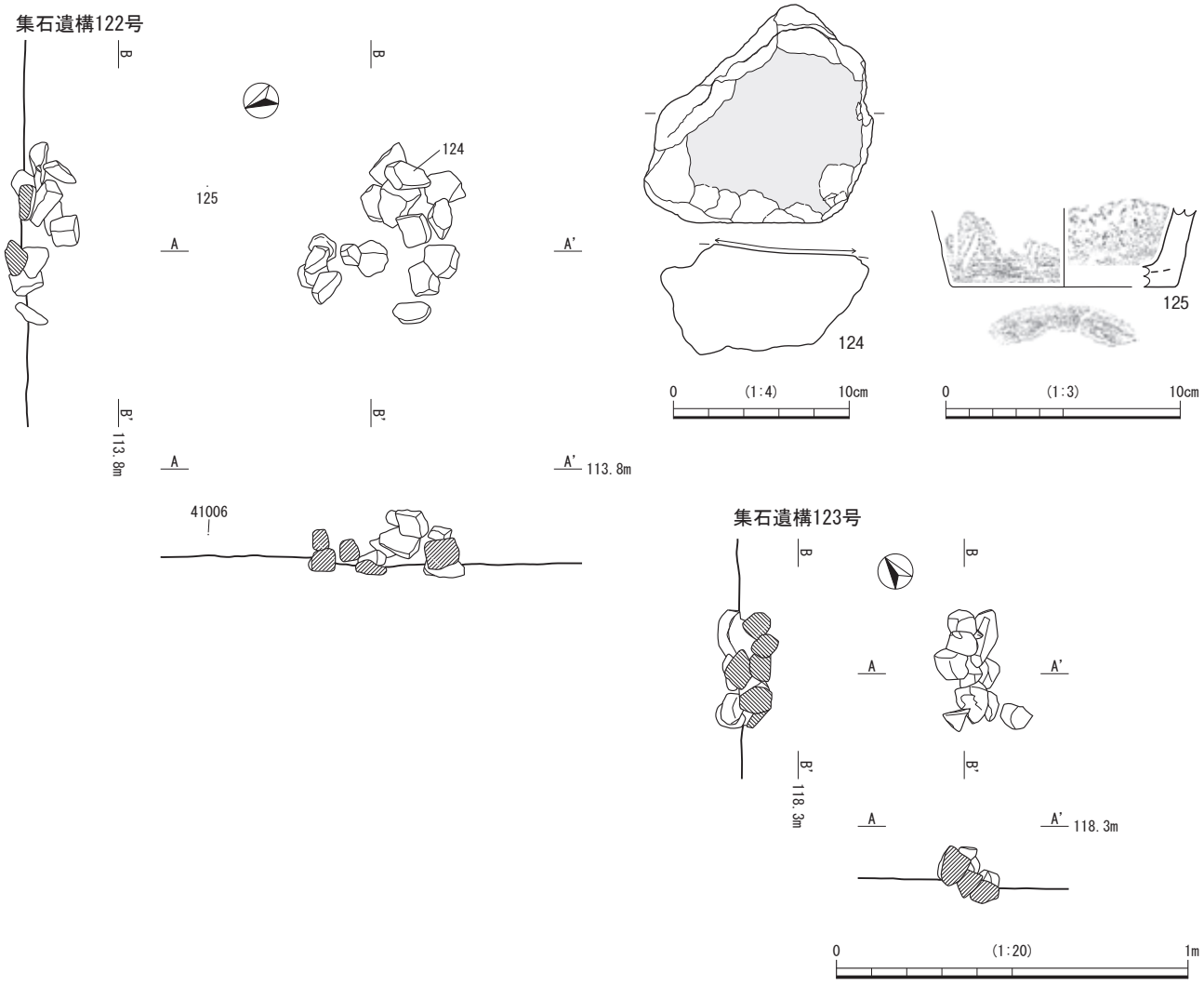
集石遺構123号（SQ123：第206図）

検出状況　Ｆ-18区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は10個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.20ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，構成礫全体の約40％が，熱を受けている。300 ～ 600ｇの礫が多いが，1000 ～ 1500ｇの礫１個も含まれる。

出土土器　出土しているが小破片のため不明である。



第206図　集石遺構122号・出土遺物・集石遺構123号

集石遺構124号（SQ124：第207図）

検出状況　D－30区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は16個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.30ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，熱を受けている礫は少ない。200 ～ 300ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構125号（SQ125：第207図）

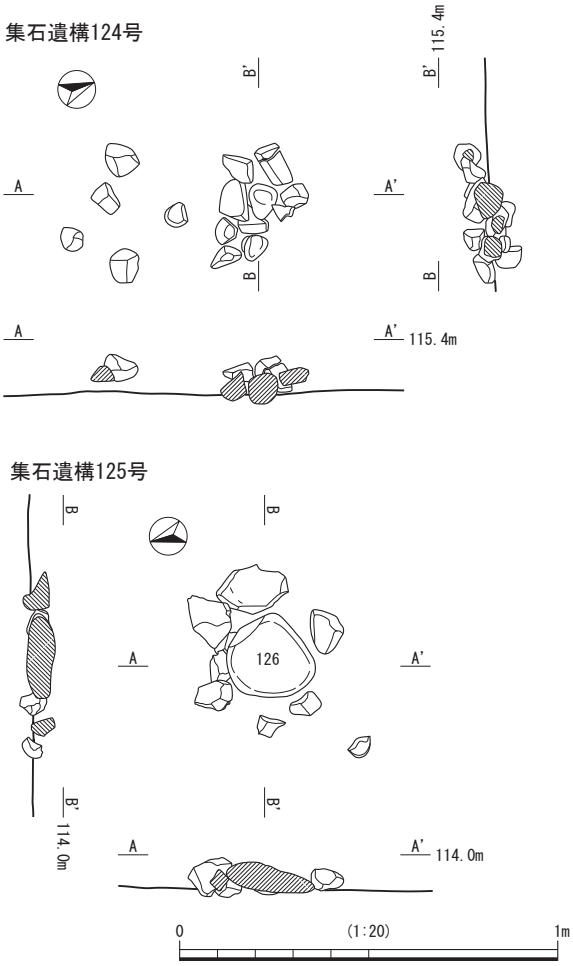
検出状況　H－45区，XI層で検出された。

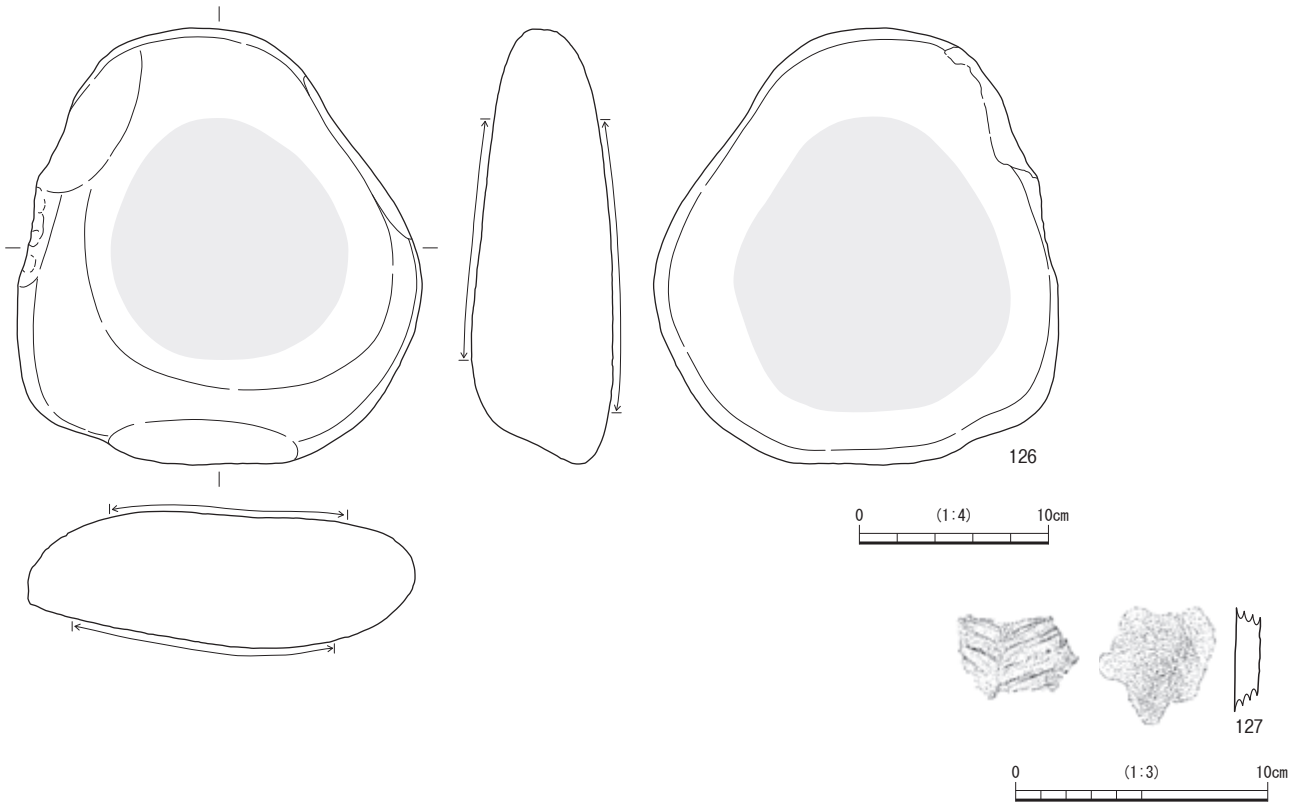
規　　模　構成礫総数は10個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.40ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。126（第207図）は安山岩製の石皿である。扁平な石の表裏中央を使用面としている。裏面に強い被熱痕が認められススが付着する。

出土土器　胴部が１点出土し，図化した。127（第207図）である。127は，外面に綾杉状の条痕文を施す。内面には，貝殻による調整と指によるナデをおこなう。

土器分類　Ⅳ類に該当する。





第207図　集石遺構124号・集石遺構125号・出土遺物

集石遺構126号（SQ126：第208図）

検出状況　A・B－13区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.45ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩のみで，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が半数を占める。

出土土器　出土していない。

集石遺構127号（SQ127：第208図）

検出状況　C－15区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は38個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.45ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000 ～ 1500ｇの礫３個も含まれる。

出土土器　出土していない。

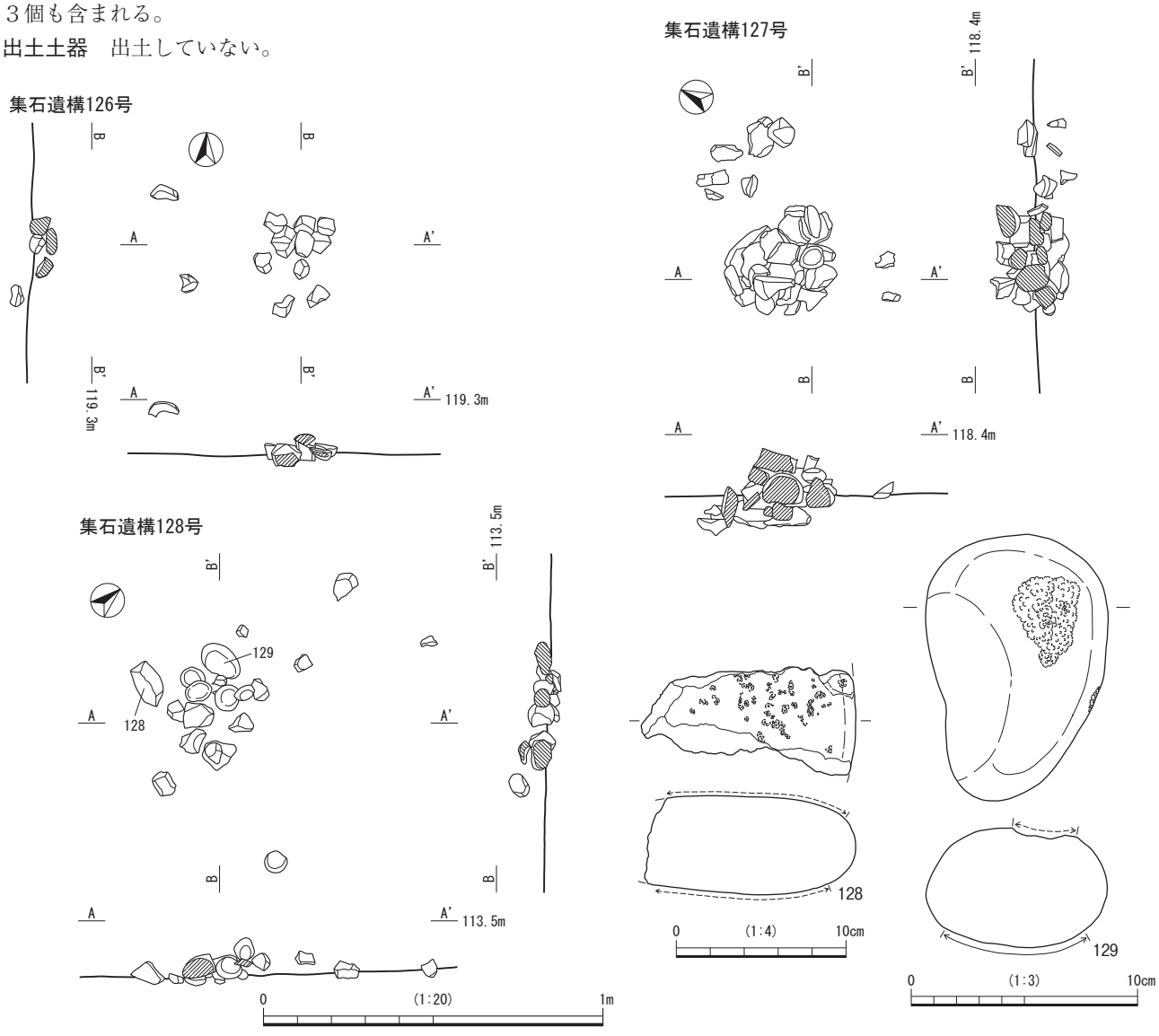
集石遺構128号（SQ128：第208図）

検出状況　Ⅰ－52区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.65ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。128（第208図）は破片資料であるが，表裏両面に細かい敲打痕が確認できたため台石とした。被熱しており全体にススが付着する。安山岩製である。129（第208図）はホルンフェルス製の磨石・敲石類である。やや不整形で扁平な円礫の裏面を磨面に使用し，表面には敲打痕が認められる。被熱しており全体がやや赤化し，裏面から側面にかけてススが付着する。

出土土器　出土していない。



第208図　集石遺構126号～ 128号・出土遺物

集石遺構129号（SQ129：第209図）

検出状況　Ｅ-18区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は28個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.70ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ホルンフェルスと安山岩が主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構130号（SQ130：第209図）

検出状況　Ｆ-40区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は34個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.70ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　構成礫は安山岩とホルンフェルスが多く，構成礫の約60％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

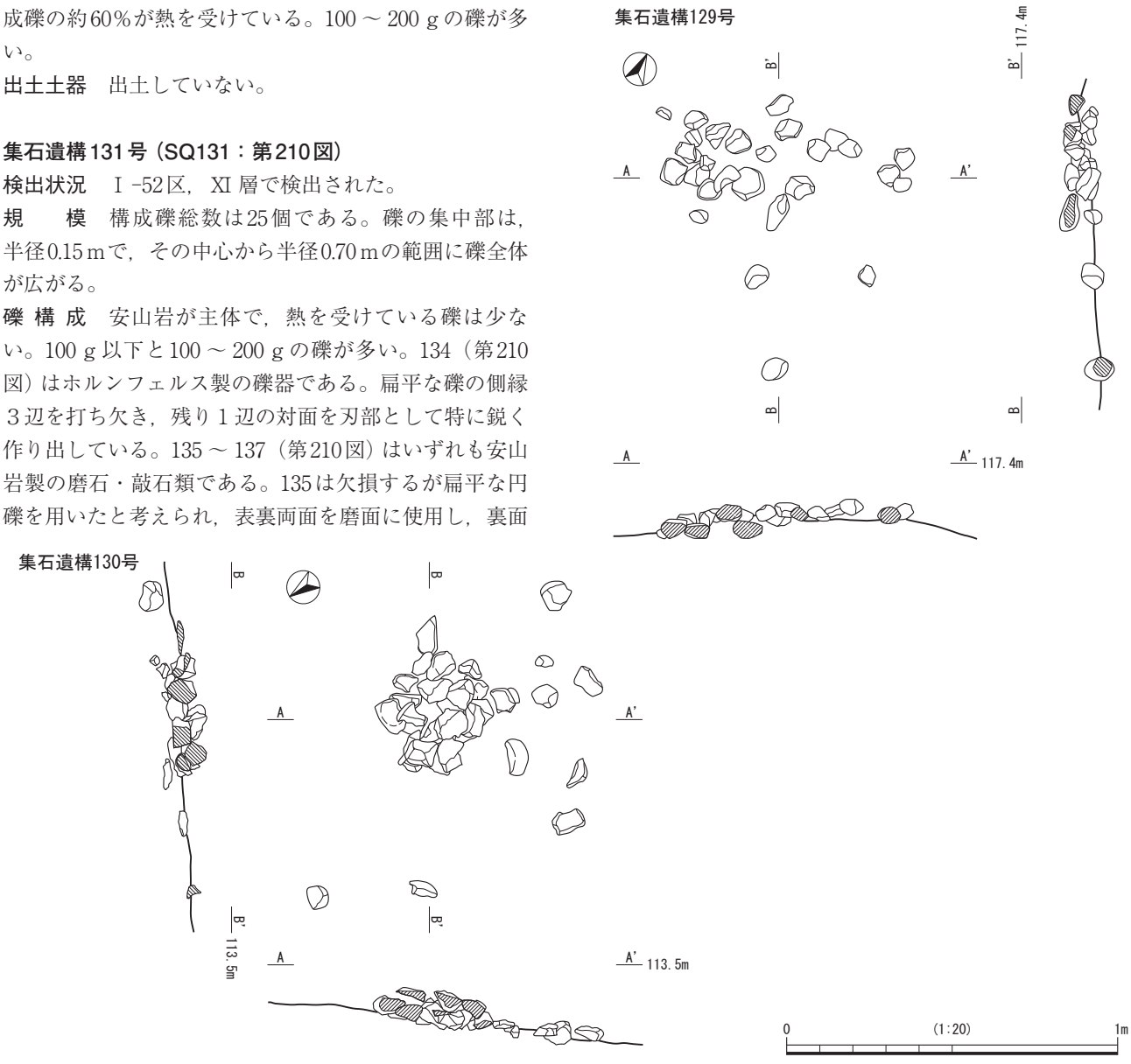
集石遺構131号（SQ131：第210図）

検出状況　Ｉ-52区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は25個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.70ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下と100 ～ 200ｇの礫が多い。134（第210図）はホルンフェルス製の礫器である。扁平な礫の側縁３辺を打ち欠き，残り１辺の対面を刃部として特に鋭く作り出している。135 ～ 137（第210図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。135は欠損するが扁平な円礫を用いたと考えられ，表裏両面を磨面に使用し，裏面から側面にかけて敲打痕が認められる。被熱のため全体が赤化し，欠損部にタールが付着する。136は下半分を欠損する。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体に薄くススが付着する。137はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。被熱しており上下側面の敲打範囲にススが付着する。

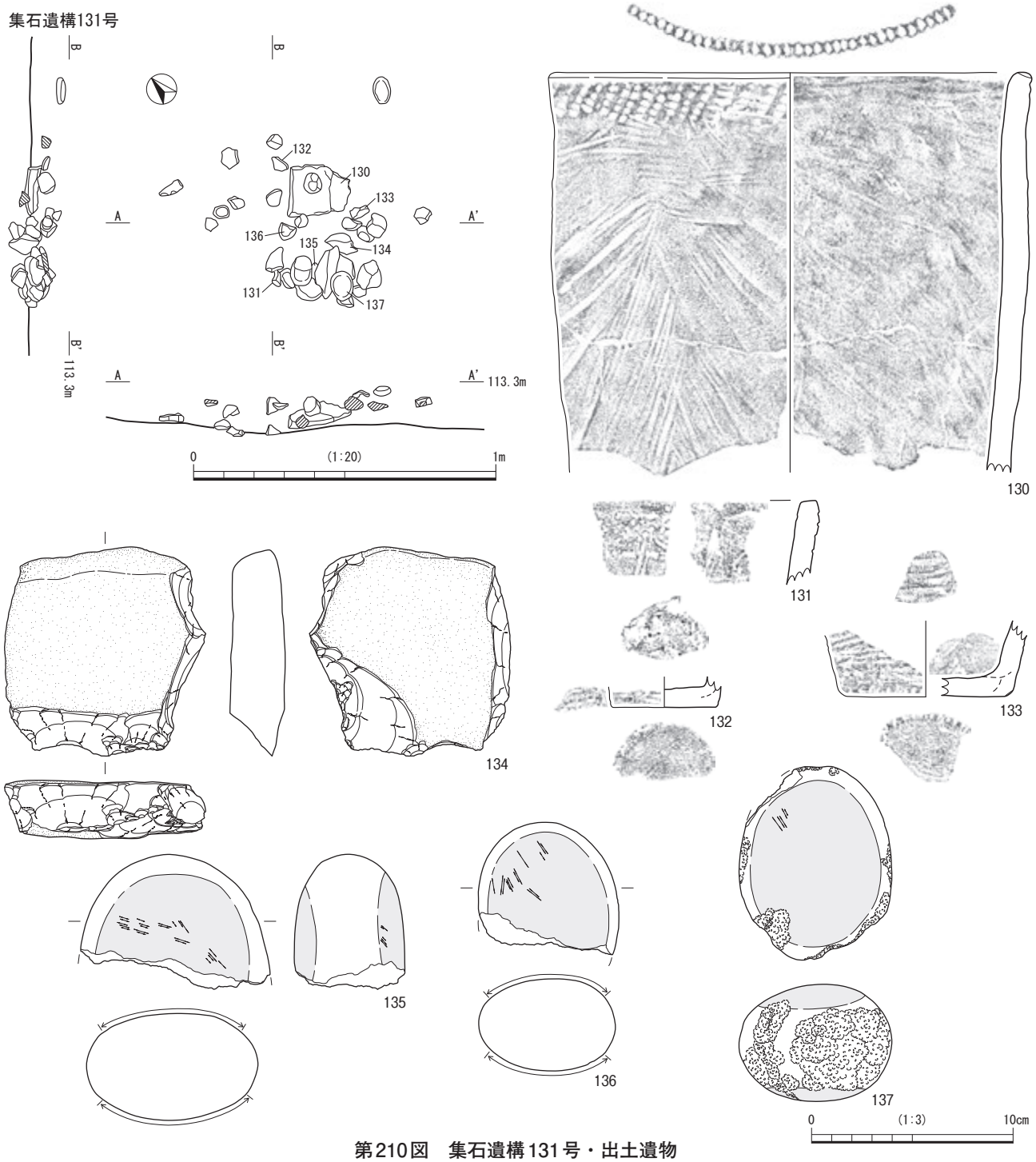
出土土器　口縁部が２点，胴部が２点，底部が３点出土している。そのうち４点を図化した。130 ～ 133（第210図）である。130は，直行する口縁部で，口縁部外面には，斜位貝殻刺突文を施し，その直下に，ランダムな貝殻条痕文を施し，その下位に，綾杉状の条痕文を施す。綾杉状の条痕文は，鋭いもの・太いものと規則性が見られない。口唇部は，貝殻にと思われる刺突状のキザ



第209図　集石遺構129号・集石遺構130号

ミを施す。内面は，貝殻によるナデをおこなう。内外面とも，多少凹凸している。131も，直行する口縁部である。口縁部外面上位に，１条の横位刺突文を施し，その下位に斜位刺突文を施し，その下位に再度横位刺突文を施す。斜位刺突文部分に数条の貝殻条痕文を確認できることから，刺突文より先に施すことが分かる。132・133は，平底の底部である。２点とも底面は，光沢を帯びている。132は，底部外面端部近くまで横位条痕文を施し，内面に指おさえによる調整が確認できる。133は，底部外面端部にキザミを施し，その上位には横位や斜位条痕文を施す。また，底部内面には貝殻による調整を確認できる。図化していないもう１点の底部外面端部にキザミはないが，横位条痕文を施す。胎土には，金雲母は含まれていない。胎土や調整等から，底部３点は同一個体とは言い難い。２点の胴部は，いずれも綾杉状の貝殻条痕文を施す。１点には金雲母が含まれ，もう１点には金雲母は含まれていないことからも，胴部２点が同一個体とは言い難い。

土器分類　いずれの土器も，Ⅳ類に該当する。



第210図　集石遺構131号・出土遺物

集石遺構132号（SQ132：第211図）

検出状況　D－14区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は32個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.75ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。138（第211図）は安山岩製の凹基無茎鏃である。平面形は二等辺三角形状を呈し，基部は両脚を欠損するがやや深い抉りをもつと考えられる。

出土土器　出土していない。

集石遺構133号（SQ133：第211図）

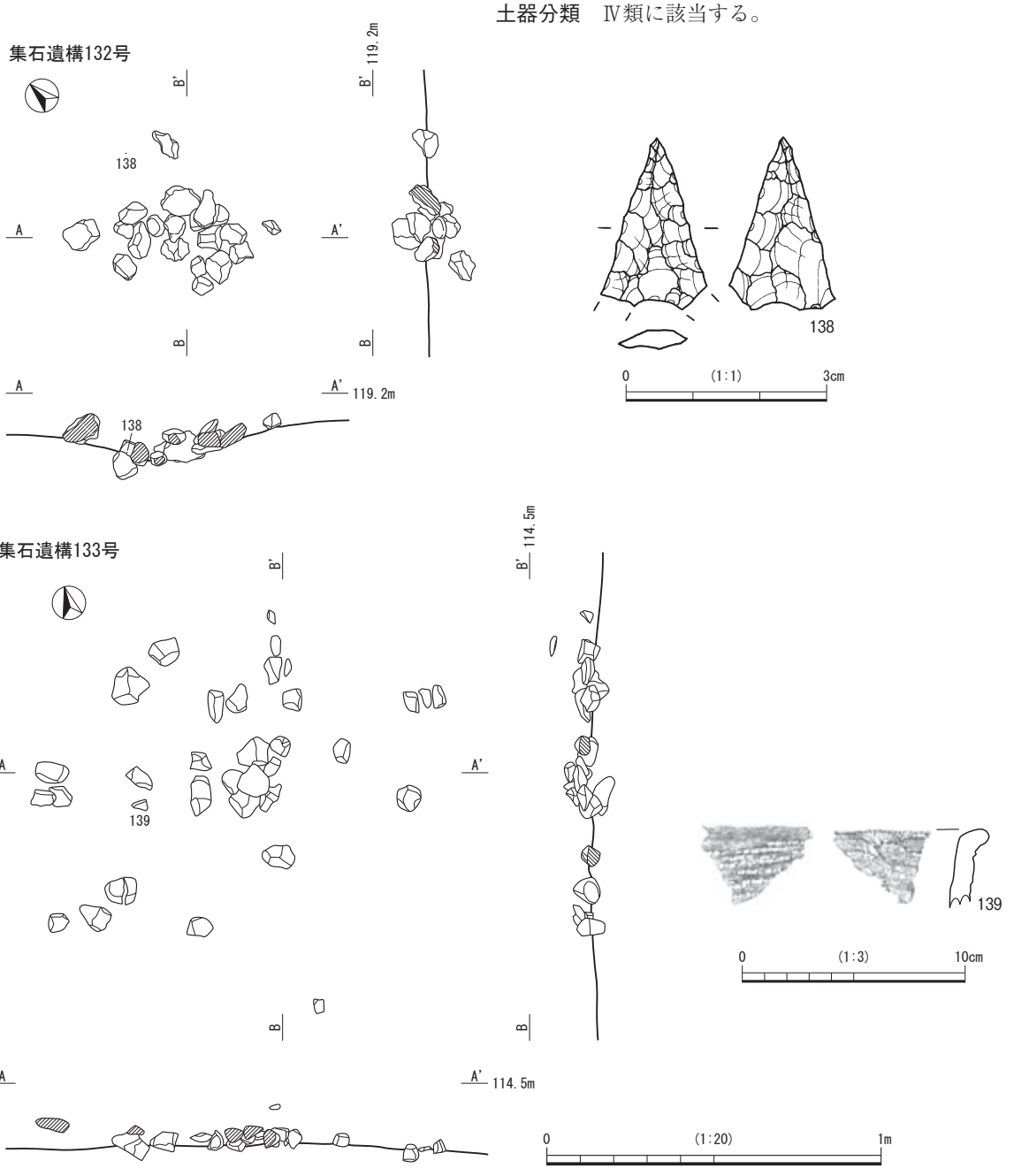
検出状況　F－35区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は32個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.75ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成全体礫の約10％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　口縁部が1点出土し，図化した。139（第211図）である。口縁端部が外反する口縁部上位には文様はなく，下位に横位刺突文を施す。口唇部に文様をもたない。内面は，工具によるナデをおこなう。

土器分類　Ⅳ類に該当する。



第211図　集石遺構132号・出土遺物・集石遺構133号・出土遺物

集石遺構134号（SQ134：第212図）

検出状況　C-27･28区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.75ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は１個しか確認できなかった。900 ～ 1000ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　胴部が１点出土し，図化した。140（第212図）である。外面に山形押型文を横位や斜位に施す。内面は，指ナデをおこなう。

土器分類　Ⅸ類に該当する。

集石遺構135号（SQ135：第212図）

検出状況　D-30区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は18個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.75ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。300 ～ 400ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。

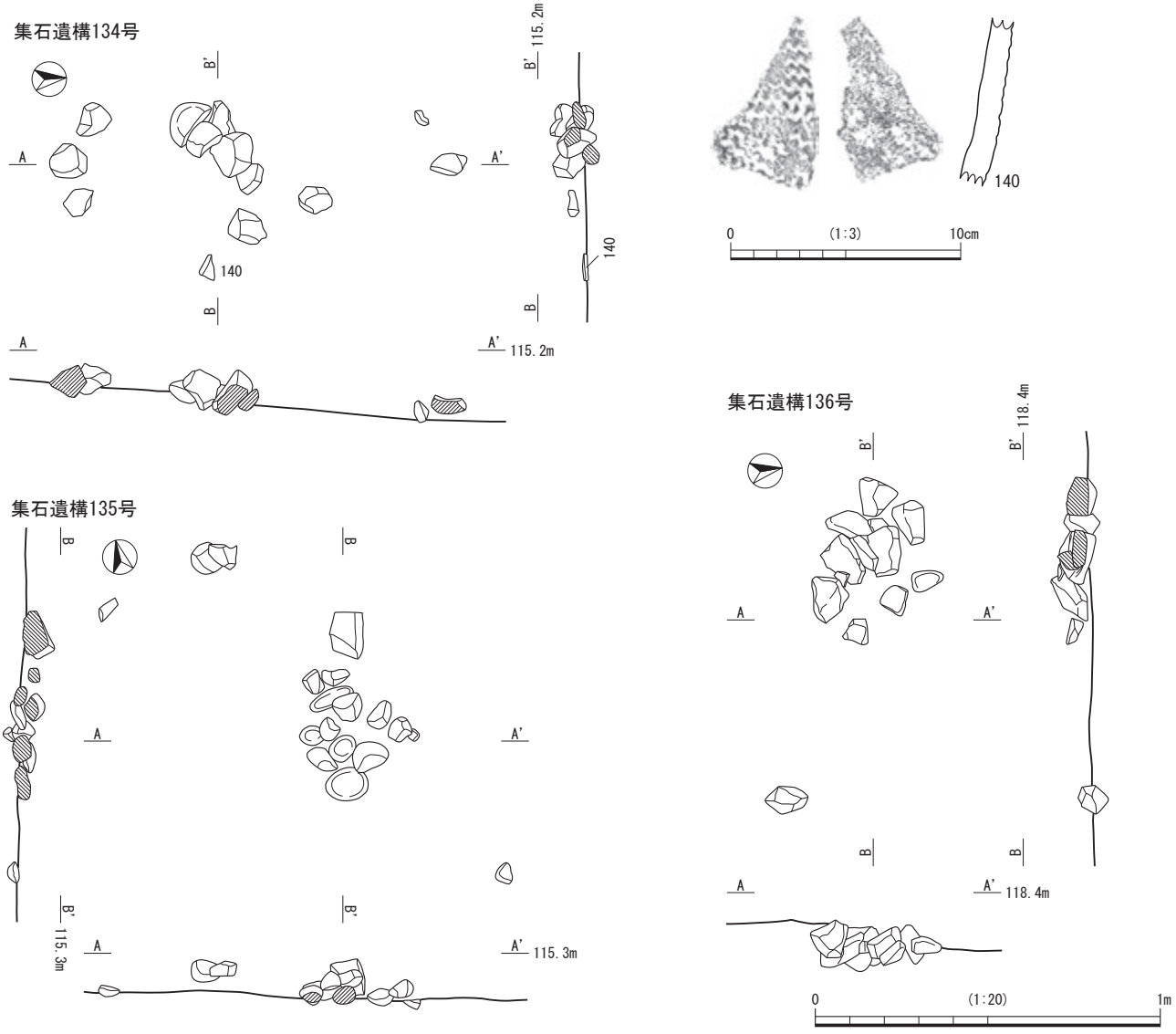
集石遺構136号（SQ136：第212図）

検出状況　F-15区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は13個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.80ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が，熱を受けている。1000 ～ 1500ｇの礫１個，1500 ～ 2000ｇの礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第212図　集石遺構134号・出土遺物・集石遺構135号・集石遺構136号

集石遺構137号（SQ137：第213図）

検出状況　D－15区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は26個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.85ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約60％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多く，磨石・敲石類の転用品が確認された。141（第213図）は安山岩製の磨石・敲石類である。欠損するが元は扁平な円礫と考えられ、表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体にススが付着する。

出土土器　出土していない。

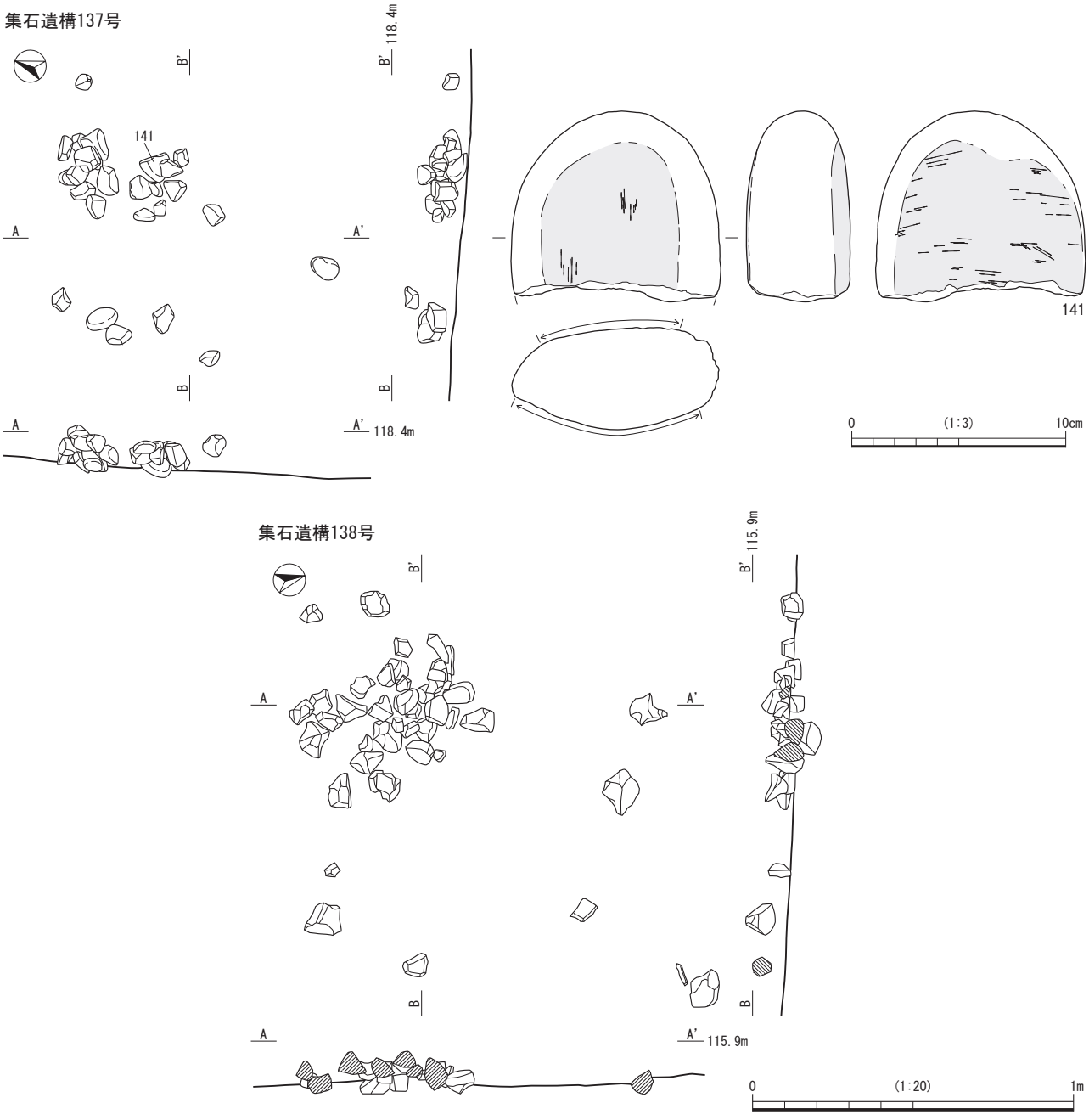
集石遺構138号（SQ138：第213図）

検出状況　D－24区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は43個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.90ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ほぼ凝灰岩で，ほとんどの礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫５個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。



第213図　集石遺構137号・出土遺物・集石遺構138号

集石遺構139号（SQ139：第214図）

検出状況　F-39区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は21個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.95ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約80％が熱を受けている。142（第214図）は花崗岩製の石皿である。破片資料であるが扁平な石の表裏を使用していると考えられる。被熱しており表面にタールが付着する。

出土土器　出土していない。

集石遺構140号（SQ140：第214図）

検出状況　Ⅰ-48区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は33個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径1.00ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100 ～ 200ｇと200 ～ 300ｇの礫が多い。

出土土器　小破片の胴部が２点出土している。胴部の１点は，綾杉状に貝殻条痕文を施し，その下位には横位条痕文がわずかに確認できる。横位条痕文を綾杉状の貝殻条痕文が切っていることから，横位条痕文を先に施す。もう１点の外面は摩滅が激しく，明確な型式の判断はできなかった。２点とも金雲母は含まれていないが，器壁の厚みや胎土の違いから同一個体の可能性は低い。いずれも図化はしていない。

土器分類　前者は，Ⅳ類に該当する。

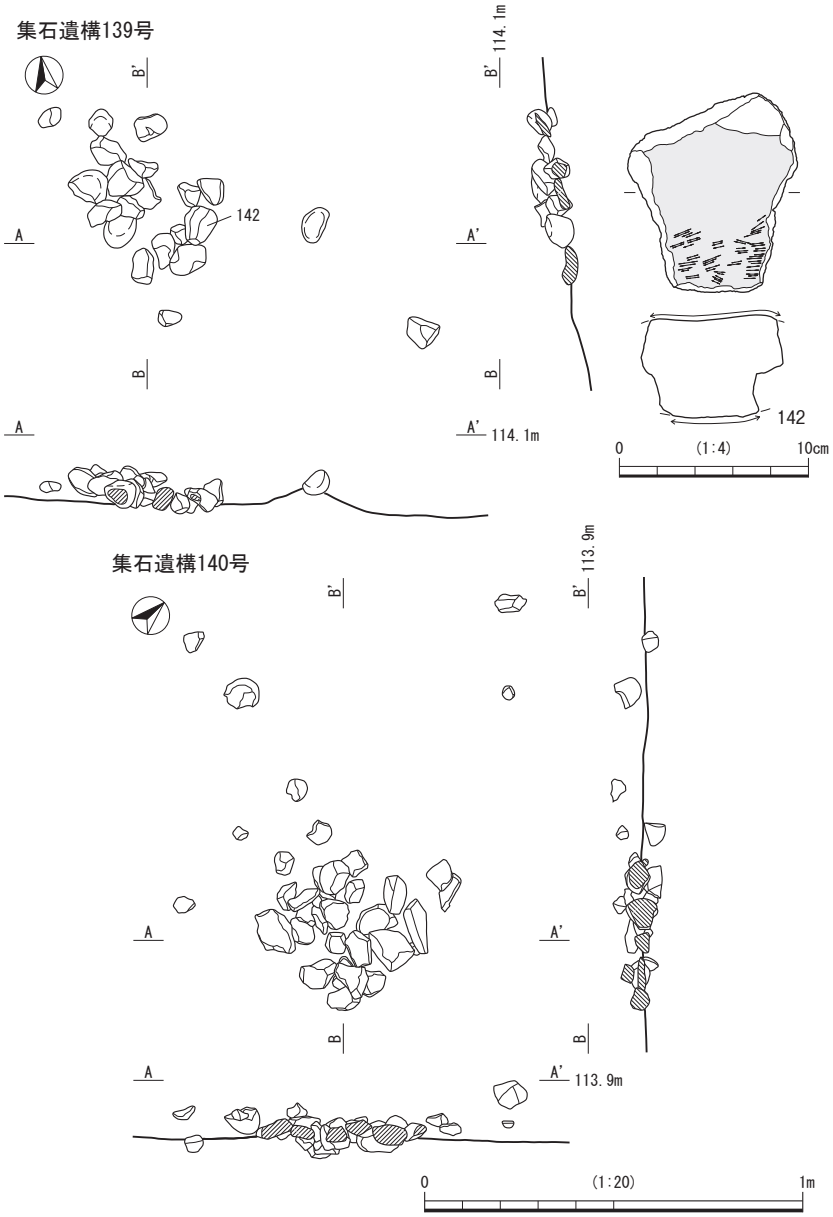
集石遺構141号（SQ141：第215図）

検出状況　J-49区，XI層で検出された。

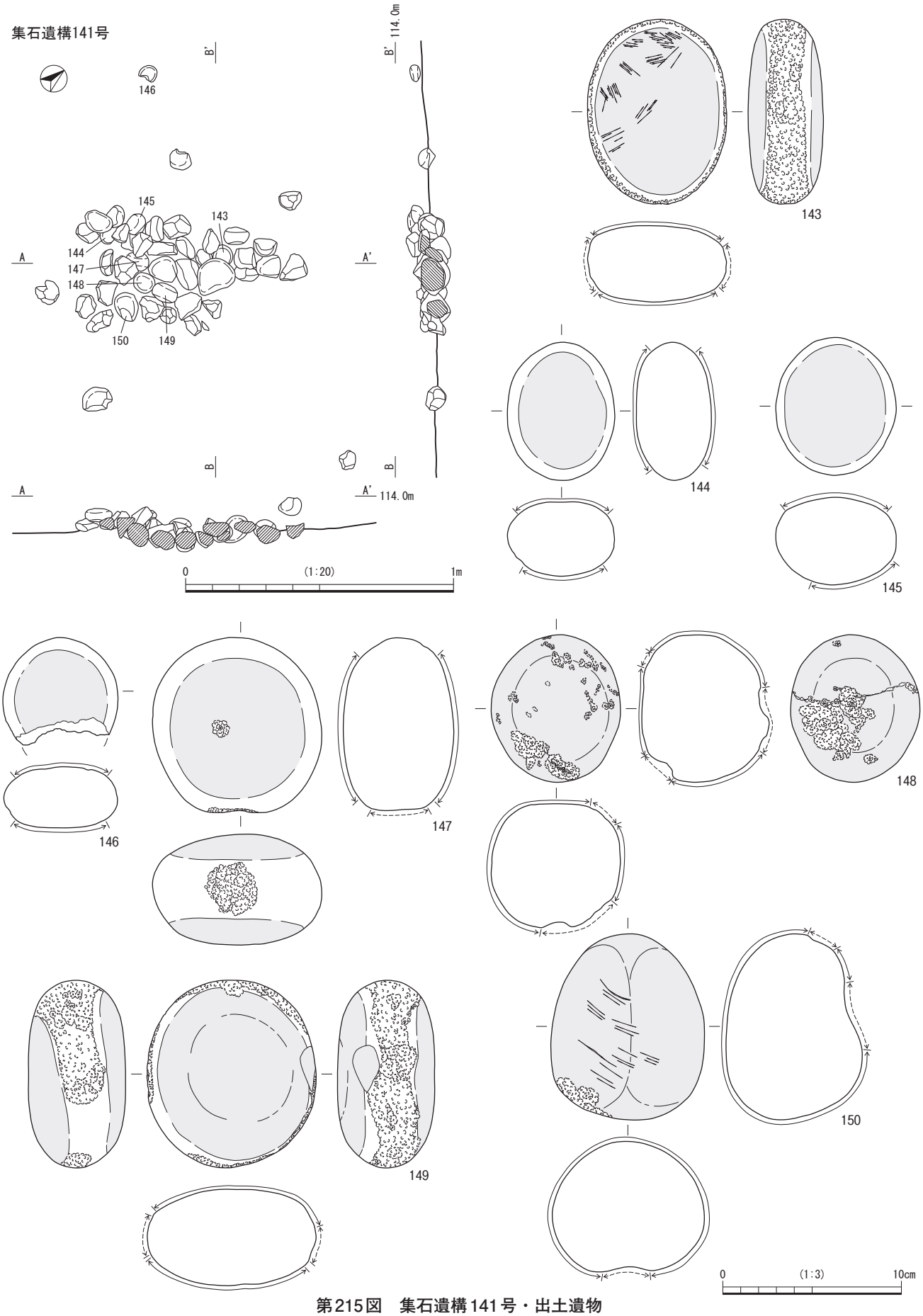
規　　模　構成礫総数は45個である。礫の集中部は，半径0.40ｍで，その中心から半径1.00ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，熱を受けている礫は少ない。400 ～ 500ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫３個も含まれる。143 ～ 150（第215図）は，いずれも安山岩製の磨石・敲石類である。143は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、裏面から側面にかけて敲打痕が認められる。被熱しており全体にスス，タールが付着する。144はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。145はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化する。146は欠損するが扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化する。147は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，下面に敲打痕が認められる。被熱しており全体にススが付着する。148は円礫の全面を磨面に使用し、表裏両面に敲打痕跡が認められる。149は扁平な円礫の表裏両面および右側面を磨面に使用し，側面には敲打痕が認められる。150は円礫の全面を磨面に使用し，裏面に敲打痕が認められる。被熱しており裏面から側面にかけてススが付着する。

出土土器　出土していない。



第214図　集石遺構139号・出土遺物・集石遺構140号



第215図　集石遺構141号・出土遺物

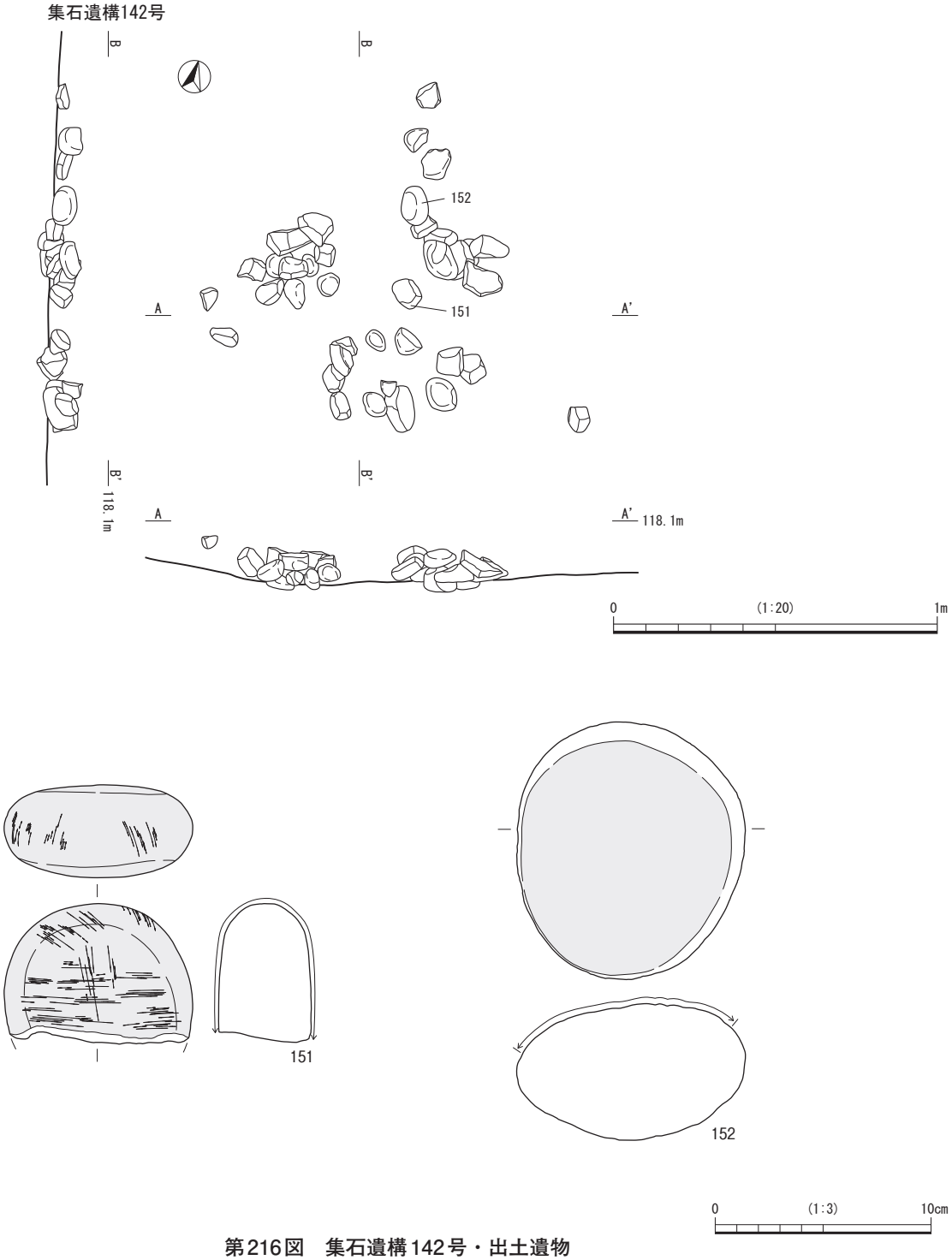
集石遺構142号（SQ142：第216図）

検出状況　D－16区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は37個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径1.05ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。400 ～ 500ｇの礫が多い。磨石・敲石類の転用品が確認され，図化した。151・152（第216図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。151は欠損するが元は扁平な円礫と考えられ、表裏両面および側面を磨面に使用している。被熱しており欠損部にススが付着する。152は扁平な円礫の表面を磨面に使用している。被熱しており表面にタールが付着する。

出土土器　出土していない。



第216図　集石遺構142号・出土遺物

集石遺構143号（SQ143：第217図）

検出状況　J -48区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は48個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径1.05ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。300 ～ 400 ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構144号（SQ144：第218図）

検出状況　K -49区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は38個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径1.10ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　ホルンフェルスと安山岩が主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100 ｇ以下の礫が多いが，1000 ｇを超える礫１個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　胴部が１点出土し，図化した。153（第218図）である。153は，底部付近の胴部と思われる。外面下位に横位貝殻条痕文を施し，その上位には綾杉状の条痕文を施す。その施文順は，不明である。

土器分類　Ⅳ類に該当する。

集石遺構145号（SQ145：第218図）

検出状況　D -15区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は28個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径1.20ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　安山岩が主体で，ほとんどの礫が熱を受けている。100 ～ 200 ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

集石遺構146号（SQ146：第218図）

検出状況　F -16区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は33個である。礫は半径0.15ｍに集中している。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100 ～ 200 ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

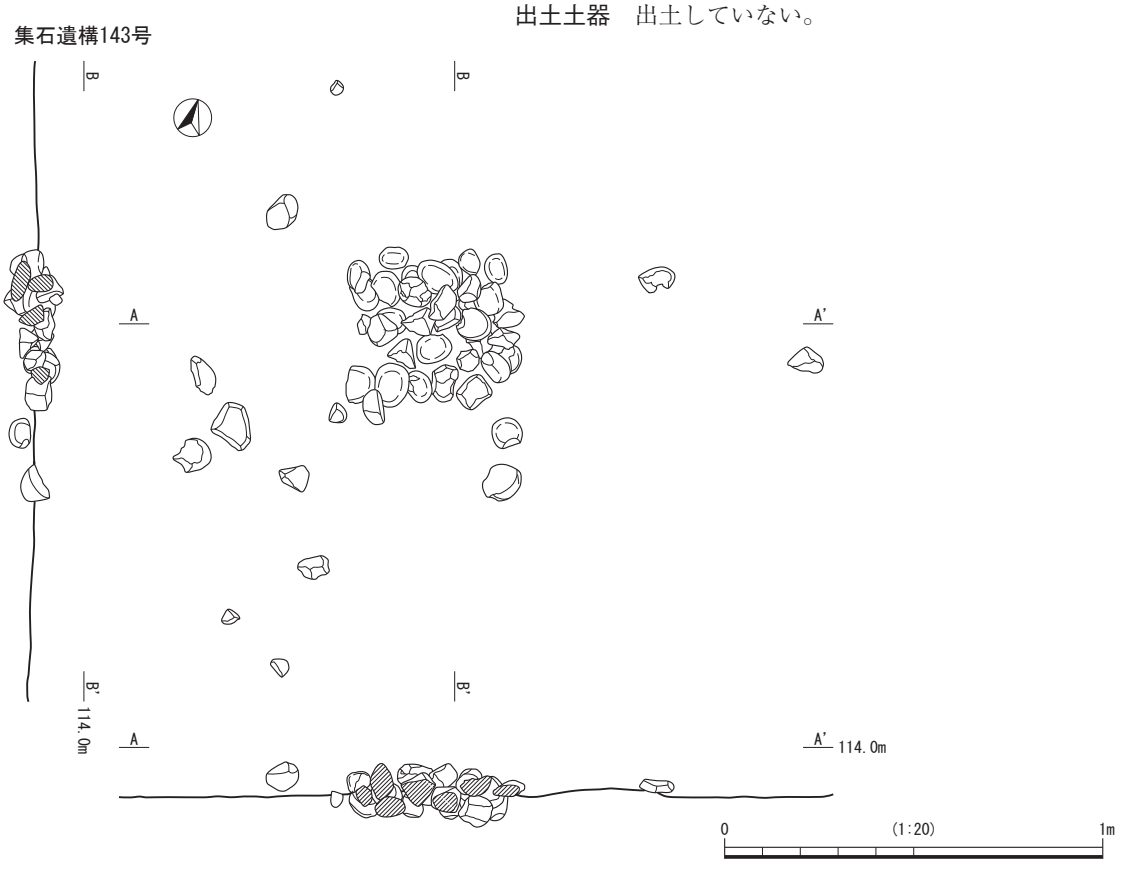
集石遺構147号（SQ147：第218図）

検出状況　C -23区，XII 層で検出された。

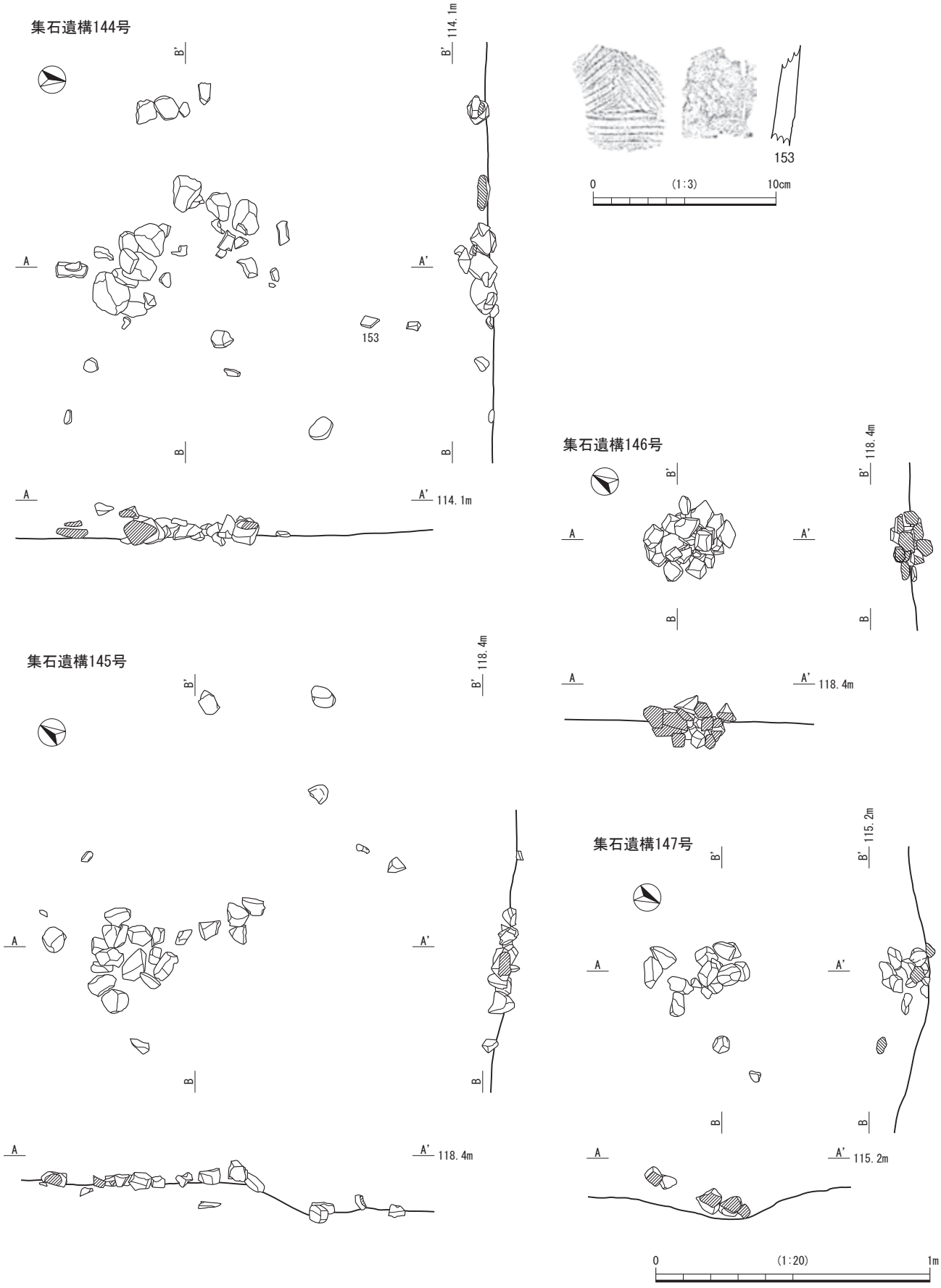
規　　模　構成礫総数は17個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.30ｍの範囲に礫全体が広がる。

礫 構 成　凝灰岩と頁岩のみで，ほとんどの礫が熱を受けている。100 ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。



第217図　集石遺構143号



第218図　集石遺構144号・出土遺物・集石遺構145号～147号

タイプⅢ

集石遺構148号（SQ148：第219図）

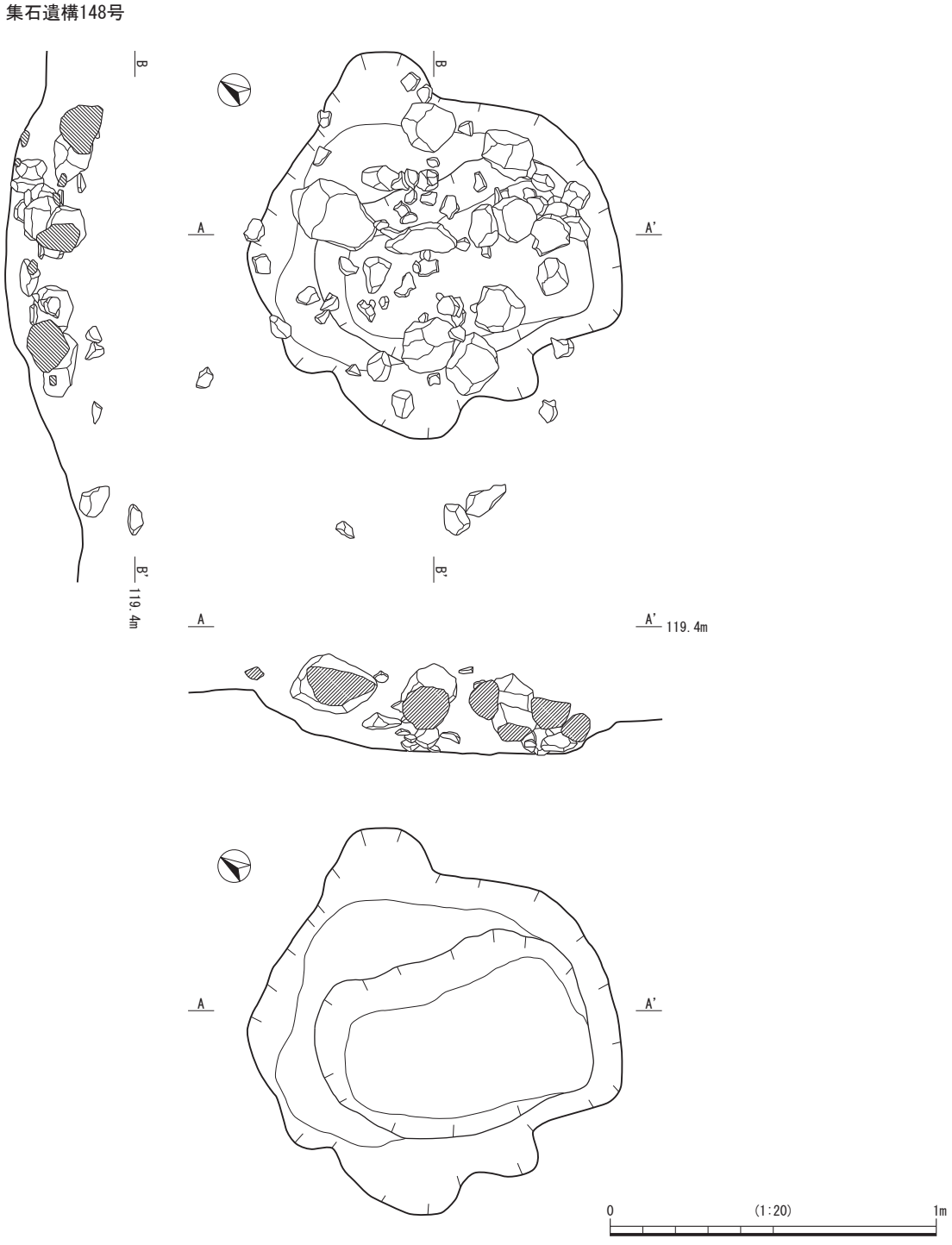
検出状況　A-21区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は73個である。礫の集中部は，半径0.50ｍで，その中心から半径1.00ｍの範囲に礫全体が広がる。0.15ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫10個も含まれる。

出土土器　小破片の胴部が２点出土している。剥落が激しく型式の判断はできなかった。胎土には，金雲母は含まれていない。図化はしていない。

炭 化 物　埋土中で確認された炭化物は，木炭であった。科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，7,519-7,346calBCを示した。



第219図　集石遺構148号

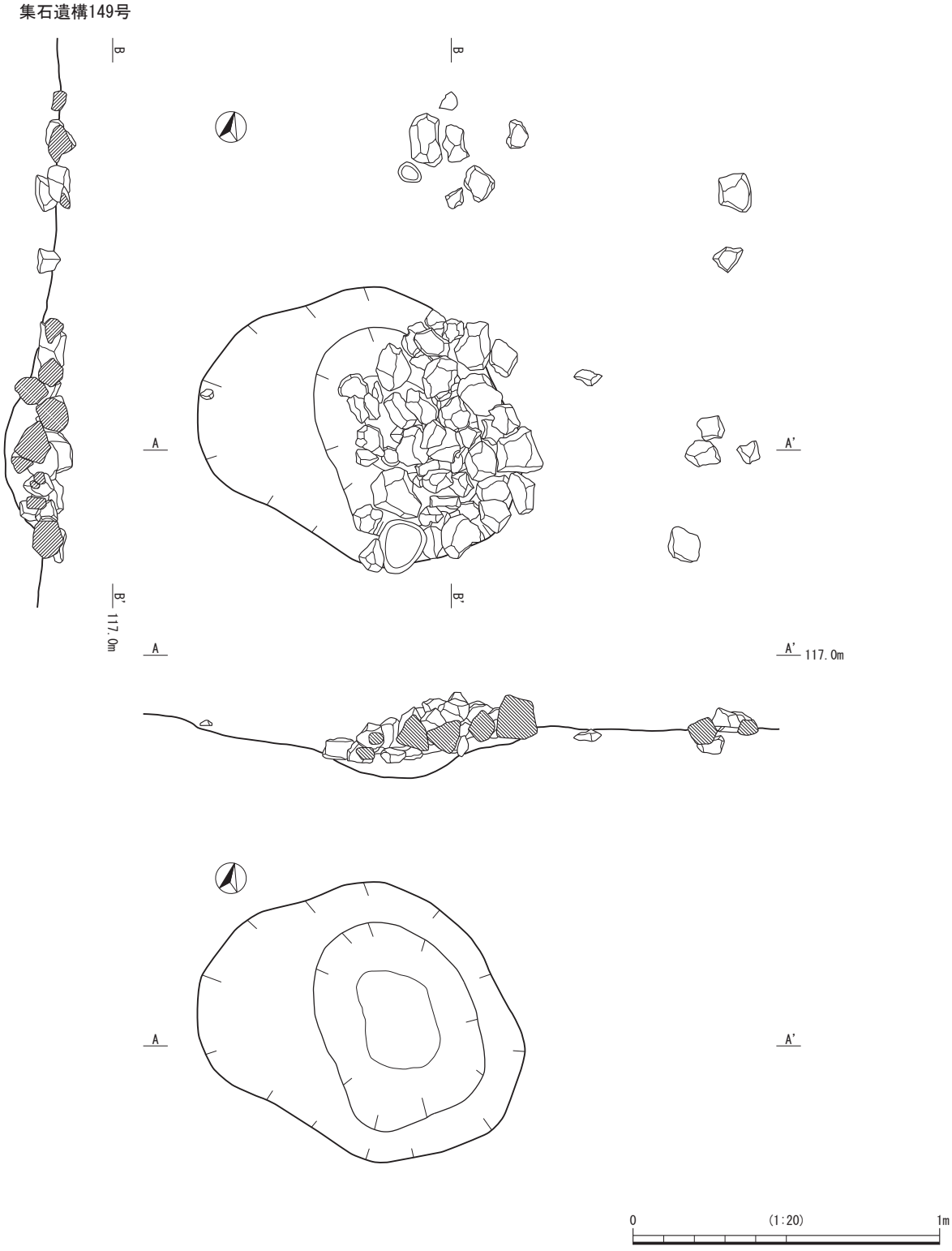
集石遺構149号（SQ149：第220図）

検出状況　B-20区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は65個である。礫の集中部は，半径0.40ｍで，その中心から半径1.35ｍの範囲に礫全体が広がる。0.19ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫全体の約70％が熱を受けている。1000 ～ 1500ｇの礫が多いが，1500ｇを超える礫10個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。



第220図　集石遺構149号

集石遺構150号（SQ150：第221図）

検出状況　C-26区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は35個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.35ｍの範囲に礫全体が広がる。0.20ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。

炭 化 物　埋土中で確認された炭化物は，木炭であった。科学分析の結果から，カヤ属に同定され，^{14}C年代測定は，7,362-7,318calBCを示した。

集石遺構151号（SQ151：第221図）

検出状況　F-33区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は14個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.90ｍの範囲に礫全体が広がる。0.07ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫全体の約30％が，熱を受けている。400 ～ 500ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。

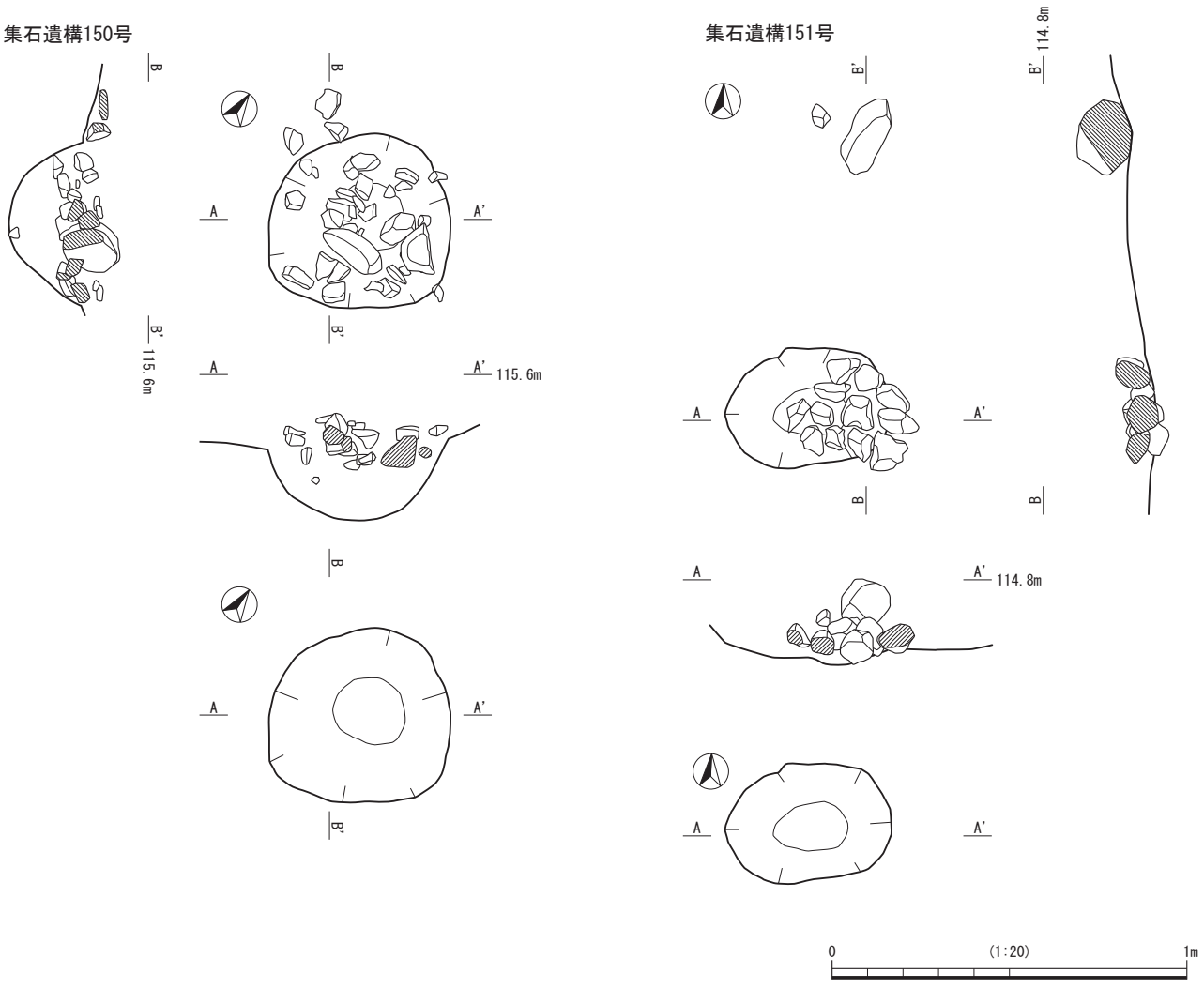
集石遺構152号（SQ152：第222図・第223図）

検出状況　C-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は42個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径1.25ｍの範囲に礫全体が広がる。0.21ｍの掘り込みを伴う。

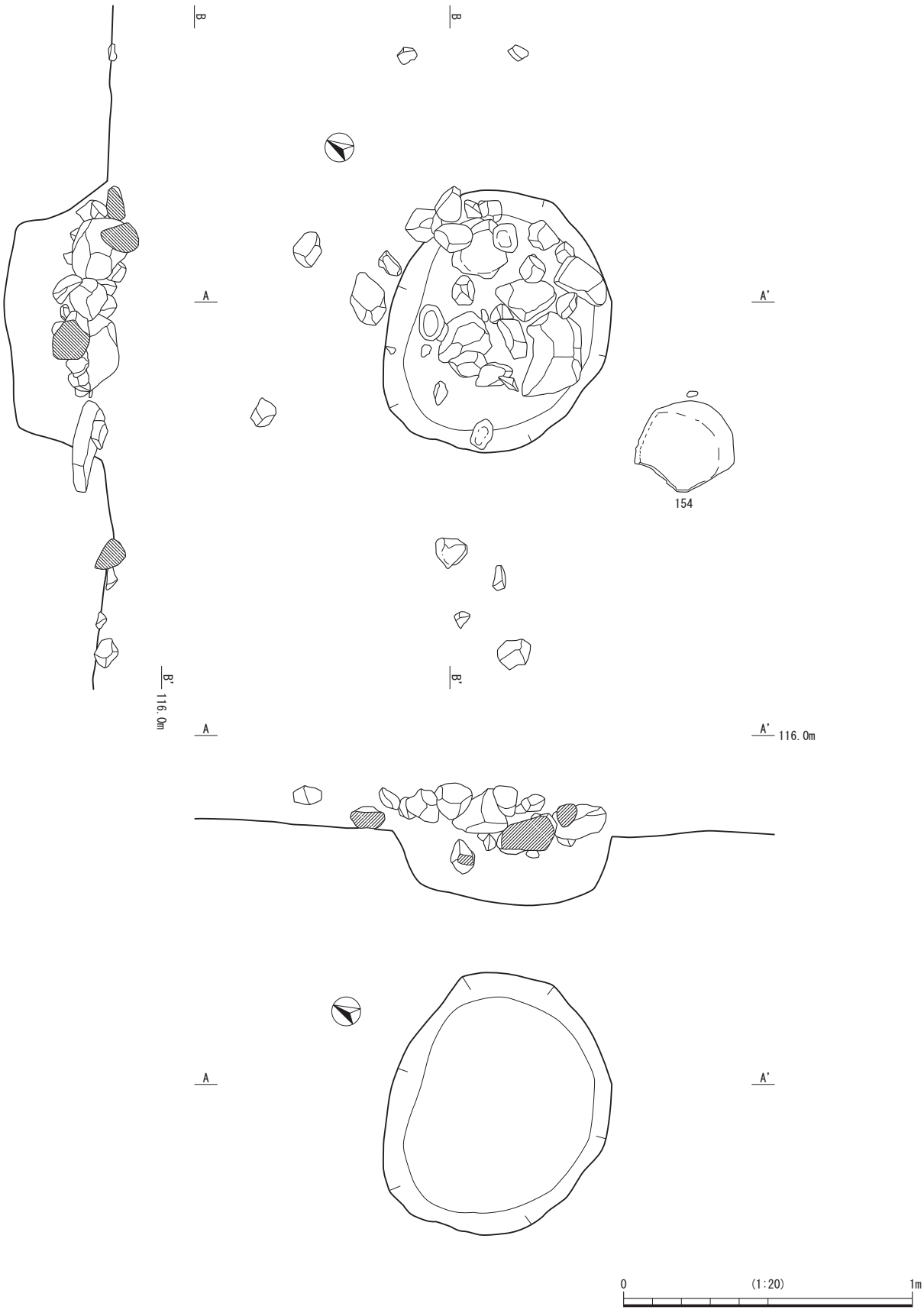
礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約10％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫13個も含まれる。154（第223図）は安山岩製の台石である。大型な扁平礫の片面を使用面とし，広く平坦な磨面が認められる。

出土土器　出土していない。

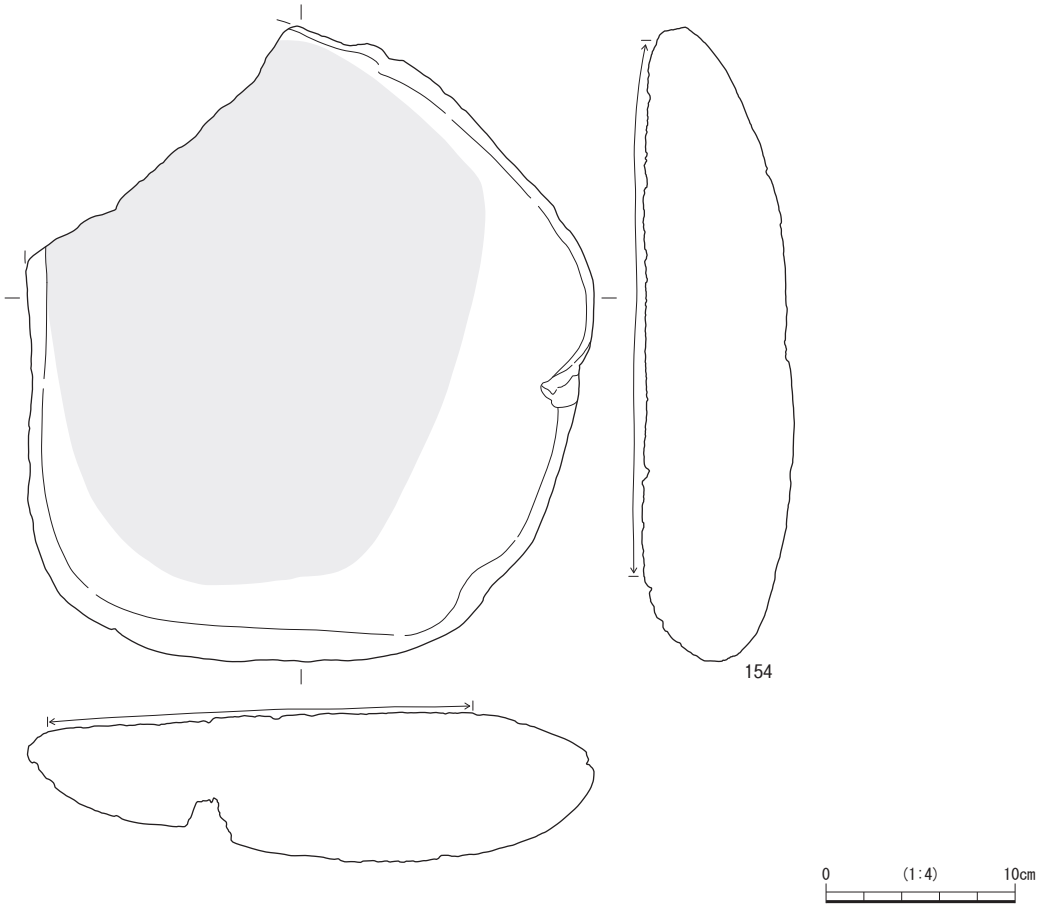


第221図　集石遺構150号・集石遺構151号

集石遺構152号



第222図　集石遺構152号



第223図　集石遺構152号出土遺物

集石遺構153号（SQ153：第224図）

検出状況　B-27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は64個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径1.30ｍの範囲に礫全体が広がる。0.27ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫５個も含まれる。

出土土器　口縁部が２点，胴部が６点出土している。そのうち２点を図化した。155・156（第224図）である。155は，口縁部である。外面は，文様は不明であるが押型文を施したと思われる痕跡が確認できる。口唇部の外面側端部は丸みを帯び，そこから1.2㎝程内傾した後，稜をもつ。稜に至る口縁部内面に，棒状工具による条痕文を縦位に施す。図化していないもう１点の口縁部は，口縁部内面上位に，棒状工具による条痕文を，その下位に山形押型文を横位に施す。この口縁部には，金雲母は含まれていない。156は，集石遺構153号（SQ153）内から出土した２点が接合した胴部である。外面に山形押型文を横位に施す。内面は，指おさえをおこなう。156は，617（第328図）と同一個体と思われる。図化していない他の胴部のうち２点は，外面に山形押型文を横位に施す。残りの２点は，詳細は不明である。図化しなかった胴部４点とも，胎土には金雲母が含まれている。

土器分類　155・156はⅨ類に，図化していない不明以外の土器もⅨ類に該当する。

集石遺構154号（SQ154：第224図）

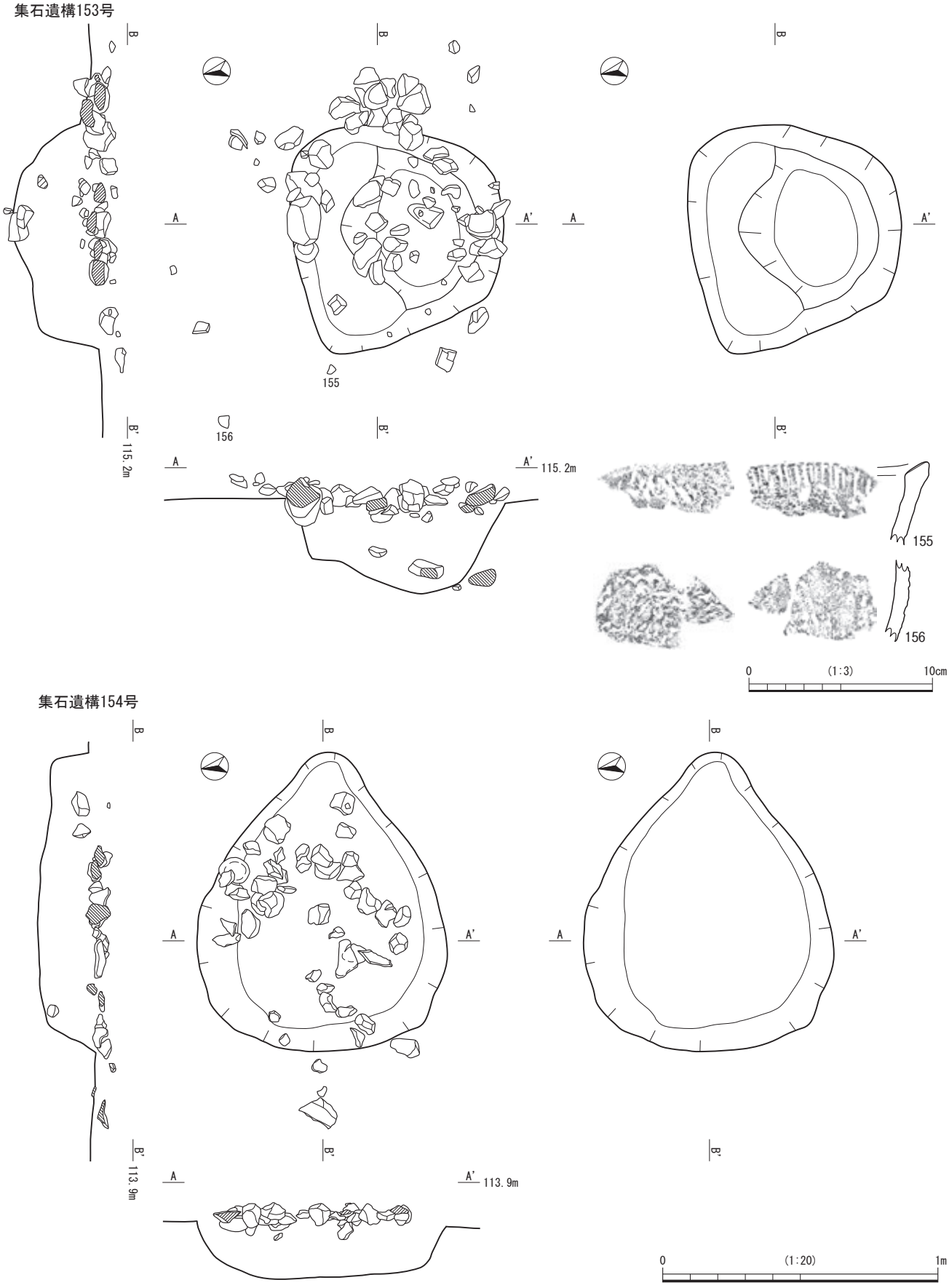
検出状況　K-52区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は45個である。礫の集中部は，半径0.10ｍで，その中心から半径0.90ｍの範囲に礫全体が広がる。0.20ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。200～300ｇの礫が多い。

出土土器　極小破片の口縁部が１点と小破片の胴部が１点出土している。口縁部の口唇部は，やや丸みを帯び，口縁部内面上部にのみ，山形押型文を施す。胎土には，金雲母が含まれている。小破片の胴部内面は剥落が激しいが，外面は，貝殻条痕文を綾杉状に施す。胎土には，金雲母は含まれていない。図化はしていない。

土器分類　口縁部はⅨ類に，胴部はⅣ類に該当する。



第224図　集石遺構153号・出土遺物・集石遺構154号

集石遺構155号（SQ155：第225図）

検出状況　L－54区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は8個である。礫は，半径0.51ｍの範囲に集中している。0.18ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩を主体に凝灰岩と構成され，熱を受けている礫は１個しか確認できなかった。

出土土器　出土していない。

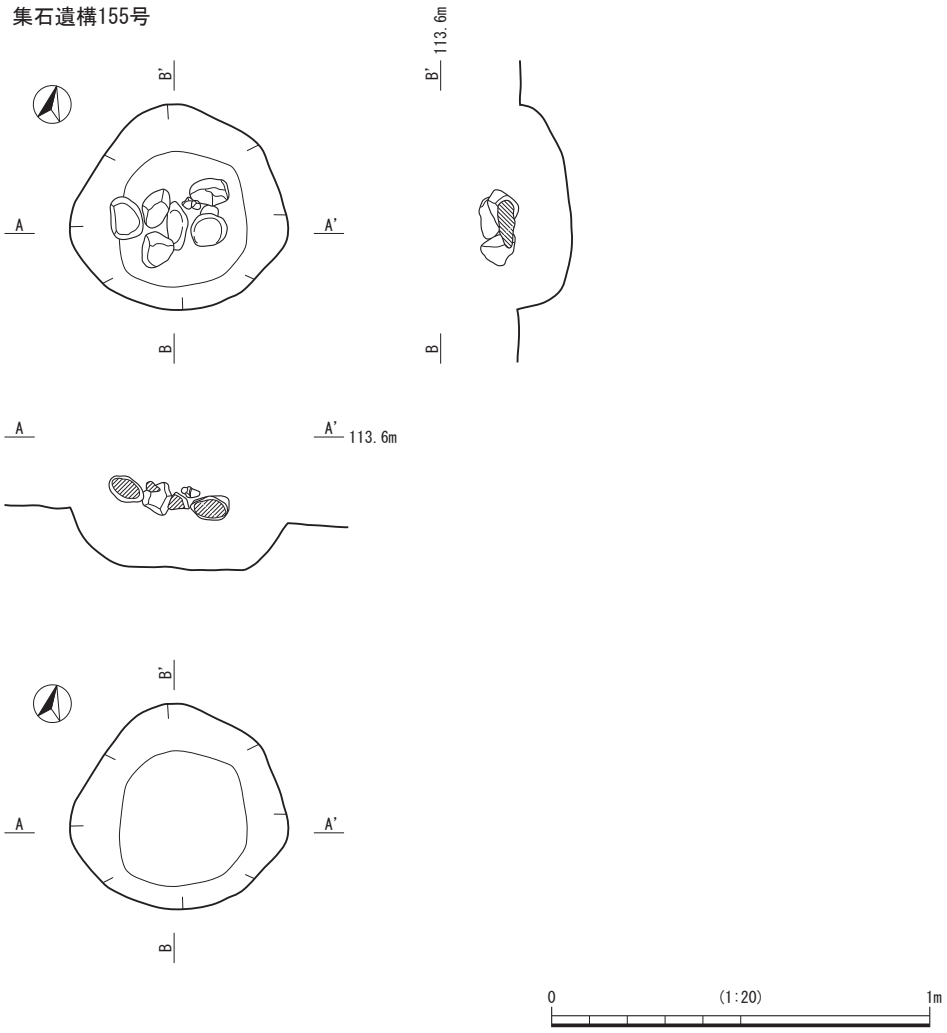
集石遺構156号（SQ156：第226図）

検出状況　J－50区，X層で検出された。

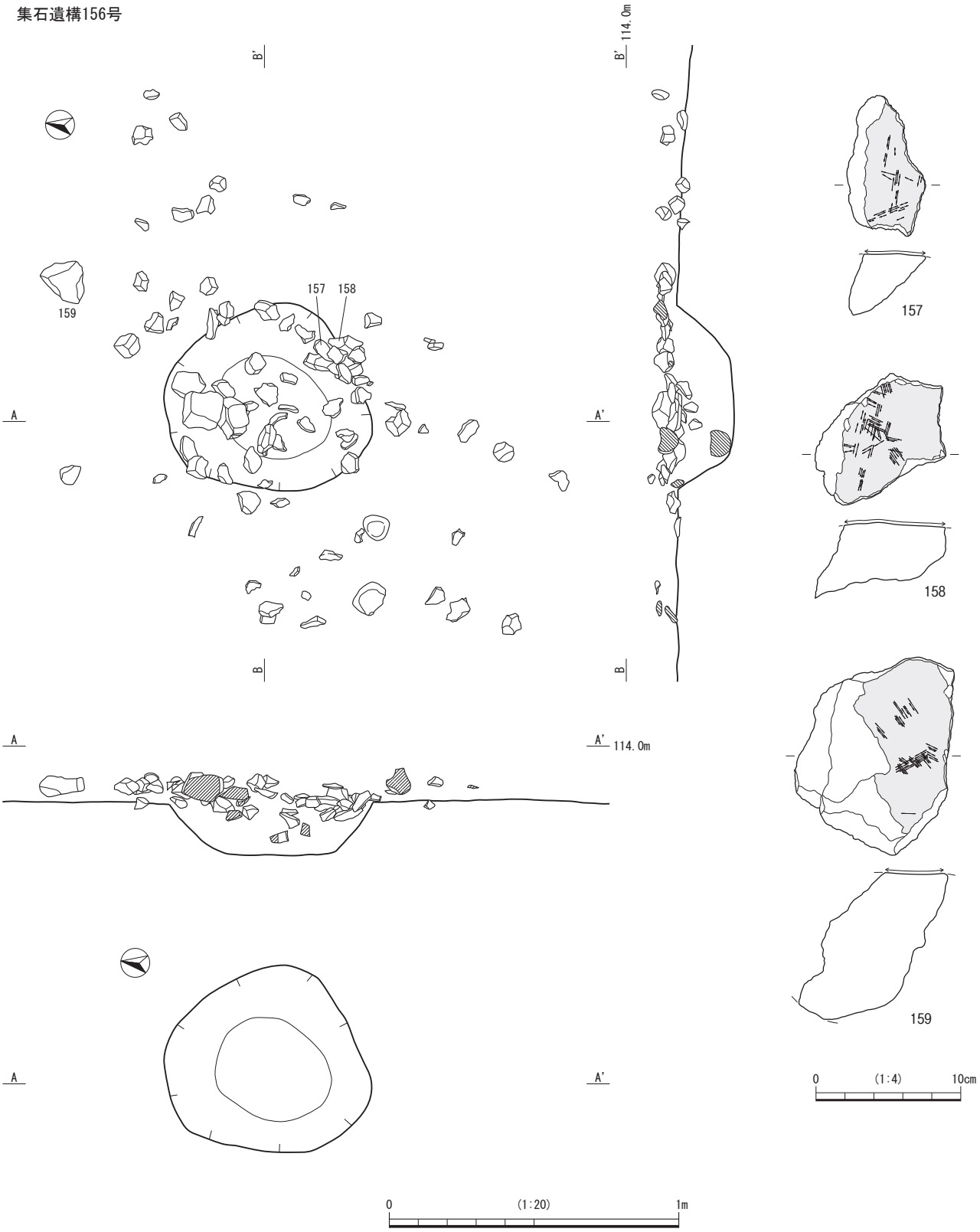
規　　模　構成礫総数は86個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径1.20ｍの範囲に礫全体が広がる0.18ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩，ホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫３個も含まれる。157～159（第226図）はいずれも凝灰岩製の石皿である。157・158は小破片であるが、平坦な磨面を持つことから石皿とした。どちらも被熱しており157は磨面に，158は欠損部にススが付着する。159も破片資料だが，破損前は大型で扁平な石の片面を使用したと考えられる。全体が被熱している。

出土土器　出土していない。



第225図　集石遺構155号



第226図　集石遺構156号・出土遺物

集石遺構157号（SQ157：第227図）

検出状況　C－23区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は17個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.40ｍの範囲に礫全体が広がる。0.14ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫４個も含まれる。

出土土器　出土していない。

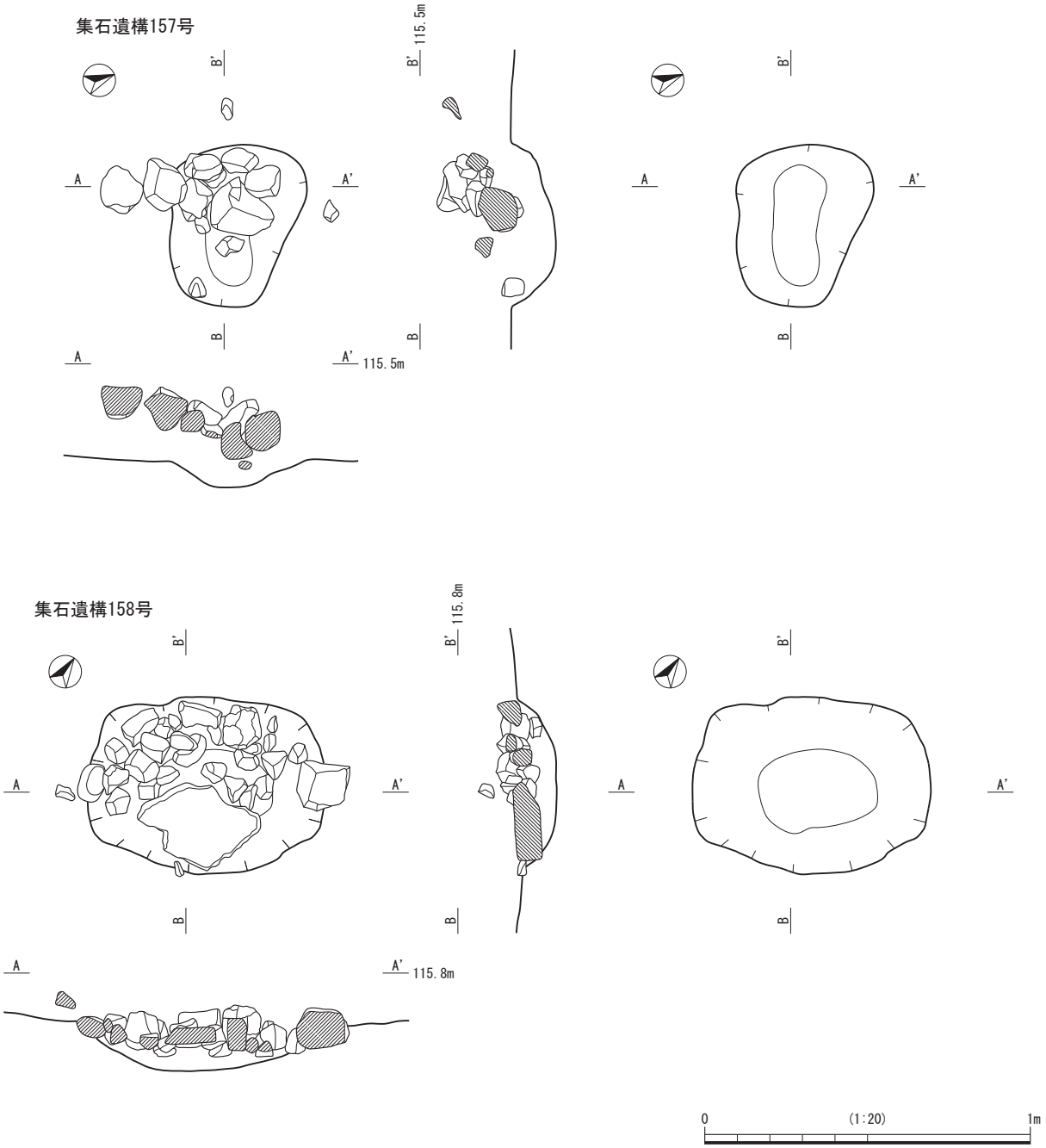
集石遺構158号（SQ158：第227図）

検出状況　D－23区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は30個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径0.45ｍの範囲に礫全体が広がる。0.14ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫６個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第227図　集石遺構157号・集石遺構158号

集石遺構159号（SQ159：第228図）

検出状況　B－26区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は65個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径0.45ｍの範囲に礫全体が広がる0.37ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。100～200ｇの礫が多い。礫器が確認された。

出土土器　出土していない。

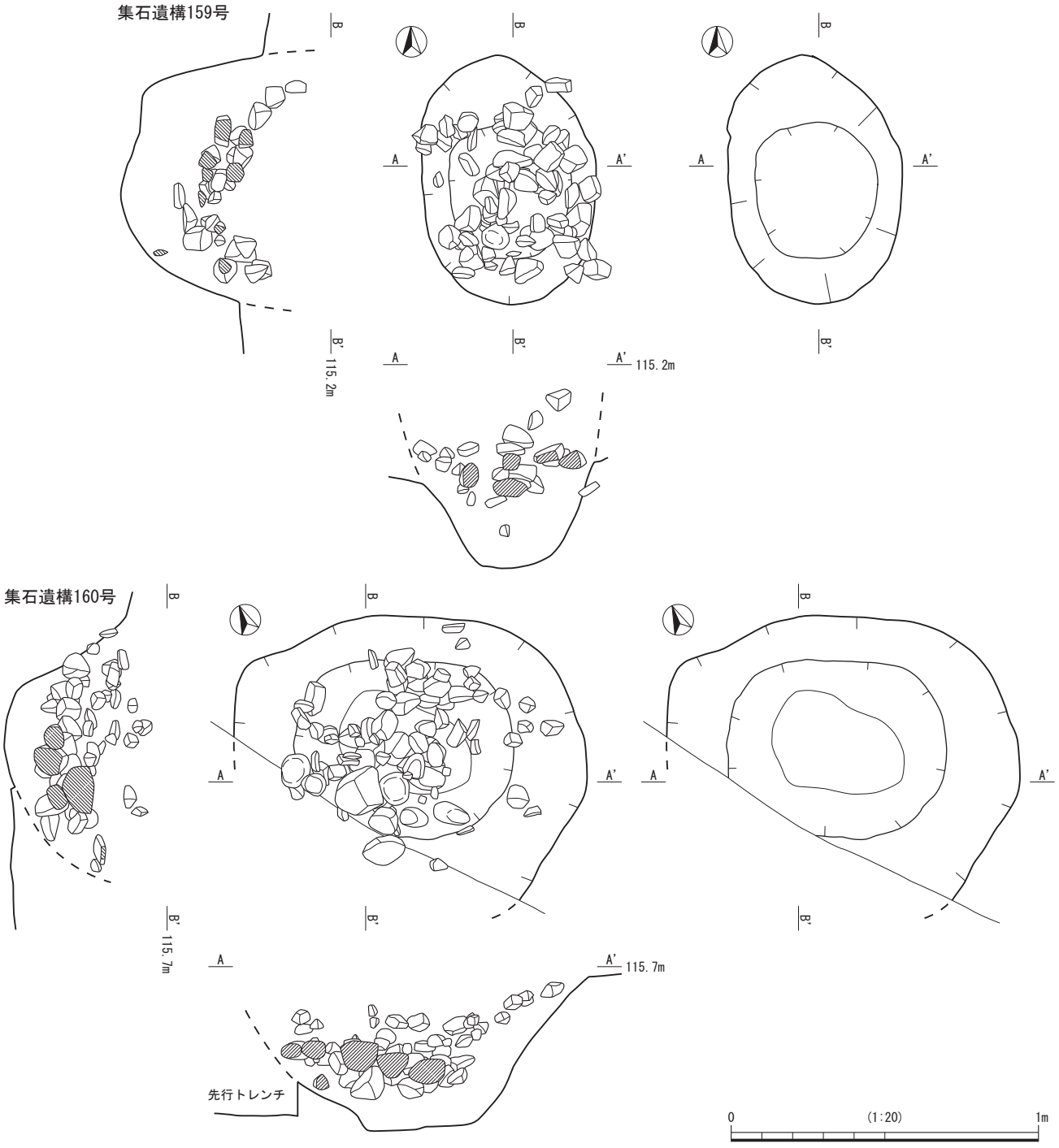
集石遺構160号（SQ160：第228図）

検出状況　C－22区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は76個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径0.55ｍの範囲に礫全体が広がる0.39ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫３個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第228図　集石遺構159号・集石遺構160号

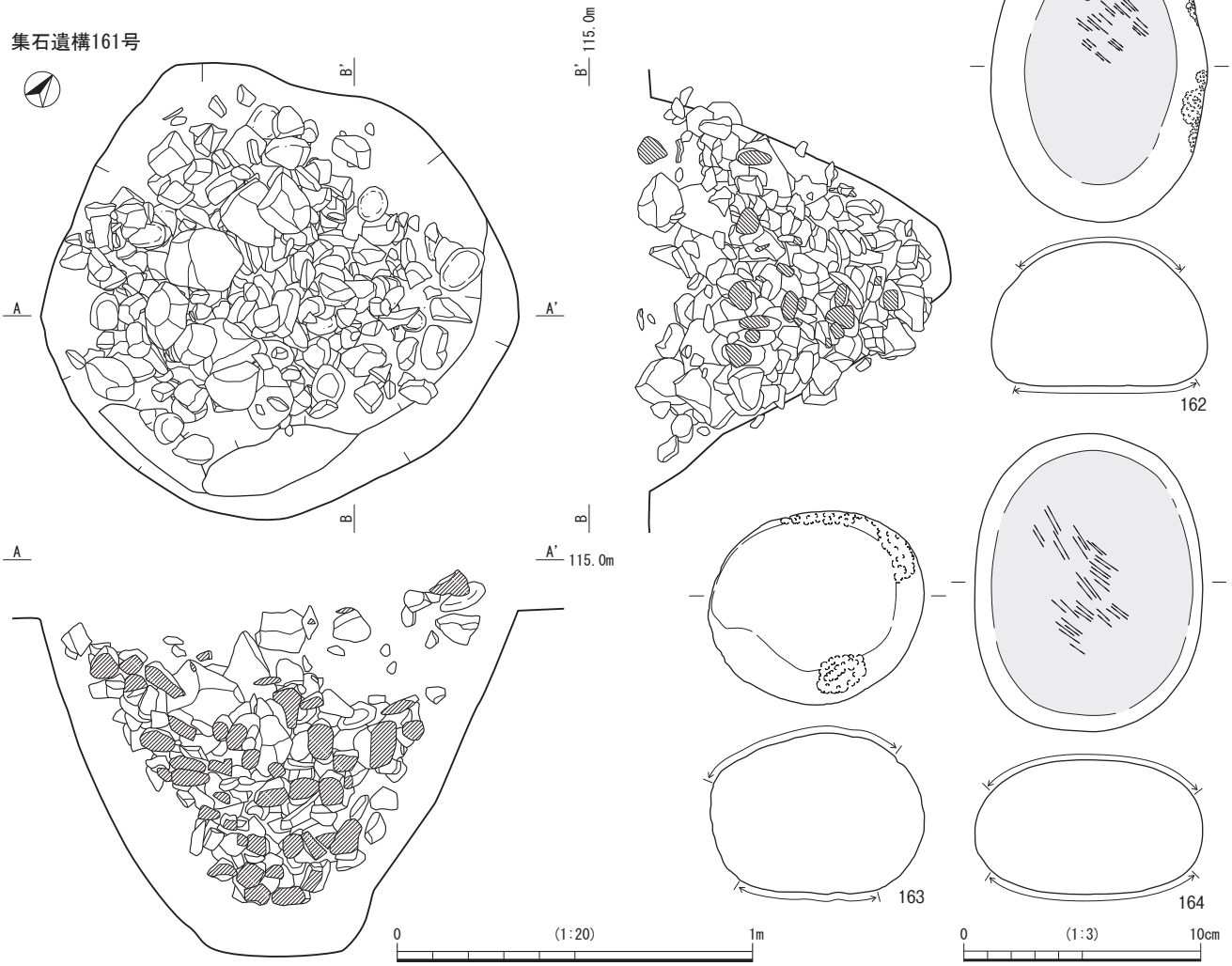
集石遺構161号（SQ161：第229図）

検出状況　B－26区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は413個である。礫の集中部は，半径0.45ｍで，その中心から半径0.70ｍの範囲に礫全体が広がる。0.95ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約10％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫37個も含まれる。160 ～ 164（第229図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。160は欠損するが元は扁平な円礫と考えられ，表裏両面を磨面に使用している。161は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し，側面に敲打痕が認められる。被熱しており裏面にスス，タールが付着する。162は片面が平らな円礫の表裏両面を磨面に使用し，右側面に敲打痕が認められる。163は円礫の表裏両面を磨面に使用し，上側面と表面に敲打痕跡が認められる。被熱しており左側面にスス，タールが付着する。164は扁平な円礫の表裏両面を磨面として使用している。全体が被熱している。

出土土器　出土していない。



第229図　集石遺構161号・出土遺物

集石遺構162号（SQ162：第230図）

検出状況　D－10区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は193個である。礫の集中部は，半径0.45ｍで，その中心から半径0.75ｍの範囲に礫全体が広がる。0.85ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約60％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫33個も含まれる。

出土土器　出土していない。

炭 化 物　埋土中で確認された炭化物は，科学分析の結果から，^{14}C年代測定は，7,551-7,447calBCを示した。また，もう1点は木炭で，^{14}C年代測定は，7,506-7,302calBCを示した。

集石遺構163号（SQ163：第231図）

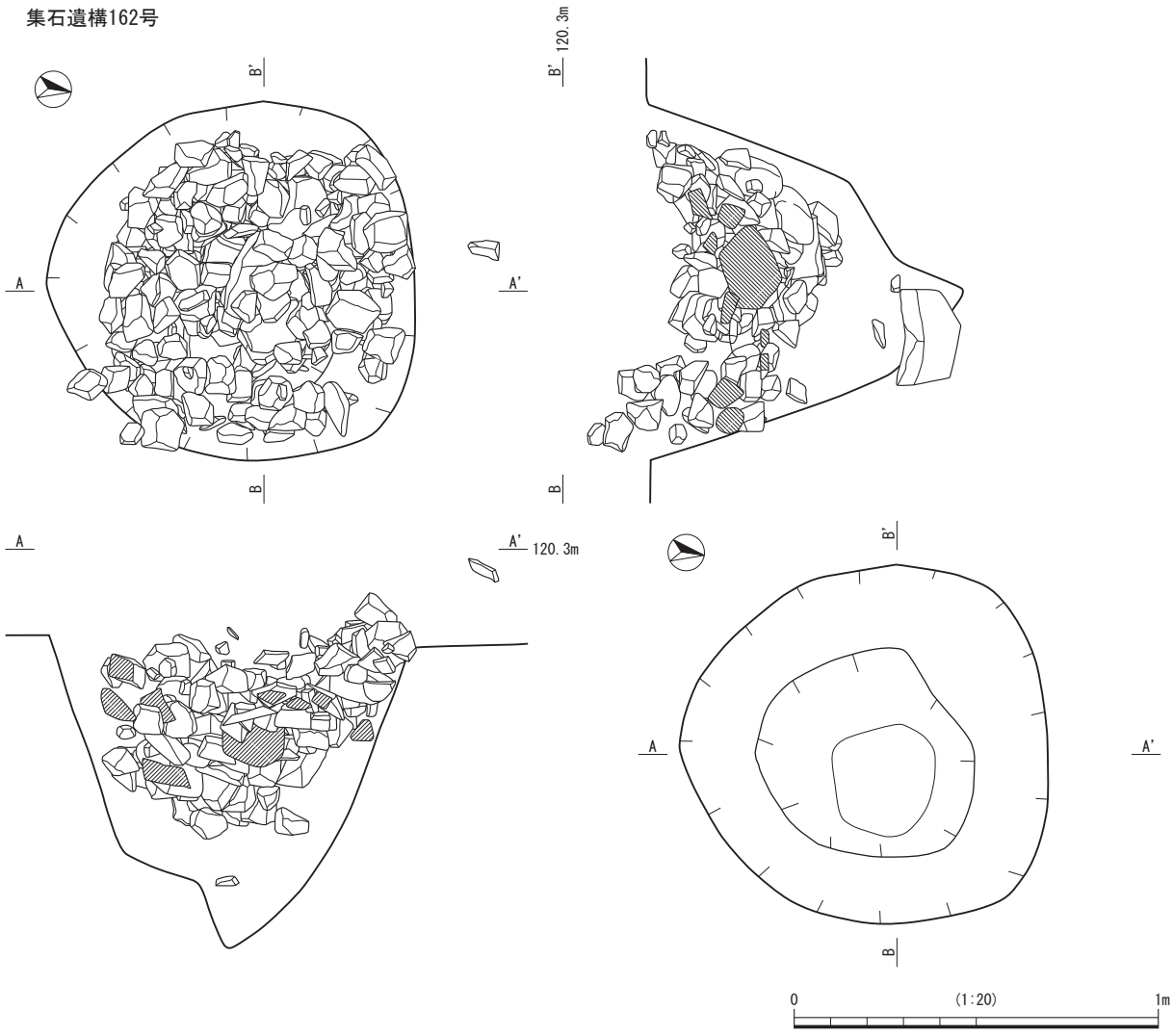
検出状況　E－38･39区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は111個である。礫の集中部は，半径0.40ｍで，その中心から半径0.75ｍの範囲に礫全体が広がる。0.50ｍの掘り込みを伴う。

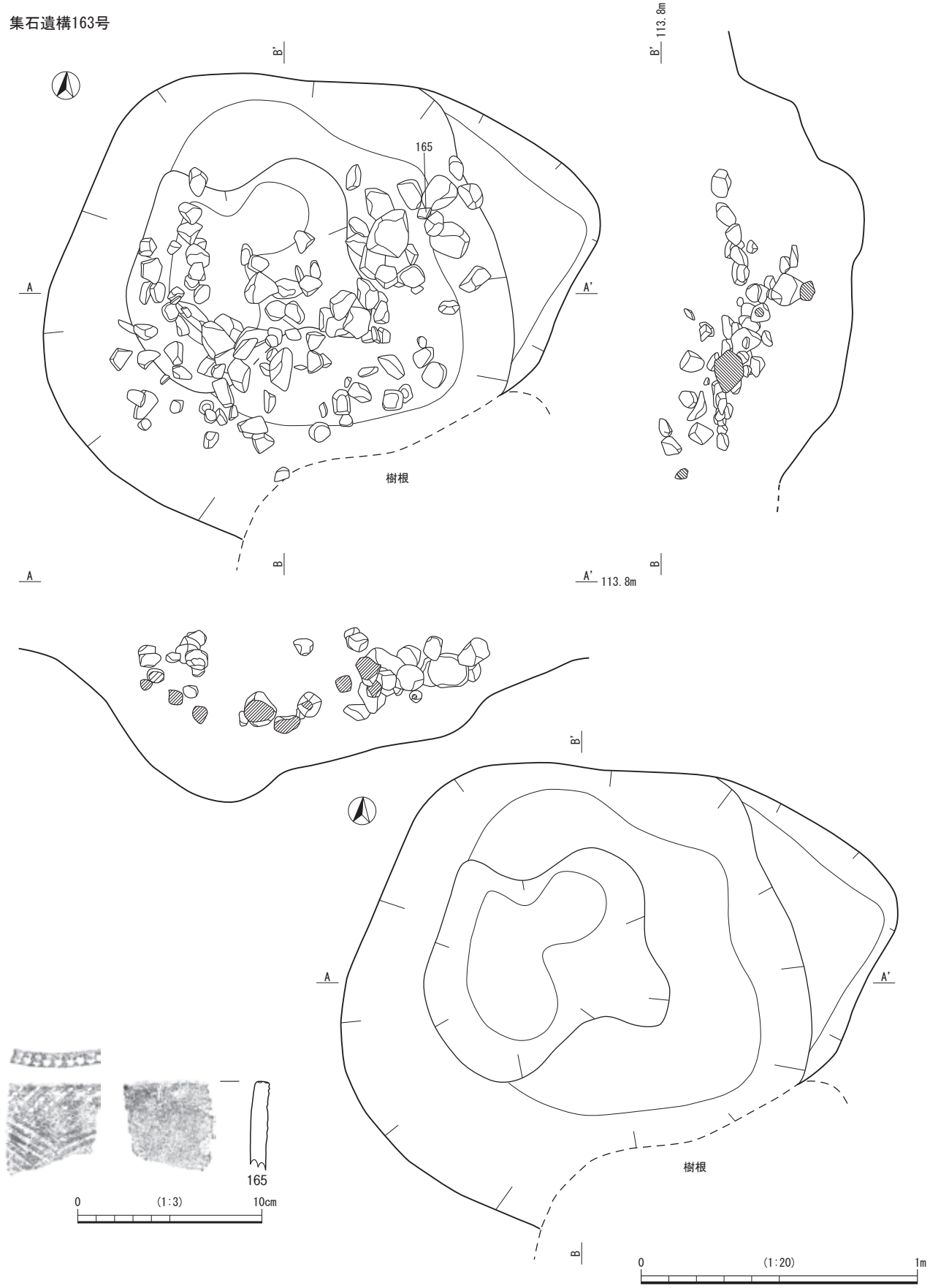
礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫4個も含まれる。石皿と礫器が含まれる。

出土土器　口縁部が1点，胴部が1点出土している。そのうち1点を図化した。165（第231図）である。165は，直行する口縁部で，口縁部外面上位に，斜位刺突文を施し，その直下に，綾杉状の貝殻条痕文を施す。口唇部は，貝殻による刺突状のキザミ2つ（外面側のキザミの方が大きい）を1単位として施す。図化していない胴部は摩滅が激しいが，外面に貝殻と思われる条痕文が確認できる。胎土には金雲母は含まれていない。

土器分類　165は，Ⅳ類に該当する。



第230図　集石遺構162号



第231図　集石遺構163号・出土遺物

集石遺構164号（SQ164：第232図）

検出状況　D-25区，XI層で検出された。

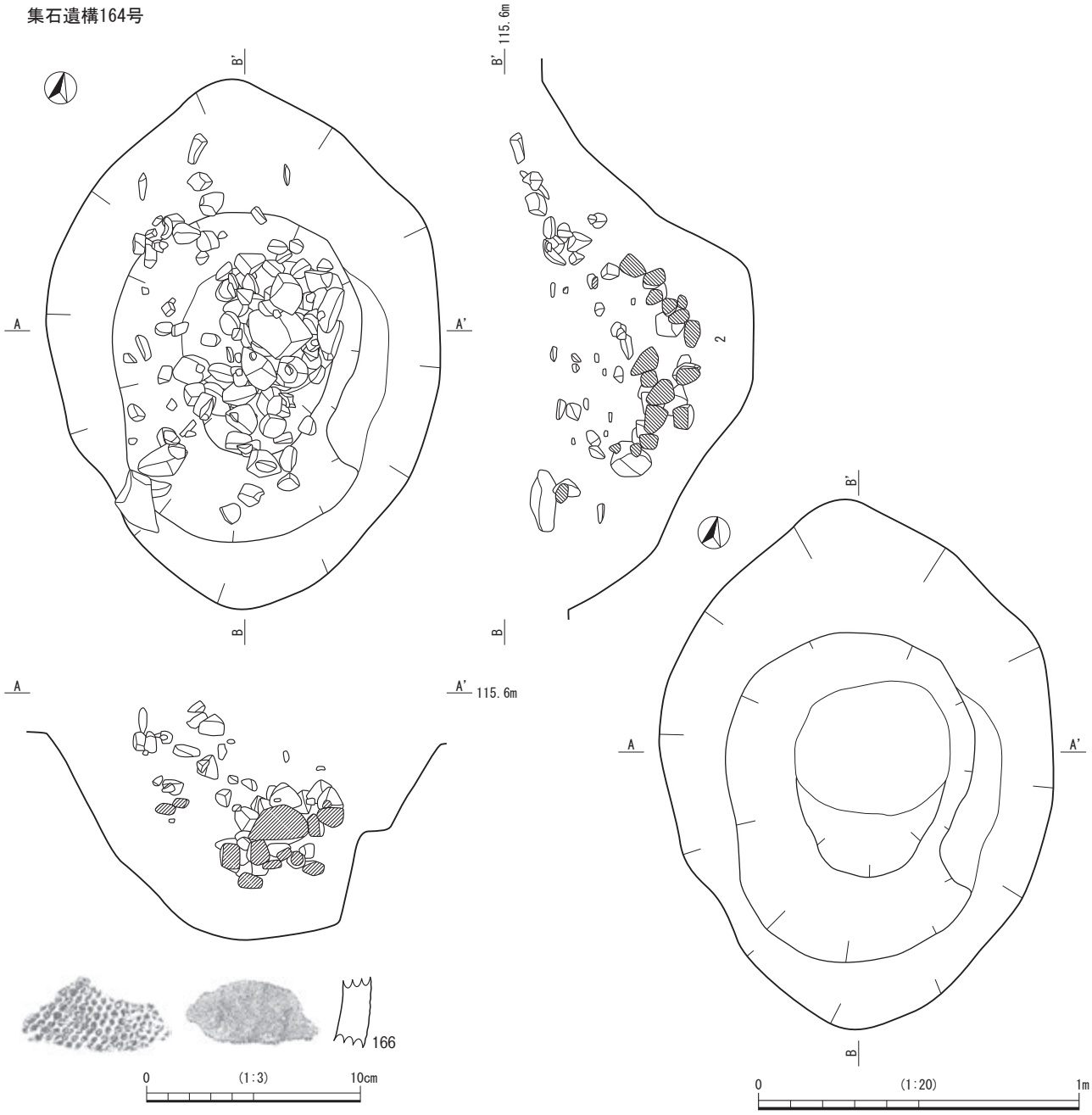
規　　模　構成礫総数は119個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径0.80ｍの範囲に礫全体が広がる。0.62ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫７個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　胴部が２点出土し，１点を図化した。166（第232図）である。器壁が厚く，外面に楕円押型文を縦位もしくは斜位に施す。接合はできなかったが，色調や胎土，施文方法から176（第244図）・537（第317図）と同一個体と思われる。もう１点は器壁は薄く，楕円の押型文を縦位に施す。胎土には，多くの白色鉱物と，金雲母が含まれている。この２点は，楕円の幅や器壁の厚さ，胎土の違い等から同一個体とは言い難い。

土器分類　２点とも，Ⅸ類に該当する。

炭 化 物　埋土中で確認された炭化物は，炭化種実であった。科学分析の結果から，鱗茎に同定され，^{14}C年代測定は，7,450-7,180calBCを示した。



第232図　集石遺構164号・出土遺物

集石遺構165号（SQ165：第233図）

検出状況　D-25区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は65個である。礫の集中部は，半径0.40ｍで，その中心から半径0.90ｍの範囲に礫全体が広がる。0.12ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫９個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構166号（SQ166：第234図）

検出状況　D-25区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は88個である。礫の集中部は，半径0.40ｍで，その中心から半径1.00ｍの範囲に礫全体が広がる。0.45ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩，ホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約40％が熱を受けている。1000ｇを超える礫24個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器　小破片の胴部が１点出土している。山形押型文が縦位と横位に施す。内面にていねいなナデをおこなう。胎土には，金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類　Ⅸ類に該当する。

集石遺構167号（SQ167：第235図）

検出状況　F-22区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は59個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径1.10ｍの範囲に礫全体が広がる。0.12ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　花崗岩と凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫４個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構168号（SQ168：第236図）

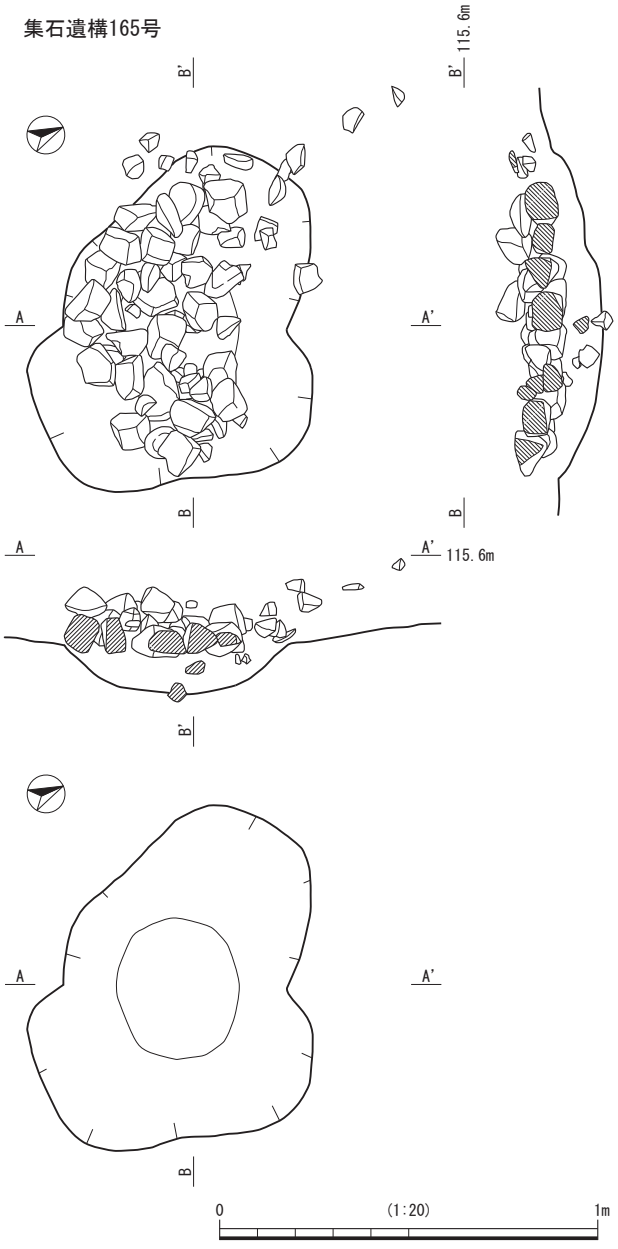
検出状況　C・D-25区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は142個である。礫の集中部は，半径0.50ｍで，その中心から半径1.10ｍの範囲に礫全体が広がる。0.55ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫19個も含まれる。石皿の転用品が確認され，図化した。167（第236図）は破片資料だが，残存状態および平坦な磨面が広く残ることから石皿とした。デイサイト製で破砕後に被熱しており、磨面から欠損部にかけてスス，タールが付着する。

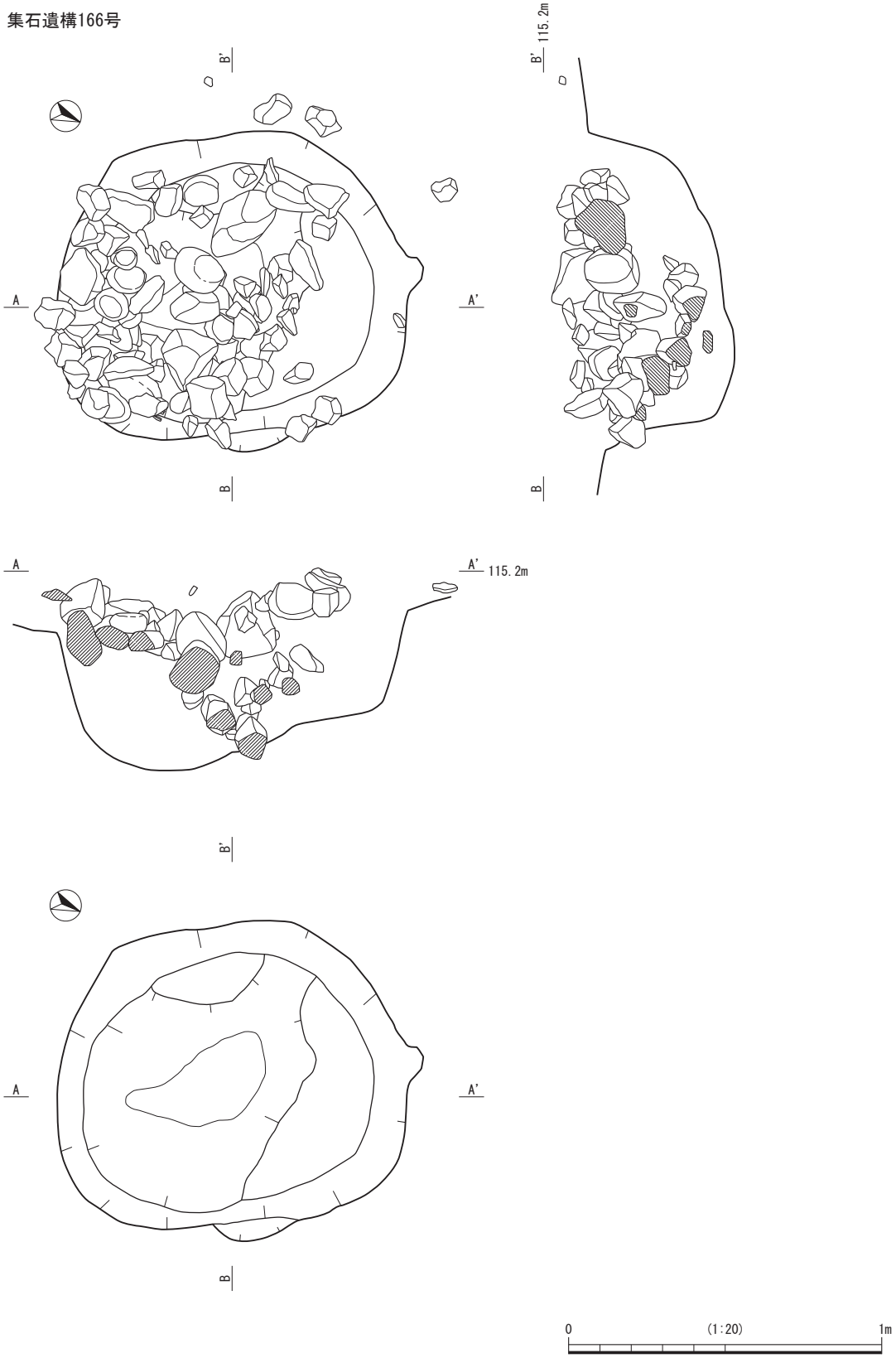
出土土器　胴部が12点，口縁部が１点，底部が１点出土している。そのうち，２点を図化した。168（第236図）は，胴部である。横位刺突文を施す。内面には，工具によるナデをおこなう。接合しなかったが，施文や胎土等から453（第304図）と同一個体と思われる。169は，胴部である。集石遺構168号（SQ168）出土の土器片が３点接合したものである。外面に貝殻刺突文をランダムに施し，一部には流水文をやや横位に施す。また，接合しなかったが，169と同一個体と思われる胴部が7点・底部が１点，SQ168から出土している。図化はしなかったが，SQ168から出土した胴部１点のみ外面に，山形押型文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。胎土には，金雲母が含まれている。

土器分類　168はⅤ類に169はⅤ類もしくはⅥ類に該当する。



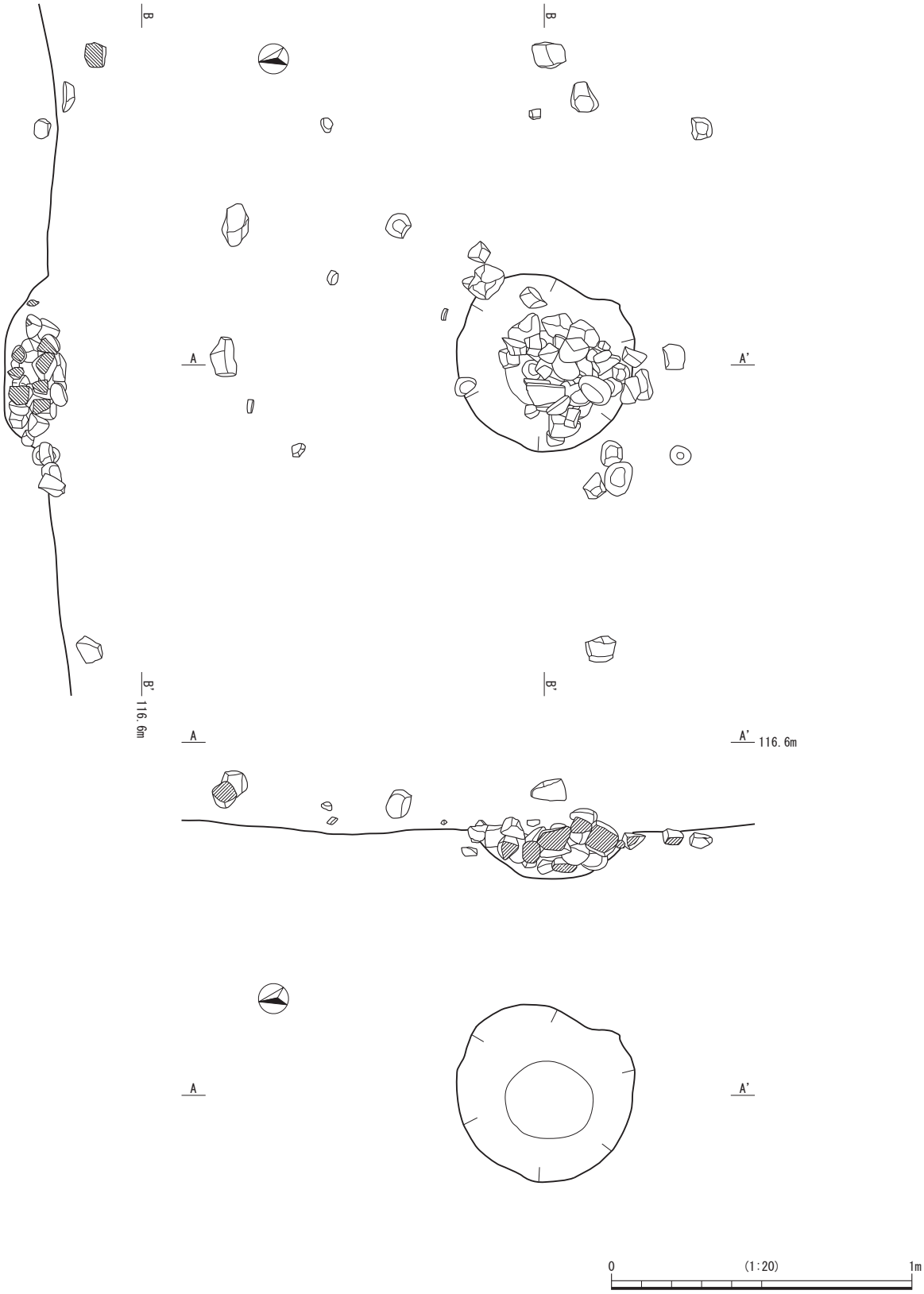
第233図　集石遺構165号

集石遺構166号

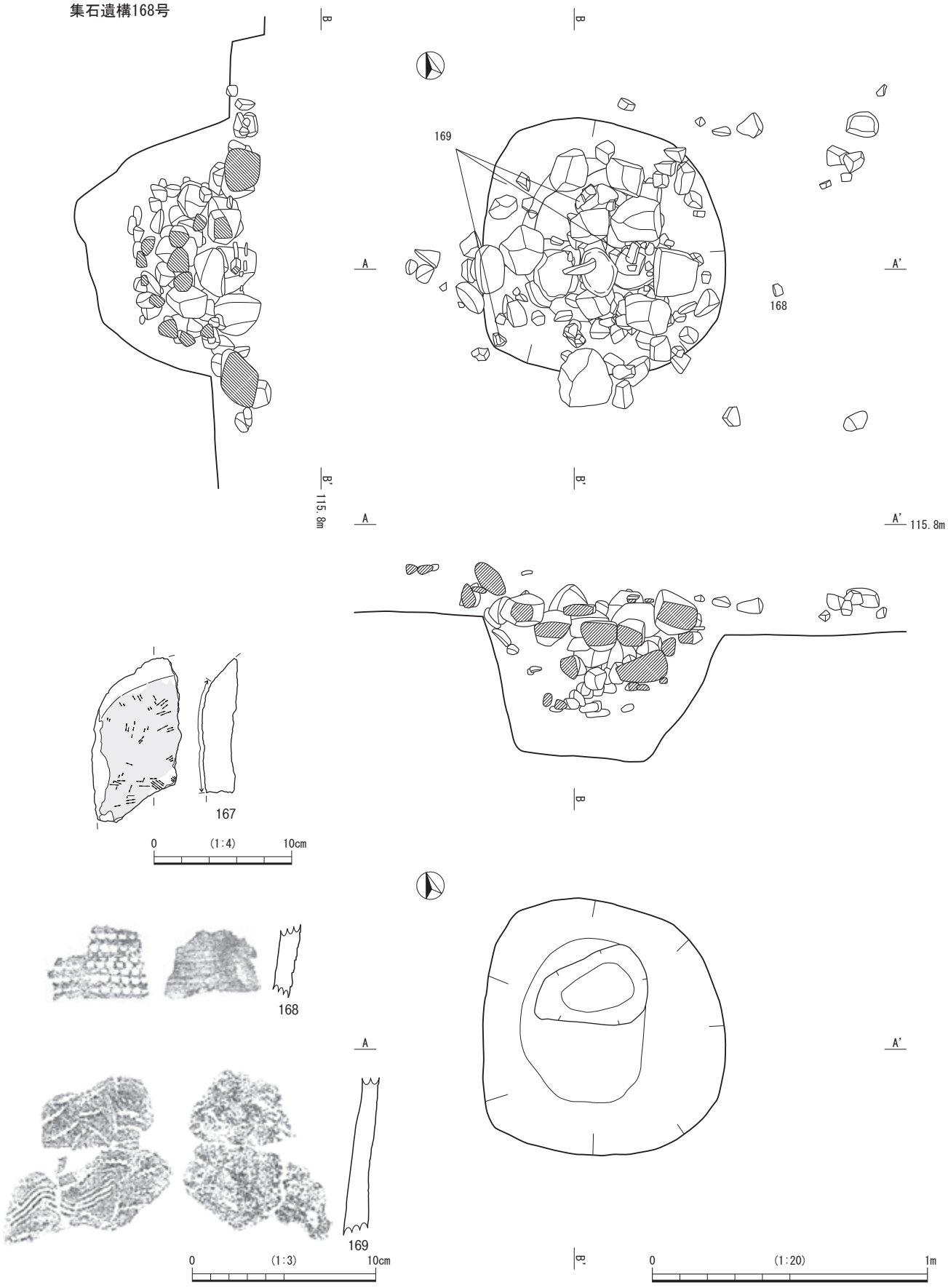


第234図　集石遺構166号

集石遺構167号



第235図　集石遺構167号



第236図　集石遺構168号・出土遺物

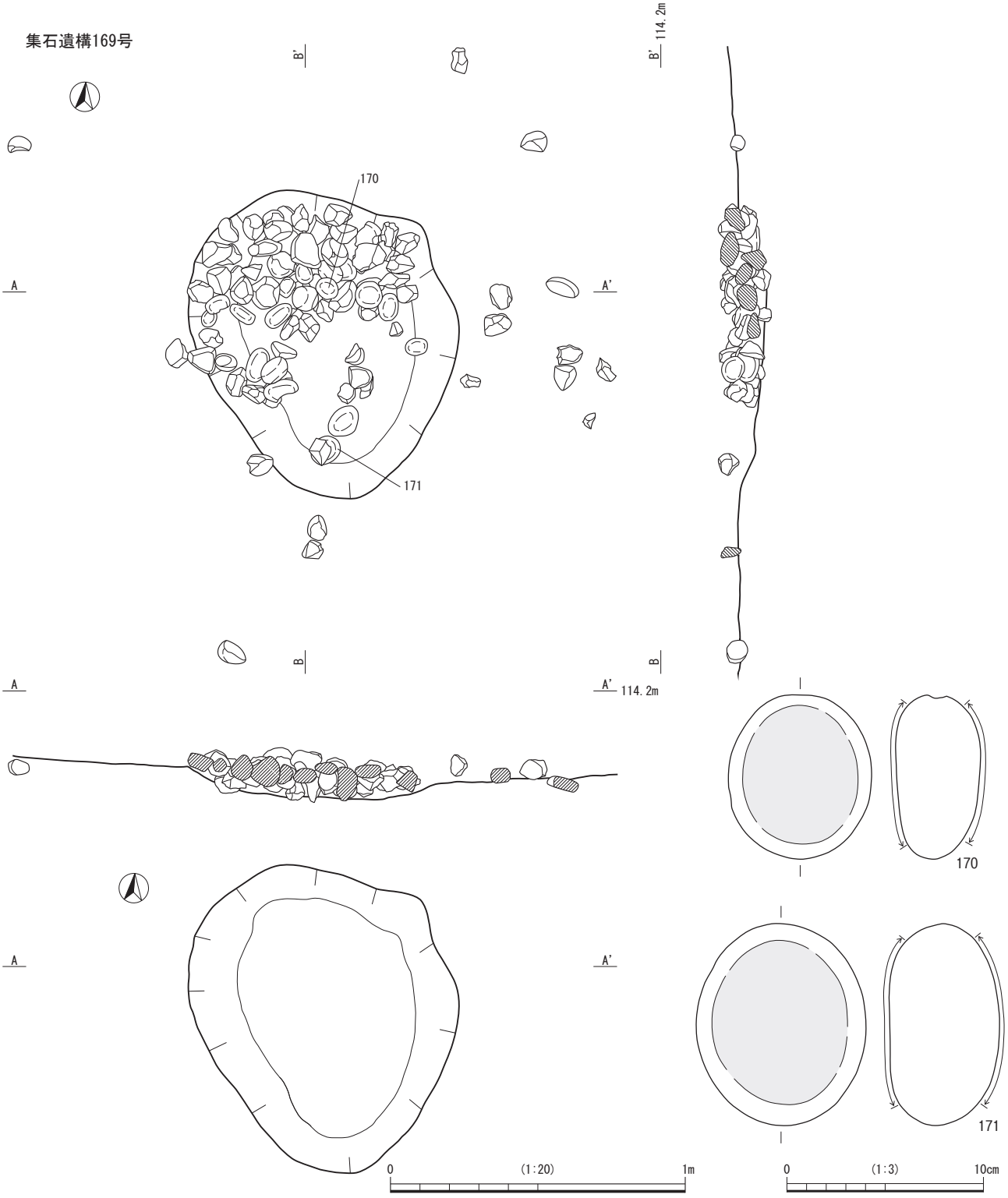
集石遺構169号（SQ169：第237図）

検出状況　Ⅰ-46区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は92個である。礫の集中部は，半径0.25ｍで，その中心から半径1.10ｍの範囲に礫全体が広がる0.08ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。400 ～ 500ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫6個も含まれる。170・171（第237図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類で，扁平な円礫の表裏両面を磨面として使用し，全体的に被熱している。

出土土器　出土していない。



第237図　集石遺構169号・出土遺物

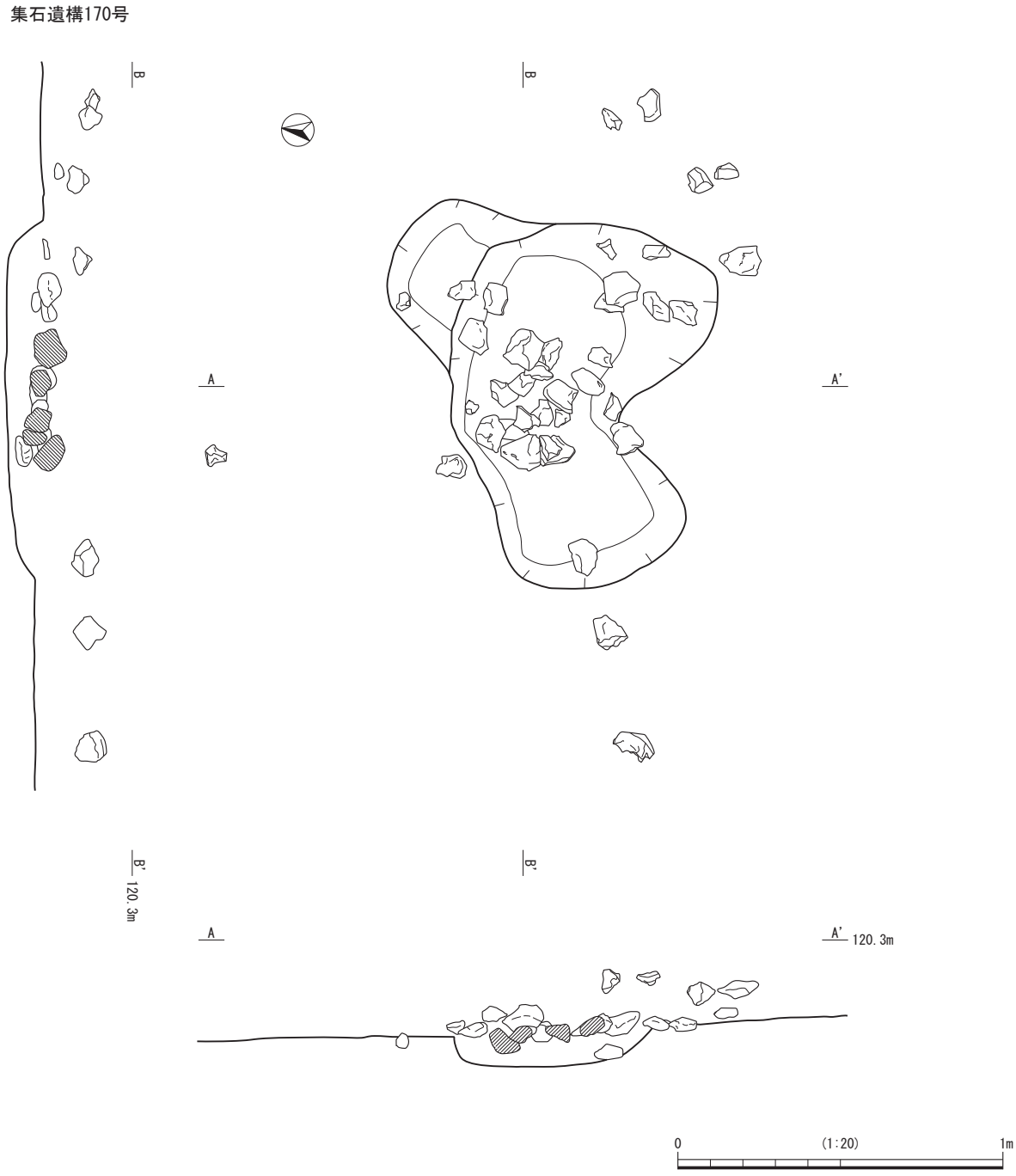
集石遺構170号（SQ170：第238図）

検出状況　E－12区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は40個である。礫の集中部は，半径0.20ｍで，その中心から半径1.20ｍの範囲に礫全体が広がる。0.12ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　砂岩が主体で，熱を受けている礫は確認できなかった。1000ｇを超える礫４個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第238図　集石遺構170号

集石遺構171号（SQ171：第239図）

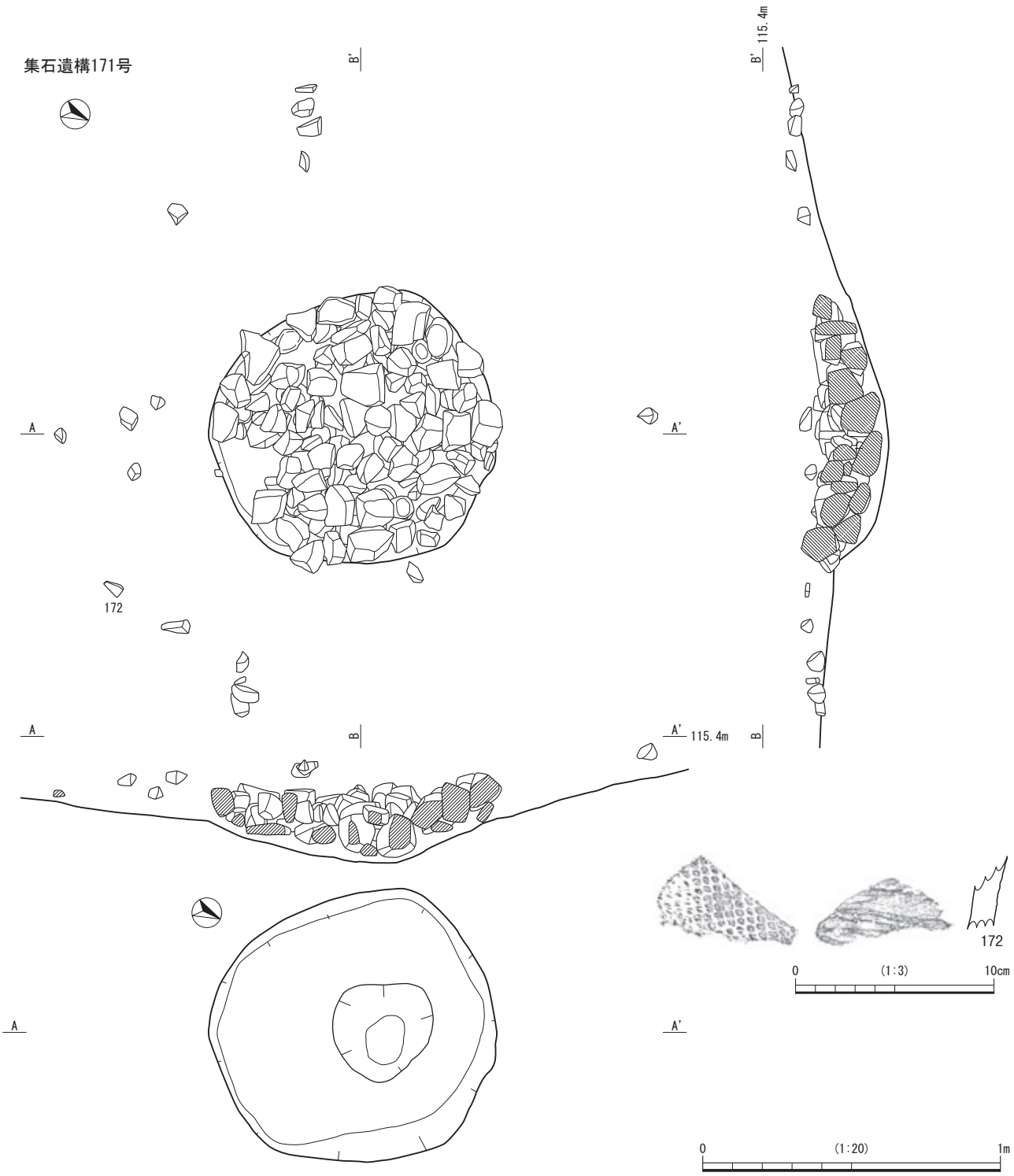
検出状況　C-25区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は137個である。礫の集中部は，半径0.90ｍで，その中心から半径1.20ｍの範囲に礫全体が広がる。0.15ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫35個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　胴部が１点出土し，図化した。172（第239図）である。外面に楕円押型文を斜位に施す。胎土には，５㎜を超える礫も含まれる。内面は，工具によるナデをおこなう。

土器分類　Ⅸ類に該当する。



第239図　集石遺構171号・出土遺物

集石遺構172号（SQ172：第240図）

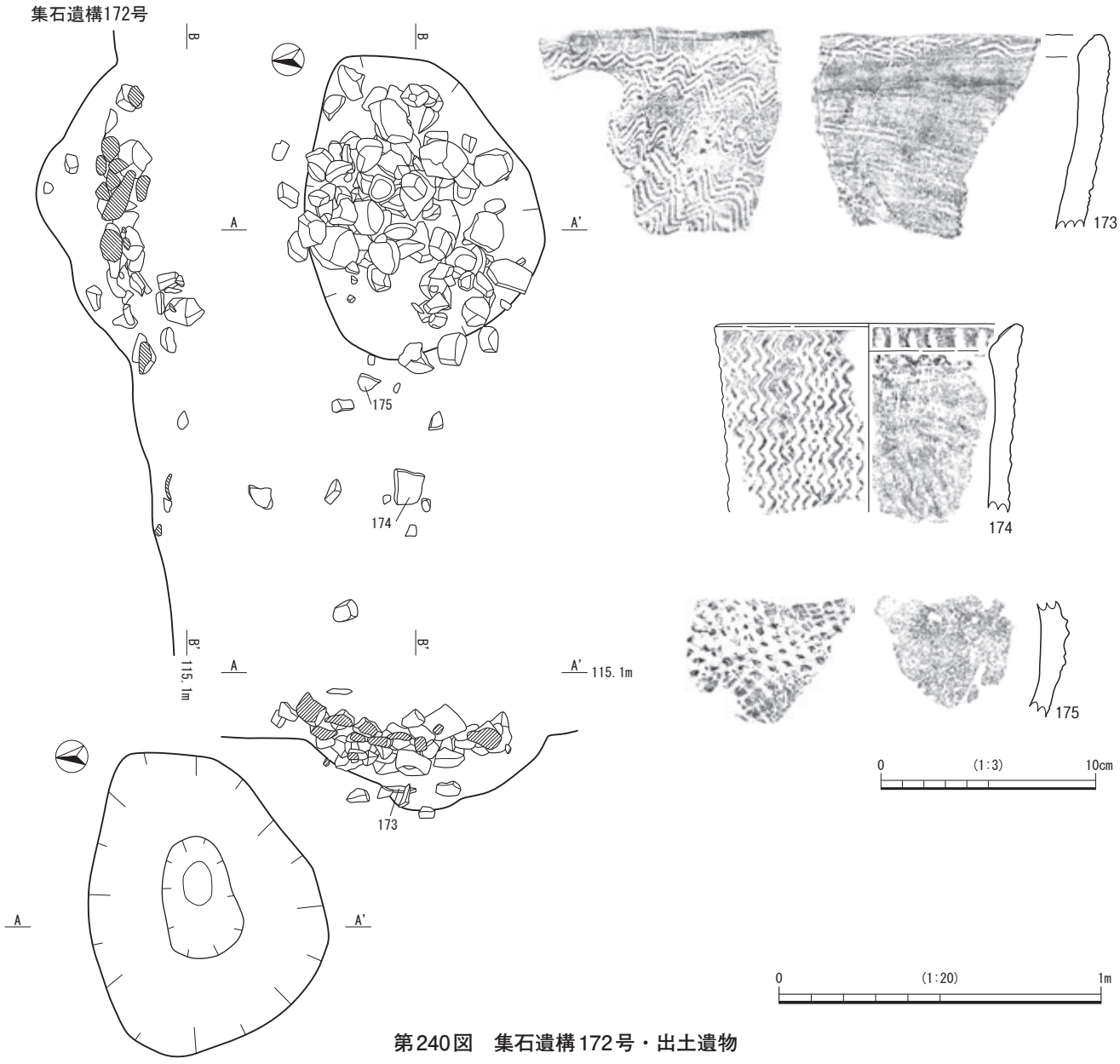
検出状況　C－27区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は116個である。礫の集中部は，半径0.30ｍで，その中心から半径1.25ｍの範囲に礫全体が広がる。0.23ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫の約20％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫７個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　口縁部が３点，胴部が１点出土している。そのうち３点を図化した。173・174・175（第240図）である。173は，やや内湾する口縁部である。口縁部外面上位に横位の流水文を施し，その下位には斜位の流水文を施す。口唇部の頂上は丸みを帯び，そこから1.2㎝程内傾した後，稜をもつ。稜に至る口縁部内面にのみ流水文を横位に施す。内面は，工具によるナデをおこなう。173は集石遺構36号（SQ36）出土遺物及び489（第308図）と同一個体と思われる。174は，直行する口縁部である。口縁部外面上位から山形押型文を縦位に施す。口唇部の外面側端部は丸みを帯び，そこから1.2㎝程内傾した後，稜をもつ。稜に至る口縁部内面は，棒状工具による条痕文を縦位に施し，その下位に山形押型文を施す。内面は，工具によるナデをおこなう。175は，菱形押型文を斜位に施す胴部である。図化していないもう１点の口縁部は，やや外反し外面に山形押型文を施す。口縁部内面の施文等については，剥落が著しいため不明である。胎土には，金雲母が含まれている。

土器分類　173・174はⅥ類に，175はⅨ類に該当する。図化していない口縁部もⅨ類に該当する。



第240図　集石遺構172号・出土遺物

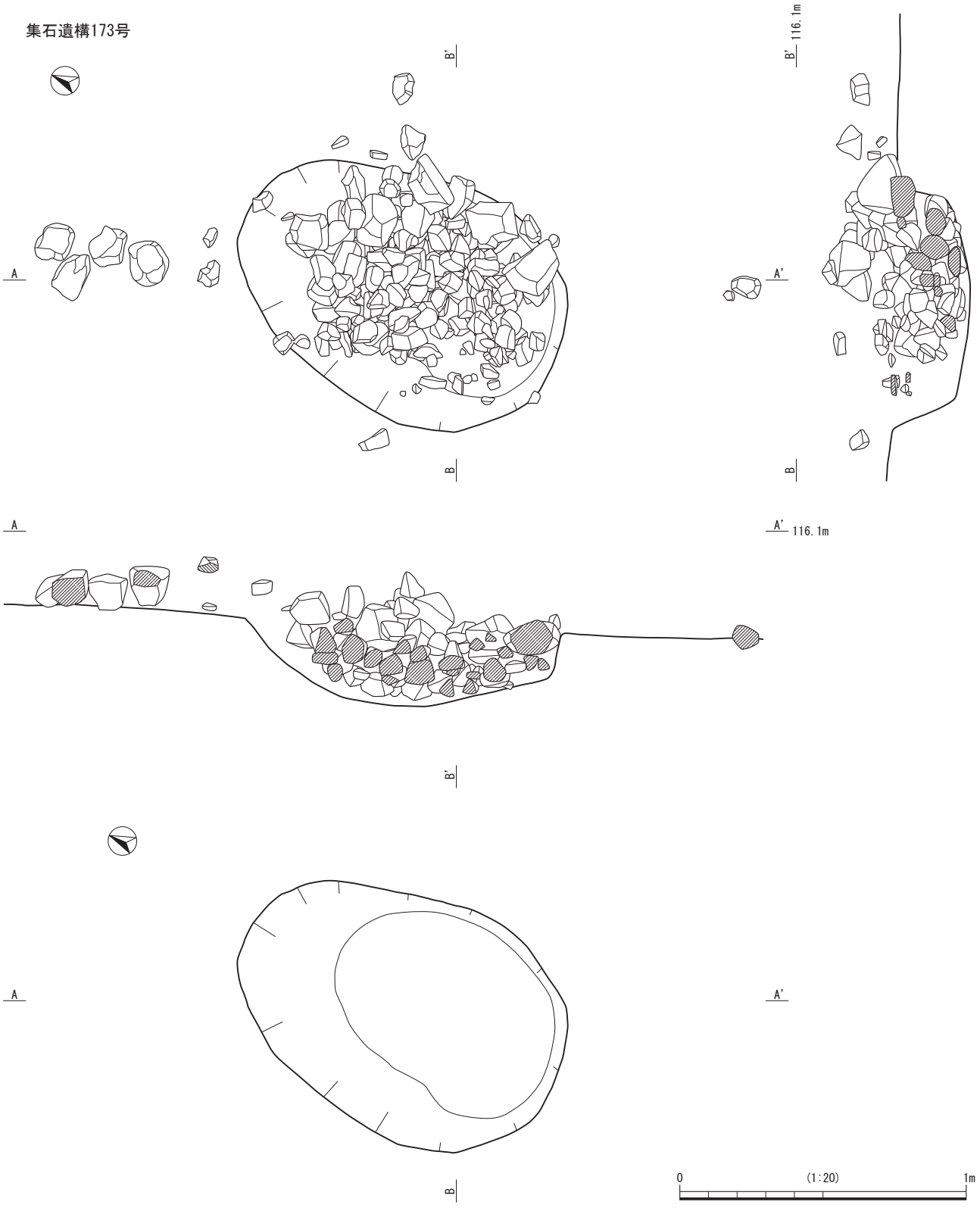
集石遺構173号（SQ173：第241図）

検出状況　C -24区，XI 層で検出された。

規　　模　構成礫総数は184個である。礫の集中部は，半径0.35ｍで，その中心から半径1.30ｍの範囲に礫全体が広がる。0.29ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　凝灰岩が主体で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200 ｇの礫が多いが，1000 ｇを超える礫25個も含まれる。

出土土器　出土していない。



第241図　集石遺構173号

集石遺構174号（SQ174：第242図）

検出状況　C－26区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は55個である。礫は，半径0.35ｍの範囲に集中している。0.28ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫全体の約30％が熱を受けている。600～700ｇの礫が多く，1000ｇを超える礫26個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構175号（SQ175：第242図）

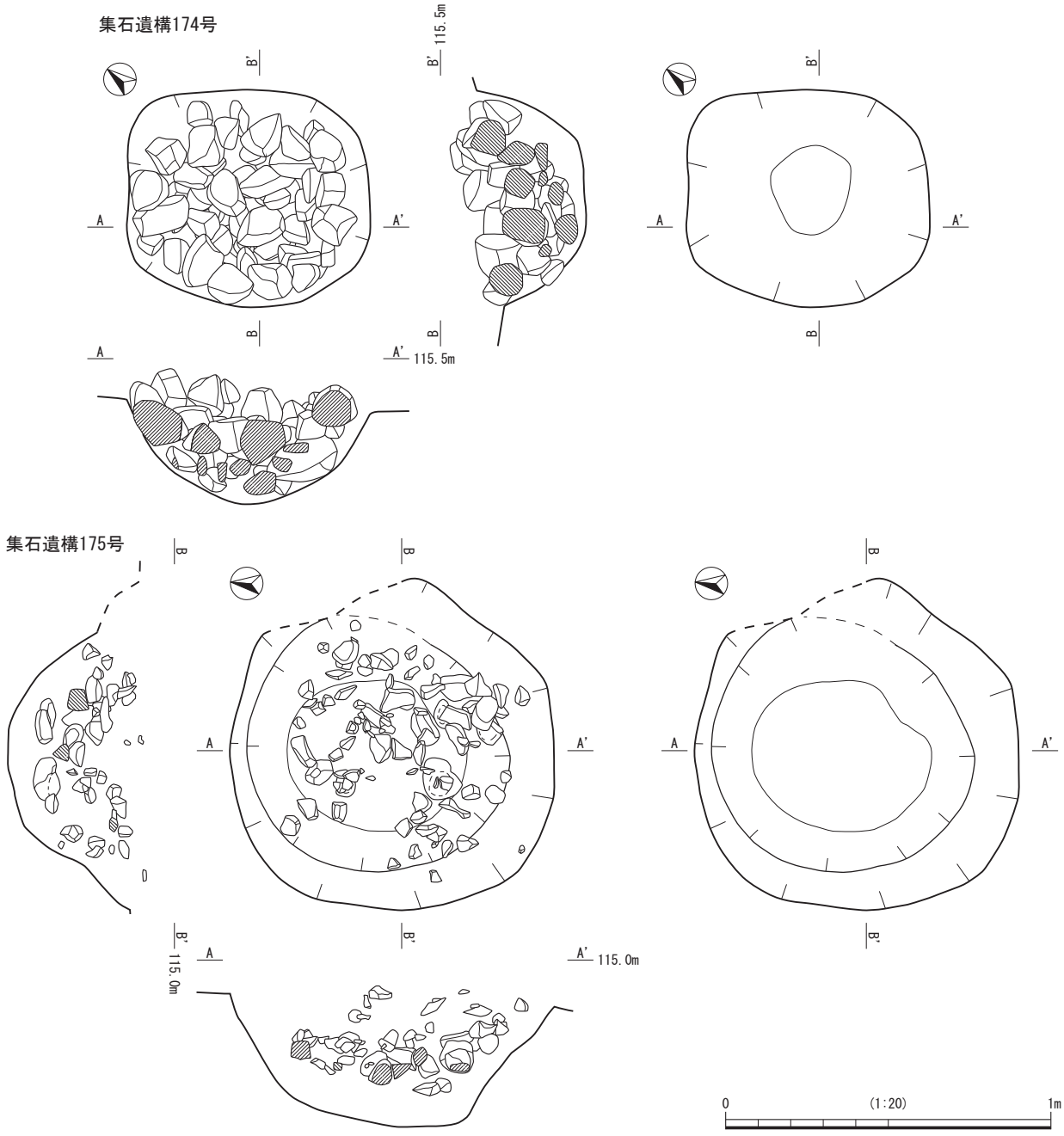
検出状況　B－26･27区，XII層で検出された。

規　　模　構成礫総数は87個である。礫の集中部は，半径0.30ｍで，その中心から半径0.45ｍの範囲に礫全体が広がる0.35ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　ホルンフェルスと安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　小破片の胴部が１点出土している。幅の狭い山形押型文が，明確ではないが縦位もしくは斜位に施す。胎土には，金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類　Ⅸ類に該当する。



第242図　集石遺構174号・集石遺構175号

集石遺構176号（SQ176：第243図）

検出状況　C－32･33区，XII層で検出された。

規　　模　構成礫総数は113個である。礫の集中部が，半径0.20ｍに広がり，その中心から半径0.85ｍの範囲に礫全体が広がる。0.48ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。200ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫３個も含まれる。

出土土器　出土していない。

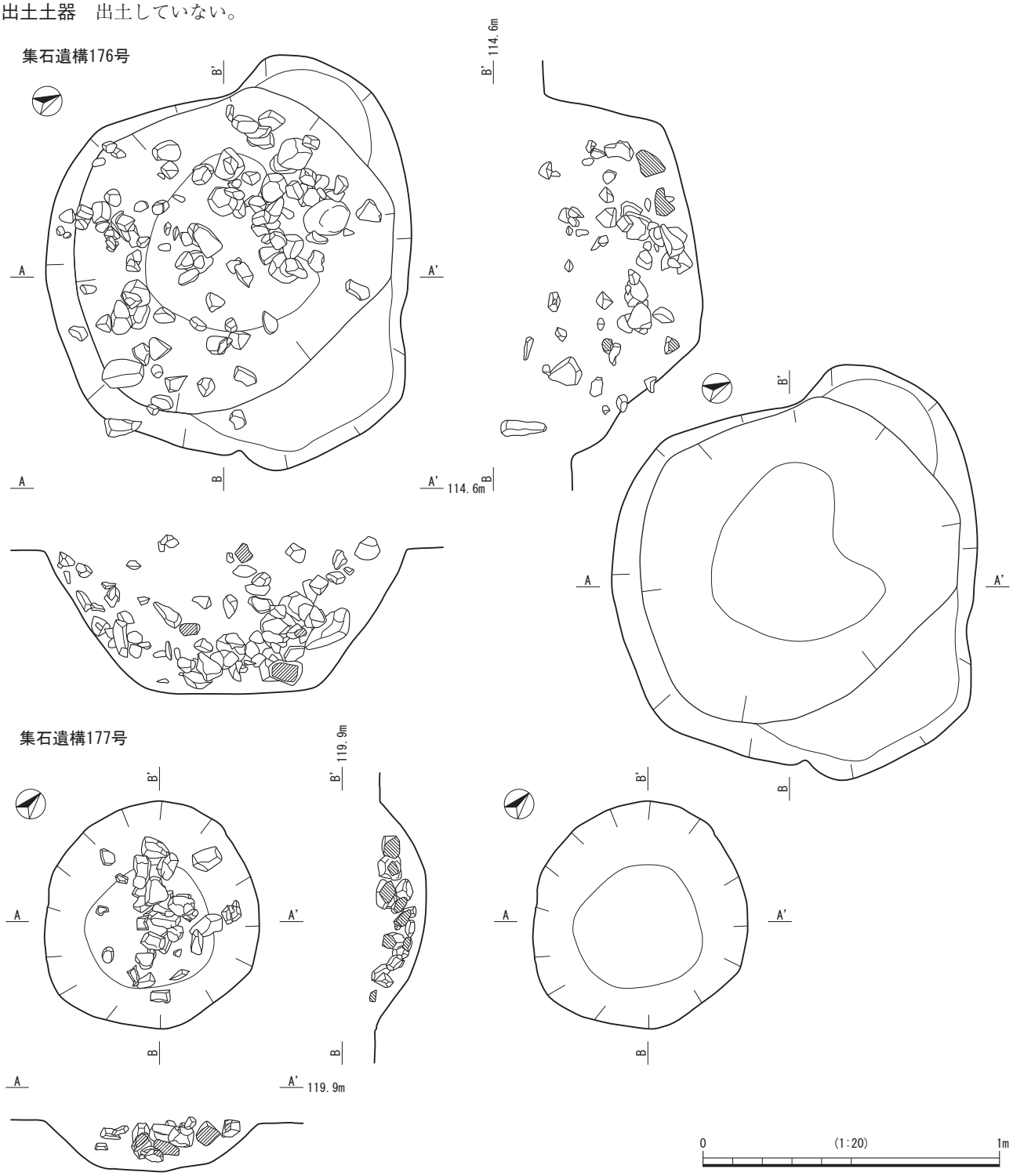
集石遺構177号（SQ177：第243図）

検出状況　D－９区，XIII層で検出された。

規　　模　構成礫総数は32個である。礫の集中部は，半径0.15ｍで，その中心から半径0.30ｍの範囲に礫全体が広がる。0.17ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体で，ほとんどの礫が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。



第243図　集石遺構176号・集石遺構177号

タイプⅣ

集石遺構178号（SQ178：第244図）

検出状況　D-25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は12個である。礫は，中心から半径0.25ｍの範囲に広がる。0.19ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　口縁部１点が出土し，図化した。176（第244図）である。外反する口縁部外面上位から楕円押型文を縦位に施す。口唇部及び口縁部内面に，楕円押型文を横位に施す。接合はできなかったが，色調や胎土，施文方法から166（第232図）・537（第317図）と同一個体と思われる。

土器分類　Ⅸ類に該当する。

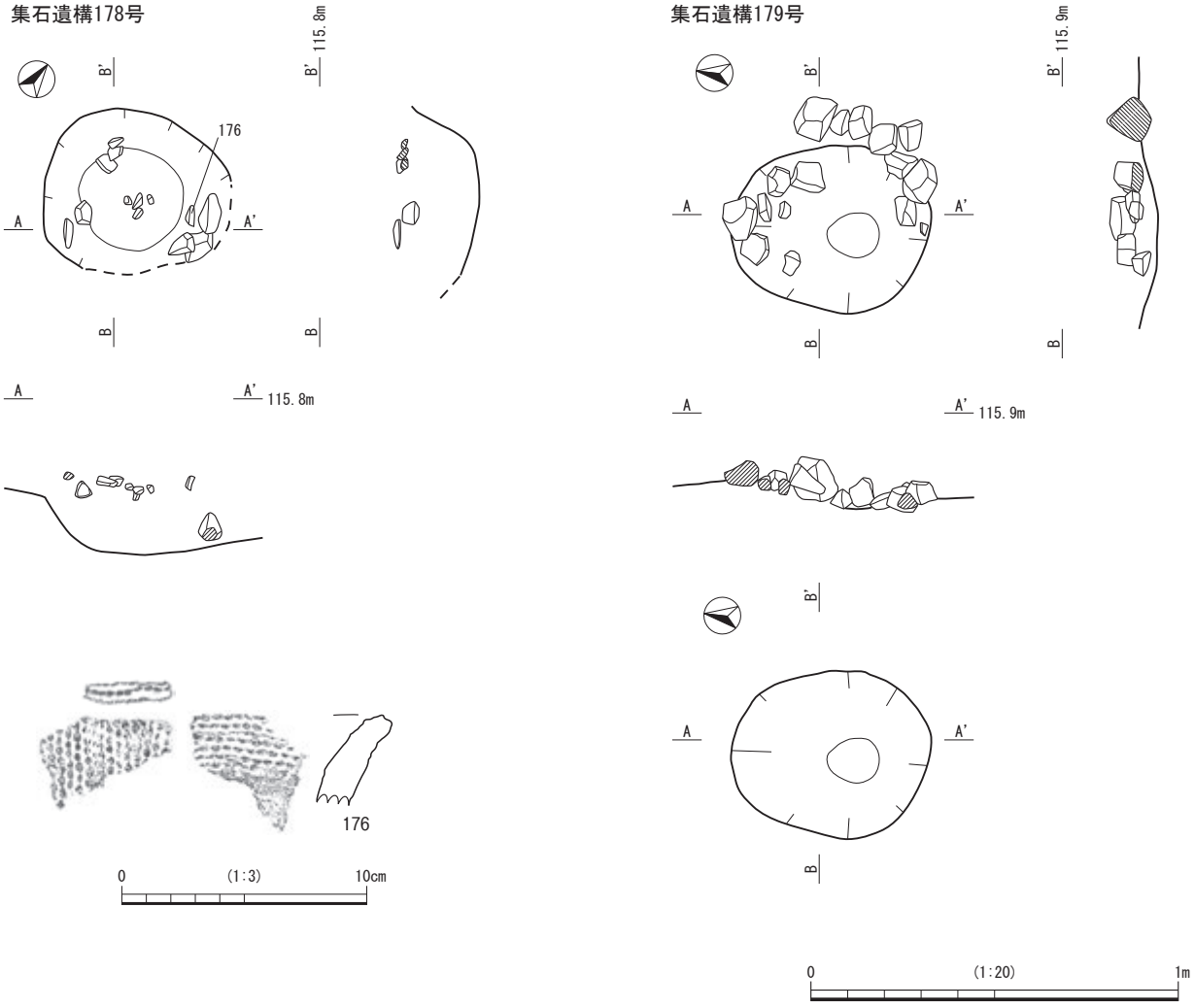
集石遺構179号（SQ179：第244図）

検出状況　C・D-26･27区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は15個である。礫は，中心から半径0.30ｍの範囲に広がる。0.08ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩のみで，構成礫全体の60％が熱を受けている。300 ～ 400ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　小破片の胴部が１点出土している。剥落はないが施文が確認できず，詳細は不明である。１～５㎜ほどの白色の小礫が多く含まれているが，金雲母は含まれていない。図化はしていない。



第244図　集石遺構178号・出土遺物・集石遺構179号

集石遺構180号（SQ180：第245図）

検出状況　B－25区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.35ｍの範囲に広がる。0.20ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルス，凝灰岩で，熱を受けている礫は少ない。100 ～ 200ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

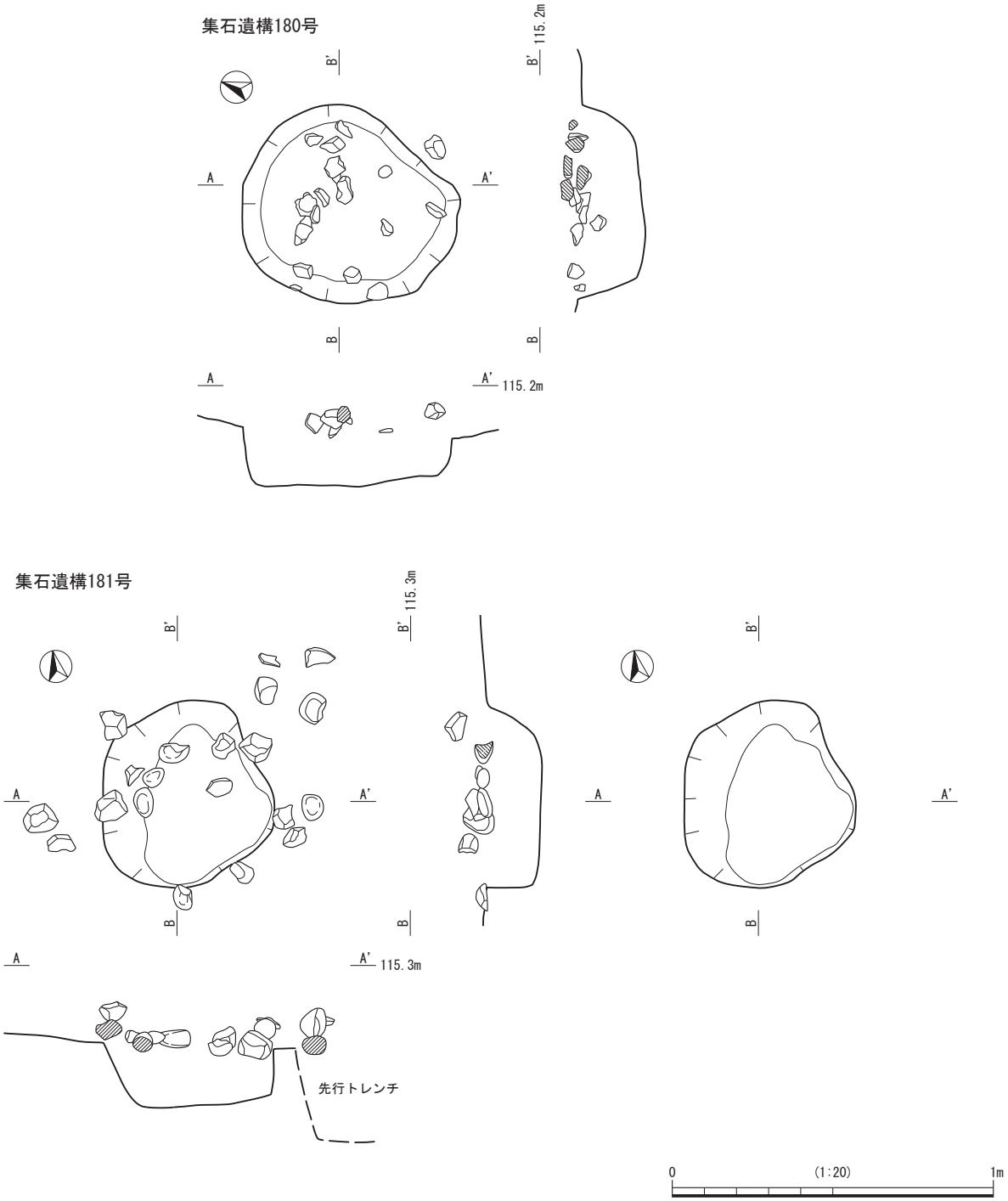
集石遺構181号（SQ181：第245図）

検出状況　D・E－32区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は19個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。0.15ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　構成礫は安山岩が多数でホルンフェルス等も含まれ，熱を受けている礫は１個しか確認できなかった。300 ～ 400ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。



第245図　集石遺構180号・集石遺構181号

集石遺構182号（SQ182：第246図）

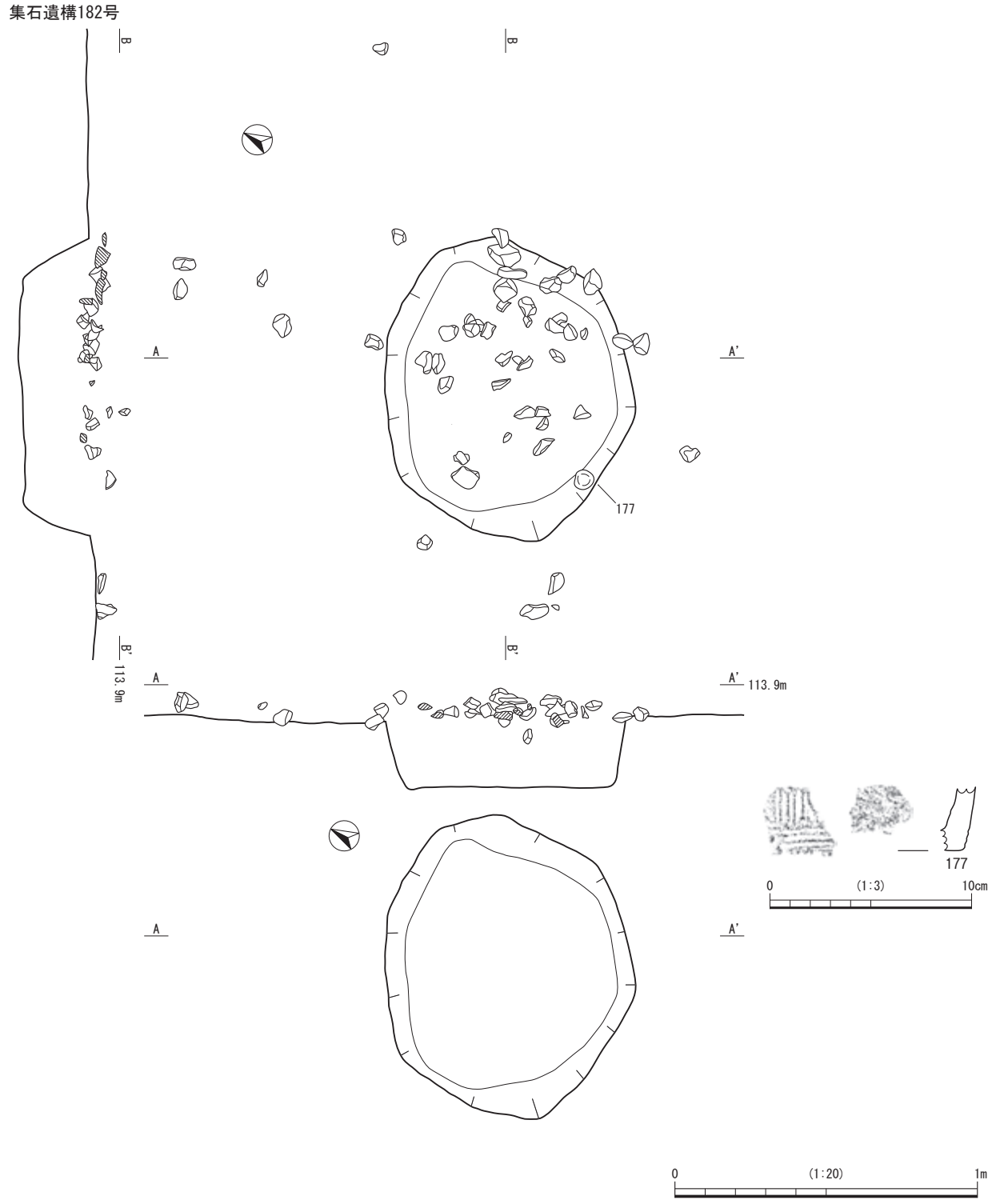
検出状況　L-51区，X層で検出された。

規　　模　構成礫総数は50個である。礫は，中心から半径1.00ｍの範囲に広がる。0.24ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　ホルンフェルスと安山岩が主体で，構成礫全体の約10％が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　胴部から底部が１点出土し，図化した。177（第246図）である。177は，底部外面端部にキザミは施さず，胴部下部に横位沈線文を施し，その上位に，縦位の沈線文を施す。底面は，平底である。

土器分類　沈線文の施行具は不明である。Ⅳ類に該当すると思われる。



第246図　集石遺構182号・出土遺物

集石遺構183号（SQ183：第247図）

検出状況　D－11区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は６個である。礫は，中心から半径0.20ｍの範囲に広がる。0.09ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　砂岩のみで，熱を受けている礫は確認できなかった。300 ～ 400ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。

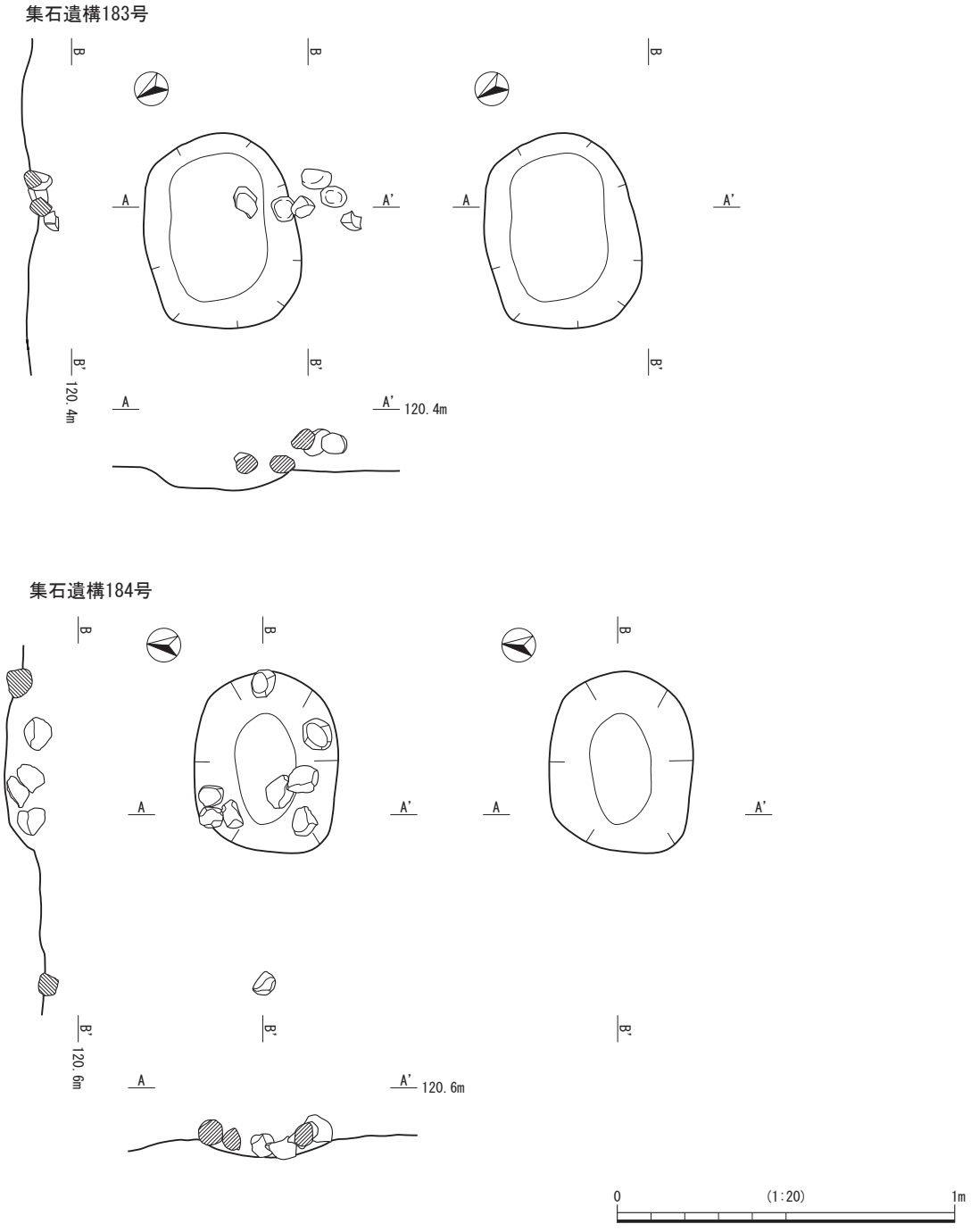
集石遺構184号（SQ184：第247図）

検出状況　C－10区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は９個である。礫は，中心から半径0.25ｍの範囲に広がる。0.07ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　ほぼ砂岩で，熱を受けている礫は確認できなかった。200 ～ 300ｇの礫が多い。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器　出土していない。



第247図　集石遺構183号・集石遺構184号

集石遺構185号（SQ185：第248図）

検出状況　B・C-25区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は34個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。0.28ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩とホルンフェルスが主体で，構成礫全体の約20％が熱を受けている。200 ～ 300ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫1個も含まれる。

出土土器　小破片の土器片が4点出土している。3点は剥落や欠損が著しく，明確な分類判断はできなかった。1点は底部近くの胴部で，山形押型文を縦位に施し，胎土には金雲母が含まれている。いずれも図化はしていない。

土器分類　1点はⅨ類に該当する。

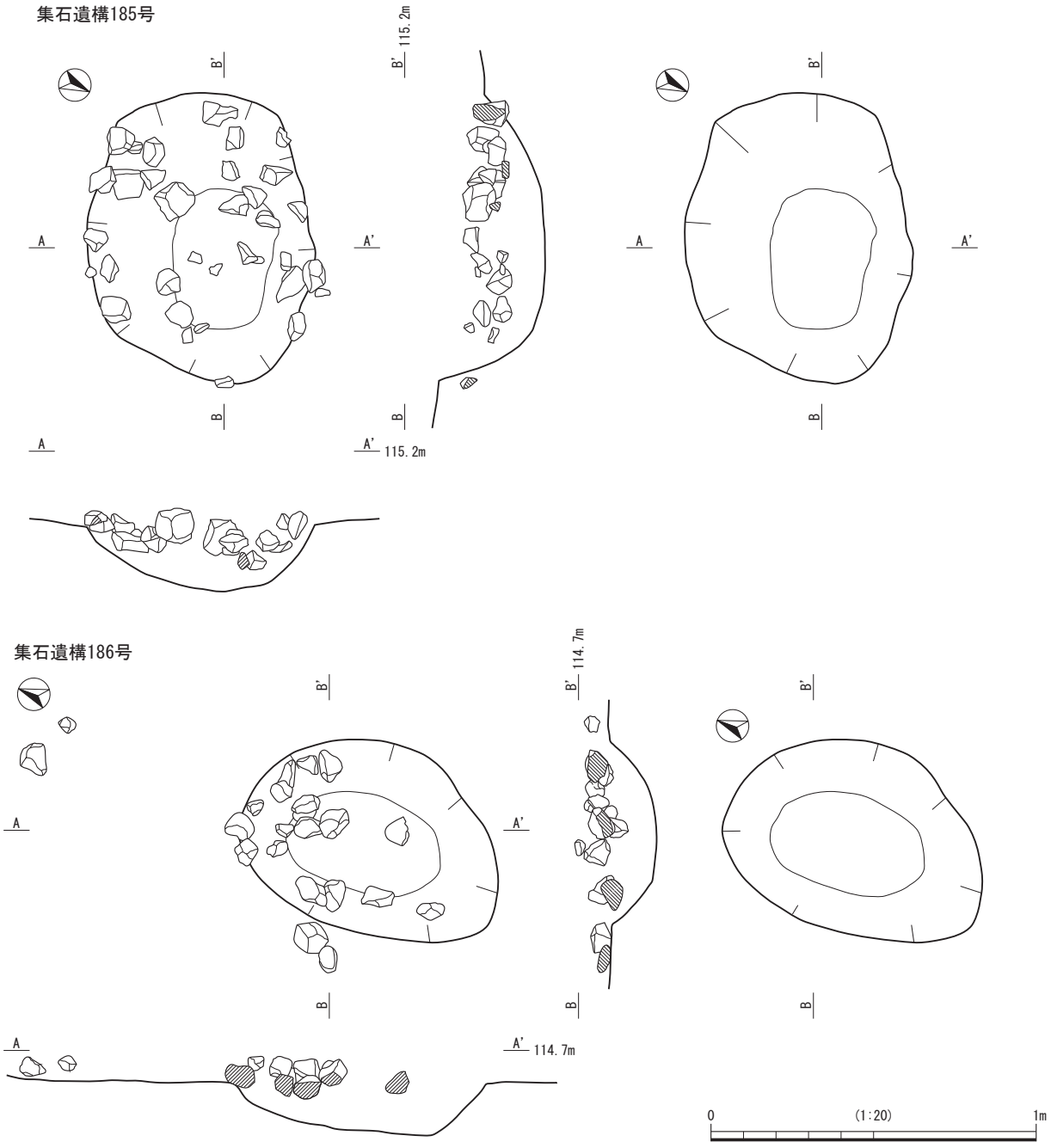
集石遺構186号（SQ186：第248図）

検出状況　Ⅰ-38区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は22個である。礫は，中心から半径0.70ｍの範囲に広がる。0.15ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　ほぼ安山岩で，熱を受けている礫は少ない。300 ～ 400ｇの礫が多い。

出土土器　出土していない。



第248図　集石遺構185号・集石遺構186号

集石遺構187号（SQ187：第249図）

検出状況　G-41区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は25個である。礫は，中心から半径0.75ｍの範囲に広がる。0.20ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，構成礫全体の約60%が熱を受けている。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。

出土土器　出土していない。

集石遺構188号（SQ188：第250図）

検出状況　E－９区，XI層で検出された。

規　　模　構成礫総数は115個である。礫は，中心から半径1.00ｍの範囲に広がる。0.40ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体で，構成礫全体のほとんどが熱を受けている。100ｇ以下の礫が半数を占める。

出土土器　出土していない。

集石遺構189号（SQ189：第250図）

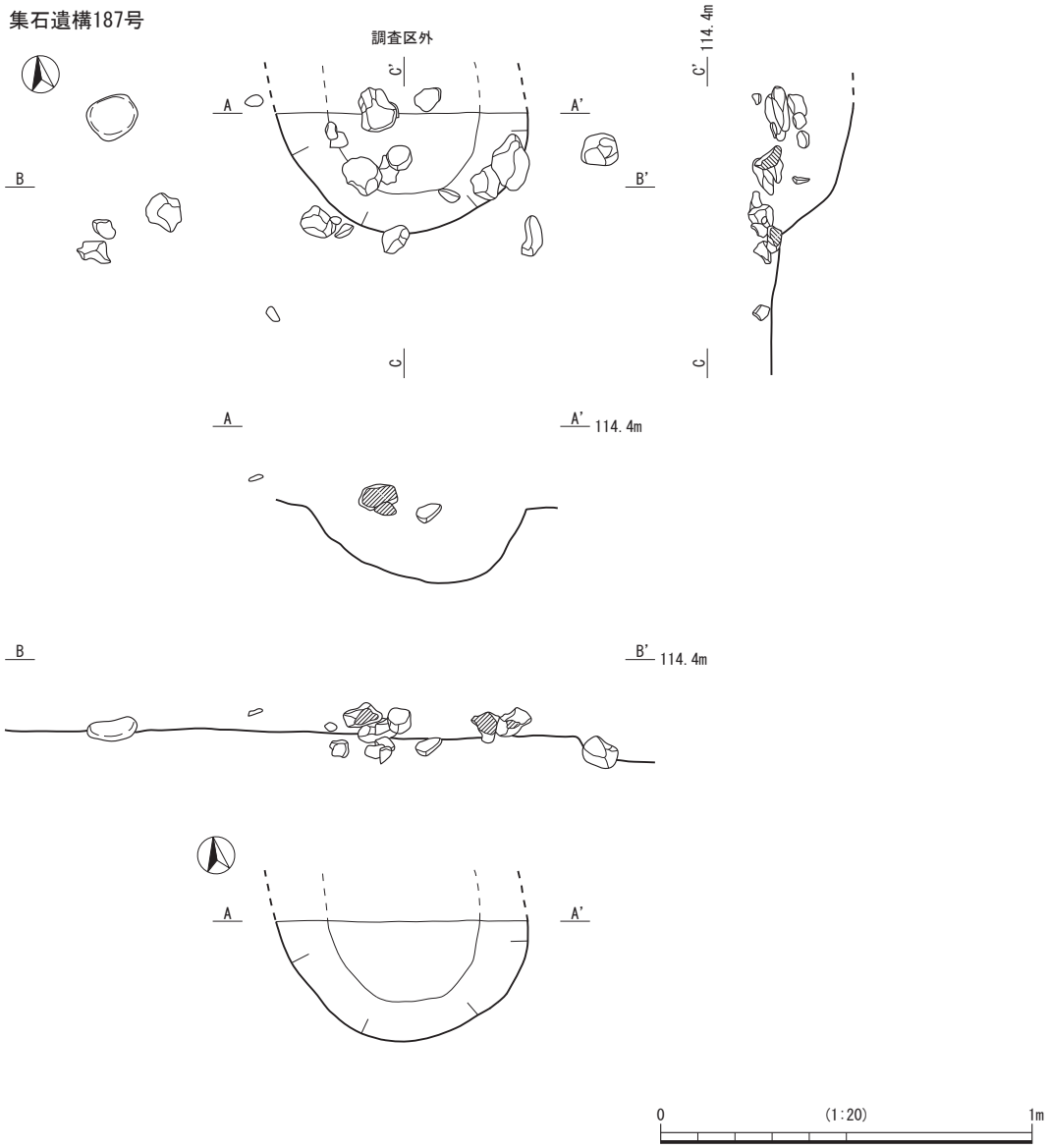
検出状況　D-24区，XII層で検出された。

規　　模　構成礫総数は26個である。礫は，中心から半径0.50ｍの範囲に広がる。0.29ｍの掘り込みを伴う。

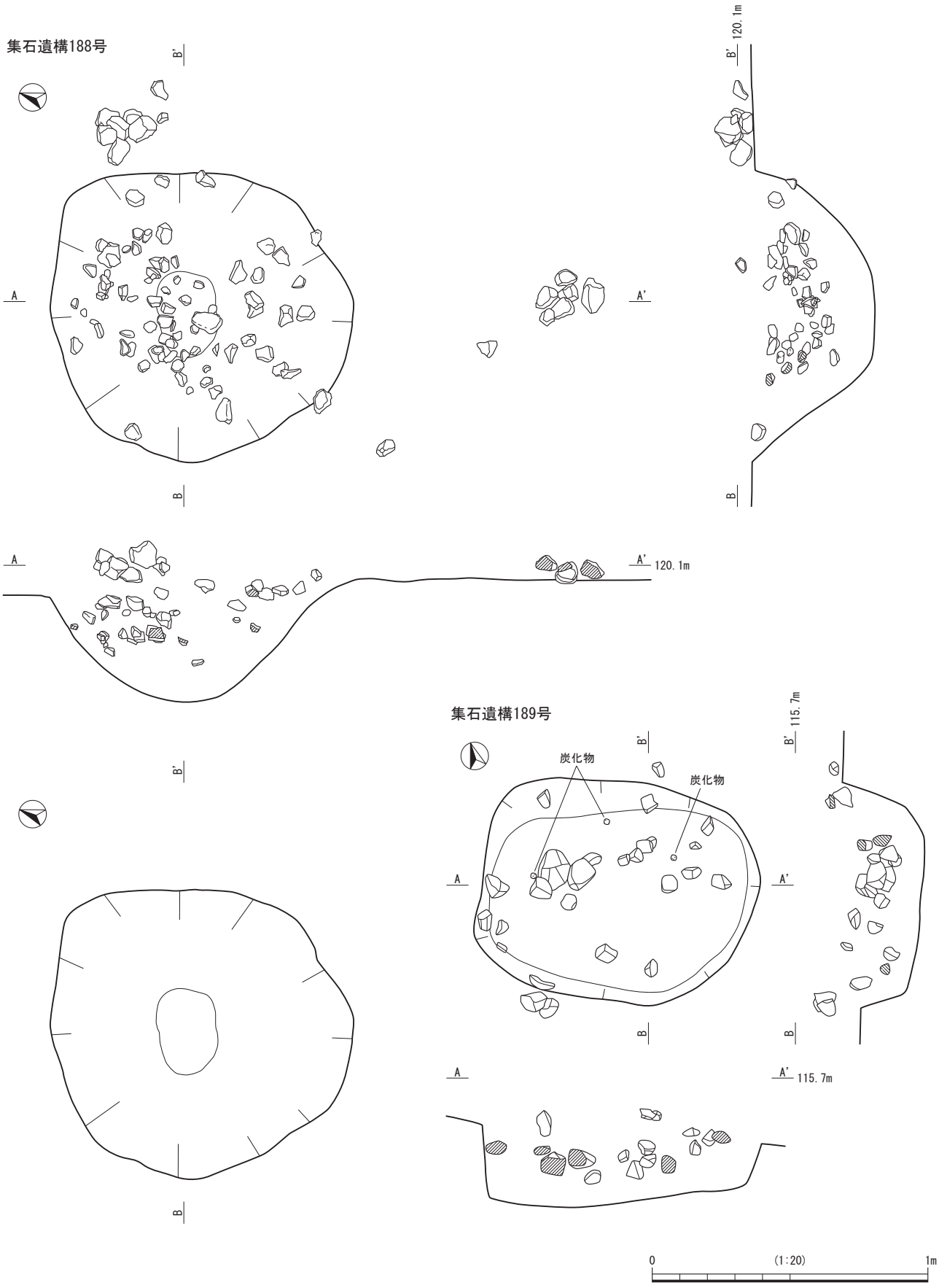
礫 構 成　ほぼ凝灰岩で，全ての構成礫が熱を受けている。100 ～ 200ｇの礫が多いが，1000ｇを超える礫２個も含まれる。

出土土器　出土していない。

炭 化 物　埋土中で確認された炭化物は，炭化材であった。科学分析の結果から，コナラ属に同定され，^{14}C年代測定は，7,521-7,353calBCを示した。



第249図　集石遺構187号



第250図　集石遺構188号・集石遺構189号

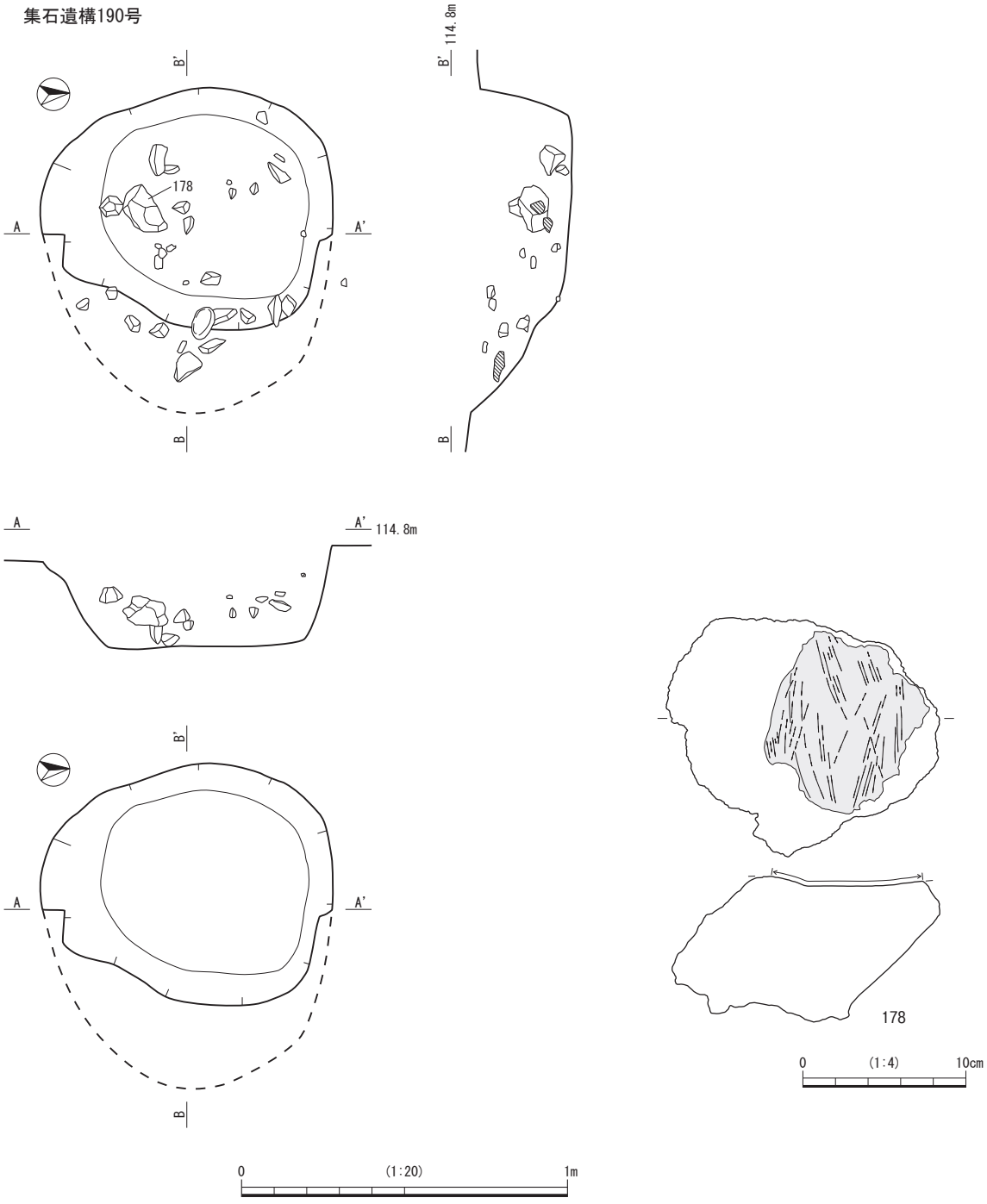
集石遺構190号（SQ190：第251図）

検出状況　B・C-25区，XII層で検出された。

規　　模　構成礫総数は32個である。礫は，中心から半径0.45ｍの範囲に広がる。0.28ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　ホルンフェルスと凝灰岩が主体で，熱を受けている礫は少ない。100ｇ以下の礫が多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。石皿の転用品が確認され，図化した。178（第251図）は破片資料だが，残存状態および浅くくぼむ磨面が残ることから石皿とした。ホルンフェルス製で，被熱しており磨面左半分周辺にススが付着する。

出土土器　出土していない。



第251図　集石遺構190号

集石遺構191号（SQ191：第252図）

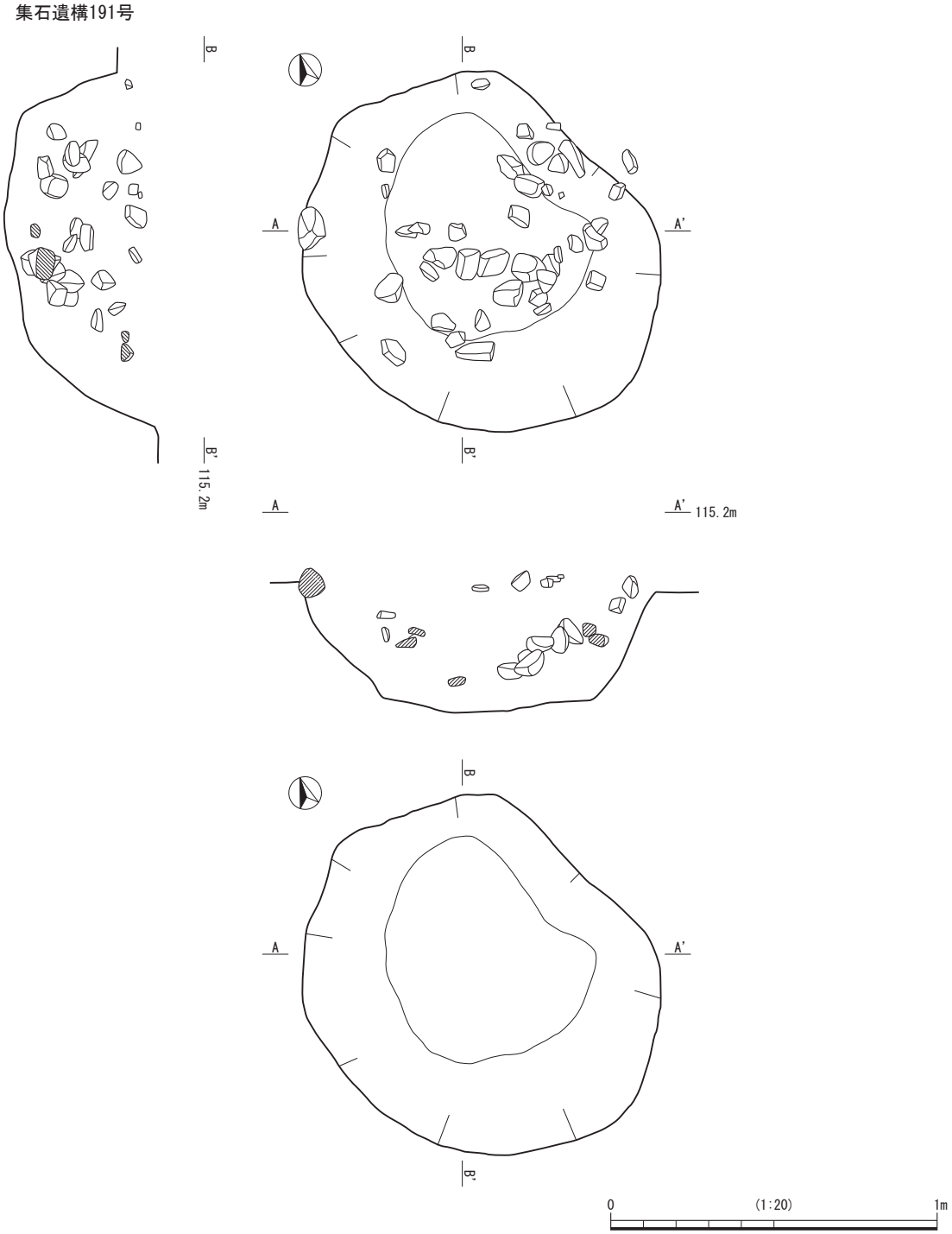
検出状況　D-26区，Ⅻ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は37個である。礫は，中心から半径0.55ｍの範囲に広がる。0.37ｍの掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩が主体でホルンフェルス等も含まれ，熱を受けている礫は少ない。100 ～ 200ｇの礫が最も多いが，1000ｇを超える礫１個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器　小破片の胴部が３点出土している。１点は剥落が激しく明確な分類判断はできなかった。１点は楕円押型文を施し，１点は山形押型文を施す。３点とも胎土には，金雲母が含まれている。いずれも図化はしていない。

土器分類　２点は，Ⅸ類に該当する。



第252図　集石遺構191号

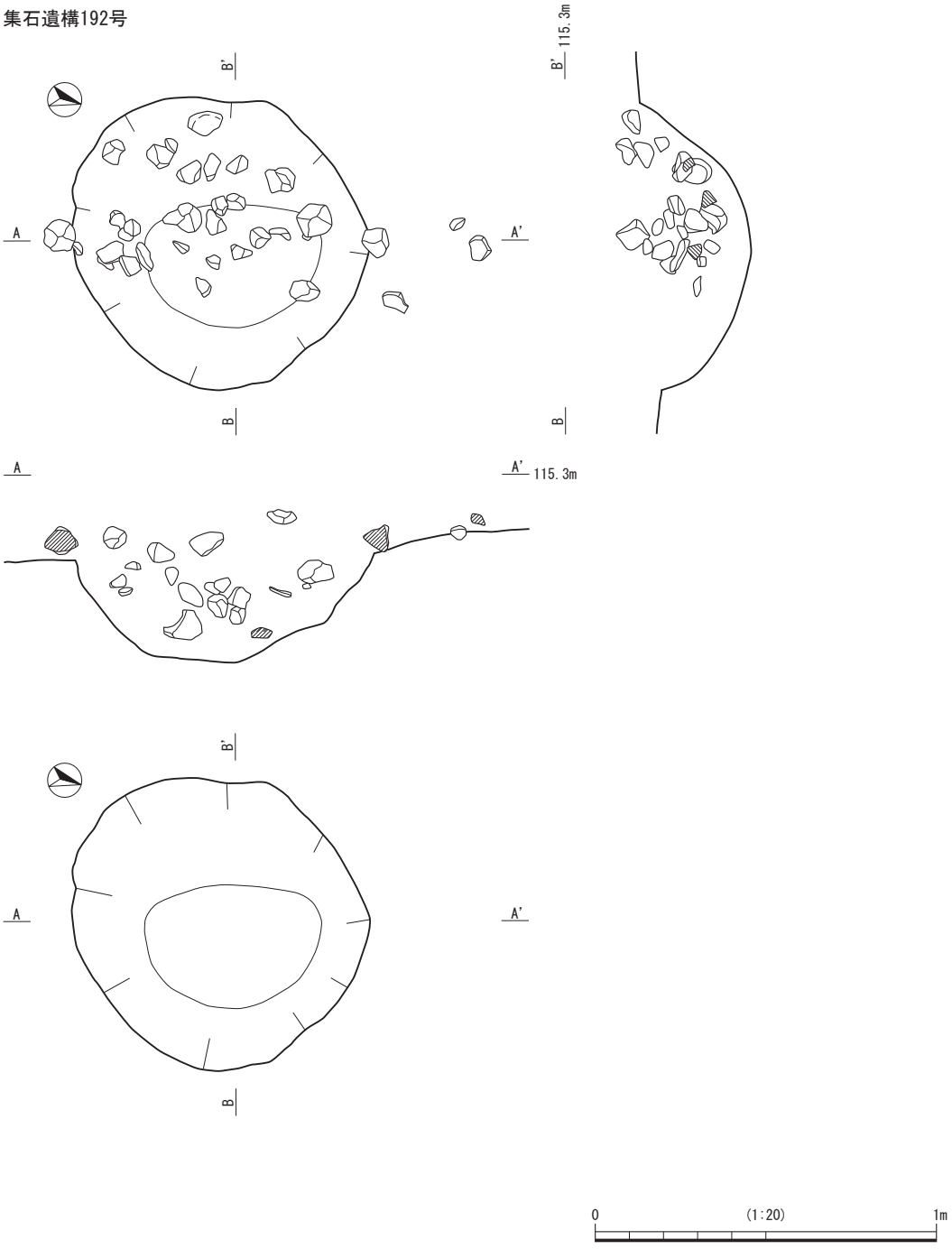
集石遺構192号（SQ192：第253図）

検出状況　D－25区，Ⅻ層で検出された。

規　　模　構成礫総数は34個である。礫は，中心から半径0.65ｍの範囲に広がる。0.30ｍ掘り込みを伴う。

礫 構 成　安山岩と凝灰岩が主体で，熱を受けている。礫は少ない。100ｇ以下の礫が多い。

出土土器　出土していない。



第253図　集石遺構192号

第31表　集石遺構一覧表１

遺構名	検出区	検出層	総礫数（個）	タイプ	範囲（半径：m）		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数													
					集中部	全体	有無	深さ（m）		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
SQ1	E-29	X	6	I	—	0.15	—	—	—	5			1	1	2	3											
SQ2	B-11	X	7	I	—	0.20	—	—	—	4				5	1	1											
SQ3	E-27	X	8	I	—	0.25	—	—	—	6	2				2		1	2		2		1					
SQ4	D-26･27	X	8	I	—	0.25	—	—	—	3	1	2	2	3	1	3	1										
SQ5	B-12	X	11	I	—	0.30	—	—	—	7		2		6	3		2										
SQ6	E･F-13	X	12	I	—	0.30	—	—	—	8		3		5	5	2											
SQ7	A-22	X	14	I	—	0.30	—	—	—	11	2	1		2	9	3											
SQ8	A-22	X	15	I	—	0.30	—	—	—	13	1		1	6	2	3	1	2	1								
SQ9	C-26	X	6	I	—	0.30	—	—	—	6					1	1		1				3					
SQ10	C-20	X	24	I	—	0.30	—	—	—	14	3	5	2	16	5	1	2										
SQ11	E-27	X	6	I	—	0.35	—	—	—	6						1	2	1				1		1			
SQ12	C-22	X	15	I	—	0.35	—	—	—	8	1	1	5	1	5	2	2	1	2		1			1			
SQ13	F-29	X	16	I	—	0.40	—	—	—	11		4	1	8	3	2	1	2									
SQ14	C-25	X	17	I	—	0.40	—	—	○	8	2		6	2	5	5		2	1				1				
SQ15	D-27	X	51	I	—	0.40	—	—	○	40	5	2	4	28	13	1	6	1	1	1							
SQ16	E-13	X	21	I	—	0.45	—	—	—	12			5	4	9	4	1	3									
SQ17	F-28	X	12	I	—	0.45	—	—	—	11					3	1	6		1				1				
SQ18	B-25	X	23	I	—	0.45	—	—	—	16	5	1	1	7	6	2		1			2	1		4			
SQ19	C-26	X	14	I	—	0.50	—	—	○	6	1		7	4	3	1		1	1			1	1	2			
SQ20	B-22	X	11	I	—	0.55	—	—	—	8			3	2	4	1	1						1	2			
SQ21	C-25	X	18	I	—	0.55	—	—	—	6	5	2	5	10	6	1	1										
SQ22	M-55	X	19	I	—	0.55	—	—	○	11	5	1	2	4	7	3	2		1			1	1				
SQ23	C-13	X	29	I	—	0.65	—	—	—	24		1		9	7	6	1		1	2	1		2				
SQ24	B-20	X	17	I	—	0.65	—	—	—	9	4		4	3	4	5	3	1	1								
SQ25	A･B-16	X	24	I	—	0.70	—	—	—	13		2	2	3	6	4		1	1		2	2		1	1	3		
SQ26	D-26	X	26	I	—	0.70	—	—	—	20	3		3	7	1	2	3	3	2	1	4	1	1	1				
SQ27	D-26	X	22	I	—	0.70	—	—	○	15	3	1	3	5	1	2	3	2	2	2	2			2	1			
SQ28	B-27	X	39	I	—	0.70	—	—	○	7	19	3	8	12	15	5	3		2									
SQ29	C-27	X	21	I	—	0.75	—	—	○	7	4		9	7	8	1	4						1				
SQ30	C-30	X	25	I	—	0.75	—	—	○	6	5	8	6	15	5	3	2										
SQ31	E-26	X	23	I	—	0.80	—	—	—	14	5	1	3	1	2	5	3	5	4	2		1					
SQ32	B-20	X	21	I	—	0.80	—	—	—	15	3		3	4	4	1		1	2	2	1	1	1	4				

第32表　集石遺構一覧表２

遺構名	検出区	検出層	総礫数（個）	タイプ	範囲（半径：m）		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数														
					集中部	全体	有無	深さ（m）		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
SQ33	C-26	X	26	I	—	0.85	—	—	○	8	3	7	8	4	5	6	2	4	1	1	1						1	1
SQ34	D-27	X	31	I	—	0.85	—	—	—	26	5			22	5			2		1		1						
SQ35	F-35	X	26	I	—	0.95	—	—	—	19	2		5	9	7	4	2		1		1			1	1			
SQ36	C-27	X	42	I	—	1.00	—	—	○	25	8	1	8	16	6	2	2	2	3	3	2	5		1				
SQ37	C-12	X	28	I	—	1.05	—	—	○	26				9	3	5	3			1			3		1	1		
SQ38	L-51	X	49	I	—	1.05	—	—	—	20	22	5	2	26	13	4	3	3										
SQ39	A-13	XI	13	I	—	0.35	—	—	—	13				6	4	3												
SQ40	D-14	XI	10	I	—	0.20	—	—	—	6				1	3	2		1	1	1		1						
SQ41	G-22	XI	7	I	—	0.20	—	—	—				7		1	2	1	2		1								
SQ42	C-25	XI	6	I	—	0.20	—	—	—	3	2		1	2	2			1	1									
SQ43	C-17	XI	19	I	—	0.25	—	—	—	12		2	2		12	6			1									
SQ44	E-13	XI	9	I	—	0.30	—	—	—	7		1		2	1	1	2	1	2									
SQ45	F-17	XI	15	I	—	0.30	—	—	—	9			1		2	2	1	3			1	1						
SQ46	E-22	XI	5	I		0.35	—	—	—			1	4			1			1		1		1					1
SQ47	B-17	XI	9	I	—	0.35	—	—	—	6			1		2	2	2	3										
SQ48	D-23	XI	19	I	—	0.35	—	—	—				18	3	8	5	1				1			1				
SQ49	C-15	XI	13	I	—	0.40	—	—	○	11			1	2	1	1	4	3		1			1					
SQ50	D-17	XI	17	I	—	0.40	—	—	—	8		2	4	5	9	2	1											
SQ51	F-22	XI	12	I	—	0.40	—	—	—	6			4			3	2	1	1	3	1	1						
SQ52	E-39	XI	21	I	—	0.40	—	—	—	12	8		1	20	1													
SQ53	B-27	XI	18	I	—	0.40	—	—	—	9	3		6	14	1	1	1							1				
SQ54	A･B-12	XI	10	I	—	0.45	—	—	—	10				4	3	3												
SQ55	D-13	XI	27	I	—	0.45	—	—	—	22		2			7	8	8	3	1									
SQ56	D-12	XI	16	I	—	0.45	—	—	—	14				3	4	3	2	1	2			1						
SQ57	D-14	XI	23	I	—	0.45	—	—	—	21			2	3	3	8	3	3	2		1							
SQ58	D-9	XI	13	I	—	0.45	—	—	—	13				2	1	1	3	5					1					
SQ59	D-17	XI	11	I	—	0.45	—	—	○	11					1	3	3	1		2				1				
SQ60	D-24	XI	17	I	—	0.45	—	—	—		2	1	4	4	2	2	3			1		1		3	1			
SQ61	C-25	XI	15	I	—	0.45	—	—	—	9	3		3	4	2	2		1		1	1	1		2	1			
SQ62	D-21	XI	19	I	—	0.45	—	—	—	11	3	3	2	5	7	2	4	1										
SQ63	C-31	XI	12	I	—	0.45	—	—	○	9		1	2	3		5		1	1	1				1				
SQ64	K-47	XI	22	I	—	0.45	—	—	—	8	9	2	3	9	7	3	2			1								

第33表　集石遺構一覧表３

遺構名	検出区	検出層	総礫数（個）	タイプ	範囲（半径：m）		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数														
					集中部	全体	有無	深さ（m）		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
SQ65	E-22	Ⅺ	5	Ⅰ		0.50	—	—	—				5					1	1			1		2				
SQ66	E-14	Ⅺ	20	Ⅰ	—	0.50	—	—	—	10		1	6	6	1	3	4	5	1									
SQ67	F-18	Ⅺ	11	Ⅰ	—	0.50	—	—	○	8			2	2	1	1	1	2	2		1		1					
SQ68	F-24	Ⅺ	16	Ⅰ	—	0.50	—	—	—			3	5	5	3	1	4	2										1
SQ69	M-52	Ⅺ	27	Ⅰ	—	0.50	—	—	—	11	8	2	6	7	9	6	2	2		1								
SQ70	B-14	Ⅺ	19	Ⅰ	—	0.55	—	—	○	8		2	4	2	3	3	6	1	2	1						1		
SQ71	J-48	Ⅺ	19	Ⅰ	—	0.55	—	—	○	14	1		1	1	1	1	7	2	6		1							
SQ72	I-50	Ⅺ	13	Ⅰ	—	0.55	—	—	—	12	1			1	2	5	2	2						1				
SQ73	E-24	Ⅺ	21	Ⅰ	—	0.60	—	—	—			1	18	1	4	8	7		1									
SQ74	E･F-23	Ⅺ	16	Ⅰ	—	0.65	—	—	—		2	1	11		3	4		4	3	1		1						
SQ75	E-21	Ⅺ	35	Ⅰ	—	0.65	—	—	—		4	5	21	15	14	4	2											
SQ76	D-15	Ⅺ	30	Ⅰ	—	0.70	—	—	—	17		1	2	13	8	7	1		1									
SQ77	E-22	Ⅺ	32	Ⅰ	—	0.70	—	—	—				30	2	9	5	2	2	3	1	2	2	2	1	1			
SQ78	B-16	Ⅺ	35	Ⅰ	—	0.75	—	—	—	22		1		11	17	4	1	1		1								
SQ79	E-10	Ⅺ	16	Ⅰ	—	0.75	—	—	—	5		2	3	5	2	5	2	1	1									
SQ80	E-22	Ⅺ	22	Ⅰ	—	0.75	—	—	—		1	1	11		2		4	6	1		1	2	1	5				
SQ81	E-13	Ⅺ	20	Ⅰ	—	0.80	—	—	○	17				2	7	6	3	2										
SQ82	A･B-15	Ⅺ	25	Ⅰ	—	0.80	—	—	—	12		1	6	7	3	3	4		2	2		1		2		1		
SQ83	E-23	Ⅺ	17	Ⅰ	—	0.80	—	—	—	2		5	4	5	6	2			1	1			1	1				
SQ84	C･D-24	Ⅺ	27	Ⅰ	—	0.80	—	—	—			1	22	9	2	4	3	4	2	1			1	1				
SQ85	F-16･17	Ⅺ	30	Ⅰ	—	0.85	—	—	—	25			2	3		1	3	4	6	2	4		6	1				
SQ86	F-24	Ⅺ	36	Ⅰ	—	0.85	—	—	—				33	2	12	12	9	1										
SQ87	G-21	Ⅺ	21	Ⅰ	—	0.95	—	—	—				11	7	4	5	1	2	1	1								
SQ88	E-33	Ⅺ	32	Ⅰ	—	0.95	—	—	—	24			8	7	11	8	2	3			1							
SQ89	K-47	Ⅺ	35	Ⅰ	—	1.05	—	—	—	35				1	2	7	6	5	5	4		2	1	2				
SQ90	D-24	Ⅺ	22	Ⅰ	—	1.15	—	—	—	7		3	6	9	5	4	2	1	1									
SQ91	F-24	Ⅺ	60	Ⅰ	—	1.20	—	—	○			2	56	6	14	9	8	9	4	1			1	6	2			
SQ92	A･B-17	Ⅺ	38	Ⅰ	—	1.35	—	—	—	25		2	5	14	5	3	2	3	2	1	1		1	3	3			
SQ93	E-39	Ⅺ	63	Ⅰ	—	1.70	—	—	○	37	16	2	8	22	14	7	5	4	3	1	1	1		1	1	3		
SQ94	D-24	Ⅻ	36	Ⅰ	—	0.50	—	—	—				28	4	3	2	4	1	3	5	3	4		3	3	1		
SQ95	E-36	Ⅻ	27	Ⅰ	—	0.95	—	—	—	17	6		4	13	12	1	1											
SQ96	E-13	Ⅹ	26	Ⅱ	0.15	0.50	—	—	—	15		1	2	20	4	1	1											

第34表　集石遺構一覧表４

遺構名	検出区	検出層	総礫数（個）	タイプ	範囲（半径：m）		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数													
					集中部	全体	有無	深さ（m）		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
SQ97	F-13	X	20	Ⅱ	0.10	0.50	—	—	—	4		8		1	9	4	4		2									
SQ98	F-13	X	40	Ⅱ	0.10	0.55	—	—	—	11		21	3	8	9	12	5	4	2									
SQ99	B-17	X	15	Ⅱ	0.15	0.20	—	—	—	9		1			4	3	1	1	2	1		2	1					
SQ100	E-29	X	10	Ⅱ	0.20	0.45	—	—	—	5	1		4		2	2	3	3										
SQ101	F-29	X	22	Ⅱ	0.20	1.30	—	—	—	18	1	2	1	1	4	1	8	6	2									
SQ102	D-28	X	20	Ⅱ	0.20	0.90	—	—	—	12	6		2	5	3	1	2	3	2					3	1			
SQ103	D-25	X	26	Ⅱ	0.15	0.60	—	—	○	18		1	7	5	6	4	4	4	1	2								
SQ104	C-26	X	42	Ⅱ	0.20	1.10	—	—	○	31	1	2	8	5	6	4	2	4	6	3	6	1	2	1	2			
SQ105	B-26	X	12	Ⅱ	0.15	0.30	—	—	—	9	2		1	2		5	1	1	2				1					
SQ106	C-20	X	35	Ⅱ	0.30	0.50	—	—	—	22	3	4	6		10	10	5	4	1	1	1			2	1			
SQ107	C-20	X	23	Ⅱ	0.20	0.45	—	—	—	17	1	3	2	3	2		2	4	2	1	2	2	1	4				
SQ108	C-26	X	5	Ⅱ	0.15	—	—	—	—	4			1	1					1				2	1				
SQ109	D-25	X	28	Ⅱ	0.20	0.55	—	—	—	11	5		12	5	8	7	3	2	1	2								
SQ110	D-25	X	36	Ⅱ	0.25	0.80	—	—	—	21	8		7		4	5	5	5	3	2	2	2	2	6				
SQ111	C-20	X	12	Ⅱ	0.25	0.50	—	—	—	11			1		1	1			1						2	1	1	5
SQ112	D-25	X	42	Ⅱ	0.20	0.90	—	—	○	29	4	3	6	5	5	5	9	6	4	4	3			1				
SQ113	E-31	X	20	Ⅱ	0.10	0.40	—	—	—	17	2	1			5	5	5	1	3			1						
SQ114	E-35･36	X	33	Ⅱ	0.10	1.00	—	—	—	28			5				5	7	5	1	4	2	2	6	1			
SQ115	E-35	X	82	Ⅱ	0.25	1.20	—	—	—	55	2	3	22	2	7	18	14	8	13	6	5		5	4				
SQ116	C-28	X	41	Ⅱ	0.20	0.85	—	—	—	22	9	1	9	4	11	9	7	4	2	3			1					
SQ117	C-27	X	29	Ⅱ	0.15	1.00	—	—	○	19	2	2	6	5	5	4	2	4	3	2			1	2			1	
SQ118	C-27	X	66	Ⅱ	0.20	2.25	—	—	○	44	4	3	15	28	18	10	4	2	2		1	1						
SQ119	C-27	X	16	Ⅱ	0.10	0.60	—	—	—	10	1		5	4	2	3	3	2		1				1				
SQ120	C-27	X	43	Ⅱ	0.15	0.75	—	—	—	28	3	2	10	13	18	10	2											
SQ121	K-50	X	11	Ⅱ	0.15	0.35	—	—	○	6	3	2			2	1	1	2	2		2		1					
SQ122	J-51	X	16	Ⅱ	0.15	0.40	—	—	○	15			1				2	1	2	1	3		2	5				
SQ123	F-18	Ⅺ	10	Ⅱ	0.15	0.20	—	—	○	10				1			2	2	2				2	1				
SQ124	D-30	Ⅺ	16	Ⅱ	0.10	0.30	—	—	—	14			2	1	2	7	2	1	1	1	1							
SQ125	H-45	Ⅺ	10	Ⅱ	0.10	0.40	—	—	○	7			3		4		1			2		1		1				1
SQ126	A･B-13	Ⅺ	12	Ⅱ	0.10	0.45	—	—	—	12				4	7	1												
SQ127	C-15	Ⅺ	38	Ⅱ	0.20	0.45	—	—	—	21		4	7	4	8	10	5	1	2	2	2	1		3				
SQ128	I-52	Ⅺ	21	Ⅱ	0.10	0.65	—	—	—	19	2			5	6	2	1	2	3	1	1							

第35表　集石遺構一覧表５

遺構名	検出区	検出層	総礫数（個）	タイプ	範囲（半径：m）		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数												
					集中部	全体	有無	深さ（m）		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
SQ129	E-18	Ⅺ	28	Ⅱ	0.15	0.70	—	—	—	9	10	4	5	7	17	3	1										
SQ130	F-40	Ⅺ	34	Ⅱ	0.20	0.70	—	—	—	14	14	2	4	3	9	6	8	1	5	2							
SQ131	I-52	Ⅺ	25	Ⅱ	0.15	0.70	—	—	○	18	2	1	4	6	6	3	3	2	3		1		1				
SQ132	D-14	Ⅺ	32	Ⅱ	0.15	0.75	—	—	—	20		1	1	6	8	6	5	4	2				1				
SQ133	F-35	Ⅺ	32	Ⅱ	0.10	0.75	—	—	○	16	3	1	11	6	11	5	2	5	1		2						
SQ134	C-27･28	Ⅺ	12	Ⅱ	0.10	0.75	—	—	○	8	2	1	1	1	1	2			1	1		1	3	1	1		
SQ135	D-30	Ⅺ	18	Ⅱ	0.10	0.75	—	—	—	15	1	1	1	3	1	3	6	2	1	1				1			
SQ136	F-15	Ⅺ	13	Ⅱ	0.10	0.80	—	—	—	6	3			2		2	2		1		1	1	1	1	2		
SQ137	D-15	Ⅺ	26	Ⅱ	0.10	0.85	—	—	—	21			5		13	4	5	3	1								
SQ138	D-24	Ⅺ	43	Ⅱ	0.15	0.90	—	—	—				39	3	7	12	4	4	1	2	4		1	4	1		
SQ139	F-39	Ⅺ	21	Ⅱ	0.20	0.95	—	—	—	15	3		2	2	3	5	5	2	2	1		1					
SQ140	I-48	Ⅺ	33	Ⅱ	0.20	1.00	—	—	○	15	13	4	1	3	9	9	5	2	2	1	1	1					
SQ141	J-49	Ⅺ	45	Ⅱ	0.40	1.00	—	—	—	43	1		1	1	1	3	9	10	2	4	1	6	5	2	1		
SQ142	D-16	Ⅺ	37	Ⅱ	0.15	1.05	—	—	—	28			5	2	1	6	6	8	2	2	5	1	4				
SQ143	J-48	Ⅺ	48	Ⅱ	0.25	1.05	—	—	—	46	2			1	6	5	11	6	5	7	5	1	1				
SQ144	K-49	Ⅺ	38	Ⅱ	0.10	1.10	—	—	○	11	19	5	3	21	5	4	1	1	1		2	2		1			
SQ145	D-15	Ⅺ	28	Ⅱ	0.10	1.20	—	—	—	19		1	4	4	9	3	6	3	2	1							
SQ146	F-16	Ⅺ	33	Ⅱ	0.15	—	—	—	—	21		3	7	5	12	8	5		2		1						
SQ147	C-23	Ⅻ	17	Ⅱ	0.10	0.30	—	—	—				11	7	2	3	2	1	1	1							
SQ148	A-21	Ⅹ	73	Ⅲ	0.50	1.00	○	0.15	○	41	23	3	6	39	8	4	4	4	2	2					1	3		6
SQ149	B-20	Ⅹ	65	Ⅲ	0.40	1.35	○	0.19	—	36	3		26	3	2	6	7	4	8	6	4	5	1	9	4	3	2	1
SQ150	C-26	Ⅹ	35	Ⅲ	0.10	0.35	○	0.20	—	16	11	2	6	13	14	5					1			1				1
SQ151	F-33	Ⅹ	14	Ⅲ	0.15	0.90	○	0.07	—	8	2		4		1	1	1	5	3		1			1				1
SQ152	C-27	Ⅹ	42	Ⅲ	0.20	1.25	○	0.21	—	28	9	1	4	10	5	2	3	2	1	3	1	2		4	1	1	1	6
SQ153	B-27	Ⅹ	64	Ⅲ	0.15	1.30	○	0.27	○	46	6	1	11	24	14	5	12	1	1			1	1	3	1		1	
SQ154	K-52	Ⅹ	45	Ⅲ	0.10	0.90	○	0.20	○	23	16	3	3	11	11	15	3	2	2		1							
SQ155	L-54	Ⅹ	8	Ⅲ	0.51	—	○	0.18	—	6			2	1	1			2	2	1		1						
SQ156	J-50	Ⅹ	86	Ⅲ	0.15	1.20	○	0.18	—	32	20	5	29	34	24	16	4	3	1	1				3				
SQ157	C-23	Ⅺ	17	Ⅲ	0.15	0.40	○	0.14	—				14	1	4	2	2			1			3		1	1		2
SQ158	D-23	Ⅺ	30	Ⅲ	0.20	0.45	○	0.14	—				23	2	1	7	2	4	1	4		2	1	3	1	1		1
SQ159	B-26	Ⅺ	65	Ⅲ	0.25	0.45	○	0.37	—	41	14	5	4	14	22	10	9	3	5	1		1						
SQ160	C-22	Ⅺ	76	Ⅲ	0.25	0.55	○	0.39	—	42	18	3	12	31	11	6	4	4	8	5	2	1	1		2	1		

第36表　集石遺構一覧表６

遺構名	検出区	検出層	総礫数（個）	タイプ	範囲（半径：m）		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数														
					集中部	全体	有無	深さ（m）		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
SQ161	B-26	Ⅺ	413	Ⅲ	0.45	0.70	○	0.95	—	194	146	32	31	85	50	62	54	40	30	22	13	7	13	15	10	3	2	7
SQ162	D-10	Ⅺ	193	Ⅲ	0.45	0.75	○	0.85	—	103		9	46	30	13	17	28	25	17	13	11	4	2	20	5	1	1	6
SQ163	E-38･39	Ⅺ	111	Ⅲ	0.40	0.75	○	0.50	○	64	27	6	14	25	24	20	11	7	7	4	3	4	2	3				1
SQ164	D-25	Ⅺ	119	Ⅲ	0.25	0.80	○	0.62	○	64	32	4	19	43	23	20	12	3	1	6	1	2	1	4			1	2
SQ165	D-25	Ⅺ	65	Ⅲ	0.40	0.90	○	0.12	—	32	19	1	13	20	11	2	4	3	1	3	3	4	5	7	2			
SQ166	D-25	Ⅺ	88	Ⅲ	0.40	1.00	○	0.45	○	48	15	6	19	9	4	8	7	9	6	3	8	6	4	12	4	2	1	5
SQ167	F-22	Ⅺ	59	Ⅲ	0.20	1.10	○	0.12	—	1		1	27	4	6	8	7	6	7	8	4	3	2	4				
SQ168	C･D-25	Ⅺ	142	Ⅲ	0.50	1.10	○	0.55	○	80	15	14	33	30	21	27	15	9	11	1	4	2	3	4	1	1	3	10
SQ169	I-46	Ⅺ	92	Ⅲ	0.25	1.10	○	0.08	—	84	3	1	4	5	4	18	19	22	8	6	1	1	2	5	1			
SQ170	E-12	Ⅺ	40	Ⅲ	0.20	1.20	○	0.12	—	1		33	6	7	7	5	6	6	2	2		1		3	1			
SQ171	C-25	Ⅺ	137	Ⅲ	0.90	1.20	○	0.15	○	89	27	1	20	13	19	17	6	12	6	7	9	7	6	16	11	3	2	3
SQ172	C-27	Ⅺ	116	Ⅲ	0.30	1.25	○	0.23	○	70	18	5	23	30	24	19	12	6	8	4	1	5		5	2			
SQ173	C-24	Ⅺ	184	Ⅲ	0.35	1.30	○	0.29	—			1	142	23	33	24	24	17	18	8	5	2	5	10	8	1	1	5
SQ174	C-26	Ⅺ	55	Ⅲ	0.35	—	○	0.28	—	35	7	1	12		5	4	3		3	6	3	2	3	8	11	2	2	3
SQ175	B-26･27	Ⅻ	87	Ⅲ	0.30	0.45	○	0.35	○	28	45	4	10	57	14	5	2	3	3	2				1				
SQ176	C-32･33	Ⅻ	113	Ⅲ	0.20	0.85	○	0.48	—	72	13	5	21	39	38	10	6	6	4	3	1	3		1	2			
SQ177	D-9	ⅩⅢ	32	Ⅲ	0.15	0.30	○	0.17	—	16		4	10	12	7	6	5	1	1									
SQ178	D-25	Ⅹ	12	Ⅳ	—	0.25	○	0.19	○	7	1	2	2	8	3						1							
SQ179	C･D-26･27	Ⅹ	15	Ⅳ	—	0.30	○	0.08	○	11			4	2	3		4	1	2	1	1				1			
SQ180	B-25	Ⅹ	19	Ⅳ	—	0.35	○	0.20	—	8	6		5	6	7	5	1											
SQ181	D･E-32	Ⅹ	19	Ⅳ	—	0.55	○	0.15	—	15	3		1	3	2	2	8	1			3							
SQ182	L-51	Ⅹ	50	Ⅳ	—	1.00	○	0.24	○	10	27	7	6	26	16	6	1	1										
SQ183	D-11	Ⅺ	6	Ⅳ	—	0.20	○	0.09	—			6			1		3	2										
SQ184	C-10	Ⅺ	9	Ⅳ	—	0.25	○	0.07	—			8	1			4	3	1	1									
SQ185	B･C-25	Ⅺ	34	Ⅳ	—	0.45	○	0.28	○	21	10	1	2	9	3	10	3	4	2	2				1				
SQ186	I-38	Ⅺ	22	Ⅳ	—	0.70	○	0.15	—	21			1	3	4	2	7	4	2									
SQ187	G-41	Ⅺ	25	Ⅳ	—	0.75	○	0.20	—	13	2	3	7	7	5	6		1	1	1	2		1	1				
SQ188	E-9	Ⅺ	115	Ⅳ	—	1.00	○	0.40	—	69		10	30	76	17	9	1	8	2	2								
SQ189	D-24	Ⅻ	26	Ⅳ	—	0.50	○	0.29	—				23	1	12	1	6	3			1			1	1			
SQ190	B･C-25	Ⅻ	32	Ⅳ	—	0.45	○	0.28	—	5	18		9	24	5	1		1								1		
SQ191	D-26	Ⅻ	37	Ⅳ	—	0.55	○	0.37	○	25	8	1	3	8	9	5	8	1	1	2	2			1				
SQ192	D-25	Ⅻ	34	Ⅳ	—	0.65	○	0.30	—	21	4		9	15	8	6	2	3										

(6)　石器製作跡（略記号：SO）

石器製作跡は，平成25年度の調査で４カ所，平成26年度の調査で１カ所の計５カ所が検出された。

検出状況　基本的には，X層を中心に黒曜石のチップ・フレーク等が密に集中するブロックが確認された。各石器製作跡の検出層及び終焉層を下表に示す。

第37表　石器製作跡の検出層及び終焉層

石器製作跡	検出層	終焉層
1	X	X
2	X	X
3	X	X
4	X	XI
5	XI	XI

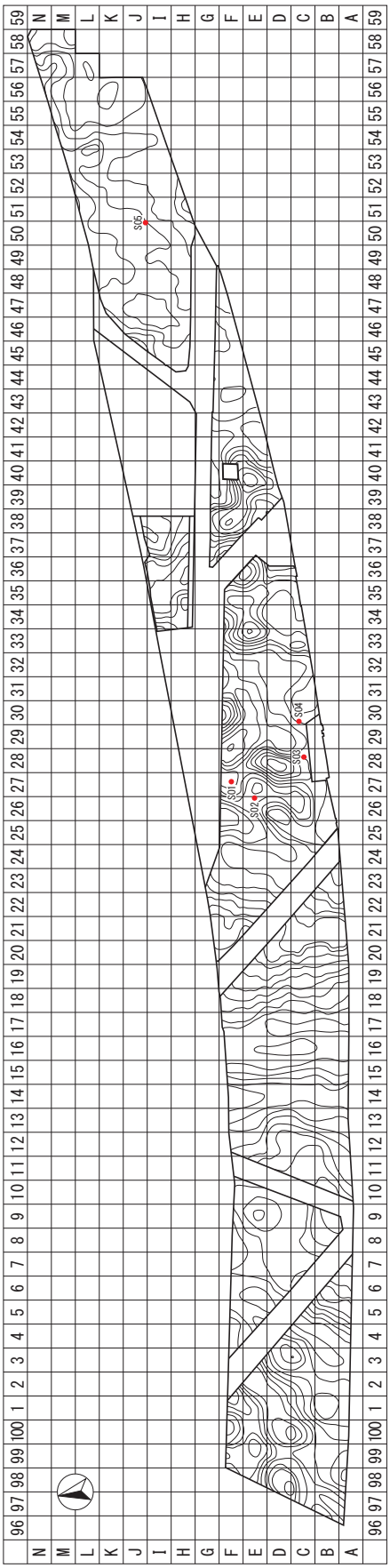
遺　物　各石器製作跡で出土した黒曜石の分類点数と，その他の石材点数について下表に示す。

第38表　石器製作跡の黒曜石・その他の石材分類点数

	SO 1	SO 2	SO 3	SO 4	SO 5
OB 1	0	0	0	0	0
OB 2	4	0	0	0	0
OB 3	3	1	0	10	0
OB 4	322	130	64	1728	208
OB 5	0	0	1	0	0
OB 6	66	1	0	1	0
OB 7	8	0	0	0	0
OB 8	1	0	0	0	0
AN	2	0	0	0	212
CH	0	0	0	4	0
HF	3	3	1	1	0
砂岩	2	0	0	0	0
合計	411	135	66	1744	420

分　布　石器製作跡は，調査区Dで４基，調査区Fで１基が分布する。調査区Dの４基は，北側で２基，南側で２基とさらに細分できる。また，いずれの石器製作跡も，竪穴住居跡からやや離れて存在し，他の遺構と切り合うことはない。

各石器製作跡　本遺跡で検出された石器製作跡を検出した順に報告する。



第254図　石器製作跡分布図

石器製作跡１号（SO １：第255図）

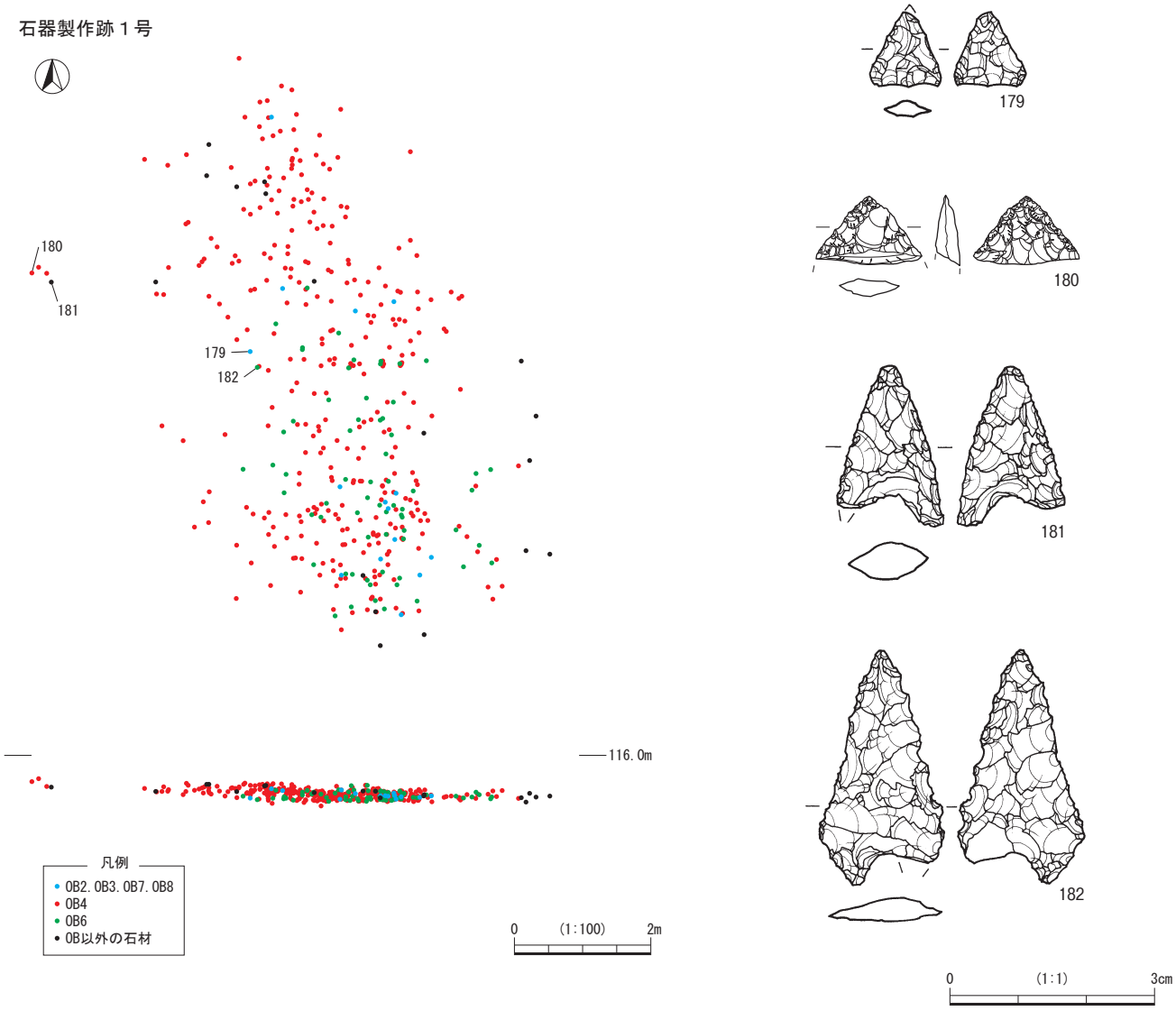
検出状況　Ｆ－27区，Ｘ層で検出された。

広 が り　全体の範囲は南北8.6ｍ・東西7.6ｍで，北北西～南南東に広がる。

周辺遺構　土坑３基が存在し，SO １の南西約10ｍには，SO ２が存在する。

素　　材　黒曜石OB4類のチップ・フレークが多く，次いでOB6類のチップ・フレークが多い。

出土遺物　石鏃４点が出土し，いずれも図化した。179～182は，打製石鏃である。179（第255図）は黒曜石製の平基無茎鏃である。小型で平面形は正三角形に近い。180（第255図）は黒曜石製である。基部を欠損するが，幅が広い残存状況から平面形は正三角形に近かったと考えられる。181は安山岩製の凹基無茎鏃である。平面形は二等辺三角形に近く、基部にやや深い抉りをもつ。182（第255図）は黒曜石の凹基無茎鏃である。右脚部を欠損する。平面形は二等辺三角形に近く、基部にやや深い抉りをもつ。179はOB3類に，180はOB4類に，181は安山岩に，182はOB6類に該当する。



第255図　石器製作跡１号・出土遺物

石器製作跡２号（SO２：第256図）

検出状況　E－26・27区，X層で検出された。

広 が り　全体の範囲は南北8.6ｍ・東西5.7ｍで，北東～南西に広がる。

周辺遺構　土坑３基，集石遺構４基が存在し，SO２の北東約10ｍには，SO１が存在する。

素　　材　黒曜石OB4類のチップ・フレークの他，OB3類，OB4類が各1点出土している。

出土遺物　石鏃１点が出土し，図化した。183（第256図）は黒曜石製の打製石鏃未成品である。先端部を欠損する。両脚部・基部は未完成だが、抉りをもつように調整を施している。183は，OB4類に該当する。

石器製作跡３号（SO３：第256図）

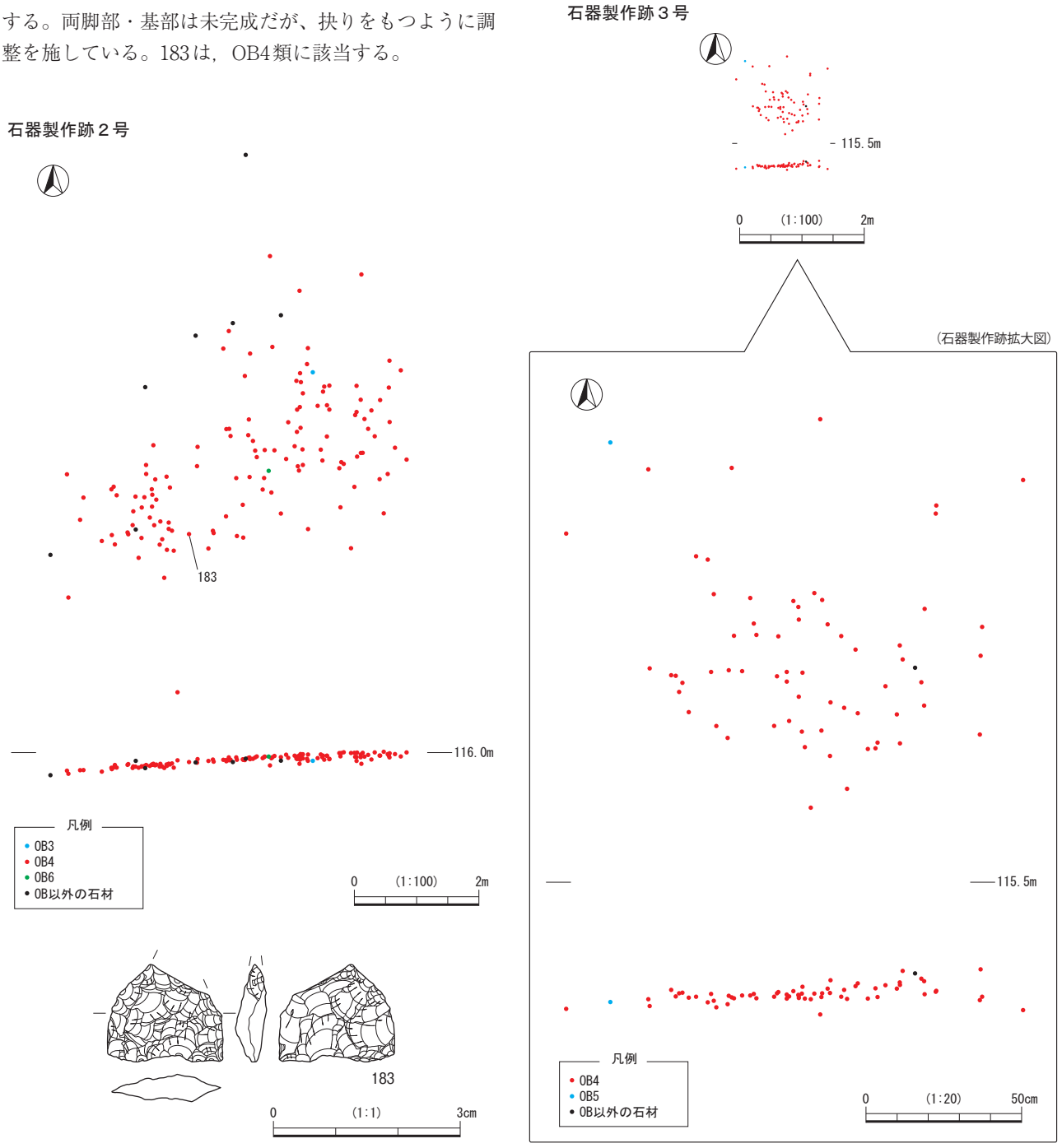
検出状況　C－28区，X層で検出された。

広 が り　全体の範囲は南北1.3ｍ・東西1.5ｍで，西～東に広がる。

周辺遺構　集石遺構１基が存在し，SO３の東約15ｍには，SO４が存在する。

素　　材　黒曜石OB4類のチップ・フレークの他，OB5類1点が出土している。

出土遺物　遺物は出土していない。



第256図　石器製作跡２号・出土遺物・石器製作跡３号

石器製作跡４号（SO４：第257図）

検出状況　C－29・30区，X層～XI層の範囲で検出された。西側の分布範囲が垂直に切れているのは，検出が遅れたためである。

広 が り　全体の範囲は南北6.5ｍ・東西5.4ｍで，西～東に広がる。

周辺遺構　集石遺構１基が存在し，SO４の西約15ｍには，SO３が存在する。

素　　材　黒曜石OB4類のチップ・フレークが多く，次いでOB3類のチップ・フレークが多い。

出土遺物　石鏃が３点出土し，いずれも図化した。184・185（第257図）は打製石鏃である。184は黒曜石製の凹基無茎鏃である。左脚部を欠損する。基部に深い抉りを持ついわゆる「鍬形鏃」で，押圧剥離を丁寧に施し全体的に鋭利に仕上げている。185は黒曜石製の平基無茎鏃である。先端部を欠損する。小型で平面形は正三角形に近く、基部はごく僅かに内湾する。186は黒曜石製の石核である。主に上下方向に打ち欠き，小型剥片を採取する様子がうかがえる。184はOB4類に，185はOB2類，186は類OB4類に該当する。

石器製作跡５（SO５：第257図）

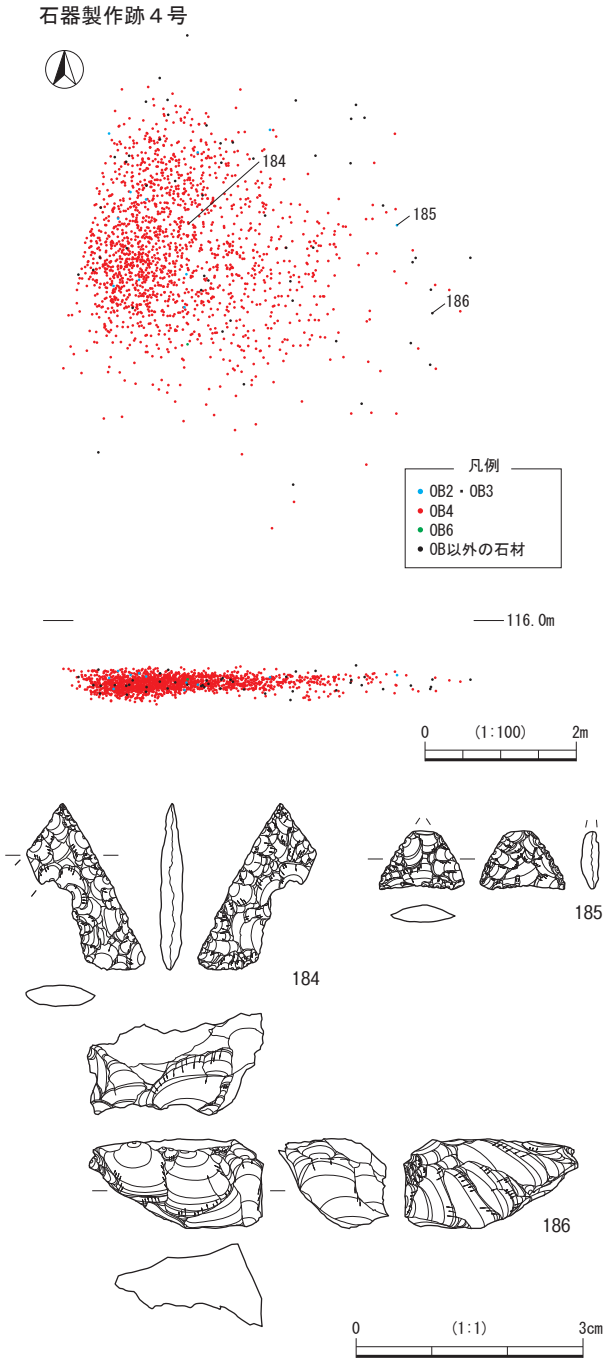
検出状況　J－50・51区，X層～XI層の範囲で検出された。

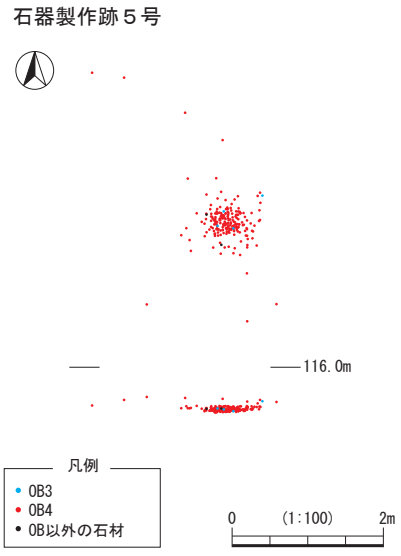
広 が り　全体の範囲は南北3.3ｍ・東西2.4ｍで，北西～南東に広がる。

周辺遺構　連穴土坑１基，土坑３基，集石遺構３基が存在する。

素　　材　黒曜石OB4類のチップ・フレークが多く，次いでOB3類のチップ・フレークが多い。

出土遺物　遺物は出土していない。





第257図　石器製作跡４号・出土遺物・石器製作跡５号

3　遺物

(1)　土器

田原迫ノ上遺跡の縄文時代早期の土器は，Ⅳ類が最も多く，次いでⅨ類がそれに続く。前述したが，縄文時代早期の土器のほとんどは，X層・XI層から出土し，出土点数の少ない類を除き，ある類の土器が単一層のみから出土することはなかった。

土器の観察表は第２分冊（第72～103表）に一括して掲載した。

Ⅰ類土器（第259図187・188・190）

全体の器形が窺える資料は出土してないが，口縁部から底部にかけて直線的な円筒形土器である。胴部に横位からやや斜位の条痕文を施す一群である。

187は，にぶい赤褐色を呈する胴から底部である。胴部外面にススが付着している。内面は縦位のケズリをおこなう。188は，底部である。底部縁辺部に胴部の粘土帯を巻き付けるように接合した痕跡をおこなう。また，底部と胴部を接合した際の指おさえ痕をおこなう。胴部接合後にナデをおこなった後，胴部は浅い貝殻条痕文を施し，底面外面端部に縦位のヘラ状工具によるキザミを施す。内面立ち上がり付近に白色の付着物をおこなう。190は，胴部である。外面上部に横位の押引状の刺突文を施す。その下位には，浅い貝殻条痕文を施す。

Ⅱ類土器（第259図189・192）

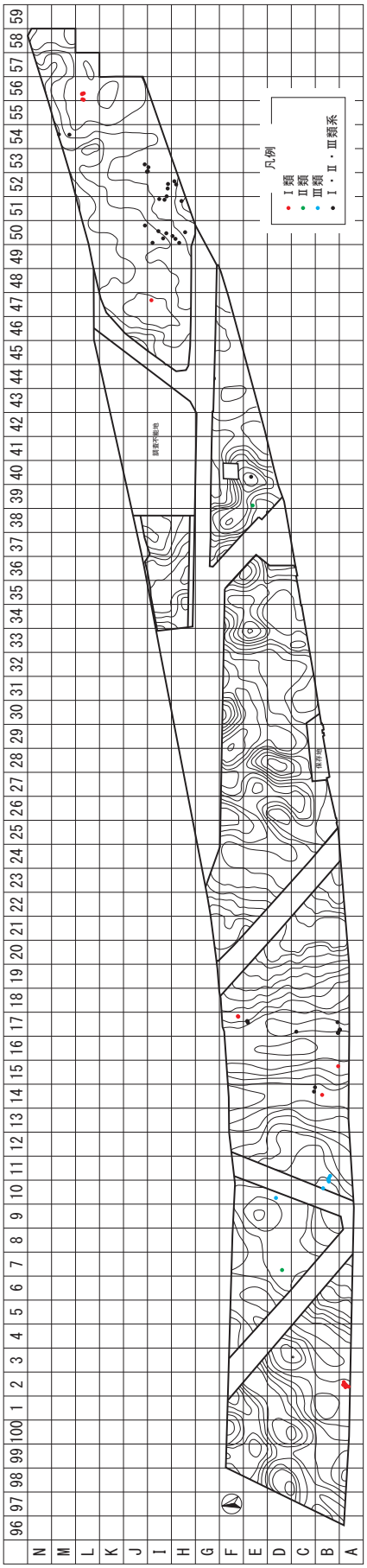
全体の器形が窺える資料は出土してない。底部から口縁部にかけて直線的，もしくは口縁部がやや外反する円筒形土器の一群である。

189は，胴部である。胴部外面に横位の押引状の刺突文を施す。192は，口縁部である。口縁部外面に，押引状の刺突文を２条施し，その間に「C」の字状・逆「C」の字状の半裁竹管文を施す。

Ⅲ類土器（第259図191）

底部から口縁部にかけてやや外反する円筒形土器である。口唇部は平坦となり，口縁部外面に横位貝殻刺突文を数条，胴部に貝殻条痕文を施す一群である。

191は，口縁部から胴部である。口縁部外面は４条の横位貝殻刺突文，胴部にやや斜位貝殻条痕文を施す。口縁部には，補修孔と考えられる９㎜程の穿孔を施し，内面はススが付着する。



第258図　遺物分布図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類系土器）

第259図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類土器・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類系土器

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類系土器（第259図193 ～ 197）

Ⅰ～Ⅲ類のいずれかの分類に該当すると考えられる。Ⅰ～Ⅲ類系という枠で報告する。

193は，口縁部である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部外面に横位貝殻条痕文を施し，内面はナデをおこなう。194は，底部である。底部外面に横位や斜位の浅い貝殻条痕文を施した後，底部との接合部をナデ消す。195は，胴部である。胴部外面に浅い横位貝殻刺突文を施し，内面はナデをおこなう。196は，胴部である。胴部外面に浅い横位貝殻条痕文を施し，内面はナデをおこなう。197は，196と同一個体と考えられる胴部から底部である。胴下部まで横位貝殻条痕文を施す。

Ⅳ類土器（第262図198 ～第301図441）

器形は深鉢形で，口縁部は外反・外傾・直行の３タイプがあり，胴部は口縁部から底部にかけややすぼまる形状となる。底部は平底である。文様は口縁部外面に貝殻刺突文を，胴部外面に貝殻条痕文を施す。また，口縁部外面の文様と胴部外面の文様との間に横位貝殻刺突文を施すものもある。胴部外面下部に横位貝殻条痕文を施すものや，底部外面端部にキザミを施すものもある。

口縁部（第262図198 ～第292図373）

口縁部と接合した胴部や底部を含むもので，以下のような基準で細分した。

①　口縁部の傾き

ａ：外反するもの（やや外反するもの，口縁端部のみ外反するもの含む）

ｂ：外傾するもの

ｃ：直行するもの

②　口縁部外面の文様の種類

斜：斜位貝殻刺突文

横：横位貝殻刺突文

羽：斜位貝殻刺突文を組み合わせ，羽状となる文様

縦：縦位貝殻刺突文

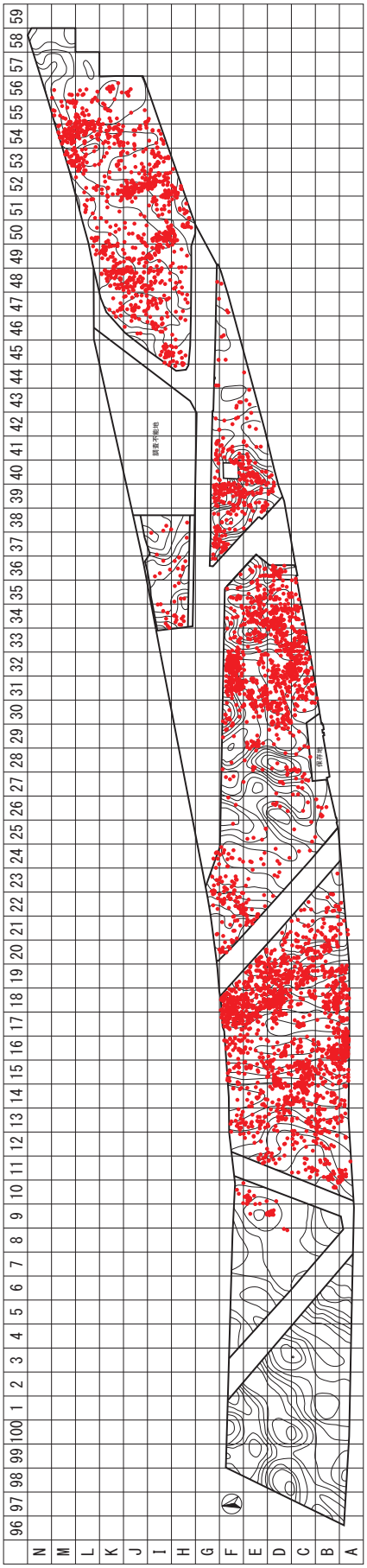
結果，次の12種類に細別ができた。

Ⅳ-a-斜類（第262図198 ～第267図240）

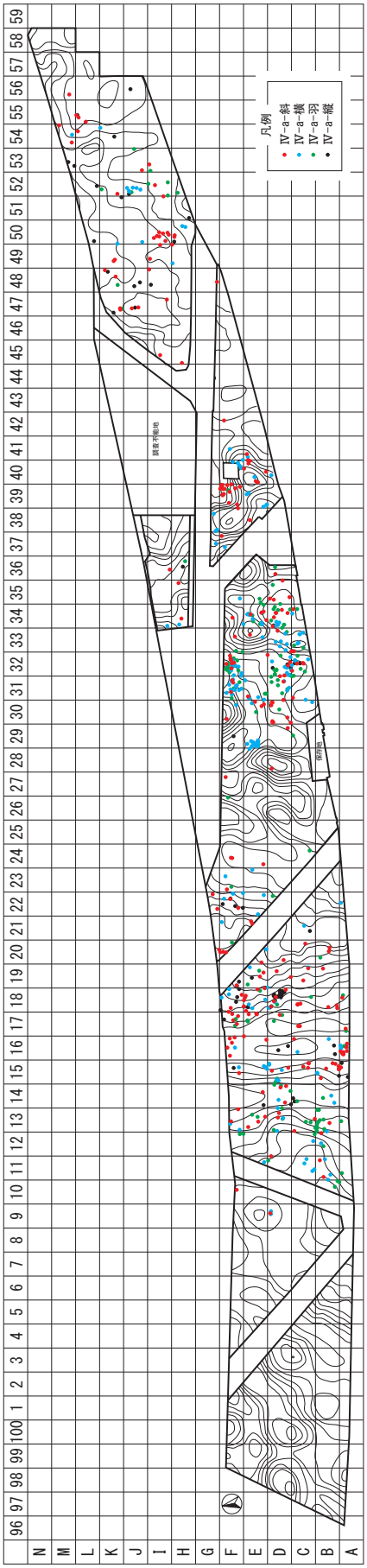
口縁部が外反し，口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施す一群である。

198 ～ 200・203・206は胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文を施す。199は胴部外面に非常に深い貝殻条痕文を施す。口縁部外面の貝殻刺突文と同一の施文原体と考えられる。

200は口唇部を平坦に整形し，ヘラ状工具によりキザミを施す。口縁部外面の貝殻刺突文は，施文後にナデたため，つぶれている部分をおこなう。その下位に２条の横位貝殻刺突文を施し，胴部文様との文様区画になっている。胴部は貝殻条痕文を浅く施す。内面は工具ナデを



第260図　遺物分布図（Ⅳ類土器）



第261図　遺物分布図（Ⅳ-a類）

おこなう。

203は口縁部から胴部下半までが出土しており，底部付近は不明であるが，口縁部から胴部は径の3/4が残存している。口縁部に２ヵ所の頂部をもつ緩い波状口縁である。口唇部はやや平坦に整形され，波頂部以外に貝殻刺突文を施す。口縁部外面に斜位貝殻刺突文を密に施し，その下位の綾杉状の貝殻条痕文を切っているため，胴部の貝殻条痕文を先に施したことが分かる。口縁部内面は稜をもち，稜の上位にはナデを，稜の下位にはケズリをおこなう。

206は完形品である。口唇部はやや平坦に整形され，ヘラ状工具によるキザミを施す。口縁部外面に斜位貝殻刺突文を１列施した後，胴部外面にやや大きめの貝殻を用いて綾杉状の浅い貝殻条痕文を施す。貝殻条痕文は底部付近ではナデ消し，底部から３㎝程度は無文部となる。底部外面及び胴部内面はナデをおこなう。

201・202・204・205は胴部外面に，斜位貝殻条痕文を施す。201・202・205の口唇部は，肥厚する。

201の口唇部には，２条の横位貝殻刺突文を施す。胴部の斜位貝殻条痕文は浅い。内面は工具ナデを，口縁部内面付近はていねいなナデをおこなう。

202の口唇部には，貝殻押圧文を施す。口縁部外面と胴部外面の貝殻条痕文の間には，横位に近い斜位貝殻刺突文を施すが，文様区画の役割を果たしているとは言い難い。胴部の斜位貝殻条痕文は，部分的に綾杉状となる。

204の口唇部と口縁部外面に同一の施文原体で，貝殻刺突文を施す。口縁部には回転穿孔による補修孔が，外面側：内面側が８：２の割合で開けられる。

205の口唇部には，貝殻刺突文を施す。この口唇部の貝殻刺突文と，口縁部外面に施す斜位貝殻刺突文は同一の施文原体と考えられる。口縁部外面の貝殻刺突文は，羽状に施す部分もある。

207・208は胴部に縦位貝殻条痕文を施す。207は口縁部に回転穿孔による補修孔が開けられており，ほぼ外面からの穿孔となっている。

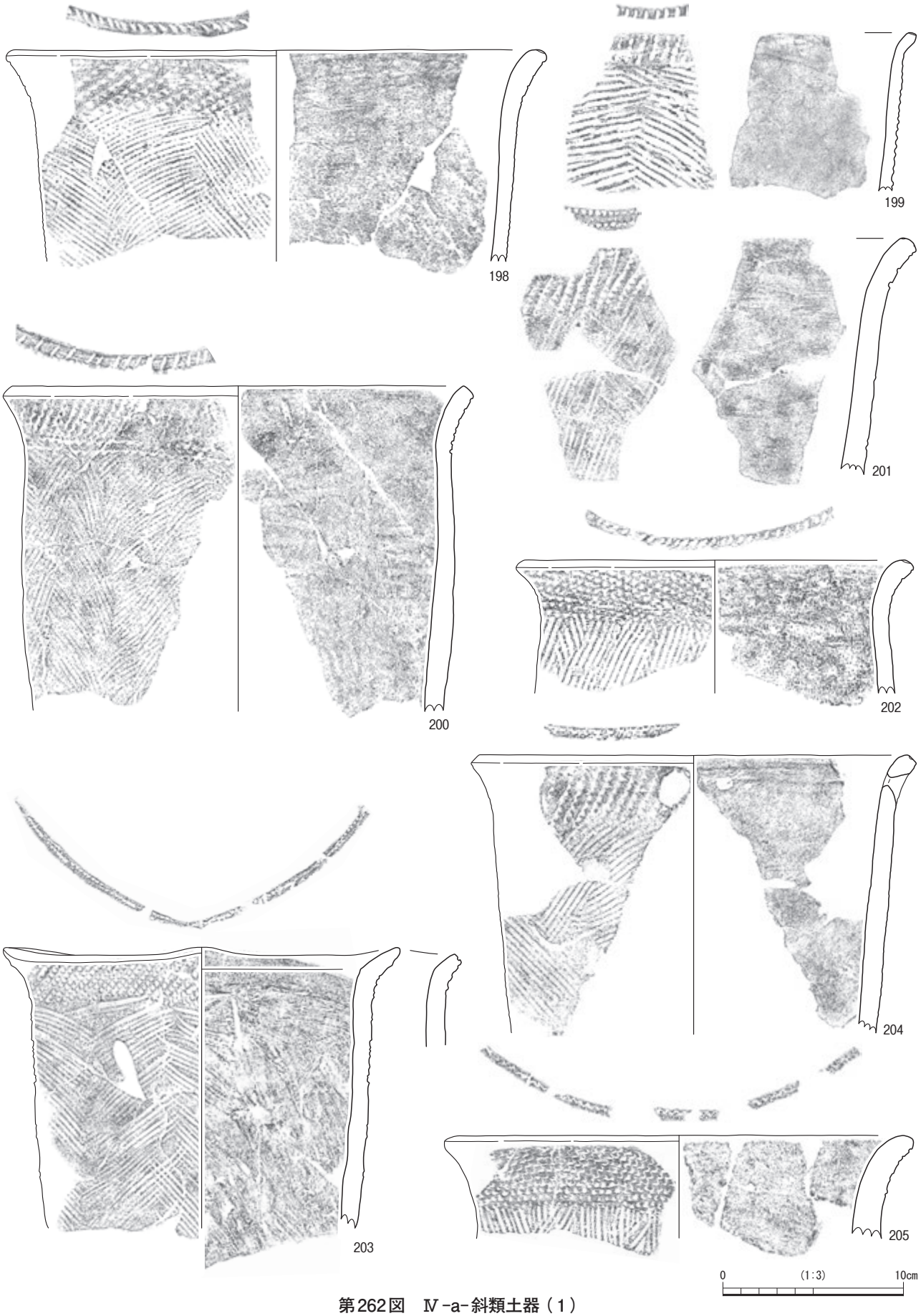
208は底部付近は不明であるが，口縁部から胴部の径が1/2程残存している。やや丸みを帯びた口唇部にはキザミを施し，ナデ消している部分もある。口縁部外面の斜位貝殻刺突文も，口縁部上端が１㎝程の幅で文様をナデ消し，細い帯状の無文帯となる。

209・210・212は胴部文様が不明な一群である。209は波状口縁となる。

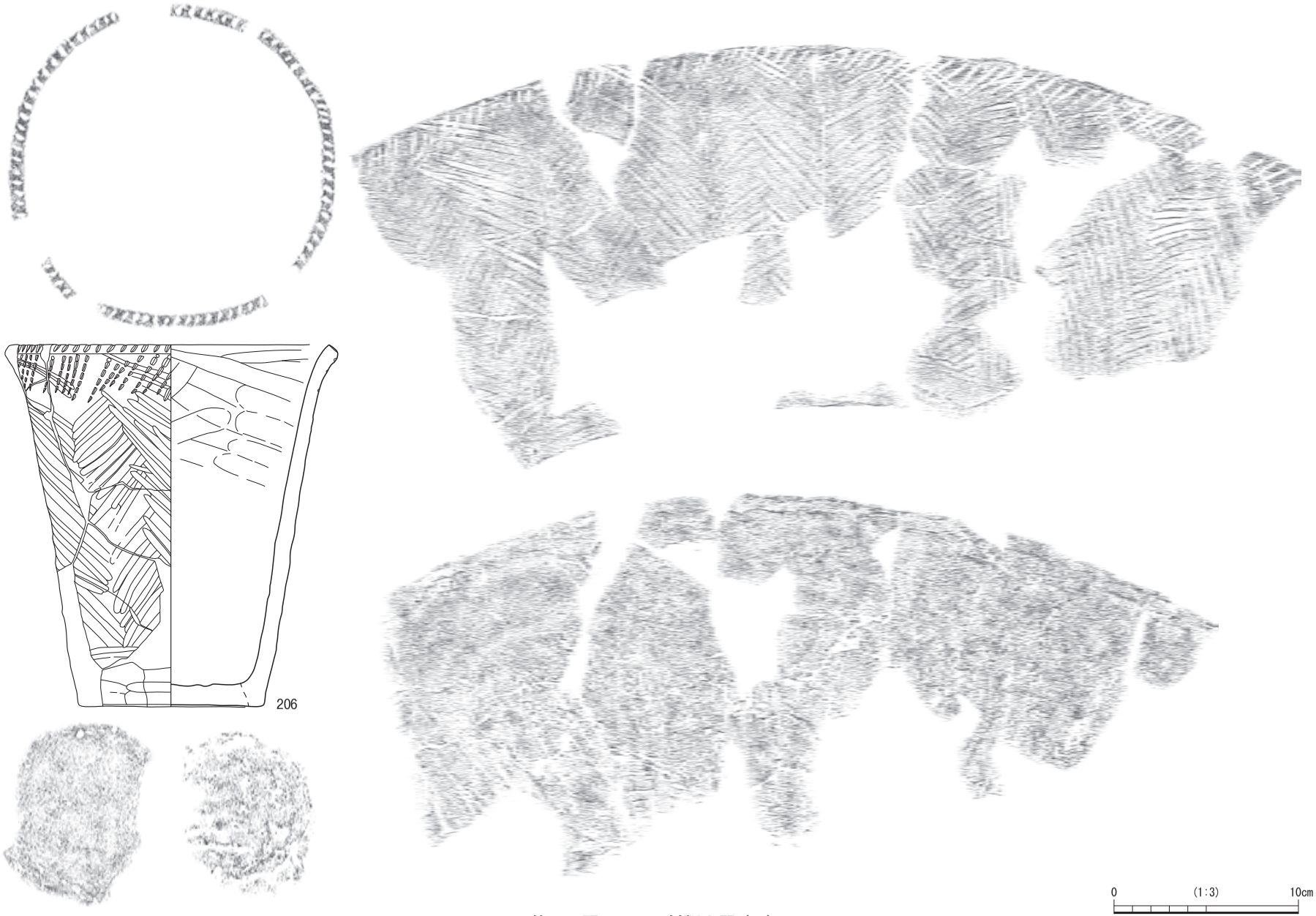
211 ～ 225は口縁部がやや外反する一群である。この一群は，胴部文様が不明なものを除くと，全ての胴部は綾杉状の貝殻条痕文である。

211は口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施した後，胴部に貝殻条痕文を施す。

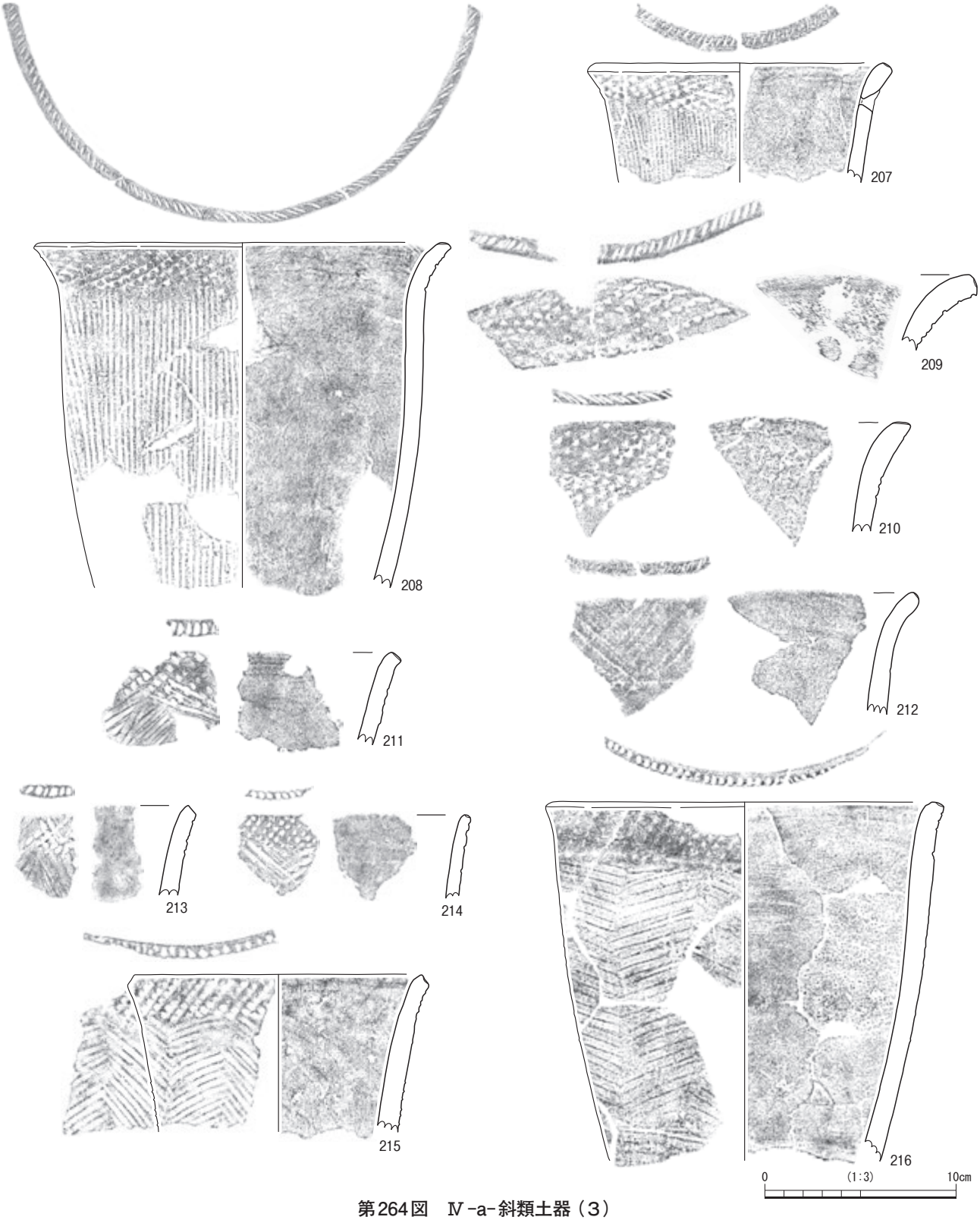
213は口縁部外面も含めた器面全体に貝殻条痕文を施



第262図　Ⅳ-a-斜類土器（1）



第263図　Ⅳ-a-斜類土器（2）



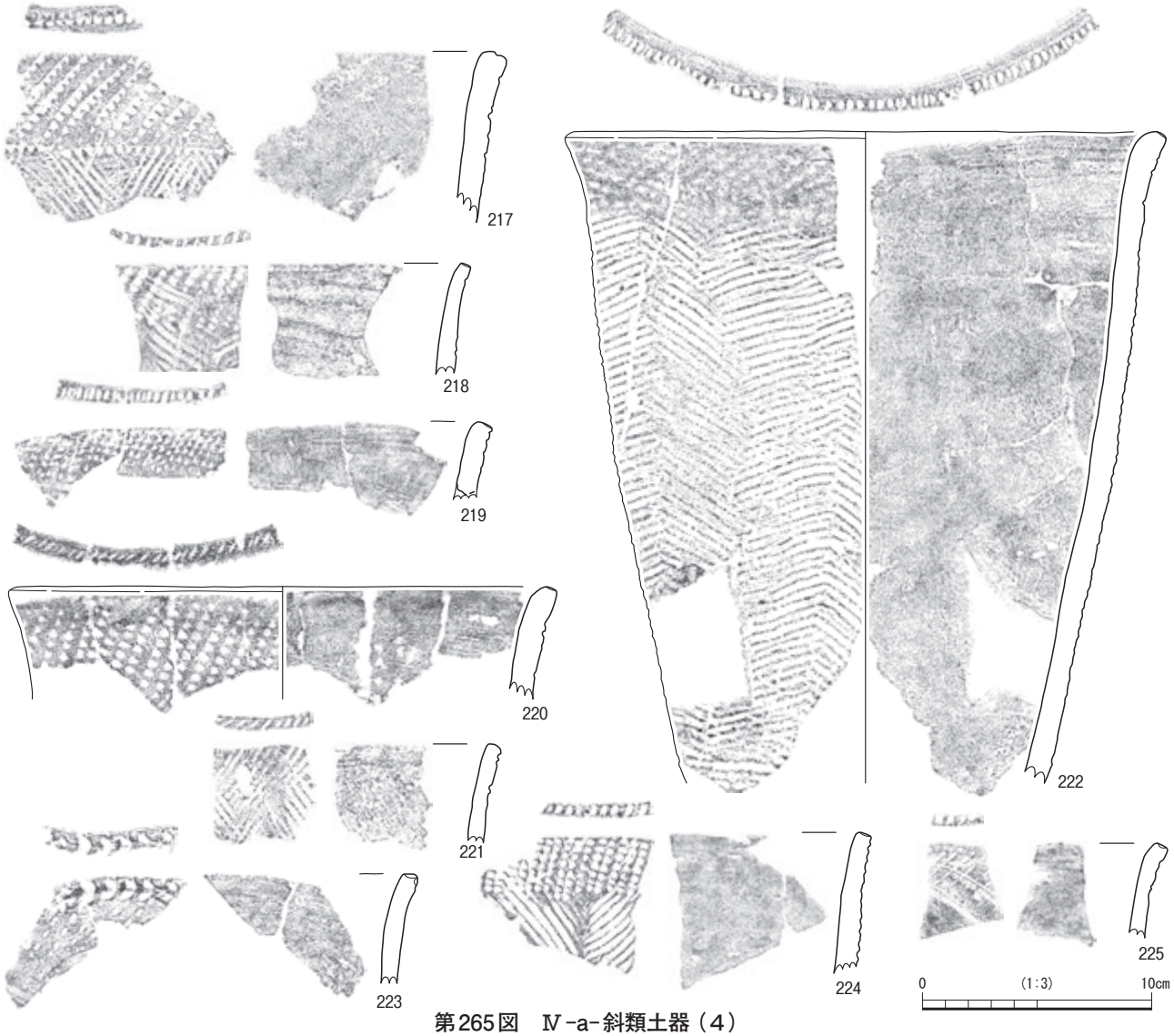
第264図　Ⅳ-a-斜類土器（3）

した後，口縁部外面に貝殻刺突文を施す。

215の口縁部外面の貝殻刺突文は，肉眼ではほとんど文様が確認できない。

216はやや丸みを帯びた口唇部の頂上部に貝殻押圧文を施す。口縁部外面の斜位貝殻刺突文は，施文後にナデ消し，文様としてはっきりとしない。口縁部外面と胴部の綾杉状の貝殻条痕文は，横位貝殻刺突文で区画される。特に内面口縁部付近は，ていねいな工具ナデをおこなう。

217はやや平坦に整形された口唇部に，横位貝殻刺突



第265図　Ⅳ-a-斜類土器（4）

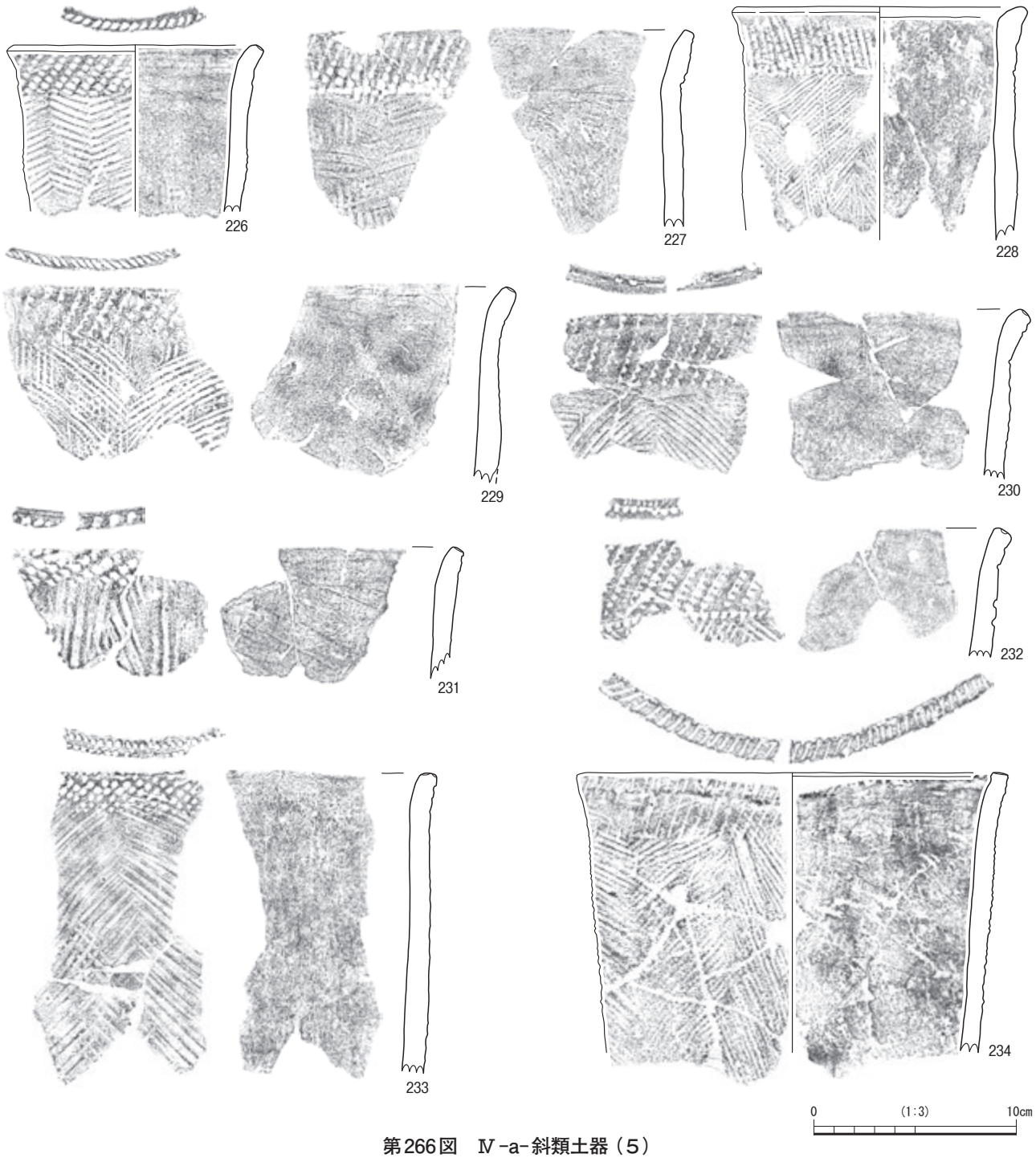
文を施す。口縁部外面は，口唇部の刺突文と同一の施文原体により，長めの斜位貝殻刺突文を施す。胴部の綾杉状の貝殻条痕文とその上位の横位貝殻刺突文も，同一の施文原体で施し，文様区画とする。土器の胎土はやや泥質で，器面はざらざらとしている。

218は口縁部外面に斜位貝殻刺突文を密に施す。

222は底部以外を確認できる資料である。口縁部外面の斜位貝殻刺突文と，胴部の綾杉状の貝殻条痕文は横位貝殻刺突文により文様区画とする。口縁部の斜位貝殻刺突文の施文後，文様をナデ消す部分がある。219～221・223～225は胴部文様が不明である。

226～240は，口縁端部のみ外反する一群である。

226～234は，胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。226は口唇部にキザミを，口縁部外面に密に斜位貝殻刺突文を施す。胴部は貝殻条痕文を羽状に施す。文様は全て同一の施文原体である。内面は非常にていねいなナデをおこない，部分的にミガキのようにも見える。227は丸みを帯びた口唇部をもち，口縁部外面の斜位貝殻刺突文と，胴部の極浅い綾杉状の貝殻条痕文との間に，非常に深い横位貝殻刺突文を１条施し文様区画とする。口縁部内面は，口縁部付近はナデを，胴部内面はケズリをおこなう。228は非常に深い貝殻刺突文を施す。特に口縁部文様と胴部文様の文様区画となる横位貝殻刺突文は顕著である。胴部に施す綾杉状の貝殻条痕文は規則的である。229・230は共に口縁部外面の斜位貝殻刺突文を部分的にナデ消す。229は口唇部頂部にキザミを施すが，230は口唇部の内面側に貝殻刺突文を施す。231は口縁部外面の幅が他より短い。胴部の貝殻条痕文は粗雑で浅い。232は口唇部に貝殻刺突文を施し，口縁部外面と胴部文様の間に１条の横位貝殻刺突文を施し文様区画とする。233は口唇部に２条の貝殻刺突文を施す。口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施した後，胴部に浅い綾杉状の貝殻条痕文を施す。口縁部内面上部は横位に，その下位はランダムな方向に工具ナデをおこなう。234は口縁部外



第266図　Ⅳ-a-斜類土器（5）

面に斜位貝殻条痕文を施し，平坦に整形された口唇部にキザミを施す。このキザミが口縁部外面上部に被ることから，口縁部外面への貝殻条痕文施文後に施したと考えられる。内面は全体的に工具ナデをおこなう。

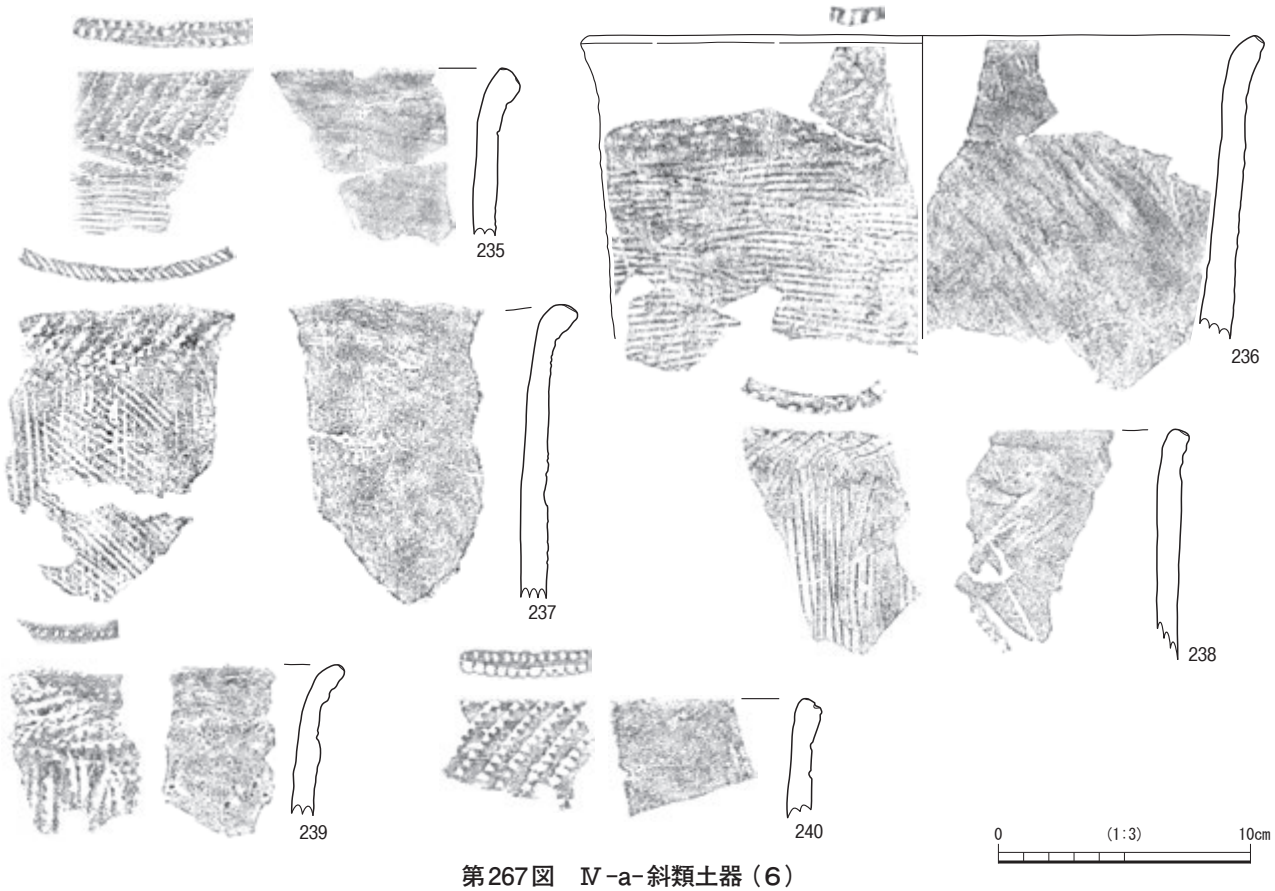
235・236は胴部に横位貝殻条痕文を施す。235はやや平坦に整形した口唇部内側に貝殻刺突文を施す。胴部の横位貝殻条痕文は浅い。236はやや斜位に貝殻条痕文を施す。内面は，ヘラ状工具痕が明確に残る。

237は胴部に斜位と縦位貝殻条痕文をに施す。

238は胴部に縦位貝殻条痕文を施す。口縁部外面の文様幅が1㎝程度と短い。

239は小破片のため詳細は不明だが，口縁部の斜位貝殻刺突文の下位に2条を1単位とした縦位貝殻刺突文や，2つの斜位貝殻刺突文を組み合わせ「ハ」の字状に文様を施す。

240はやや平坦に整形された口唇部外面に貝殻刺突文，内面にキザミを施す。



第267図　Ⅳ-a-斜類土器（6）

Ⅳ-a-横類（第268図241～第271図275）

口縁部が外反し，口縁部外面に横位貝殻刺突文を施す一群で，口縁部文様の最上段に１条でも横位貝殻条痕文を施せば，この類に分類した。

241～260は口縁部が外反する一群である。

241～249は，口縁部外面に横位貝殻刺突文のみを数条施す。241は７～８条の横位貝殻刺突文を施す。242は６条の横位貝殻刺突文を施す。243は３条の横位貝殻刺突文を施す。横位貝殻刺突文は貝殻を３㎝で１単位とし連続で施し，１条の貝殻刺突文とするためわずかに湾曲する。胴部外面の綾杉状の貝殻条痕文は荒く，口縁部内面直下の稜までがナデ，稜より下位はケズリをおこなう。244は拓本では確認しにくいが，横位貝殻刺突文の下位に２ヶ所，斜位の短い貝殻刺突文を施す部分がある。そのうちの１つの斜位貝殻刺突文は施文原体が異なり，口縁部文様の貝殻よりもやや大型の貝殻で刺突文を施す。この刺突文は10㎝程の間隔で２ヶ所に施すことから，意識的に施文したと考えられる。245は２条の横位貝殻刺突文を施し，その下位に斜位のごく短い貝殻刺突文を施す。胴部は非常に浅い貝殻条痕文を施す。247は９条の横位貝殻刺突文を施す。248は口縁部から底部までを窺える資料である。平坦に整形された口唇部はキザミを施す。口縁部外面は部分的にナデ消すが５条の横位貝殻刺突文を施す。胴部下部は横位に貝殻条痕文を施し，底面外面端部はキザミを施す。このキザミと口唇部のキザミとは異なる施文原体である。内面は全体に工具ナデをおこなう。249は４～５条の横位貝殻刺突文を，胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。胴部下部に横位貝殻条痕文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。以上の土器（241～249）の胴部は，胴部文様を確認できるものは全て綾杉状の貝殻条痕文を施す。

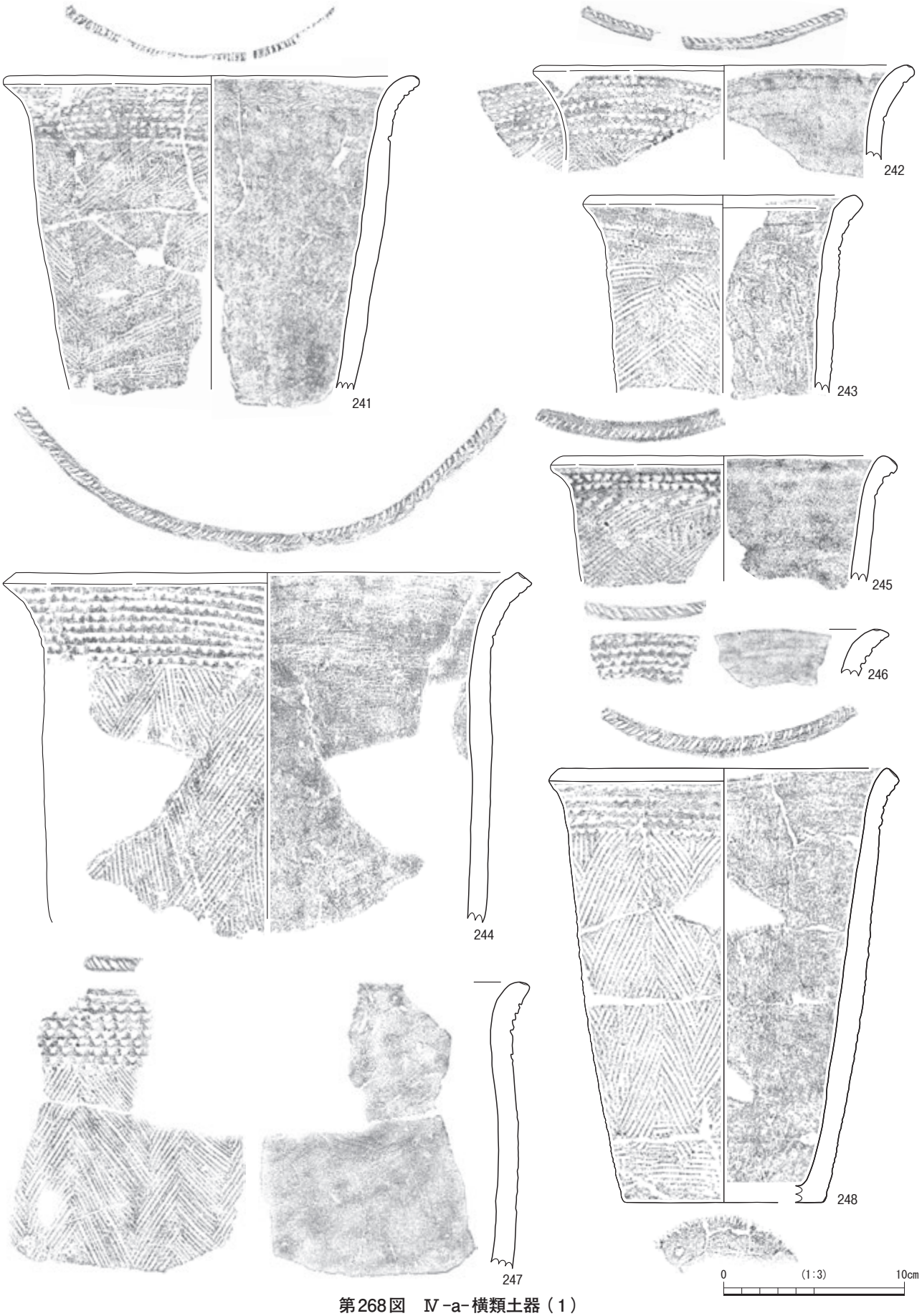
250は口縁部外面に１条のみ横位貝殻刺突文を施し，その下位に斜位貝殻刺突文を羽状に施す。

251～253・255～259は口縁部外面に１条のみ横位貝殻刺突文を施し，その下位に斜位貝殻刺突文を施す。252・253・255は，斜位貝殻刺突文が羽状となる可能性もある。253は平坦な口唇部にキザミを羽状に施す。257・259は１列の斜位貝殻刺突文の下位にも１条の横位貝殻刺突文を施す。260は波状口縁で，口縁部外面に２条の横位貝殻刺突文を施し，その下位に斜位貝殻刺突文を１列施す。259・260は波状口縁である。

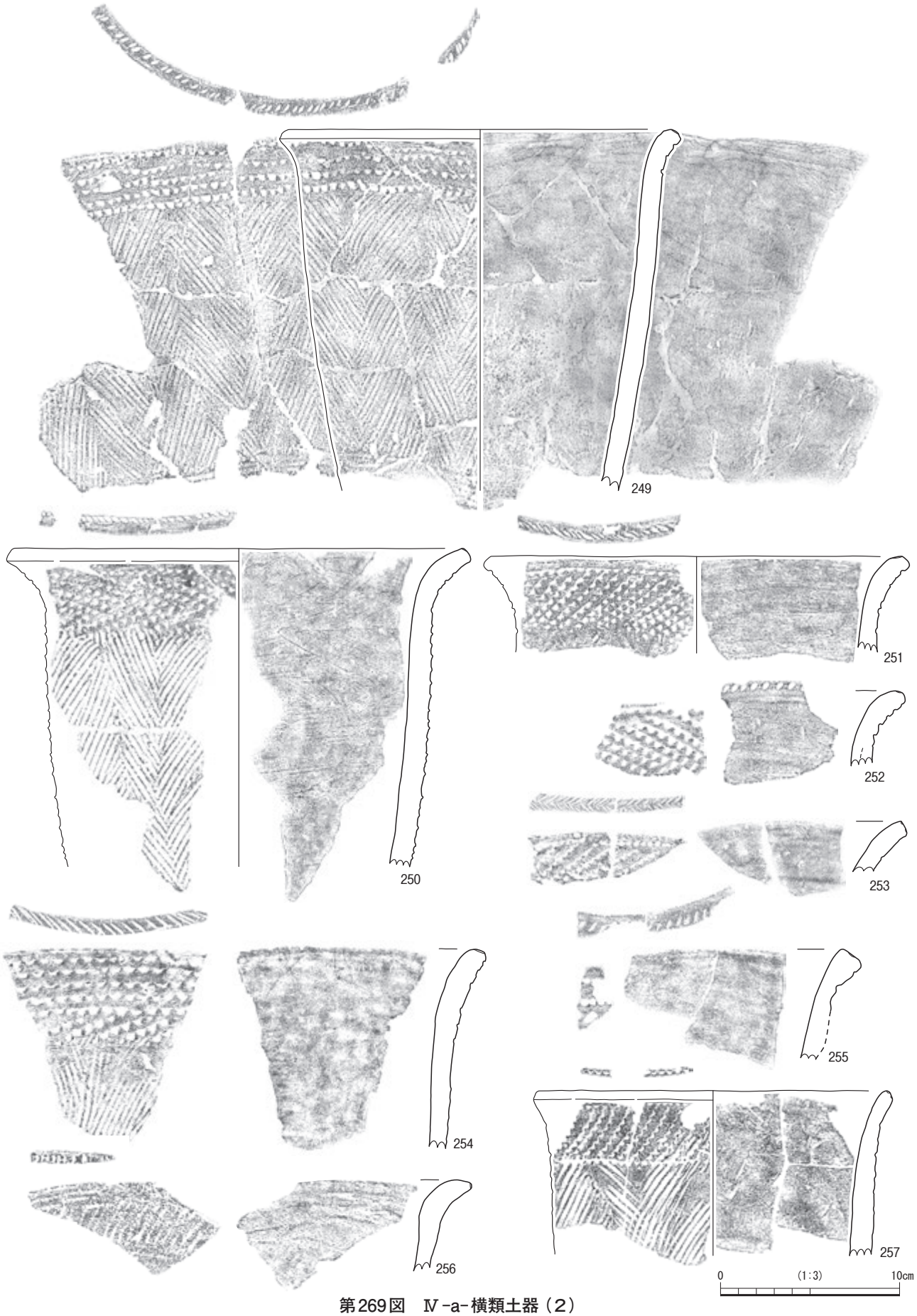
254は口縁部外面に５条の横位貝殻刺突文を施し，その下位に斜位貝殻刺突文を１列施す。

261～268は口縁部がやや外反する一群である。

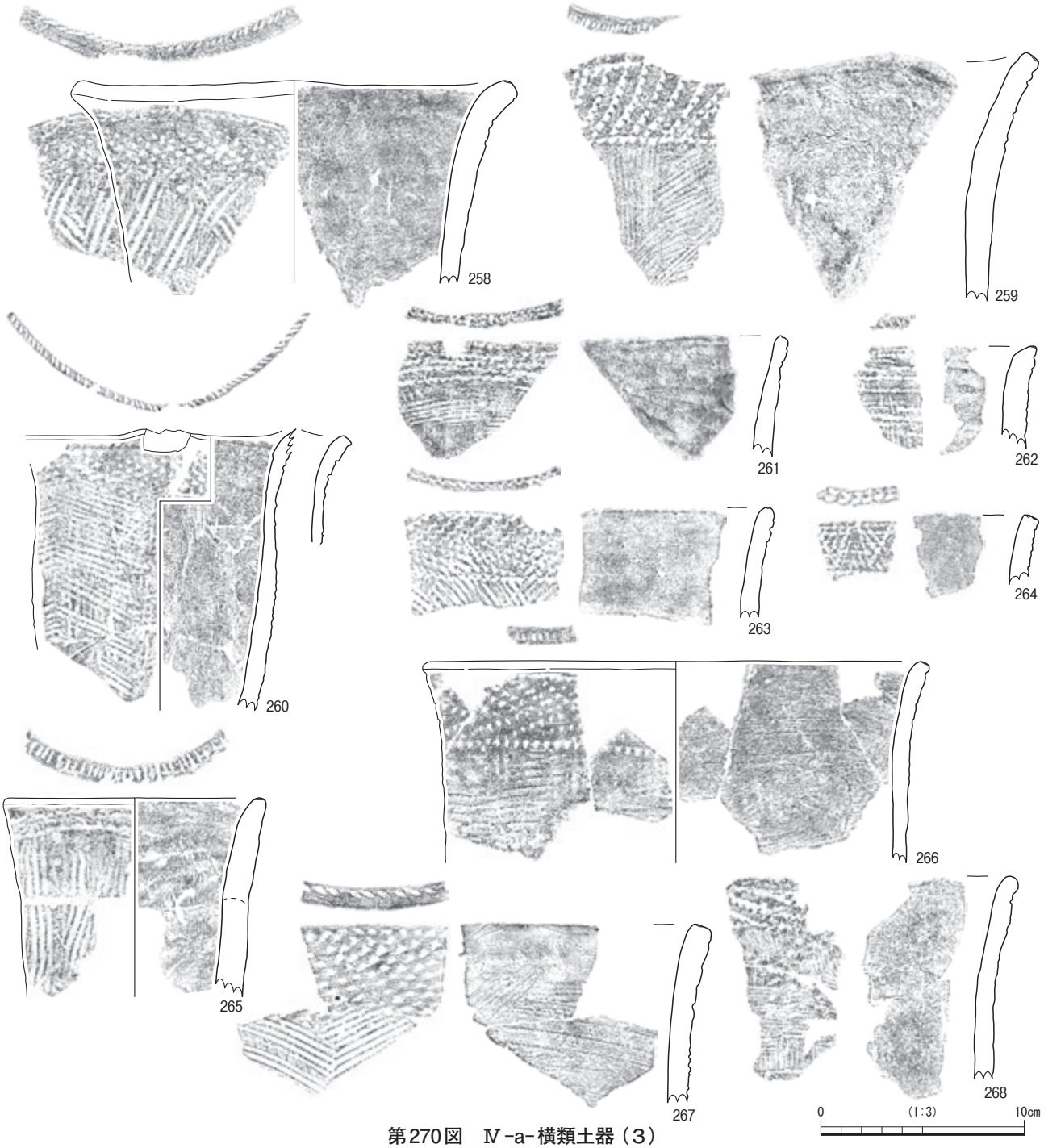
261・262・265は口縁部外面に横位貝殻刺突文のみを数条施す。261はやや丸みを帯びる口唇部に横位貝殻刺



第268図　Ⅳ-a-横類土器（1）



第269図　Ⅳ-a-横類土器（2）



第270図　Ⅳ-a-横類土器（3）

突文を２条，口縁部外面には５条の横位貝殻刺突文を施す。胴部は横位方向の貝殻条痕を施すが，ナデ消す部分が多い。内面は工具ナデをおこなう。265は口縁部外面に２～３条の横位貝殻刺突文を，胴部は縦位貝殻条痕文を施す。

263は口縁部外面に斜位貝殻刺突文を羽状に，その上位と下位に１条の横位貝殻刺突文を施す。丸みを帯びた口唇部に施す１条の横位貝殻刺突文も含め，貝殻刺突文は全て同じ施文原体である。

264は口唇部に２連の貝殻刺突文を１列施し，口縁部外面に確認できる範囲のみだが，６条の横位貝殻刺突文を施し，その上から斜位貝殻刺突文を鋸歯状に施す。

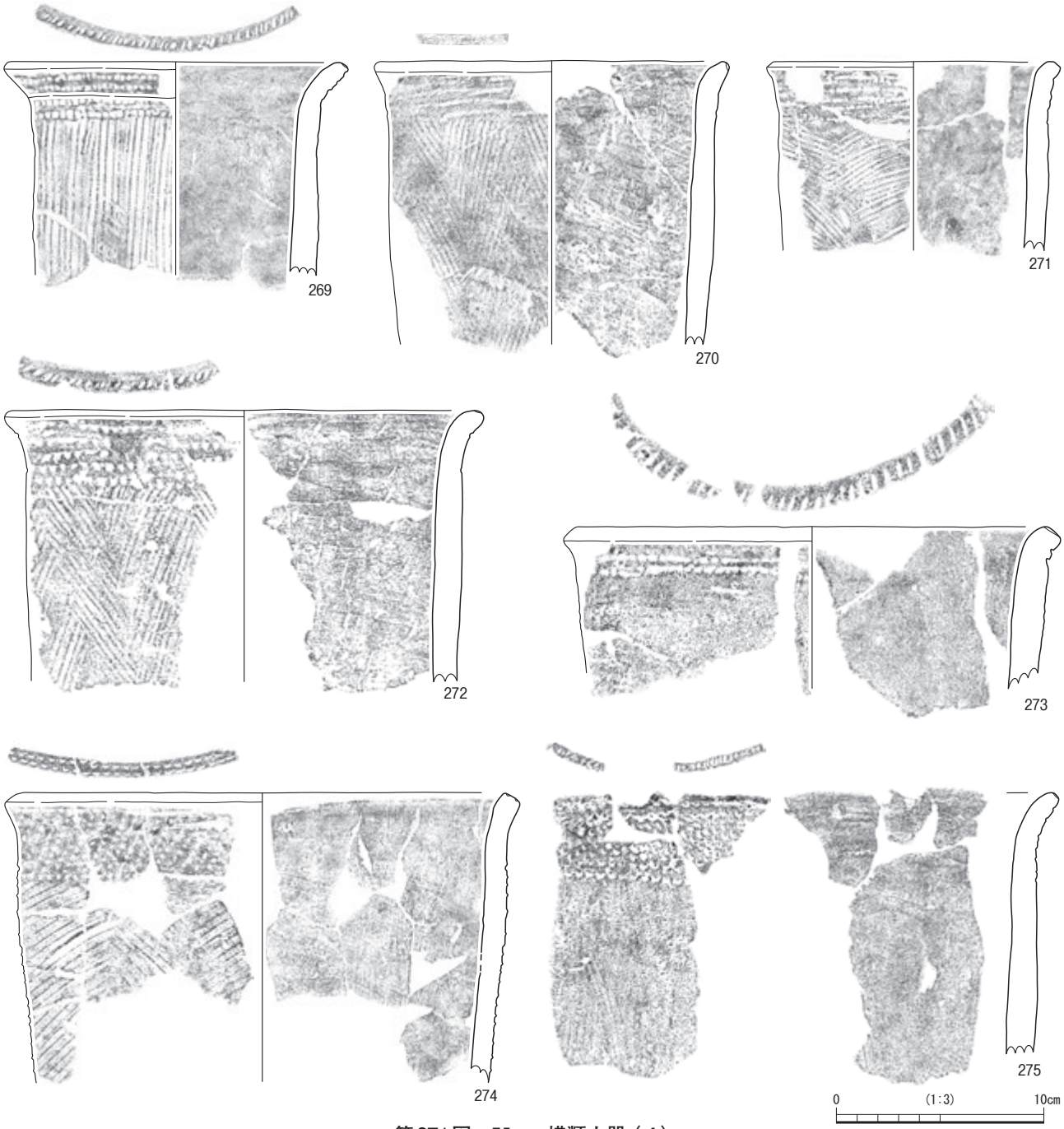
266～268は口縁部外面に１条のみ横位貝殻刺突文を施し，その下位に斜位貝殻刺突文を施す。266・268は斜位貝殻刺突文の上下に横位貝殻刺突文を施す。268は丸みを帯びた口唇部に１条の横位貝殻刺突文をわずかに確認できる。

269～275は口縁端部のみ外反する一群である。

269～273は口縁部外面に横位貝殻刺突文のみを数条

施す。269は４条の横位貝殻刺突文を施すが，部分的に横位貝殻刺突文の１条目と２条目間，２条目と３条目間にナデをおこなう。そのため，上下の刺突文は部分的につぶれている。胴部は縦位貝殻条痕文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。270は５～６条の横位貝殻刺突文を施す。口縁部内面の上部はナデ，下位はケズリをおこなう。271は５～６条の横位貝殻刺突文を施すが，部分的に段差をもつ。胴部の綾杉状の貝殻条痕文は浅い。272は５条の横位貝殻刺突文を施す。胴部の綾杉状の貝殻条痕文は肉眼観察でははっきりしないほど浅く施され，また摩滅している。273は平坦気味に整形された口唇部に太めのキザミを，口縁部外面には２条の横位貝殻刺突文を施す。胴部の横位貝殻条痕文はほとんどをナデ消す。

274は横位貝殻刺突文の間に斜位貝殻刺突文を施し，横位貝殻刺突文は１条である。口唇部には２条の貝殻刺突文を施す。275は口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施し，その上位は１条，その下位に２条の横位貝殻刺突文を施す。胴部の貝殻条痕文は摩滅するが，斜位や縦位に施すようである。



第271図　Ⅳ-a-横類土器（４）

Ⅳ-a-羽類（第272図276～第275図295）

口縁部が外反し，口縁部外面に斜位貝殻刺突文を羽状に施す一群である。

276～288は口縁部が外反する一群である。

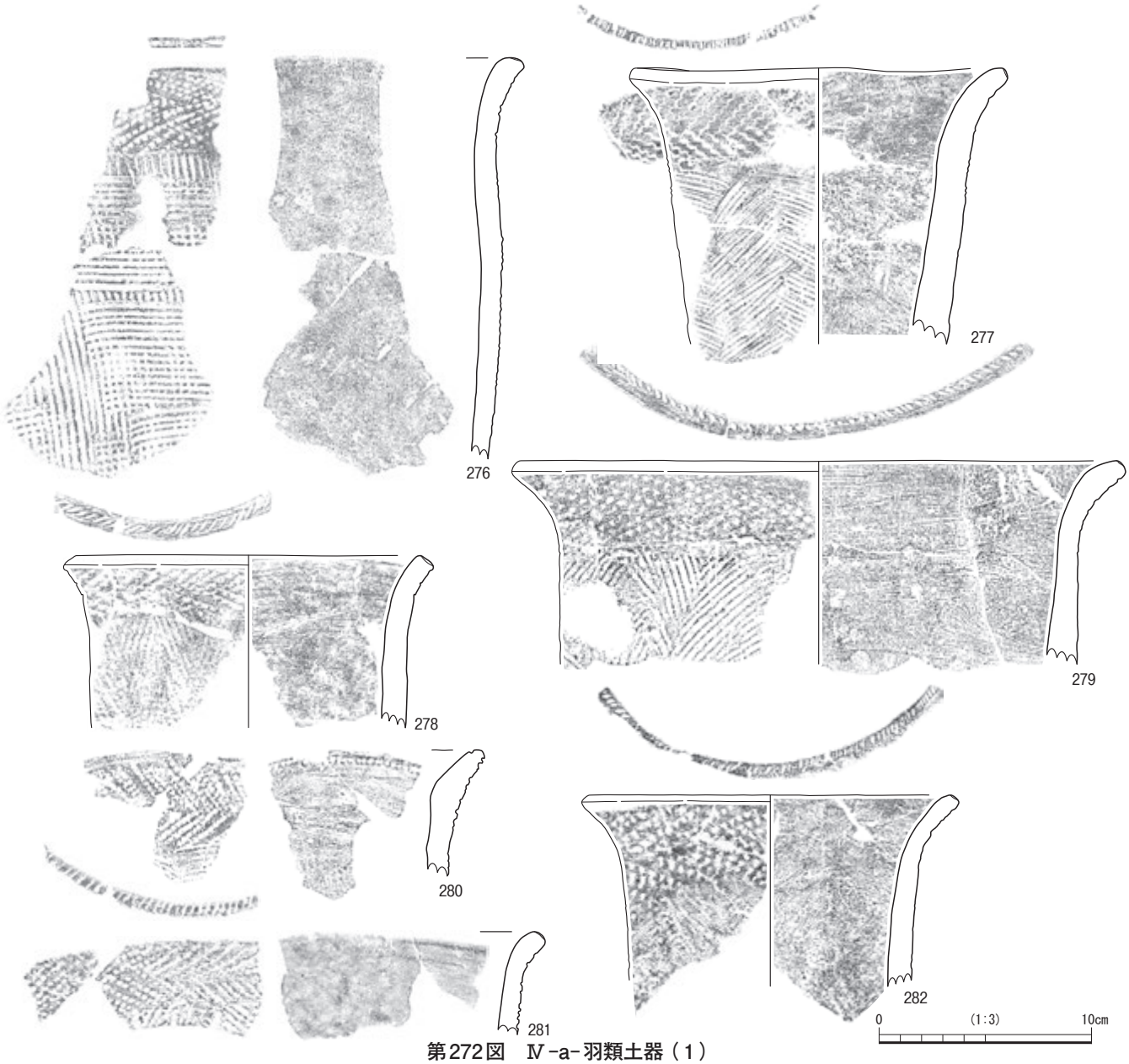
276は胴部に横位及び縦位の貝殻条痕文を重ねて施す。横位・縦位の先後関係はこの破片資料からは確認できない。丸みを帯びた口唇部はキザミを施す。

277～280・283・284・286～288は胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す一群である。277は波状口縁で，内面は口縁部付近はミガキのようなナデ，その下位はナデとケズリをおこなう。278は胴部の綾杉状の貝殻条痕文は摩滅する。280は口唇部内面側に横位貝殻刺突文を１条施す。283は口縁部から底部まで残存している完形品である。丸みを帯びた口唇部にはキザミを，胴部下部には横位貝殻条痕文を施す。横位貝殻条痕文は文様の重なりから，胴部の綾杉状の貝殻条痕文を施した後に施す。底面外部端部はキザミを施す。このキザミは最下部まで施した横位貝殻条痕文をナデ消してから施す。底面外部はていねいなナデをおこなう。内面は口縁部付近から底部まで，工具ナデや指ナデをおこなう。284は底部は残存していないが，口縁部から胴部下半まで窺える資料である。

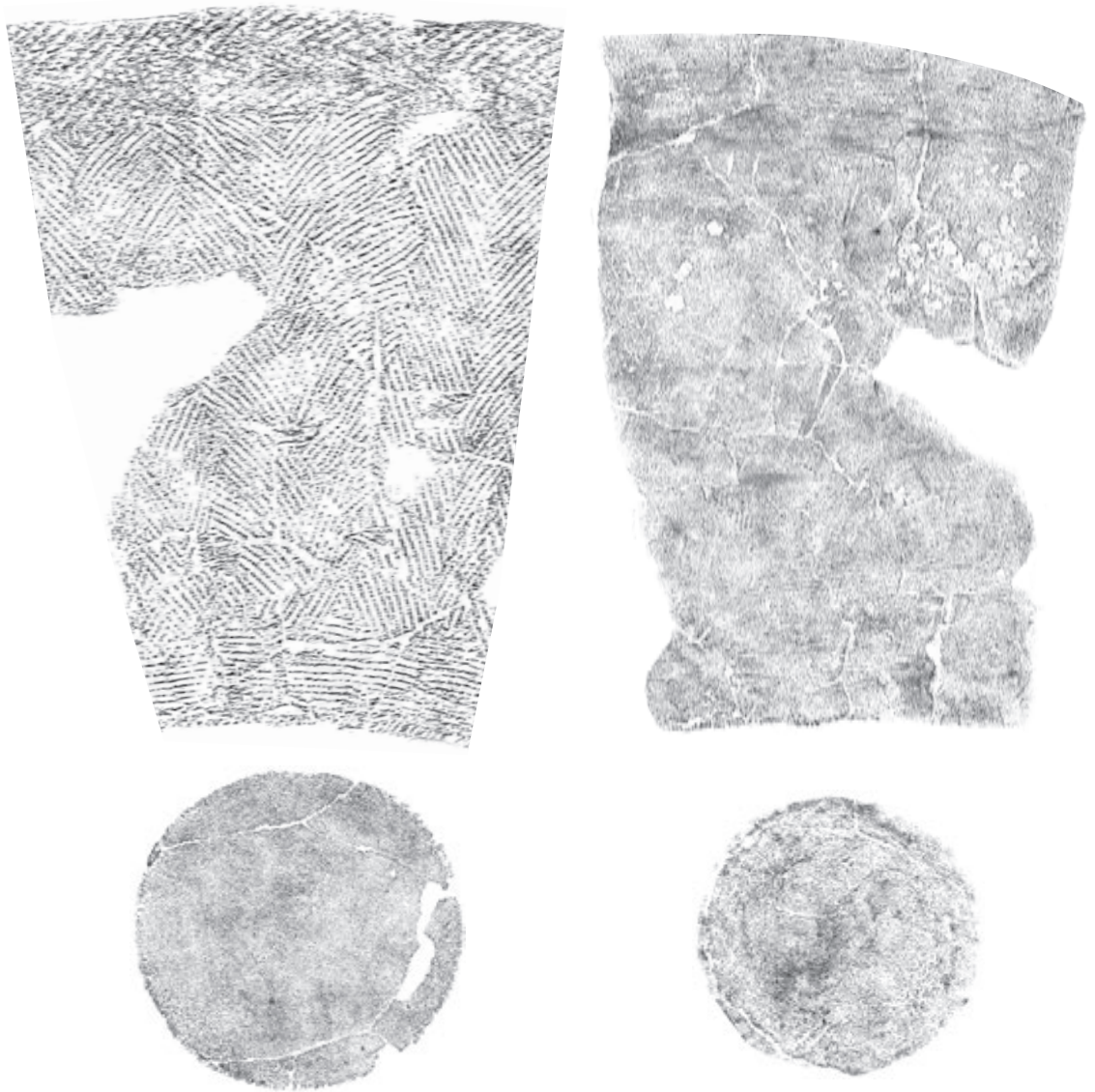
281は口縁部外面付近に貝殻刺突文を羽状に施すが，場所により貝殻を刺突する方向が異なり，文様形態が変化する。また羽状の貝殻刺突文の下位には，斜位貝殻刺突文を施す。胴部は貝殻条痕文を施す。

282は胴部文様が完全に摩滅しており不明である。

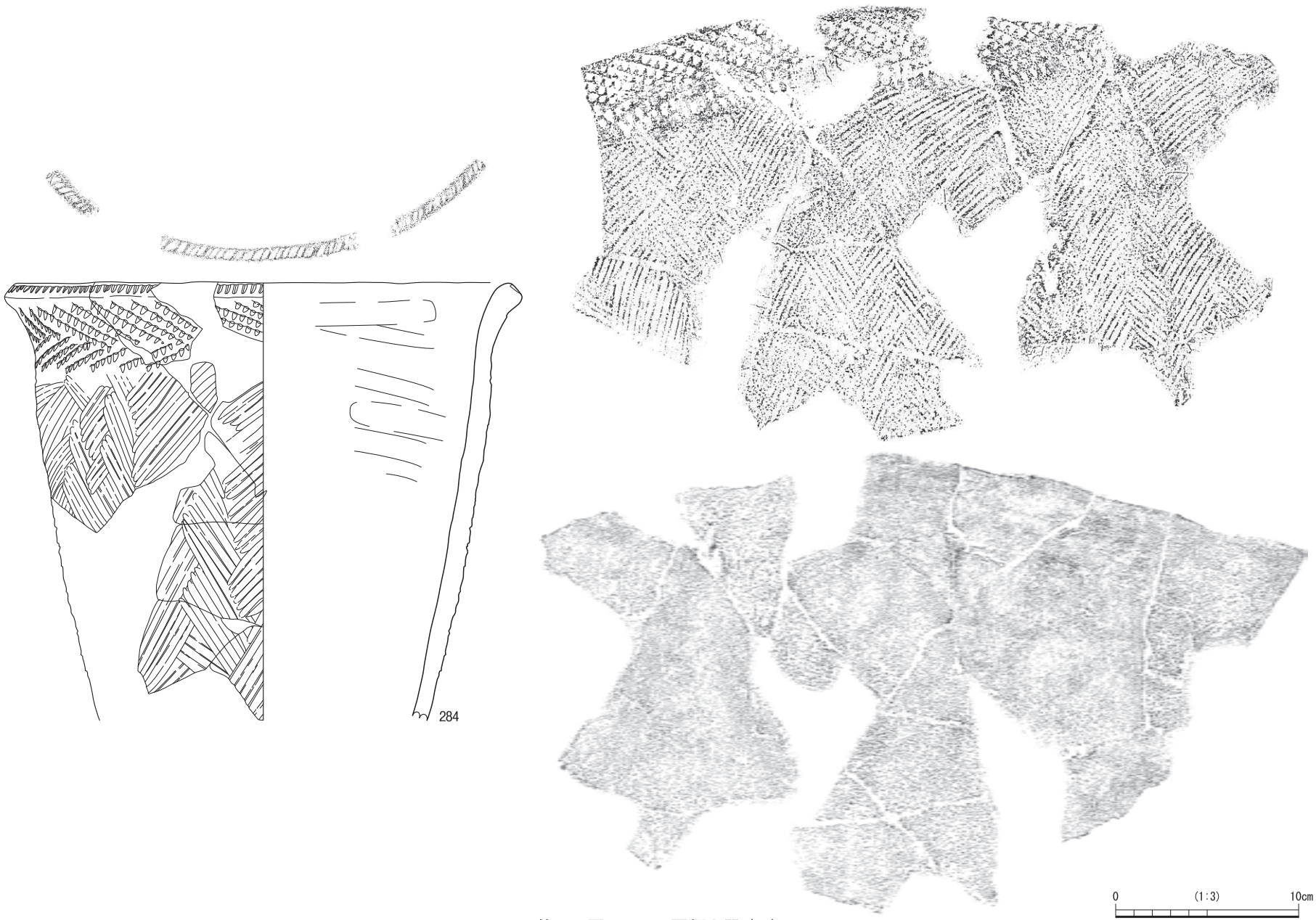
285は口縁部付近のみの破片資料で，胴部文様は確認できない。



第272図　Ⅳ-a-羽類土器（１）



第273図　Ⅳ-a-羽類土器（2）



第274図　Ⅳ-a-羽類土器（3）

289 ～ 293は口縁部がやや外反する一群である。

289は胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。平坦に整形された口唇部に縦位貝殻刺突文を１列施す。

290は胴部に斜位貝殻条痕文を施す。

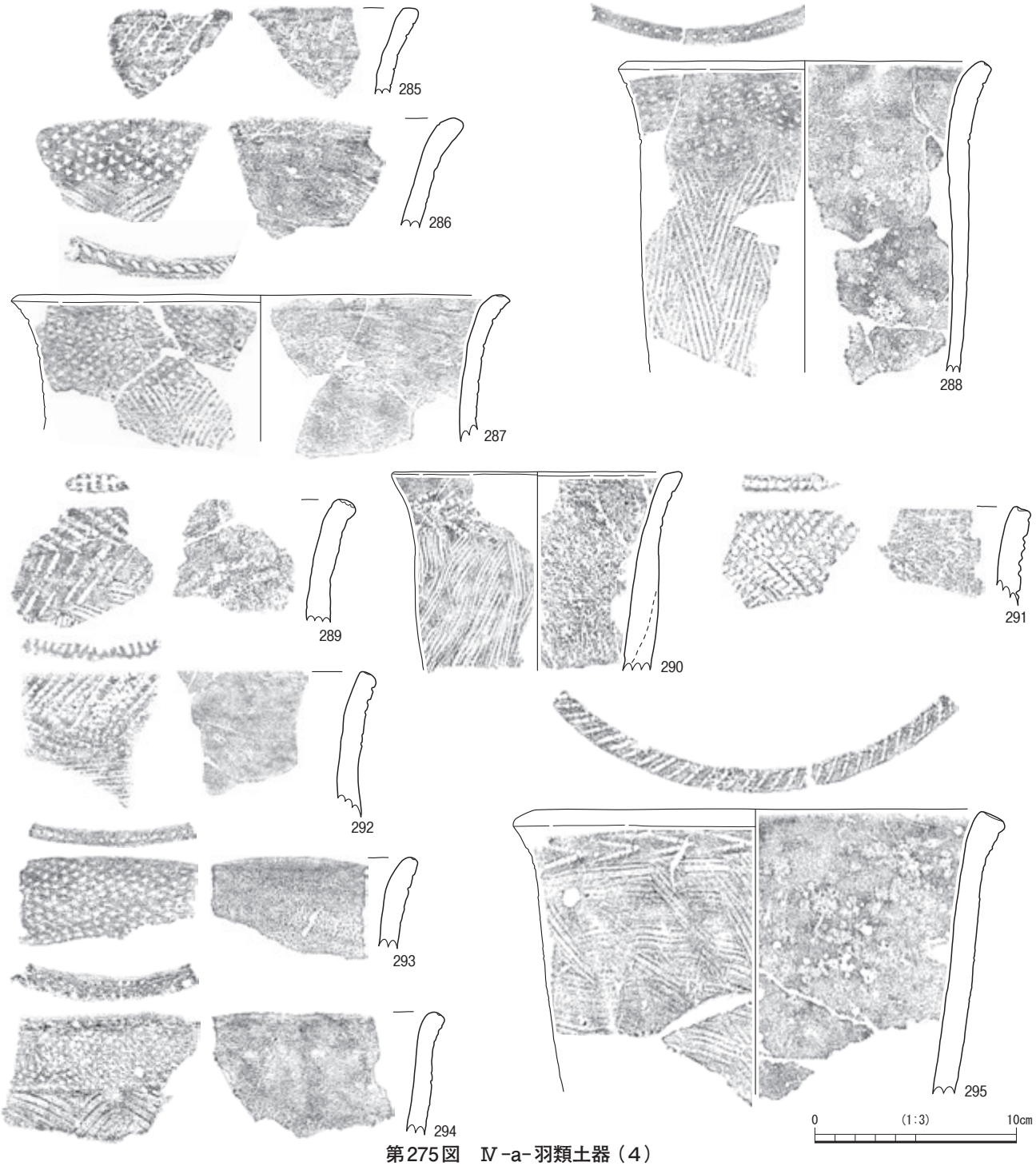
291・293は口縁部付近のみの破片資料で，胴部文様は確認できない。291は平坦に整形された口唇部に横位貝殻刺突文を１条施す。

292は胴部に横位貝殻条痕文を施す。

294・295は口縁端部のみ外反する。

294は胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。口縁部外面上部の貝殻刺突文と胴部の貝殻条痕文との間に，横位貝殻刺突文を１条施し文様区画とする。

295は口縁部外面上部に，他の土器の文様と比較すると羽状間が広い貝殻刺突文を施す。その下位には横位の貝殻条痕文を１条施し，胴部文様との文様区画とする。胴部には施文方向の異なった２種類の斜位貝殻条痕文を施す。



第275図　Ⅳ-a-羽類土器（４）

Ⅳ-a-縦類（第276図296～第277図303）

口縁部が外反し，口縁部外面に縦位貝殻刺突文を施す一群である。

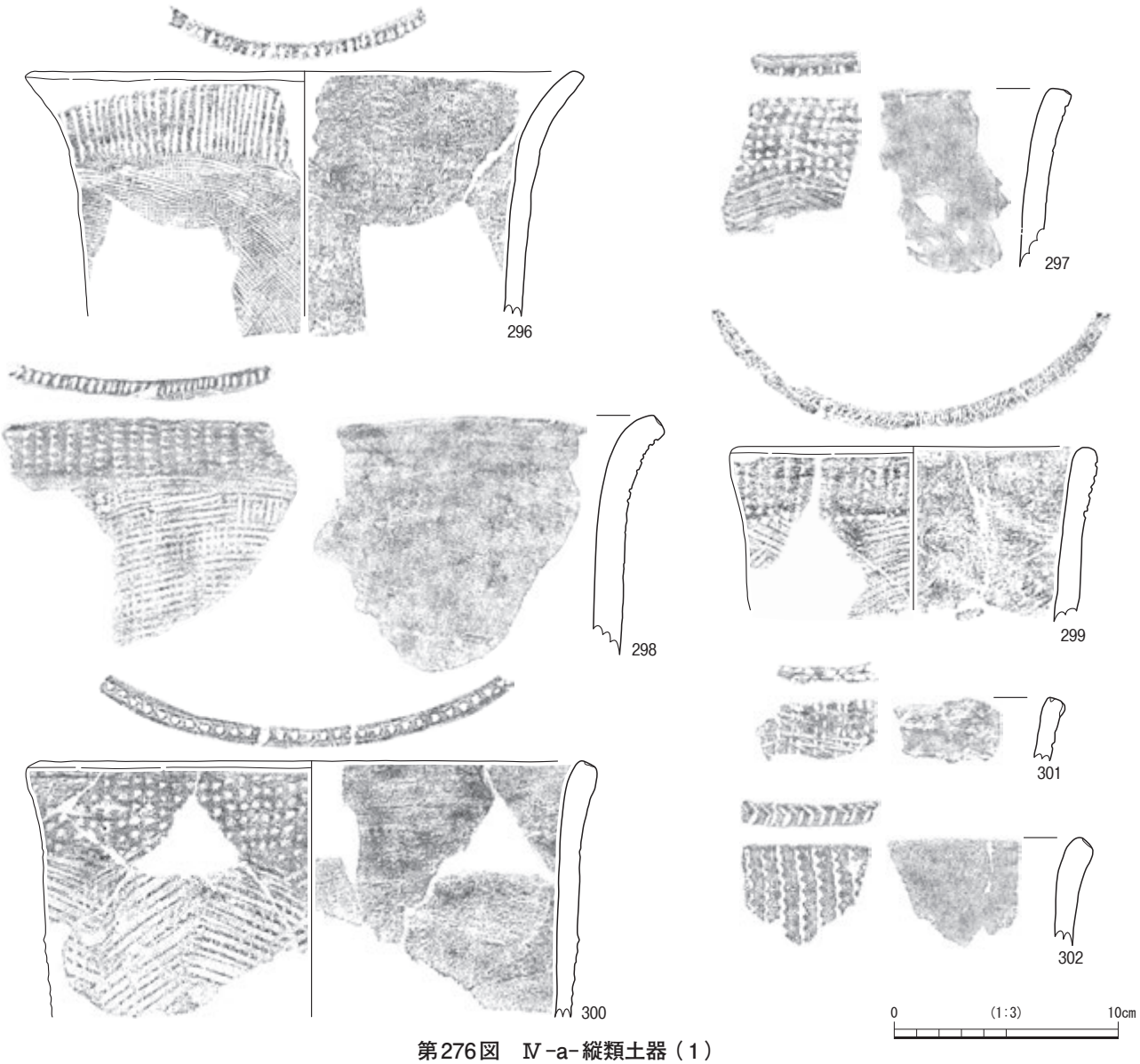
296・298は口縁部が外反する。296は口唇部に貝殻刺突文，口縁部外面上部に縦位貝殻刺突文，胴部に貝殻条痕文を同一の施文原体で文様を施す。貝殻条痕文が細かいことから施文原体は小型の貝殻である。口縁部外面には，縦位貝殻刺突文を２列施す。胴部の貝殻条痕文は様々な方向に施す。298の縦位貝殻刺突文は部分的にナデ消す。胴部には横位に近い斜位貝殻条痕文を施し，部分的に縦位貝殻条痕文も確認できる。内面は工具ナデをおこない，口縁部付近は特にていねいである。器壁は厚いが，外器面が剥落する部分がある。

297・299～303は口縁部がやや外反する一群である。

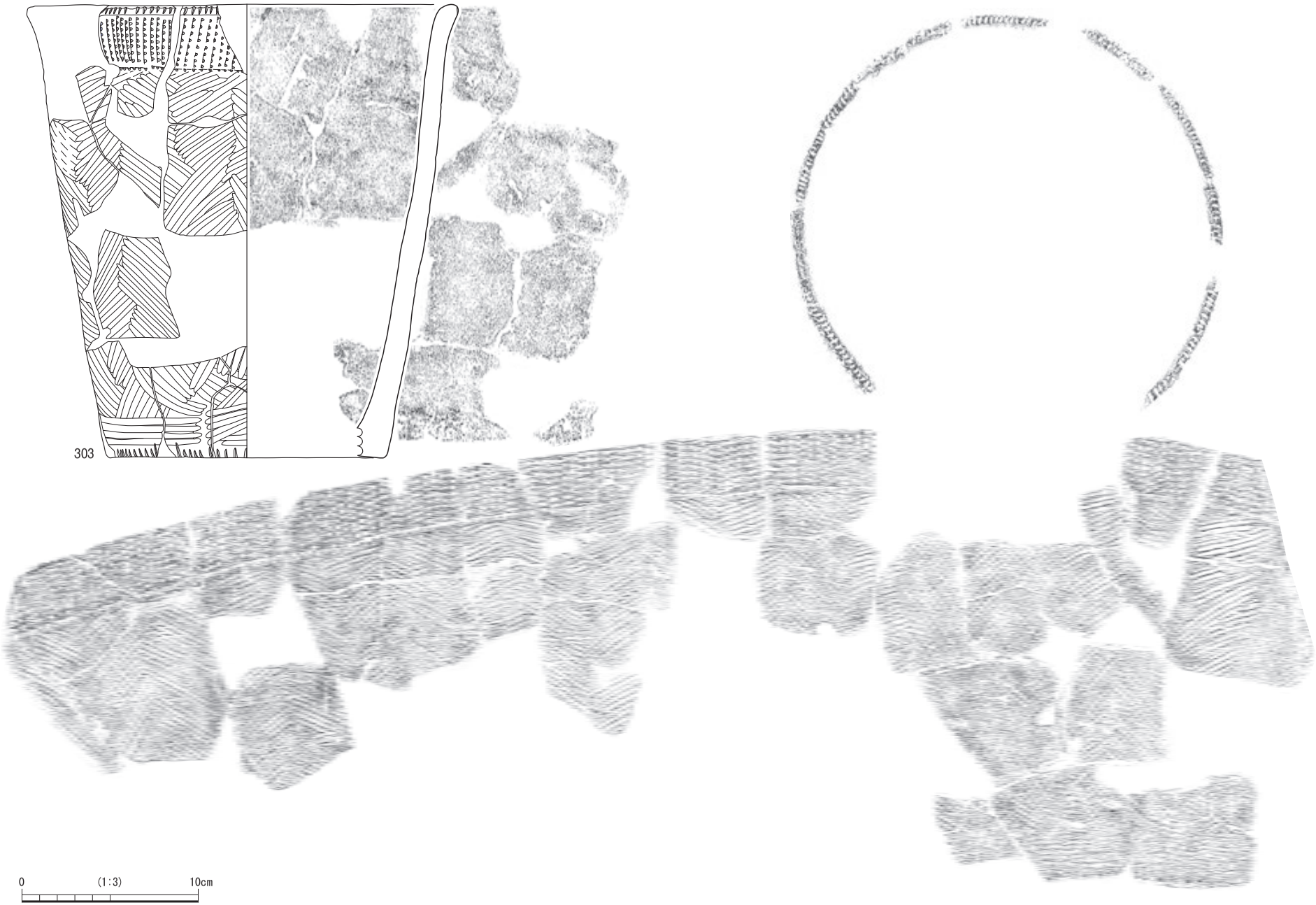
297・300・303は胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。297は口唇部の外側端部に貝殻で押圧気味のキザミを施す。口唇部頂部はナデ調整により平坦に整形され，部分的に口唇部が平坦になる。303は口縁部から底部まで残存している。口唇部は外側端部にキザミを施す。口縁部外面の縦位貝殻刺突文と胴部の綾杉状の貝殻条痕文の間に，横位貝殻刺突文を１条施し文様区画とする。内面は全面に工具ナデをおこなう。

299はやや平坦気味な口唇部にキザミを施す。口縁部外面の縦位貝殻刺突文の下位には，横位貝殻刺突文を１条施し，胴部の貝殻条痕文との文様区画とする。胴部には斜位や横位の貝殻条痕文を施す。

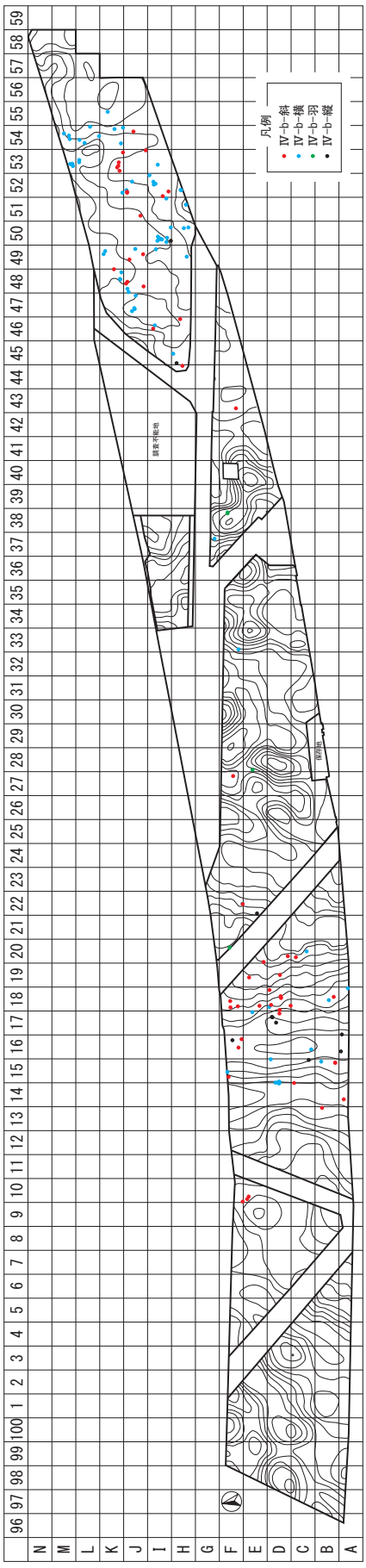
301・302は口縁部付近のみの破片資料で，胴部文様は確認できない。301の口縁部外面は，２連の縦位貝殻刺突文を１組とした文様である。口唇部の貝殻刺突文も２連で施す。器形の整形や器面調整が他の同類の土器と比較して粗い。302の口唇部にはキザミを羽状に施す。



第276図　Ⅳ-a-縦類土器（１）



第277図　Ⅳ-a-縦類土器（2）



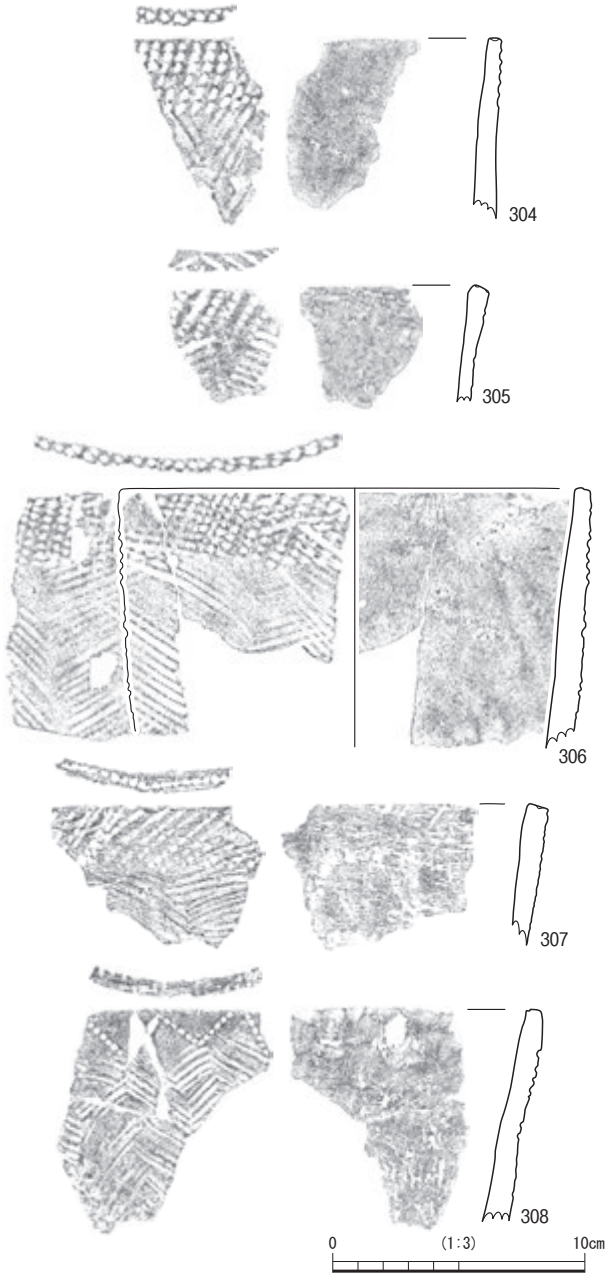
第278図　遺物分布図（Ⅳ－b類）

Ⅳ－ｂ－斜類（第279図304～第282図322）

口縁部が外傾し，口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施す一群である。瘤状突起をもつものも見られる。

304～309は胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。308は斜位貝殻刺突文を鋸歯状に施す。口唇部は縦位貝殻刺突文を施した後，ほとんどをナデ消す。309と310は口縁部外面上部まで貝殻条痕文を施した後，斜位貝殻刺突文を施す。口縁部外面の貝殻刺突文と胴部の貝殻条痕文を１条の横位貝殻刺突文で文様区画とする。

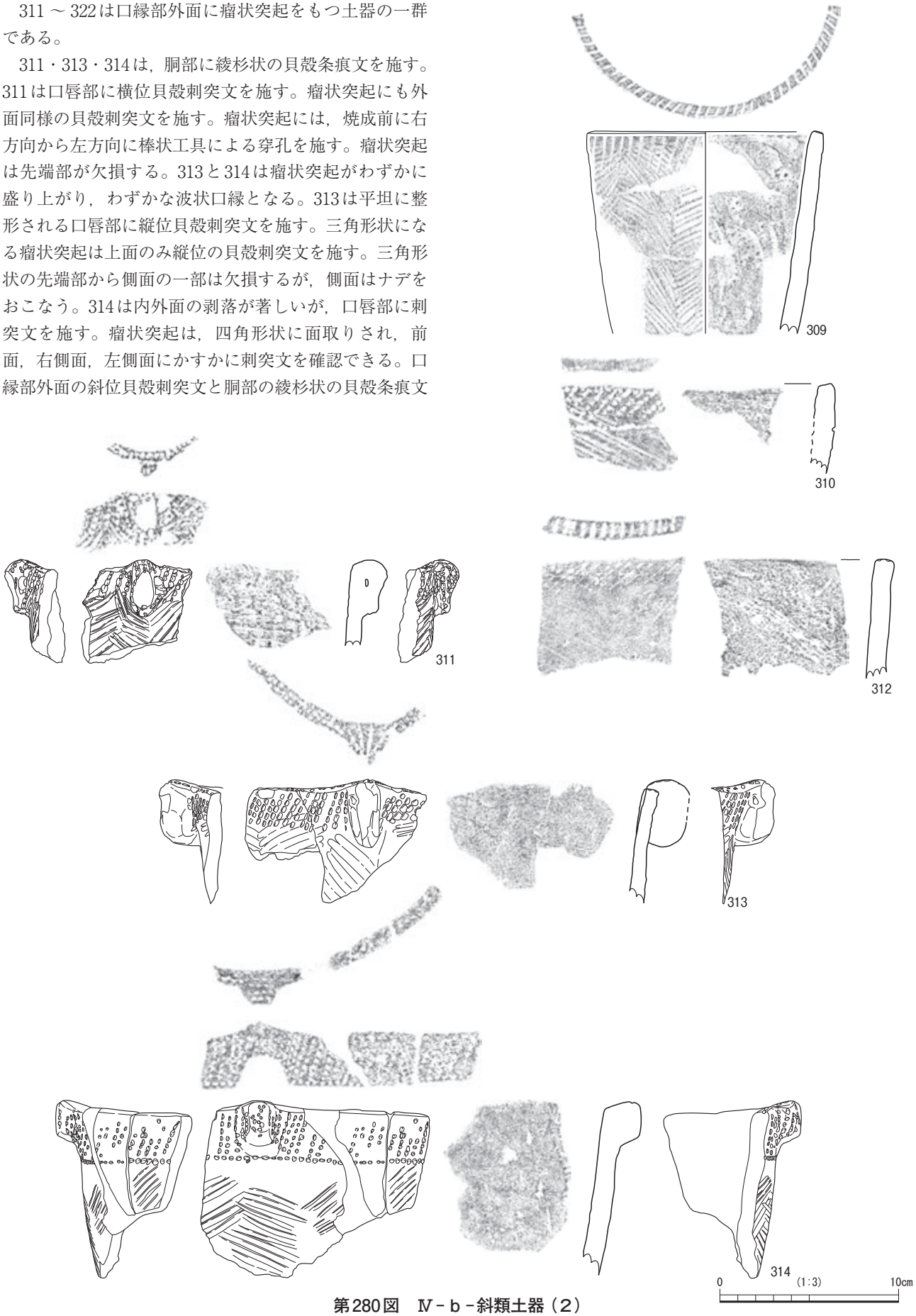
312は破片資料で全体は不明であるが，口縁部外面のみに文様を施し，胴部に文様をもたない。胴部はナデが確認でき，摩滅等で文様が消えたわけではないことが分かる。平坦に整形された口唇部は縦位貝殻刺突文を施す。



第279図　Ⅳ－ｂ－斜類土器（１）

311 ～ 322は口縁部外面に瘤状突起をもつ土器の一群である。

311・313・314は，胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。311は口唇部に横位貝殻刺突文を施す。瘤状突起にも外面同様の貝殻刺突文を施す。瘤状突起には，焼成前に右方向から左方向に棒状工具による穿孔を施す。瘤状突起は先端部が欠損する。313と314は瘤状突起がわずかに盛り上がり，わずかな波状口縁となる。313は平坦に整形される口唇部に縦位貝殻刺突文を施す。三角形状になる瘤状突起は上面のみ縦位の貝殻刺突文を施す。三角形状の先端部から側面の一部は欠損するが，側面はナデをおこなう。314は内外面の剥落が著しいが，口唇部に刺突文を施す。瘤状突起は，四角形状に面取りされ，前面，右側面，左側面にかすかに刺突文を確認できる。口縁部外面の斜位貝殻刺突文と胴部の綾杉状の貝殻条痕文



第280図　Ⅳ－ｂ－斜類土器（２）

とは，１条の横位貝殻刺突文で文様区画とする。胎土には石英が多く含まれる。

315・316は胴部に斜位貝殻条痕文を施す。口唇部は平坦に整形され，縦位貝殻刺突文を施す。同一の施文原体で口縁部外面や，瘤状突起に貝殻刺突文を施す。瘤状突起は上面・側面・前面が面取りされ，下部は丸みを帯びる。面取りされた面には縦位貝殻刺突文を施す。胴部には浅い斜位貝殻条痕文を施す。316は波状口縁で，波頂部外面に瘤状突起をもつ。口唇部は内傾し，波頂部では特に傾斜が顕著である。ていねいなナデをおこなった口唇部に文様はもたない。口縁部外面の斜位貝殻刺突文は波状に沿って施し，その下位にも横位気味の斜位貝殻刺突文を施す。瘤状突起の側面と前面には縦位貝殻刺突文を施す。瘤状突起直下には貼り付け時の指おさえの痕跡が明瞭に残る。胴部には浅い貝殻条痕をおこなう。

317は胴部に横位貝殻条痕文を施す。瘤状突起がわずかに盛り上がり，わずかな波状口縁である。口唇部は平坦に整形され，貝殻刺突文を施す。三角形状に飛び出す瘤状突起に縦位貝殻刺突文を施す。口縁部外面は１条の横位貝殻刺突文で胴部の貝殻条痕文と文様区画とするが，瘤状突起直下のみさらに横位貝殻刺突文を一条施す。胴部はごく浅い横位貝殻条痕文を施す。内面はヘラ状工具によるていねいなナデをおこなう。

318 ～ 322は口縁部付近のみの破片資料で，胴部文様は確認できない。318は丸みを帯びた口唇部に貝殻押圧文を施す。瘤状突起は丸みを帯び，側面及び前面に縦位貝殻刺突文を施す。内面はヘラ状工具によるナデをおこなうが，口縁部付近のみていねいな指ナデをおこなう。319の口唇部は平坦に整形され，１列の縦位貝殻刺突文を施す。口縁部外面に施す斜位貝殻刺突文は，密である。瘤状突起は側面と前面が面取りされるが，一部は欠

第281図　Ⅳ－ｂ－斜類土器（３）

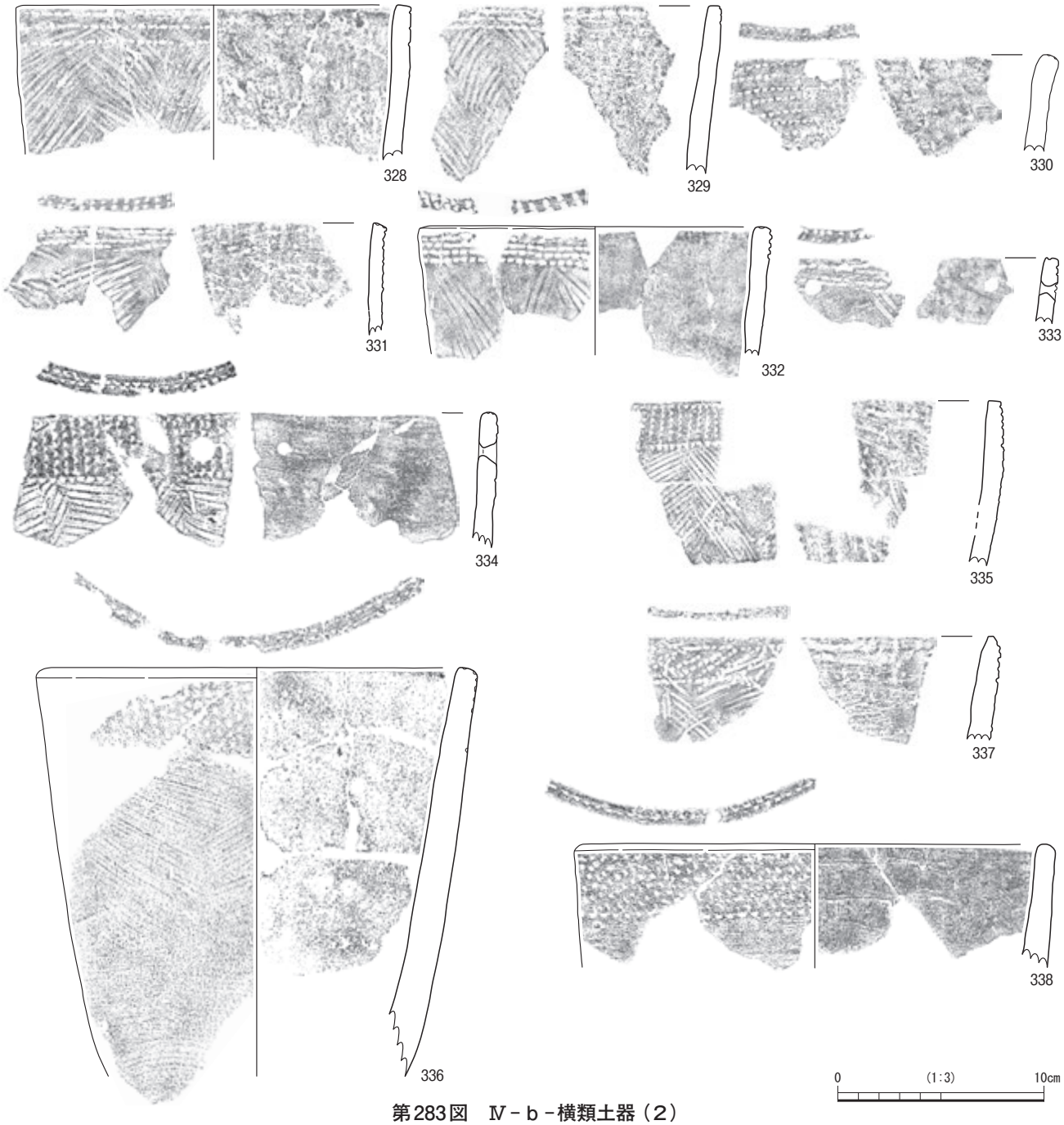
損する。320は平坦に整形した口唇部に横位貝殻条痕文を施す。瘤状突起は上面・側面・前面を面取りし，下面のみ丸みを帯びる。上面は口唇部同様に横位貝殻刺突文を，側面及び前面は縦位貝殻刺突文を施す。321・322は同一個体と考えられる。波状口縁で，縦長の瘤状突起分が波頂部となる。口唇部は内傾する。瘤状突起は面を整形しているとは言えないが，上面・側面・前面を形成する。前面は曲線を描きそのまま胴部へ接合する。瘤状突起全面に貝殻刺突文を施す。瘤状突起側面には上下２ヶ所で焼成前に穿孔を施し，貝殻刺突文は穿孔部を避けて施す。口縁外面の斜位貝殻刺突文の下位に，１条の横位貝殻刺突文を施し，その下位にさらに斜位貝殻刺突文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。

Ⅳ－ｂ－横類（第282図323～第285図347）

口縁部が外傾し，口縁部外面に横位貝殻刺突文を施す一群で，口縁部外面文様の最上段に１条でも横位貝殻条痕文を施せば，この類に分類した。瘤状突起をもつものも見られる。

323～329・331～333は口縁部外面に横位の貝殻刺突文のみを数条施す。323・325は２条の横位貝殻刺突文を施す。口唇部は平坦に整形され，ナデをおこなうが無文である。胴部には斜位貝殻条痕文を施す。内面はケズリをおこなうが，口縁部付近のみ指ナデとなる。323は胴部の綾杉状の貝殻条痕文を粗く施すが，内面のナデはていねいである。327は３条の横位貝殻刺突文を施すが，平坦に整形した口唇部と口縁部の境に２連の貝殻刺突文を施すことから，口縁部外面最上位の横位貝殻刺突

第282図　Ⅳ－ｂ－斜類土器（４）・Ⅳ－ｂ－横類土器（１）

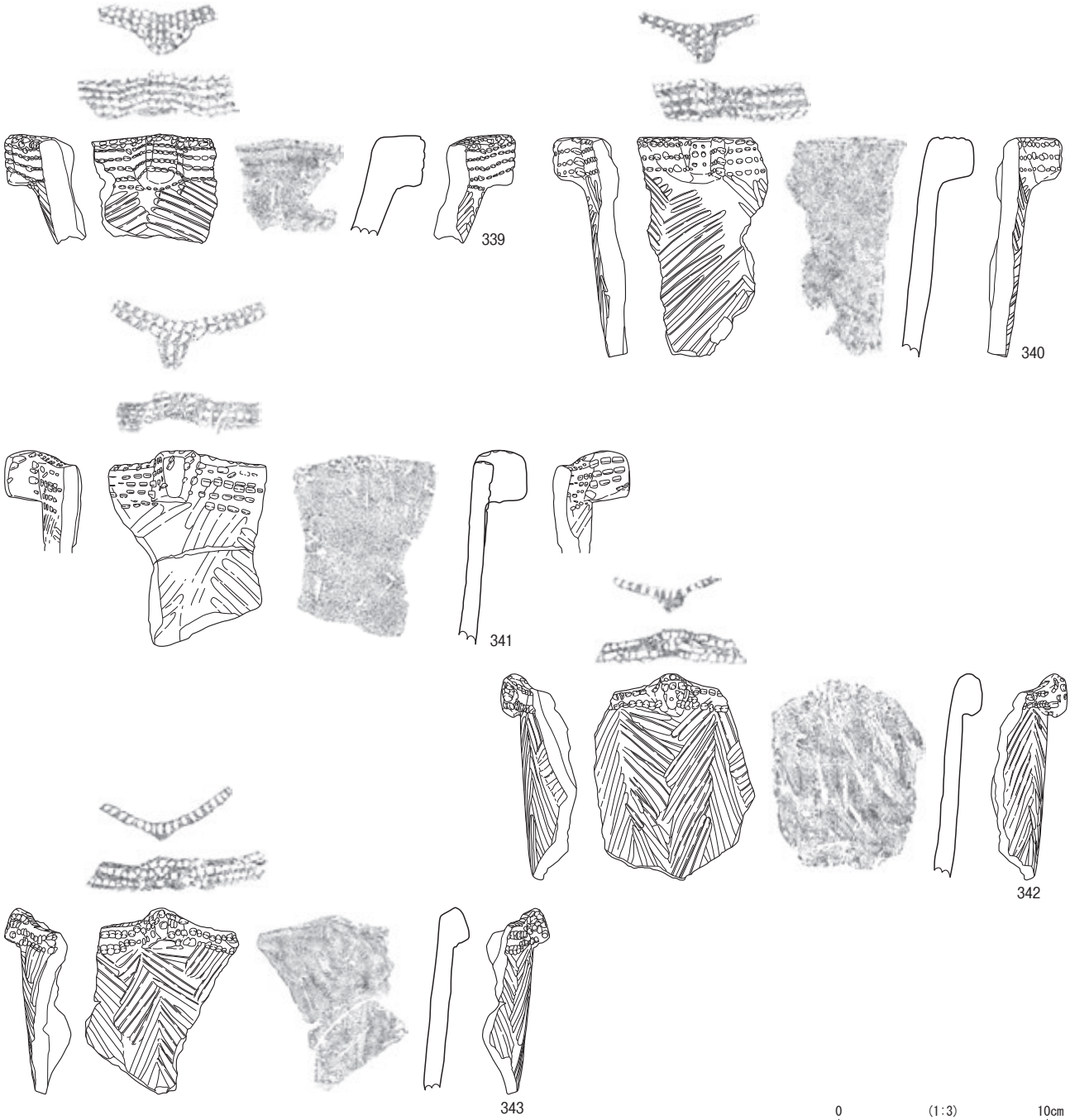


第283図　Ⅳ－ｂ－横類土器（２）

文と口唇部文様が重なり合う。324・326・328・329も３条の横位貝殻刺突文を施す。326の口唇部は２連の貝殻刺突文を施す。328・329の口唇部は平坦に整形されるが無文である。329は胴部に浅い綾杉状の貝殻条痕文を施す。330は７条の横位貝殻刺突文と縦位の貝殻刺突文を施す。口唇部は横位貝殻刺突文を２条施す。331は３～４条の横位貝殻刺突文を施す。332は４条の横位貝殻刺突文を施す。胴部は貝殻条痕文を鋸歯状に施す。333は４～５条の横位貝殻刺突文を施す。平坦に整形された口唇部は２連の貝殻刺突文を施し，胴部は浅い綾杉状の貝殻条痕文を施す。また内外面から回転穿孔による補修孔をもつ。

334～338の口縁部外面は，縦位貝殻刺突文が目立つが，その上下に１条の縦位貝殻条痕文を施し，口縁部文様を構成する。334の胴部は斜位からやや横位の貝殻条痕文を施す。口縁部には回転穿孔による補修孔が，外面側：内面側が９：１の割合で垂直方向に開けられる。口唇部は刺突文を２条施す。内面はていねいなナデをおこなう。336は平坦に整形された口唇部に２条の横位貝殻刺突文を施す。胴部に貝殻条痕文を非常に浅く施すが，肉眼観察ではほとんど見えない。内面はていねいな工具ナデをおこなう。338は胴部が無文である。

339 ～ 347は，口縁部外面上部に瘤状突起をもつ一群である。339 ～ 344は，瘤状突起上部を頂部にやや波状口縁となる。339・340・342 ～ 344・346は，瘤状突起にも口縁部外面同様の横位貝殻刺突文を施す。341の瘤状突起の左側面には，横位刺突文がみられるが，正面と右側面には，斜位のような刺突文がみられる。345の瘤状突起は無文である。339 ～ 341・346は，口唇部と瘤状突起上部に刺突を施す。342・343は，口唇部に押圧状のキザミをもつ。344・345の口唇部は無文である。339 ～ 347の胴部は，綾杉状の貝殻条痕文を施す。342・344・345の内面は，やや雑な工具ナデをおこなう。343の瘤状突起の下部は，焼成される過程で粘土の貼り付け部分が欠落した可能性のある剥落痕がある。347は，口縁部外面に羽状の貝殻刺突文が目立つが，その上下に１条ずつ横位貝殻刺突文を施し，口縁部文様を構成する。口縁部外面上部に逆三角状の瘤状突起をやや斜位にもつ。瘤状突起にも口縁部外面同様の文様を施す。胴部外面は綾杉状の貝殻条痕文を施し，口唇部には１条の貝殻刺突文を施すが，瘤状突起上面は２条である。



第284図　Ⅳ－ｂ－横類土器（３）

第285図　Ⅳ－ｂ－横類土器（４）

Ⅳ－ｂ－羽類（第286図348）

口縁部が外傾し，口縁部外面に羽状の貝殻刺突文を施す一群で，瘤状突起をもつものもあるが出土数は少ない。

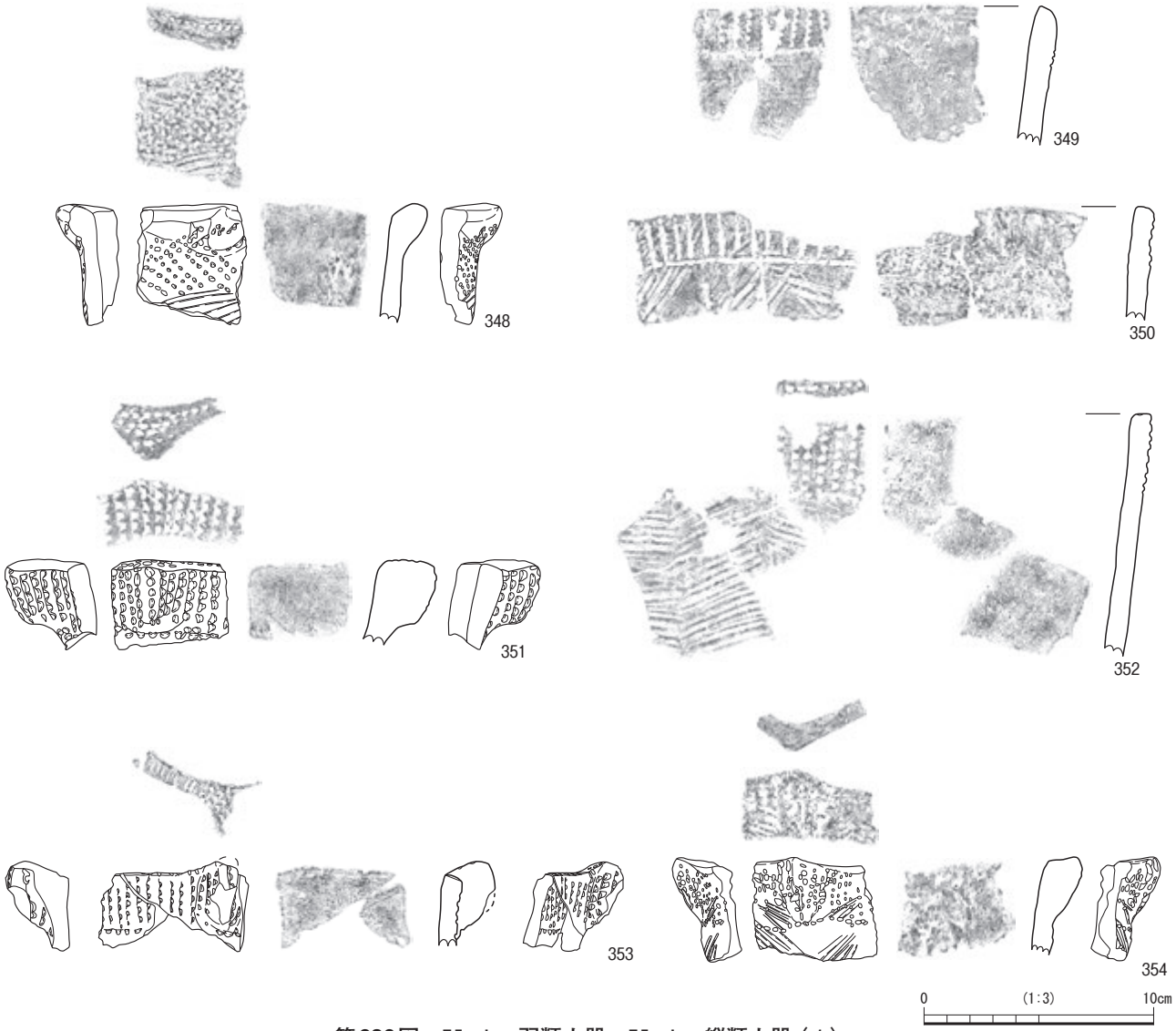
348は，口縁部外面上部に突起のような丸みを帯びた膨らみ（突起）をもち，その突起上部を頂部としやや波状口縁となる。突起にも口縁部外面同様の文様を施し，その下位には斜位貝殻条痕文を施す。口唇部は刺突文を施し，内面はナデをおこなう。

Ⅳ－ｂ－縦類（第286図349～第287図357）

口縁部が外傾し，口縁部外面に縦位貝殻刺突文を施す一群である。瘤状突起をもつものもある。

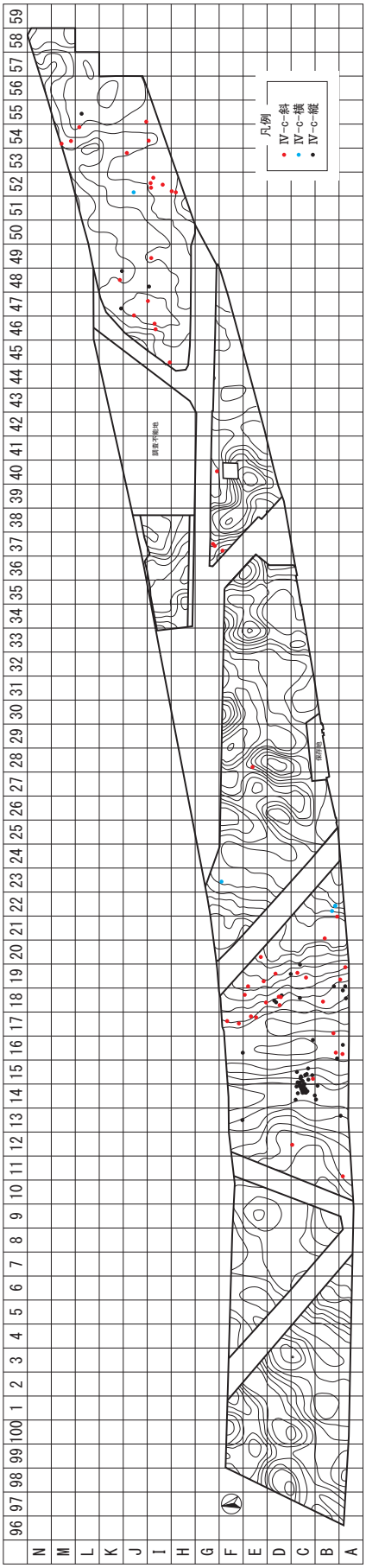
349・350・352は，口縁部外面の縦位貝殻刺突文直下に1条の横位貝殻刺突文を施す。349の口唇部及び胴部外面は，無文である。胴部外面はわずかであるがナデ調整を確認できる。内面にはススが付着する。350の口唇部は無文で，胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は工具ケズリをおこなう。352は口唇部に1条の刺突文を，胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文を施す。

351・353～357は，口縁部外面上部に瘤状突起をもつ一群で，瘤状突起上部を頂部にやや波状口縁となる。瘤状突起にも口縁部外面同様の文様を施す。その縦位貝殻刺突文直下に351・353～355は，横位刺突文を施す。351・355・356は口唇部に刺突文を施す。351・355は瘤状突起上部にも刺突文を施す。353の口唇部では瘤状突起を下に真上から見ると，瘤状突起左端までは斜位貝殻刺突文を，それより左側は細いキザミを施す。354は逆三角状の瘤状突起で口唇部に文様をもたない。354～357は，胴部に斜位条痕文を施すが，357のみ縦位刺突文の上から条痕文を施す。354・357の内面は，工具ケズリをおこなう。355の胎土には石英が多く含まれ器壁が厚い。



第286図　Ⅳ－ｂ－羽類土器・Ⅳ－ｂ－縦類土器（1）

第287図　Ⅳ－ｂ－縦類土器（２）

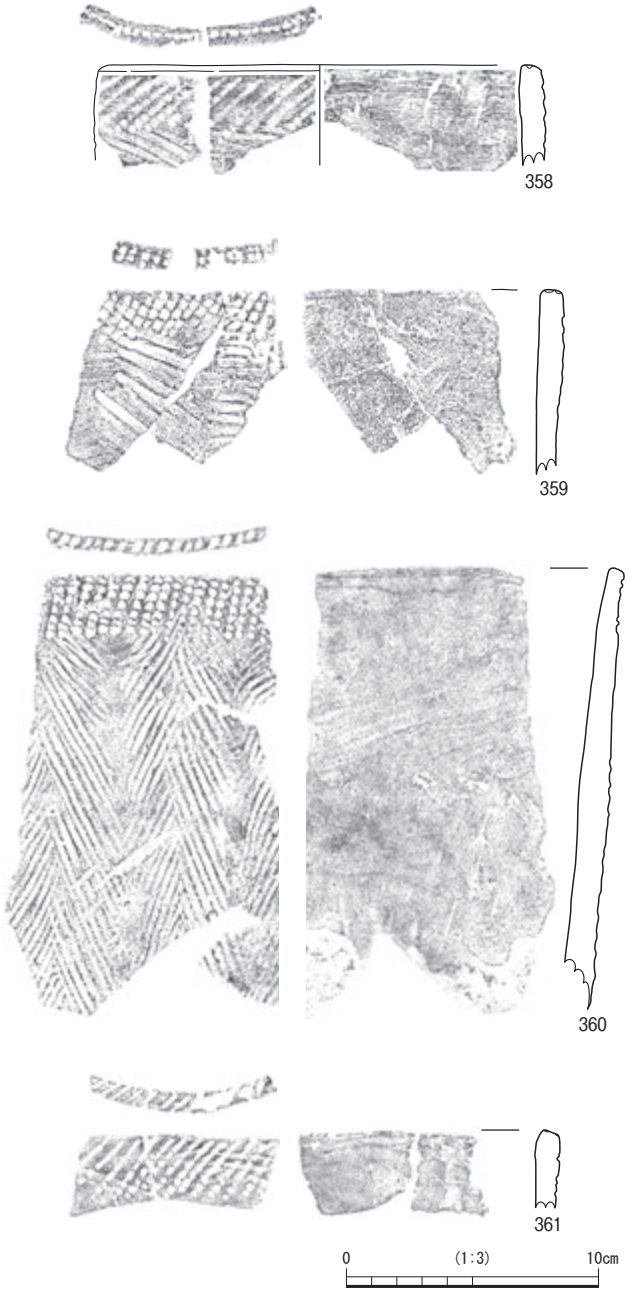


第288図　遺物分布図（Ⅳ-c類）

Ⅳ－ｃ－斜類（第289図358 ～ 361）

口縁部が直行し，口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施す一群である。

358 ～ 360は，口縁部外面の斜位貝殻刺突文直下に，綾杉状の貝殻条痕文を施す。先後関係は，いずれも綾杉状の貝殻条痕文が先である。358・360の内面は工具ナデをおこなう。358は口唇部に貝殻刺突文を施す。359は口縁部に２条の貝殻刺突文を施す。360・361は，口縁部外面の斜位貝殻刺突文に一連の流れとして続くようなキザミを口唇部に施す。その貝殻刺突文とキザミの幅や施文方向は，ほぼ同じである。361の胴部文様は不明である。



第289図　Ⅳ－ｃ－斜類土器

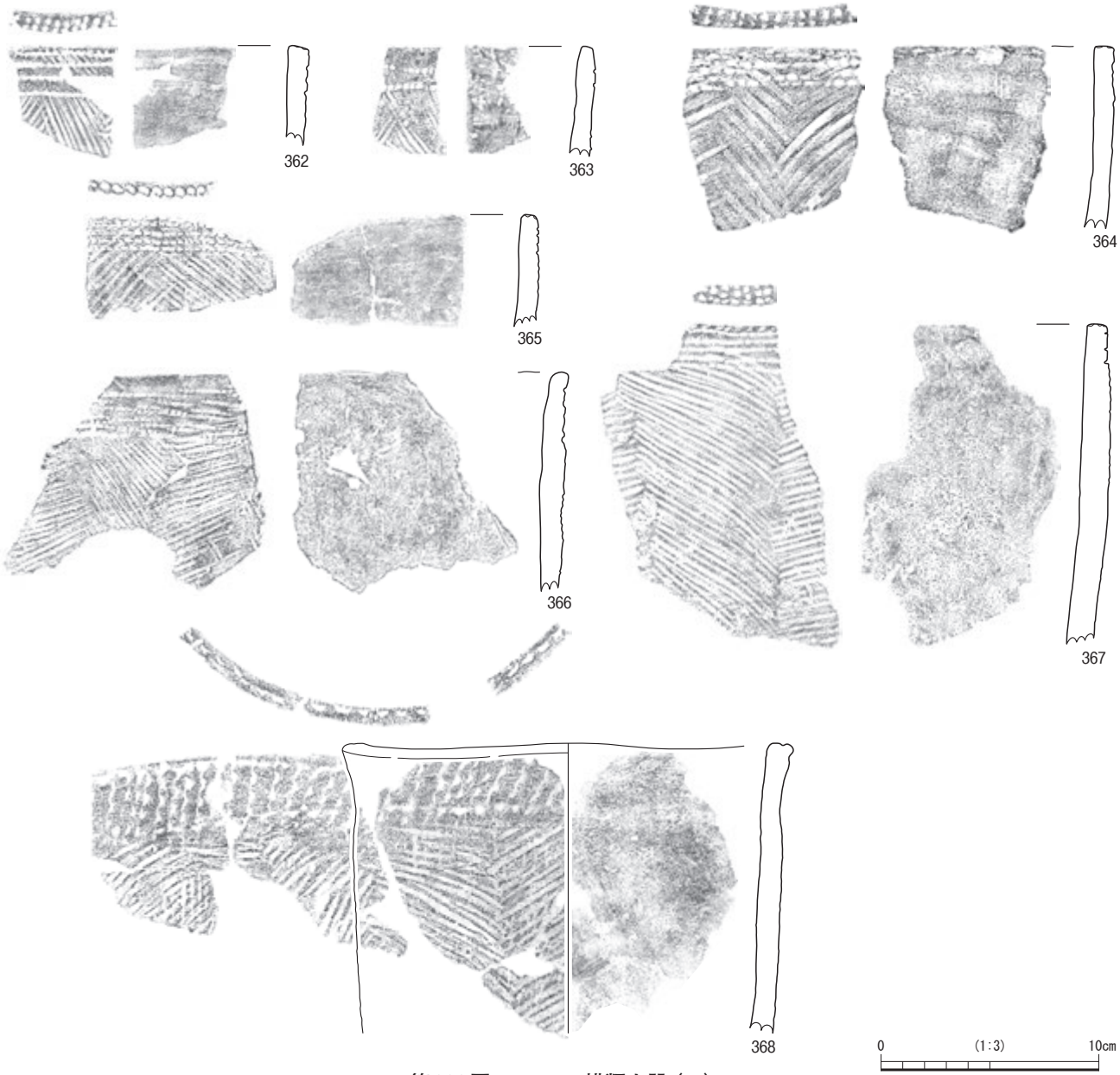
Ⅳ－ｃ－横類（第290図362～第291図370）

口縁部が直行し，口縁部外面に横位貝殻刺突文を施す一群である。瘤状突起をもつものも見られるが，他の類と比較し出土数は極端に少ない。

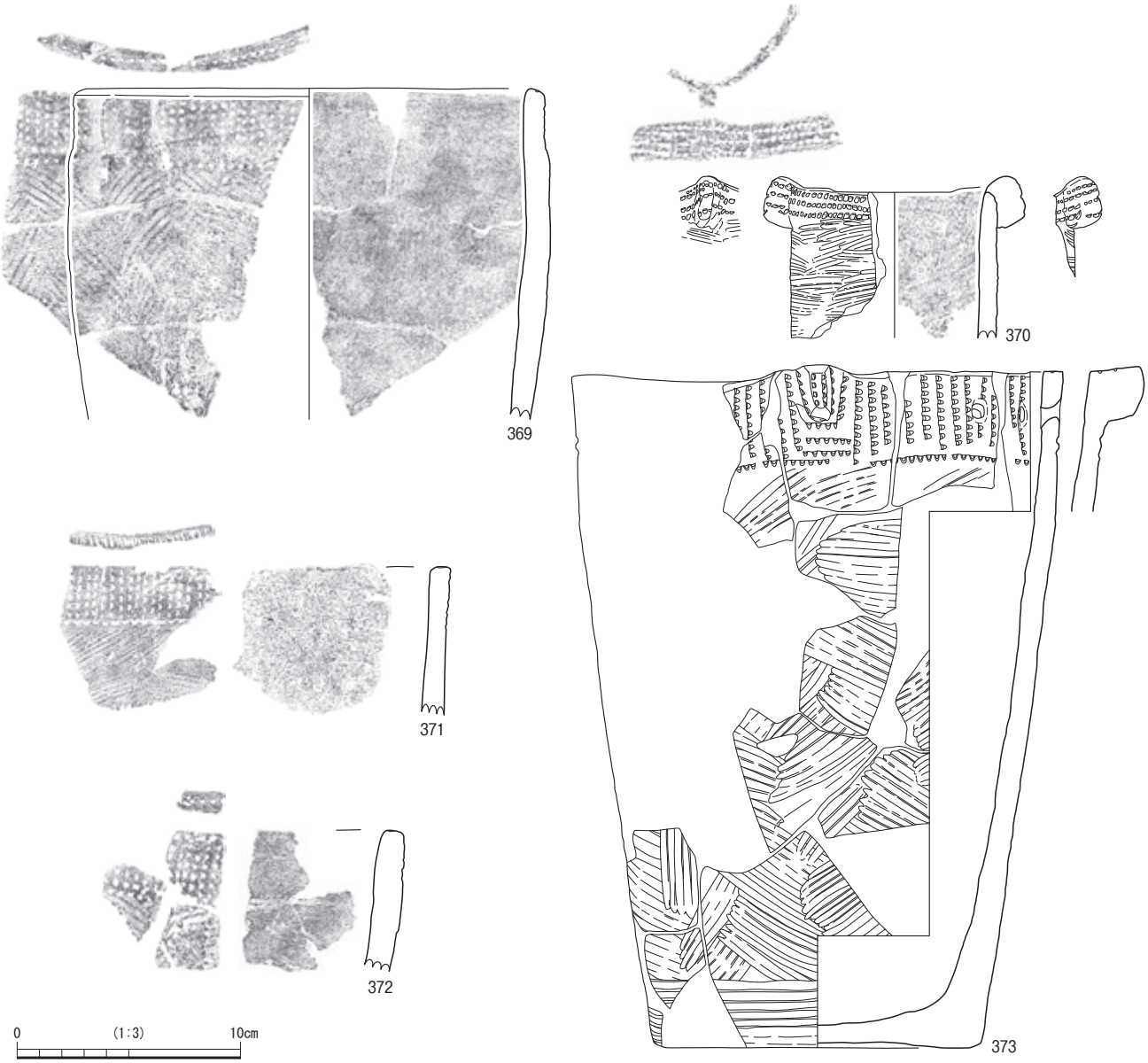
362・364・365は，口縁部外面上部から器面全体に綾杉状の貝殻条痕文を施した後，口縁部外面に４条の横位貝殻刺突文を施す。362は，口唇部に２連の貝殻刺突文を施す。363・366は，口唇部は無文である。口縁部外面上部からやや間を空け，横位貝殻条痕文を施す。胴部は綾杉状の貝殻条痕文を横位貝殻刺突文より先に施す。363の横位貝殻条痕文は雑だが密である。367は，口唇部に２～３連の貝殻刺突文を，胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文を施す。口縁部は横位貝殻刺突文より先に貝殻条痕文を施す。368は口唇部に刺突文を１条施す。口縁部外面にやや斜位貝殻刺突文が目立つが，その上下に１条ずつ横位貝殻刺突文を施し，口縁部文様を構成する。

369の口縁部は，外面からの強いナデ調整により，一段凹ませる。その一段凹ませた部分に，縦位貝殻刺突文を挟むように，上位に１条，下位に２条の横位貝殻条痕文を施し，口縁部文様を構成する。胴部は綾杉状の貝殻条痕文を施す。口唇部は貝殻刺突文を１条施す。内面はていねいなナデをおこなう。

370は，口縁部外面上部に瘤状突起をもち，瘤状突起上部を頂部にやや波状口縁となる。瘤状突起にも口縁部外面同様の文様を施す。口唇部は無文である。瘤状突起の下部に貼り付け痕がある。胴部は斜位と横位の貝殻条痕文を施す。内面は工具ナデをおこなう。



第290図　Ⅳ－ｃ－横類土器（１）



第291図　Ⅳ－ｃ－横類土器（2）・Ⅳ－ｃ－縦類土器（1）

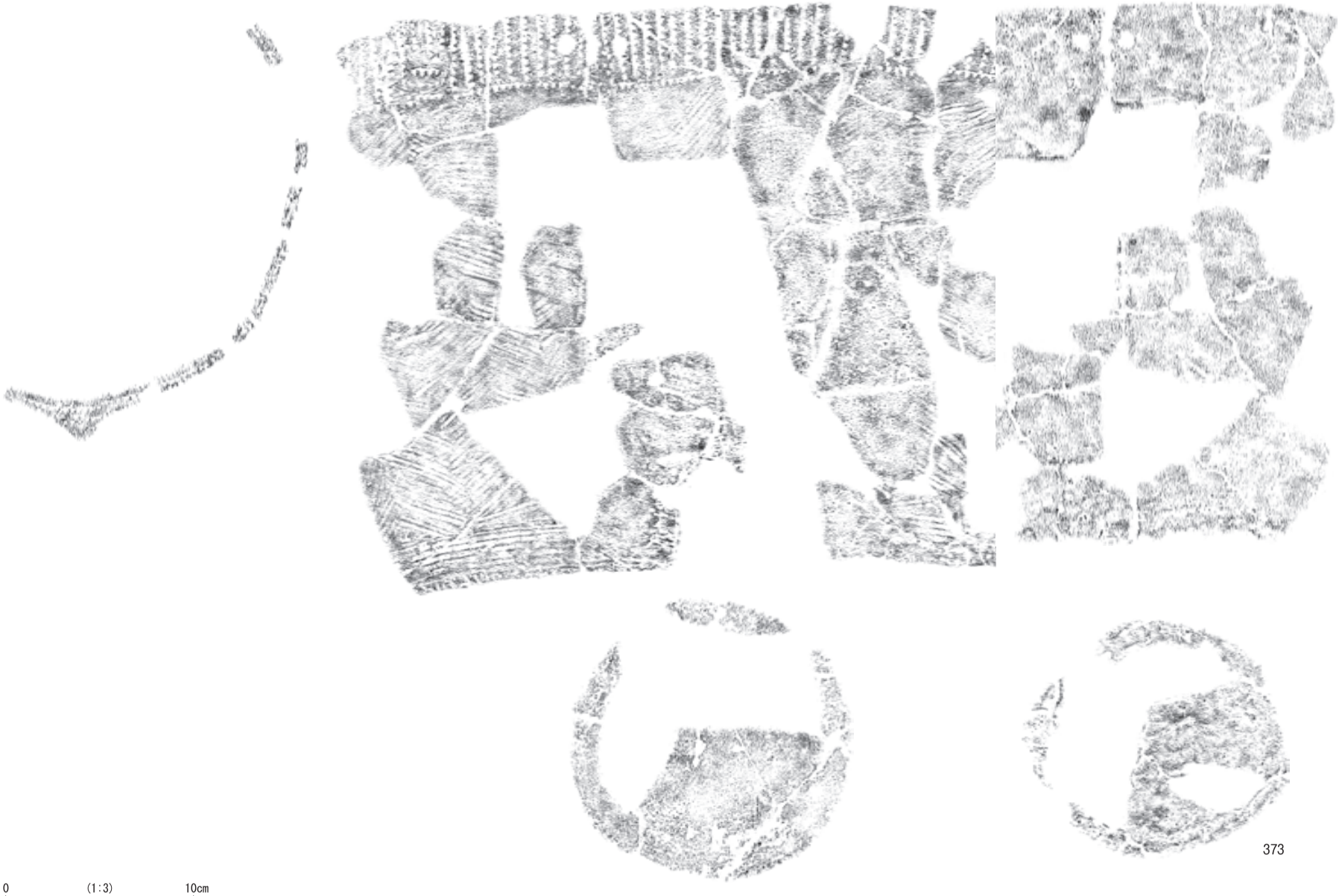
Ⅳ－ｃ－羽類

口縁部が直行し，口縁部外面に羽状の貝殻刺突文を施す一群は，確認できなかった。

Ⅳ－ｃ－縦類（第291図371～第292図373）

口縁部が直行し，口縁部外面に縦位貝殻刺突文を施す一群である。瘤状突起をもつものもある。

371は，口縁部外面の縦位貝殻刺突文直下に，貝殻腹縁による横位刺突文を施す。胴部には，ごく浅い条痕文を斜位に施す。口唇部は平坦に整形され，キザミを施す。内面はていねいなナデや指おさえをおこなう。372は，口縁部外面の縦位貝殻刺突文直下から，斜位貝殻条痕文を施す。口唇部に刺突文を施す。内面はナデをおこなう。373は，接合できなかった同一個体片を含めるとほぼ完形となる。口縁部外面上部に瘤状突起をもち，口縁部外面同様の文様を施す。縦位貝殻刺突文直下に１条の横位貝殻刺突文を施す。その横位貝殻刺突文から瘤状突起の下部の間にのみ３条の横位貝殻刺突文を施す。口縁部には焼成後に開けられた回転穿孔が２つあり，その間隔は2.5㎝程である。外面から見て右側の穿孔は，内外面から垂直に穿孔される。左側の穿孔は外面側は上方向，内面側は下方向から穿孔される。口唇部は平坦で貝殻刺突文を１条施すが，瘤状突起の上部のみ２条施す。胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施した後，胴部下部に横位貝殻条痕文を施す。底部外面端部には，キザミを施す。口縁部内面・胴部内面は工具ナデ，底面内面は指おさえをおこなう。373に施す貝殻刺突文は，いずれも殻頂を右にした貝殻腹縁によるものである。また，胴部外面の剥落が著しい部分のみが黒色を帯び，焼成不足と考えられる。



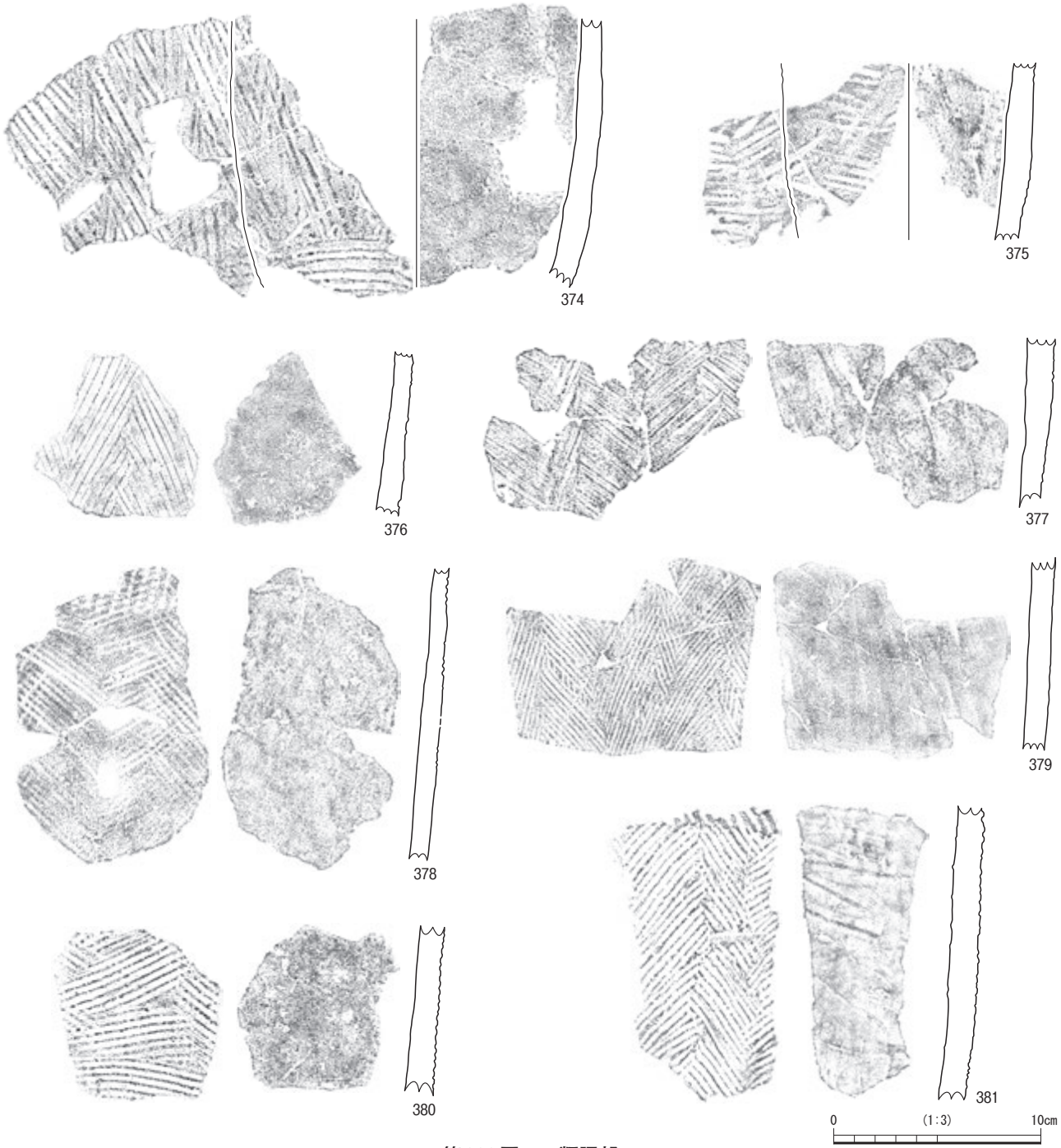
第292図　Ⅳ－ｃ－縦類土器（２）

Ⅳ類胴部（第293図374 ～ 381）

口縁部や底部と接合しなかった胴部である。

374 ～ 377・379は，やや膨らみをもちながら立ち上がる胴部である。374の外面上位に綾杉状の貝殻条痕文を施した後，下位に横位貝殻条痕文を施す。同一の施文原体と考えられる。375の外面には，斜位貝殻条痕文を施す。376は外面に３～４条を一単位とする綾杉状の貝殻条痕文を施す。377の内面は，工具ナデをおこなう。外面の条痕は浅い部分と深い部分が見られる。379の内面は，指おさえやナデをおこなう。外面は貝殻条痕文を斜位に施すが浅い。外面全体にススが付着する。

378・380・381は，直線的に立ち上がる胴部である。378は　外面全体を貝殻で調整した後，外面上位に斜位貝殻刺突文を施す。外面の一部にススが付着している。380は外面に６～７条を一単位とする貝殻条痕文を斜位や横位に施す。381の内面は，ていねいな工具ナデをおこなう。外面は綾杉状の貝殻条痕文を施した後，上位に斜位貝殻刺突文を施す。



第293図　Ⅳ類胴部

Ⅳ類底部（第294図382～第298図418）

口縁部と接合しなかった胴部から底部で，以下のような基準で４つに細別した。

	底部外面端部にキザミ	胴部下部に横位条痕文
ア類	有	有
イ類	無	有
ウ類	有	無
エ類	無	無

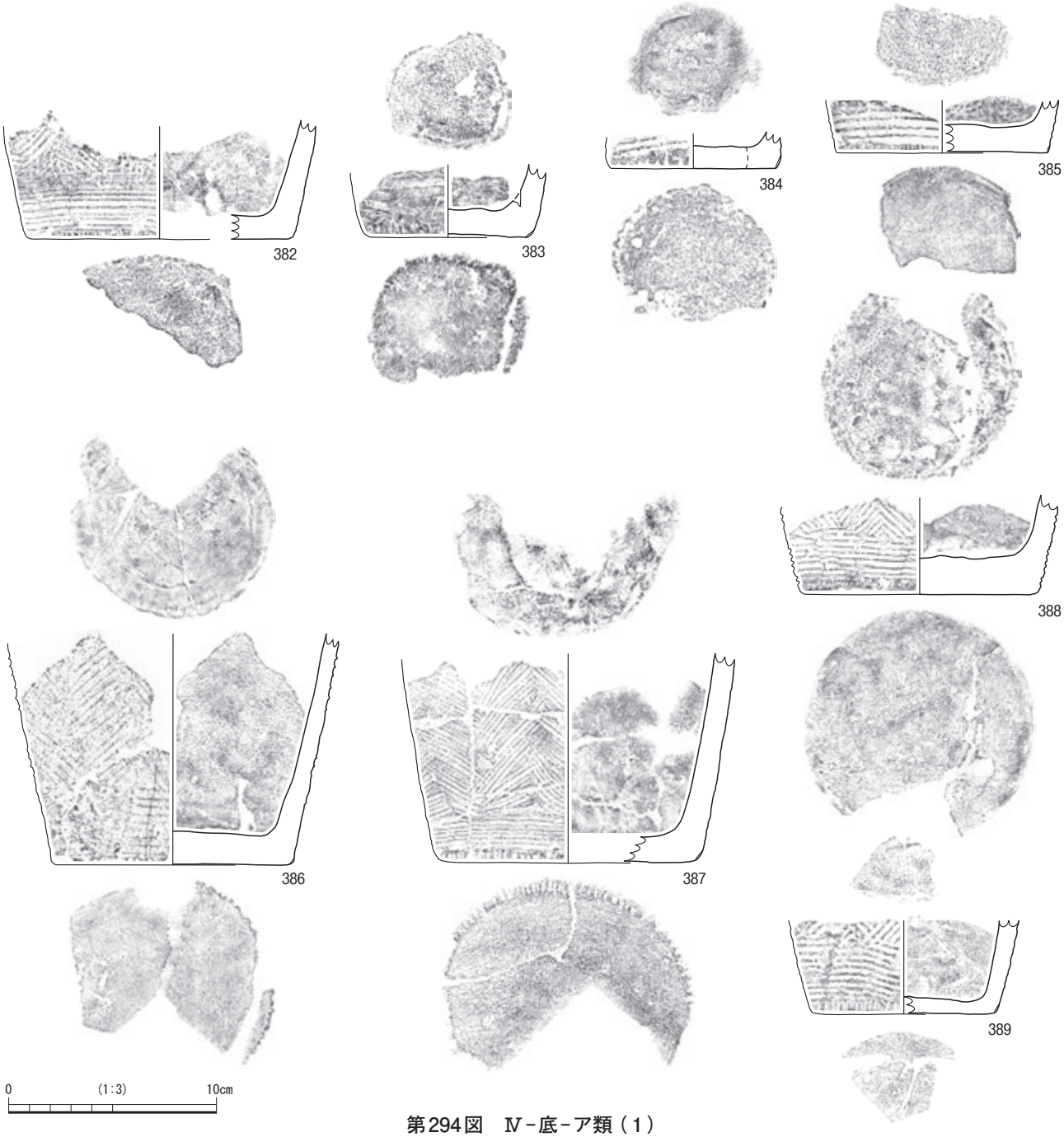
Ⅳ－底－ア類（第294図382～第296図401）

底部外面端部にキザミ，胴部外面下部に横位条痕文を施す一群である。

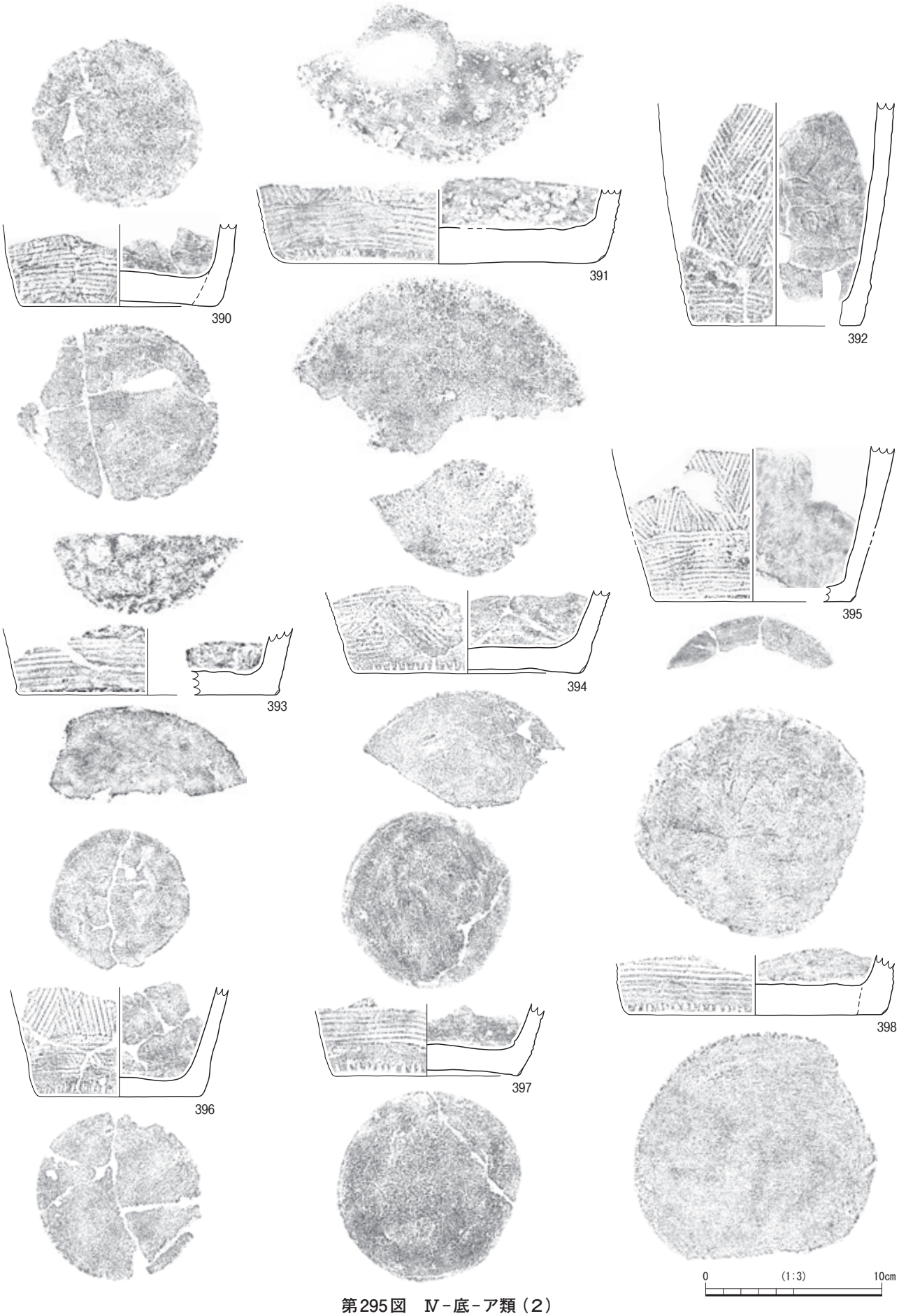
386～400は，胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文を施した後，胴部下部に横位貝殻条痕文を施す。392・399は，胴部下部に横位貝殻条痕文を施した後，上位に綾杉状の貝殻条痕文を施す。393・394の胴部外面の施文は不明であるが，胴部下部に横位貝殻条痕文を施す。

382～393・395は，胴部下部に横位貝殻条痕文を施した後，底部外面端部にキザミを施すが，そのキザミは横位施文を明確に切らない。

394・396～398は，胴部下部に横位貝殻条痕文を施し，底部外面端部近くの横位施文をナデ消した後，底部外面端部にキザミを施す。



第294図　Ⅳ－底－ア類（１）



第295図　Ⅳ－底－ア類（2）

399・401は，胴部下部に横位貝殻条痕文を施した後，底部外面端部にキザミを施し，そのキザミは横位施文を明確に切る。

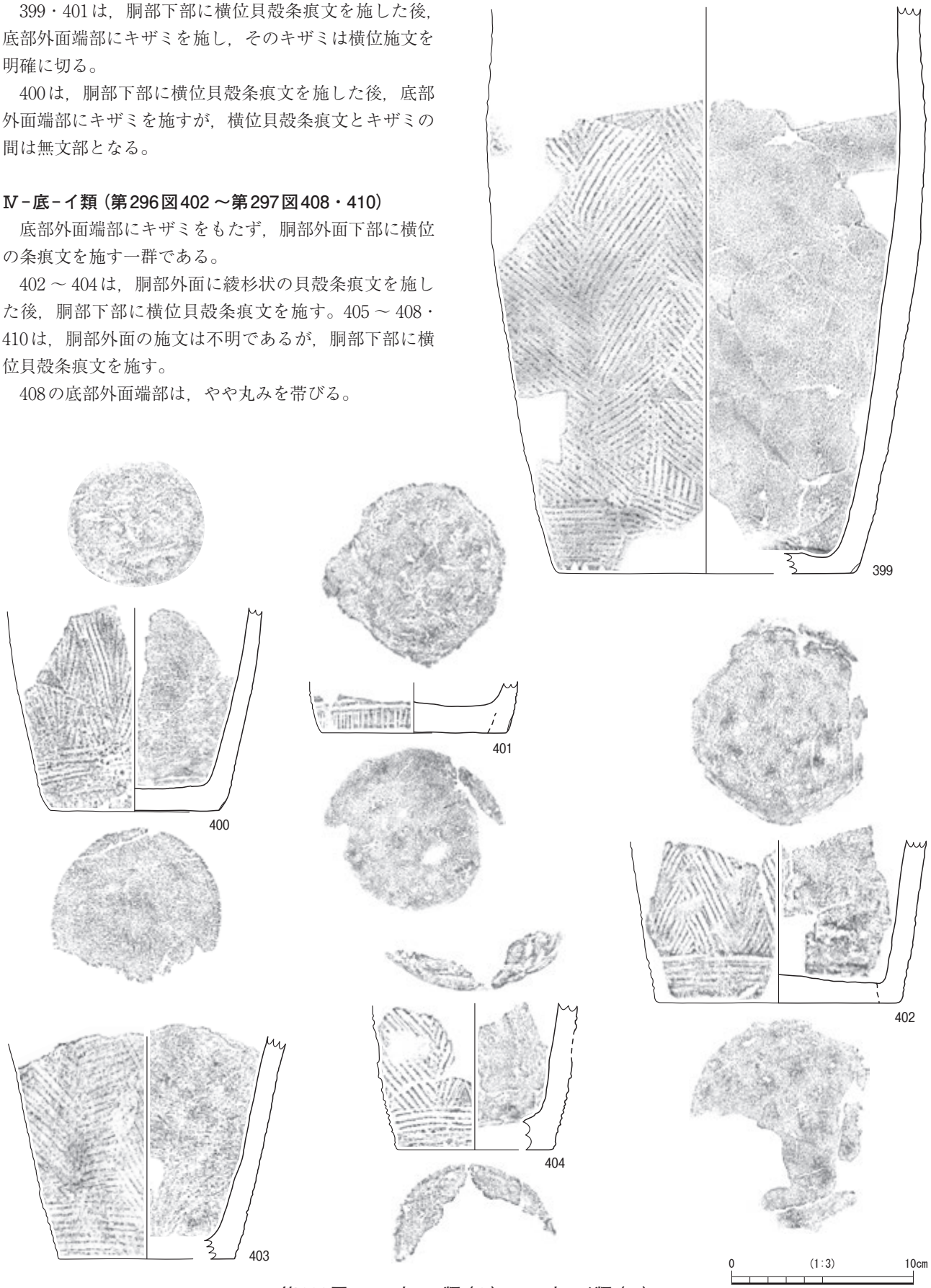
400は，胴部下部に横位貝殻条痕文を施した後，底部外面端部にキザミを施すが，横位貝殻条痕文とキザミの間は無文部となる。

Ⅳ－底－イ類（第296図402～第297図408・410）

底部外面端部にキザミをもたず，胴部外面下部に横位の条痕文を施す一群である。

402～404は，胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文を施した後，胴部下部に横位貝殻条痕文を施す。405～408・410は，胴部外面の施文は不明であるが，胴部下部に横位貝殻条痕文を施す。

408の底部外面端部は，やや丸みを帯びる。



第296図　Ⅳ－底－ア類（3）・Ⅳ－底－イ類（1）

Ⅳ－底－ウ類（第297図409・411 ～ 413）

底部外面端部にキザミを施し，胴部下部に横位の条痕文をもたない一群である。

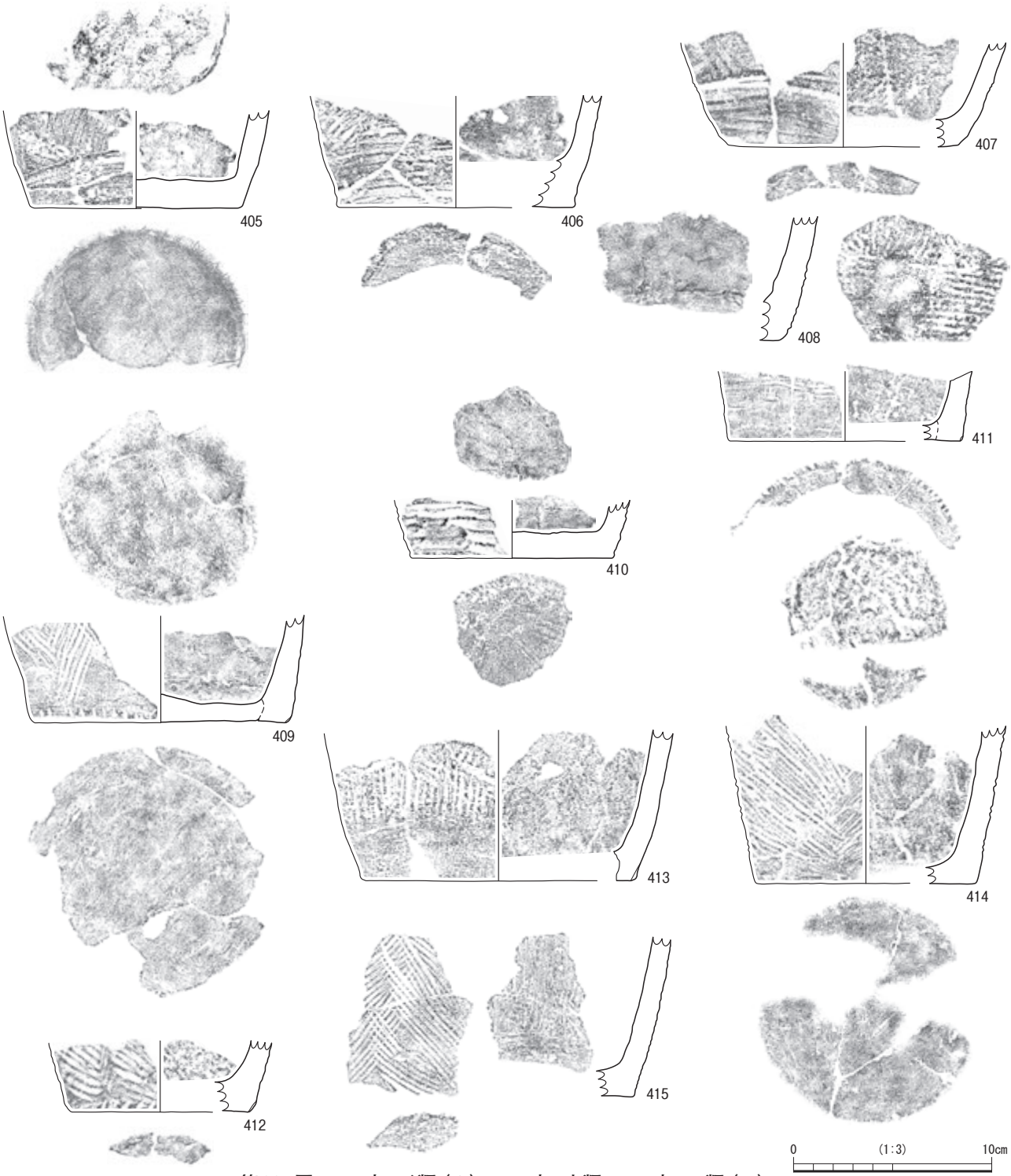
409は一部に胴部上位の斜位貝殻条痕文を施す。

411・413は，胴部下部に文様をもたない。412は胴部上位の斜位貝殻条痕文を底部下部まで施す。

Ⅳ－底－エ類（第297図414 ～第298図418）

底部外面端部にキザミをもたず，胴部外面下部に横位の条痕文をもたない一群である。　414 ～ 417は，底面外面端部付近まで文様を施す。414・415は綾杉状の条痕文，416は縦位や斜位の条痕文，417は，斜位貝殻条痕文である。

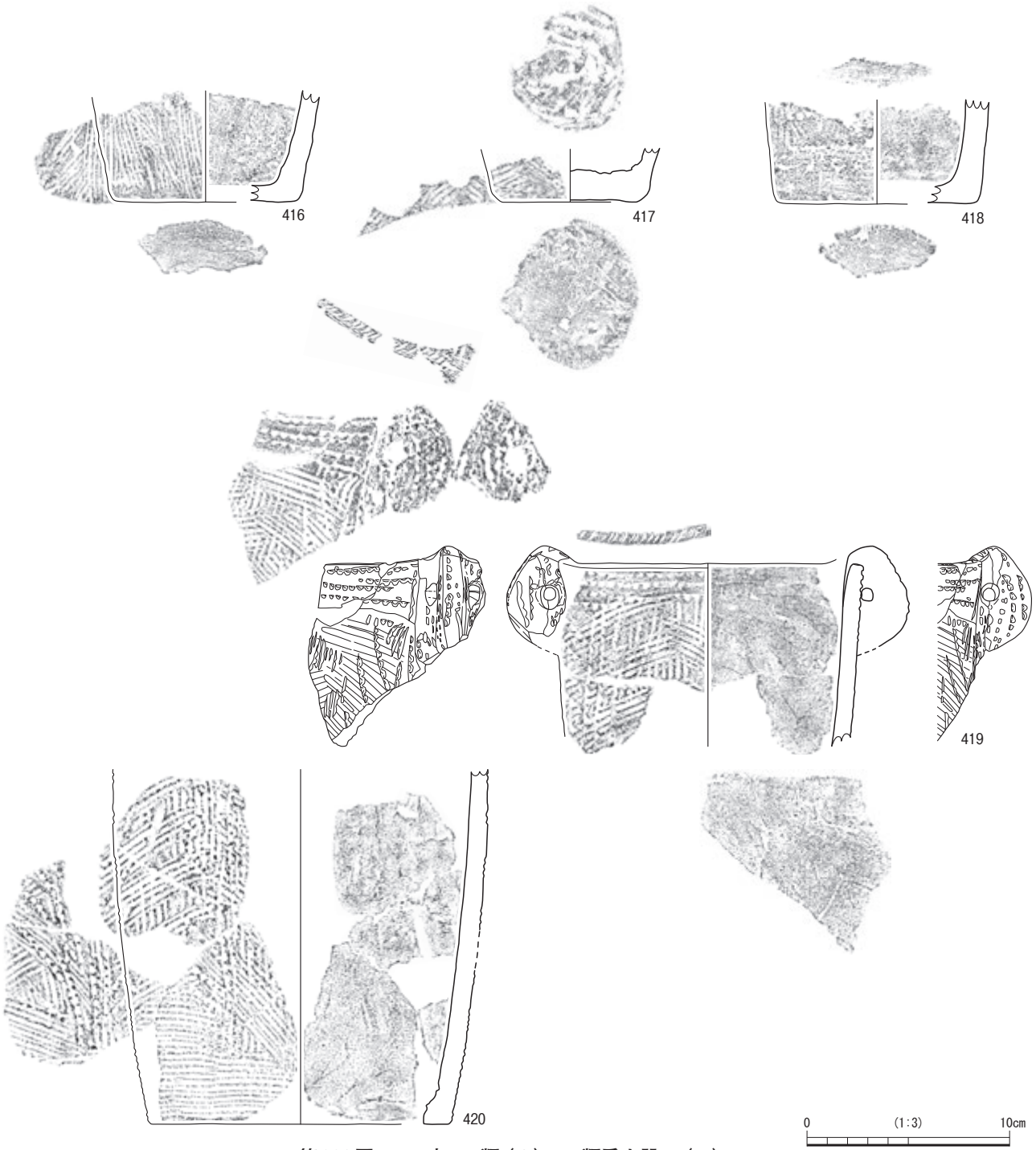
418は，胴部がほぼ直立する器形で文様をもたない。



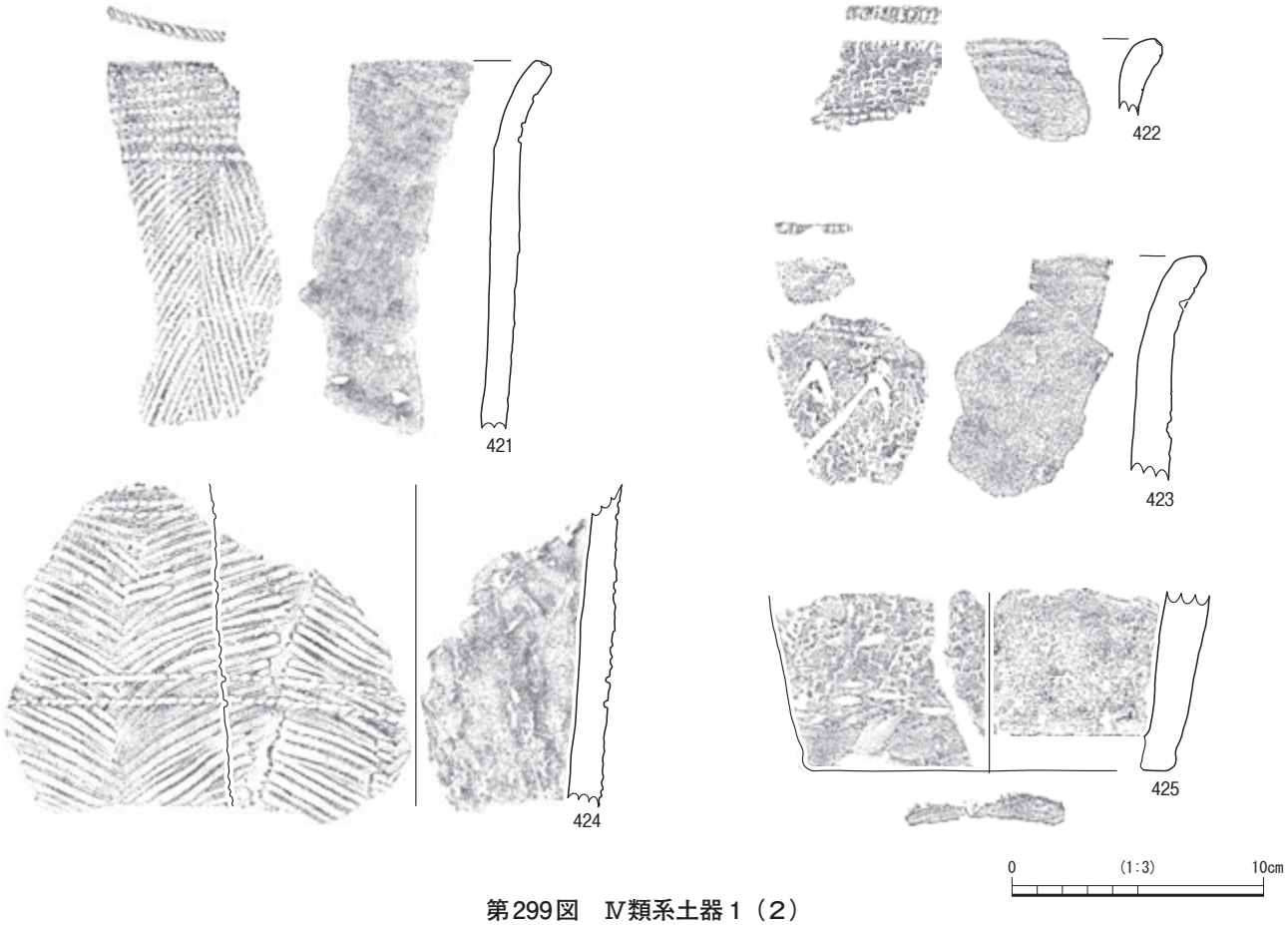
第297図　Ⅳ－底－イ類（2）・Ⅳ－底－ウ類・Ⅳ－底－エ類（1）

Ⅳ類系土器１（第298図419～第300図434）

器形がⅣ類に該当し，二重文様を施す一群である。419は，外傾し口縁部外面上部に瘤状突起をもつ口縁部である。419と同一個体と考えられる瘤状突起をもたない口縁部も出土し，合わせて3/5の径を復元できる。このことから瘤状突起は２箇所以下と推測できる。瘤状突起には，焼成前に開けられた回転穿孔をもつ。口縁部外面は，横位貝殻刺突文を３～４条施すが，瘤状突起近くや瘤状突起では，縦位刺突文に変わる。横位貝殻刺突文の下位に横位や斜位・縦位の貝殻条痕文を施した後，２～３条の縦位貝殻刺突文を施す。その縦位貝殻刺突文を中心にＶ字状に斜位刺突文を幾つも施す。口唇部は，ていねいなナデで平坦に整形され，斜位にキザミを施す。内面はナデをおこなう。420は，419と同一個体と考えられる胴部から底部である。胴部外面上位は，419同様，横位や斜位・縦位貝殻条痕文を施した後，２～３条の縦位貝殻刺突文を施す。その縦位貝殻刺突文を中心にＶ字状に斜位貝殻刺突文を幾つも施すが，胴部下部ま



第298図　Ⅳ－底－エ類（２）・Ⅳ類系土器１（１）



第299図　Ⅳ類系土器１（２）

では及ばない。胴部下部は，横位貝殻条痕文を施すのみである。底部外面端部は，キザミを斜位に施す。底部外面はていねいなナデをおこなう。写真図版では上部の接合が外れている。

421は，口縁部から胴部で，口縁部が外反するものである。口縁部外面は横位貝殻刺突文を施す。その下位に綾杉状の貝殻条痕文を施した後，浅い縦位刺突文を施すが，施文具は不明である。口唇部は斜位のキザミを施す。口縁部内面はナデを，その下位は縦位や斜位・横位の工具による調整をおこなう。

422・423は，同一個体と考えられ口縁部端部が外反する口縁部である。口縁部外面上部は，斜位貝殻刺突文を施し，その直下に横位刺突文を施す。胴部は，貝殻刺突文をランダムに施した後，工具不明の深い「へ」の字状の条痕文をもつ。ていねいなナデで丸みを帯びた口唇部頂部にキザミをもつ。425も，422・423と同一個体と考えられる胴部から底部である。「へ」の字状の条痕文はもたないが，斜位や横位に短く深い条痕文を施す。胴部下部は無文で，底部外面端部にキザミをもたない。

424は胴部である。外面に綾杉状の貝殻条痕文を深く施した後，横位刺突文を施すが，刺突具は不明である。上位は幅の狭い２条の刺突文を，中央はそれより幅広の２条の刺突文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。

426は，外反する器壁の薄い口縁部である。口縁外面上部は貝殻腹縁による刺突文を横位からやや斜位に施す。その直下に，同様の斜位刺突文を施す。やや丸みを帯びた口唇部頂部に，キザミを施す。427は，426と同一個体と考えられる胴部である。外面に貝殻条痕文を施した後，貝殻刺突文を斜位や縦位に施す。426・427の内面は，工具ナデをおこなう。

428は膨らみをもつ胴部である。外面に貝殻条痕文を縦位や斜位に施した後，上位にＶ字状の貝殻刺突文を施す。外面上位の一部にススが付着する。内面は，工具によるていねいなナデをおこなう。

429は，底部近くの胴部である。外面上位は，綾杉状の貝殻条痕文を施した後，縦位刺突文を数条施す。下位は，横位貝殻条痕文を施すのみである。

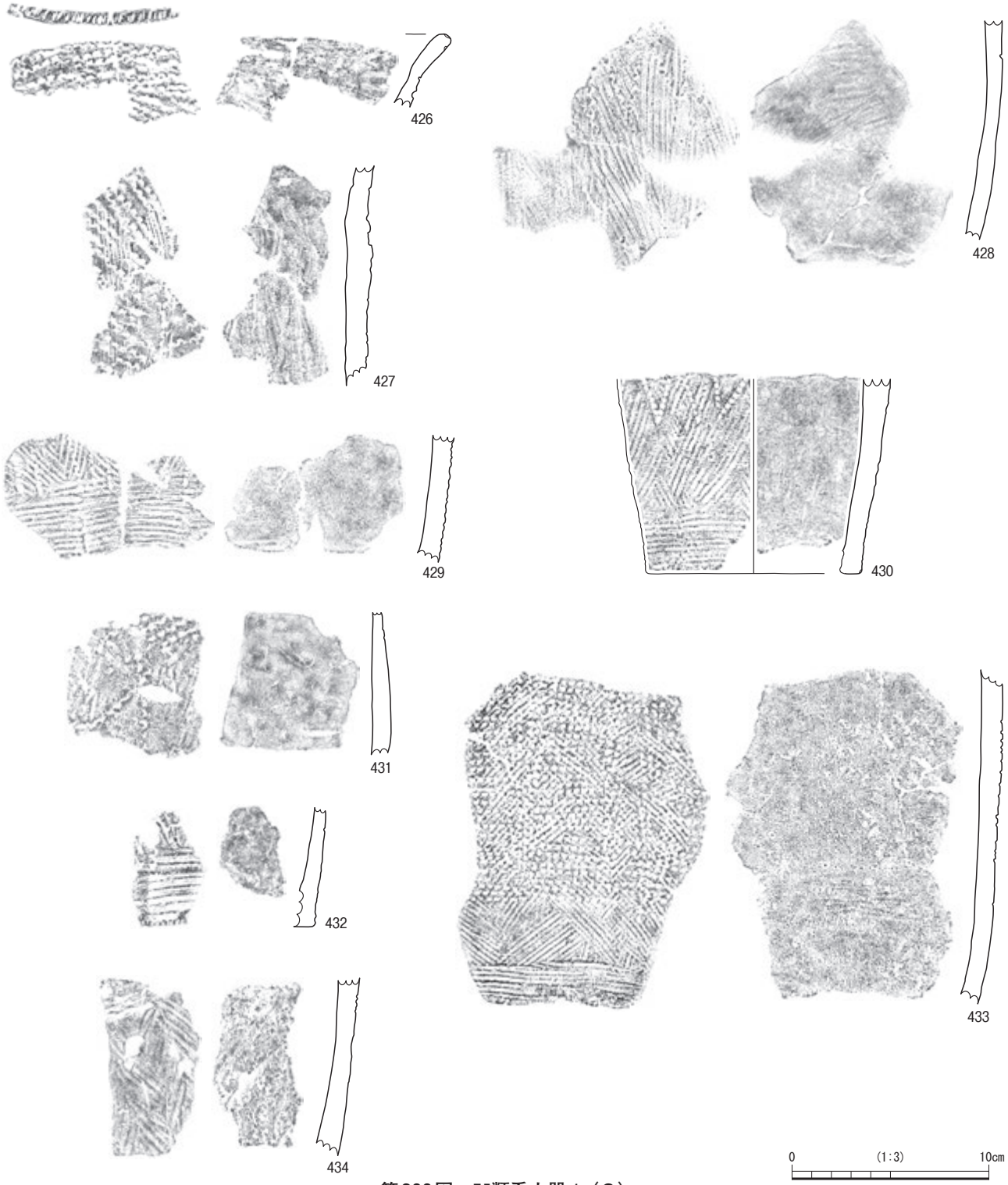
430は底部がわずかに残る胴部である。外面上位2/3に綾杉状の貝殻条痕文を施した後，上位にＶ字状の貝殻刺突文を施す。下位1/3は，横位貝殻条痕文を施すのみである。底部外面端部にわずかなキザミを施す。内面は，工具ナデをおこなう。

431は，肉眼では観察しにくい条痕文を外面に施す胴部である。条痕文施文後に，貝殻刺突文を施す。上位の

貝殻刺突文は斜位に，下位の貝殻刺突文はＸ（エックス）状に施す。内面は，ていねいなナデをおこなう。432は431と同一個体と考えられる胴部から底部である。胴部外面下部は横位貝殻条痕文を施す。底部外面端部に，キザミをもたない。

433は胴部である。外面上位2/3は綾杉状に貝殻条痕文を施した後，横位やＶ字状に貝殻刺突文を施す。その下位は，綾杉状の貝殻条痕文のみを施し，最下部には横位貝殻条痕文のみを施す。内面はナデをおこなう。

434はやや膨らみをもつ胴部である。外面に斜位貝殻条痕文を施し，一部に貝殻刺突文を施す。内面は，工具による荒い調整がおこなわれ，内面にはススが付着する。



第300図　Ⅳ類系土器１（３）

Ⅳ類系土器２（第301図435 ～ 441）

器形もしくは施文等がⅣ類に該当するが，Ⅳ類系土器１に該当しない一群である。

435・437は，同一個体である。口縁部は胴部より器壁が薄くなり，口縁端部がやや外反する。口唇部はやや丸みを帯び，文様をもたない。外面上部から胴部にかけて，貝殻腹縁による刺突文を羽状に施す。内面はナデをおこなう。

436は口唇部がやや内傾する口縁部である。口縁部外面上部に横位貝殻条痕文を施し，その下に斜位貝殻条痕文を施す。平坦に整形された口唇部は，１もしくは２つの刺突文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。

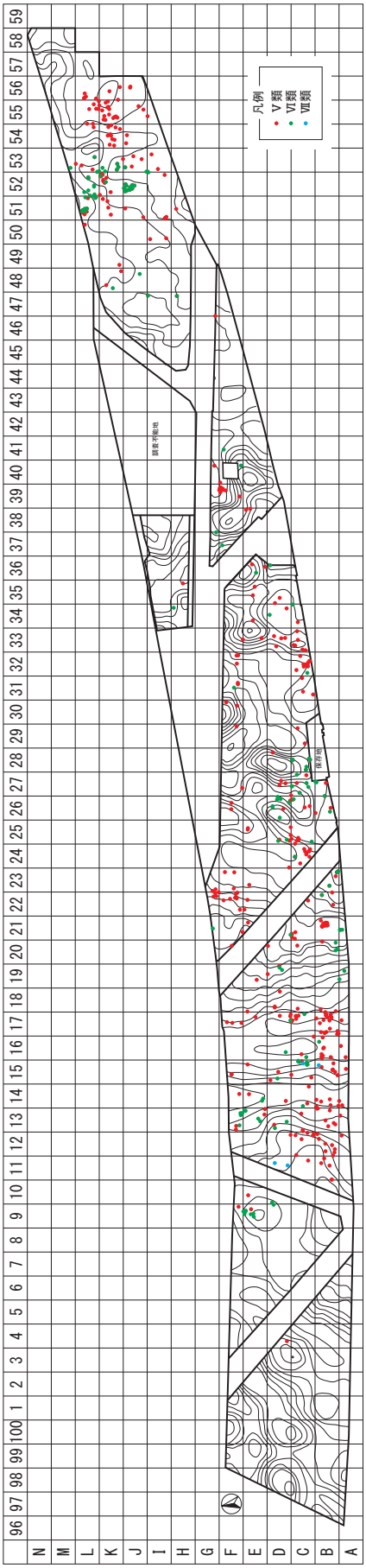
438は口縁部が肥厚し，やや内湾する口縁部である。口縁部外面上部は，横位刺突文を施すが，極小である。その下位には，斜位刺突文と，調整か施文かは不明だが縦位の条痕も確認できる。

439は若干内湾する口縁部である。口縁部外面上部は，横位刺突文を施す。その下に斜位条痕文を施した後，斜位刺突文を施す。やや平坦に整形された口唇部は，１もしくは２つの刺突文を施す。内面は，やや雑な工具ナデをおこなう。

440はやや外反する口縁部である。外面上部は，縦位刺突文を，その下位に縦位や斜位の条痕文を施す。丸みを帯びた口唇部には刺突文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。

441は，口縁部外面上部に瘤状突起をもち，瘤状突起上部を頂部としやや波状となる口縁部である。瘤状突起にも口縁部外面同様の文様を施す。口唇部に施文はもたない。瘤状突起の下部に貼り付け痕が見られ，貼り付けの際の指おさえが明瞭である。胴部外面上位の一部に斜位貝殻条痕文を施す。内面は，工具によるやや雑なナデをおこなう。

第301図　Ⅳ類系土器２

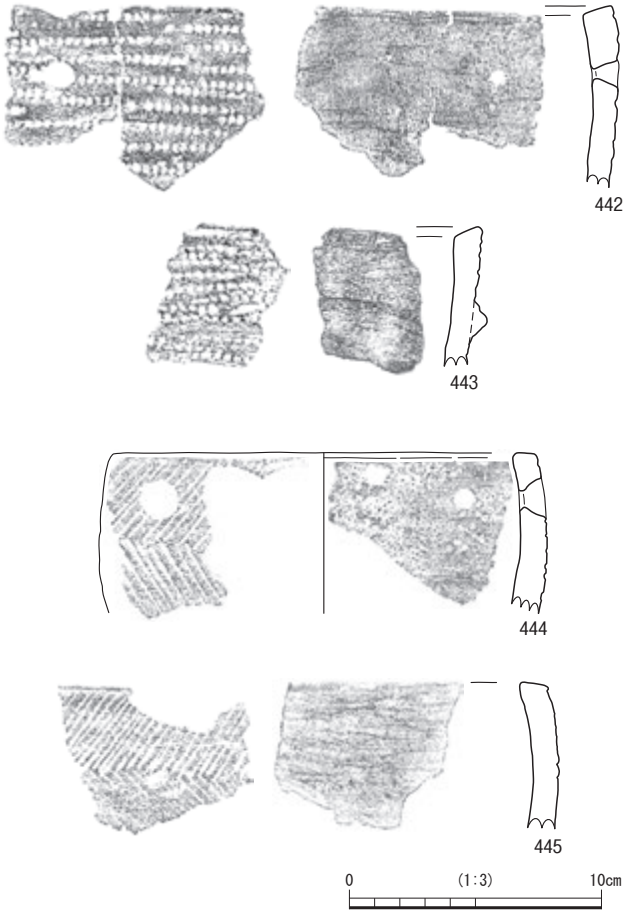


第302図　遺物分布図（Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類土器）

Ⅴ類土器（第303図442～第307図482）

器形は，底部から胴部まで開き気味に立ち上がり口縁部で内湾する円筒形である。口唇部は平坦面となる。口縁部外面に突帯や穿孔をもつものがある。突帯については，外面に１周巡らすものはなく，部分的に横位に作り出す。文様・調整は，口唇部にていねいなナデ，口縁部外面に貝殻刺突文を施す。胴部外面に貝殻腹縁による刺突文，貝殻条痕文を施す。内面はていねいなナデ，もしくはミガキをおこなう。

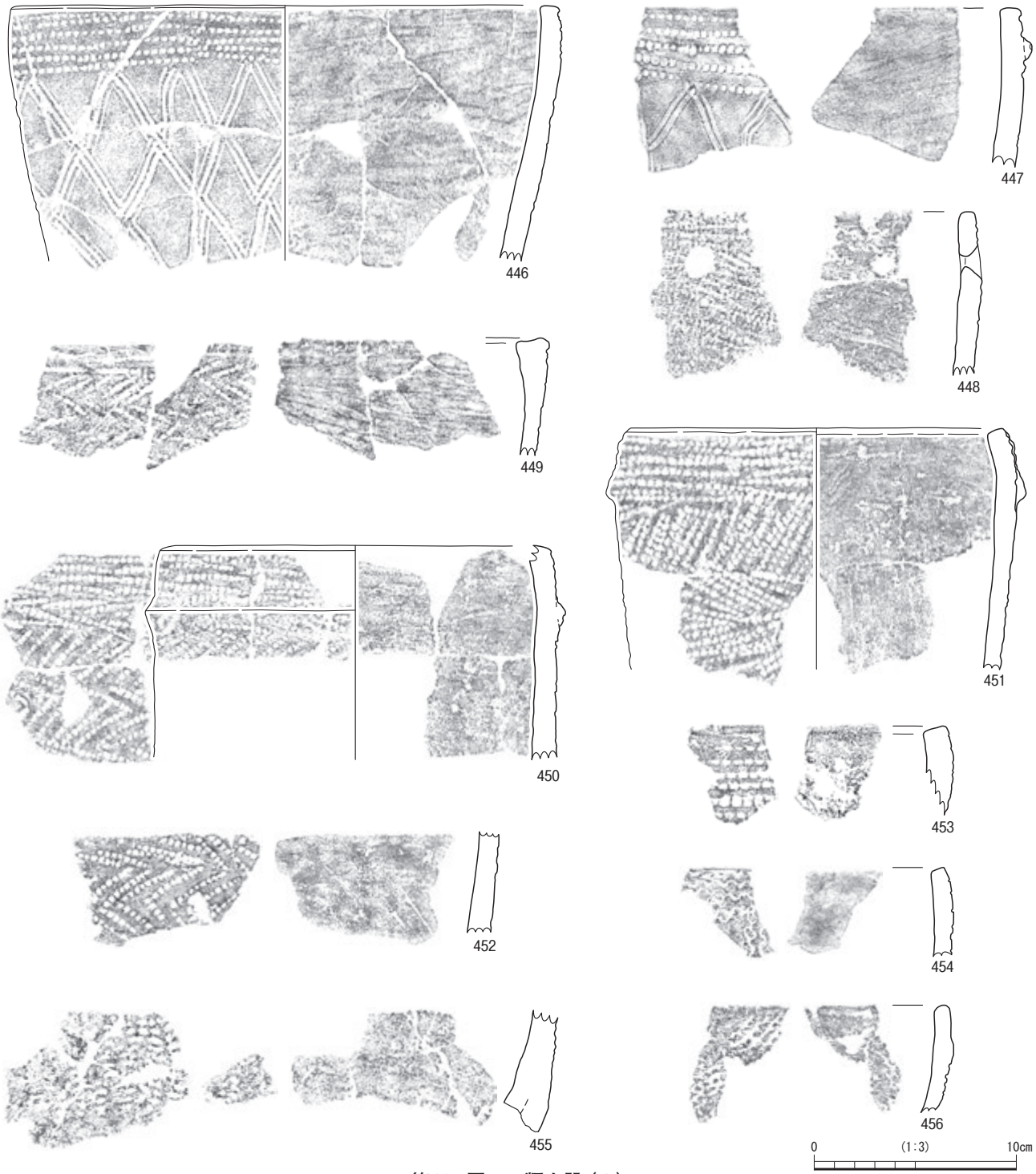
442～451・453・454・456～460は，口縁部である。442・443は，同一個体と考えられる。貝殻腹縁による横位刺突連点文を施す。442は口縁部に穿孔をほぼ外側から施す。443は突帯が１条巡っている。444・445は，同一個体と考えられる。口縁部は内湾する。外面に連続する斜位貝殻刺突文を施し，羽状とする。444は口縁部に穿孔をほぼ外面から施す。446・447は，同一個体と考えられる。外面にススが付着している。口縁部外面に貝殻腹縁による横位刺突文を施す。447は突帯が１条巡る。胴部外面に３条の沈線からなる鋸歯状文を３段施す。一部に２条の沈線も見られる。448は，わずかに内湾する口縁部である。外面に３条の横位貝殻刺突文，胴部外面に浅い斜位貝殻刺突文を施す。口縁部に穿孔をほ



第303図　Ⅴ類土器（１）

ぼ外面から施す。449は，口縁部が肥厚する。口縁部外面に貝殻腹縁による２条の横位刺突文を施す。胴部外面に斜位貝殻刺突文を施す。内面は，ていねいなナデをおこなう。450・452・455は，同一個体と考えられる。口縁部外面下部に貝殻腹縁による横位刺突文を施す。突帯が１条巡り，斜位貝殻刺突を施し，羽状となる。突帯下位の胴部外面は貝殻刺突文を斜位に交互に施す。451は口縁部から胴部である。口縁部から胴部にかけ，横位→斜位→羽状の順で刺突文を施す。口縁部外面下位では，突帯を部分的に巡らせ，突帯にも横位刺突文を施す。453は刺突文を施す。454は口縁部外面に横位と縦位の刺突文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。456は口縁部外面下位に突帯をもち，斜位貝殻刺突文を浅く施す。

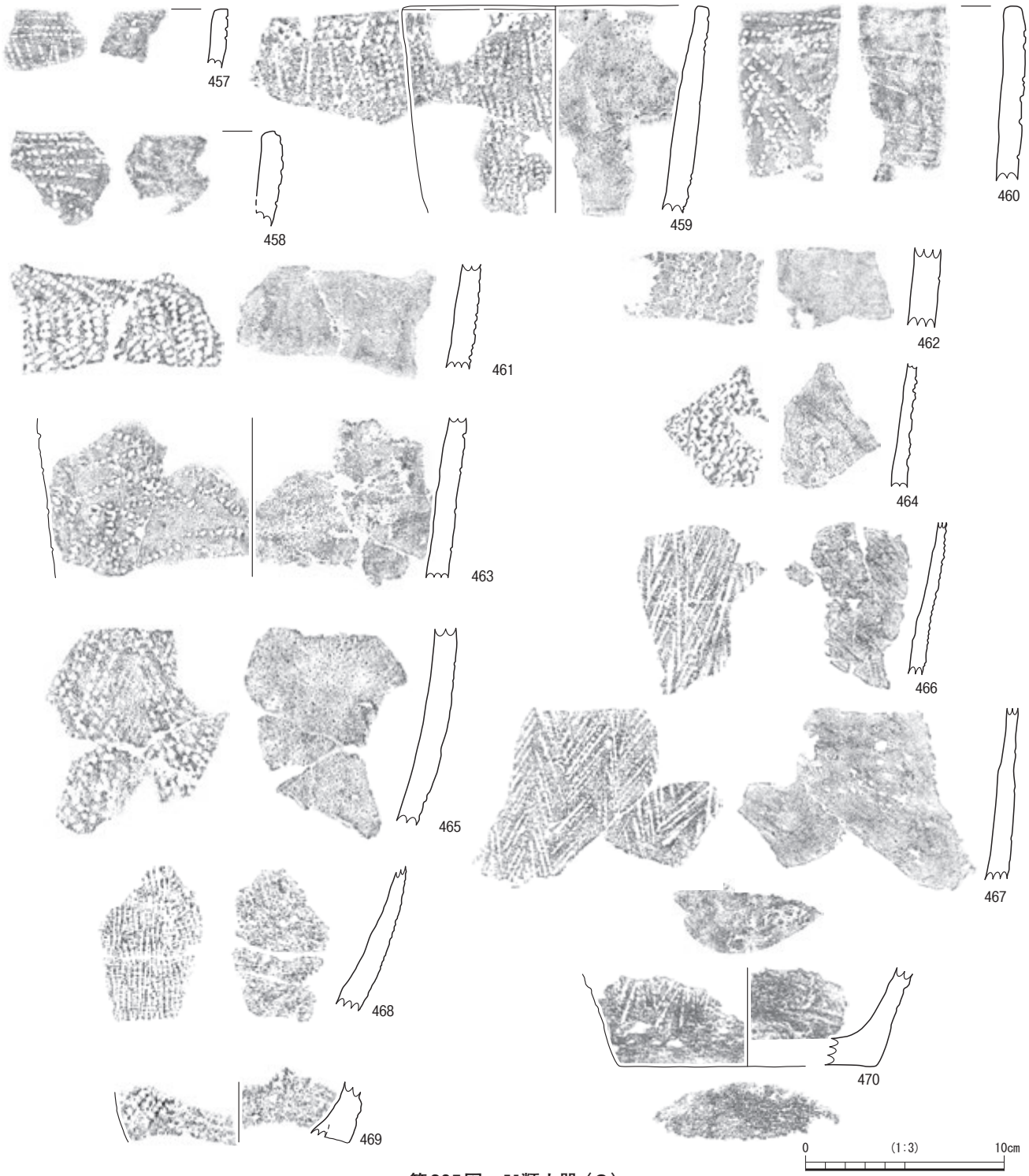
457は外面に横位貝殻刺突文を施す。458は外面に横位や斜位の貝殻腹縁による刺突文を施す。459・460は



第304図　Ｖ類土器（２）

口縁部から胴部である。胴部外面に斜位貝殻刺突文を羽状に施す。

461 ～ 469・471・472は，胴部である。461は外面に斜位から縦位の貝殻刺突文を施す。462は，外面に貝殻腹縁による斜位刺突文を施す。463・465は，外面に貝殻刺突文を施す。464は外面に斜位貝殻刺突文を密に施す。468は外面に浅い縦位貝殻刺突文を密に施す。469は，胴部最下部で底部が剥落したものである。外面に斜位貝殻刺突文を施す470は底部で466・467と同一個体と考えられる。内外面にススが付着する。466・467は，胴部外面に浅い斜位貝殻刺突文を鋸歯状に施す。470の胴部下部はナデをおこない文様をもたない。471は外面に浅い斜位貝殻刺突文を施す。472は内面に白色の付着物が見られる。外面は不規則な条痕の上に横位・斜位の

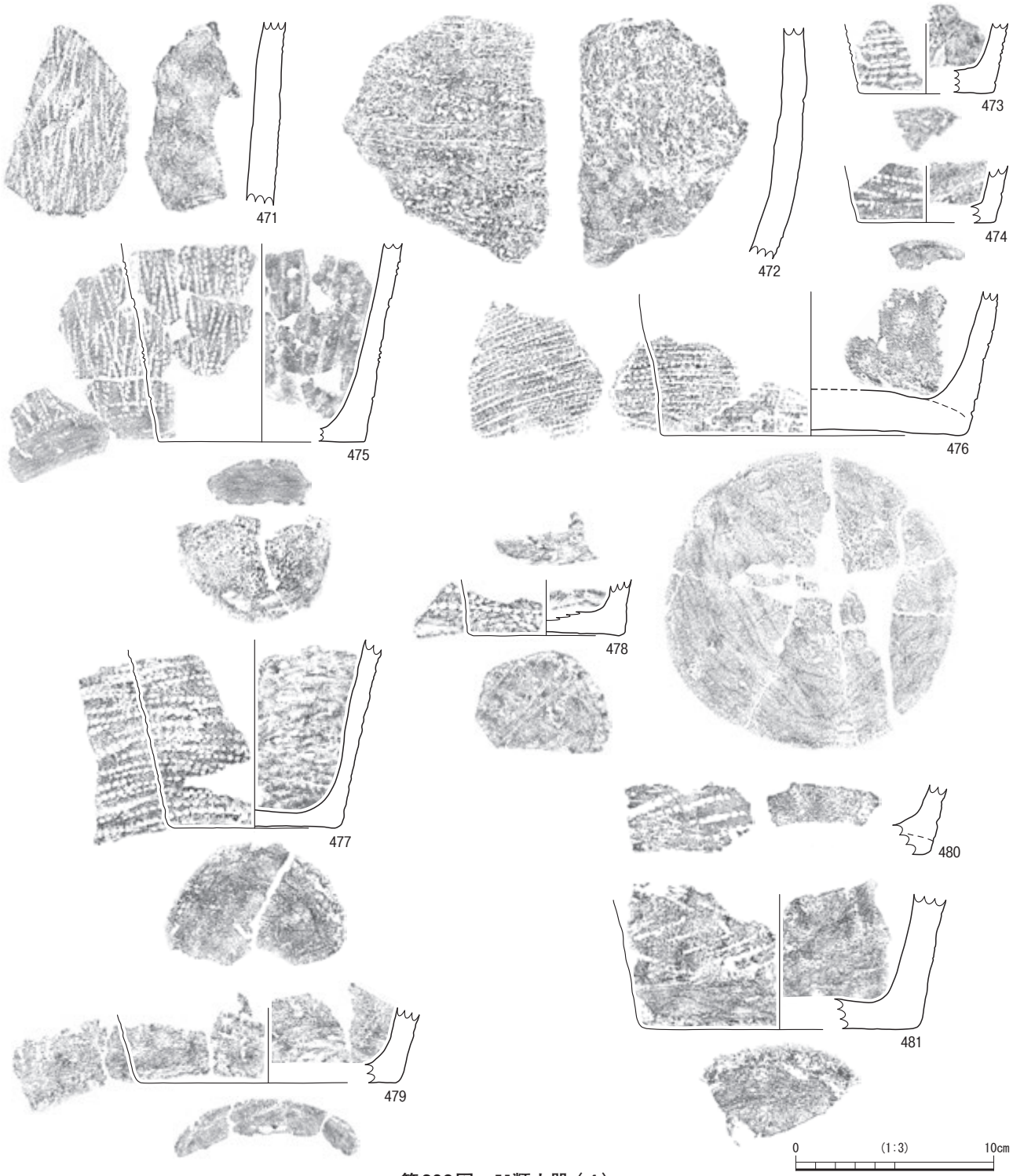


第305図　Ⅴ類土器（3）

貝殻刺突文をまばらに施す。

473 ～ 481は，胴部から底部である。473・474・476 ～ 478は，胴部下部に横位貝殻刺突文を施す。475は内面にススが付着する。胴部外面に浅い斜位貝殻刺突文を鋸歯状に施し，下部に横位貝殻刺突文を施す。胴部下部はナデをおこなうが，文様をもたない。479は胴部下部にナデをおこなうが，文様をもたない。480は胴部下部に斜位貝殻刺突文を施す。481は底部外面端部にナデをおこない，その上位に浅い斜位貝殻刺突文を羽状に施す。

482は口縁部から底部である。外面に貝殻腹縁による斜位刺突文を鋸歯状に施す。刺突文を密に施す箇所と，まばらに施す箇所がある。口縁部外面に貫通していない穿孔痕がある。



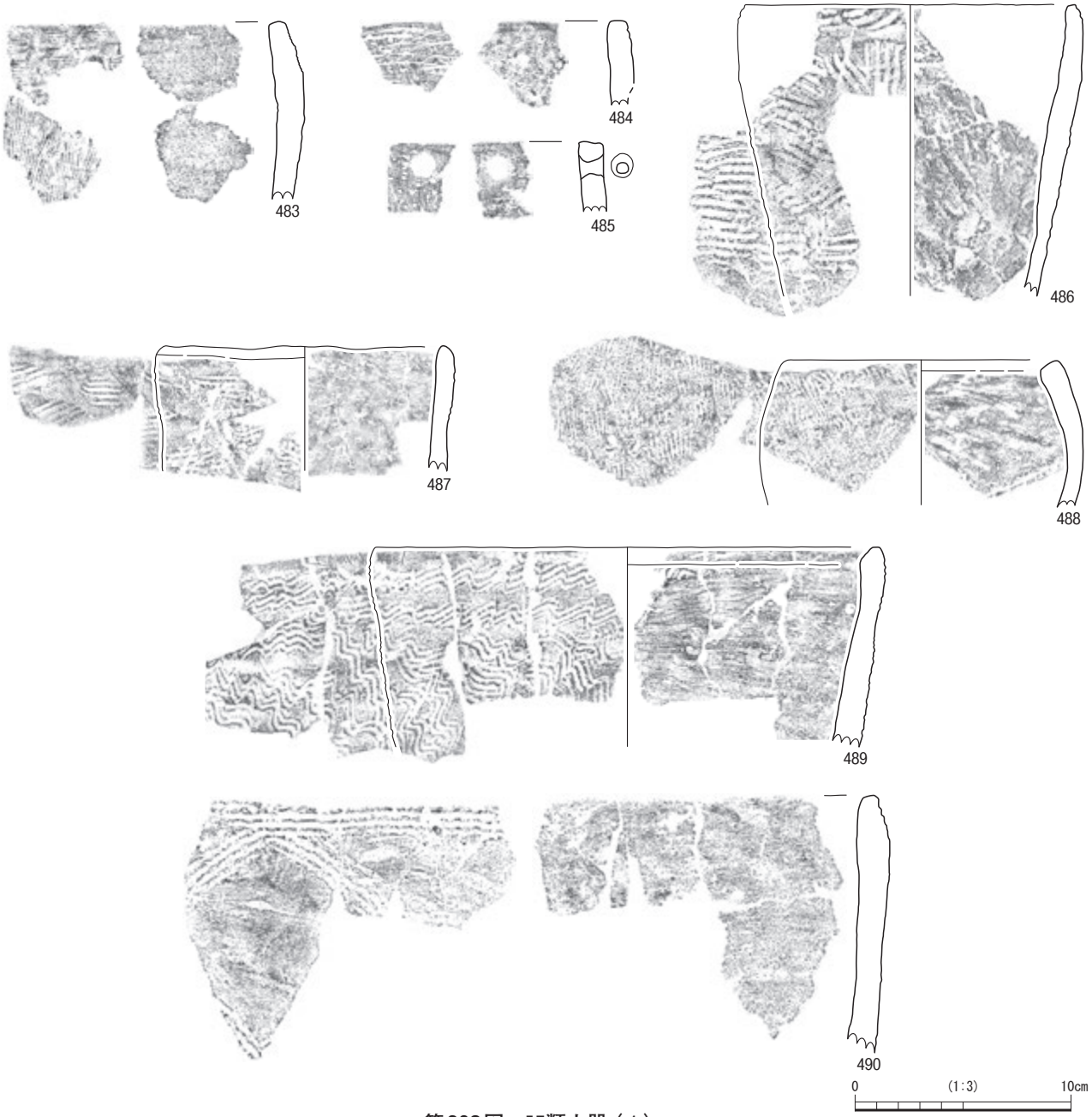
第306図　Ｖ類土器（４）

第307図　Ｖ類土器（５）

Ⅵ類土器（第308図483 ～第310図515）

器形は，底部から直線的もしくは，やや膨らみつつ立ち上がるバケツ形である。口縁部は内湾するものと直口のものがある。口唇部は平坦のものや，内傾するもの，丸みを帯びるものがある。

483 ～ 490は，口縁部または，口縁部から胴部である。そのうち483 ～ 485は口縁部が内湾する。483は，口縁部外面に６～７条を一単位とする横位条痕文を施す。胴部外面にも同じ施文具によって縦位条痕文を施す。484は，外面に横位貝殻条痕文を施す。485は，外面に刺突文を不規則に施す。口縁部に内外面から施された穿孔をもつ。486は，外面に４～５条を一単位とした深い短沈線文を縦位・横位・斜位と不規則に施す。器壁が他と比較し薄い。487は，口縁部外面に短い貝殻腹縁による条痕文を横位・斜位に施す。488の口縁部は内湾し稜をもつ。口縁部付近にはススが付着する。外面に棒状工具による縦位・斜位の刺突文を施す。489は，口唇部がやや丸みを帯びつつ内傾し，内傾面の一部に横位の流水文を施す。外面に横位・斜位の流水文を施す。490は，口唇部がやや丸みを帯びつつ内傾し，口縁部外面上部に貝殻腹縁による横位条痕文，胴部に貝殻復縁による条痕文を山形に施す。

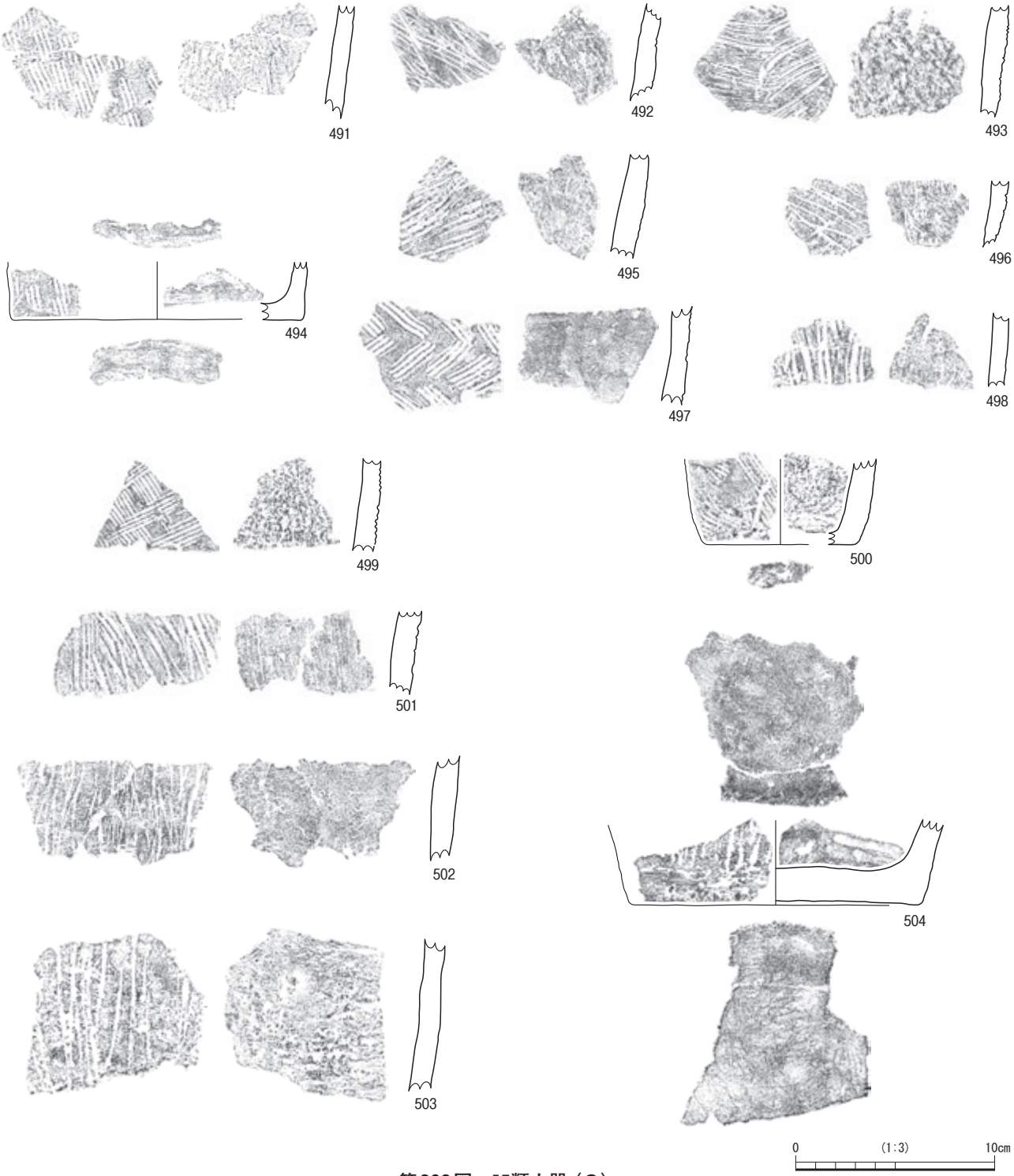


第308図　Ⅵ類土器（１）

491・494は，同一個体と考えられる胴部と底部である。底部は平底で，外面に３～４条を一単位とする条痕文を施す。

492・493・495～499・501～503は，胴部である。492・493は，外面に斜位条痕文を施す。493は，不規則な条痕文に，一部深い沈線文を施す。492・493の文様は，幅・深さは一定ではないが，同一工具による施文と考えられる。495・496は，外面に斜位条痕文を施す。499は外面に斜位条痕文を方向をたがえて，格子状に施す。497は外面に３条を一単位とした沈線文を羽状に施す。498・501～503は，外面に斜位条痕文を施す。

500・504は胴部から底部である。500は外面に斜位条痕文を施す。504は底部がわずかに上げ底となる。胴部外面下部にナデをおこない，上部に縦位貝殻刺突文を施す。

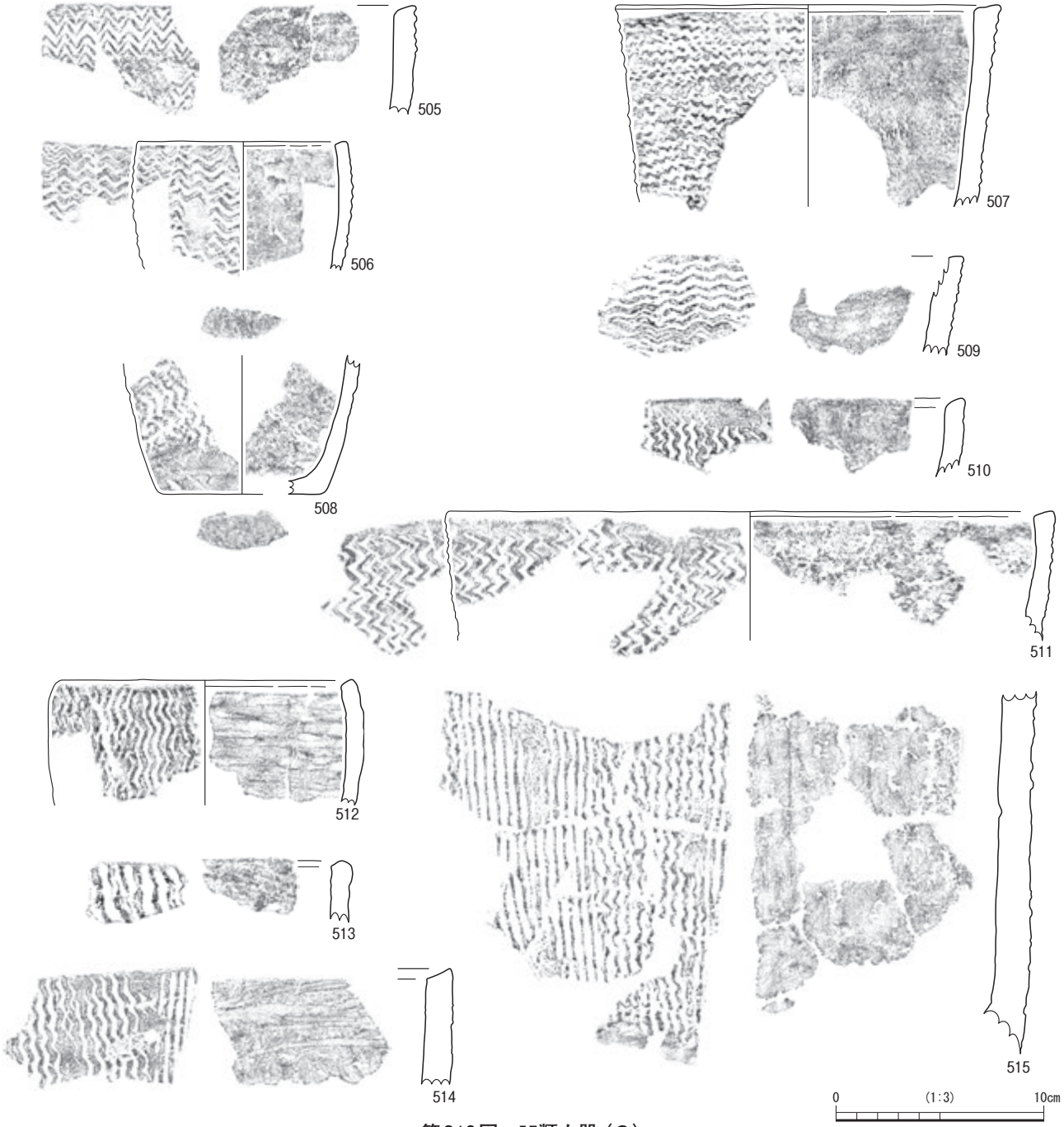


第309図　Ⅵ類土器（２）

505 ～ 515は，外面に押型文を施す一群である。505・506は，口縁部が内湾し横位に山形押型文を施す。505は，外面の一部を指おさえにより文様を消す。口唇部はていねいなナデをおこない内傾する。内面はナデをおこなう。508は胴部から底部で，506と同一個体と考えられる。506と508の内面はミガキのようなていねいなナデをおこない，一部光沢を帯びる。507・509は，口縁部が直行し横位に山形押型文を施す。507・509の口唇部は若干内傾する。507の口唇部は非常にていねいなナデをおこない光沢を帯びる。内面はナデをおこなう。胎土に角閃石を含む。

510 ～ 512・514は，口縁部が内湾し山形押型文を縦位に施す。口唇部はていねいなナデをおこなう。510・511の内面はナデをおこなう。512・514の内面は，工具による調整をおこなった後ナデをおこなう。515は514と同一個体と考えられる。514と515は，外面に２種類の施文原体で山形押型文を縦位に施す。

513は直行し口唇部が丸みを帯びる口縁部である。口縁部外面はていねいなナデをおこなう。内面はやや荒いナデをおこなう。

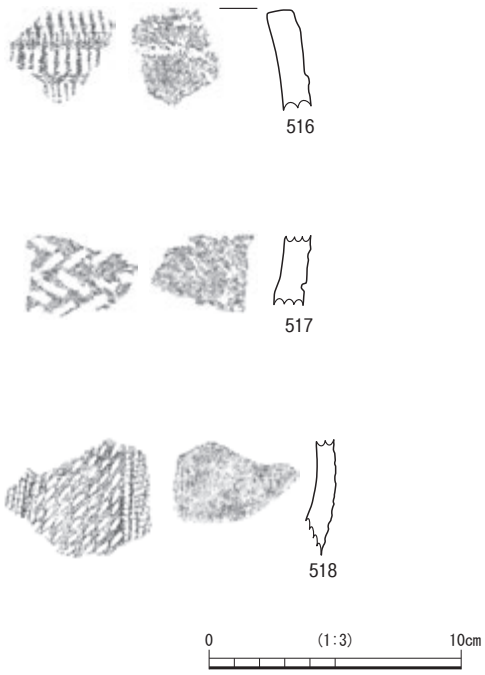


第310図　Ⅵ類土器（３）

Ⅶ類土器（第311図516 ～ 518）

外面は短沈線文を施し，内面はナデをおこなう一群である。

516は，口唇部を平坦に整形し，内湾する口縁部である。口縁部外面上位の沈線文は，下から上へ，中位は上から下，下位は下から上へと交互に施す。517は，胴部である。棒状工具による沈線文を斜位に施し，羽状とする。518は，内外面がミガキのようにナデ整形する胴部である。外面の左右に密に刺突文を施し，その間にケズリのような沈線文を施す。また，図の外面右が上になる可能性もある。

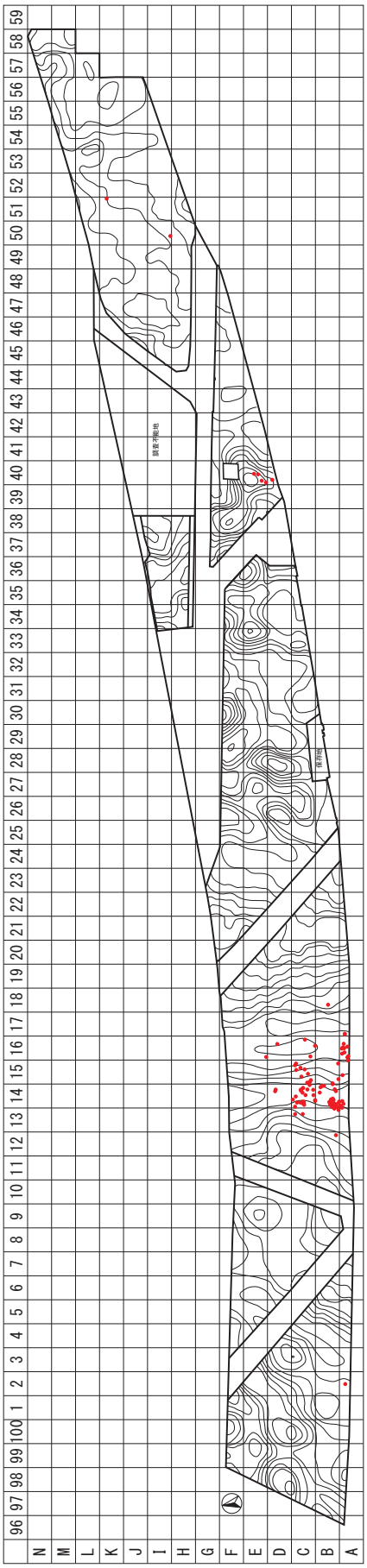


第311図　Ⅶ類土器

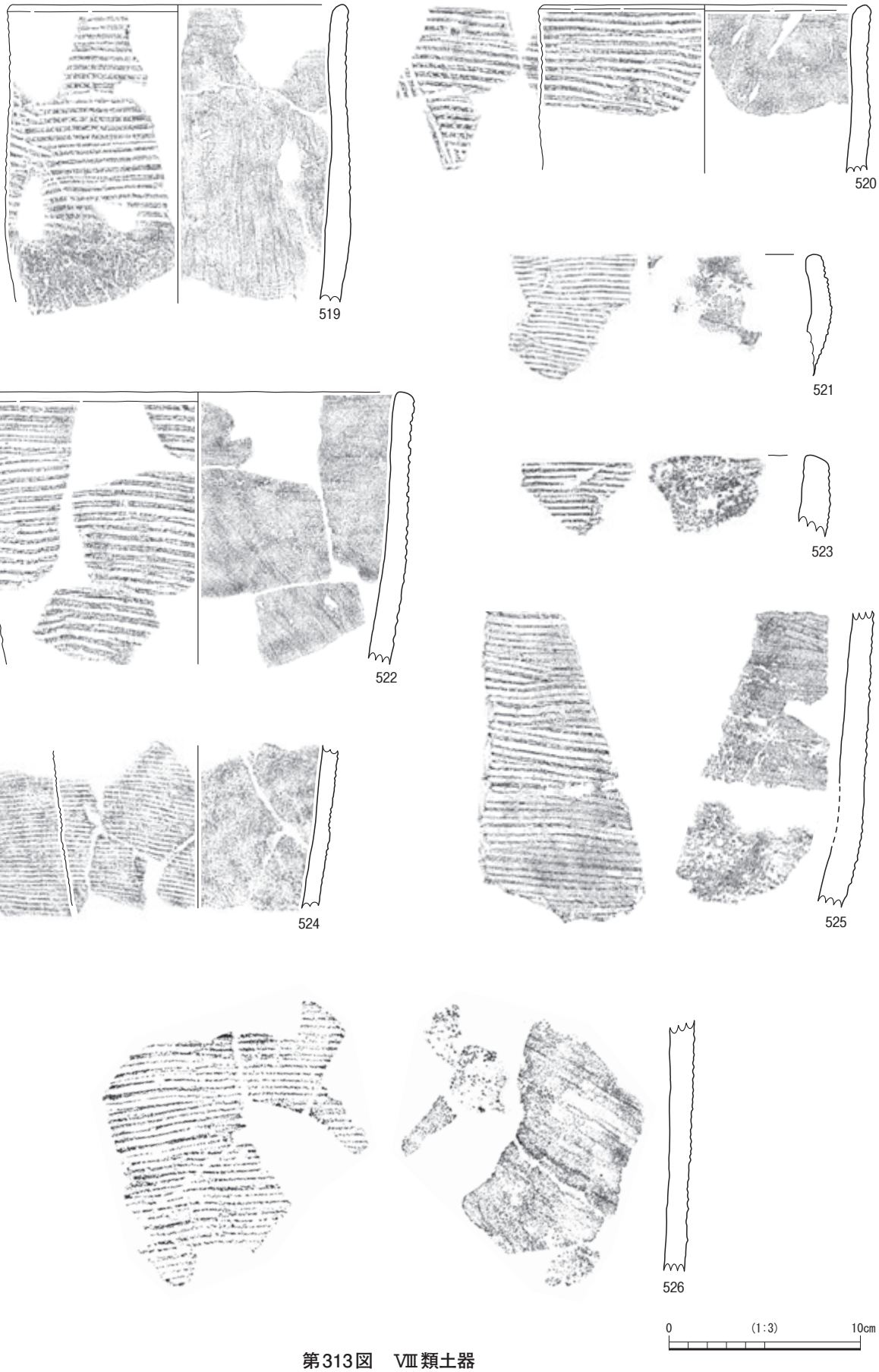
Ⅷ類土器（第313図519 ～ 526）

口縁部外面から胴部外面に貝殻条痕文を横位に施し，器形は円筒形となる一群である。

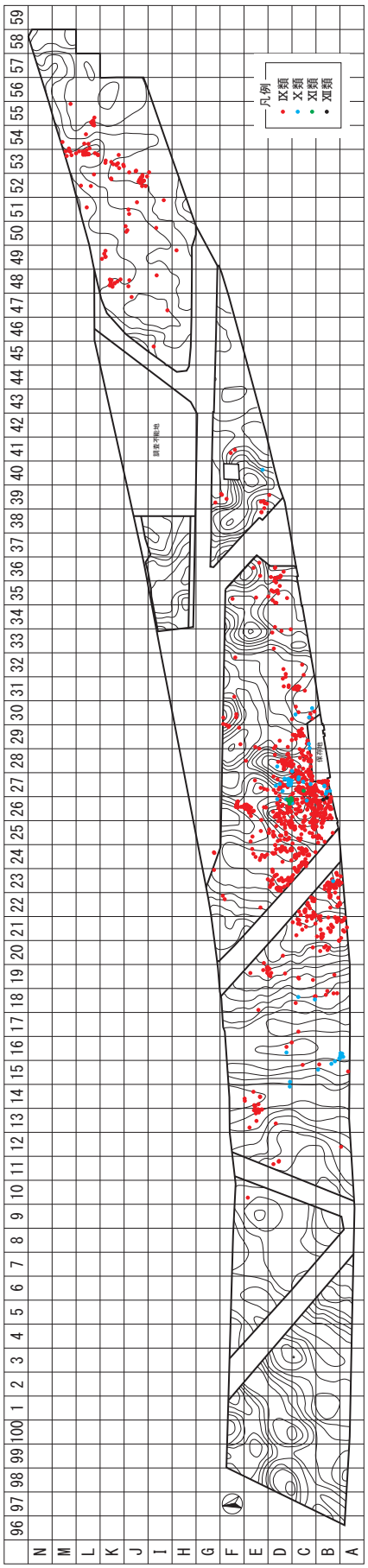
519 ～ 522は，口縁部から胴部である。口縁部内面は横位に，胴部内面は縦位に工具ケズリをおこなう。519・520は同一個体と考えられる。胎土に角閃石を含む。胴部下位に文様をもたない。口唇部は，やや丸みを帯びる。520は，内面に赤褐色の付着物が見られる。522の口唇部は，平坦である。521・523は，口唇部がていねいにナデられた口縁部である。内面は剥落が著しい。521は内湾する。524 ～ 526は，胴部である。525・526の内面には剥落があるが，横位の工具ケズリをおこなう。523・525・526は，同一個体の可能性が高い。



第312図　遺物分布図（Ⅷ類土器）



第313図　Ⅷ類土器



第314図　遺物分布図（Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ類土器）

Ⅸ類（押型文）土器（第316図527～第329図631）

器面に押型文を施し，器形がⅥ類にあてはまらない土器群である。楕円文・連珠文（楕円文とも山形文ともいえないもの）・山形文・菱形文の４つの文様が見られる。調査区Ｃ～Ｆに分布している。出土したⅨ類土器は破片資料が多く，計測する位置で傾きや器形に多少の影響を及ぼすため，個々の土器片をその土器の全体的な傾向として判断した。

口縁部について

口縁部と接合したり，同一個体と判断したりした胴部・底部を含み，以下のような基準で細分した。

①　口縁部内面に明確な稜をもたないかもつか

ａ：明確な稜をもたないもの

ｂ：明確な稜をもつもの

②　押型文の種類

楕：楕円，連：連珠，山：山形，菱：菱形

結果，次の８種類に細別ができた。

Ⅸ－ａ－楕類（第316図527～第317図541）

口縁部内面に明確な稜をもたず，口縁部外面に楕円押型文を施す一群である。

527は波状口縁で楕円押型文を横位に施す。口唇部や内面に文様をもたない。528は胴部で527と同一個体と考えられる。529は横位に楕円押型文を施す。内面にも外面と同一の楕円押型文を横位に施し，その上位に刺突文を施す。

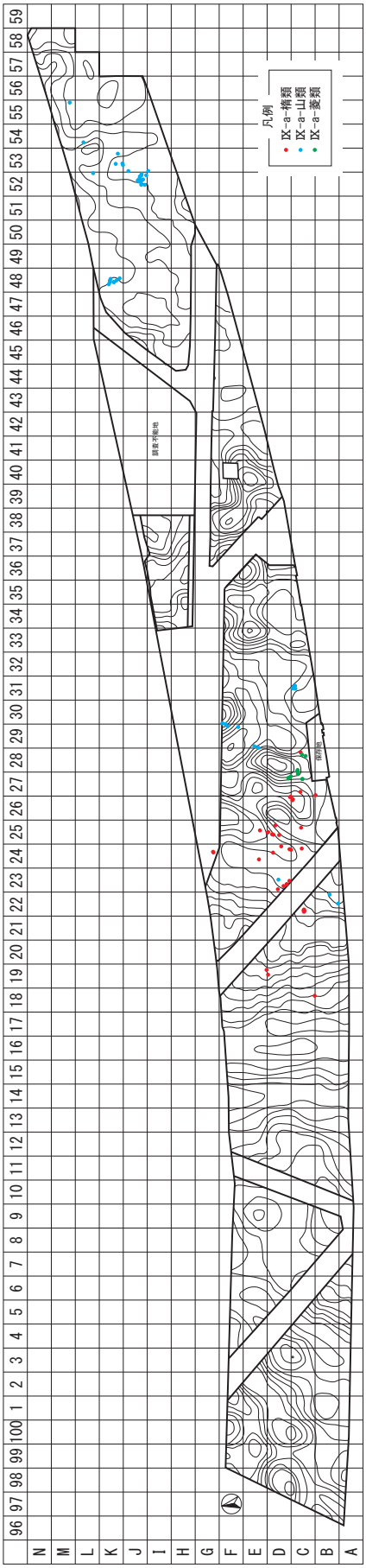
530・531は，口縁部外面上部が無文部となる。530の無文部下位は，楕円押型文を横位に施す。口縁部内面も外面と同一の楕円押型文を横位に，口唇部にはキザミを施す。531は無文部のみの確認だが，器形等から530と同じ分類とした。口唇部と口縁部内面に，同じ楕円押型文を横位に施す。

532は楕円押型文を斜位に施し，口唇部と口縁部内面にも外面と同一の楕円押型文を横位に施す。

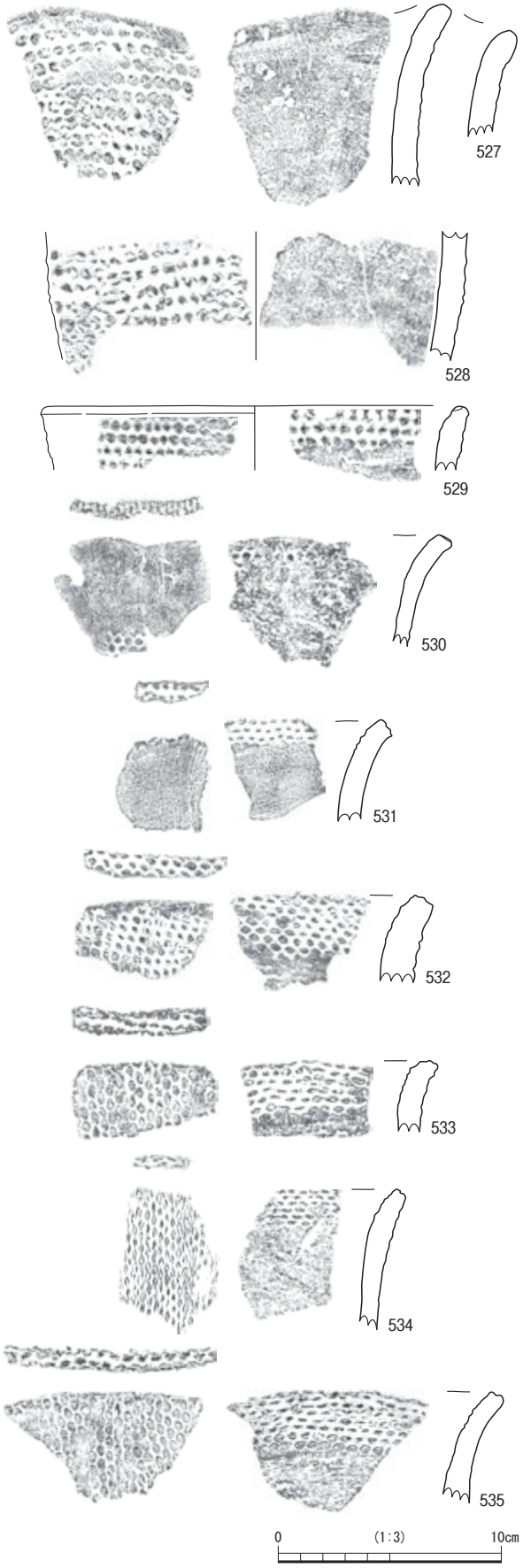
533～537・539の口縁部外面は，縦位に楕円押型文を施す。口唇部と口縁部内面にも外面と同一の楕円押型文を横位に施す。540は胴部から底部で，539と同一個体と考えられる。楕円押型文を横位に施すが，胴部下部は文様をもたない。538は口縁部外面の縦位の楕円押型文は，下位では横位の楕円押型文となる。口唇部にキザミを施す。541は538と同一個体と考えられ，楕円押型文を横位に施す。

Ⅸ－ａ－連類

口縁部内面に明確な稜をもたず，口縁部外面に連珠押型文を施す土器は，確認できなかった。



第315図　遺物分布図（Ⅸ-a-楕類・Ⅸ-a-山類・Ⅸ-a-菱類）



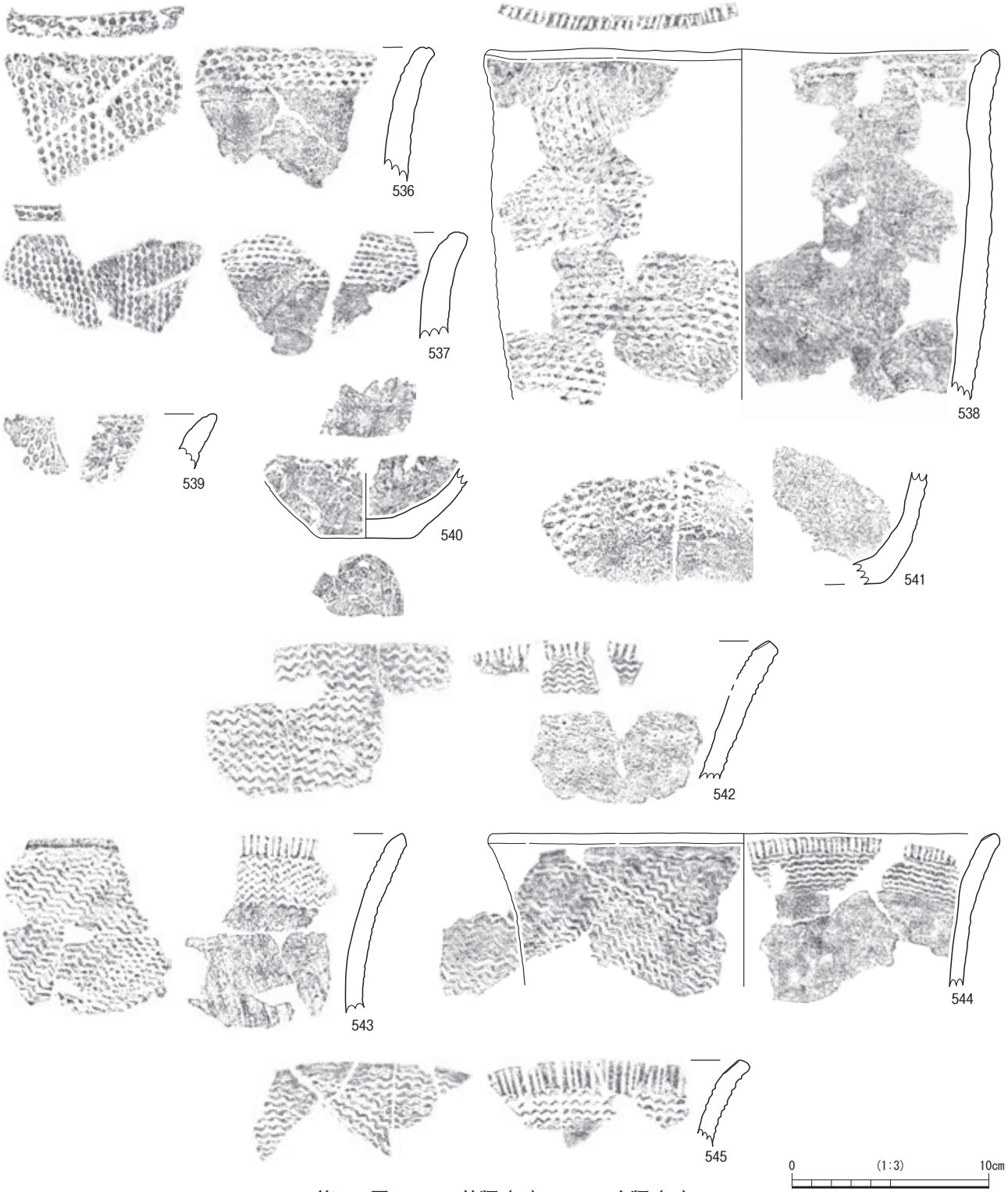
第316図　Ⅸ-a-楕類（1）

Ⅸ－ａ－山類（第317図542～第318図547・548）

口縁部内面に明確な稜をもたず，口縁部外面に山形押型文を施す一群である。

542～545の口縁部外面上部は，山形押型文を横位に施す。口縁部内面上部には柵状文を，その下位に外面と同一の山形押型文を横位に施す。施文順は横位押型文→柵状文となる。543～545の外面は，横位の山形押型文の下位はやや斜位の山形押型文となる。

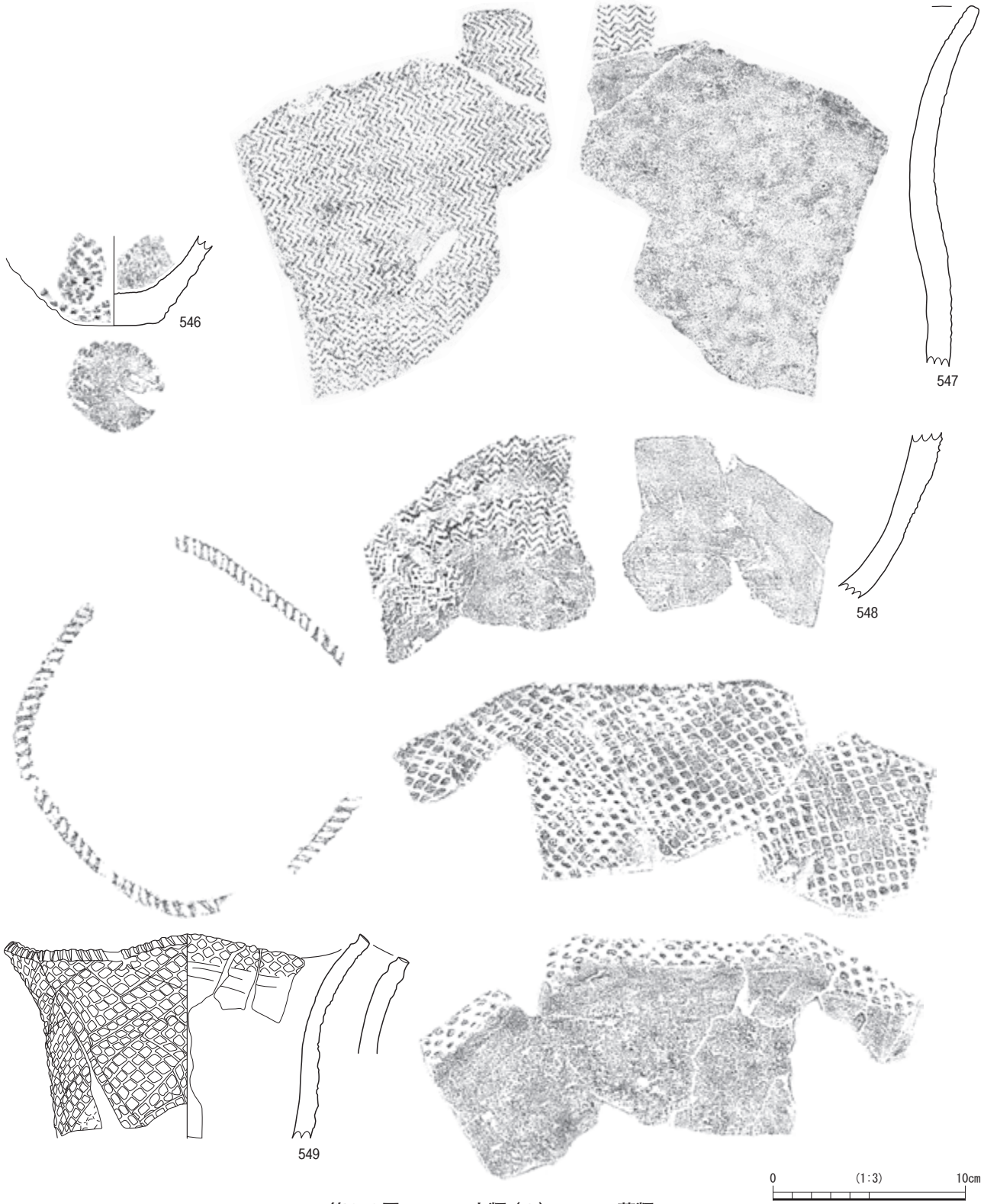
547は口縁部外面の縦位の山形押型文は，下位で横位の山形押型文となる。口縁部内面も外面と同一の山形押型文を横位に施す。548は547と同一個体と考えられる。



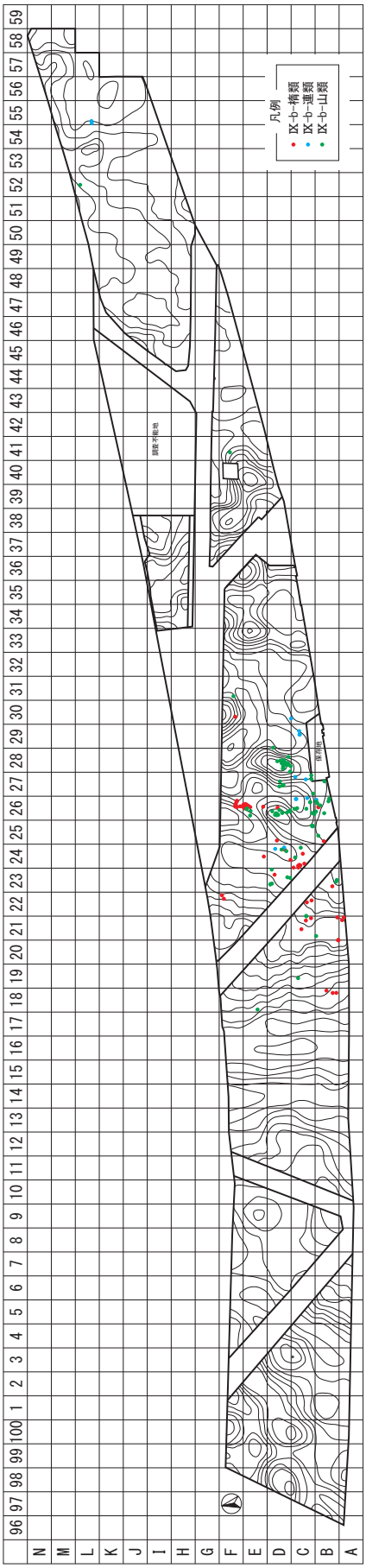
第317図　Ⅸ-a-楕類（2）・Ⅸ-a-山類（1）

Ⅸ－ａ－菱類（第318図546・549）

口縁部内面に明確な稜をもたず，口縁部外面に菱形押型文を施す一群である。549は口縁部から胴部まで全周し接合した。波状口縁の口縁部外面上部から胴部まで斜位に菱形押型文を施す。口唇部には刺突状のキザミを施す。口縁部内面は外面と同一の菱形押型文を横位に施した後，施文幅が一定となるようナデ消す。546は底部で，外面端部まで，菱形押型文を斜位に施す。549と同一個体と考えられる。



第318図　Ⅸ-a-山類（2）・Ⅸ-a-菱類



第319図　遺物分布図（Ⅸ-b-楕類・Ⅸ-b-連類・Ⅸ-b-山類）

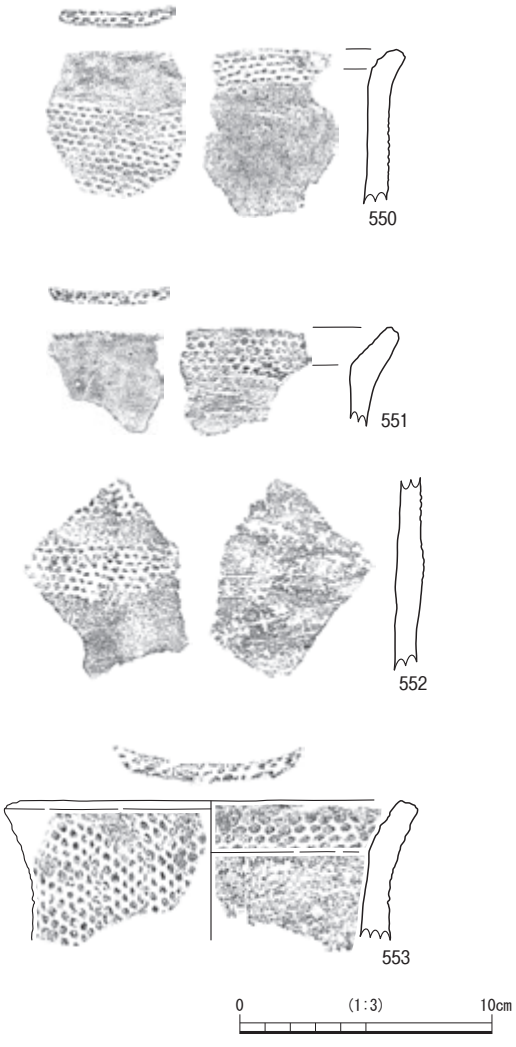
Ⅸ－ｂ－楕類（第320図550～第321図560）

口縁部内面に明確な稜をもち，口縁部外面に楕円押型文を施す一群である。

550・551は，口縁部外面上部が無文部となる。550は口唇部と口縁部内面も外面と同一の楕円押型文を横位に施す。551・552は，同一個体と考えられる。551は口唇部と口縁部内面に同じ楕円押型文を横位に施す。

553～556の口縁部外面は，楕円押型文を斜位に施す。553・554は，口唇部と口縁部内面にも外面と同一の楕円押型文を横位に施す。555は口縁部内面に外面と同一の楕円押型文を横位に施し，口唇部は斜位に刺突文を施す。556は口縁部外面に無文帯をもちながら楕円押型文を異方向（斜位）に施す。口縁部内面に外面と同一の楕円押型文を横位に施す。

557～559の口縁部外面は，楕円押型文を縦位に施す。口唇部と口縁部内面も外面と同一の楕円押型文を横位に施す。559は波状口縁である。560は胴部で，559と同一個体と考えられ，楕円押型文を横位に施す。



第320図　Ⅸ－ｂ－楕類（１）

Ⅸ－ｂ－連類（第321図561～第322図565）

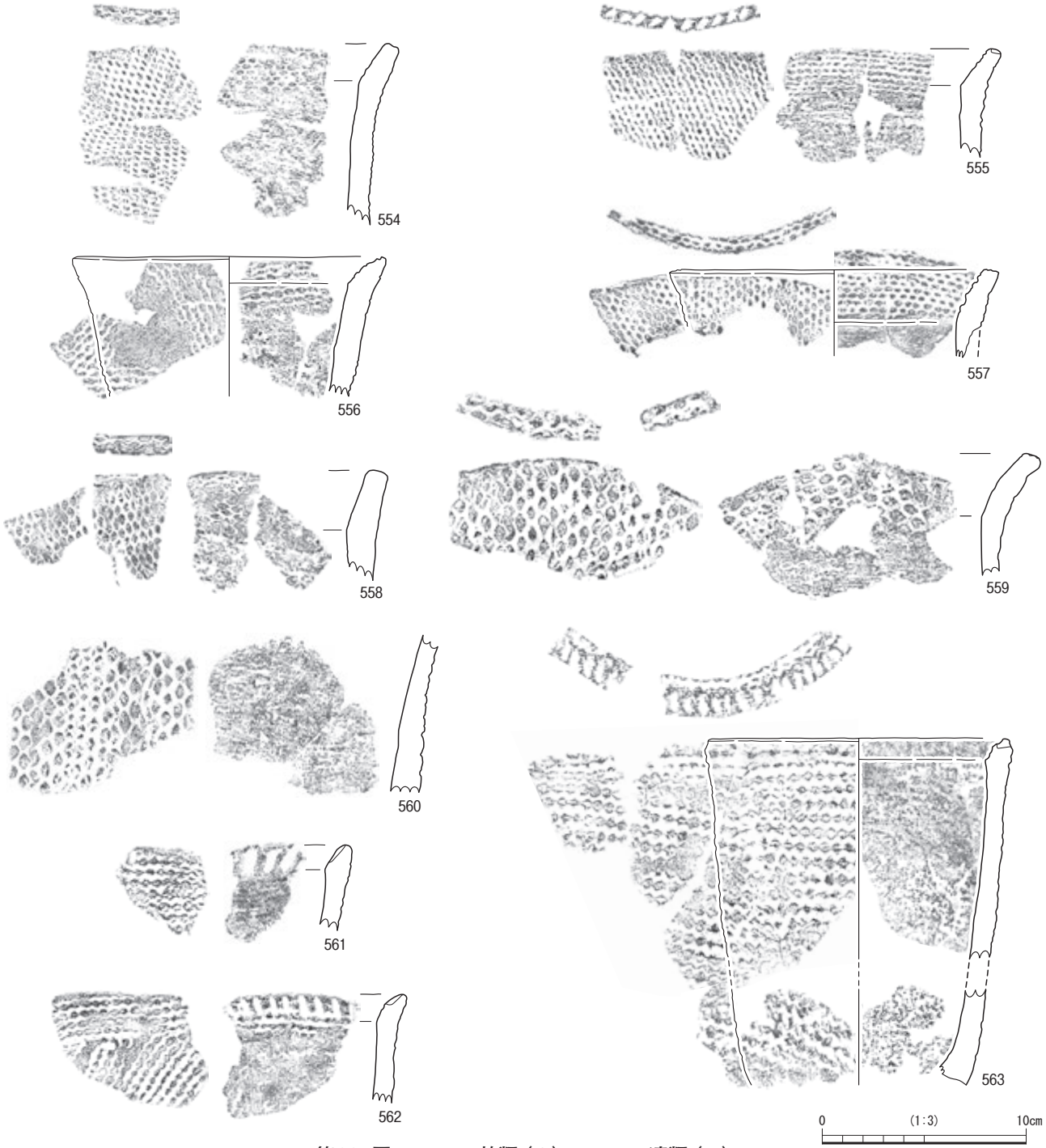
口縁部内面に明確な稜をもち，口縁部外面に連珠押型文を施す一群である。

561～563は，口縁部外面に連珠押型文を横位に施す。

561は口縁部内面上部に刺突状のキザミを施すのみである。562は口縁部内面に外面と同一の連珠押型文を横位に施し，その上位に刺突状のキザミを施す。口縁部外面上部の横位の連珠押型文は，下位で斜位の連珠押型文となる。563は口縁部内面に外面と同一の連珠押型文を横位に施した後，口唇部に刺突状のキザミを施す。胴部下部は，連珠押型文を斜位に施す。

564は口縁部外面に連珠押型文を斜位に施す。口縁部内面に外面と同一の連珠押型文を横位に施した後，その上位にキザミを施す。やや波状口縁となる。

565は口縁部外面に連珠押型文を縦位に施す。口縁部内面に外面と同一の連珠押型文を横位に施した後，その上位に刺突文を施す。口唇部はていねいなナデをおこない平坦である。



第321図　Ⅸ－ｂ－楕類（2）・Ⅸ－ｂ－連類（1）

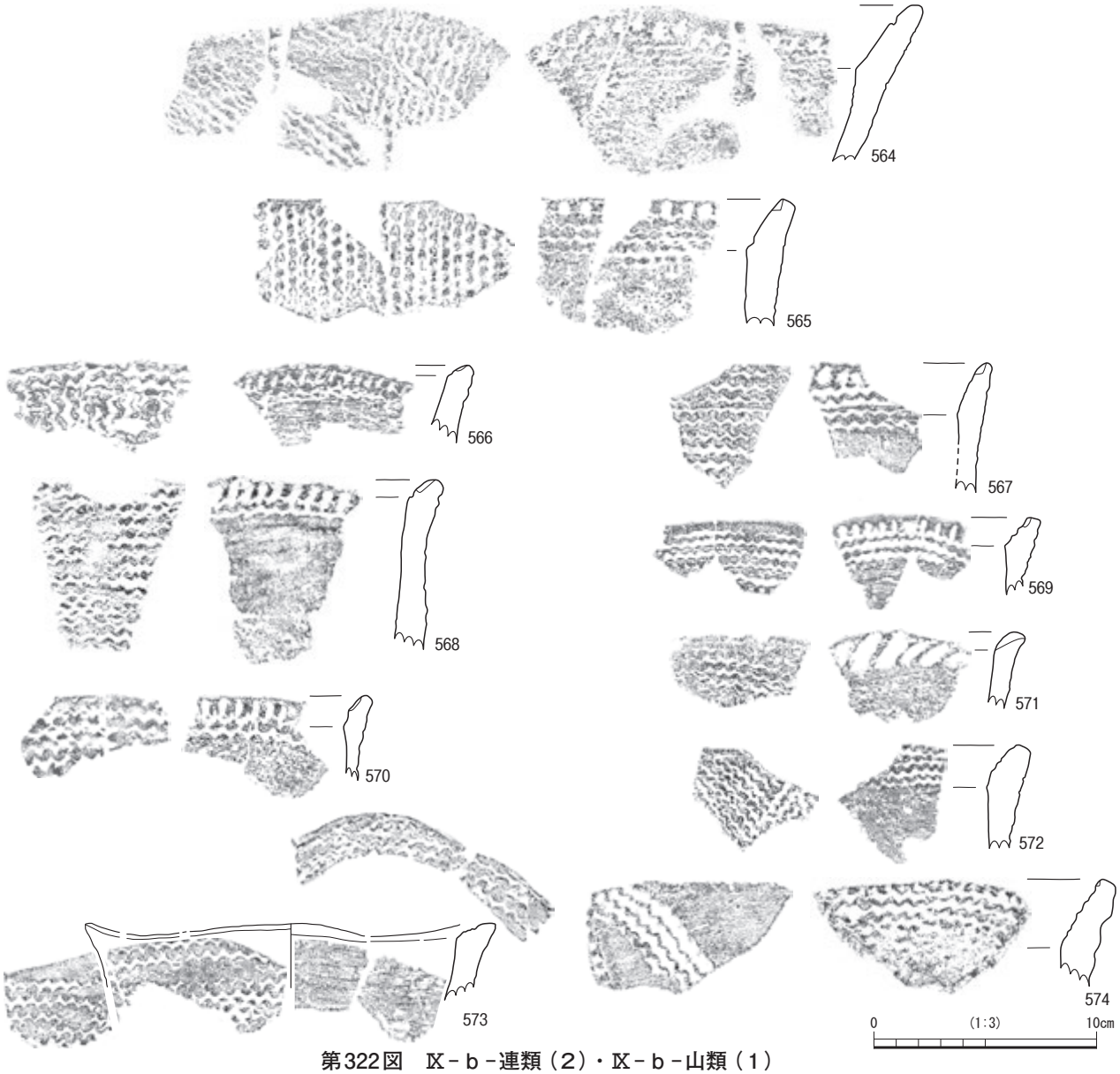
Ⅸ－ｂ－山類（第322図566～第323図580）

口縁部内面に明確な稜をもち，口縁部外面に山形押型文を施す一群である。

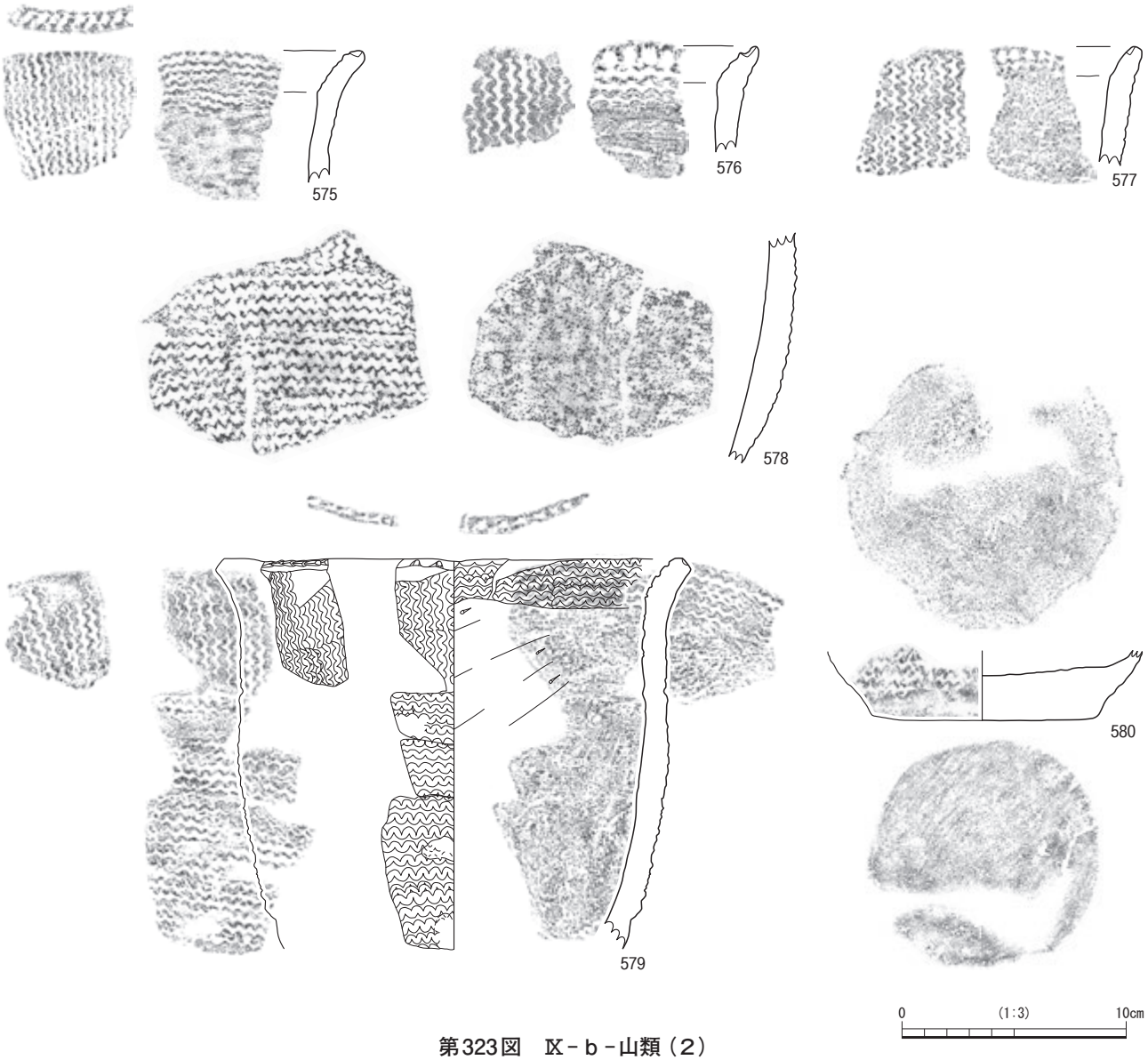
566～571・573は，口縁部外面に山形押型文を横位に施す。566～569は，口縁部内面に外面と同一の山形押型文を横位に施した後，その上位に刺突文を施す。566の口縁部外面での横位の山形押型文は，下位では縦位の山形押型文となる。570は口縁部内面に外面と同一の山形押型文を横位に施した後，その上位にキザミ状の刺突文を施す。571は口唇部から口縁部内面上部にかけて押圧状の６～８㎜程度の太いキザミを施すのみである。572は口縁部外面に山形押型文を異方向（斜位）に施す。口縁部内面は外面と同一の山形押型文を横位に施すのみである。573はやや波状口縁で，口縁部内面に外面と同一の山形押型文を横位に施すのみである。

574は口縁部外面に無文帯をもちながら山形押型文を斜位に施す。口縁部内面に外面と同一の山形押型文を横位に施した後，その上位に２㎜程度の刺突文を施す。わずかに波状口縁となる。

575～577・579は，口縁部外面に山形押型文を縦位に施す。575～577は，口縁部内面に外面と同一の山形押型文を横位に施した後，その上位に刺突文を施す。577・578・580は，同一個体と考えられる。578は外面上位は縦位の山形押型文だが，下位で横位の山形押型文となる。579は口縁部外面の縦位の山形押型文は，下位は横位の山形押型文となる。口唇部は刺突文を施す。580の底部外面は，ていねいなナデをおこない光沢を帯びる。



第322図　Ⅸ－ｂ－連類（２）・Ⅸ－ｂ－山類（１）



第323図　Ⅸ－ｂ－山類（２）

Ⅸ－ｂ－菱類

口縁部内面に明確な稜をもち，口縁部外面に菱形押型文を施す土器は，確認できなかった。

胴部・底部について

Ⅸ類の中で口縁部と接合しない，もしくは同一個体と判断できない押型文を施す胴部・底部はⅨ－ｃとし，以下のような基準で４つに細別した。

押型文の種類

楕：楕円，連：連珠，山：山形，菱：菱形

Ⅸ－ｃ－楕類（第325図581～第326図596）

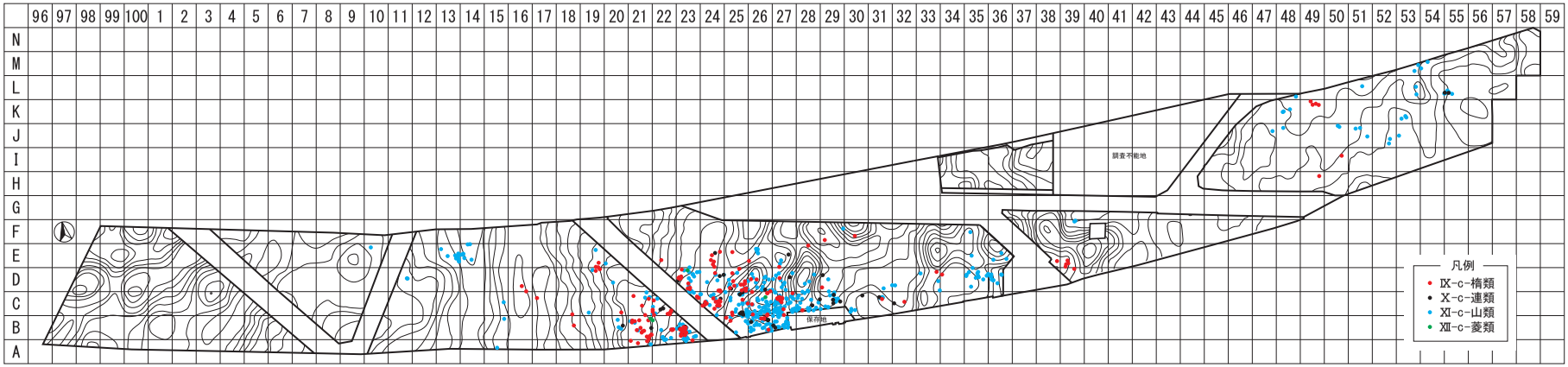
外面に楕円押型文を施す一群である。

581は，口唇部に近い口縁部から胴部である。外面上位に無文部をもち，無文部下位では楕円押型文を横位に施す。口唇部の施文の有無は不明だが，内面には，外面と同一の楕円押型文を横位に施す。その施文下位は，工具による調整をおこなう。582・583は，外面に楕円押型文を横位に施す。

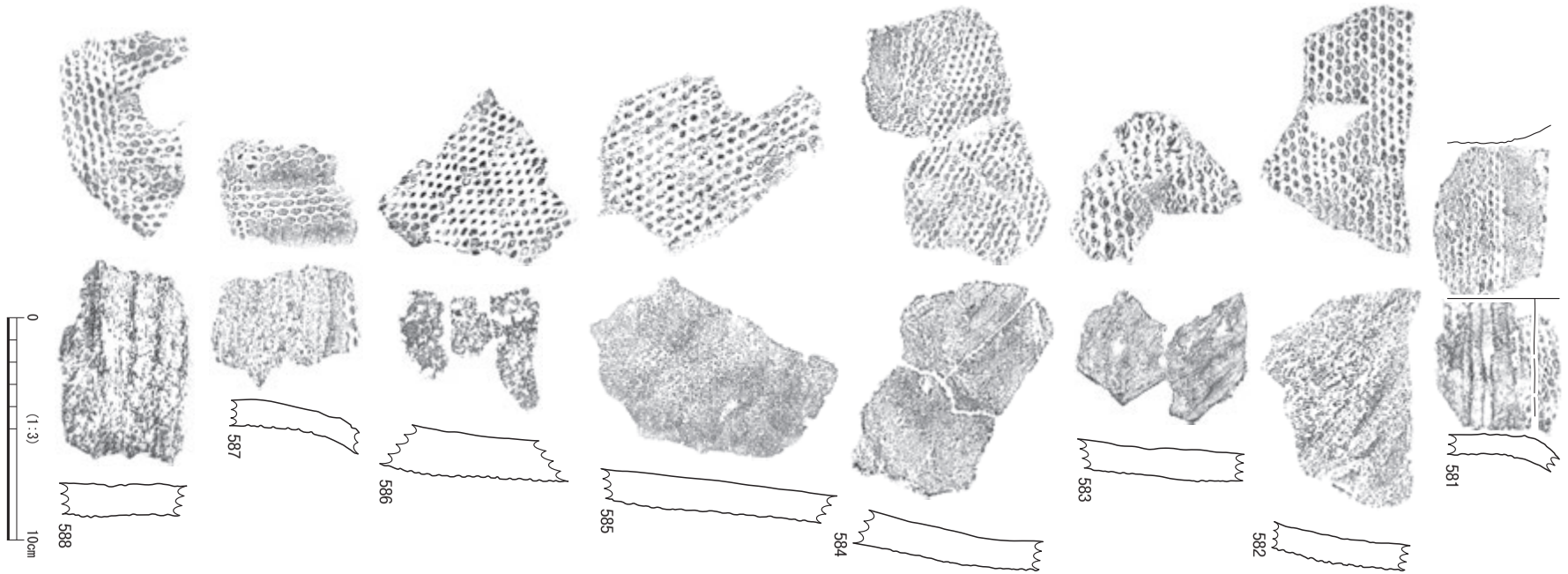
584～586は，外面に楕円押型文を斜位に施す。587・588は，外面上位に縦位の楕円押型文を，下位に横位の楕円押型文を施す。587は口縁部近くの胴部で，外面上位で縦位の施文の一部をナデ消す。内面上位には外面と同一の楕円押型文を横位に施す。588は587と同一個体と考えられる。

589・590は，外面に楕円押型文を斜位と横位に施す。591は外面に楕円押型文を縦位と斜位に施す。592・593は，外面に楕円押型文を縦位に施す。

594は外面上位に横位，下位に斜位の楕円押型文を施す。596は底部近くで，594と同一個体と考えられる。



第324図　遺物分布図（Ⅸ-c-楕類・Ⅸ-c-連類・Ⅸ-c-山類・Ⅸ-c-菱類）



第325図　Ⅸ-c-楕類（1）

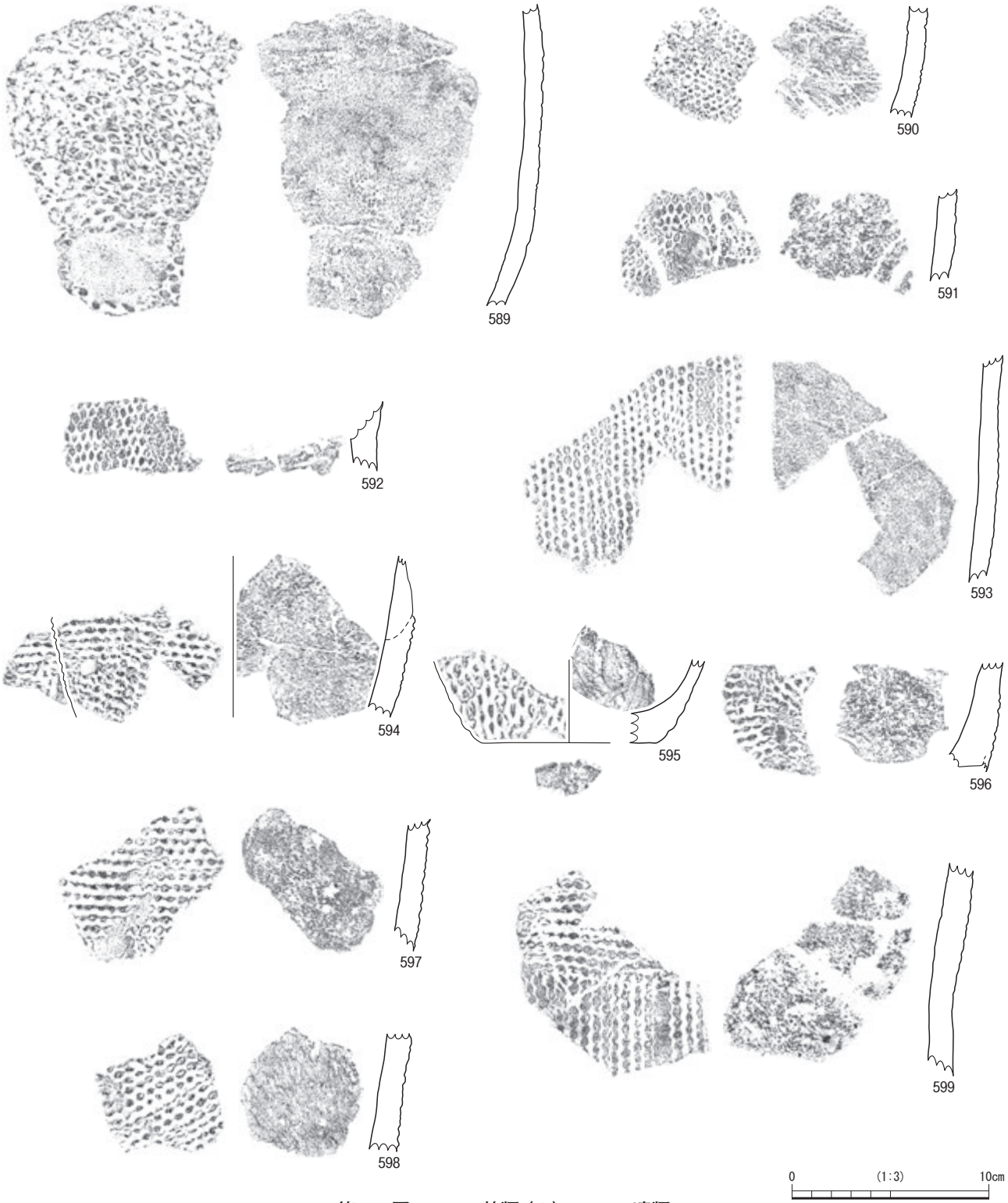
外面に楕円押型文を横位に施すが，一部は斜位の楕円押型文を施す。

595は外面に楕円押型文を縦位に施す胴部から底部である。底部は平底で，底部外面端部まで楕円押型文を施す。

Ⅸ－ｃ－連類（第326図597 ～ 599）

外面に連珠押型文を施す一群である。

597は外面に横位に，598は外面に斜位の連珠押型文を施す。599は外面上位に横位，下位に縦位の連珠押型文を施す。施文順は，横位→縦位である。



第326図　Ⅸ-c-楕類（2）・Ⅸ-c-連類

Ⅸ－ｃ－山類（第327図600 ～第329図629・632）

外面に山形押型文を施す一群である。

600 ～ 610は，外面に山形文を横位に施す。

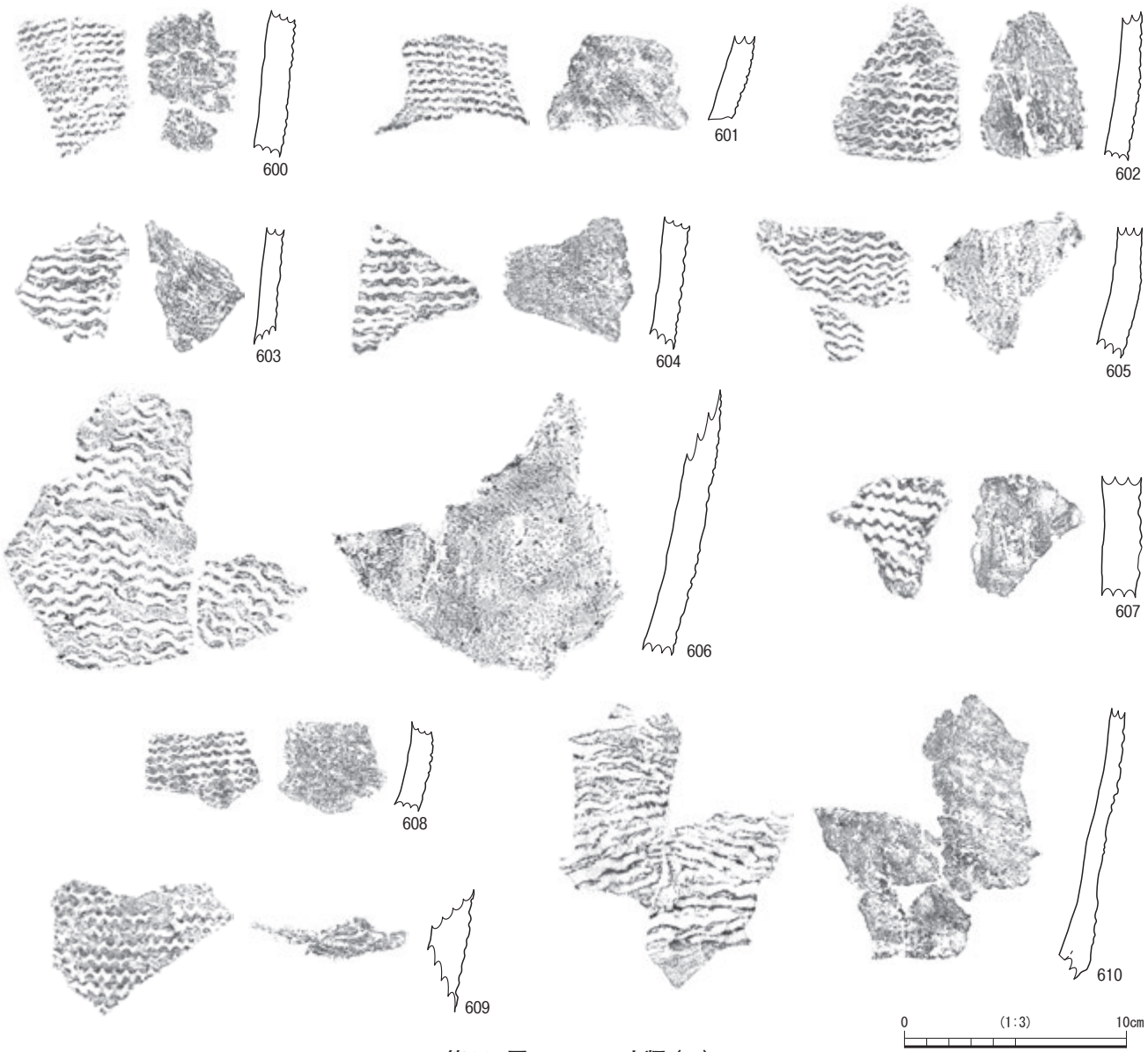
611・612は，外面に１方向のみ山形押型文を斜位に施す。613は外面に２方向に山形押型文を斜位に施す。614は口縁部近くで，外面上位に２方向の斜位の山形押型文を，下位に横位の山形押型文を施す。その３つの施文間は無文部となる。施文順は，横位→縦位である。内面上位に外面と同一の山形押型文を横位に施す。615・616は，外面に山形押型文を斜位と横位に施す。617は外面上位に縦位の山形押型文を施し，下位に横位の山形押型文を施す。施文順は，横位→縦位である。618は外面上位に横位の山形押型文を施し，下位に斜位の山形押型文を施す。619 ～ 621は，外面に山形押型文を縦位に施す。

622・624・626 ～ 628・632は，胴部から底部で，外面に山形押型文を縦位に施す。624は底部の器壁が薄い。622・627・628は，胴部が大きく膨らみをもつと考えられる。622・627は，胴部下部には文様をもたず，ナデをおこなう。628は胴部下部まで山形文押型文を縦位に施す。

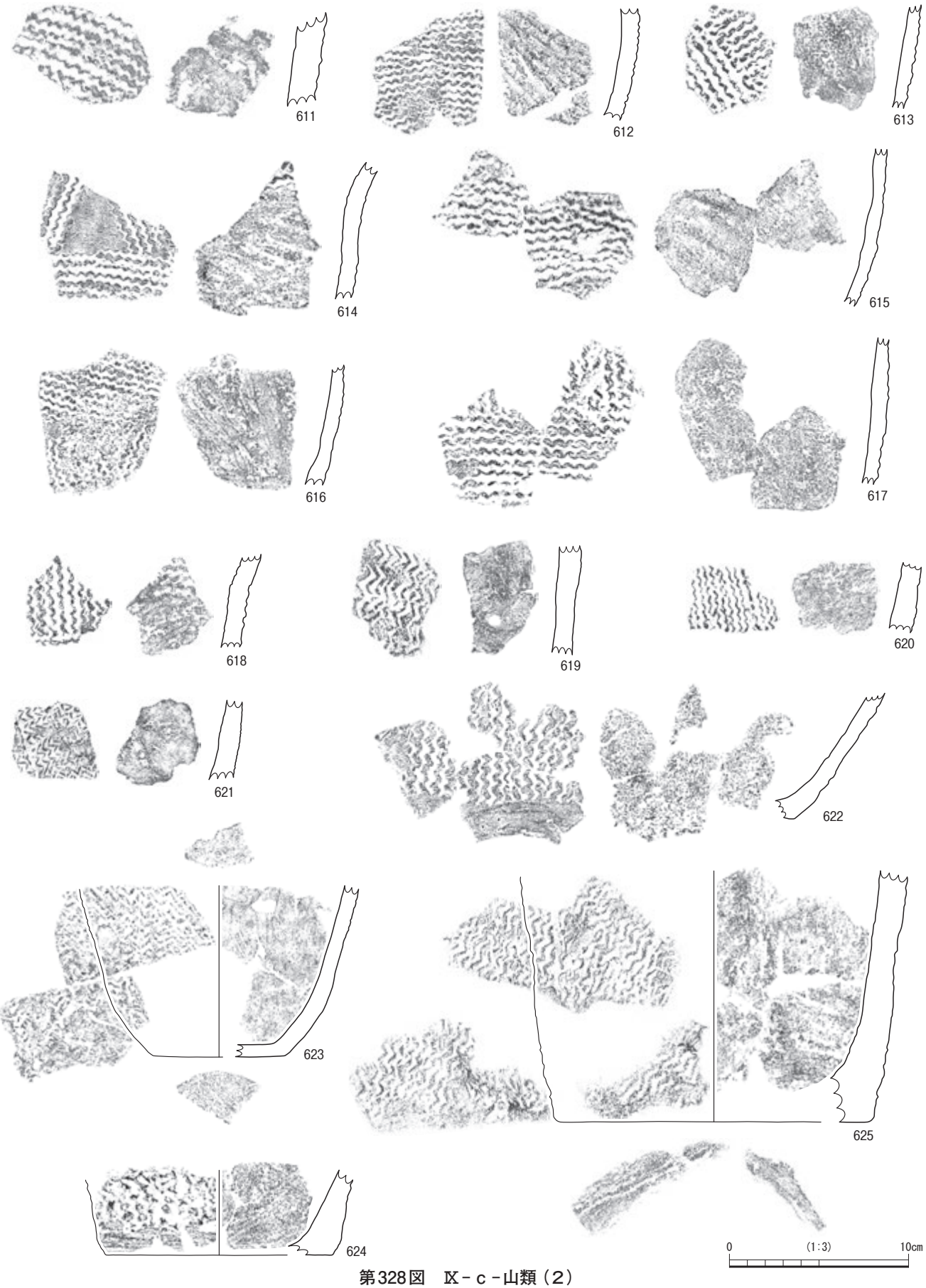
623は胴部から底部で，外面に山形押型文を横位に施す。内面はていねいに磨かれ黒色で光沢を帯びる。

625は胴部から底部で，外面に山形押型文をやや斜位に施す。底部は平底である。器壁は厚く，胴部は直立気味である。外面は剥落が著しい。

626は，外面の一部にタールが付着し，内面のには黒斑をおこなう。632は内面の一部にススが付着する。629は胴部で，632と同一個体と考えられる。626・632は，胴部が直立気味である。いずれも胴部下部に文様をもたない。



第327図　Ⅸ－ｃ－山類（１）


611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
0
(1:3)
10cm

第328図　Ⅸ－ｃ－山類（２）

Ⅸ－ｃ－菱類（第329図630・631）

外面に菱形押型文を施す一群である。

630は外面にネガティブな菱形押型文を施す。ネガティブな施文方法は，630のみに確認された。

631は胴部から底部で，外面に菱形押型文を斜位に施す。胴部のみに施文され，底部外面端部との間に条痕をもつ。

Ⅹ類土器（第330図633 ～ 644）

器面に文様を施す箇所や器形がⅨ類に類似し，器面に撚糸文を施す一群である。

口縁部について

以下のような基準で細分した。

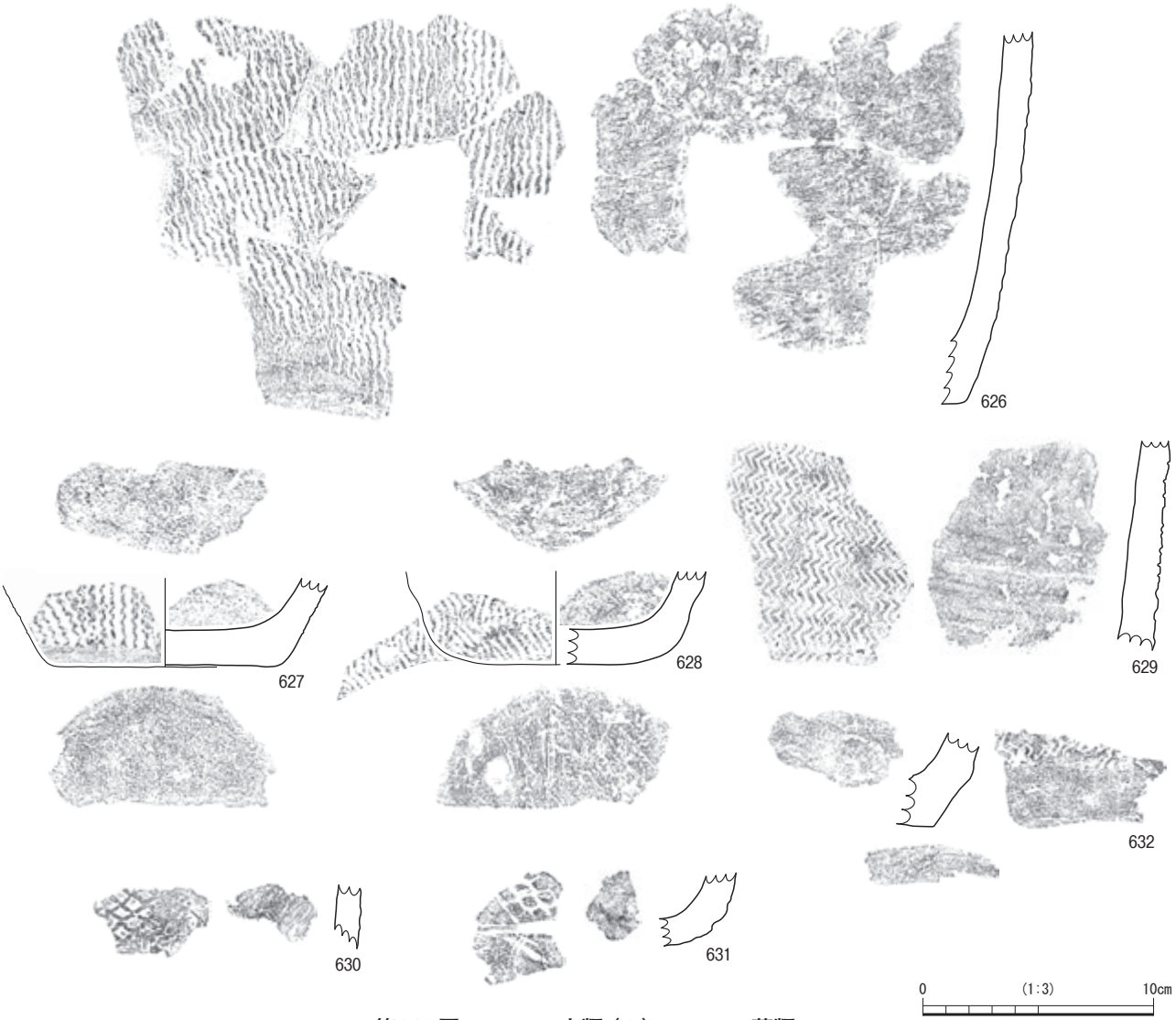
口縁部内面に明確な稜をもたないかもつか

ａ：明確な稜をもたないもの

ｂ：明確な稜をもつもの

Ⅹ－ａ類（第330図633・634・636）

口縁部内面に明確な稜をもたず，口縁部外面に撚糸文を施す一群である。633・636は，口縁部外面に撚糸文を縦位に施す。口唇部や口縁部内面に文様をもたない。633は，波状口縁である。633・636は，同一個体と考えられる。634は，口縁部外面に撚糸文を縦位に施し，口縁部内面上部に外面と同一の撚糸文を横位に施す。口縁部に回転穿孔をもつ。穿孔の形状は，外面から見ると円形状で，器壁の中央まで施す。内面から見ると，2/3が円形状に器壁の中央まで施され，1/3は穿孔の痕跡がほとんどない。内面からの穿孔中に割れた可能性もある。



第329図　Ⅸ－ｃ－山類（３）・Ⅸ－ｃ－菱類

Ｘ－ｂ類（第330図635・637～640・642）

口縁部内面に明確な稜をもち，口縁部外面に撚糸文を施す一群である。

635は，口縁部外面に撚糸文を横位に施す。口縁部内面に，外面と同一の撚糸文を横位に施した後，その上位に刺突文を施す。内面は工具による調整をおこない，やや光沢を帯びる。637・638は，635と同一の撚糸文を横位に施し，635と同一個体と考えられる。638は，底部に近い胴部である。

639・640は，口縁部外面に撚糸文を縦位に施す。639は口唇部に刺突文を施す。640は口縁部内面上部に外面と同一の撚糸文を横位に施した後，上位に刺突文を施す。波状口縁である。内面は工具による調整をおこない，やや光沢を帯びる。

642は口縁部外面に無文部を設け，その下位に撚糸のような文様を施すことから，この類とした。施文方向は不明である。口唇部や口縁部内面にも，外面と同一の文様を施す。

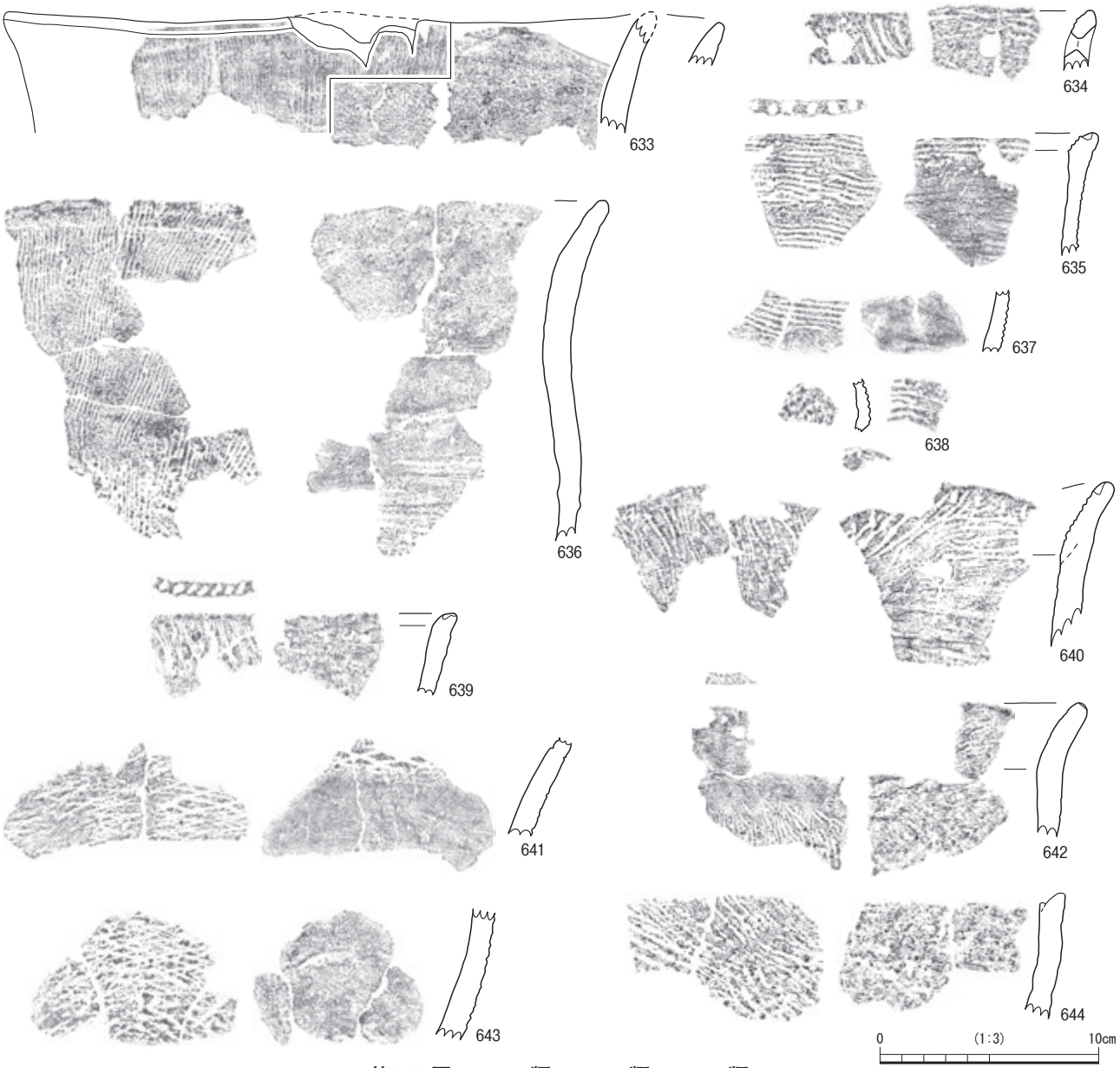
胴部・底部について

Ｘ類の中で口縁部と接合しない，もしくは同一個体と判断できない胴部・底部は，Ｘ－ｃと分類した。

Ｘ－ｃ類（第330図641・643・644）

641・643は，外面に網目撚糸文を横位に施す。641は，口縁部近くの胴部で，内面上位に外面と同一の網目撚糸文を横位に施す。641・643は，同一個体と考えられる。

644は外面に撚糸文を施す。上積痕が確認できる。



第330図　Ｘ－ａ類・Ｘ－ｂ類・Ｘ－ｃ類

Ⅺ類土器（第331図645・646）

器形に加え，文様を施す箇所がⅨ類に類似し，器面に縄文を施す一群である。

645は完形に近い個体となった。底部はていねいなナデをおこないやや光沢を帯びる。底部外面には指頭圧痕がみられ，そのためか，やや上げ底状となる。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部はやや外傾する。口縁外面上部から胴部下部までＬＲの単節斜縄文を横位に施す。縄文原体の長さは５～７㎝で，上部から下部の順に施す。口唇部は尖頭状で，口縁部内面は内傾し，明確な稜をもつ。内傾する部分のみ，外面同様の文様を横位に施す。稜より下位は，工具によるていねいなナデでやや光沢を帯びる。

646は外反する口縁部で，口縁部外面上部に無文部を設け，その下位に縄文を施す。口唇部や口縁部内面上部にも外面と同一の縄文を横位に施す。口縁部内面には明確な稜をもつ。

Ⅻ類土器（第331図647）

器形に加え，文様を施す箇所がⅨ類に類似し，器面に枝回転による文様を施す一群である。

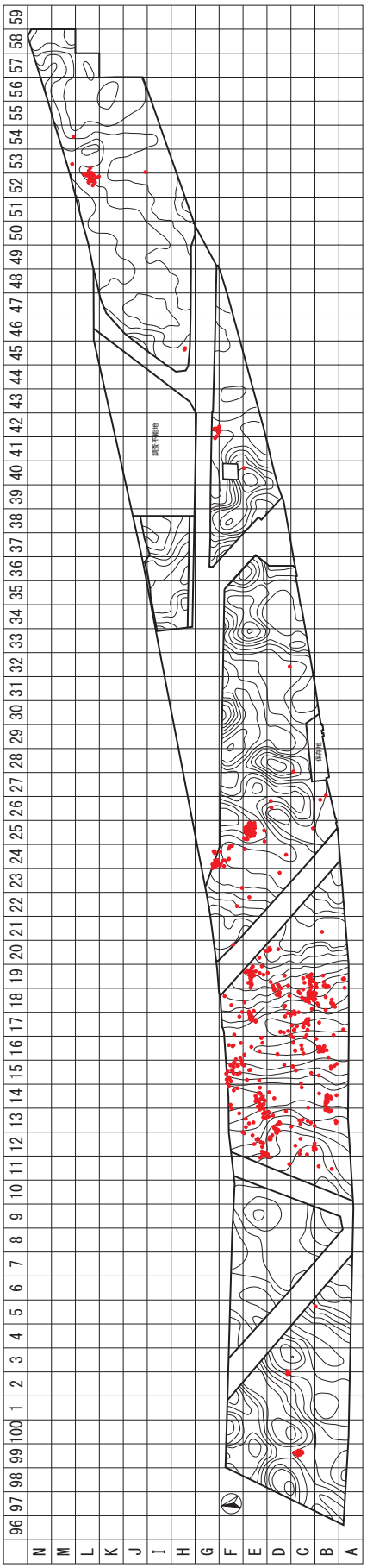
647は外反する口縁部で，口縁部外面に枝回転を縦位に施す。口縁部内面には，外面と同一の枝回転を横位に施した後，その上位に刺突文を施す。口縁部内面は，明確な稜をもち，稜以下は工具による調整をおこなう。

ⅩⅢ類土器（第333図648～第336図705）

器形は，底部から胴部にかけて膨らみ，胴上部で「く」の字状に屈曲し，頸部ですぼまり，口縁部で大きく外反する。口唇部はていねいに面取りし，平坦面を有する一群である。器壁は，厚さ４～６㎜程度の薄いものと厚さ９～11㎜程度の厚いものがある。

648～658・660・662は，押型文を施す一群である。648は，口縁部である。口唇部から口縁部外面に押型文を斜位に施す。652・653は，口縁部から胴部である。外面は山形押型文を縦位に施す。649・650は，口縁部である。外面は菱形押型文を施す。651は口縁部から胴部である。口唇部と口縁部外面は，菱形押型文を施す。654・656・658は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。654は口唇部と口縁部外面，胴部外面に菱形押型文を施す。658は胴部で，外面に菱形押型文を施す。

第331図　Ⅺ類土器・Ⅻ類土器



第332図　遺物分布図（XⅢ類土器）

655・657は，壺形土器の胴部と考えられる。外面は同心円押型文を施す。器壁が厚く，胎土に砂粒を多く含む。655・657は，同一個体と考えられる。660・662は，同一個体と考えられる。底面は浅い上げ底となる。山形押型文を口縁部から胴部上半外面は縦位に，胴部下半外面は斜位に施す。

659・661・663～666は，撚糸文を施す一群である。659・661・663は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。外面にやや大ぶりな２条１単位の撚糸文を網目状に施す。665は，外面は変形撚糸文を施す胴部である。664・666は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。外面は撚糸文を網目状に施す。口縁部内面は横位にケズリ調整をおこなう。

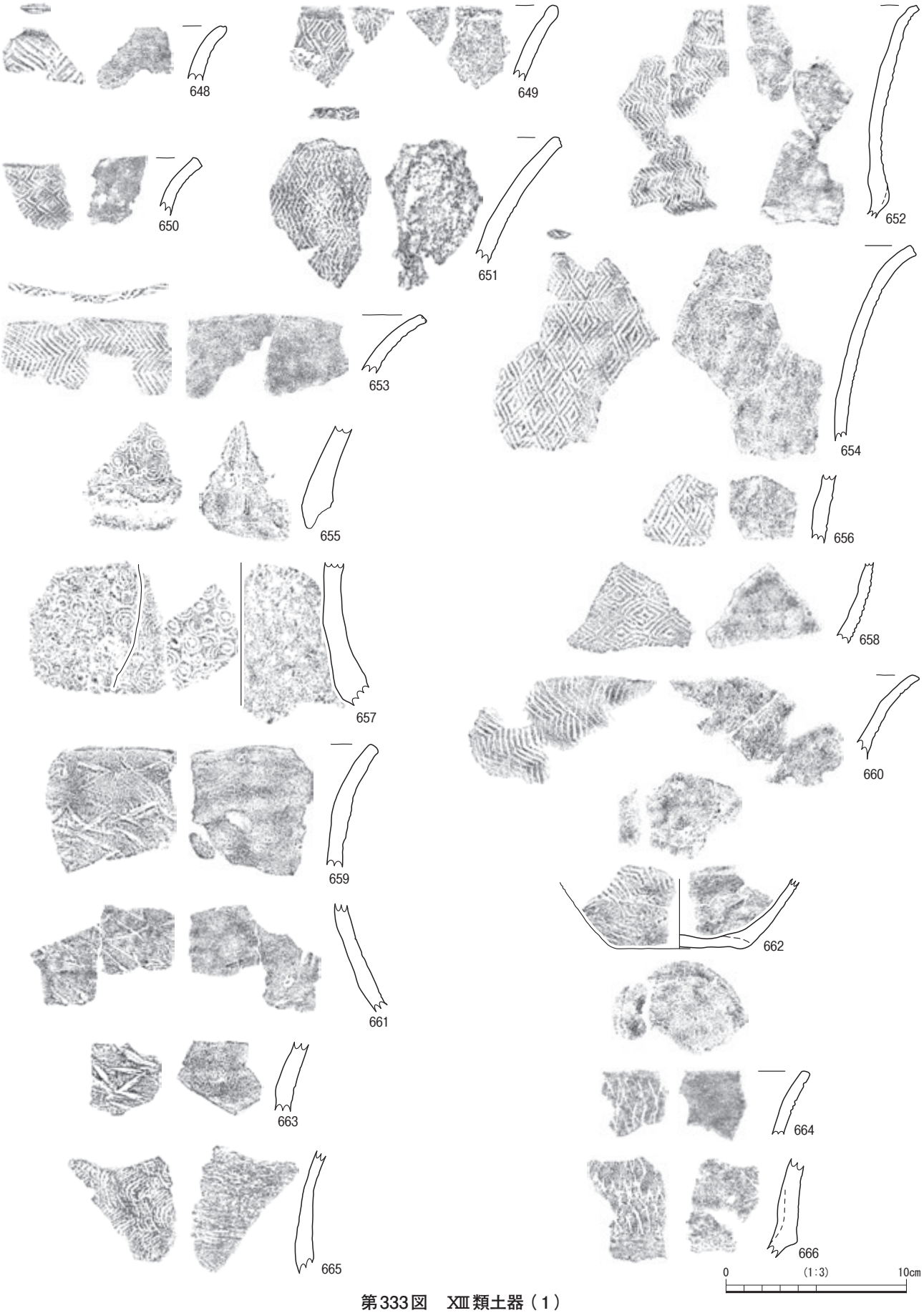
667～670・672・674・675は，沈線文を施す一群である。667・669は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。667は外面は大きめの山形押型文を施した後，口縁部と屈曲部を横位の沈線文で区画し，内部に紡錘状をモチーフとした沈線文で充填している。口縁部内面は，大きめの山形押型文を施す。内面には，指おさえが明瞭に見られる。668・670は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。668の口唇部は，工具による半裁竹管状の刺突文を施し，波状口縁である。口縁部外面は，曲線状のモチーフの沈線文で区画した後，縦位の沈線文を柵状に施す。670は，668と同様に曲線状のモチーフの沈線文を数条施した後，下位に横位の沈線文を施す。672は口縁部で，口唇部に刺突文を施す。外面に横位の沈線文を施した後，その上から斜位の沈線文を施す。674・675は，口縁部及び胴部で同一個体と考えられる。674の口唇部は刺突文を施す。口縁部外面に横位・斜位の深い沈線文を施す。675は，屈曲部付近に突帯を貼り付け，突帯上に原体押圧と考えられる刺突文を施す。

671と673，676と677は，それぞれ同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。外面に菱形押型文を施した後，横位の数条の沈線で区画し，区画内を２条１単位の波状の沈線文で充填する。口縁部内面に横位の沈線文を施す。

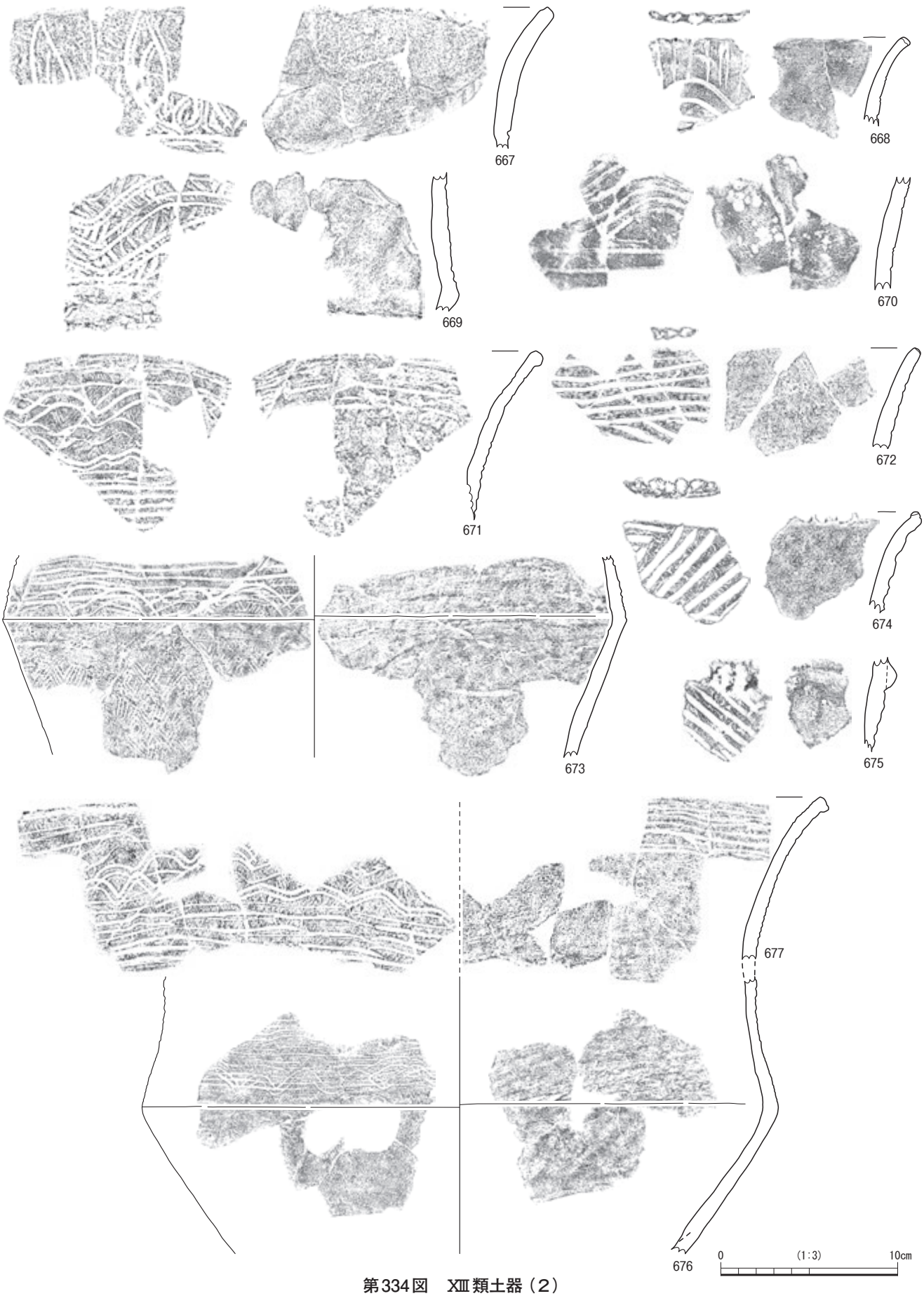
678・679は，外面に条線文を施す口縁部である。678は，斜位や曲線状の条線文を施し，679は，浅い条線文を斜位に施す。口縁部の形態的特徴や内面調整が他のXⅢ類土器と近似することから本類とした。

680は口縁部である。内外面ともナデをおこなうが無文である。

681は胴部である。外面上位に撚糸文を網目状に，下位に連珠押型文を施す。682は，屈曲する胴部である。外面に連珠押型文を施す。下部は無文である。683～688は，胴部である。外面に山形押型文を縦位に施す。683は外面に山形押型文を縦位に施すが，屈曲部付近はナデをおこない無文となる。684は，内面に指おさえが



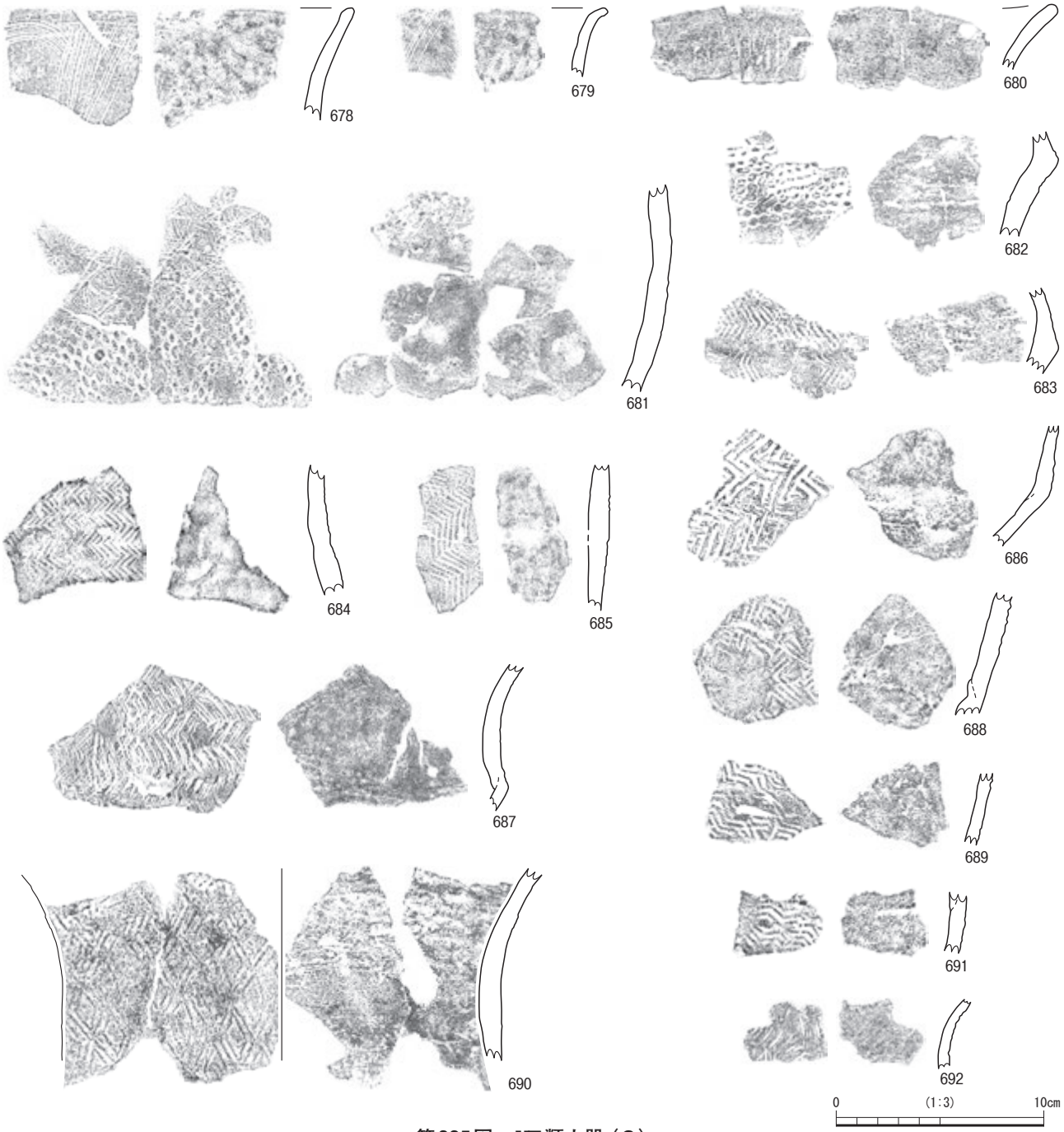
第333図　XIII類土器（1）



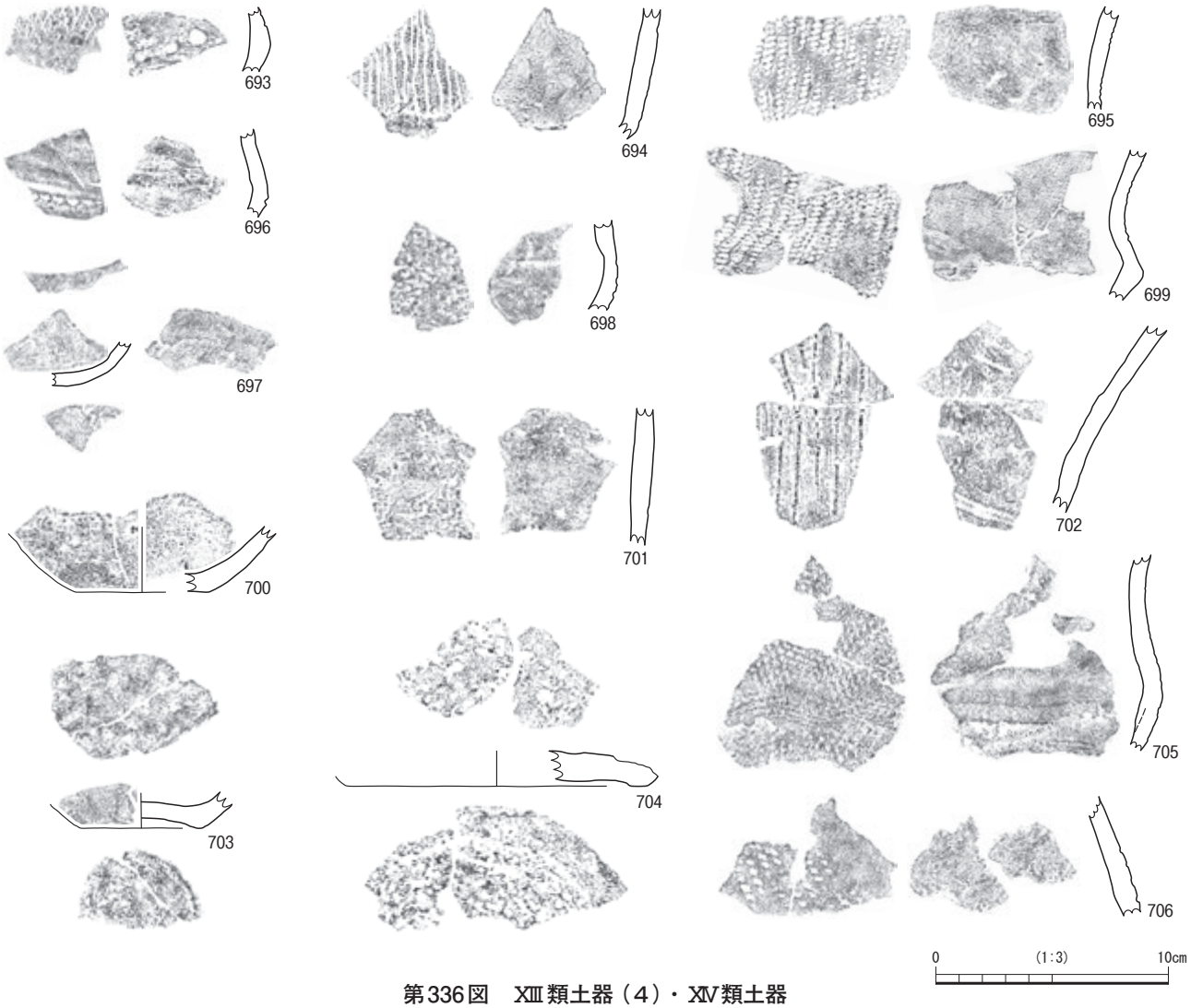
第334図　XIII類土器（2）

明瞭に見られる。686は，屈曲部付近と考えられる胴部であるが，683と異なり屈曲部の上でも連続して山形押型文を縦位に施す。687は，内面に屈曲上部を接合する際の，内傾接合の痕跡が明瞭に確認できる。689 ～ 691は胴部である。689は外面に山形押型文を斜位に施す。690は外面に菱形押型文を施す。691は外面に山形押型文を横位に施す。内面に屈曲上部の接合をする際の内傾接合の痕跡が明瞭に見られる。692 ～ 694は，胴部である。外面に撚糸文を施す。693は，屈曲上部付近に撚糸文を網目状に施す。694は，内面に指おさえが明瞭に見られる。695・699は，同一個体と考えられる胴部である。外面は屈曲部上部にＲＬの単節縄文を縦位に施す。696は外面に刺突文を施す。702は外面に微隆線によるミミズ腫れ文を縦位に施し，微隆線の両面を幅狭のヘラ状工具でていねいにナデをおこなう。698・701・705は胴部である。外面に枝回転による施文をもつ。698・701は，同一個体と考えられる。705は内面に指おさえをおこなう。

697・700・703・704は，底部で内外面とも無文である。703・704は底面が上げ底になる。



第335図　XIII類土器（3）



第336図　XIII類土器（4）・XIV類土器

XIV類土器（第336図706）

XI類とは異なる器形で，器面に縄文を一部に施す一群である。

706は胴部である。外面は斜位の短い縄文を施す。内面はナデをおこなう。

XV類土器（第338図707～716）

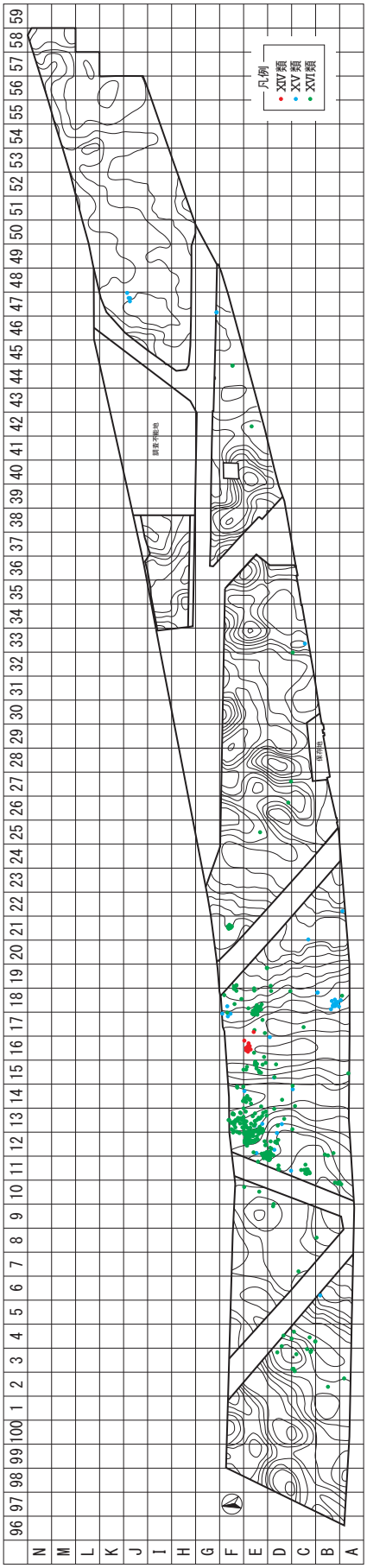
全て深鉢の口縁から底部で，全体の器形を窺える資料はない。口縁部は大きく外反し肥厚する。胴部は丸みを帯びる。口唇部にはキザミ，微隆帯＋キザミや沈線文と刺突文を文様にもつ一群である。

707～709は口縁部である。707は，口唇部外面に断面三角状の突帯が巡る。突帯の上下端にはキザミ，外面には３～４条の横位の沈線文，一部に縦位沈線文を施す。708は口縁部上部～中央部まで広く肥厚する。口縁部の上端に１列，下部に２列の連点文を横位に施す。この連点文の間に数条１組の鋸歯状沈線文および連点文を施す。胎土に金雲母を多く含む。709は口唇部内面の内傾する範囲にキザミを，口縁部外面上部には縦位の短い沈線文を施す。下部にはキザミを施す微隆帯をつくり出し，これを挟むように数条の横位の沈線文を施す。710は，口縁部近くで横位の沈線文を等間隔に数条施し，この間にキザミを施し微隆帯とする。壺の頸部の可能性もある。

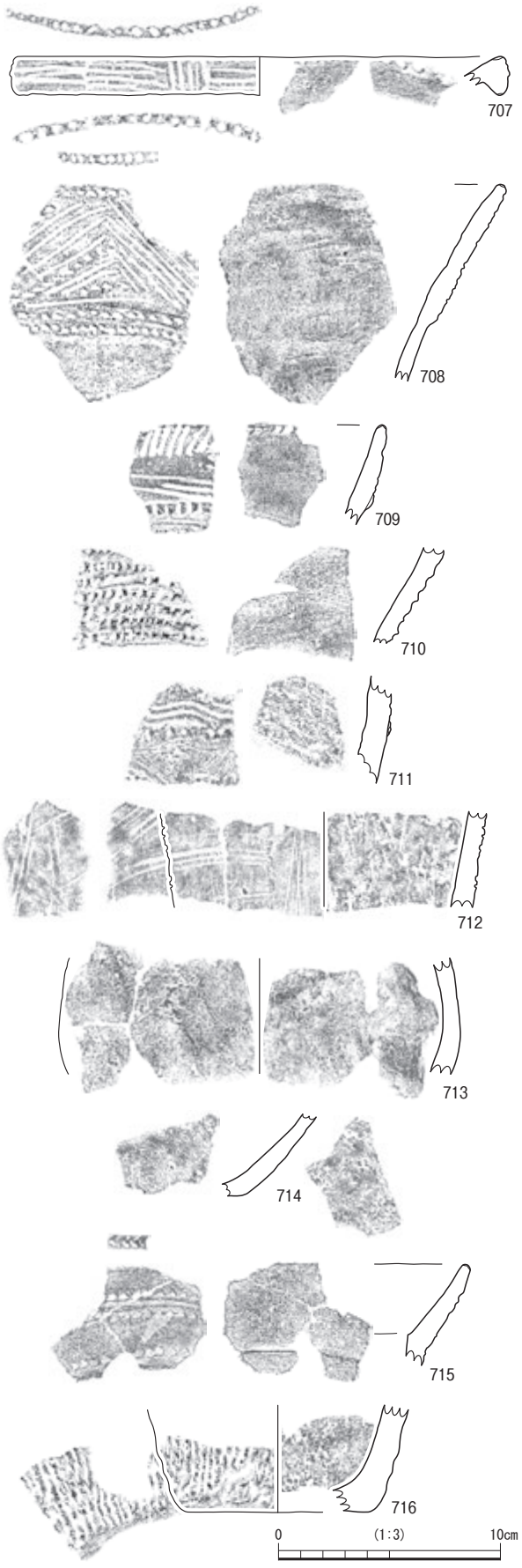
711～714は胴部である。711は外面上位にゆるやかな波状の沈線文を３条施し，下位にはキザミを施す微隆帯をつくり出す。712は，斜位や縦位の条線が見られるが，文様か調整痕か判断し難い。713はやや膨らみ，外面は無文である。714は，やや膨らみをもつ底部に近い胴部で，外面は無文である。

715・716は，XVI類の可能性もあるため，本類の最後に報告する。715は口縁部で，内面下位に稜をもつ。口唇部にキザミを施し，口縁部外面に連点文と沈線文を横位に施す。内外面に顔料付着と考えられる赤彩が認められる。

716は胴部から底部で，平底である。胴部外面全体に撚糸文を縦位に施す。胎土に白色鉱物を多く含む。



第337図　遺物分布図（XIV・XV・XVI類土器）



第338図　XV類土器

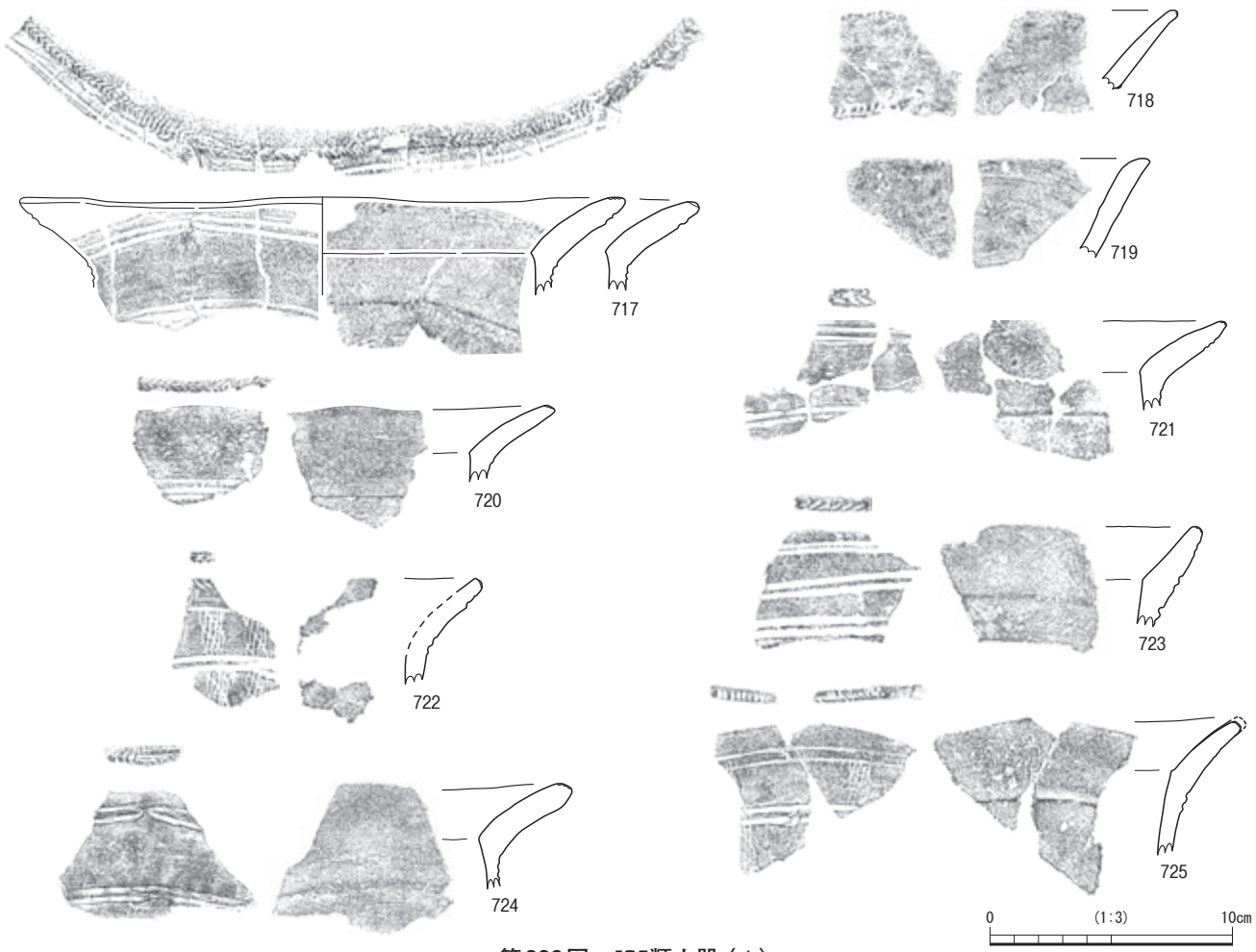
XVI類土器（第339図717～第344図763）

全て口縁部から底部までの破片資料で，全体の器形を窺える資料はない。口縁部は大きく外反し，頸部から胴部は屈曲する。沈線文や網目撚糸文，刺突文，連点文を組み合わせて文様を構成する一群である。

717～734は，沈線文と撚糸文の組み合わせで文様を構成する一群である。沈線文と網目撚糸文が切り合う，もしくは沈線文の区画内に撚糸文を充填するもので，縦位の網目撚糸文を施した後，横位の沈線文を施すものが多く見られる。

718・719は口縁部で，外反する器形である。718は薄手に成形した口縁部外面と，口縁部外面下位の横位の隆線上にキザミを施す。719は波状口縁で，内面はていねいなナデをおこなう。口縁部外面に文様をもたない。

717～723・725の口縁部は大きく外反し，胴部との境に強い屈曲をもつ。口唇部にキザミを施し，口唇部と平行するように２～３条１組の沈線文を，口縁部外面上部や屈曲部外面に施す。717・720～723の口縁部は平坦で，724・725の口縁部は波状である。717の口唇部には羽状のキザミと，ヘラ状工具による直線的なキザミを施すが，わずかに突出する頂部２ヶ所のみ短沈線文を横位に施す。口縁部外面の沈線文は，頂部の下で線を湾曲させ区切りとする。720は内外面にていねいなナデをおこなう。口唇部には羽状のキザミを施し，屈曲部外面に３条１組の短沈線文を施す。721は口唇部に羽状のキザミを施す。722は口唇部に羽状のキザミを施す。口縁部外面から胴部外面にかけ網目撚糸文を縦位に施した後，口縁部外面上部と屈曲部外面に２条１組の沈線文を横位に施す。723は屈曲部がやや肥厚し，口唇部には斜位のキザミを施し，口縁部外面は沈線文を等間隔に施す。724は口唇部の頂部に短沈線文を横位に施す。口縁部外面上部と屈曲部外面は，２条１組で沈縁文を施し，上部の短沈線文は頂部の下で線を湾曲させ区切りとする。胴部は網目撚糸文を縦位に施す。725は口唇部にヘラ状工具によるキザミを施すが，波頂部には短沈線文を施す。口縁部外面から胴部外面に網目撚糸文を間隔をあけ縦位に施した後，口縁部外面上部と屈曲部外面に沈線文を横位に施す。両沈線文とも頂部の下で端部を弧状に施文する。



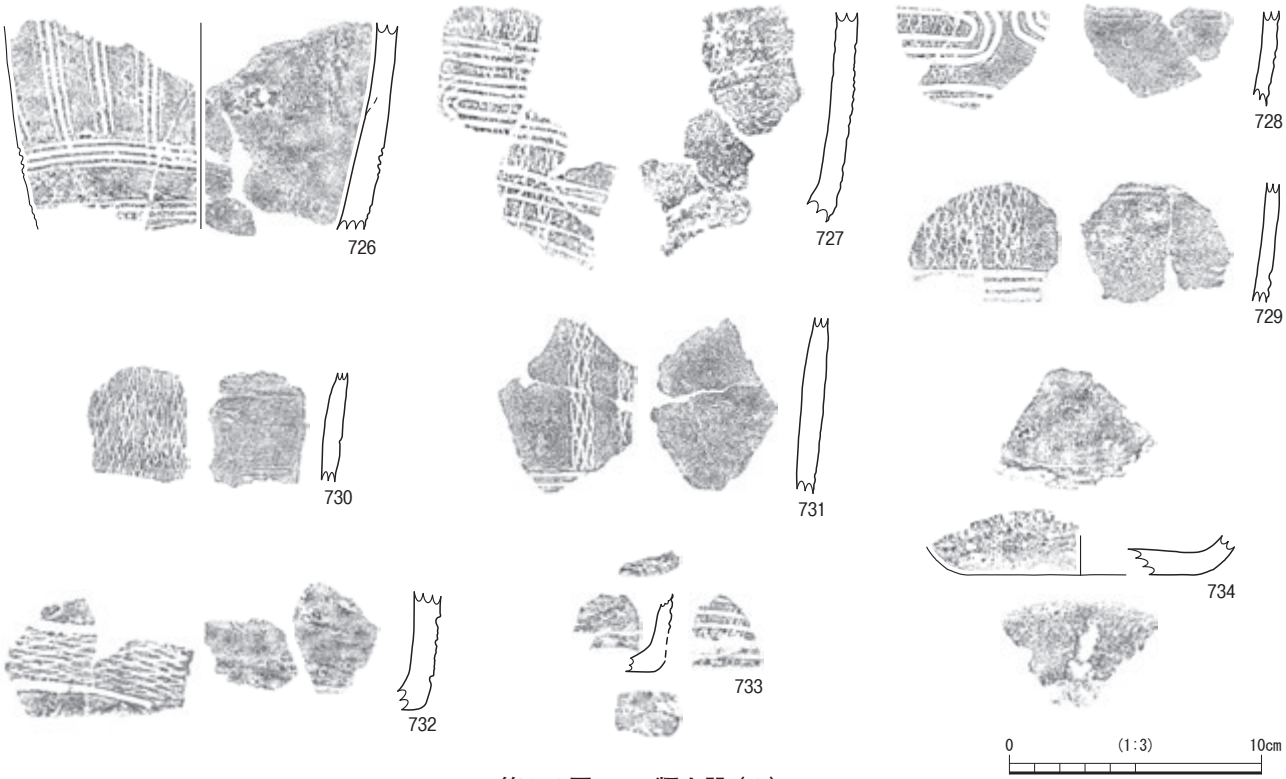
第339図　XVI類土器（１）

726 ～ 731は胴部で，わずかに上方に開き直線的もしくは内湾する。726は外面に４条１組の沈線文を横位に施した後，３条１組の沈線文を等間隔で縦位に施す。胎土に金雲母を多く含む。727は外面に網目撚糸文を等間隔で縦位に施した後，３条１組の沈線文を横位に施す。上から２組目と３組目の沈線文の間で，隣接する上下の２本の短沈線文端部を湾曲させ結合する。728の外面はていねいなナデをおこなう。外面に網目撚糸文を縦位に施した後，端部を湾曲させ折り返すように３条１組の沈線文を横位に施す。729・731は，網目撚糸文を縦位に施した後，729は３条，731は２条の沈線文を横位に施す。730の内外面はていねいなナデをおこなう。外面に網目撚糸文を間隔をあけ縦位に施す。

732 ～ 734は胴部から底部である。732の内外面ではていねいなナデをおこなう。胴部外面に２条の沈線文を横位に施し，その区画内で撚糸文を横位に施し充填する。733は胴部がわずかにすぼまりながら平坦な底部へ至る。胴部外面に網目撚糸文を縦位に施した後，横位に沈線文を施す。727と同一個体と考えられる。734は胴部から丸みを帯びつつ平坦な底部へ至る。内面には成形時の接合痕をおこなう。胴部外面は網目撚糸文を底部外面端部まで縦位に施す。

735 ～ 763は，直線や曲線の沈線文と貝殻条痕文を横位や斜位に施し，それらに平行するように貝殻刺突文を連続させ文様を構成する一群である。

735 ～ 743・745は口縁部である。いずれも外反する。735 ～ 740は口唇部に貝殻腹縁による押引き状の刺突文を施す。口縁部外面を横位貝殻条痕文で区画した後，区画内をゆるやかな曲線で充填する。736は口縁部外面に貝殻条痕文を横位に直線および曲線で施す。737は口縁部外面に幅狭の横位貝殻条痕文を等間隔に施した後，縦方向に横位貝殻刺突文を施す。胎土に混入物が多く，白色鉱物，赤色鉱物が目立つ。738は外反がやや緩やかで，口唇部を丸く整形する。口縁部外面は上部に２条の横位の沈線文を施した後，縦向きに横位貝殻刺突文を連続して施す。口縁部外面は幅狭の横位貝殻刺突文を連続して施し区画とする。その区画内に斜格子状の沈線文を施す。下端部には横位の沈線文を施す。735・736・738は，胎土に金雲母を多く含む。740は口唇部を内傾気味の平坦部として整形する。口縁部外面は貝殻腹縁による幅狭の横位貝殻刺突文を施し区画する。その区画内に同様の貝殻刺突文を波状に施す。741・743の口唇部は，内外端に稜をもち，口唇部に細かいキザミを施す。口縁部外面には細い微隆線を横位に２本つくり出した後，微隆線上で棒状工具によるキザミを施す。743の口唇部外面はやや磨滅，欠損するが，細かいキザミが確認できる。口縁部外面は２条１組の横位貝殻条痕文を施し，一部は口唇部外面のキザミ上に施文が重なる。742は口唇部に貝殻刺突文を施す。口縁部外面は貝殻腹縁による縦向きの横位貝殻刺突文を連続して施した後，斜格子状の沈線文

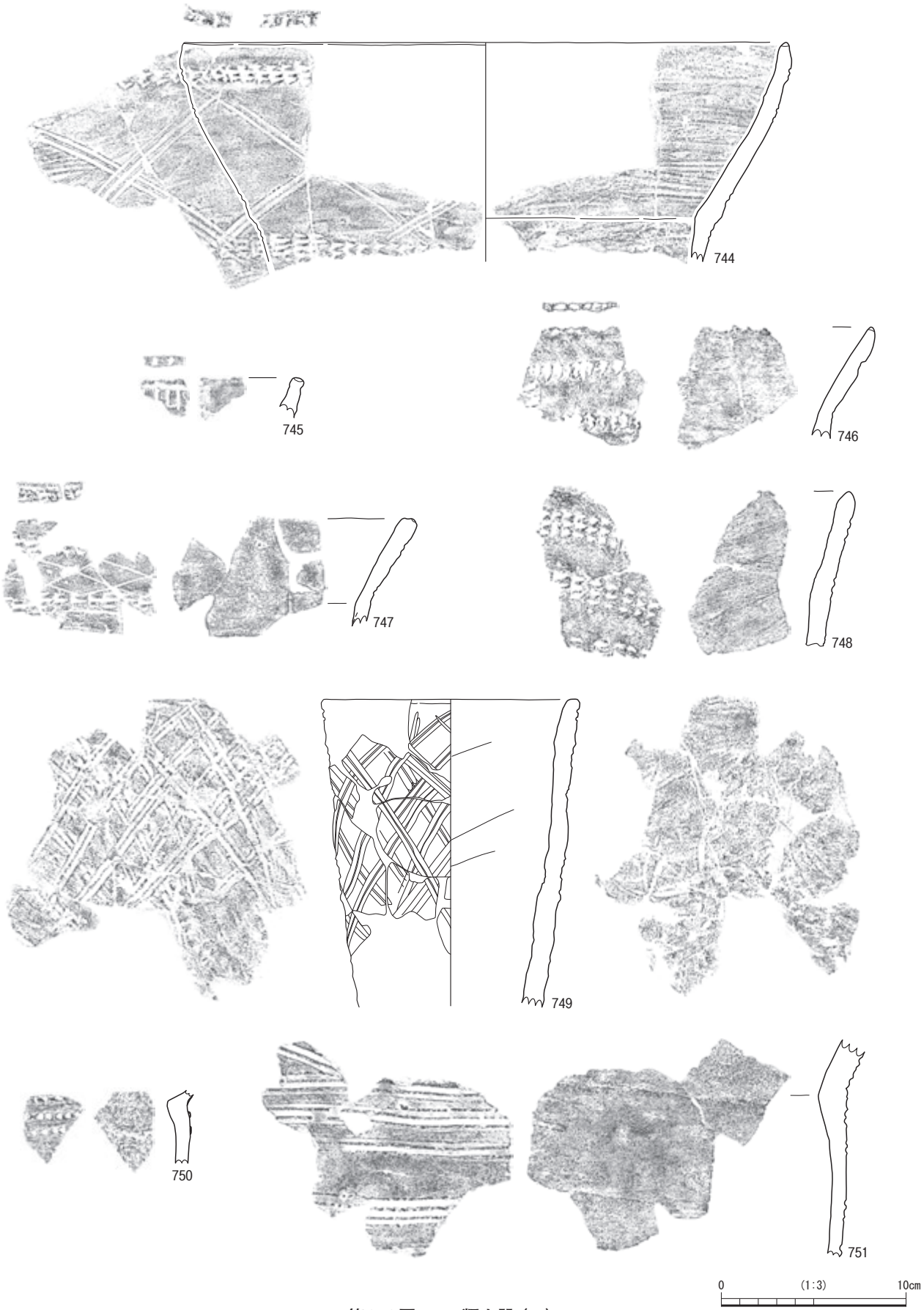


第340図　XVI類土器（２）

を施す。745の内面はていねいなナデをおこなう。口唇部は工具による刺突文を施す。口縁部外面は２条の横位の短沈線文を施し，その間隙に縦向きの沈線文を連続して施す。短沈線文の施文具は不明である。

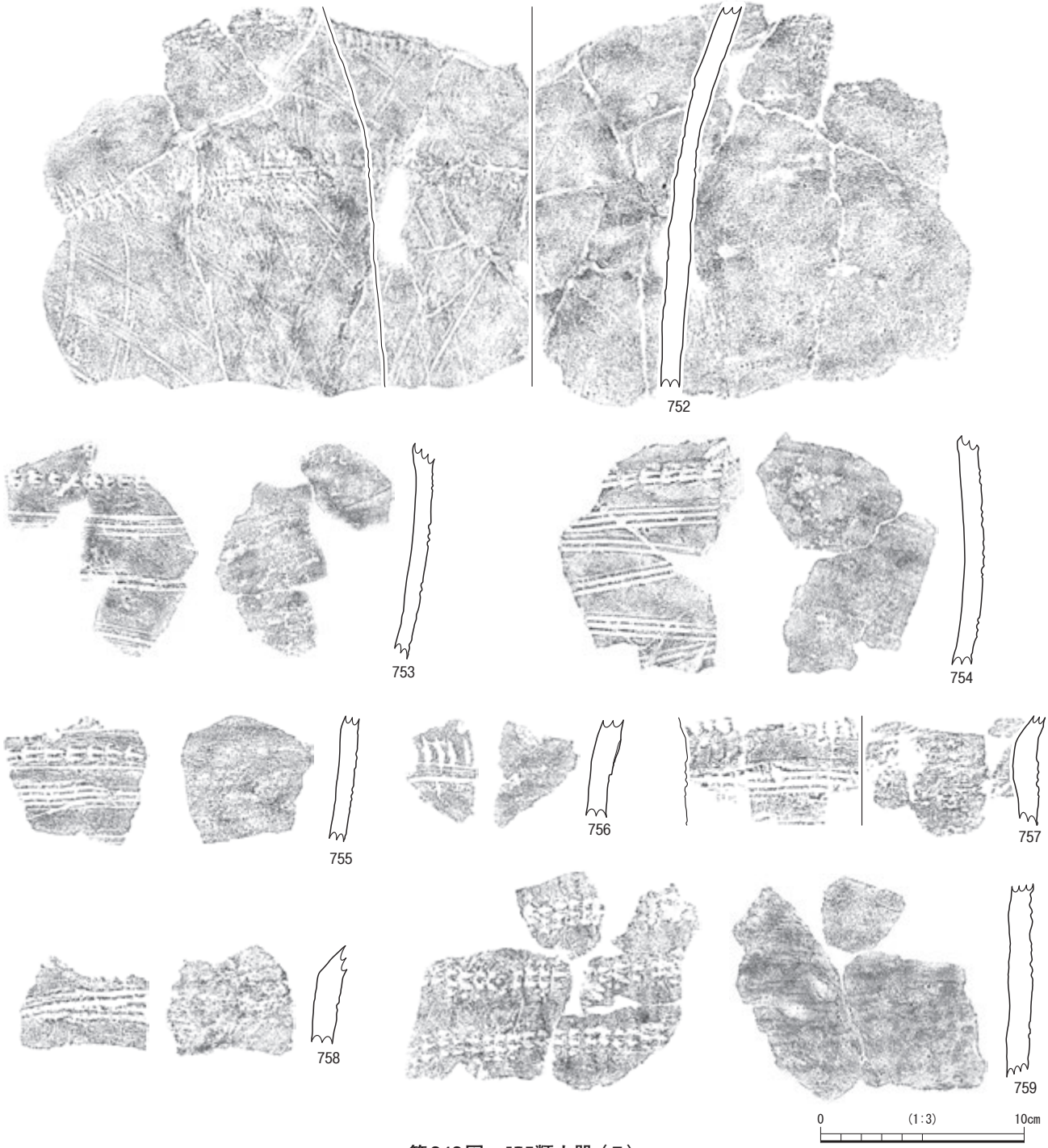
744・746 ～ 750は口縁部から胴部である。744・746は口唇部に貝殻腹縁による三日月形の刺突文を施す。744は口径32.4cmと大型で，口唇部を舌状に整形し，口縁部はやや膨らむ。口縁部外面に縦向きの横位貝殻刺突文を連続して施し区画した後，区画内に２条１組の沈線文を斜格子状に施す。746・748は口唇部を薄手に整形し，内面はていねいなナデをおこなう。746は口縁部外面上部と屈曲部外面に，貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して施す。748は口縁部外面から胴部外面にかけ縦向きの貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して等間隔で施す。747は施文パターンは739と同様で，口縁部外面と胴部外面の境で横位に沈線文を施す。胎土に金雲母を多く含むことからも，739と同一個体と考えられる。749は丸みをもつ口唇部から胴部下位へややすぼまる円筒形である。器面全体にナデをおこなうが，胴部は内外面とも凹凸が残り粗い。口縁部外面から胴部半ばに，やや太めの棒状工具による沈線文を斜格子状に施す。750は口縁部と胴部の境が強く屈曲する。胴部外面上位に２条の微隆線をつくり出し，その上に貝殻刺突文を施す。胎土や焼成から，741と同一個体と考えられる。751は口縁部近くから胴部で，幅狭の横位貝殻条痕文を間隔をあけ施す。胎土に金雲母を多く含む。735・736と同一個体と考えられる。752は口縁部下位と胴部の境が緩やかに屈曲する。内外面にナデをおこなうが，凹凸が残り粗い。外面の磨耗が著しいが，口縁部外面上位に縦向きの横位貝殻刺突文を施し，下位に押引き状の横位貝殻刺突文を施す。胴部外面は２条１組の工具による深い沈線文を格子状に施す。

第341図　XVI類土器（３）



第342図　XVI類土器（4）

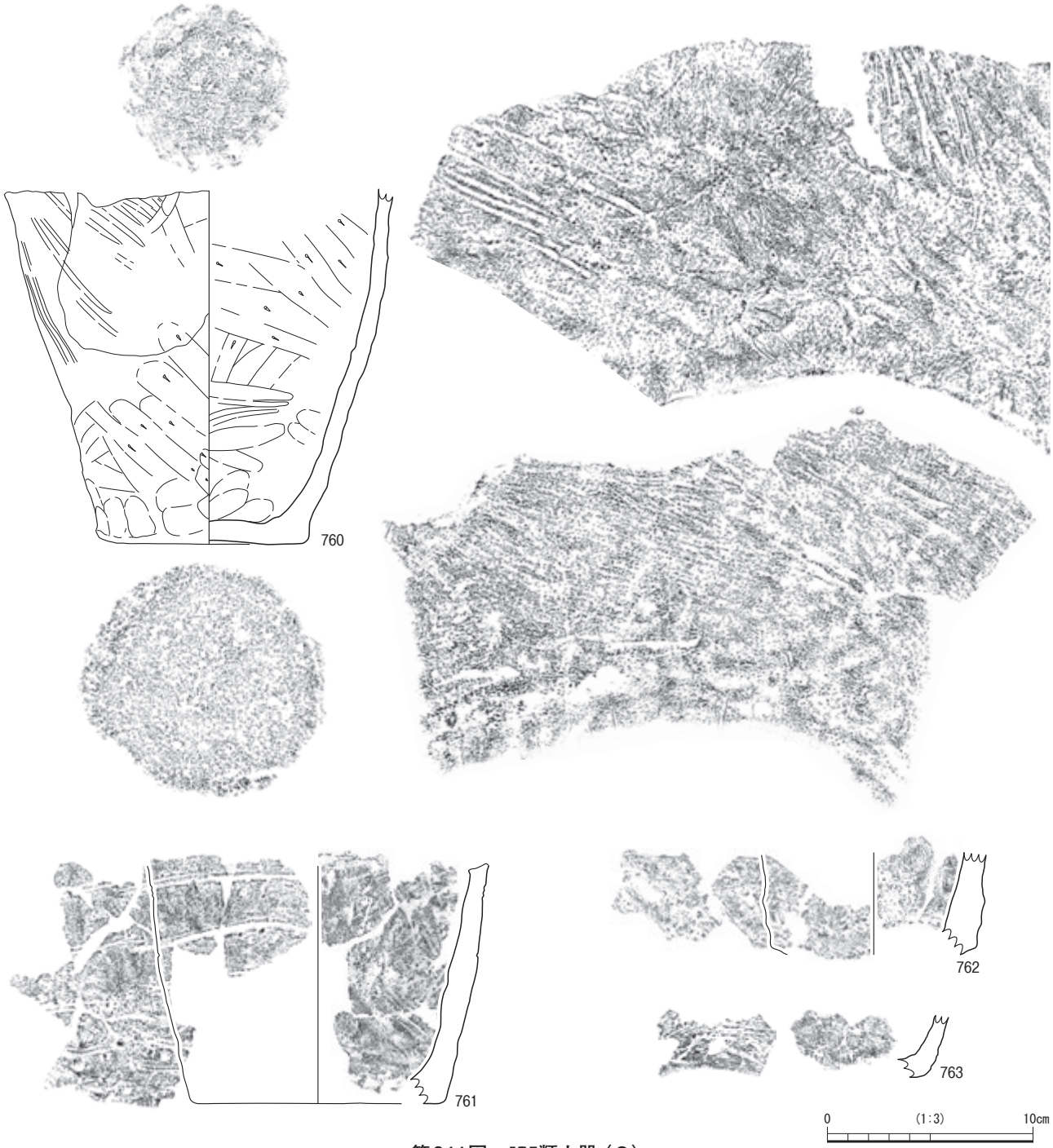
753 ～ 759・762は胴部である。753と754はやや丸く膨む。753は胴部上半が口縁部に向かい肥厚し，内面はていねいなナデをおこなう。上部は縦向きの貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して施し，その下位から下部にかけ，横位貝殻条痕文をやや間隔をあけて施す。胎土に金雲母を多く含む。754は外面上部で縦向きの貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して施し，その下位から下部にかけ横位や斜位に貝殻条痕文を施す。755は上部で２条の沈線文を間隔をあけて横位に施し，この隙間に縦向きで押引き状の横位貝殻刺突文を連続して施す。下部では横位貝殻条痕文を間隔をあけて施す。胎土に金雲母を多く含む。755は740と同一個体と考えられる。756は上部で工具による縦向きの横位刺突文を施した後，２条の沈線文を横位に施す。胎土に白色鉱物を多く含む。756は745と同一個体と考えられる。757は，口縁部との境の屈曲部分と考えられる。上部に貝殻腹縁による縦向きの貝殻刺突文を連続させて横位に施し，中部～下部ではやや間をあけて貝殻条痕文を横位に施す。758は口縁



第343図　XVI類土器（５）

部近くである。横位貝殻条痕文を施す。胎土に金雲母を多く含む。759は縦向きに貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して等間隔で施す。胎土に金雲母を多く含む。759は748と同一個体と考えられる。762は底部近くである。内外面をともにナデをおこなうが，整形時の指おさえが残り粗い。762は749と同一個体と考えられる。

760・761・763は胴部から底部である。内外面をナデや指おさえで調整するが，器面に凹凸が残り粗い。760は残存部分が全周しており，やや膨らみをもちつつすぼまる胴部から平坦な底部へ至る。上半分に斜位の条線が見られるが，施文か調整痕かは判断し難い。胎土にはガラス質鉱物，白色鉱物を多く含む。761は膨らみをもつ胴部である。内面には工具による調整痕をおこなう。胴部は２条１組の沈線文を横位に施す。胎土に白色鉱物を多く含む。763は底部円盤周縁上に，胴部の粘土帯を乗せ積み上げた接合痕が認められる。胴部外面に短い横位貝殻条痕文を施す。



第344図　XVI類土器（６）

XVII類土器（第345図764 ～第347図801）

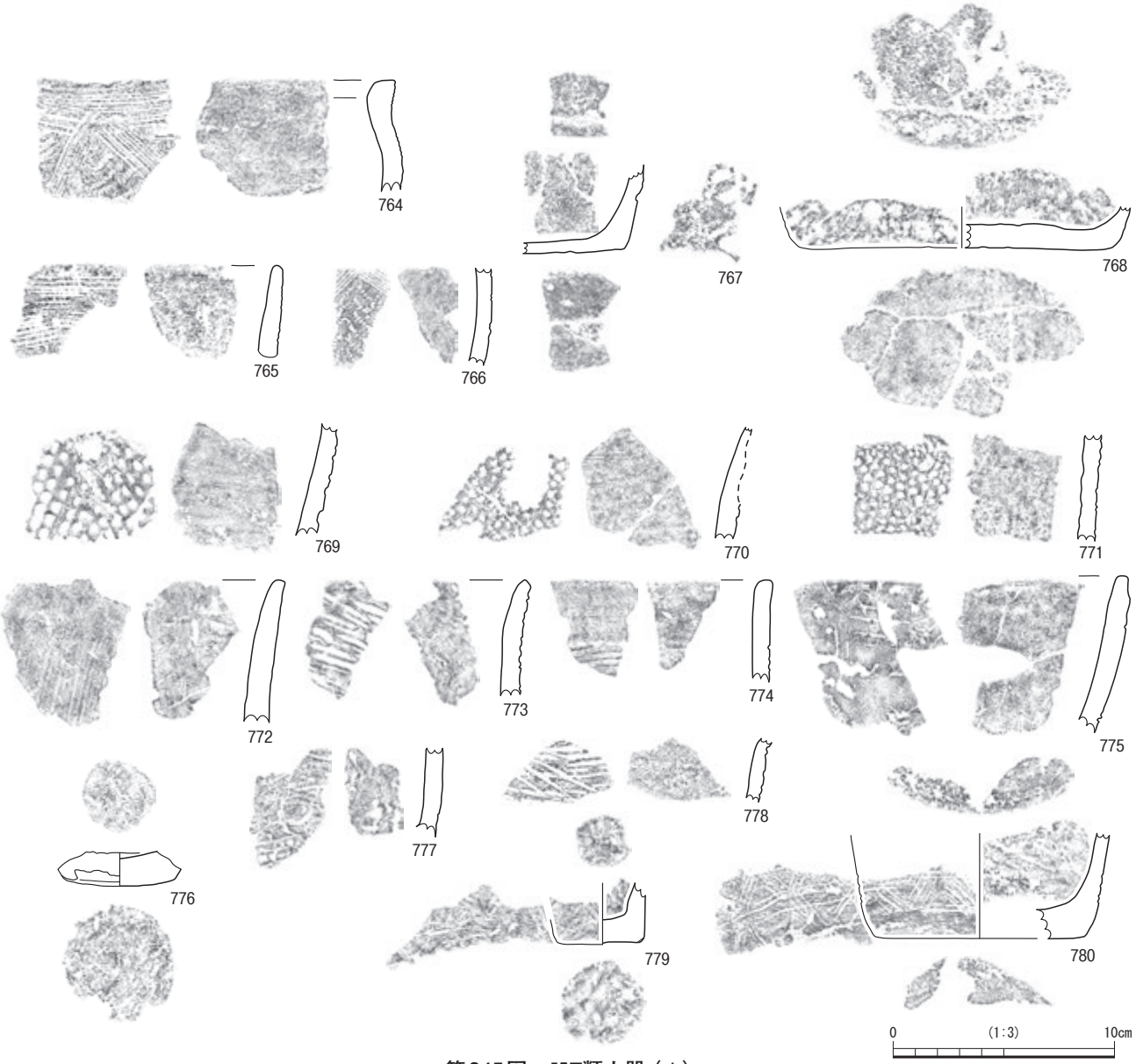
Ⅰ～XVI類の各分類に当てはまらない土器の一群である。

764 ～ 768は，石英粒を多く含み，内面にていねいなナデを施す一群である。764・766は，口縁部外面に横位条痕文，胴部外面に斜位条痕文と刺突文を施す。764は口唇部に平坦面をもつ。765はやや直行気味の口縁部である。外面に横位条痕文を施す。767・768は底部である。768の胴部外面下部に直径９㎜の貫通しない穿孔を外面から施す。

769 ～ 771は，外面に貝殻刺突文を斜位に施す。

772 ～ 780は，外面に条線文・条痕文を施す一群である。772・776は，同一個体と考えられる口縁部及び底部である。772は，口縁部外面にミガキのようなていねいなナデをおこなった後，縦位の条線を施す。776は胴部との接合痕が明瞭に残る。773 ～ 775は，口縁部である。773は外面に斜位・横位の条痕を施す。774は口縁部外面上部が，無文である。この無文下位に横位刺突文を１条施す。刺突文下位に横位条痕文を施す。775は外面に横位に４条，縦位に２条の条痕文を施す。777・778は，胴部である。777は外面に条線と刺突文を施す。778は外面に横位条痕文を施した後，斜位条痕文を重ねて施す。779は，円筒形土器のミニチュア土器の底部である。斜位条痕文を施し，胴部下部には横位条線文を施す。780は底部である。底部外面端部に施文をもたず，その上部に横位・斜位の条痕文を施し，連続する三角形状の文様を構成する。

781は，胴部である。外面に縄文と思われる文様を横位に施す。782・783は，口縁部である。782は，口唇部が肥厚する。口唇部と口縁部外面上部に刺突文を施す。

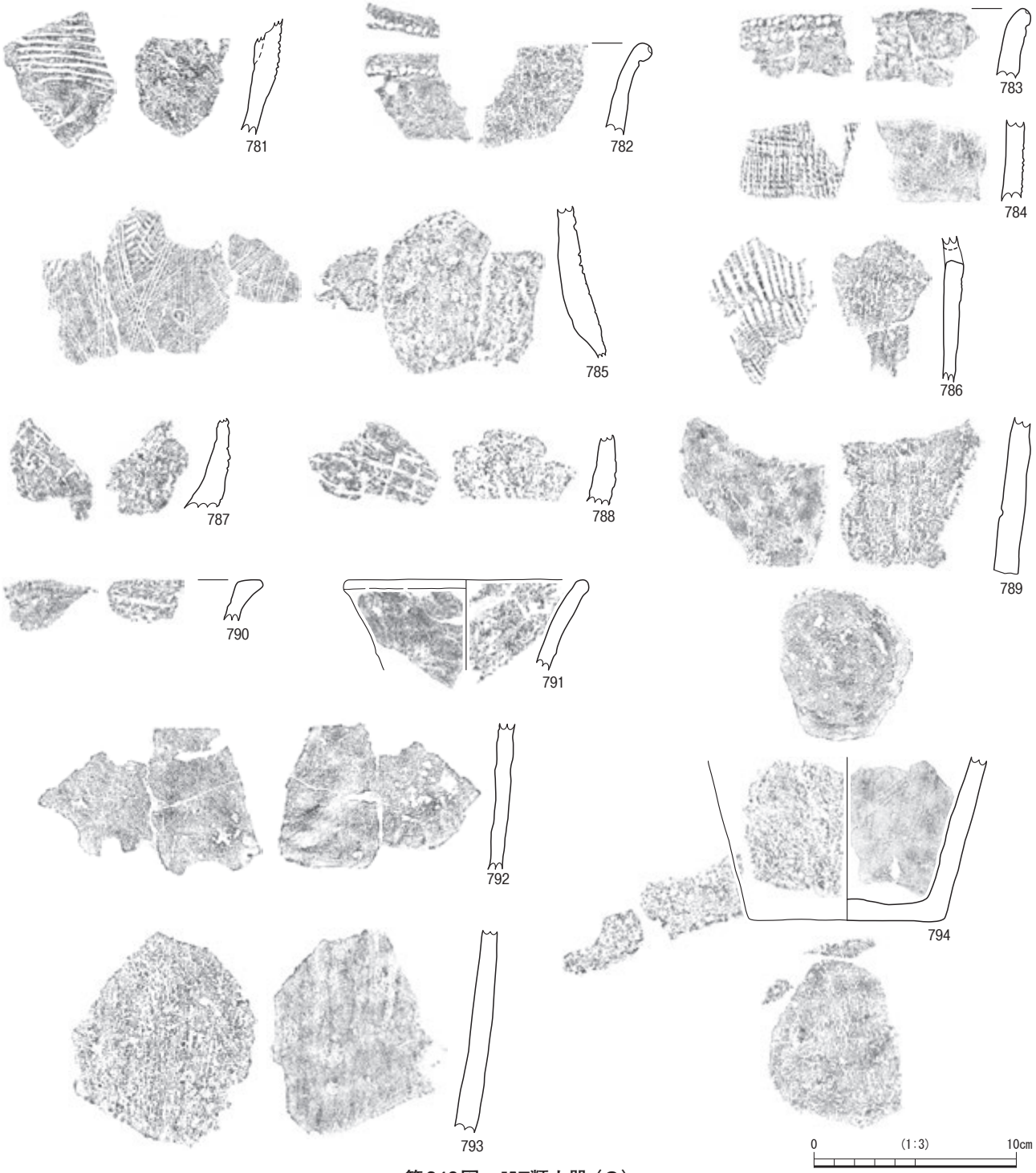


第345図　XVII類土器（１）

784・786は胴部である。外面文様は，巻貝を横方向に回転し施文すると思われる。785は胴部である。外面の一部に山形押型文を横位に施す。その上に櫛状工具による斜位条線文を重ねて施す。787・788は胴部で，同一個体と考えられる。外面は縦位と横位の条痕文を施し，格子状に見える。

789 ～ 794は，内外面ともナデをおこない，外面に文様をもたない一群である。790・791は，口縁部である。790は口縁部が肥厚し，口唇部が平坦である。内面のナデはやや雑である。789は外面に，792は内面に指おさえの痕跡が残る。793・794は，同一個体と考えられる胴部から底部である。底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は粗いナデをおこない工具痕が残る。

795 ～ 797は，同一個体と考えられる口縁部から胴部である。口唇部に刺突文，口縁部から胴部外面に貝殻刺突文・条痕文を不規則に施す。

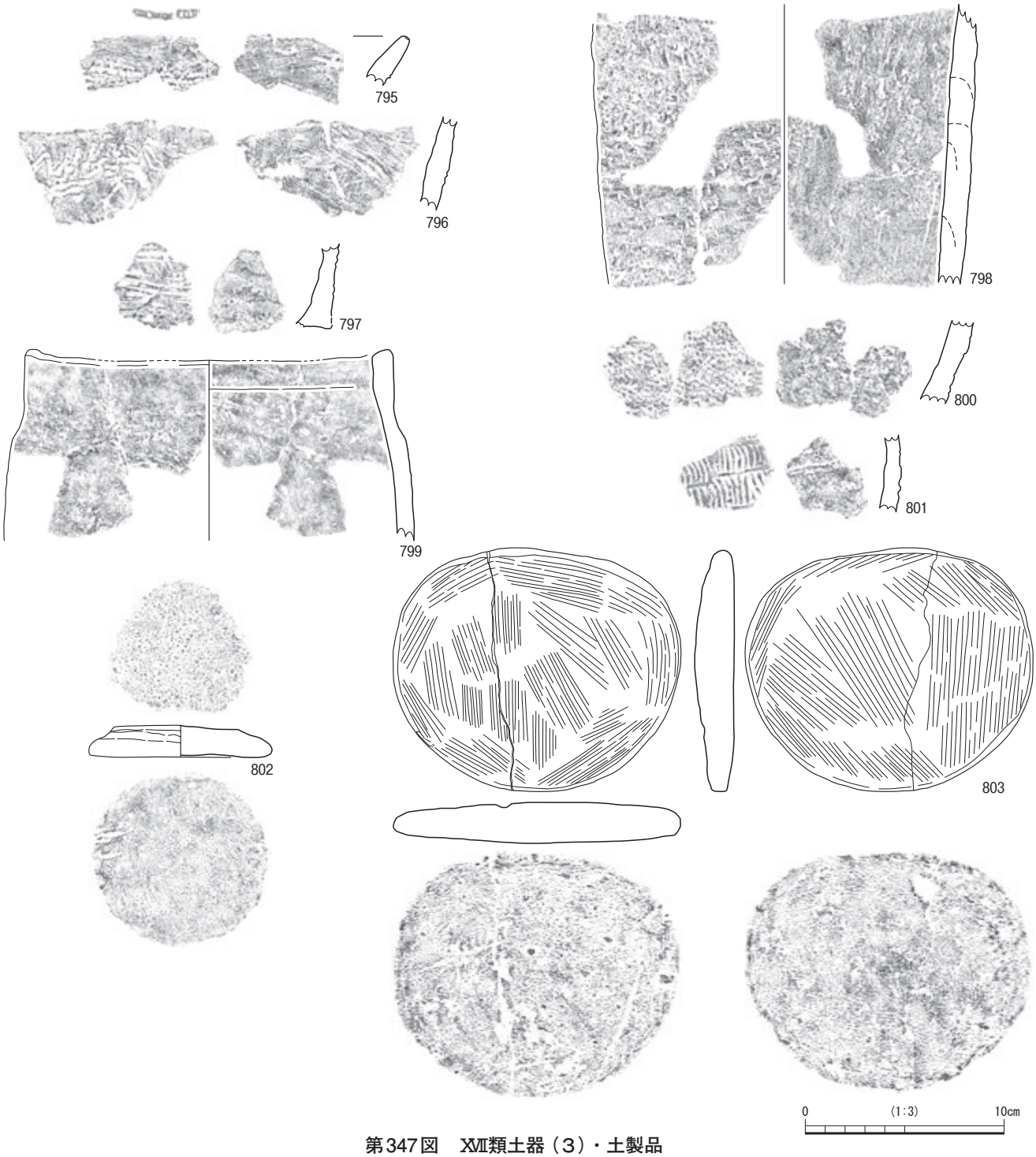


第346図　XⅦ類土器（2）

798は，直線状に立ち上がる胴部である。外面は，粗いナデ調整しているため凹凸がある。外面上部は，不規則な条痕文を施す。799は口縁部から胴部である。胴部上部が内傾し，口縁部でやや垂直に立ちあがる。口唇部は平坦面を有し，内面は稜をもつ。口縁部外面はていねいなナデをおこなった後，枝回転による文様をもつ。800は，胴部である。外面は刺突文を施す。801は，胴部である。外面の施文方法は不明だが，魚の背骨のような文様をもつ。

土製品（第347図802・803）

802・803は，円盤状の土製品である。802は胴部との接合部がみられ，底部片の再利用である。周辺部を打ち欠き，研磨している。803は，表裏に条痕調整があり，裏面はススが付着している。周辺部は，研磨して丸みを帯びている。断面の焼成状況から，底部片の再利用ではなく，目的をもって作られたと考えられる。



第347図　XⅦ類土器（3）・土製品

(2)　石器

石器出土状況（第349・350図）

石器は調査区全体にわたって多くの出土がみられた。器種としては石鏃，石槍，石匙，削器，掻器，異形石器などの狩猟具類と，磨石・敲石類，礫器，打製・磨製石斧，石皿，砥石などの加工具類が出土したが，特に石鏃，磨石・敲石類の出土が多い。

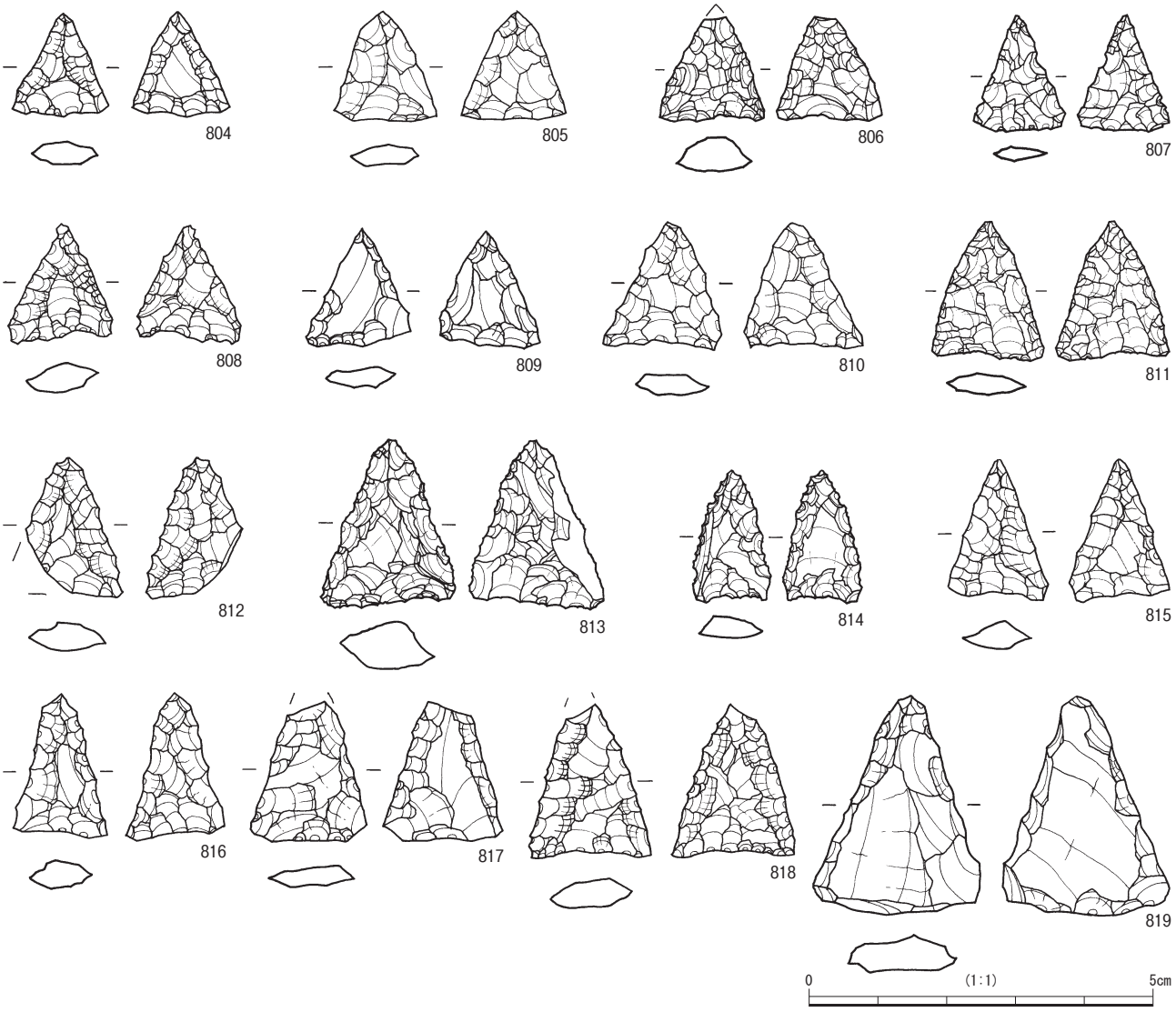
分布範囲としては調査区Ｃ～Ｆを中心に出土し，特に調査区Ｃ・Ｄに集中している。興味深いのは，落とし穴が点在している調査区Ａ・Ｂでは石器の出土がほとんどみられない点であり，狩り場や森など居住域以外の空間であったことをうかがわせる。

石鏃（第348～360図）

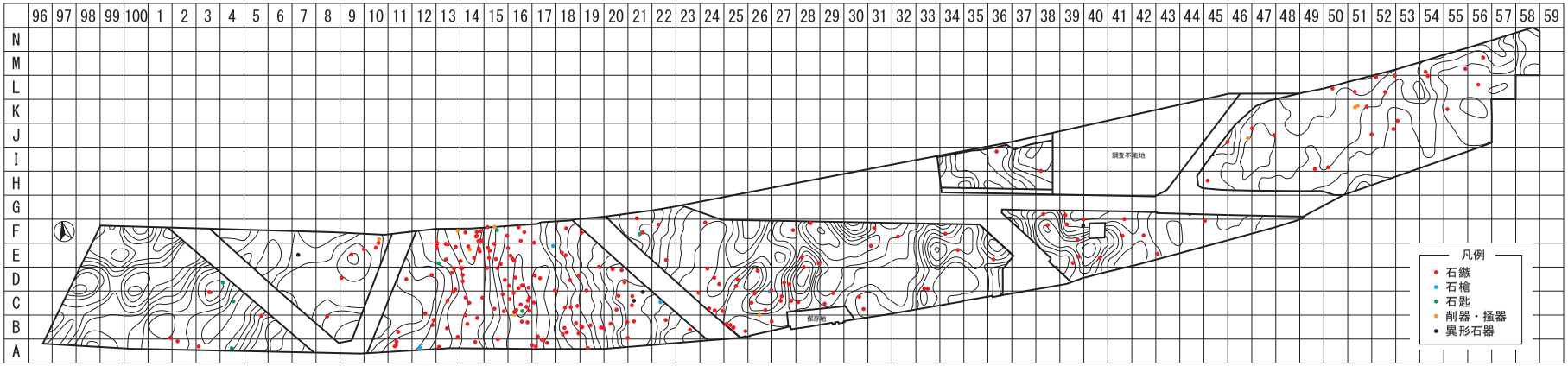
縄文早期の包含層であるＸ～ⅩⅡ層から出土した打製石鏃，うち未製品，破損品を含め230点を図化した。主に形状を観察し，以下のように分類を行った。

石鏃分類

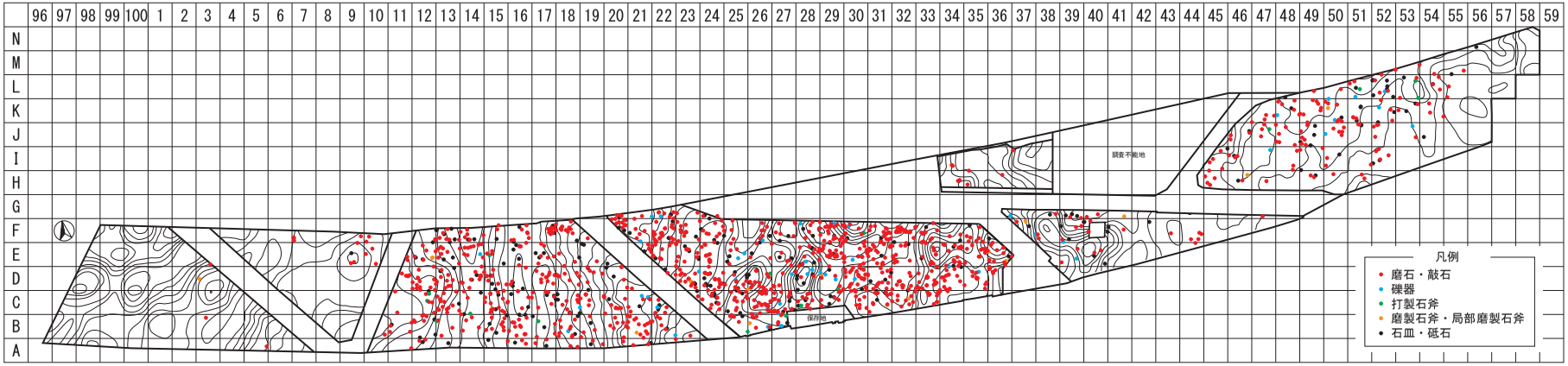
Ⅰ類　基部が平坦で抉りのない平基式無茎鏃
Ⅱ類　正三角形状を呈するもの
　a 正三角形状を呈し基部の抉りが浅いもの
　b 正三角形状を呈し基部の抉りが深いもの
Ⅲ類　二等辺三角形状を呈するもの
　a 二等辺三角形状を呈し基部の抉りが浅いもの
　b 二等辺三角形状を呈し基部の抉りが深いもの
Ⅳ類　先端部が錐状のハート形を呈し，抉りが深いもの
Ⅴ類　打製石鏃のうち欠損のため全体の形状が不明なもの
Ⅵ類　打製石鏃のうち未製品なもの
Ⅶ類　磨製石鏃
　a 磨製石鏃のうち全面磨製のもの
　b 磨製石鏃のうち局部磨製で側縁部に剥離を残すもの



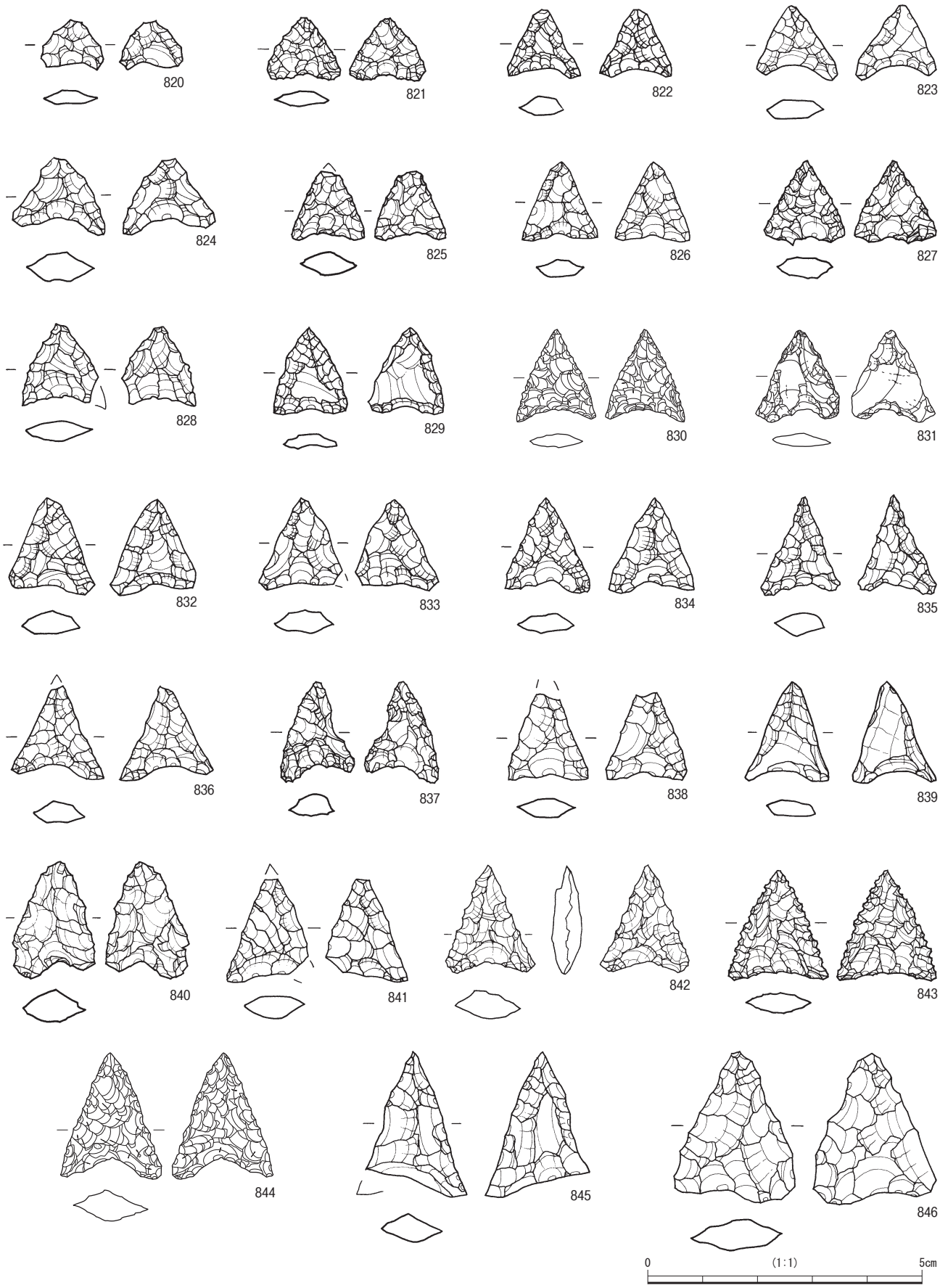
第348図　石鏃Ⅰ類



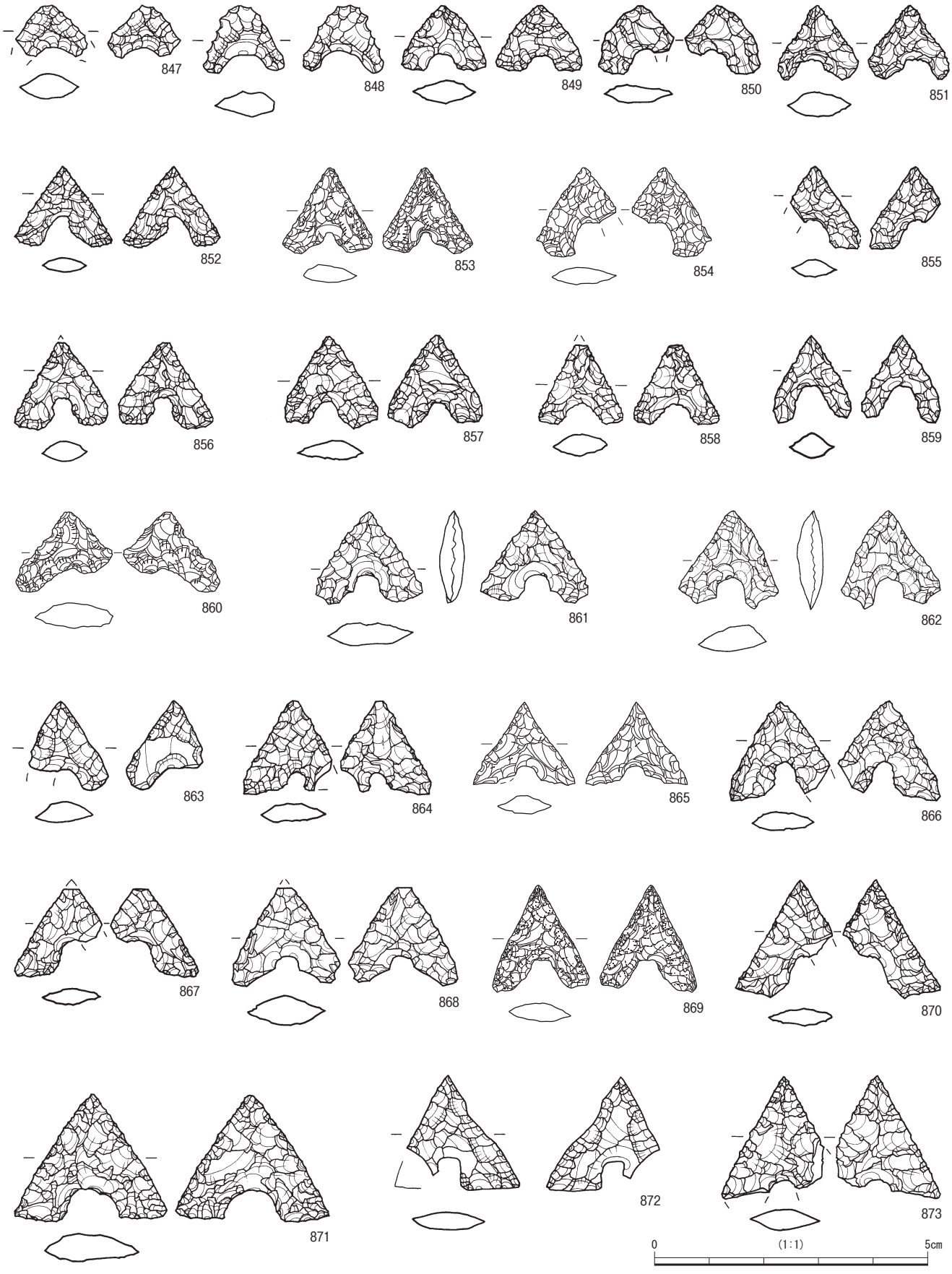
第349図　石器分布図（狩猟具類）



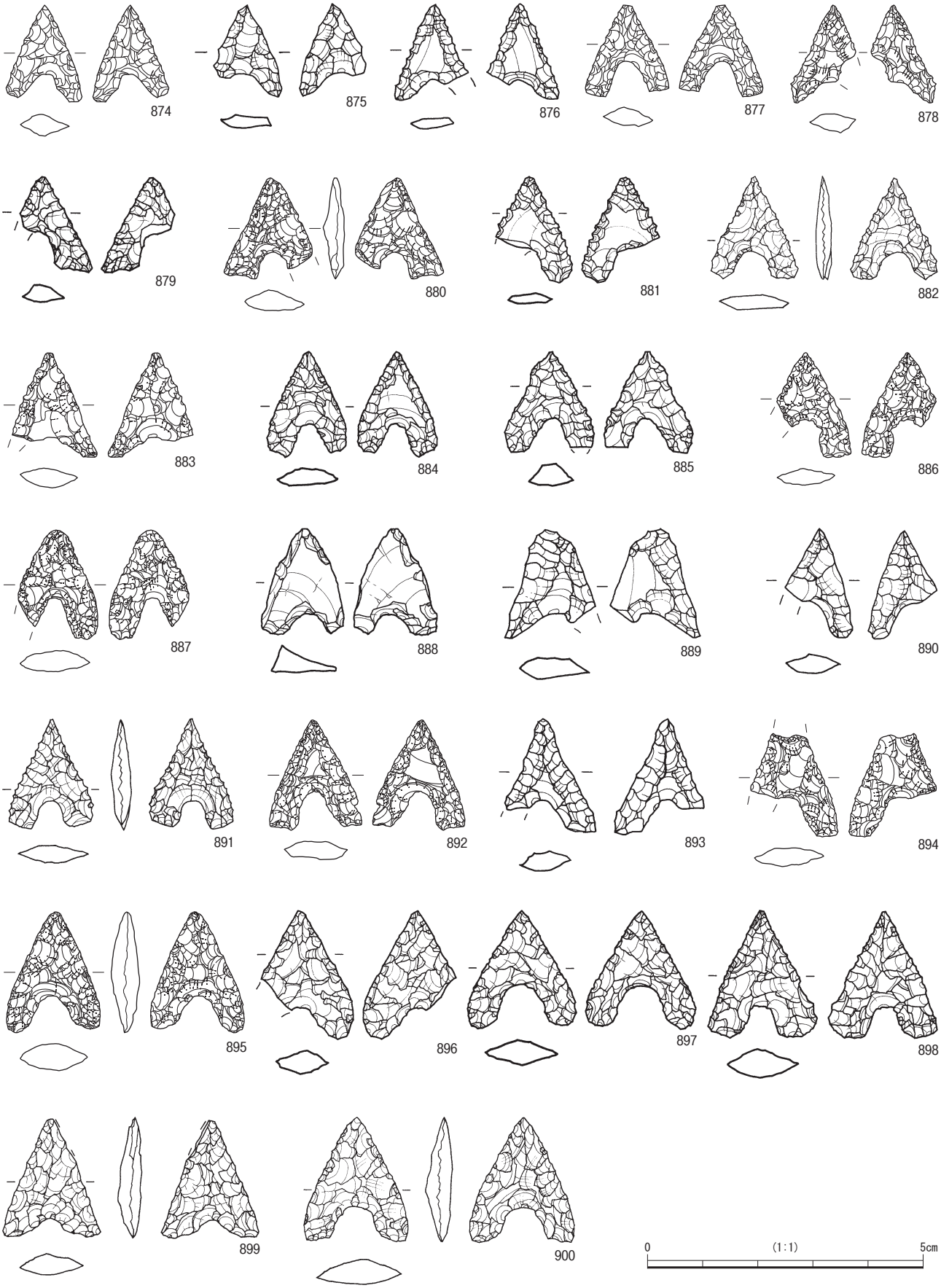
第350図　石器分布図（加工具類）


820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
0
(1:1)
5cm

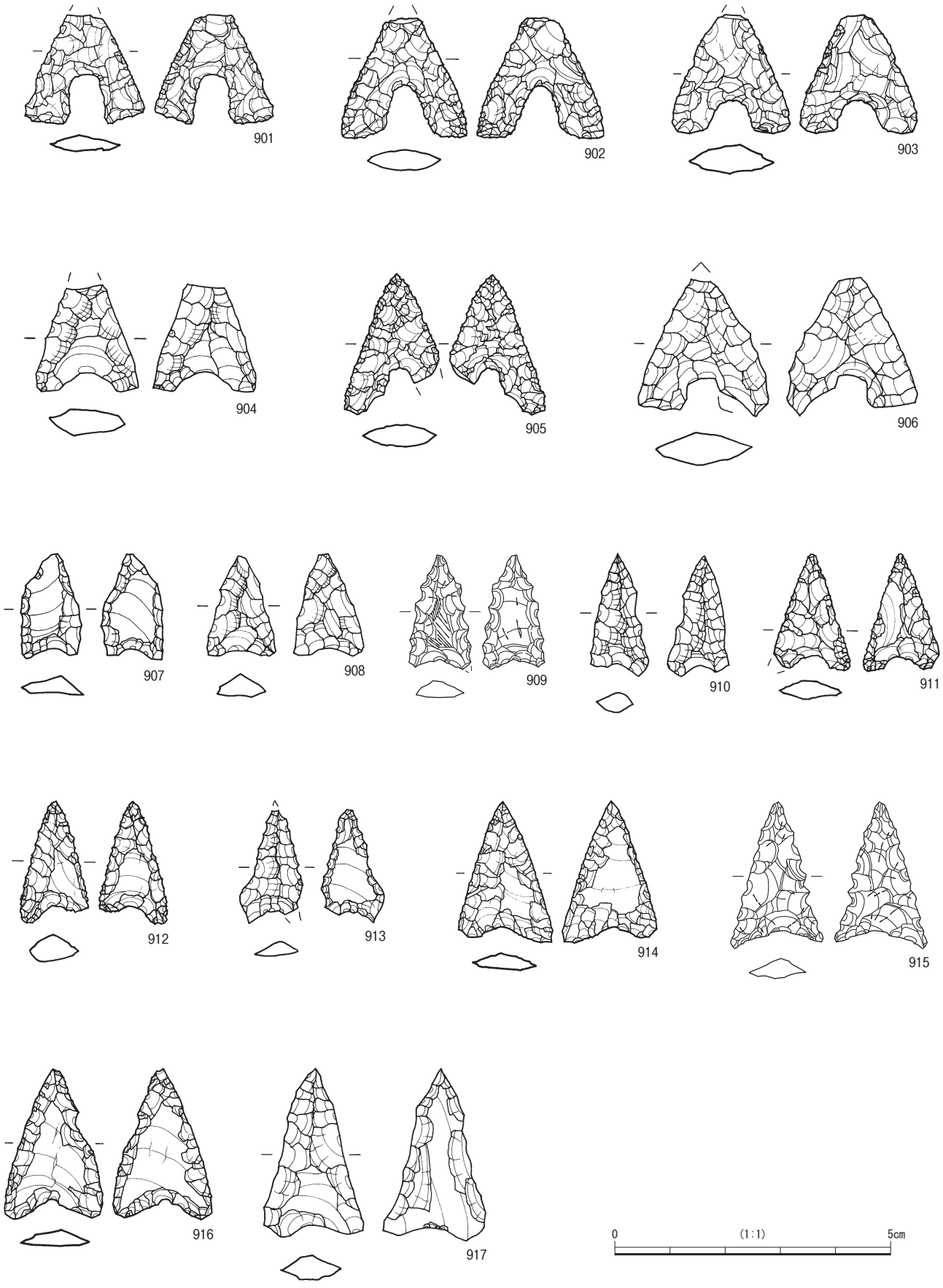
第351図　石鏃Ⅱa類



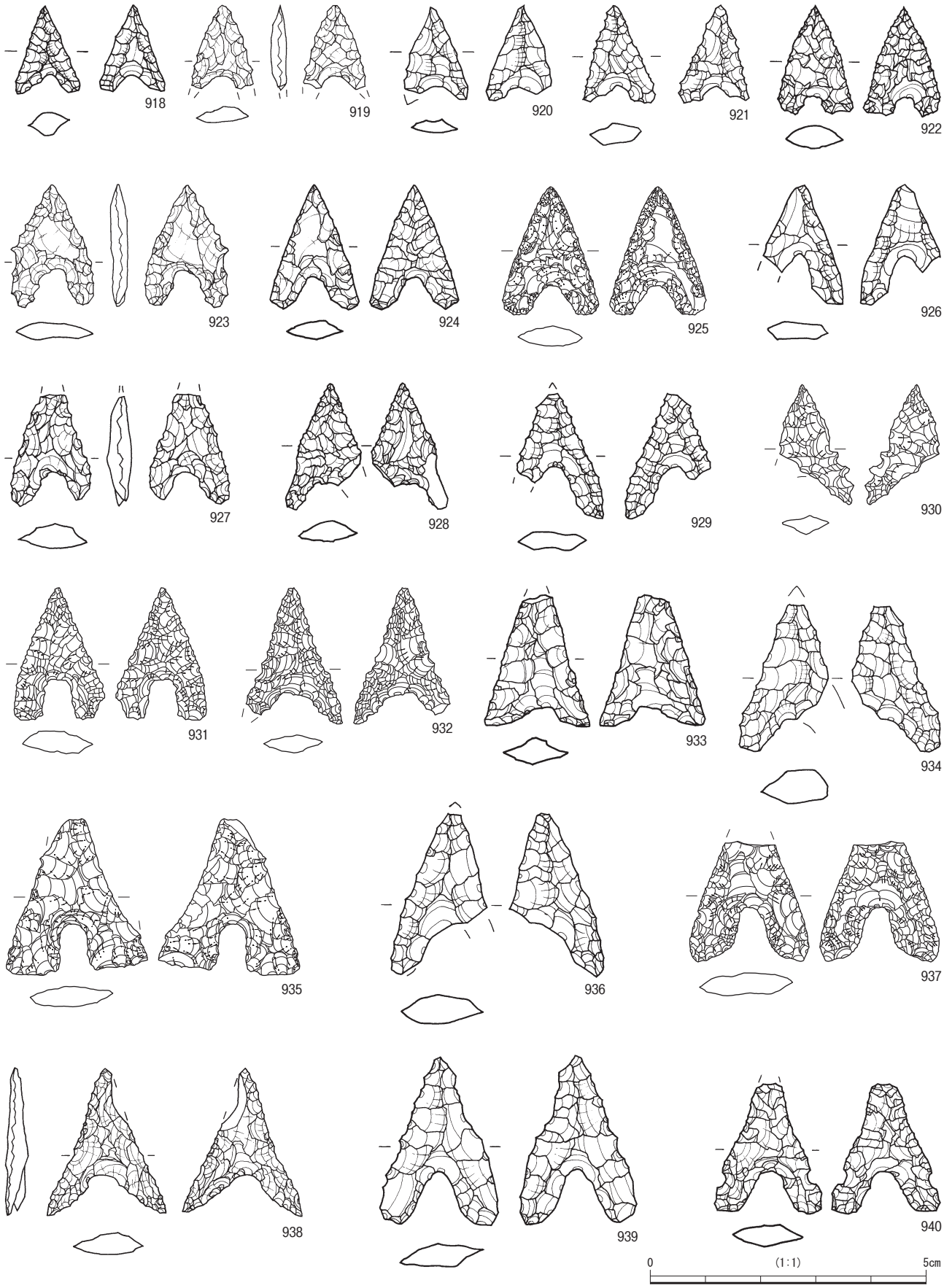
第352図　石鏃Ⅱb類（1）



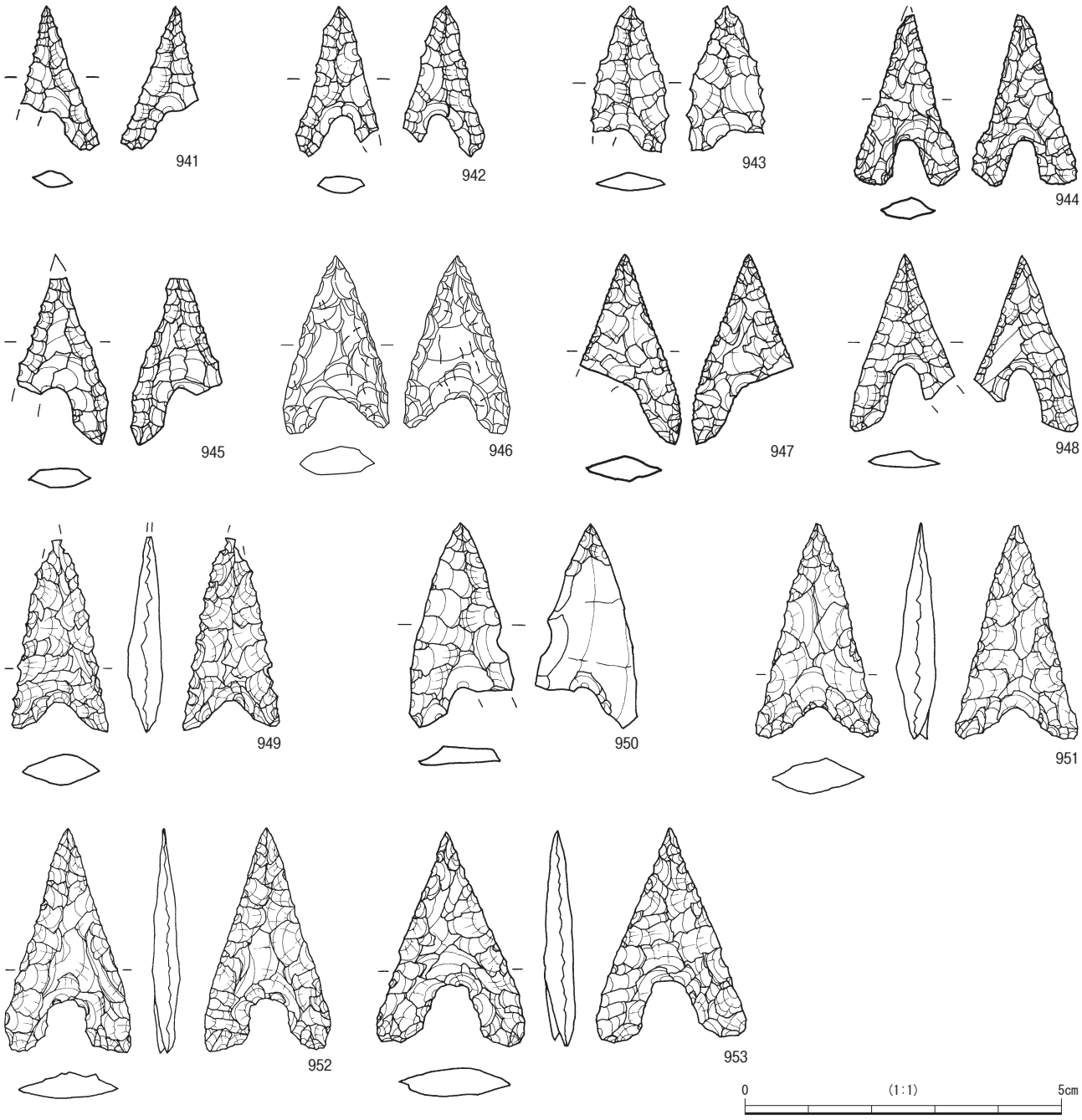
第353図　石鏃Ⅱb類（2）



第354図　石鏃Ⅱb類（3）・石鏃Ⅲa類



第355図　石鏃Ⅲb類（1）



第356図　石鏃Ⅲb類（2）

Ⅰ類（第348図804 ～ 819）

804 ～ 819は抉りのない平基式無茎鏃である。石材は安山岩が最も多く，次いで黒曜石が多い。

804 ～ 813は正三角形状を呈するものである。804 ～ 809は小型のもので全長が1.5cm程である。806は玉髄製で，他のものと比べて厚みがある。

810 ～ 812は全長が2.0cm程である。811は両側縁が外側にやや湾曲し，812は片側縁が鋸歯状をなす。813は大型で全長が2.5cm程あり，厚みがある。

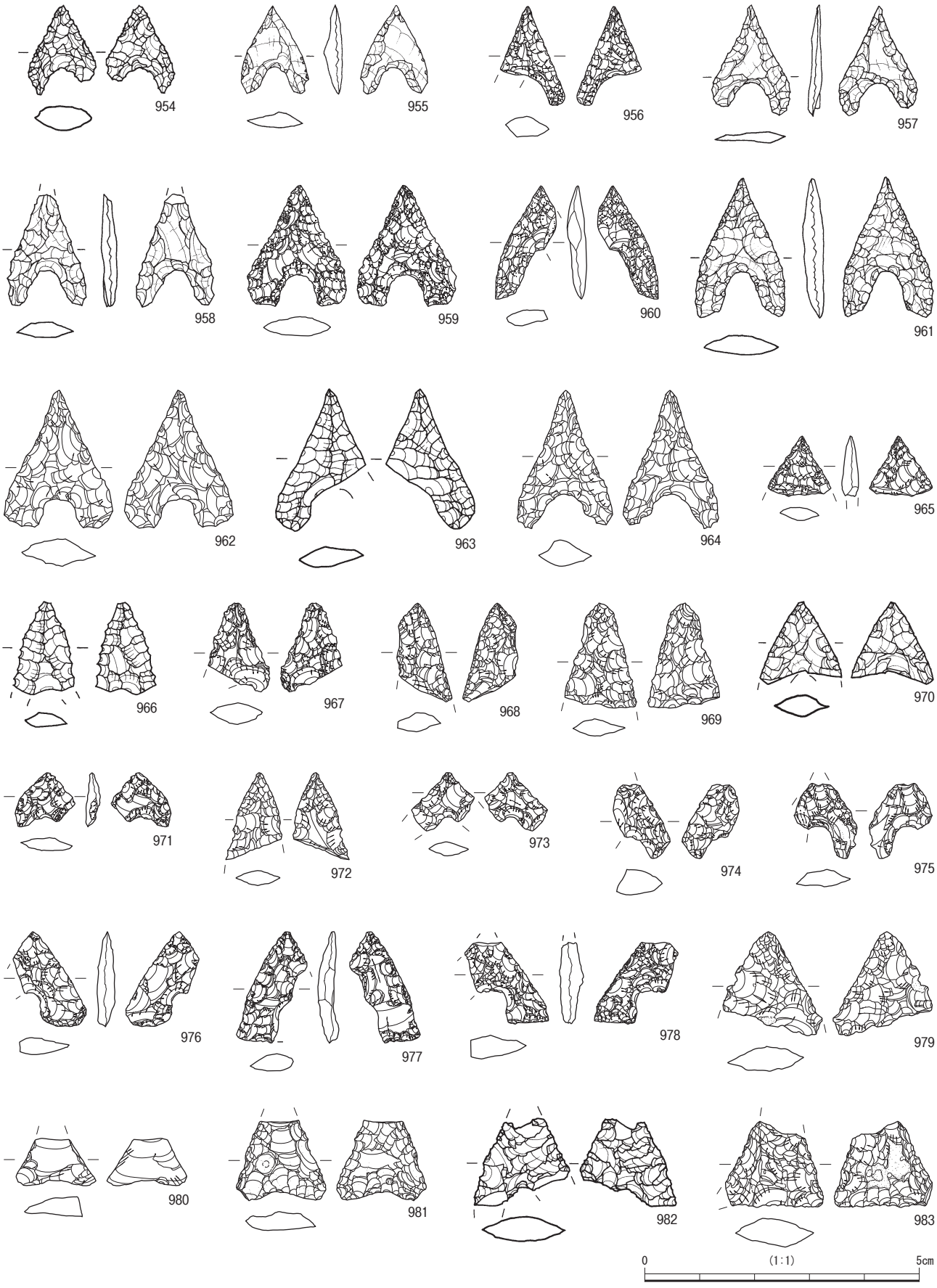
814 ～ 819は二等辺三角形状を呈するものである。全長は2.0cm程度のものが中心である。814は両側縁が外側にやや湾曲し鋸歯状を呈するもので，818は片側縁が鋸歯状をなす。819は3.0cm超の大型で，主要剥離面を残す剥片鏃である。

Ⅱa類（第351図820 ～ 846）

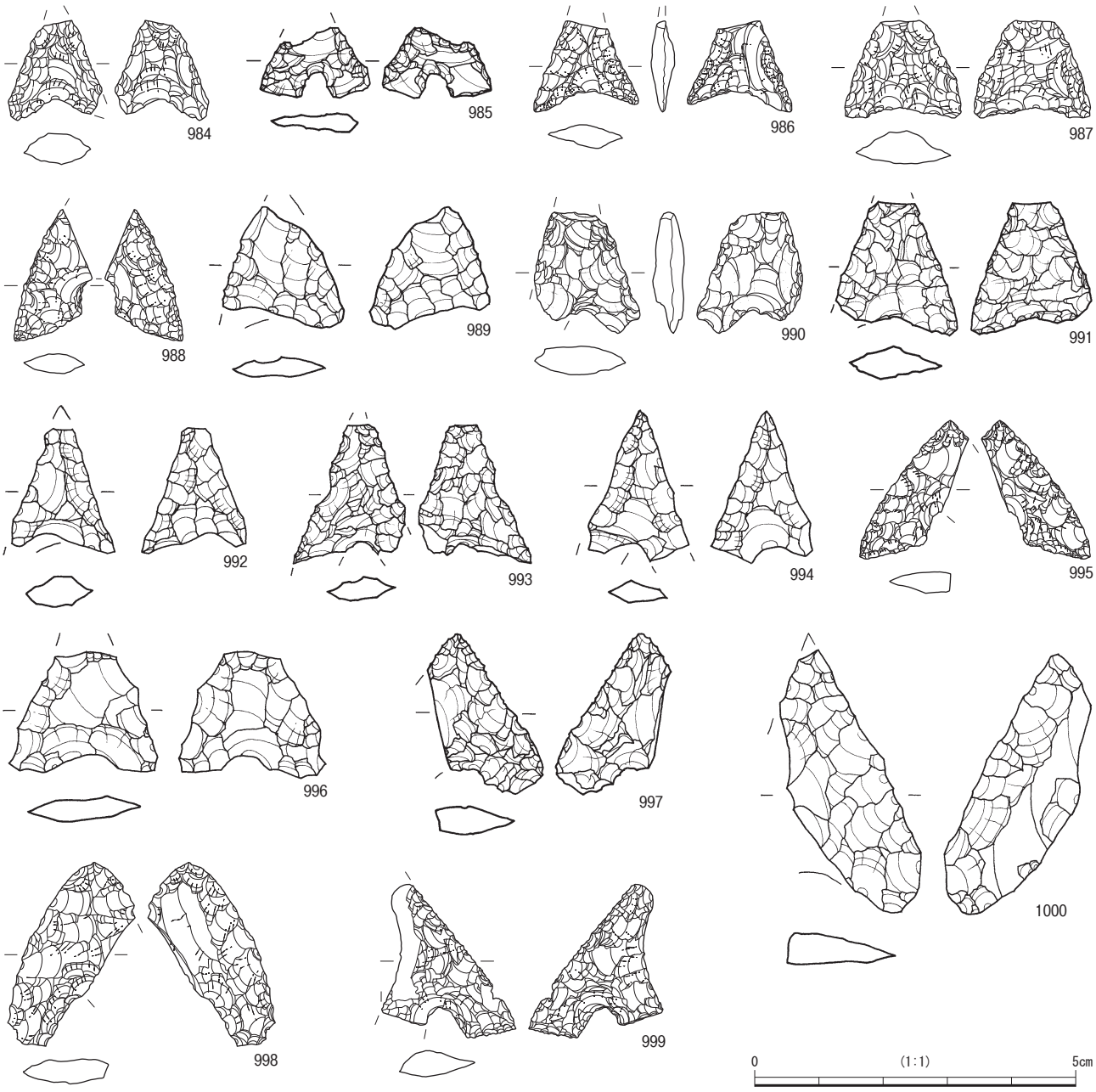
820 ～ 846は正三角形状を呈し，抉りが浅いものである。石材は黒曜石が主体で，次いで安山岩製が多い。

820 ～ 829は小型のもので全長1.0 ～ 1 .5cm弱の大きさである。

823は頁岩，824はチャート，829は鉄石英製である。820 ～ 824は最大幅が全長よりも大きく，扁平である。



第357図　石鏃Ⅳ類・石鏃Ⅴ類（1）



第358図　石鏃Ⅴ類（2）

830 ～ 843は全長1.5 ～ 2.0cm程の大きさである。830・843は均整のとれた左右対称形であり，843は両側縁が鋸歯状を呈する。831・839は主要剥離面を残す剥片鏃である。837は両側縁が外側にやや湾曲している。844 ～ 846は大型のもので2.5 ～ 3.0cm程である。

Ⅱb類（第352図847 ～第354図906）

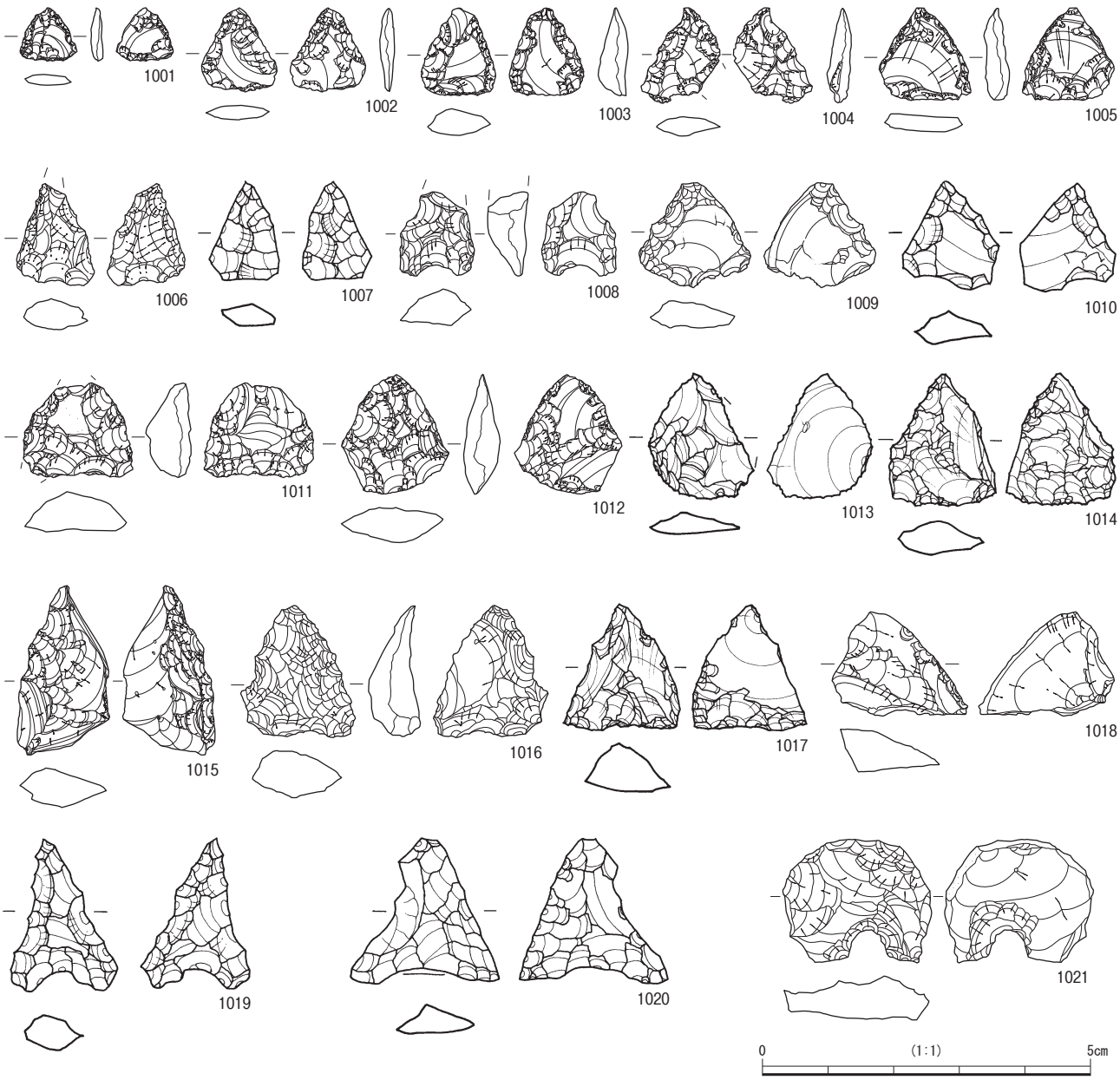
847 ～ 906は正三角形状を呈し，抉りが深いものである。石材は黒曜石とチャートでほぼ占めている。

847 ～ 851及び860・861は最大幅が全長よりも大きくやや扁平である。うち847 ～ 851は小型のもので全長が1.0cm程である。849・850は両側縁がやや外側に湾曲し，851は側縁部がややくびれるものである。

852 ～ 868は全長が1.5 ～ 2.0cm程である。864 ～ 866はいわゆる鍬形鏃に近い形状を呈する。864は両側縁がやや鋸歯状をなしており，865はややくびれるものである。

869 ～ 873は2.0cm強の大きさである。871・872は鍬形鏃で脚部の先が幅広く角張っている。874 ～ 894は全長が最大幅よりも大きく，やや二等辺三角形に近い形状を呈する。

874 ～ 892は2.0cm前後のものである。882・885・891は両側縁が鋸歯状を呈する。885は鉄石英製である。887は先端部が丸みをおびている。888は主要剥離面を



第359図　石鏃Ⅵ類

残し，ほとんど調整のみられない剥片鏃である。892は側縁部が直線状に近い。

893 ～ 900は2.5cm前後のものである。893は側縁部がややくびれるもので鋸歯状をなしている。895・897・900は側縁部が直線状に近いものである。898は厚みがある。899は抉りが比較的浅い。

901 ～ 906は比較的大型のもので3.0cm弱のものである。901・902は鍬形鏃で脚部の先が幅広く角張っている。U字状の深い抉りをもつ。903は玉髄製で全体的に丸味をおびた形状である。904は大きめの押圧剥離が施されており，抉りが比較的浅い。905は全長が最大幅よりもやや大きく二等辺三角形状に近い。丁寧な押圧剥離が施され両側縁は鋸歯状を呈する。906は先端が欠損する。

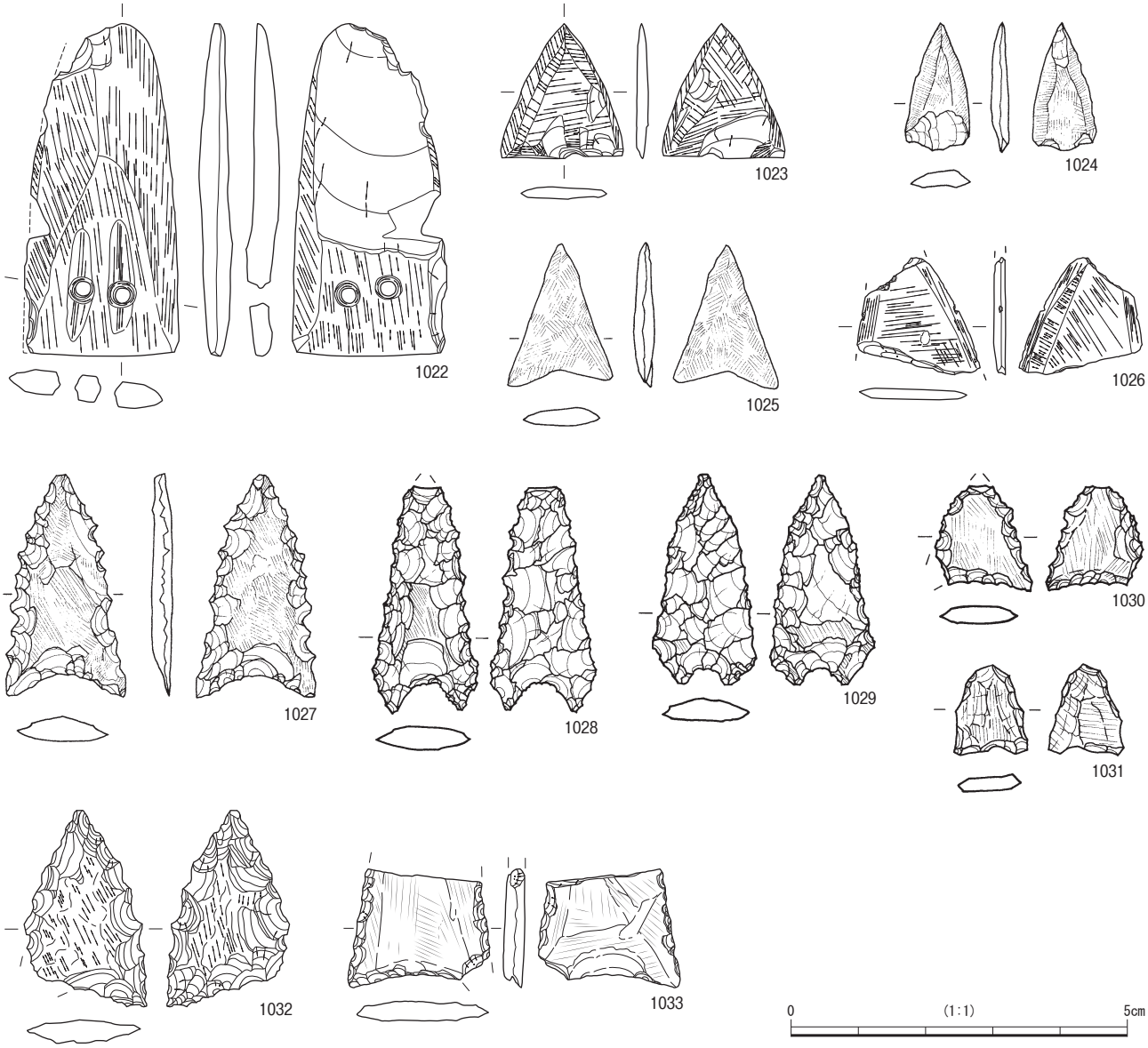
Ⅲa類（第354図907 ～ 917）

907 ～ 917は二等辺三角形状を呈し，抉りが浅いものである。断面が三角形のものが多い。石材はチャートが主である。

907・908は2.0cm未満のものである。907は表裏とも主要剥離面を大きく残す剥片鏃である。

909 ～ 913は2.0 ～ 2.5cmのものである。909はほぼ左右対称に近い形状で，両側縁がしっかりとした鋸歯状を呈する。910は片側縁が外側にやや湾曲しており，911は両側縁が直線状である。912は両側縁が細かい鋸歯状で身が厚い。913はハリ質安山岩製で一部に主要剥離面を残す。

914 ～ 917は3.0cm前後のものである。914は一部に



第360図　石鏃Ⅶa類・石鏃Ⅶb類

主要剥離面を残すものの，全体的に丁寧な押圧剥離が施されている。915は両側縁がしっかりとした鋸歯状を呈する。916は表裏とも主要剥離面を大きく残す。917は裏面にほとんど調整が施されていない。

Ⅲb類（第355図918～第356図953）

918～953は二等辺三角形状を呈し，抉りが深いものである。石材はチャートが主である。

918～921は2.0cm未満のものである。919・921は両側縁が鋸歯状を呈する。

922は両側縁が外側にやや湾曲しており身が厚い。923は表裏面ともに主要剥離面を残している。924・925は両側縁が直線状で，比較的丁寧な押圧剥離が施されている。926は右側縁が細かな鋸歯状を呈する。左脚部が欠損する。927は右脚部が短く先端部が欠損する。929は両側縁が鋸歯状を呈し，脚部が外側にやや湾曲する。930は脚部に鋸歯状の加工が施される。931は丁寧な押圧剥離が施され抉りが深い。932は側縁部がややくびれるもので，鋸歯状をなしている。933は抉りが比較的浅く基部が方形を呈する。934はやや大雑把な押圧剥離が施されている。935は鍬形鏃で脚部の先が幅広く角張っている。U字状の深い抉りをもつ。936は先端部と右脚部が欠損しているものの，丁寧な押圧剥離が施され全体として整った形状をしている。身が厚い。937は水晶製で先端部が欠損している。938は側縁部及び脚部内側まで全面的に細かな鋸歯状の加工が施されている。脚先端部は鋭く尖る。939は大きめの押圧剥離が施され，全体として調整が雑である。940は側縁部がややくびれるもので，両脚部の外側には抉りが施されている。

941 ～ 953は全長よりも最大幅が狭く，全体として細長な形状のものである。941 ～ 943は2.5cm未満のものである。941は左脚部が欠損しているものの，全体的に丁寧な押圧剥離が，両側縁には細かな鋸歯状の加工が施されている。943は両側縁が外側にやや湾曲するものである。大きめの押圧剥離が施され，全体として雑な作りである。

944 ～ 949は3.0cm程度のものである。944・945は側縁部がややくびれるものである。945は脚部の先が尖っている。946は両側縁が外側にやや湾曲するものである。大きめの押圧剥離が施され，裏面中央部分には主要剥離面を残す。947・948は側縁部がややくびれ，細かな鋸歯状の加工が施されるものである。脚先端部は尖っている。949は先端部が欠損しているものの，細長で身の厚いものである。両側縁は鋸歯状の加工が施されている。

950 ～ 953は3.5cm程度のものである。950は，表面は丁寧な押圧剥離による調整が施されているものの，裏面は先端部と基部部分のみ調整が施され，大部分が主要剥離面を残している。951は細長で左右対称形に近く身が厚いものである。抉りは比較的浅い。952は側縁部が中央へややくびれ，U字状の深い抉りをもつ。953はやや正三角形に近い形状で，U字状の深い抉りをもつ。

Ⅳ類（第357図954 ～ 964）

954 ～ 964は先端部が錐状のハート形を呈し，抉りが深いものである。石材はチャートが主で，次に黒曜石が多い。954・955は1.5cm程度のものである。脚先端部が尖っている。954は安山岩製で身が厚く，955は鉄石英製で裏面は主要剥離面を大きく残すものである。鏃956 ～ 960は2.0cm前後の大きさである。956は左脚部が欠損している。957 ～ 959は側縁部がややくびれ，鋸歯状の加工が施されている。957は表裏面とも中央部に主要剥離面を残す。960・961は形状が類似しており，側縁先端部付近がややくびれたあと，外側に湾曲するものである。962 ～ 964は側縁部が中央へややくびれるものである。962・963は脚部の先が角張っているもので，964は先端部が尖るものである。

Ⅴ類（第357図965 ～第358図1000）

965 ～ 1000は欠損のため全体の形状が不明なものである。本来はⅠ～Ⅳ類のいずれかに属するものが大半であると考えられる。

965～973・976・977・979・994・995・997・998は，脚部あるいは基部が欠損したものである。971・973は小型で，998は大型のものである。

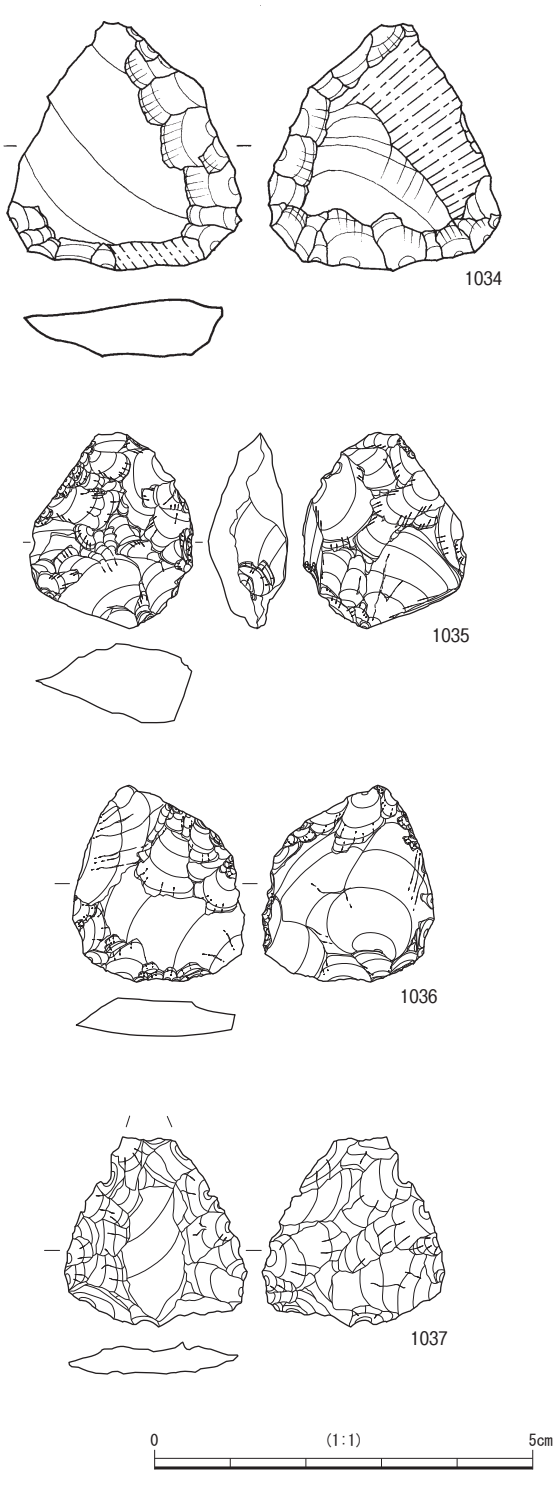
974・975・978・980～987・989～993・996・999・1000は先端部が欠損している。1000は非常に大型のものである。

Ⅵ類（第359図1001 ～ 1021）

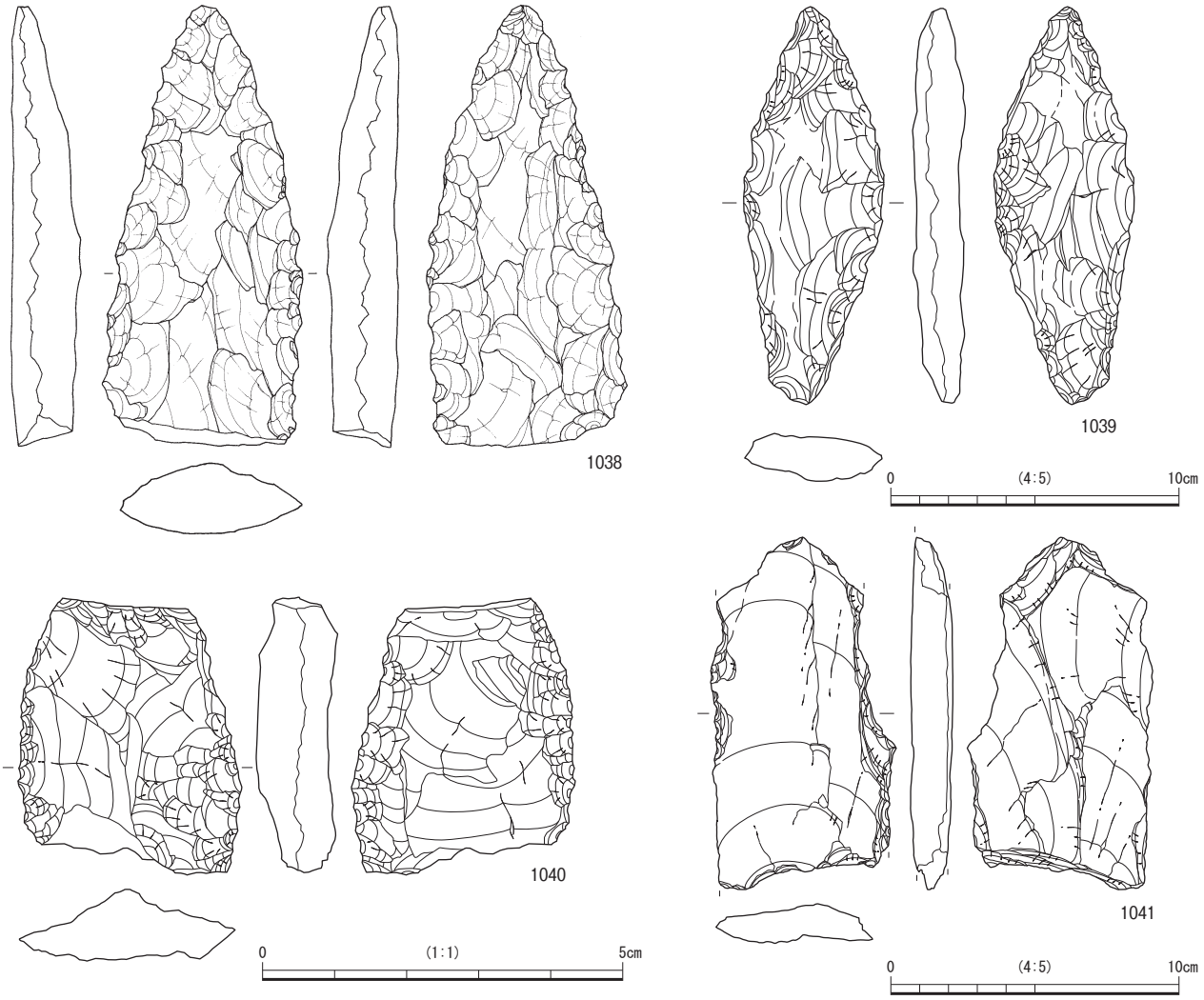
1001 ～ 1021は打製石鏃の未製品であると考えられるものである。

1001 ～ 1008は小型のものである。特に1001は非常に小さい。1001 ～ 1007・1009・1010・1014・1016・1017は三角形状を呈し，石鏃の形状が整いつつある。

1006・1016・1017は基部が浅い抉り状を呈している。



第361図　尖頭状石器



第362図　石槍

1019・1020は視覚的にも石鏃であることは明瞭で，完成品に近い。

1021は基部にU字状の抉りが入るが，全体的に蒲鉾状を呈し，先端部が形成されていない。

Ⅶa類（第360図1022 ～ 1026）

1022 ～ 1026は磨製石鏃である。石材は頁岩が主である。

1022は全長5.0cmの大型のもので，基部近くに結束のためと思われる穿孔が２箇所認められる。穿孔周辺には有溝を伴う。裏面は大きく剥離している。1023は全長2.0cmのもので，ほぼ正三角形に近い平基式の無茎鏃である。両面とも丁寧な研磨が施されて，身が薄い。1024は磨製石鏃の先端部分と思われる。本来は細長い二等辺三角形状を呈していたと推定される。1025は玉髄製で両面とも非常に丁寧な研磨が施され，ツルツルしている。抉りは浅い。1026は磨製石鏃の欠損品である。先端部付近と推定され，両面とも丁寧な研磨が施されている。

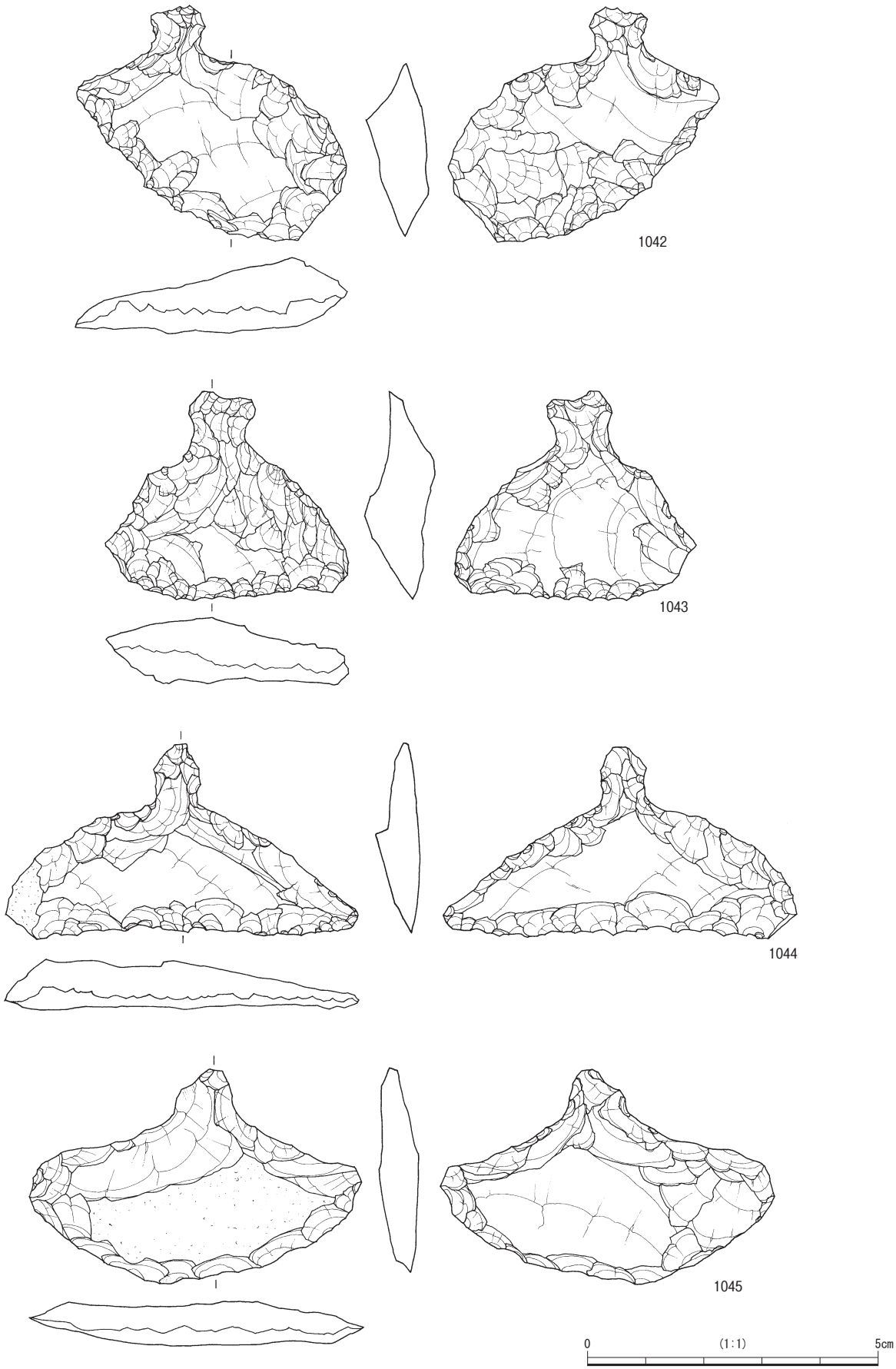
Ⅶb類（第360図1027 ～ 1033）

1027 ～ 1032は局部磨製石鏃である。石材はホルンフェルスと頁岩が主である。無茎鏃の基部から鏃身中央部の装着部を中心として研磨され，両側縁に鋸歯状の加工が施される。

1027 ～ 1029は3.0cm前半の細長の二等辺三角形を呈するものである。1027は鉄石英製で脚部が八の字に開くもの，1028は珪質頁岩製で抉りの浅いもの，1029はホルンフェルス製で先端がやや錐状を呈する。抉りは浅く幅も狭い。1030・1031は2.0cm未満のものである。1031は押圧剥離による側縁部の調整が雑で不整形な作りである。1032は3.0cm程のもので，側縁部がやや外側に湾曲するものである。抉りは浅い。1033は欠損品で基部周辺のみが残存する。

尖頭状石器（第361図1034 ～ 1037）

1034 ～ 1037は尖頭状石器である。４点を図化した。石材は黒曜石，チャート，ホルンフェルスなどが見られた。いずれも尖頭状をなすとはいえ先端は鋭利さに欠け



第363図　石匙（1）

る。1034は三角形状の剥片を素材とし，二辺に粗めの押圧剥離を施して調整を行っている。1035は身が厚い。

1036は基部部分に押圧剥離による調整を施しているが，先端部は打ち欠きによって形成されている。1037は先端部が欠損しているが，剥片素材に全体的に押圧剥離を施している。

石槍（第362図1038 ～ 1041）

1038 ～ 1041は石槍である。４点を図化した。1038は安山岩製で，欠損品ではあるが残存部径6.0cm程を測る大型のものである。本来は柳葉形を呈すると考えられる。1039はハリ質安山岩製で全長6.0cm弱である。柳葉形を呈する。1040はチャート製の欠損品である。両側縁部を細かな押圧剥離により調整している。1041は粘板岩製の未製品である。全体のサイズや形状から石槍として扱った。

石匙（第363図1042 ～第364図1048）

1042 ～ 1048は石匙である。７点を図化した。石材はチャートと安山岩が多く，他に頁岩と黒曜石製が見られた。

1042 ～ 1045は横長のものである。1042は刃部がやや斜刃になるものである。1043・1044は横方向の刃部で，しっかりとした摘まみが作出されている。1045は刃部が弧状を呈するもので，全体的に粗い調整である。

1046 ～ 1048は縦長のものである。1046は刃部がやや弧状をなし，全体としてイチゴ形を呈する。しっかりとした摘まみが作出されている。1047は刃部がやや斜刃になるものである。1048は欠損品で，摘まみ部分のみが残存している。

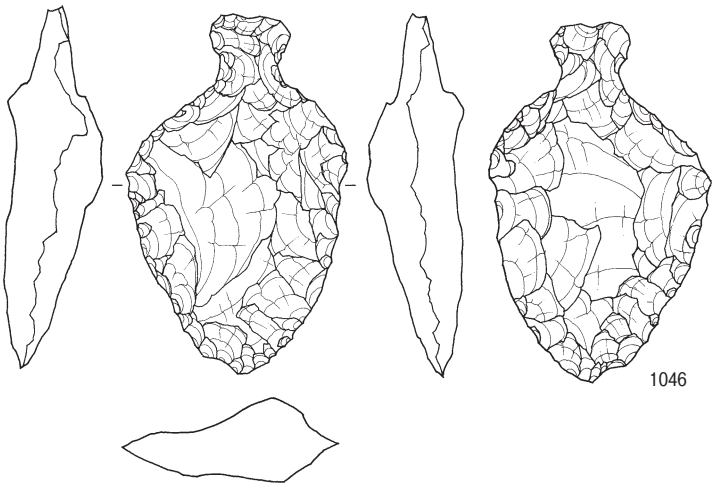
削器（第365図1049 ～第366図1057）

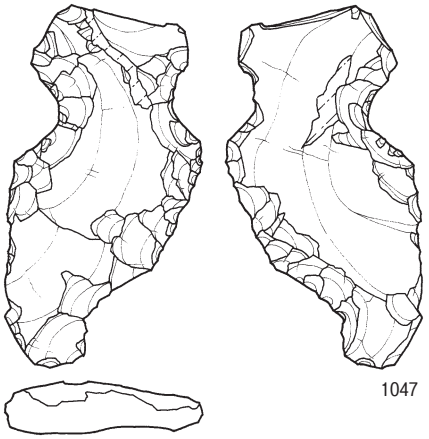
1049 ～ 1057は削器である。９点を図化した。剥片の縁辺部や端部に二次調整を行い，刃部整形が施される。石材はチャートと安山岩が主で，他に黒曜石と玉髄製のものが見られた。

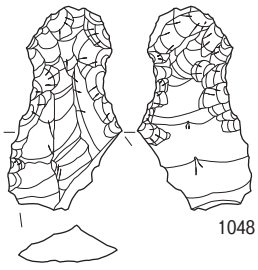
1049は縦長剥片を素材とし，両側縁部に押圧剥離を施すことによって刃部加工を行っている。1050は黒曜石製の小型のものである。側縁部及び端部に刃部加工が施されている。裏面は主要剥離面のままである。1051は片側の側縁部のみを刃部形成している。刃部はやや内側への弧状をなす。1052は横長剥片を素材とし，一辺に両面からの押圧剥離を施して刃部形成している。1053は欠損しており全体の形状は不明だが，1054と同じ様な特徴を有していると判断し，削器として扱った。

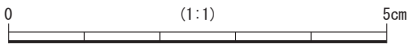
1054・1055は両面からの押圧剥離により刃部形成が行われている。1056は剥片素材の両側面に微細な押圧剥離を施し刃部を加工している。二次加工剥片に含めてもいいかもしれない。

1057は剥片素材を利用したもので，押圧剥離による刃部調整がほとんど認められない。

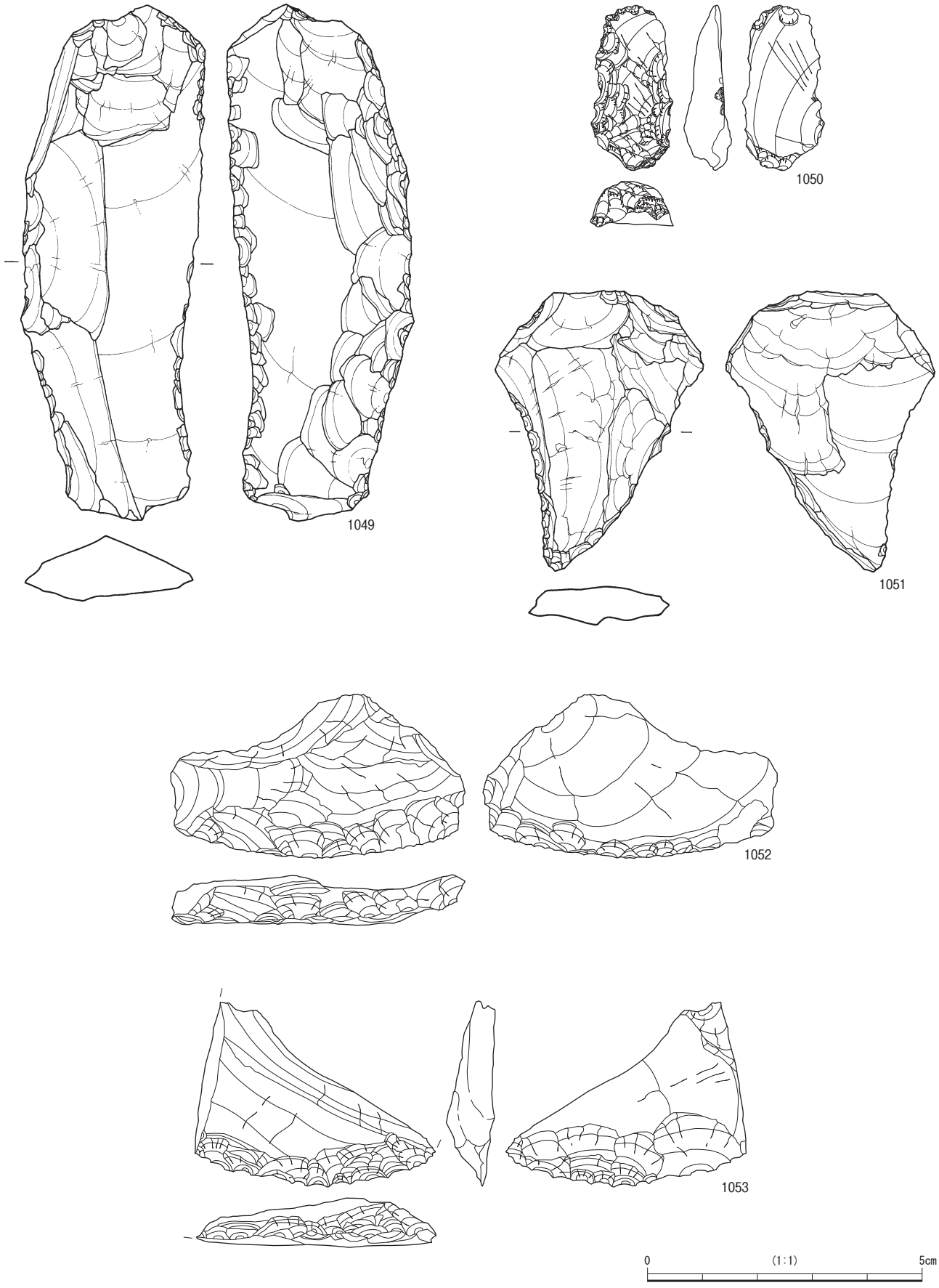




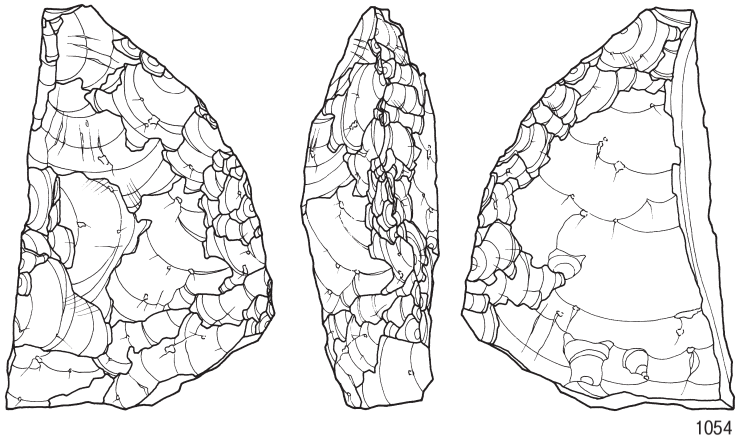


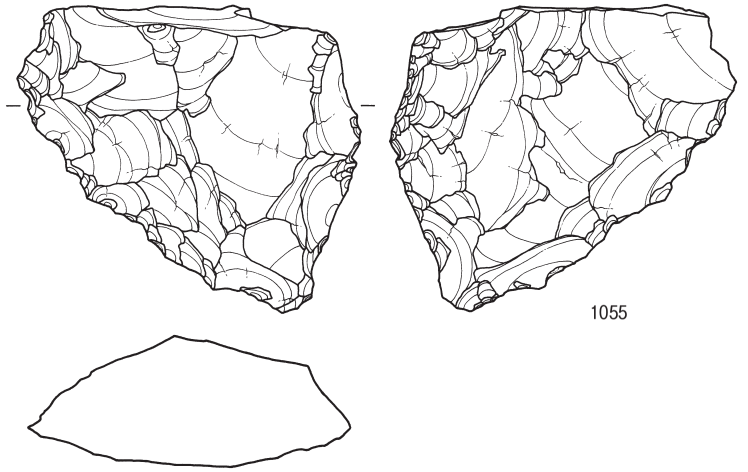


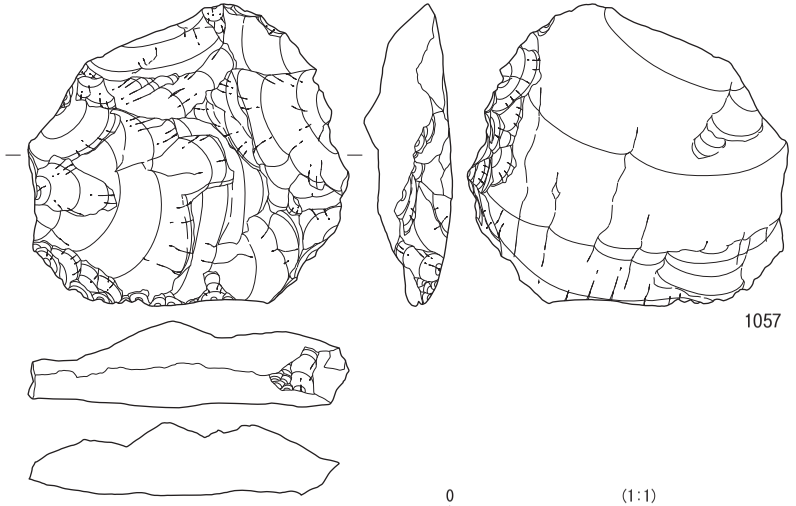
第364図　石匙（２）

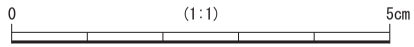


第365図　削器（1）

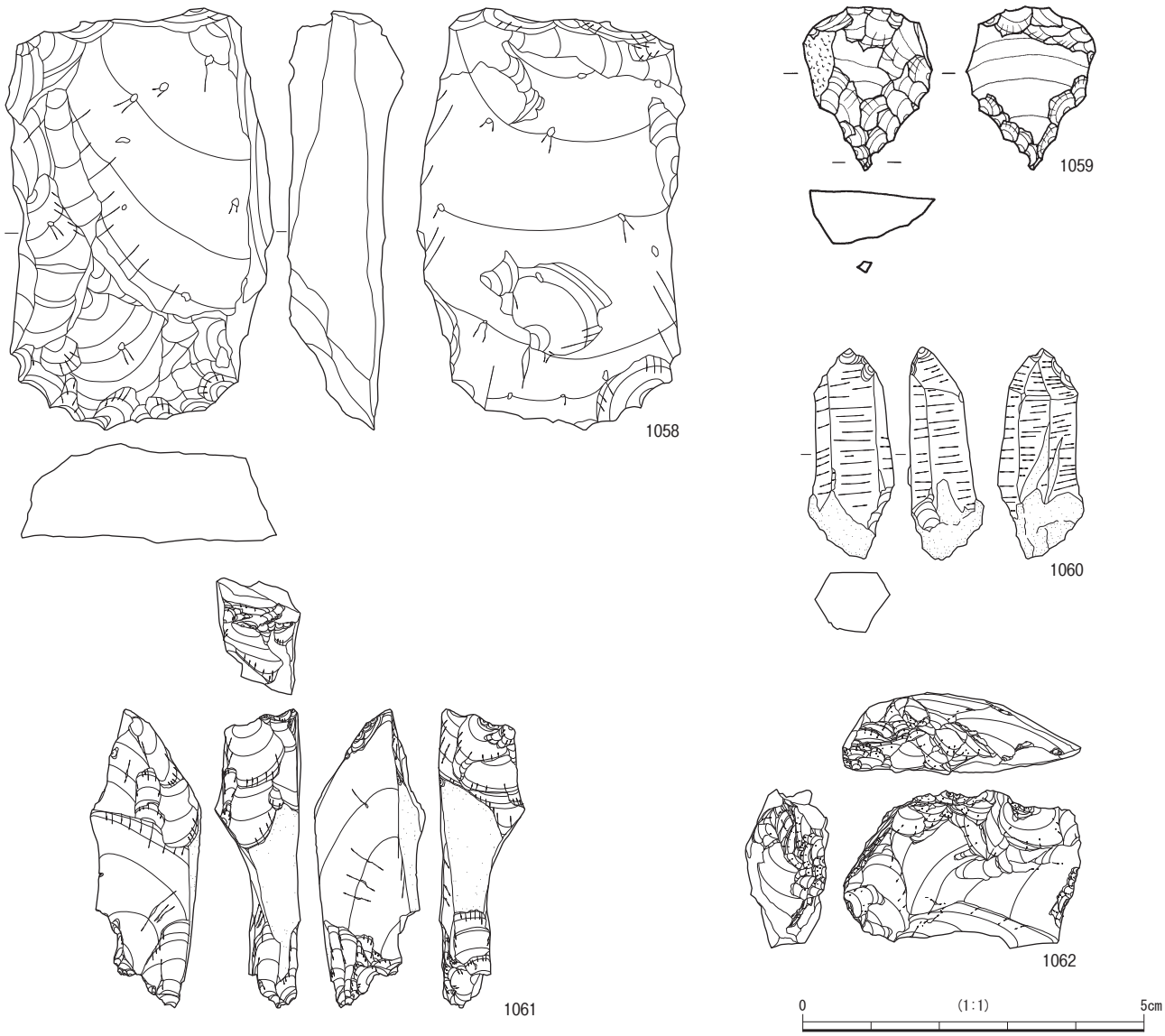








第366図　削器（2）



第367図　掻器・石錐・ドリル・楔状石器

掻器（第367図1058）

掻器は1点を図化した。1058は黒曜石製である。縦長剥片を素材とし，一端部を片面からの粗い押圧剥離により刃部加工が施されている。

石錐（第367図1059）

石錐は1点を図化した。1059は頁岩製で剥片の一端を剥離加工により鋭角に整えている。

ドリル（第367図1060）

ドリルは1点を図化した。1060は水晶製である。六角柱状のきれいな自形結晶を利用したもので，加工はほぼ見られないが，先端部に使用痕のような剥離が認められるため，ドリルとして扱った。

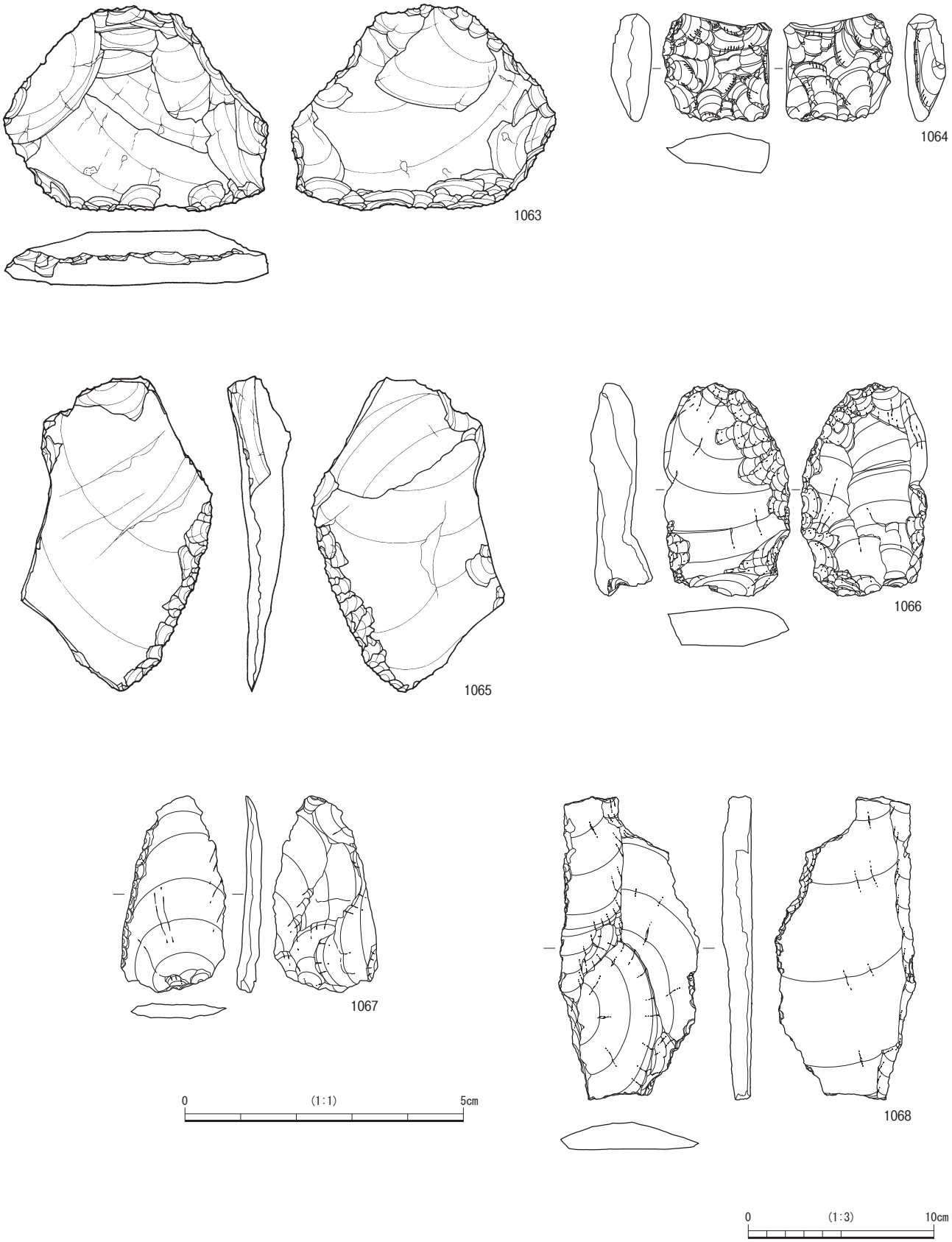
楔形石器（第367図1061・1062）

1061・1062は楔形石器である。2点を図化した。いずれも黒曜石製である。1061は三角柱状で，上下から対抗する剥離がみられ，上端部は潰れが認められる。下端部は使用によるものか刃こぼれ状に欠損している。1062は下端部を鋭角状にしている。

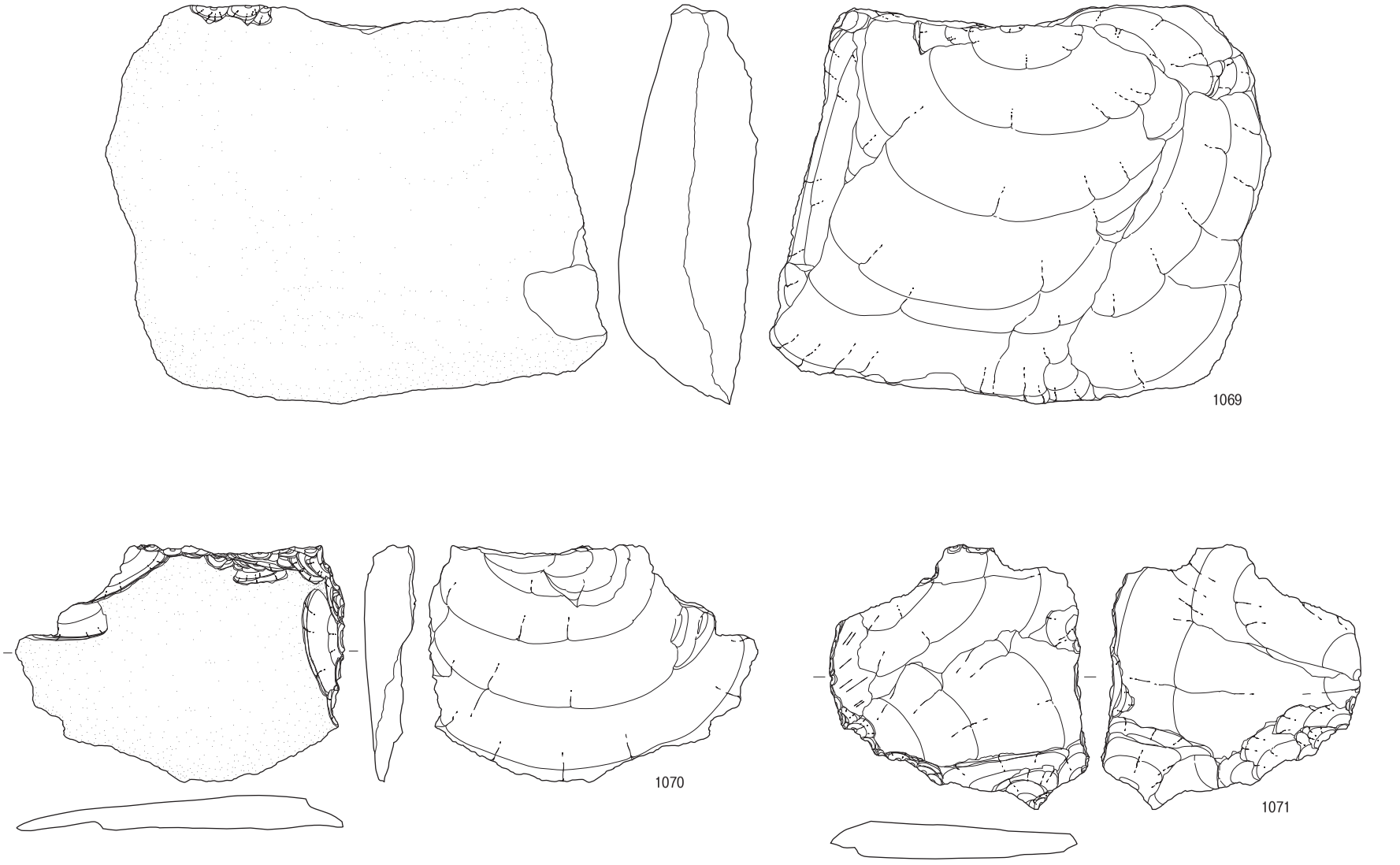
二次加工剥片（第368図1063 ～ 1068）

1063 ～ 1068は二次加工剥片である。6点を図化した。石材はチャートと安山岩が主である。剥片の縁辺部に二次調整を施すが，明瞭な刃部形成や調整が行われないものを二次加工剥片とした。

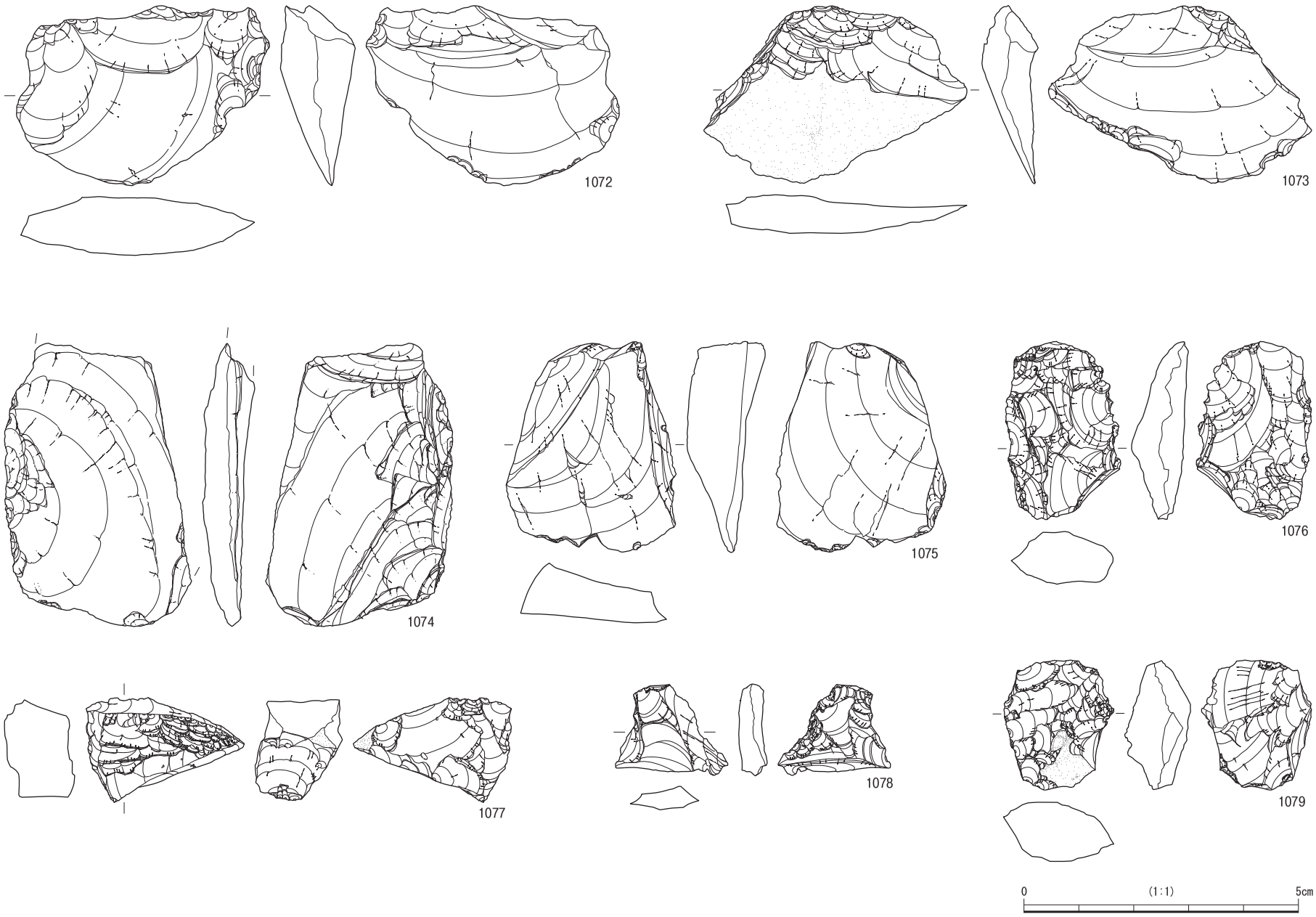
1063は頁岩製の剥片の縁辺部にわずかに剥離調整が認められるものである。1065はチャート製の剥片を素材とし，縁辺部の両面から微細な剥離加工が施されている。削器に含めてもいいかもしれない。1067もチャー



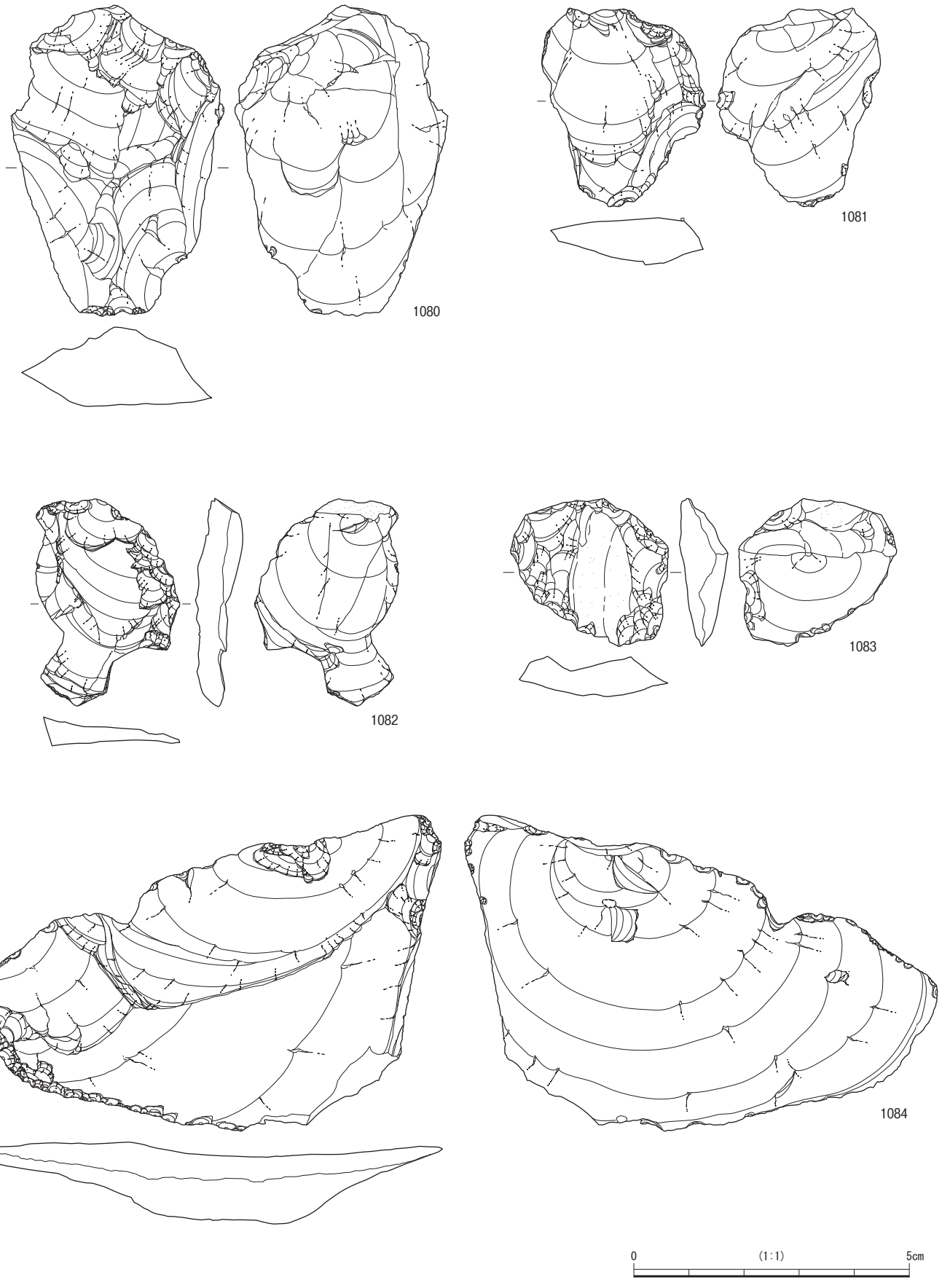
第368図　二次加工剥片



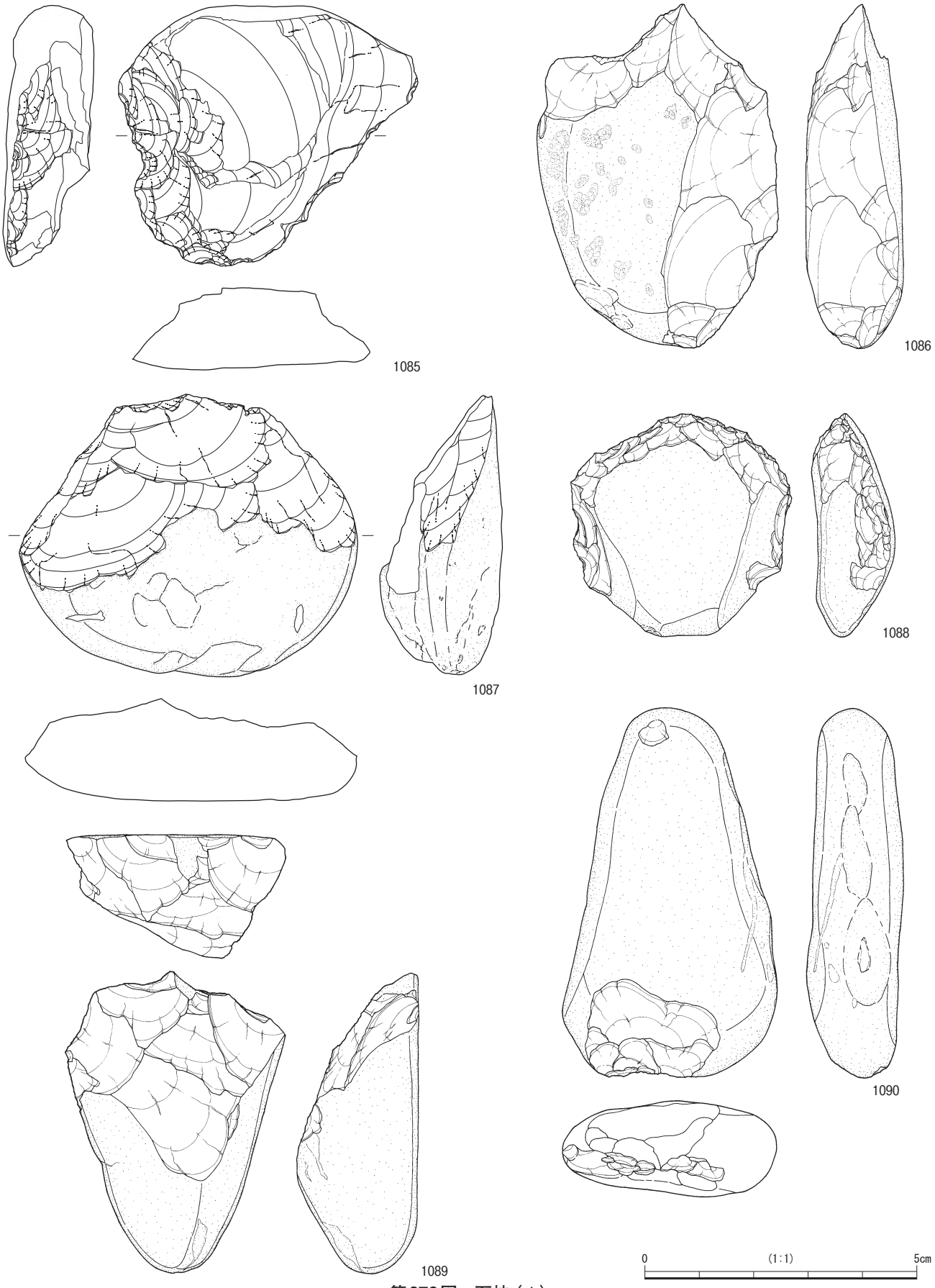
第369図　剥片（1）



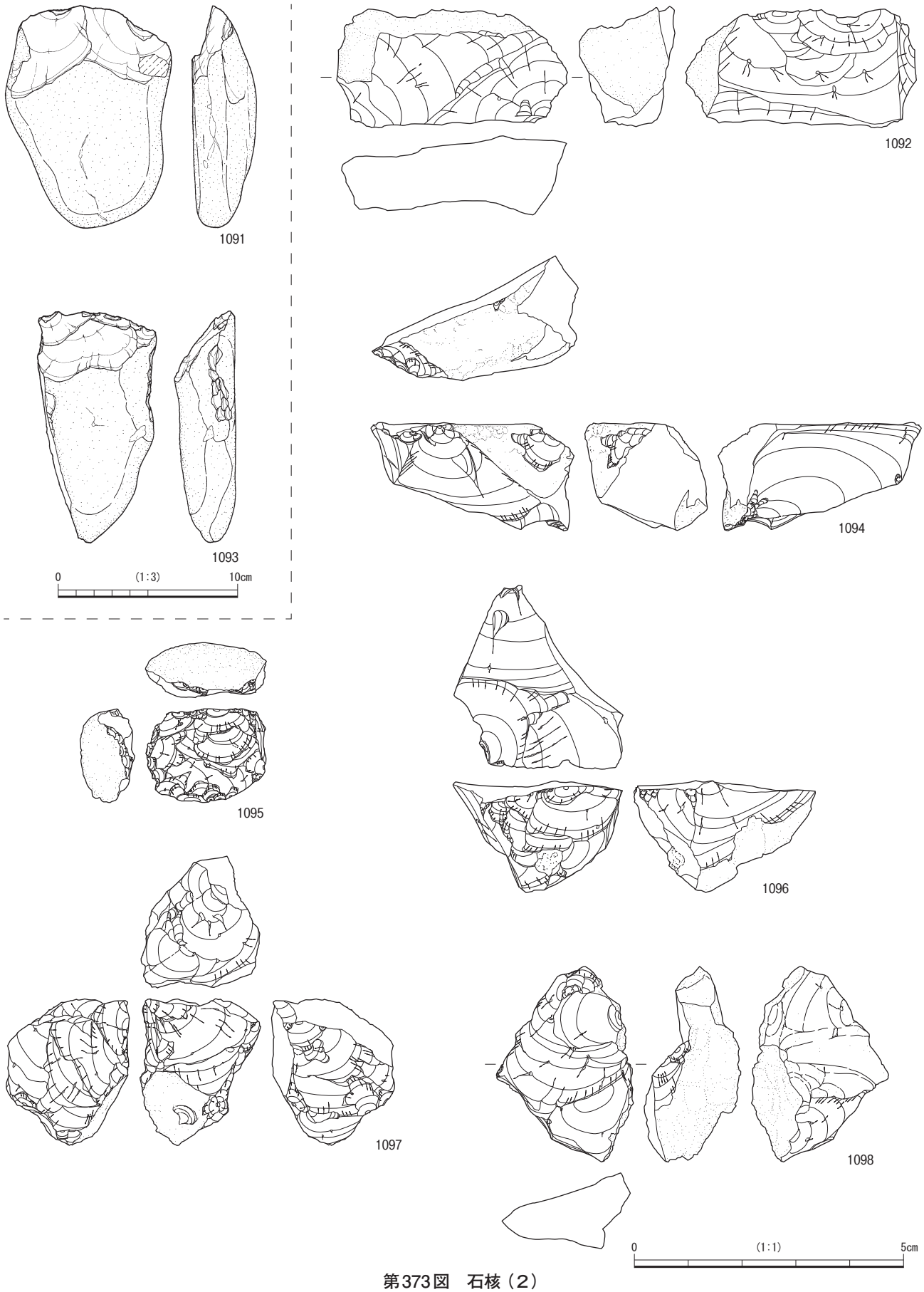
第370図　剥片（2）



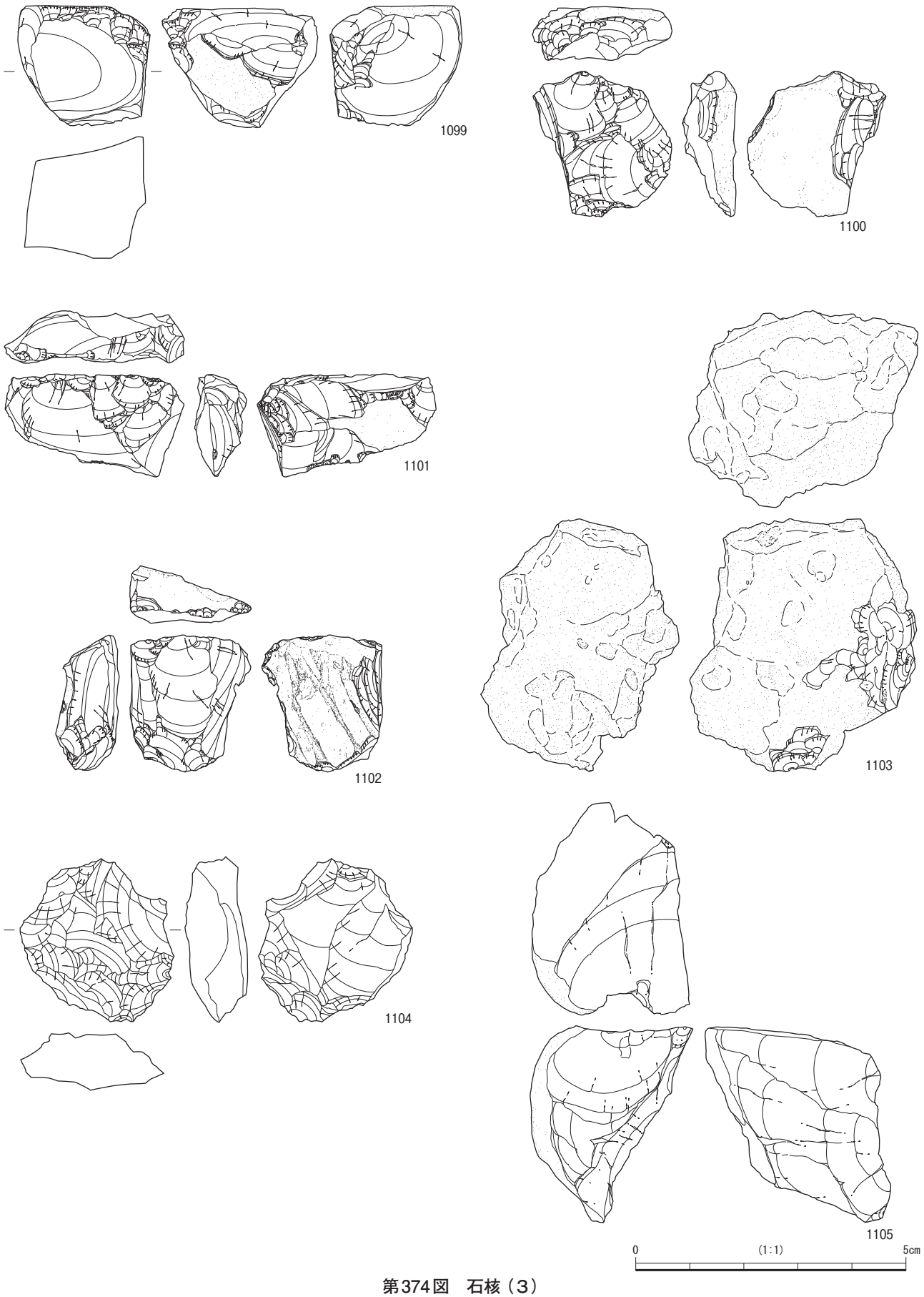
第371図　剥片（3）



第372図　石核（1）



第373図　石核（2）



第374図　石核（3）

ト製の薄い剥片を素材とし，一縁辺部に片面から微細な剥離加工が施されている。1064は黒曜石製で，全体的に押圧剥離を施しながら刃部が形成されている。縁辺部に明瞭な剥離調整は認められず，上端部が面をなしていることから，楔形石器の可能性も考えられる。1066は頁岩製である。1068は安山岩製の大型の縦長剥片の縁辺部の一部に粗い剥離調整が行われているものである。

剥片（第369図1069 ～第371図1084）

1069 ～ 1084は剥片である。16点を図化した。

1069は砂岩製で，打面分割して作出しており，表面には自然面を残す。

1070・1071・1073・1074はホルンフェルス製である。1070・1073は表面に自然面を残し，側縁部の一部に二次加工のような痕跡が伺える。1071・1074は両面とも同一方向からの剥離である。

1072・1075・1076・1080 ～ 1082はチャート製である。1072は側縁部の一部に微細な剥離が見られ，使用痕の可能性がある。1075は台形状の剥片である。1076は両面ともに細かく剥離されており，何らかの未製品である可能性がある。1082はつまみ状の突起部分があり，反対側の側縁部に二次加工のような痕跡が認められる。石匙の未製品である可能性がある。

1077・1078は黒曜石製の折断剥片である。いずれも２辺を折断している。1078は左右側縁部の裏面に二次加工のような痕跡が認められる。

1079は黒曜石製で，表面は頂部を中心に放射状に細かな剥離が行われており，裏面は打面転移しながら剥離が行われている。何らかの未製品である可能性もある。1083は珪質頁岩製である。側縁部の一部に二次加工のような痕跡が認められる。1084は砂岩製である。翼状の剥片で，側縁部に細かい使用痕状の剥離が認められる。使用痕剥片としてもいいかもしない。

石核（第372図1085 ～第374図1105）

1085 ～ 1105は石核である。21点を図化した。

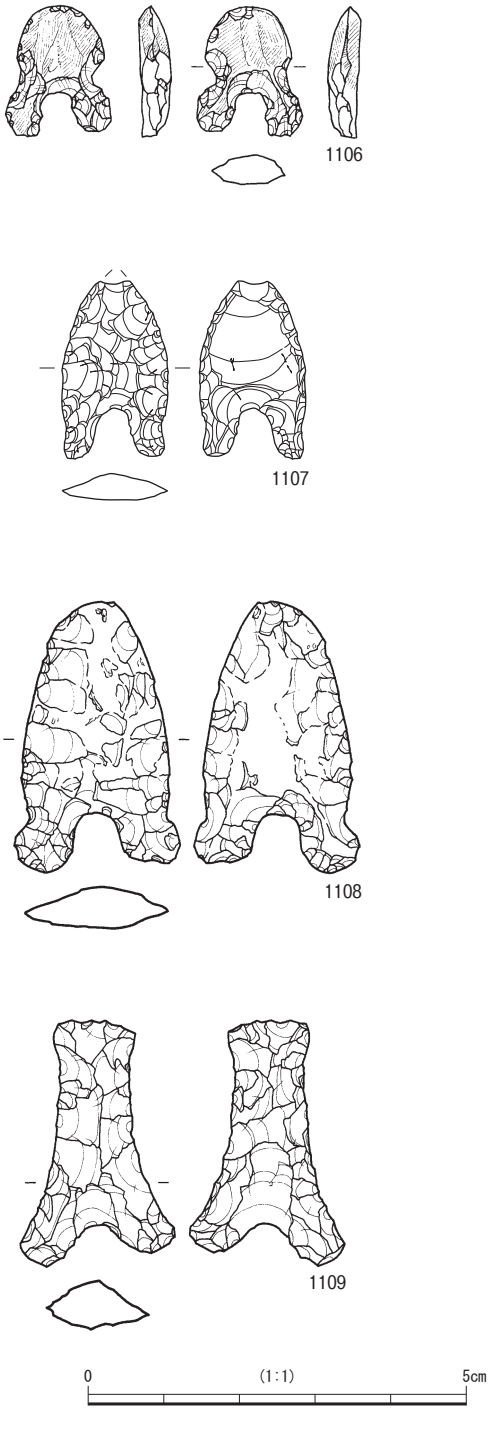
1085は玄武岩製で，扁平楕円礫に平坦な打面を形成した後，打面転移をしながら剥片を剥いでいる。

1086・1087は扁平楕円礫を打撃分割により打面形成した後，打面転移をしながら剥片を剥いでいる。1086は砂岩製，1087は花崗岩製である。

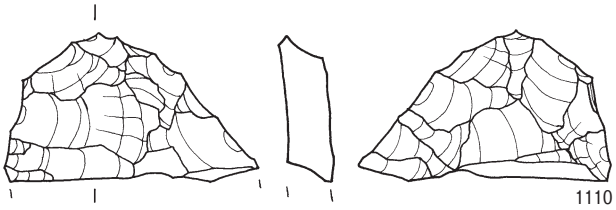
1088はホルンフェルス製で，扁平楕円礫に打面形成を行わず，縁辺部を打面転移をしながら剥片を剥いでいる。1089は砂岩製で，三角柱状の礫を素材とし，頂部から縁辺部に向かって剥片を剥いでいる。

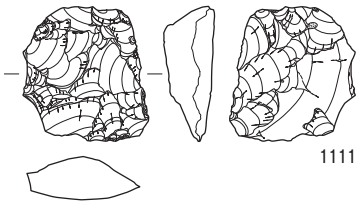
1090・1091・1093はホルンフェルス製である。1090は三角形状の扁平礫の先端部を同一方向から剥片を剥いでいる。1091は扁平楕円礫を打撃分割により打面形成し，縁辺部のほぼ同一打面から同方向に複数枚の剥片を作出している。1093は扁平楕円礫を打撃分割により打面形成し，縁辺部へ向かって若干打面転移をしながら剥片を剥いでいる。

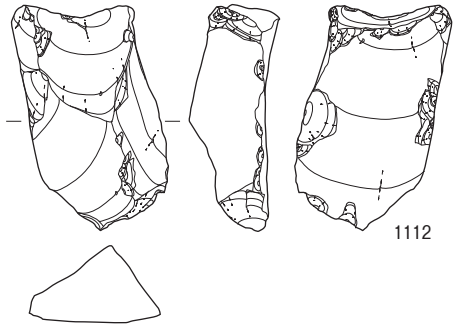
1092・1094 ～ 1102は黒曜石製である。1092・1094は平坦面を打面にして表裏両面に剥離面がみられる。1095は小角礫の分割面を打面にして剥片を剥いでいる。1096・1097は自然面を有せず，剥離方向にも規則性が

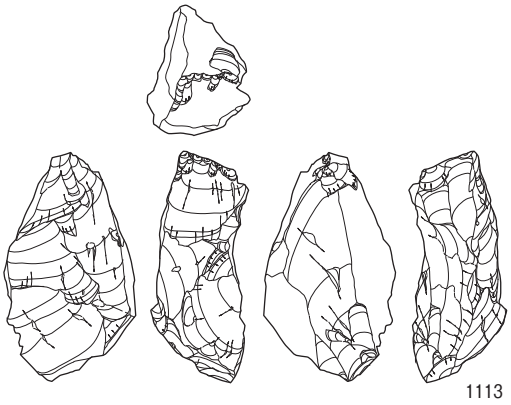


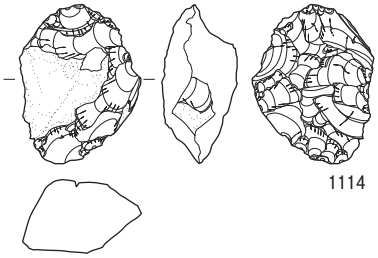
第375図　異形石器

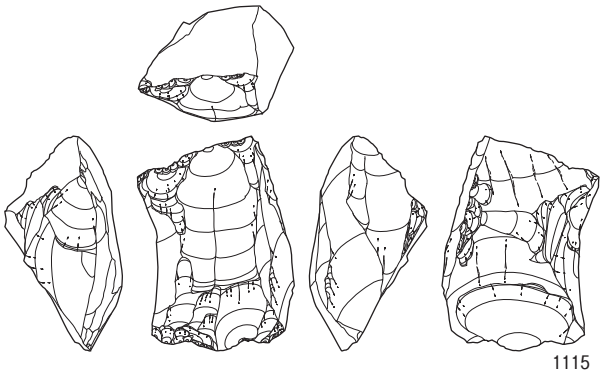


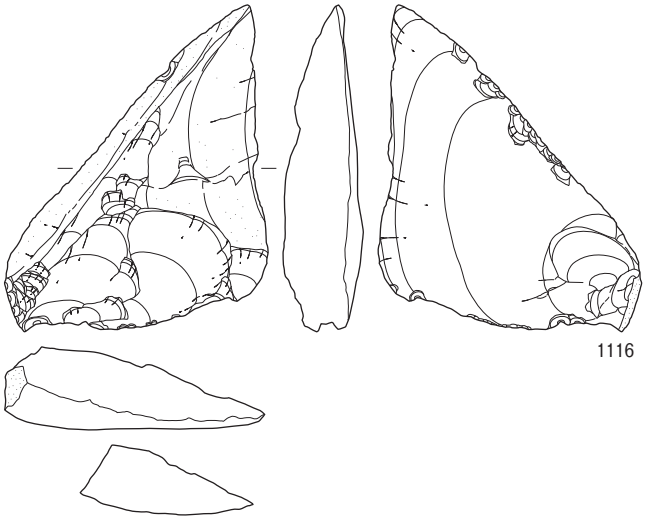


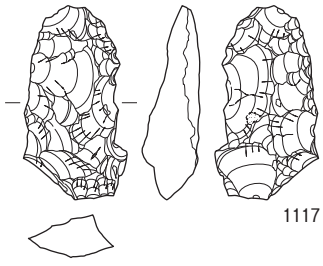


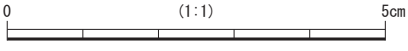






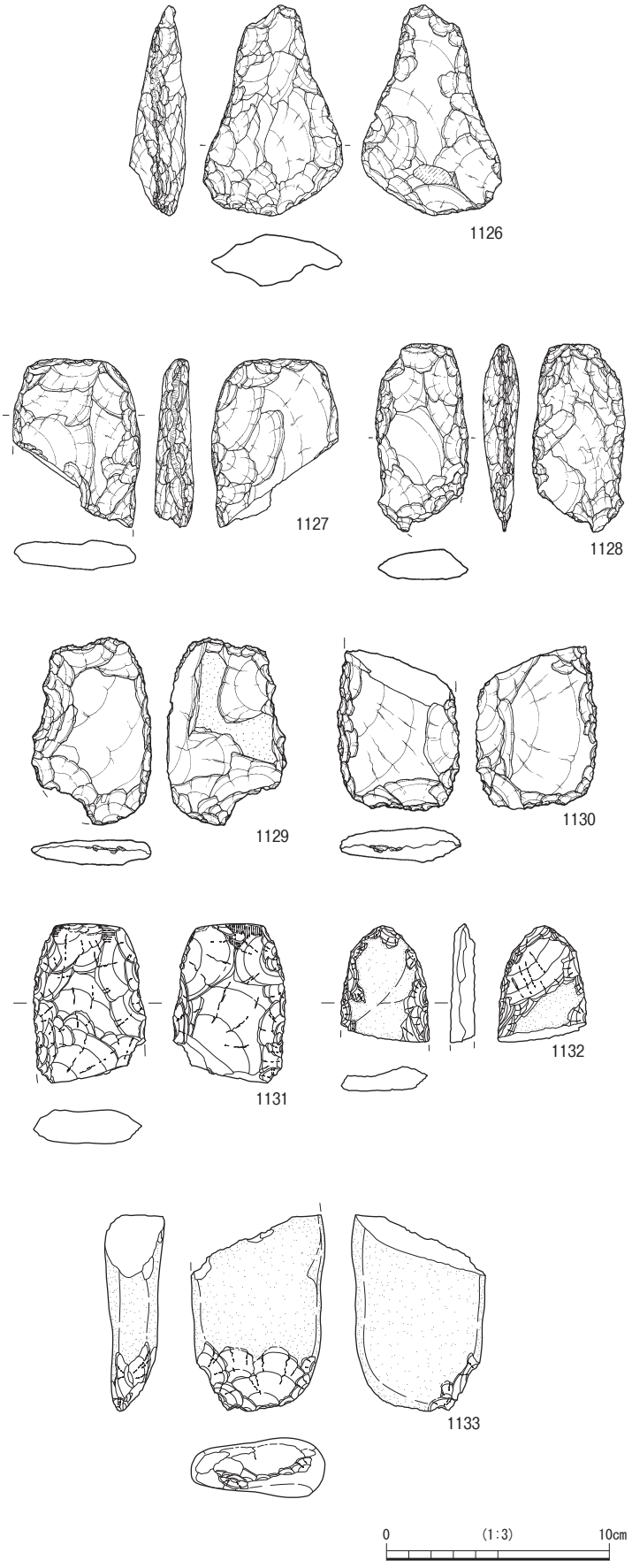






第376図　器種不明石器

第377図　打製石斧（1）



第378図　打製石斧（2）

見いだせない。1098・1099・1100は一部に自然面を残し，剥離方向に規則性が見いだせない。1099は一部に自然面を残し，打面転移しながら剥離が行われている。1102は自然面を有し，周辺から中心に向かって剥離を行っている。1104は自然面を有せず，中心から周辺に向かって剥離を行っている。チャート製である。1103はほとんど原石の形状を残している。

1105は水晶製で，礫を打撃分割により打面形成した後，中心から周辺に向かって剥離を行っている。

異形石器（第375図1106 ～ 1109）

1106 ～ 1109は異形石器である。4点を図化した。1106は黒曜石製で，1.7cm程の小型のものである。身中央部分を中心として研磨が施される局部磨製である。先端部は丸く収まり，脚部付け根には両側縁から抉りが入る。1107はチャートの剥片を素材として剥離調整を施したもので，いわゆるトロトロ石器と呼ばれるものである。表面は全面的に剥離調整が行われているが，裏面は側縁のみの調整である。先端が欠損する。1108は先端部が丸く収まり，脚部付け根には両側縁から抉りが入る。1109は黒曜石製で琴柱状の形状を呈する。

器種不明石器（第376図1110 ～ 1117）

ここでは器種の特定できないものをまとめ，8点を図化した。

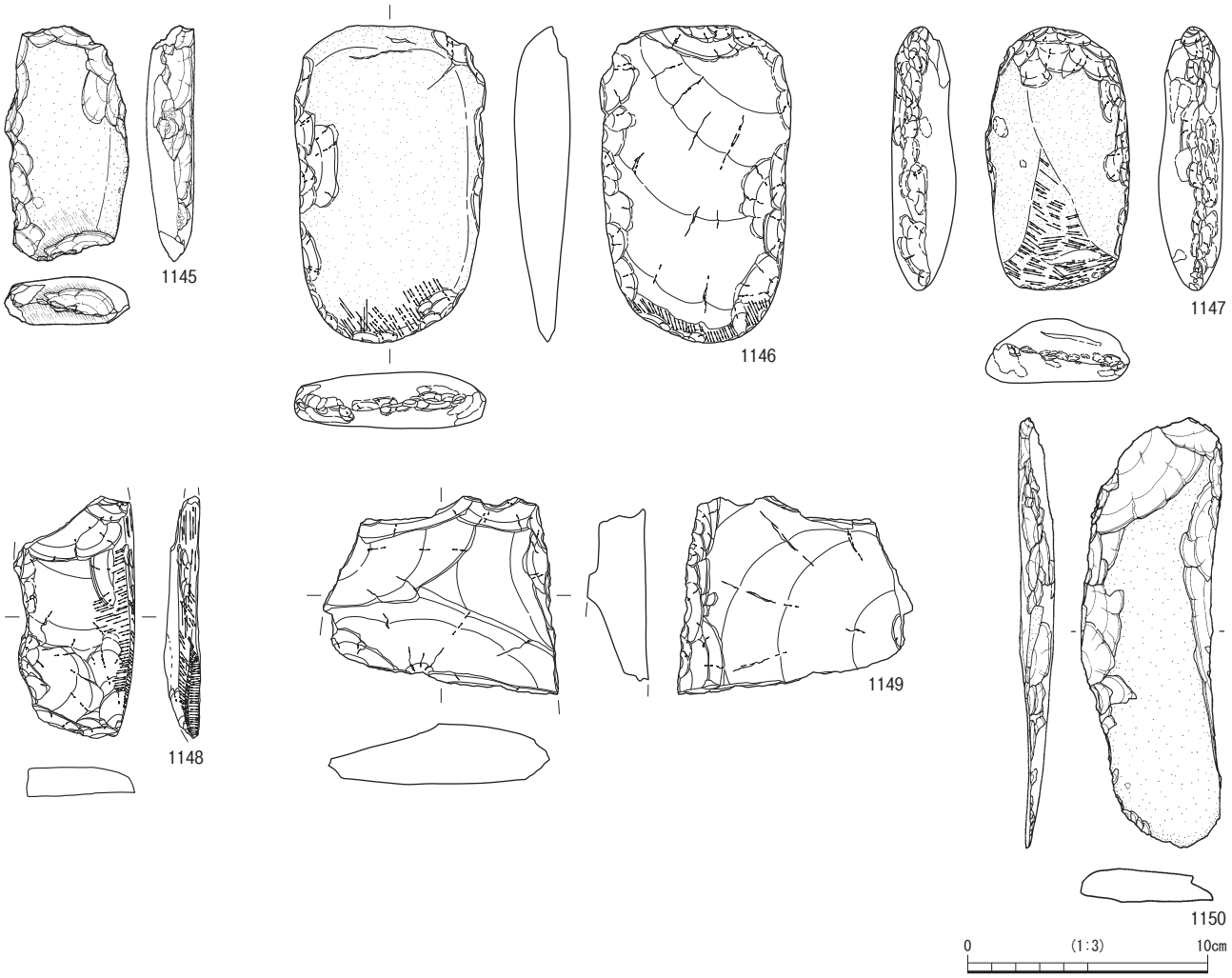
1110 ～ 1117は器種不明石器である。1110はハリ質安山岩製のもので，欠損のため全形は不明である。縁辺部を中心に押圧剥離が施されている。1112は流紋岩製で，表面は頂部を中心に放射状に剥離が行われている。裏面は主要剥離面が残る。1113は黒曜石製である。全長3.0cm程の角柱状で，楔形石器に類する。1114は2.0cm程の小型のもので，表面には自然面を残し，裏面は全面的に剥離がされている。1115は水晶製で，厚みのある角状を呈する。裏面は細長剥片を剥離した痕跡が認められる。1116は珪質頁岩製で，三角形状の剥片である。側面には自然面を残す。側縁の一部に使用痕のような痕跡が認められる。使用痕剥片に近い。1117は2.5cm程の小型のもので，両面に押圧剥離が施されている。楔形石器に類する。

打製石斧（第377図1118 ～第378図1133）

1118 ～ 1133は打製石斧である。石材はホルンフェルスが大部分を占める。1118は長楕円形で，ほぼ端部のみに調整を施し，刃部形成を行っている。1121は全面的に粗い剥離調整を施し，全体的

1134
1135
1136
1137
1138
1139
1140
1141
1142
1143
1144
0
(1:3)
10cm

第379図　磨製石斧



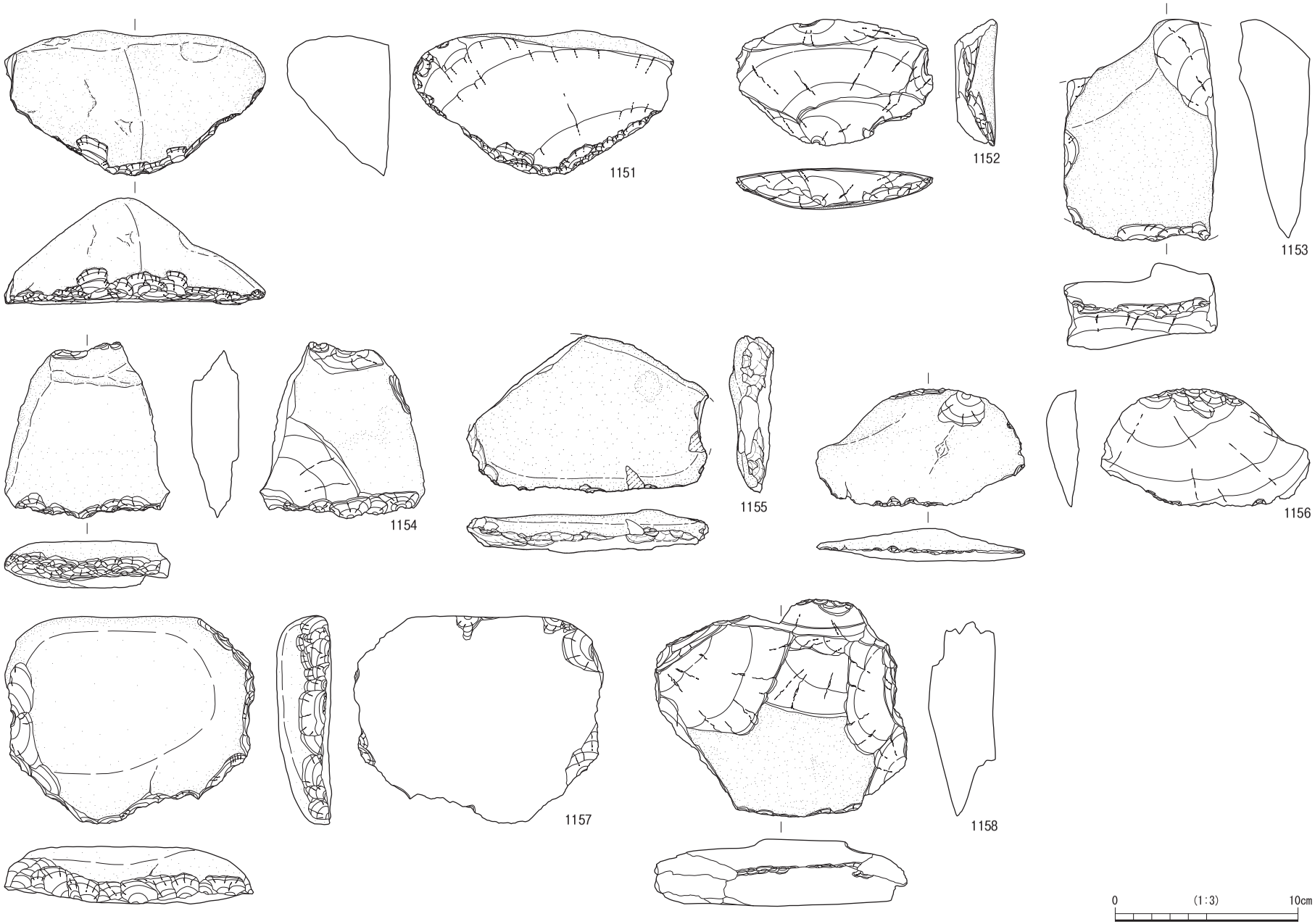
第380図　局部磨製石斧・石斧未製品

な成形と刃部形成を行っている。基部の方が厚くなっている。1119は礫を打面分割して素材剥片を得た後，側縁部を剥離調整している。1120は扁平な礫を用いており，側縁の一部に調整を行っている。両端部が刃部として使用されており，下端部は使用によるものか欠損している。1122は表面を中心に粗い剥離調整が施され，刃部は欠損している。1123は頁岩製で，素材剥片を得た後，全体的に粗い調整を施している。1124は礫を打面分割して素材剥片を得た後，裏面と片側縁に調整を施している。表面は自然面が残る。1125は薄い扁平礫を素材とし，側縁部に軽く調整を施している。刃部は使用により欠損している。1126は撥形を呈する。全体に粗い調整が施されている。1127は下端部が欠損しているものの，全体に剥離調整が施され，整った形状を呈する。1128は幅4.0cmと小型のものである。全体的に粗い調整を施し，基部から刃部へ向けて薄くなる。刃部は一部欠損している。1129は礫を打面分割して素材剥片を得た後，全体的に粗い調整を施している。裏面の一部に自然面を残す。1130は剥片素材の側縁部を中心に細かい剥離調整を施している。基部は欠損している。1131は剥片素材に全体的に粗い調整を施している。下部は欠損している。1132は薄い扁平礫を素材とし，側縁部を中心に調整を施している。刃部は欠損している。1133は基部側が欠損している。自然面を活かしており，ほとんど調整は認められない。使用のためか刃部も刃が欠けている。

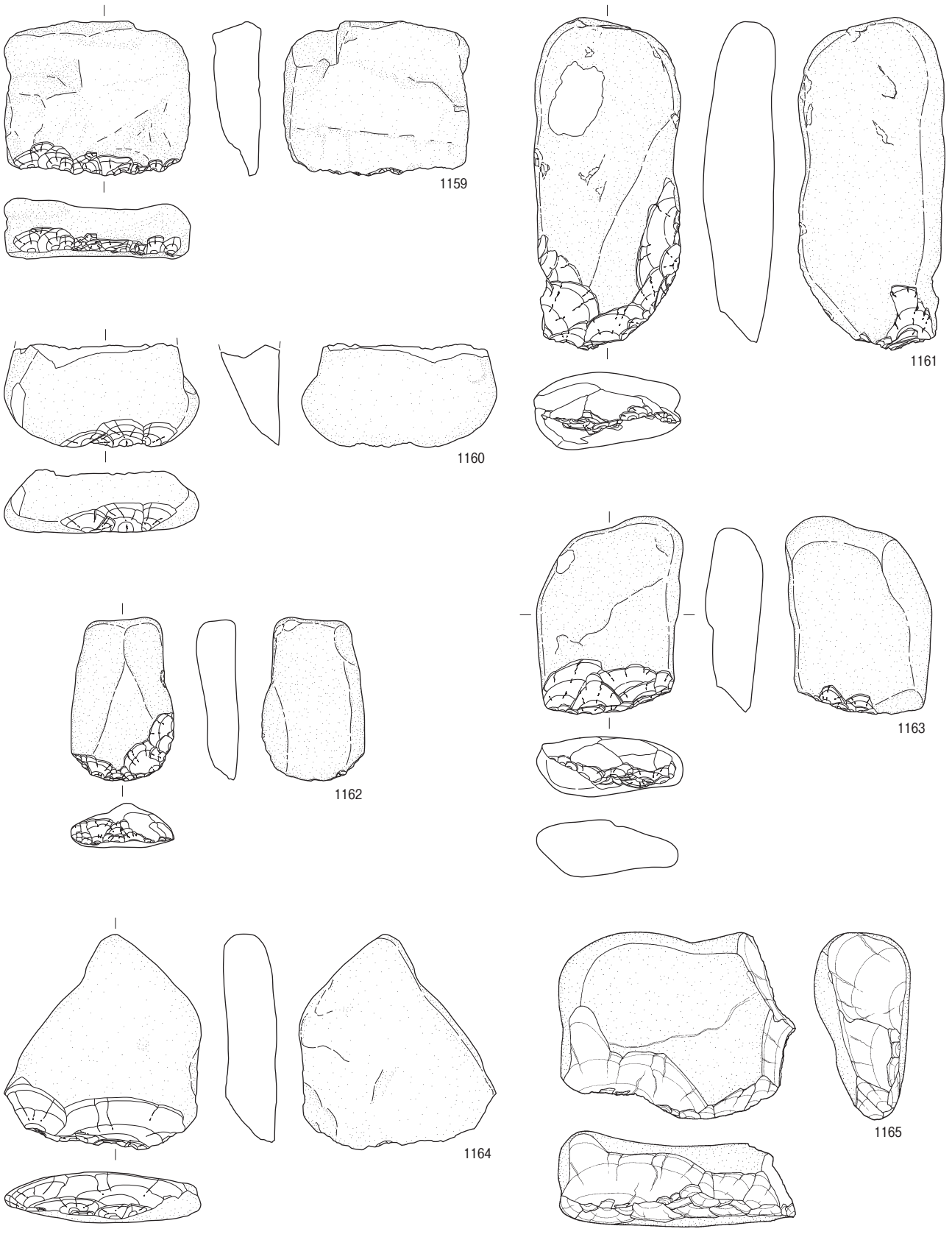
磨製石斧（第379図1134 ～ 1144）

1134 ～ 1144は磨製石斧である。11点を図化した。

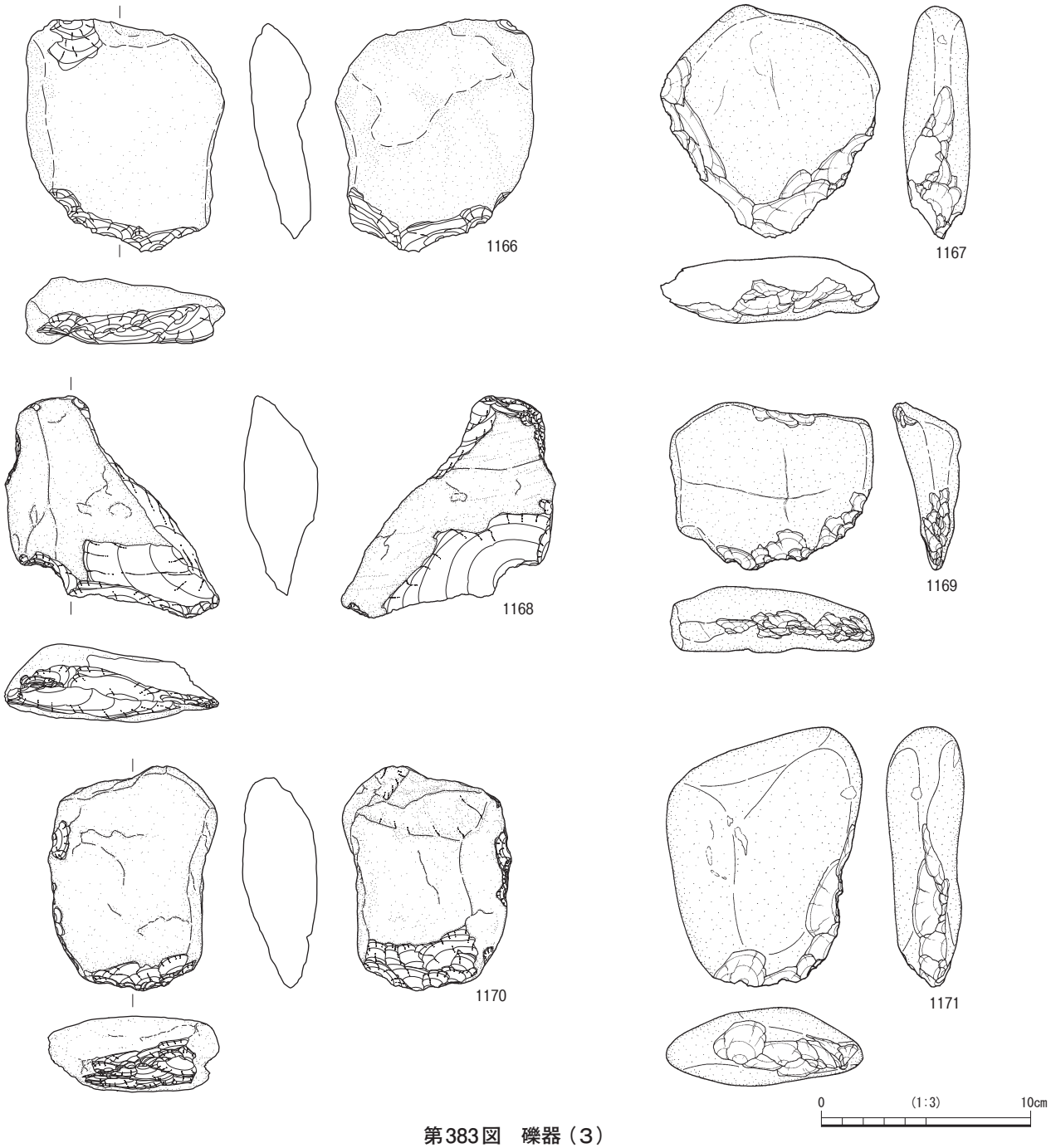
1134は全体的に剥離調整を行った後，研磨を施している。素材剥片を得る際の打面分割が粗かったのか，全体的に反っている。1135は全体に粗い調整ではあるものの，整った形状を呈する。刃部を中心に丁寧な研磨が施される。1136は方形状の整った形状である。研磨によってしっかりとした刃部が形成されているが，使用により一部欠損している。1137は裏面を中心に，一部剥離の痕跡が認められる。左側面はやや湾曲している。1138の表面は自然面が活かされており，礫を打面分割して得た素材剥片を用い，裏面を中心に剥離調整を行った後研磨しているのがわかる。裏の側面の一部には剥離



第381図　礫器（1）



第382図　礫器（2）



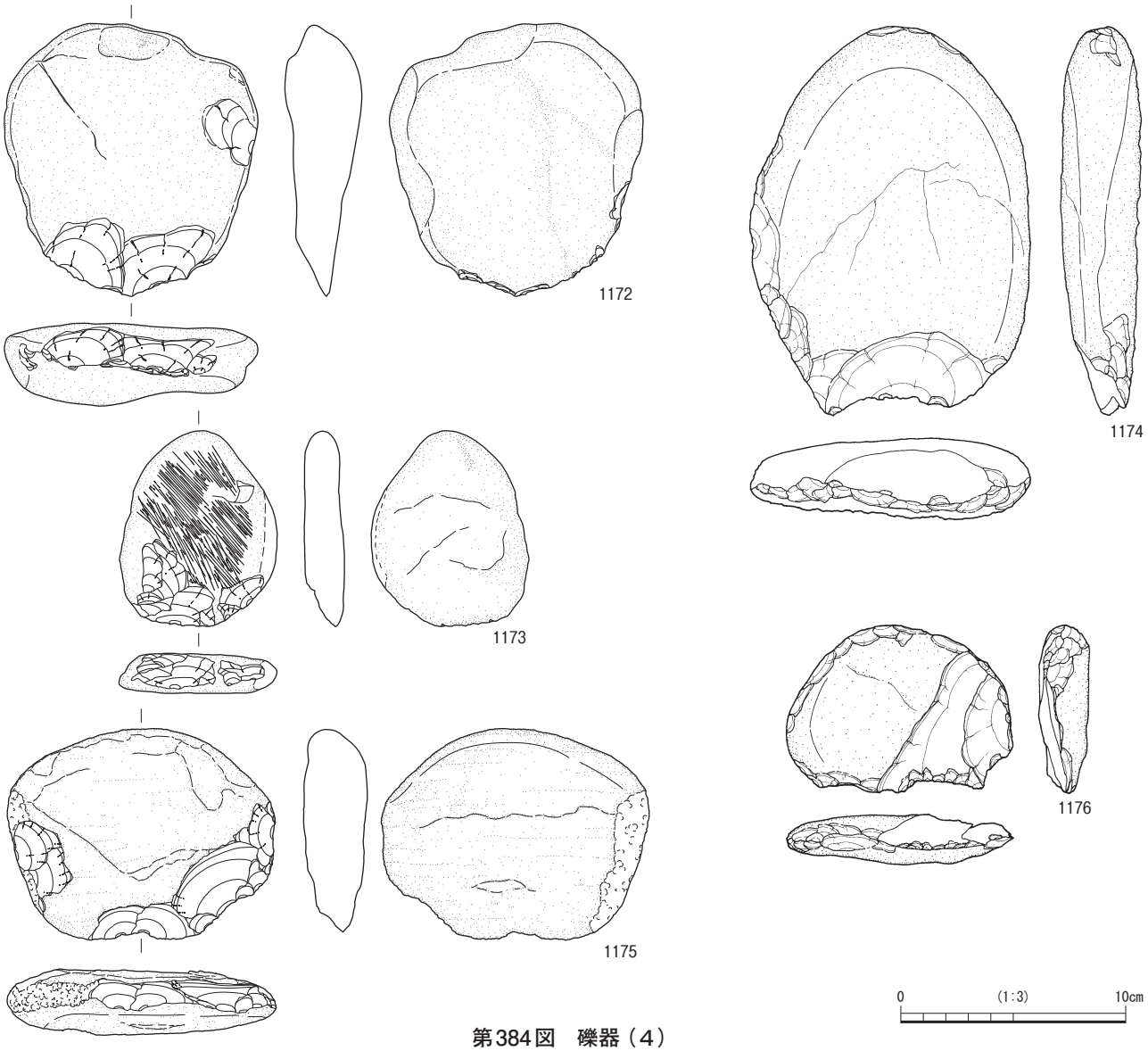
第383図　礫器（3）

痕が認められる。1139は頁岩製で，全体に粗い剥離調整を行った後，研磨が施されている。使用により刃部は一部刃こぼれしている。1140は全体に粗い剥離が施されており，厚みが均一ではない。1141は，基部側が欠損している。刃部は使用によるものと思われる剥離が認められ，刃部の一部が刃こぼれしている。1142は全長7.0cmと小型のものである。裏面は全体的に大きく剥離している。1143は丁寧な研磨が施されているもので，刃部がやや細くなっている。基部側は欠損している。1144は裏面に研磨が十分施されていない。刃部側は欠損している。

局部磨製石斧（第380図1145 ～ 1147）

1145 ～ 1147は局部磨製石斧である。3点を図化した。

1145は礫を打面分割して素材剥片を得た後，裏面と側縁の一部に調整を施している。表面は自然面が残る。刃部に研磨が認められることから，ここでは局部磨製石斧として扱ったが，磨製石斧の未製品の可能性も考えられる。1146・1147は，表面は自然面が活かされており，礫を打面分割して得た素材剥片を用い，側縁を中心に剥離調整を行った後，一部を研磨している。刃部は一部刃こぼれしている。1145・1146はやや薄めのもの，1147はやや厚めのものである。



第384図　礫器（4）

石斧未製品（第380図1148 ～ 1150）

1148 ～ 1150は石斧の未製品である。3点を図化した。

1148は剥片素材の片面に研磨を施している途中の未製品である。1149は未製品である。剥片素材に粗い剥離を施し，形状を整える途中と思われる。ここでは打製石斧の未製品として扱ったが，礫器等，他の器種の可能性も考えられる。1150は細長の薄い剥片素材で，側縁の一部を中心に調整が施されている。未製品であり，ここでは石斧として扱ったが，薄手であることと，やや湾曲していることから，石斧以外の器種の可能性も考えられる。

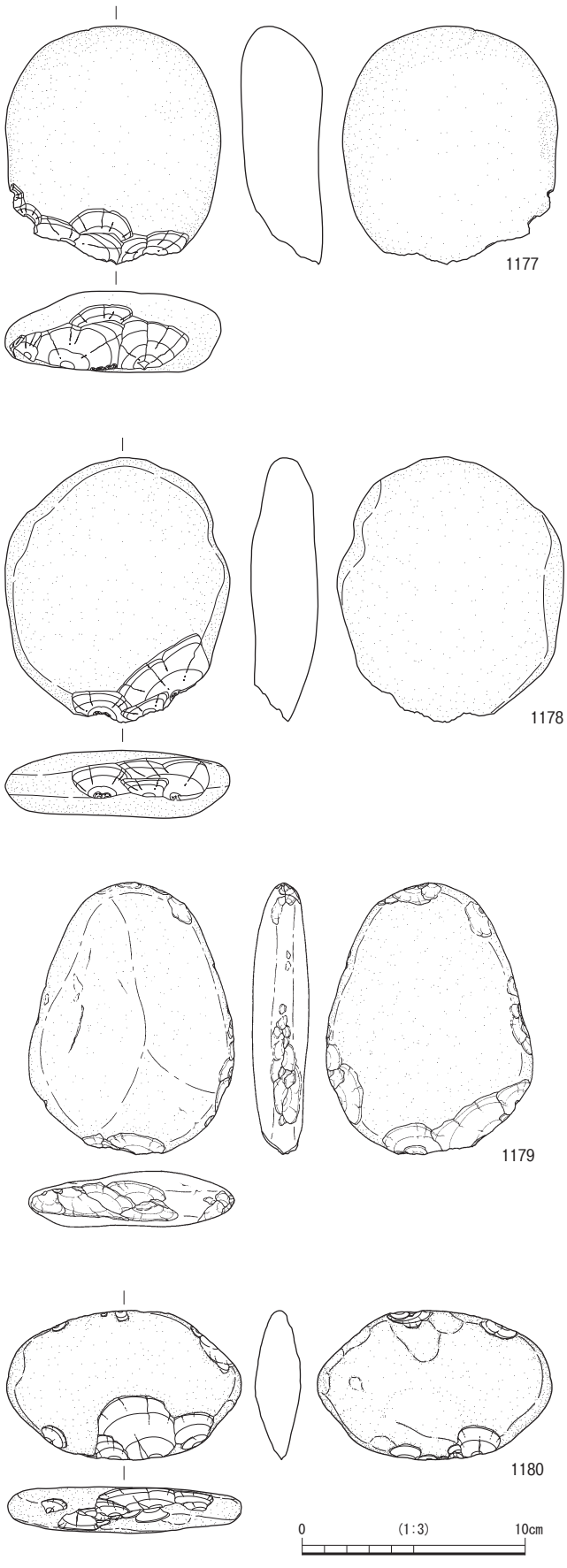
礫器（第381図1151 ～第385図1180）

1151 ～ 1180は礫器である。30点を図化した。石材はホルンフェルスが大多数で，全体の7割以上を占めている。

1151 ～ 1158は扁平な楕円礫を分割した後，幅広剥片を素材として刃部調整を行ったものである。1151は側縁部を両面から粗い剥離により刃部形成したものである。1152は打ち欠きによるもので，ほとんど刃部調整が認められない。1153は礫の分割により，鋭角な縁辺を作出した後，粗い刃部調整を施している。1154は扁平な楕円礫の片側縁を打ち欠いて薄い縁辺を作出した後，両面から粗い刃部調整が施されている。1155・1156は扁平な楕円礫を分割して刃部を形成したもので，刃部調整はほとんど認められない。1157は側縁部を片面から粗い剥離により刃部形成したものである。1158は打ち欠きにより鋭角な刃部を形成したもので，刃部調整は認められない。

1159 ～ 1171は扁平な楕円礫を分割せず，楕円礫の端部に粗い剥離調整を施すことによって刃部を形成したものである。1159・1160・1162・1164は片面からの粗い調整である。1159は安山岩，1160は砂岩製で，本遺跡の礫器では少ない素材である。1162は粗い剥離調整が行われている。

1161・1163・1165 ～ 1171は両面から粗い調整が行われるものである。1161は刃部先端に使用によると思われ



第385図　礫器（5）

る刃こぼれが見られる。1161・1163は細長い楕円礫の端部を打ち欠いて刃部を形成している。1165は方形状の楕円礫の二辺を打ち欠いて刃部を形成したもので，一辺は裏面から剥離調整が行われている。1166 ～ 1168・1170は両面からの打ち欠きによって刃部を形成したものである。1169は刃部先端に使用によると思われる刃こぼれが見られる。

1172 ～ 1180は円礫を分割せず端部に粗い調整を施すことによって刃部を作出したものである。1172 ～ 1178は円礫の端部を片面側から粗く打ち欠いて刃部を形成している。1179・1180は端部を両面から打ち欠いている。

磨石・敲石類（第386図1181 ～第402図1371）

1181 ～ 1371は磨石・敲石類である。191点を図化した。本遺跡では多数の磨石・敲石が出土したが，使用状況を観察したところ，磨面と敲打痕の両方が確認できるため，明確に磨石・敲石の分類はせず，磨面・敲打痕の状況から以下のようにⅠ～Ⅴ類に分類した。

Ⅰ類：全面的もしくは部分的に磨面を有し，敲打痕が不明瞭なもの。

Ⅱ類：全面的もしくは部分的に磨面を有し，平坦部に明瞭な敲打痕がみられるもの。側面にも敲打痕がみられるものがある。

Ⅲ類：全面的もしくは部分的に磨面を有し，両側面に敲打痕がみられるもの。

Ⅳ類：側面の一部に敲打痕がみられるもの。磨面がみられるものもある。

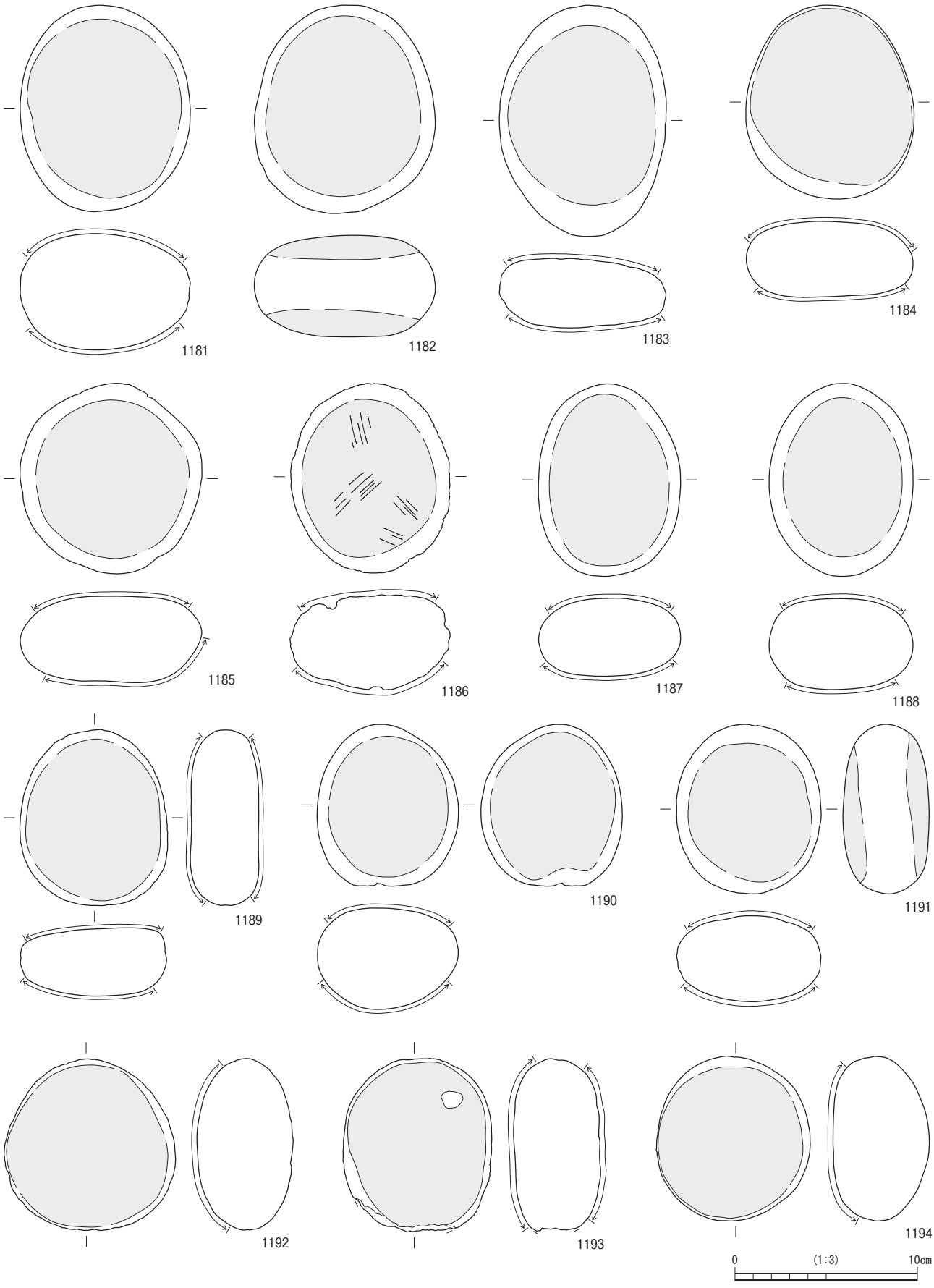
Ⅴ類：欠損あるいは剥離が激しく，分類が不可能なもの。

Ⅰ類（第386図1181 ～第392図1271）

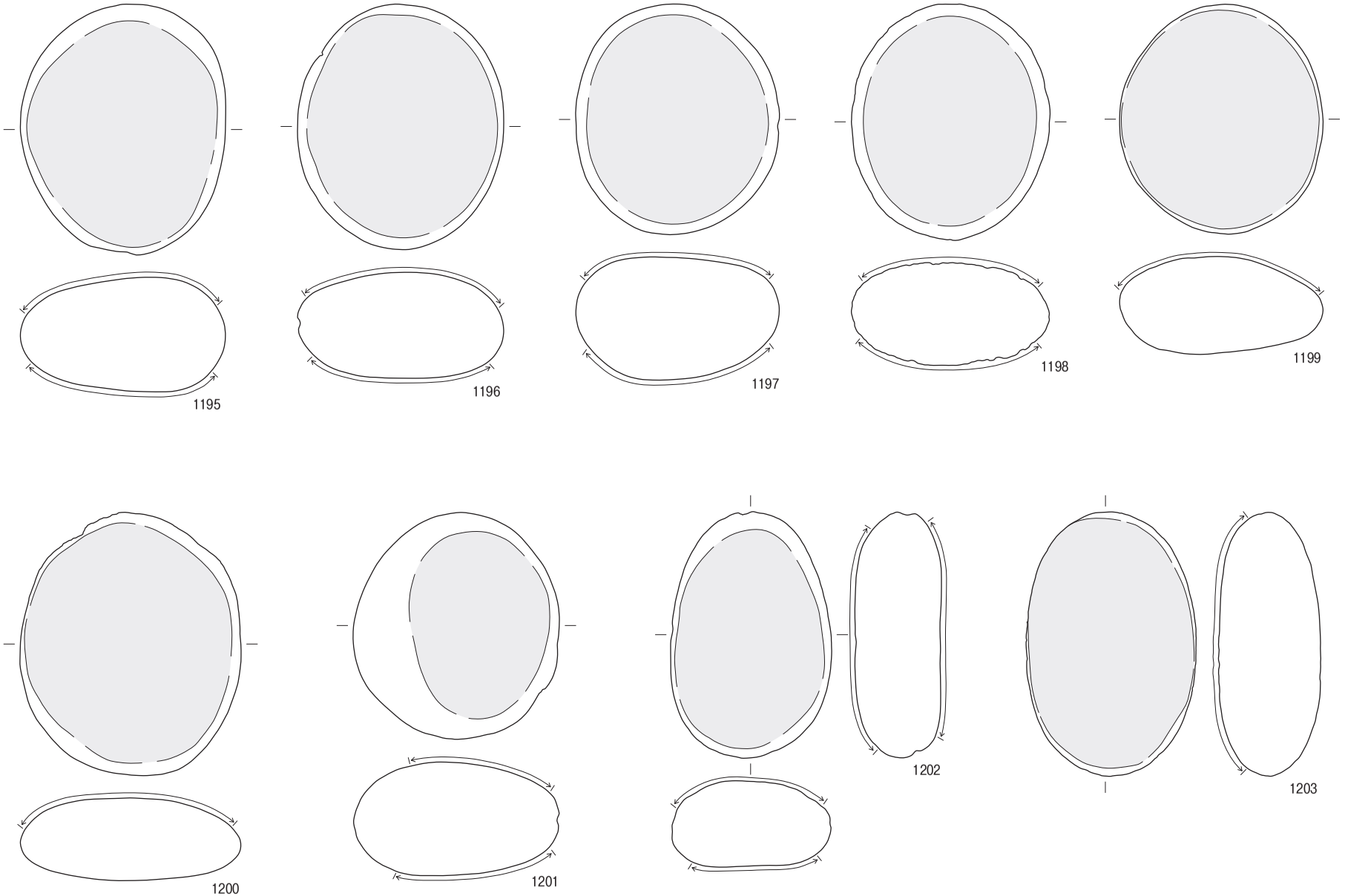
1181 ～ 1271は，全面的もしくは部分的に磨面を有し，敲打痕が不明瞭なものである。石材は安山岩が9割近くを占めるが，わずかに花崗岩・砂岩・玄武岩製のものも認められた。

1181・1184 ～ 1186・1193・1197・1200・1203・1205・1206・1209・1210・1211・1218・1220 ～ 1223・1226・1229・1233 ～ 1235・1242 ～ 1245・1250・1256・1260・1263 ～ 1265・1268・1270は片面に明瞭な磨面が認められるものである。1263・1270は側面も使用している。1185・1193・1206・1209・1210・1260はわずかに敲打と思われる痕跡が認められる。1193・1210は花崗岩製で，きれいな楕円形を呈する。1221は拳大の楕円礫を使用している。

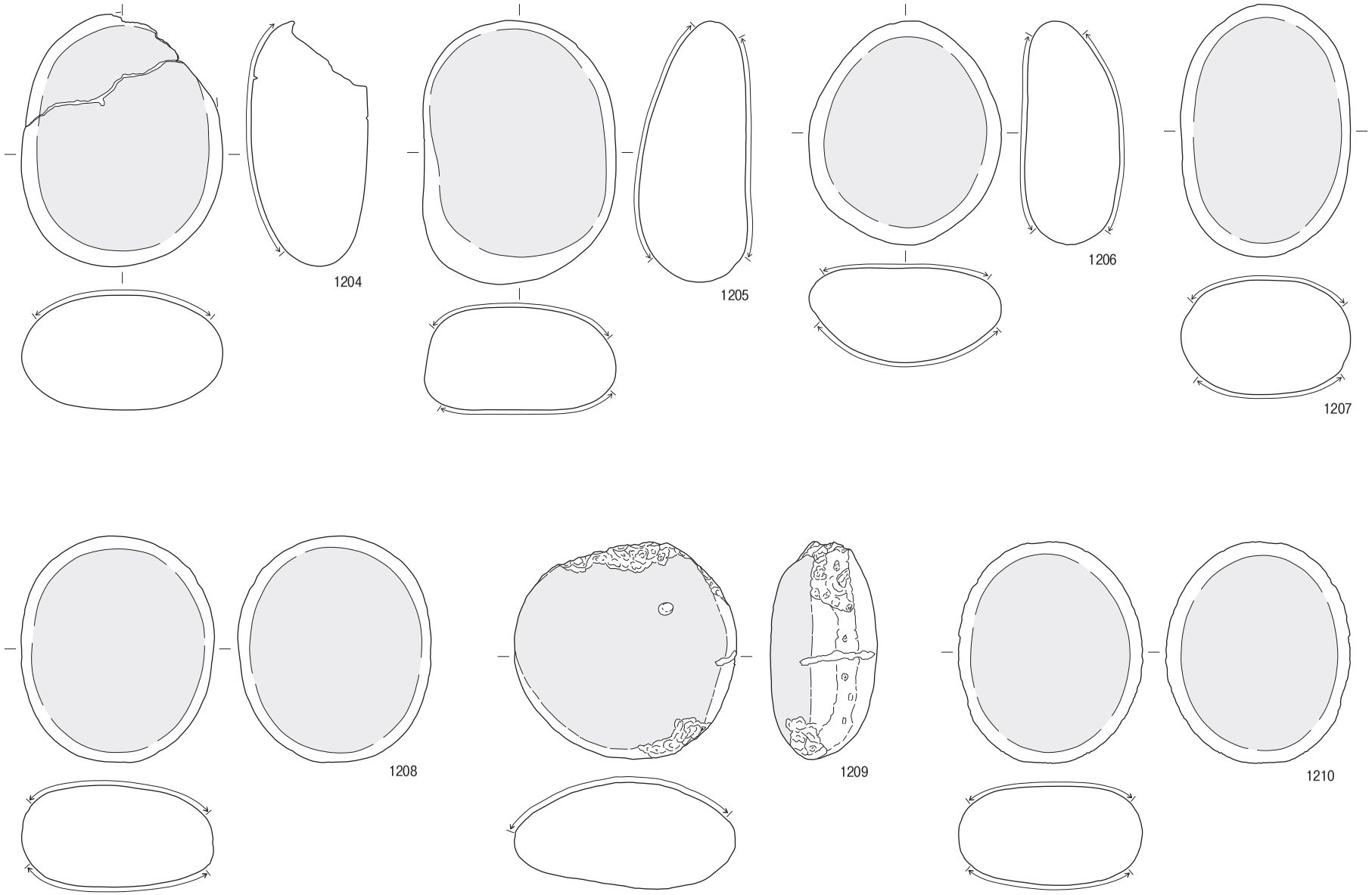
1183・1187 ～ 1189・1191・1195・1196・1198・1201・1204・1207・1208・1212・1214 ～ 1217・1219・1227・1228・1230 ～ 1232・1236・1238 ～ 1240・1246 ～ 1248・1251 ～ 1253・1255・1257・1259・1261・1267・1269は両面に明瞭な磨面が認められるものである。1201・1231・1232・1255はわずかに敲打と思われる痕跡が認められる。1189・1212・1238は側面を面取りしたきれいな石鹸状を



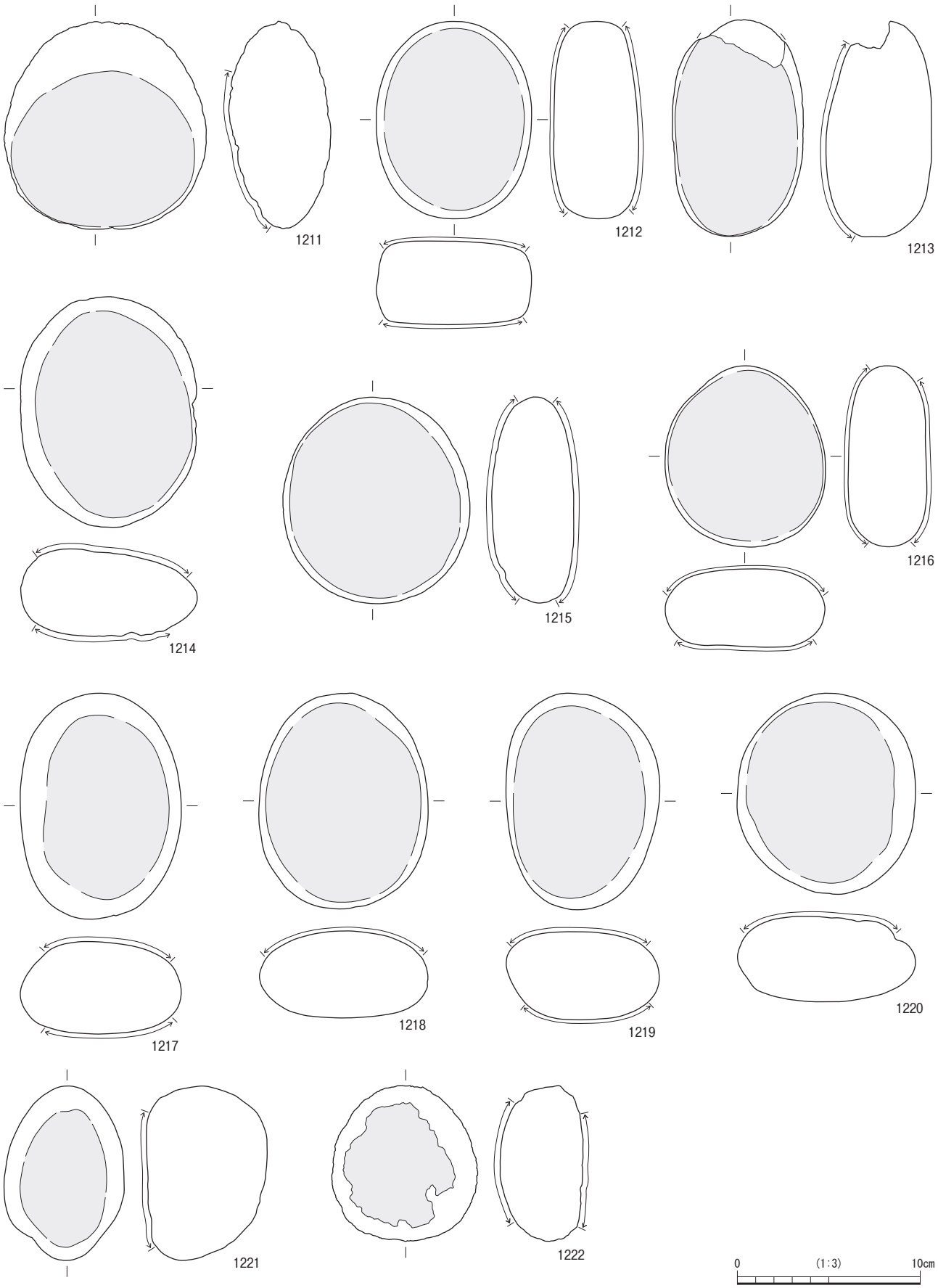
第386図　磨石・敲石類Ⅰ類（1）



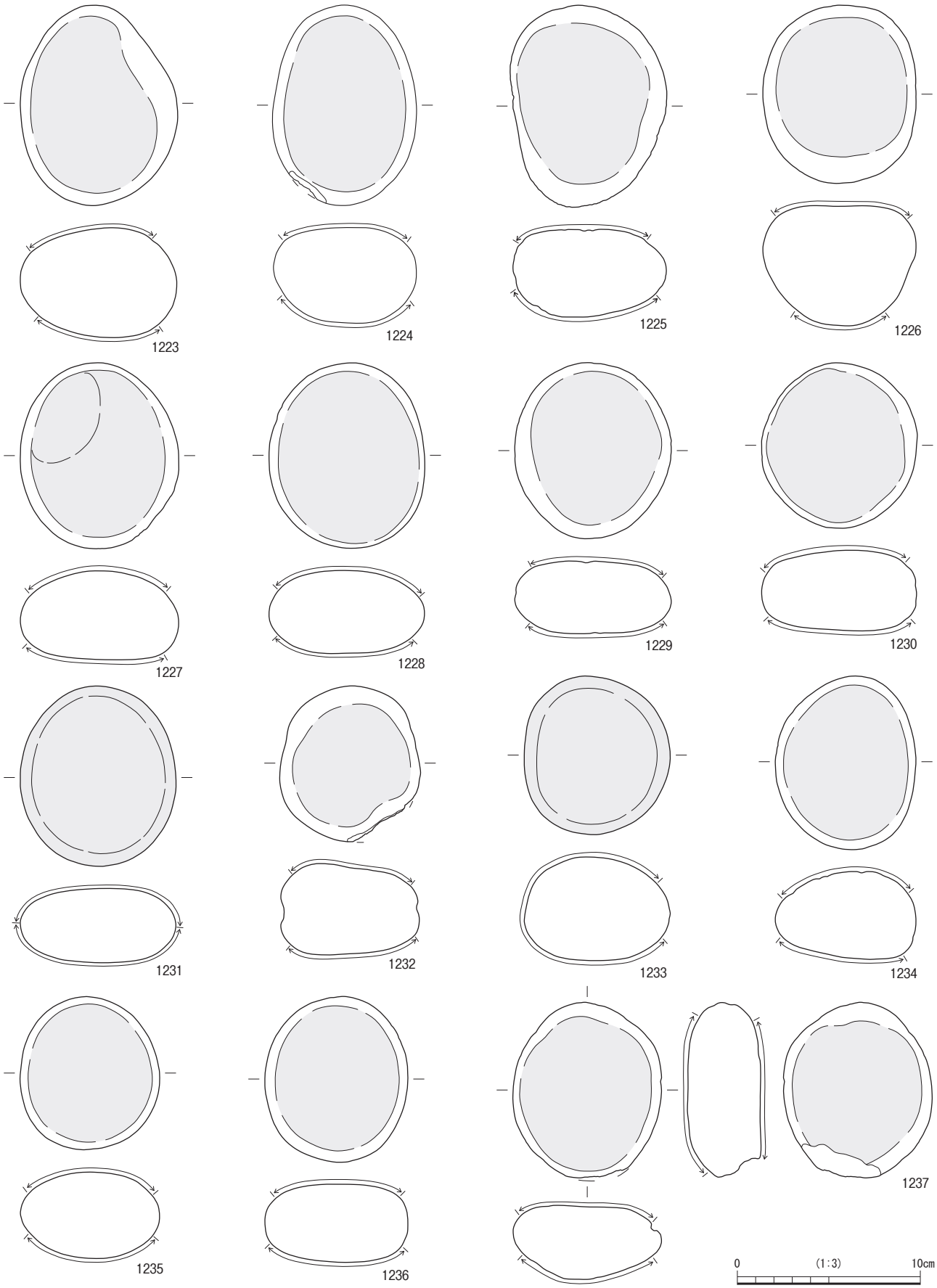
第387図　磨石・敲石類Ⅰ類（2）



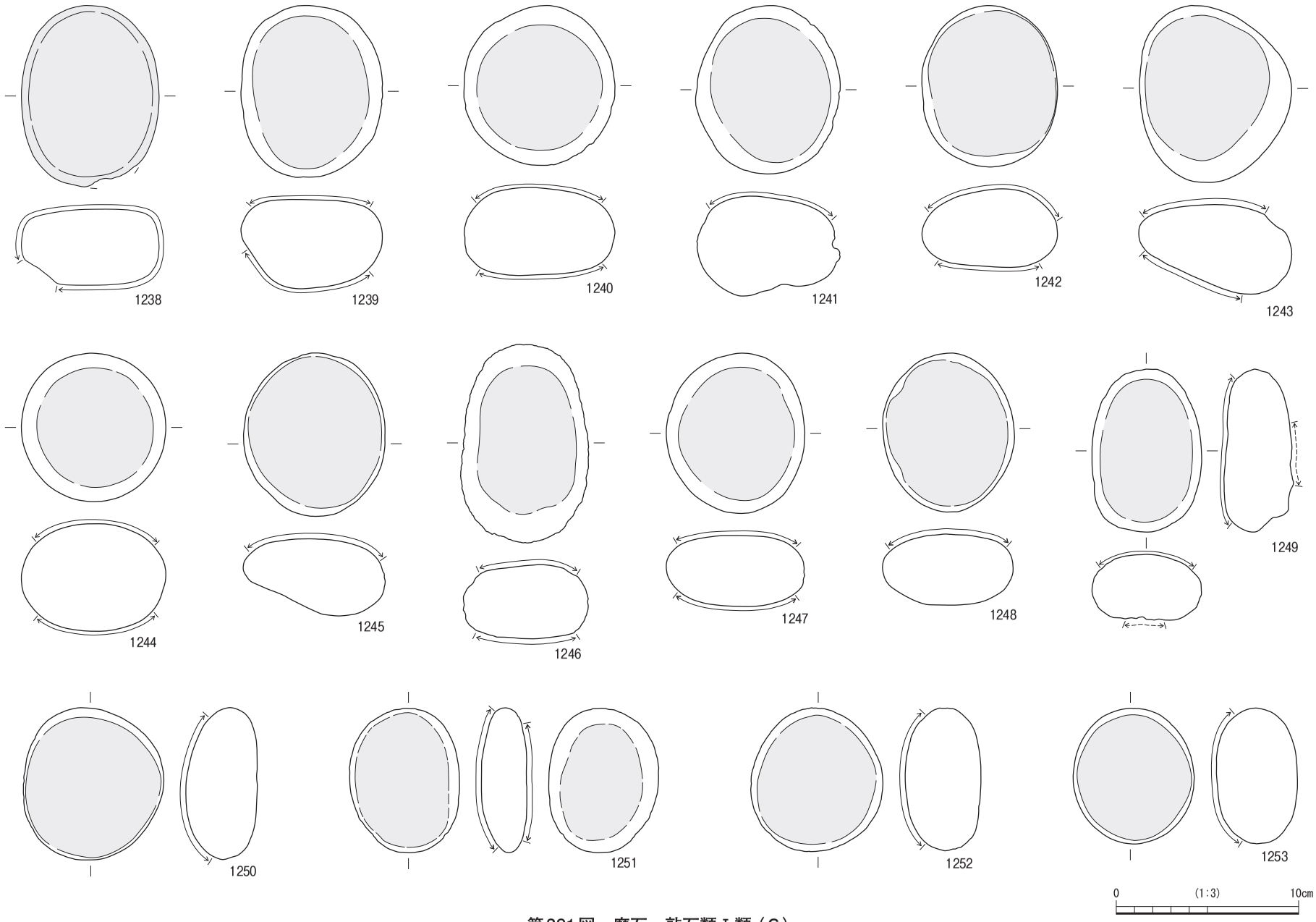
第388図　磨石・敲石類Ⅰ類（3）



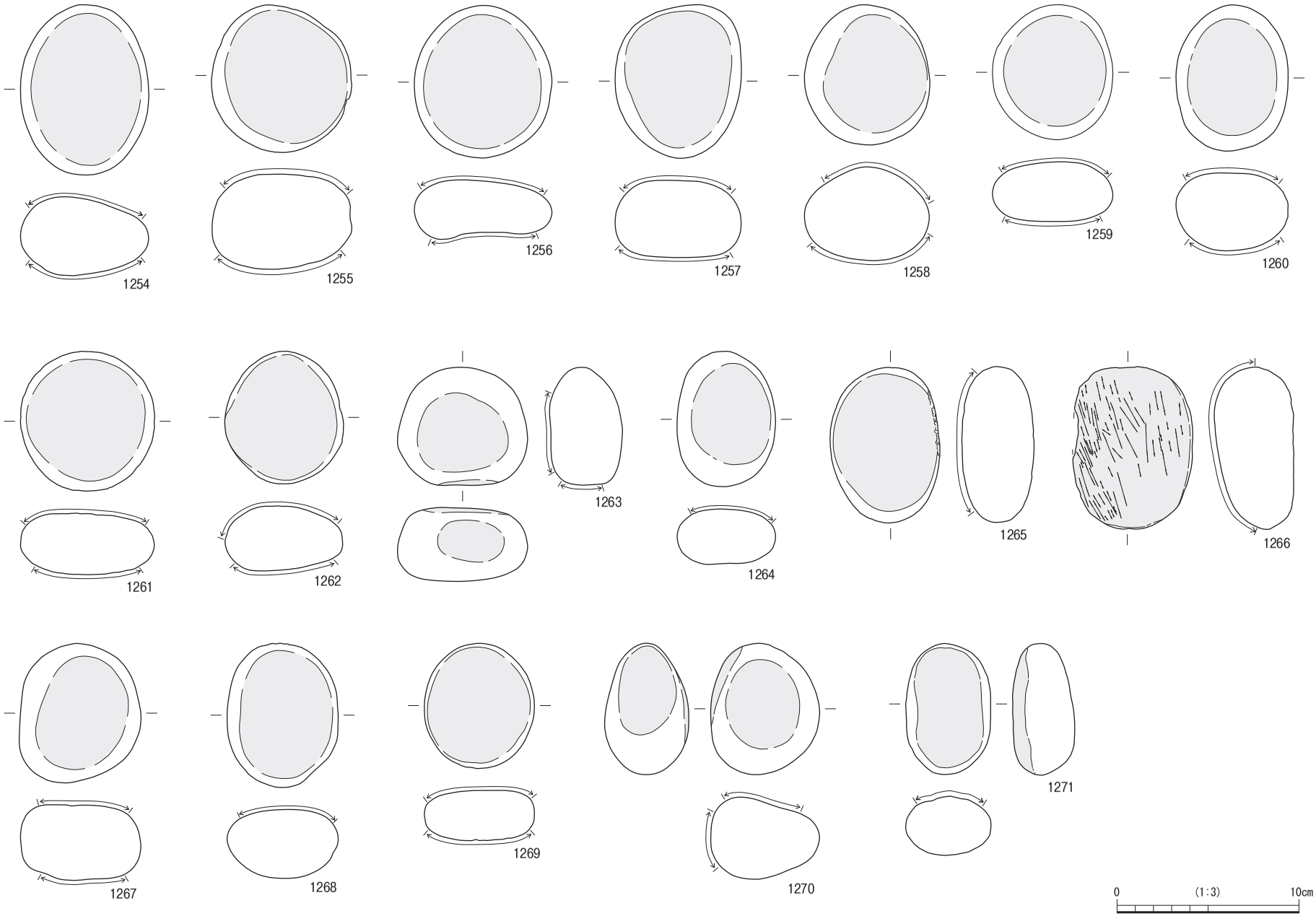
第389図　磨石・敲石類Ⅰ類（4）



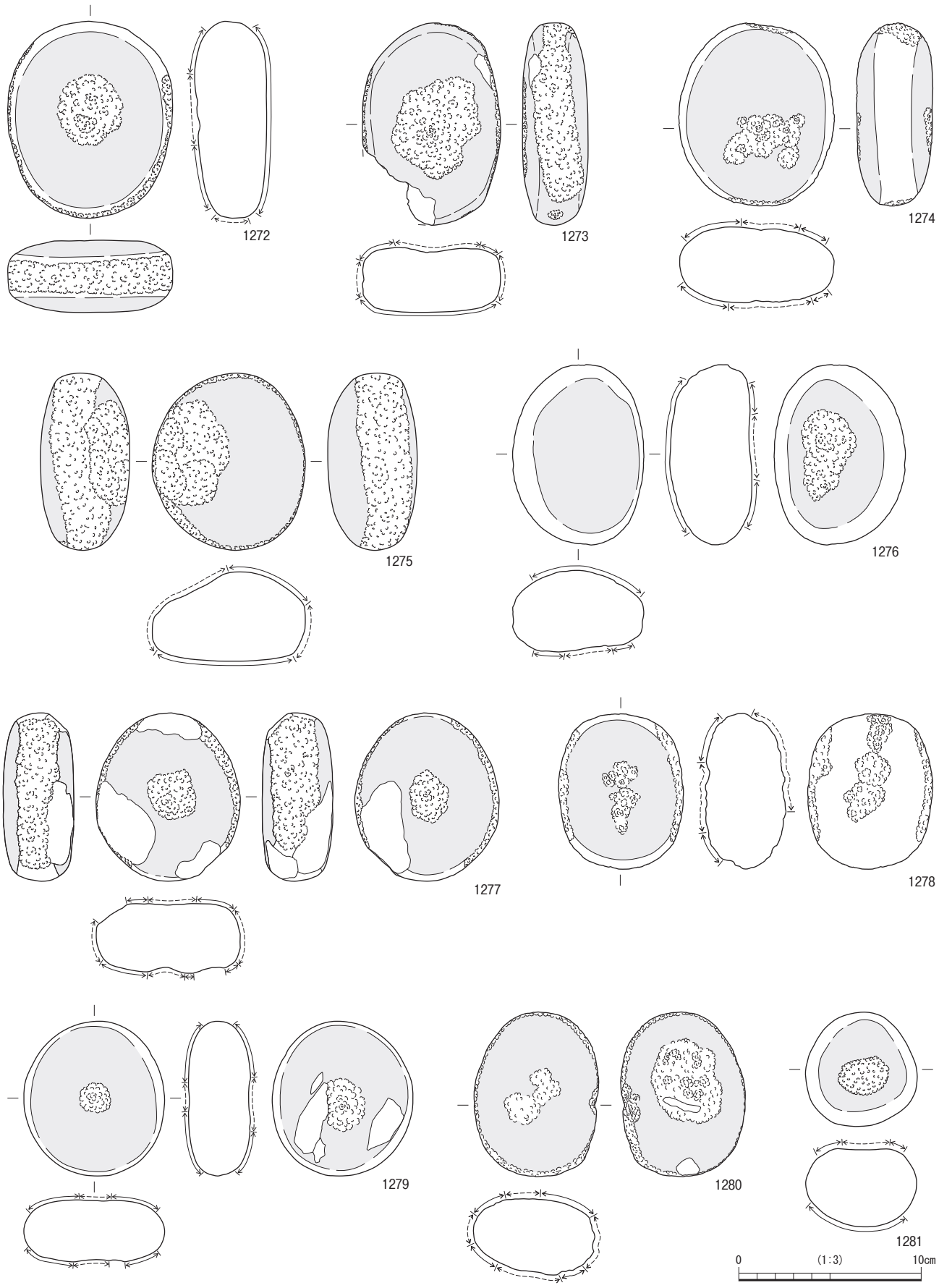
第390図　磨石・敲石類Ⅰ類（5）



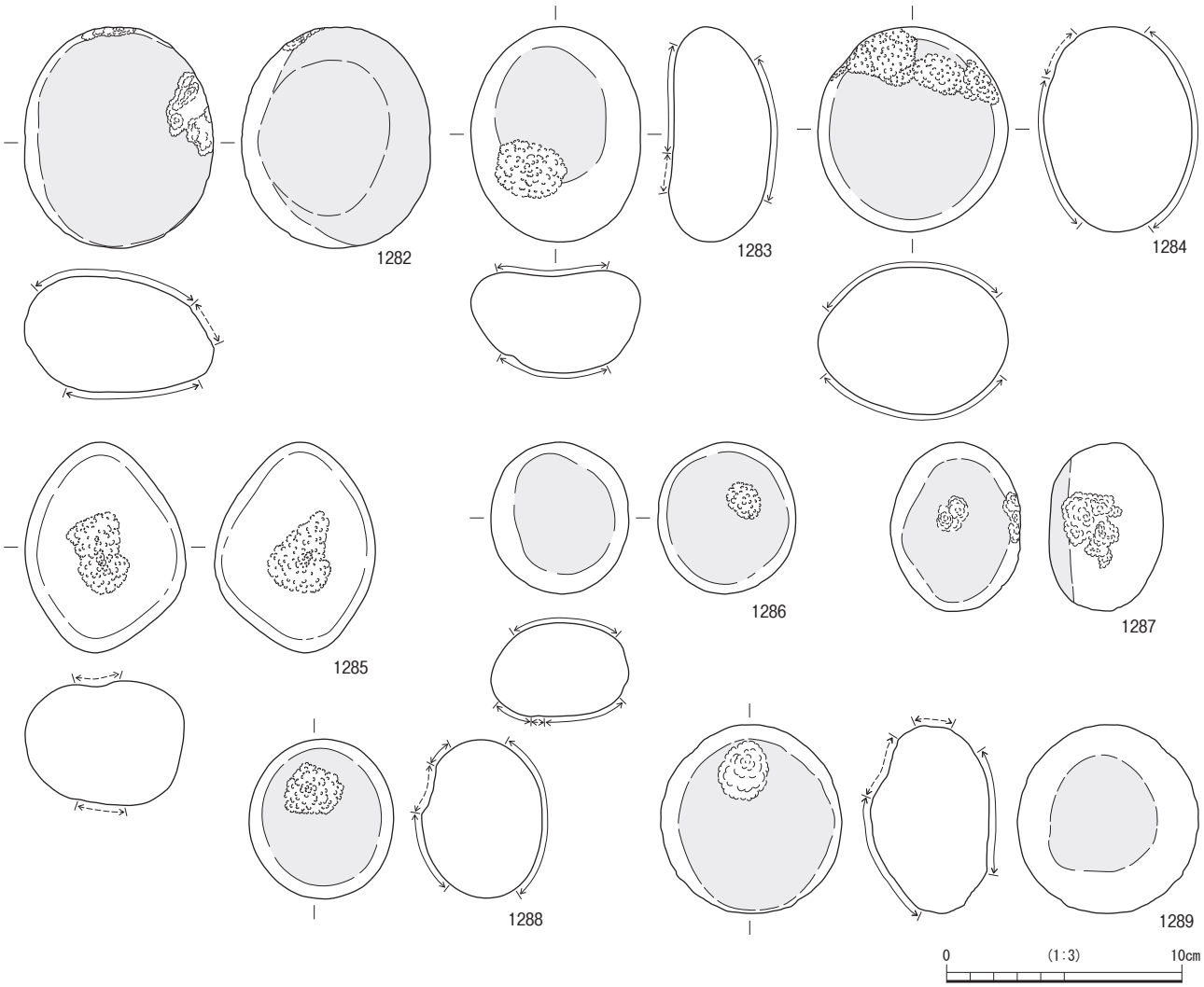
第391図　磨石・敲石類Ⅰ類（6）



第392図　磨石・敲石類Ⅰ類（7）



第393図　磨石・敲石類Ⅱ類（1）



第394図　磨石・敲石類Ⅱ類（2）

呈し，1191・1196・1198・1207・1208・1230・1231・1240はきれいな楕円形を呈する。1231・1239は砂岩製で，1240・1246は花崗岩製である。1255・1267は被熱により黒化しており，製粉作業以外の用途でも使用されたことが伺える。

Ⅱ類（第393図1272～第394図1289）

1272～1289は，全面的もしくは部分的に磨面を有し，平坦部に明瞭な敲打痕がみられるものである。側面にも敲打痕がみられるものがある。石材は安山岩が9割近くを占めるが，わずかに砂岩製のものも認められた。

1272～1274・1277～1279・1282は両面に明瞭な磨面を有するものである。1272～1274・1282は側面にも敲打痕が認められる。1273は砂岩製で一部欠損しているものの，側面を面取りしたきれいな石鹸状を呈する。1277～1279も側面を面取りしたきれいな楕円形である。1279は砂岩製である。

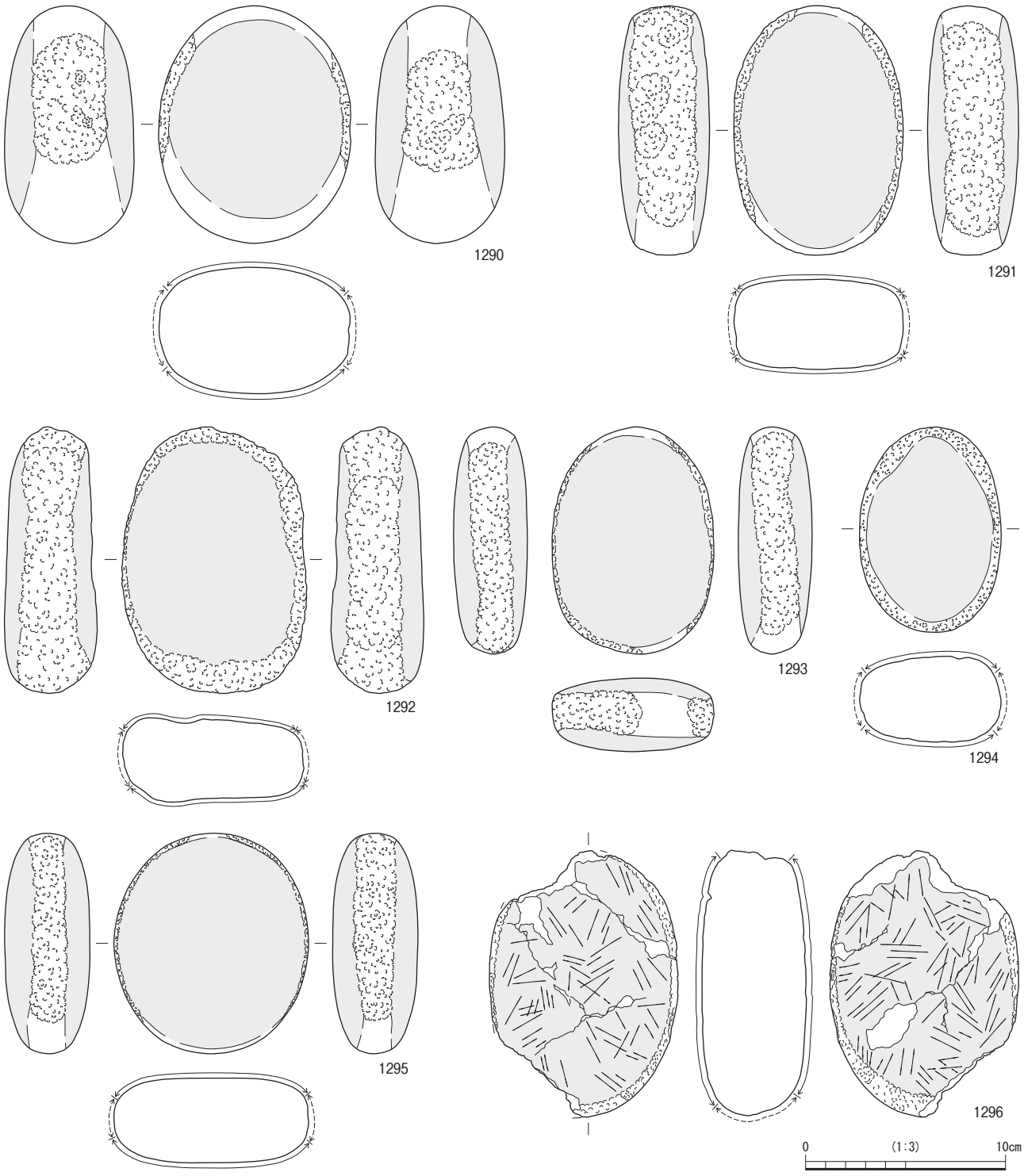
1275・1276・1281・1283・1285・1286は，片面に明瞭な磨面を有するものである。1275・1276は側面にも敲打痕が認められる。

Ⅲ類（第395図1290～第398図1325）

1290～1325は，全面的もしくは部分的に磨面を有し，両側面に敲打痕がみられるものである。石材は安山岩が7割近くを占め，他に砂岩と花崗岩製のものが見られた。

1291～1305・1308～1311・1313・1319・1320・1322・1323・1325は両面に明瞭な磨面を有するものである。1290・1291・1293～1295・1297・1299・1300・1304・1305・1319・1320はきれいな楕円形を呈する。1291～1295・1297～1301・1303・1304・1320・1323は側面にしっかりとした面取りがなされている。1297・1299・1300は敲打痕が不明瞭で，1305・1318はわずかに認められる。1295・1305・1307・1309は砂岩製，1296・1300・1302・1310・1323は花崗岩製である。

1306・1307・1314は片面に明瞭な磨面を有するものである。1307は本来両面ともに磨面を有していた可能性があるが，裏面は剥離している。



第395図　磨石・敲石類Ⅲ類（1）

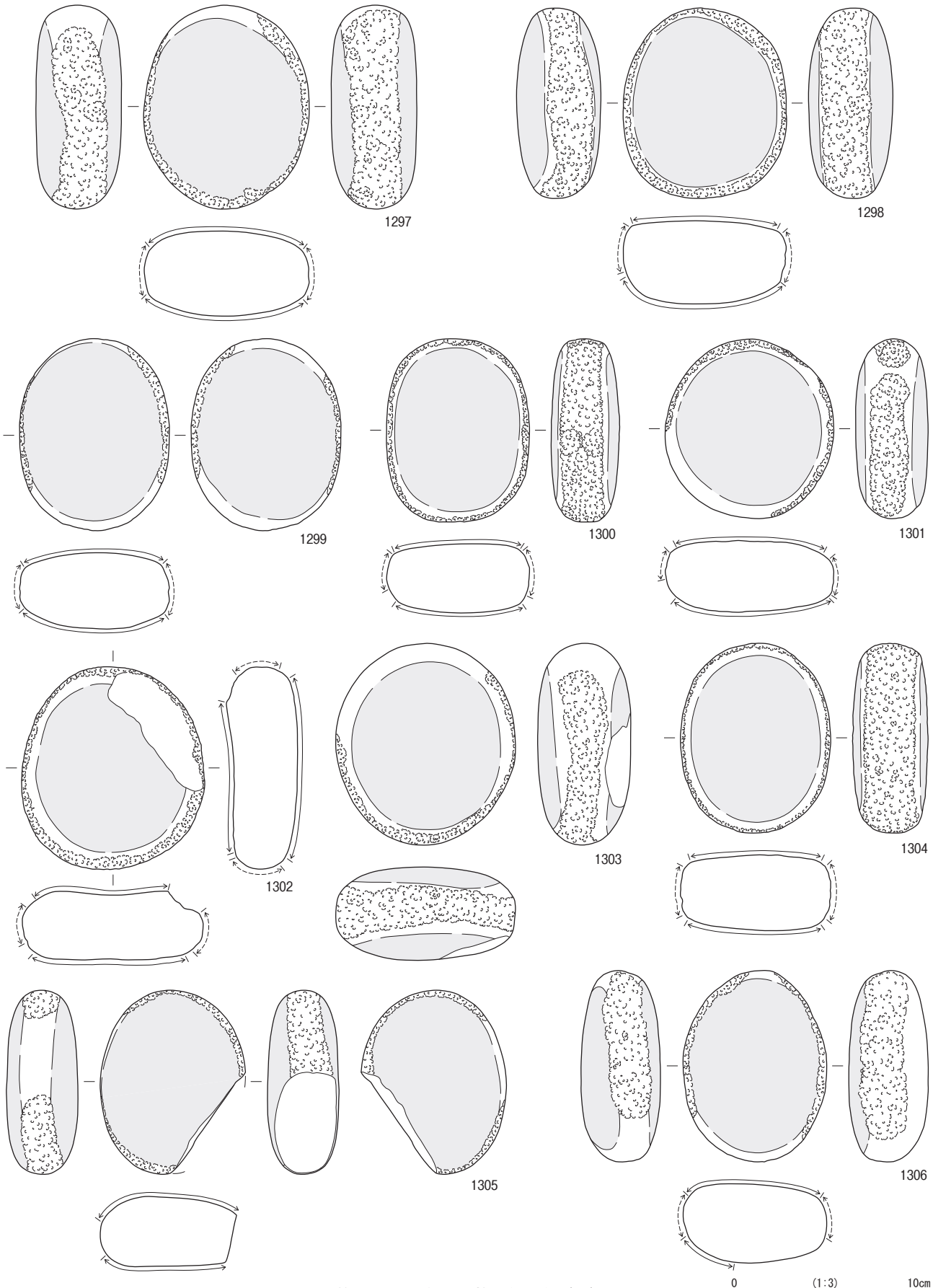
Ⅳ類（第399図1326 ～第401図1351）

1326 ～ 1351は，側面の一部に敲打痕がみられるものである。磨面がみられるものもある。石材はほぼ安山岩で占められる。

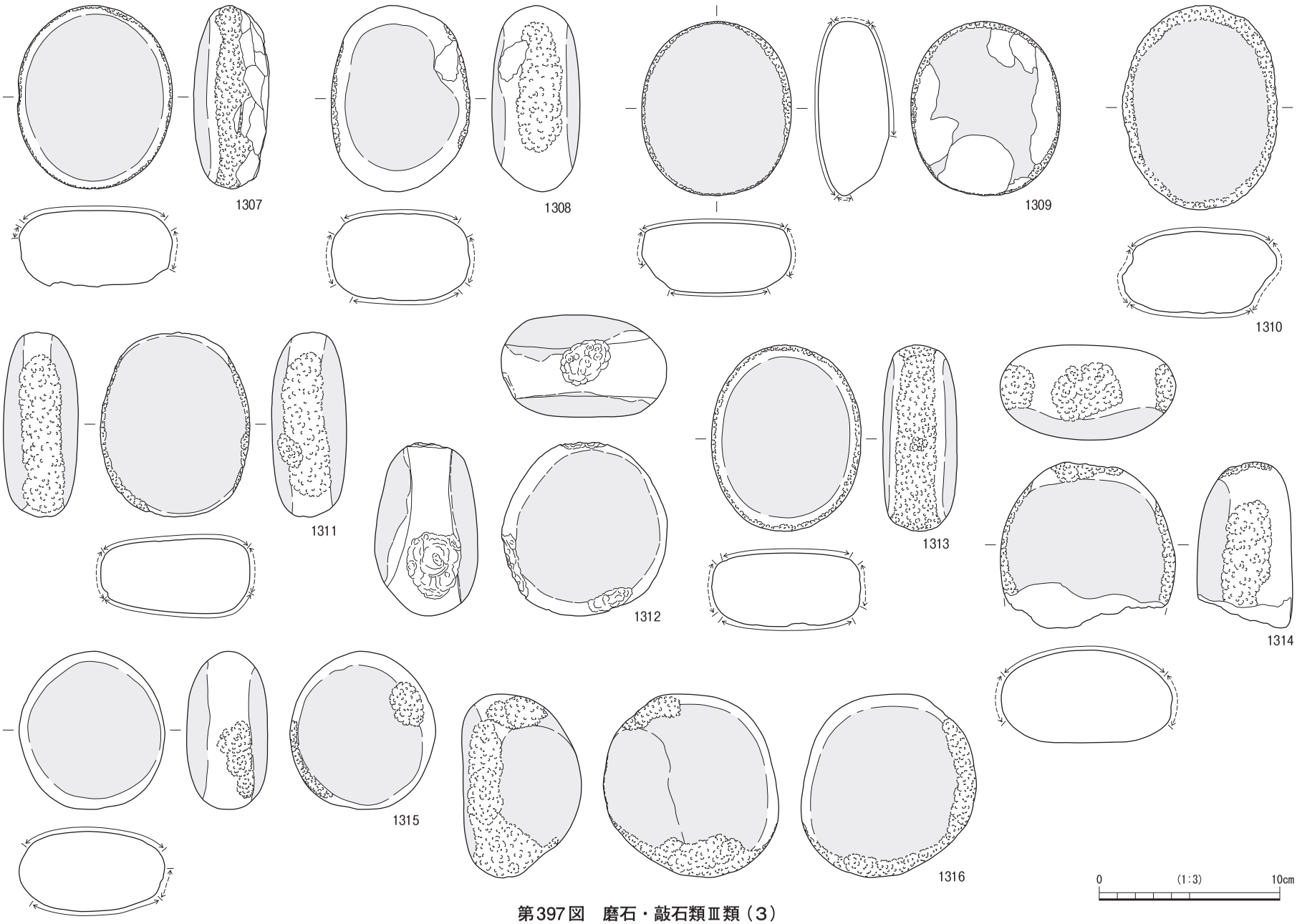
1326・1327・1329・1331・1334・1335・1338 ～ 1340・1344・1349は両面に明瞭な磨面を有するものである。1326・1327・1329・1331・1349は側面を面取りしており，1326・1327・1335・1338はきれいな楕円形を呈する。1326・1327・1329・1331・1335・1339・1340・1349は敲打痕がわずかに認められる。

1328・1330・1351は片面に明瞭な磨面を有するもので，きれいな楕円形を呈するものである。1351は敲打痕がわずかに認められる。

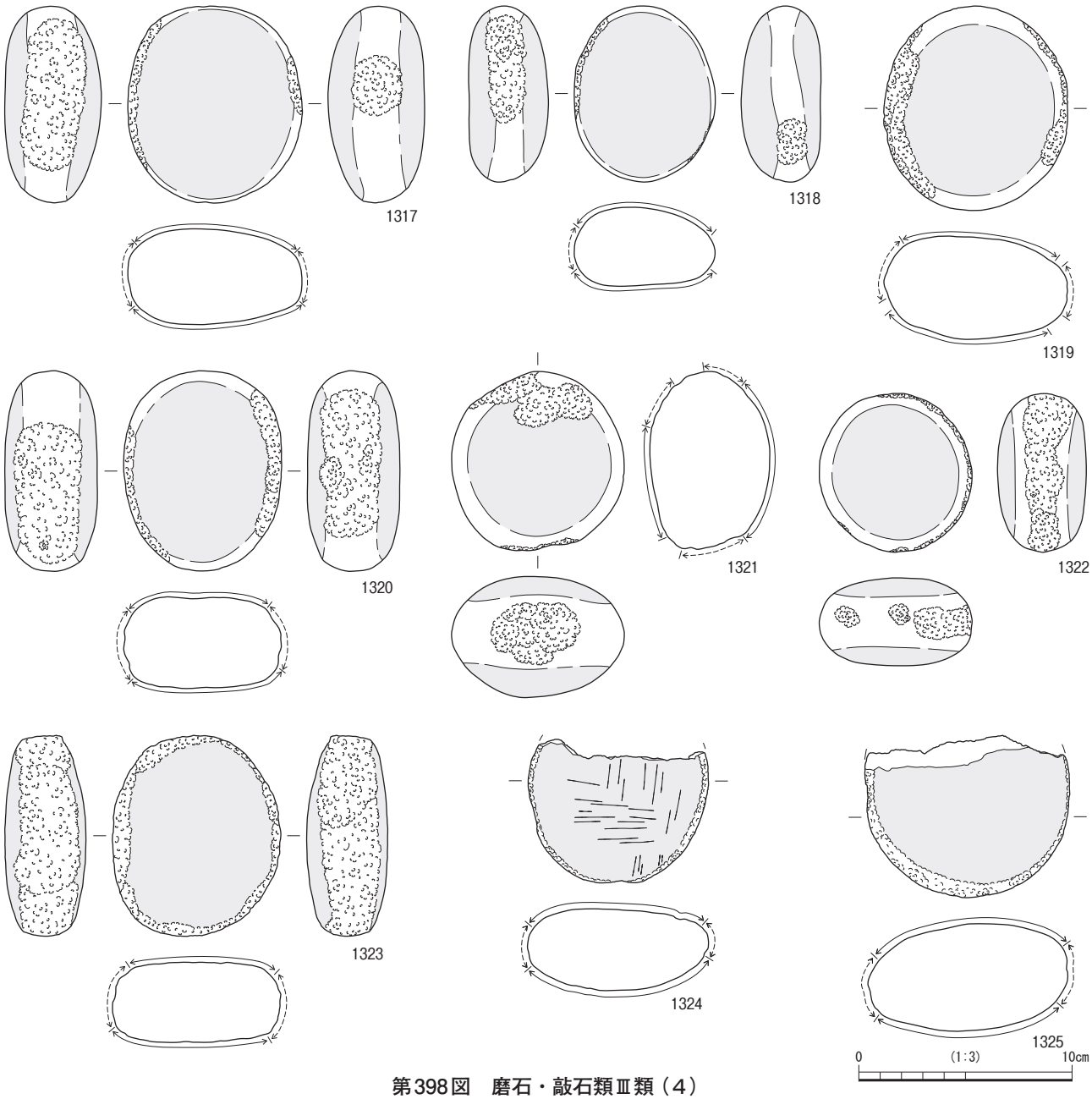
1332・1333・1336・1337・1341 ～ 1343・1345 ～ 1348・



第396図　磨石・敲石類Ⅲ類（2）



第397図　磨石・敲石類Ⅲ類（3）



第398図　磨石・敲石類Ⅲ類（4）

1350は磨面が不明瞭なものである。1336・1337・1341・1350は拳大の丸い円礫である。1347は被熱により黒化しており，製粉作業以外の用途でも使用されたことが伺える。1333・1342・1346・1348・1350は敲打痕がわずかに認められる。

Ⅴ類（第401図1352～第402図1371）

1352～1371は，欠損あるいは剥離が激しいために分類が不可能なものである。本来は大部分がⅠ～Ⅳ類のいずれかに該当するものと思われる。

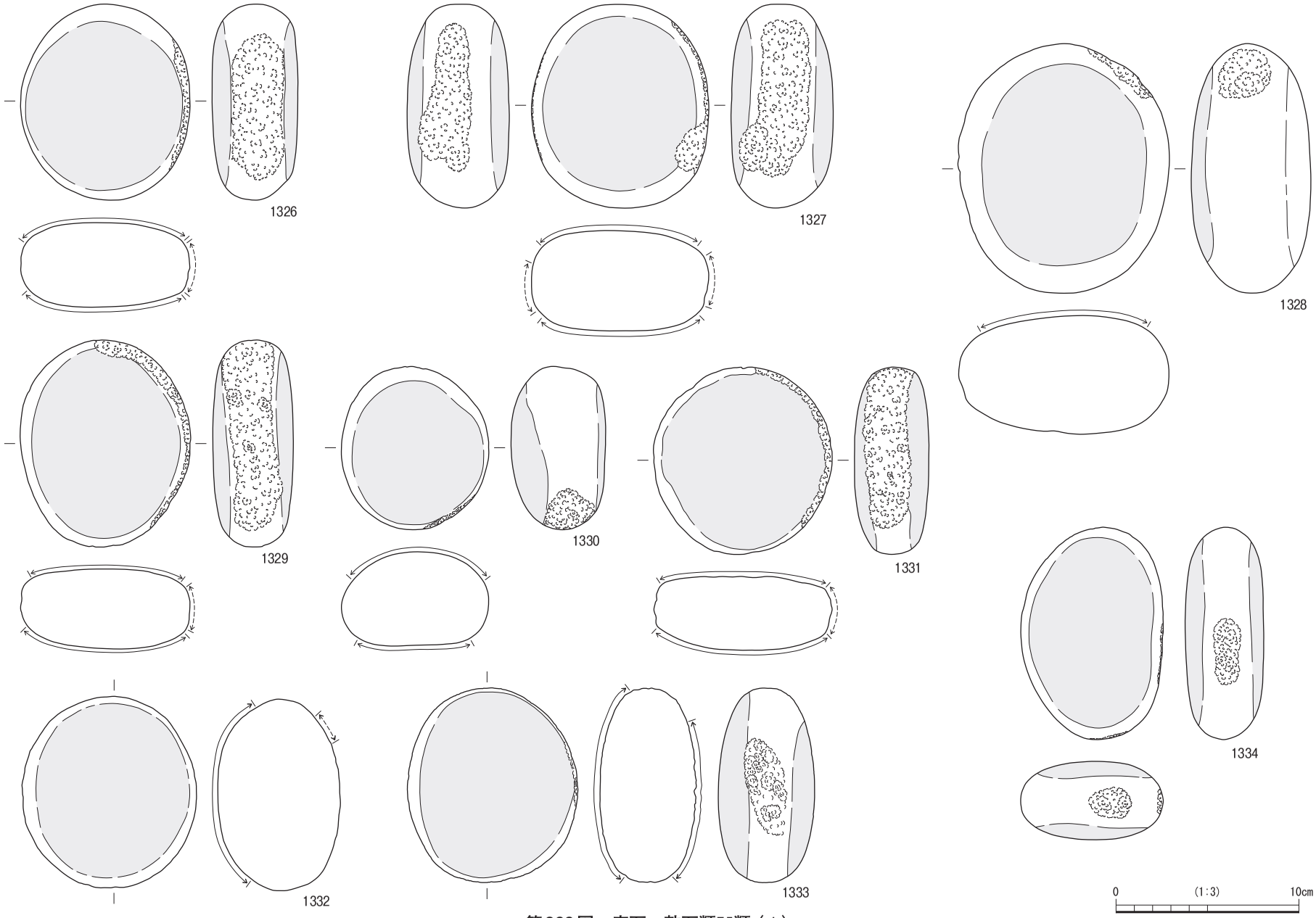
1352はホルンフェルス製で，縁辺部周辺にわずかに敲打痕が認められる。表面は剥離が激しい。

1353・1357・1358は，両面に明瞭な磨面を有し，側面に敲打がみられる。Ⅲ類の可能性が高い。1353は両面が被熱により黒化しており，製粉作業以外の用途でも使用されたことが伺える。1354は片面に明瞭な磨面が認められ，平坦部に敲打痕が認められる。Ⅱ類の可能性が高い。

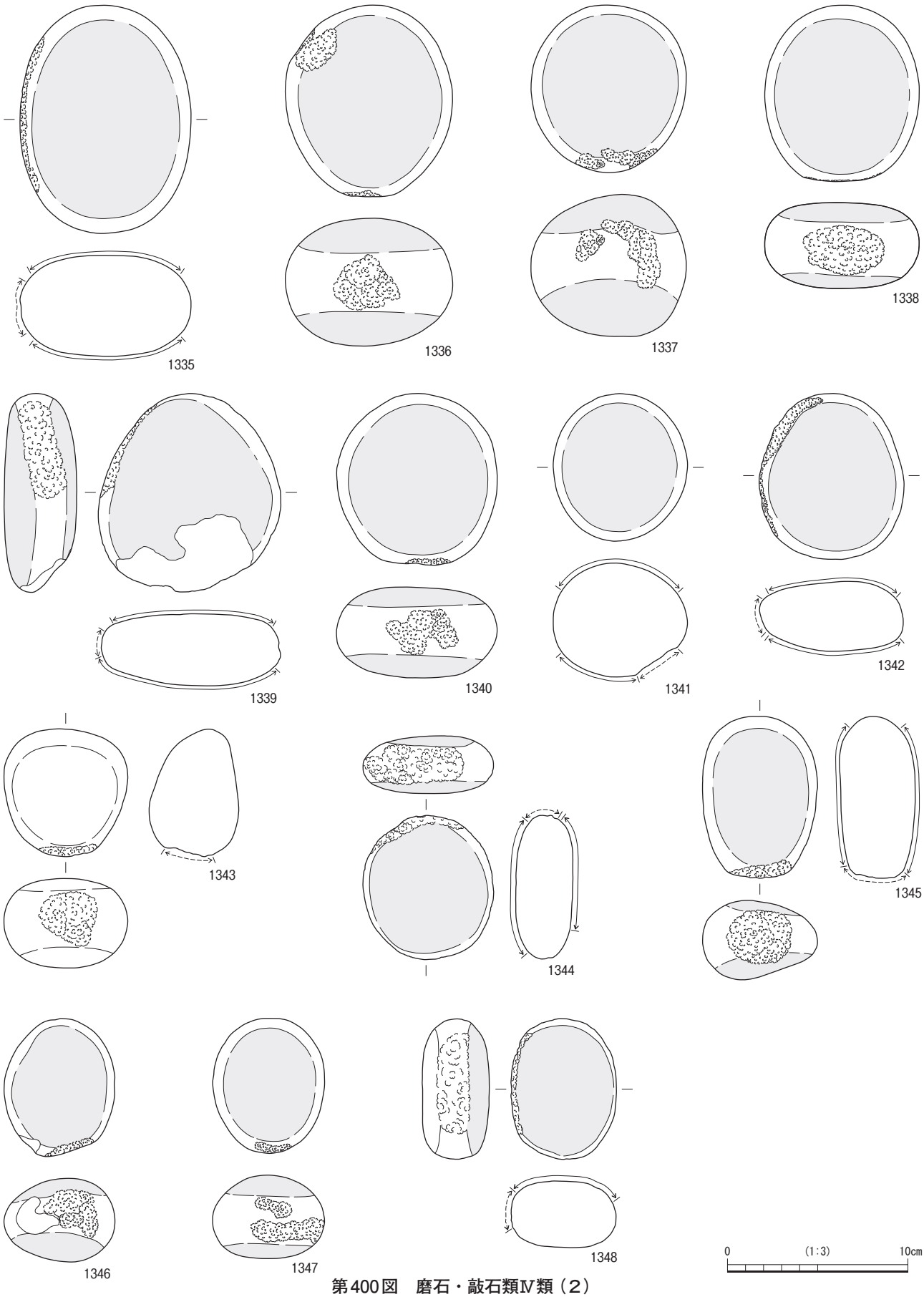
1355・1356・1359・1362・1364は，両面に明瞭な磨面を有し，側面の一部に敲打がみられる。Ⅳ類の可能性が高い。1362は砂岩製で欠損が著しいが，残存部分は非常にきれいな形状をしている。1364は側面にしっかりとした面取りがなされている。

1365・1371は片面に明瞭な磨面を有し，側面の一部に敲打がみられる。Ⅳ類の可能性が高い。

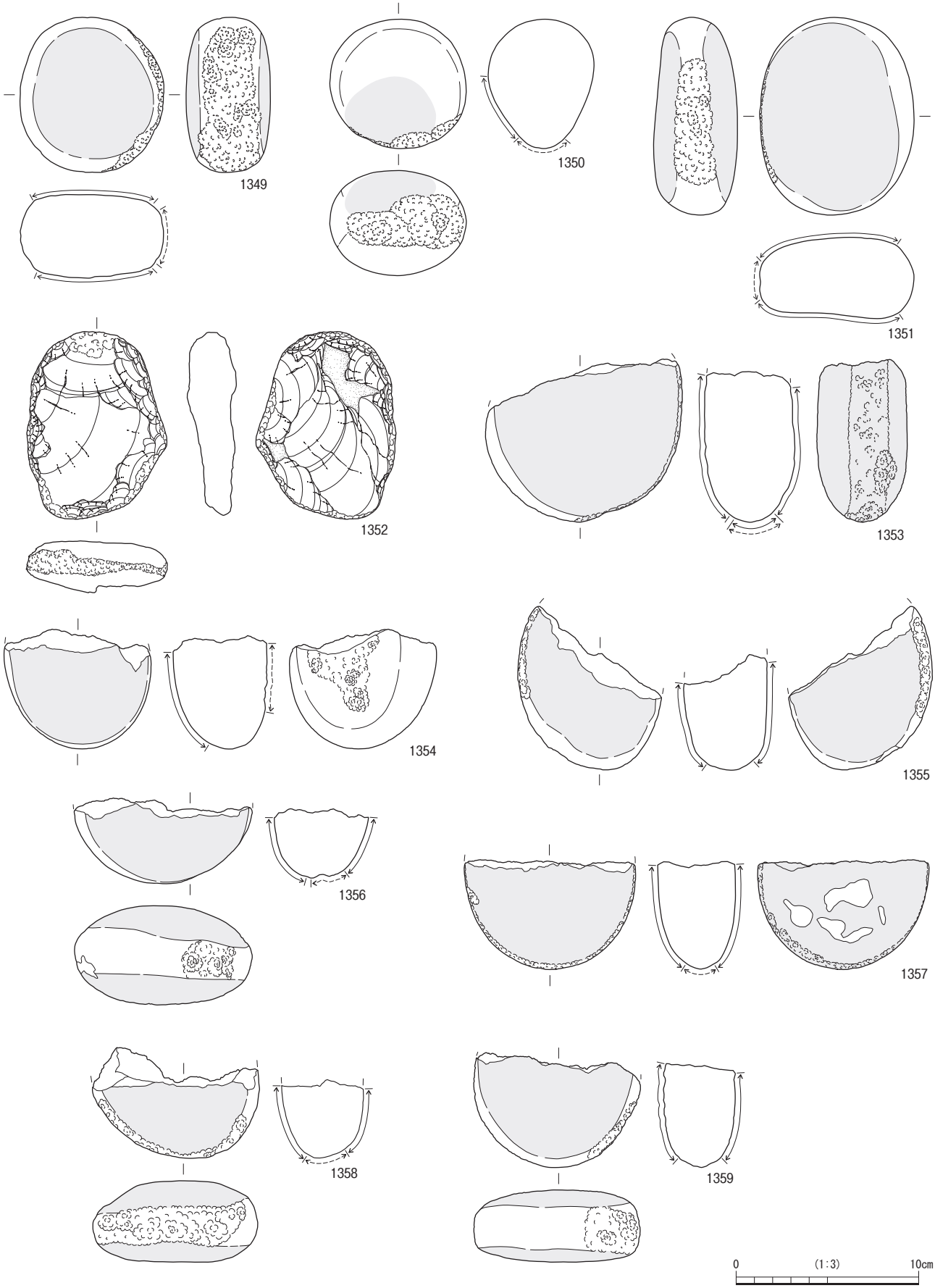
1361・1366・1367・1369は両面に，1360・1368は片面に



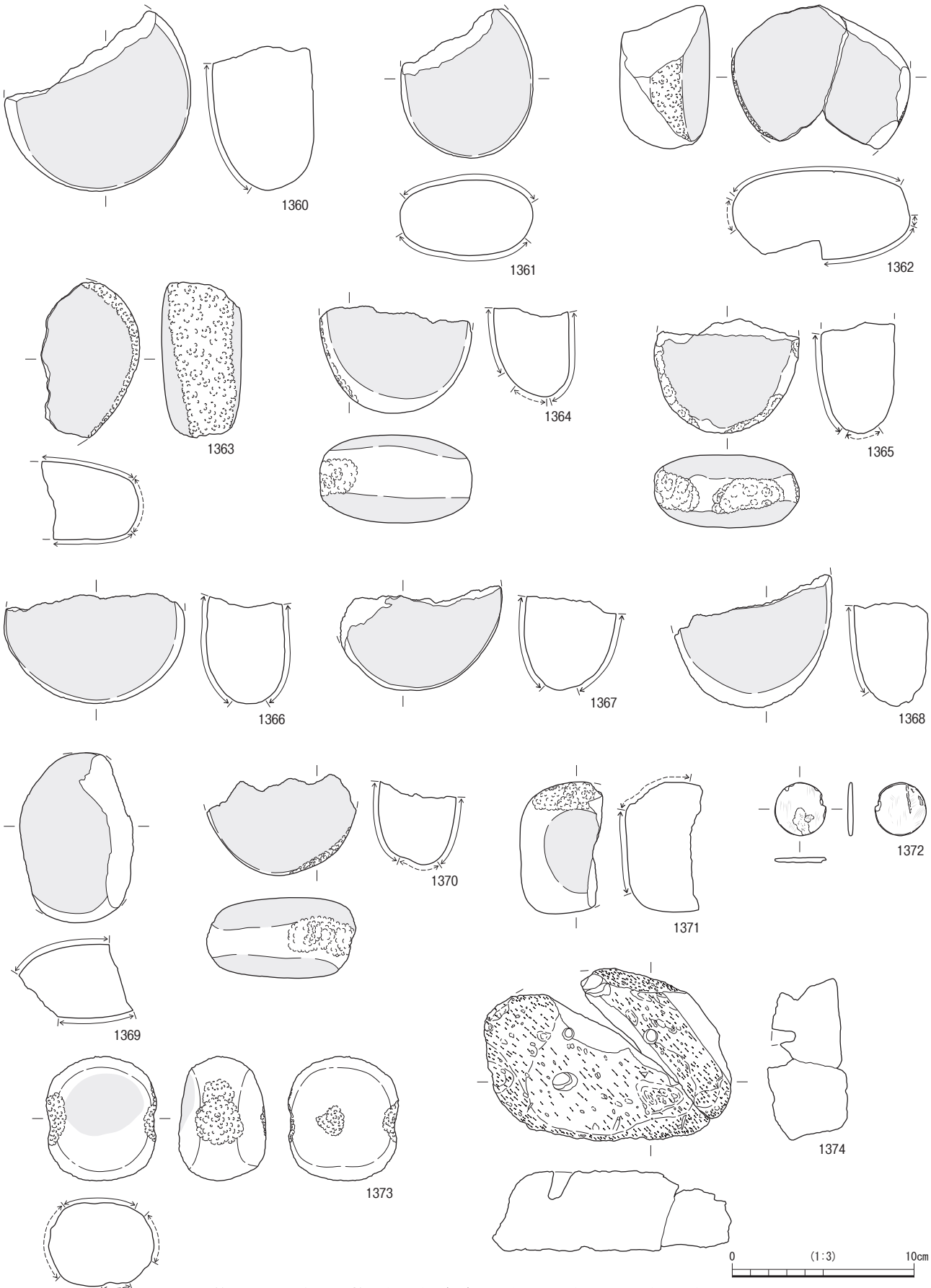
第399図　磨石・敲石類Ⅳ類（1）



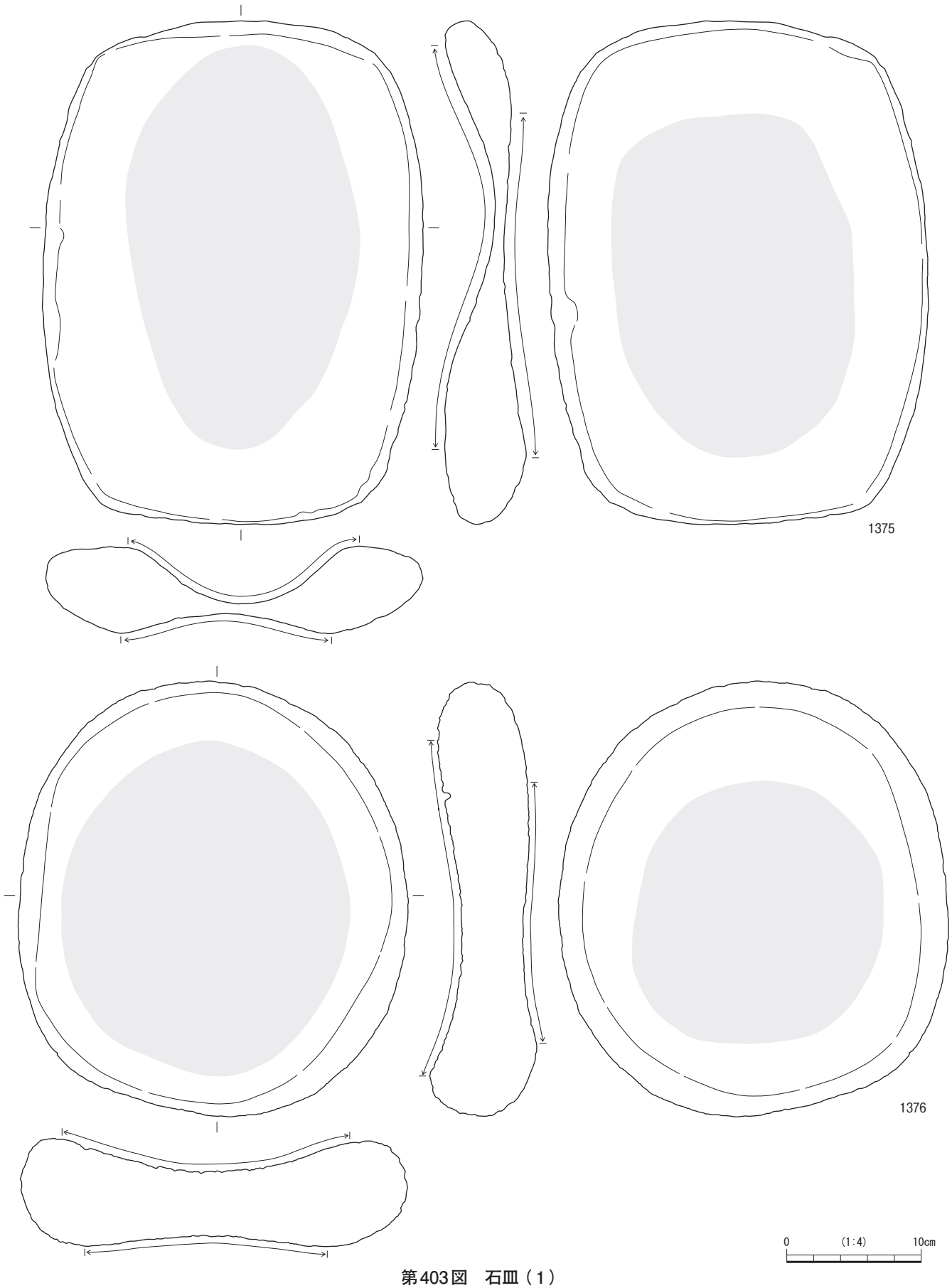
第400図　磨石・敲石類Ⅳ類（2）



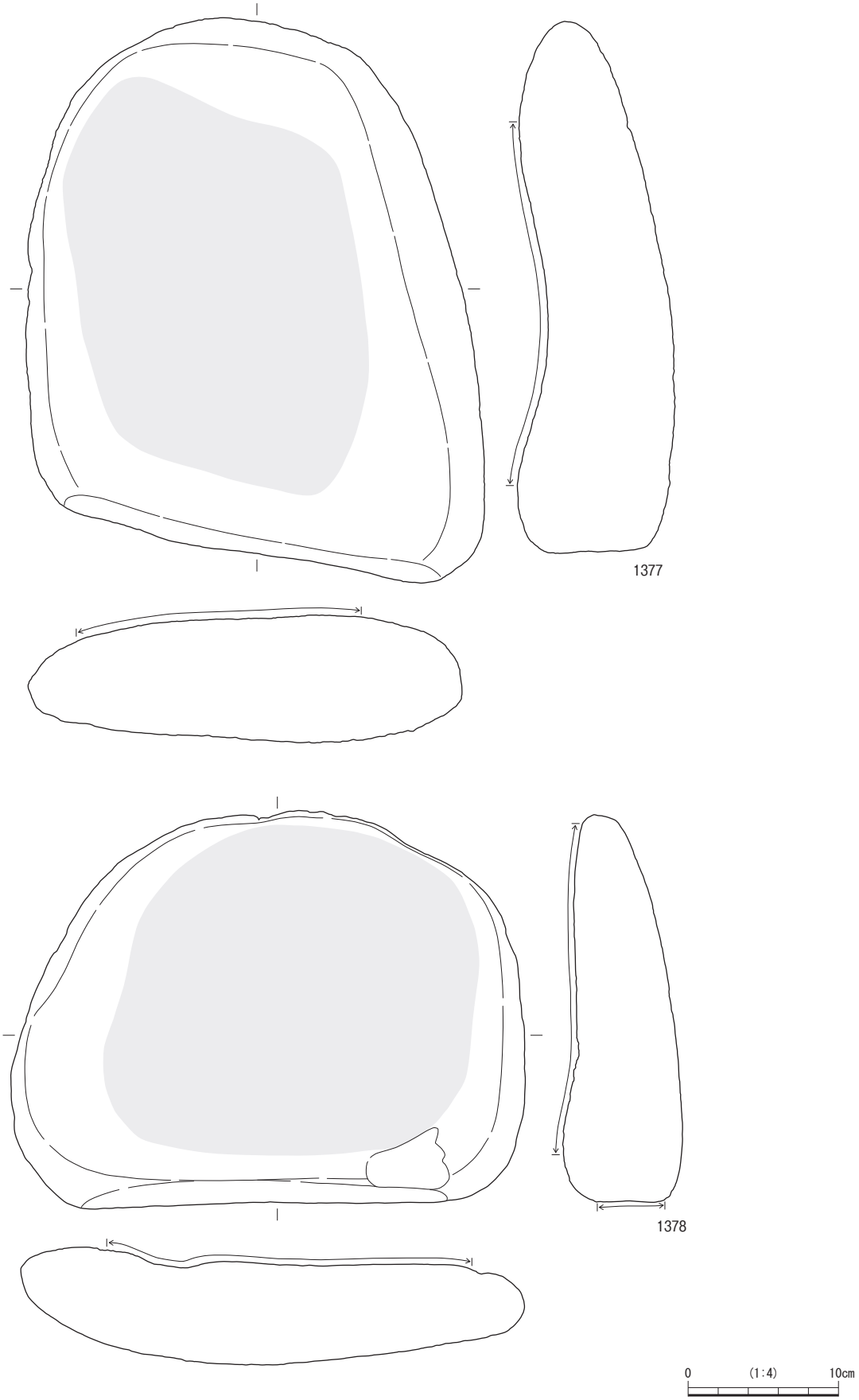
第401図　磨石・敲石類Ⅳ類（3）・磨石・敲石類Ⅴ類（1）



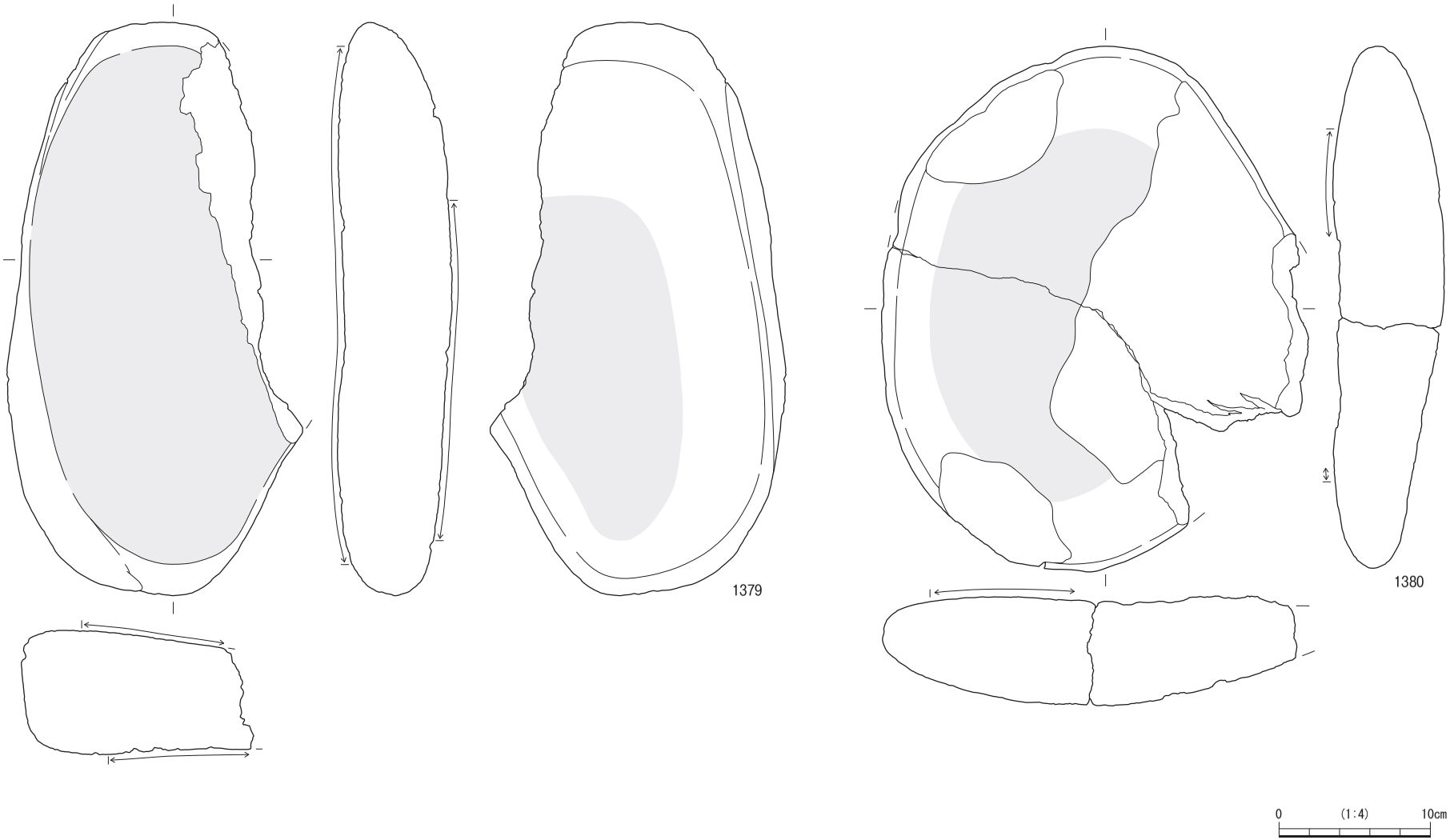
第402図　磨石・敲石類Ⅴ類（2）・石錘・石製加工品・軽石製品



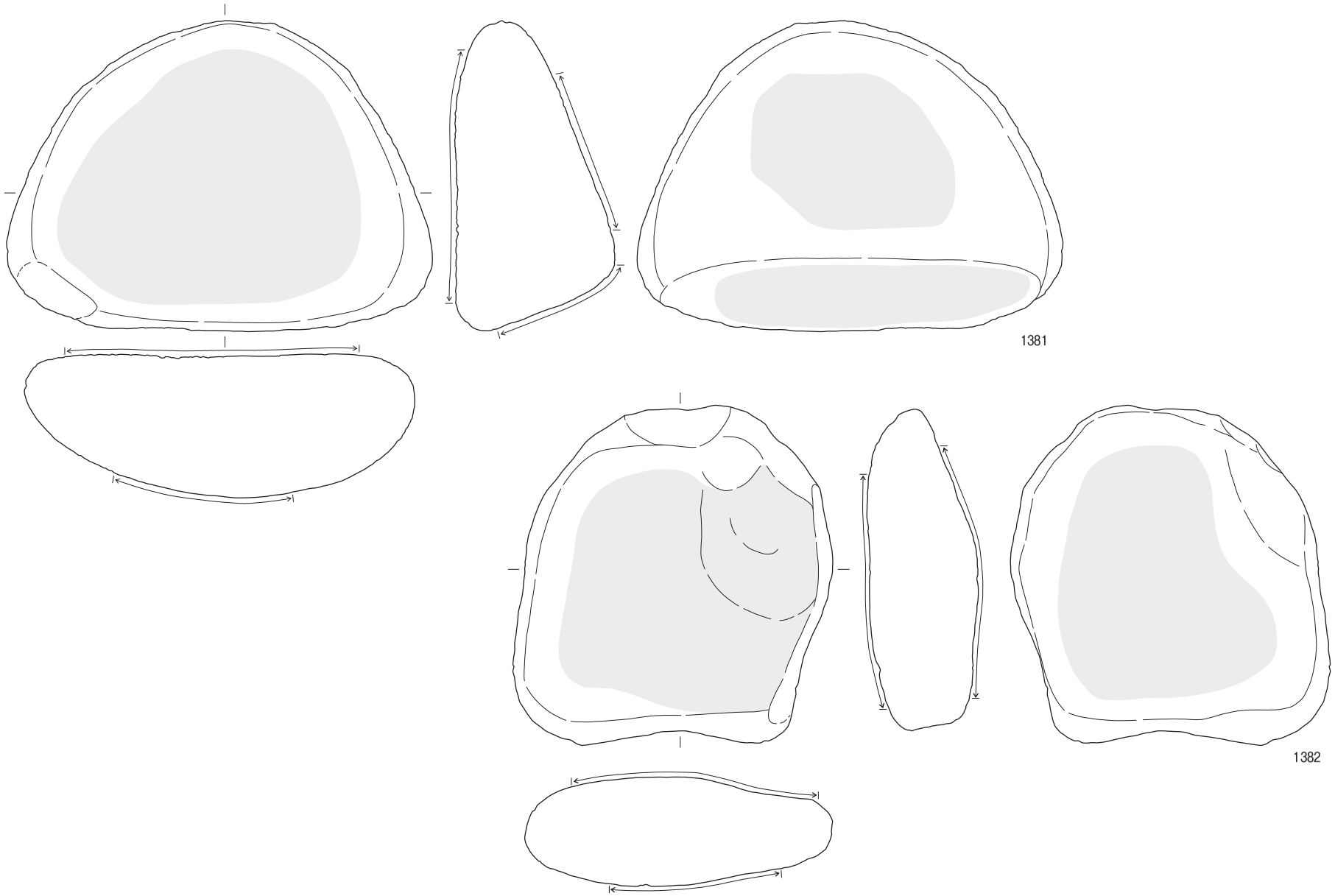
第403図　石皿（1）



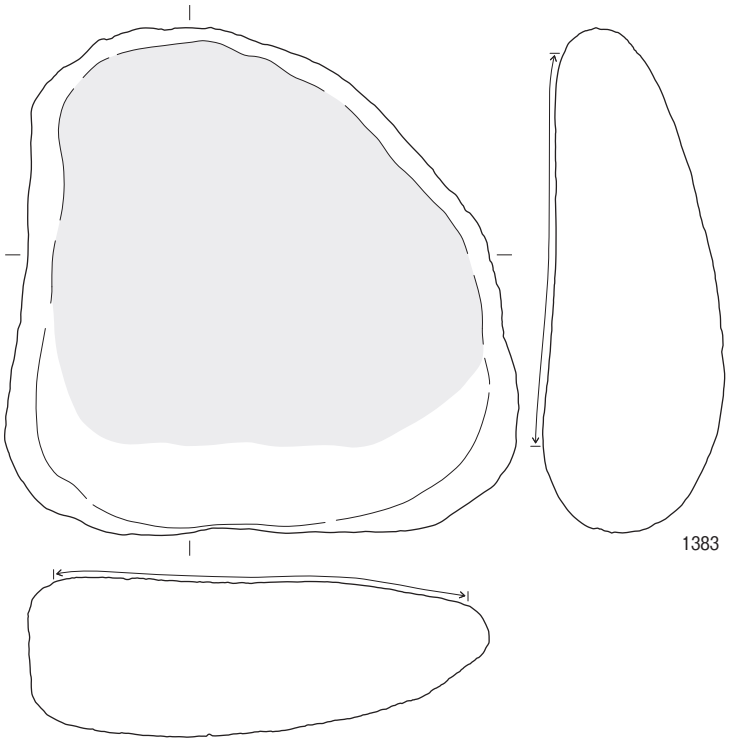
第404図　石皿（2）

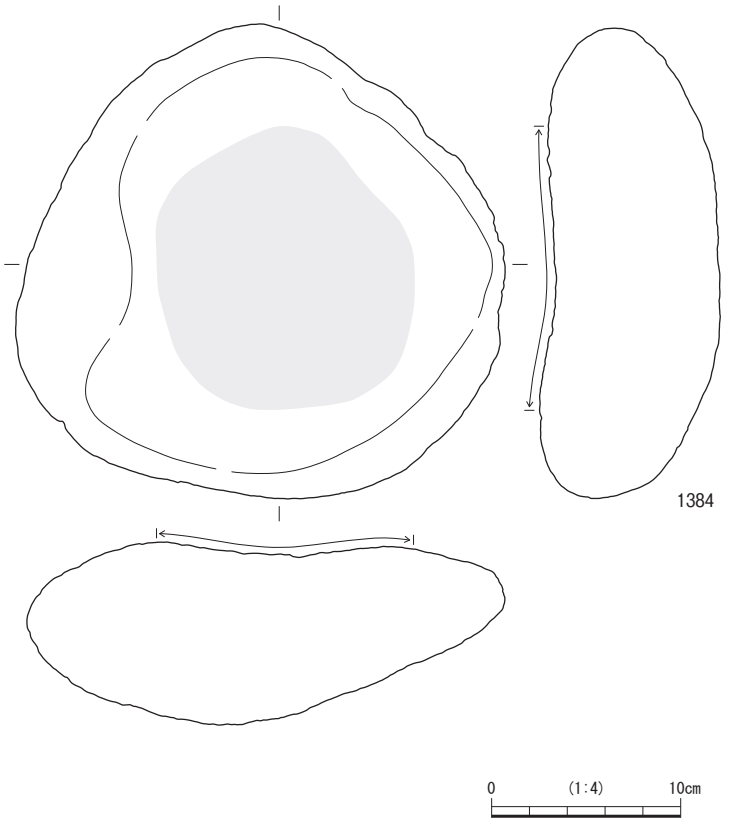


第405図　石皿（3）



第406図　石皿（4）





第407図　石皿（5）

明瞭な磨面を有するが，敲打痕が不明瞭である。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類のいずれかに該当する可能性が高い。1369は砂岩製で欠損が著しいが，残存部分は非常にきれいな形状をしている。

石錘（第402図1373）

石錘は1点を図化した。1373は安山岩製である。7.0cm程のほぼ円形な礫の横軸上の二側面に抉りを作出し，網掛け部としている。抉り部分には敲打によるブランティングが認められる。

石製加工品（第402図1372）

石製加工品は1点を図化した。1372はホルンフェルス製である。2.8cm程の大きさで円形に加工され，両面は研磨されている。

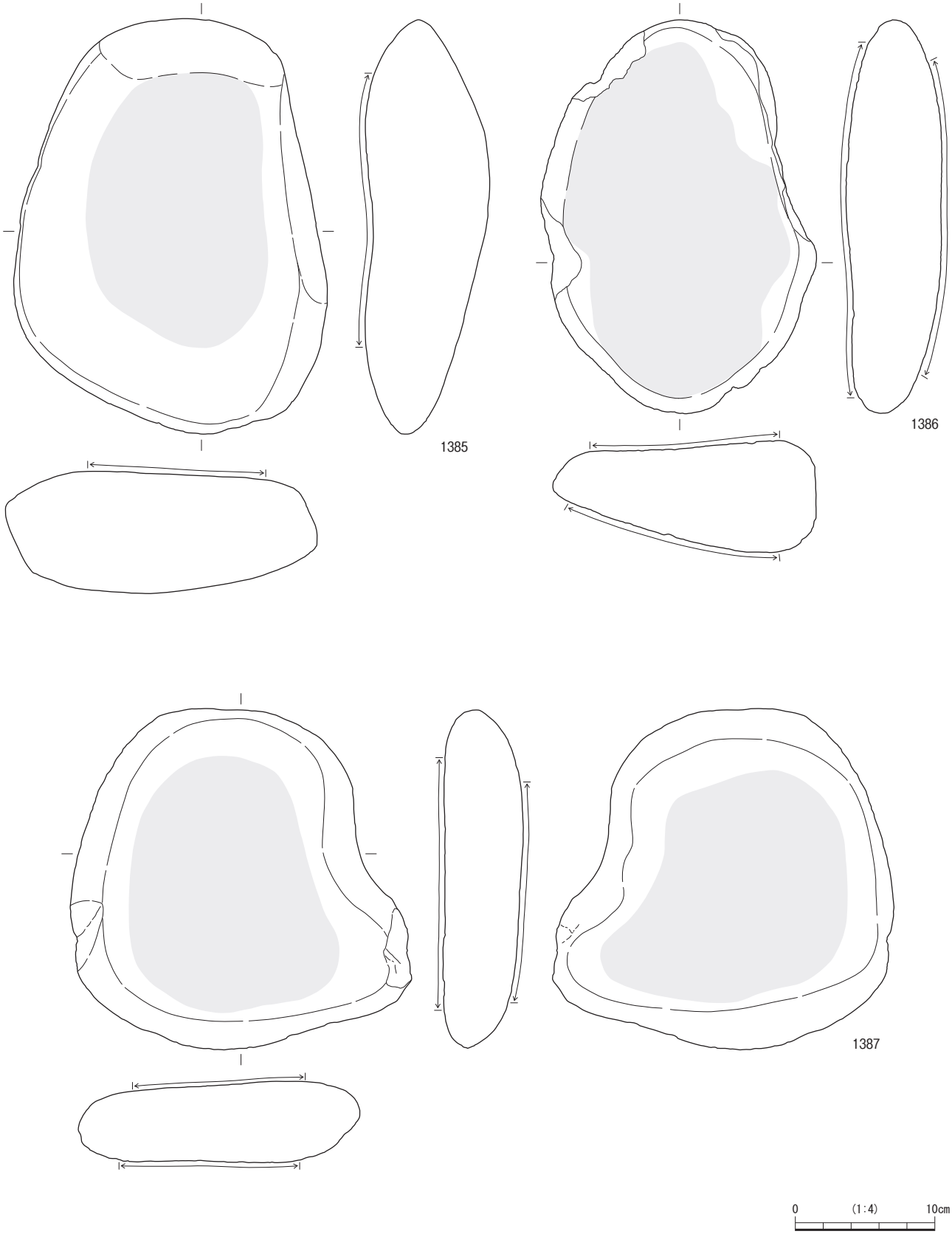
軽石製品（第402図1374）

軽石製品は1点を図化した。1374は13.5cm程の大きさで，欠損しているものの，全体的には楕円形状を呈する。中央部に3箇所の穿孔状の痕跡が認められるが，貫通はしていない。

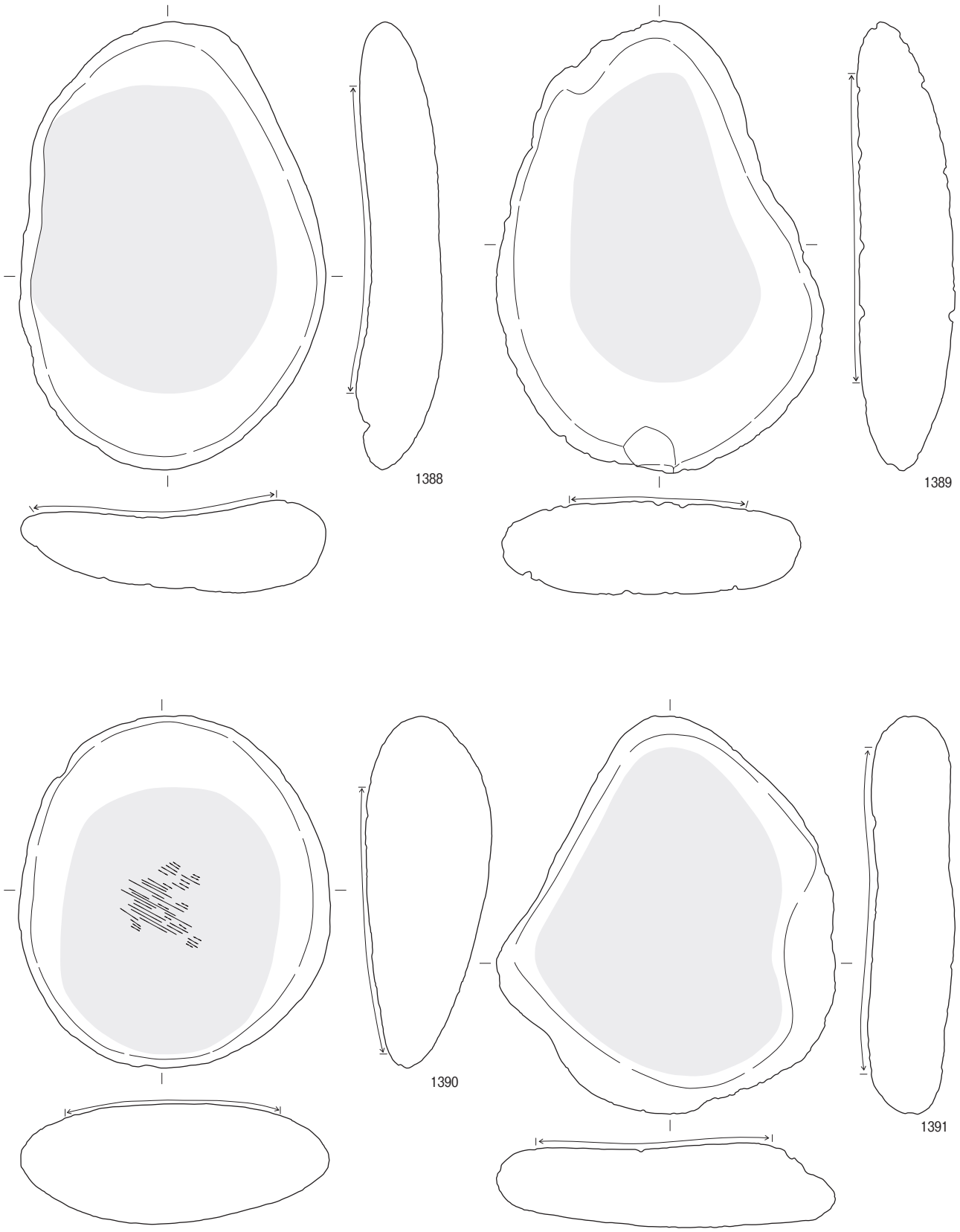
石皿（第403図1375～第417図1422）

1375～1422は石皿である。48点を図化した。ここでは，食品加工以外の台石として使用されたと推測されるものも含まれる。石材は安山岩が圧倒的で，全体の8割以上を占める。その他にわずかながら花崗岩・凝灰岩・砂岩製のものがみられた。

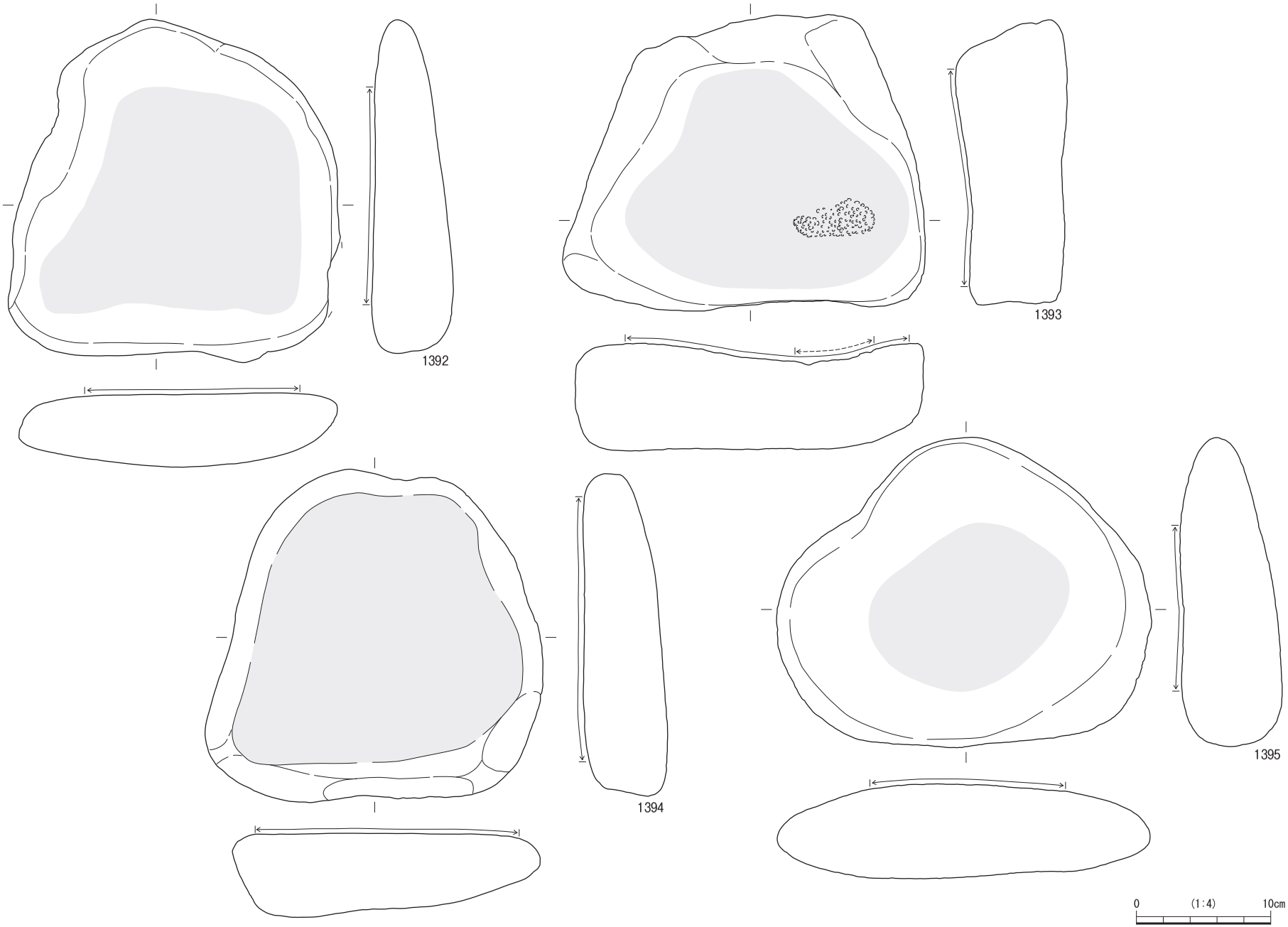
1375・1376・1379・1381・1382・1386・1387・1396・1403・1407・1408・1412・1417・1418は両面が使用されているものである。1375・1376・1381・1382は完形品である。1375はきれいな石鹸形で，1376はきれいな円形を呈する。1375・1376とも両面の中央部分が大きく凹んでいる。1379・1381・1382・1386・1387・1403・1407・1417はいずれも使用面が平坦である。1379は欠損品で，細長い楕円形状を呈すると思われる。1381は三角形状で，側面の一部にも使用面が認められる。1382は方形状を呈する。1386は楕円形状である。側縁の一部に敲打痕が認められる。1396は楕円形状で，表面の使用面はやや凹み，裏面の使用面は平坦である。側縁の一部に敲打痕が認められ，敲石あるいは礫器としての用途が伺える。1408は欠損品ではあるが，両面の中央部分が大きく凹んでおり，中心が貫通してU字状を呈している。1412も欠



第408図　石皿（6）

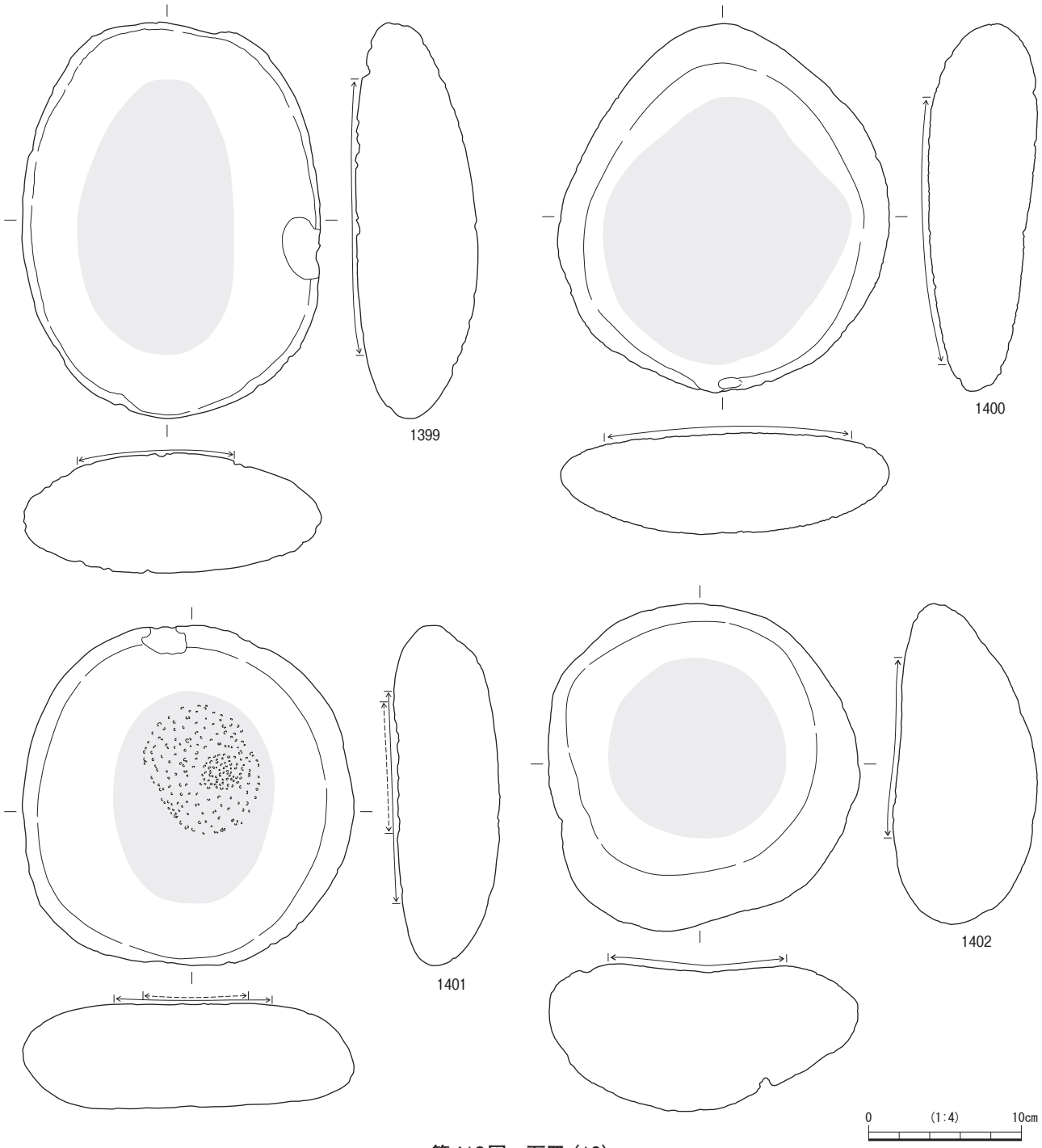


第409図　石皿（7）



第410図　石皿（8）

第411図　石皿（9）

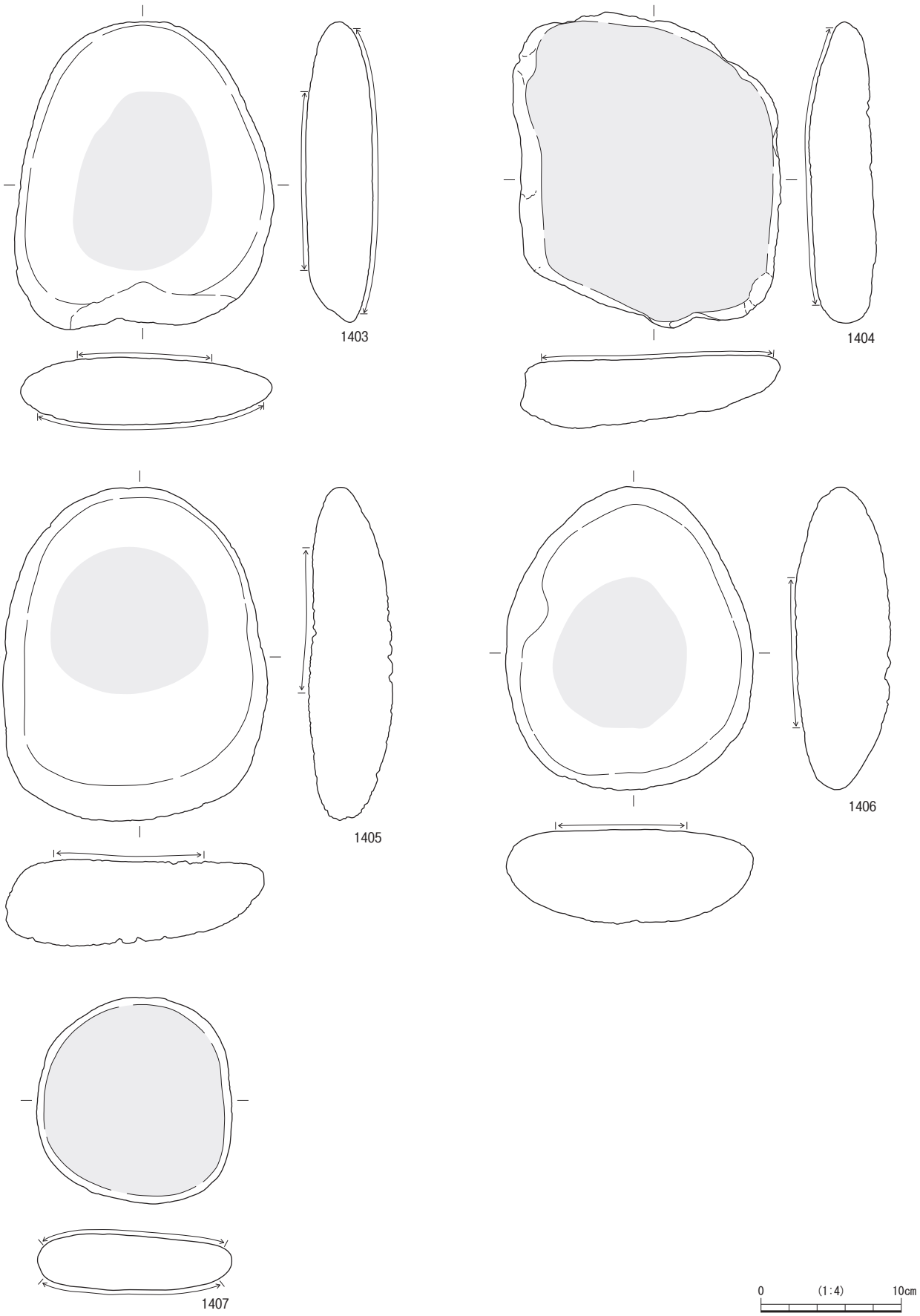


第412図　石皿（10）

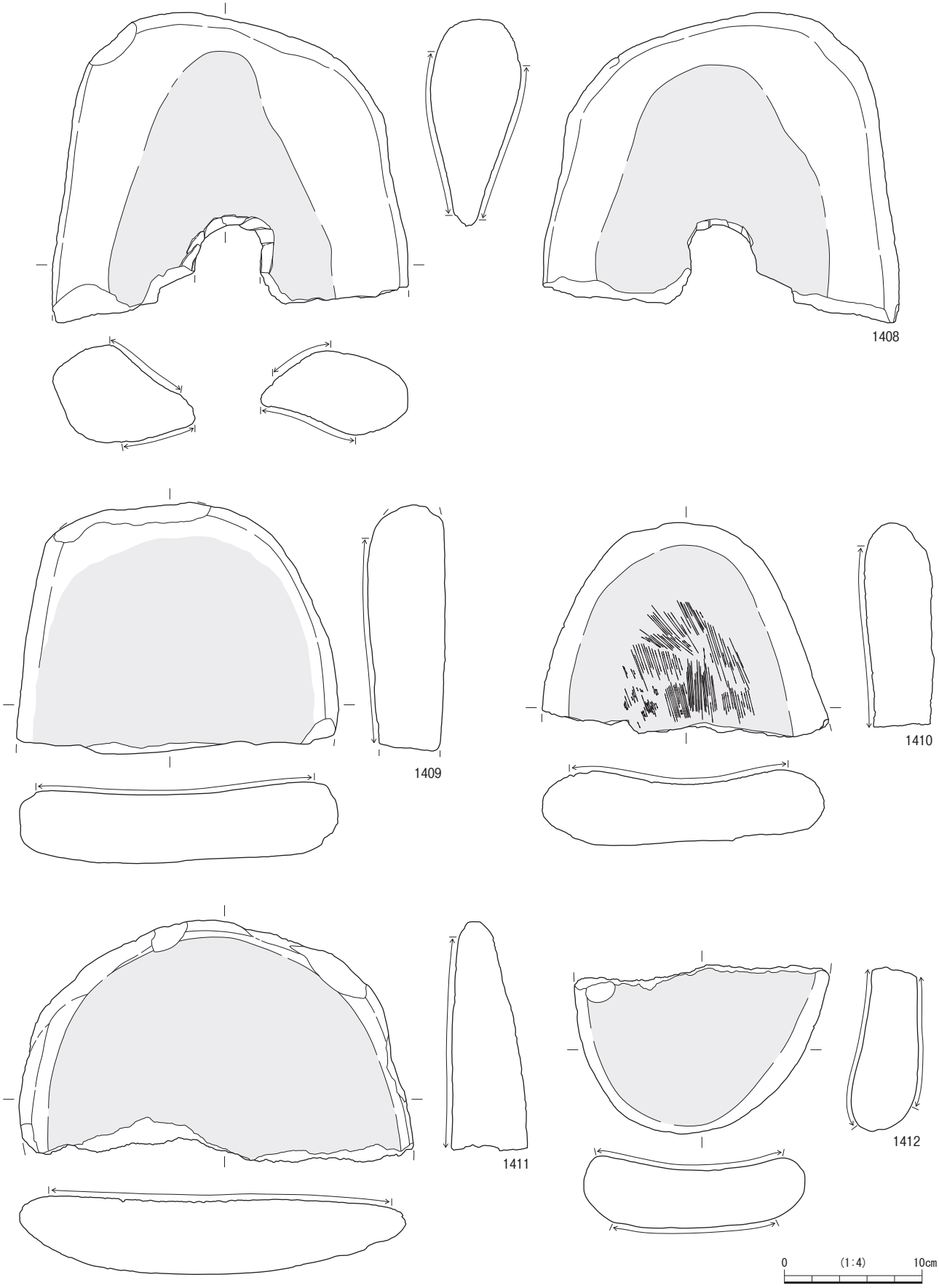
損品で，両面の中央部分が凹んでいる。1417・1418は花崗岩製の欠損品である。1418は両面とも使用面がやや凹む。

1377・1378・1380・1383・1385・1388～1395・1397～1402・1404～1406・1409～1411・1413～1416・1419～1422は片面が使用されているものである。1377・1378は完形品で蒲鉾形状を呈する。ともに片面の中央部が大きく凹む。1378は側面にも使用面が認められる。1380は欠損品である。楕円形状で2点が接合した。被熱により赤化しており，使用面が剥落している。1383・1395は三角形状，1389・1397・1399～1401・1405・1406・1415は楕円形状，1390は円形，1392・1394・1398・1404・1421は方形状で，いずれも使用面が平坦である。1397～1400・1404は側縁の一部に敲打痕が認められ，敲石あるいは礫器としての用途がうかがえる。1398は一部黒化しており，被熱によるものと思われる。1401は平坦面及び側縁に敲打痕が認められ，台石や敲石としての用途がうかがえる。

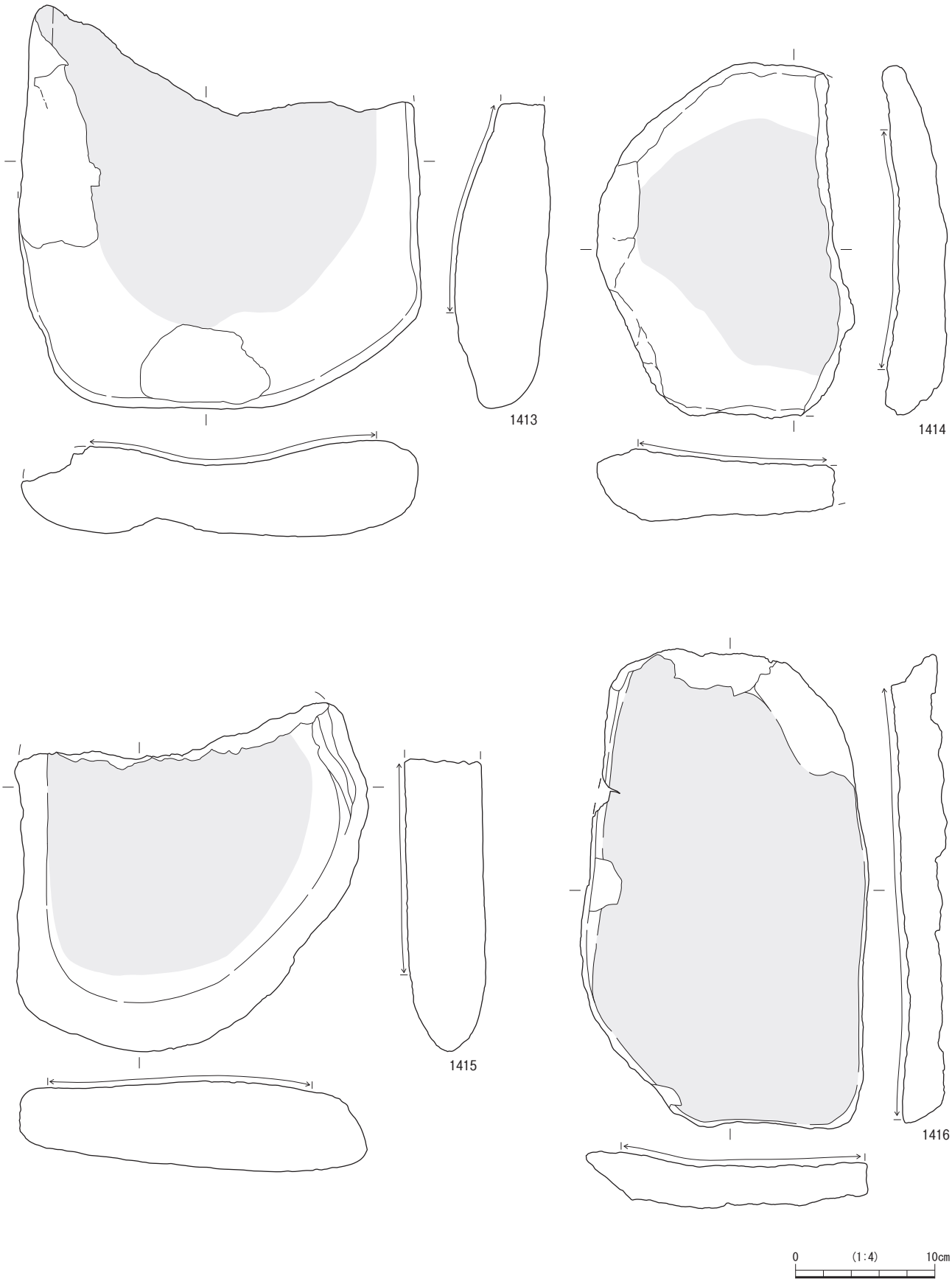
1384・1385・1388・1391・1402・1409～1411・1414は楕円形状，1393・1394・1413・1416・1419・1422は



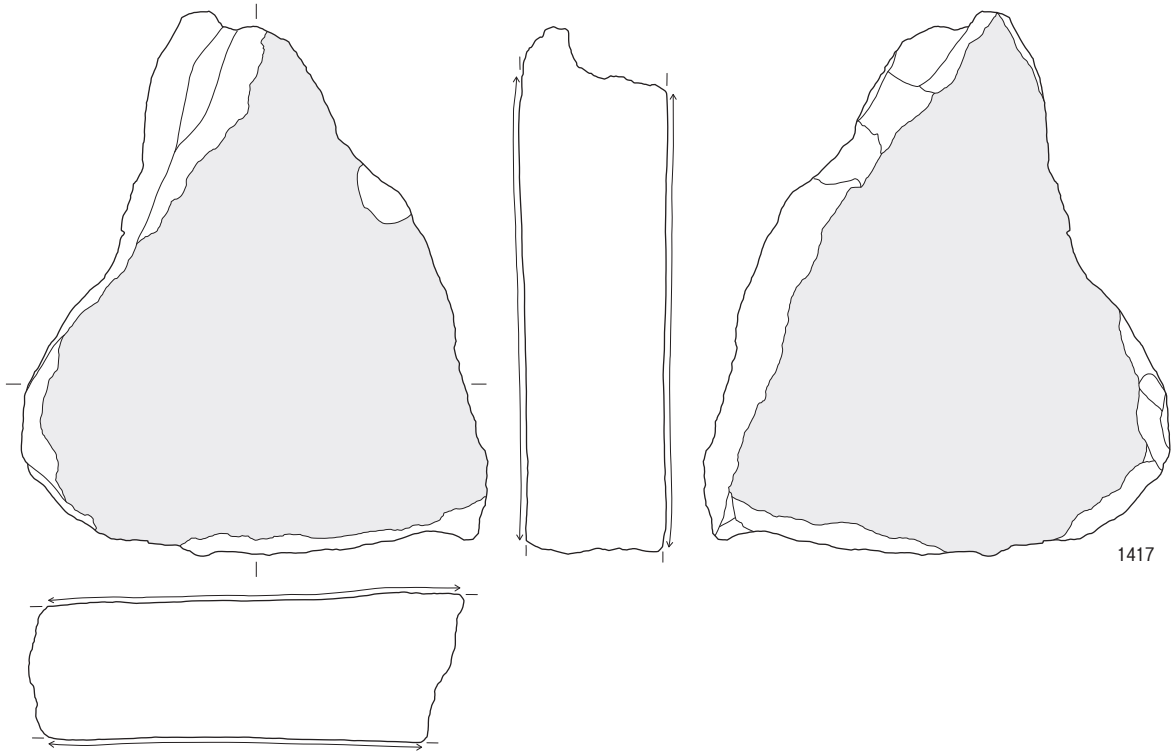
第413図　石皿（11）

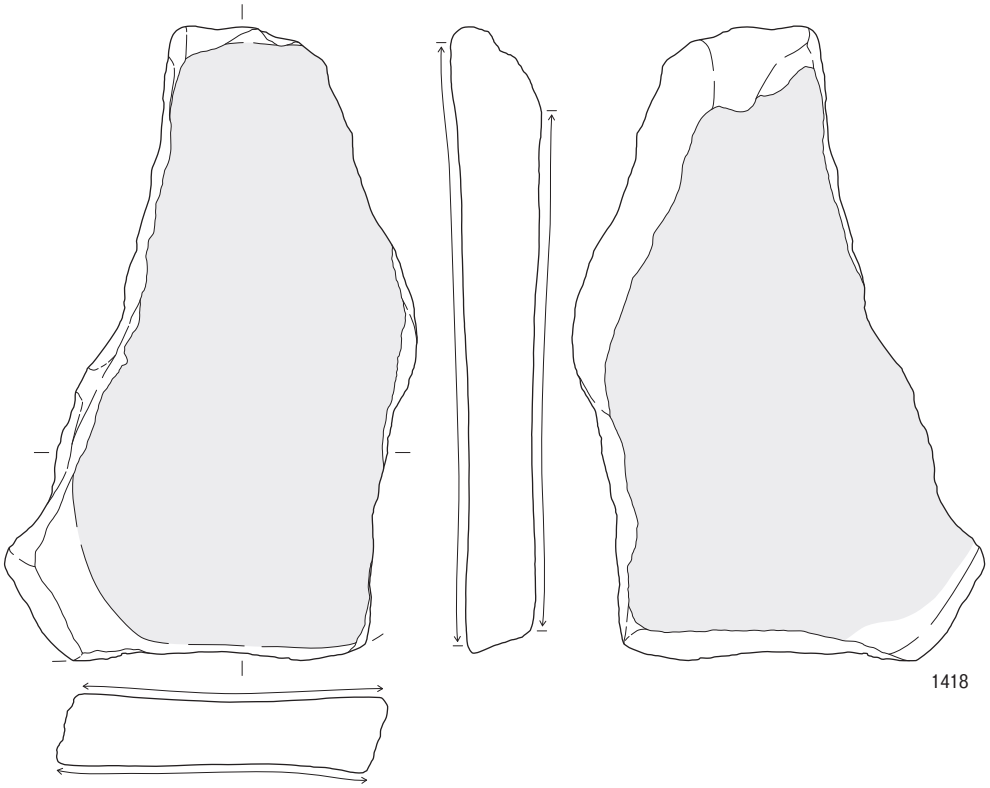


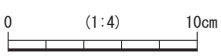
第414図　石皿（12）



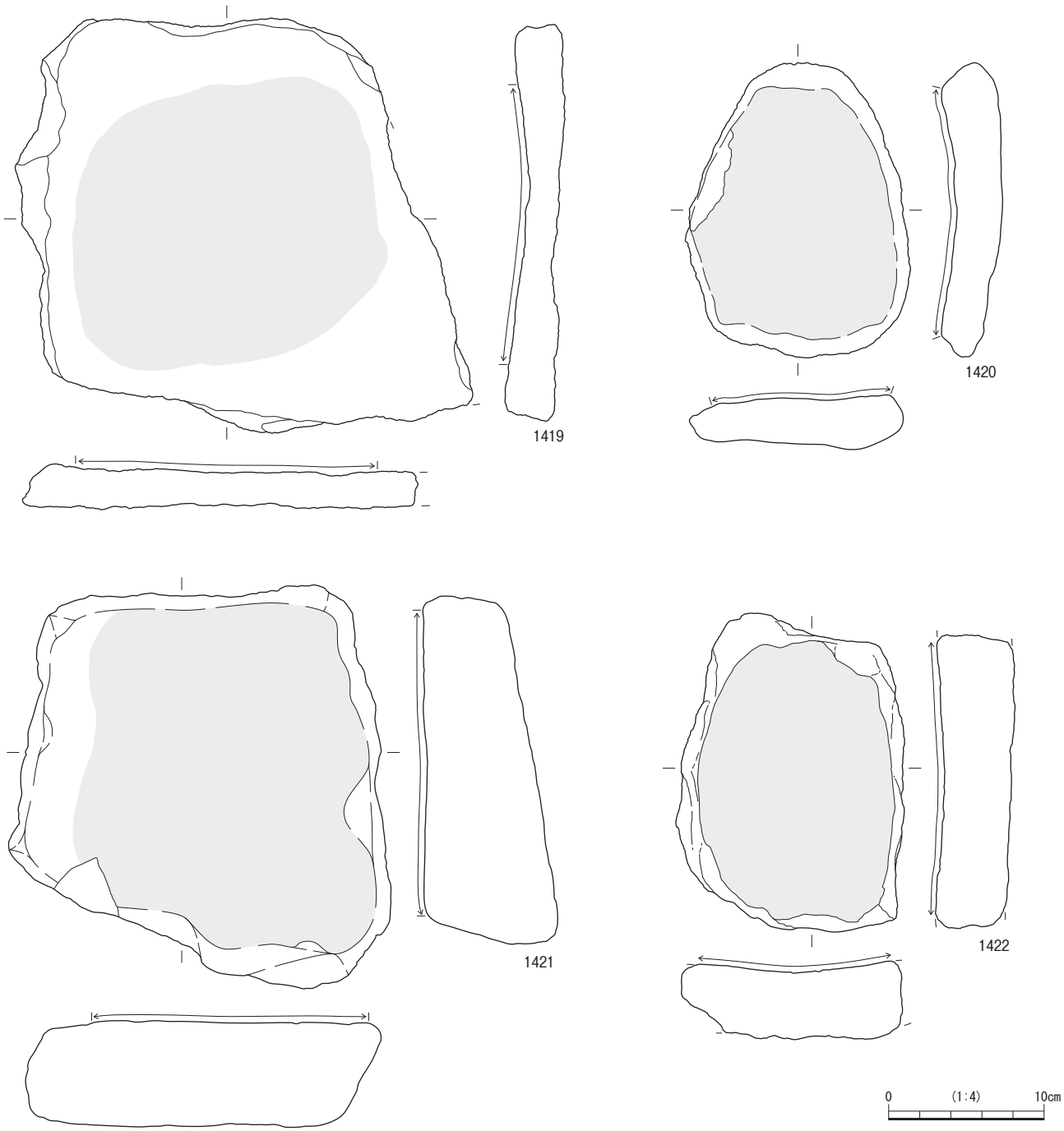
第415図　石皿 (13)







第416図　石皿（14）



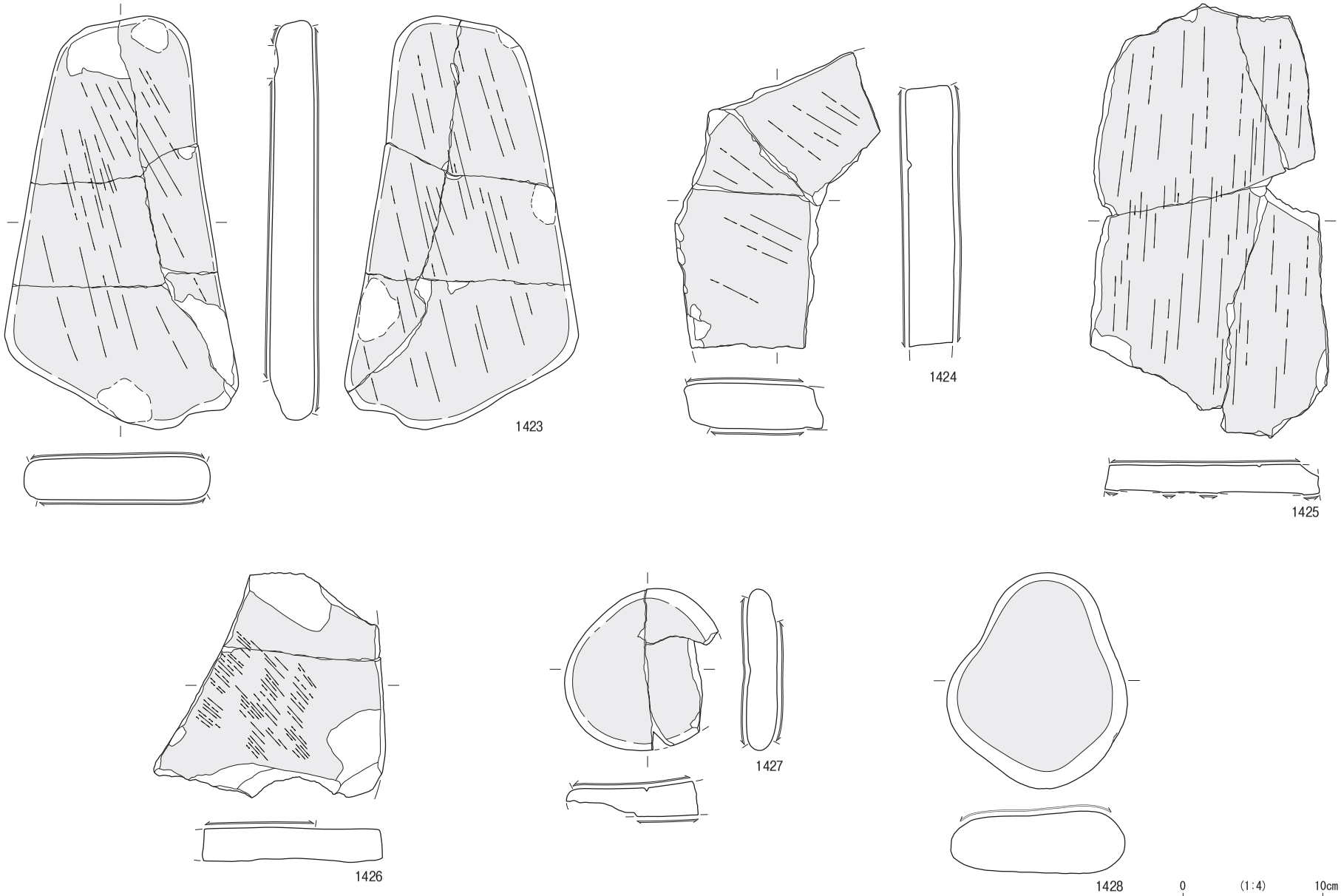
第417図　石皿（15）

方形状で中央部分が凹むものである。1391は側縁の一部に敲打痕が認められる。1393は凝灰岩製で，平坦部に敲打痕が認められる。1409は凝灰岩製である。1410・1411は被熱により黒化し，欠損している。側縁の一部には敲打痕が認められる。1413は凝灰岩製である。1416は砂岩製で，剥離の激しい素材を用いているため，使用面が凸凹している。1414・1419・1420・1422は花崗岩製である。1419・1420は敲打によるものかは不明瞭なものの，使用面に凹凸がみられることから，台石として使用された可能性も考えられる。

砥石（第418図1423 ～ 1428）

1423 ～ 1428は砥石である。６点を図化した。

1423 ～ 1427は砂岩製である。1423・1424は扁平礫の平坦面を用いている。1423は６個体，1424は３個体が接合した。1425・1426は剥片を用いており，裏面の剥離が激しい。1425は４個体，1426は２個体が接合した。1425の表面には多数の筋状の研磨痕が認められる。1427は扁平な円礫の平坦面を用いたもので，３個体が接合した。表面は磨りが強く，やや凹んでいる。1428は花崗岩製である。扁平な楕円礫の平坦面を用いている。



第418図　砥石

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（15）
東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

田原迫ノ上遺跡２

第１分冊

発 行 年 月　2017年３月

編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576

印　　刷　株式会社　松井ピ・テ・オ・印刷
〒321-0904　栃木県宇都宮市陽東５－９-21
TEL　028-662-2511　　FAX　028-662-4278

鹿児島県